熊本県文化財調査報告第68集

熊本県装飾古墳

総合調査報告書

1984

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第68集

熊本県装飾古墳

総合調査報告書

1984

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では，文化財保護のため，国庫補助を受けて各種の基礎調査を行い，資料の整備に努めております。過去には，条里制調査（50～51年度），中世城跡調査（50～52年度），菊池川流域文化財調査（50～52年度），生産遺跡調査（53～54年度），鞠智城跡調査（55～57年度），歴史の道調査（56～58年度）などを実施し，その成果は，熊本県文化財調査報告として刊行してきました。

装飾古墳総合調査もこれらと一連の事業として計画したもので，昭和48～49年度及び昭和56～58年度の二回にわたって実施した調査の成果を，今回刊行することにしました。

本県は，全国的にみて，質・量ともに秀れた装飾古墳を有し，その調査結果については期待されているところであります。

調査にあたり，文化庁をはじめ関係市町村教育委員会，専門調査員，調査協力者など多くの方々の協力をうけ，円滑な調査ができましたことに対してここに厚くお礼を申し上げます。

本書がより多くの人に活用され，文化財保護の一助ともなれば幸いです。

昭和59年３月31日

熊本県教育長　外　村　次　郎

例　言

(1) 本書は、熊本県教育委員会が国庫補助を受けて実施した、熊本県下に分布する装飾古墳すべてについての調査報告書である。

(2) 未調査であった古墳については実測調査を実施し、既調査の古墳については図面整理を主とし、必要に応じて補足調査を実施した。

(3) 調査には、依嘱した専門調査員と熊本県教育庁文化課職員があたり、熊本大学考古学研究室等の協力を得た。特に、横穴墓群の立面配置図の作成は甲元真之氏（熊本大学文学部助教授）の指導・協力に負うところが大である。

(4) 本書の執筆者は、本文目次と各文の末尾に記すとおりであり、主として調査者に依頼した。付章１については乙益重隆氏（国学院大学文学部教授）から玉稿を賜った。

(5) 本書所収の写真の多くは、白石巌氏の撮影・提供によるものである。

(6) 挿図の実測・製図あるいは出典については、挿図目次に示すとおりである。主に製図は高木正文と佐藤淳子が行い、原稿浄書は米原圭子と高村恭子が行った。

(7) 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、三島格氏（肥後考古学会長）と隈昭志の助言を受けて、高木が担当した。

本 文 目 次

I 序 章

1．調査の目的と概要 ……隈 昭志・高木 正文… 3
2．調査の事務組織…… 3
3．調査委員の組織…… 4
4．調査参加者・協力者・資料提供者 …… 4
5．本報告書の構成……高木 正文… 5

II 装飾ある石棺・石室墓

1．四ッ山古墳 ……三島 格… 11
2．三ノ宮古墳 ……三島 格… 12
3．大原9号石棺 ……田添 夏喜… 15
4．大坊古墳 ……田添 夏喜… 18
5．永安寺東古墳 ……田辺 哲夫… 21
6．永安寺西古墳 ……田辺 哲夫… 25
7．馬出古墳 ……田添 夏喜… 27
8．経塚古墳 ……乙益 重隆… 29
9．塚坊主古墳 ……隈 昭志… 30
10．江田穴観音古墳 ……高木 正文… 35
11．臼塚古墳 ……原口 長之… 38
12．チブサン古墳 ……原口 長之… 42
13．オブサン古墳 ……原口 長之… 47
14．馬塚古墳 ……原口 長之… 49
15．弁慶ガ穴古墳 ……原口 長之… 52
16．御霊塚古墳 ……原口 長之… 56
17．持松塚原古墳 ……隈 昭志… 59
18．持松3号石棺 ……原口 長之… 60
19．浦大間4号石棺 ……原口 長之… 61
20．横山古墳 ……上野 辰男・桑原 憲彰… 62
21．石川山4号古墳 ……原口 長之・隈 昭志… 66
22．石立石棺 ……隈 昭志… 68
23．袈裟尾高塚古墳 ……隈 昭志… 69
24．上御倉古墳 ……原口 長之… 73
25．釜尾古墳 ……乙益 重隆… 75
26．富ノ尾1号古墳 ……伊藤 奎二… 79
27．稲荷山古墳 ……隈 昭志… 82
28．千金甲1号古墳 ……三島 格… 83
29．千金甲3号古墳 ……伊藤 奎二… 86
30．井寺古墳 ……乙益 重隆… 88
31．今城大塚古墳 ……緒方 勉… 92
32．坂本古墳 ……三島 格… 95
33．甚九郎山古墳 ……三島 格… 96
34．石之室古墳 ……三島 格… 97
35．中郡古墳 ……伊藤 奎二… 99
36．宇賀岳古墳 ……勢田 廣行… 101
37．潤野古墳 ……富樫卯三郎… 105
38．晩免古墳 ……富樫卯三郎… 107

39．宇土城石垣の古墳石材……富樫卯三郎… 109
40．梅崎古墳 ……富樫卯三郎… 112
41．城塚古墳 ……平山　修一… 114
42．東畑古墳 ……平山　修一… 115
43．仮又古墳 ……平山　修一… 116
44．鴨籠古墳 ……三島　　格… 119
45．不知火塚原１号古墳 ……三島　　格… 124
46．国越古墳 ……乙益　重隆… 127
47．桂原１号古墳……三島　　格… 131
48．桂原２号古墳……平山　修一
高木　恭二… 134
49．小田良古墳 ……江本　　直… 135
50．長砂連古墳 ……乙益　重隆… 140
資　　料 ……下林　繁夫… 141
51．広浦古墳 ……乙益　重隆… 144
52．大戸鼻北古墳……隈　　昭志… 146
53．大戸鼻南古墳……隈　　昭志… 148
54．大戸鼻石棺 ……隈　　昭志… 149
55．大野窟古墳 ……三島　　格… 150
56．大野村石棺 ……高木　恭二… 153
57．竜北高塚古墳……三島　　格… 154
58．大王山古墳 ……乙益　重隆… 159
59．門前２号古墳……佐藤　伸二… 161
60．大鼠蔵尾張宮古墳 ……隈　　昭志… 163
61．大鼠蔵東麓１号古墳 ……江上　敏勝… 165
62．大鼠蔵東北麓２号古墳……江上　敏勝… 167
63．大鼠蔵西北麓２号古墳……江上　敏勝… 168
64．小鼠蔵１号古墳……乙益　重隆… 169
65．小鼠蔵３号古墳……池田　栄史… 170
66．五反田古墳 ……佐藤　伸二… 172
67．長迫古墳 ……乙益　重隆… 174
付　　……佐藤　伸二… 176
68．田川内１号古墳……佐藤　伸二… 178
69．田川内２号古墳……佐藤　伸二… 181
70．田川内３号古墳……佐藤　伸二… 181
71．竹ノ内古墳 ……佐藤　伸二… 182

III　装飾ある横穴墓

72．今村岩の下横穴墓群 ……高木　正文… 185
73．石貫穴観音横穴墓群 ……高木　正文… 191
74．石貫ナギノ横穴墓群 ……高木　正文… 196
75．石貫古城横穴墓群 ……高木　正文… 211
76．原横穴墓群 ……高木　正文… 218
77．横畠横穴墓群……高木　正文… 227
78．城迫間横穴墓群……高木　正文… 231
79．田崎横穴墓群……高木　正文… 234
80．長力・北原横穴墓群 ……高木　正文… 236
81．小原浦田横穴墓群 ……高木　正文… 239
82．小原大塚横穴墓群 ……高木　正文… 246
83．長岩横穴墓群……原口　長之
高木　正文… 260
84．岩原横穴墓群……高木　正文… 277
85．桜ノ上横穴墓群……高木　正文… 290
86．鍋田横穴墓群……高木　正文… 299
87．付城横穴墓群……高木　正文
隈　昭志… 319

88．城横穴墓群……高木　正文… 324
89．宮穴横穴墓群……高木　正文… 329
90．古城横穴墓群……高木　正文… 333
91．御領横穴墓群……高木　正文… 340
92．牛頸横穴墓群……高木　正文… 341
資　料……小林　久雄… 342
93．大村横穴墓群……高木　正文… 344
94．京ガ峰横穴墓群……高木　正文… 356
95．小原横穴墓群……高木　正文… 360

Ⅳ　付　　章

1．熊本県下における装飾古墳の発見と研究の歴史……乙益　重隆… 363
2．熊本県の装飾古墳の分布と一覧…… 371
(1)熊本県の装飾古墳分布図…高木　正文… 371
(2)熊本県の装飾古墳一覧表…高木　正文… 372
(3)熊本県の装飾古墳図文集成…高木　正文　佐藤　淳子… 379
3．熊本県の古墳石製表飾の分布と一覧…… 391
(1)熊本県の古墳石製表飾分布図 …高木　正文… 391
(2)熊本県の古墳石製表飾一覧表 …高木　正文… 392
(3)熊本県の古墳石製表飾集成…高木　正文… 392

図 版 目 次

1の1図　四ッ山古墳位置図（大牟田・荒尾2.5万分の1地図）……11
1の2図　四ッ山古墳石室実測図（坂本経堯『肥後上代文化の研究』より）……11
2の1図　三ノ宮古墳および周辺測量図（昭和38年三島格・佐藤伸二・村井真輝・菊池大和・平野博之・福島作蔵・津田実測，高木正文製図）……12
2の2図　三ノ宮古墳位置図（大牟田・荒尾2.5万分の1地図）……13
2の3図　三ノ宮古墳石材実測図（昭和38年三島・佐藤・伊藤奎二実測，高木製図）……13
2の4図　三ノ宮古墳石人実測図（昭和38年三島・佐藤・伊藤・平野実測，高木製図）……14
3の1図　大原9号石棺位置図（玉名2.5万分の1地図）……15
3の2図　大原9号石棺発見状態（三島格撮影）……15
3の3図　大原石棺群配置測量図（昭和42年田添夏喜実測，佐藤淳子製図）……16
3の4図　大原9号石棺実測図（昭和42年田添実測，佐藤製図）……17
3の5図　大原9号石棺石材の線刻文実測図（三島・島津義昭・山崎純男拓影より作図，高木製図）…17
3の6図　大原9号石棺出土鉄鏃実測図（田添実測・製図）……17
4の1図　大坊古墳周辺の装飾古墳位置図（玉名2.5万分の1地図）……18
4の2図　大坊古墳玄室奥壁（田添夏喜撮影）……18
4の3図　大坊古墳周辺地形測量図（昭和39年田添・田辺哲夫・玉名高校考古学部実測，高木正文製図）……19
4の4図　大坊古墳石室実測図（昭和38・41年田添実測，高木製図）……20
5の1図　永安寺東・西古墳周辺測量図（昭和39年田添夏喜・田辺哲夫・玉名高校考古学部実測，佐藤淳子製図）……21
5の2図　永安寺東古墳石室実測図（昭和39年田添・田辺・玉名高校考古学部実測，昭和59年高木正文装飾補足，佐藤製図）……22
5の3図　永安寺東古墳羨門部（白石巌撮影）……23
6の1図　永安寺西古墳玄室奥壁（白石巌撮影）……25
6の2図　永安寺西古墳石室実測（昭和39年田辺哲夫・田添夏喜・玉名高校考古学部実測，佐藤淳子製図）……26
7の1図　馬出古墳墳丘測量図（田添夏喜実測，佐藤淳子製図）……27
7の2図　馬出古墳石室実測図（昭和40年田添実測，佐藤製図）……28
8の1図　経塚古墳位置図（伊倉2.5万分の1地図）…29
8の2図　経塚古墳舟形石棺実測図（昭和42年乙益重隆実測・製図）……29
9の1図　清原古墳群分布図（昭和57年環境事業計画研究所作成・県文化課依託）……30
9の2図　塚坊主古墳・江田穴観音古墳位置図（玉名2.5万分の1地図）……31
9の3図　塚坊主古墳周溝復原図（西田道世ほか作成，『船山』菊水町教育委員会昭和51年より）……31
9の4図　塚坊主古墳墳丘測量図（昭和49年松村道博・丸山武水実測，佐藤淳子製図）……32
9の5図　塚坊主古墳石室全景（京都大学文学部考古学研究室提供）……33
9の6図　塚坊主古墳玄室全景（京都大学文学部考古学研究室提供）……34
9の7図　塚坊主古墳家形石棺全景（京都大学文学部考古学研究室提供）……34
10の1図　江田穴観音古墳墳丘全景（昭和40年高木誠治撮影）……35
10の2図　江田穴観音古墳墳丘測量図（菊水町教育委員会提供，高木正文製図）……36
10の3図　江田穴観音古墳石室実測図（菊水町教育委員会提供，高木製図）……37
11の1図　山鹿盆地の装飾古墳位置図（山鹿2.5万分の1地図）……38
11の2図　臼塚古墳墳丘測量図（昭和31年原口長之・山鹿高校考古学部実測，佐藤淳子製図）……38
11の3図　臼塚古墳石室実測図（昭和49年鹿本高校考古学部・鹿本商工高校考古学部実測，佐藤製図）……39
11の4図　臼塚古墳装飾文実測図(1)（昭和31年原口・山鹿高校考古学部実測，佐藤製図）……40
11の5図　臼塚古墳装飾文実測図(2)（昭和31年原口・山鹿高校考古学部実測，佐藤製図）……41
11の6図　臼塚古墳石人実測図（昭和56年本田博久実測，昭和59年高木正文補足，佐藤製図）……41
12の1図　チブサン古墳・オブサン古墳周辺測量図（昭和57年環境事業計画研究所作成・県文化課依託）……42
12の2図　チブサン古墳墳丘測量図（保存工事図面，佐藤淳子製図）……43
12の3図　チブサン古墳石室実測図（昭和47年隈昭志・中村幸史郎実測，佐藤製図）……44
12の4図　チブサン古墳後室家形石棺実測図（昭和47年隈・中村実測，佐藤製図）……45
12の5図　チブサン古墳石人（乙益重隆撮影）……46
12の6図　チブサン古墳後室の家形石棺（白石巌撮影）…46

13の1図　オブサン古墳墳丘測量図（昭和49年鹿本高校考古学部実測，高木正文製図）……47
13の2図　オブサン古墳石室実測図（昭和49年鹿本高校考古学部実測，高木製図）……48
14の1図　馬塚古墳墳丘測量図（昭和29年原口長之・山鹿高校考古学部実測，佐藤淳子製図）……49
14の2図　馬塚古墳の旧状（白石巌撮影）……50
14の3図　馬塚古墳第二羨門部（白石巌撮影）……50
14の4図　馬塚古墳石室実測図（昭和49年鹿本高校考古学部実測，高木正文製図）……51
15の1図　弁慶ガ穴古墳墳丘測量図（昭和31年原口長之・山鹿高校考古学部実測，佐藤淳子製図）……52
15の2図　弁慶ガ穴古墳石室実測図（昭和31年原口・山鹿高校考古学部実測，佐藤製図）……53
15の3図　弁慶ガ穴古墳装飾文位置図（昭和31年原口作成を改変，佐藤製図）……54
15の4図　弁慶ガ穴古墳の人物浮彫（白石巌撮影）……54
15の5図　弁慶ガ穴古墳装飾文実測図(1)（昭和31年原口実測，佐藤製図）……54
15の6図　弁慶ガ穴古墳の円文と舟に乗った馬(白石撮影)……54
15の7図　弁慶ガ穴古墳装飾文実測図(2)（昭和31年原口・山鹿高校考古学部実測，佐藤製図）……55
16の1図　御霊塚古墳位置図（来民2.5万分の1地図）……56
16の2図　御霊塚古墳墳丘測量図（昭和31年原口長之・山鹿高校考古学部実測，佐藤淳子製図）……56
16の3図　御霊塚古墳石室実測図（昭和31年原口・山鹿高校考古学部実測，佐藤製図）……57
16の4図　御霊塚古墳玄室奥壁の装飾文実測図（富田紘一実測『鹿本町史』より，佐藤製図）……57
16の5図　御霊塚古墳玄室右壁の装飾文実測図（富田実測『鹿本町史』より，佐藤製図）……58
16の6図　御霊塚古墳外観（白石巌撮影）……58
17の1図　持松塚原古墳と持松石棺群位置図（来民2.5万分の1地図）……59
17の2図　持松塚原古墳石棺実測図（昭和42年田辺哲夫・隈昭志実測，佐藤淳子製図）……59
18の1図　持松3号石棺実測図（昭和34年原口長之・山鹿高校考古学部実測，佐藤製図）……60
19の1図　浦大間石棺群位置図（来民2.5万分の1地図）……61
19の2図　浦大間4号石棺棺蓋実測図（昭和32年三島格実測・高木正文製図）……61
20の1図　横山古墳・石川山古墳群位置図（植木2.5万分の1地図）……62
20の2図　横山古墳墳丘測量図（昭和44年第二高校考古学部実測『熊本県文化財調査報告第41集』より）……63
20の3図　横山古墳石室実測図（昭和44年上野辰男・桑原憲彰ほか実測『熊本県文化財調査報告第41集』より）……64
21の1図　石川山古墳墳丘測量図（昭和41年原口長之・隈昭志実測『熊本県文化財調査報告第9集』より）……66
21の2図　石川山4号古墳装飾文様拓影（昭和41年原口・隈採拓『熊本県文化財調査報告第9集』より）……66
21の3図　石川山4号古墳石室実測図（昭和41年原口・隈実測『熊本県文化財調査報告第9集』より）……67
22の1図　石立石棺位置図（菊池・肥後大津2.5万分の1地図）……68
22の2図　石立石棺実測図（昭和42年隈昭志実測・高木正文製図）……68
23の1図　袈裟尾高塚古墳位置図（菊池2.5万分の1地図）……69
23の2図　袈裟尾高塚古墳墳丘測量図（昭和54年保存計画協会実測，勢田廣行製図）……69
23の3図　袈裟尾高塚古墳石室実測図（昭和54年保存計画協会実測，勢田製図）……70
23の4図　袈裟尾高塚古墳石室復原実測図（昭和54年保存計画協会実測、勢田製図）……71
23の5図　袈裟尾高塚古墳石屋形奥壁装飾文実測図（昭和54年保存計画協会実測，勢田製図）……72
23の6図　袈裟尾高塚古墳第二羨門の下部眉石実測図（昭和54年保存計画協会実測，勢田製図）……72
24の1図　上御倉古墳位置図（坊中・坂梨2.5万分の1地図）……73
24の2図　上御倉古墳閉塞石の装飾文実測図（昭和33年原口長之実測，高木正文製図）……73
24の3図　上御倉古墳石室実測図（有光教一・坂本経堯ほか実測，乙益重隆『熊本県文化財調査報告第三集』より）……74
25の1図　釜尾古墳周辺測量図（北部町役場作成、『北部町史』より，佐藤淳子製図）……75
25の2図　釜尾古墳石室実測図（昭和42年乙益重隆・上野辰男・平岡勝昭・松本信秀実測，佐藤製図）……76
25の3図　釜尾古墳装飾図(1)（京都大学『九州における装飾ある古墳』大正8年の池上年氏の図を改変，佐藤製図）……77
25の4図　釜尾古墳装飾図(2)（京都大学『九州に於ける装飾ある古墳』大正8年の池上年氏の図を改変，佐藤製図）……78
26の1図　釜尾古墳・富ノ尾1号古墳位置図（植木・熊本2.5万分の1地図）……79
26の2図　富ノ尾1号古墳奥壁（白石巌撮影）……79
26の3図　富ノ尾1号古墳墳丘測量図（伊藤奎二ほか実測・高木正文製図）……80

26の4図　富ノ尾古墳群の石人（白石巌撮影）……80
26の5図　富ノ尾1号古墳石室実測図（伊藤奎二ほか実測・高木製図）……81
27の1図　稲荷山古墳位置図（熊本2.5万分の1地図）… 82
27の2図　稲荷山古墳石室実測図（昭和23年高士与市・上野辰男実測，佐藤淳子製図）……82
28の1図　千金甲1号・2号古墳位置図（熊本2.5万分の1地図）……83
28の2図　千金甲1号古墳墳丘測量図（昭和39年三島格・乙益重隆・佐藤伸二実測，高木正文製図）…83
28の3図　千金甲1号古墳石室実測図（昭和39年伊藤奎二ほか実測，高木製図）……84
28の4図　千金甲1号古墳玄室の装飾文（白石巌撮影）… 85
28の5図　千金甲1号古墳奥壁の靱彫刻模式図（昭和39年伊藤奎二作成，佐藤淳子製図）……85
29の1図　千金甲3号古墳の墳丘（白石巌撮影）……86
29の2図　千金甲3号古墳石室実測図（伊藤奎二・西健一郎実測，佐藤淳子製図）……87
30の1図　井寺古墳位置図（健軍・御船2.5万分の1地図）……88
30の2図　井寺古墳墳丘測量図（乙益重隆ほか実測，佐藤淳子製図）……88
30の3図　井寺古墳石室実測図（乙益・平岡勝昭ほか実測，佐藤製図）……89
30の4図　井寺古墳石室の線刻文拓影図(1)（浜田耕作「上益城郡六嘉村井寺古墳」より）……90
30の5図　井寺古墳石室の線刻文拓影図(2)（浜田「上益城郡六嘉村井寺古墳」より）……91
31の1図　今城大塚古墳位置図（御船2.5万分の1地図）……92
31の2図　今城大塚古墳石室奥壁装飾図(1)（大正2年和田千吉作図，梅原末治「肥後国下益城郡今城の大塚」より）……92
31の3図　今城大塚古墳石室奥壁装飾図(2)（大正7年梅原末治実測，梅原末治「肥後国下益城郡今城の大塚」より）……92
31の4図　今城大塚古墳石室奥壁装飾図(3)（緒方勉実測，高木正文製図）……92
31の5図　今城大塚古墳墳丘測量図（緒方・高野啓一・第二高校考古学部実測，高木製図）……93
31の6図　今城大塚古墳石室実測図（緒方実測，高木製図）……94
32の1図　坂本古墳・甚九郎山古墳位置図（宇土・御船2.5万分の1地図）……95
32の2図　坂本古墳石障の装飾文（小林久雄撮影）……95
32の3図　坂本古墳石室実測図（梅原末治実測「肥後国上益城郡杉上村の古墳」より）……96
34の1図　石之室古墳位置図（宇土2.5万分の1地図）… 97
34の2図　石之室古墳家形石棺実測図（三島格実測『城南町史』より）……97
34の3図　石之室古墳家形石棺（『城南町史』より）…… 98
34の4図　石之室古墳円筒状石製品実測図（三島実測『城南町史』より）…… 98
34の5図　石之室古墳石棺奥壁（『城南町史』より）…… 98
35の1図　中郡古墳位置図（甲佐2.5万分の1地図）… 99
35の2図　中郡古墳家形石棺内壁（松本雅明撮影）…… 99
35の3図　中郡古墳家形石棺実測図（伊藤奎二・高島忠平・佐藤伸二・菊池大和実測，高木製図）……100
36の1図　宇賀岳古墳位置図（松橋2.5万分の1地図）……101
36の2図　宇賀岳古墳周辺測量図（保存計画協会提供，池田栄史ほか実測，勢田廣行製図）……101
36の3図　宇賀岳古墳石室実測図（保存計画協会提供，池田ほか実測，勢田製図）……102
36の4図　宇賀岳古墳石室複原実測図（保存計画協会提供，勢田製図）……103
36の5図　宇賀岳古墳玄室壁面の装飾文実測図（昭和56年高木正文・平山修一・勢田・木下洋介・柳原真由美実測，高木・米原圭子製図）……104
37の1図　潤野古墳・晩免古墳位置図（宇土松橋2.5万分の1地図）……105
37の2図　潤野古墳石棺図（「肥後国宇土郡花園村の古墳」より）……105
37の3図　潤野古墳周辺地形測量図（昭和48年富樫卯三郎・宇土高校社会部実測，佐藤淳子製図）……106
38の1図　晩免古墳石棺図（「肥後国宇土郡花園村の古墳」より）……107
38の2図　晩免古墳地形測量図（昭和48年富樫卯三郎・宇土高校社会部実測，佐藤淳子製図）……108
39の1図　宇土城三の丸跡位置図（宇土2.5万分の1地図）……109
39の2図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(1)（富樫卯三郎作成，佐藤淳子製図）……109
39の3図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(2)（富樫作成，佐藤製図）……110
39の4図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(3)（富樫作成，佐藤製図）……110
39の5図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(4)（富樫・三島格作成，佐藤製図）……111
39の6図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(5)（富樫作成，佐藤製図）……111
39の7図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(6)（富樫作成，佐藤製図）……111
40の1図　梅崎古墳・城塚古墳位置図（網津2.5万分の1地図）……112
40の2図　梅崎古墳地形測量図（昭和42年富樫卯三郎・清見末喜・宇土高校社会部実測，佐藤淳子製図）……112
40の3図　梅崎古墳石室実測図（昭和42年富樫・清見・宇土高校社会部実測，佐藤製図）……113

40の4図　梅崎古墳東側壁装飾文実測図（富樫作成，佐藤製図）……114
42の1図　東畑古墳・仮又古墳位置図（宇土2.5万分の1地図）……115
42の2図　東畑古墳遠望，西側より（平山修一撮影）‥115
42の3図　東畑古墳玄室奥壁側を見る（平山修一撮影）……115
43の1図　仮又古墳墳丘測量図（平山修一ほか実測『仮又古墳』より）……116
43の2図　仮又古墳石室実測図（平山修一・木下洋介実測『仮又古墳』より）……117
43の3図　仮又古墳玄室側壁の装飾文実測図（平山修一・高木正文・柳原真由美実測『仮又古墳』より）……118
44の1図　鴨籠古墳・不知火塚原1号古墳位置図（松橋2.5万分の1地図）……119
44の2図　鴨籠古墳墳丘測量図（昭和36年杉村彰一ほか実測，高木正文製図）……120
44の3図　鴨籠古墳石室実測図（昭和36年高島忠平・杉村彰一・古田一英実測に石棺を復元設置，佐藤淳子製図）……121
44の4図　鴨籠古墳家形石棺実測図（昭和56年永田次郎・宮本千絵実測に補筆，佐藤製図）……122
44の5図　鴨籠古墳家形石棺直弧文部分図（高木作成，佐藤製図）……123
44の6図　鴨籠古墳家形石棺線刻文拓影図（梅原末治採拓「宇土郡不知火村の古墳」より）……123
45の1図　不知火塚原1号古墳石室実測図（昭和36年三島格ほか実測，古城史雄製図）……124
45の2図　不知火塚原1号古墳天井石の装飾文実測図（昭和36年三島ほか採拓より古城史雄図化・製図）……125
45の3図　不知火塚原1号古墳玄室東側壁の装飾文実測図（昭和36年三島ほか採拓より古城史雄図化・製図）……126
46の1図　国越古墳と桂原1・2号古墳位置図（松橋2.5万分の1地図）……127
46の2図　国越古墳出土鹿角製玉飾品実測図（野田拓治実測図，佐藤淳子製図）……127
46の3図　国越古墳墳丘測量図（昭和41年村井真輝・佐藤伸二・佐藤哲三・北川繁秋実測，佐藤淳子製図）……128
46の4図　国越古墳石室実測図（昭和41年乙益重隆・伊藤奎二ほか実測，佐藤淳子製図）……129
46の5図　国越古墳家形石棺装飾文実測図（昭和41年乙益・伊藤ほか実測，佐藤淳子製図）……130
47の1図　桂原1号古墳墳丘測量図（昭和36年三島格ほか実測，佐藤淳子製図）……131
47の2図　桂原1号古墳石室実測図（昭和49年松村道博実測，佐藤製図）……132
47の3図　桂原1号古墳玄室東側の装飾図(1)（昭和36年三島格ほか採拓より古城史雄図化・製図）‥‥133
47の4図　桂原1号古墳玄室東側の装飾図(2)（昭和36年三島ほか採拓より古城図化・製図）……133
47の5図　桂原1号古墳玄室西側の装飾図（昭和36年三島ほか採拓より古城図化・製図）……133
47の6図　桂原1号古墳玄室南側の装飾図（昭和36年三島ほか採拓より古城図化・製図）……133
48の1図　桂原2号古墳羨道右側壁の装飾文実測図（昭和58年平山修一・高木恭二・中野章・木下洋介採拓，図化・製図）……134
49の1図　小田良古墳位置図（三角・松合2.5万分の1地図）……135
49の2図　小田良古墳周辺測量図（昭和53年江本直・下村智実測，江本製図）……135
49の3図　小田良古墳石室実測図（昭和53年江本・下村実測，江本製図）……136
49の4図　小田良古墳石室全景（江本撮影）……137
49の5図　小田良古墳障壁装飾文実測図（昭和53年江本・下村実測，江本製図）……138
49の6図　小田良古墳障壁装飾文拓影図（昭和53年山城仁恵・笠間いつ子・岩崎さゆり・新改孝子・小原洋子採拓）……139
50の1図　長砂連古墳位置図（天草松島2.5万分の1地図）……140
50の2図　長砂連古墳石室実測図（昭和39年斉藤忠・乙益重隆実測，乙益製図）……140
50の3図　長砂連古墳石室見取図および復元想像図（下林繁夫氏作成，佐藤淳子製図）……142
50の4図　長砂連古墳石室右袖壁の装飾文見取図（下林作成，佐藤製図））……143
51の1図　広浦古墳位置図（天草松島2.5万分の1地図）……144
51の2図　広浦古墳装飾石材実測（昭和49年丸山武水実測，佐藤淳子製図）……144
51の3図　広浦古墳装飾石材拓影図（島田貞彦「肥後国天草郡維和村の古墳」より）……145
52の1図　大戸鼻北古墳墳丘測量図（文化財保存計画協会提供）……146
52の2図　大戸鼻北古墳石室実測図（昭和49年松村道博・丸山武水実測，松村製図）……147
52の3図　大戸鼻北古墳石室石障装飾拓影図（浜田耕作「阿村大戸北古墳」より）……148
53の1図　大戸鼻南古墳石棺実測図（昭和49年松村道博・丸山武水実測，松村製図）……148
53の2図　大戸鼻古墳群位置図（天草松島2.5万分の1地図）……149
53の3図　大戸鼻南古墳石棺南壁装飾拓影図（浜田耕作「阿村大戸南古墳」より）……149
55の1図　大野窟古墳・竜北高塚古墳位置図（鏡2.5万分

の１地図）……150
55の２図　大野窟古墳・古窟古墳墳丘測量図（三島格「大野窟古墳」より，佐藤淳子再製図）……151
55の３図　大野窟古墳石室実測図（三島「大野窟古墳」より、佐藤再製図）……152
55の４図　大野窟古墳玄室（白石巌撮影）……153
56の１図　大野村石棺スケッチ（E・S・モース作図「日本その日その日」より）……153
57の１図　竜北高塚古墳墳丘測量図（昭和42年三島格・佐藤伸二ほか実測，佐藤淳子製図）……154
57の２図　竜北高塚古墳石棺実測図（梅原末治「肥後国八代郡吉野村の古墳」より）……154
57の３図　竜北高塚古墳石棺内文様拓影図（梅原「肥後国八代郡吉野村の古墳」より）……155
57の４図　竜北高塚古墳石棺実測図（昭和57年三島・平山修一・高木恭二・木下洋介実測，高木製図）……156
57の５図　竜北高塚古墳石枕実測図（昭和57年三島・平山・高木・木下実測，高木製図）……156
57の６図　竜北高塚古墳石棺東小口文様（昭和57年木下撮影）……157
57の７図　竜北高塚古墳石棺東小口文様（梅原「肥後国八代郡吉野村の古墳」より）……157
57の８図　午橋生の竜北高塚古墳石棺実測図（午橋生「肥後雑見㈡」より）……158
58の１図　大王山古墳位置図（鏡2.5万分の１地図)…159
58の２図　大王山古墳石室・石棺実測図（昭和33年乙益重隆実測・製図）……159
58の３図　大王山古墳石棺（江本直撮影）……160
58の４図　大王山古墳石室（江本撮影）……160
59の１図　門前２号古墳位置図（鏡2.5万分の１地図）……161
59の２図　門前２号古墳装飾石材拓影図（浜田耕作「肥後国八代郡龍峯村の古墳」より）……161
59の３図　門前２号古墳装飾石材実測図（浜田「肥後国八代郡龍峯村の古墳」より）……162
59の４図　門前２号古墳装飾石材（熊本県教育庁文化課撮影）……162
60の１図　大鼠蔵山・小鼠蔵山古墳群位置図（日奈久2.5万分の１地図）……163
60の２図　大鼠蔵山・小鼠蔵山古墳群位置図（江上敏勝作成，佐藤淳子製図）……163
60の３図　大鼠蔵尾張宮古墳石室実測図（昭和49年松村道博・丸山武水実測，松村製図）……164
61の１図　大鼠蔵山東麓土取り工事現場（昭和29年江上敏勝撮影）……165
61の２図　大鼠蔵山東麓箱式石棺発見の現場（昭和29年江上撮影）……165
61の３図　発見された東麓１号古墳装飾文（昭和29年江上撮影）……165
61の４図　発見された東麓１号古墳石棺側石（昭和29年江上撮影）……165
61の５図　大鼠蔵東麓１号古墳装飾石材図（江上実測，佐藤淳子製図）……166
61の６図　大鼠東麓２号古墳石棺（昭和29年江上撮影）……166
62の１図　二重円形刻文をもつ大鼠蔵東北麓２号古墳（江上敏勝撮影）……167
62の２図　大鼠蔵東北麓２号古墳石棺の装飾刻文（江上撮影）……167
63の１図　大鼠蔵西北麓２号古墳（昭和35年江上撮影)・168
64の１図　小鼠蔵１号古墳石室実測図（池田栄史・田尻悦子・森山栄一実測，池田・高木正文製図)…169
64の２図　大鼠蔵山・小鼠蔵山遠景（白石巌撮影）…170
65の１図　小鼠蔵３号古墳石棺実測図（池田栄史・田尻悦子実測，池田製図）……171
66の１図　五反田古墳位置図（日奈久2.5万分の１地図）……172
66の２図　五反田古墳石室の装飾壁面（佐藤伸二撮影）……172
66の３図　五反田古墳石室装飾壁の円文（佐藤撮影)…172
66の４図　五反田古墳石室実測図（松本雅明「敷川内五反田古墳調査報告」より）……173
66の５図　五反田古墳石障実測図（松本「敷川内五反田古墳調査報告」より）……173
67の１図　長迫古墳とその石材位置図（日奈久2.5万分の１地図）……174
67の２図　長迫古墳石材（東京大学総合研究資料館提供）……174
67の３図　長迫古墳石材の現状（乙益重隆撮影）……175
67の４図　長迫古墳石材の装飾文（乙益撮影）……175
67の５図　長迫古墳日奈久神社の石材拓影（梅原末治「日奈久町字永迫古墳」より）……176
67の６図　長迫古墳日奈久神社の石材実測図（昭和59年佐藤伸二実測，佐藤淳子製図）……176
67の７図　長迫古墳角田氏蔵石材拓影（梅原「日奈久町字永迫古墳」より）……177
67の８図　長迫古墳日奈久山下町の石材実測図（昭和59年佐藤伸二実測，佐藤淳子製図）……177
67の９図　長迫古墳日奈久山下町の石材拓影（昭和59年佐藤伸二採拓）……177
67の10図　長迫古墳日奈久山下町の石材保存状態（昭和59年佐藤伸二撮影）……177
67の11図　長迫古墳日奈久山下町の石材（昭和59年佐藤伸二撮影）……177
68の１図　田川内古墳群・竹ノ内石棺石材位置図（日奈久2.5万分の一地図)……178
68の２図　田川内１号古墳石室内部（白石巌撮影）…178
68の３図　田川内１号古墳石室槨壁文様拓影図（梅原末治「日奈久町字田川内古墳」より）……179

68の4図　田川内1号古墳石室実測図（昭和49年丸山武水・松村道博実測，松村製図）……180
69の1図　田川内2号古墳装飾文実測図（蓑田田鶴男『金剛の歴史』より）……181
70の1図　田川内3号古墳の装飾石材（昭和59年佐藤伸二撮影）……181
70の2図　田川内3号古墳装飾石材実測図（昭和59年佐藤伸二実測，佐藤淳子製図）……182
70の3図　田川内3号古墳装飾石材拓影図（昭和59年佐藤伸二採拓）……182
71の1図　竹ノ内石棺装飾石材実測図（昭和59年佐藤伸二実測，佐藤淳子製図）……182
72の1図　今村岩の下横穴墓群位置図（関町2.5万分の1地図）……185
72の2図　今村岩の下横穴墓群配置図（昭和59年坂田和弘・明瀬慎吾・米原圭子・三山茂実測，高木正文製図）……185
72の3図　今村岩の下Ⅰ－1号横穴墓実測図（昭和59年高木・河北毅・坂田実測，高木製図）……186
72の4図　今村岩の下Ⅱ－3号横穴墓実測図（昭和59年米原・明瀬・坂田実測，高木製図）……187
72の5図　今村岩の下Ⅱ－7号横穴墓実測図（昭和59年高木・河北・坂田実測，高木製図）……188
72の6図　今村岩の下Ⅲ－2号横穴墓実測図（昭和59年高木・河北・坂田・米原実測，高木製図）…189
72の7図　今村岩の下Ⅰ－1号横穴墓（昭和59年三山撮影）……190
72の8図　今村岩の下Ⅱ群の横穴墓（昭和59年三山撮影）……190
72の9図　今村岩の下Ⅱ－3号横穴墓（昭和59年三山撮影）……190
73の1図　繁根木川流域装飾横穴墓群位置図（玉名2.5万分の1地図）……191
73の2図　石貫穴観音横穴墓群配置図（昭和54年甲元真之ほか実測・製図）……191
73の3図　石貫穴観音1号横穴墓実測図（昭和54年宮本千絵・永田次郎・管付和樹・谷口武範実測，高木正文補足・製図）……192
73の4図　石貫穴観音1号横穴墓第二飾り縁の盾線刻文実測図（昭和59年高木実測・製図）……193
73の5図　石貫穴観音2号横穴墓実測図（昭和39年田添夏喜・昭和54年西住欣一郎ほか実測，高木補足・製図）……194
73の6図　石貫穴観音3号横穴墓実測図（昭和54年西住・宮本・谷口実測，高木補足・製図）……195
74の1図　石貫ナギノ横穴墓群配置図（昭和54年甲元真之ほか実測・製図，米原圭子再製図）……196
74の2図　石貫ナギノ8号横穴墓の石屋形（白石巌撮影）……196
74の3図　石貫ナギノ6号横穴墓実測図（昭和48年田添夏喜実測・高木正文製図）……197
74の4図　石貫ナギノ8号横穴墓実測図（昭和48年田添実測・高木製図）……198
74の5図　石貫ナギノ9号横穴墓実測図（昭和48年田添実測・高木製図）……199
74の6図　石貫ナギノ12号横穴墓実測図（昭和48年田添実測・高木製図）……200
74の7図　石貫ナギノ16号横穴墓実測図（昭和54年西住欣一郎・米倉秀紀・谷口武範実測，高木製図）……200
74の8図　石貫ナギノ17号横穴墓実測図（昭和54年西住実測，高木補足・製図）……201
74の9図　石貫ナギノ19号横穴墓実測図（昭和54年西住実測，高木製図）……202
74の10図　石貫ナギノ28号横穴墓実測図（昭和48年田添実測，高木製図）……203
74の11図　石貫ナギノ29号横穴墓実測図（昭和54年西住・宮本千絵実測，高木製図）……204
74の12図　石貫ナギノ30号横穴墓実測図（昭和54年谷口武範・辻満久実測，高木補足・製図）……205
74の13図　石貫ナギノ12号横穴墓の石屋形（白石巌撮影）……205
74の14図　石貫ナギノ37号横穴墓実測図（昭和48年田添実測・高木製図）……206
74の15図　石貫ナギノ39号横穴墓実測図（昭和54年松尾法博・熊谷智徳実測，高木製図）……207
74の16図　石貫ナギノ40号横穴墓実測図（昭和54年西住実測，高木製図）……208
74の17図　石貫ナギノ横穴墓群近景（白石巌撮影）…208
74の18図　石貫ナギノ43号横穴墓実測図（昭和48年田添実測，高木製図）……209
74の19図　石貫ナギノ45号横穴墓実測図（昭和48年田添実測，高木製図）……210
75の1図　石貫古城横穴墓群配置図（昭和57年高木正文・柳原真由美・西住欣一郎・明瀬慎吾実測，高木製図……211
75の2図　石貫古城Ⅰ－7号横穴墓実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……212
75の3図　石貫古城Ⅰ－7号横穴墓装飾文実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……212
75の4図　石貫古城Ⅰ－16号横穴墓実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……213
75の5図　石貫古城Ⅰ－26号横穴墓実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……214
75の6図　石貫古城Ⅱ－3号横穴墓実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……215
75の7図　石貫古城Ⅱ－3号横穴墓装飾文実測図（昭和57年高木実測・製図）……215
75の8図　石貫古城Ⅱ－13号横穴墓実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……216

75の９図　石貫古城Ⅱ－13号横穴墓装飾文実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……217
76の１図　原横穴墓群配置図（昭和57年高木正文・柳原真由美・明瀬慎吾実測，高木製図）……218
76の２図　原３号横穴墓実測図（昭和57年高木・柳原・宮本千絵・米原圭子・入江久成実測，高木製図）……219
76の３図　原３号横穴墓玄室壁面装飾文実測図（昭和58年高木・米原実測，高木製図）……220
76の４図　原７号横穴墓実測図（昭和57・58年高木・柳原・宮本・入江・米原実測，高木製図）……221
76の５図　原10号横穴墓実測図（昭和57・58年高木・松原明美・井上信之・米原・入江実測，高木製図）……222
76の６図　原12号横穴墓実測図（昭和57・58年高木・柳原・宮本・米原・入江実測，高木製図）……223
76の７図　原13号横穴墓実測図（昭和57・58年高木・松原・米原・入江実測，高木製図）……224
76の８図　原15号横穴墓実測図（昭和57年明瀬・宮本実測，高木製図）……225
76の９図　原３号横穴墓玄室左壁の装飾（白石巌撮影）…226
76の10図　原３号横穴墓玄室右壁の装飾（白石撮影）…226
77の１図　横畠・城迫間横穴墓群位置図（玉名 2.5 万分の１地図）……227
77の２図　横畠横穴墓群配置図（昭和56年甲元真之・高木正文・西住欣一郎・柳原真由美・明瀬慎吾・坂田和弘実測，高木製図）……227
77の３図　横畠６号横穴墓実測図（昭和56年高木・西谷大実測，高木製図）……228
77の４図　横畠８号横穴墓実測図（昭和56年西住実測，高木製図）……229
77の５図　横畠10号横穴墓実測図（昭和56年高木実測・製図）……230
78の１図　城迫間２号および装飾文実測図（昭和56年西住欣一郎・古城史雄・高木正文実測，高木製図）……231
78の２図　城迫間横穴墓群配置図（昭和56年甲元真之・入江久成実測，高木製図）……232
78の３図　城迫間３号横穴墓実測図（昭和56年高木・松尾法博実測，高木製図）……232
78の４図　城迫間４号横穴墓実測図（昭和56年高木実測，高木製図）……233
79の１図　田崎横穴墓群位置図（玉名・伊倉 2.5 万分の１地図）……234
79の２図　田崎横穴墓群配置図（昭和58年高木正文・米原圭子・入江久成実測，高木製図）……234
79の３図　田崎１号横穴墓実測図（昭和58年高木・米原・入江実測，高木製図）……235
80の１図　長力・北原横穴墓群位置図（玉名 2.5 万分の１地図）……236
80の２図　長力・北原横穴墓群周辺測量図（昭和54年菊水町教育委員会作成，米原圭子製図）……236
80の３図　北原横穴墓群配置図（昭和54年菊水町教育委員会作成，米原製図）……236
80の４図　長力１号横穴墓実測図（昭和54年菊水町教育委員会作成，高木正文補足・製図）……237
80の５図　北原３号横穴墓実測図（昭和54年菊水町教育委員会作成，高木製図）……238
80の６図　北原３号横穴墓装飾文実測図（昭和54年菊水町教育委員会作成，高木製図）……238
81の１図　志々岐・岩原台地周辺横穴墓群位置図（山鹿・来民 2.5 万分の１地図）……239
81の２図　小原浦田横穴墓群配置図（昭和56年甲元真之・西住欣一郎実測，高木正文製図）……239
81の３図　小原浦田１号横穴墓実測図（昭和56年柳原真由美・吉武学・高木実測，高木製図）……240
81の４図　小原浦田２号横穴墓実測図（昭和56年高木・坂田和弘・入江久成実測，高木製図）……241
81の５図　小原浦田２号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……242
81の６図　小原浦田３号横穴墓実測図（昭和56年甲元・西谷大・高木実測，高木製図）……243
81の７図　小原浦田３号横穴墓羨道壁面装飾文実測図（昭和56年高木実測，製図）……244
81の８図　小原浦田４号横穴墓実測図（昭和56年甲元・西住実測，高木製図）……244
81の９図　小原浦田５号横穴墓実測図（昭和56年西住・入江実測，高木製図）……245
82の１図　小原大塚横穴墓群配置図(1)（昭和56年甲元真之・西谷大・入江久成・吉武学・坂田和弘実測，高木正文製図）……246
82の２図　小原大塚横穴墓群配置図(2)（昭和56年甲元・西谷・入江・吉武・坂田実測，高木製図）…246
82の３図　小原大塚横穴墓群配置図(3)（昭和56年甲元・西谷・入江・吉武・坂田実測，高木製図）…247
82の４図　小原大塚13号横穴墓実測図（昭和56年井上靖司・西住欣一郎実測，高木製図）……248
82の５図　小原大塚39号横穴墓実測図（昭和56年柳原真由美・坂田・高木実測，高木製図）……249
82の６図　小原大塚39号横穴墓装飾文実測図（昭和56年高木実測，製図）……250
82の７図　小原大塚39号横穴墓羨道右壁装飾文（白石巌撮影）……250
82の８図　小原大塚41号横穴墓右外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測，製図）……250
82の９図　小原大塚41号横穴墓実測図（昭和56年西住・井上・高木実測，高木製図）……251
82の10図　小原大塚41号横穴墓右外壁装飾文（白石巌撮影）……251

82の11図　小原大塚51号横穴墓実測図（昭和56年柳原・坂田実測，高木製図）……252
82の12図　小原大塚53号横穴墓実測図（昭和56年西住・熊谷智徳・井上実測，高木製図）……253
82の13図　小原大塚54号横穴墓実測図（昭和56年柳原・井上実測，高木製図）……254
82の14図　小原大塚55号横穴墓実測図（昭和56年熊谷・坂田・井上実測，高木製図）……255
82の15図　小原大塚75号横穴墓実測図（昭和56年柳原・坂田実測，高木製図）……256
82の16図　小原大塚91号横穴墓実測図（昭和56年高木実測・製図）……257
82の17図　小原大塚93号横穴墓実測図（昭和56年坂田実測，高木製図）……258
82の18図　小原大塚100号横穴墓実測図（昭和56年柳原・西谷実測，高木製図）……259
83の1図　長岩横穴墓群配置図(1)（昭和39年藤坂史人実測，佐藤淳子補足・製図）……260
83の2図　長岩横穴墓群配置図(2)（昭和39年藤坂実測，佐藤補足・製図）……261
83の3図　長岩横穴墓群配置図(3)（昭和39年藤坂実測，佐藤補足・製図）……262
83の4図　長岩41号横穴墓実測図（昭和59年高木正文・米原圭子実測，高木製図）……263
83の5図　長岩41号横穴墓左外壁装飾文実測図（昭和59年高木・米原実測，高木製図）……264
83の6図　長岩46号横穴墓左外壁装飾文実測図（昭和59年高木実測・製図）……264
83の7図　長岩46号横穴墓実測図（昭和59年高木・米原実測，高木製図）……264
83の8図　長岩47号横穴墓実測図（昭和39年原口長之・松本・松下・丸山実測，高木製図）……265
83の9図　長岩48号横穴墓実測図（昭和39年緒方勉・大塚・野中実測，高木製図）……265
83の10図　長岩47号・48号横穴墓と装飾文の正面実測図（昭和59年高木実測・製図）……266
83の11図　長岩48号横穴墓右外壁装飾文実測図（昭和59年高木実測・製図）……266
83の12図　長岩48号横穴墓右外壁の装飾文（白石巌撮影）……266
83の13図　長岩横穴墓群の部分近景（京都大学考古学研究室提供）……267
83の14図　長岩52号横穴墓実測図（昭和39年佐藤伸二実測，高木製図）……268
83の15図　長岩52号横穴墓右外壁の装飾文（京都大学考古学研究室提供）……268
83の16図　長岩91号横穴墓実測図（昭和59年高木実測・製図）……269
83の17図　長岩92号横穴墓実測図（昭和39年緒方・松本実測，高木製図）……270
83の18図　長岩92号横穴墓左外壁装飾文実測図（昭和59年高木実測・製図）……270
83の19図　長岩101号横穴墓実測図（昭和39年田添夏喜・坂田実測，高木製図）……271
83の20図　長岩101号横穴墓装飾文全景（白石巌撮影）……271
83の21図　長岩101号横穴墓外壁上部装飾文実測図（昭和59年高木実測・製図）……272
83の22図　長岩108号横穴墓実測図（昭和39年原口ほか実測，高木製図）……273
83の23図　長岩108号・109号横穴墓全景（白石巌撮影）……273
83の24図　長岩108号横穴墓外壁上部装飾文実測図（昭和59年高木実測・製図）……274
83の25図　長岩109号横穴墓実測図（昭和39年隈昭志・原口克己・杉水久仁雄・矢野千恵子実測，高木製図）……275
83の26図　長岩109号横穴墓右外壁装飾文実測図（昭和59年高木実測・製図）……275
83の27図　長岩109号横穴墓装飾文（白石巌撮影）……276
83の28図　長岩横穴墓群装飾図（矢野一貞『筑後将士軍談』より）……276
84の1図　岩原横穴墓群周辺地形図（昭和57年環境事業計画研究所作成・県文化課依託）……277
84の2図　岩原横穴墓群配置図(1)（昭和57年甲元真之・高木正文・西住欣一郎・柳原真由美・明瀬慎吾実測，高木製図）……278
84の3図　岩原横穴墓群配置図(2)（昭和57年甲元・高木・西住・柳原・明瀬実測，高木製図）……279
84の4図　岩原横穴墓群配置図(3)（昭和57年甲元・高木・西住・柳原・明瀬実測、高木製図）……279
84の5図　岩原Ⅰ－14号横穴墓実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……280
84の6図　岩原Ⅰ－15号横穴墓実測図（昭和58年高木・米原圭子・入江久成実測、高木製図）……281
84の7図　岩原Ⅰ－23号横穴墓実測図（昭和58年高木・米原・入江実測，高木製図）……282
84の8図　岩原Ⅰ－32号横穴墓実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……283
84の9図　岩原Ⅰ－32号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……284
84の10図　岩原Ⅰ－38号横穴墓実測図（昭和58年高木・米原・入江実測，高木製図）……285
84の11図　岩原Ⅰ－39号横穴墓実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……286
84の12図　岩原Ⅳ－3号横穴墓実測図（昭和57年高木・友口恵子実測，高木製図）……287
84の13図　岩原Ⅴ－6－6号横穴墓実測図（昭和57年高木・柳原・西住実測，高木製図）……288
84の14図　岩原横穴墓群（高木撮影）……289

85の１図　桜ノ上横穴墓群配置図(1)（昭和56年坂田和弘・西谷大・吉武学・茂山宏美・明瀬慎吾実測，高木正文製図）……290
85の２図　桜ノ上横穴墓群配置図(2)（昭和56年坂田・西谷・吉武・茂山・明瀬実測，高木製図）……291
85の３図　桜ノ上Ⅰ－１号横穴墓実測図（昭和56年高木・柳原・西谷・吉武・明瀬実測，高木製図）‥292
85の４図　桜ノ上Ⅰ－１号横穴墓内壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……293
85の５図　桜ノ上Ⅰ－２号横穴墓実測図（昭和56年高木・柳原・坂田・吉武実測,・高木製図）……294
85の６図　桜ノ上Ⅰ－４号横穴墓実測図（昭和56年高木・柳原実測，高木製図）……295
85の７図　桜ノ上Ⅰ－５号横穴墓実測図（昭和56年高木・柳原実測，高木製図）……297
85の８図　桜ノ上Ⅰ－６号横穴墓実測図（昭和57年高木・柳原実測，高木製図）……298
86の１図　鍋田横穴墓群位置図（山鹿 2.5 万分の１地図）……299
86の２図　鍋田横穴墓群周辺地形図（昭和57年環境事業計画研究所作成・県文化課依託）……299
86の３図　鍋田横穴墓群配置図（昭和56年甲元真之・井上靖司・坂田和弘・吉武学実測,高木製図）……300
86の４図　鍋田６号横穴墓実測図（昭和56年米倉秀紀・入江久成実測，高木製図）……301
86の５図　鍋田７号横穴墓実測図（昭和56年米倉・高木実測，高木製図）……302
86の６図　鍋田７号横穴墓外壁の弓浮き彫り（白石巌撮影）……302
86の７図　鍋田７号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……302
86の８図　鍋田８号横穴墓実測図（昭和56年柳原真由美・高木実測，高木製図）……303
86の９図　鍋田８号横穴墓外壁の人物浮き彫り（白石巌撮影）……303
86の10図　鍋田８号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……304
86の11図　鍋田12号横穴墓実測図（昭和56年河野法子実測,高木製図）……305
86の12図　鍋田12号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……306
86の13図　鍋田13号横穴墓実測図（昭和56年柳原実測・高木製図）……306
86の14図　鍋田14号横穴墓実測図（昭和56年河野・吉武実測・高木製図）……307
86の15図　鍋田14号横穴墓羨道の靱浮き彫り（白石巌撮影）……307
86の16図　鍋田14号横穴墓羨道右壁装飾文実測図（昭和59年高木実測・製図）……307
86の17図　鍋田21号横穴墓実測図（昭和56年米倉・高木実測，高木製図）……308
86の18図　鍋田21号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年，高木実測・製図）……308
86の19図　鍋田26ｂ号横穴墓実測図（昭和56年熊谷智徳・松田まゆみ実測，高木製図）……309
86の20図　鍋田26ｄ号横穴墓実測図（昭和56年西谷大・西住欣一郎・高木実測，高木製図）……310
86の21図　鍋田26ｄ号横穴墓玄室装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……310
86の22図　鍋田26ｄ号横穴墓奥壁の人物浮き彫り（白石巌撮影）……310
86の23図　鍋田27号横穴墓実測図（昭和56年河野・松原明美・高木実測，高木製図）……311
86の24図　鍋田27号横穴墓外壁の浮き彫り（白石巌撮影）……311
86の25図　鍋田27号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……312
86の26図　鍋田横穴墓群装飾図（矢野一貞『筑後将士軍談』より）……312
86の27図　鍋田33号横穴墓実測図（昭和56年柳原・入江・高木実測・製図）……313
86の28図　鍋田33号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……313
86の29図　鍋田46号横穴墓実測図（昭和56年西住・井上靖司実測，高木製図）……314
86の30図　鍋田49号横穴墓実測図（昭和56年井上・坂田実測，高木製図）……315
86の31図　鍋田50号横穴墓実測図（昭和56年米倉・古荘千栄子実測，高木製図）……316
86の32図　鍋田52号横穴墓実測図（昭和56年宮本千絵・米倉・入江実測，高木製図）……317
86の33図　鍋田53号横穴墓実測図（昭和56年西谷・河野実測，高木製図）……318
87の１図　付城・城横穴墓群位置図（山鹿 2.5 万分の１地図）……319
87の２図　付城横穴墓群配置図（昭和56年甲元真之・西住欣一郎・入江久成・吉武学実測，高木正文製図）……319
87の３図　付城48号横穴墓実測図（昭和56年西住・西谷大実測，高木製図）……320
87の４図　付城67号横穴墓実測図（昭和56年甲元・入江・吉武実測，高木製図）……321
87の５図　付城72号横穴墓実測図（昭和56年西住・西谷実測，高木製図）……322
87の６図　付城72号横穴墓奥屍床（白石巌撮影）……323
88の１図　城横穴墓群配置図(1)（昭和57年坂田和弘・茂山宏美・明瀬慎吾・馬原和弘実測,高木製図)…324
88の２図　城横穴墓群配置図(2)（昭和57年坂田・茂山・明瀬・馬原実測，高木製図）……324
88の３図　城横穴墓群配置図(3)（昭和57年坂田・茂山・明

瀬・馬原実測，高木製図）……325
88の4図　城20号横穴墓実測図（昭和57年西住欣一郎・蒲原卓・高木実測，高木製図）……326
88の5図　城20号横穴墓の間の外壁装飾文実測図（昭和57年高木実測・製図）……327
88の6図　城20号・21号横穴墓外観（白石巌撮影）……327
88の7図　城21号横穴墓実測図（昭和57年柳原真由美・池田伸二・高木実測，高木製図）……328
89の1図　宮穴横穴墓群位置図（来民 2.5 万分の 1 地図）……329
89の2図　宮穴横穴墓群配置図（昭和58年高木正文・米原圭子・入江久成実測，高木製図）……330
89の3図　宮穴17号横穴墓実測図（昭和58年高木・米原・入江実測，高木製図）……331
89の4図　宮穴22号横穴墓実測図（昭和58年高木・米原・入江実測，高木製図）……332
90の1図　古城横穴墓群位置図（熊本 2.5 万分の 1 地図）……333
90の2図　古城横穴墓群全景（白石巌撮影）……333
90の3図　古城横穴墓群配置図（昭和58年高木正文・米原圭子・入江久成・友口恵子・白石実測，高木製図）……334
90の4図　古城 8 号横穴墓実測図（昭和58年高木・米原実測，高木製図）……335
90の5図　古城16号横穴墓実測図（昭和57年米原・明瀬慎吾・松原明美・友口実測，高木製図）……336
90の6図　古城 8 号・16号横穴墓閉塞石実測図（昭和58年高木実測・製図）……337
90の7図　古城39号横穴墓実測図・文字拓影図（昭和58年高木・米原・入江実測，高木製図，二ノ村映子・江島園子採拓）……338
90の8図　古城46号横穴墓および線刻文実測図（昭和58年高木・白石・木下俊恵実測，高木実測）……339
91の1図　御領・牛頸横穴墓群位置図（宇土 2.5 万分の 1 地図）……340
91の2図　御領横穴墓群配置図（昭和57年高木正文・柳原真由美実測，高木製図）……340
92の1図　牛頸横穴墓群配置図（昭和57年高木正文・柳原真由美実測，高木製図）……341
92の2図　牛頸 2 号横穴墓略測図（小林久雄氏の記録から高木復元作図）……342
92の3図　牛頸横穴墓発見状態（小林久雄氏撮影）……342
92の4図　牛頸 2 号横穴墓閉寒石実測図（小林久雄先生遺稿集『九州縄文土器の研究』より，佐藤淳子再製図）……343
92の5図　牛頸 2 号横穴墓閉塞石（小林氏撮影）……343
93の1図　大村横穴墓群位置図（人吉 2.5 万分の 1 地図）……344
93の2図　大村横穴墓群地形図（人吉市地図，佐藤淳子再製図）……344
93の3図　大村横穴墓群配置図(1)（昭和56年甲元真之・坂田和弘・明瀬慎吾実測，高木正文製図）……345
93の4図　大村横穴墓群配置図(2)（昭和56年甲元・坂田・明瀬実測，高木製図）……345
93の5図　大村 4 号横穴墓実測図（昭和56年西住欣一郎・高木実測，高木製図）……346
93の6図　大村 4 号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年西住実測，高木製図）……347
93の7図　大村 5 号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……347
93の8図　大村 5 号横穴墓実測図（昭和56年高木実測・製図）……348
93の9図　大村 7 号横穴墓実測図（昭和56年西谷大・茂山宏美・高木実測，高木製図）……349
93の10図　大村 7 号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……350
93の11図　大村11号横穴墓実測図（昭和56年西谷・茂山・高木実測，高木製図）……351
93の12図　大村11号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……351
93の13図　大村13号横穴墓実測図（昭和56年坂田・明瀬・高木実測，高木製図）……352
93の14図　大村13号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……352
93の15図　大村14号横穴墓実測図（昭和56年吉武学・入江久成・古閑朗・高木実測，高木製図）……353
93の16図　大村14号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実・製図）……353
93の17図　大村15ｂ号横穴墓実測図（昭和56年西谷・茂山・高木実測，高木製図）……354
93の18図　大村15ａ号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……355
93の19図　大村横穴墓付近発見蕨手直刀（浜田耕作「球磨郡大村城ヶ下横穴群」より）……355
94の1図　京ガ峰・小原横穴墓群位置図（人吉 2.5 万分の 1 地図）……356
94の2図　京ガ峰 1 号横穴墓全景（白石巌撮影）……356
94の3図　京ガ峰横穴墓群配置図（昭和56年西住欣一郎・入江久成実測，高木正文製図）……356
94の4図　京ガ峰 1 号横穴墓実測図（昭和56年柳原真由美・西住・高木実測，高木製図）……357
94の5図　京ガ峰 1 号横穴墓外壁装飾文実測図（昭和56年高木実測・製図）……358
94の6図　京ガ峰 1 号横穴墓装飾文拓影（浜田耕作「球磨郡西村京ヶ峰横穴」より）……358
94の7図　京ガ峰 2 号横穴墓実測図（昭和56年西谷大・吉武学実測，高木製図）……359
95の1図　小原横穴墓群配置図（昭和56年西谷大・吉武学実測，高木正文製図）……360
95の2図　小原 4 号横穴墓実測図（昭和56年坂田和弘・吉

武実測，高木製図）……360
付第１図　山鹿市鍋田横穴第27号，崩壊以前の壁画彫刻（矢野一貞『筑後将士軍談』より）……364
付第２図　長砂連古墳発見当時，下林繁夫氏の写生図（九州日日新聞より）……367
熊本県の装飾古墳分布図（高木正文作成）……371
熊本県の装飾古墳図文集成１図靱（高木正文・佐藤淳子作成）……379
熊本県の装飾古墳図文集成２図靱（高木・佐藤作成）……380
熊本県の装飾古墳図文集成３図靱・盾（高木・佐藤作成）……381
熊本県の装飾古墳図文集成４図短甲・弓・鞆・太刀・剣・刀子（高木・佐藤作成）……382
熊本県の装飾古墳図文集成５図舟（高木・佐藤作成）……383
熊本県の装飾古墳図文集成６図舟（高木・佐藤作成）……384
熊本県の装飾古墳図文集成７図舟（高木・佐藤作成）……385
熊本県の装飾古墳図文集成８図舟（高木・佐藤作成）……386
熊本県の装飾古墳図文集成９図人物像（高木・佐藤作成）……387
熊本県の装飾古墳図文集成10図人物像（高木・佐藤作成）……388
熊本県の装飾古墳図文集成11図馬（高木・佐藤作成）……389
熊本県の古墳石製表飾分布図（高木正文作成）……391
熊本県の古墳石製表飾集成①清原石製品（白石巌撮影）……392
熊本県の古墳石製表飾集成②天堤古墳の蓋（白石巌撮影）……392
熊本県の古墳石製表飾集成③三ノ宮古墳石人（三島格撮影）……393
熊本県の古墳石製表飾集成④チブサン古墳石人（乙益重隆撮影）……393
熊本県の古墳石製表飾集成⑤臼塚古墳石人（白石巌撮影）……393
熊本県の古墳石製表飾集成⑥富ノ尾古墳群の石人（乙益重隆撮影）……393
熊本県の古墳石製表飾集成⑦姫ノ城古墳の石製品（白石巌撮影）……394
熊本県の古墳石製表飾集成⑧木柑子石人（本田博久実測）……395
熊本県の古墳石製表飾集成⑨今城大塚古墳石函（緒方勉実測）……395
熊本県の古墳石製表飾集成⑩石之室古墳石製品（『城南町史』より）……395
熊本県の古墳石製表飾集成⑪袈裟尾高塚古墳の靱（文化財保存計画協会提供）……395
熊本県の古墳石製表飾集成⑫小野崎の石製品（隈昭志実測）……395

I 序　章

1．調査の目的と概要

石棺や石室あるいは横穴墓の内外面に線刻・彫刻や彩色により文様や絵画などの装飾を施した古墳を装飾古墳という。文献の乏しい日本の古代の空白を埋め，古代人の思想を語るものとして，また原始美術などさまざまな意味で重要性をもっている。

装飾古墳を古墳の構造によって分類すると，①箱式石棺の内部に線刻・彫刻などにより装飾したもの，②舟形石棺の内外面に彫刻により装飾したもの，③家形石棺の内外面に線刻あるいは彫刻により装飾したもの，④横穴式石室の内壁に沿って立てた板石に線刻や彫刻で装飾したもの，⑤横穴式石室の壁面に彩色もしくは線刻で文様や絵画を描いたもの，⑥横穴墓の入口付近や外壁あるいは内部に線刻・彫刻あるいは彩色により装飾を施したものに分けられる。また装飾図文の種類により分類すると，㋑幾何学的文様（直弧文，鍵手文，円文，同心円文，車輪状文，三角文，連続三角文，菱形文，蕨手文など），㋺器物（靱，盾，弓，鞆剣，刀，刀子，船，家など），㋩像（人物，馬，鹿，鳥，ヒキガエルなど）の三類があるが，一つの古墳に各種の図文が描かれた例も多い。

装飾古墳は全国で三百余基知られているが，分布に著しい偏りがあり，九州の北・中部に集中的に分布している。特に全国の半数を数える装飾古墳が熊本県下に分布し，図文の種類も多様で，その発生・発展さらに土着性を考える上で極めて注目されるものである。

しかし装飾古墳が造られてから千数百年を経た今日，風化などにより消滅したりあるいは消滅しようとしている古墳・装飾図文も少なくない。またすべてが崩壊の運命にあるといっても過言ではない。これらを記録し，その全容を把握し，保存についての処置を講ずることは多くの装飾古墳を保有する熊本県の急務である。そこで熊本県教育委員会では昭和48年度と同49年度に墳丘をもつ古墳を主とした調査を実施した。さらに今回の昭和56年度と同57年度は横穴墓の調査と報告書刊行を目的とした調査を計画し実施したが，その間にさらに50基以上の装飾横穴墓が発見されたため，２年の計画を３年に延長し，昭和58年度に新発見分についての補充調査を行ない，報告書にまとめることになった。今だ，調査が不充分な点もあり，また遺物の調査までは及ばなかったが，本書の刊行が装飾古墳の保存・研究上で大きなステップとなるものと信ずる。

2．調査の事務組織

調査は下記の事務組織で行った（所属等は調査当時のものである）。

(1)　昭和48年度調査

調査主体　熊本県教育委員会
調査総括　田辺哲夫（文化課長）
　　浜田　勝（文化課長補佐）
　　松田安雄（文化課文化財係長）
調査総務　西野英敏（文化課主事）
　　東　忠昭（文化課主事）
調査員　　隈　昭志（主査・文化課参事）
　　原口長之（文化課嘱託）

(2)　昭和49年度調査

調査主体　熊本県教育委員会
調査総括　田辺哲夫（文化課長）
　　浜田　勝（文化課長補佐）
　　村田一美（文化課文化財係長）
調査総務　西野英俊（文化課主事）
　　等　正勝（文化課主事）
調査員　　高木正文（主査・文化課学芸員）
　　丸山武水（文化課臨時職員）
　　松村道博（文化課臨時職員）

(3)　昭和56年度調査

調査主体　熊本県教育委員会
調査総括　岩崎辰喜（文化課長）
　　田辺宗弘（文化課長補佐）
　　林田茂一（文化課長補佐）
　　上野辰男（文化課主幹）
　　隈　昭志（文化課文化財調査係長）
調査総務　大塚正信（文化課経理係長）
　　松崎厚生（文化課参事）
　　谷　喜美子（文化課主事）
　　木下英治（文化課主事）
調査員　　高木正文（主査・文化課学芸員）
　　柳原真由美（文化課嘱託）

(4)　昭和57年度調査

調査主体　熊本県教育委員会
調査総括　岩崎辰喜（文化課長）
　　林田茂一（文化課長補佐）
　　上野辰男（文化課主幹）
　　隈　昭志（文化課主幹・文化財調査係長）
調査総務　大塚正信（文化課主幹・経理係長）
　　松崎厚生（文化課参事）

谷　喜美子（文化課主事）
木下英治（文化課主事）
調査員　高木正文（主査・文化課学芸員）
柳原真由美（文化課嘱託）
米原圭子（文化課臨時調査員）

(5)　昭和58年度調査

調査主体　熊本県教育委員会
調査総括　米村嘉人（文化課長）
岩崎辰喜（前文化課長）
林田茂一（文化課長補佐）
隈　昭志（文化課主幹・文化財調査係長）
調査総務　大塚正信（文化課主幹・経理係長）
花田隆二（文化課参事）
松崎厚生（前文化課参事）
谷　喜美子（文化課主事）
木下英治（文化課主事）
調査員　高木正文（主査・文化課学芸員）
米原圭子（文化課嘱託）

3．調査委員の組織

〔調査指導員〕

伊藤奎二（熊本県立鹿本高等学校教諭）
江上敏勝（八代市教育文化センター建設準備室指導主事）
乙益重隆（国学院大学教授）
甲元真之（熊本大学助教授）
古財誠也（植木町立田原坂資料館長）
佐藤伸二（国立八代工業高等専門学校助教授）
渋谷　敦（熊本県文化財保護指導員）
白木原和美（熊本大学教授）
田添夏喜（熊本県文化財保護指導員）
田辺哲夫（熊本県立熊本高等学校長）
富樫卯三郎（熊本地名研究会長）
徳本　明（城南町文化財専門委員）
中田好則（肥後考古学会幹事）
原口長之（山鹿市立博物館長）
松本雅明（熊本大学名誉教授）
三島　格（肥後考古学会長）

〔執筆者〕

伊藤奎二（熊本県立鹿本高等学校教諭）
池田栄史（国学院大学助手）
江上敏勝（八代市教育文化センター建設準備室指導主事）
乙益重隆（国学院大学教授）
佐藤伸二（国立八代工業高等専門学校助教授）
勢田廣行（文化財保存計画協会研究員）
高木恭二（宇土市教育委員会主事）
田添夏喜（熊本県文化財保護指導員）
田辺哲夫（熊本県立熊本高等学校長）
富樫卯三郎（熊本地名研究会長）
原口長之（山鹿市立博物館長）
平山修一（宇土市教育委員会主事）
三島　格（肥後考古学会長）
上野辰男（熊本県教育庁文化課主幹）
隈　昭志（熊本県教育庁文化課主幹・文化財調査係長）
緒方　勉（熊本県教育庁文化課課付）
江本　直（熊本県教育庁文化課学芸員）
高木正文（熊本県教育庁文化課学芸員）

4．調査参加者・協力者・資料提供者

〔団　体〕

熊本大学文学部考古学研究室・京都大学文学部考古学研究室・東京大学総合研究資料館（人類・先史部門）・東京国立博物館・熊本県立鹿本高等学校考古学部・熊本県立鹿本商工高等学校考古学部・熊本県立玉名高等学校考古学部・熊本県立菊池高等学校考古学部・熊本県立第二高等学校考古学部・熊本県立宇土高等学校社会部・玉名女子高等学校社会部・文化財保存計画協会・肥後考古学会・山鹿文化財を守る会・熊本県文化財保護協会・熊本県立美術館・熊本市教育委員会・熊本市立博物館・玉名市教育委員会・菊水町教育委員会・南関町教育委員会・山鹿市教育委員会・山鹿市立博物館・鹿央町教育委員会・植木町教育委員会・菊池市教育委員会・北部町教育委員会・嘉島町教育委員会・城南町教育委員会・城南町歴史民俗資料館・宇土市教育委員会・三角町教育委員会・不知火町教育委員会・松島町教育委員会・八代市教育委員会・宮原町教育委員会・人吉市教育委員会・その他

（個　人）

小林行雄（京都大学名誉教授），森貞次郎(九州産業大学教授)，藤沼邦彦(宮城県立東北歴史資料館)，白石巌(写真家･熊本民族文化研究会員)，西住欣一郎・宮本千絵・永田次郎・管付和樹・本田博久・熊谷智徳・吉永明・小畑弘己・河野法子・谷口武範・辻満久・鳥越のり子・永目尚子・古荘千栄子・古城史雄・松尾法博・米倉秀紀・井上靖司・入江久成・西谷大・平井利枝・松田まゆみ・吉武学・池田伸二・馬原和広・蒲原卓・古賀朗・坂口隆裕・茂山宏美・松原明美・明瀬慎吾・井上信之・友口恵子・藤崎伸子・三山茂・吉永義治（以上熊本大学文学部考古学研究室)，西田道世・牧野吉秀・松尾克己（以上玉名市役所)，浦一喜・城戸央・城戸吉弘・城戸敏・横畠矩夫・岩永浩・(以上玉名市)，池田道也（菊水町教育委員会)，坂口実・高木誠治(以上菊水町)，森野伝蔵・田中貢(以上南関町)，轟木正斗・中村幸史郎・倉原謙治・次木万里子(以上山鹿市立博物館)，中原猪辛・松尾一喜・山村広人・原田寿夫・岩田亀雄・坂本正幸・松本宏治（以上山鹿市)，西田幸子・西田フジ子(山鹿市朝日屋旅館)，島田重孝・春田文夫(以上鹿央町教育委員会)，森山澄夫(鹿央町)，田中義和(菊池市教育委員会)，今村克彦・山中末勝・渡辺完・大城康雄(以上熊本市教育委員会)，富田紘一・坂本経昌(以上熊本市立博物館)，前田軍治・橋本誠二(以上熊本市)，福島幹敏(北部町教育委員会)，豊崎晃一・清田純一(城南町歴史民俗資料館)，小林麟也(城南町)，木下洋介(宇土市教育委員会)，椎葉文雄（人吉市教育委員会)，山根百合熊(人吉市)，鳥越肖男(人吉市松屋ビジネスホテル)，古川十吉（相良村)，上妻信寛(熊本県立鹿本高等学校)，桑原憲彰（熊本県立菊池高等学校)，杉村彰一(熊本県立氷川高等学校)，高野啓一(熊本県立第二高等学校)，西健一郎(福岡県)，平岡勝昭･村井真輝・西沢八郎・島津義昭・松本健郎・野田拓治・大田幸博・橋本康夫・高谷和生・木崎康弘・古森政治・西住欣一郎・黒田裕司・鶴嶋俊彦・森山英一・浦田信智・河北毅・坂田和弘・渡辺正一・佐藤淳子・田尻悦子・元吉京・酒井しのぶ・尾上妙子・中村絹子・栗林やすよ(以上熊本県教育庁文化課)，高村恭子・木下俊恵・木下春千代・瀬丸伸子・穴見恵美子・笠間いつ子・二ノ村映子・江島園子（以上熊本県文化財収蔵庫)，林田順太郎・上野博次・原口幸男（以上山鹿市・追加）その他

5．本報告書の構成

本報告書においては装飾古墳を石棺・石室墓に施したものと，横穴墓に施したものとに大別して，各々について概要を記述した。記述順序はほぼ北にあるものから南にあるものへと移行した。なお非装飾古墳のうち装飾古墳に類するものも一部含めて紹介した。各古墳の記述内容は下記のとおりである。

〔装飾ある石棺と石室墓〕

①古墳名　②国・県指定の有無と指定年　③関係図版番号　④所在地　⑤立地　⑥墳丘　⑦墓室　⑧装飾　⑨出土遺物　⑩年代　⑪備考（調査者・伝承など特記すべき事）　⑫参考文献（執筆者・論文名・書名・発行所・発行年）

〔装飾ある横穴墓〕

①横穴墓群名　②国・県指定の有無と指定年　③関係図版番号　④所在地　⑤立地　⑥分布と概要　⑦各装飾ある横穴墓と装飾　⑧出土遺物　⑨備考（調査者・伝承など特記すべき事）　⑩参考文献（執筆者・論文名・書名・発行所・発行年）

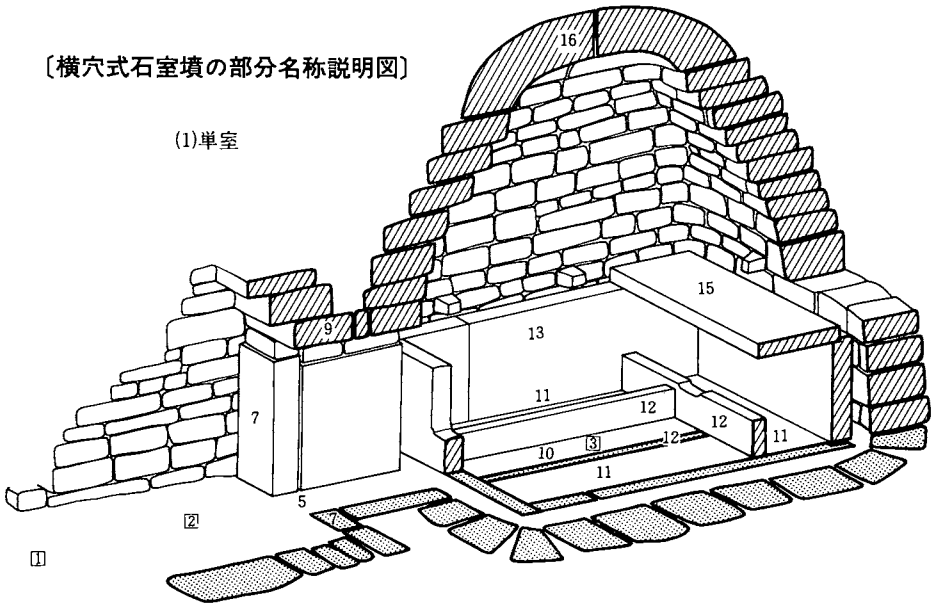
なお，横穴墓群の年代は現時点では決定しがたいので「年代」の項を省いたが，多くは6世紀代から7世紀代に造られたと考えられる。

その他，古墳の部分名称はほぼ次頁以下に示した名称を用いた。

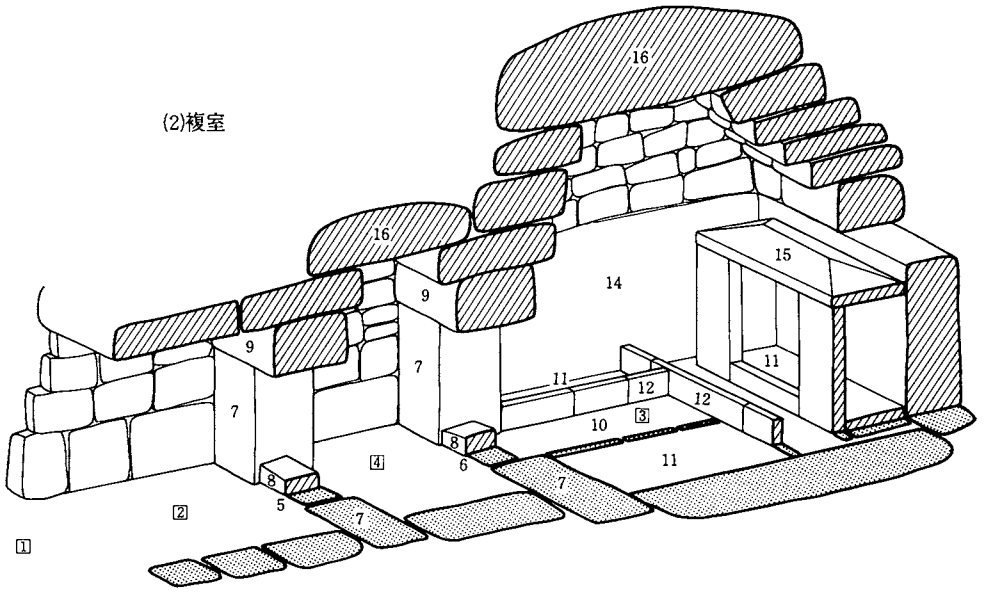
また，付章には研究史（乙益重隆氏執筆）と分布図・一覧表・文様集成図等を収録したので，研究の一助にされたい。

〔横穴式石室墳の部分名称説明図〕

(1)単室



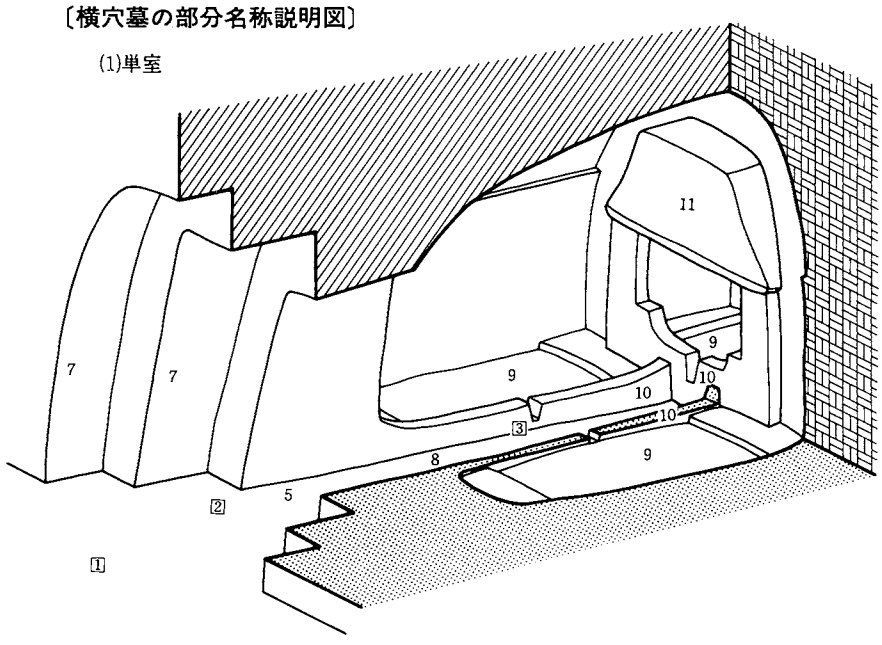
(2)複室



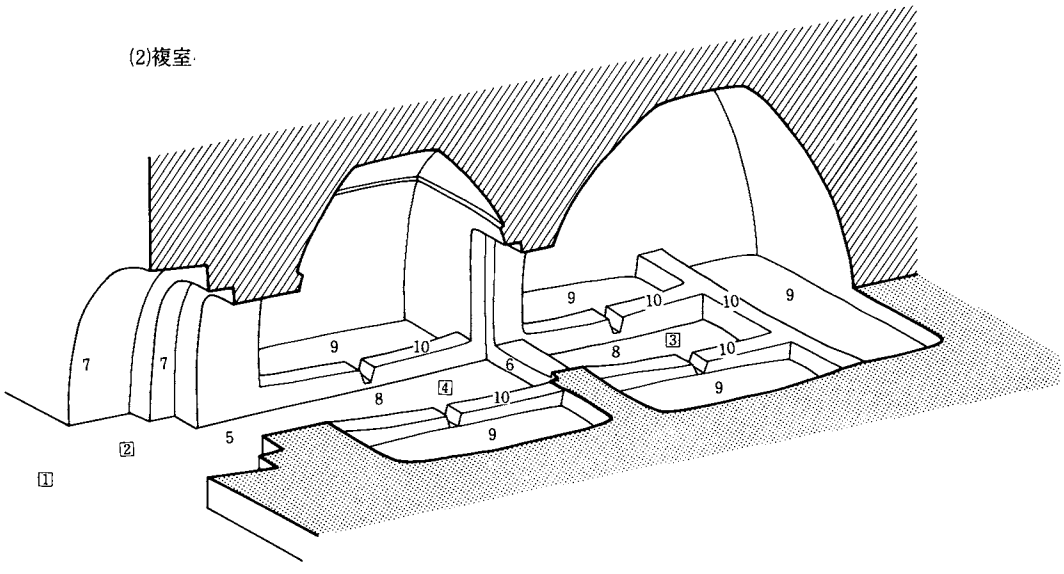
1. 前庭部（ぜんていぶ）　古墳入口前（羨道前）の広場。
2. 羨道（せんどう）　古墳の外部から玄室に通じる道。
3. 玄室（げんしつ）　古墳の主体となる屍体を安置する室。複室墳（室が2室ある古墳）の場合，奥室・後室・主室とよぶこともある。
4. 前室　複室墳（室が2室ある古墳）の場合，入口側にある室。
5. 羨門（せんもん）　前室や玄室の入口。
6. 玄門（げんもん）　玄室の入口。第二羨門ともよぶ。
7. 袖石（そでいし）　羨門や玄門の両脇にある石。
8. 框石（かまちいし）　羨門や玄門の床に敷きわたした敷居状の石。
9. 楣石（まぐさいし）　羨門や玄門の上に水平にわたした石。
10. 通路　玄室や前室の中央部を貫く道。
11. 屍床（ししょう）　屍体を収める所。
12. 仕切石（しきりいし）　区切石ともよぶ。用途を区切る境の石。
13. 石障（せきしょう）　囲み石ともよぶ。玄室の4壁に接して立てめぐらした板石。
14. 腰石（こしいし）　玄室壁面の最下段の巨石。
15. 石屋形（いしやかた）　玄室の奥屍床が家形に造られたもの。
16. 天井石（てんじょういし）　玄室や前室の最上部に乗せられた石。

〔横穴墓の部分名称説明図〕

(1)単室



(2)複室

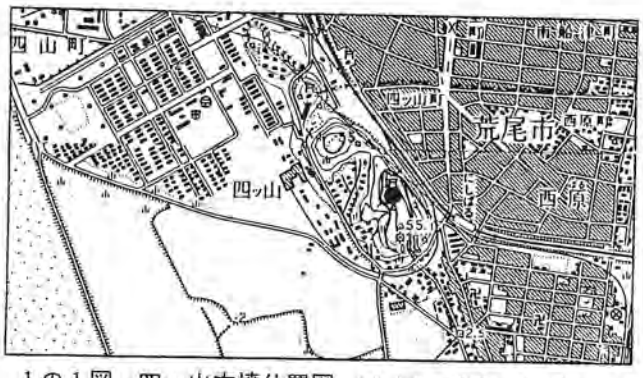


1. 前庭部　横穴墓入口（羨道前）の広場。
2. 羨　道　横穴墓の外部から玄室に通じる道。
3. 玄　室　横穴墓の主体となる屍体を安置する室。複室（室が２室）の横穴墓の場合，奥室・後室・主室とよぶこともある。
4. 前　室　複室（室が２室）の横穴墓の場合，入口側にある室。
5. 羨　門　前室や玄室の入口。
6. 玄　門　玄室の入口。第二羨門ともよぶ。
7. 飾　縁　（飾り縁），羨門の外に造られた階段状の飾り。飾縁が２つ以上つく場合，本項では内側から第１飾縁，第２飾縁……とする。
8. 通　路　玄室や前室の中央部を貫く道。
9. 屍　床　屍体を収める所
10. 仕　切　用途を区切る境の突帯。
11. 石屋形　玄室の奥屍床が家形に造られたもの。

II　装飾ある石棺・石室墓

1．四ッ山古墳 (⇨1の1・2図)

——荒尾市大島区笹原四ッ山神社境内——



1の1図　四ッ山古墳位置図 (大牟田・荒尾2.5万分の1)

立　地　有明海に面する四ッ山丘陵の南頂部(標高約58m)に位置する。同丘陵上にはかつて6基の古墳があり，本墳もその中の1基である。なお同丘陵のほぼ南麓の岩陰には四ッ山貝塚（縄文中・後期）がある。

墳　形　調査時にすでに封土を失っていたが，径10m余の円墳。

墓　室　西南に開口する横穴式石室で，奥室・前室からなり，羨道部は古く破壊されて不明である。用石は丘陵の基盤である砂岩で，海蝕をうけた巨石が使用されている。奥室平面は長方形で，床面は敷石の上に粘土をはったと調査者はみている。側壁の間隙は板石の小口積みによって補う。天井部は持送り式によって構築し頂部に平石を架したのであろう。奥室の内法　長さ 2.8m，幅 2.2m，高さ 1.9m。前室は平面長方形で床面は敷石である。長さ（内法）1.1m，幅 1.8m，高さ 1.5m で，幅65cmの羨道で奥室に通ずる。

装　飾　「玄室西壁の中央部は削平されて，コンパスを使用した円が描かれている。東壁にもその痕跡がある。又前室西袖石の内面の一部に赤と紫の顔料が厚くこびりついていた。(中略三島) 顔料が何であるかは名大教授山崎一雄博士に調査を依頼した」と記載する（文献①②)。後者すなわち顔料についてはその鑑定が文献①②に出ている。抄録すると「おそらく現今使用せらるる色素が何等かの原因によりて古墳内に混入せるものとの疑あり」と。

西壁中央部の円形文は，筆者らもその後実現しているが，現況は風化，破壊が激しく確認することは困難である。

出土遺物　剣・刀子・雲珠・くつわ・帯革金具・金環・曲玉・須恵器・土師器など（四ッ山神社保管)。

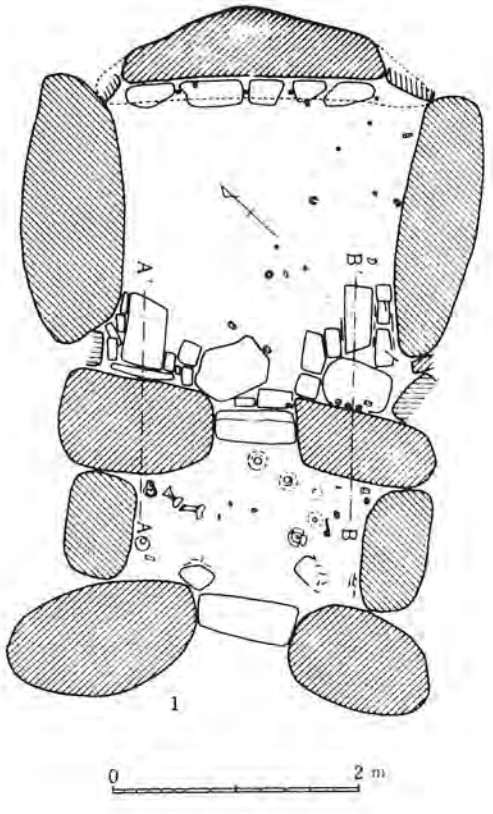
年　代　古墳時代後期

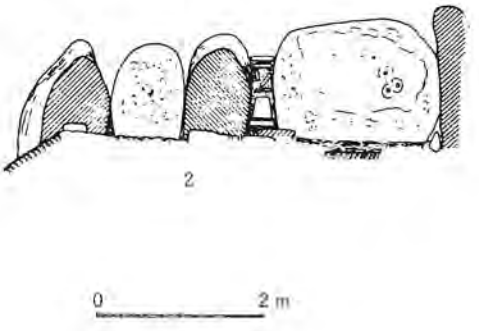
備　考　①本古墳が虚空蔵菩薩信仰と結びついていることは，『肥後国誌』〈野原荘大島村の條〉に出ている。②被葬者について。出土位置はかならずしも明確でないが，「粘土床水洗によって」検出された歯について，栃原義人博士による，結果が出ている。それによると，推定年令30才位の男性でムシ歯を全く認めないと。　　(三島　格)

〔参考文献〕

①坂本経堯『四ッ山古墳』同古墳調査委員会　昭和25年(1950)荒尾

②坂本「四ッ山古墳」『肥後上代文化の研究』　P 153—210　肥後上代文化研究所・肥後考古学会　昭和54年(1979)熊本



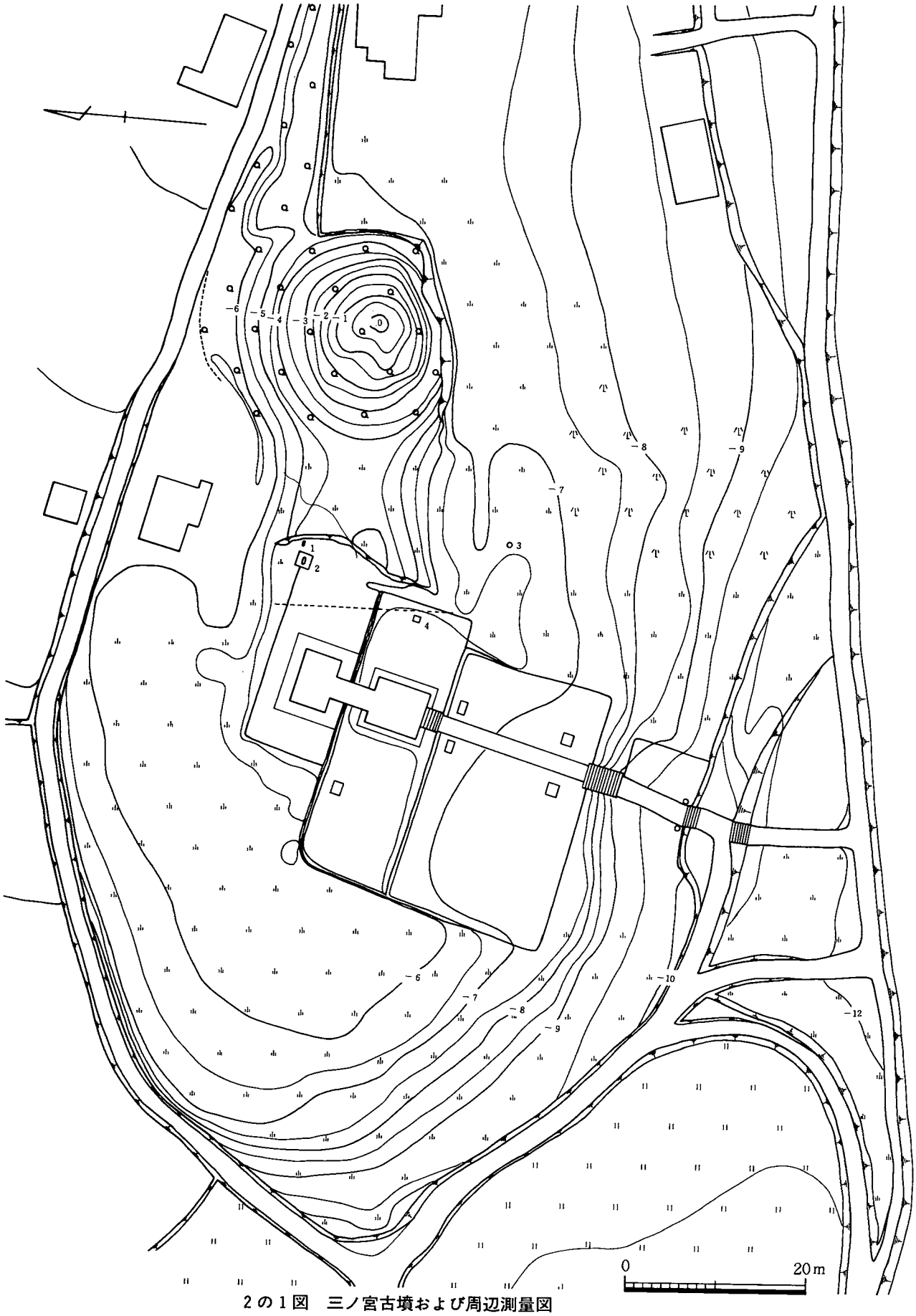


1の2図　四ッ山古墳石室実測図
1　平面実測図　2　西壁実測図
(原図，坂本)

2．三ノ宮古墳〔武装石人：昭和10年国重要美術品〕

（⇨2の1～4図）

——荒尾市平井区下井手三ノ宮——



2の1図　三ノ宮古墳および周辺測量図

1．石室石材　2.石人　3.石人脚部　4.正平八年四仏塔

2の2図　三ノ宮古墳位置図（大牟田・荒尾2.5万分の1）

立　地　熊本（肥後）・福岡（筑後）両県のほぼ県境を西流し有明海にそそぐ諏訪川北岸の低台地上に位置する。近距離に萩尾古墳（大牟田市・壁画系装飾・旧名弁財天古墳）がある。

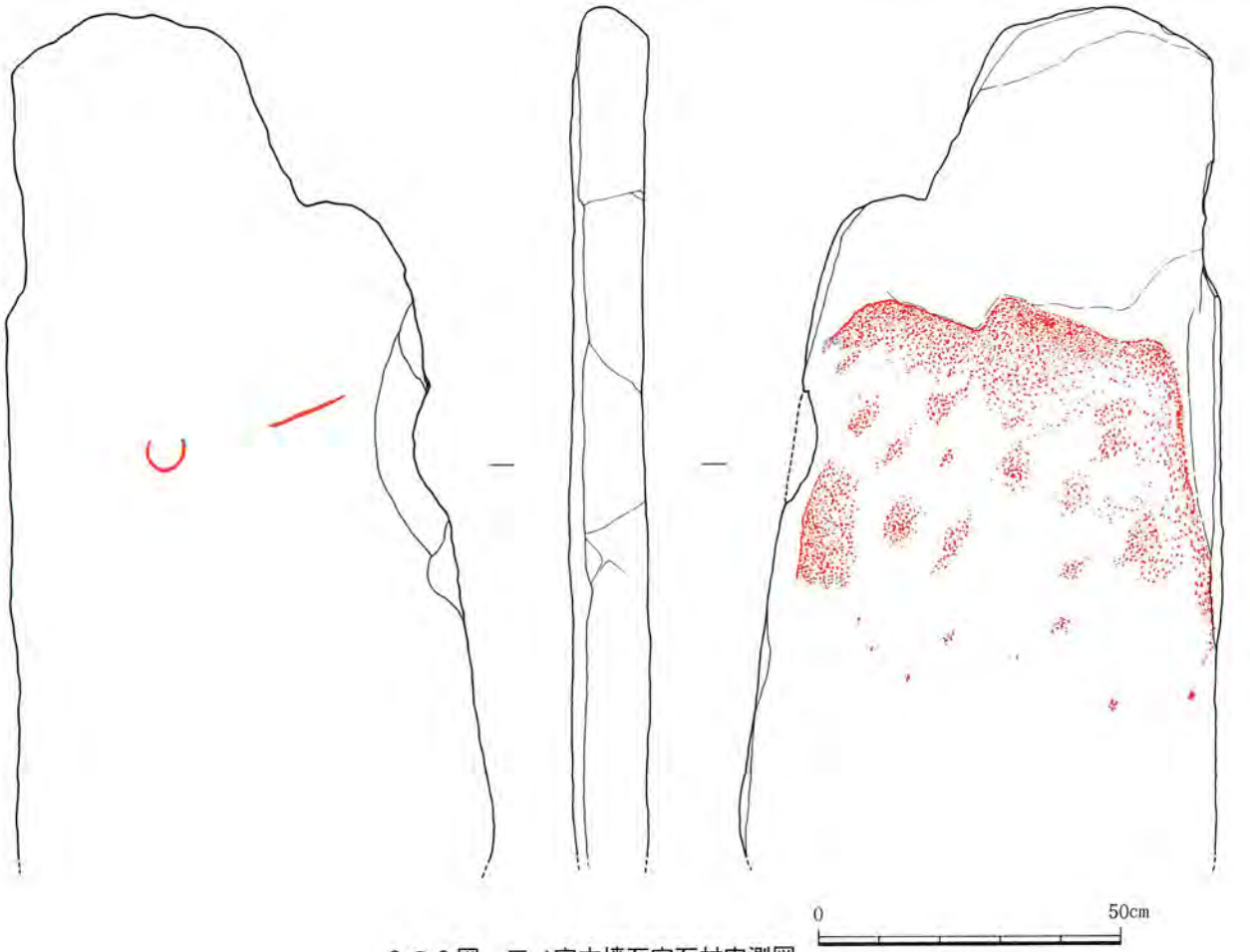
墳　丘　主軸をほぼ東西におく前方後円墳で（2の1図），後円部は比較的原形を遺存するかのごとくであるが、東・南斜面は採土のため丘裾は崖状を呈する。盗掘孔も認められる。前方部は低平で神社側に出ているが、神社建立時以降かなり削平されている。後円部北側に周湟の跡を認め前方部に至る。後円部径23m，高さ6m，前方部長14m，高さ2.3mを測る。

墓　室　内部主体は未発掘のため不明であるが，後述の装飾をもつ石材から推すと横穴式石室であろう。

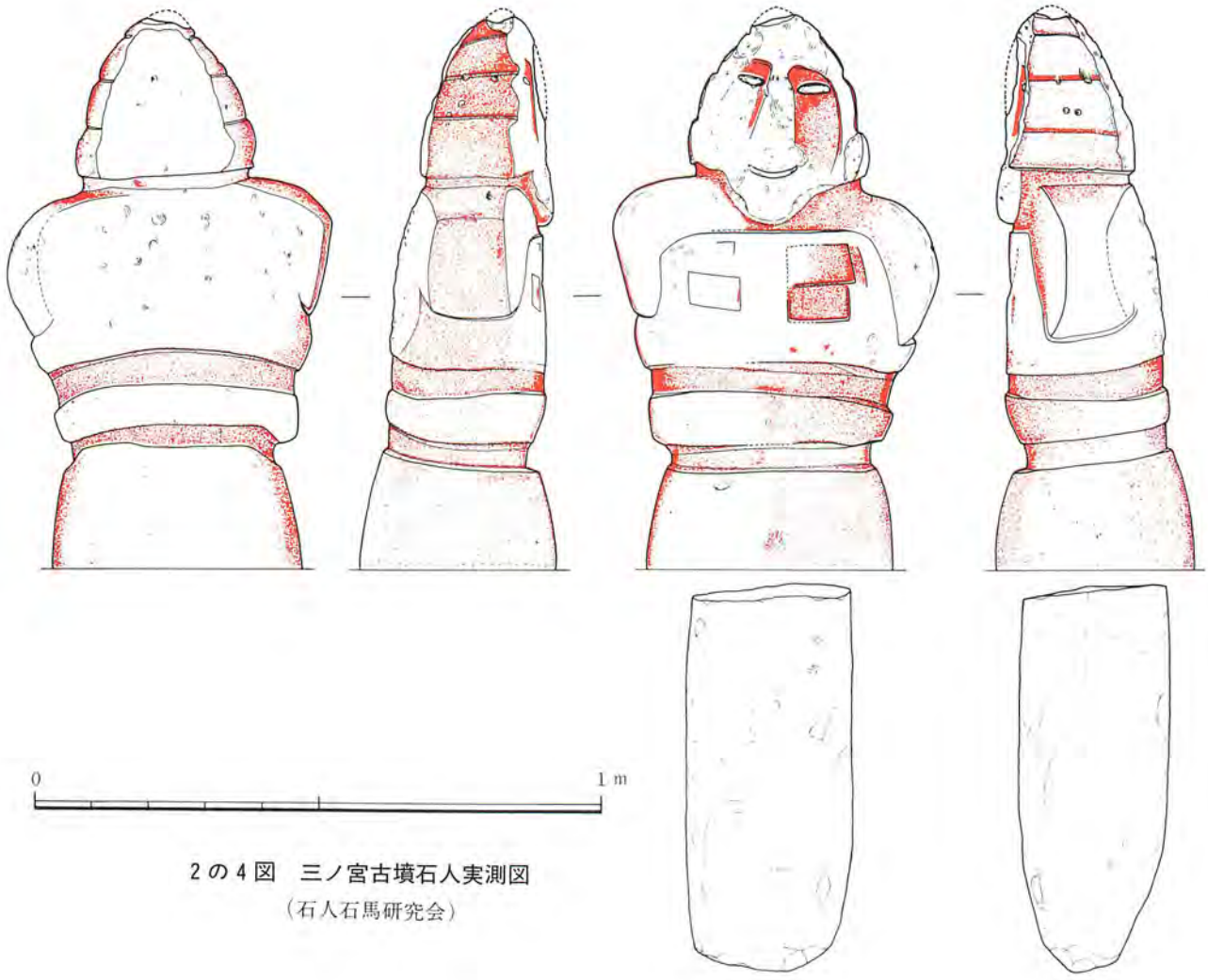
装　飾　前方部端に，装飾と加工部を持つ下記の板石状石材（阿蘇凝灰岩・長約3m幅約80cm）が長らく放置。現在は石人保護屋の中に保存。この石材は本古墳自体よりも早く学界の注目を受け，下記の研究史をもつ。

①大正7年（1918年）に下林繁夫氏（文献①P 43）が「境内に石槨の一部に用ひられたるものに非ざるかと思はるる一つの扁平なる石材あり。〈中略〉其の表面に毛彫りにて二本の平行なる横線を引きて其の面を数区に分ち，更にその間に三角形の模様を入れたり。〈中略〉又表面には朱を塗りたる痕跡も認むべし」と。②7年後の大正14年（1925）に梅原末治・古賀徳義・下林氏（文献②P 40—41）は「一個の長方形の板石ありて，一面に山形様波文の刻線を施し，其の装飾古墳の槨壁たりしを推測せしむることなり」とのべ「塚の破壊に当りて幸に其の一部分に残されたるものと解することは前者に比してより可能性の多きものと見るを得むか」とのべる。補説すると，文中の前者とは三の宮石人が近くの萩尾古墳に属し後年三の宮に移されたとする巷間の説をさす。同説は戦後再び新聞紙上のニュースとなったが，昭和38年（1963年）のわれわれの調査中に伊藤奎二氏により石人脚部が発見され，この論議に終止符を打った。上述板状石材には戦後しばらく彩色・沈線を認めた。

石　人　「—東京帝国大学より県庁郡役所を経て寄贈方を請ひたるも祟りなどあらんとて村民之に応せず大正五年礎



2の3図　三ノ宮古墳石室石材実測図



2の4図　三ノ宮古墳石人実測図
（石人石馬研究会）

石を高く築きておごそかに之を保存す一」（文献⑥P 870）との因縁がある。文献①②の記載も重要だが，昭和38年（1963）実測調査（2の4図）時の所見を箇條書きにのべる。(1) 阿蘇凝灰岩の丸彫りの型式で，冑・短甲を着装した扁平石人。県内石人中最も遺存完好である。(2) 現存高約96.5cm　肩幅約57.5cm（やや右肩下りである)。顔面長37.5cm　顔面幅（最長部）32.5cm。(3) 冑・短甲の着装状況は側・背面図を参照。前者の綴の横金の部分など明瞭である。(4) 短甲胸板には4枚の小札を認める。(5) 腹部に相当する部位に，上下2段の凹帯部をめぐらし，上・下半部をわける。(6) 彩色　顔面：左右眉から頬の部分のみを浅く削平し塗朱。冑：左右両側に認め背面には認められない。頸・顎以下は下半部に至るまで側・背面ともに塗朱。(7) 下半部の裳の現存高は約17cmで以下は台石中にある。当該部を実見した文献②は「一裾開きの底面を検するに該部分には横一尺〇三分，竪八寸三分の楕円形の切損面を残せるに依れば，もと他の石人に見る如き円柱状の脚部ありて土中に樹てしものなるを知り得」とのべ，大牟田市北方の上楠田石人との酷似を指摘している。(8) 上記の脚部を半世紀を経た今次の調査中に再発見。現存長約68cmで断面は不整形の楕円で長径約30cm短径約26cm。

出土遺物　円筒埴輪片

年　代　6世紀初

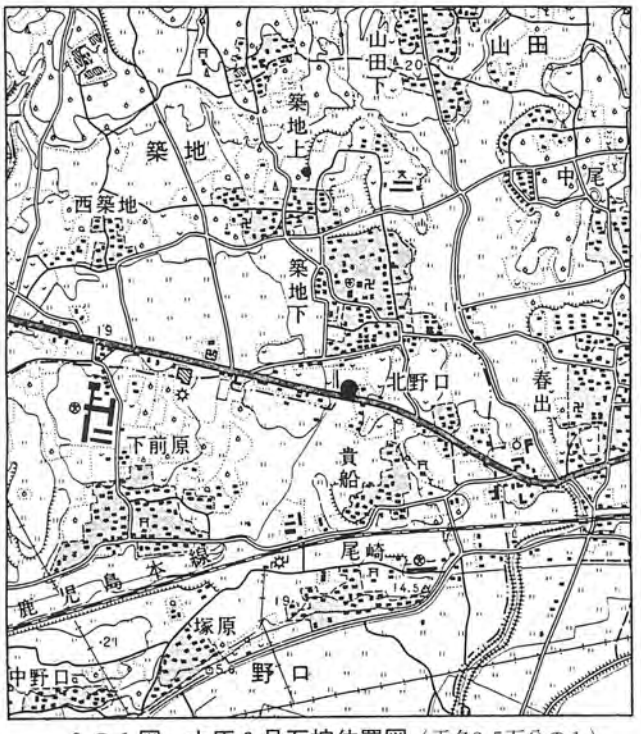
備　考　①昭和38年（1963）8・12月荒尾市文化財専門委員会と石人石馬研究会（代表　九州大学岡崎敬氏）により，石人実測と墳形測量を実施。②調査者　伊藤奎二・佐藤伸二・村井真輝・菊池大和・平野・福島作蔵・三島格（責任者)。③石人脚部は境内に在り民間信仰の対象となっている。④同境内には正平八年在銘の四仏塔（大工藤原助次）あり（文献⑤)。⑤文献⑦参照。　（三島　格）

〔**参考文献**〕

①下林繁夫「平井村の石人」『熊本県史蹟調査報告』1　P 42—44　熊本県教育会史蹟調査部　大正7年（1918）　熊本
②梅原末治・古賀徳義・下林繁夫「熊本県下にて発掘されたる重要なる古墳の調査（第1回）『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』2　P 38—41　大正14年（1925）　熊本
③三島格「三宮古墳（武装石人)」『荒尾市文化財解説』1　P 1—2　荒尾市教育委員会　昭和40年（1965）　荒尾
④乙益重隆『肥後上代文化史』P 114—P 115　日本談議社　昭和29年（1954）　熊本
⑤乙益「絵画風彫刻を有する南北朝銘石造物の一解釈」『国学院雑誌』78—9　P 146—162　昭和52年（1977）　東京
⑥『熊本県玉名郡史』P 870　玉名郡教育会　大正12年　玉名
⑦『熊本県文化財一覧』熊本県教育委員会　P 12　昭和59年（1984）における疑問は不用である。

3．大原（おおばる）9号石棺（⇨3の1～6図）

——玉名郡岱明町野口大原538——



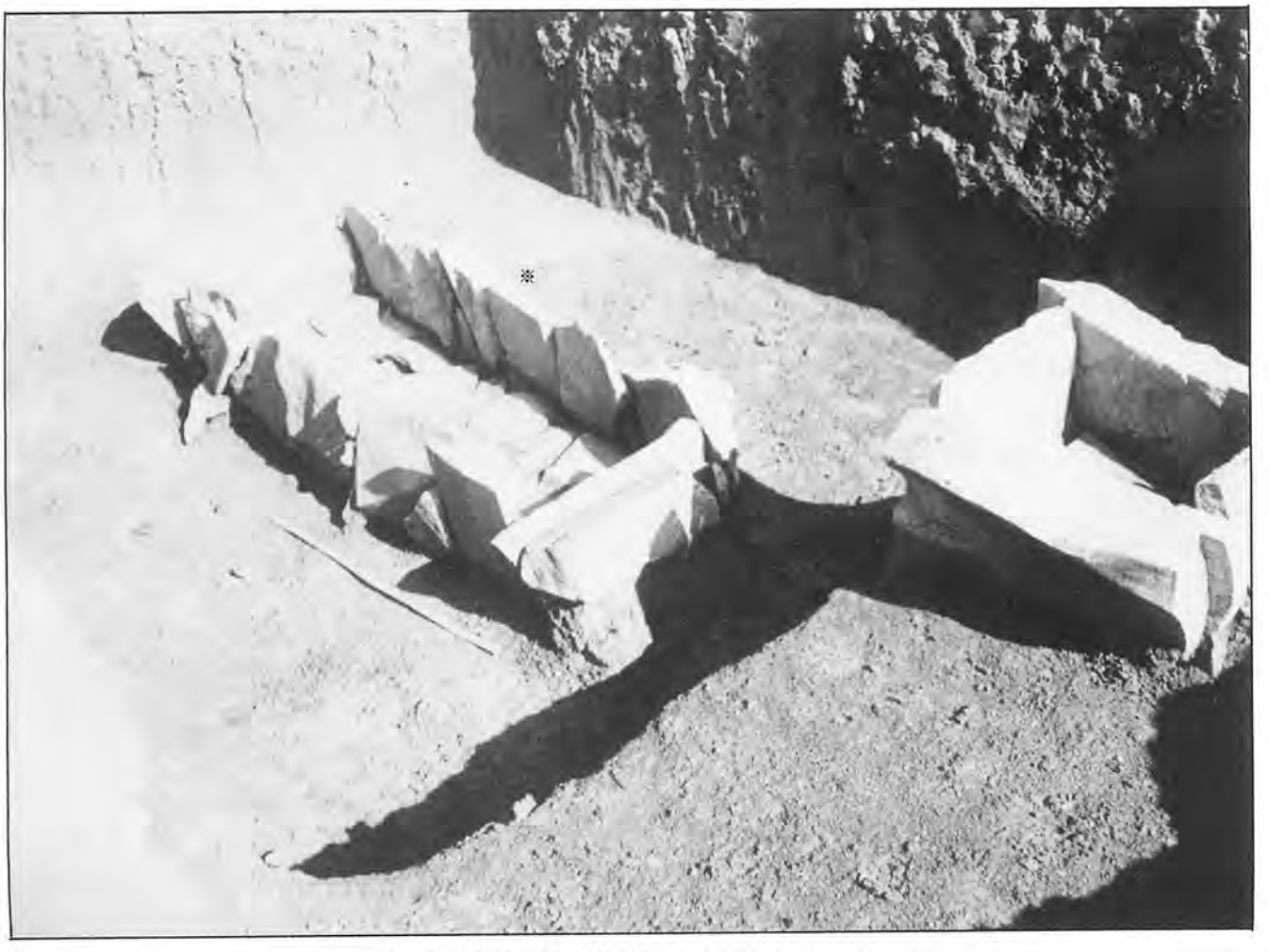
3の1図　大原9号石棺位置図（玉名2.5万分の1）

立　地　岱明町の東端部で玉名市境に近く，菊池川の支流境川流域平野を東に，大野牟田の大穀倉地帯を南に望み，標高501 mの小岱山と有明海との中間にひろがる標高17 mの沖積台地の東端部にあたる。

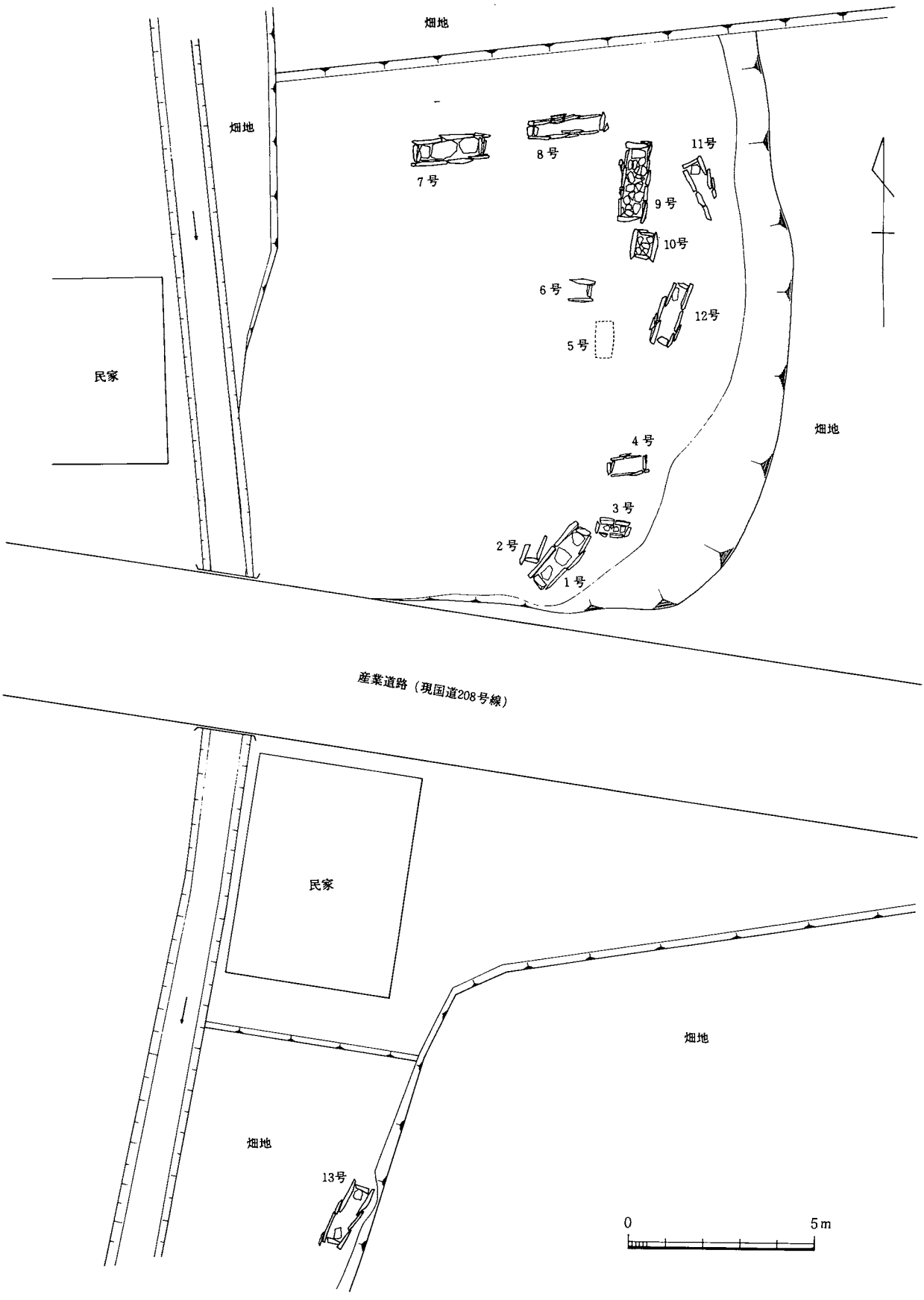
墳　丘　畑地の地表下から出土したもので，墳丘の形跡は認められなかった。

墓　室　畑地の地表下70cmほどのところから出土した13基中の一つ。主軸を南北方向にとる。安山岩の板状割石大小15個を内側で縦1.75 m，横幅45cmの大きさをもつ長四角の箱形に組み，深さ30cmの底に同じ石材22個を平面に敷き詰めて棺床をつくり，北壁に接し大小の平石2枚を平らに重ねた枕を備える。蓋石の隙間から侵入し，棺床を覆う程度の土砂が積もり，主体人骨は認められなかった。上部は同質石材4枚を継ぎはいで並べ棺身全体を覆っていた。

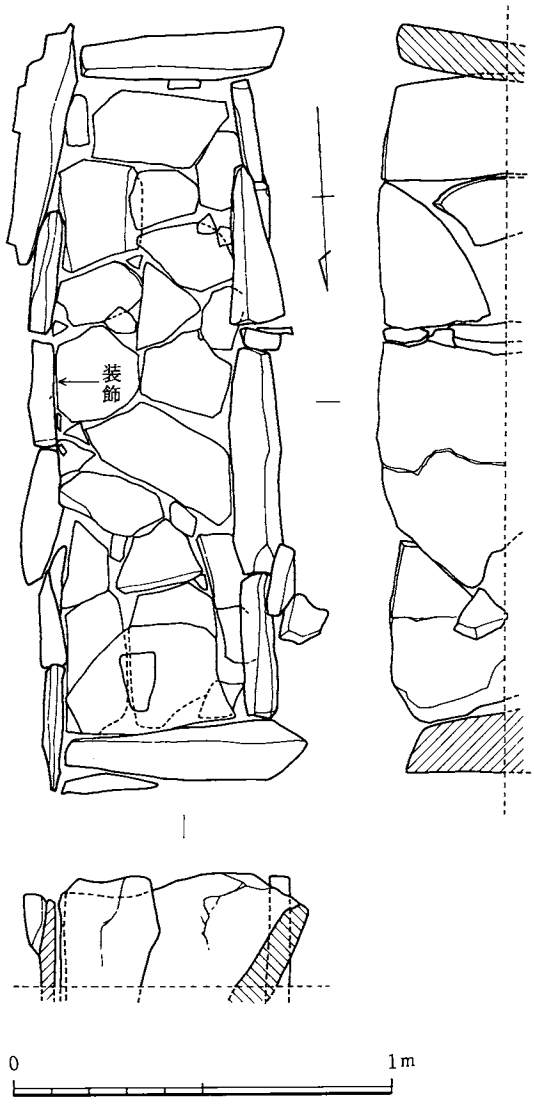
装　飾　東側壁の中央石材には，その内側に線刻の図文が施される。石面下半部の右端に見られるのは住居の屋根であろう。左側は冬木立であろうか。上半部では中央にあたって小舟に乗り，笠をかぶって棹さす人物が伺われ，その上の直線3本を中点に正交させた図文は，夜空に輝く星であろうか。



3の2図　大原9号石棺発見状態（※印は装飾石材、右は10号石棺）



3の3図　大原石棺群配置測量図



3の4図　大原9号石棺実測図

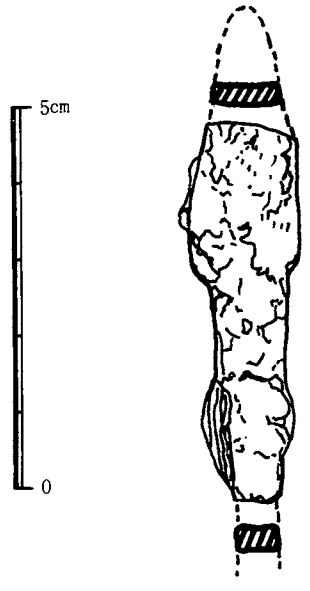
3の5図　大原9号石棺石材の線刻文実測図

夜空の一つ星は取りも直さず北極星で，古代人はこの星を目当てに夜の航路をきめたという。遺体は舟に乗せて大洋の彼方の死後の浄土へおくるという水葬思想のあらわれであろうか。舟と星（または太陽）の図文は，近くでは玉名市石貫五城横穴群第1号の左内壁に，また遠いところでは長野県茅野市尖石遺跡発見（太陽として報告）のものが発表されているが，それらとまったく共通する。

出土遺物　棺内中央西寄り付近，鉄鏃1点

年　代　古墳時代前期

備　考　昭和42～43年，畑地の採土工事によって発見され，他に12基があり，調査後同町中央公民館へ移転復元。第9号棺には別に南側40cmの地点に小形の陪棺があった。ここから北へ約80mの地点に出土の3基の箱式石棺は一連のものか。また出土地の西方約400mの地続きには，同時期と見られる竪穴式住跡群の下前原遺跡がある。（田添夏喜）



3の6図　大原9号石棺出土鉄鏃

〔参考文献〕

①田添夏喜『大原箱式石棺群』（岱明町文化財指定資料25号）岱明町教育委員会　昭和57年（1982）プリント

4．大坊古墳〔昭和52年国史跡〕（⇨4の1～4図）

——玉名市玉名出口——

4の1図　大坊古墳周辺の装飾古墳位置図（玉名2.5万分の1）
1 大坊古墳　2 永安寺西古墳　3 永安寺東古墳　4 馬出古墳

4の2図　大坊古墳玄室奥壁

立　地　玉名市中心部の北約2㎞，玉名平野北限，菊池川とその支流錦川（繁根木川）との中間に東西に連らなる標高93ｍの飯森岳を主峰とする山丘の南裾に位置する。

墳　丘　東方から突出する舌状丘陵を巧みに利用して築かれ，全長約54ｍの前方後円形をつくる。主軸を東西方向にとり，後世前方部の先端は一部を開いて墓地とし，後円部東端は道路開設によって削除され，墳丘両端に可なりの変形が見られる。前方部は長さ約30ｍ，先端幅23ｍ，高さ標高27.6ｍ，後円部は直径24ｍ，標高27.8ｍの規模をもつ。墳丘の西側から北側にかけて流水の深い谷をめぐらし，周溝としての役割を果たす。

墓　室　後円部頂点から僅か南がわに偏し，羨門を南方の平野地に望んでとり，安山岩の割石を用いて前室，奥室（玄室）の二室から成り，各室に装飾を施す横穴割石小口積復式装飾石室の古墳である。前室は極めて小さく，奥に入って狭くなり，平面は梯形を呈し，間口2.24ｍ，奥行1.30ｍの大きさで，荒砂混りの山土を敷き固めて床をつくり，周壁は比較的に厚手の割石を積み上げ，上面に幅広い大石数枚をつぎはいで天井とする。奥室は前室に比して規模が大きく，その4倍を上回る広さを有し，床面は横2.70ｍ，縦3.40ｍ，細石の混入した山砂で固め，その周壁は割に薄手の割石を積み上げて上部に漸次狭くし，2.80ｍの高さをもって幅の広い板状石数枚で覆って天井とする。奥壁に接して凝灰岩の板状切石10枚を組んで厨子形の棺廓を付設し，その前面広場には向って右寄りに同質の角長切石2個を縦に敷いて区切り，別の屍床をつくる。

装　飾　墓室内の第1，第2両羨門の扉石，第2羨門の両支柱石，奥厨子内壁及びその前面木口，袖石に至る各所に正三角形を単位として，朱と群青を彩色構成した壁画が施される。奥厨子内正面のは特に壮大で保存もよく，横に5段に区切り，各段に三角形を5個または6個づつ上下たがいに向い合わせに配列し，さらに2段目と4段目に同大の円3個づつを等間隔に三角形内に朱と群青色をもって，あるいは塗りたて，あるいは塗り残して配する。朱の顔料が豊富であるため用具の痕跡を止め，興味をそそる。

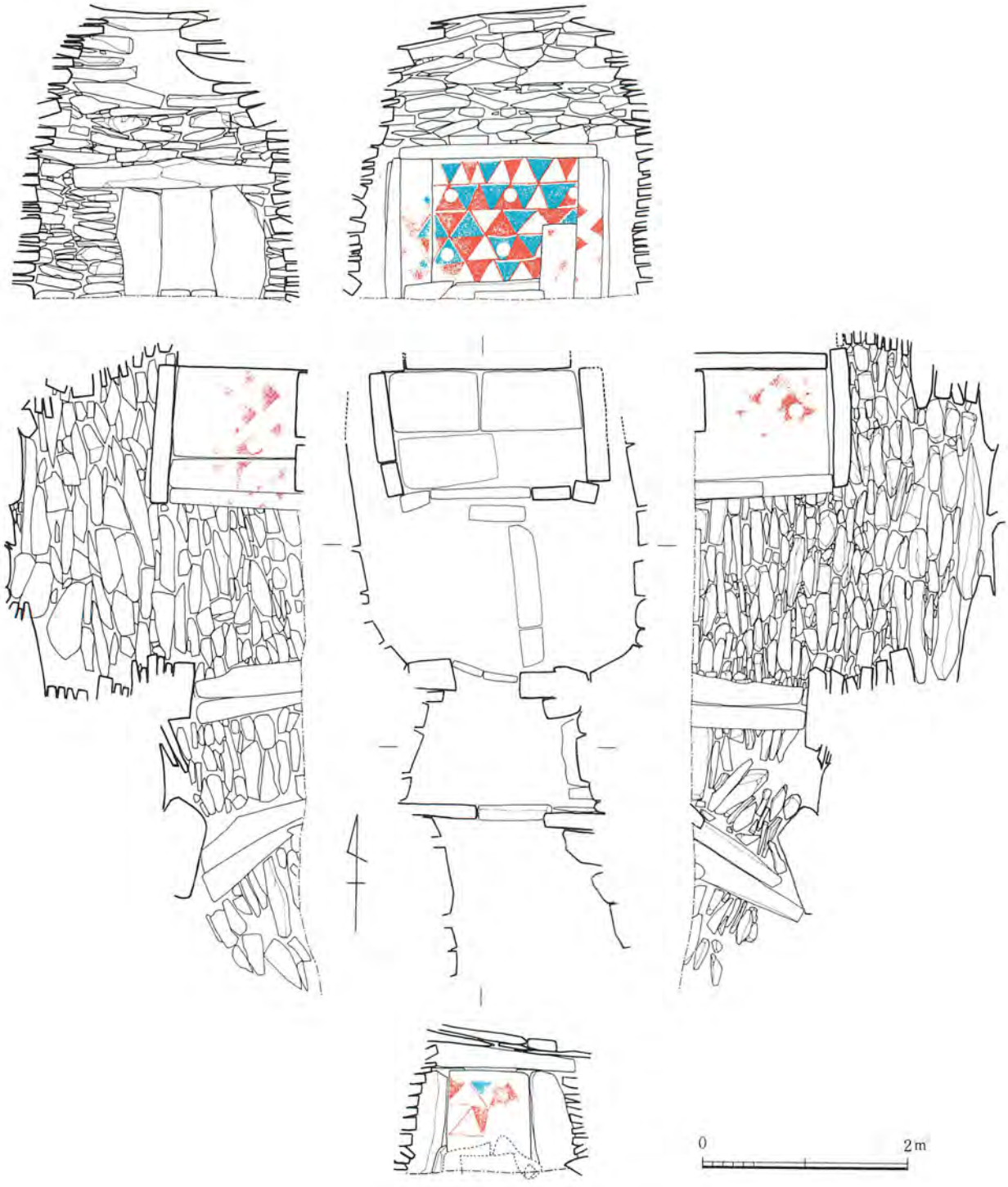
出土遺物　奥室から金製垂飾のある耳飾，真珠玉，めのう勾玉，玻璃小玉，水晶勾玉，埋木小玉，管玉，金環，帯金具等の装身具類，直刀，鉄剣（片），鉄鉾，鉄鏃，鉄斧等の鉄器，青磁碗，前室からは杏葉，鐙，鞍金具等の馬具類，須恵器，土師器百数十点が出土した。

年　代　古墳時代後期

備　考　昭和52年2月17日国指定史跡となり同時に保護施設完成，壁画保存に大いに効果を挙げている。年1回（2日間）一般に公開している。また現地の東約1㎞の道路近くに永安寺西古墳と同東古墳が，またそこから東約180ｍの地点，玉名大神宮裏の山丘頂上が馬出古墳のあったところ。（いづれも装飾古墳）　（田添夏喜）

4の3図　大坊古墳周辺地形測量図

〔参考文献〕
①梅原末治「大坊古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』（京都帝国大学文科大学考古学研究報告第1冊）大正6年(1917)
②田添夏喜『玉名市玉名大坊古墳追加資料』昭和38年（1963）プリント
③乙益重隆「大坊古墳」小林行雄編『装飾古墳』P77　平凡社　昭和39年（1964）
④田辺哲夫「熊本県玉名市玉名大坊古墳」『玉高考古学部部報第11号』玉名高校考古学部　昭和40年（1965）
⑤田辺哲夫「大坊古墳」斉藤忠編『古墳壁画（日本原始美術第5巻）』P178　講談社　昭和40年（1965）
⑥田添夏喜編著『玉名市の文化財』第1集　玉名市教育委員会　昭和45年（1970）
⑦森貞次郎『装飾古墳』朝日新聞社　昭和47年（1972）
⑧斉藤忠『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1973）
⑨『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
⑩乙益重隆編著『装飾古墳と文様』（古代史発掘8）講談社　昭和49年（1974）
⑪田添夏喜「大坊古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P50・51　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑫『史跡大坊古墳保存工事報告書』玉名市教育委員会　昭和54



4の4図　大坊古墳石室実測図

年（1979）
⑬『熊本県の文化財』3（史跡）熊本県教育委員会　昭和56年
（1981）

5．永安寺東古墳〔昭和34年県史跡〕(⇨4の1図，5の1～3図)　——玉名市玉名永安寺——

東・西古墳の呼び方は浜田耕作氏の命名によるものである。

永安寺というのは小字名である。もと永安寺という寺があったと見え，東西両古墳の中間に五輪塔等の残欠が散乱している。その中には永仁二年（1294）銘の宝塔もあり，他の石造物も様式からして中世後期と考えられる。古書に寺の由来などの記載がないところからすると，近世には廃絶していたのではあるまいか。

立　地　有明海から菊池川を遡り，第一の関門，桃田・高瀬のやや狭隘になっているところを過ぎると，玉名平野と呼んでいる盆地状に干陸した水田地帯750 haがあり，古代の条里が施行された痕跡をかなり留めている。

その奥は高さ100 mに及ばない低い丘陵状のよく開析を受けた玉名山の山々が連なり，平野との接点は小さいながら断層崖となっている。その断層崖と菊池川とが直交する交点付近に永安寺東西両古墳は位置するのである。したがって，この地は位置的に重要な地点に当るだけに，宗教上，政治上にも重要な役割を占めたと考えられるが，その詳細は備考に記した。

墳　丘　低い丘陵の最末端，平坦地との境は8 mの崖となっている。その崖が少さく突出している部分に石室を営み，それを覆って墳丘があるが，現在の墳丘の高さは約3 m。前室，前庭部では封土は勿論，基盤も削りとられてしまっていて，面影は全く失われている。墳丘上には円筒埴輪も葺石も見受けない。斎藤忠氏は，基底径13m内外，高さは6 mぐらいあったものと推定している。

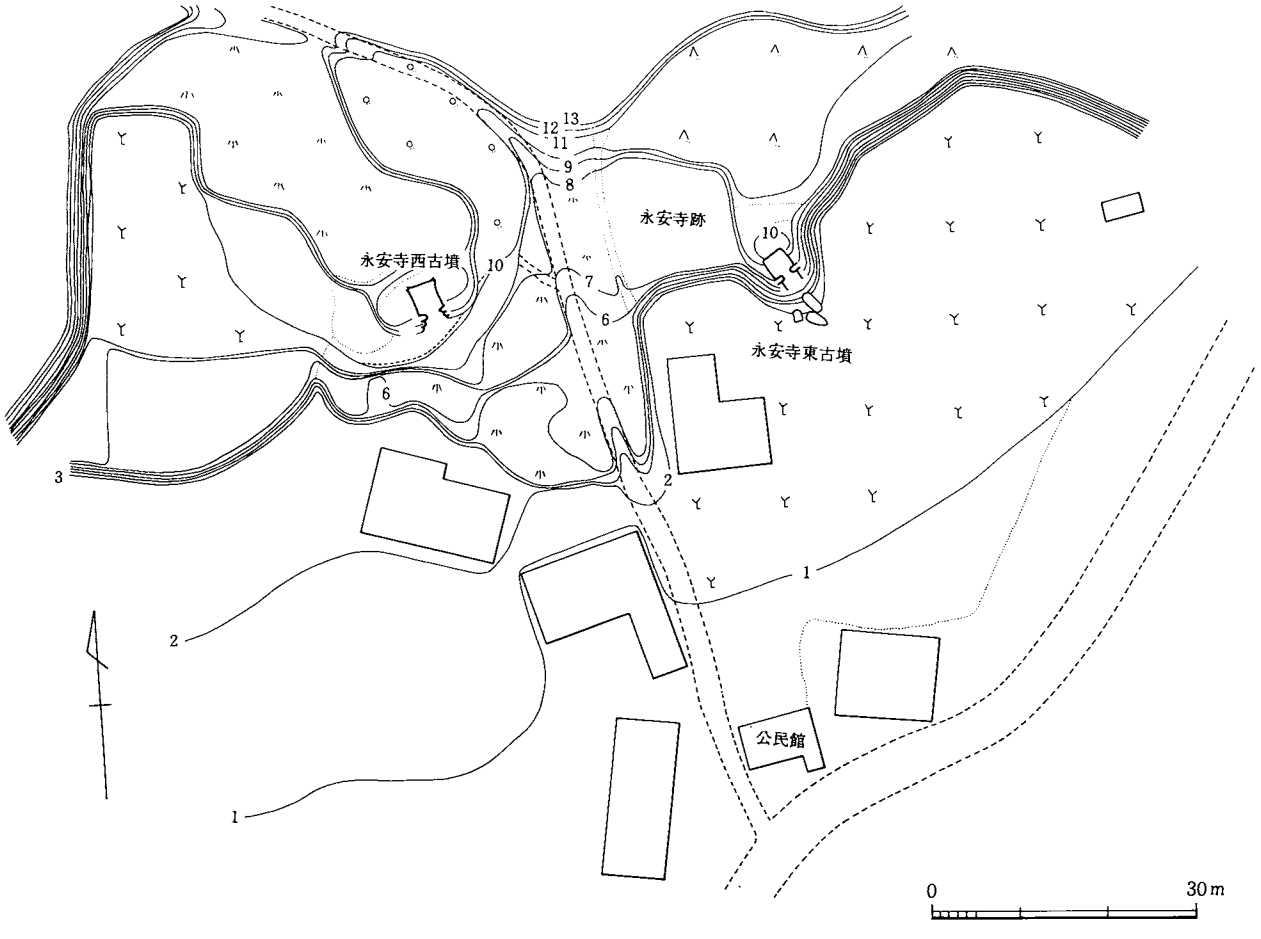
平地から眺めると，山の断崖が古墳の両翼にも見えるという視覚的効果を期待して造営されたかのようにも思われる。

墓　室　複室からなる横穴式石室である。全長4.2 m（現存部のみ），幅2.42m，高さ2.85m。羨道を兼ねていると思われる前室の前半は崩落しているが，その石材は遺存している。開口部は南々東，平野を望んでいる。

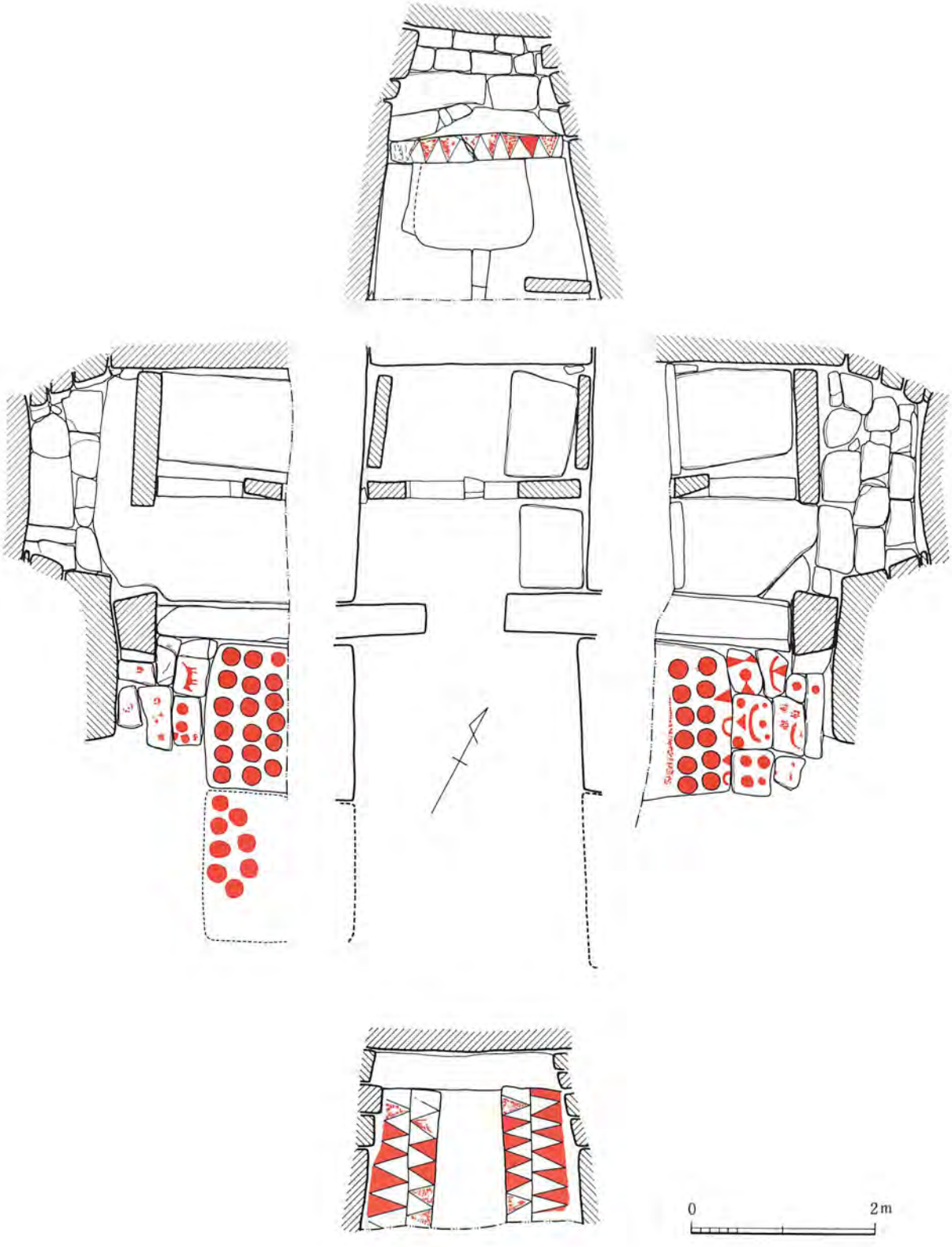
後室，平面形はほぼ正方形をなし，石屋形が作られている。奥と両側の三方の周壁の下部は阿蘇泥熔岩（凝灰岩）を加工した巨大な切石一枚石である。周壁上部は小形切石をもって持送り式に三段に積み上げている。天井部は安山岩の巨大な一枚石で覆う。全体として，横断面は梯形をなして，整美であるという印象が強い。

石屋形は後室の半分を占めるほど雄大なものである。奥の壁は後室の奥壁をもって兼ね，左右には側石を立て，その上に大きな一枚石を架ける。

前部の壁石には横口式石棺に似た広いU字形の窓を刳り



5の1図　永安寺東・西古墳周辺測量図



5の2図　永安寺東古墳石室実測図

抜いている。建築家の矢野和之氏は「入口部分（窓）の曲線は非常に端正なカットがなされており左右に二分割して，組立てたものである。建築でいうプレハブ的発想を行っているのが面白い。もし，これを一枚の石でつくったとすると，構造上一番弱い下部が必らず割れることになるし，第一，輸送が困難である。なお驚くべきことに，二つの石を組合わせる時の誤差を予想し，中心に逆台形の石を調整用としてはさんでいる。この調整用の石は左右の石が建てこまれた後に現場で加工され,はめ込まれたものと思われる。」と述べている。（文献①）

羨門の両袖石も整備なものであるが，その上に架けている楣石には花崗岩を用いている。このことについて，矢野

5の3図　永安寺東古墳羨門部（白石巌撮影）

和之氏は「使用石材はほとんど凝灰石であるが，力が集中してかかる玄門の楣部分にだけ強度の高い花崗岩を使用するという構造力学上の細かい配慮がみられる」とも述べている。

この羨門の閉塞石かとも考えられる凝灰岩の切石が後室の石屋形前の一隅に置かれている。

前室は羨道であったと思われ，もと，両側・壁下半は大きな切石各2枚で構成され，その上に，後室と同様に小型切石を持送りに三段積み上げ，天井石を載せていた。

装　飾　後室では石屋形の蓋石の正面に線彫による三角文の並列が見られ逆三角の部分に朱を塗彩している。

前室，羨門袖石は中央に浅い縦線を線彫し，この中央線に向かって連続三角形の文様を線彫の上，朱を塗彩している。するどく，はなやかで，稲妻のような壮観を感ずる人もあれば，幟を立てたように見える人もあり，この古墳の代表的装飾文である。

右側壁の下半部の一枚石に，大きな円文12個を二段に並べ，下には1本の太刀を，上には2個の半円弧と2個の三角形を加えている。一枚石の上の小形切石には10個以上の小円文，舟と考えられる弧が2個，それに4個以上の三角形とが，それぞれ不規則に描かれている。太刀との見解を述べているのは田添夏喜氏であるが，この壁の文様について「舟と大小の円文は，満天の星輝やく大海原に，霊魂を乗せた舟を浮ばせたようすを現わしたものであって」と解説している。（文献②）

また，大きな円文は円を線彫したうえに朱を塗っている。線彫は下書きに当り，構図の便宜上のものであろう。とくに袖石に近い円文には絵具の垂れが見られる。このことについて，熊本県立美術館の学芸課長であった美術家の乙葉統氏は「この血糊のような絵具の垂れの形は，おそらく絵具の熔剤に油性のものを加えたろうと思われる粘っこい流下速度を示している。(中略)このような粘性の絵具の垂れの形は，この円を描いた刷毛の毫が，絵具をたっぷりと含む毛質と分厚さをもち，且つ筆圧によって絵具を絞り出す弾力性をもっていたことを示している」と解説している。（文献③）

左側壁でも下半部の一板石に，大きな円文を18個，三段に分けて並べている。この石の上の小形切石には数個の小円文と三角文が描かれている。とりわけ，馬の絵が注目される。頭を入口の方に，4本の足を揃えている。下半部の一枚石の隣りの一枚石は崩落しているが，大きな円文が8個以上認められる。

遺　物　なし

年　代　6世紀後半

備　考

(1)　調査

①熊本県立玉名中学校大槻弘毅教諭の調査で大正3年永安寺西古墳は装飾古墳であることが判明していたが，東古墳の

ほうは，もと前部に藁を積んであったため，壁面に注意を払わなかったが，翌年，玉名郡で講習会の催があって，この遺蹟を実査したとき，一会員が東古墳の装飾を発見した。（文献④）

②大正５年冬京都帝国大学浜田耕作博士は，わが国で初めて装飾古墳の調査に着手され，その助手として梅原末治氏らが，井寺古墳，江田船山古墳と精力的に調査されて年を越し，さらに６年３月梅原氏が単身県下に再調査に見えたのであった。（文献④，⑤）

③昭和39年２月号にあたる平凡社の雑誌『太陽』第８号は「日本の原始絵画」の特集を組み，その表紙に永安寺東古墳の羨門東側の袖石の鋸歯文列，前室東壁の円文列の強烈な赤色の装飾文を掲載し，装飾古墳ブームに火をつけたのである。

④講談社は大冊である『日本原始美術』の第５巻として「古墳壁画」（昭和40年４月刊）を作ることになり，斎藤忠氏が担当することになった。そこで，梅原氏以来初めて，改めて実測図も作製することになり，永安寺両古墳は田辺哲夫に割当てがあったので，田添夏喜氏・玉名高校考古学部の協力を得て昭和39年８月実測及び地形測量を実施したのである。

(2)　玉名の歴史上・宗教上の特性

永安寺東西両古墳一帯は古くからの玉名村であって，郡名発祥の地である。しかし，白鳳以後の玉名郡衙は南西2.8km距った大字立願寺にあったと考えられる。というのは，白鳳期の単蓮弁軒丸瓦・重弧文軒平瓦を初め，奈良・平安前期に亘る布目瓦を出す郡家推定地や廃寺跡，瓦は出さないが，礎石群の間隔が唐尺で割切れるので同時代と見られる郡倉跡，それに郡司日置氏が祀る式内社疋野神社（現存は再興）などの遺跡群が存在するからである。ここは『和名類聚抄』に見える日置郷であると考えられる。立願寺のこれらの地点は，菊池川筋からやや奥まっており，背に山周囲に丘をめぐらす要害の地形であって，白村江敗戦後の官衙の奥地移転の一例ではあるまいか。

そうすれば，永安寺両古墳の一帯の玉名の地はそれ以前の玉名郡家の所在地である可能性があるが，現在までのところ，その遺構は発見されていない。しかし，永安寺東西両古墳のみならず，近接して，小路古墳，馬出古墳などの優秀な古墳が近来相次いで発掘調査され，後期の顕著な古墳群を形成していることが判明したことは重要視されなければならない。

有明海は干満の差が最も大きいところであるが，満潮の影響が及ぶ最も上流地点，すなわち，汐留めが，この玉名の地点である。したがって，ここまでは容易に舟運が溯りうるわけで，菊池川第一の港として重要なところであったであろう。

玉名は『日本書紀』景行天皇条に「玉杵名邑」として見え，奈良期には玉名と好字二字で表記したが，読みは依然としてタマキナであったらしく，平安時代に入ると，玉井名，多万伊奈という読みの記録がある。タマキナの意味については霊魂の寄り来たりたまう地という説があり，この古墳群の中央に，郡で最も古い由緒のある「玉名大神宮」があって，玉依姫をも祀っている。汐留めのこの地が古来霊地であったこと，その信仰が今日に伝わっていることがわかる。

(3)　美術館移設問題

熊本県立前術館を建設するに当って，特別企画として常設の装飾古墳室を設けることになり，その中心として実物の装飾古墳を移設する案が出され，その候補にこの永安寺東古墳が選ばれたのである。（昭和47年３月）

しかし，地元の玉名市教育委員会は移設に反対であり，６月25日，７月９日と肥後考古学会は臨時総会を開き，その席で現地保存を行うべしとの意見が強く出され，８月に至ってその計画は中止された。

そのあと，玉名市教委は県教委の補助を得て，翌48年３月，石室前室から前庭にかけて，鉄骨・小波スレート葺きの保存小屋を建設し，応急の措置をしたが，密閉に至らなかったため，却って乾燥させる結果となったので，国史蹟への指定を促進したうえ，本格的な保存施設を施す必要がある。（文献⑧，⑨）　　（田辺哲夫）

〔参考文献〕

①矢野和之編『99の謎，甦る古墳文化－石室の記録』サンポウジャーナル　昭和53年（1978）
②田添夏喜「文化財めぐり(42)永安寺東古墳」『広報たまな』昭和47年（1972）３月１日号
③乙葉統「造形言語が語る装飾古墳壁画」『装飾古墳室』熊本県立美術館　昭和51年（1976）
④梅原末治「玉名郡玉名村の三古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴（京都帝国大学文科大学考古学研究報告第１冊)』大正６年（1917）
⑤梅原末治『考古学六十年』平凡社　昭和48年（1973）
⑥『太陽(第８号)』（日本の原始絵画）平凡社　昭和39年（1964）
⑦田辺哲夫「永安寺東古墳」斎藤忠編『古墳壁画（日本原始美術第５巻)』講談社　昭和40年（1965）
⑧『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年(1974)
⑨『装飾古墳白書－熊本県下における保存の現状』装飾古墳を守る会　昭和53年（1978）
⑩田辺哲夫「熊本県玉名市玉名永安寺東古墳」『玉高考古学部部報第11号』玉名高校考古学部　昭和40年（1965）
⑪乙益重隆「永安寺東古墳と永安寺西古墳」小林行雄編『装飾古墳』P76　平凡社　昭和39年（1964）
⑫上野辰男「永安寺東古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P52・53　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑬田添夏喜編著『玉名市の文化財』第１集　玉名市教育委員会　昭和45年（1970）
⑭『熊本県の文化財』３（史跡）　熊本県教育委員会　昭和56年（1981）

6．永安寺西古墳（えいあんじにし）〔昭和34年県史跡〕(⇨4の1図，6の1・2図)　——玉名市玉名永安寺——

永安寺東古墳と同じく浜田耕作氏の命名による。

立　地　永安寺東古墳の西側40m。同じ崖線上にある。両墳の間には極く浅い谷があり，その崖堆を凹道の小径が上っている。

墳　丘　円墳，東西13m，南北8mの楕円状，高さ5mであるが，前後が著しく削り取られたと考えられる。崖端と墳丘の間を小径が廻っている。石室の床平面はさらに2mほど下の方にあり，小径から羨門に至るまでは下り坂となっている。したがって、石室の築造にあたっては，地盤を深く掘り下げたものである。

墓　室　羨門の両外側はいまだに封土の中にあるので，前室又は羨道の遺構があるかどうか判らない。ただ，羨門が極めて整美であり，外側に戸口状の柱を併らべ立てているので，単室の横穴式石室である可能性が強い。

玄室　横3.4m，高さ2mの巨大な一枚石を以て三方を囲み，南側に入口を設ける。周壁の上段は粒の揃った自然石をえらんで，四段に持送り式に積み，巨大な天井石を支える。用石はすべて阿蘇泥熔岩（凝灰岩）である。

奥壁にそって，切石で組み立てた石屋形の残痕が残っている。すなわち，奥壁には天井に当る棚石を架ける切り込みの線が延びているし，石屋形の両側壁はその根部を残している。床面にも切石を敷いていた。ともかく背の高い大きな石屋形である。

また，石屋形の前面には，左右両区の屍床があったことが，残存する床石の配置からわかる。これは肥後地方に多いコの字形配置の屍床を有する形式である。

装　飾　奥壁では石屋形の石棚の下の部分に，三段の大きい円文（径24cm）を計15個並べる。両側壁については石屋形によって見えなくなる部分を除いて，左側壁も3段に12個，右側壁は3段に16個，同じく大きい円文を並べる。これらの円文には線刻の痕が残っている。左壁以外では，円文の3段の間に，一直線を線刻する。

彩色については不明であるが，梅原末治氏の調査報告には「西（左）壁第一列の南端の円と東壁第二列の北より数えて第二行目のそれには周囲に朱を塗抹せる痕を残せり」記述している。しかし，現在では確認が困難である。

ここで注目されるのは，右側壁の円文で最上段の石屋形に近い円文にかかって，両側に鉾先らしいものが2個線彫されていることである。梅原氏は狭鋒・廣鋒の銅剣と認められると述べているが，刀痕が新しく，刻法も異なり，整然たる円文重ねて不規律に刻せられているので，後人の附加とも疑われるが，無智の人の加筆にしては銅鉾に似すぎていることも併せて指摘している。

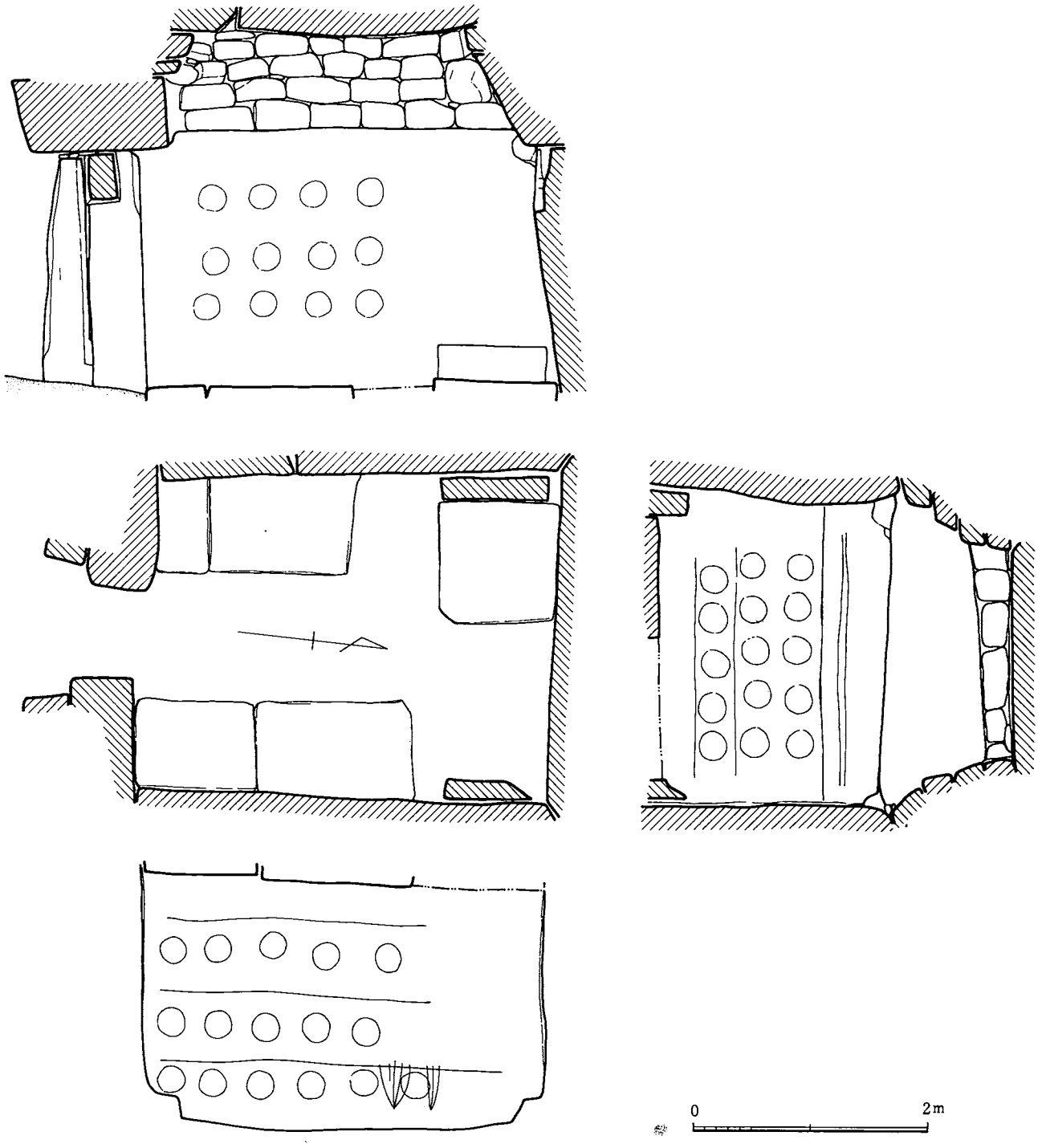
遺　物　須恵器破片少々，上代末期の土師器片も採取されているが，これは開口の時期を示しているか。

年　代　6世紀後半

備　考　調査，以下すべて永安寺東古墳を参考のこと。

（田辺哲夫）

6の1図　永安寺西古墳玄室奥壁（白石巌撮影）



6の2図　永安寺西古墳石室実測図

〔参考文献〕
①梅原末治「玉名郡玉名村の三古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴（京都帝国大学文科大学考古学研究報告第1冊）』大正6年（1917）
②乙益重隆「永安寺東古墳と永安寺西古墳」小林行雄編『装飾古墳』P76　平凡社　昭和39年（1964）
③田辺哲夫「永安寺西古墳」斎藤忠編『古墳壁画（日本原始美術第5巻）』P179　講談社　昭和40年（1965）
④田添夏喜編著『玉名市の文化財』第1集　玉名市教育委員会　昭和45年（1970）
⑤『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年(1974)
⑥田辺哲夫「永安寺西古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P54・55　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑦『熊本県の文化財』3（史跡）　熊本県教育委員会　昭和56年（1981）

7．馬出古墳（⇨4の1図，7の1・2図）

——玉名市玉名馬出4597の5——

立　地　玉名市中心部から東北方へ約2.5㎞，大坊古墳の東方約1.2㎞の地点，標高92.8ｍの飯森岳を主峰とする山系の東南端玉名大神宮裏山の，地表面から約30ｍの高さの山丘頂上で，南に玉名平野の穀倉地帯，東方の近くに菊池川の清流を眼下に収める景勝地に営まれていた。

墳　丘　山丘頂上を利用して円形に築かれ，封土の基部は東西20ｍ，南北16ｍ，高さ4.5ｍ。

頂部以外，ほとんど原形を止める感があった。北方から西方にかけて急傾斜の深い谷をめぐらし，自然の周湟を形成する。

墓　室　墓室は墳丘頂よりやや南側に偏して，羨門を南に向けた横穴単式割石小口積石室墳の構造をとる。天井部はすでに消滅し，羨門部も桁石を失い両支柱だけ南に大きく傾斜のまま遺存していた。奥壁に接して凝灰岩の板状切石箱形に組み，南の正面だけを開けた厨子形(大坊古墳同形)の大形棺廓が設けられ，その前面左右にはそれぞれ内壁に接して同質材の角形切石を縦に置いて障石とし，内側に板状切石を敷き詰めて床とした一基づつの屍床の備えがあった。石室の規模は間口2.80ｍ，奥行3,05ｍ。

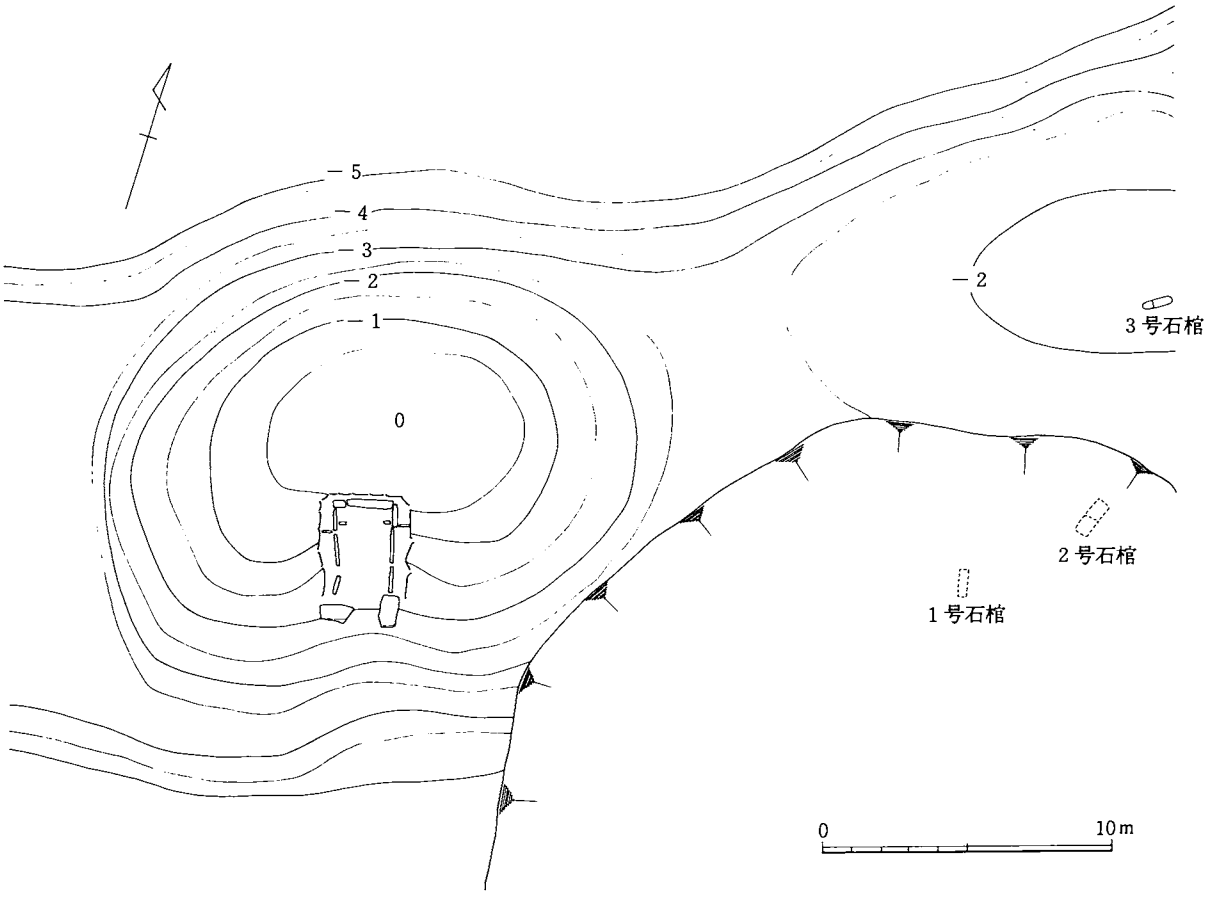
奥へ僅かに広さを増す逆梯形を呈し，その周囲に割石を小口積みに，上方へいくに従って内側へ狭められ，床面より2.10ｍのあたりで小口積みの壁はなくなり，羨門付近では床上1ｍで消滅，破壊の痕跡を示す。したがって天井部の構造は不明。

装　飾　石室奥の厨子形棺廓には，円を主調とする図文が施されていた。内部奥壁で一枚石の壁面には円形12個を6個づつ横2行にし，上部空隙に大きな鋸歯文帯を，左右側壁には同大の円4個づつを，厨子外正面の右袖石では小円6個を2個づつ左右に相対させ，左袖石では大円3個を縦に並べ，上の円には小円1個を，次の円には小円2個を円周上に重ねかけて線刻する。一部分に朱色が残っていた。出土遺物，石厨子前面に集中的に出土，両屍床上に少数発見。各種水晶玉，玻璃小玉類・めのう勾玉・金・銀環等の装身具類・刀鐔・鉄鏃・刀子等の鉄器類・木葉形目被い具一対等百余点。また右側厨子外石棚から馬頭骨が出土した。

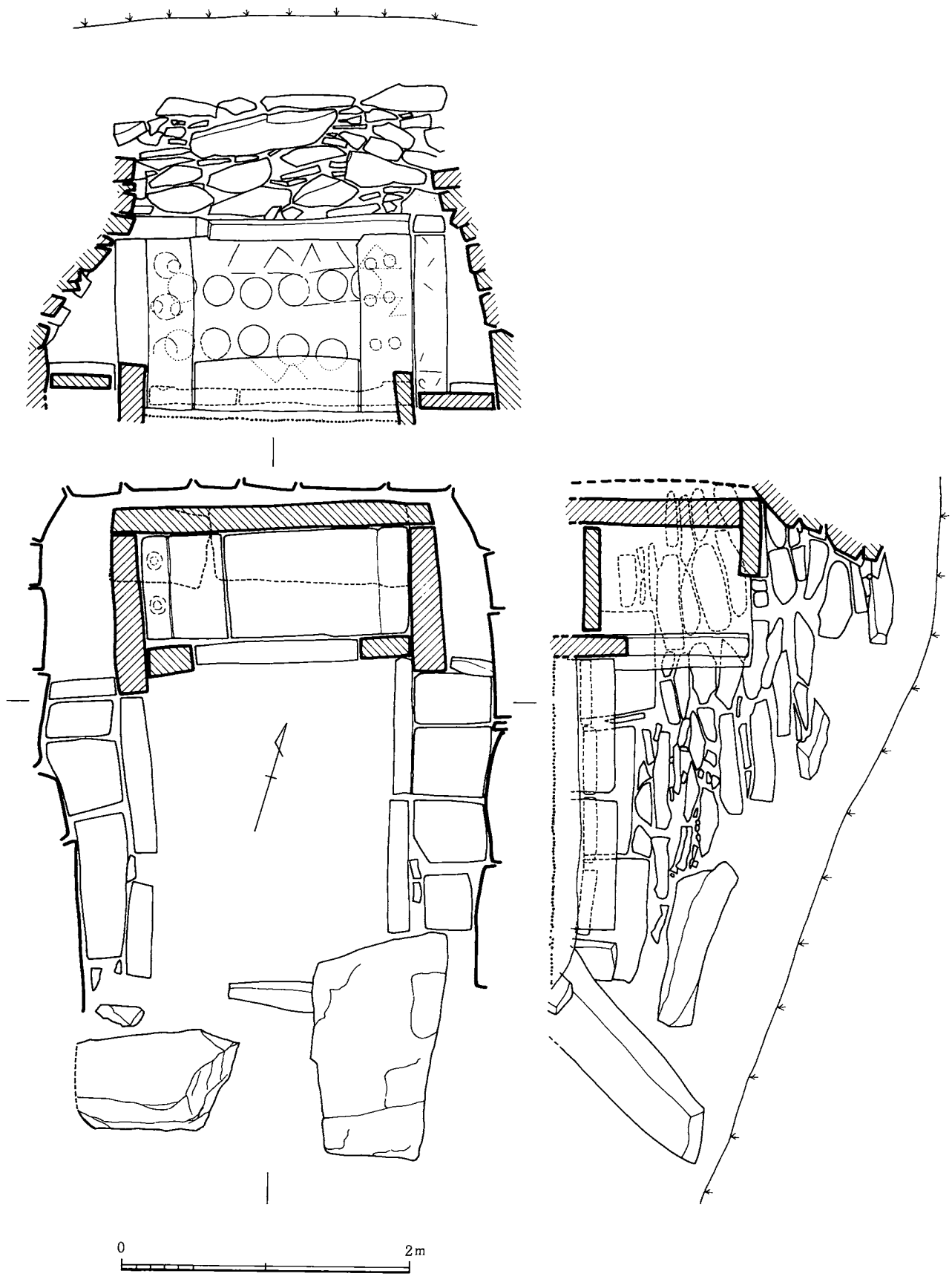
年　代　古墳時代後期中葉

備　考　国鉄復線化，菊池川護岸に伴う採土工事で発見。現在消滅封土の一部をのこす。付近円墳横穴石室墳，箱式石棺1基の陪墳が分布。西180 ｍの地点に永安寺東西両古墳，西方1,200ｍの地点に大坊古墳がある。　（田添夏喜）

〔参考文献〕
①田添夏喜編『玉名市の文化財』総集編　玉名市教育委員会　昭和49年（1974）
②田添夏喜「馬出古墳」『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）



7の1図　馬出古墳墳丘測量図



7の2図　馬出古墳石室実測図

8．経塚古墳（⇨8の1・2図）

——玉名郡天水町部田見城ノ平1213番地——

立　地　金峰火山群の秀峰三ノ岳山麓から西につづく丘陵上，部田見集落の背後にある円墳で，小塚の円墳と二基ならぶ。同じ丘陵上立花集落の北側には，かって底部穿孔の壺形土器や倣製の内行花文鏡を出土した大塚の円墳があり，他にも数基の古墳らしいものが散在する。

墳　丘　古墳は丘陵の頂にあり直径45m，高さ7mの円墳で，墳頂に広い平坦部があり古式を呈する。

石　棺　昭和42年夏の発掘調査結果によると，墳頂部の東南寄りに巨大な阿蘇熔岩製の舟形石棺が直葬されていた。石棺は全長2.74m，身蓋合せると高さ1.33mを有し，身蓋共に前後に尖端のふくらんだ縄掛突起を丸彫りにしている。棺蓋は棟が平らで幅16cmを有し，全体は切妻の家形に近い。棺蓋の両側面には上段に棟からつづく幅約10cmの帯を彫出し，下段の舟べり（幅約15cm）との間を2区にわたって梯形に彫くぼめ，一種の装飾効果をあらわしている。このような彫刻のある石棺まで装飾古墳とみなすについては，若干の問題が残るが，それでも一種の装飾には変りないので一応取り上げることにした。棺身内部には造付けの石枕を彫出し熟年の男性人骨1体が安置されていた。

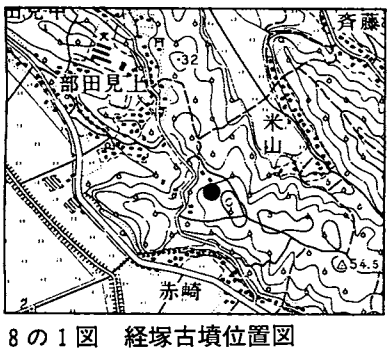
出土遺物　副葬品には珠文帯鏡（直径 8.3cm）1面と碧玉製管玉3個，短剣1，外装付短剣1が出土した。とくに外装付短剣は柄頭と柄の責金および鞘口を銀で，柄間の部分を鉄でつくり，木製の鞘は六ッ編みの細い真田紐で巻き締めていた。尚，墳頂付近から広口の壺形埴輪数個と，古式，土師器の壺形土器が3個以上採取され，それらの年代は4世紀末～5世紀初頃とみられている。

年　代　4世紀末～5世紀初頃

備　考　経塚古墳とならぶ小塚は完全な姿を呈した未開口墳で，外形上経塚と共通点が多く，おそらく古式古墳の一種と考えられる。（乙益重隆）

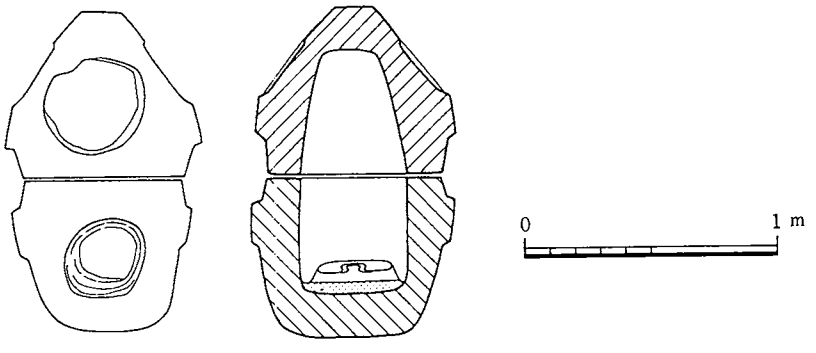
〔**参考文献**〕

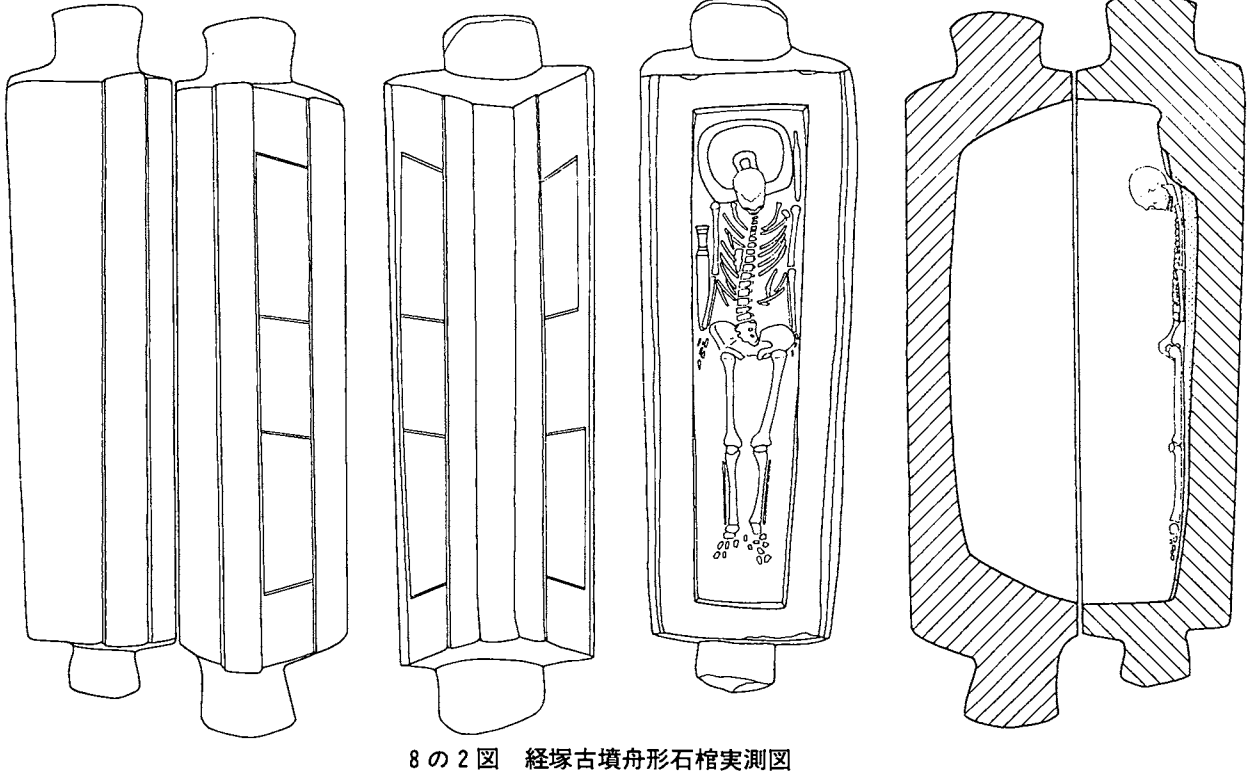
①帆足文夫「経塚古墳発掘報告」『白梅』玉名女子高等学校文芸部　昭和42年（1967）



8の1図　経塚古墳位置図

（伊倉2.5万分の1）



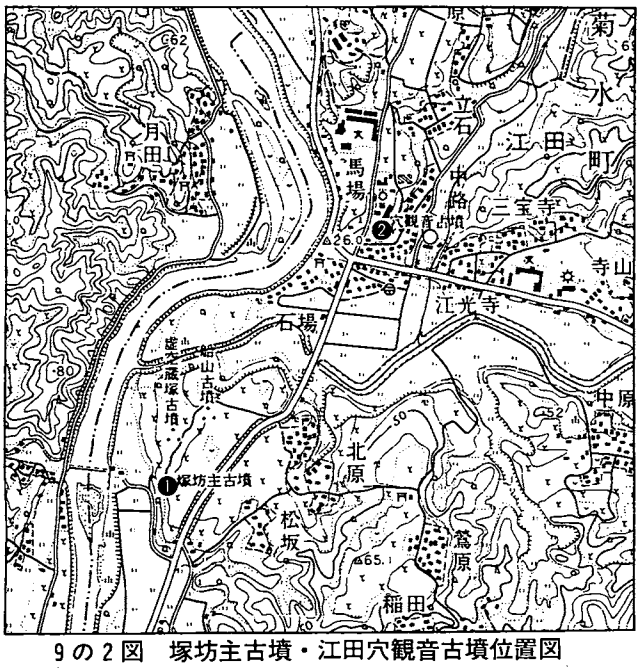


8の2図　経塚古墳舟形石棺実測図

9．塚坊主古墳（つかぼうず）〔昭和26年国史跡〕(⇨９の１～７図)

――玉名郡菊水町瀬川清水原（しみずばる）――

９の１図　清原古墳群分布図



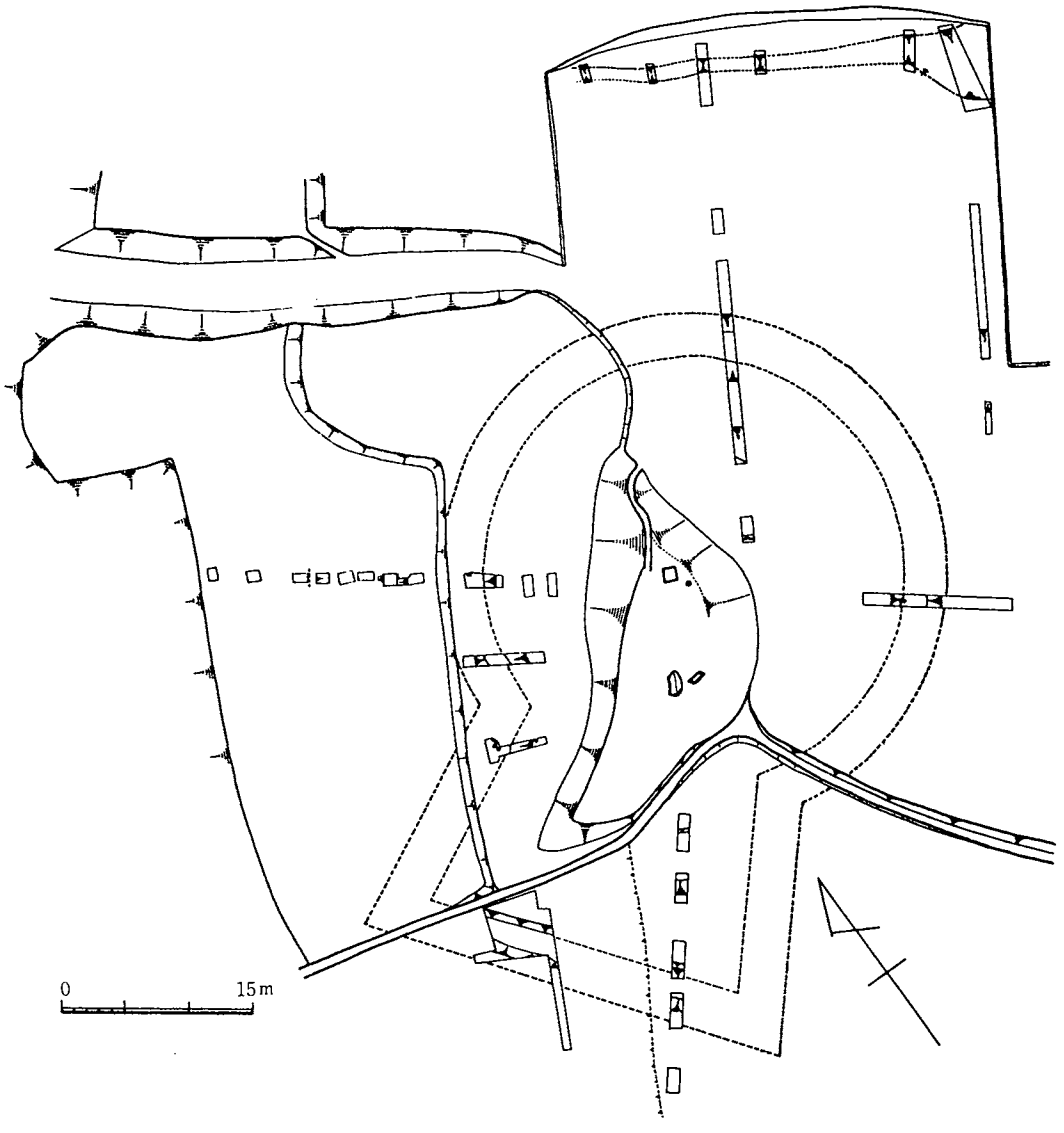
9の2図　塚坊主古墳・江田穴観音古墳位置図
（玉名2.5万分の1）　1塚坊主古墳　2江田穴観音古墳

立　地　菊池川デルタの頂点にある清原（せいばる）台地（標高約30m）上に立地する。

墳　丘　現在長さ約35m，幅約15mの三日月形の墳丘を呈している。復原すると主軸をS－50°－Wにとり，前方部がほぼ南西に向く前方後円墳である。長44.3m，後円部直径30m，前方部幅21.3m，周溝4～5.3mである。

石　室　後円部から前方部に移るくびれ部に2枚の板石が露出している。この下に横穴式石室が構築されている。第二次大戦中に一度発掘されたが現在は内部を見ることができない。当時の写真から判断すると山鹿市チブサン古墳に類似し，チブサン古墳よりやや小規模である。割石小口積の玄室の奥に屋根形棺蓋を架した石屋形があり，その前にL字状の仕切り石が設けられている。調査前の盗掘によって棺蓋の一部は破壊され，天井石も移動している。

出土遺物　石室内から鉄鉾1個，轡2個（f字形鏡板と素環の鏡板），木心鉄板張輪鐙破片1対分，青銅鈴1個，尾錠破片1個，環状金具1個，須恵器破片1個（器台の脚部）が出土。周溝の一部から須恵器（Ⅰ期後半～Ⅱ期），埴輪破片（形象及び円筒）が出土している。



9の3図　塚坊主古墳周溝復原図（菊水町　文献①より）

9の4図　塚坊主古墳墳丘測量図

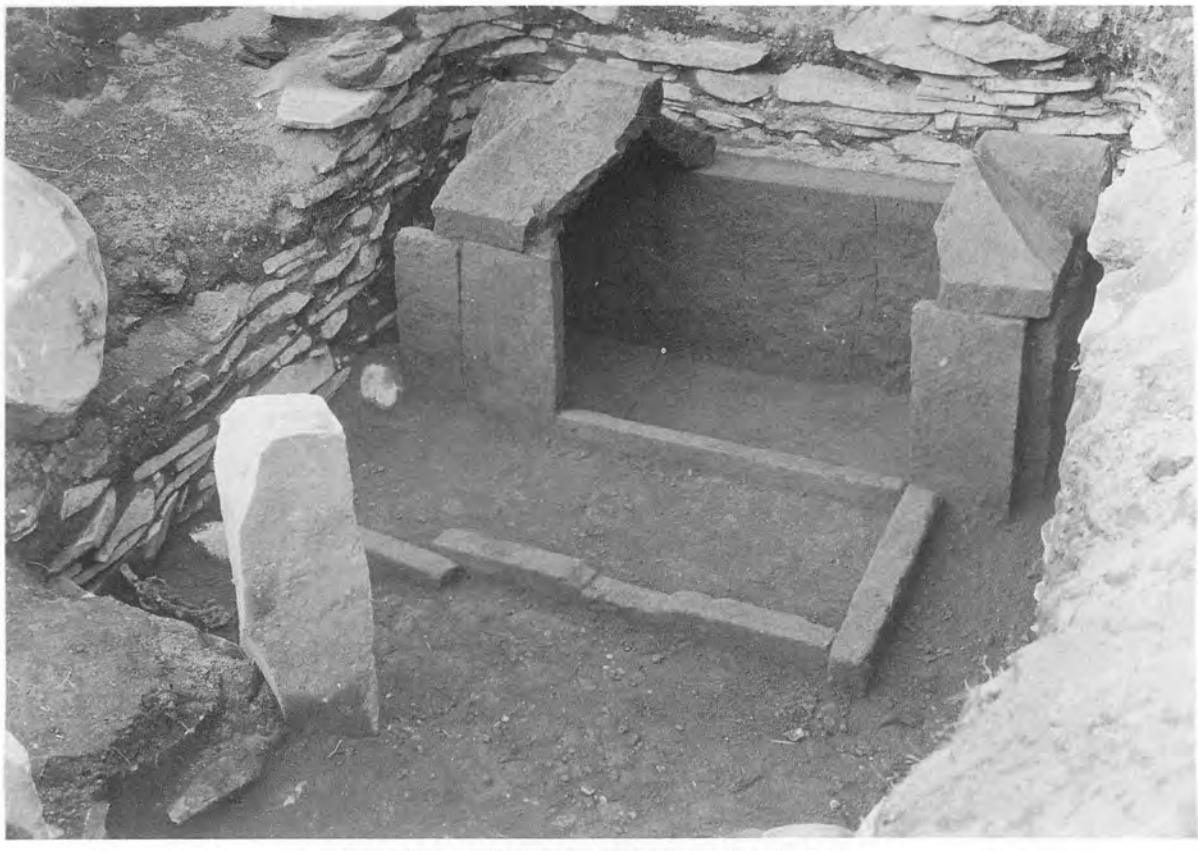
装　飾　石屋形の内壁に赤の連続三角文が描かれているという。

年　代　6世紀初頭

備　考　第二次大戦中，京都大学考古学研究室が発掘調査を行ったが，その直前に盗掘にあった。昭和50年（1975）菊水町教育委員会，昭和56年（1981）熊本県教育委員会が周溝確認調査を実施した。昭和26年（1961）6月9日江田船山古墳，虚空蔵塚古墳とともに国史跡指定。（隈　昭志）

〔参考文献〕
①菊水町教育委員会文化財調査報告書第1集『船山』昭和51年（1976）
②緒方勉ほか『清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査』熊本県文化財調査報告第55集，熊本県教育委員会　昭和57年（1982）
③『京都大学文学部博物館考古学資料目録2』京都大学文学部　昭和43年（1968）
④小林行雄編著『装飾古墳』　平凡社　昭和39年（1964）
⑤松本雅明編著『熊本の装飾古墳』P60—61　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）

9の5図　塚坊主古墳石室全景（京都大学提供）



9の6図　塚坊主古墳玄室全景（京都大学提供）

9の7図　塚坊主古墳家形石棺全景（京都大学提供）

10. 江田穴観音古墳（えたあながんのん）〔昭和19年国史跡〕

（⇨9の2図，10の1～3図）

——玉名郡菊水町江田——

立　地　玉名平野の奥の菊池川東岸に船山古墳や塚坊主古墳などのある清原台地があり，さらに菊池川を逆上った東岸に諏訪原台地がある。江田穴観音古墳はこの台地の南端にあり，近くに家形石棺を主体部とする前方後円墳の若宮古墳や若宮舟形石棺もある。なお江田穴観音古墳から船山古墳までの直線距離は 800m 程で，間を菊池川支流の江田川が流れている。

墳　丘　台地の斜面に築かれているため規模がはっきりしないが，直径約17m，高さ約3.5mとみられる円墳で，墳頂には直径7m程を測る平坦面がある。

墓　室　主軸をN—23°—Wにとり，南に開口部を持つ複室構造の横穴式石室である。石室の全長は9mで，全て凝灰岩の切石で造られており，墳丘よりも石室の方に築造の主力をおいでいる。

羨道は長さ350cmを測り，入口側の幅190cm，奥の幅 210cmで，床面は埋もれているが，床面から天井までの高さは180cmと推定される。両壁・天井とも平面で，各々2枚の切石で構築されている。第一羨門は厚さ60cmを測る一枚石の中央を長方形にくりぬいて造られており，幅70cm，高さ110cmを測る。

前室は奥行き170cm，入口側の幅200cm，奥の幅 230cm，高さ180cmを測り，両壁・天井とも平担な一枚石から成っている。前室の両側には床面から仕切りまで一枚石で造られた屍床がある。屍床面の幅は50～60cmを測る。第二羨門も一枚石で造られ，厚さ60cmを測る切石の中央部を幅60cm，高さ100cm長方形にくりぬいており，その前室側には幅90cm，高さ120cm，奥行き10cmを測る飾り縁がついている。

後室は奥行き260cm，手前の幅230cm，奥の幅 250cm，高さ230cmを測る。左右壁・奥壁とも平面の一枚石で造られている。天井も一枚石であるが，上方に皿状の抉り込みがみられる。床には三枚の石で造った屍床が「コ」字形に配置されている。左右の屍床面の幅は70cm，奥屍床面の幅は80cmを測る。

装　飾　長年にわたって後室で焚火が行なわれているため後室・前室とも黒く煤で覆われているため描かれていたとみられる装飾の確認が困難である。ただ，羨道の左壁の奥に赤色顔料による装飾文の痕跡を確認できるが，文様の形状は不明である。

出土遺物　須恵器破片（大甕），金環1個，ガラス製勾玉1個，金銅製杏葉（心葉形）2個，

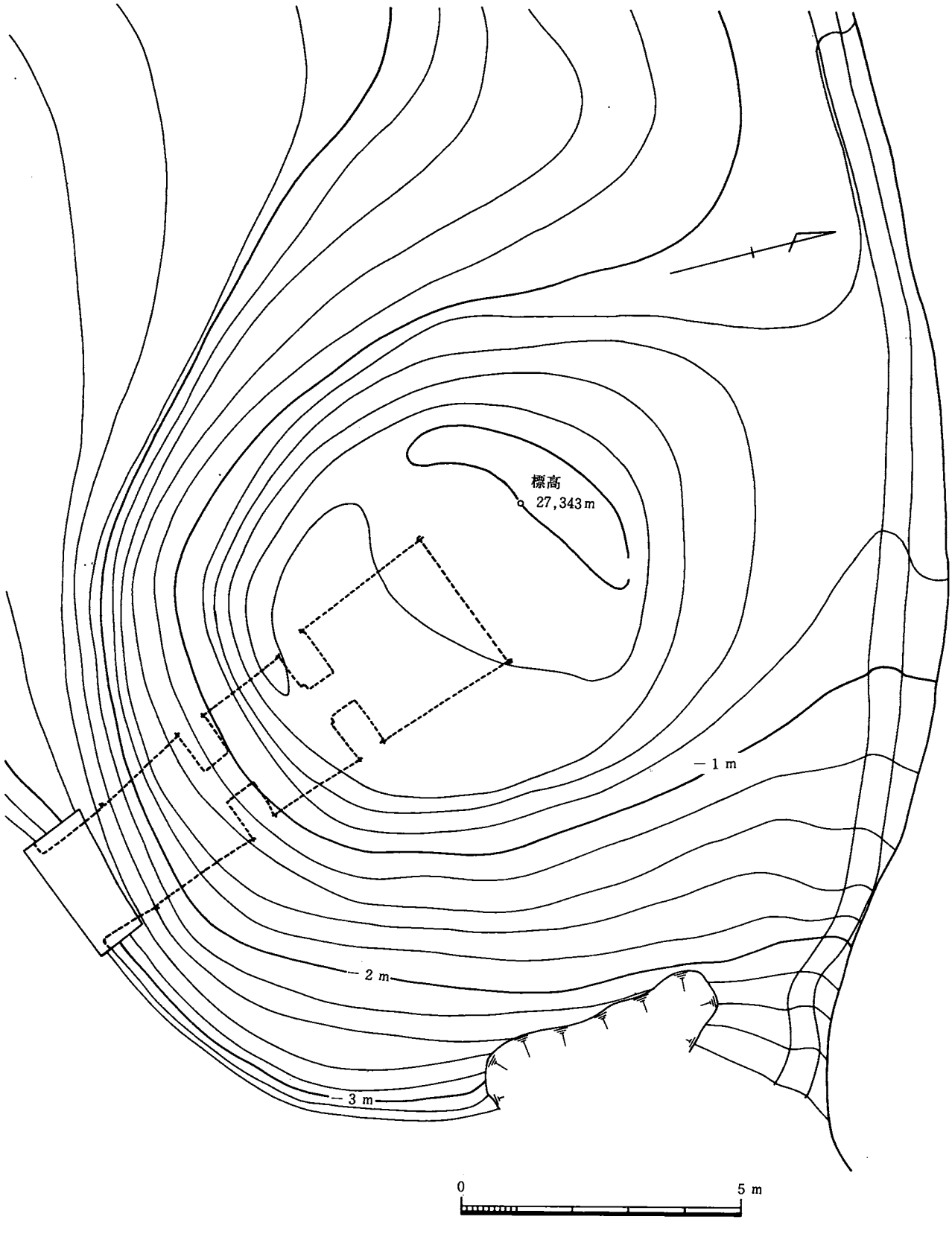
年　代　6世紀後半

備　考　昭和19年（1944）梅原末治氏により調査が行なわれた。（高木正文）

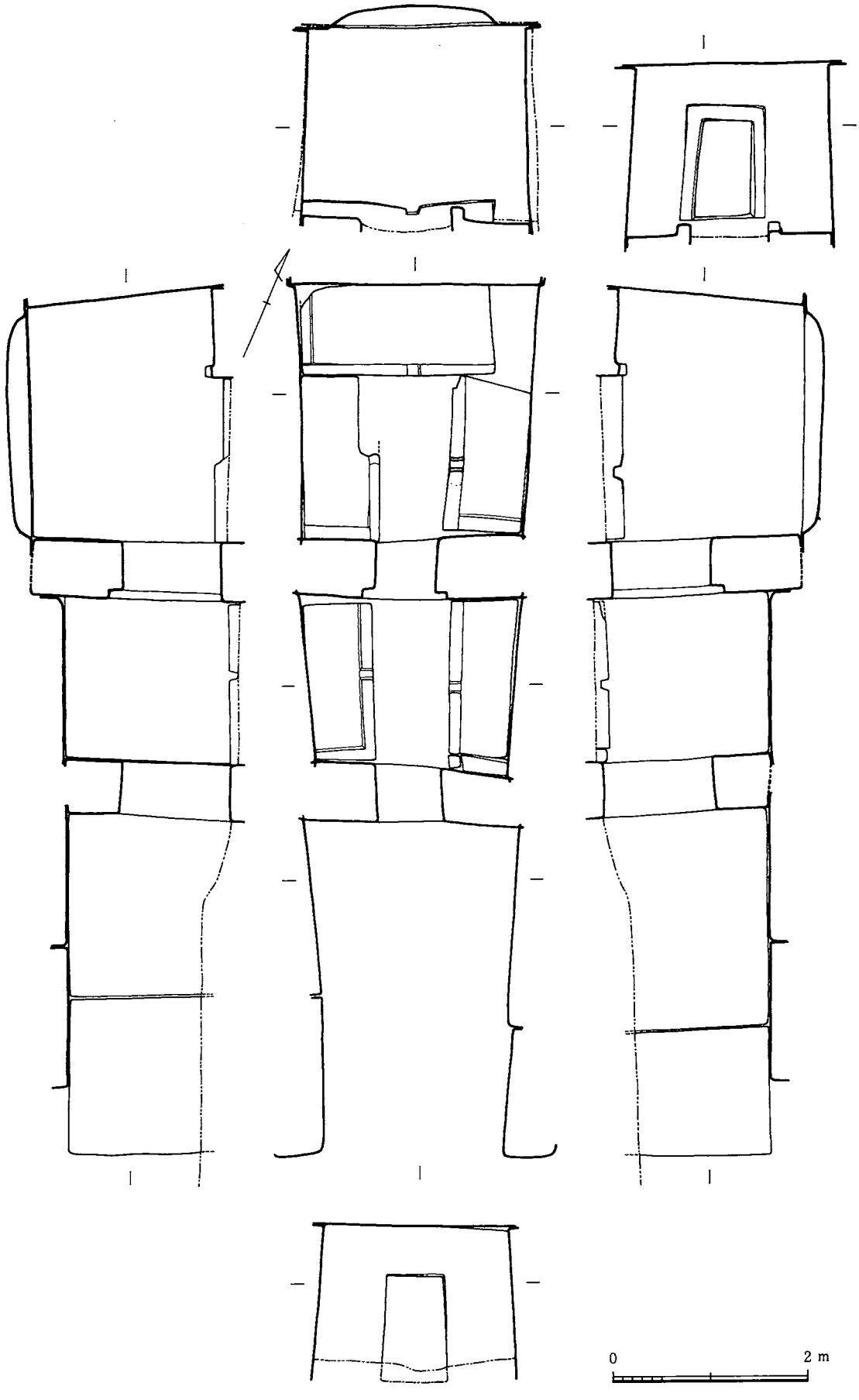
〔**参考文献**〕

①梅原末治「玉名郡江田村中小路穴観音古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告1』P63—65 熊本県 大正11年（1922）
②『京都大学文学部博物館考古学資料目録2』京都大学文学部 昭和43年（1968）
③『長力・北原横穴群』P42・43 菊水町教育委員会 昭和55年（1980）

10の1図　江田穴観音古墳墳丘全景（高木誠治撮影）



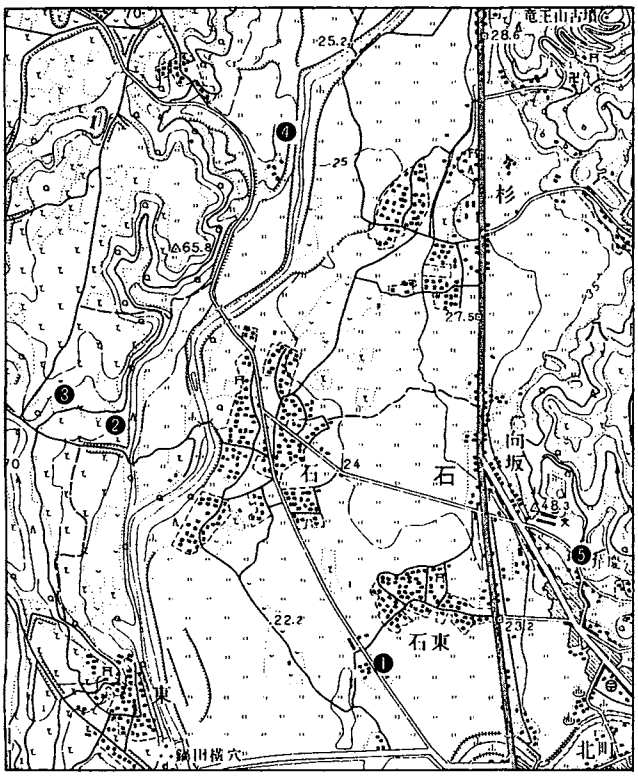
10の2図　江田穴観音古墳墳丘測量図（菊水町教育委員会提供）



10の3図　江田穴観音古墳石室実測図（菊水町教育委員会提供）

11．臼塚（うすづか）古墳　〔石人：昭和48年県重要文化財〕
（⇨11の１～６図）

——山鹿市石臼塚762——

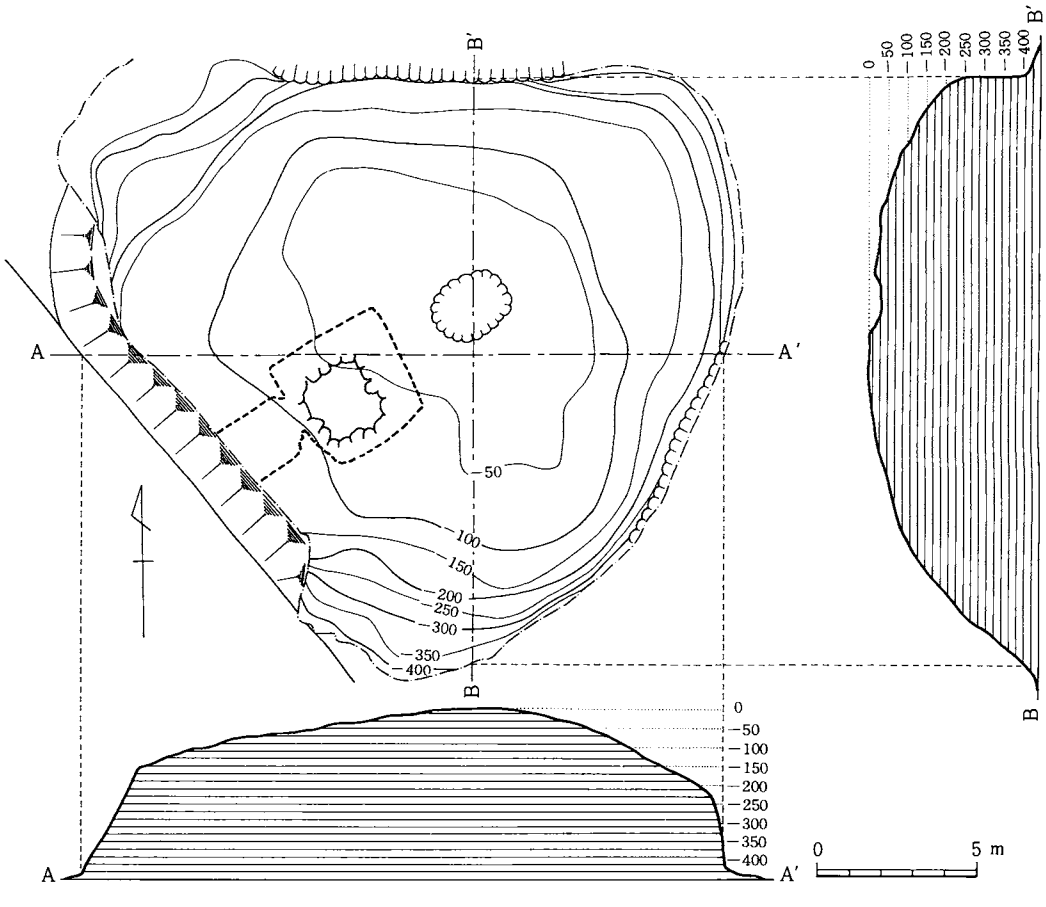


11の１図　山鹿盆地の装飾古墳位置図（山鹿2.5万分の１）
1 臼塚　2 チブサン　3 オブサン　4 馬塚　5 弁慶ガ穴

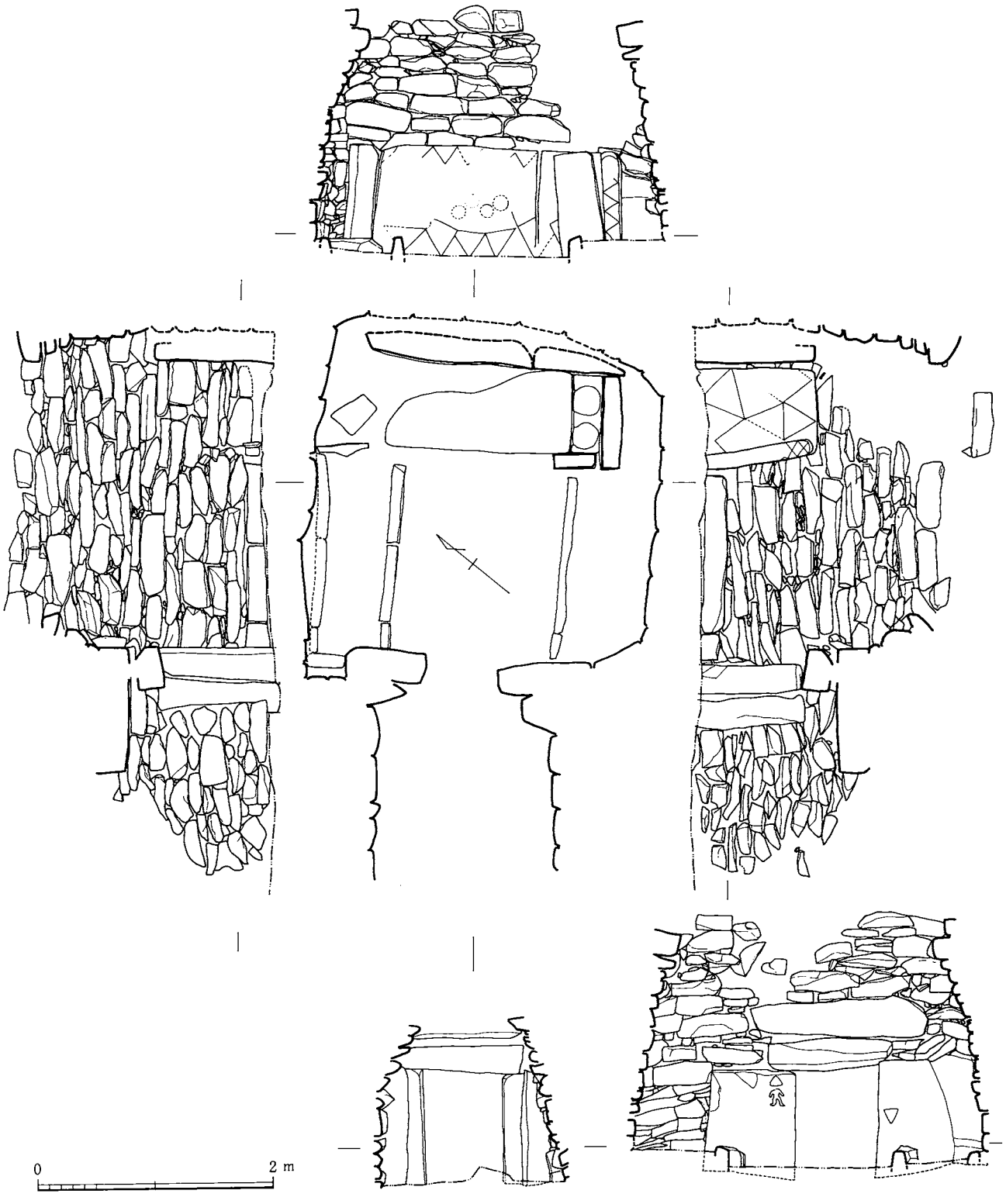
立　地　山鹿市役所の北西約1800ｍ，岩野川によって形成された洪涵地面上の比高約2.5ｍの小丘阜上に臼塚が立地する。洪水時にはこの小丘阜は湖上の小島の観を呈する。

墳　丘　円墳。周辺からしだいに削り取られ、現在の封土は高さ4.5ｍ，直径は南北22.2ｍ，東西21.4ｍ。比較的原形を保っていると思われる封土東側部分の円弧をもとに原墳形を復元すると封土の基底部の直径28.6ｍとなる。現存する石室側からドーム状の石室天井を推定し，その上に当地方の通例に従って約１ｍの盛り土があったものとすれば墳丘のもとの高さは７ｍほどあったものと考えられる。埴輪あり、周濠の有無は未調査。

墓　室　南西に開口する横穴式石室で羨道・前室・後室からなっていたと思われるが，明治年間の県道開さくのとき羨道と前室の大部分を切り取られ、その切断面は石垣でふさがれている。後室の床面形は奥壁ぞい（南北する）のと長さ2.95ｍ，東西の長さ2.55ｍ，南東角と南西角と隅丸となり，形はややいびつである。わずかに間口が長いが本来は正方形の床面を意図したものであろう。奥壁ぞいに板石で組み立てた石屋形がある。北側壁を失なっているので正確には分らないが底面の広さは縦1.89ｍ，横0.72ｍ，高さ1.06ｍである。石屋形内にあったと思われる石枕には頭を受ける大小の凹みが二つある。石屋形は屋根を失なってい



11の２図　臼塚古墳墳丘測量図

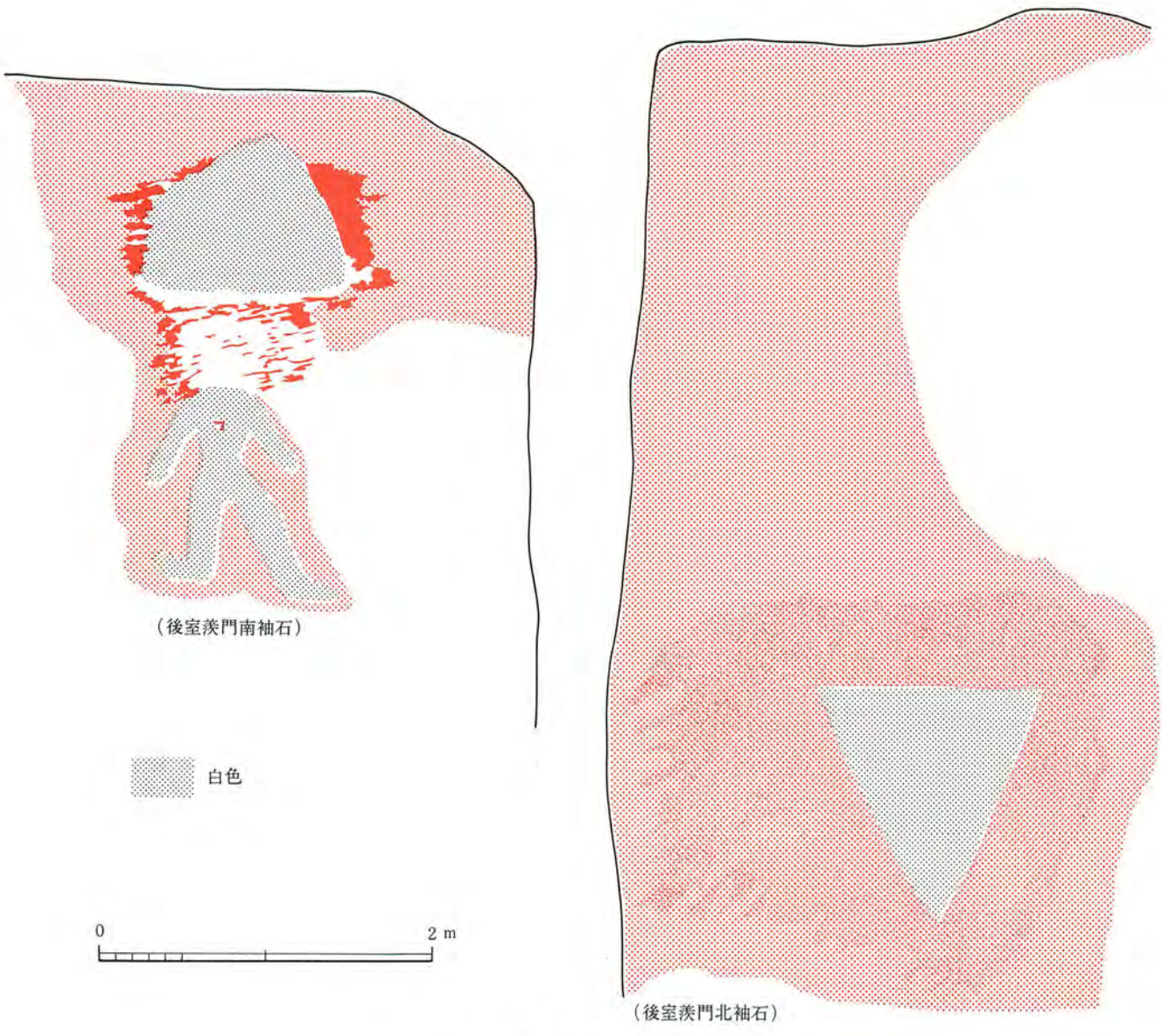


11の3図　臼塚古墳石室実測図

るが，近接するチブサン古墳の場合と同じ形式のものであったと思われる。石室側壁は床面から約1.5ｍの高さまでは，ほぼ垂直に割石で小口積みにつみあげ，それから上は割石を順次持ち送りにつみ四壁から天井部にせまったところで大きな平石をもってふさいだと思われるが、天井部分は盗掘によって失なわれている。奥室の羨門は高さ0.9ｍと0.92ｍの両袖石ををたて，その上に長さ1.8ｍの眉石をかけわたしている。前室の現存部分は1.6×1.52ｍの床面をもつが，形はいびつである。使用された石材は、すべて当地方で産する凝灰岩である。

装　飾　装飾文様は後室羨門両袖石内壁と石屋形に施されている。

羨門の南側袖石には，丹塗の面に白色で両腕をひろげ足を踏んばった人物像，その上方に白の三角文がある。北側



11の4図　臼塚古墳装飾文実測図(1)

袖石には丹塗の面に白色で両腕をひろげ足を踏んばった人物像，その上方に白の三角文がある。北側裸石には丹塗の面に大きく三角文がある。石屋形の奥壁内面に三角形を2段に連ねた文様帯をめぐらしている。下端より約0.32mのところに2段の横線をひき，その横巾を約0.22mに区切って一つおきに斜線を引き三角形の連続文，その上方円文，それを白・丹・青で塗りわけている。石屋形南壁内面とその小口にも連続三角文がある。浅い，かすかな陰刻で下書きをして，それに塗採するという方法をとっている。

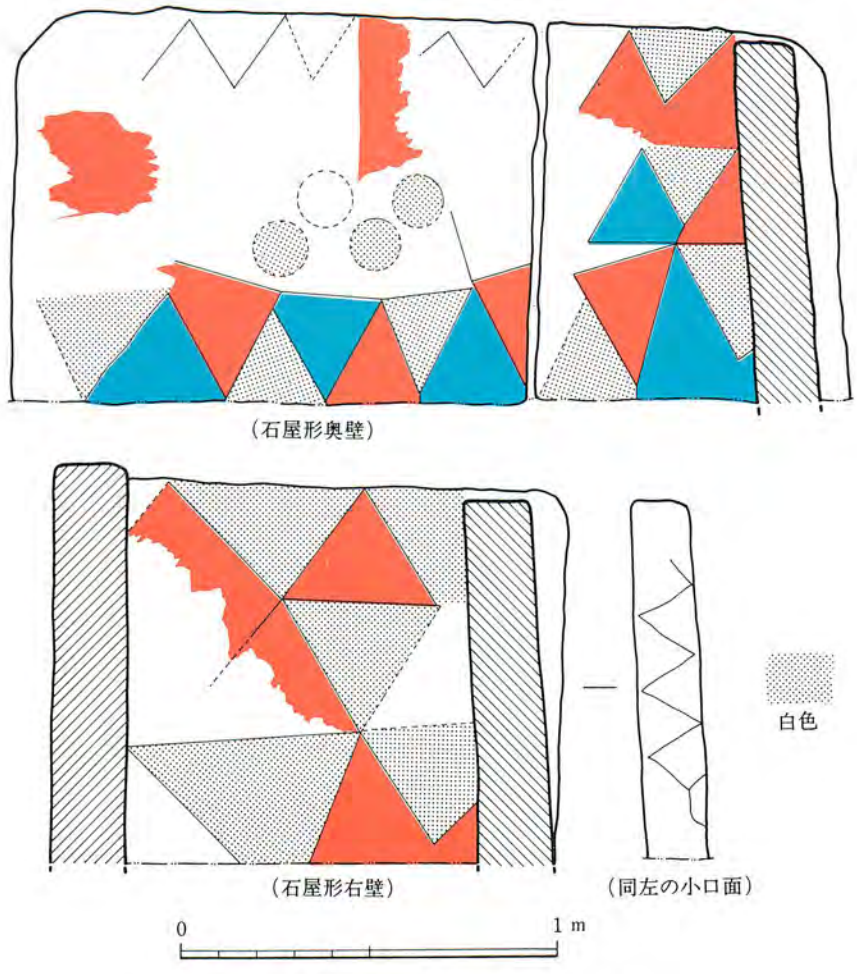
石　人　鹿本郡誌に臼塚に関する記録がある。

「八幡村石村製絲場の向にあり。前者と同じく貴人の墳墓ならん。埴輪の破片周囲に散乱せるあり。中央に南面したる一大石人ありしが明治三七年春，鹿本中学校生徒中島秀雄氏（大阪毎日記者）に発見報告せられ，現在同校に保管せらる。其後チブサンの石人・菊池郡花房の石人・熊本市池田の石人等を発見せるが，その端緒は全くこの石人にありしなり　東西九間　南北七間　高さ四間」とあるが，文中の石人は現在熊本県立美術館に保管されている。

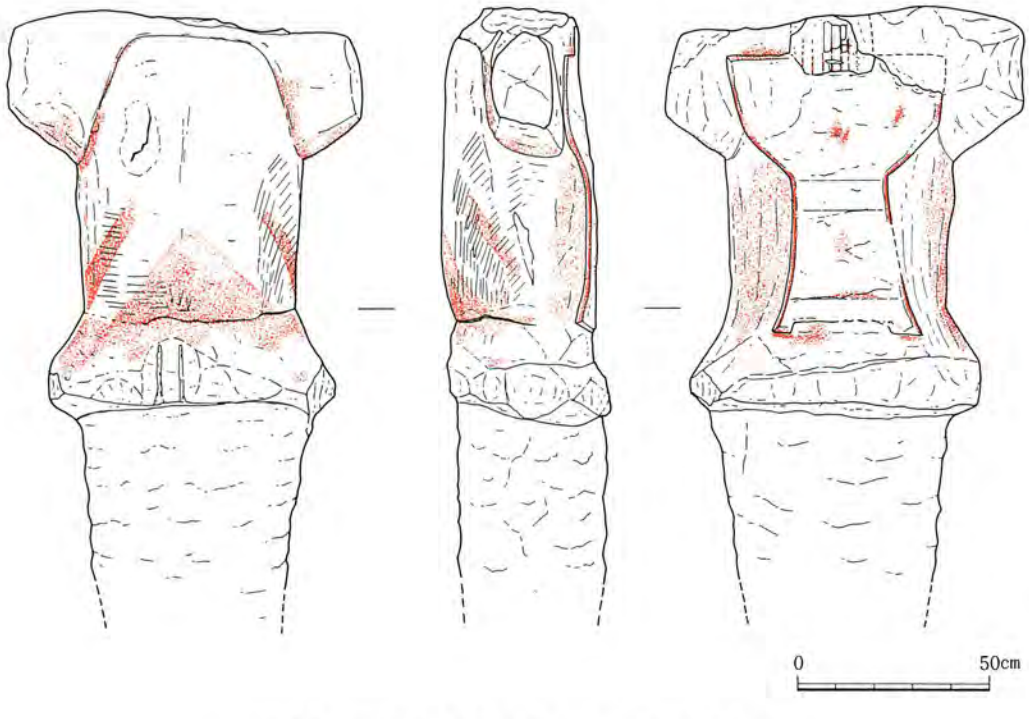
凝灰岩で作られ首を失ってヤッコダコ型を呈している。高さ約150cm，前面の肩幅91cm，胸囲161cm，腰部のまわり240cm，脚部の前面の幅61cm，脚部の周囲159cmを測る。福岡県八女市岩戸山古墳発見の石人と同じく背に靫を負い，胸に短甲を着し，明らかに武装した姿をあらわしている。短甲の前面には丹で三角文を描き，短甲と靫の縁なども丹が塗られている。

出土遺物　墳丘に円筒・朝顔形・形象（人物）の埴輪があった。徹底的な盗掘を受けていたが，山鹿高校（原口長之）が調査したとき，鉄鏃・刀子・鉇・雲珠・水晶勾玉・その他玉類多数・鉸具・須恵器多数・その他不明鉄片などが出土した。なお，後室内通路両脇の屍床には平石の割石を並べてはった上にアサリ・カキ・シオフキの貝類を敷いてあった。

備　考　昭和31年（1956）原口長之・山鹿高等学校考古学部調査。　（原口長之）



11の 5 図　臼塚古墳装飾文実測図(2)



11の 6 図　臼塚古墳石人実測図（原図　本田博久）

〔参考文献〕
①原口長之『臼塚古墳調査報告』熊本県立山鹿高等学校考古学部　昭和31年（1956）

12．チブサン古墳〔大正11年国史跡〕

（⇨11の１図，12の１～６図）

——山鹿市城西福寺——

12の１図　チブサン古墳・オブサン古墳周辺測量図

12の2図　チブサン古墳墳丘測量図

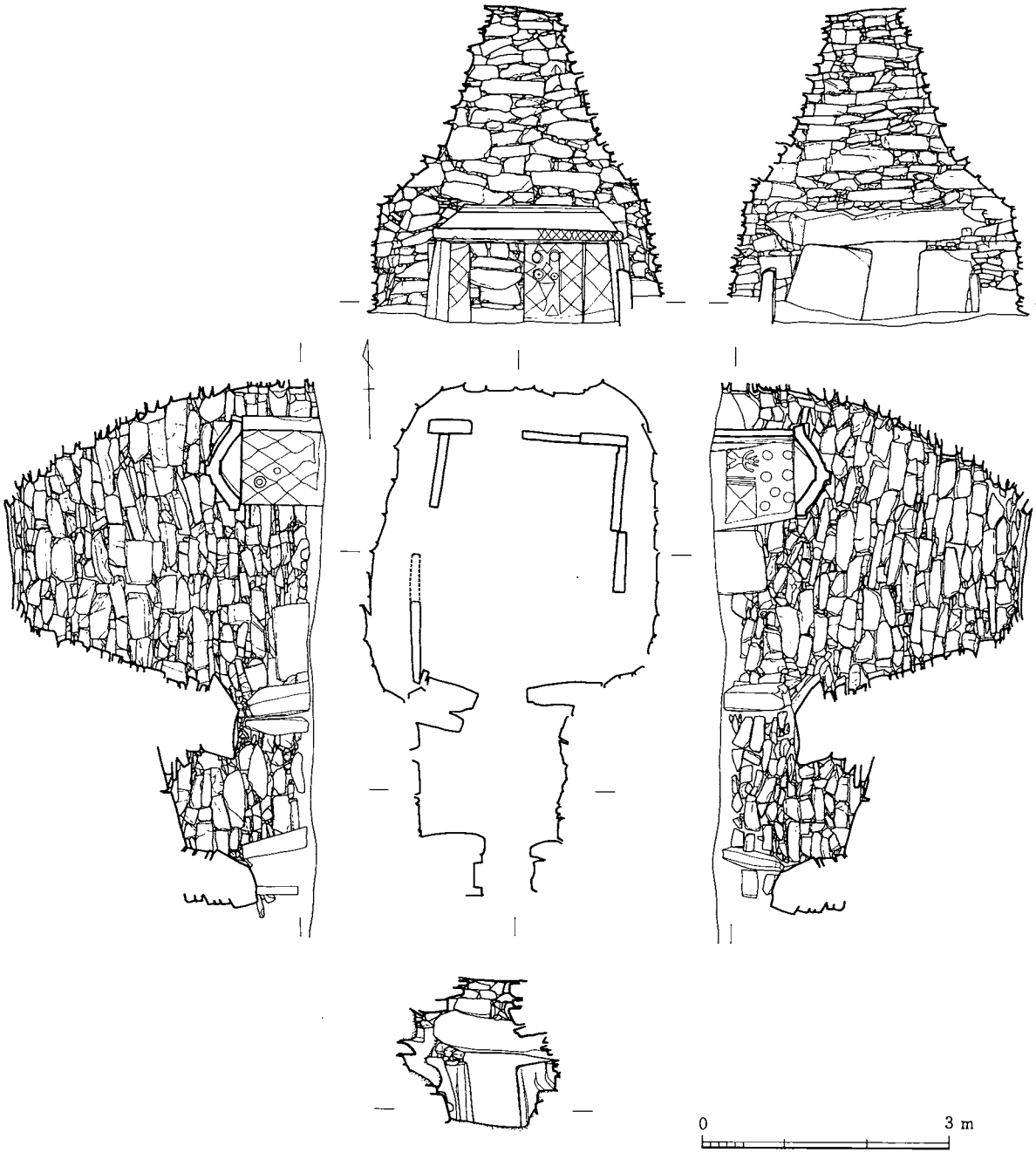
立　地　山鹿温泉の西北約2.4㎞，平小城台地の東端，北から南へ緩傾斜するところにある。そこから20ｍほど東へ行くと菊池川の支流，岩野川の氾濫原である。

墳　丘　主軸をほぼ東西（北84度東）にとる前方後円墳で，主軸の長さ44ｍ，後円部の径23ｍ，高さ７ｍ，前方部前端の幅16.5ｍ，高さ６ｍ，段がなく，埴輪・葺石をもち，墳丘北側には幅約11ｍの濠の遺構があった。古墳の立地する場所が北から南に緩傾斜する傾斜面にあるため，墳丘の北側には濠があるが南側つまり古墳石室羨門の方に濠があったものかどうか不明である。羨門の高さからみると，はじめからなかったのかも知れない。

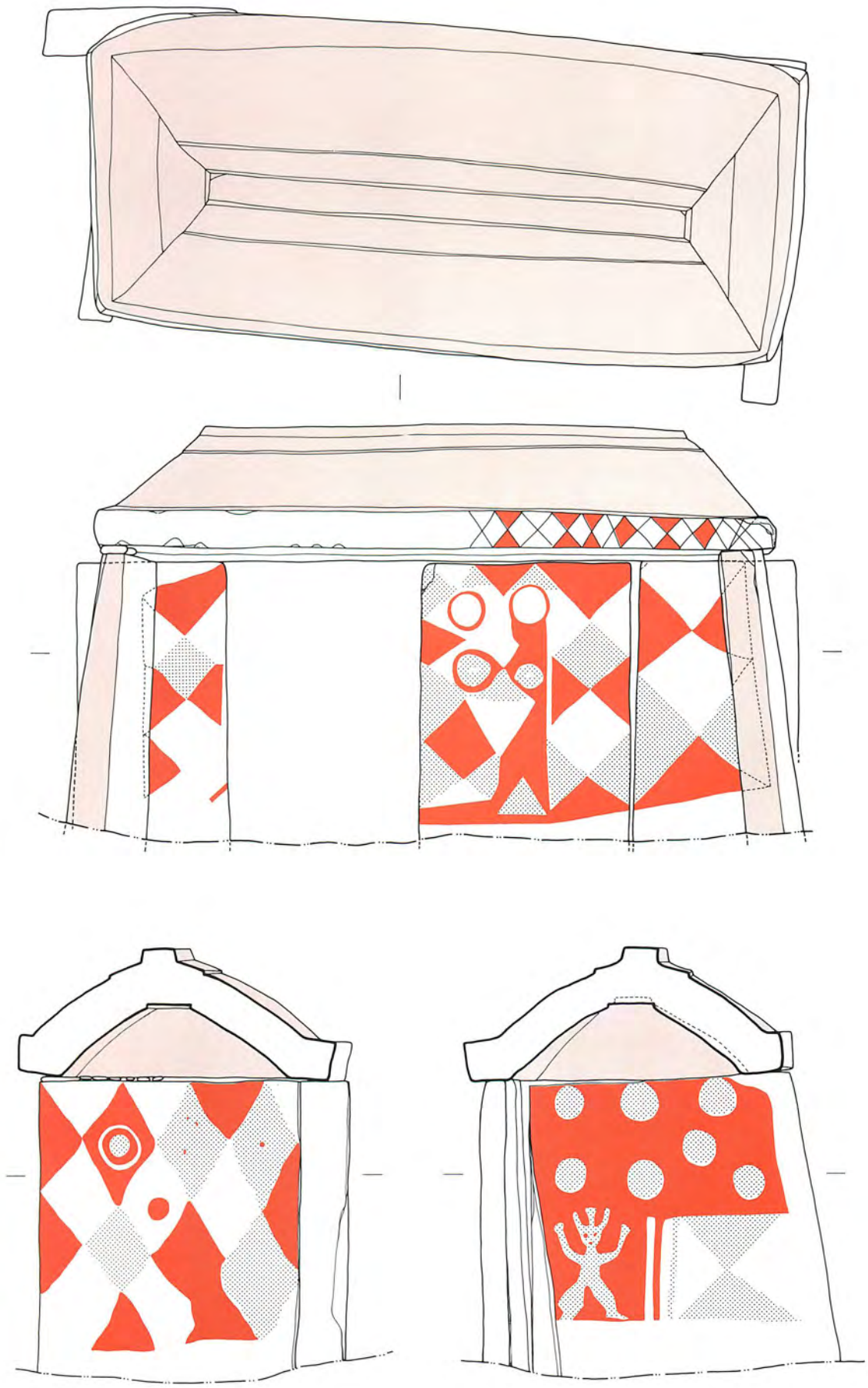
墓　室　後円部中央に横穴式石室があり，南20度西に開口する。石室は羨道・前室・後室からなるが羨道はほとんど失われ，昭和28年（1953）の原口長之のメモによると，墳丘底より１ｍほどあがったところに切妻造りの屋根をもつ木扉があって，そこから内部に入ると約１ｍで前室羨門があった。現在はコンクリートの地下道式の長い通路となっているが，これは昭和47年（1972）からの山鹿市教委の保護施設によるものである。

羨門から奥壁まで約６ｍ。前室の床面は一辺が約1.9ｍの方形に近く，後室は間口・奥行・高さとも各3.6ｍ，床面形は隅丸である。側壁は凝灰岩の割石を小口積にし、積むに従ってしだいに内側に積み出して丸天井をつくり，天井部に大きな石をかぶせて押えている。

後室の奥壁ぞいに長さ2.3m，奥行0.9m，高さ1.45m，寄棟造りの精巧な屋根をもつ家形石棺が据えられ，その内



12の３図　チブサン古墳石室実測図



12の4図　チブサン古墳後室家形石棺実測図

壁に彩色の装飾文様がある。石棺の前面，通路の両側に各１面ずつの屍床があったらしく石障の一部がのこっている。

装　飾　装飾文様は石棺内壁に主として施されている。すなわち左側石には菱形の連続文様に円文を配し，赤・白・青の三色で塗り分けている。正面左端の壁面には菱形連続文。正面は，もと４枚の板石で構成したものが，いま１枚を失っている。その右側の２枚には菱形連続文と同心円を赤・白・青で描いている。中央に描いた２つの菱形と同心円の配合は偶然とはいえ，独得の図柄のように見え，昔からこの附近の者は，これを女性の乳房にたとえ，乳の神様としての信仰のもとになっている。右側石は全面を赤く塗り，上段に白い円文８個を配し，下段には冠をかぶり，両手をひろげ，両足をふまえて立つ人物像を白色で描いている。両側石の前面小口に連続三角文の線刻があり塗り分けているようであるが確認されていない。

石　人　墳丘の後円部と前方部のつなぎ目，くびれ部の上に石人が立っていたが今は東京国立博物館に収蔵されている。石人は凝灰岩の板石でヤッコダコ形の胴部の上方に顔面を造り出し，円筒状の脚部をつけた身長約1.5ｍの男性石人である。

出土遺物　開口が古く遺物の伝わるものはない。

年　代　６世紀

備　考　古くから乳の神様として信仰があり，甘酒を供えて礼参りすることが今も続いている。　（原口長之）

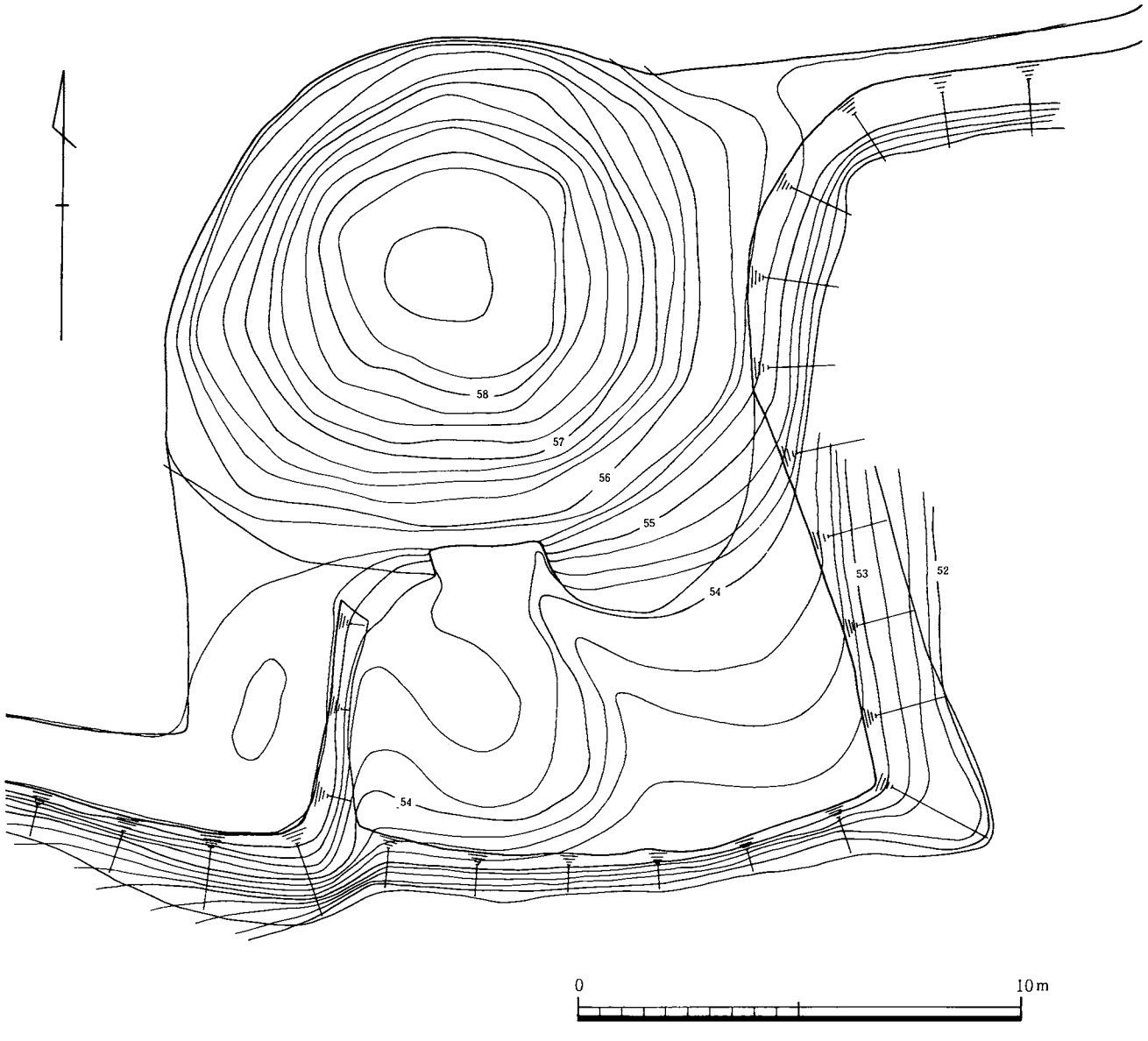
12の５図　チブサン古墳石人（乙益重隆撮影）

〔参考文献〕

①下林繁夫「チブサン古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第４冊』熊本県　昭和２年（1927）
②原口長之「チブサン古墳」斉藤忠編『日本原始美術５（古墳壁画）』Ｐ178　講談社　昭和40年（1965）
③乙益重隆「チブサン古墳」小林行雄編・藤本四八撮影『装飾古墳』Ｐ81　平凡社　昭和39年（1964）
④斉藤忠『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1973）
⑤原口長之「チブサン古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』Ｐ94－97　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑥森貞次郎『装飾古墳』朝日新聞社　昭和47年（1972）
⑦乙益重隆編『古代史発掘８（装飾古墳と文様）』講談社　昭和49年（1974）
⑧原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
⑨原口長之編著『山鹿の文化財』山鹿市教育委員会　昭和50年（1975）

12の６図
チブサン古墳後室の家形石棺
（白石巌撮影）

13．オブサン古墳〔昭和59年県史跡〕（⇨12の1・2図，13の1・2図）　——山鹿市城西福寺——



13の1図　オブサン古墳墳丘測量図

立　地　平小城台地の東端が岩野川の氾乱原に急崖をもってせまるところ標高60mにチブサン古墳があり，その西北方約 350mにオブサン古墳がある。

墳　丘　円墳。墳丘は西南から北東にやや長い楕円形をしており，基底部の長径約13m，短径約14m，高さ約4mを測るが，本来は径約30mあったと考えられる。

墓　室　阿蘇熔岩の巨石をもって構築した横穴式石室で，南に開口する。石室は羨道・前室・後室よりなり奥行の全長8.2m。側壁は羨道・前室・後室とも巨大な板石を立てて腰石とし，その上部に大きな割り石を積み天井石をのせている。後室は奥行約 2.8m，間口約 2.6m。東側壁の板石がゆがんでいるので三味線の胴形に見える。奥壁には石屋形の痕跡がある。前室は奥行約2m，間口約 2.3m。床面形は非常にいびつになっている。羨道は奥行約 2.5m，間口約 2.4m。前室・羨道ともに腰石として立てた板石の長さの足りない部分に割り石をつめて補ってある。床面には平たい自然石を敷きつめている。

装　飾　奥壁正面の板石の中央上部よりと第二羨門右側面に浅い線があるが意味は不明である。また，後室左屍床の障石外側に連続三角文の丹塗りがある。

出土遺物　須恵器（高坏，坏，大甕片），馬具（金銅製杏葉1，轡1，飾り金具，尾鉈など），金環2，鉄鏃その他。

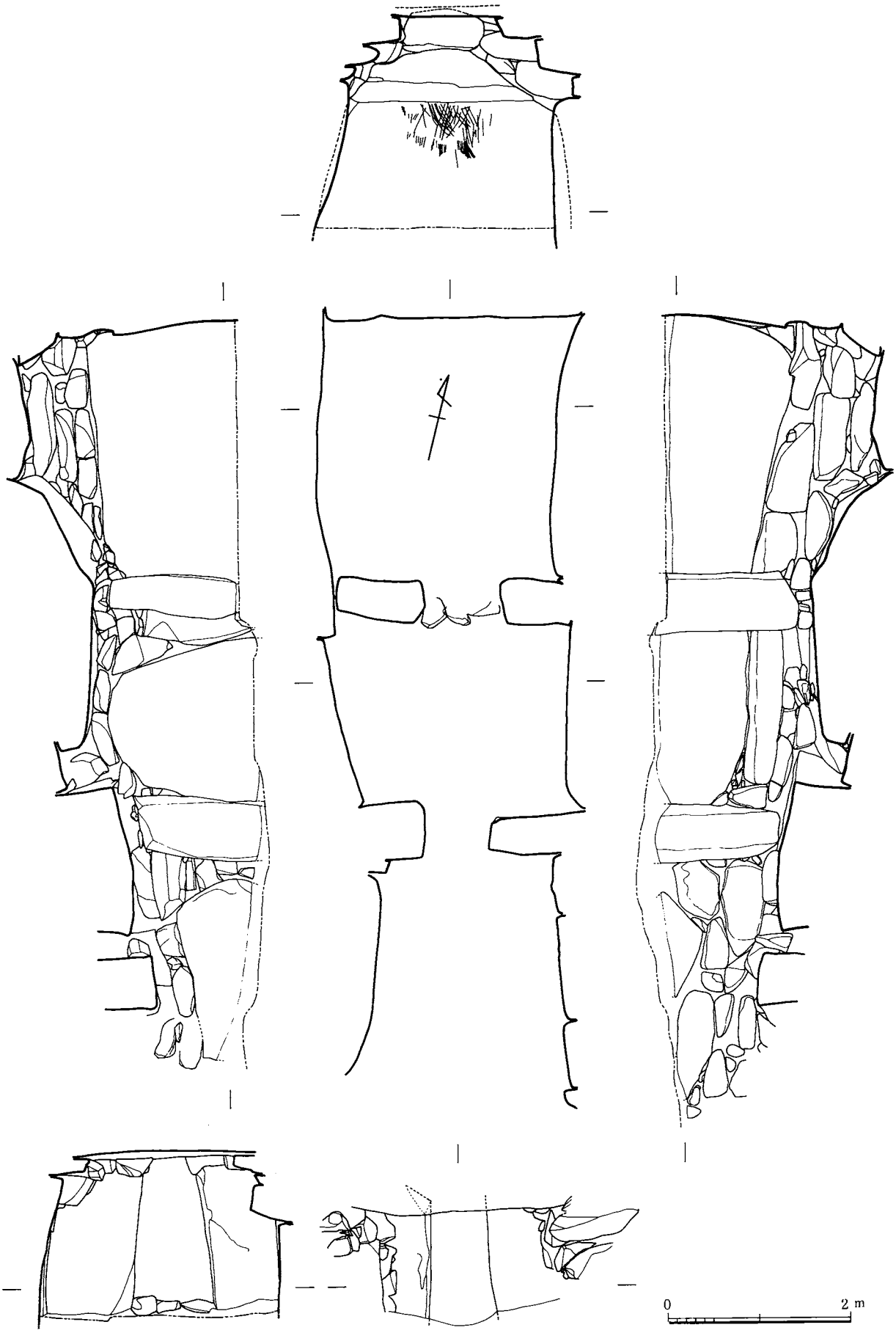
年　代　6世紀

備　考　昭和49年上妻信寛・鹿本高校考古学部実測調査。

（原口長之）

〔参考文献〕

①原口長之『山鹿の文化財』山鹿市立博物館　昭和56年（1981）熊本



13の2図　オブサン古墳石室実測図

14. 馬塚古墳 〔昭和48年県史跡〕

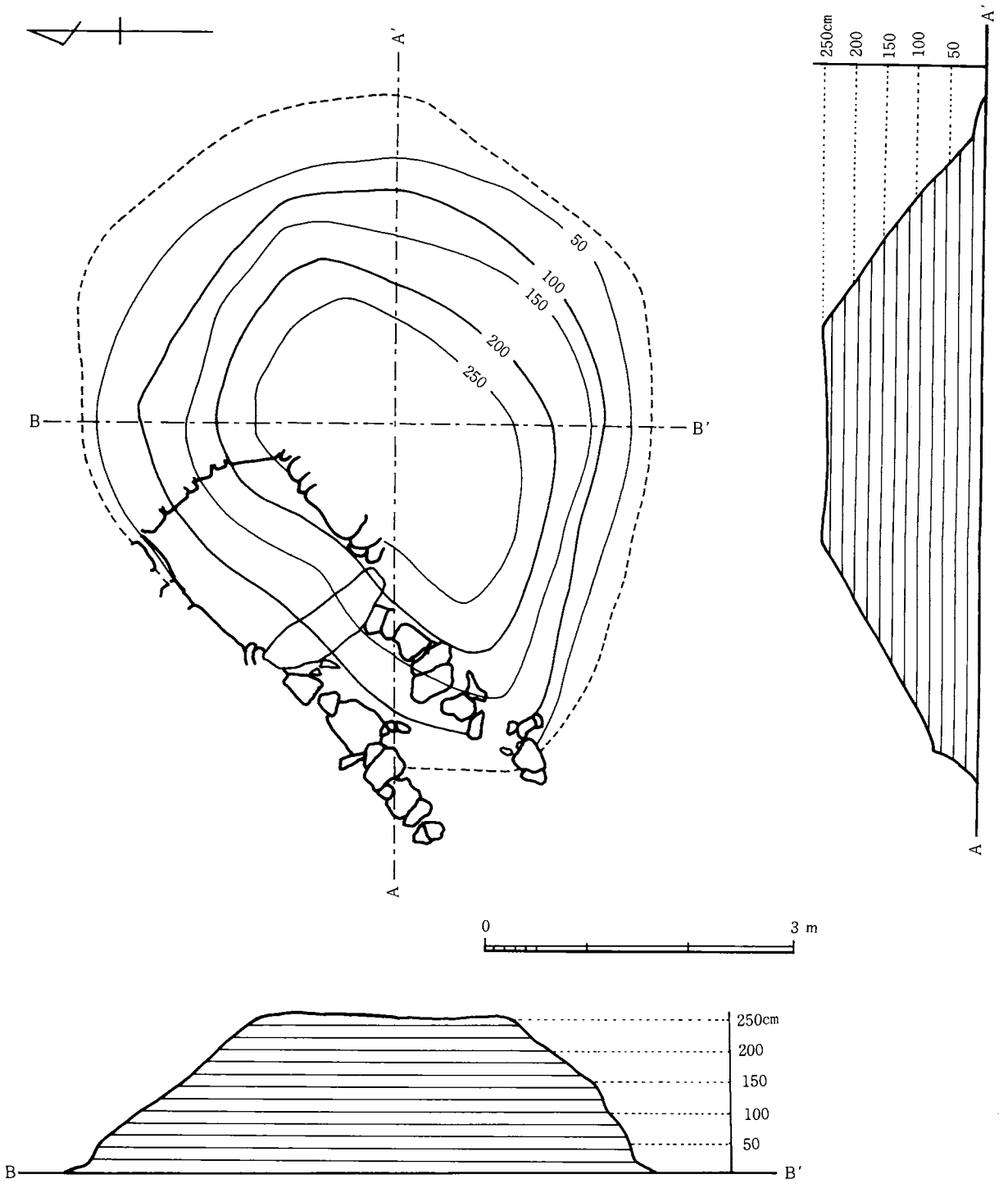
(⇨11の1図，14の1～4図)

——山鹿市鬼天神1328——

立　地　山鹿市の北西方，平小城台地の東南端（標高40m）は阿蘇熔岩の断崖となり，その脚部に岩野川が流れているが，断崖に近いところに馬塚古墳がある。

墳　丘　円墳。今は山鹿市教育委員会によって復元されているが，昭和29年（1954）調査当時は封土は周辺から削り取られ西半分は失なわれ，石室の西側壁が露出していた。残存部分から復元して基底部分の直径約25～30m，高さ4mあったと推定される。ハニワはない。周濠の有無は未調査。

墓　室　南西に開口し，羨道・前室・後室を有する横穴式石室である。使用の石材はすべて当地方に産する凝灰岩である。後室床面形は形がいびつになっているので寸法の表現が難しいが，だいたいにおいて，間口3.2m，奥行3.4m，東の角が隅丸となっている。正方形を基本形としたもので



14の1図　馬塚古墳墳丘測量図

ある。東壁と西壁は表面を削平した厚い長方形の巨石をたて，その周囲から北壁にわたっては不規則な板状の割り石を小口積みで内側に持ち送りにし縮約したところで天井石でおさえていたものである。ただし調査時には石室上部は失なわれていた。徹底的に荒らされていたが，本来は奥壁ぞいに家形石棺がおかれ，その前面の通路をはさんで両脇に一基ずつ屍床があったことが確認された。床面は台地の自然土層の赤土を叩き固めたもので，現状では敷石，礫土，粘土床等の特殊工作のあとは認められなかった。前室は間口2.8m，奥行1.5m，床面形は長方形に近いが非常に歪んでいる。両壁とも板状石の小口積みで手法は粗雑である。石材はすべて当地方に産出する凝灰岩である。奥壁から羨道前端まで全長7.11m。

装　飾　内壁全面に丹彩を施し，入口の第2羨門両袖石外壁に赤・青・白色をもってモザイク状に三角形を組み合わせる。また後室の左側壁と左前壁には大きな三角文を，石屋形(家形石棺)軒先破片には連続三角文を線刻している。

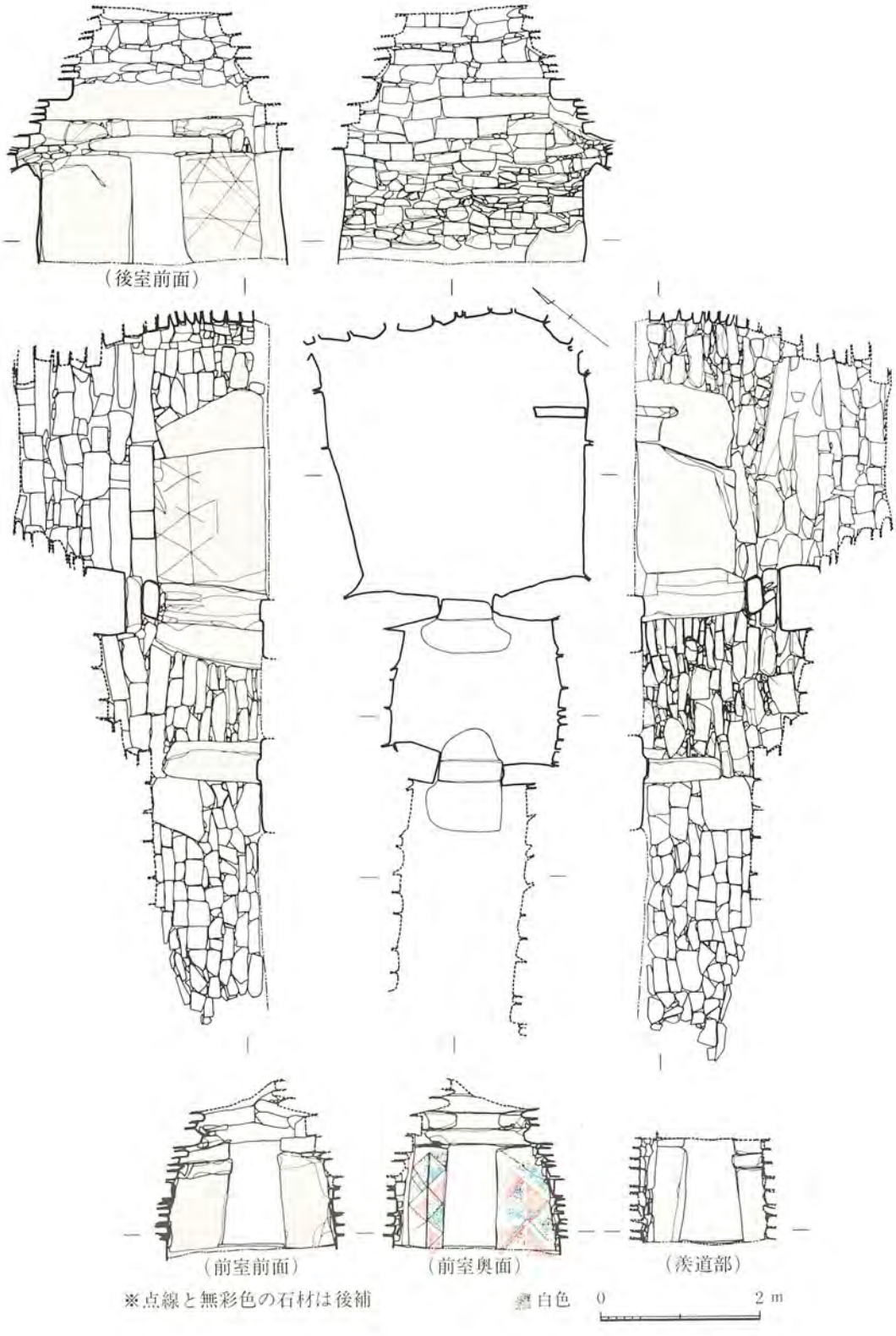
出土遺物　徹底的に荒されており金銅鍍金尾錠・鉄環（用途不明）・鉄鉾片・刀子・直刀片・平根および尖根式の鉄鏃・須恵器・土師系土器，弘治通宝・青磁・白磁片など。

年　代　6世紀

備　考　この古墳は馬の神様として信仰されていた。現在は山鹿市教育委員会で石室，墳丘も復元，保護施設も講じられている。昭和29年（1954）原口長之・山鹿高校考古学部調査。　（原口長之）

14の2図　馬塚古墳の旧状（白石巌撮影）

14の3図　馬塚古墳第二羨門部（白石巌撮影）



14の4図　馬塚古墳石室実測図

〔参考文献〕
①原口長之『熊本県山鹿市大字城馬塚古墳調査報告』熊本県立山鹿高等学校考古学部・山鹿市役所観光課　昭和30年（1955）
②原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
③原口長之「馬塚古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P102－103　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
④『熊本県の文化財』3（史跡）熊本県教育委員会　昭和56年（1981）
⑤原口長之編『山鹿の文化財』山鹿市立博物館　昭和56年（1981）

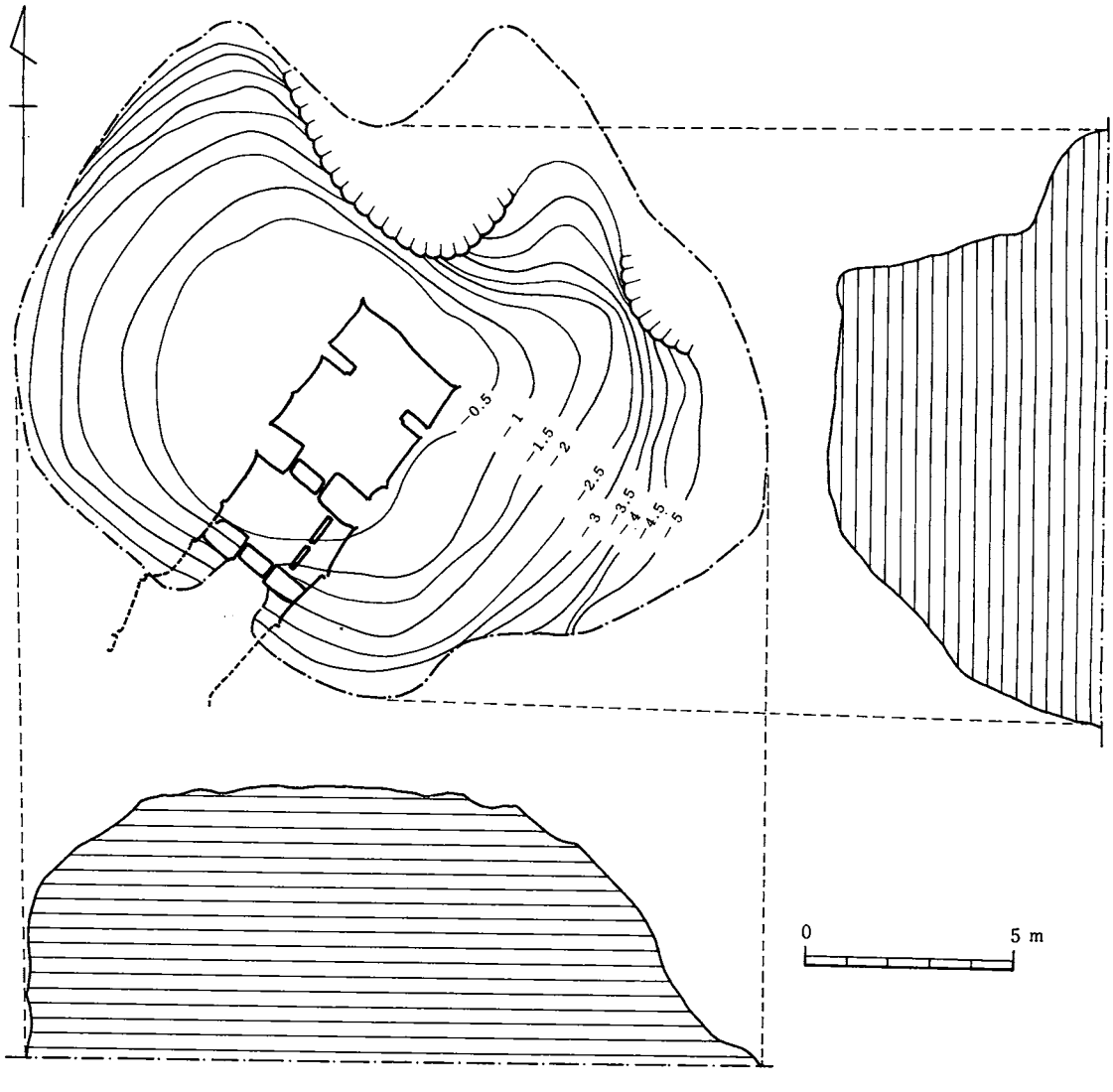
15．弁慶ガ穴古墳〔昭和31年国史跡〕（⇨11の1図，15の1～7図）　——山鹿市熊入1109——

立　地　鹿本北部の主峯，標高416ｍの震岳がゆるやかに南にのびて岩野川洪積地へ舌状に突出した熊入台地の西端山鹿温泉より北へ約1500ｍの標高40ｍの地点にある。

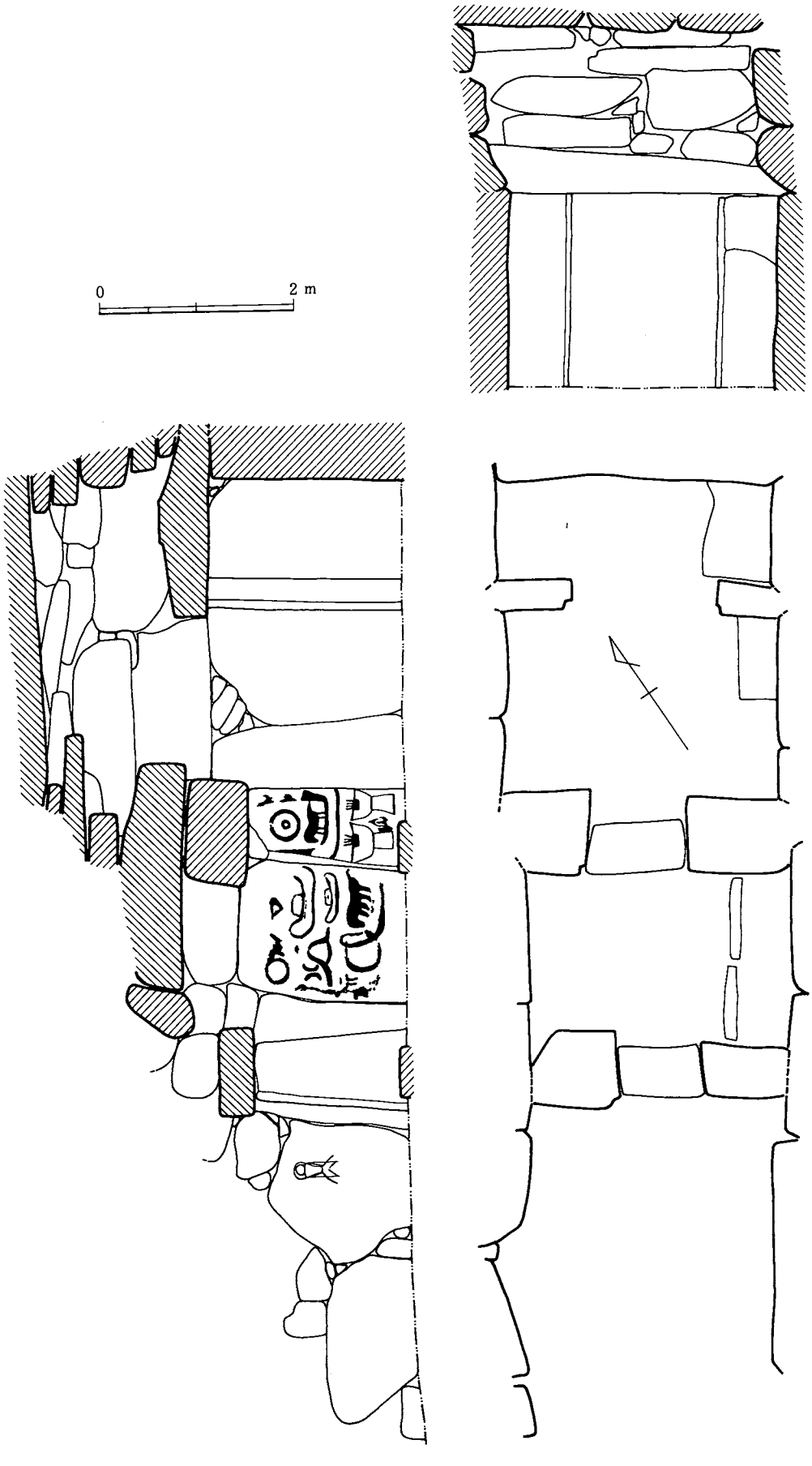
墳　丘　記録に「前方後円式ナルガ如シ」とあり，前方部の遺構かと思われる畦畔もあるが，近世以降墓地が営まれた結果，変更が著しく判定は困難で現状では円墳である。山鹿市教育委員会によって2度修復され，その後の計測値を得ていないが昭和31年の調査時には封土基底部の直径15ｍ，高さ5.7ｍあった。ハニワ・石人・葺石等はない。周濠の有無は未調査。

墓　室　南西に開口する横穴式石室で，石室は阿蘇熔岩の巨石をもって構築し，羨道・前室・後室の3部からなる。石室の奥壁から羨道の外端までの長さ9.8ｍ，羨道の幅約2.6ｍ，前室の幅2.6ｍ，後室の幅2.75ｍ。前・後室とも，床面は長方形を基本とする。前・後室とも側壁の下段には巨大な板石をたてならべ，その上部に塊石または切石を持ち送り式に，内側に向って3段に積みだし，その収約したところを巨大な天井石でふさいでいる。床面は周囲の現地表面より低い。前・後室とも羨道からの通路をはさんで両側に各2個の屍床があったらしい。さらに後室には，奥壁ぞいに屋根形の巨石を左右側に架けわたし，作りつけにした平入りの石屋形を組みたてている。

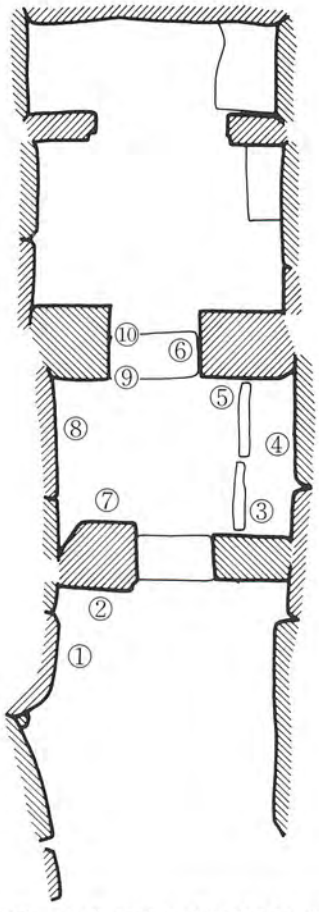
装　飾　もとは石室の側壁全面に壁画があったらしいが，昭和31年（1956）調査時には羨道と羨門と前室に10図残っているだけであった。その後，密閉して保護施設を講じた結果，石屋形両袖石の小口に丹彩の三角連続文が認められるようになった。羨道の左側壁にある人物像の浮彫を除けば，すべて彩画である。そのうちには，幾何学文様が2図，形象図像が7図ある。前者は同心円・菱形・三角形を主とするもので赤・白・青の3色を使用している。後者は赤と



15の1図　弁慶ガ穴古墳墳丘測量図



15の2図　弁慶ガ穴古墳石室実測図

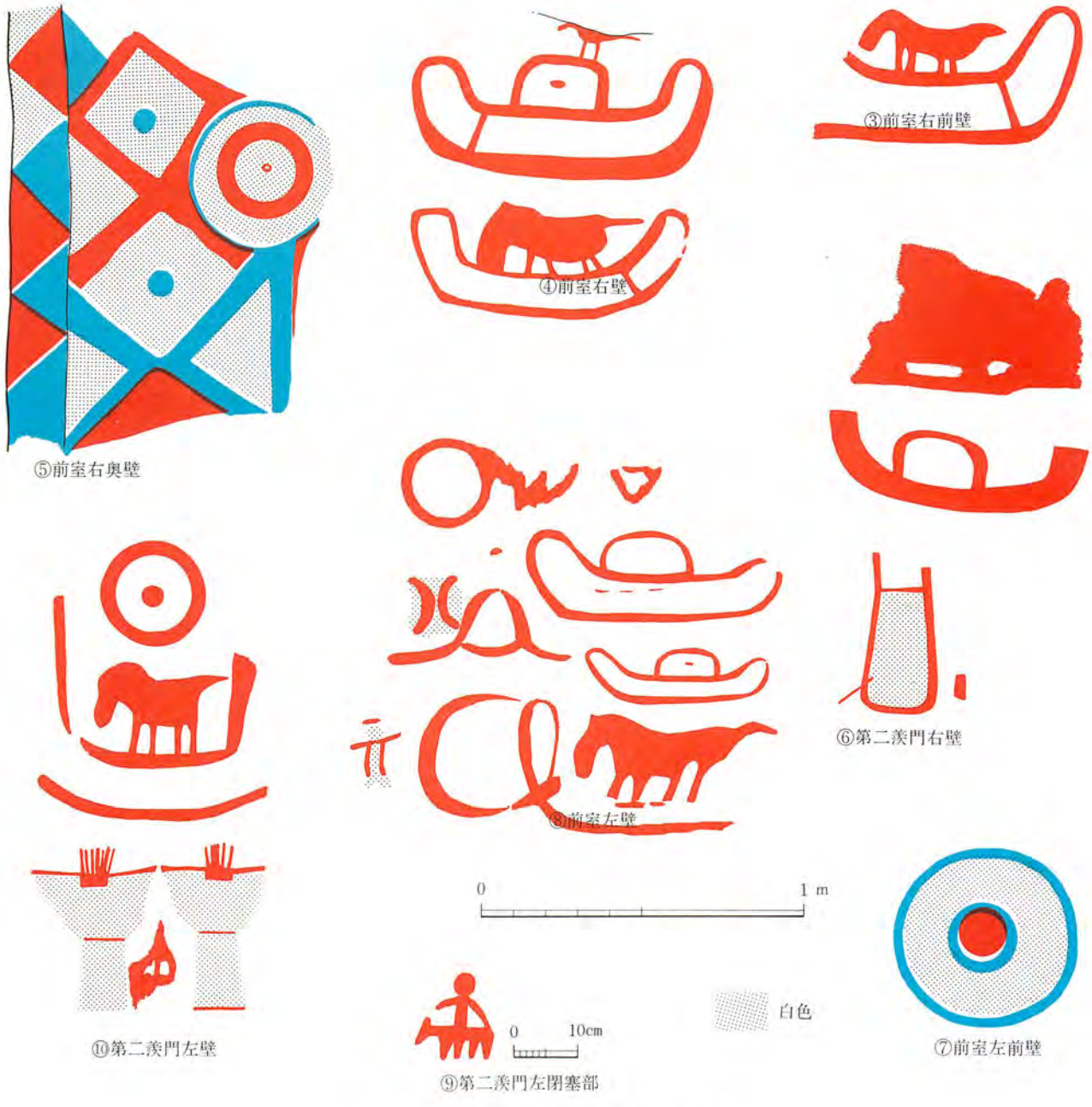


15の 3 図　弁慶ガ穴古墳装飾文位置図

15の 4 図　弁慶ガ穴古墳の人物浮彫（①羨道左壁，白石巌撮影）

15の 5 図　弁慶ガ穴古墳装飾文実測図(1)（②羨道左奥壁）

15の 6 図　弁慶ガ穴古墳の円文と舟に乗った馬
（⑩第二羨門左壁，白石巌撮影）



15の7図　弁慶ガ穴古墳装飾文実測図(2)

白で羨門袖石外壁には5頭の馬と人物立像および舟に乗った人物，前室内壁には馬を乗せた舟，鳥と積荷と舟および馬を乗せた舟，積荷と舟，同心円および馬を乗せた舟と2個の靱，盾らしきものの絵を，壁いっぱいに書いてある。馬は合計11頭，舟は11隻もあって馬と舟の絵の多いことが注意をひく。筆法は大胆雄渾で，しかもまとまりがある。

出土遺物　古くから開口していたので，遺物はほとんど失なわれているが，昭和31年（1956）山鹿高校考古学部が清掃実測した際，後室の石屋形の上から，乱雑な廃置で鉄鏃片25，鐔1，金環1，鉄地金銅張雲珠2，飾金具残欠5，鉤具2，鉄環片1，鉄片1を発見した。

年　代　6世紀後半

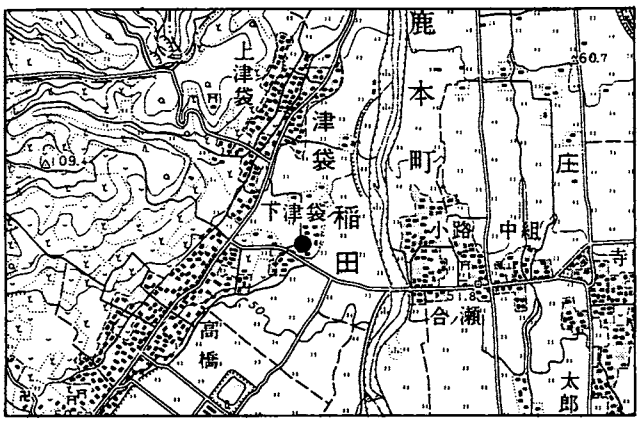
備　考　昭和31年（1956）調査。調査者原口長之・山鹿高校考古学部　　（原口長之）

〔参考文献〕

①原口長之『弁慶ガ穴古墳調査報告』熊本県立山鹿高等学校考古学部　昭和31年（1956）
②原口長之「装飾古墳弁慶ガ穴調査報告」『熊本史学』第11号　昭和32年（1957）
③原口長之「弁慶ガ穴古墳」小林行雄編・藤本四八撮影『装飾古墳』P82　平凡社　昭和39年（1964）
④乙益重隆「弁慶ガ穴古墳」斎藤忠編『日本原始美術5（古墳壁画）』P181　講談社　昭和40年（1965）
⑤森貞次郎『装飾古墳』朝日新聞社　昭和47年（1972）
⑥斎藤忠『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1973）
⑦乙益重隆編『古代史発掘8（装飾古墳と文様）』講談社　昭和49年（1974）
⑧原口長之編『山鹿の文化財』山鹿市　昭和50年（1975）
⑨原口長之「弁慶ガ穴古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P104－105　熊本日日新聞社　昭和51年(1976)

16．御霊塚古墳〔昭和52年県史跡〕（⇨16の１～６図）

——鹿本郡鹿本町津袋広江307——

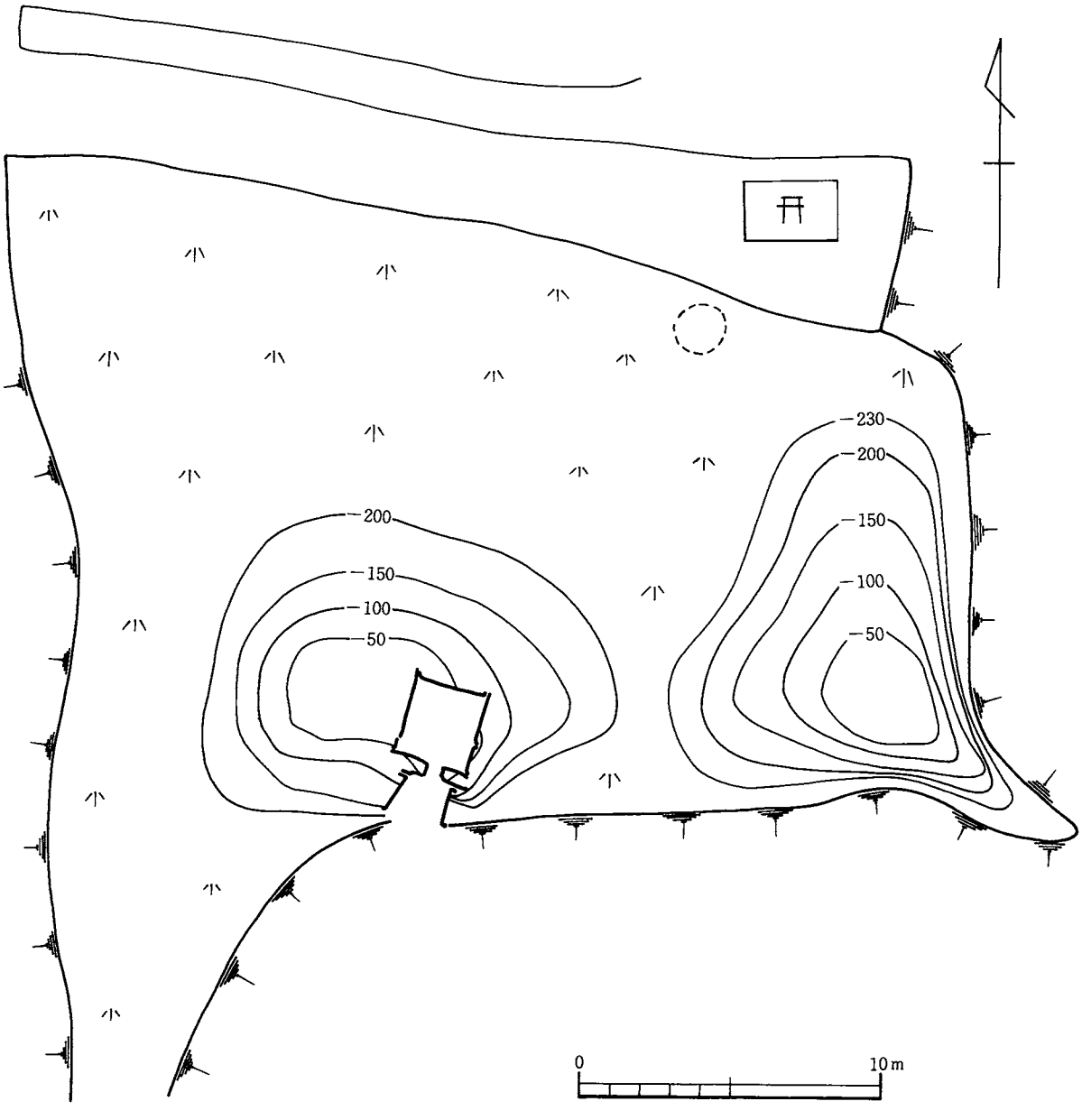


16の１図　御霊塚古墳位置図（来民2.5万分の１）

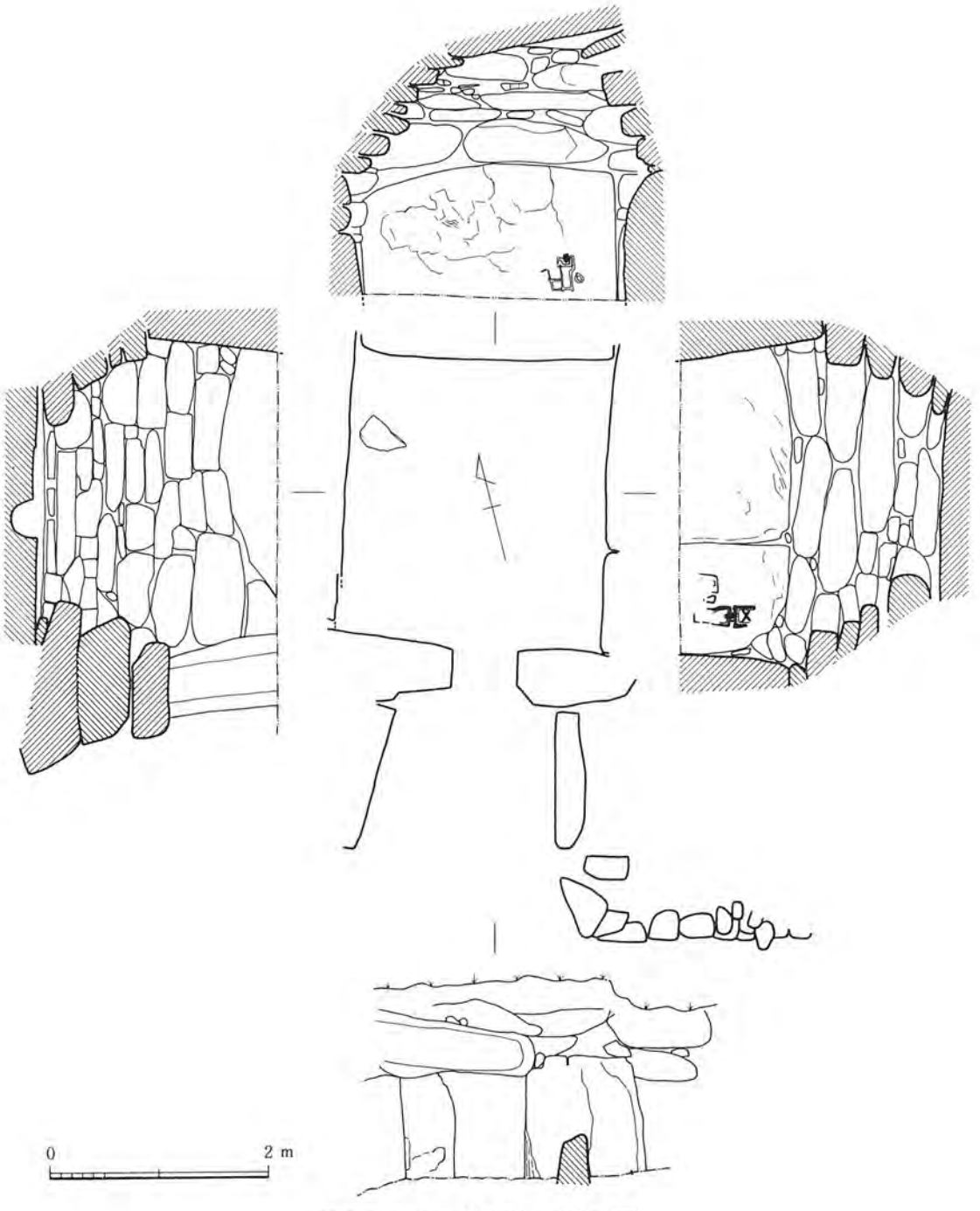
立　地　日の岡山の山麓が東に延びて内田川洪涵地にのぞむ段丘上に２基の円墳が東西に並んでいる。その西側のものが御霊塚古墳で高さ約3.5 m，基底部の直径約12m。墳丘全面に川石の葺石がある。

墓　室　南に開口する単室の横穴式石室で羨道は現状ではない。羨門を入ると直ちに石室である。石室は奥行2.15m間口 2.4 m，床面より天井までの高さは2.25m，床面形はほぼ正方形である。奥壁は１枚，東・西壁は各２枚の阿蘇熔岩の巨石を立て，その上に大きな石を内側に持ち送りせり出し，天井に巨石をおいてふさいでいる。

装　飾　築造当時は全面に丹彩があり装飾文様が描かれていたと思われるが，剝落してはっきりしない。昭和31年



16の２図　御霊塚古墳墳丘測量図



16の3図　御霊塚古墳石室実測図

(1956) 10月，山鹿高校考古学部で調査した当時は奥壁の右下に丹彩の地の上に白色で靫と鞆が明瞭にのこっていた。その後，富田紘一氏によって東壁にもX字状の文様や靫などが赤色と白色で描かれているのが発見された。

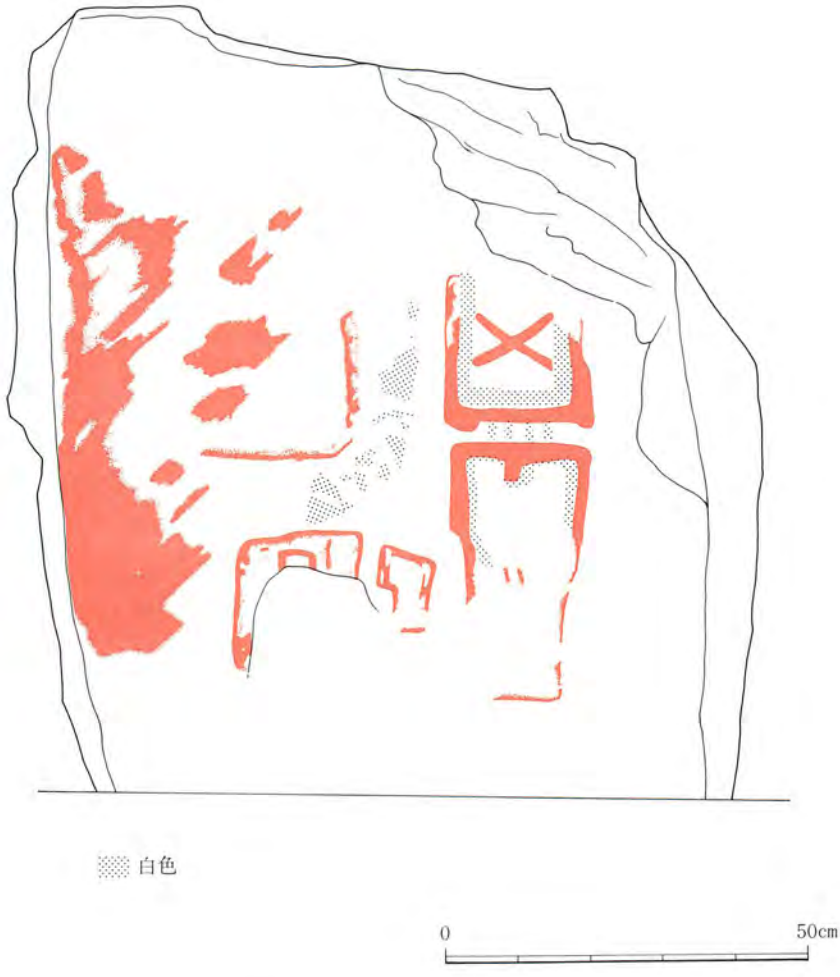
出土遺物　開口が古く今に伝わるものはない。

年　代　7世紀

備　考　調査者原口長之と山鹿高校考古学部。

伝承として肥後国誌に「御霊塚　林間ニ石窟アリ御霊塚ト云　口狭クシテ奥ハ九尺四方　大石ヲ畳テ築キ　上ノ大石ニ胄ノ鉢ノ形ニ穿チタル穴アリ　土俗伝ヘテ昔菊池家合戦ニ敗北シテ此窟ニ逃入リシ時着タル胄ニテ突穿チタル跡ト云，其口狭キ故家臣等這テ入給ヘト云シヨリ俗間這入給ヘト云コト起レリト云　不堪一笑　此塚穴ノ所以不分明」

16の4図　御霊塚古墳玄室奥壁の装飾文実測図



16の5図　御霊塚古墳玄室右壁の装飾文実測図

16の6図　御霊塚古墳外観（白石巌撮影）

とある。　　（原口長之）

〔参考文献〕

①原口長之「鹿本町の古代文化―御霊塚古墳を中心として」『かもと（鹿本町公民館報）第14号』鹿本町公民館　昭和31年（1956）12月15日
②『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
③桑原憲彰「御霊塚古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P106，107　熊本日日新聞社 昭和51年(1976)
④富田紘一「原始古代」『鹿本町史』鹿本町役場　昭和51年（1976）

17．持松塚原古墳〔昭和48年県史跡〕 (⇨17の１・２図) ——鹿本郡鹿央町持松1220番地——

立　地　菊鹿盆地の西南縁，菊池川支流の千田川の左岸台地，持松集落の西方約 400m のところに位置する。標高約 62.5m である。

墳　丘　昭和42年(1967)時点では，直径約20ｍ，高さ約４ｍの円墳であった。現在は11m×10m，高さ 4.7m の方形の墳丘となっている。

17の１図　持松塚原古墳と持松石棺群位置図（来民2.5万分の１）
1　持松塚原古墳　2　持松石棺群

主体部　阿蘇凝灰岩を使用したくり抜きの巨大な石棺で，主軸は東西方向である。試掘による一部調査のため全容は不明であるが，幅1.68m の棺蓋の切妻に巨大な突起を有し，棺身にも同様の突起が認められる。舟形石棺か家形石棺のいずれかである。

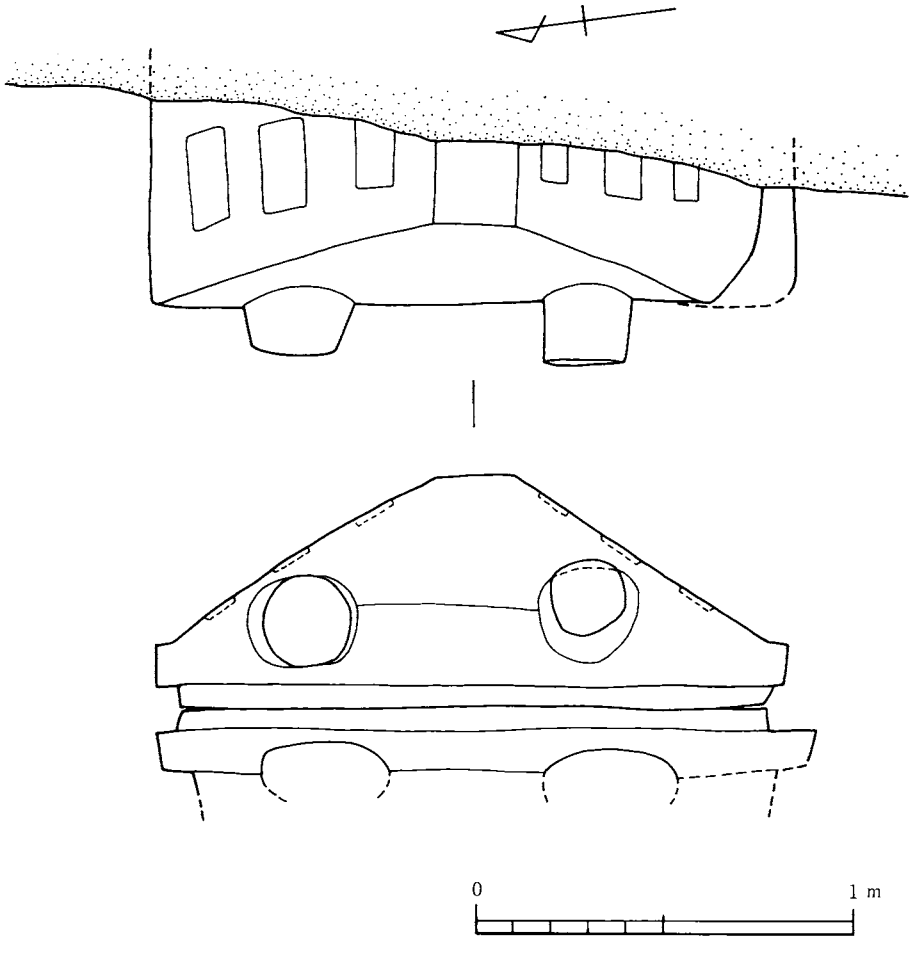
装　飾　棺蓋に長方形のスカシ状の表飾が認められる。

年　代　５世紀後半？

備　考　昭和42，43年(1967，1968)度構造改善事業持松圃場整備事業により，古墳周辺40*ha*について進行中，古墳の重要性を確認するため，昭和42年(1967)12月12日田辺哲夫，隈昭志が試掘調査した。その結果未掘の巨大な石棺が確認されたことにより，一部墳丘を削ることで保存が決まった。昭和48年（1973）８月27日県史跡指定。

この周辺からは，５基の石棺群がみつかり，調査されている。１～３号は原口長之，４～５号は隈昭志の調査である。（隈　昭志）

〔参考文献〕
①隈昭志「持松塚原古墳」，田辺哲夫編『熊本の上代遺跡』昭和55年（1980）熊本日日新聞社



17の２図　持松塚原古墳石棺実測図

18．持松（もちまつ）3号石棺（⇨17の1図，18の1図）

——鹿本郡鹿央町持松中屋敷——

立　地　菊鹿盆地はその南を岩原，千田，田底の3台地によって限られている。この石棺群が立地するのは千田台地上の集落，「持松」で標高は約60m。集落のほぼ中心に公民館の南側に1基(第1号)，西側に1基（第3号）の家形石棺が発見された。聞くところによると，公民館建設のさいにも石棺の出土があったというが，石棺や出土品は残っていない。

遺跡の概要　昭和34年5月，石棺出土地の所有者若杉至誠氏をはじめ区民総出で，農道補修のため地下げをやっていたところ第1号石棺を掘りあて，当時山鹿高校教諭であった原口長之へ連絡があり調査した。

第1号石棺（所在番地は1203）は家形石棺で長軸の方向はN56°E，棺身の上縁から20cm下がった棺身の四周に約85cmの幅をもって，赤褐色粘土質の地山を叩きかためて，その表面に凝灰岩の破片を約2cmの厚さに敷き並べてある。この層より上は黒色土である。

棺材は凝灰岩で，よく削平された4枚の板石を立てて長方形を作り，屋根形の棺蓋をかぶせる。棺底に底石はなく礫を粘土とともに叩きしめて底とし真赤な丹で染めた細砂を敷く。

棺内は古い時期に擾乱され，棺蓋も破壊されて棺内に落下していた。歯・鉄鏃6・剣身破片・刀子1・もり1・用途不明の鉄片2が採取されたが各遺物の配置状況はわからない。

第2号石棺は第1号石棺よりも北方に数100m離れた持松字塚原1560の1に所在の家形石棺である。記述を略する。

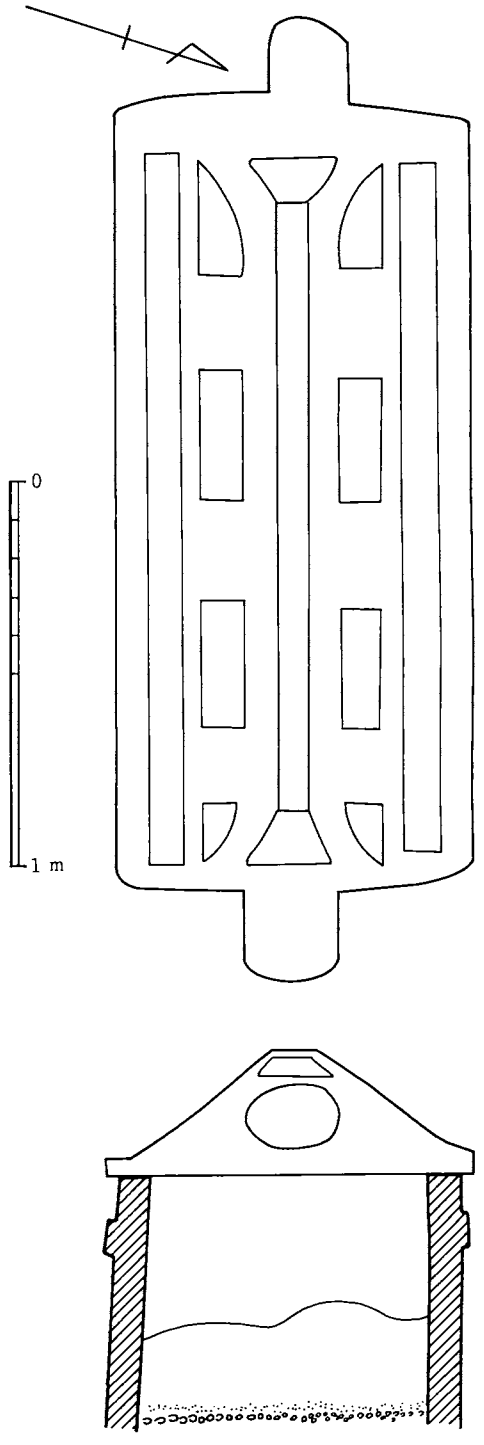
公民館の西側，(所在番地は1201)竹林中に第3号石棺の棺蓋が露出していた。家形石棺で長軸の方向はN72°E。戦時中防空壕構築のさい掘りあて，石棺の妻にあたる部分を破って横穴状とし，空襲警報のたびに隠れていたという。石棺発見のとき刀などが発見され，刀はのち売却したが，その他のものは，あとでまた棺内にかえした，ということであったので，棺内を調査したところ，鋤先1・鉄斧1・刀子1が発見された。直刀は2本あったという。

装　飾　装飾という表現が適切かどうか疑問であるが，第3号家形石棺の棺蓋は一般の家形石棺と異なる陽刻をもっている。

棺蓋の長さ250cm，幅94cm。棺蓋中央に長さ162cm，幅9cmの棟をとり，その両斜面中央部に32×10cmの長方形の長辺を棟と平行に2個ずつ陽刻し，その左右両端に刀尖状の陽刻をそえる。さらにその下方に長さ192cm，幅19cmの帯状の陽刻を棺身に平行に施す。陽刻の作り出しの厚みは約1cmである。これらの陽刻は棟を挟んで対称形をなし，均整がとれている。何を表現しようとしたのか明瞭でない。

出土遺物　前項に記したとおり鋤先1・鉄斧1・刀子1・直刀2である。

年　代　6世紀　　（原口長之）

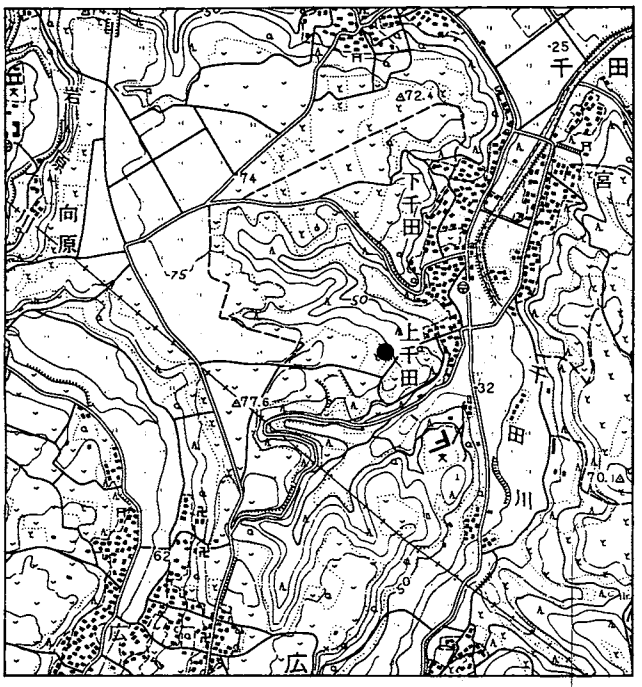


18 の1図　持松3号石棺実測図

〔参考文献〕
①原口長之『熊本県千田石棺群調査概報』　山鹿高校考古学部　昭和34年（1959）

19．浦大間（うらだいま）4号石棺（⇨19の1・2図）

——鹿本郡鹿央町千田浦大間——



19の1図　浦大間石棺群位置図（来民2.5万分の1）

立　地　菊鹿盆地の南縁を限る千田台地は千田川の低地を隔てて田底台地に接するが，千田川が盆地底に流出する左岸斜面に千田集落がある。

集落ののる傾斜面が台地面（標高72m）に続くところ，標高約60mのところに第1号～第5号の家形石棺がある。畑作地帯の周辺をなす原野状の疎林中である。

遺跡の概要　昭和32年3月，浦大間3770番地で土地所有者江藤富士男氏が雑木林の下草を採取中に石棺の棺蓋を発見し，原口長之（山鹿高校教諭）へ連絡があり調査した。石棺は5個分あり，調査の順序にしたがって1号～5号とした。

第1号石棺は凝灰岩製の舟形石棺で棺蓋全長236cm，幅73cm，棺蓋両側に幅約10cmの軒をもっている。棺蓋，棺身とも内部はくりぬきで棺身内部は箱形に近い。棺身の外側に舷をもち棺身の前後は垂直に切られている。棺身の四周に幅30cmの粘土質の赤土がかためられた状態でめぐっている。

第1号石棺の東27mに石棺の破片を塚のように積んであった。復元実測のためとりのぞいたところ，第2号石棺つづいて第3号石棺があった。第2号棺は家形石棺で長軸の方向はN8°W。墓坑として第1号のような棺外の施設は認められなかった。棺は凝灰岩製で棺蓋両端に繩掛突起をもつ。棺蓋の長さ226cm，幅66cm。棟に平坦部がなく，両側に幅8cmほどの軒をもっている。棺蓋の東北隅に穴があり，その穴にはめこみ式の石の栓があって，穴をふさいでいる。棺身はよく削平された4枚の板石を立てて長方形の箱形をつくる。底石はなく礫を粘土でかためて細砂をしく。棺内に多量の丹を使用したものとみえて細砂は赤く染まっている。棺蓋と棺身がずれており，明らかに2度以上，棺蓋が動かされていることを示している。

第3号石棺は第2号石棺と約1mの間隔をおいてほぼ平行している。第2号棺と同様な構造をもった家形石棺で長軸の方向はN6°W。棺蓋西南区画のほぼ中央部に第2号棺蓋と同様な石の栓をもった穴があった。

装　飾　第4号・第5号石棺は第3号石棺埋葬地上に破片として積んであったもので，ともに家形石棺の一部である。詳細は不明であるが，第4号石棺棺蓋に幅7～9cmの帯状の陽刻が棺身に平行して施されている。持松第3号棺の陽刻に類するものである。

第5号石棺の詳細は不明。

出土遺物　第1号石棺の排土中より土師片を10個採取したが細片で器形復元不能である。

第2号石棺より人骨4体分，櫛4・刀子1・直刀1・小玉2・朱（水銀朱）の附着せる木片出土。遺骨は東枕の2体が西枕の2体より早く斂葬されている。東・西2体のそれぞれの斂葬の順序・性別等不明。

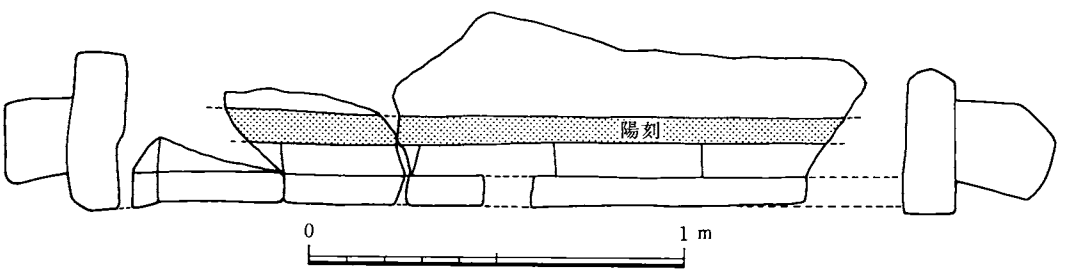
第3号棺より人骨4体分，擾乱され斂葬の順序・性別等不明。その他の出土品はない。

第4号，第5号は棺蓋片のみで遺物はわからない。

年　代　6世紀

備　考　墳丘の有無は不明，調査時にはそれらしい痕跡はなかった。（原口長之）

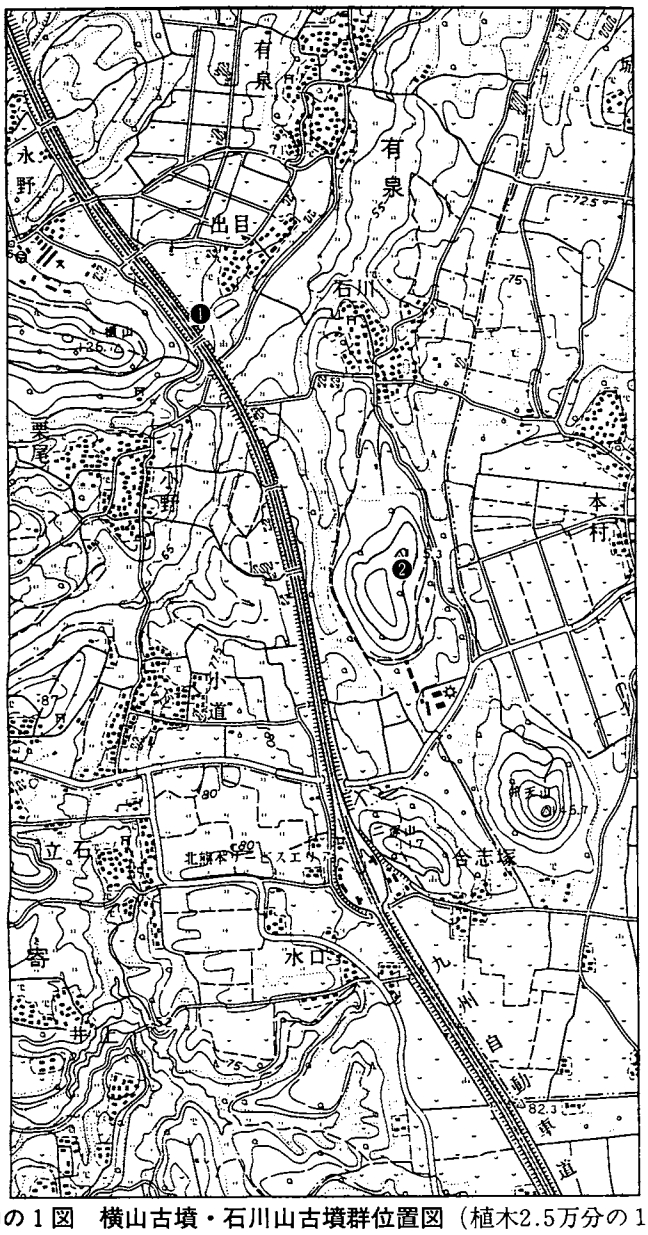
〔参考文献〕
①原口長之『熊本県千田石棺群調査概報』　山鹿高校考古学部　昭和34年（1959）



19の2図　浦大間4号石棺蓋実測図

20. 横山古墳（よこやま）（⇨20の1～3図）

——鹿本郡植木町有泉横山842——



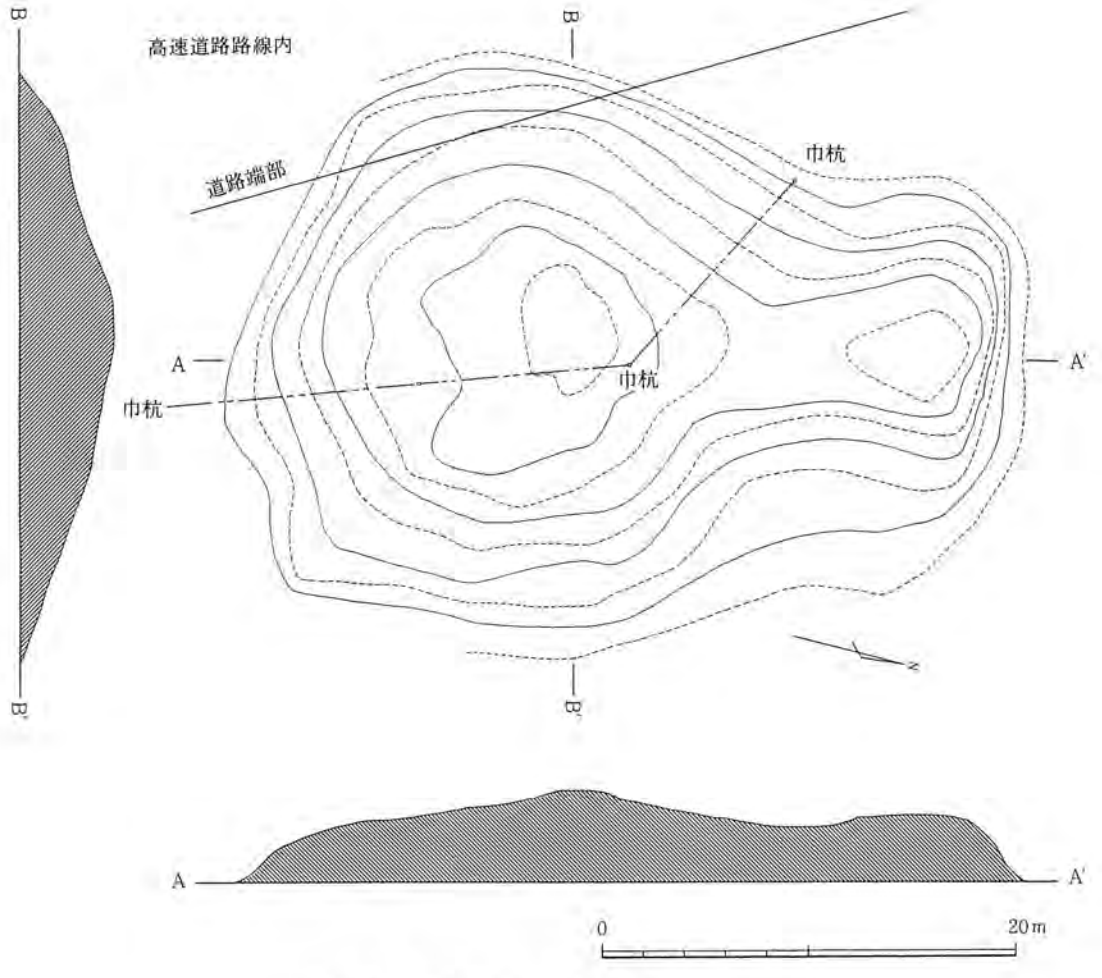
20の1図　横山古墳・石川山古墳群位置図（植木2.5万分の1）
1 横山古墳　2 石川山古墳群

立　地　阿蘇外輪山の西麓に続いて展開する台地を肥後台地とよび，その主体部をなすのが合志原，黒石原，植木台地地域で大体において100m～40mの標高をもつ火山性洪積台地であるが，植木台地面に飛石のように散在する小丘群のやや平面をなした山地内に横たわるのが横山古墳である。なお，横山古墳の西方には状大な横穴式複室巨石墳の「鬼のいわや」古墳と円墳三基があり，岩野山には横穴式複室墳の露出がある。横山古墳の南東，石川山には，昭和41年，果樹園造成のため緊急調査を実施した9基の古墳（石川山古墳群）が点在する。この石川山の東方合志原は，縄文時代から古墳時代に及ぶ豊かな古代文化の集石地である。また今回の調査期間中に，横山古墳の周辺で当古墳と同時期の住居址，また時代は下ると思われるが年代不明の蔵骨器及び大字塚園に前方後円墳1基が発見された。

墳　丘　この古墳は，原口氏らの予備測量調査によると全長38.5m，前方部19.5m，後方部直径29m，前方部高さ3m，後円部高さ4.5mを有する小型の前方後円墳である。墳裾は，前方部北側が削られている以外は，あまり変形は認められない。ただし，後円部墳頂は，天井石が落下し石室が埋没しており，本来の盛土の高さは，これよりさらに上まわるであろう。墳丘は，山の自然の起伏の高地の部分をうまく利用しわずかの盛土で構築されている。石室と比べるとその規模も小さく，後期古墳の特色を備える。盛土の部分には版築が認められる。玄室は，後円部封土のほぼ中心に設けられ羨道部は西側封土端に口を開いている。玄室はすでに古く盗掘にあい，玄室南壁は破壊され天井石は殆んど床面に接し斜に落ち込んでいた。後円部には列石遺構が存在する。この列石は玄室の中央部を中心として半径9mの一重の円を描くが，羨道の部分，および前方部と後円部の接続点では切断される。列石は後円部に密で前方部寄りに疎である。佐賀県勇猛山4号墳や7号墳にみられるものと同意義を持つ遺構であると思われる。その他墳丘には，葺石，埴輪等は認められなかった。また周溝についても後円部の東西両墳裾に2本のトレンチを入れ追求したが確認できなかった。

墓　室　本古墳における羨道部の方向は，古墳の主軸方向にほぼ直角をなし，南に開口している。羨道部奥行約6m幅1.1m，天井までの高さ1.55mを有する。羨道部における側壁構築の手法は，玄門より約3.3mのところまでは床面に巨大な板石をたてて腰とし，その上部は割石を内にわずかに持ち送りにして積みあげている。羨道前端部には腰石を使用せず下部よりの割石の小口積で，天井はない。また羨門よりおよそ3mのところに，二次，三次的遺構と推定される閉塞遺構が認められた。安山岩質の板口を立てて閉塞し，板石の外側から数十個の石灰岩の乱れ積みによる補強がなされていた。この閉塞遺構下部には，10～15cmの厚さに小石と白粘土がつめられているのが確認された。なお，この閉塞遺構付近から羨道部は，北の方向に曲がりはじめ，入口周辺では中心部より1mあまりのゆがみを生じている。

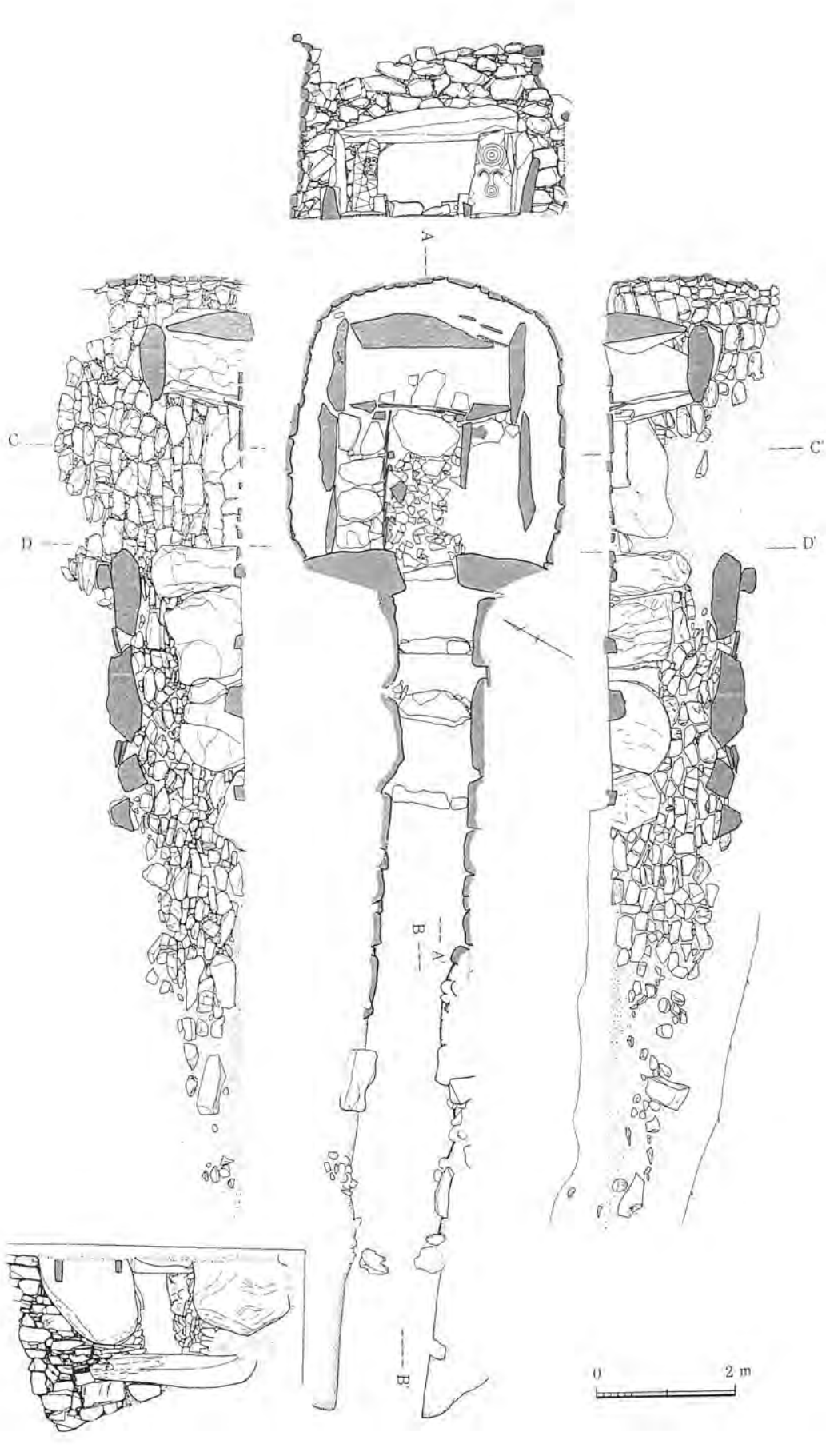
石室は，石灰岩を主とし，一部に安山岩を交えて構築し割石小口積の横穴式単室墳である。玄室における側壁構築の手法は，下部より割石をゆるやかに持ち送りに積み，天井部がやや狭くなったところで1枚の巨石を持ってふさぎ天井とする。割石の乱れ積みは粗雑である。天井はすでに落下し，床面近く斜めに埋没していたが，復原すれば，石室内の高さは床面より3m以上を有していたことがわかる。南側壁の大半は盗掘者によって破壊され，下段の割石数個がわずかにその名残りを留めているにすぎない。他の部分の積み方に比べると玄室角の部分の石組にはとくに考慮が払われており，内部に傾斜する四方の石壁を巧みにきめている。3.8m×3.8mの隅丸のほぼ正方形の床面を持つ玄室



20の２図　横山古墳墳丘測量図

は三区からなり，割石を敷きつめた中央墓道をはさんで，左右に屍床があり玄室奥壁に沿って石屋形が存在する。石屋形の石材は凝灰岩および安山岩よりなるが，石の切り方および組み方は極めて粗雑で，とくに石屋形奥壁など，１枚石のみで不足する部分を後方から安山岩質の板石でおぎなったり，北側壁を外から切り石で支えたり工作をしているのが注目される。凝灰岩の１枚石よりなる屋蓋のみは丁寧な加工により偏平楕円形をなし，石材の削平も比較的整斉である。石室を構成する石材は，側壁の場合，周辺に産出する石炭岩の割石がその殆んどを占めているが，なかには他の墳墓の石材を転用したと思われる丹塗りの安全岩も数十個もまじって使用されている。石屋形には凝灰石，安全岩が用いられていた。床面は，すべて安全岩の敷石が施されていたと思われるが，完全に残っているのは北側屍床と墓道のみで，南側屍床，石屋形奥床は盗掘の際破壊されたものか，一部石材が残存しているに過ぎない。墓道敷石下は白粘土が張られていた。敷石には一部丹の施されているものがある。

装　飾　本古墳の装飾は大別して全面に丹を施した単彩色部と幾何学文様に分けられる。前者としては，石屋形の屋蓋裏，玄門近くの羨道上に架した巨石の下面，床敷石，墓道割石，側壁の一部に認められる。とくに屍床，墓道敷石には丹の彩色の有るものと無いもの，裏面に彩色の施されているものなどなど煩雑に混じり合って敷石を形成しているが，他の古墳からの転用の結果かも知れない。考慮の余地がある。後者としては，石屋形軒縁，石屋形左右袖石，墓道を区切る南北の二屍床の石障，および南側壁沿いの石障，天井石等に施されている。石屋形軒縁の場合，浅い線でふち取った三角形連続文が横ならびに走っている。もともと赤青白の三色を連続して塗り分けていたと思われるが，剝落がはげしく現在では赤色しか識別できない。石屋形左袖石には，中心にさかさまの状態の双脚輪状文が描かれ周囲の余白は赤青白の三角文によって埋められている。同系の文様は熊本県の国指定史跡釜尾古墳や福岡県に２，３例認められているものである。同袖石の小口部にも三角形連続文が施されているが，彩色の順は赤青白の循環を繰り返している。一方，右袖石は重圏円文，三角文，蕨手文等から構成される。やはり左袖石と同様描象的図形で，重圏円文の場合も先の三角文と同様，中心から赤青白の循環を繰り返す。三角形連続文は先にも述べたように，石屋形正面石障，左右屍床の墓道側石障に施されている。これら三角文の描かれる石障は，各々１枚石ではなく数個の石材が互いに重なり合って構成されているが，石の継ぎ目に関係なく三角文は連続し，色は沈線をもって隣りと区別される。その他，右屍床の壁側石障には大小の三角文が丹一色で描かれている。連続等の統一性はないが，リズムを感じさせ



20の3図　横山古墳石室実測図

る文様である。褪色がはなはだしい。石屋形奥壁にも，左下方床面すれすれにわずかながら赤の三角文が識別される。装飾文様のかつての存在を推察せしめるが剝落がはげしく茫洋として判明できぬのは惜しい。天井石にも一部丹の三角文がわずかに認められる。

出土遺物　出土遺物については，その出土場所からみて石室内出土遺物と封土中出土遺物の２つに大別することができよう。

イ．石室内出土遺物

装身具：金環11，勾玉３，管玉２，丸玉小玉類約 200。鉄器：鉄鏃類86，刀子６，金ばり装具４，馬具類（轡２，鐙鞍１，尾錠２，飾金具21)。須恵器：高坏，坏，提瓶，盤，甕，甕。土師器：壺，高坏。その他：砥石。

早い時期に盗掘を受け攪乱されており，発掘時の位置が葬送時における原位置とは考え難いが，まとまった遺物が出土したのは石屋形裏，南屍床石障と石壁間隙，および北屍床，墓道等であった。とくに北屍床，参道から多くの副葬品が認められた。石屋形内床からは，わずかな骨片以外なんらの遺物をも見い出し得ず，破壊のはげしい南側屍床も２，３の遺物の出土を数えるにすぎなかった。石屋形裏は人のはいり込める程度の間隙があるが，ここより多数の鉄鏃が出土した。殆んどが，いわゆる柳葉式とよばれるもので刃先が一定方向に揃っている点から，一括たばねて副葬したもので葬送時の位置を保っていると思われる。奥壁石積の間から獣骨の下顎骨が出土した。南屍床石障と石壁との間隙から須恵器４個分（大型高坏，高坏，坏，壺）の破片が一括して出土した。北屍床からは多量の人骨片が出土した。腐蝕がひどいが下顎骨，歯などから少なくとも３体以上の遺体が互い違いに埋葬されていたものと思われる。とくに，墓道側石隙に沿っては人骨片の密集がはなはだしく追葬の際に人骨を掻きよせた形跡がうかがえた。石屋形よりに，金環８個，小玉 170 個，管玉１個，羨門側から金環３個が出土した。墓道からは，鉄鏃，刀子を主とした遺物が出土したが攪乱がはなはだしく，原位置とは認められなかった。石屋形内床，南屍床から盗掘者によってかき出されたものであろうか。その他，玄門左袖石小口下に高坏２個が置かれていたのが注目された。羨道部からは閉塞石周辺より大小の轡２個，須恵器提瓶，閉塞遺構積み石間隙より馬具の鐙鞍１個が出土した。

ロ．石室外出土遺物

須恵，土師を主とする土器類であるが，出土場所は羨道入口左封土中，羨道入口周囲，および羨道入口右墳裾などである。とくに右墳裾の場合，故意にわられ一括まとめて埋納された形跡がある。出土場所から三つのグループに分けることができる。須恵器の高坏，坏，壺等が多い。

年　代

備　考　この古墳は，九州縦貫自動車道建設予定地にかかる文化財の予備踏査の際，原口，古財氏等により新しく発見されたものである。県教育委員会においては直ちに現地を調査し，保存について数回の文化財専門委員会を開き検討してきたが，諸事情のため，ついに記録，移転保存の止むなきに至り，緊急発掘調査を実施する計画を立て，県縦貫自動車道文化財調査団に調査を依頼した。

調査担当者：坂本経堯・原口長之・乙益重隆・緒方勉・古財誠也・高野啓一・平岡勝昭・佐藤伸二・上野辰男・桑原憲彰

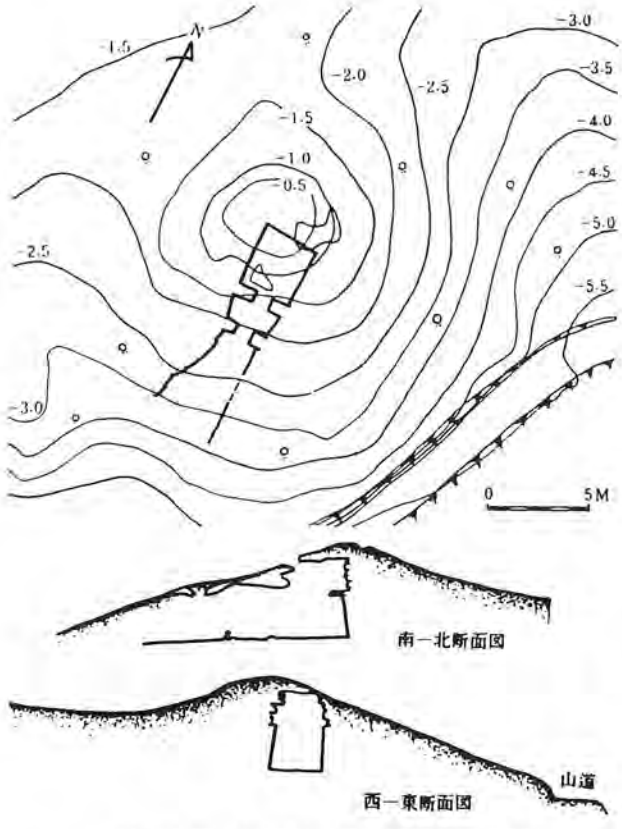
調査は，昭和44年８月23日から９月３日にかけての第１次調査を皮切りに同年中に第２次，第３次の調査を実施した。期日に追われ，人手不足に悩みながら，まがりなりにも第３次調査を終了したのは，第１次調査から３ヵ月も経過した11月も終わりに近づいた頃であった。九州縦貫自動車道，植木―託麻間の工事は進み，山地を開鑿しつくし，当古墳を残すのみとなり，この時点においてはすでに本古墳の運命は記録，移転保存という事態に立ち至らざるを得ない状況にあった。県教委としては，移転保存を前提として，文化庁の文化財調査官の横山浩一氏や東京国立文化財研究所の岩崎友吉氏の来熊をあおぎ，今後の措置に関しての指導助言を受けることにした。11月25日，岩崎室長が来熊，基礎資料の収集に引き続いて，装飾文様保存についての打合わせを行った。12月９日，岩崎室長，樋口技官が再度来熊，装飾文様の剝落を防ぐための薬品加工と紙張り作業が２日に渡っておこなわれ移転保存への道が一歩前進した。12月11日，装飾石材をエバーソフト包装，羨道部から解体作業を開始，機械力を導入し，同17日には無事解体を終了した。石材はすべて，熊本県立図書館敷地内に新しく建てられた収納庫へ格納され，復原の日を待つことになった。前方後円墳で装飾を持つ古墳は稀少である。熊本県で横山を加えて６基，福岡県で５基，佐賀県に１基を数えるのみで，九州他県にみられない貴重なものである。復原場所は現在のところ未定であるが，適当な個所を見つけ，早急に復原にこぎつけたい。　　（上野辰男）

〔**参考文献**〕

①乙益重隆『装飾古墳と文様』　講談社　昭和49年（1974）東京
②上野辰男「横山古墳」松本雅明編著『熊本の装飾古墳』P108―109，熊本日日新聞社　昭和51年（1976）熊本
③上野辰男・桑原憲彰「横山古墳」『清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓』熊本県文化財調査報告41　熊本県教育委員会　昭和55年（1980）
④森貞次郎『装飾古墳』朝日新聞社　昭和47年（1972）熊本

21. 石川山（いしかわやま）4号古墳 (⇨20の1図，21の1～3図)

——鹿本郡植木町石川塚前97——



21の1図　石川山4号古墳墳丘測量図

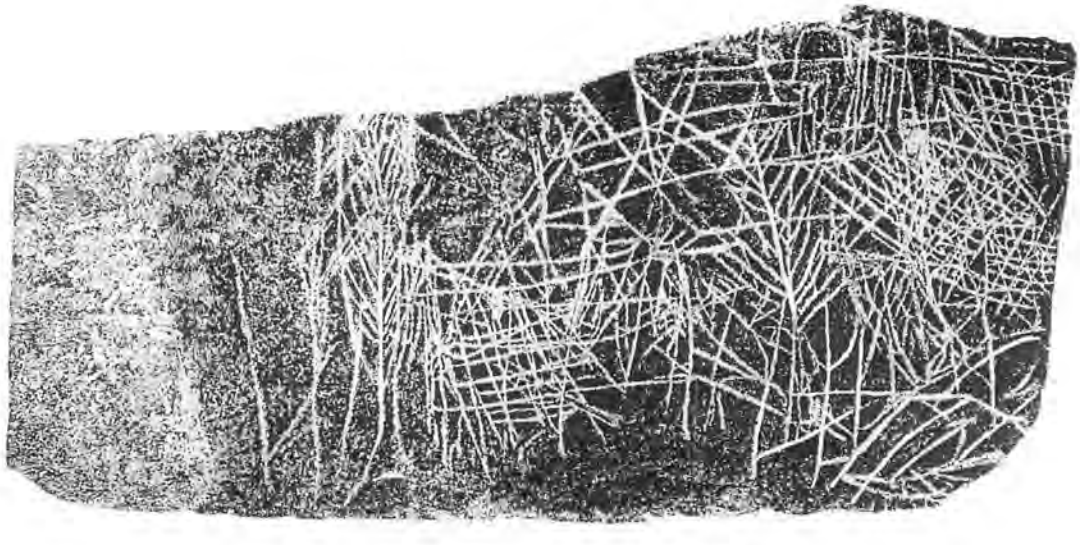
立　地　阿蘇火山外輪山の西麓に続いて展開する一帯の台地を肥後台地とよび，肥後台地の主体部をなすのが合志原・黒石原地域である。100m～30mの標高を持つ火山性の洪積台地であるが，この台地面に存在する小丘群の一つが石川山である。山頂に立って東方を望むと標高85mの平坦な畑地がはるばると開ける。平坦な台地面に隆然とそびえるこの山は周辺から仰ぎ見られる趣があり古くから霊山視せられていたようで，この丘陵上に9基の古墳が散在している。装飾をもつものは，その中の第4号墳で石川山東斜面の標高102mに位置するものである。

墳　丘　丘陵の東斜面につくられた円墳で封土が流出していて正確な数値はつかめないが石室から推して墳丘の高さは4.5mぐらいで基底部の直径は22～25mほどのものであったようと思われる。

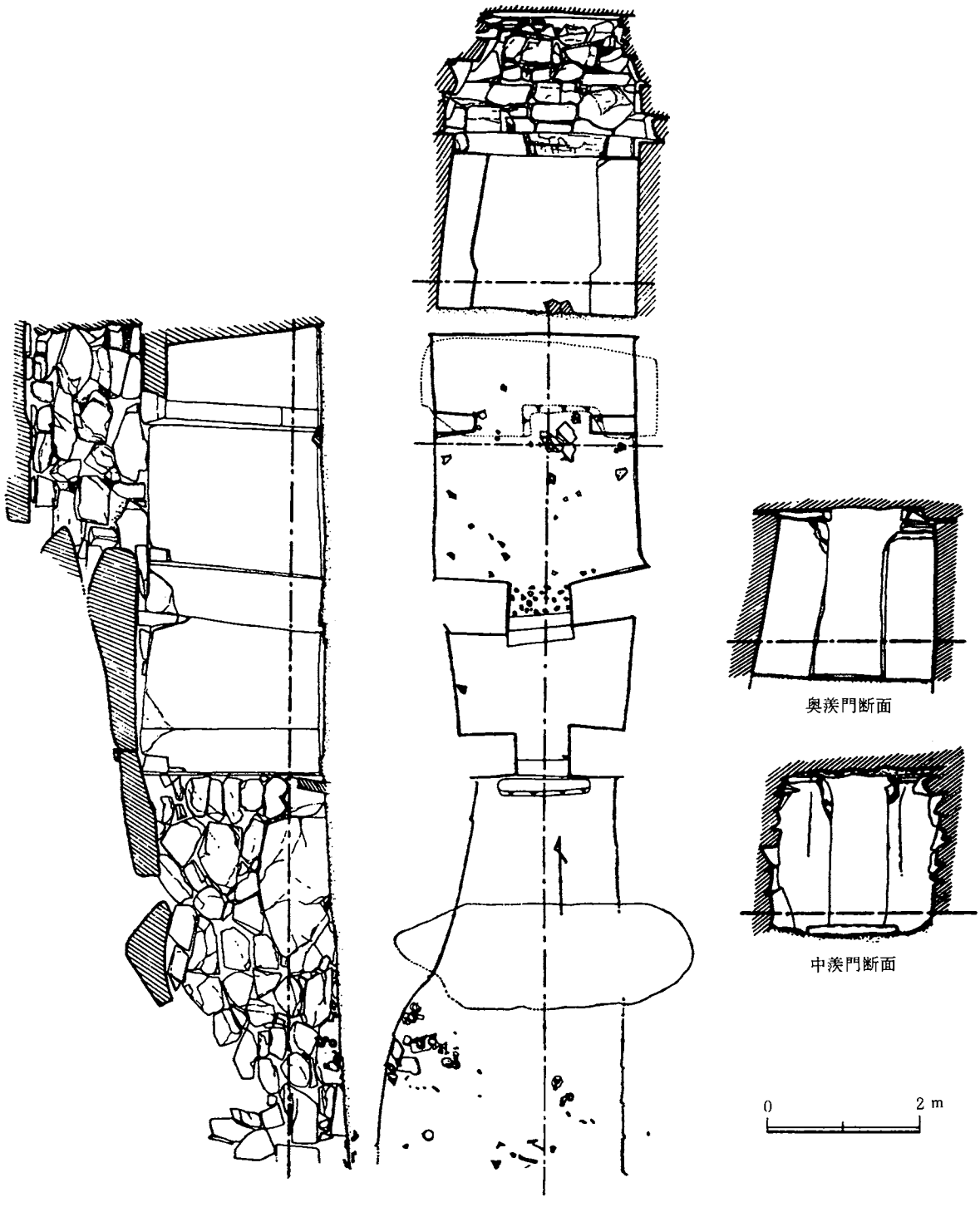
墓　室　墳丘のほぼ中央に設けられ南に開口する。長い羨道と前室・後室をもつ横穴式石室で全長10.6mである。後室の床面形は奥行約3.1m，巾約2.53mの長方形で，両側壁と奥壁にはそれぞれ阿蘇熔岩の大きな板石を立てて腰石とし，その上方に4段の割り石小口積みで内側に持ち送りにし大きな1枚石で天井をふさいでいる。奥壁ぞいに間口2.87m，奥行1.2mの石屋形を造りつけている。前室は奥行1.12m，間口約2.33m，横長の長方形をしているが，いびつである。両側壁に阿蘇熔岩の一板石をたて天井石を架している。羨道は完掘ができなかったが現長は約5.2mである。巾は第1羨門側で約1.75m，そこから外部に向うにしたがって西側壁がいちじるしく広がっている。羨道部の両側壁は割り石を粗雑に積みあげ約2.25mの高さで天井を架す。現存の天井石は安山岩で，その上面と裏面に線刻で絵画が描かれている。

装　飾　第1羨門に近く羨道上に架した巨石の下面に浅い陰刻による絵画がある。林に囲まれた家を表現したものであろうと思われる自由画風の文様である。巨石の側面にも線刻があるが何をあらわしたものかわからない。

出土遺物　須恵器（高坏・坏・提瓶・甕・壺・台付埦その他），土師器（高坏・盤），土師系土器（糸切底），磁器，



21の2図　石川山4号古墳装飾文様拓影



21の3図　石川山4号古墳石室実測図

武器類（鉄鏃・石突・鞘・刀子）工具類（鉄斧），馬具類
人骨，銭貨

年　代　6世紀

備　考　古墳群のうち2基（3号・4号）は古くから知られていたが，他の7基は昭和41年（1966），果樹園造成の事前調査で発見された。昭和41年（1966）7月熊本県教育委員会によって発掘調査され，現在も保存されている。第4号は原口長之，隈昭志が調査に当った。

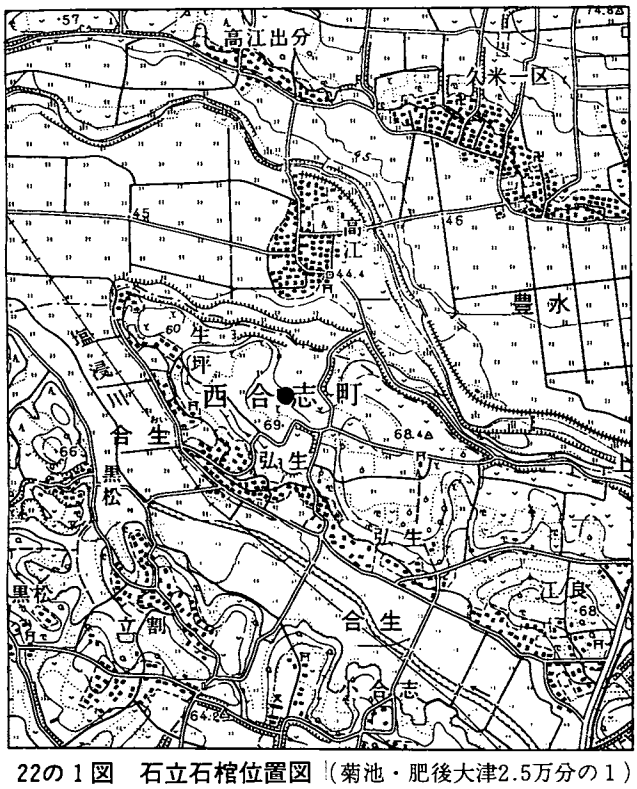
（原口長之・隈　昭志）

〔参考文献〕
①田辺哲夫，原口長之ほか「石川山古墳群発掘調査」『熊本県文化財調査報告第9集』熊本県教育委員会　昭和43年（1963）
②隈昭志「石川山古墳第四号墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P 110—111　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）

22. 石立石棺（こくりゅう）（⇨22の1・2図）

——菊池郡西合志町合生石立——

立　地　合志川とその支流塩侵川にはさまれた標高60m前後の台地の西端近くに立地する。台地の南側に成立した生坪（おつぼ）集落の東北方である。



22の1図　石立石棺位置図（菊池・肥後大津2.5万分の1）

墳　丘　畑地に開かれていたため，墳丘は不明。

主体部　阿蘇凝灰岩を使用した家形石棺。棺身は4枚の板石を組み合せたもので，棺蓋は屋根形を呈する。主軸をほぼ東西に向け，棺身は内法 153cm，幅53cm，深さ45cm，棺蓋は屋根形のくり抜きで，東側にのみ突起がある。内面は棺身，蓋とも丹塗りで，床面は粘土床で，砂をまき，枕部が高くなっている。

装　飾　棺蓋には上面の両側に線刻による並列三角文が描かれ，上から見た感じは突起を頭にした亀甲を想い起させる。

出土遺物　東枕にした少女一体と津麻櫛1個。

年　代　5世紀

備　考　①昭和22年（1947）5月23日，桑の抜根作業中に，地下約30cmの深さから発見され，故坂本経堯氏が調査した。その後，生坪東方の軍人墓地内に移転し，土盛をして保存されている。昭和42年（1967）2月11～12日，坂本経堯氏立合いのもとに隈昭志が実測した。

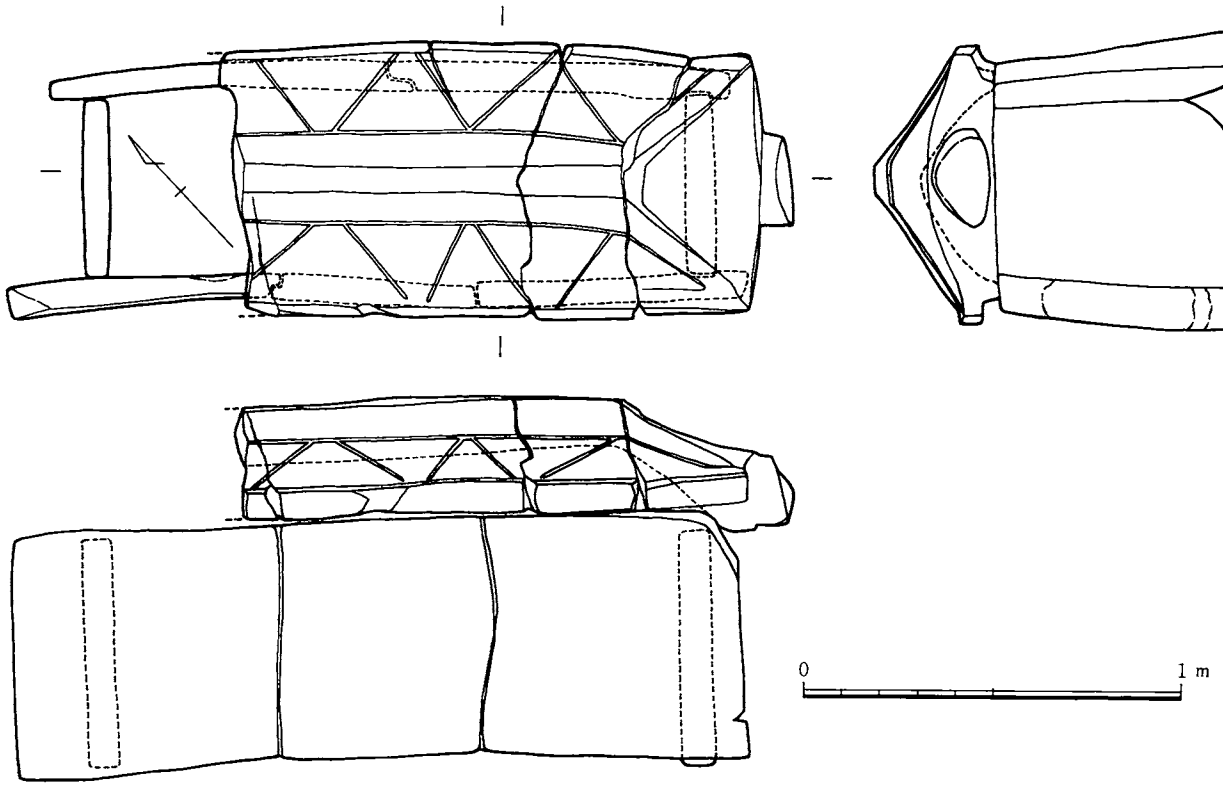
②少女が埋葬されていたことから，地元では「ヒメツカ」と呼んでいる。

③この西方には塚山古墳や生坪古墳などが存在する。

（隈　昭志）

〔参考文献〕

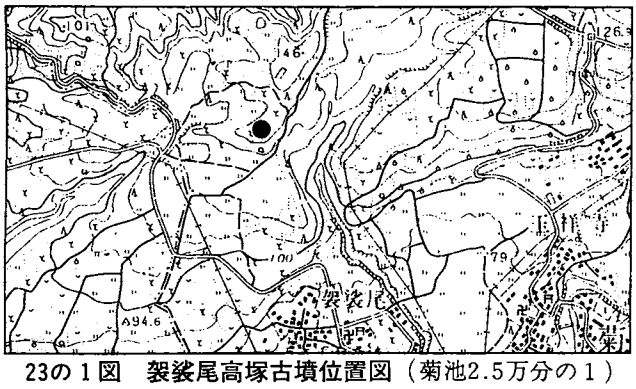
①隈昭志「石立石棺」松本雅明編著『熊本の装飾古墳』P 112 — 113，熊本日日新聞社　昭和51年（1976）熊本



22の2図　石立石棺実測図

23．袈裟尾高塚古墳〔昭和50年県史跡〕（⇨23の１～６図）

——菊池市袈裟尾高塚722・723・724番地——

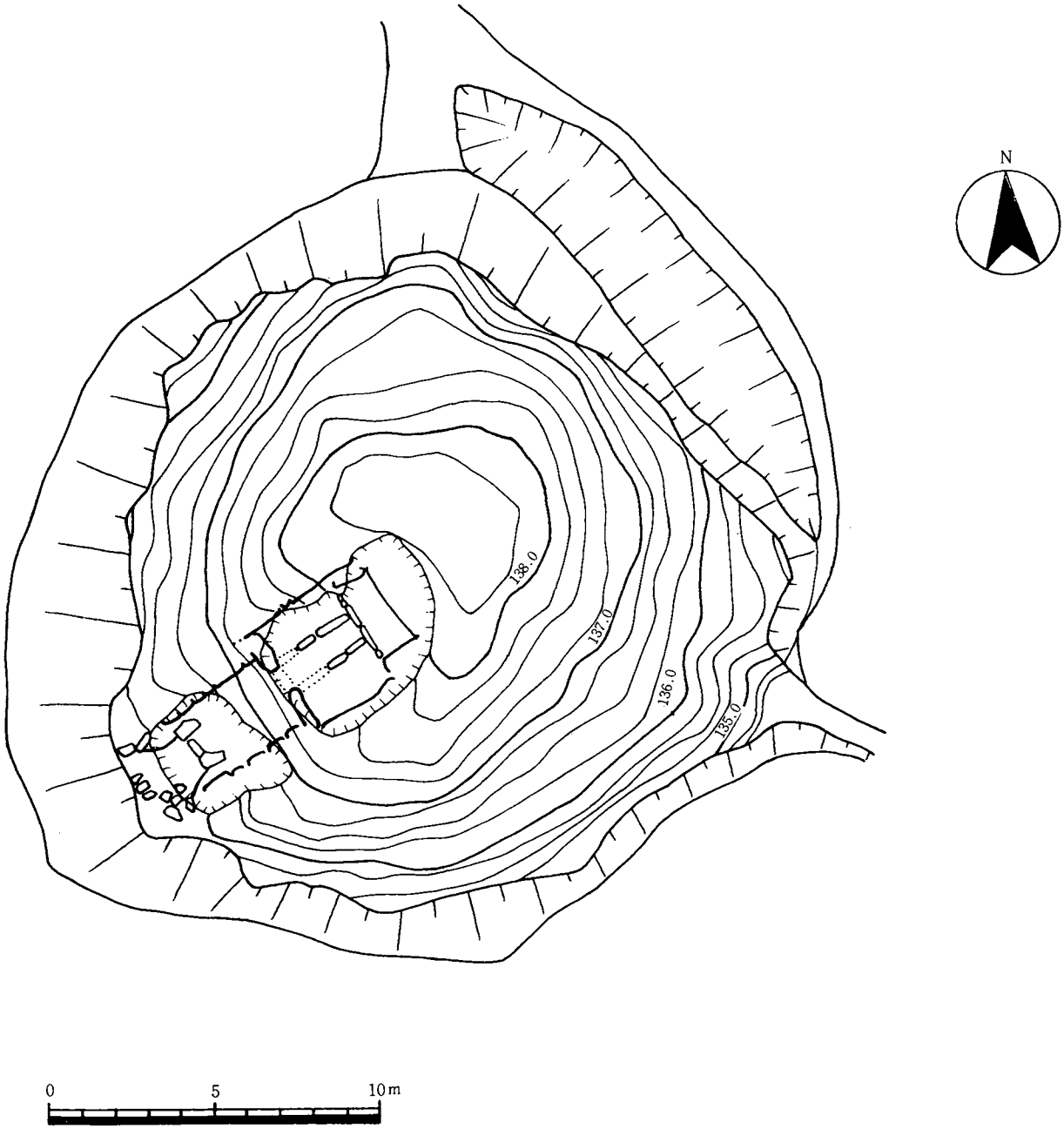


23の１図　袈裟尾高塚古墳位置図（菊池2.5万分の１）

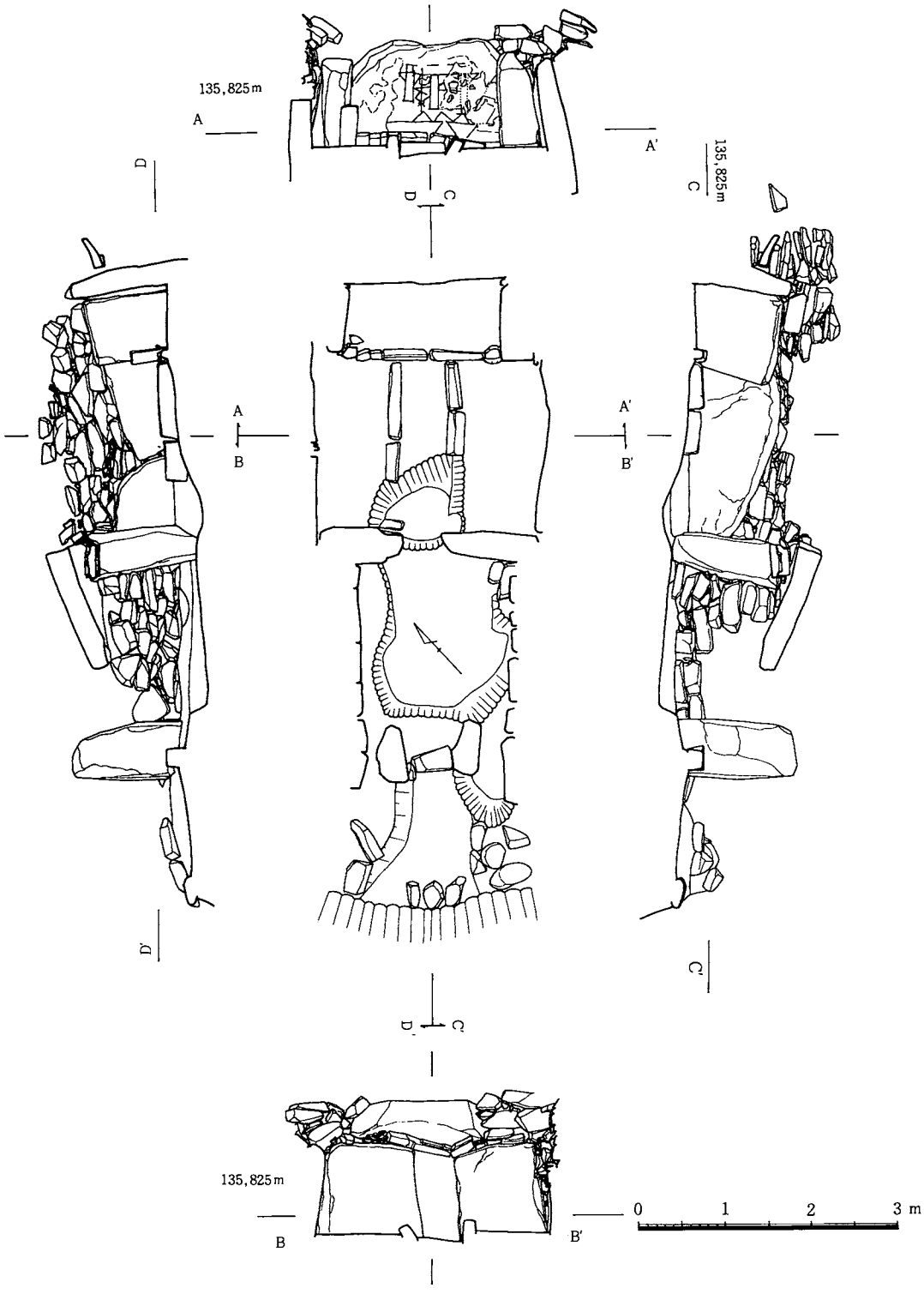
立　地　菊池川支流，迫間川中流の右岸，高塚台地の頂上（標高138ｍ）に位置し，北に八方岳，東に鞍岳，阿蘇の連山を仰ぎ，南から西に菊池平野が広がる眺望雄大なところである。

墳　丘　直径約18m，高さ４ｍの円墳で，坂本経堯氏の記録によれば周囲に幅4ｍ，深さ1ｍの溝がめぐっていたという。

石　室　南西方向に羨門をもつ複室の横穴式石室墳で，全長６ｍである。玄室は奥行約３，幅2.5ｍの長方形で，両側壁，奥壁とも凝灰岩の大石を用い，その上部は持ち送り式の小口積みとなり，その上に天井石を架したものと思わ



23の２図　袈裟尾高塚古墳墳丘測量図（原図　文化財保存計画協会）



23の3図　袈裟尾高塚古墳石室実測図（原図　文化財保存計画協会）

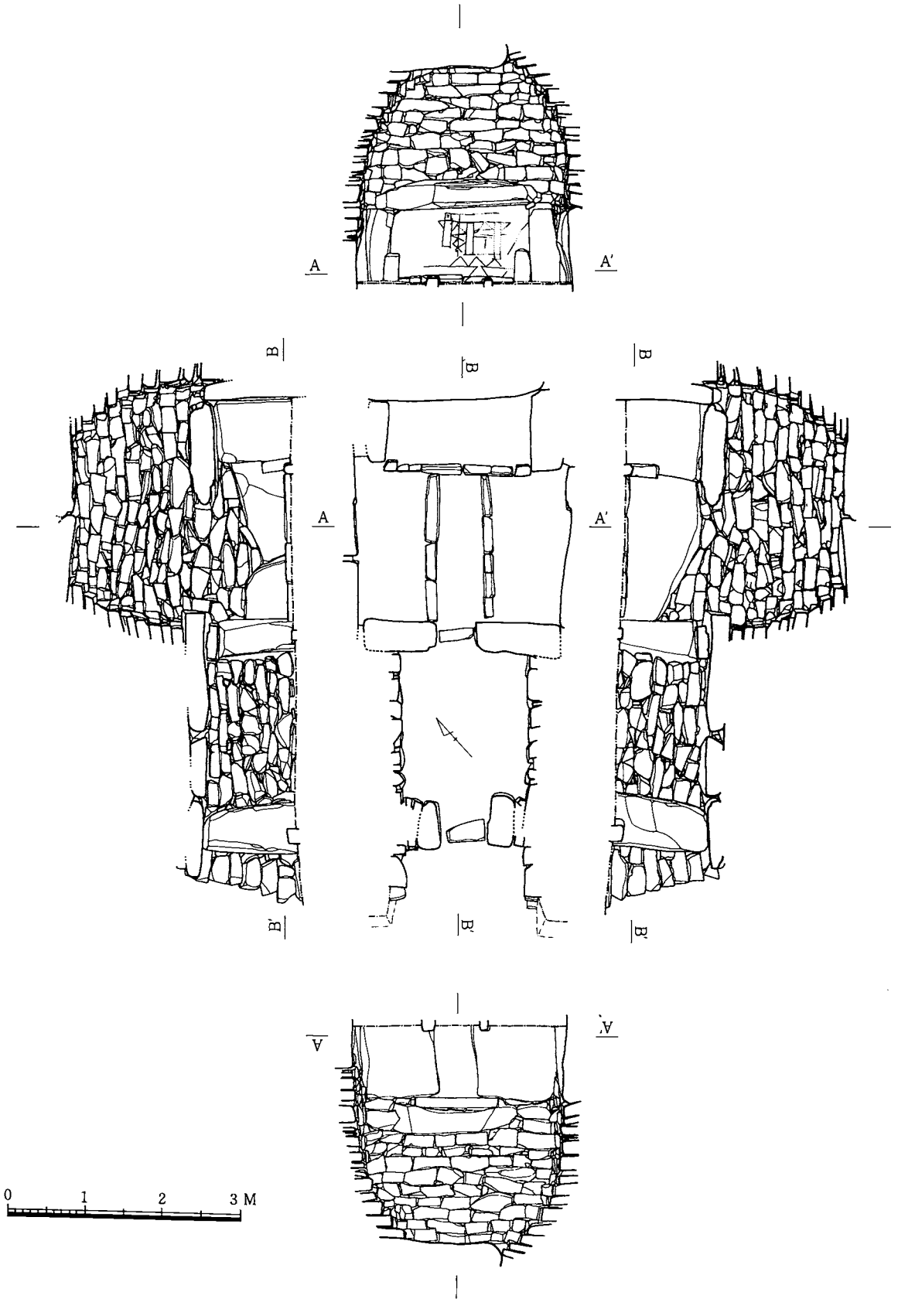
れる。床面から天井までの復元高約3m。奥には造り付けの石屋形を設け，その前方には二区の屍床があり，石屋形を含めて「コの字」屍床となっている。前室は奥行約2m，幅1.9m，側壁は玄室と同様の構造である。床面から天井石までの高さは約1.1mである。

なお，昭和56年（1981）の保存整備工事の際，第2羨門の眉石の一枚が凝灰岩の板石に靭を彫りこんだ表飾石材であることが確認された。

石室構築時に，当古墳のために作ったものか，別の古墳のものを転用したものか不明である。

装　飾　石屋形奥壁に線刻による靭様のもの二つを並べ，その周辺に三角文を配している。その他，羨門及び側壁にも朱・白の彩色があったといわれるが，現在は見えない。

出土遺物　昭和5年（1930）発掘品として，ガラス玉（東床），金環（西床），帯飾り（羨道奥），刀子片（前室），鉄鏃（石屋形の西南隅，西北隅に各1束），轡(第1羨門内東)，須恵瓶（前室第2羨門内東），土師高坏（玄室羨門奥），土師坏（前室），土師片口（封土中）などがある。また昭和49



23の4図　袈裟尾高塚古墳石室復原実測図（原図　文化財保存計画協会）

年（1974）の調査時にガラス玉，轡，須恵器などが検出されている。

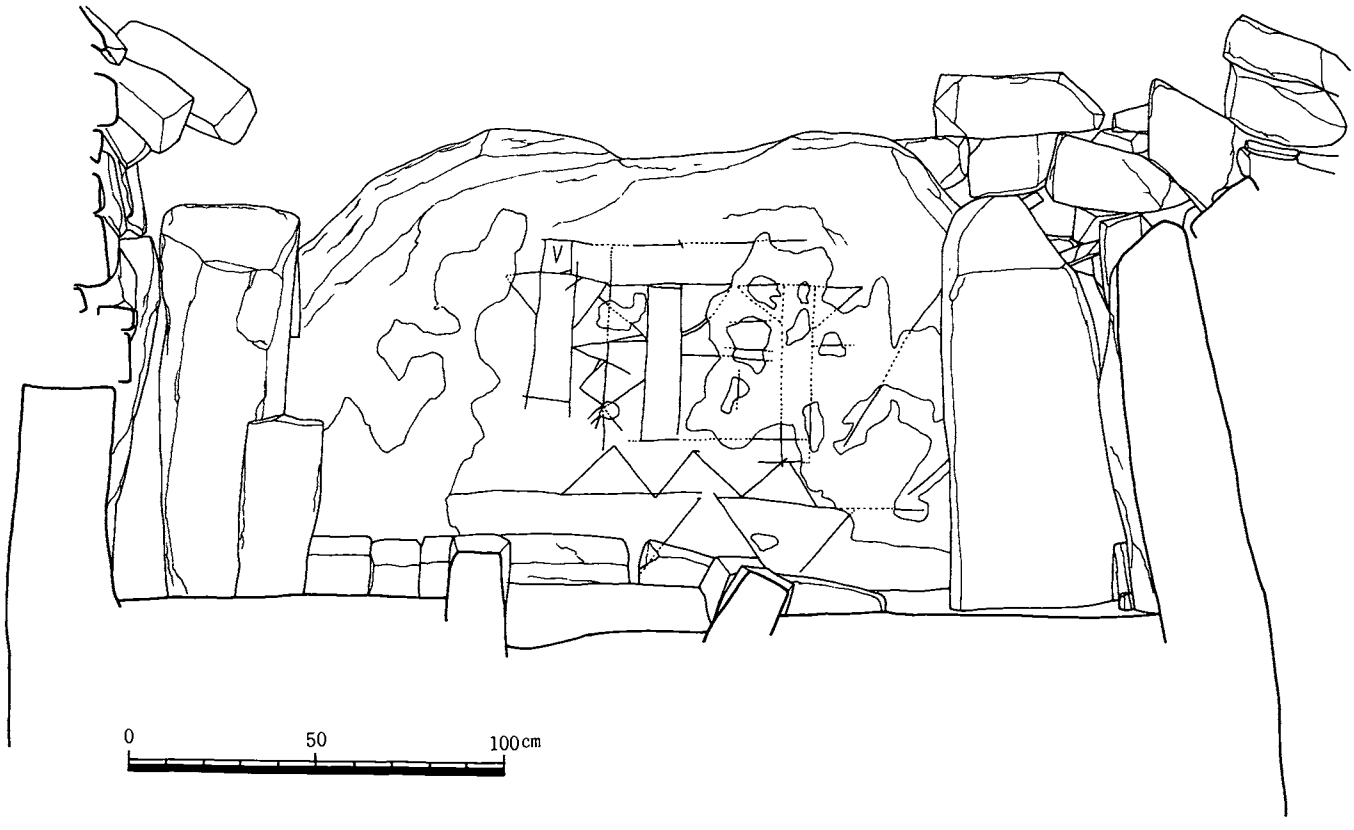
年　代　6世紀末～7世紀初頭

備　考　昭和5年（1930）7月5日，盗掘を伝え聞いた坂本経堯が，盗掘者の聞き取りによって遺物の出土地点を記録した。その後同10年（1935）1月6日，坂本によって装飾文を確認。

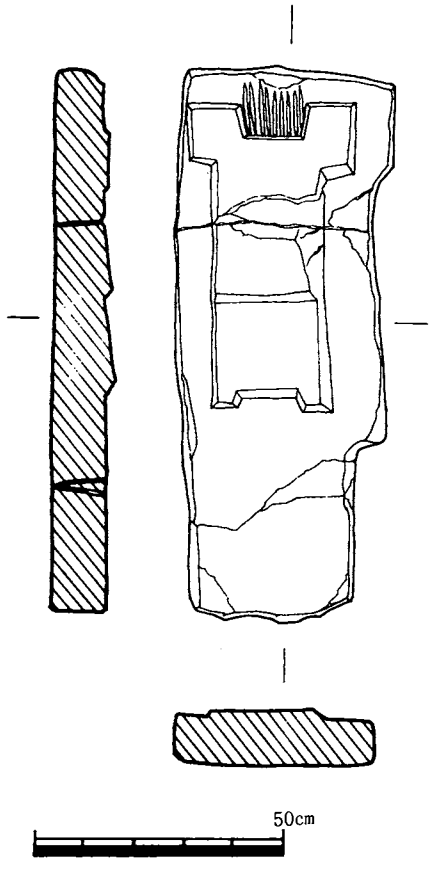
昭和49年（1974）県教育委員会が実施した装飾古墳総合調査の一環として，上妻信寛が実測した。

昭和53～55年度（1978～1980）県費補助をうけて，菊池市が保存整備した。昭和50年（1975）7月31日県指定史跡

（隈　昭志）



23の5図　袈裟尾高塚古墳石屋形奥壁装飾文実測図（原図　文化財保存計画協会）

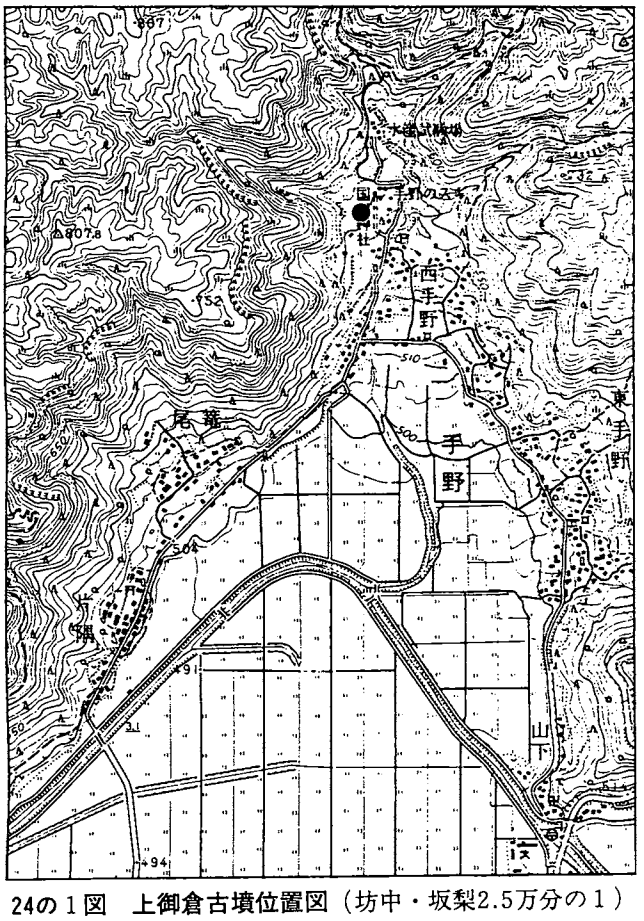


23の6図　袈裟尾高塚古墳第二羨門の下部眉石実測図
（原図　文化財保存計画協会）

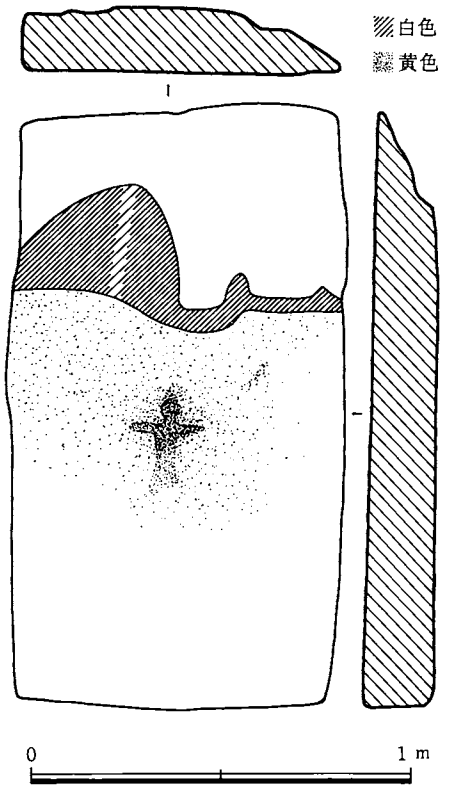
〔参考文献〕
①坂本経堯「菊池文化財調査票」菊池文化財保存会　昭和5年（1930）
②『菊池の文化財』P14，15　熊本県菊池事務所　昭和40年（1975）
③高木正文「袈裟尾高塚古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P116，117，熊本日日新聞社　昭和51年(1976)
④文化財保存計画協会編『県史跡袈裟尾高塚古墳保存修理工事報告書』菊池市教育委員会　昭和56年（1981）
⑤原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）

24．上御倉（かみのおくら）古墳〔昭和34年県史跡〕（⇨24の１～３図）

——阿蘇郡一の宮町手野宮の前——



24の１図　上御倉古墳位置図（坊中・坂梨2.5万分の１）



24の２図　上御倉古墳閉塞石の装飾文実測図

立　地　阿蘇外輪山の東北隅にあたり，山麓部の傾斜面の国造神社の鳥居から西方約60m にあり，40m ほど離れて下御倉古墳がある。

墳　丘　やや楕円形をしているが円墳である。斜面にあって雑木林におおわれているため，偉容がないが，直径約33m，高さ5.28m もある大きい墳丘である。

墓　室　安山岩の巨大な石材と阿蘇熔岩の切石で構築した横穴式石室で羨道・前室・後室より成り，ほぼ南に開口する。羨道は高さ1.50m，幅1.50m，奥行約３m。第１羨門は幅0.65m，高さ1.05m。第１羨門の表にむかって両袖石の上端に幅16cm，高さ10cmのくりこみが左右均等に彫られている。第１羨門の前に板石が倒れてこれに原口長之が調査したときに装飾文様があった。前室は奥行2.35m，幅2.5m，天井の高さ2.3m。おそらく中央の通路の両側に各１体ずつの屍床があったものと思われる。第２羨門は幅0.83m，高さ1.6m，石材には加工の痕跡がみられる。後室は奥行3.6m，幅3.18m，天井までの高さ3.7m。正面奥壁にそうて阿蘇熔岩の切石で作った石屋形がある。石屋形の屋根は寄棟造になっているが前方に転落している。石屋形の前方には切石で仕切った二つの屍床がある。後室の周壁は三方にそれぞれ一枚石の巨材を立て，その上方は自然石の巨材を持ち送りに積み上げ天井部が縮約したところで巨石をもって抑えふさいでいる。

装　飾　装飾文様は前室入口の前に倒れていた板石の裏側にあった。板石は石の厚みがほぼ0.15m，上端が0.84m，下端が0.8m，長さは左側が1.51m，右側が1.55m のほぼ矩形をなし，その上端から0.18m と0.6 m の間に白色で高い山のような形を描き裾野は連山のように流れる。山のほぼ中央に0.03m 幅ぐらいの線が上下にとおっている絵で，その下方はうすい黄色で塗り，その中に濃く人物像があった。人物像は地塗りと同色で描いてあったので，ことに腰部から下が明瞭を欠いた。

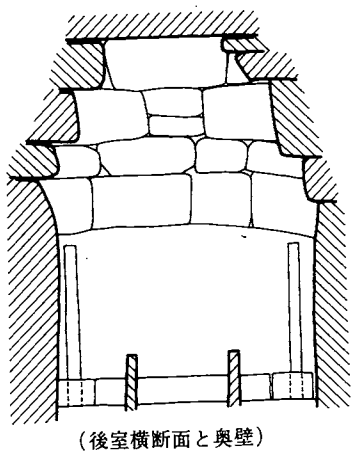
出土遺物　直刀１，刀子片１，盗掘を受けており遺物は僅少であった。

年　代　６世紀

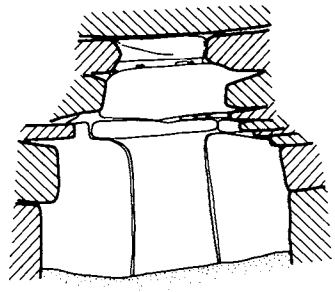
備　考　調査者（有光教一，坂本経堯，乙益重隆，原口長之）　（原口長之）

〔参考文献〕

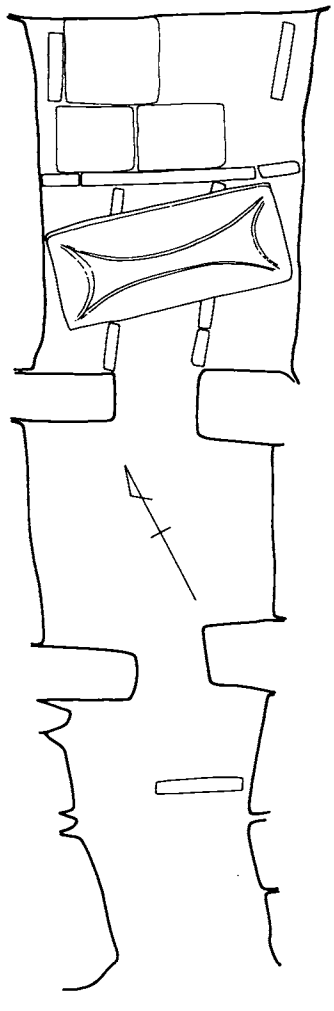
①乙益重隆「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告第３集』熊本県教育委員会　昭和37年（1961）
②原口長之『新たに装飾を発見した二つの古墳について』昭和33年（1958）プリント
③原口長之「上御倉・下御倉古墳」松本雅明編著『熊本の装飾古墳』P118・119　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）

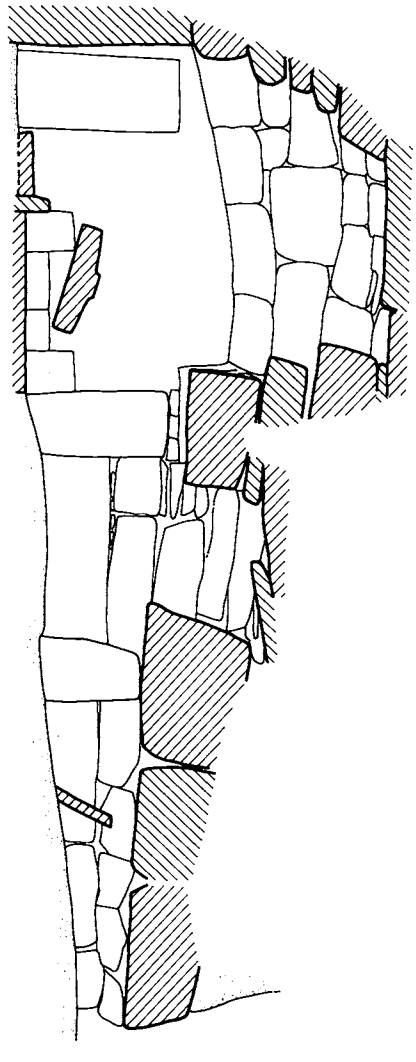


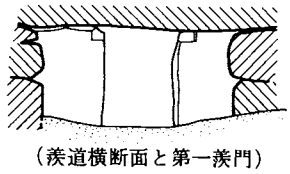
（後室横断面と奥壁）



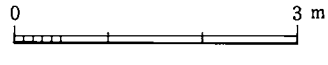
（前室横断面と第二羨門）







（羨道横断面と第一羨門）



24の3図　上御倉古墳石室実測図（乙益　文献①）

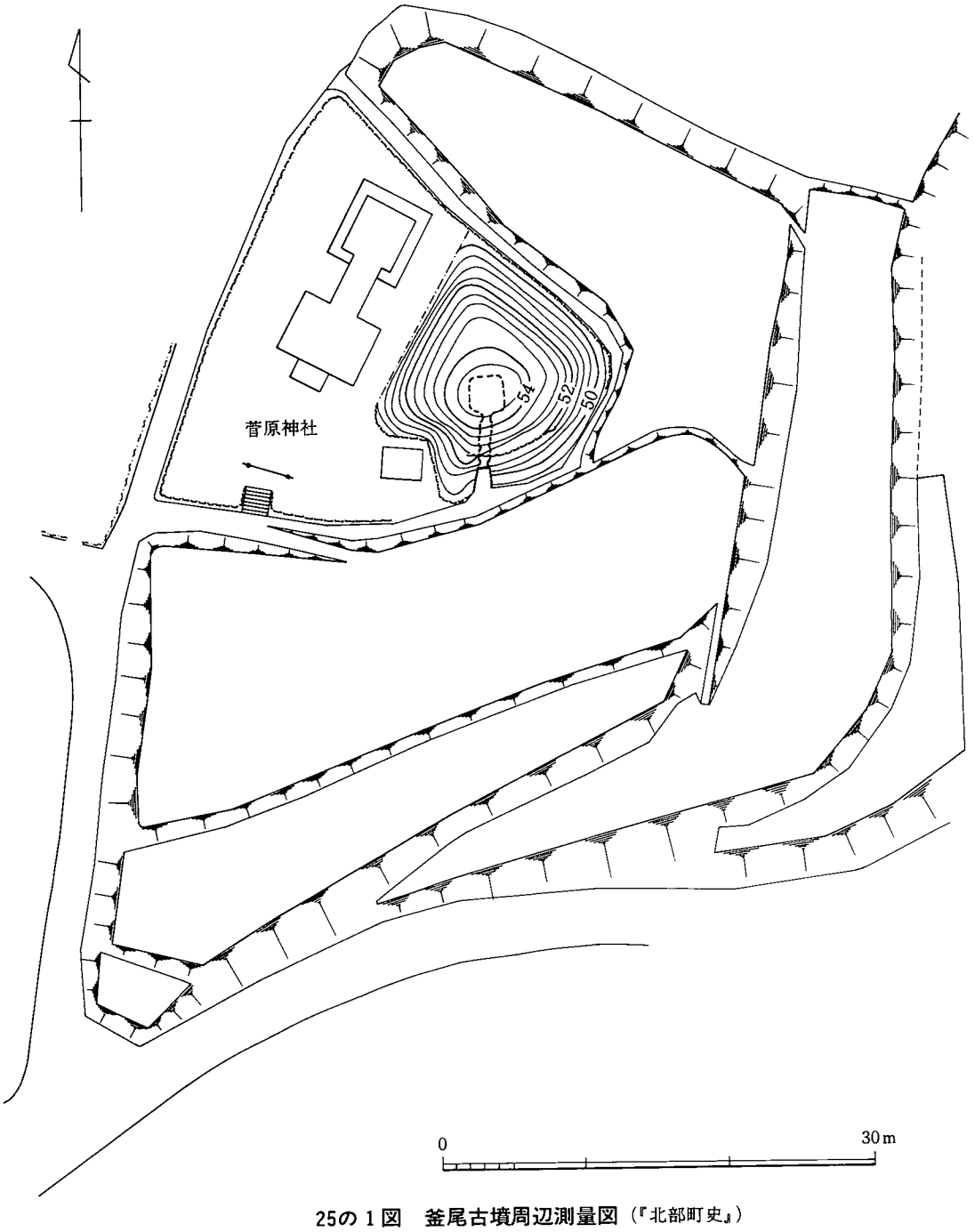
25．釜尾古墳〔大正10年国史跡〕（⇨25の1～4図，26の1図）　——鉾託郡北部町釜尾同免——

立　地　国鉄鹿児島本線西里～上熊本間，線路にのぞむ釜尾丘陵の東端に位し，天満宮の杜殿と隣接する。大正10年（1921）3月3日指定史跡

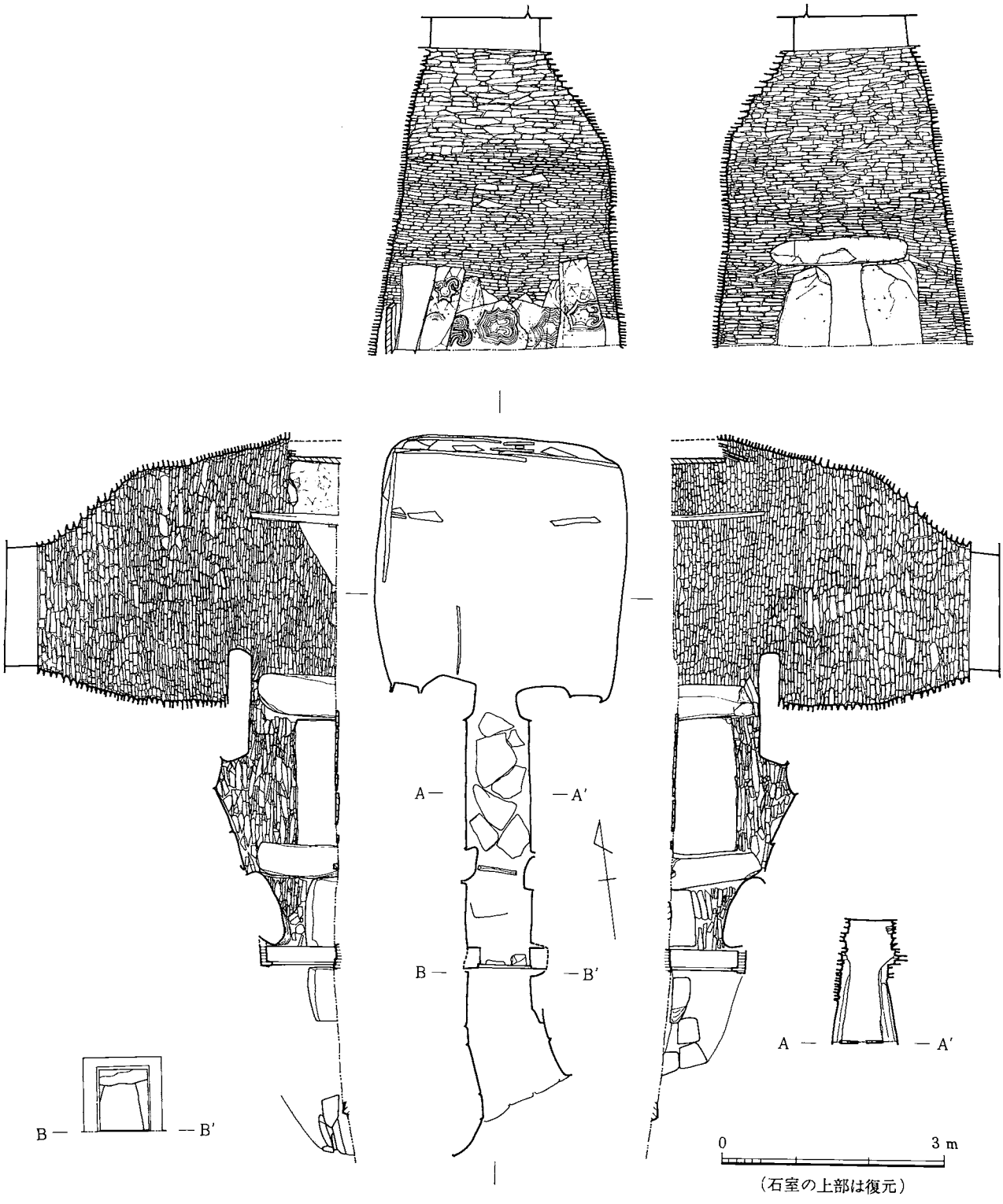
墳　丘　直径約13m，高さ約5.5mの円墳で『肥後国志』によると明和6年（1769）に発見されたという。

石　室　墳丘の南側に開口する安山岩の割石小口積による横穴式石室があり，総奥行9.60mを有する。玄室の奥行3.25m，幅3.35m，高さ3.05mを有し，奥壁に沿って石屋形が設けられ，その天井石は現在石室の壁に立てかけている。床面にはもと左右2区の屍床があったが，今では石材の一部が残る。羨道は奥行2.50m，幅0.90m，天井までの高さ0.70mの狭長なもので，その奥の両側に石柱を立てて奥行1.75m，幅0.90m，天井までの高さ1.50mの前室を設ける。床に板石7枚を敷くがそれらは本来天井石の落下したものらしい。羨道および前室の下部は安山岩の自然石を立てめぐらし，その上を安山岩の割石で平積みにしている。

玄室の周壁は床から約1.50mまで赤く塗り，その上部は白で塗りわけている。石屋形の石材は不統一で，奥壁下の2枚には双脚輪状文を3個描き，他に放射状の突起を有する歯車状の同心円文や三角形文などを赤・青・白の配色で



25の1図　釜尾古墳周辺測量図（『北部町史』）



25の2図　釜尾古墳石室実測図

美しく描く。その他にも石屋形の外壁や内壁天井石の内面などに双脚輪状文や三角形，重三角形，同心円文などを赤・青・白の三色で彩る。前室との境をなす羨門の内外壁や，石梁の表面および天井部にも三角形や重三角形，双脚輪状文，同心円文などを三色で描くが，それらの配置は不規則である。

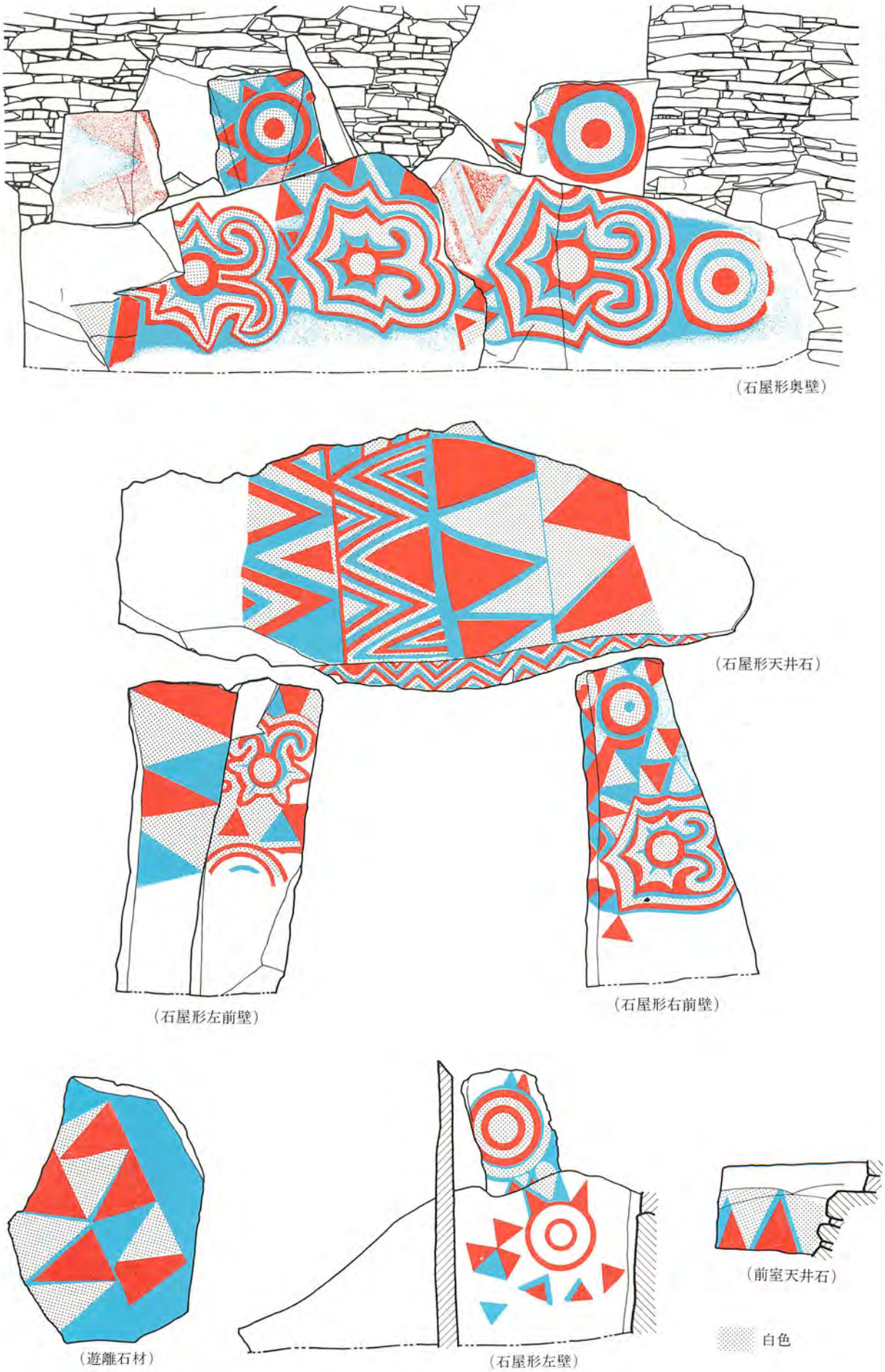
この古墳はすでに明和6年（1769）以来2世紀近い荒廃状態にあったため，大正6年（1917），と同12年（1923），昭和26年（1951），同42年（1967）と四回にわたる修理が行われ，ようやく現状を保っている。

出土遺物　大正6年（1917）2月石室内部の清掃にあたり，管玉2と桂甲残欠，大刀，剣，斧，鞍金具，轡，鏃，須恵器の残欠などが出土した。

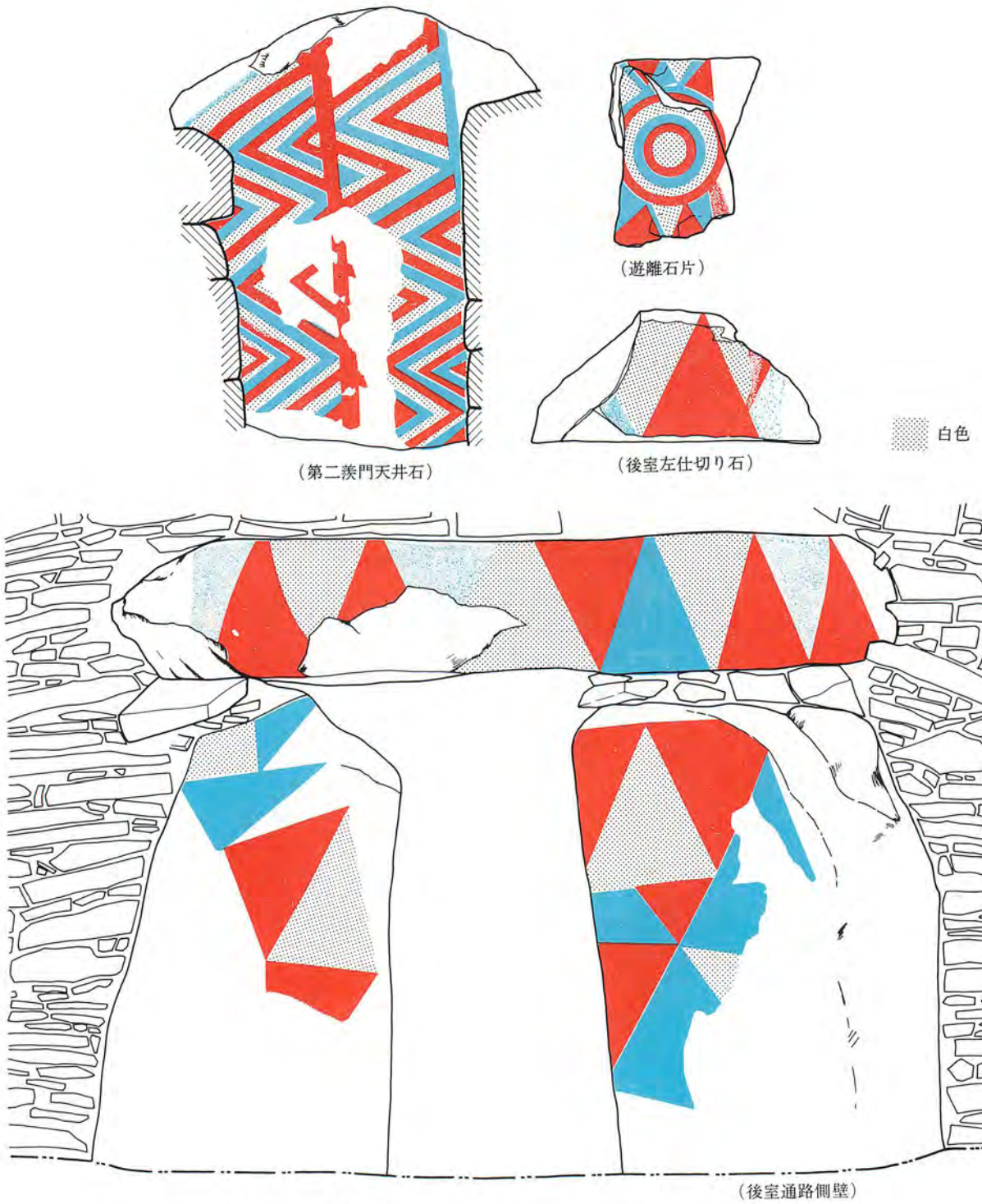
年　代　6世紀

備　考　釜尾古墳の西方約400 mには熊本市富尾古墳群3基があったが，現在1基が残り，元はその羨道の一部に円と三角形の丹彩文が描かれていたが，今では消滅している。

（乙益重隆）



25の３図　釜尾古墳装飾図(1)（京都大学文献①　池上年氏の図を改変・縮尺不統一）



25の４図　釜尾古墳装飾図(2)（京都大学文献①　池上年氏の図を改変・縮尺不統一）

〔参考文献〕

①浜田耕作「肥後国飽託郡西里村釜尾の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』（京都帝国大学考古学研究報告）第３冊　大正８年（1919）
②乙益重隆「釜尾古墳」小林行雄編『装飾古墳』平凡社　昭和39年（1964）
③乙益重隆「装飾古墳の修理―熊本県釜尾古墳―」『月刊文化財』第49号　第一法規出版株式会社　昭和42年（1967）
④富田紘一「原始・古代」『北部町史』北部町　昭和54年（1979）

26. 富ノ尾（とみお）1号古墳 （⇨26の1～5図）

——熊本市池田3丁目富ノ尾——

26の1図　釜尾古墳・富ノ尾1号古墳位置図　植木・熊本 2.5万分の1

1　釜尾古墳　　2　富ノ尾古墳

立　地　坪井川，井芹川にはさまれ，植木より熊本城にのびる台地の西端，通称富ノ尾山の頂上近く，釜尾古墳を鹿児島本線ごしに北北西に見る位置にある。熊本放送送信所より北西に約300m，熊本市水道局配水場，富の尾園療養所の隣である。

墳　丘　自然丘陵を利用し盛土した円墳で，封土の流出により若干変形しているが，直径約15m，高さ約3m，南面して開口する横穴式石室墳である。

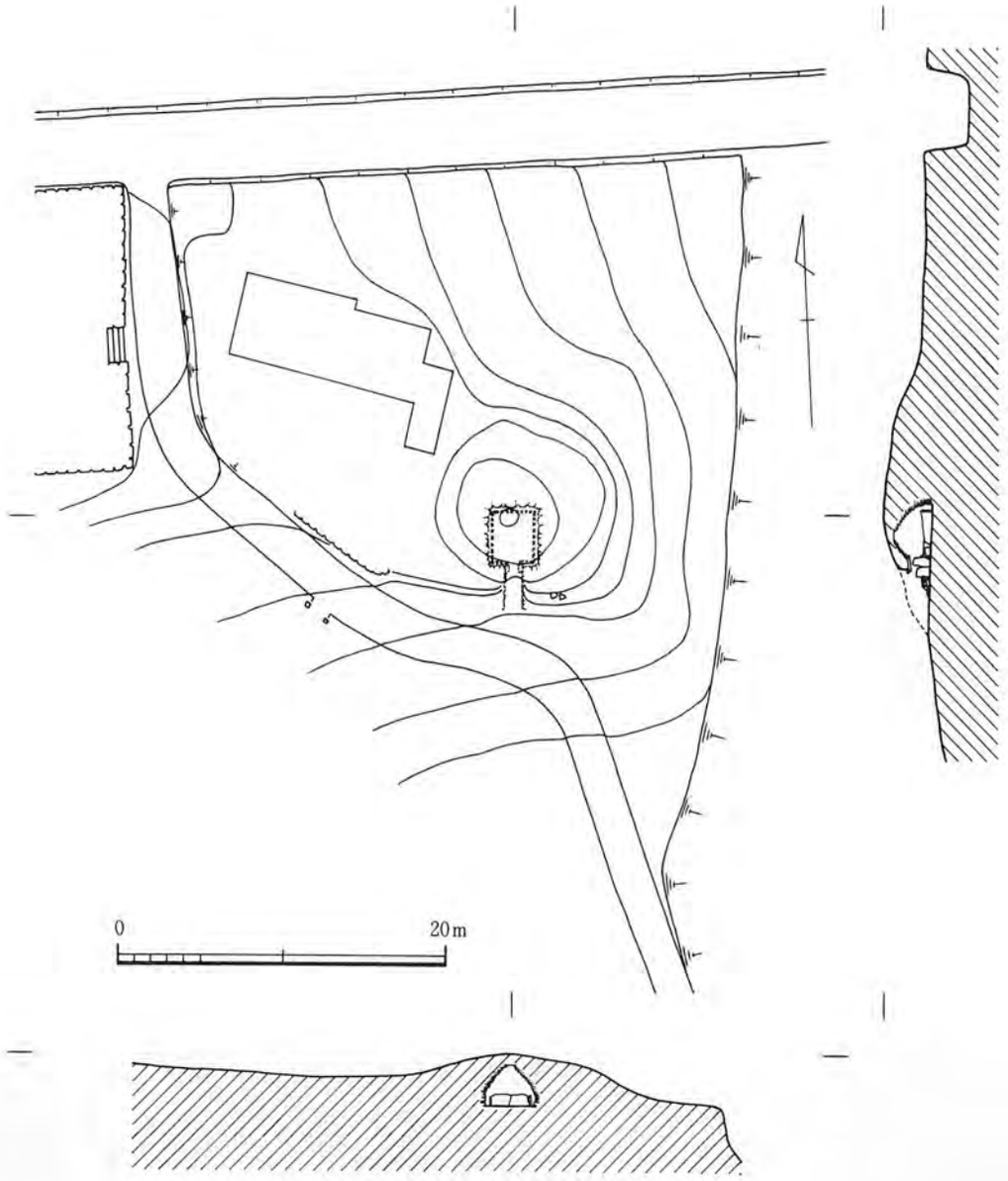
墓　室　石室は安山岩の板状石を持ち送りに平積した隅丸方形で，奥行き3.12m，幅3m，高さ2.55mを計る。石室内には安山岩の板状石をめぐらし石障をつくる。石障は周壁と中央の仕切石が残るが，仕切石を抜き去ったあとがのこり，コの字形に三つの屍床が作られていたことがわかる。周壁は2.62m×2.45mを計り正方形にほぼ近い。

羨道は現在2.5m残り，上部は板状石を平積みし，下部は安山岩を立てならべている。

装　飾　石室内の石障と安山岩を小口積した壁面に朱を塗付するが，現在は剝落がひどく装飾であるか否かは判然としない。かっては羨道部西側腰壁石に赤色で円文と三角文が描かれていたというが，現在は消滅し全くみることはできない。

出土遺物　水晶製勾玉1，ガラス小玉1，開口時のものと

26の2図　富ノ尾1号古墳奥壁（白石巌撮影）



26の3図　富ノ尾1号古墳墳丘測量図

思われる肥後拵の刀の鐺1

年　代　6世紀前半

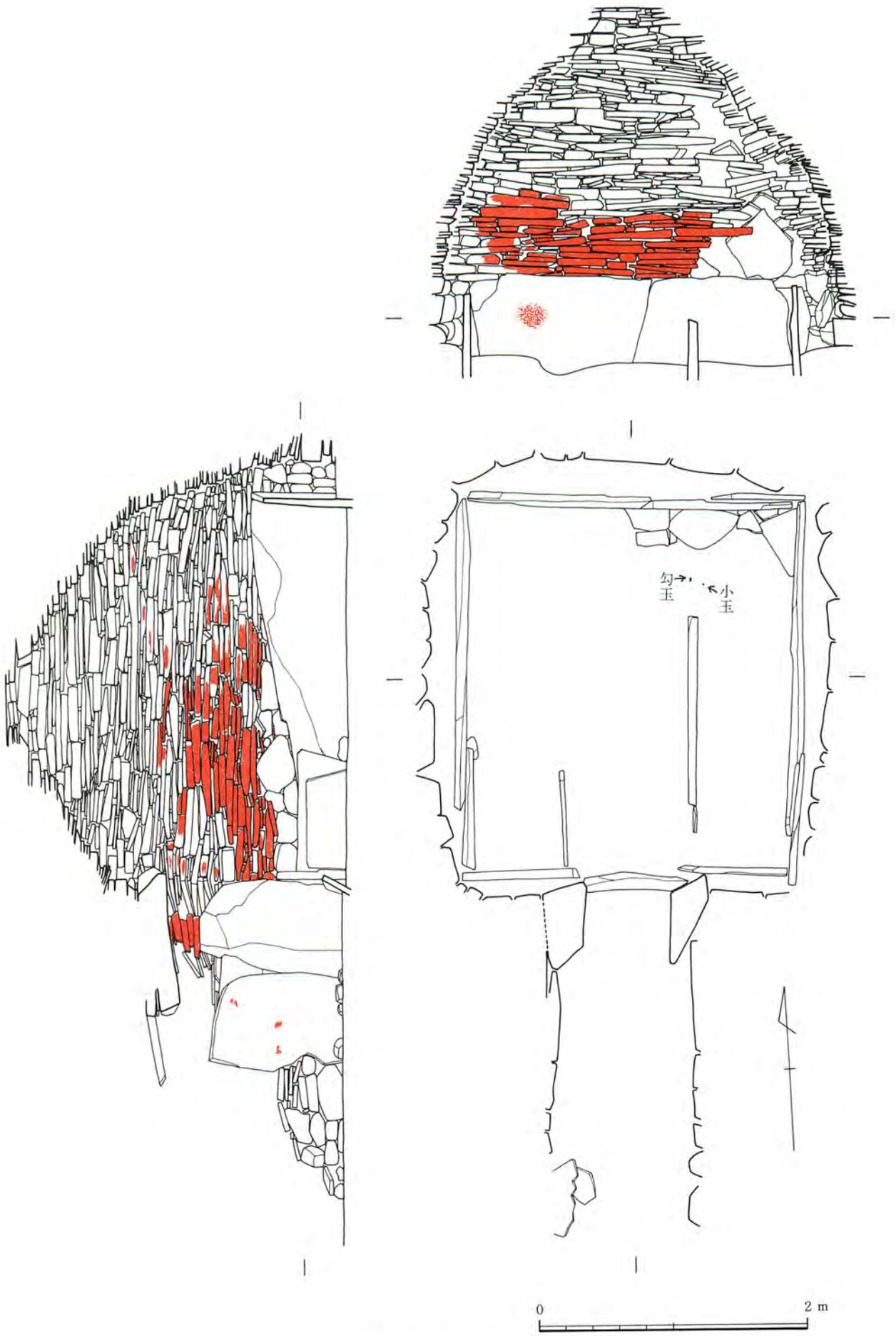
備　考　この付近には本墳を含め3基の古墳がかってあった。2号墳は1号墳の南西約45mにあって，長径約25m，短径約15m，高さ1.5mを存したが，水道局の配水場となり破壊された。3号墳は西方約70mに位置し，小形の前方後円墳で主軸長約30m，後円部径約20m，前方部幅約10m，高さ2.4mであったということであるが，宅地造成の為破壊された後の実見では，前方後円墳であるとの確認はできなかった。

本墳より西南方に約400m，字北島の墓地にヤッコダコ形の石人が祭ってあった。現在は東京国立博物館に所蔵されるが，富ノ尾古墳群のいずれかに付属していたといわれるが確証はない。　（伊藤奎二）

〔参考文献〕

①梅原末治「熊本県下に於ける石人と其の表飾の古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第二冊』　大正14年（1925）熊本

26の4図　富ノ尾古墳群の石人（乙益重隆撮影）



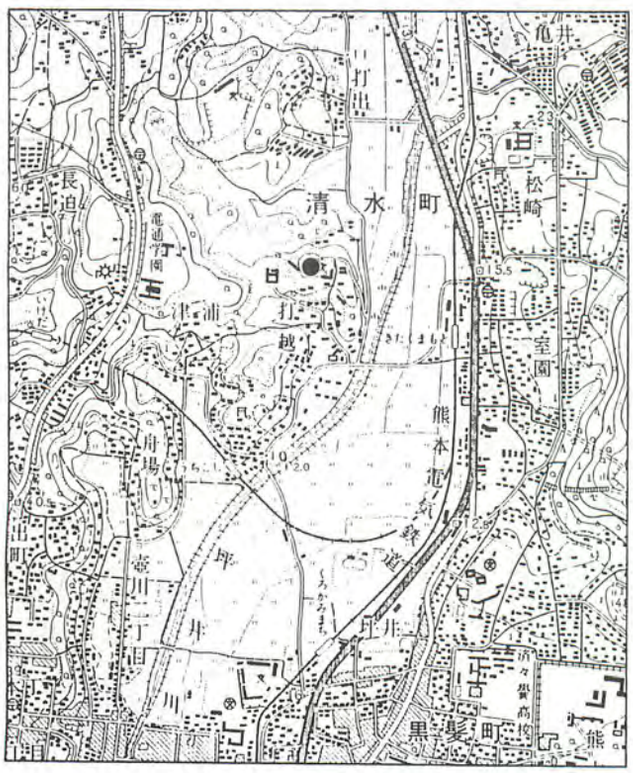
26の5図　富ノ尾1号古墳石室実測図

27. 稲荷山古墳（いなりやま）〔昭和49年県史跡〕(⇨27の１・２図)

——熊本市清水町打越521－4——

立　地　坪井川上流の右岸，通称京町台の東北端，標高約40mの丘陵頂上にある。

墳　丘　直径約30，高さ７mの円墳，付近に稲荷神の小祠が祀られている。



27の１図　稲荷山古墳位置図（熊本2.5万分の１）

石　室　安山岩の割石と自然石を用いた横穴式石室で，南に開口している。石室は奥行き2.9，幅2.9mのほぼ正方形で，細長い羨道（長2.8，幅約0.8，高1.15m）を有する。石室の奥壁に板状自然石で構築した石屋形，その前方に通路をはさんで左右に２区の屍床が板石で区画されている。

装　飾　石屋形の奥壁と側壁，屍床の仕切などに赤・白・青の顔料で同心円や三角形の連続文が描かれていたが，現在はうすれている。

出土遺物　石屋形と右屍床から，変形獣帯文鏡（径9.6cm）１，玉類（勾玉，管玉，棗玉，小玉），大刀３，矛４，鏃63，杏葉２，雲珠３，その他金環，轡，須恵器，土師器，刀装具類などが出土した。杏葉は長さ15.5，幅11cmの鐘形を呈する金銅張りで，表面に唐草とハート形を組み合せた透し彫りの板を裏板に鋲留めにしている。

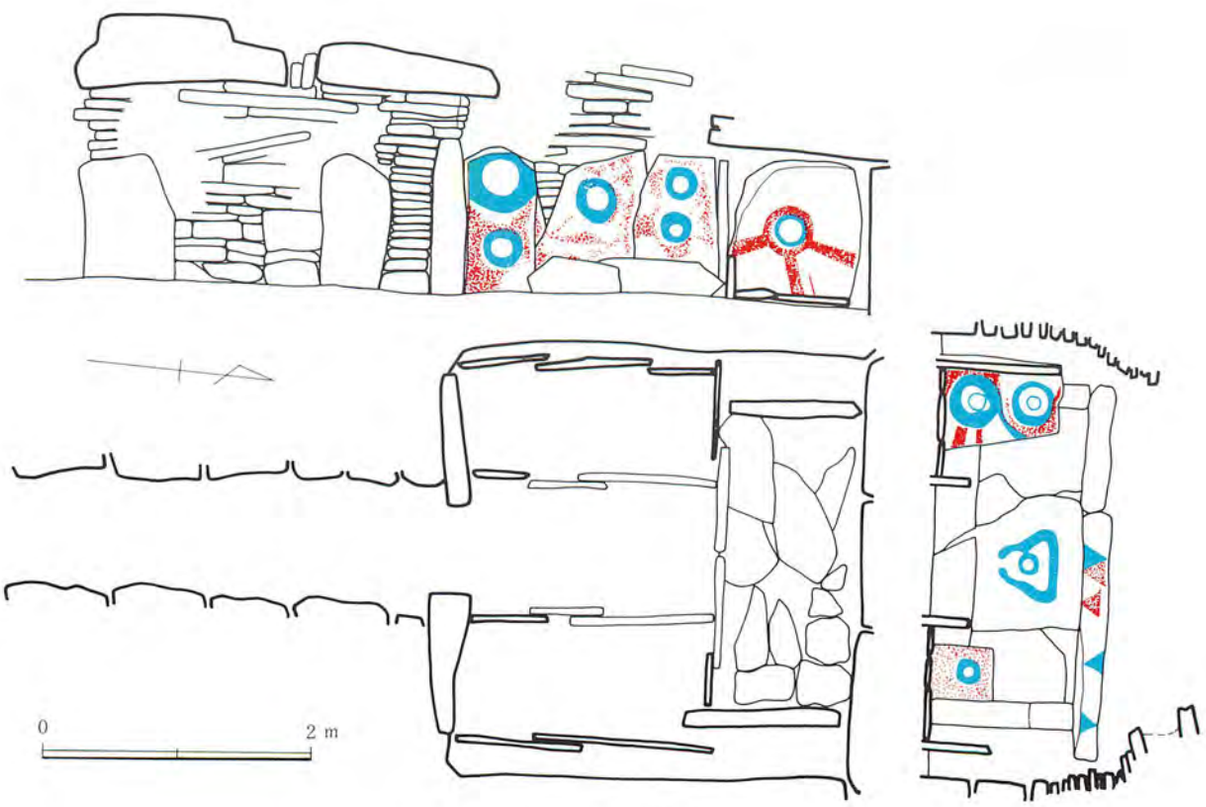
年　代　６世紀後半

備　考　昭和22年（1947）10月10日，当時熊本語学専門学校生高士与市，上野辰男ら９名が発掘した。昭和48年（1973）熊本市教育委員会が保護のための覆屋を施し，昭和49年（1974）３月23日，県史跡指定。　（隈　昭志）

〔参考文献〕

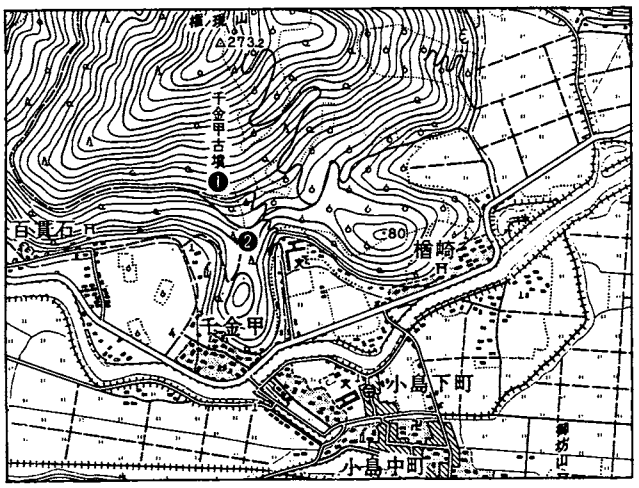
①高士与市「稲荷山古墳研究号」『考古学報』第１輯，昭和24年（1949），プリント

②乙益重隆「稲荷山古墳」　小林行雄編『装飾古墳』昭和39年（1964），平凡社



27の２図　稲荷山古墳石室実測図

28．千金甲1号(甲号)古墳〔大正10年国史跡〕　(⇨28の1～5図)　——熊本市小島下町勝負谷——

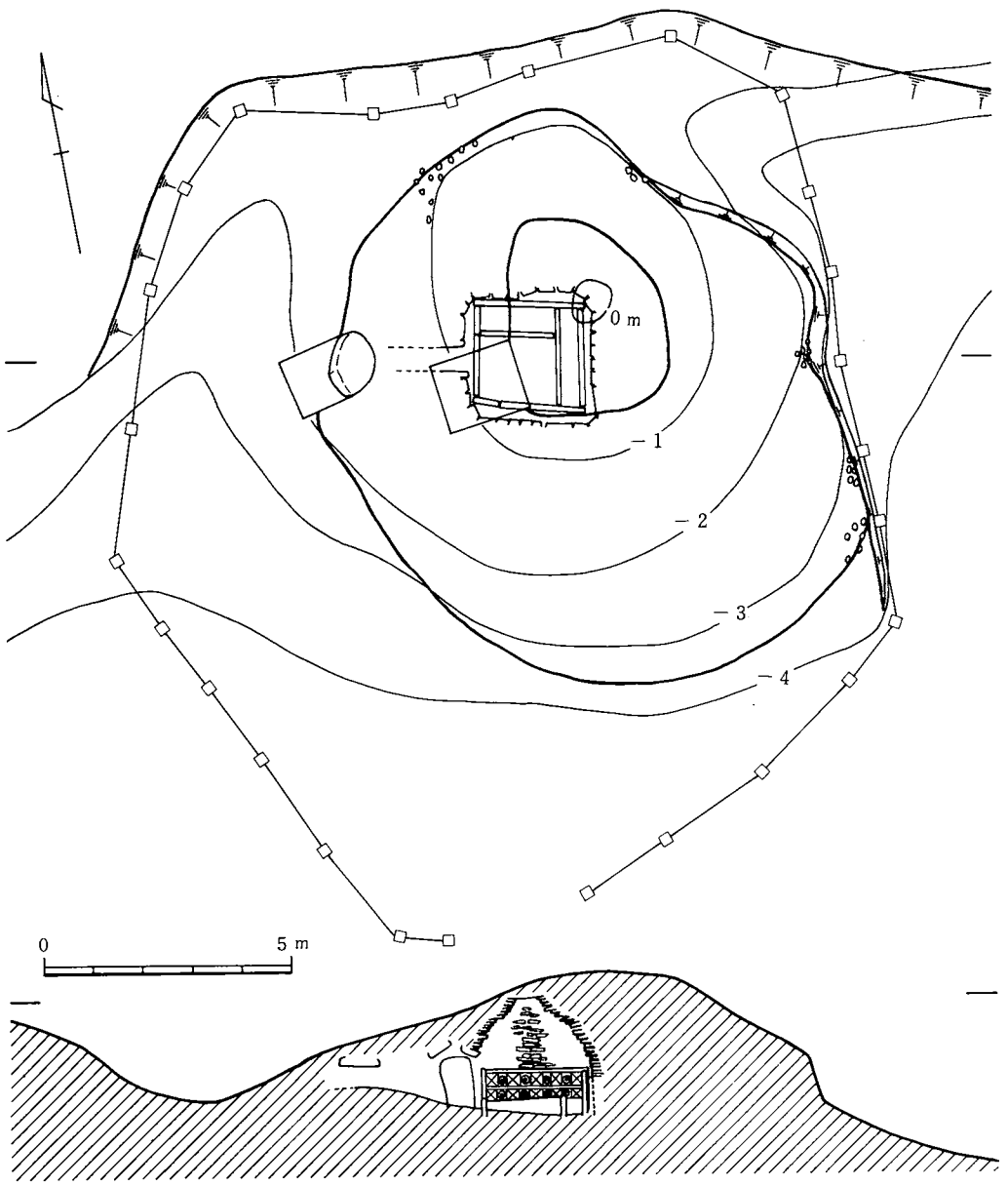


28の1図　千金甲1号・2号古墳位置図 (熊本2.5万分の1)
1　千金甲1号古墳　2　千金甲2号古墳

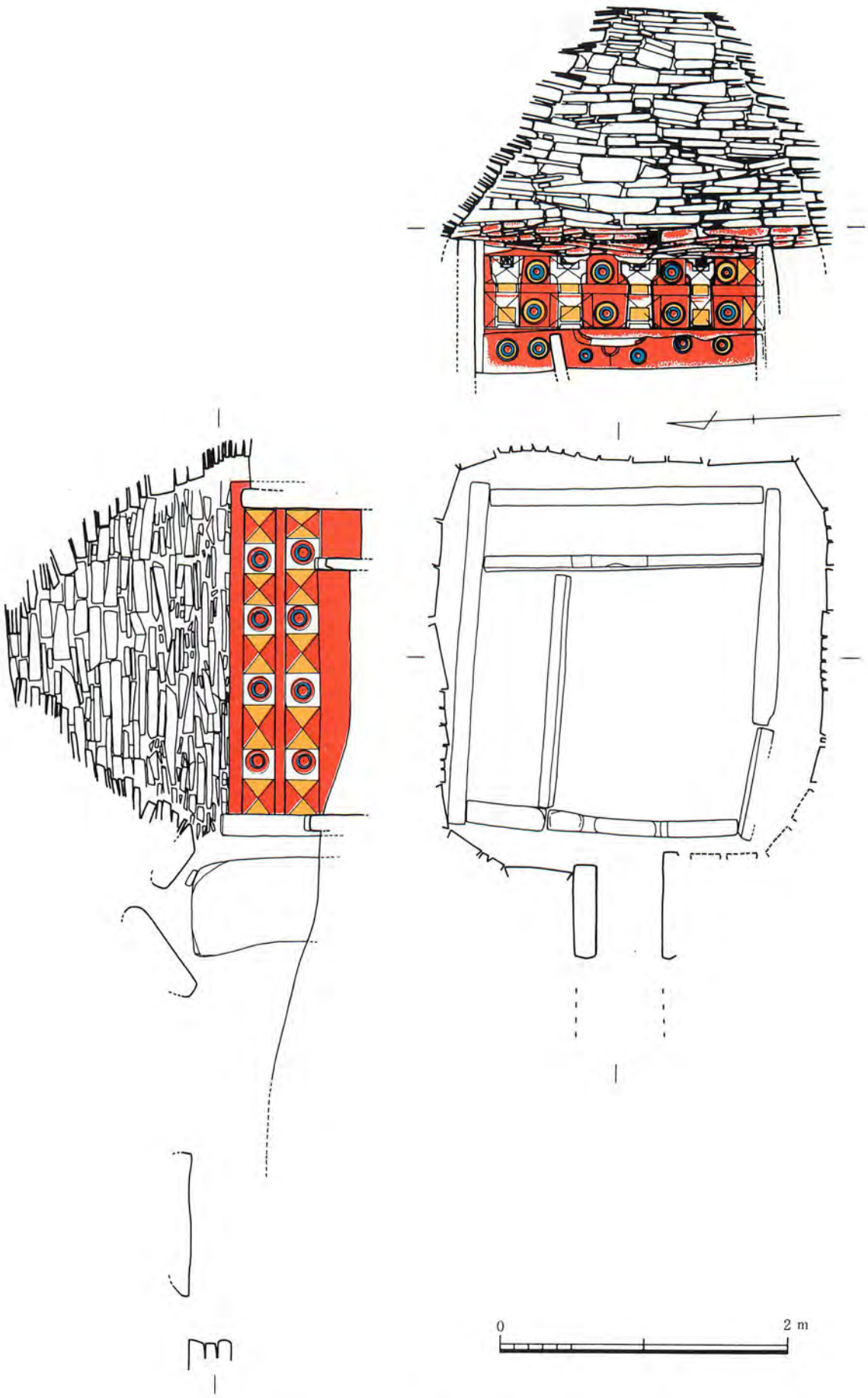
立　地　主峯金峰山から南に派生する権現山丘陵(標高110－120m)の南傾面に位置する千金甲古墳群中の1基。

墳　丘　急斜面中腹の山地を削り平担面を作り，石室を構築した円墳である。削平・掘開の跡は周湟状の凹地となる。直径12m，高さ3mを認める。墳丘面には，塊石の葺石を認める。(28の2図)

墓　室　ほぼ西方に開口する板石小口積みの横穴式石室であるが，羨門部は早く破壊を受ける。羨道部未発掘（調査時現在，盗掘孔より出入りした）であるが，推定長 3.6mを測りかつ狭長である。玄室の平面は奥行 2.7m，幅 2.6mの隅丸方形で，室内の四周には高さ80cm，厚さ15cmの阿蘇熔岩の切石を石障として立てめぐらし，その内面に装飾を施すが，羨道に通ずる西側のそれにはなく，中央部に浅いU字状のくり込みがある。床面はさらに仕切り石によっ



28の2図　千金甲1号古墳墳丘測量図



28の3図　千金甲1号古墳石室実測図

て奥壁に接する幅狭な小区（1区）と左（2区）右（3区）の各区計3区の屍床に区分されるが，現在は南側第3屍床を欠ぐ（京都帝国大学調査時には一石遺存。文献①）。中央部は通路である。天井部は板状の安山岩を持ち送りに挺出し頂部を巨石一枚で塞ぐ。高さ約 2.4m で墳丘の基底面に近い。肥後型横穴式石室（石障系古墳）。（28の3図）

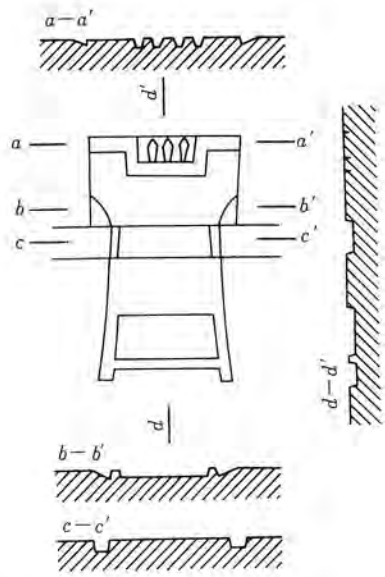
装　飾　前述のごとく石障内面に装飾を施すが，羨道に通ずる西側のみは認めない。さらに奥壁に平行する仕切り石外側に装飾が施されかつ中央部にくり込みがある。（28の3図）

奥壁：4條の横刻沈線で上下2段を画し，さらに縦線により9個の文様区を作る。各文様区上下に対角線文と同心円文を交互に刻む。対角線の彫りは金属でかいたもののごとく狭くかつ浅い。同心円文は三重の半肉彫りであるが，コンパスを使用したらしく中心孔を認める。径は約6，11，16cmとおよその規格がある。彩色は中心から赤・青・黄・赤の順序に塗り別ける。対角線の上にさらに3本の矢をもつ短脚の靱を深く浮彫りに彫る。図示（28の5図）のごとく靱には上下二段の長方形状の凹面に黄色顔料を塗彩。また上段凹面より上位は黄色顔料を認めつつも黒色味をおび，黄色とは明かに識別できると伊藤奎二氏は観察している。なお靱には帯状の赤色塗彩が部分的に認められる。3本ならぶ矢のまわりは緑色が遺る。対角線によって4つに区画された三角形について，留意すべきことがある。それは右端の上下同心円に接した対角線文区で円に接する2つの三角形のみが黄色であり，他は赤彩であることである。本来はこの区は靱が描刻されるべき場所である。なお，乙益重隆氏は本墳の各壁の描画を左から右へではないかと疑いかつ右端では「構図を調節したか」とものべている。（文献6）。

Ⅰ区仕切り石：上縁と外側面は赤く塗彩され，上縁中央部には二重の縁取りをなした舟底状のくりこみを持つ。その中央直下にワインカップ状の線刻がある。これを中心に左右に3個ずつ計6箇の青色によって塗り別けられた赤・黄の二重円を配する。

2号石障：石障の装飾は要約していえば，奥壁石障の文様構成帯から靱を省いただけの図柄であるが，留意すべきことは，対角線で区分形成された4つの三角形の中で，上下の2三角形は赤彩され，左右の2三角形のみは黄色顔料で塗彩されている。この手法は上述奥壁右端にも認められた。3号石障の装飾も2号と同じである。

28の4図　千金甲1号古墳玄室の装飾文（白石　巌撮影）



28の5図　千金甲1号古墳奥壁の靱彫刻模式図

出土遺物　開口が古くほとんど判らないが，大正5年（1916）に碧玉製管玉1が得られたと（文献2）。

年　代　6世紀初

備　考　①国指定史跡　②本墳の調査は昭和39年（1964）8月25—26日で，42年（1967）4月の復原工事以前の調査である。伊藤奎二・佐藤伸二・村井真輝・菊池・三島格（責任者）らにより実施。地形・室内実測図は上記諸氏による。　（三島　格）

〔参考文献〕

①梅原末治「飽託郡小島町千金甲高城山古墳群」『京都帝国大学文化大学考古学研究報告』1　P16—24　大正6年（1917）京都
②浜田耕作・梅原「千金甲古墳」『熊本県史跡名勝天然記念物調査報告』4　P16—20　昭和2年（1927）
③乙益重隆『肥後上代文化史』P 138— 139　日本談義社　昭和29年（1954）　熊本
④三島格「千金甲古墳1号」斎藤忠編著『日本原始美術』5　P 184　講談社　昭和40年（1965）　東京
⑤斎藤忠『日本装飾古墳の研究』　講談社　昭和48年（1973）東京
⑥乙益重隆「千金甲第1号・第3号古墳」小林行雄『装飾古墳』P86—87　平凡社　昭和39年（1964）
⑦『熊本市西山地区文化財調査報告書』P86—87　熊本市教育委員会　昭和44年（1969）　熊本
⑧松本雅明編著『熊本の装飾古墳』P 130　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑨乙益重隆「石障系石室古墳の成立」『国学院大学大学院紀要』11　P31—60　昭和54年（1979）　東京
⑩柳沢一男「肥後型横穴式考」『古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念　P465—497　昭和55年（1980）　福岡
⑪河野法子「石障系古墳の一考察」『肥後考古』2　昭和57年（1982）　熊本

29．千金甲3号(乙号)古墳〔大正10年国史跡〕（⇨28の1図，29の1・2図）

——熊本市小島下町高城山——

立　地　熊本市の西方，金峰山の南，権現山（標高273.2m）より南，高城山にのびる丘陵鞍部に立地し，眼下に坪井川，白川河口，さらには有明海をみる。

墳　丘　丘陵鞍部のやや南西に傾斜した平坦面に設けられた円墳で径約15m，墳丘は三段に築成せられ，各段共に南西側は安山岩による2～3段の裾石がめぐる。天井石は早く失われ現在は保護屋にて覆い，墳高は不明である。

墓　室　羨道は西に開口し現在長2.5m，入口はコンクリート枠に鉄格子扉がもうけられ，現在よりもう少々長かった可能性もある。石室は奥行き3.7m，幅3.15m隅丸の平面プランをとる。高さは不明であるが現在高3.7m，当初は4mをこえていたものと考えられる。安山岩割石平積み持ち送りで築造せられ，千金甲1号古墳にくらべ石積はやや雑である。石室奥に安山岩割石の石屋形をつくる，高さ1.65m，幅2.5m，奥行き1.35m，架石の厚さ0.35mをはかる。石室内には石障があったと思われるが，現在は確認できない。

装　飾　装飾は石屋形にみとめられ，クギ状のもので描かれたと推定せられる細い刻線よりなり，剝落し部分的にしか確認できぬが，彩色がほどこされている。石屋形架石正面に円文，京大報文では三重の円文とされるが径27cmの円の一部が残存するのみで，他は消滅してしまっている。石屋形奥壁は2石よりなり，右石には上段に消えかかり判別が困難であるがゴンドラ状の舟，中段はヤッコダコ形の靱と弓とが交互に4個，下段は右側に靱1個，中央に三重の同心円，左に二重の円文の一部が描かれている。石屋形奥壁左石は上段にゴンドラ状の舟，中段は靱4個弓1個，右側の靱は石の剝落もあり判別しにくいが，ヤッコダコ形の靱の袖は弓とも考えられる。下段は三重の同心円と左に太刀1振が描かれている。左側袖石正面には2個の太刀状の装飾がみられるが，消えかかり装飾であるかいなかも不明である。左側袖石内面は中央に上下2段に三重の同心円文，両側に太刀状の装飾がみられる。京大報文には「頭椎太刀のごときをなす」とあるが，把頭の部分に手書きによる二重の円文が描かれたものかもしれない。右側袖石内面は上段に4個の靱と弓を交互に描き，下段には2個の二重の同心円文を描く。

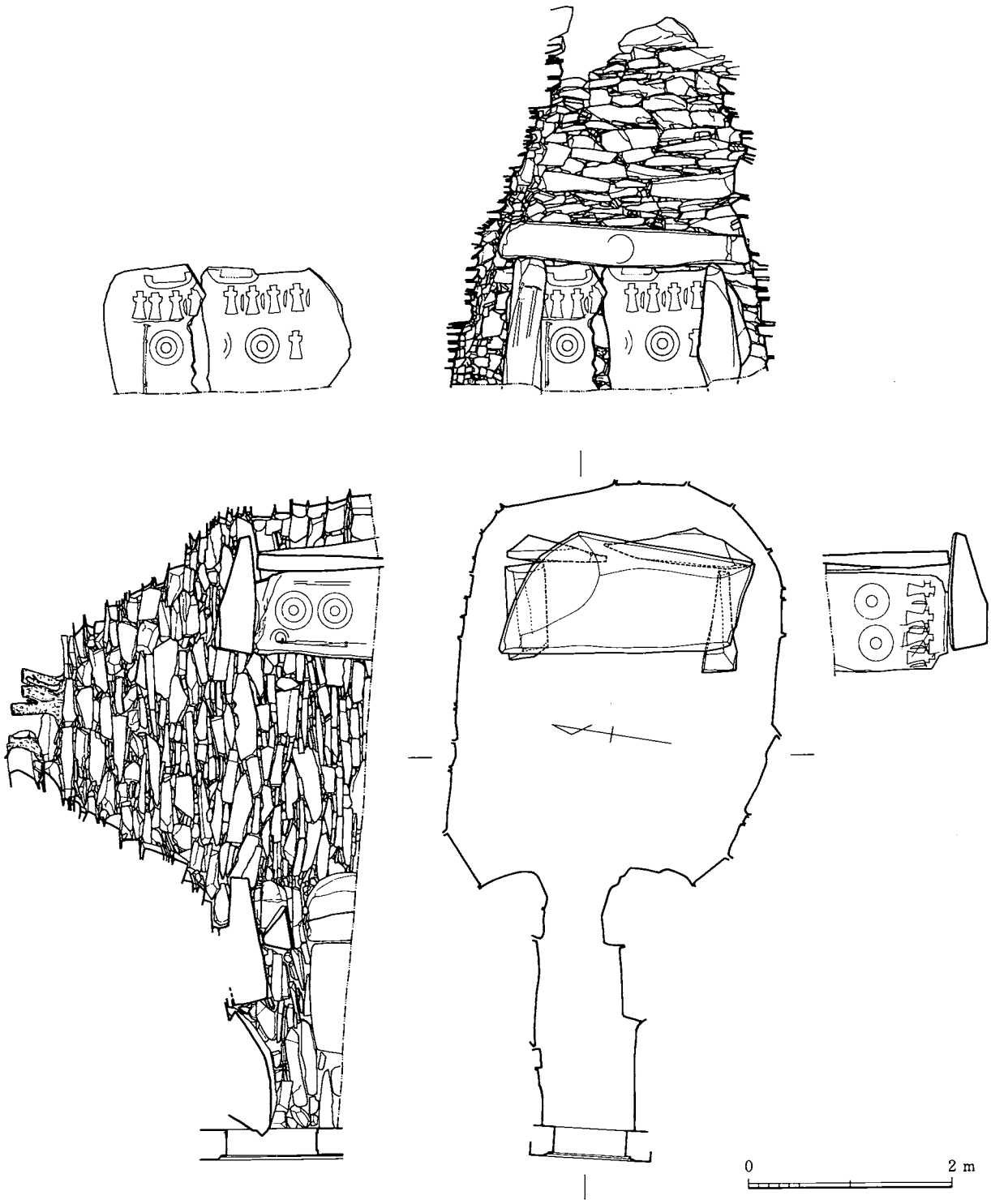
同心円文は架石正面においては不明であるが，奥壁左右の2個の三重の同心円文，左袖石の2個の三重の同心円文，右袖石の2個の二重の円心円文はいずれもコンパス状の器具を使用して描かれたと推定せられ，それぞれ中心点が確認できる。大円は35.1cm～34.7cm，中円は23.3cm～21.5cm，小円は11.3cm～10.7cmの範囲内に直径がおさまる。

彩色は石屋形内面の刻線の部分のみにみとめられる。ほとんど消えかかり痕跡のみであるが緑と赤の2色が確認できる。一部にしろ彩色が残る部分をあげると，左袖石内側の円心円文の中円が上下共に緑，奥壁右石中段の靱が右より2個目の靱をのぞき緑，弓は左右両端が緑，下段中央の同心円文の大円が緑，中円が赤，左に一部残る円文の大円が赤，中円が緑で他には彩色はみとめられない。しかし京大報文には他にも彩色の記載がある，60年余の間に消え去ったのであろう。

出土遺物　開口が古く，出土遺物は知られていない。

年　代　6世紀後半　（伊藤奎二）

29の1図　千金甲3号古墳の墳丘（中央部・白石巌撮影）



29の2図　千金甲3号古墳石室実測図

〔参考文献〕

①梅原末治「飽託郡小島町千金甲高城山古墳群」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』（京都帝国大学文科大学考古学研究報告第一冊）大正6年（1917）京都

30. 井寺古墳〔大正10年国史跡〕(⇨30の1～5図)

——上益城郡嘉島町井寺富屋敷——

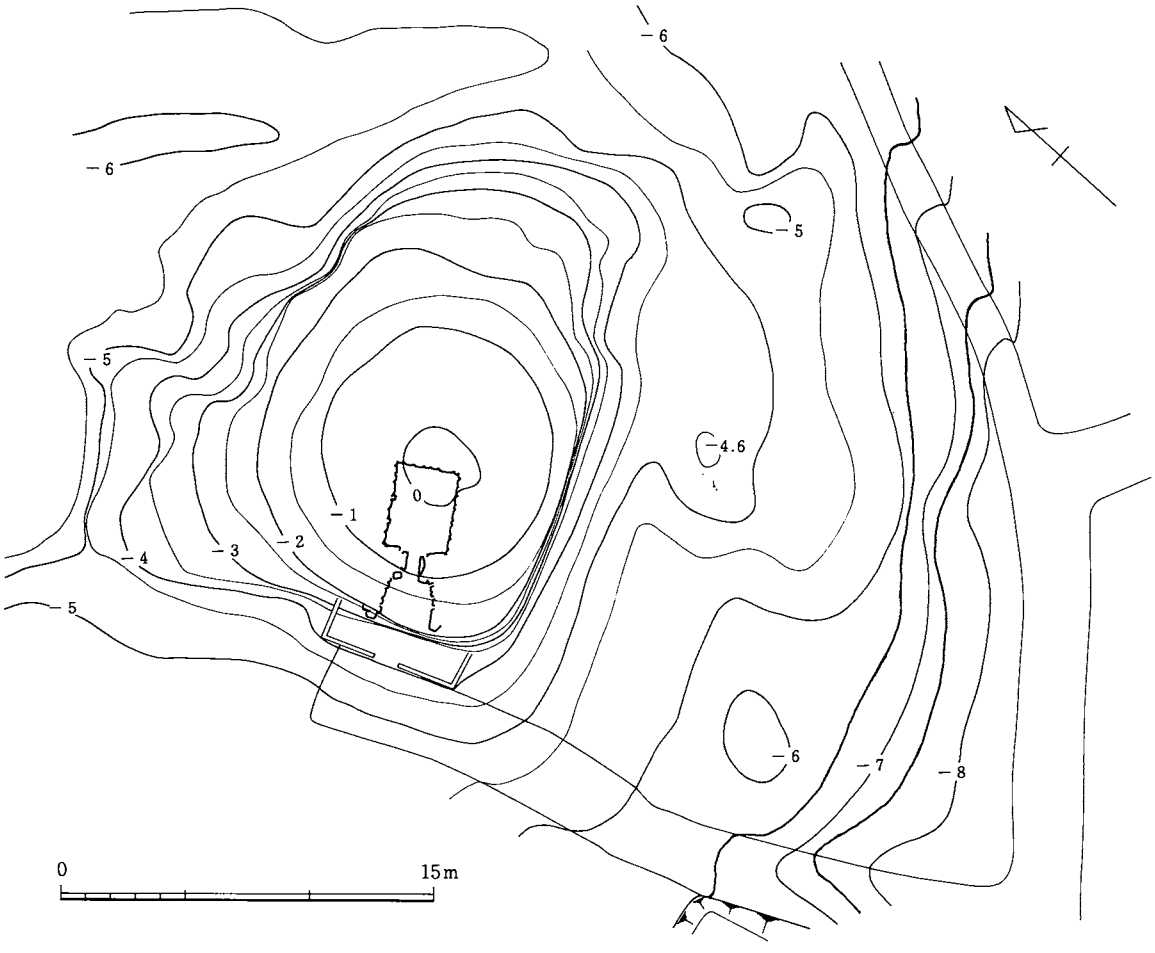
30の1図　井寺古墳位置図（健軍・御船2.5万分の1）

立　地　井寺集落の背後にひかえる丘陵の南西斜面にある円墳で，東南方約400mにはジョウカンヅカの円墳2基がある。『御郡方記録』によると古墳は安政4年(1857)の地震で開口したといい，大正10年（1921）3月3日国の史跡に指定された。

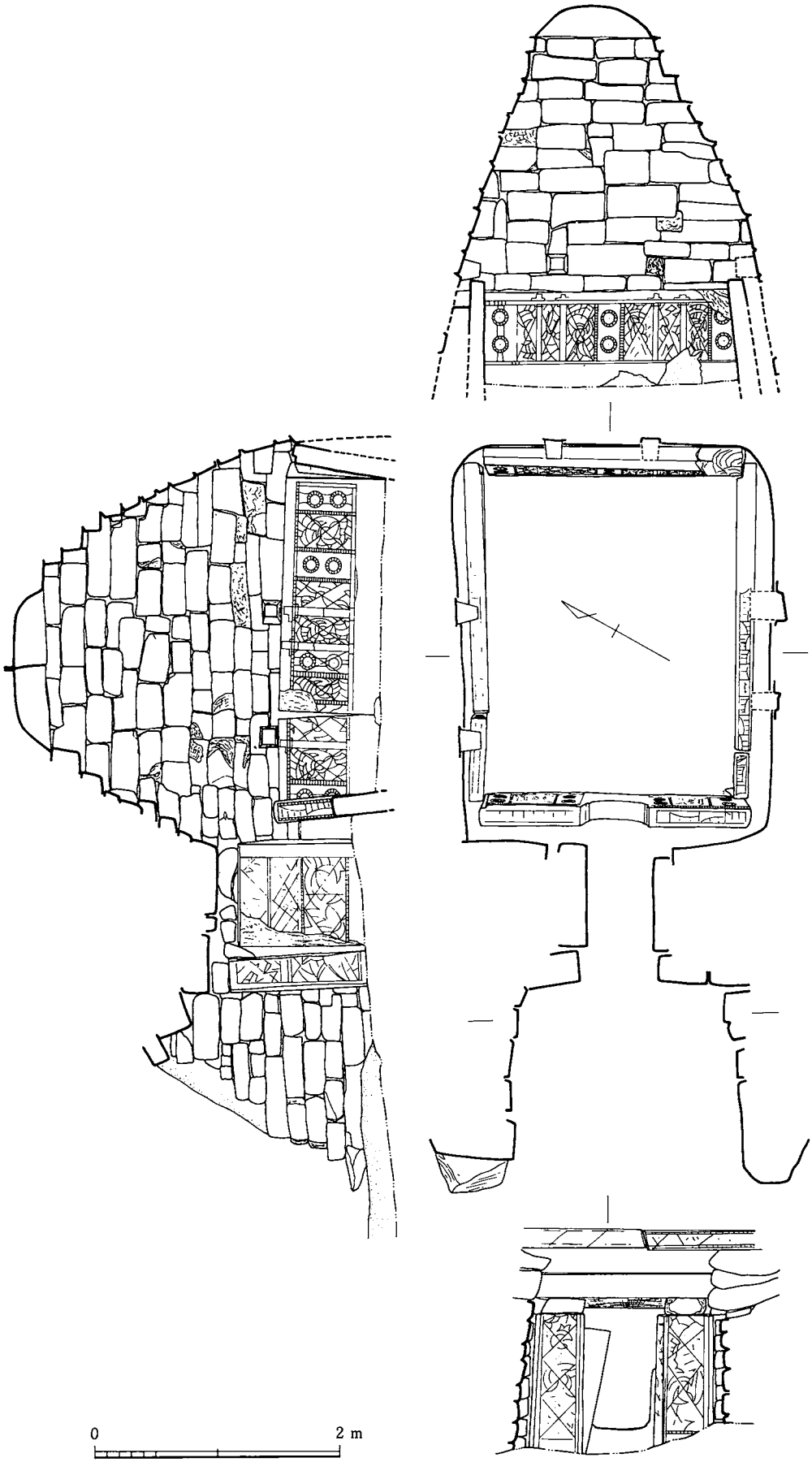
墳　丘　現存直径約28m，高さ6mを有する円墳で，南側は著しく変形している。墳丘上には雑木と竹が繁り，崖線に沿って石室入口にむかう小道がつくられている。

石　室　全体は西にむかって開口する横穴式石室で，羨道部奥行1.08m，幅0.56m，玄室奥行2.94m，幅2.47m，天井までの高さ3.08mを有し，もとは前室があった疑がある。もしそうだとすると総奥行5.60mになる。石室内部は阿蘇熔岩の切石を練瓦状に整え，これを持送り式に築き，天井は内面を長楕円形にえぐった巨石で塞ぐ。室のまわりには高さ85cmの切石づくりの石障6枚を立てめぐらす。もとは内部の中央通路を中心に，コの字形配置をもって3区の屍床を設け石棚を架していたといい，現在石材の一部が残る。

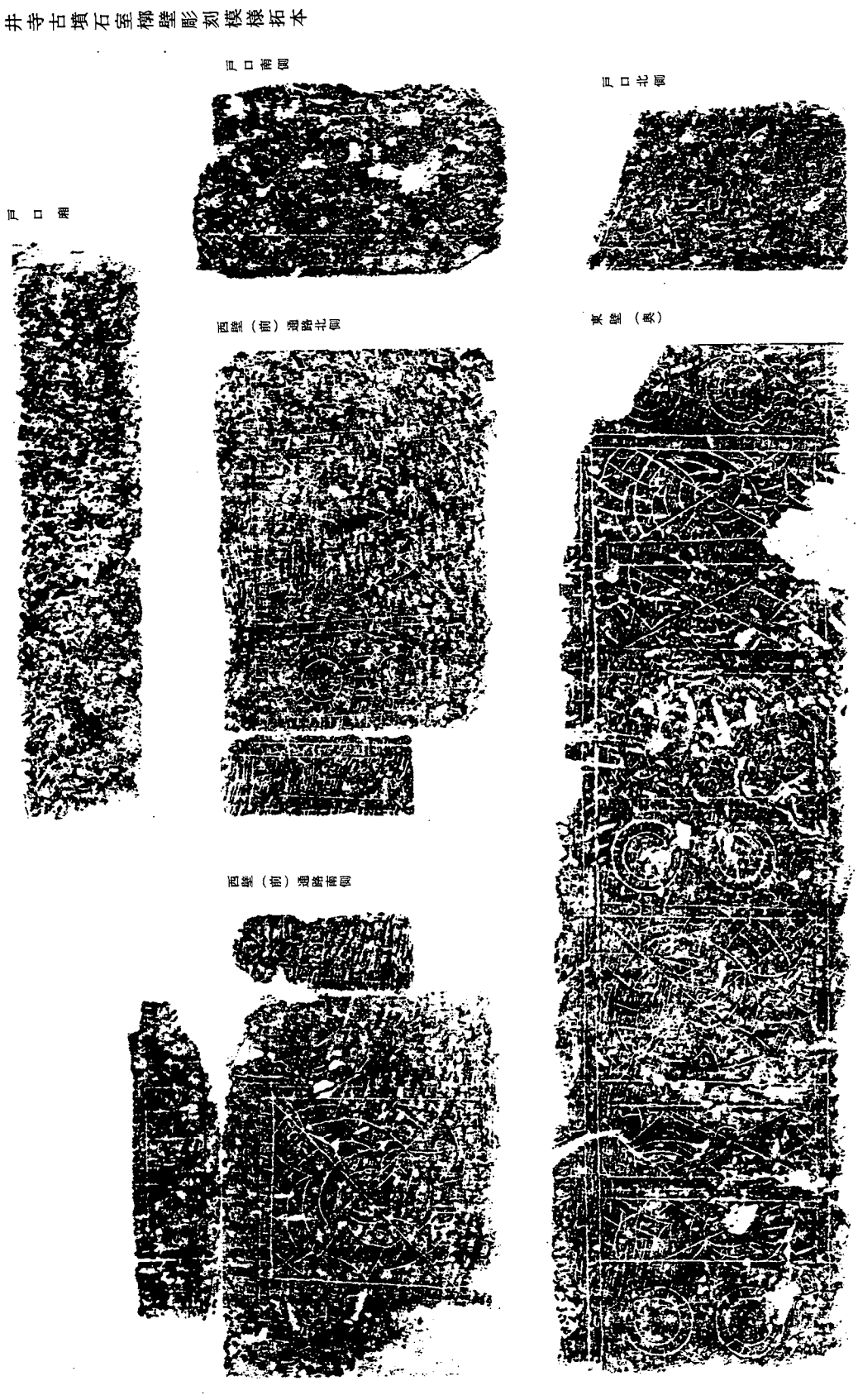
装　飾　石室内の装飾はすべて直弧文を主とする幾何学図形文様で，石障内壁をはじめその上面，石棚の前面，羨道の両側壁，入口の両袖石，石梁の表面など各所に線刻している。まず石障面の文様は梯子文や柱状文で囲んだ中に，



30の2図　井寺古墳墳丘測量図



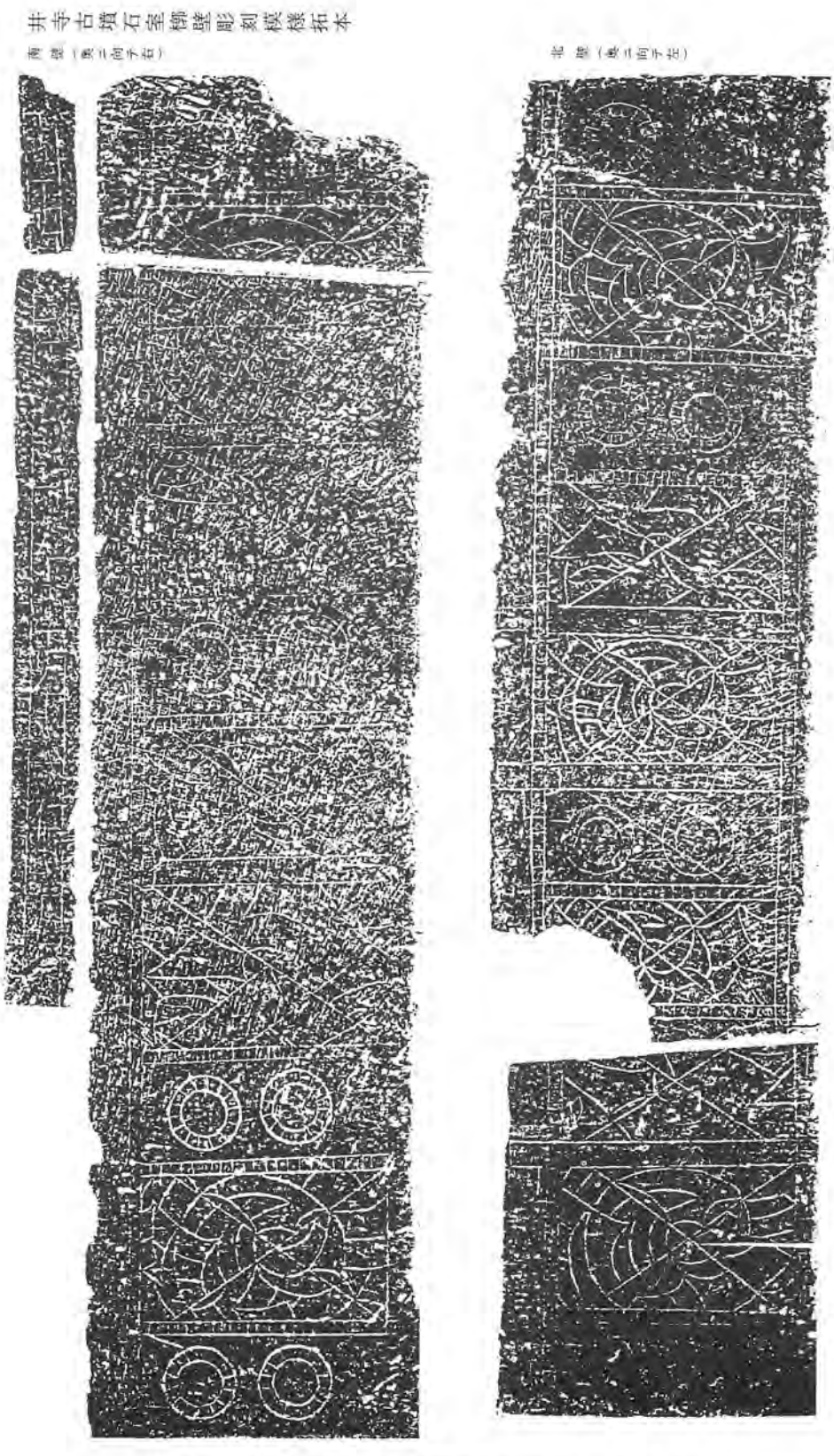
30の3図　井寺古墳石室実測図



30の4図　井寺古墳石室の線刻文拓影図(1)（京大・文献①より）

車輪文や直弧文A型やB型を一定の順序で描く。とくに直弧B型の中には左右反転して描いたものがあり，また羨道部側壁には直弧文A型とB型を連続して組合わせたC型文様もみられる。さらに入口につづく石障の一部をU字形に抉り込んだ部分や，石障の上面には鍵ノ手文を連続して描く。しかもそれらの図形文様は赤・青・白・緑の4色で塗りわけ，もとは幔幕を張りめぐらしたように鮮やかで荘麗をきわめたが，今では剝落してしまった。

要するに井寺古墳の装飾文様は，わが国における直弧文という名称の起源となった点でも意義深いものがあり，かつその基本的図形のすべてが表現されている点でも重要性がある。



30の5図　井寺古墳石室の線刻文拓影図(2)（京大・文献①より）

出土遺物　かってこの古墳石室内には，石棚の上に鏡2面があったというが失われて明らかでない。現在大刀4が熊本市立博物館に出陳されているが，特記すべき点はない。

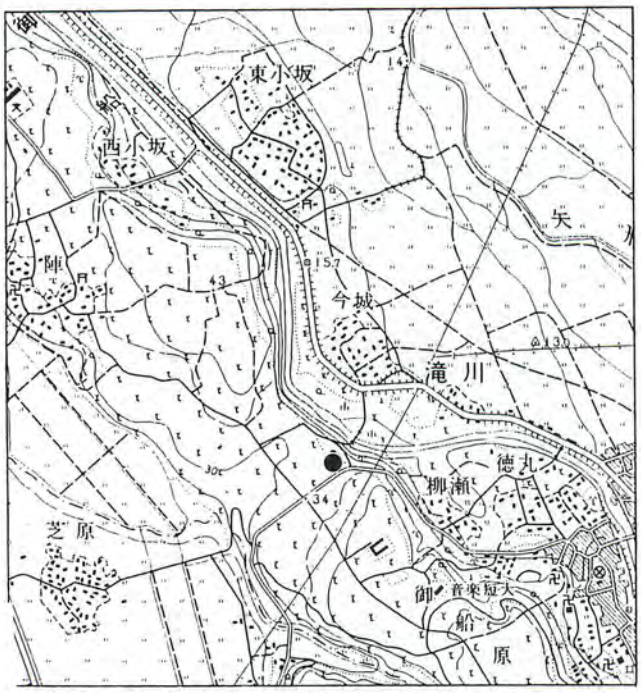
年　代　（乙益重隆）

〔参考文献〕

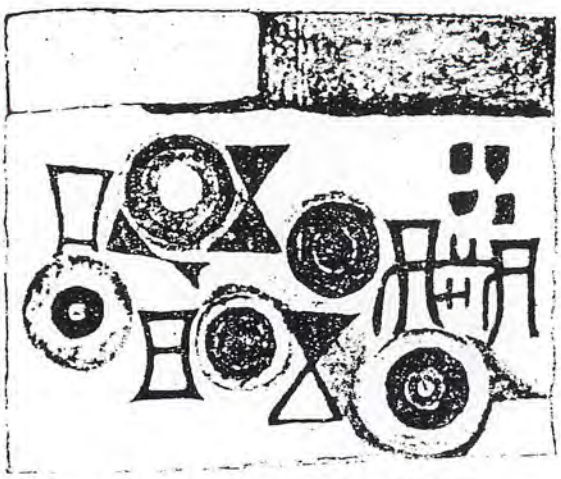
①浜田耕作「上益城郡六嘉村井寺古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴』（京都帝国大学文科大学研究報告第一冊）大正6年（1917）
②乙益重隆「井寺古墳」小林行雄編『装飾古墳』P88－89　平凡社　昭和39年（1964）
③乙益重隆編『装飾古墳と文様』（古代史発掘8）講談社　昭和49年（1974）
④田添夏喜『史跡井寺古墳』嘉島町教育委員会　昭和57年（1982）

31 ．今城大塚古墳（いまじょうおおつか）〔⇨31の１～６図〕

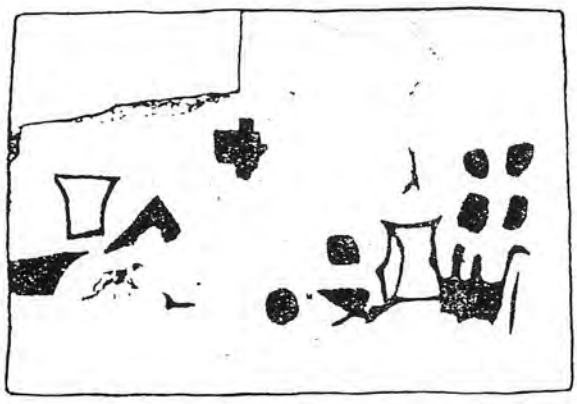
——上益城郡御船町滝川1373番地——



31の１図　今城大塚古墳位置図（御船2.5万分の１）



31の２図　今城大塚古墳石室奥壁装飾図(1)
大正２年和田千吉氏調査（京都大学・文献①より）



31の３図　今城大塚古墳石室奥壁装飾図(2)
大正７年梅原末治氏調査（京都大学・文献①より）

立　地　御船町の西南に横たわる火山灰台地の辺縁部にあり，古墳の裾部で標高約36m。北約50m で西流する御船川の崖に達する。

墳　丘　台地上に封土を築成しているが，南北に狭長な墳形に変容している。墳丘の比高差は約５m，残りの形からして前方後円墳の可能性が強い。

墓　室　西に開口する墓室は，玄室・羨道からなり阿蘇熔岩を使用している。玄室は3.4ｍ×２ｍの長方形のプランで，南側壁は１枚の切石，北側壁は２枚の切石を使用している。奥壁は１枚の平板な切石（左上部一部を欠く）からなり，そこには装飾文が描かれている。また奥壁上端から石室内に石棚が設けられているが，両側壁には石棚前端より少し下ったあたりに円形の刳り込みがあり，中央部がいぼ状に出ていることは，石棚前端に横に棒を差し渡したことをにおわせる。側壁上は５～６個の切石を持送り式に横積みにし，その上に天井石が乗っている。天井までの高さは３ｍ（側壁上2.2ｍ）であるが，側壁上の石積みが軟弱であるため，痛みが激しく随所に縦のひび割れがある。さらに，北側上面は崩壊している。羨道部は両側各３枚の切石からなり，幅約1.3m，奥行約3ｍである。また羨道部の天井は一部を残して失われている。羨門部は幅48cmであるが，南側の袖石は磨耗して基部を残すだけである。

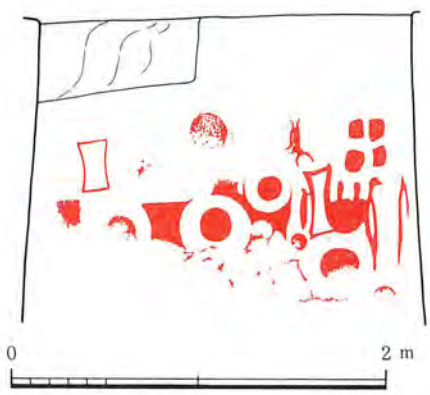
装　飾　奥壁全面に装飾文が確認される。彩色文様について和田千吉氏によると緑・朱・黄等の色彩を用いたとしているが，現状では朱（赤）以外の色彩を検出することは難しい。図柄は数個の円文，楯等が確認される。

石　函　石室の開口部の北側に石函がある。75cm×55cmの箱状のもので，一側が段をなし上部は丹彩されている。また上端両側に溝状の切込みがある。

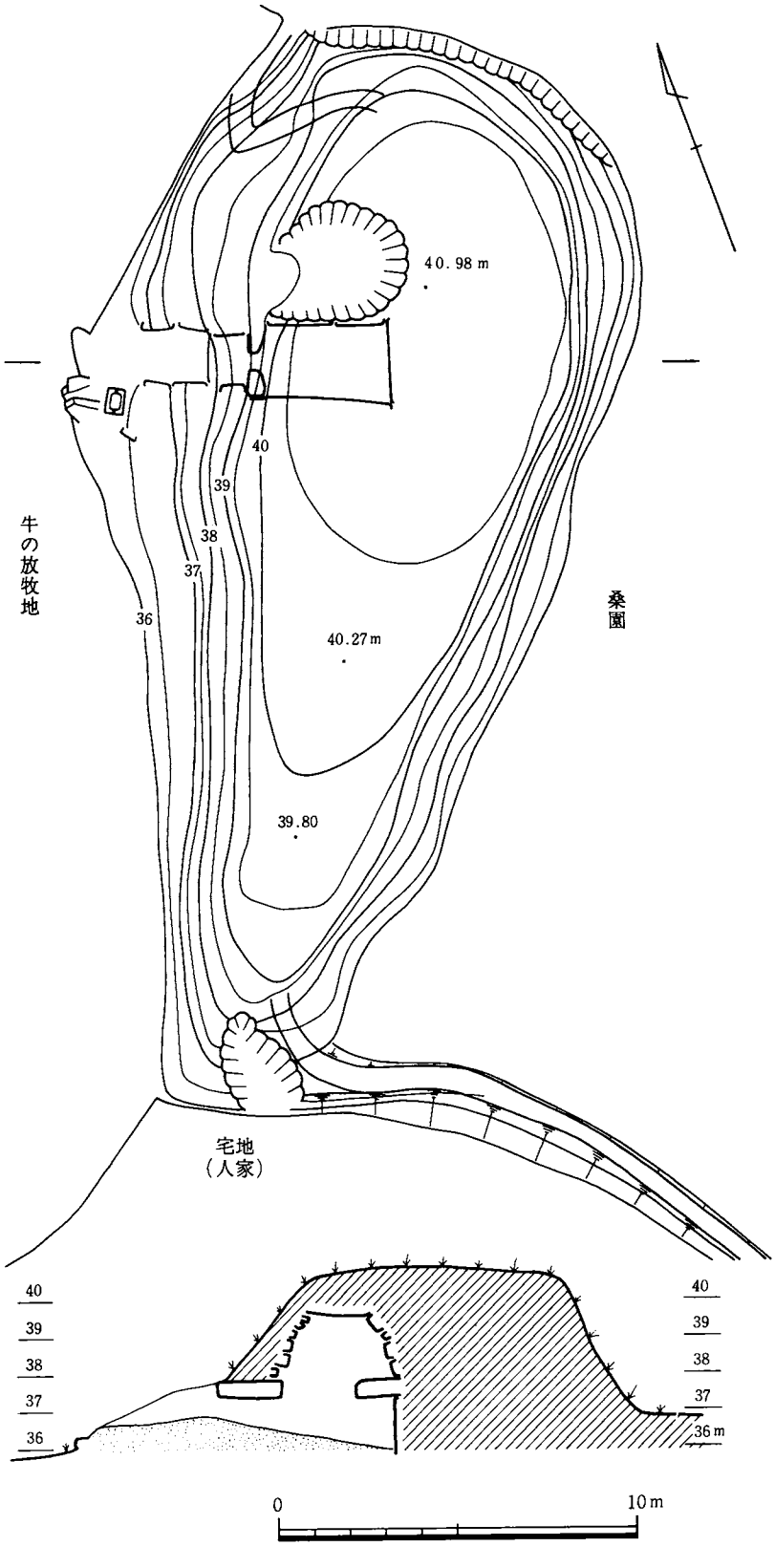
出土遺物　且て，一部の床さらえで，須恵器（大型器台）の存在が確認されている。

年　代　６世紀後半

備　考　古墳の周辺に人家が出来はじめ，古墳の範囲確認の調査と早急な保存対策が求められる。　（緒方　勉）

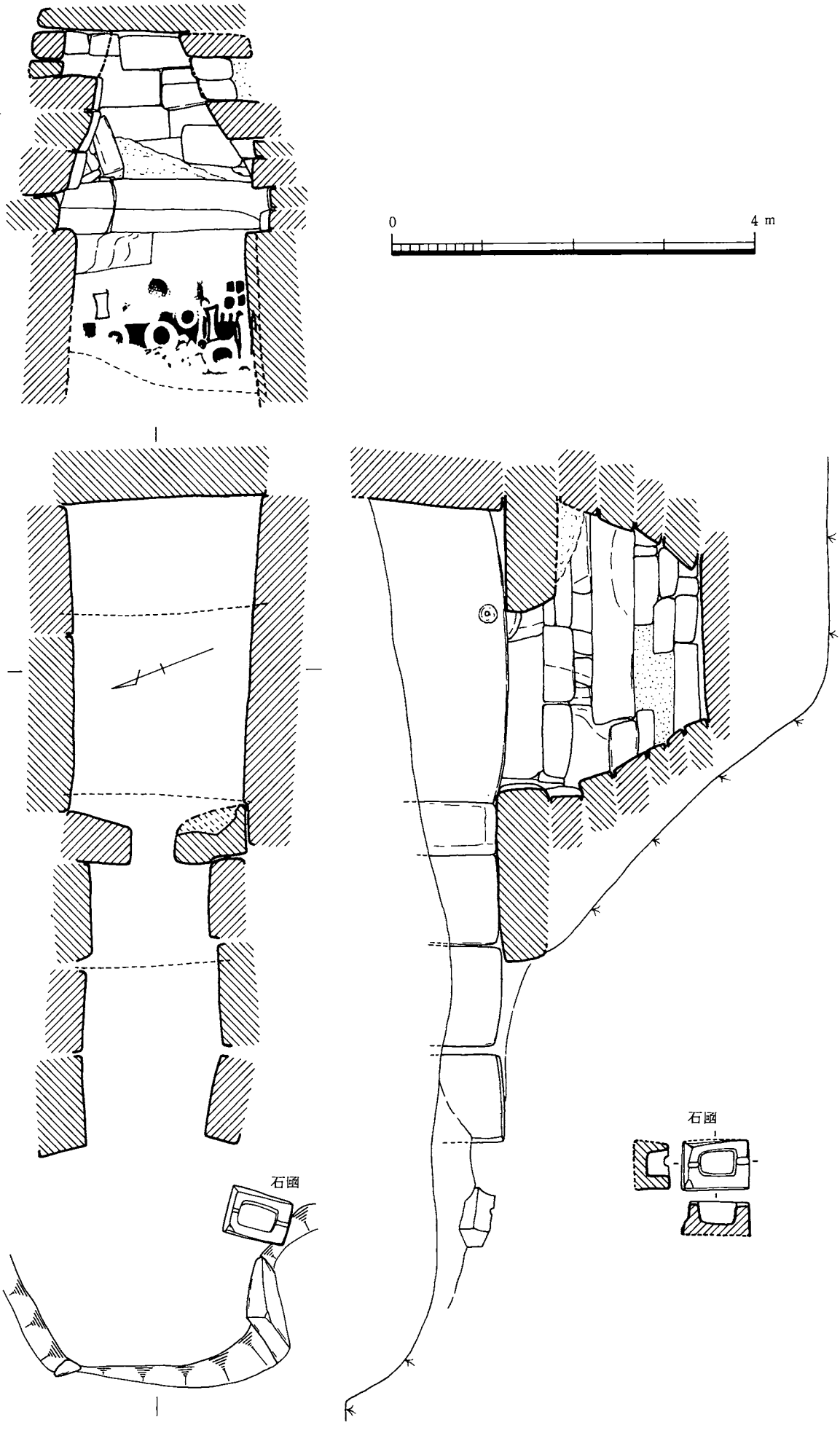


31の４図　今城大塚古墳石室奥壁装飾図(3)現況



31の5図　今城大塚古墳墳丘測量図

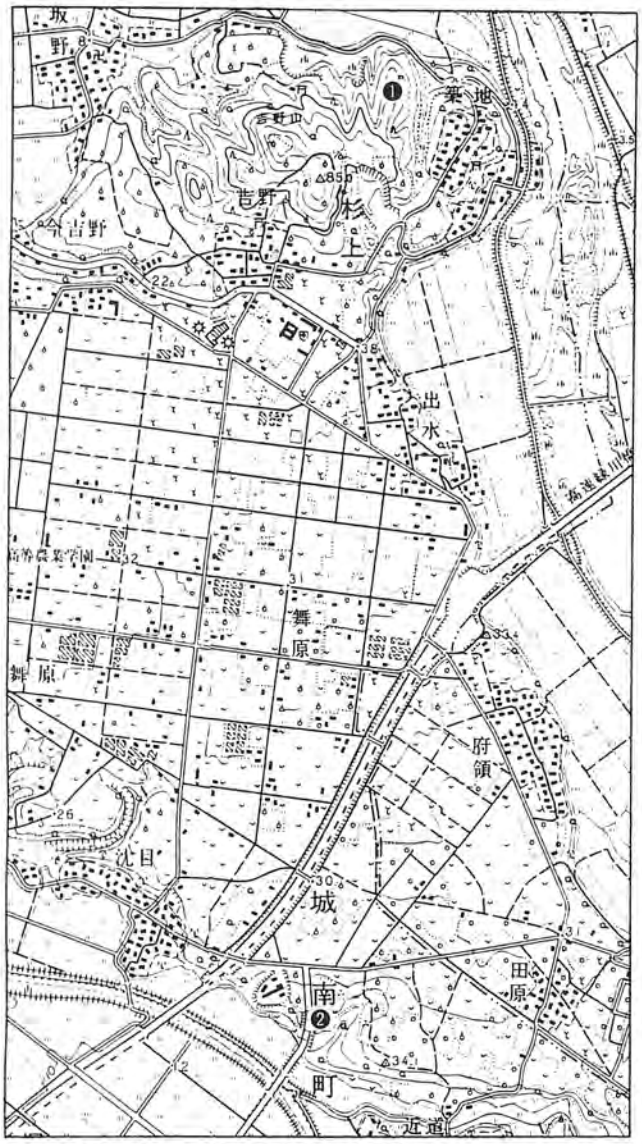
〔参考文献〕
①『肥後国誌』下　上益城郡鯰手永甘木荘陣村に「座敷塚」の記載あり。
②梅原末治「肥後国下益城郡今城の大塚」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』3　P30—33　大正8年（1919）京都
但し原題の下益城は上益城の誤記。
③緒方勉「今城大塚古墳」『久保遺跡』（熊本県文化財調査報告18）P124—128　熊本県教育委員会　昭和50年（1975）
④緒方勉「今城大塚古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P142—143　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）



31の6図　今城大塚古墳石室実測図

32．坂本古墳（⇨32の１～３図）

——下益城郡城南町板野坂本——



32の１図　坂本古墳・甚九郎山古墳位置図
（宇土・御船2.5万分の１）　１ 坂本古墳　２ 甚九郎山古墳

立　地　吉野山東北麓の低丘陵上

墳　丘　現存しないが円墳，墳径など不明

墓　室　大正７－８年（1918－1919）梅原末治氏らが調査。当時すでに破壊されており，松本雅明氏および筆者らが踏査時には墓室の痕跡もなかった。文献①②に従って整理すると，内部主体は割石小口積の横穴式石室でほぼ南に開口する。石室の平面形は長方形で長さ3.33m，幅1.82m。奥壁の石障（阿蘇熔岩）に平行に配された仕切り石としての石障があり屍床を作る。その高さは奥壁よりも低い。屍床の幅は72.7cm。左右両側の石障の有無については不詳であるが，おそらく存在し，肥後型横穴式石室（石障系古墳）であることは間違いない。

装　飾　奥壁の石障には幅22.7cmの浅い掘り込みによる凹帯があり，その凹帯部に薄肉彫りによる三重の同心円を２箇認めるが，「特殊の彩色を認めず前の槨壁面と共に朱を塗抹せるを見るのみ」と文献①は指摘しているので，朱の塗抹があったことを知る。

出土遺物　刀破片など。文献③は「三叉戟の上部」を記す。

年　代　５世紀後半

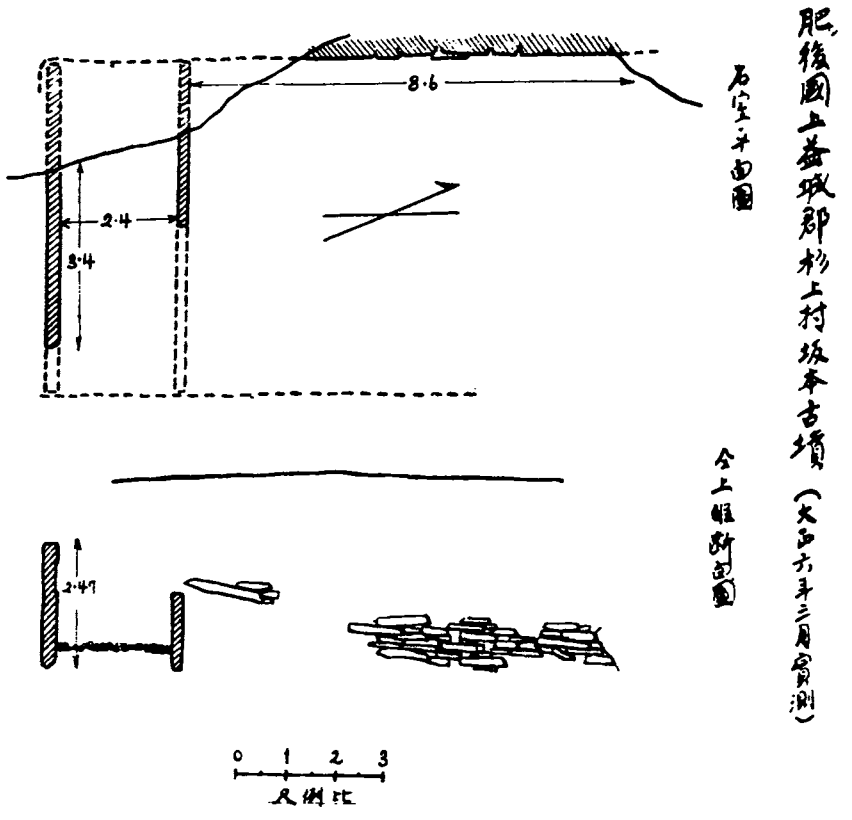
備　考　京都大学調査後，終戦時まで城南町杉上小学校に吉野山舟形石棺とともに保管されていた。現存せず。

（三島　格）

〔参考文献〕

①梅原末治「肥後国上益城郡杉上村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』3　P28－29　大正８年（1919）　京都
但し原題の上益城は下益城の誤記。
②三島格「坂本装飾古墳」松本雅明編著『城南町史』P79－80　城南町役場　昭和40年（1965）
③西沢武雄『坂本村郷土史』昭和10年（1935）　坂本
※肥後型横穴式石室については28．千金甲１号文献を参照

32の２図　坂本古墳石障の装飾文（原版　小林久雄）



32の3図　坂本古墳石室実測図
（原図 梅原・文献①）

33．甚九郎山古墳（じんくろうやま）（⇨32の1図）

——下益城郡城南町沈目奥野1115番地——

立　地　浜戸川にのぞむ舞の原台地の南縁。斜面には横穴古墳がある。

墳　丘　主軸をほぼ南北におく前方後円墳で，内部主体は横穴式石室で後円部の中心が奥壁部にあたる。主軸に対して約77度東に開口する。封土は黒色火山灰土と褐色粘土を交互に積み重ねる。現存長36.9m，後円部径21m，前方部幅15m，後円高 4.5m，前方部高４m。前方部には遺構は確認されなかった。調査時（昭和33年）には周湟は認められないとしたが（文献①），後年の昭和52年に緒方勉・村井真輝氏らによって同墳の西側が発掘され，溝幅３－ 4.8 mの周湟がめぐることが明らかになった(文献②P64—67)。したがって上記の計測値はそれぞれ大きくなる。

墓　室　旧陸軍航空監視哨が後円部に構築され徹底的に破壊を受け，辛うじて原位置を保っていたのは玄室南側の切石による側壁石（長さ 173cm，高さ50cm）のみで，併せて検出された床面（奥行き約 3.4m，幅２m）により，玄室の平面形を復原推定し得た。

装　飾　上述の切石側壁石（阿蘇熔岩）に認める。

①同石上縁より約３cmと11cmの位置に沈刻細線が１條横走する。

②上記の帯状の区画内に鉄丹が塗彩され，やや左よりに図柄不明の赤色文様がある。

③下位の細線下にほぼ等間隔に白・青色の三個の装飾文を認める。そのうち左端は径５cm余の白色の円形文で，他の二個は青色であるが形状は不明。

④遊離した北側壁の一部かと認められる一石（破片）にも彩色が認められる。

出土遺物　鉄刀　鹿皮　須恵器など（以上は監視哨構築時出土，小林久雄・小林麟也氏ら実見，現存せず）。

年　代　古墳時代後期

備　考　①本墳の調査は昭和33年(1958)３月熊本日日新聞社主催により実施。古墳名はその当時調査団が命名，以後使用されている（甚九郎については文献②P67参照）。

②装飾についての実測図は三島が採図したが，調査終了後行方不明となり，調査日誌により文献①を記載。

（三島　格）

〔参考文献〕

①三島格「甚九郎山古墳」松本雅明編著『城南史』P82—84　城南町　昭和40年（1965）

②緒方勉・村井真輝『沈目立山遺跡』P64—67　県文化財調査報告26　昭和52年（1977）

34．石之室古墳（いしのむろ）（⇨34の１～５図）

――下益城郡城南町塚原北原――

34の１図　石之室古墳位置図（字土2.5万分の１）

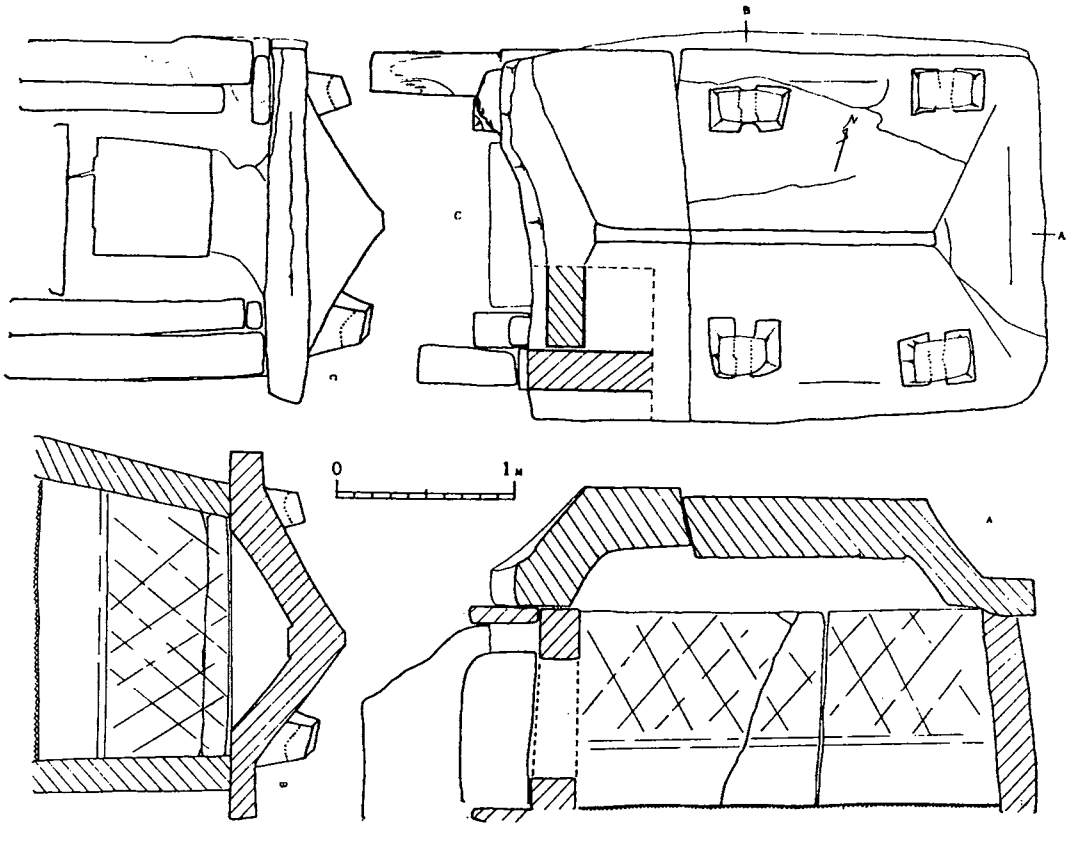
立　地　浜戸川南岸沿いの塚原古墳群をのせる台地上（標高10―25m）に位置する。

墳　丘　現存径東西12m　南北14m　高さ 2.5mを測る円墳で，墳頂に「石之室古墳」の石標が立つ。江戸（安政年間）から棺の前方は露出していた。

墓　室　内部主体は封土に直葬された，妻入横口式家形石棺で用材は阿蘇熔岩の組合石棺である。ほぼ西方に開口。棺身の構成はおのおの２枚の長側石を配し前後両端に各１枚の小口石を立てる。西側の小口石をほぼ方形にくり抜き，開口するので，妻入りとなる。入り口下縁には浅い切り込みがある。全長（内法）2.35m，幅1.55m，高さ 1.1m。

棺蓋は２石からなるが，大石のみに左右おのおの２個の縄掛突起をもつ。棺蓋の周縁にはやや広い縁をめぐらす。棟は明らかに造り出されているが，裏面にもおおむね対称的に造り出しがある。ただし開口部側の蓋裏面にはそれを認めない。羨門の外側に接して敷居石と立石がある。ことに立石は左右おのおの２個づつを並立させ，外側は内側よりも長く突き出ており，あたかも羨道を形成するようである。羨道にあたる部分には敷石状の川原石や阿蘇熔岩の細片を認めた。

装　飾　奥壁と両側壁石に認める。すなわち，床面より約30cmの高さに横走の沈線をめぐらし，その上位に上縁に達



34の２図　石之室古墳家形石棺実測図（原図 三島）

34の3図　石之室古墳家形石棺
（原図『城南町史』）

する斜行交叉の沈線を描く。鉄丹などの塗彩は認められない。

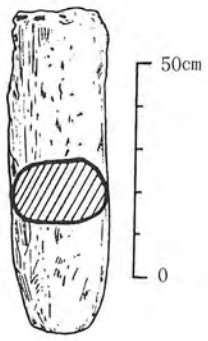
出土遺物　円筒状石製品（現存長75cm，径23cm，石製きぬがさの柄の形状に近い，羨門外立石近く出土。阿蘇熔岩製）須恵器杯破片　鉄板　鉄鋌　銅環など。

年　代　5世紀末

備　考　①調査終了後，保存のため埋めもどした。
②棺身南側石の羨門近くの内面に「仮大布大開十」とよめる縦書の線刻文字がある。古墳に伴なうものか決定しがたい。
（拓影は文献②P100）　（三島　格）

〔参考文献〕

①梅原末治「肥後の二古墳－豊田村石之室と免田町の鬼の釜古墳」『史迹と美術』169　昭和21年（1946）
②三島格「石之室古墳」松本雅明編著『城南町史』P95－100　城南町役場　昭和40年（1965）
③高木恭二「環状縄掛突起を有する石棺について－特にその石棺材の産地をめぐって」『熊本史学』53　昭和54年（1979）

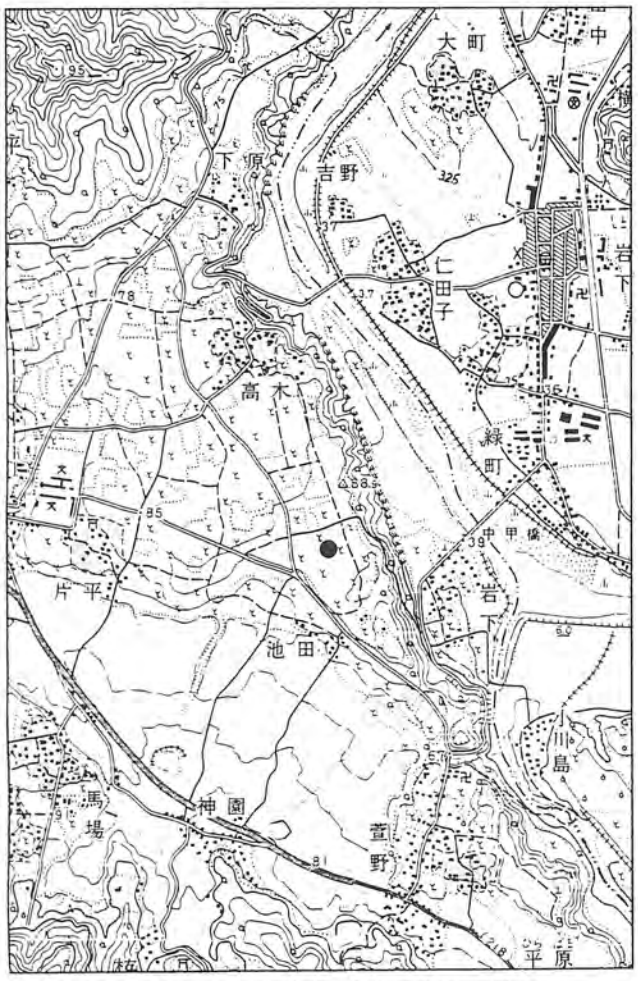


34の4図　石之室古墳円筒状石製品実測図（原図　三島）

34の5図　石之室古墳石棺奥壁（原図『城南町史』）

35．中郡古墳（なかごうり）（⇨35の１～３図）

——下益城郡中央町中郡楠原平927番地——



35の１図　中郡古墳位置図（甲佐2.5万分の１）

立　地　古墳は緑川左岸，阿蘇泥溶岩を基盤とする火山灰台地端に立地する。

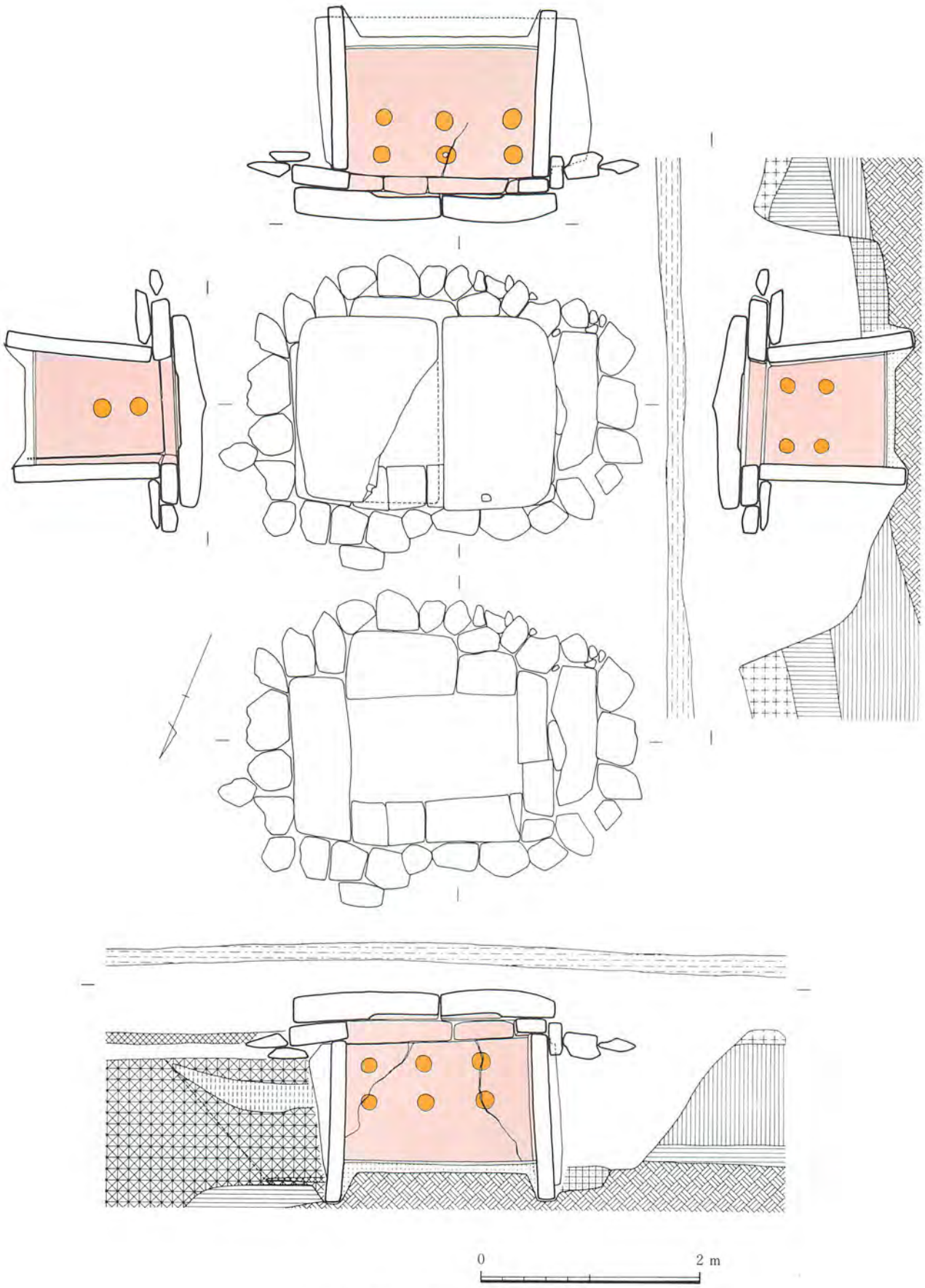
墳　丘　墳丘は耕作により削平され存在しない。通称四十八塚の地名もあり，かっては高くはないが円墳であったと思われる。

墓　室　石棺直葬の古墳で，石棺を覆う外部施設は存在しない。

石棺は阿蘇泥溶岩で作られ，長辺がほぼ東西方向をなす。棺蓋は２石（長1.74ｍ×幅1.05ｍ・長1.66ｍ×幅1.30ｍ）よりなる。隅はやや丸みをおび，屋根の傾斜はきわめてゆるく，切妻形で内側はくり込みがある，箱式石棺に近い特異な形式の家形石棺である。棺蓋は２石共に北方の一端に１個ずつ，辺６cmの方形の穴があけられている。穴をもつ繩掛突起の穴のみを表現したものであろう。棺身は厚さ約15cmの切石を４枚組合せ，その上に切石を一段並べ，石材の組合せ部分には粘土をつめる。棺身の内法は1.70ｍ×0.90ｍ，床面よりの高さ1.25ｍである。石棺床面は木炭をしきつめ，４体分の頭蓋骨の破片が検出された。

装　飾　装飾は棺身内面にほどこされている。石棺内部は酸化鉄で塗られ，東側壁上段２，下段２，西側壁上段１，下段１，南・北側壁にはそれぞれ上段３，下段３の円形刻文がある。円文内は浅く彫りくぼめられて黄色の粘土でもってその中を塗られている。北側壁上段中央の円文のみは二重の円文をなし，内円はさらに彫りくぼめられて酸化鉄で赤く塗られている。これ等の円文はいずれも非常にいびつな形をしており，コンパス等を使用したとは考えにくい。

35の２図　中郡古墳家形石棺内壁（松本雅明撮影・移転後）



35の３図　中郡古墳家形石棺実測図

出土遺物　なし

年　代　５世紀末～６世紀初頭

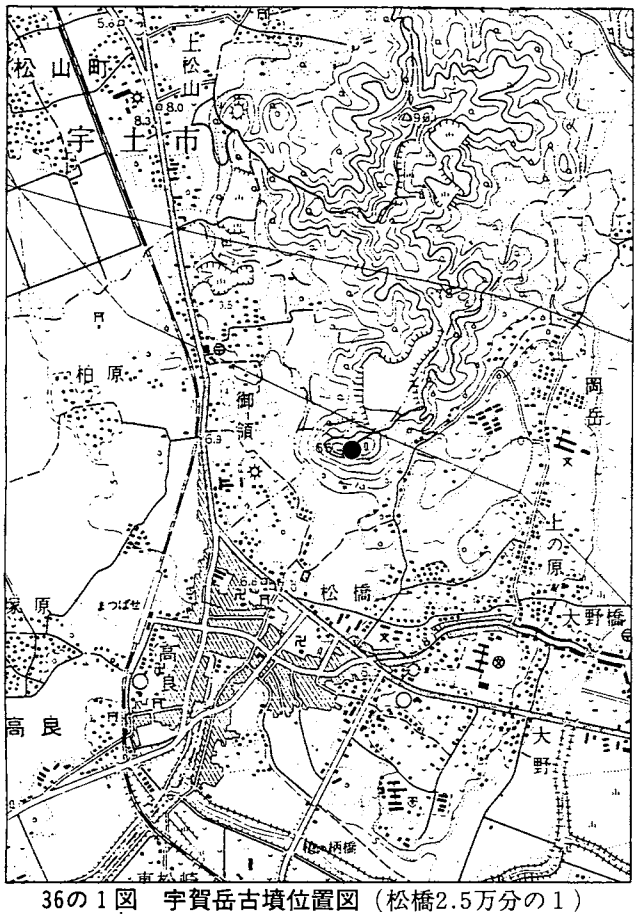
備　考　石棺は現在熊本大学構内に移転復原されている。

（伊藤奎二）

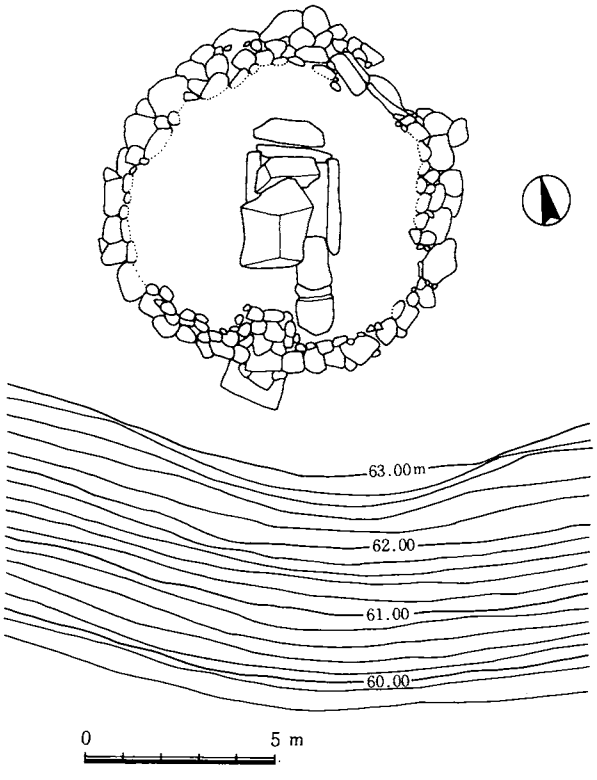
〔参考文献〕

①高島忠平・伊藤奎二・佐藤伸二・菊池大和「熊本県中郡楠原の装飾ある家形石棺」『熊本史学』31号　昭和41年（1966）熊本

36．宇賀岳古墳〔昭和51年県史跡〕（⇨36の１～５図）　——下益城郡松橋町大字松橋字岩谷——



36の１図　宇賀岳古墳位置図（松橋2.5万分の１）



36の２図　宇賀岳古墳周辺測量図
（古墳周囲の列石は後補）（原図　文化財保存計画協会）

立　地　松橋町の東北方向，宇賀岳と呼ばれる小丘陵の西南端部に位置する。宇賀岳は標高約65m 程で，南側には松橋町一帯を見おろすとともに不知火海，遠くは天草の島々まで見渡すことができる。

墳　丘　公園整備事業のため宇賀岳頂部の丘陵一帯を削平したため封土もなく，石室部分が独立し高まって残されていた。昭和55年古墳保存修理工事の一環として発掘調査を実施したが，封土および墳丘範囲を示す資料は得ることはできなかった。このため墳形についても不明であるが石室の規模，周辺地形の状況等より判断すれば直径約10数m の円墳であったものと推定される。

石　室　保存修理事業を行う以前の段階においては，奥壁，両側壁は大きな板石の単一石材を「コ」字形に配置し，屋根形を呈する大，小の天井石らしい２石の石材と他の石材が石室内に向って落ち，南側に開口している状況であった。京都帝国大学報告書には石室の上部構造について石材の加工状況等より判断して天井部分は屋根形石が平入りと妻入りで並列して架せられ注意に値するものと記されている。保存修理事業に伴う調査の結果，玄門の袖石および羨道部の壁石の掘り方が確認された。また玄室内，羨道部に散在する石材はそれぞれ石室を構成する楣石，框石，袖石，壁石等であることが判った。これらの結果より石室の形状は石室全長，3.4m，玄室長さ，2.4m，玄室巾（中央部で），1.95m，羨道長さ，0.8m，羨道巾，1.3m であることが判明した。石室内より出土した石材で石室の上部構造を復原すれば

１）両側壁から奥壁に寄棟屋根形状の小型な石材を石棚状に平入りに架せる。

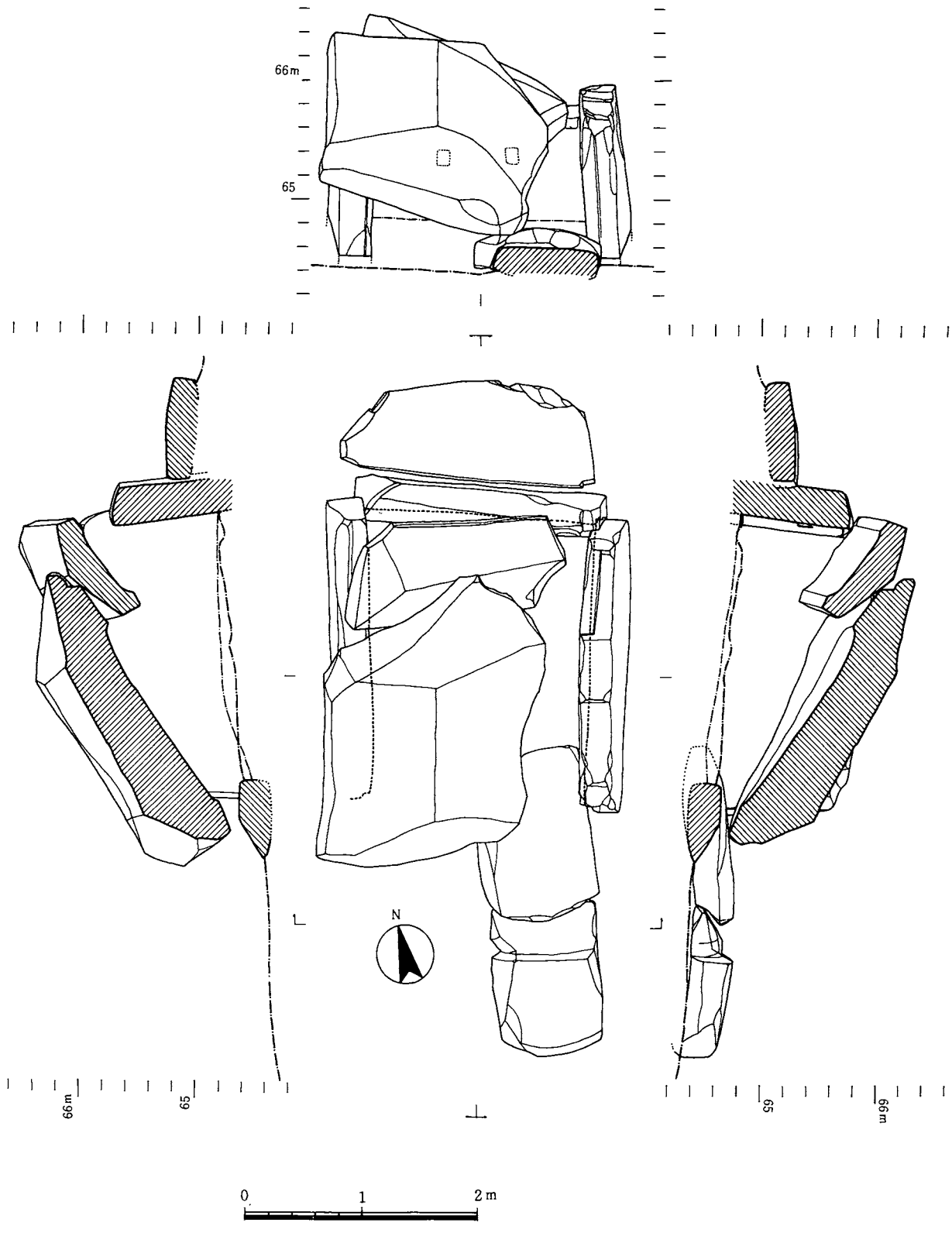
２）楣石を袖石と両側壁に架せる。

３）各壁面上部は凝灰岩の切石ブロックを数段持ち送って積み上げる。

４）天井石には大型の寄棟屋根状の石材を妻入りに架せる。という構造を有する石室であると推定される。石室を構成する石材は全て凝灰岩であり，寄棟屋根形状の石材内側は凹状に抉られ，奥，側壁，框，楣石などにも凹形の刳込みが施されており石室は丁寧で高度の加工技術をもって築造された石棺系石室である。

装　飾　装飾は奥，両側壁に円形，三角形，平行線を主とする線刻文様の上に彩色が施されている。彩色は濃い赤，薄い赤，緑色の三色を使い分けている。

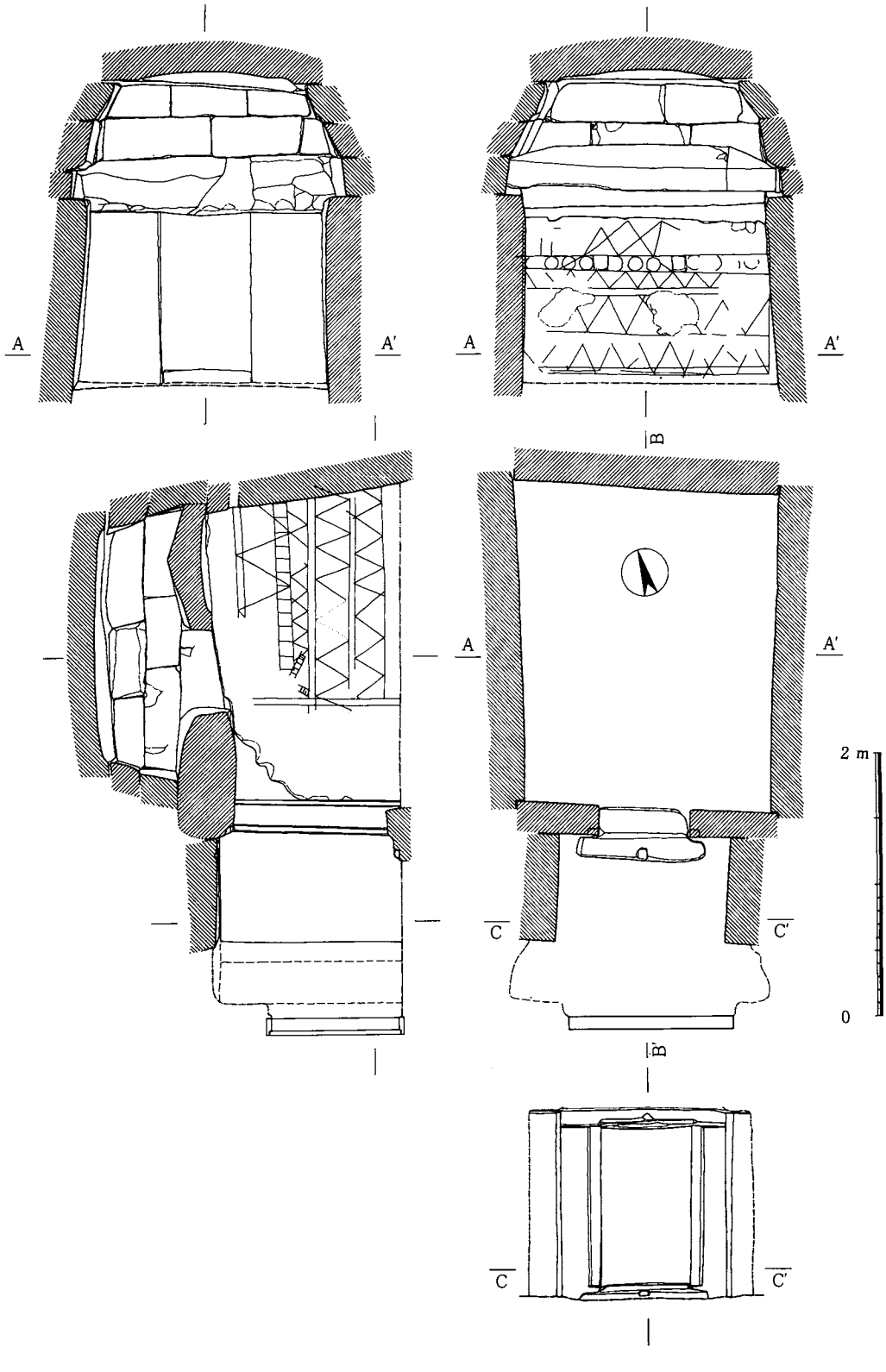
奥壁石材のやや上側で中央部には二個の造り出しの小突起の基部が残っている。この小突起の上下には平行線が横走し，平行線の間には直径約10cmの11個の円文が確認される。そのうち突起間の２個の円文には濃い赤色の彩色がある。またこの円文の周囲は緑色で縁どりし，円文の周辺は薄い赤色で彩色を施す。さらにこの円文の上下には三角形を組み合せた鋸歯文があり，下の鋸歯文には濃い赤，薄い



36の3図　宇賀岳古墳石室実測図（原図　文化財保存計画協会）

赤，緑色の彩色を施す。石材の中央部には比較的大きな鋸歯文があり，濃い赤と薄い赤の彩色があり鋸歯文の縁は緑により縁どりを施す。また石材の下側には部分的に薄い赤色を施した鋸歯文がある。左壁は平行線と大小3～4段の鋸歯文がある。上より二段目の平行線には縦に直交する線があり梯子形の文様をなす。この文様の袖石側にも小型の左，右下りの梯子形の文様がある。3，4段目の鋸歯文はやや大型で濃い赤，薄い赤の彩色を部分的に施す。この左壁の袖石および下側には部分的に濃い赤色の彩色がある。右壁は奥，左壁ほど装飾は明瞭でない。しかし，平行線，鋸歯文等を施し，赤の彩色がある。

出土遺物　石室は古くから開口していたので遺物は知られていない。今回の調査においても石室の床面は残っていなく中世期の遺物がわずかに出土したのみである。

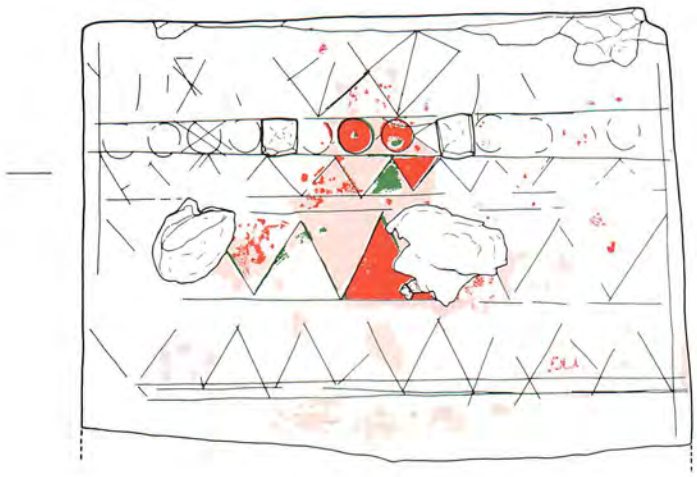


36の4図　宇賀岳古墳石室復原実測図（原図　文化財保存計画協会）

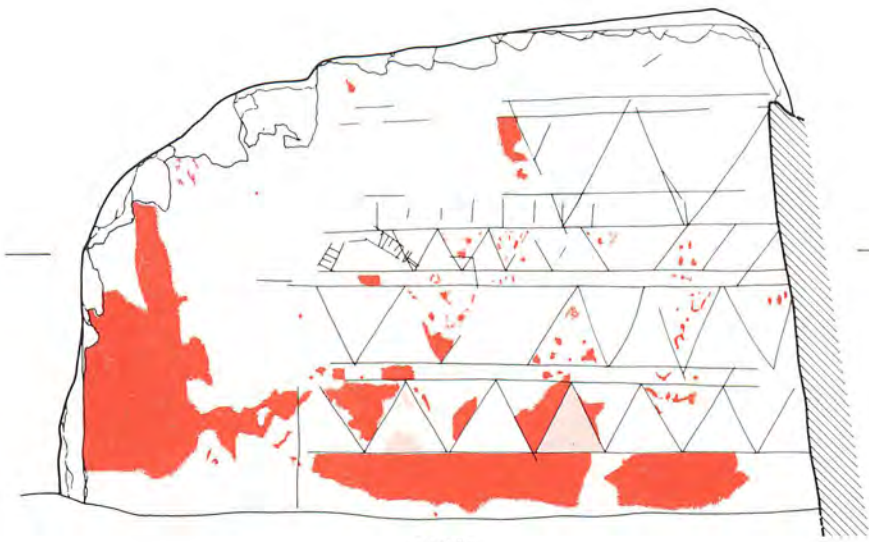
備　考　昭和55年保存工事に伴い国学院大学助手池田栄史により調査。　（勢田廣行）

〔**参考文献**〕

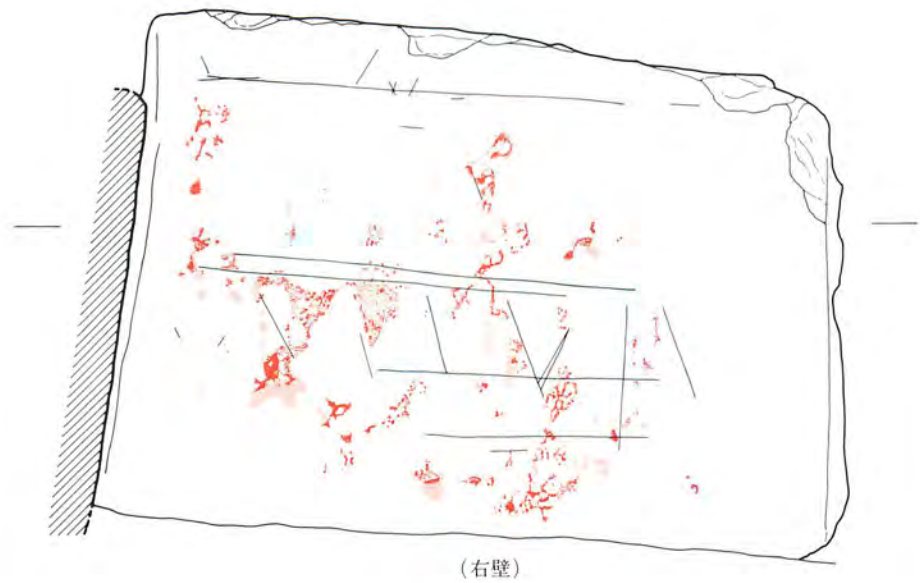
①島田貞彦「肥後国下益城郡松橋の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』（京都帝国大学文学部考古学研究報告3）P34—37　大正8年（1918）京都
②松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P152—153　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）　熊本
③『松橋町史』松橋町　昭和45年（1975）　熊本
④『熊本県の文化財』（史跡）熊本県教育委員会　昭和56年（1981）



（奥壁）



（左壁）



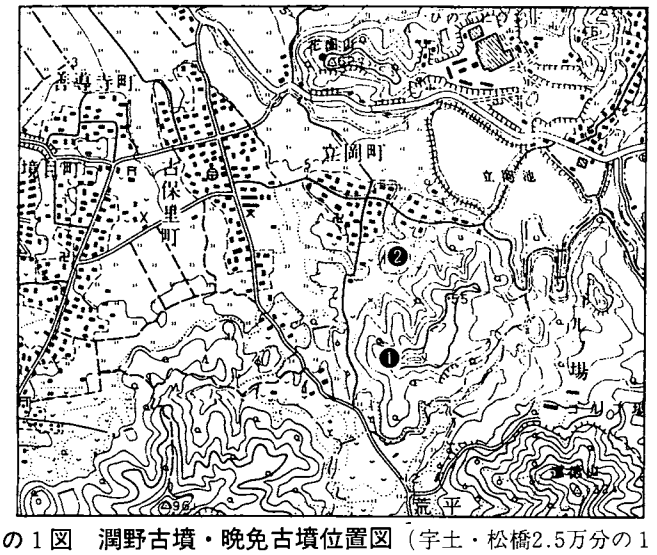
（右壁）

0　　1 m

36の 5 図　宇賀岳古墳玄室壁面の装飾文実測図

37．潤野古墳（うろごの）（⇨37の１～３図）

——宇土市立岡町潤野——



37の１図　潤野古墳・晩免古墳位置図（宇土・松橋2.5万分の１）
1　潤野古墳　2　晩免古墳

立　地　潤野古墳は，雁回山南麓に続く花園山南側。立岡池西辺の晩免古墳のあるドウヤマから南約 300m の丘陵標高約35m の西斜面の所にある。半円状の盛り土を割石で覆った上に古墳と彫った標石が立てられている。

墳　丘　墳丘の盛り土は失われたが，もと円墳であったと見られる。

石　棺　晩免古墳の石棺と同じく早く石棺は露出し，その長軸の方向は南北であった。明治16年(1883)春，石蓋裏に吾人平資盛の刻字が発見され，評判が高まった。

京大報告は当時の測図について家形組合せで，晩免古墳と似ていると指摘されている。ただその石蓋は壊れかたがひどいが，その表面に晩免のような線刻は見られず，また家形の両斜面周縁につく縄掛突起も各２個がつく。棺身側壁の長さ７尺４寸，幅２尺５寸，高さ３尺２寸あり，石蓋は長さ８尺を超え，幅３尺８寸内外とある。

装　飾　潤野の石棺内で，西壁に長方形の造り出し突起が２個並び，その上部に細長い矩形の中に倒三角形３個が続く線刻と，前記突起の間や突起の下部にそれぞれ円文がある。北壁には横に１列の円文３個がつく。

石蓋裏の吾人平資盛の刻字は書体から後人の偽刻とされている。

出土遺物　この石棺発掘当時，鉄斧１個とその他鉄片数個があったという。

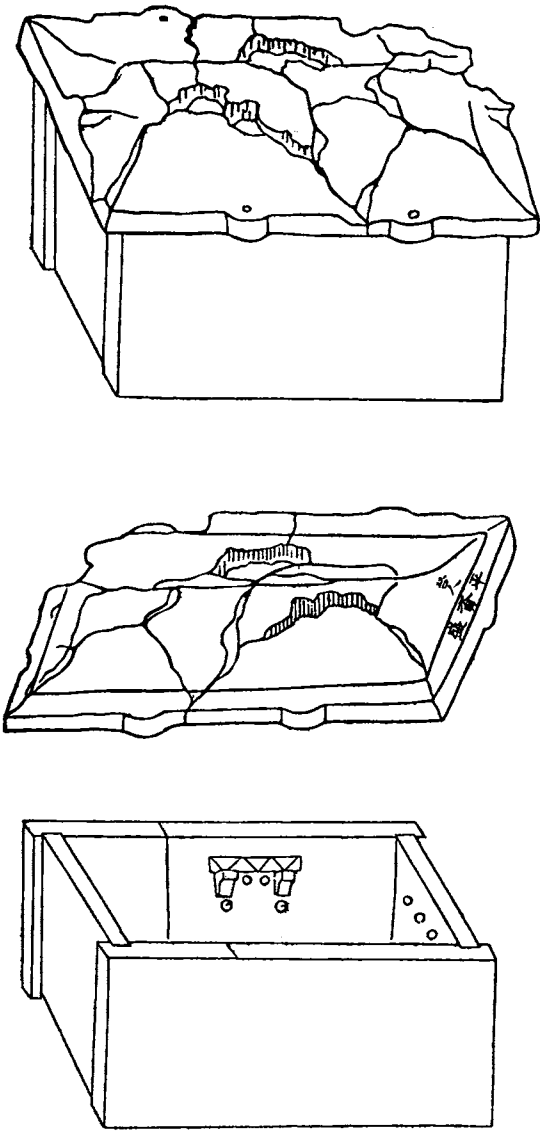
年　代　晩免古墳の年代とそう隔たるものではない。古墳終末期に近く，石棺の構造，装飾の変化から晩免につぐものかもしれない。

備　考　立岡町では，明治16年（1883）春，潤野の石棺に「平資盛」の刻字を発見してから平家伝説が急に浮上したらしい。『肥後国誌』下，立岡村の条に，「(補)資盛墳墓」の記事がのる。かって宇土の故浅井寅喜翁から富樫が聞いた話では，翁の若い頃その知人が平資盛という字を石蓋にいたずらして彫ったとのことで驚いたことがある。

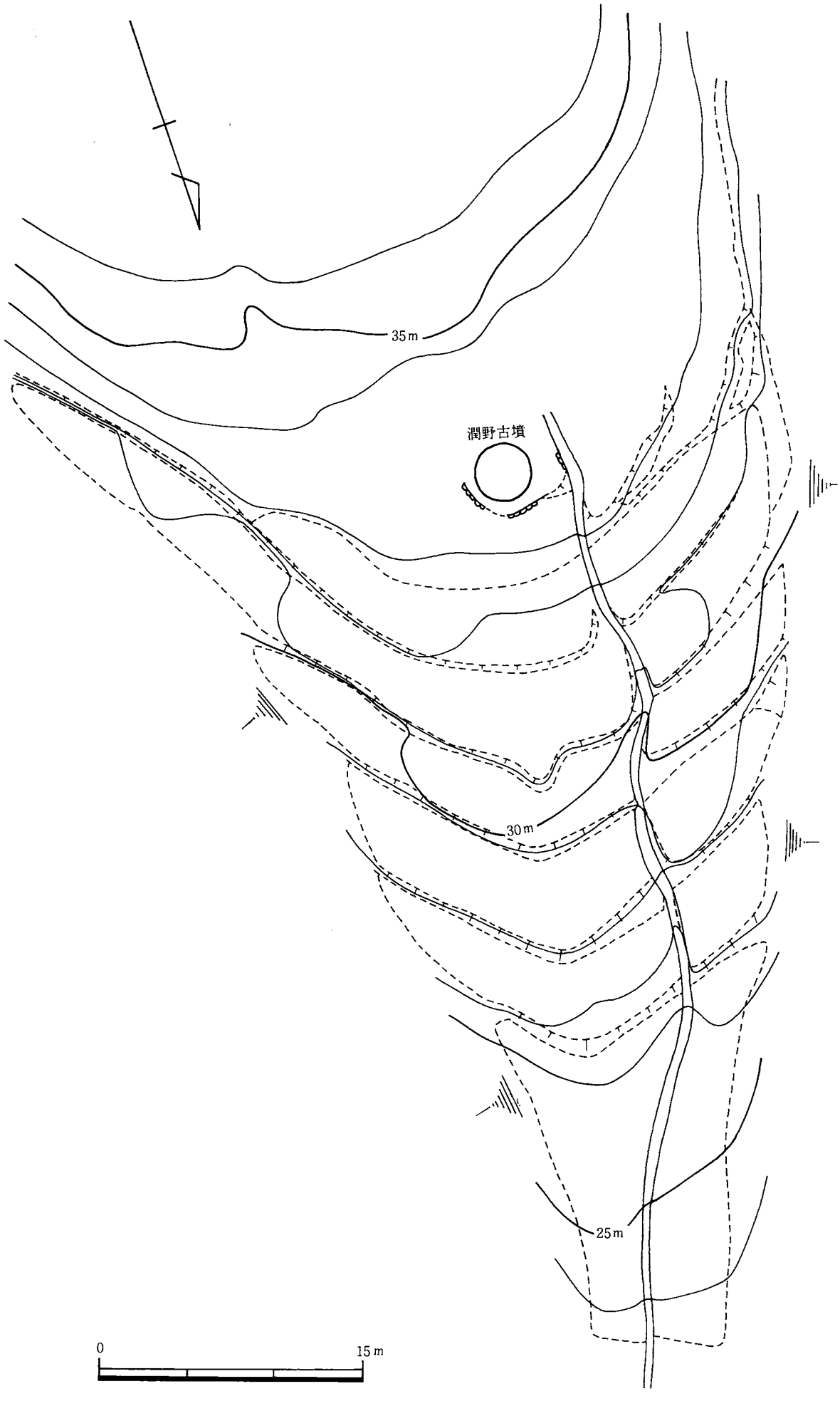
晩免古墳が安徳天皇の御陵，潤野古墳が資盛さんの墓，晩免古墳の西約 150m の所に二ツ枝古墳の残骸があり，ウバが墓(二位尼，清盛の妻)とよばれている。(富樫卯三郎)

〔**参考文献**〕

①梅原末治「肥後国宇土郡花園村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』３（九州に於ける装飾ある古墳）Ｐ22—27　大正８年（1919）　京都
②富樫卯三郎「晩免古墳・潤野古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』Ｐ 154—155　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）　熊本
③高木恭二「環状縄掛突起を有する石棺について—特にその石棺材の産地をめぐって—」『熊本史学』53・54　Ｐ41—58　Ｐ39—52　昭和54・55年（1979・1980）　熊本



37の２図　潤野古墳石棺図（梅原文献①より）



37の3図　潤野古墳周辺地形測量図

38．晩免（ばんめん）古墳 —花園陵墓参考地—（⇨37の1図，38の1・2図）　——宇土市立岡町晩免——

立　地　宇土市東端のこの町は，雁回山南麓に続く標高62.4mの花園山すぐ南側の立岡池西辺を占めている。池の周辺に楢崎・女夫塚両古墳があり，また町南辺に晩免・潤野・二ツ枝など3古墳が寄っている。晩免は標高33.3mのドウヤマとよばれる径約90mの独立丘の頂上にある。

墳　丘　かって独立丘の岩石を削り，円墳を築いたとみられる頂上に石棺石蓋が露出していた。墳丘の盛り土は失われている。

石　棺　京大報告によると，石蓋の露出していた石棺長軸の方向は南北とある。熊本県庁保管の図を引用し，それが家形組み合わせの石棺で，石質は凝灰岩とみられている。石蓋表面は，棟から両斜面に流れのある家形で，各10本の刻線が小口側壁に並行して数えられ，斜面周縁に穴のある半円状縄掛突起が各3個あり，斜面南北両端には円形棒状縄掛突起が各1個つく。石棺内法の長さ6尺，幅2尺5寸，深さ3尺余ある。

装　飾　晩免の石棺内で，北と西の両壁面に長方形の造り出し突起が各2個あり，北壁にはその下部に円文，西壁には造り出しの北側に菊花文が浮彫りされている。

前記石蓋には，もと種々の彫刻があったようだが，長年の露出で，石質の堅くないこともあり，風化して分らない。

県庁保管書類の拓本は，径3寸8分の円文の中に16弁菊花文の薄肉彫りであるが，偽刻とされている。明治の調査から100年になんなんとし，古墳研究の上から，石棺の再調査がのぞまれる。なお，石棺の菊花文から江田船山古墳大刀の花文を連想したけれど，船山のはロータス（蓮花）と見る向きがある。

出土遺物　石棺内部の景状図は，棺内に2体人骨の頭部を北にした側に破損した鉄片を描く。また副葬の刀剣というのが，別の図にあるが，残欠で明らかでない。

年　代　晩免古墳は，一般墳墓制の沿革から奈良朝を下るものでないことが明らかとされている。

備　考　「熊本県知事の上申書及び調書に基づき，明治21年12月26日，陵墓伝説参考地に決定，同22年1月23日，当該土地を熊本県から引渡しを受け，宮内省（現宮内庁）の管理地とした。」（花園陵墓参考地—晩免古墳—について，富樫の問い合わせへの宮内庁書陵部陵墓課長の回答，昭和47年5月1日）

立岡町では，安徳天皇を偲んで毎年1月20日天皇さん祭りのオミキアゲがある。　（富樫卯三郎）

〔参考文献〕

①小杉榲邨「肥後に埋蔵するめずらしき石棺」『帝国古蹟取調会々報』3　P11—15　明治35年（1902）　東京

②梅原末治「肥後国宇土郡花園村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』3（九州に於ける装飾ある古墳）P22—27　大正8年（1919）　京都

③花岡興輝「古墳発顕記録」『熊本史学』13　P30—31　昭和32年（1957）　熊本

④花岡興輝「古墳発顕記録（抄）」『宇土市史研究』3　P1—10　昭和57年（1982）　宇土

⑤原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』P90　熊本県教育庁文化課　昭和49年（1974）　熊本

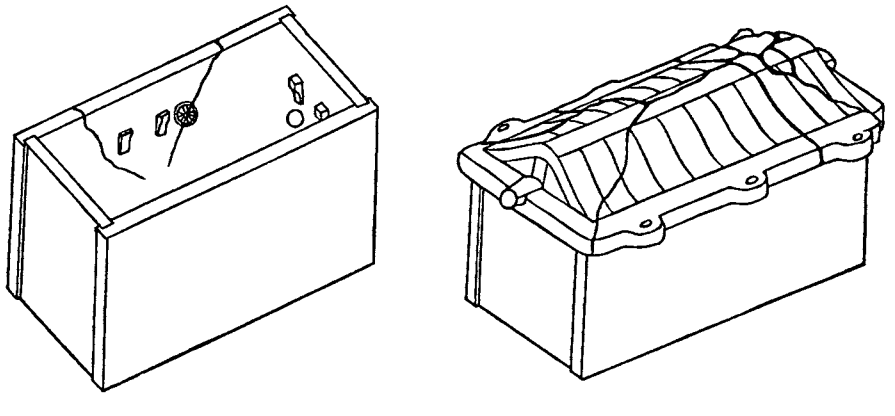
⑥富樫卯三郎「晩免古墳・潤野古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P 154— 155　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）　熊本

⑦高木恭二「環状縄掛突起を有する石棺について—特にその石棺材の産地をめぐって—」『熊本史学』53・54　P41—58　P39—52　昭和54・55年（1979・1980）　熊本

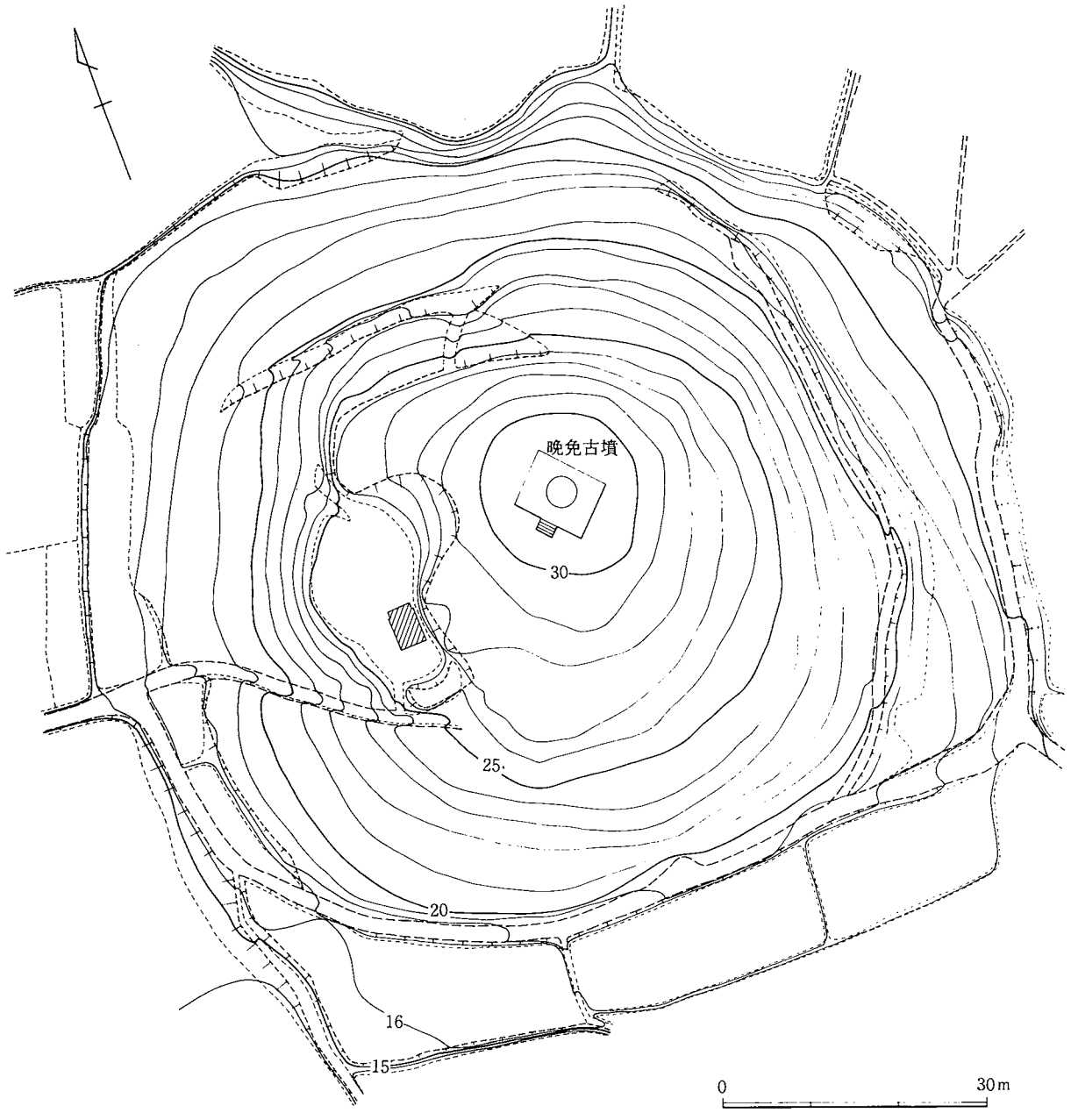
⑧高木恭二「肥後南部の石棺資料（三）」『宇土市史研究』4　昭和58年（1983）　宇土

⑨三島格「明治中期の熊本県考古学」『肥後考古』4　P1—30　肥後考古学会　昭和58年（1983）　熊本

⑩上原和「楽浪海中の民族・倭人とは何か」『邪馬台国』伝統と現代保存版　昭和57年（1982）　東京



38の1図　晩免古墳石棺図（梅原文献②より）

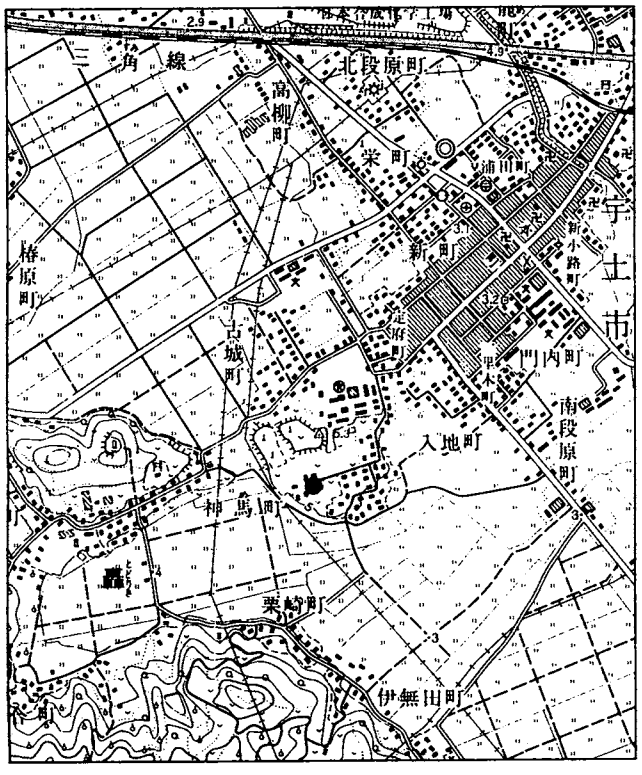


38の2図　晩免古墳地形測量図

39．宇土城石垣の古墳石材（⇨39の１～７図）

——宇土市神馬町宇土城三の丸跡——

—古城古墳の存在推定—



39の１図　宇土城三の丸跡位置図（宇土2.5万分の１）

立　地　天正17年（1589），小西行長築造という宇土城跡は宇土高校裏手の標高16.3ｍの台地で，宇土半島基部東辺の中央要地を占めている。

古墳石材　昭和44年（1969），三の丸跡台地西辺で地下げの採土作業中，１列の石垣らしい一部が露出し，調査した所，地下に南北の方向で西面した長さ約20ｍ，二，三段の石積みがあった。その石積みは石垣の底部で，南端で道路沿いに東へ曲っている。

石垣の構築には板碑・五輪塔・六地蔵・墓などのほか古墳の石材なども転用されている。ことに古墳の石材が石垣に集中しており，１基の古墳の存在が考えられる。古城古墳といわれるが，他所からの運搬転用ということがあったかもしれない。装飾古墳であった。

同48年（1973），その石垣再調査の前後，石垣南端と道路を挟んだ新築中の民家庭内に運ばれていた石垣の石材や三の丸北側崖面に落ち込みの石材，同じく本丸跡南側空濠に面した崖上の列石西辺の石材などにも刻線が見出された。

装　飾　装飾文様は安山岩へ細く浅い線刻で描かれている。前記石垣北端のは，２本足の鳥が彫られた石材と立った木の葉状のものが刻まれた２個の石材がある。その１個には中央に鳥か蛇また船とも分らない弧線があり，他の１個には船や鳥らしい線がある。なお石垣の外に落ちた小形の石材にも舟らしい線がある。

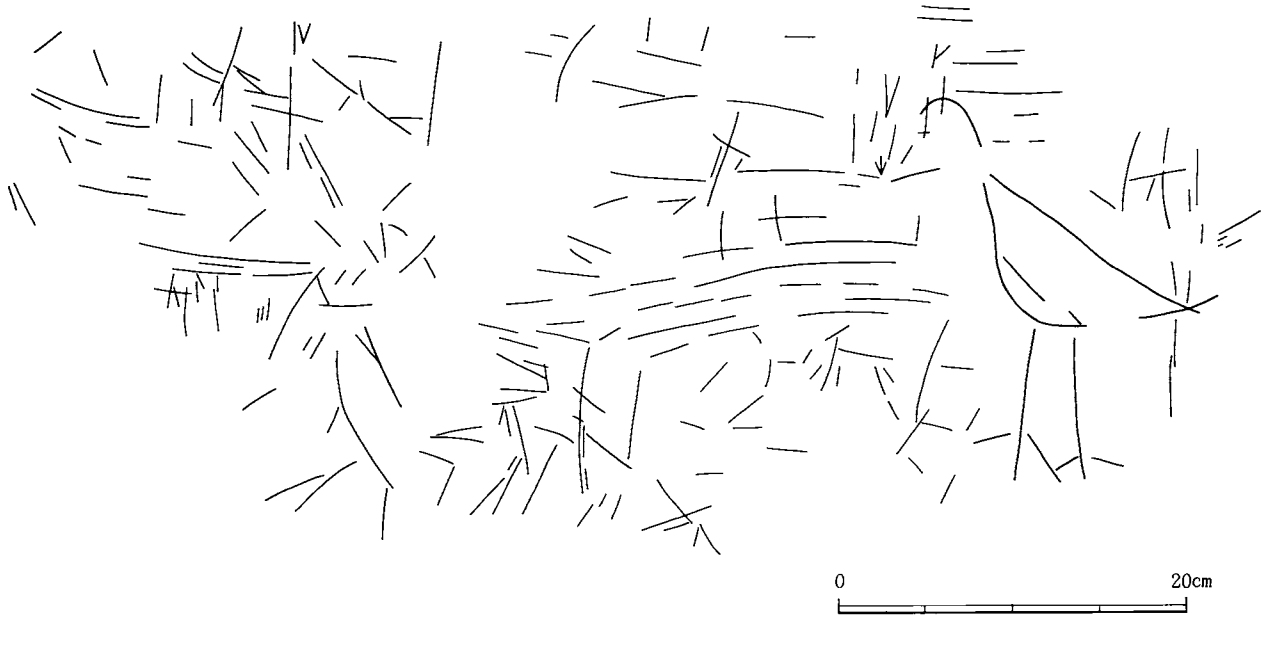
新築の宇土小学校隅に置かれた石垣の巨石には船が彫られ，船底に櫂，船尾に舵らしい線，また船上一ぱい長方形の柵か屋形とも思われる線がある。こうした形の船が，民家庭内の大小２個の石材にもあり，大に１隻，小に２隻（２隻とも×印の四角な旗印がつく），三の丸空濠崖面の石材にもあった。なお本丸跡空濠に面した崖上列石の石材には家形のような幾何学的文様がある。

備　考　石材の一部は失われたが，主な石材は市の収蔵庫に保管されている。

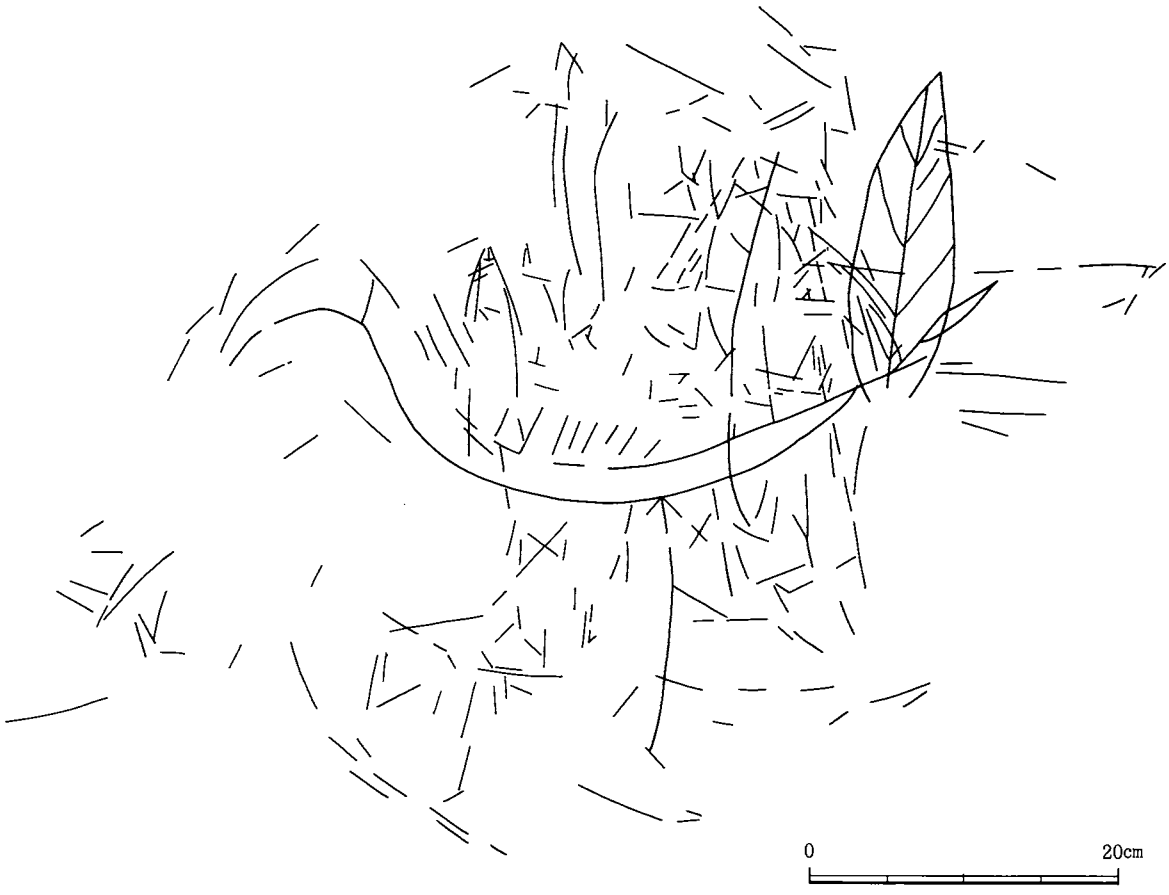
（富樫卯三郎）

〔参考文献〕

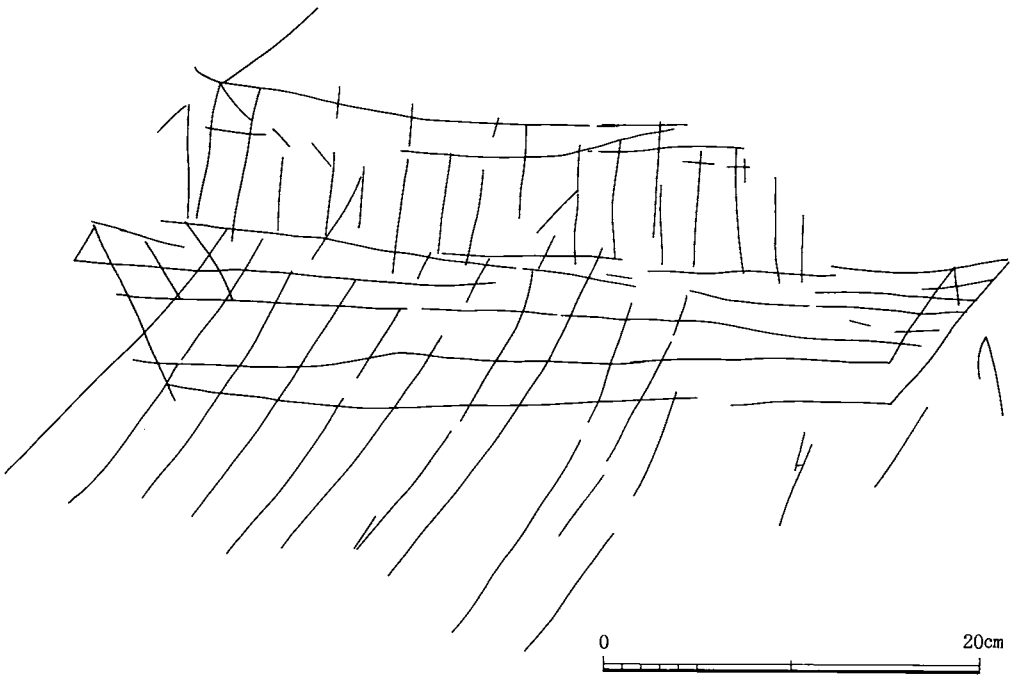
①富樫卯三郎「宇土城の石垣」『宇土市の文化財』第１集　昭和47年（1972）



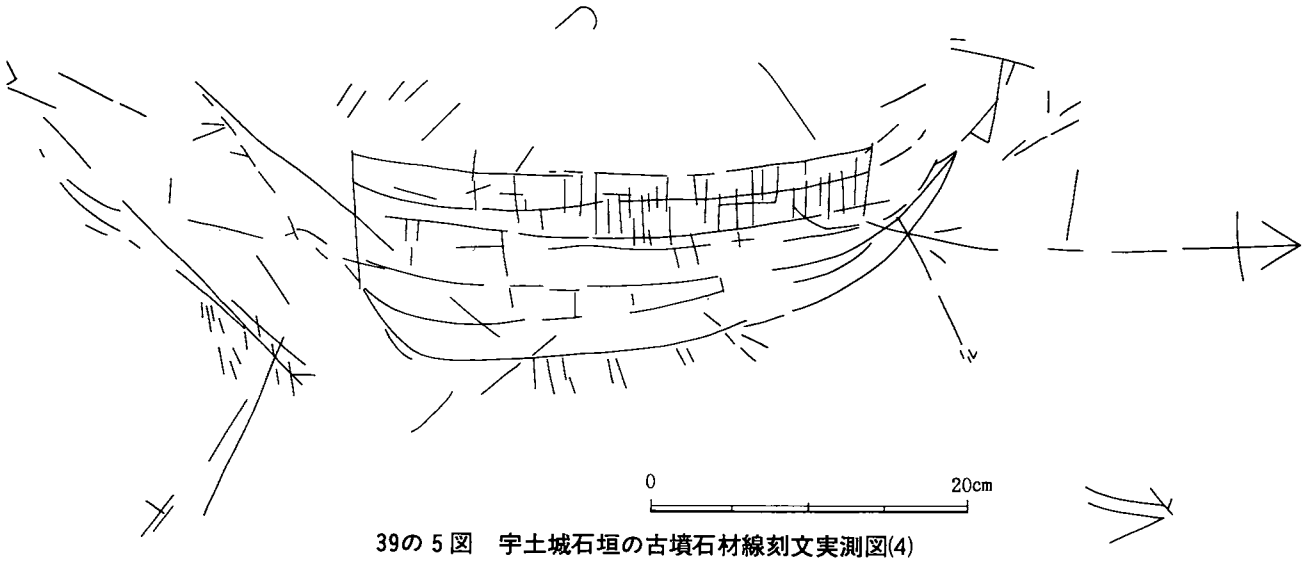
39の２図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(1)



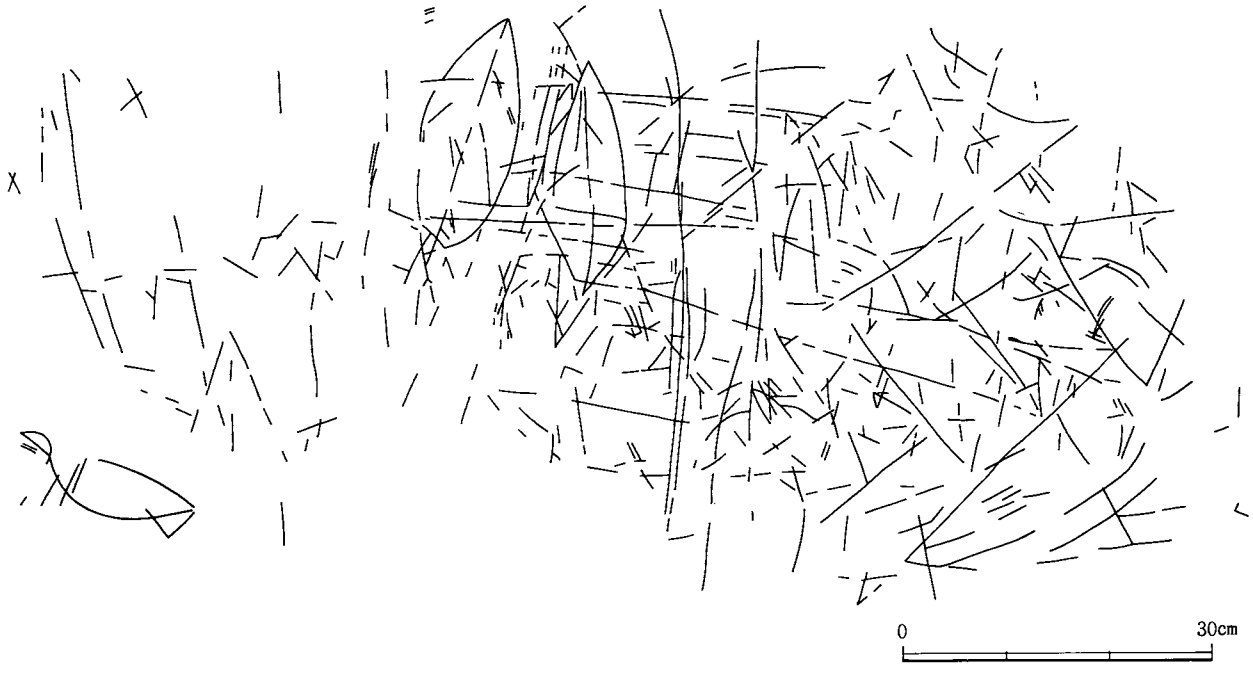
39の 3 図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(2)



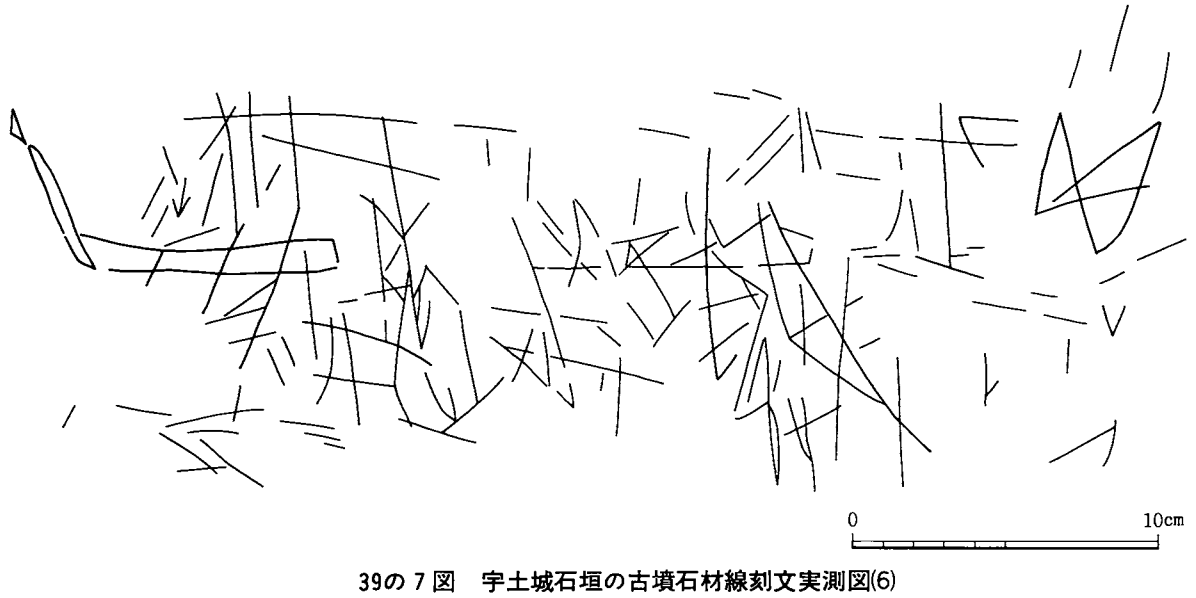
39の 4 図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(3)



39の 5 図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(4)



39の 6 図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(5)



39の 7 図　宇土城石垣の古墳石材線刻文実測図(6)

40．梅崎古墳（うめざき）（⇨40の１～４図）

——宇土市笹原町梅崎——

40の1図　梅崎古墳・城塚古墳位置図（網津2.5万分の１）

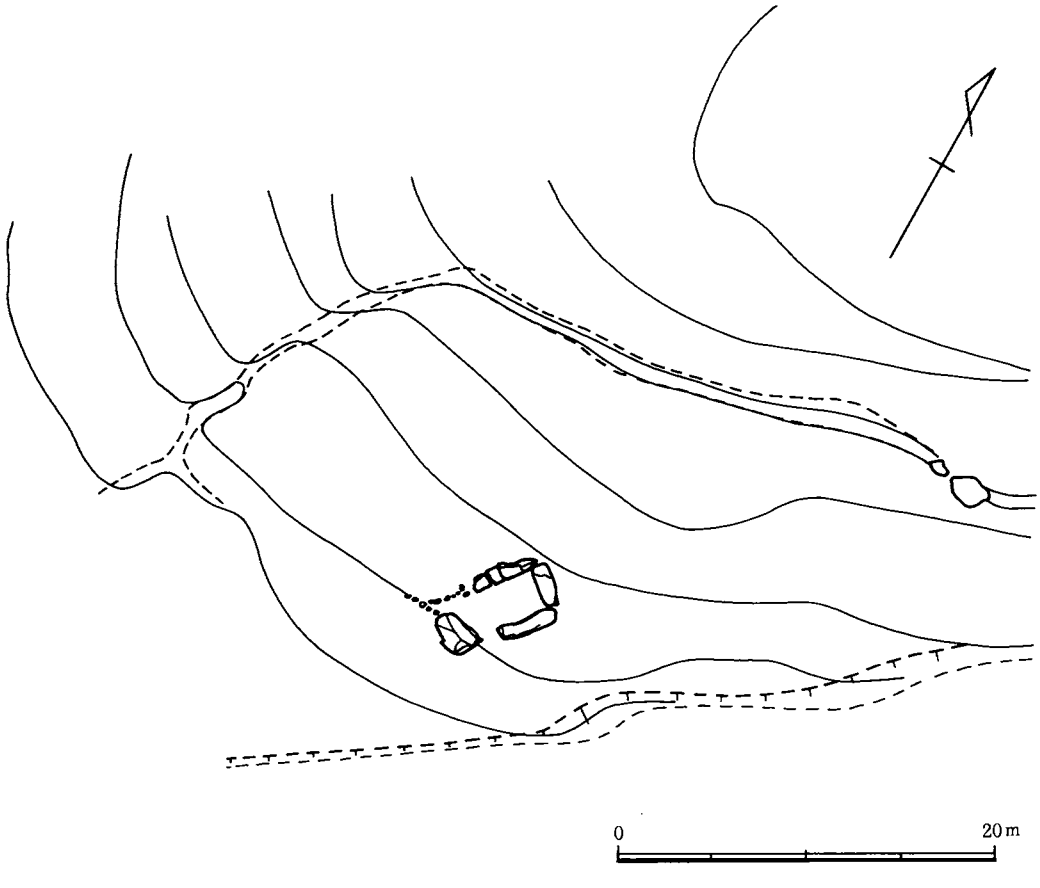
1 梅崎古墳　2 城塚古墳

土　地　宇土半島基部の北辺，国鉄三角線の北側に突き出て緑川川口に臨む丘陵上には住吉中学があり，その北方標高59mの頂上近く，墓地奥の雑木林に一部露出した梅崎古墳がある。

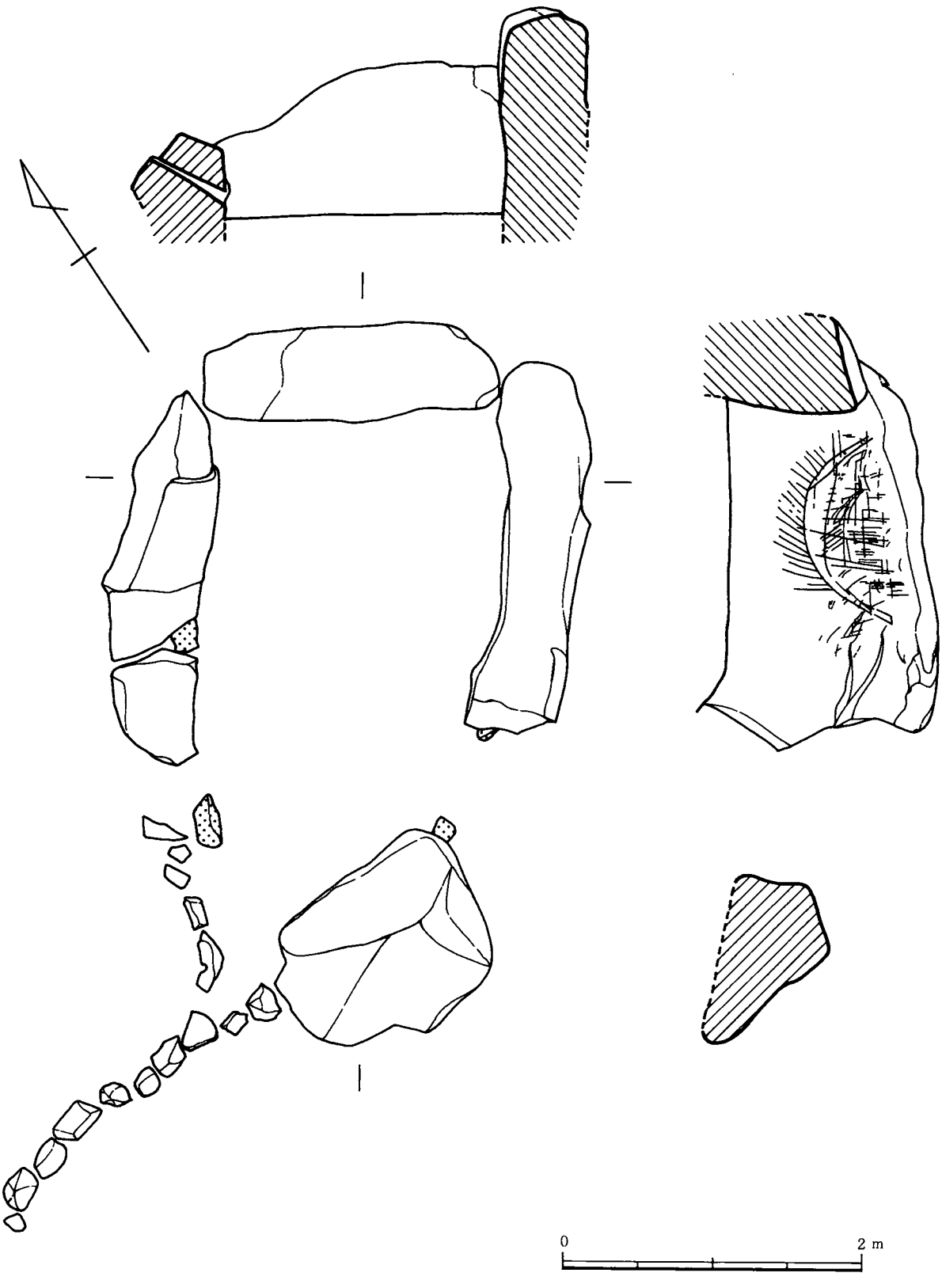
墳　丘　破壊墳で，すでに墳丘の盛り土は失われていた。

墓　室　東・西および北の３側壁は各１枚石の安山岩の自然石で囲み，南側壁の石材は全く欠け，その先に横倒しの自然石が出土したが，側壁には短かい，石室の内法 1.9m × 2.3m。長軸の方向は北東。調査当時，一部露出していた東側壁は南端が垂直に削られ，また西側壁上半部が水平に削られ，二つに割られていた。西側壁南端から南西へ１列に並んだ塊石が出土したが，石室前庭の仕切りかどうか分らない。また羨道の跡は見られない。側壁の石の取り工合は，小池平古墳などと似たところがあり，横穴式の疑いがある。盛り土は失われたが，円墳と見られる。

装　飾　装飾は東側壁の内面だけで，長さ 2.3m，高さ１m余，厚さ約60cmの安山岩に，１隻の大きな船を主とした線刻がある。船首から船尾まで1.29m，船底から船首・船尾を結ぶ線まで高さ54cm，船底に右上から左下へ20本余の櫂の線があり，川船ではなく，海を行くものと見られる。両側のそり上ったこの船の上方にも２・３の船らしい線があり，その１隻は櫂の方向が大きな船と反対の方向になっ



40の２図　梅崎古墳地形測量図



40の3図　梅崎古墳石室実測図

40の4図　梅崎古墳東側壁装飾文実測図

ている。船の上方には多くの縦線や弧線が入り乱れ，その中の2本の縦線は，大きな船の方へ引かれている。大分県伊美鬼塚古墳の船の線刻にも多くの縦線などが見られ，描法のつながりを思わせる。

この大きな船は現実的な量感があり，半島基部にあり，有明海に臨み，被葬者をめぐる海上活動を偲ばせるものがある。

出土遺物　副葬品に，径 1.7cmのさびた金環，腐蝕した針金状の銅製環，須恵器小片が出土した。

年　代　宇土半島基部にある船の線刻画をもつ古墳は古墳終末期に属し，梅崎古墳もそう年代の隔たりはない。ただ線刻の船の扱いかたから梅崎の方がややさかのぼるのではないかとみられる。　（富樫卯三郎）

〔参考文献〕
①富樫卯三郎・清見末喜「梅崎古墳発見線刻の舟」『考古学ジャーナル』20　P18—19　昭和43年（1968）　東京
②富樫卯三郎「梅崎古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P 158— 159　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）　熊本

41．城塚（じょうつか）古墳　（⇨40の1図）

——宇土市城塚町——

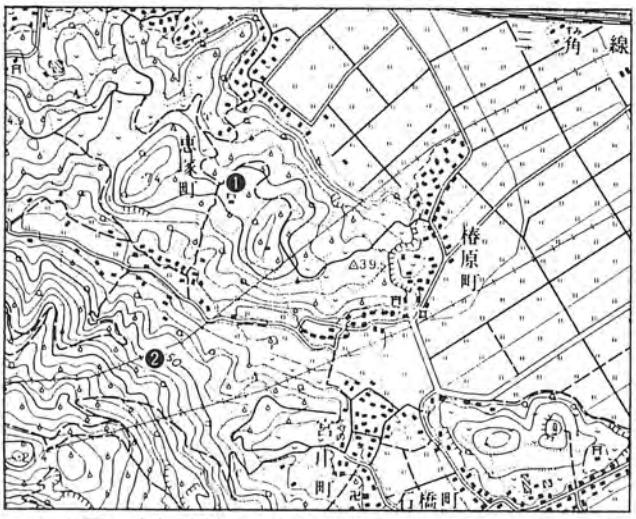
概　要　宇土半島山塊から東に延びる丘陵の先端部に位置していたが，現在埋滅して所在しないため詳細は不明である。発見当時の記憶によると，墳丘は流出もしくは削られてなく，直接石室が露出していた。石材には安山岩を用いた横穴式石室と思われる。装飾文様は奥壁に向って左側壁面に線刻による文様であるが，何を現わしているか不明。

出土遺物・文献　なし

年　代　7世紀？　（平山修一）

42．東畑古墳（ひがしはた）（⇨42の１～３図）

——宇土市恵塚町東畑——



42の１図　東畑古墳・仮又古墳位置図（宇土2.5万分の１）
１ 東畑古墳　２ 仮又古墳

立　地　宇土半島山塊から延びる丘陵の標高約40m の丘陵尾根上に立地する。

墳　丘　小規模の円墳であるが，測量等の調査を行なっていないので数値については不明。埴輪，葺石等の外護施設はみうけられない。

石　室　南東側に開口する横穴式石室である。石材は付近にみられる安山岩塊石と，凝灰岩の切石を用いる。石室は上半部が欠失し，石室内には流土が入り込み床面の状況は明らかでない。奥壁には石棚を架構する。石室の規模については未調査のため正確な数値は不明である。

装　飾　奥壁と東側壁の両面に線刻による文様を描く。全体的な構図は不明であるが，東壁には鋸歯文がみられる。

出土遺物・文献　なし

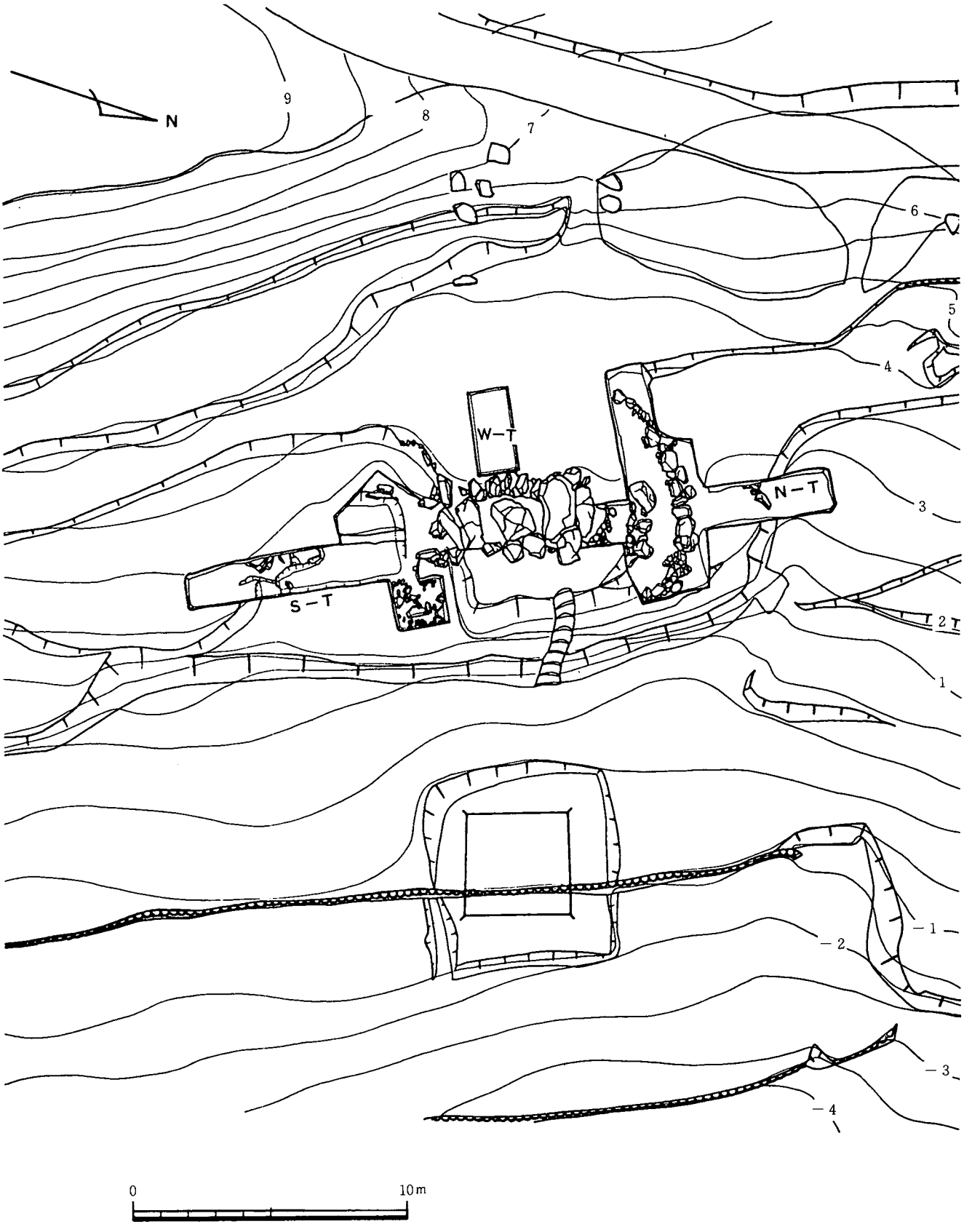
年　代　７世紀？　（平山修一）

42の２図
東畑古墳遠望、西側より

42の３図
東畑古墳玄室奥壁側を見る

43. 仮又（かりまた）古墳〔昭和57年県史跡〕（⇨42の１図，43の１～３図）

——宇土市恵塚町仮又——



43の１図　仮又古墳墳丘測量図

立　地　宇土半島の大岳（標高478m）から東に派生する丘陵傾斜面に位置し，脚下に飯塚の狭隘な谷を望む。

墳　丘　墳丘は立地上，石室を露呈するまでに流出しているが，発掘調査の結果，東西約12m，南北14mの不整円形をなす。

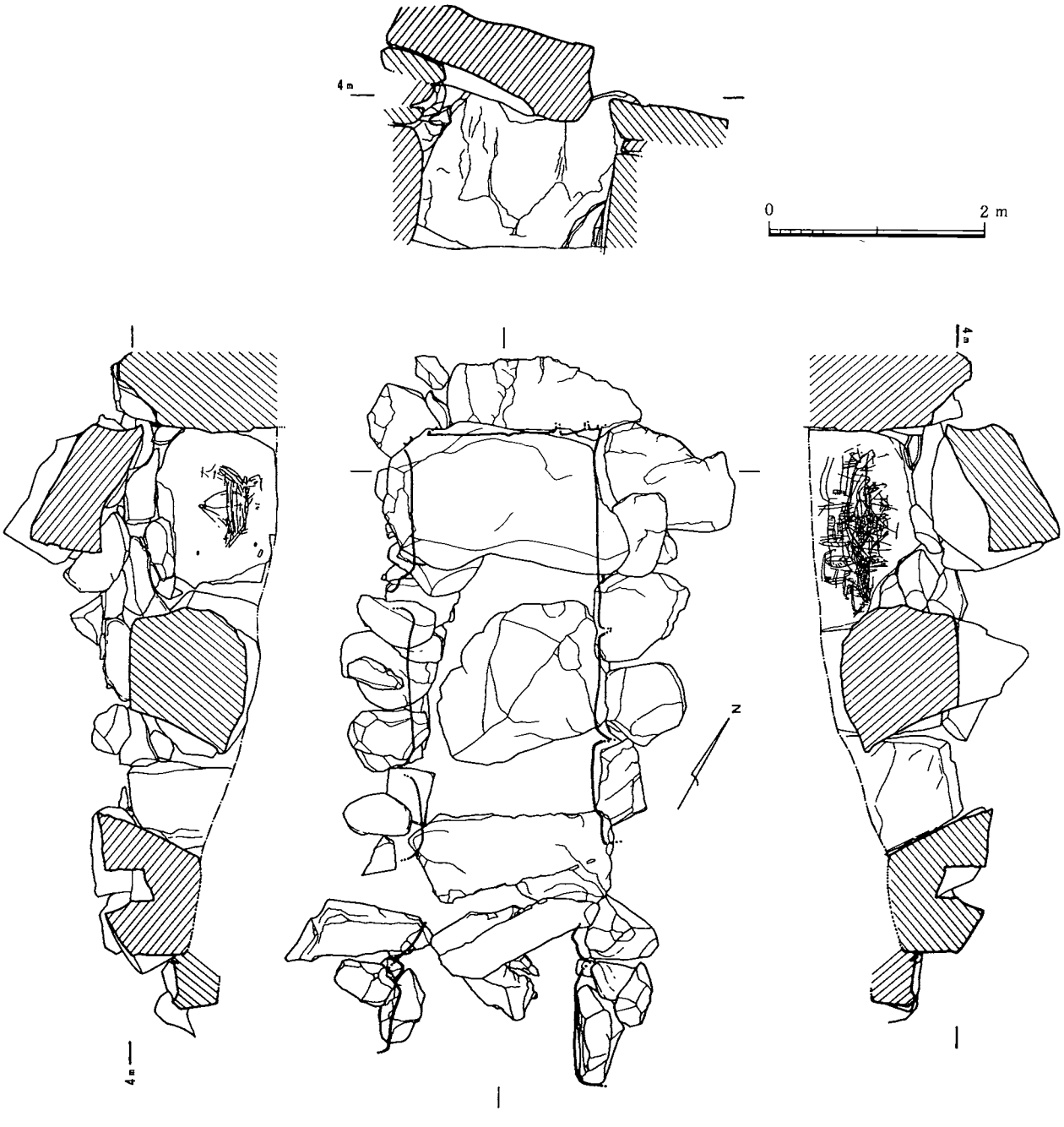
墳丘の北側と東側には，封土の流出を防ぐため三段に巡る列石を配する。

また羨道部前面には“L”字形をなす墓道が検出された。

石　室　主軸をN29°Wにとる単室無袖の横穴式石室で南に開口する。石室は内法で全長5.96m，玄室中央部幅1.77m高さ1.66m（現況）を測る。石材は安山岩の巨石を用い，一部に凝灰岩を使用する。天井には3枚の安山岩巨石を架構するが，3枚とも現位置からは摩れたり，石室内に落ち込んでいる。側壁は腰石だけが旧状を保ち，側石は摩れたり玄室内に落ち込んでいる。腰石は奥壁に1枚，東西両側壁にそれぞれ3枚ずつ据る。床面は攪乱され，屍床配置等は不明である。

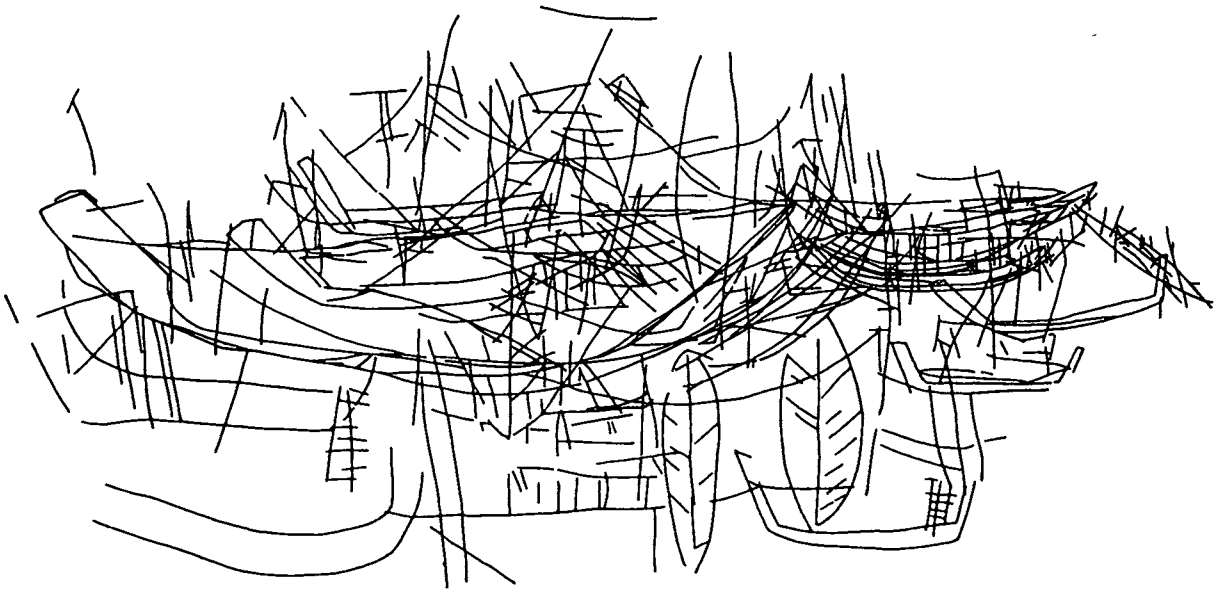
羨道は無袖のため玄室とほぼ同様，幅1.74mを測る。

装　飾　玄室内の東西両側壁に線刻による装飾文様を描く。東側壁には約10艘の舟群と木葉状文を無造作に重なり合って描いている。両側壁には東側壁に比べたら，かなり写実的な表現で一艘の帆掛け舟を描き，文様の右肩には「大□」の字を舟と同様のタッチで書いている。西側壁の装飾文様は，後述する遺物の中にも中世の遺物がみられることから中世に石室が開口した時点で描かれた可能性がある。東側壁に描かれた装飾文様の舟は艫辺から出た艫の数などから，



43の2図　仮又古墳石室実測図

（西側壁）



（東側壁）

0　50cm

43の3　仮又古墳玄室側壁の装飾文実測図

川舟ではなく明らかに海を航行する構造船で，被葬者の生前における活動を示唆するものと考えられる。

出土遺物　開口が古いことから出土遺物は少なく，しかも原位置での出土はごくわずかの量である。遺物は時期的に古墳に伴うものと中世の遺物に大別される。古墳時代の遺物では鉄滓と円頭広根の斧箭式鉄鏃，刀子片が出土した。また同時期の須恵器，土師器片が羨道部及び墓道から出土した。中世の遺物では染付椀片と須恵質土器片，糸切底を呈する土師器の浅皿が検出された。

年　代　7世紀前半　　（平山修一）

〔参考文献〕

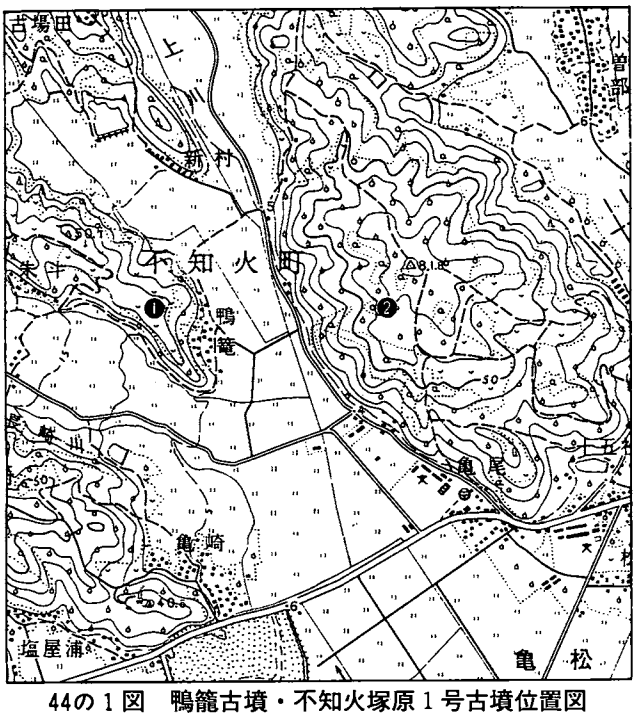
①島田貞彦「肥後国宇土郡緑川村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』3（九州に於ける装飾ある古墳）　大正8年（1919）　京都

②富樫卯三郎「仮又古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P160－163　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）　熊本

③宇土市教育委員会『仮又古墳』（宇土市埋蔵文化財調査報告6）　昭和57年（1982）　宇土

44．鴨籠（かもご）古墳（⇨44の１～６図）

——宇土郡不知火町長崎坊ノ平——



44の１図　鴨籠古墳・不知火塚原１号古墳位置図

（松橋2.5万分の１）１　鴨籠古墳　２　不知火塚原１号古墳

立　地　宇土半島基部南岸の長崎平地を二分するかのごとくに挺出する城ノ越丘陵（海抜約40ｍ）上の，南端部に立地（海抜20ｍ）する。近くに鴨籠２号墳（円墳，朝顔・円筒・埴輪，文献⑨）がある。

墳　丘　開口古く（文献①）墳形はいちじるしく変改・削平されている。現墳頂海抜20ｍをゼロとし得られた地形図では，等高線50cmと１ｍが長楕円形にめぐり，長径25ｍ，短径16ｍの計測値を得た。高さについては明らかにしがたいが。文献⑨も指摘するごとく東方の畠地を基準にすれば，比較高約６ｍを得る。いずれにしても最少限径25ｍ余の円墳であったと推定できる。なお本墳を前方後円墳ではないかと見るむき（文献⑨）もあるが，従い難い（第１図）。

墓　室　墳丘のほぼ中央部に構築された石室と，その室内に収められた家形石棺からなる。

①竪穴石室：調査時には北側短側壁石のみが内傾していたが，京都大学（文献①）の調査時には南側のそれも内傾している。後日南側が復原されたことは密接した支え石が見られることから首肯できる。

本来は長大な切石４枚を立てて石室を形成するもので，簡単な型式である。開口部はない。用材はすべて砂岩である。長方形を示す石室平面（内法）は縦３ｍ45cm，横２ｍ45cmを側る。床面は地山の上に４～５cmの礫石を敷きその上に粘土を敷いた部分が一部遺存していた。床面より側壁上縁まで１ｍ60～70cmである。側壁石の計測値－長辺東壁長さ３ｍ62cm，厚さ25～30cm。短辺南壁長さ２ｍ36cm，厚さ25cm。天井の架構については，それに足りる長大な石材の遺存がなく不明である。なお南側短辺には鉄丹の一部には塗彩痕が認められた。石室でもっとも重要なことは，北側短側壁石（文献①はこの石を奥壁とよぶ）より「約２尺５寸（約76cm）の位置に之と平行して安置せられありし」家形石棺である。その位置は，現況でいえば内傾する側壁石の下にあり，調査は断念した。

②家形石棺：棺蓋・棺身ともにそれぞれ一大石を刳り抜いた刳り抜き式石棺。蓋・身ともに足部の幅が頭部のそれより狭い。用材は阿蘇熔岩で，棺蓋は大破して不足部がある。

棺蓋－頂部の棟に相当する部分は平坦面をのこす。幅狭な側縁が四周をめぐるが，側縁の下にさらに造り出しがあり，棺身上縁と接している。なお，現在は欠失して認められないが，本来は繩掛突起を長側縁に２個づつもち（文献⑦），その型式は半円形であろうとする見解がある（文献⑧）。おそらくそうであろう。棺身－頭部に一段高い枕部を作り出し，凹部を作る。棺身の縦断面は足部が直角に近く頭部は曲線を呈する。同横断の棺底は直線であり曲線を呈さない。計測値：棺蓋－高さ40cm・幅78cm・長さ173 cm。棺身－高さ51cm・幅67cm・長さ166 cm。文献②によると重量１ｔ。

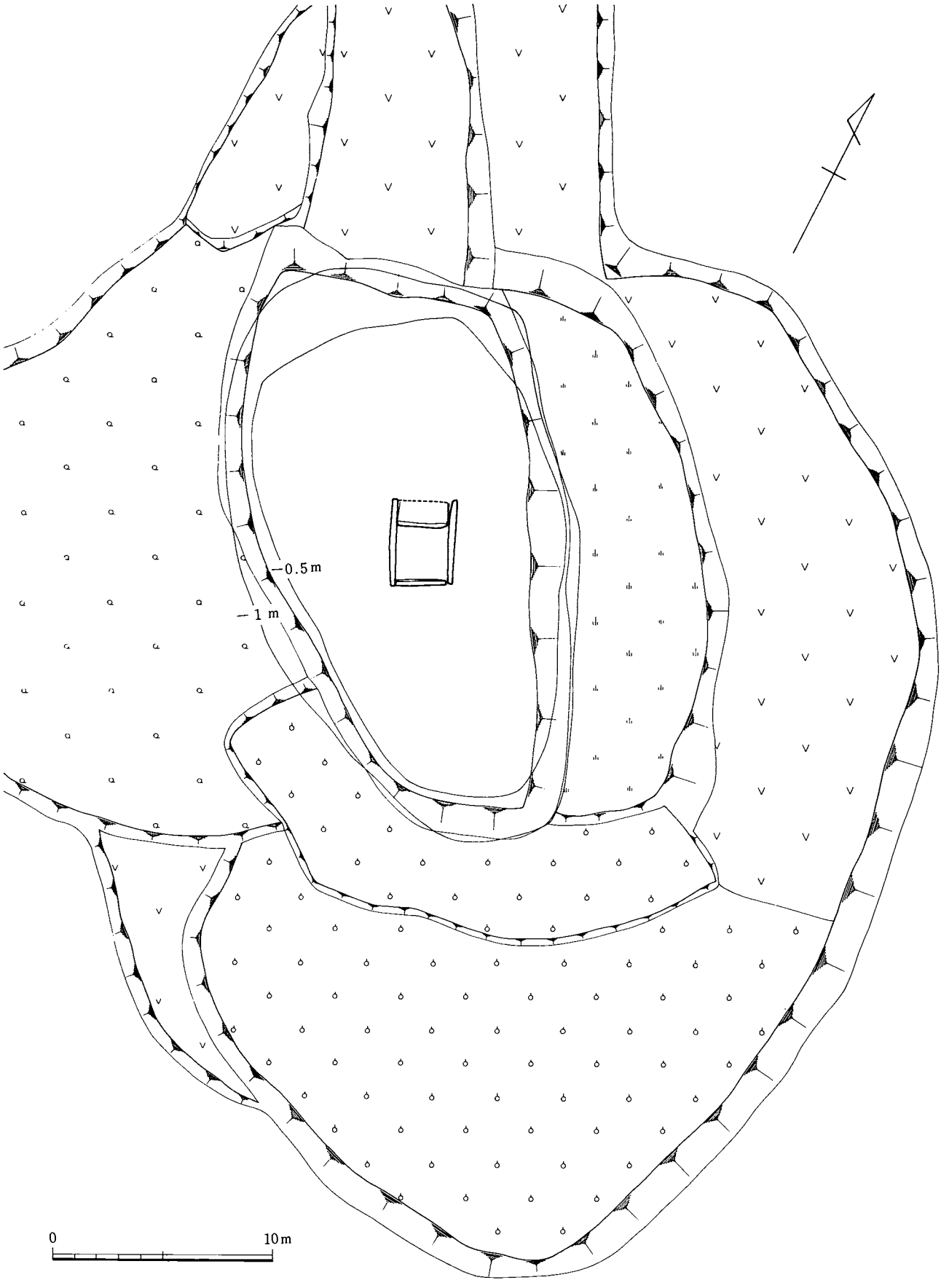
装　飾　①　棺蓋頂部を中心に長軸にそって二条の帯状沈線文で長方形区を画し，内部をさらに四区分するが，左右両端区は中央の二区より大きい。②　上記四区内には長軸に直交する短沈線が一条づつと，左右の大区には棺蓋短側隅部から延びた帯状曲線文とそれに沿った梯子状文がある。③　さらに②の大区には本来は短側（妻側）の装飾である４条の平行斜線が，沈線・幅狭な帯状沈線文を中心にして，左右に描かれる。④　左右の短側（妻側）の主な装飾は，③でのべた左右に及ぶ平行斜線とその下位の直弧文である。直弧文は上述の平行斜線を二分した沈線と帯状文により，同じく二分されている。⑤　長側部斜面は，細い帯状沈線によって五区分され，直弧文と同心円文が交互に配置される。この配置そのものは反対側斜面におけるそれと対応する。⑥　棺蓋側縁上面と同外側面には，梯子状文がめぐる。⑦　彩色－赤・青を使用し塗彩したらしいが，現在はほとんど認められない。彩色には２色を塗り分ける定則があったらしい（文献②小林　Ｐ11）。棺身には朱がのこる。

直弧文　上文の⑤＝長側部と④＝短側部では，それぞれ６区・２区の計８区において直弧文が認められる。それらの直弧文の単位図形はＢ型であり，特にＢ型単位図形の右半分の２区側の連続（文献②乙益）であることが，明らかにされている（文献②③⑤⑥。）連続の一例を示すと，44の４図のＡ′は同図Ａの反転裏返しの使用である。

出土遺物　床面清掃の結果，家形石棺破片１・刀子片２・鉄刀片１・鉄鏃数本分を得た。（文献①「刀剣矛首等の残欠を得たり」）。

年　代　５世紀後半

備　考　①開口古く正徳年間（同５年・1715年）にさかの

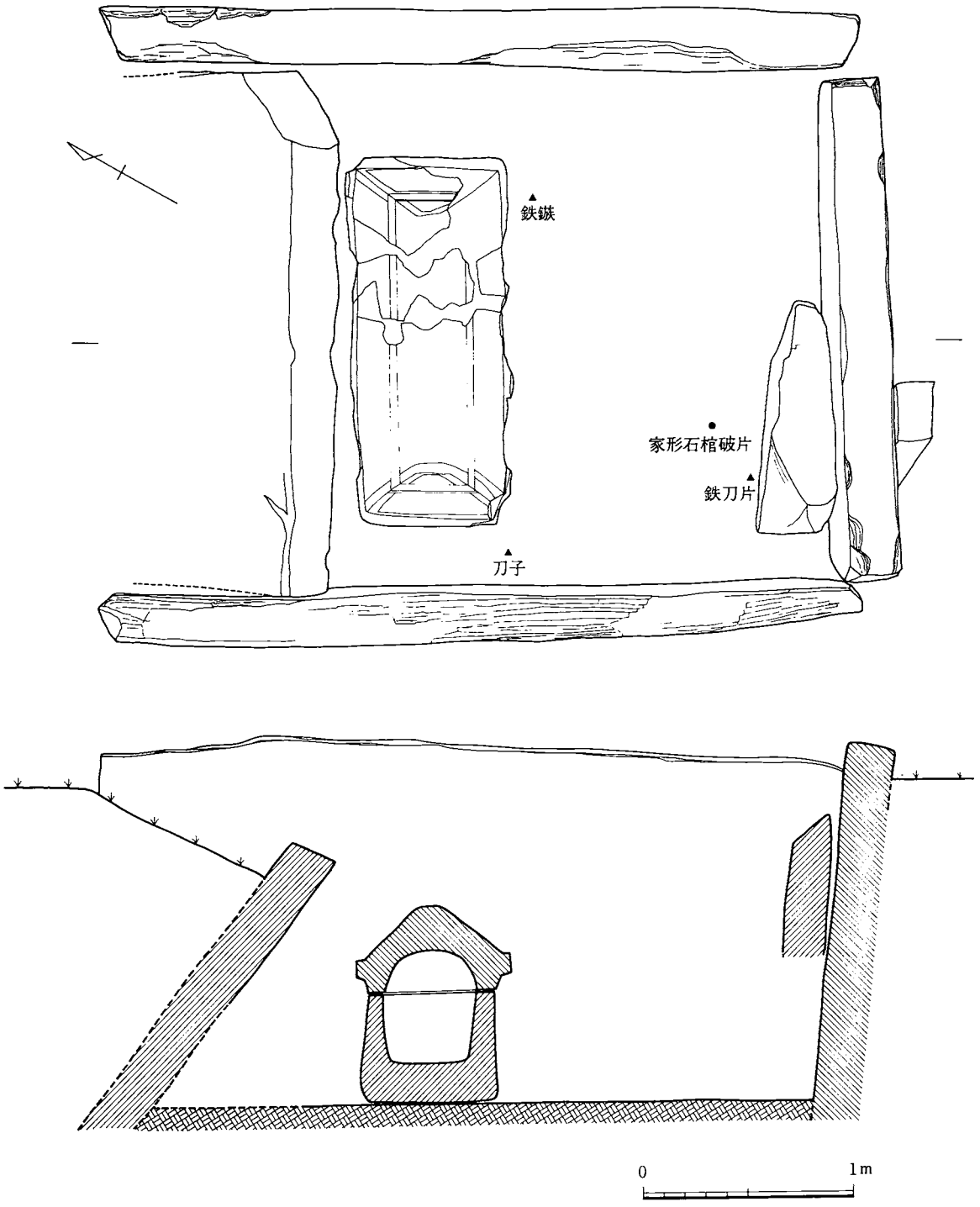


44の2図　鴨籠古墳墳丘測量図

ぼる。(文献①)②熊本県庁角田政治氏の調査後京都大学の発掘。③昭和36年(1961)12月27日調査，調査者－平岡勝昭伊藤奎二・上村俊雄・杉村彰一・高島忠平・古田一英・三島格(責任者)　　(三島　格)

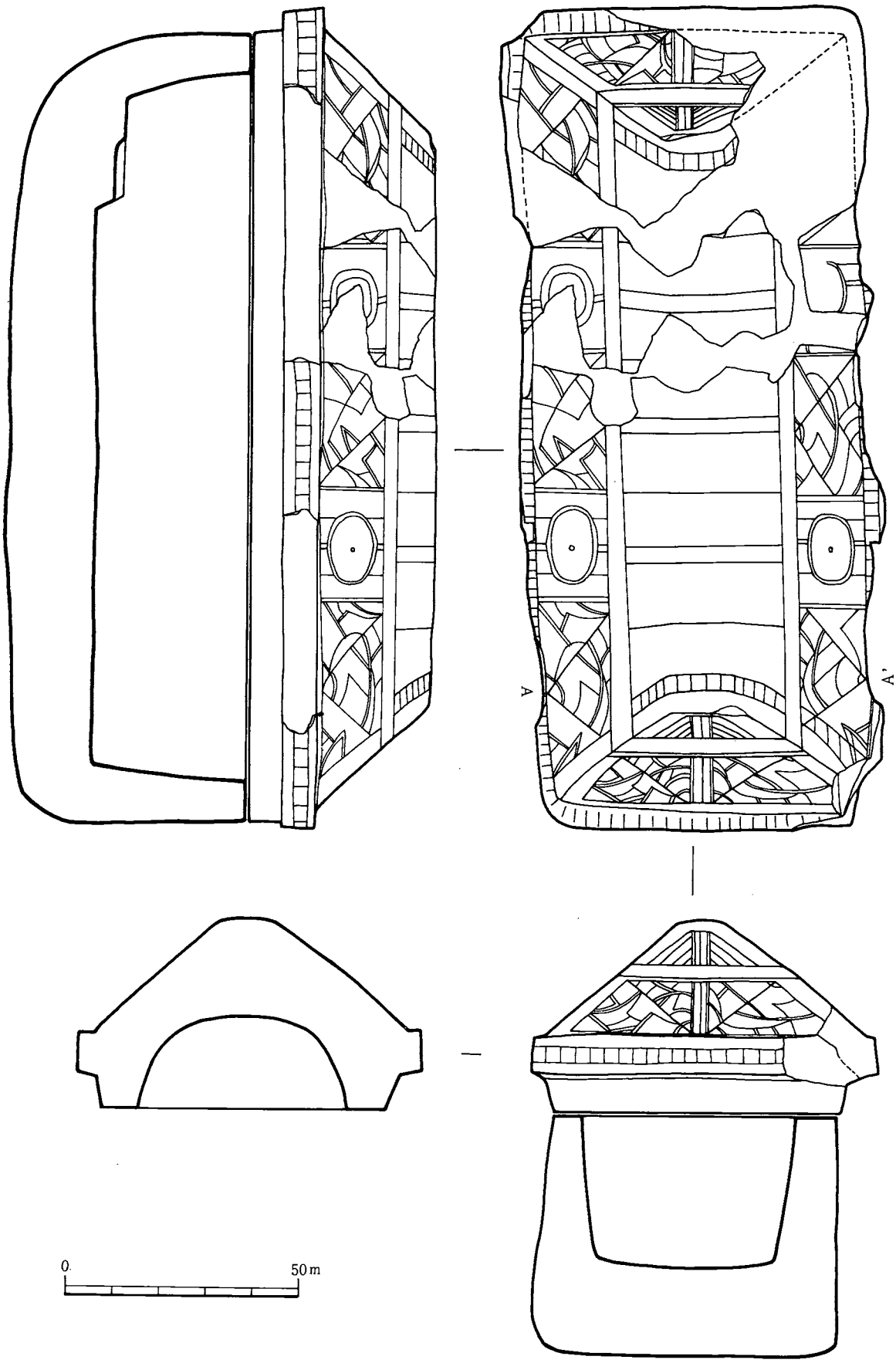
〔参考文献〕

①梅原末治「宇土郡不知火村の古墳」『京都帝国大学文化大学考古学研究報告』1　P24－29　大正6年(1917)　京都
②小林行雄「直弧文の表現」　乙益重隆「鴨籠古墳の石棺」小林行雄編著・藤本四八撮影『装飾古墳』P90　平凡社　昭和

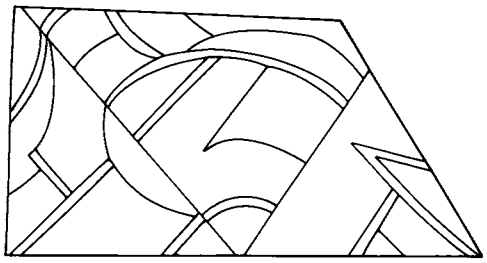


44の3図　鴨籠古墳石室実測図（石棺は京大報告・文献①に基づき復元設置）

39年（1964）　東京
③乙益編著『装飾古墳と文様－古代史発掘』8　P37・87～97（伊藤玄三），98～106（小田富士雄）　講談社　昭和49年（1974）　東京
④乙益『肥後上代文化史』P150　日本談義社　昭和29年（1954）　熊本
⑤斉藤忠編著『日本原始美術－古墳壁画』5　P192　講談社　昭和40年（1965）　東京
⑥斉藤『日本装飾古墳の研究』本文編P35・図版編P260 講談社　昭和48年（1973）　東京
⑦高木恭二「環状縄掛突起を有する石棺について－特にその石棺材の産地をめぐって」（1）　『熊本史学』53　P52　昭和54年（1979）　熊本
⑧高木「肥後南部の石棺資料」『宇土市史研究』2　P16　昭和56年（1981）　宇土
⑨坂本経堯「鴨籠古墳」『不知火町史』P58～59　昭和47年（1972）　不知火
⑩大林太良「装飾古墳の文様と絵画」『図説日本文化の歴史』1　P212～220　小学館　昭和54年（1979）　東京



44の4図　鴨籠古墳家形石棺実測図（永田次郎・宮本千絵実測を補筆）



44の5図　鴨籠古墳家形石棺直弧文部分図（44の4図のA部分・44の6図の拓影より作図）

44の6図　鴨籠古墳家形石棺線刻文拓影図（京大・文献①より）

45. 不知火塚原（しらぬいつかはら）1号古墳（通称鬼塚）（⇨44の1図，45の1 ~3図）

——宇土郡不知火町高良栗崎坊平——

立　地　大野川北岸丘陵（標高81.5m）支脈の突端部に位置し，古墳群を形成する。

墳　丘　封土はほとんど流失・採土されて墳丘は認められない。僅かに遺る堆土と石室高から，最少限径7m余高さ3mの円墳と推定できる。

墓　室　主体は長方形の玄室に短かい羨道をもつ，小形横穴式石室である（45の1図）。ほぼ南に開口する。墓室のみ露出して遺存。玄室奥行2.5m，幅1.6m，高さ1.6m。羨道長1.8m，幅98cm，高さ90cm。用材は輝石安山岩。

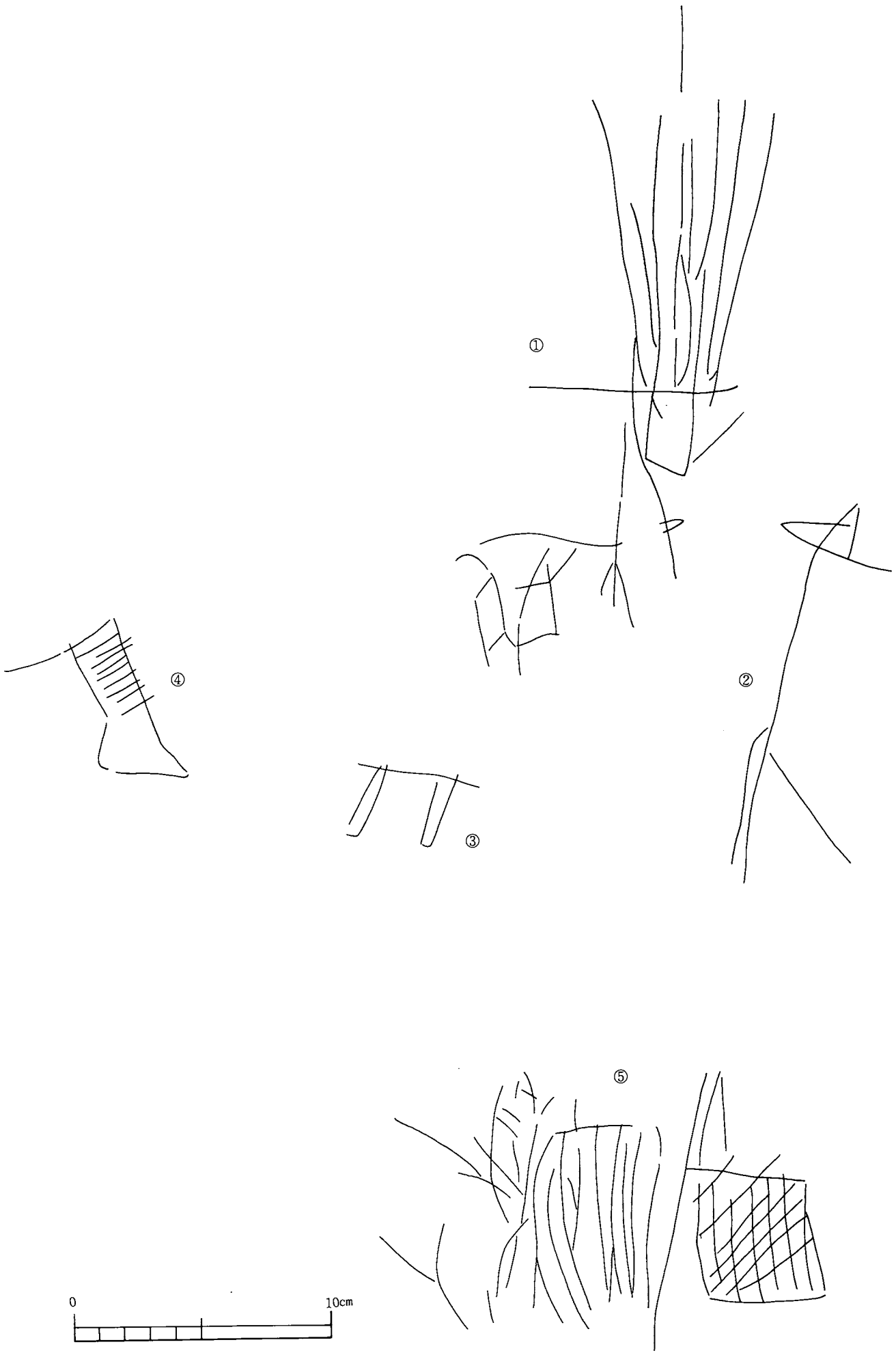
装　飾　線刻による装飾を，①天井石（45の2図）　②玄室東側壁（45の3図）　③玄室西側壁　④玄室南側壁（眉石）　⑤羨道西側などに認める。③④⑤は時間の都合上採拓しなかった。

45の2図は天井石の線刻でその直下に被葬者は位置する。五群に分けられる線刻の中では柱状の線刻が比較的多いが，個々の図形については不明である。45の2図の下位（5群）の右の斜格子は旗竿にかかげた旗旌であろうか。その左に木葉状の線刻を認める。柱状線刻は二又（ふたまた・5群中央と左）あるいは三又（中央右の2群およびその左上のⅠ群の下位）に分岐するものがある。船形を示す線刻がないのが特色である。

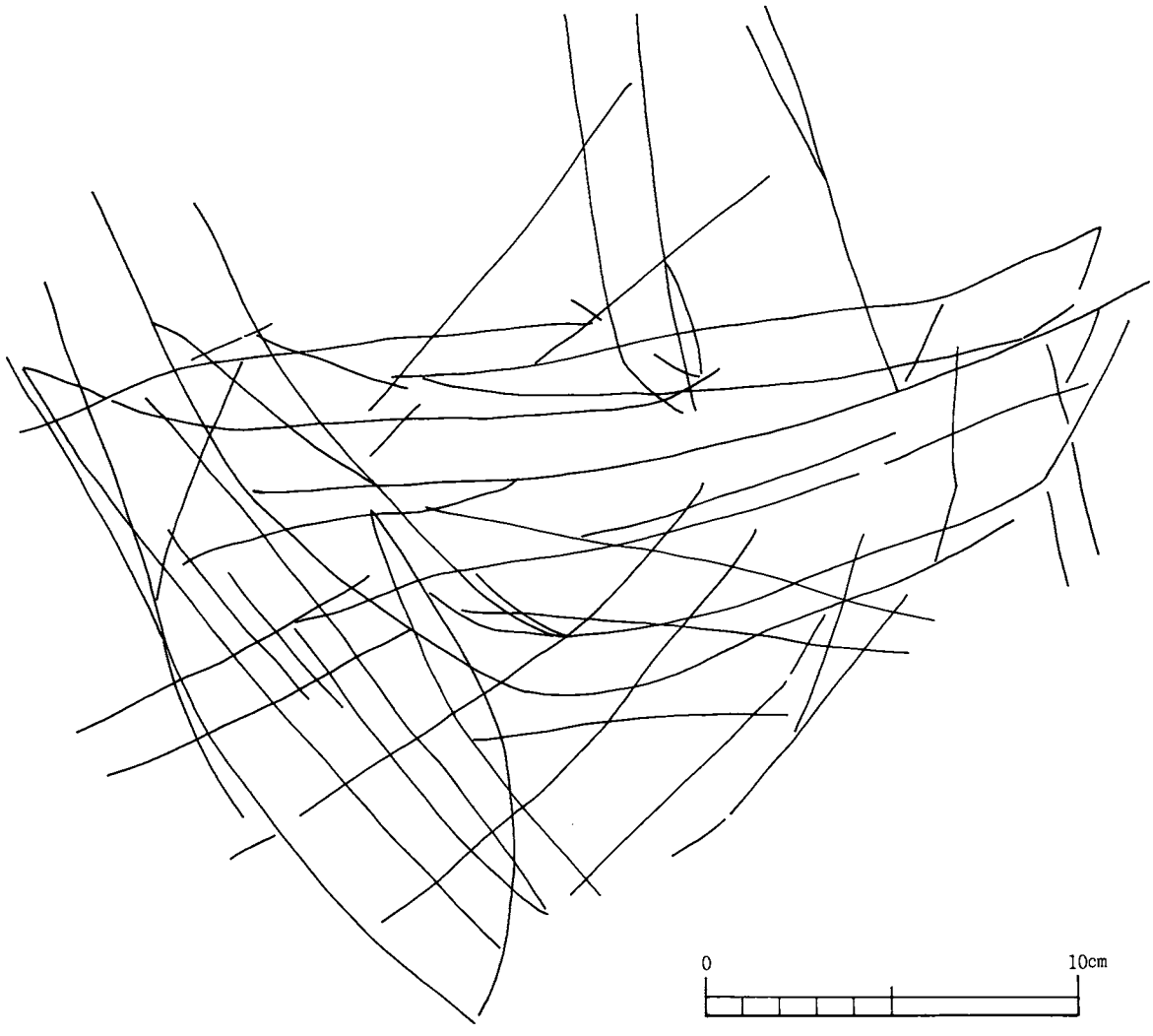
45の3図は玄室東側壁の線刻で，被葬者の頭部と大差ない高さに位置し，複数の船と旗旌？・帆？・櫂などが認められる。

木葉状を示す線刻は石川山・仮又古墳（本書当該遺跡参照）などにも認められる。また上文において旗旌であろうかとした図形の類似例は仮又古墳の東側壁にも認められる。ただし仮又の場合は斜線ではない。

45の1図　不知火塚原1号古墳石室実測図



45の2図　不知火塚原1号古墳天井石の装飾文実測図



45の3図　不知火塚原1号古墳玄室東側壁の装飾文実測図

出土遺物　不明

年　代　6世紀末葉

備　考　①昭和36年（1961）12月27日，上村俊雄・伊藤奎二・木下豊積・三島格（責任者）調査。②昭和5年(1930)鳥居龍蔵氏を迎えて在熊の研究者が本墳や桂原古墳を訪れている（文献②P56参照)。玄室のセメント補修も（45の1図の破線部）その気運によるものだろう。③本報文と桂原1号作製に際し古城史雄・高木恭二氏の援助を得た。

（三島　格）

〔参考文献〕

①三島格「熊本県宇土郡塚原古墳群」『日本考古学年報』14　P156 日本考古学協会　昭和41年（1966）　東京

②三島格「塚原第1号古墳」『不知火町史』P52−56　昭和41年（1966）　不知火。本書所収の天井石および東側壁の線刻図と二者の解説を本文のごとく訂正する。

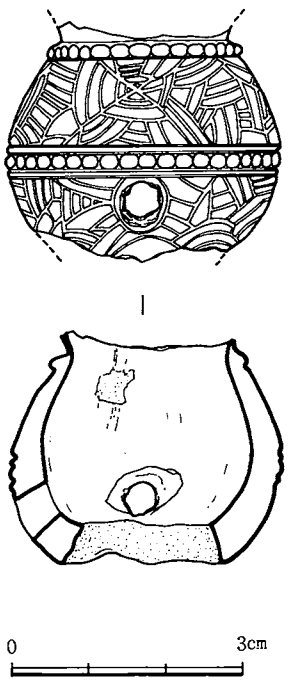
③松本雅明編著『熊本の装飾古墳』P166　昭和51年（1976）　熊本

46．国越古墳（⇨46の１～５図）

——宇土郡不知火町長崎国越——

46の１図　国越古墳と桂原１・２号古墳位置図（松橋 2.5万分の１）

１ 国越古墳　２ 桂原１号古墳　３ 桂原２号古墳



0　3cm

46の２図　国越古墳出土鹿角製玉飾品実測図

立　地　宇土半島の南岸にのぞむ亀崎の西北方台地上にある前方後円墳で，周辺に弁天山の古式前方後円墳や道免古墳（円墳）などが群集し，谷を隔てた東北方約１キロの台地には鴨籠の装飾古墳がある。

墳　丘　丘頂部を削り出し，その上に墳丘を築き上げたもので，全長62.5m，後円部直径36.2m，高さ6.5m，前方部幅22.5m，高さ６mを有し周溝はない。墳丘は一見段築状にみえるが，それは昭和40年密柑山に開墾されたさいに変形したものである。後円部の西南側に通路と入口を設け，横穴式石室につづく。通路の床には礫をつめた排水溝がつくられ，入口には大きな把手を彫り出した扉石を立てる。おそらく，その形は楯をあらわしたものであろう。

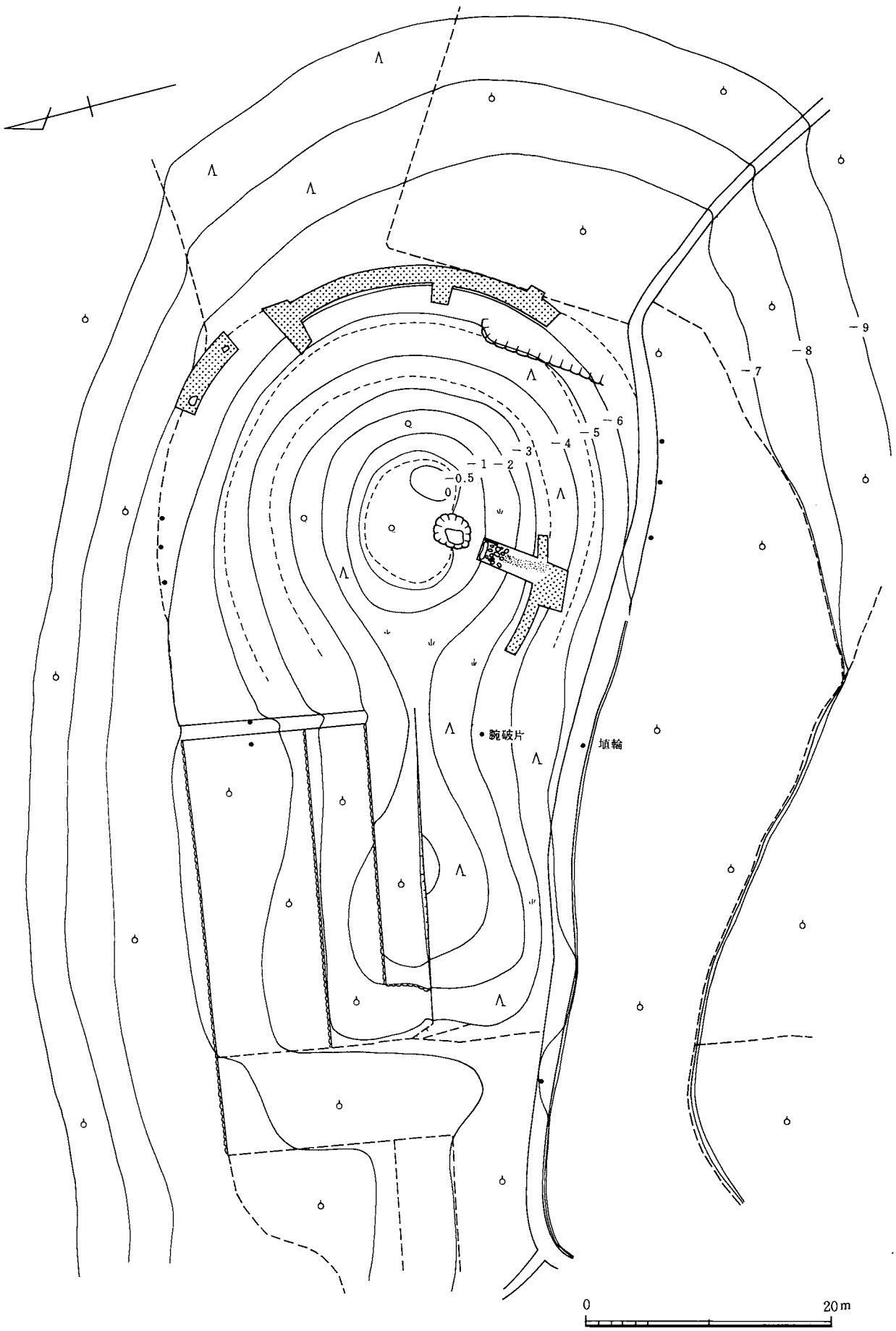
石　室　石室は奥行2.85m，幅2.16m，天井は崩れて明らかでない。石室内部両側には中央通路をはさんで，左右に二個の屍床を設け，その奥には奥行約35cmの副床があり，さらに奥壁にそって平入の入口を有する家形石棺を置く。

装　飾　石棺は阿蘇熔岩製で屋根の斜面を三区にわたって方形に彫りくぼめる。その軒まわりと入口の左右の袖石には，きちんと枠どりした中に直弧文の一種である鍵ノ手文を描き，その上から赤・青・白・緑の四色でぬりわけている。石棺の奥壁にも梯子形文で三区に枠どりした中に，同様な鍵ノ手文を数段にわたって描き，同様な彩色を施しそれらの配色は荘麗である。石棺奥壁正面には２段にならぶ４個の託架状の突起を設け，うち３個は造り付の丸彫りであるが，右上段の１個は嵌め込式になっている。これらの部分にも彩色で鍵ノ手文をあらわし，おそらく刀架をあらわしたものであろう。

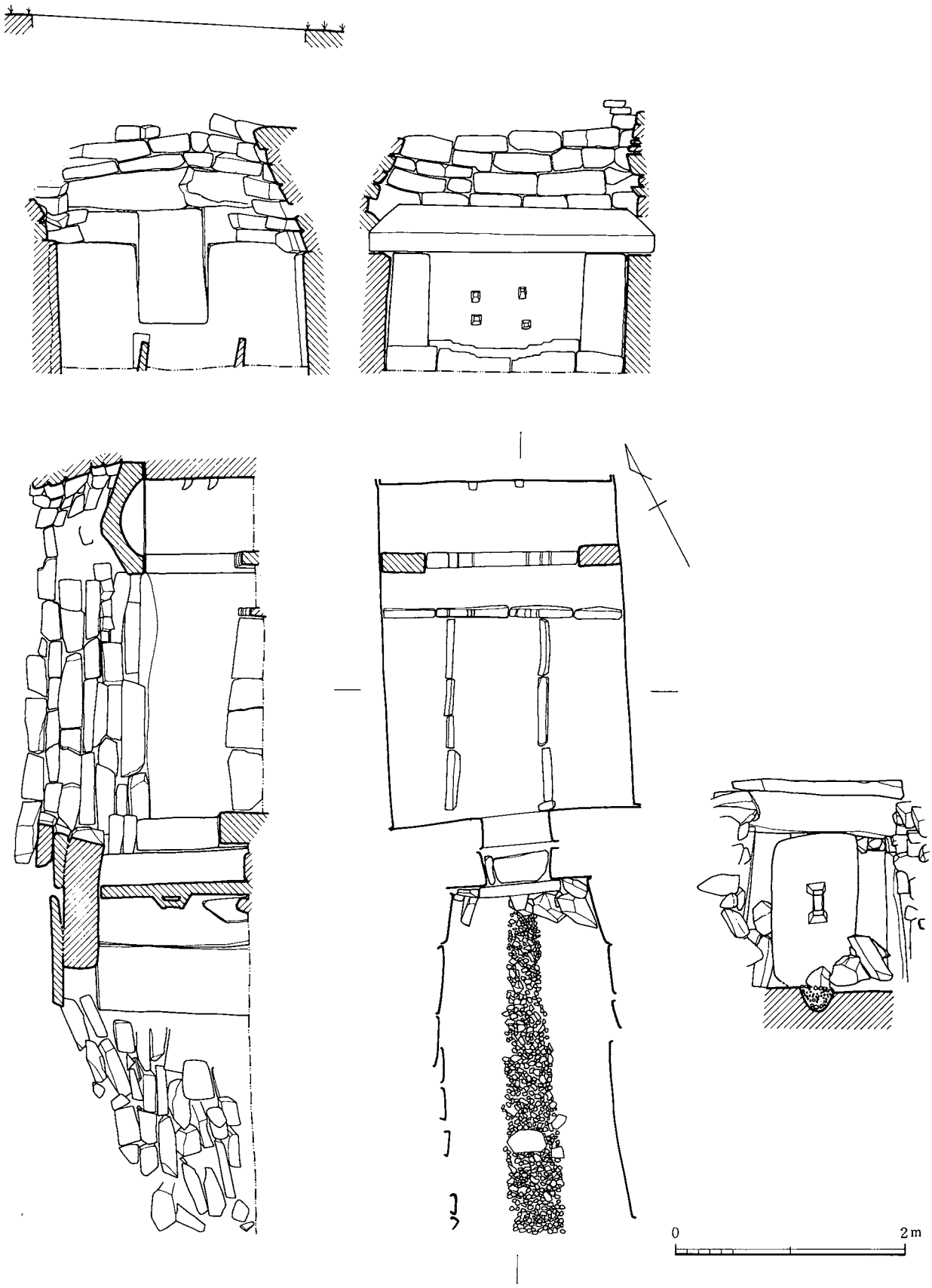
出土遺物　昭和41年８月の発掘にさいして東屍床より四獣鏡１と金環・銀環各１，鉄鏃約20本，大刀１を出土した。西屍床には人骨２体以上と獣文縁獣帯鏡１，金環２対，硬玉製勾玉１，碧玉製管玉13，銀製空玉３，ガラス製の小玉や粟粒玉多数が出土した。また副床には斧８，ノミ２，刀子４，鉇３，矛２，石突２，鋤先12，鎌６，鏃約40，銅椀１，杏葉１，辻金具２，帯金具２のほかに鉄製雛形の斧３，同鏃先４，同刀子２，同鎌２，同鋤先３，同大刀片１などを出土している。さらに奥の石棺内には人骨２体をはじめ画文帯神獣鏡１，鹿角製玉飾付矛１，ガラス勾玉10，ガラス小玉約180，ガラス粟粒玉約600，鏃約30，帯金具２，ノミ１などを出土した。その他中央通路には須恵器の小形高杯と，脚台付の蓋付壺１が出土し，後円部封土の頂部にも須恵器の脚台付壺１が検出されている。また墳裾および封土の中腹から人物や鈴，楯その他の器材埴輪や円筒埴輪も出土している。

年　代　６世紀　　（乙益重隆）

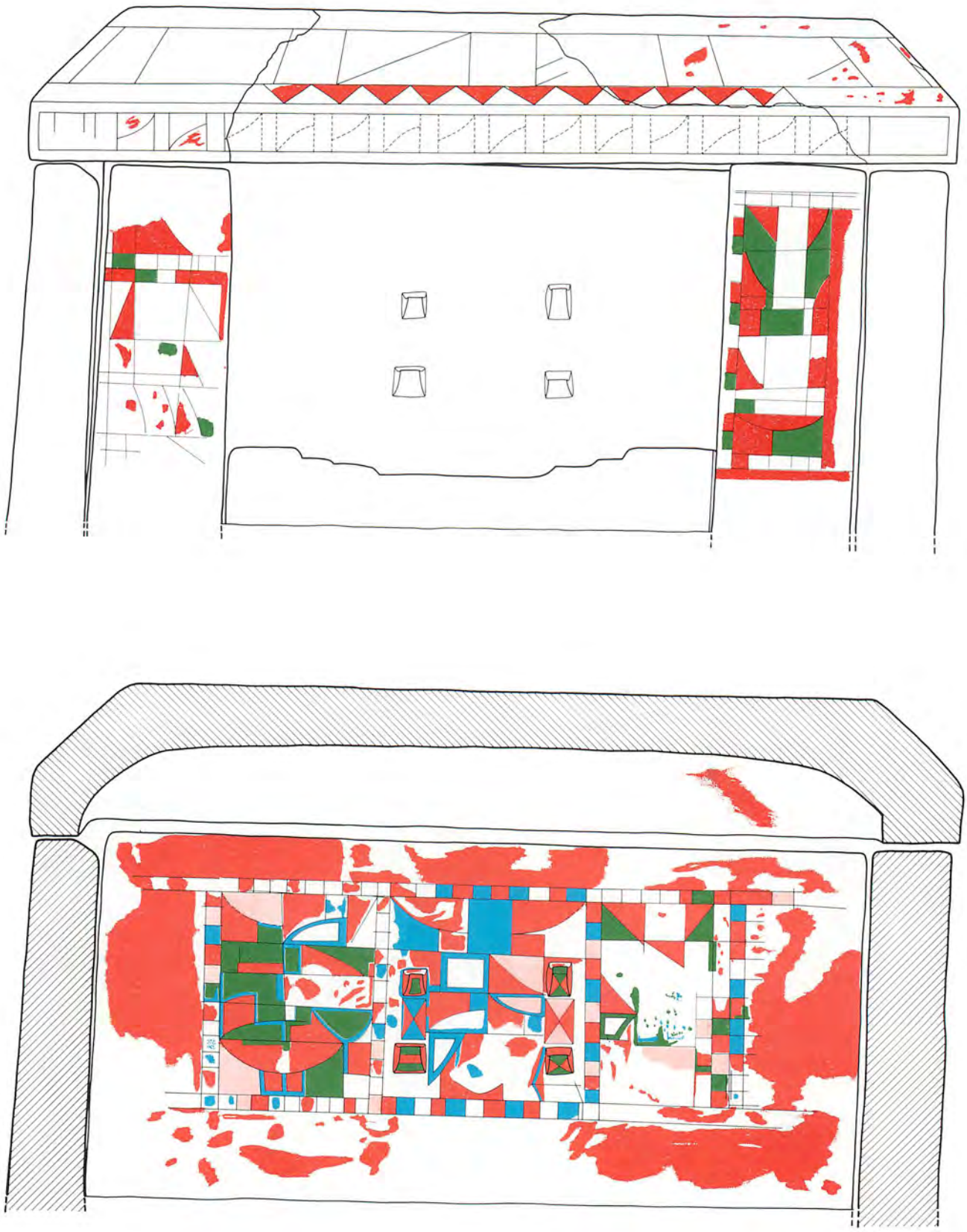
〔参考文献〕
①乙益重隆「国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』昭和42年（1967）



46の3図　国越古墳墳形測量図（網目部分と点の位置から埴輪出土）



46の4図　国越古墳石室実測図



46の5図　国越古墳家形石棺装飾文実測図

47. 桂原（かずわら）1号古墳（別称桂原白玉（しらたま）古墳）〔昭和50年県史跡〕（⇨46の1図，47の1～6図）

――宇土郡不知火町長崎白玉――

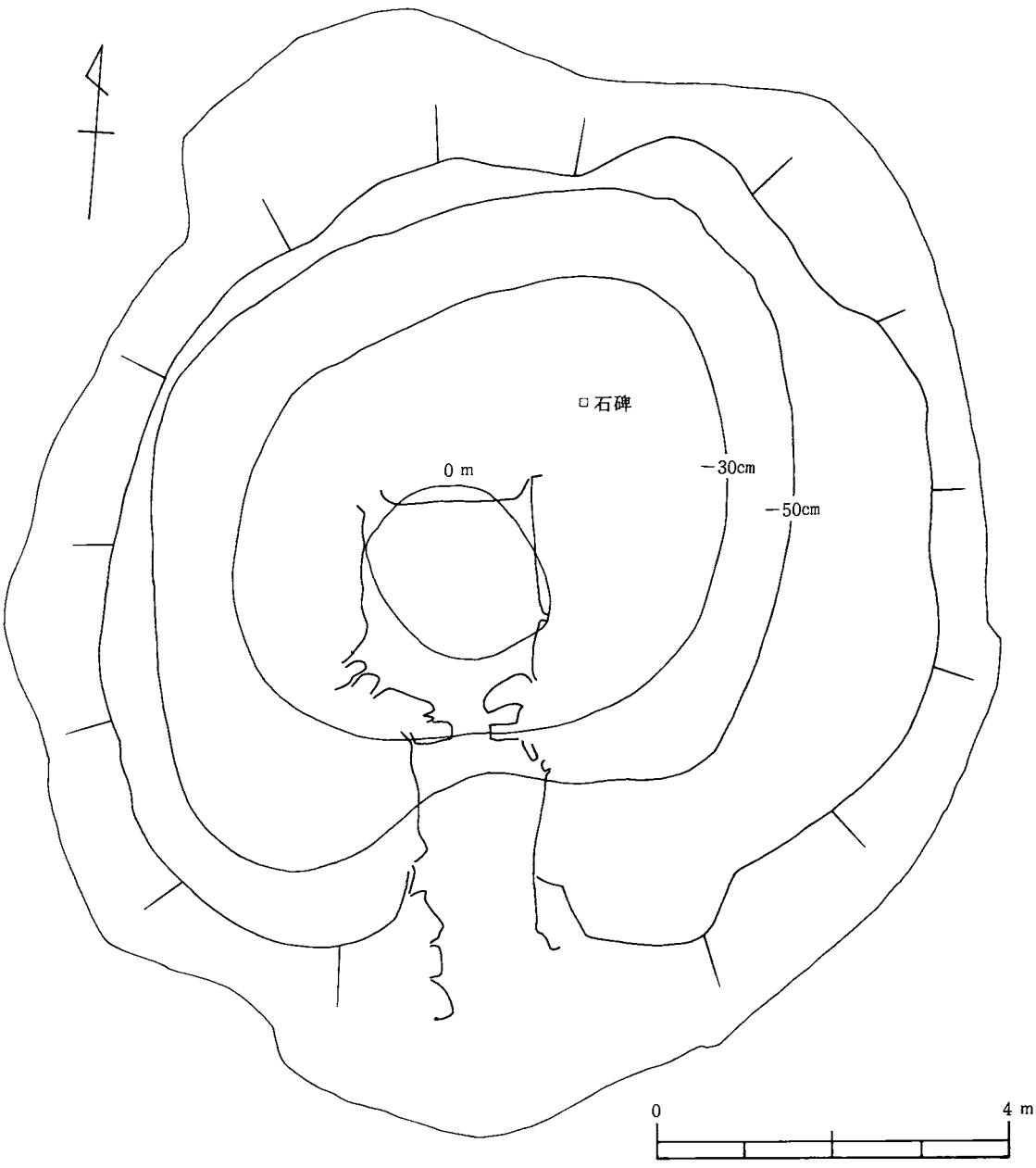
立　地　不知火海に面した宇土半島基部の丘陵中腹（標高65m）に位置する。近くに破壊墳があるのでかっては群を形成していたらしい。

墳　丘　東西径約12m 南北径13m 高さ4mを測る円墳。墳頂部は平担で玄室天井石の一部が露出する。墳頂一隅に後代の立石がある刻字などはない。葺石については不詳。

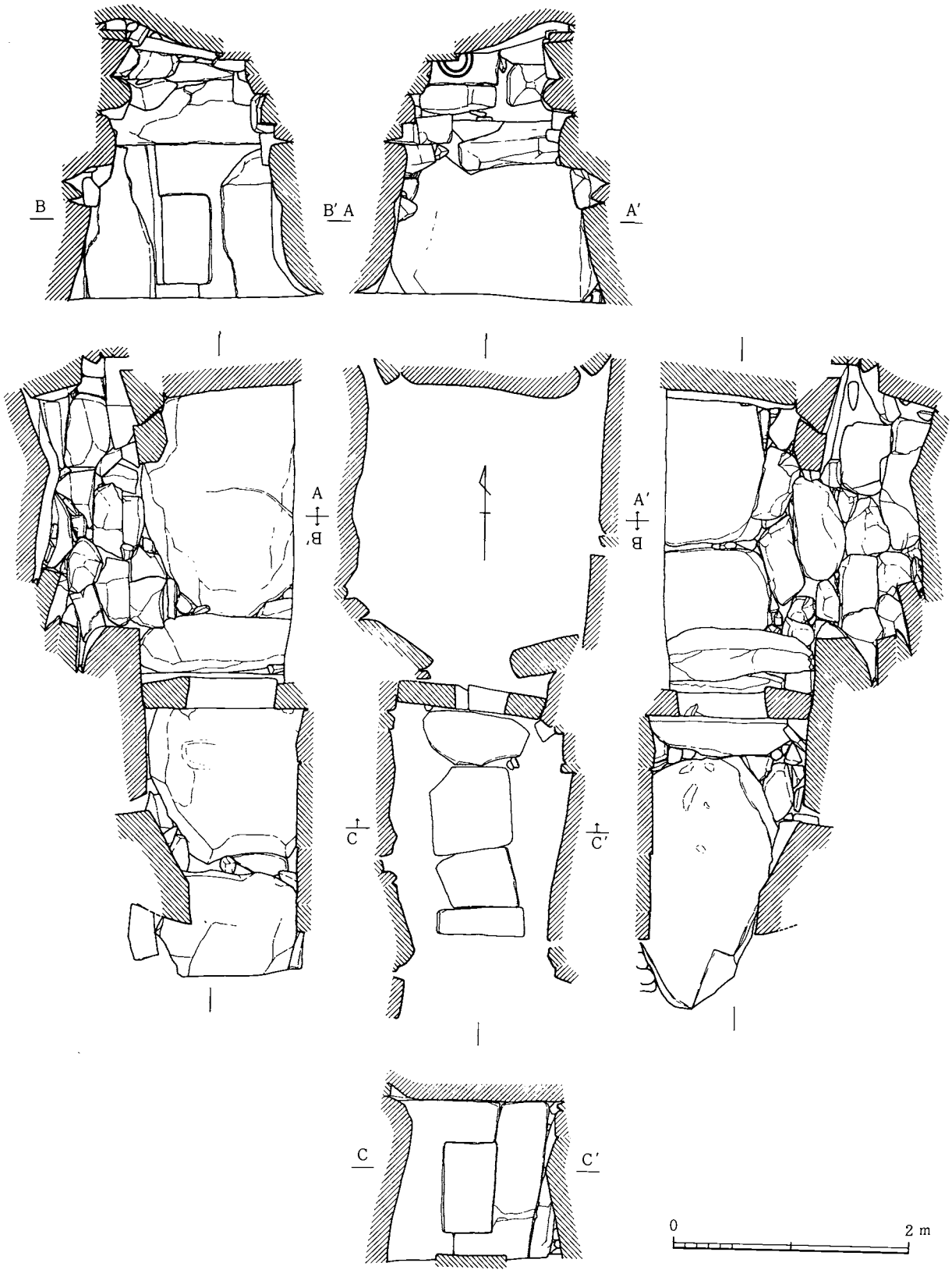
墓　室　ほぼ南に開口する全長5.85m の横穴式石室で，玄室と羨道からなる。使用石材は宇土半島産出の輝石安山岩を使用するが，野面積みの粗面に加飾（後述）を施す。玄室平面形は長方形状で厚さ22cmの仕切り石と左右側壁石の交叉する両隅部は張り出している。奥壁は右に偏して石棚が挺出している。玄室と羨道は一枚石を刳り抜き中央に通門を穿った立石で区切られている。巨石を配した羨道は開口部でやや狭くなっている。開口部近くの側壁石はかなり取り去られ，かつ積み直しがあったらしく舟の線刻をもつ石材が倒立して使用されている。石室全長：5.85m，玄室：奥行き2.48m，幅2.50m，石室高2.1m，石棚の高さは床面より1.3m，羨道：長3.15m，幅1.5m（開口部1m 高さ1.3m）仕切石厚さ22cm。

装　飾　線刻と彩色による装飾が下記の部位に認められるが，彩色は1箇所で他はすべて線刻による舟を描く。

①奥壁　白と黒の顔料による同心円形文と舟の線刻1箇所（以下舟を略す）。②玄室西側，4箇所。③玄室東側　8箇所。④玄室南側　仕切立石通門西側1箇所と通門上位3箇



47の1図　桂原1号古墳墳丘測量図

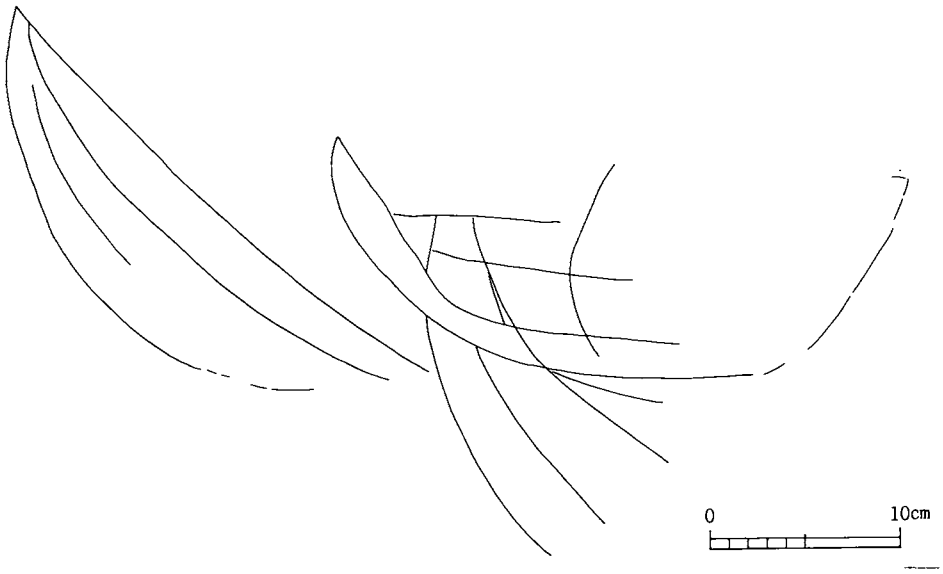


47の2図　桂原1号古墳石室実測図（原図 松村道博）

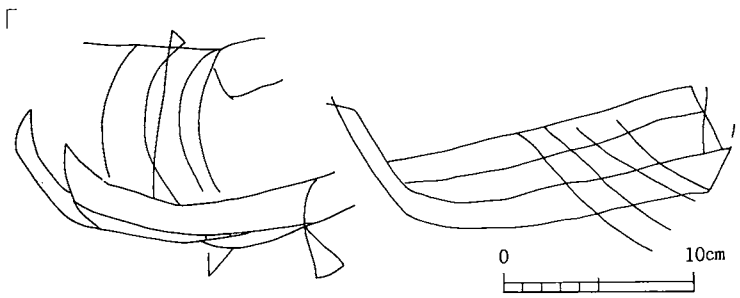
所。⑤石棚上面　1箇所。⑥羨道端近く西側　1箇所。

	①奥壁	②玄室西側	③玄室東側	④玄室南側	⑤石棚上面	⑥羨道西側	計
彩色	1						1
線刻	1	4	8	4	1	1	19

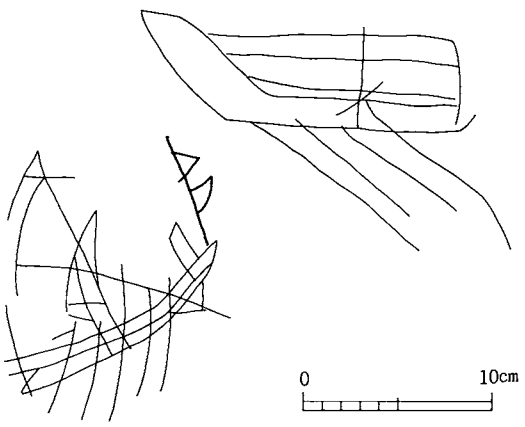
但し，上記の中には後世の追刻・新刻もあり得て判断のつきかねるものもあるが，昭和36年（1961）の調査では能う限り上記19の拓本を取った。註③⑥の三島書の装飾の位置と数に脱落があるので，本文で訂正しておく。



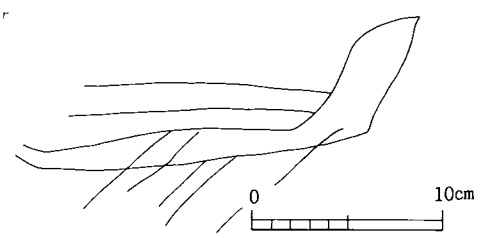
47の3図　桂原1号古墳玄室東側の装飾図(1)



47の4図　桂原1号古墳玄室東側の装飾図(2)



47の5図　桂原1号古墳玄室西側の装飾図



47の6図　桂原1号古墳玄室南側の装飾図

出土遺物　不明

年　代　6世紀後半代

備　考　①大正8年（1919）京都大学による図示が初出（Shirani　Tomb）。②昭和36年（1961）12月　松本雅明・乙益重隆・平岡勝昭・杉村彰一・古田一英・伊藤奎二・上村俊雄・高島忠平・三島格（責任者）および宇土・玉名高校生により調査。熊本日日新聞の援助があった。

（三島　格）

〔参考文献〕

①浜田・梅原・島田「九州における装飾ある古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』3所収の第1図　大正8年(1919)　京都
②三島格「熊本県宇土郡不知火町桂原古墳」『日本考古学年報』14　P156－157　日本考古学協会　昭和41年（1966）　東京
③三島「桂原古墳」『不知火町史』P72－75　同委員会　昭和47年（1972）　不知火
乙益重隆「桂原古墳」斎藤忠編『日本原始美術』5　P183・224　講談社　昭和40年（1965）　東京
⑤斎藤忠『日本装飾古墳の研究』本文編　P45　講談社　昭和48年（1973）　東京
⑥三島「桂原古墳」松本・白石（写真）編『熊本の装飾古墳』P170－175　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）　熊本
⑦『熊本県概要』　昭和12年（1937）　〈未見〉

48. 桂原（かずわら）2号古墳 (⇨46の1図，48の1図)

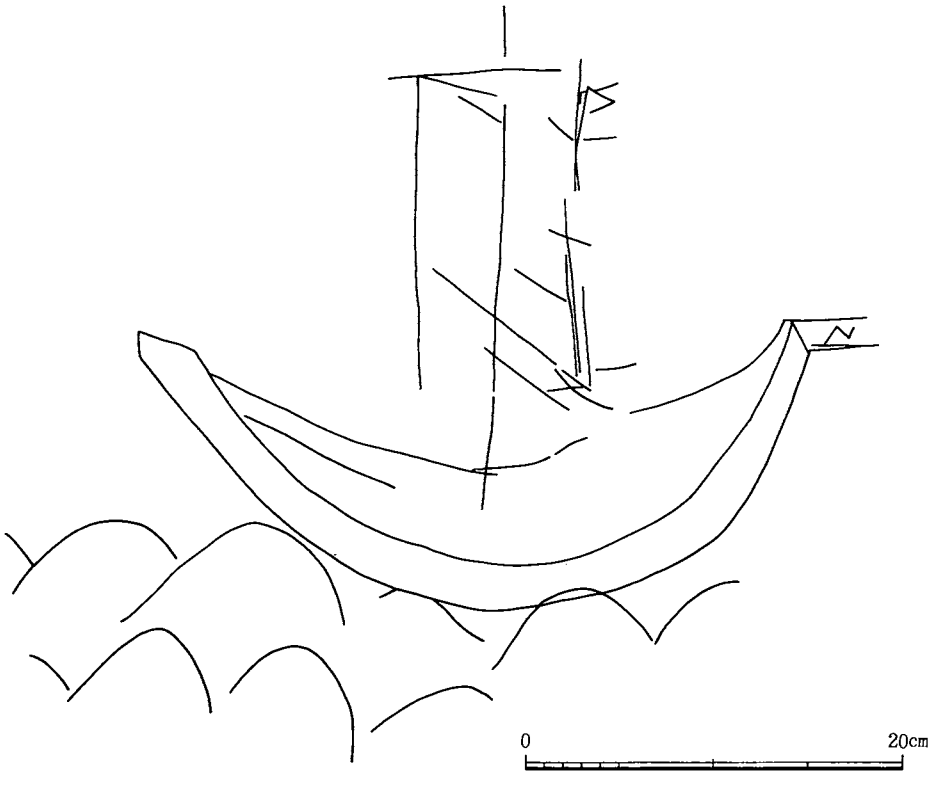
——宇土郡不知火町長崎白玉——

立　地　宇土半島を形成する山塊の一つ，柴尾山（標高359m）から不知火海にむかって派生する丘陵の，比較的になだらかな尾根上に位置する。西方約50mのところに1号墳（桂原古墳）が位置し，装飾文様なども深い関連性を示している。

墳丘・石室　封土等を流出し，墳形などについては知るよしもないが，石室基底部の腰石のみを残存し，側壁上部や天井石なども欠失する。両袖の横穴式石室であり，内部には若干の石室用材や土砂が埋まり現存高約90cmをはかる。石室内法は，長さ約195cm，幅140cmの矩形をなし，これに長さ約30cmの袖部があって，その前面に閉塞石が立っている。羨道部の現存長は128cm，幅95cmで，この左側壁に線刻で装飾をほどこす。

装　飾　線刻は長さ35.7cm，高さ31.1cmの一艘の舟を描く。中央には幅9.0cm，高さ23.7cmのマストを立て，その後には三角形の旗状のものを描く。また舟の後方には乗降施設と考えられる梯子状の文様を刻む。また舟の下には半円状の波頭を二段現わし，航海する様子を描く。この他，別の壁面にも装飾文様が描かれていたことも十分考えられる。このように本墳は立地，装飾文様から被葬者の生前における活動の状況を示しているといえる。なお装飾文様の採拓にあたっては，中野章・木下洋介両氏の協力を得た。記して謝意を表する。

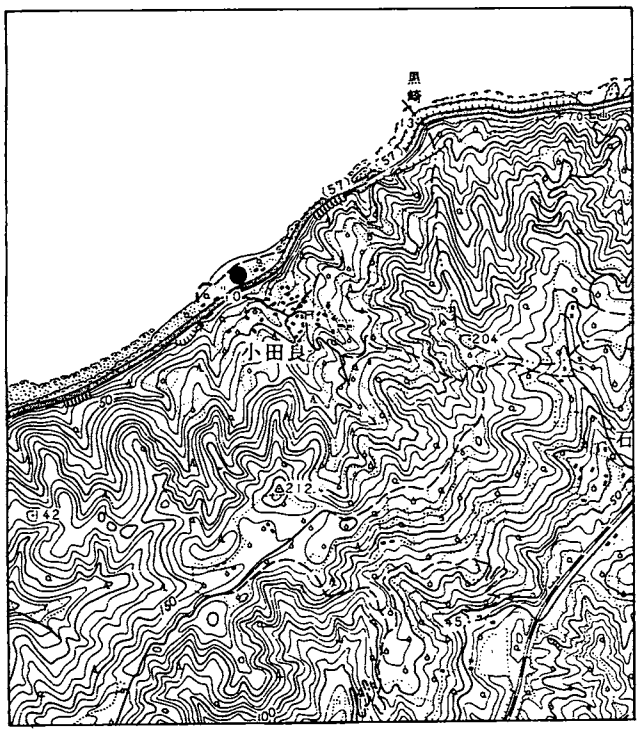
年　代　7世紀？　(平山修一・高木恭二)



48の1図　桂原2号古墳羨道右側壁の装飾文実測図

49. 小田良（おだら）古墳〔昭和54年国史跡〕（⇨49の１～６図）

——宇土郡三角町中村前畑——



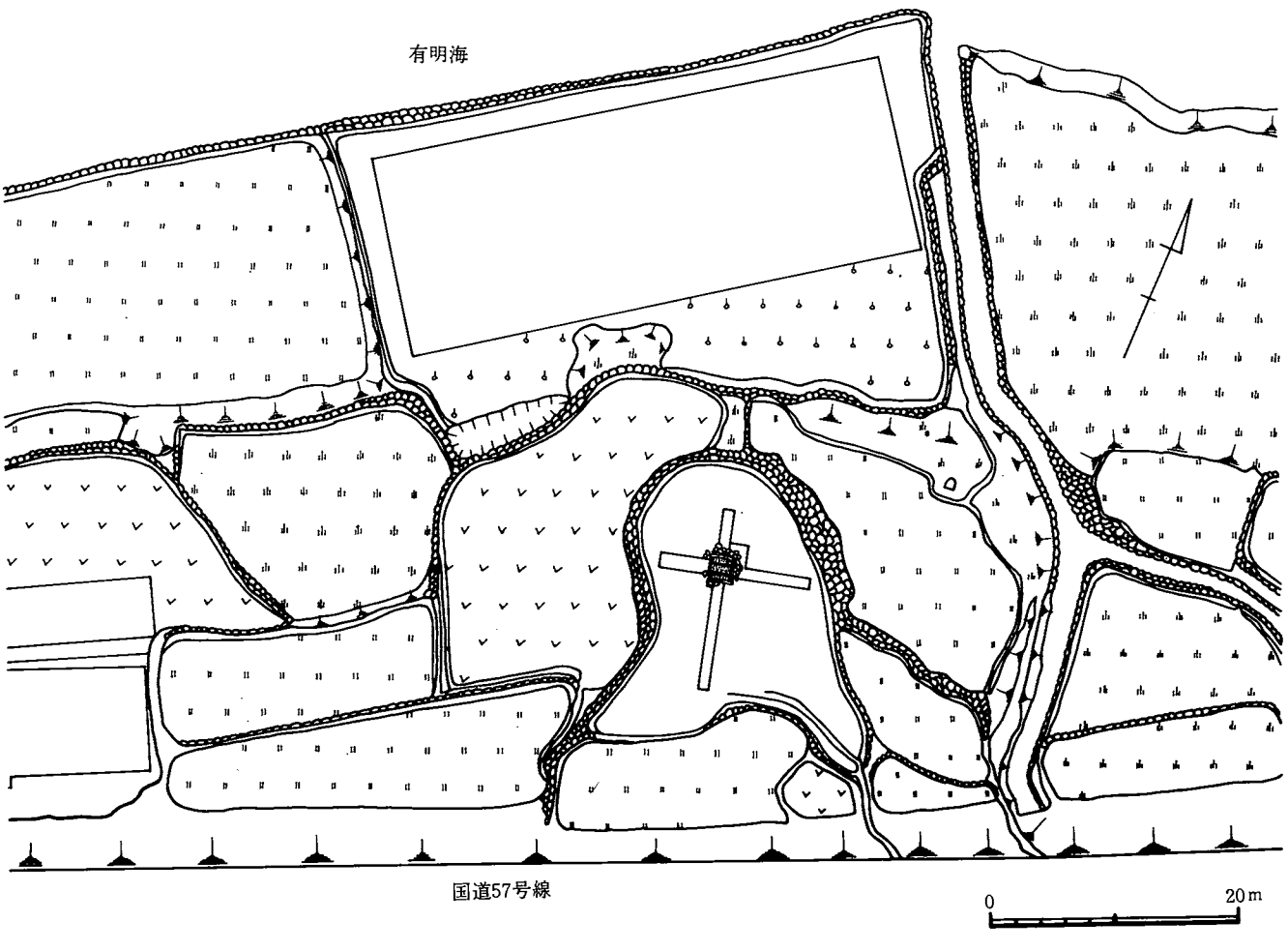
49の１図　小田良古墳位置図（三角・松合2.5万分の１）

立　地　三角半島北岸で小田良集落からわずかに突出した小半島（長さ約40m×幅18m）の畑地内にあり，海抜約７m上に位置している。

墳　丘　墳丘は発掘調査前に完全に消滅しており，周濠の状態も不明であるが，小規模台地上に位置する事から円墳と推定される。

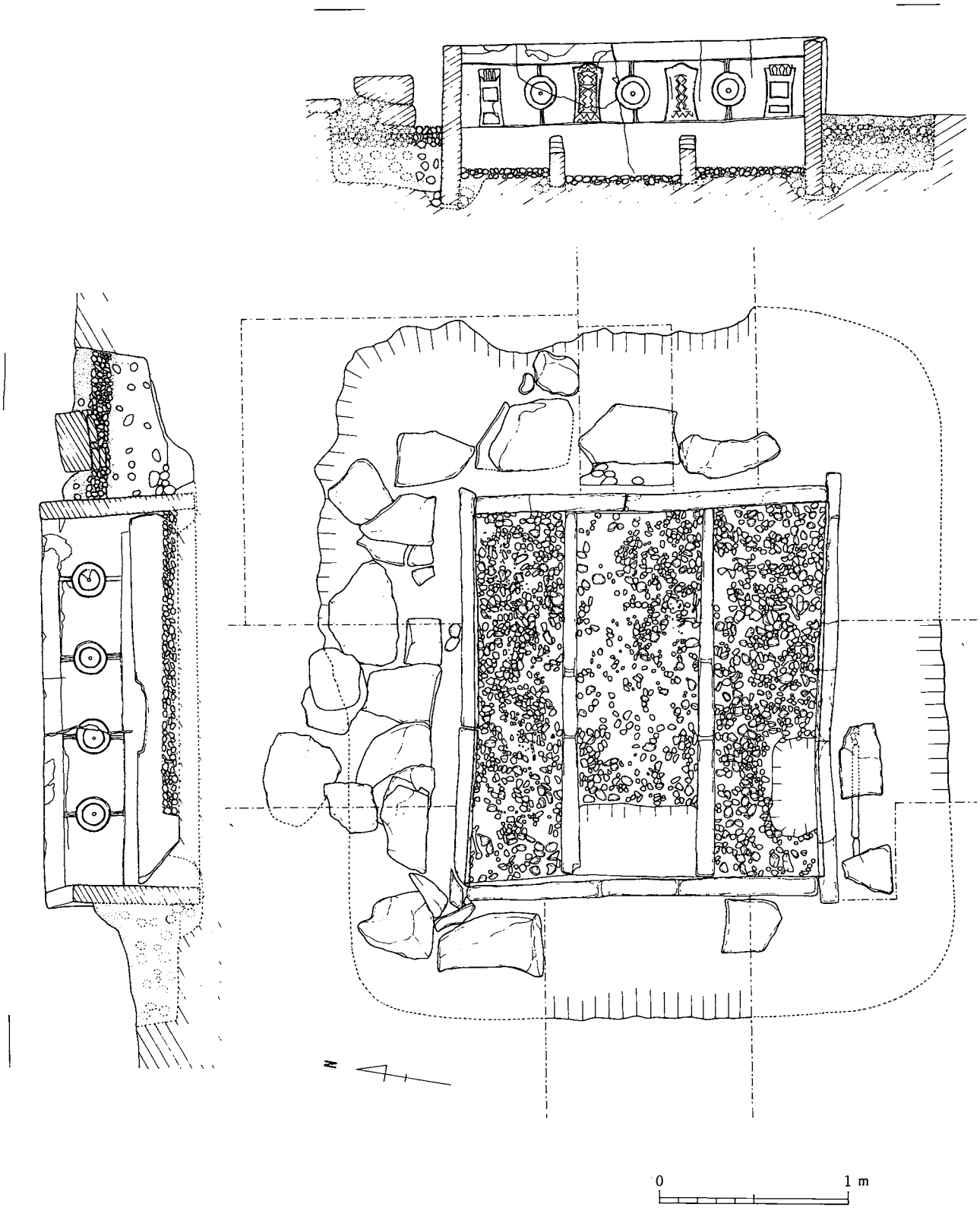
墓　室　石障の周囲に板石が認められる事から，板石を小口積みに持ち送り，ドーム状の石室を構築したものと判断される。石室内に４枚の石障を巡ぐらせ，二枚の仕切石を施けている。石障はいずれも砂岩の板石で，入口にあたる前障及び，２枚の仕切石の中央には刳り込みが施こされている。屍床及び通路には礫石を敷きつめている。石障の規模は195cm×189cmを測る。前障に入口を意味する刳り込みがある事から小規模の羨道が存在するものと思われ，横穴式石室として捉える事ができよう。

装　飾　装飾文様は左側障に円文４個，奥障に靫２個，楯２個，円文３個，右側障に円文３個，前障に円文２個が施こされている。奥障では上下に幅約32cmで２本の横沈線を引き，その中に左から靫・円文・楯・円文・楯・円文・靫の順序で施文している。左の靫は高さ28.8cm，最大幅13.4



49の２図　小田良古墳周辺測量図

cm，最小幅12cmを測り，縦長で裾開きの梯形を呈している。體部２ヶ所を方形に彫り凹め，頭部は筒状の上部に翼を広げた様に左右に突出している。柳葉式状を呈する３本の鏃を浮き彫りにしており，長さ5.3cm，最大幅1.7cmを測る。円文は上下に２本の沈線が張られ，外円・内円と中心孔が表現されている。直径を左円で測ると外円18cm，内円10.4cm，中心孔1.7cmである。この外円と内円との間は２～３mmの深さで彫りくぼめている。左の靱は高さ29.8cm，最大幅15.1cm，最小幅12.9cmである。頭部は孤状をなし，両端は翼状にやや張りが見られる。両側はｘ状にゆるやかにそり，下縁は直線である。内側に同様の形を施こし二重の文様である。外縁と内縁との間には二重の鋸歯文が見られ，



49の３図　小田良古墳石室実測図

内縁にも同じく二重の鋸歯文を主調とした幾何学文様を施こしている。右楯は高さ30.1cm，最大幅16.9cm，最小幅14.4cmを測る。形状は左楯と同じであるが，横幅が幾分広くずんぐりとしている。内縁や鋸歯文は彫りが浅く不鮮明となり，内縁は菱形を4個縦に並べたかの様にある。右靱は高さ26.7cmを最大幅14.7cm，最小幅12.8cmを測る。左靱と同じ形状を示すが，幾分，ずんぐりとした形で，體2ヶ所に設けた彫り込みは，上下の大きさが不ぞろいである。3本の鏃は長さ4.9cm，最大幅2.4cmで平根の定角式を表現している。円文はこの奥障の3個のほか，左側障4個，右側障3個，前障2個があり合計で12個である。朱が残されたところも多く，元来，全面に施こされていたものと思われる。

出土遺物　石障外から直刀一振が出土しており，石障内からは約700個の玉類や青銅製鈴，刀子，人骨片，獣骨片，馬骨が出土している。また，埋土からは貝殻片，青磁が出土している。

玉類…ガラス製の棗玉，小玉と滑石製の臼玉がある。棗玉は黄緑，黄，黒色の色調を呈し，中央部がふくらみ，稜は不明瞭である。最大長10.8cm，最大径6.2cmである。小玉は濃紺から紺色，コバルトブルーを呈するものがある。形態は不ぞろいで径は7.2～3.4mm，厚さは6.1～2.5mmと変化がある。

鉄器…直刀があり，平作りで反りはなく基を一部欠失する。長さ70.0cm，刃部幅3.5cm，厚さ1.2cmである。鉄剣は3片出土しており断面はゆるい菱形で大ぶりの剣である。このほか，鉄矛，刀子，鉄鏃が数点出土している。

青銅製器…青銅製鈴2点と半球形に糸通し孔をつけた銅製品一点が出土している。

人骨…屍床から人骨片が出土し，頭骨，脛骨片，大腿骨，切歯，大臼歯などが確認されている。

獣骨他…人骨のほかイノシシ，イヌの骨や馬の骨が見られている。

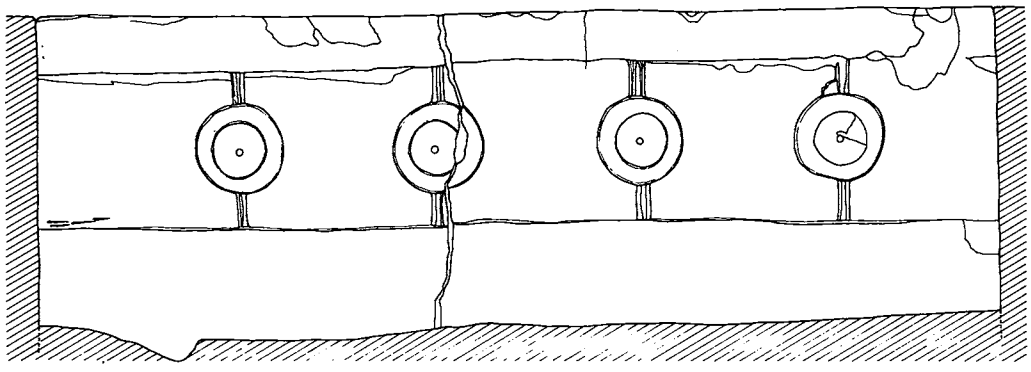
年　代　5世紀と考えられる。

備　考　昭和53年（1978）9月三角町教育委員会により発掘調査。昭和54年（1979）国指定史跡となる。（江本　直）

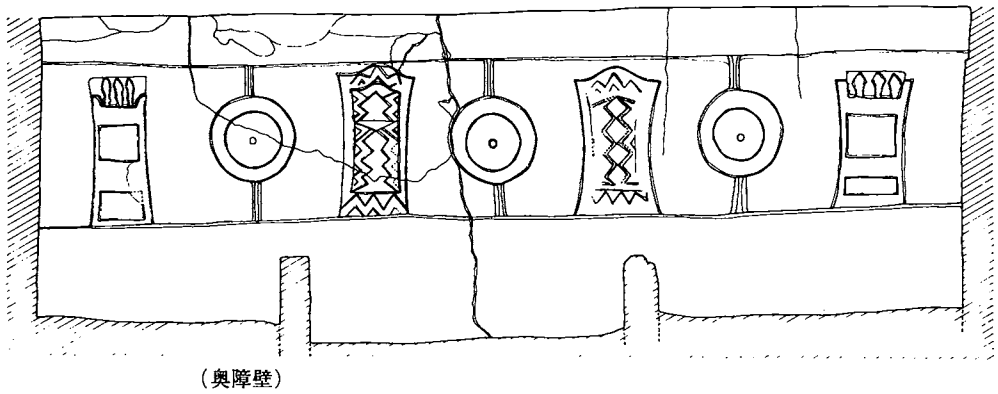
〔参考文献〕

①『小田良古墳』三角町文化財調査報告　三角町教育委員会　昭和54年（1979）

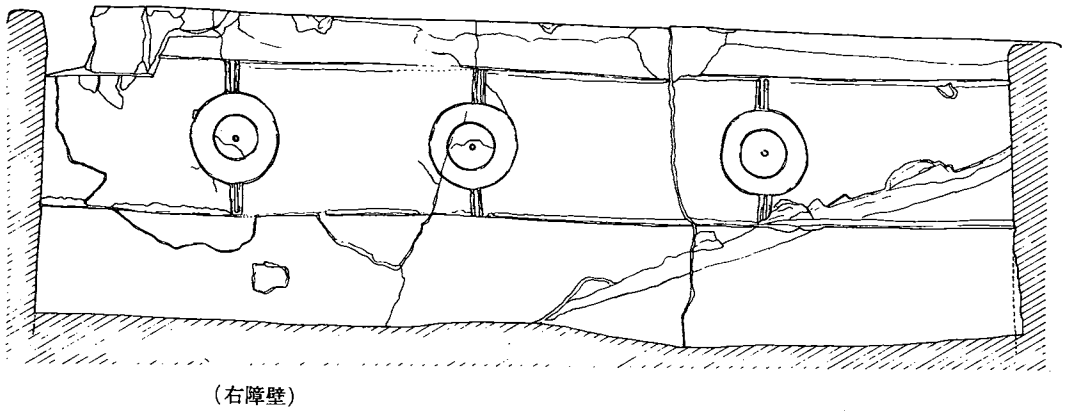
49の4図　小田良古墳石室全景



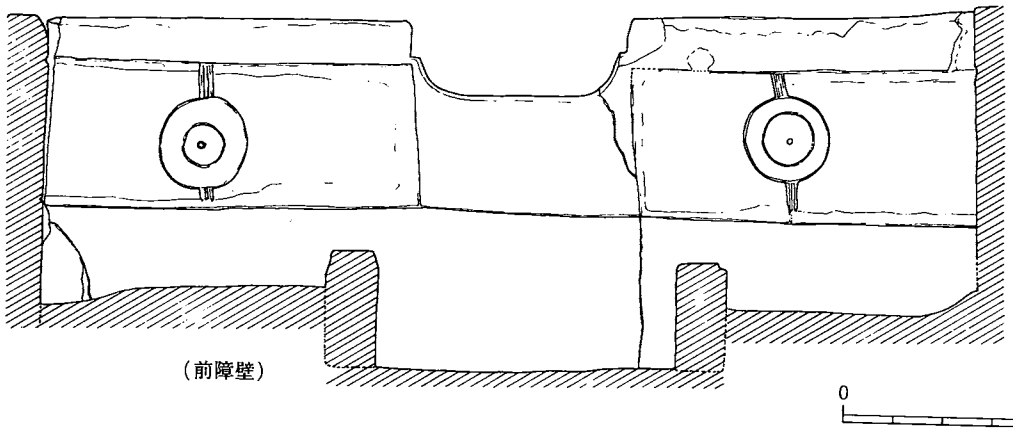
（左障壁）



（奥障壁）



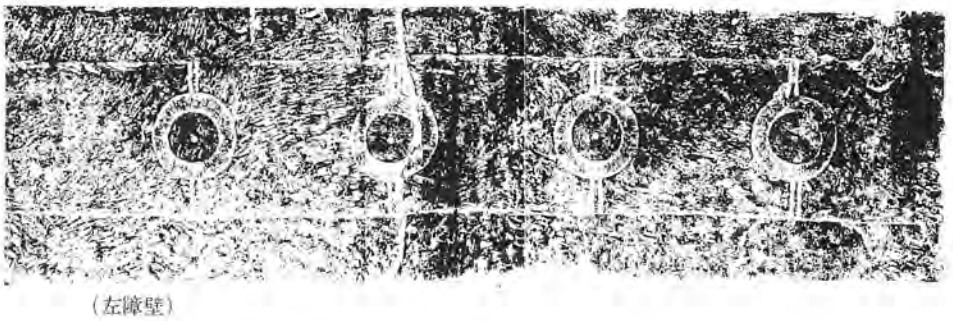
（右障壁）



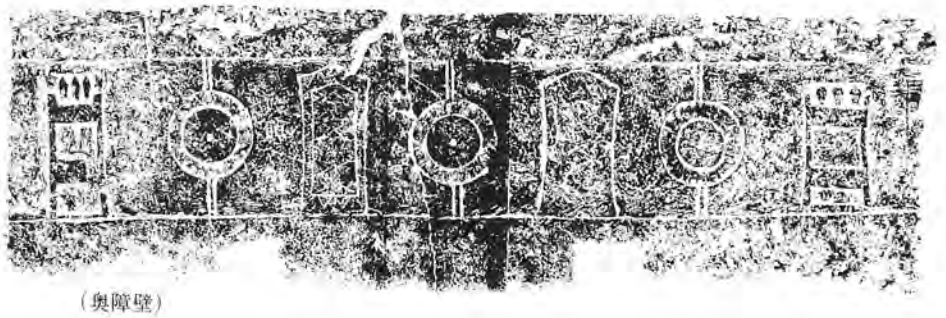
（前障壁）

0　50cm

49の5図　小田良古墳障壁装飾文実測図

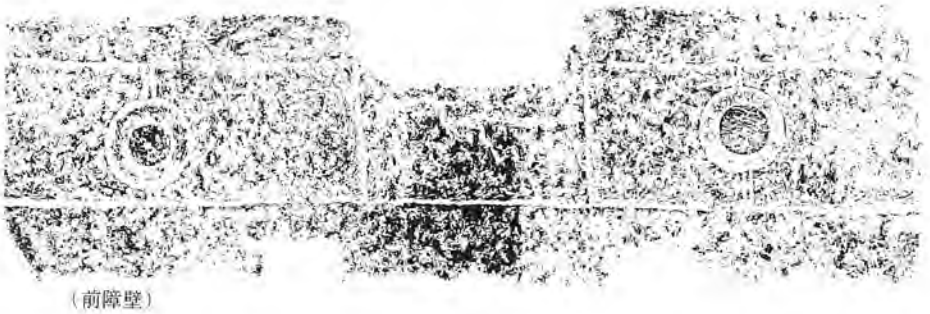


（左障壁）



（奥障壁）

（右障壁）



（前障壁）

0　50cm

49の 6 図　小田良古墳障壁装飾文拓影図

50. 長砂連（ながざれ）古墳〔昭和50年県史跡〕（⇨50の１～４図）

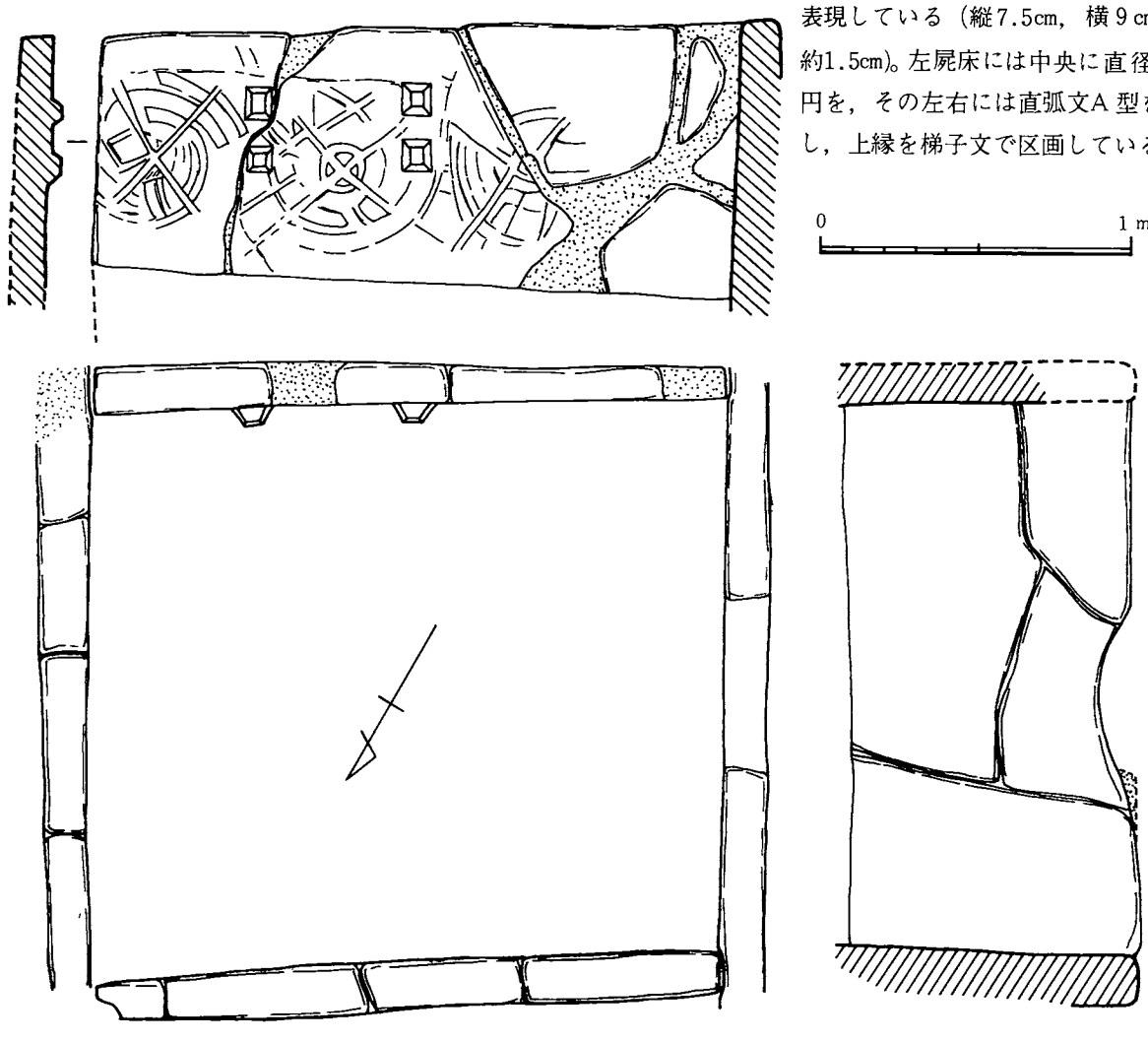
——天草郡大矢野町長砂連上貝場——

50の１図　長砂連古墳位置図（天草松島2.5万分の１）

立　地　古墳は大矢野島の東南端，長砂連集落の背後にある六部塚の丘頂に築いた円墳で，昭和９年（1934）４月，この地に金比羅宮の社殿建造のさいに発見された。

墳　丘　発見当時現地を踏査した下林繁夫氏や梅原末治氏の記録によると，古墳は古く破壊された形跡があり，封土のほとんどを失い石材が散乱していたという。

石　室　石材の残存状態から判断すると石室は割石平積の半地下式肥後型の石障系横穴式石室で，西南に開口していたらしい。発見当時石室内の周囲石障とその内部屍床だけは旧態を存し，奥行2.06m，幅1.86m を存した。内部は砂岩の板状石を２列にならべ併列した三区の屍床を配し，うち，むかって右屍床の奥には副函を設けていた。石障はすべて阿蘇熔岩の切石を用い，高さ74cm，厚さ16cmを有し，入口側は幅60cm，深さ18cmをもってU字形に抉り込んでいる。左右の石障には直弧文と円文を半肉彫りであらわし，全面に丹彩の痕跡がみられる。右石障壁には中央に直弧文C型を，その左右には直弧文A型をあらわし，これらの図形のほぼ中央には，上下２段に４個の長方形突起を重ねて表現している（縦7.5cm，横９cm，厚さ約1.5cm)。左屍床には中央に直径30cmの円を，その左右には直弧文A型をあらわし，上縁を梯子文で区画している。



50の２図　長砂連古墳石室実測図（原図 斎藤忠・乙益）

出土遺物　発見当時鉄矛1と直刀片1，土師器高坏片1，須恵器壺の底部部残欠1を出土しており，それらの遺物からみて古墳の成立年代は5世紀末～6世紀初頃に比定されよう。

年　代　5世紀末～6世紀初　　（乙益重隆）

〔参考文献〕

①下村繁夫「装飾文様のある長砂連古墳」九州日日新聞　昭和9年（1934）
②乙益重隆「長砂連古墳」小林行雄編・藤本四八撮影『装飾古墳』昭和39年　平凡社　東京

〔資　料〕

下林繁夫氏の『長砂連古墳調査報告』について

本項で紹介・解説する下林繁夫氏(1885年—1940年・註1)による下記の報文と略測図は，長砂連古墳についての当事者による発見時の正確，かつ重要な文献である(註2)。紹介資料の出典は昭和30年8月（1955年）に田辺哲夫氏が印刷された『天草維和村の考古学的調査の栞』（註3）である。同書は謄写刷りで頒布先も限られており，収録された下林氏報文も公開された学界共通の財産とはなっていない。

田辺氏によれば，昭和9年（1934年）の本古墳発見当時の史跡調査委員であった下林氏の県からの出張報告書であり，坂本経堯氏（前肥後考古学会長）がその後写しを作製され，さらに田辺氏が坂本氏の提供を受けて上述の栞に収録されたものである。

詳細な下林氏の観察記録は，幸いにも坂本・田辺両氏によって受けつがれ，半世紀を閲した今日ようやく活字となる。下林報文の価値については改めて言及する必要もないが，長砂連古墳の構造について，一種の石棺直葬ではないかとの見解（註4）が近時示されており，註4書の性格から世上一般に受け入れられやすい面もあるので，筆者は下林報告を根拠にしてその誤りを指摘したことがある(註5)。付記するならば，同墳復原時に田辺氏らに相談し下林図面を参考とすれば，石室進入路も今日とは異なった復原方法がとられていたであろう。　　（三島　格）

註1　明治18年10月26日生—昭和15年8月24日没，東京美術学校卒（明治43年)。済々黌勤務，日本画家・号素光，熊本城趾保存会・県史蹟調査会の指導的地位にあった。肥後考古学会員，郷土史・考古学界の業蹟多し。
『熊本大百科辞典』（東光彦）　熊本日日新聞社

註2　乙益重隆氏は発見当時の九州日々新聞の下林氏による記事を保存しておられる。

註3　玉名高校在勤（当時）の田辺哲夫氏が天草維和島（現大矢野町・旧維和村）調査に際して，既往の天草の資料を収録し関係者に配布。玉名高校考古学部刊　31頁　謄写刷　昭和30年。維和島の調査者は，責任者：田辺。調査指導：坂本・乙益・田添・三島。学生：杉村彰一部長以下30名と卒業生。

註4　松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P176　熊本日日新聞　1976年　熊本

註5　三島　格「事実有理—長砂連古墳の構造」『夜豆志呂』63　P12—13　1981年　八代

長砂連古墳調査報告

熊本県史蹟調査委員　　下林繁夫

一，所在地

熊本県天草郡中村大字長砂連上貝場7554番地

一，地種目並坪数

山，官有地（附近一帯5坪）

一，発見届出

無格社金比羅宮の社殿を建設するため，前記の地点を開墾中，昭和9年4月7日石室及土器鉄器の破片を発掘せし旨、三角警察署宛中村村長、浦本長七郎より4月17日届出

一，調査委員出張

上記（原文は右）に関し本委員6月24日同地に出張調査を為す。

一，位置

天草郡大矢野島の東南端に突出する長砂連岬の丘上にありて，三角港（際崎）から上島合津行発動船に乗ずれば約1時間にて長砂連に着す。海岸より仰ぎ見れば近く丘上に新なる社殿ありて古墳の所在地点を容易に知ることを得べし。

一，古墳の命名

村有志の多数と協議の上，字名を附して長砂連古墳と呼ぶこととなす。

一，傳説

古墳所在地点を六部塚と呼び来りし外，他に傳説なし。

一，古墳の封土と石室

此古墳は已に古く破壊せられ，封土は大部分を失い石室又陥没し居たりしが，今回崩壊せる封土を除きもと石室に用いし石材の散乱せしものを集めて石垣を築造する等附近一帯を開拓して数十坪の平地を得たり。もと石室の存在せしことは今附近に遺されたる扁平なる自然石の多数ありし事と，同地方の他の古墳の形式より類推してこの石室も亦扁平なる石材を周囲より穹窿式に積み重ねたる形式なりし事を容易に推定し得るなり。現在に於て原の位置のままに遺れるものは古墳石室内部の四周に巡らせる槨壁及び室内を更に3区に分つ所の障壁並に羨道の一部を為せる遺材2個あるのみ。古墳の主枢は約西南に向って開く。槨壁内の寸尺は内法奥行6尺8寸，幅6尺1寸5分の風字形を為す。槨壁の石材は厚さ5寸内外の各一枚宛の凝灰岩より成る。槨壁中先づ入口に位する前壁（西南面）の石材は殆んど完全に原型を保存し上縁の中央部即ち羨道に接する所は幅1尺9寸深さ5寸5分の凹字形に抉れり，奥壁（東北面）は下半分のみ遺れり。左右の両壁はその基部のみ原位置にありて上部の石材は数個の破片となりて室内に埋れたりしを今回一ヶ所に集めて新なる仮小屋に納めて保存せり。室内には更に厚さ2寸5分内外の砂岩を以て前後の方向に室内を3区に分つ所の障壁を設け，又東の一隅奥壁に近き所には小石片を以て更に小区画をなせりと云う。底部は今深く掘り下げられ雨水をためるがため最初の床地の有様を知る事を得ず。粘土の層ありしか，或は礫石を敷きしか等全く

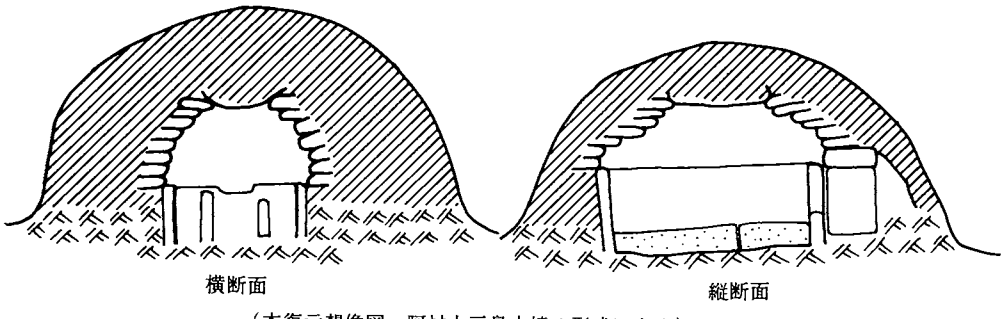
之を知る能はず。前壁外にある羨道の一部を示せる２個の石材は其の間隔２尺５寸あり。

一，遺物（副葬品）

室内奥壁に近き東隅の一部より直刀の小破１と３破片となれる鉄槍と思わるるもの長さ９寸３分の物を発見すと。尚土器の底部を残せる破片１個を出せるのみなり。然れどもこの古墳には最初相当の副葬品を有せしものと思わるれども古く発掘破壊の厄に会ひしため皆散逸したりしものと考へらる。

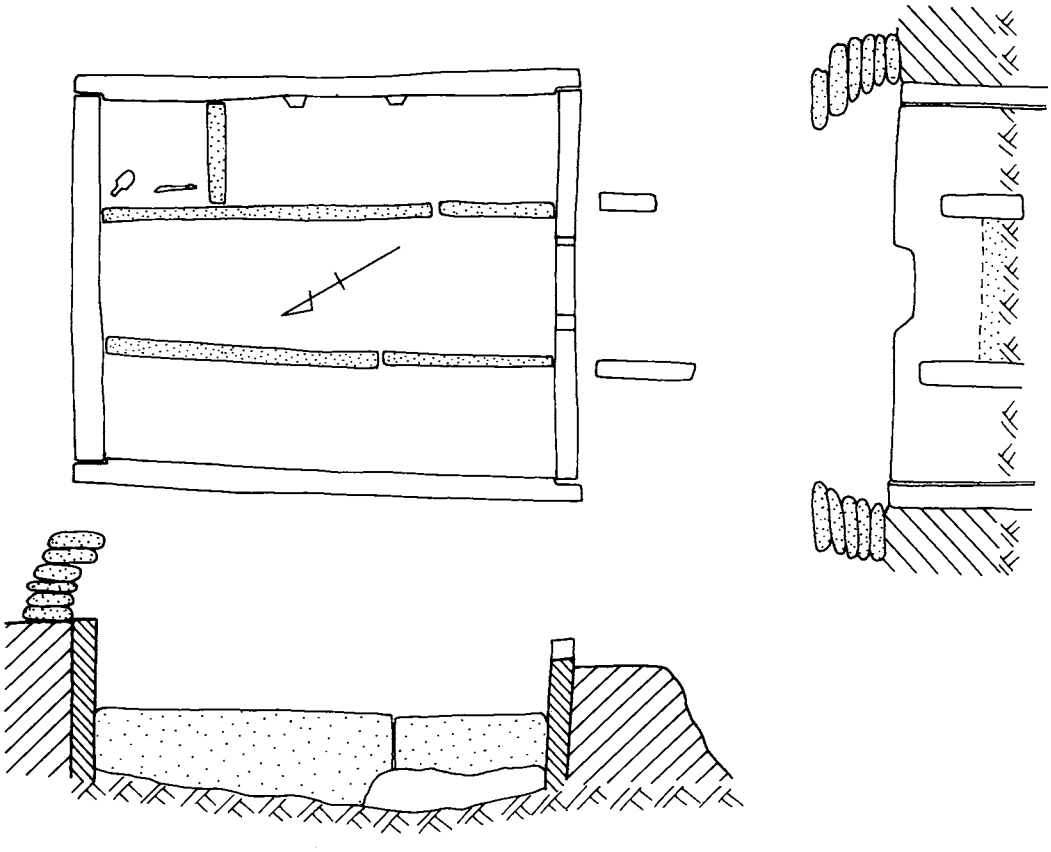
一，槨壁の装飾文様

此の古墳に於て最も貴重なるものは槨壁中左右の石材に施されたる特種なる彫刻紋様の存在なり。今両壁とも数個に破壊せられたれば之が継ぎ合せを試みしに幸その原形を察するを得る程度に至れり。いま少しく紋様につき細述すれば右側（東南面）の槨壁は３個の破片と他に一部は原位置のまま残れり。この壁面は中央よりやや高き位置に於て高さ１尺６寸，横幅５尺７寸５分の面積に於て紋様区あり。この紋様区は更に縦に３区に分たる（但し其の間明瞭なる境界を示されども）各区とも先ず其の四隅より対角線を３分内外の深さに於て浮彫として表わす。向って左区はこの対角線の上に約二回転を以て外囲に達する右巻の渦線を浮彫なして重ぬ。向って右区も同様，但し左巻の渦線を重ぬ。中央区は中心に円下半部に更に円を重ねて二重となす。幅３寸乃至４寸にして其の両縁の輪廓は浮彫とし更に其の中



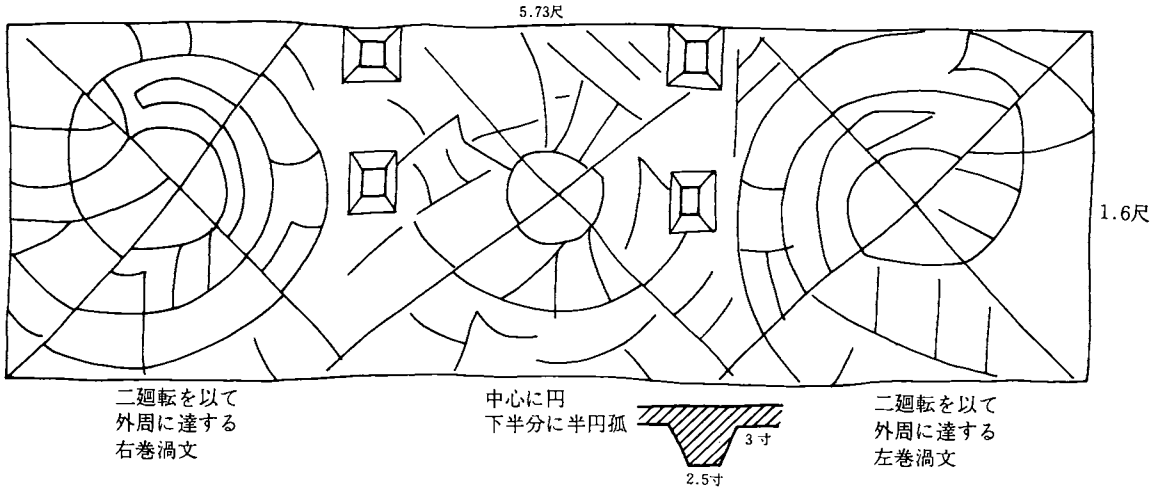
（本復元想像図　阿村大戸鼻古墳の形式による）

槨壁…凝灰岩　北方300ｍ小瀬戸と称する近接地より出す厚５寸
障壁…砂岩　厚２寸内外



副葬品は東側室の奥を更に小区画にて鉄槍・直刀（切損）を副葬す。
埴輪系の高杯・皿型器破片を出す。掘り出した土中に存した。

50の３図　長砂連古墳石室見取図および復元想像図（下林作成）



50の4図　長砂連古墳石室右槨壁の装飾文見取図（下林作成）

央には一條の凹線を示せる所の帯状の紋様を以て前に述べたる対角線と渦線との間隙中を或は縦に或は横に極めて不規則の方向を以て之を充たせり。帯状紋様の長短，幅等の一定せざること勿論なり。中央区に於ては上縁に沿いて2尺の間隔に2個又その各の下方に凡そ9寸を距れて2個合計4個の突起部あり，其の大さは高く約3寸，幅2寸5分にして1寸5分の突出あり，左側（西北面）の槨壁は5個の破片となれり，之を接合して紋様を考ふるに紋様区の位置等右側の槨壁とほぼ同様にして凡そ高さ1尺8寸，横幅5尺9寸あり，之を3区に分つ但し中央区は幅最も狭く此区に於ては先ず中央に直径1尺の円を浮彫の線を以て表わし，四隅より来れる対角線は此円上を亘らず左右の両区は前述の右側の槨壁と全然同様の形式を以て紋様を示せり此石に於ては突起部を見ず，然れども紋様区の全上縁に亘って約2寸幅の梯子形の紋様帯附属す。さて此の特種なる紋様と同種の紋様を以て装飾せる古墳の今日まで世に知られたるもの数個所あり，其の内最も有名なるものは

○上益城郡六嘉村井寺古墳にして文部大臣指定の史蹟として天下の学界に著名なり。

○宇土郡不知火村鴨籠古墳内の石棺蓋上の装飾あり。

他県に於ては

○福岡県三井郡上津荒木村二軒茶屋古墳石棺内部の紋様

○岡山県都窪郡加茂村古墳等にあり。

由来古墳に装飾ある事は我国に於て其数少からず然るに今日まで知られたるもの其の大部分は我熊本県下に存在し尚熊本県に接近する福岡県下の筑後地方に於ても多数を見る。之に依て考ふれば，古代に於て肥後と筑後の地方に特種文化の存在せしには非ざるかを想像せしむ。

京都帝国大学文学部考古学教室に於てその研究報告第1冊第3冊に於て「九州に於ける装飾古墳」の題下に大正6年より同8・9年に亘りて精細なる研究を発表せられたり。更に浜田博士は今回発見の長砂連古墳の装飾紋様と同種なる特種文様に就て所説を述べられたり。それによれば仮に之を直弧文と名づけその起原及び之が意義等を述べられたり。此の紋様が幾何的紋様に属するが如きも種々なる資料を募集し各種の例をあげて編物の形より発達せるものには非ざるかとの解釈を試みられたるが其の点に於いて有名なる井寺古墳等にある此種の紋様よりも寧ろ長砂連古墳の紋様はその編物起原を想像するには一層適切なる感を深くするものあり。此種の紋様には多くは各種の彩色あれど長砂連古墳に於ては今その彩色明瞭を欠ぐ，只朱色の一部に遺れるを認むるのみ。

一，同地方他の古墳との関係

此の長砂連古墳と共に此地方附近に存在する他の古墳との関係を考えるに長砂連古墳は大矢野島の東南端に位する岬の丘上にあり之に相対する上島の最北端阿村の大戸鼻の丘上には数個の古墳ありて装飾紋様のある事已に有名なり。又その阿村と近く相対して大戸の瀬戸の口を扼する千束島最南端には維和村広浦に数個の古墳ありてその石棺に装飾紋様の存せしこと又世に知らる。以上の3地点は殆んど三角形の位置にあり，古墳は皆海中に突出する岬の先端丘上にあり。この3つの岬は恰も1つ内海を抱擁せる形勢にあり，而して此内海は天草郡島中最風光に富める所謂天草松島の称ある絶勝の地域なり，この地に住せる古代天草の島民は一度び舟を艤して東に大戸の瀬戸を出れば八代海湾に出ず可く，又西に柳の瀬戸を出ずれば洋々たる島原海湾に出でん。舟によりて容易に遠くの土地と交渉し同時に彼方の文化を将来せしことも多かりしならん。今八代海をめぐりて装飾ある古墳の多きを驚くべし。宇土郡三角古墳，不知火村鴨籠，桂原，塚原等の諸古墳，八代郡金剛村の鼠蔵の諸古墳又龍峰の古墳あり，芦北郡田川内永迫の諸古墳あり。一々其等との交渉を考ふる時更に深き興味を覚ゆるものあり。今回長砂連古墳に特種の紋様装飾ある事を発見せし事は天草古代史の研究上最も貴重なる資料として従って風光の天草をして加ふるに史蹟の天草として一段価値を加えたるを喜ぶ。

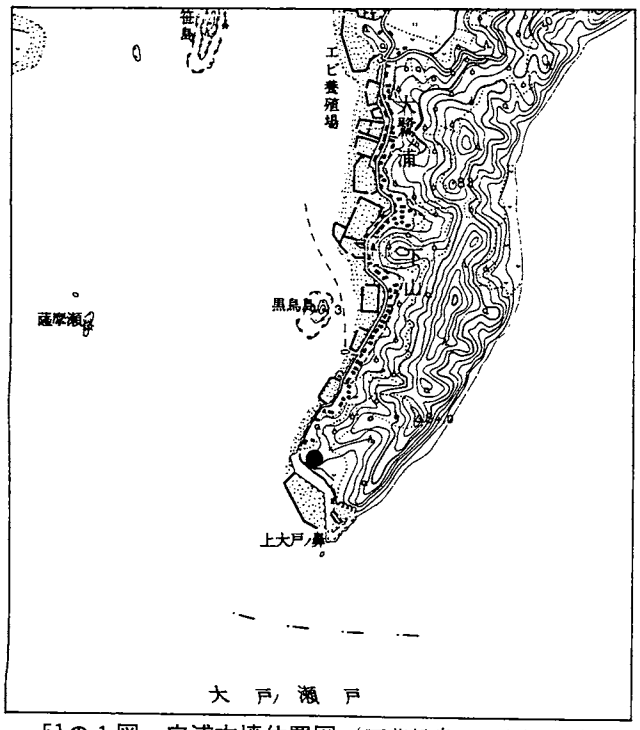
一，保存に関して

○県指定の史蹟として標木，制札を立つること（阿村古墳に準ず）

○槨壁の破片を接合して原位置に復原し覆屋を設くること。

51. 広浦古墳（ひろうら）（⇨51の１～３図）

——天草郡大矢野町千束広浦——



51の１図　広浦古墳位置図（天草松島2.5万分の１）

立　地　この古墳は大矢野島の東約1.5km，千束蔵々島（せんぞくぞうぞうじま）（元，維和島（いわじま））の南端，上大戸鼻の西北方約250m にあったといわれ，大正７年（1918）２月工事のため破壊された。もとはこの一帯に数基の小古墳があり，当時すでに３基が知られていた。うちこの古墳は海岸側より３番目にならんでいたらしく，現在２番目の古墳と推定される円文を彫刻した古墳石材が，密柑山の崖線に横たわっている。

墳　丘　現地はかって小形の土饅頭状を呈し，上部に円形の石材が堆積していたという。その下部に石室があったともいい，或は三個の棺があったともいい明確でない。

石　室　石室の有無不明。主体部は砂岩の切石を組合せた箱式石棺で，内法の長さ約２m，幅約60cm，深さ60cm内外であったらしく，石材の接合部に框溝を彫り込んでいた。装飾を有する石棺材は全部で４個あり，いずれも図柄のある部分だけを切り欠いて保存したものである。第１石と第２石は済々黌高等学校の所蔵で，現在熊本県立美術館に出陳されている。第１石は現存長さ106cm，現存幅37cmを有し，表面に鹿角装大刀とその上に重ねて皮鞘の刀子を重ねて浮彫にしている。第２石も現存長さ約58cm，現存幅30.5cmを有し，これも浮彫をもって皮鞘の刀子と柄鏡様の物体と，半円形に柄を付したような物体をあらわす。第３石は現在京都大学文学部にあり，第４石は現地に残されたというが，現在行方不明である。第３石は厚さ約８cmの残欠で表面に丹が残り，上段に刀子を，下段に２個の円文を浮彫にしている。第４石も残欠で，一端が半円形で他の一端が末ひろがりの方形を呈した物体を彫り凹めている。

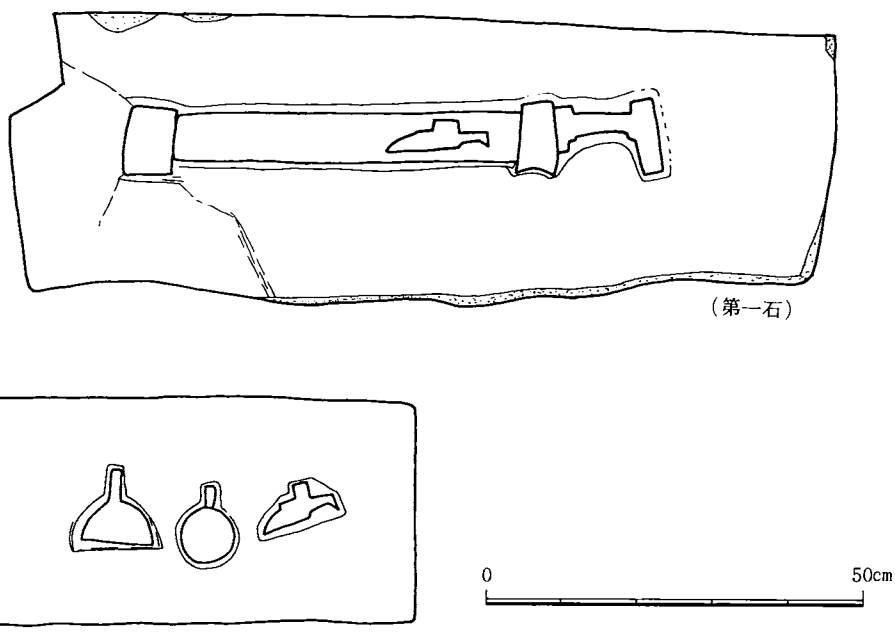
出土遺物　人骨片と直刀片を出土したという。

年　代　５世紀　　（乙益重隆）

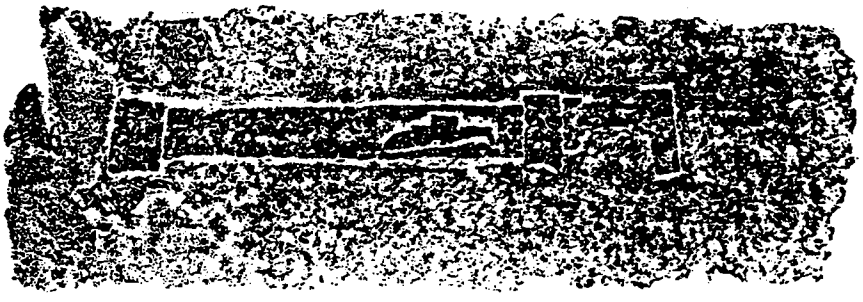
〔参考文献〕

①島田貞彦「肥後国天草郡維和村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』３（九州に於ける装飾ある古墳）P14－21　大正８年（1919）　京都

②乙益重隆「広浦古墳と大鼠蔵東麓古墳」小林行雄編『装飾古墳』P92　平凡社　昭和39年（1964）　東京

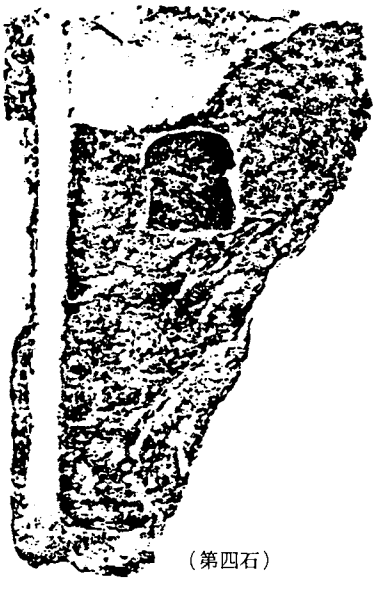


51の２図　広浦古墳装飾石材実測図

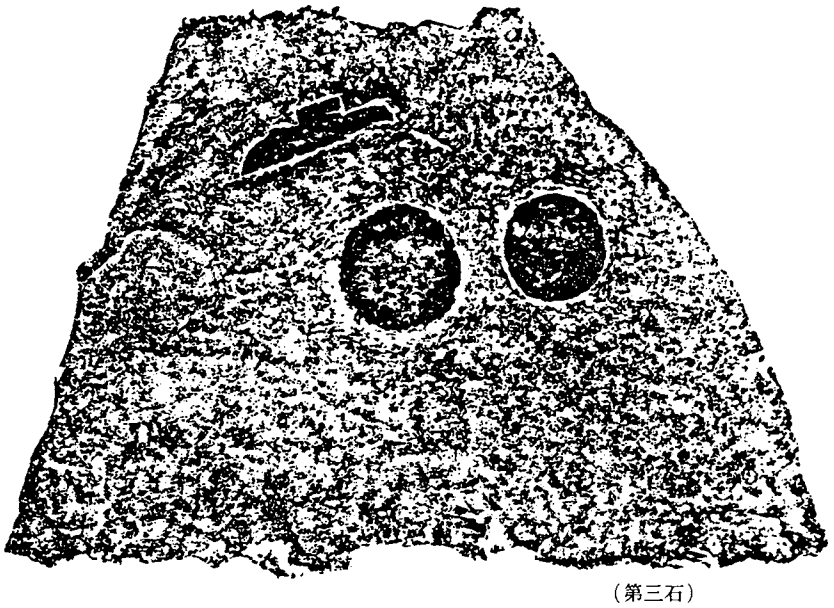


（第一石）

（第二石）



（第四石）



（第三石）

51の3図　広浦古墳装飾石材拓影図（京都大学文献①より）

52. 大戸鼻北古墳 〔昭和48年県史跡〕
(⇨52の1～3図，53の2図)

——天草郡松島町阿村字御手水——
（通称 大戸岬）

立　地　天草上島の東北端に突出した下大戸岬の北端（標高約30ｍ）に位置し，東は八代海，九州の山脈，北は大矢野の島々や宇土半島，西には天草松島や雲仙岳が遠望できる。

墳　丘　直径約25ｍ，高さ約４ｍの円墳。

石　室　砂岩の板石をアーチ状に積みあげた横穴式石室で，南に開口している。床面プランは奥行き2.05m，幅1.90ｍの方形で，その内側に砂岩の板石（厚さ約８cm）で低い石障をめぐらし，全面丹塗りである。入口の石障の中央に幅48cmの浅いＵ字形のえぐりがある。床面から天井までの高さは約1.80ｍである。羨門は高さ約80cm，幅は下部で29cm，上部で23cmと非常にせまい。なお，東袖石の外面には板石を建てている。羨道は全容が不明であるが，現在70cmである。

装　飾　石障の三面（奥，左，右）に稚拙な円文を彫る。

52の１図　大戸鼻北古墳墳丘測量図（原図　文化財保存計画協会）

円文は直径約15cmで，奥に３個，左右に各４個描かれている。

出土遺物　開口が古く不明

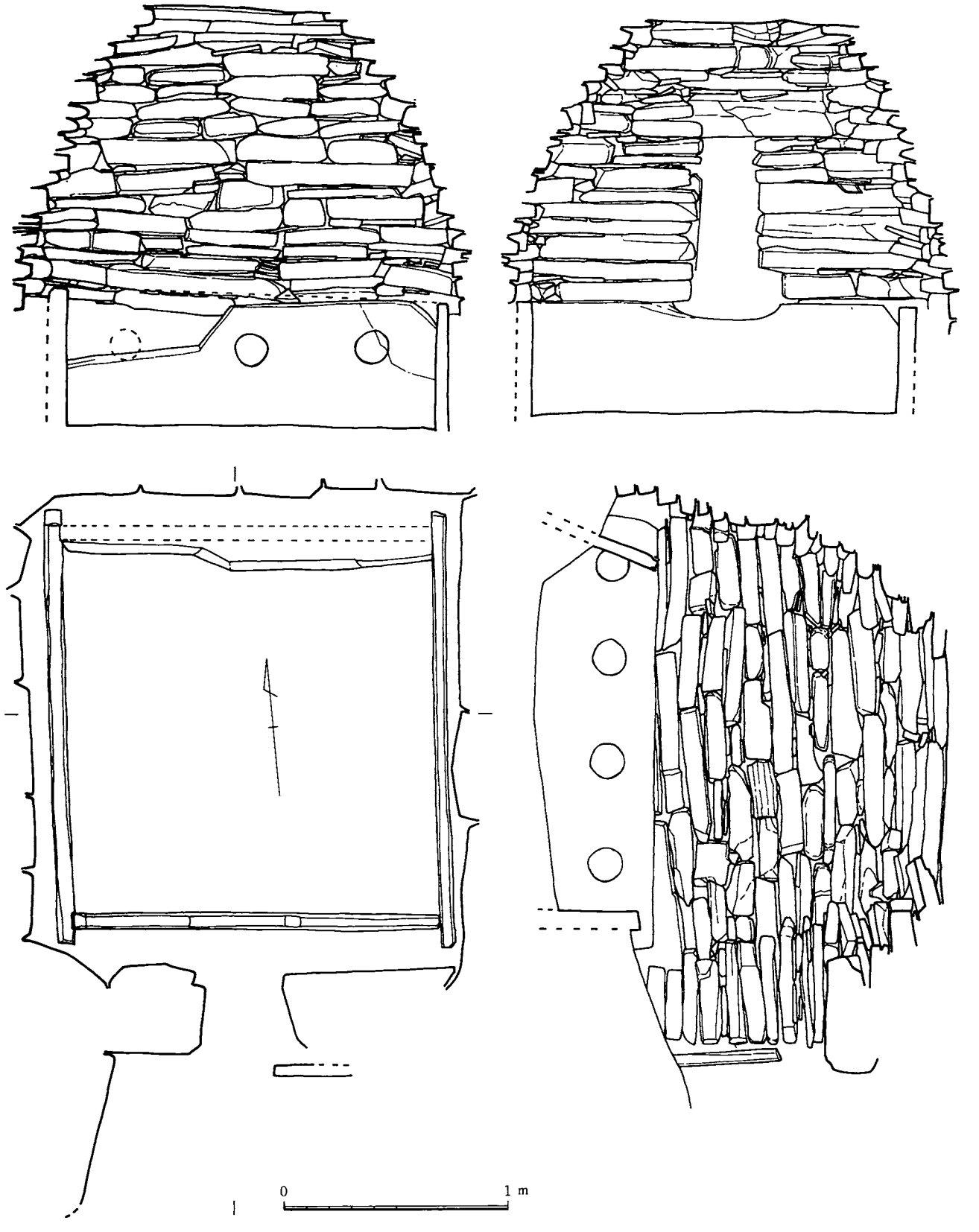
年　代　６世紀中葉

備　考　大戸岬には他に，北古墳（１号墳）の南方約70ｍに，中古墳（３号墳），その南約80ｍに南古墳（２号墳），そのすぐ南西に箱式石棺，他の箱式石棺とともに昭和48年（1973）11月26日県史跡指定。

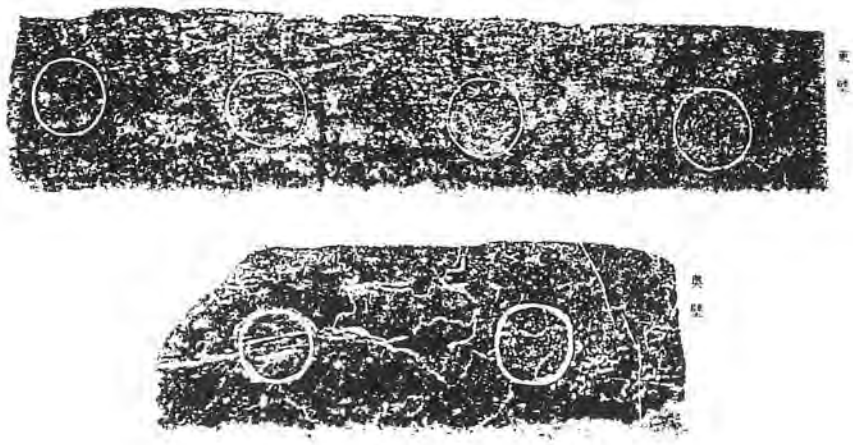
昭和55年（1980）年，県費補助をうけて松島町教育委員会が保存整備した。　（隈　昭志）

〔参考文献〕

①浜田耕作「阿村大戸北古墳」京都帝国大学文化大学考古学



52の２図　大戸鼻北古墳石室実測図



52の３図　大戸鼻北古墳石室石障装飾拓影図（京大文献①より）

研究報告第１冊　大正６年（1917）
②斉藤忠「大戸北古墳」『日本原始美術５』昭和40年（1965）　講談社
③斉藤忠「大戸岬北古墳」『日本装飾古墳の研究』昭和48年（1973）　講談社

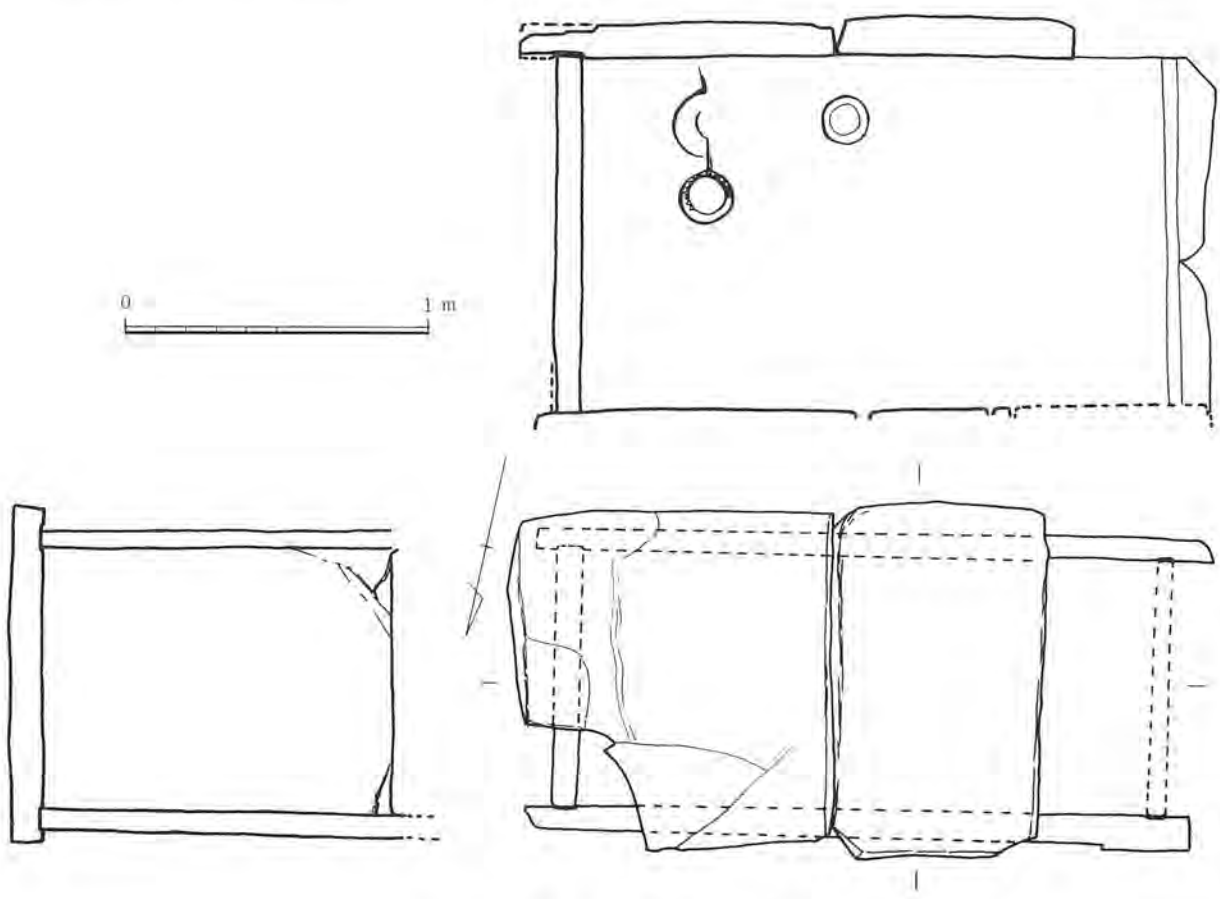
53．大戸鼻南古墳〔昭和48年県史跡〕

（⇨52の１～３図，53の２図）

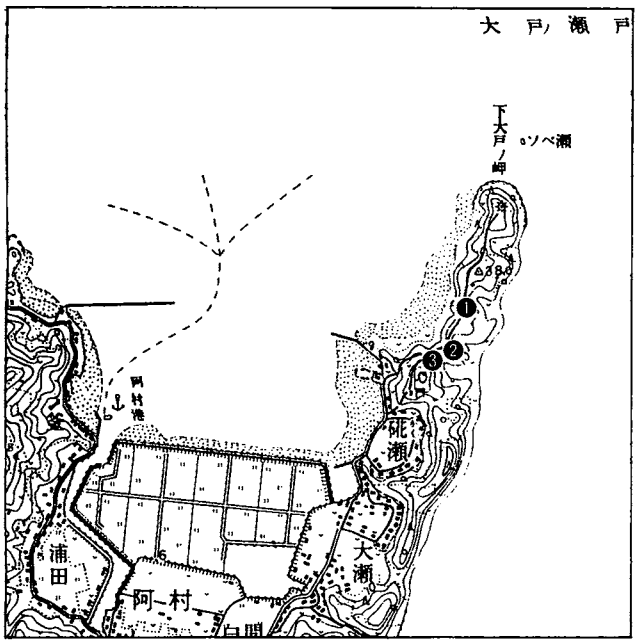
――天草郡松島町阿村御手水――
（通称　大戸岬）

墳　丘　石室が露出した状態で周知されていたが，恐らく小墳丘の円墳であったと考えられる。

石　室　約７～８cmの砂岩の板石をもって構築され，西に開口した箱形石室である。奥壁は１石，北，南側壁は２石



53の１図　大戸鼻南古墳石棺実測図



53の2図　大戸鼻古墳群位置図（天草松島2.5万分の1）
1 大戸鼻北古墳　2 大戸鼻南古墳　3 大戸鼻石棺

を組み合せ，天井石は2石残存していた。前壁の石材は天井に載せられ上下が反対になっていた。内法で奥行き1.89m，幅約0.85m，高さ約1.15mの長方形プランで，羨門の外部施設は不明。床面は板石を敷き，側石・天井石にはそれぞれ切りこみが施してある。内面は全面丹彩している。

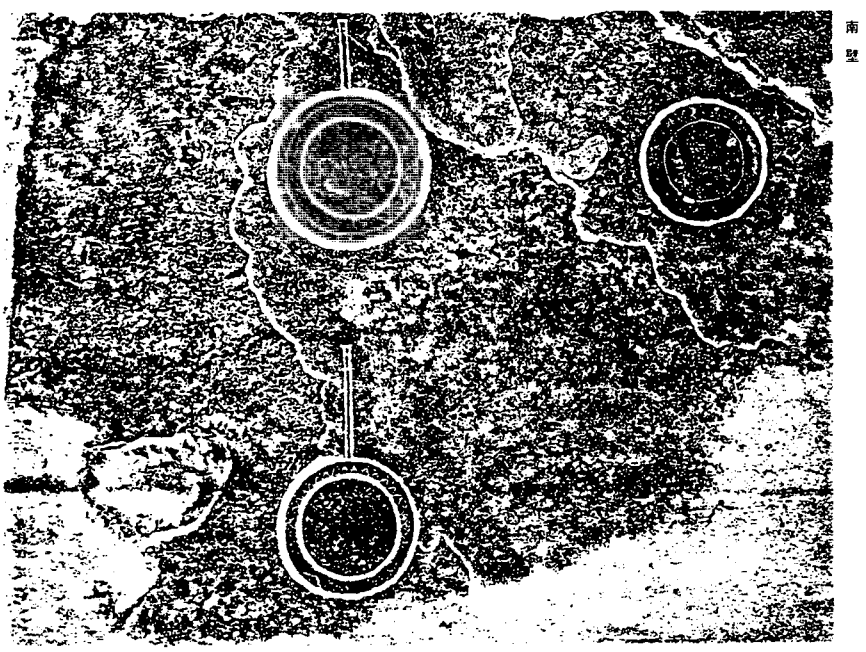
装　飾　南側壁に直径16～18cmの同心円3個が彫られている。もとは奥寄りに外円に鋸達し文を施し，上部に紐状の2条の線を引く，鏡を垂したような文様が，上下に2個あったが，上部のものは現存しない。また入口寄りに同心円があるが，紐状の表現はない。その他西壁にも円文の中に飛ぶ鳥の刻文ではないかと思われる文様があったといわれるが現存しない。

年　代

備　考　昭和49年（1974），松島町教育委員会が石材を強化，保存整備した。　（隈　昭志）

〔参考文献〕

①浜田耕作「阿村大戸南古墳」前掲書
②斉藤忠「大戸岬南古墳」『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1974）



53の3図　大戸鼻南古墳石棺南壁装飾拓影図（京大文献①より）

54. 大戸鼻石棺

——天草郡松島町阿村御手洗——

墳　丘　移転保存されており，不明

主体部　砂岩の組合せ式の箱式石棺

出土遺物　勾玉など。

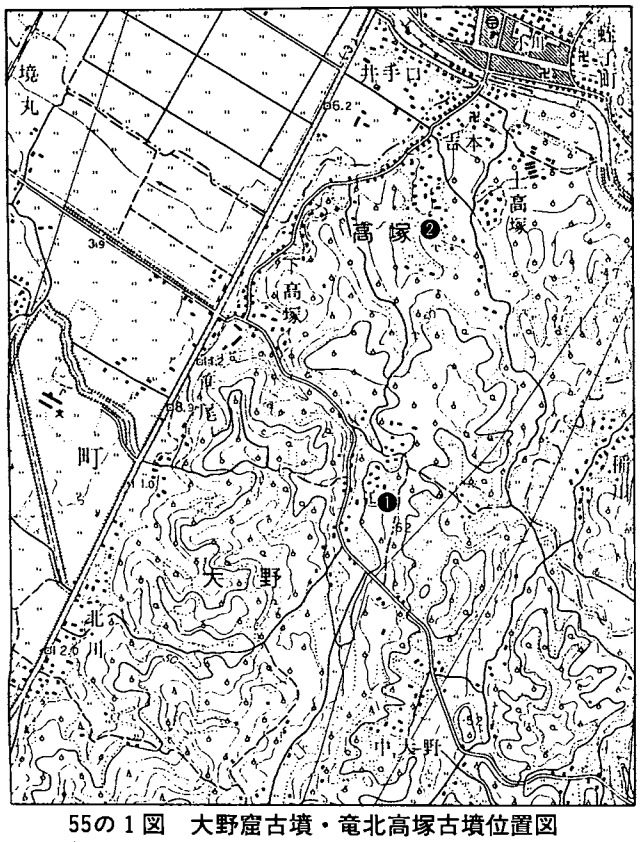
装　飾　石棺内面に赤の円文が描かれていたというが，現在は不明。

備　考　大戸鼻南古墳の西南に移転保存されている。

（隈　昭志）

55. 大野窟古墳（おお　ののいわや）（⇨55の1～4図）

——八代郡竜北町大野芝原（通称 岩屋本）——



55の1図　大野窟古墳・竜北高塚古墳位置図
（鏡、2.5万分の1）　1 大野窟古墳　2 竜北高塚古墳

立　地　比高30－40mの舌状台地上に位置するが，大局的には八代平野をのぞむ姫の城・中の城・端の城・物見櫓などの有力な前方後円墳群の一部を形成する立地である。

墳　形　現存長東西径38.5m，南北径38.7m，高さ11.5m（北側民家畠地基準）を測る円墳で，二段築成であろう。なお，本墳を前方後円墳ではないかとする意見があるが，前方部に当る位置に古窟（ふるのいわや）古墳があり，当該古墳調査時（昭和37・文献⑤）に確認されており，円墳で大石があったことが明確にされている。かつまた調査終了後古窟に所属し移動した，おそらく羨門部使用の柱状石材を実見。以上の所見から，大野窟・古窟の2円墳が並存したとみるべきである。前方後円墳状に見えるのは，後代の開墾による成形である。

墓　室　封土の中央部をはずれて構築された，複室の切石積の横穴式石室で用材のほとんどは阿蘇熔岩。ほぼ西南に開口。奥室：平面長方形で奥壁に一巨石を，両側にもそれぞれ大石を対称に配する。奥壁に接して巨材をくり抜いた石棺が置かれ，その直上に石棚が奥壁から挺出している。棺蓋を欠失するが，その破片から家形と推すが棟幅などの詳細は不明。棺底に盗掘孔あり。石棺をのせる棺台はない。羨門に接して左右2基の屍床がある。1号（北壁側）　長さ2.3m，幅1.1m，厚さ30cm余の1枚石を周縁を残し，舟底状に浅くくり抜いた屍床で，枕や蓋を受ける切り込みはない。調査時は$\frac{1}{3}$ほどの所で折損していた。2号（南側壁）長さ2m，厚さ30cmの板状の屍床で，1号のようなくり抜きはなく枕もない。注意すべきは，両屍床をめぐって立つ立石で，屍床を保護し通路と区画するための仕切り石である。先後関係は遺物面から言及できぬが，2号がより粗雑な作りである点を重視すれば，2号が後次となる。両屍床とも顔料の使用がないので，二・三次の追葬時はその不使用が考えられる。ただしこの場合の顔料（後出）は装飾を意味するそれではない。

前室：ほぼ対称に4個の大石を配した長方形プランであるが，羨門部は僅かに広くなる。埋葬施設については明らかでない。奥室との間にはくり抜きによる入口がある。扉石：羨門部にぴったりはまる1枚石のそれがあったが，約40年前（昭37から）古墳前の観音堂建立時に割って石垣に使用したと（稲田幾一郎氏談）。天井その他の構造および被葬者をめぐる諸問題については文献⑤を参照されたい。計測値を表示する。

	玄　室	羨門(ロ)	前室	羨門(イ)	羨道	羨　門	全　長
奥行	5.23m	0.65m	2.30m	0.38m	3.84m	—	12.40m
幅	2.90m	0.48m	2.16m	1.26m	1.80m	1.98m	玄室高※ 羨道高
高	6.48m	1.46m	2.00m	2.00m	2.08m	2.14m	※ 3.11

備考　1　羨門の(イ)は羨道と前室　(ロ)は前室と玄室の入口である。2　※印について　大野窟は表示のごとく3.11であるが，福岡宮地嶽古墳は1.00，熊本江田穴観音古墳は1.47，奈良石舞台古墳は1.96である。

装　飾　下記の位置に彩色を認める。

①北1・2　南1・2・3　赤色顔料を塗彩した装飾を認めるが剝落激しく図柄は全くわからない。

②南5・6（仕切り石に接し別個の柱状石）　白・赤色の顔料塗彩。

③北8・南8　彩色あるも識別困難。

④棺身正面と棺縁上面および棺蓋の小破片に赤色顔料塗彩。

⑤石棚前縁　赤色塗彩。

上記の中で④・⑤はいわゆる装飾文に属さないことはいうまでもないが，①・②・③は文様図柄こそ不明であるが装飾古墳であると認定すべきであろう。文献⑥（昭49）は②のみの彩色を認めて「装飾古墳と云い得るか疑問である」とするが。

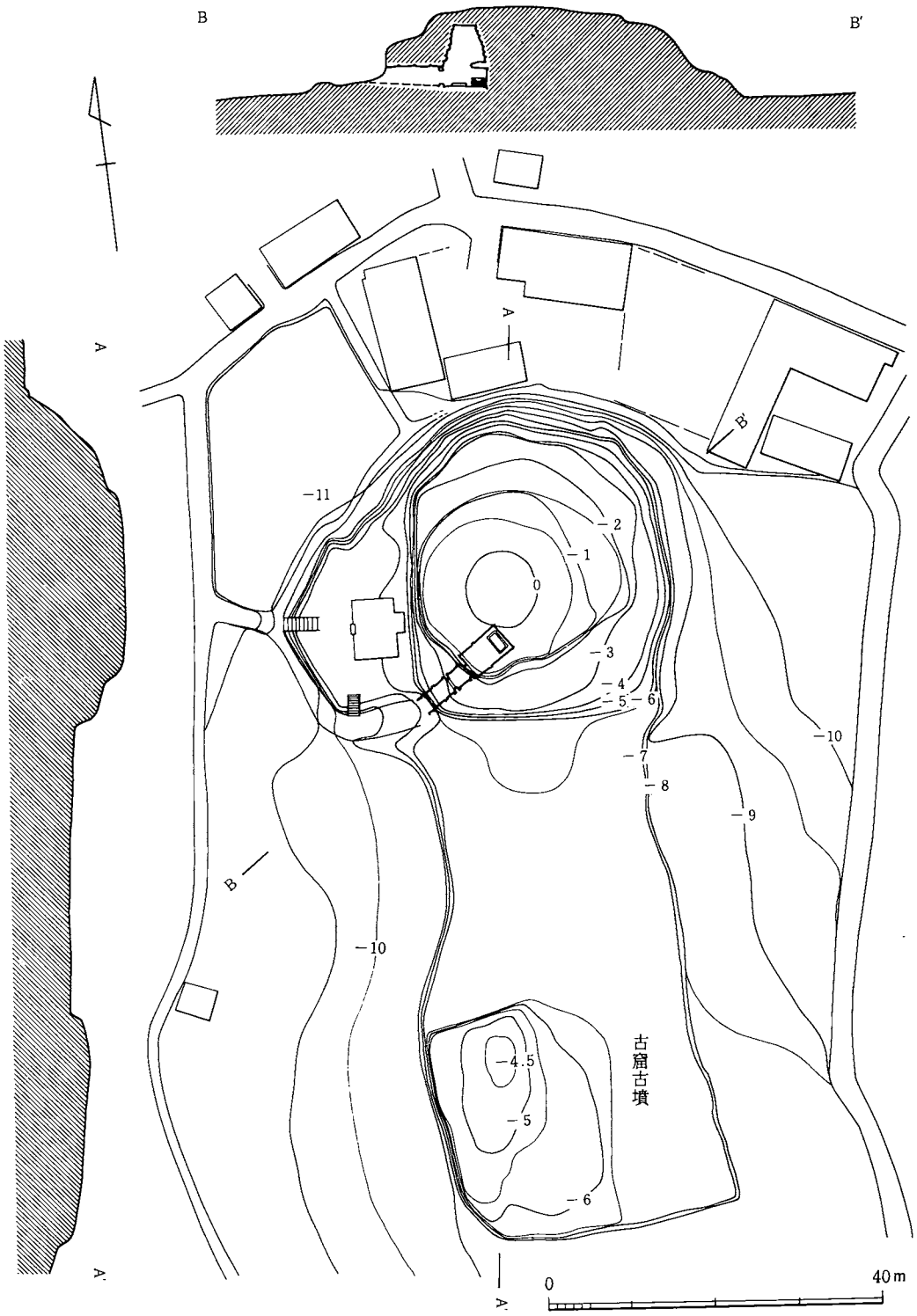
出土遺物　須恵器器台・壺（瓦器）など

年　代　6世紀中葉—後半

備　考　①開口の古さを示すものとして，前室南壁に明応6年銘（1497年）の刻字あり。②昭和37年（1962）12月末，花岡興輝・隈昭志・平岡勝昭・杉村彰一・古田一英・高島忠平・伊藤奎二・松本雅明・北川・倉田・宇土高校・熊本高校社会部および三島（責任者）ら調査。　（三島　格）

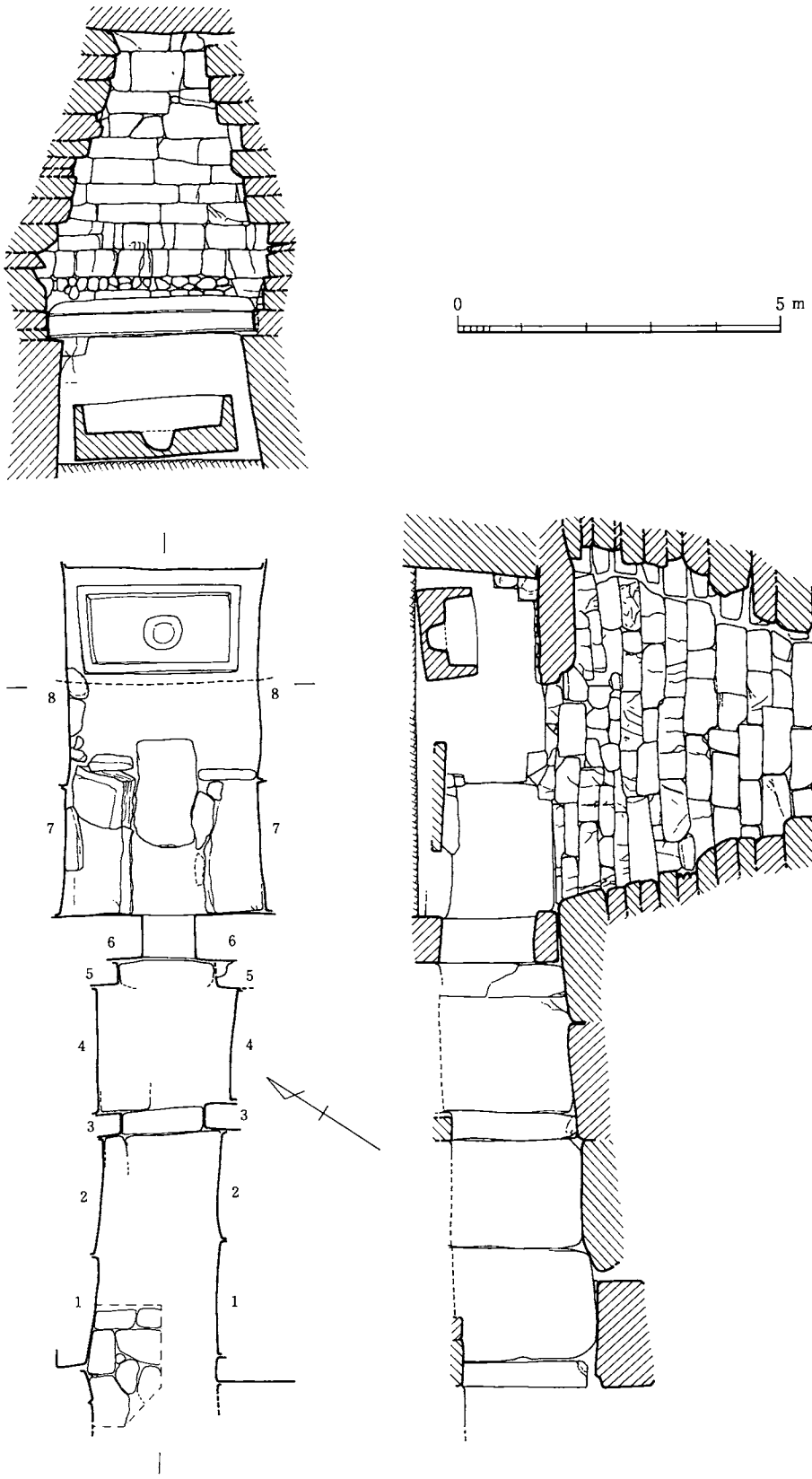
〔参考文献〕

①花岡興輝『大野窟関係文献』私家版　大野村碌之石刻

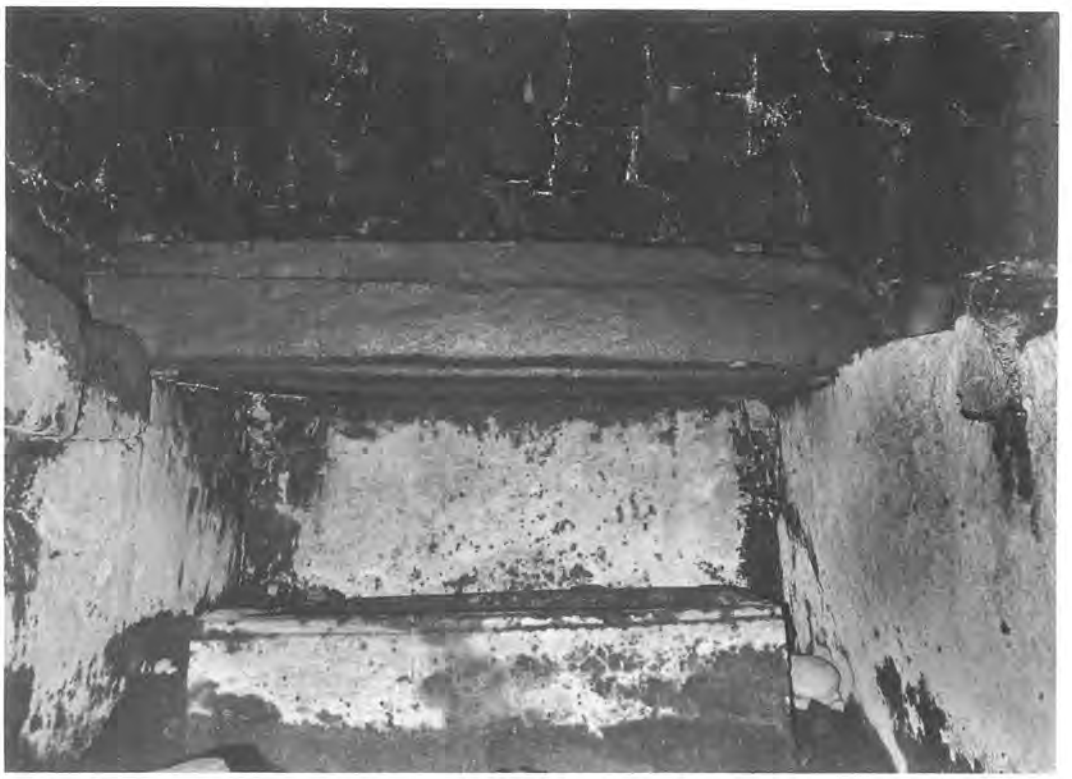


55の2図　大野窟・古窟古墳墳丘測量図

②福原岱郎「肥後雑見」『考古学会雑誌』2－9　P334－337　明治32年（1899）東京
③高橋健自『古墳と上代文化』頁48，50　雄山閣　大正13年（1924）　東京
④浜田耕作『大和島庄石舞台古墳の巨石古墳』京都帝国大学研究報告14　昭和12年（1937）京都
⑤三島格「大野窟古墳」『九州考古学』19　九州考古学会　昭和38年（1963）　福岡。『五ツ穴横穴群』熊本県報34に再録
⑥『熊本県の装飾古墳白書』P77　熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
⑦松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P188　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑧三島格「明治中期の熊本県考古学」『肥後考古』4　P1－30　昭和58年（1983）　熊本



55の3図　大野窟古墳石室実測図



55の4図　大野窟古墳後室の石棺と石棚（白石撮影）

56. 大野村石棺（おおの）（⇨56の1図）

——八代郡竜北町大野——

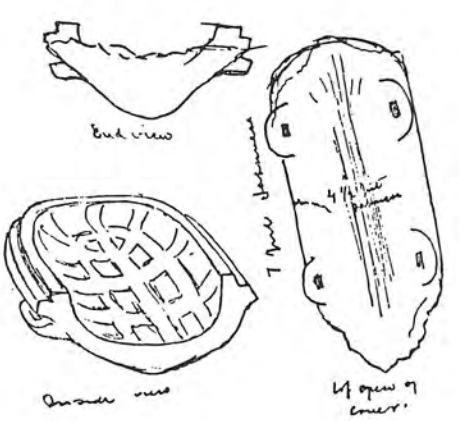
立　地　日本考古学の草分けともいえるアメリカの動物学者E・S・モースが，明治12年（1879）に九州旅行を行い，その紀行文「南方の旅」（『日本その日その日』）にスケッチ入りで紹介を行なっている石棺である。石棺は大野村の貝塚付近にあったといい，正確な位置を明らかにし得ないのは残念であるが，一応竜北町の大野貝塚がこれにあたるであろうと考えられている。

石　棺　モースの記述やスケッチ(56の1図)から見て，舟形石棺の棺蓋と考えられるが一端は毀損。断面は蒲鉾形をなしている。頂部には明確な平坦面をつくらないが，斜面部の長側辺には一辺に2箇所づつ，計4箇所に環状縄掛突起を造り出している。

装　飾　棺蓋内面に亀甲状の長方形区画が彫りこまれており，モースは「…，内側は小間（パネル）に刻んである。…」と表現している。これと類似した区画は，同じ竜北町高塚古墳の家形石棺棺蓋にもあり，地域的にもその関連性が窺われる。

年　代　5世紀前半～中葉

備　考　『八代郡誌』には，大野貝塚に長さ6尺以上の舟形石棺（石枕附）が出土したとされており，これが本石棺の棺身となるものであるとも考えられる。　（高木恭二）



56の1図　大野村石棺スケッチ
（E・S・モース、1917年より転載）

〔参考文献〕

①E・S・モース著　石川欣一訳『日本その日その日』3　東洋文庫　平凡社　昭和46年（1971）東京　（原典は1917年，ボストン）

57．竜北高塚古墳（⇨55の1図，57の1～8図）

——八代郡竜北町高塚吉本——

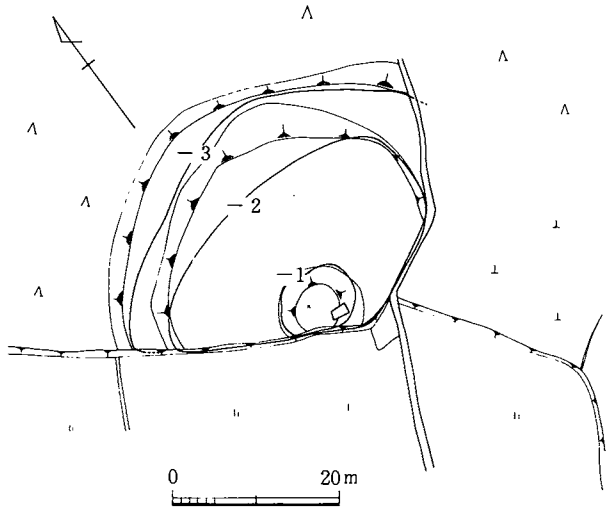
立　地　丘陵上の一支丘端に位置するが，農道・墓地・畠地などのために，大きく変改している。

墳　形　著しく変形した墳丘が辛うじて遺る。得られた測量図では長径約44.6m，短径29m，高さ3mを測る円墳である。葺石などについては不明（1図）。

墓　室　内部主体は組合式家形石棺で，用材は阿蘇熔岩。主軸をほぼ東西におくが直葬であり，石室をもたない。京都大学の調査（大正7－8年（1918～1919）文献①）以後約半世紀以上にわたって露出している遺構で，筆者らの調査時には棺蓋の破・折損，棺身の傾斜反転など荒廃がはなはだしかった。かかる現況では，特に装飾についてのべるにあたっては，文献①の付図（2・3図）が不可欠唯一の資料で，これを無視することはできない。

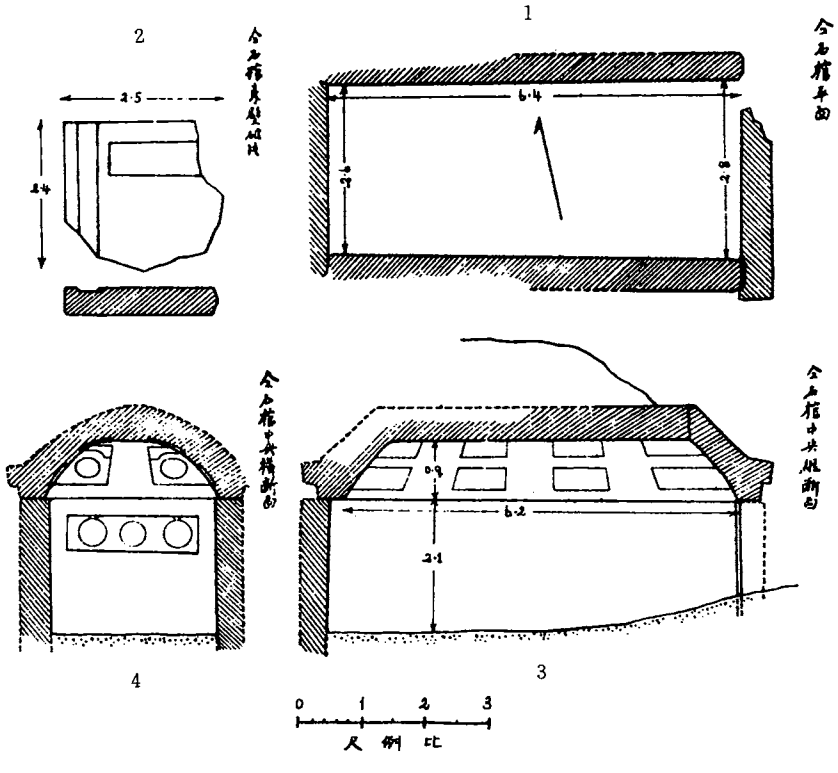
棺蓋：一枚石のくり抜きであろうと推したが，時間の制約上比較的大片を棺身にのせ作図（4図上・左）するにとどめ全容を明らかにし得なかったが，その後高木恭二氏（文献②・4図右下）により，再査を受け下記が明らかになった。①一石をくり抜いたもので，断面形は頂部に平担部をつくらず，蒲鉾形に近い。平縁（幅7cm）をめぐらす。②長辺にそれぞれ3箇の環状突起の退化型らしい造り出しをもつ。復原図による推定長2m25cm　幅1m20cm　高さ45cmである。

棺身：板石を組合せたもので，石床をもたない。各材の接合部には浅い溝を作る。文献①によって計測値（内法）を示すと，長さ1m94cm　幅　西小口—78cm，東小口—84cmを得る。

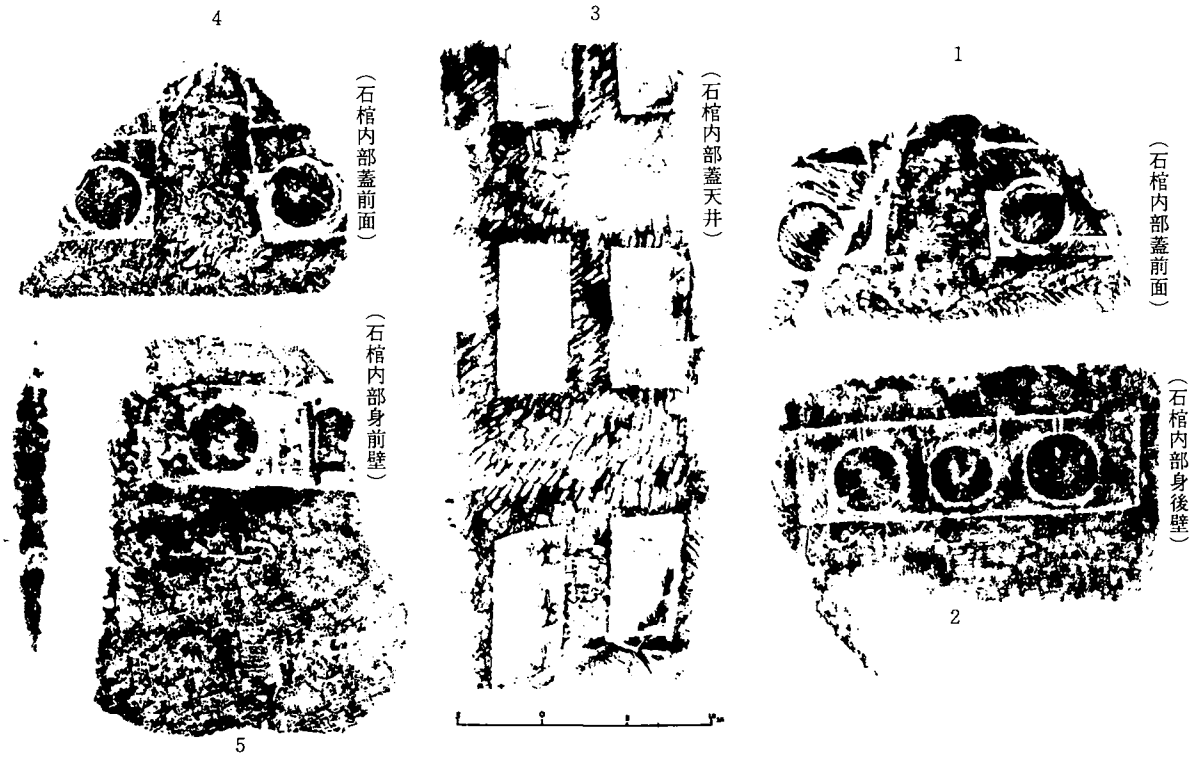


57の1図　竜北高塚古墳墳丘測量図

石枕：高木氏らによってその後発見されたものである（文献2）。厚板状の一枚石からなり，緩斜面の枕部と壁状に立つ低い突起部と幅狭なその外縁の三区に造り出されている（5図）。計測値　幅80cm　奥行32cm　高さ19cm。石枕の存在については京都大学調査時（文献①）においても知られておらず，本墳について最も早い午橋生 明治32年（1899）



57の2図　竜北高塚古墳石棺実測図（京都大学・文献①）



57の3図　竜北高塚古墳石棺内文様拓影図（京都大学・文献①）

文献④）も言及していない点から推すと，同氏も気づいていなかったと思われる。いずれにしても後述のごとく，県内初見の例で重要である。石枕の原位置については，今後明かにされる筈である。

装　飾　棺蓋裏面と棺身の西，東小口および石枕にもつ。今この全貌を知るには残念ながら文献①の実測図と拓影によらなければならない。

①棺蓋裏面：（2・3図）装飾は一連のものであるが2区に大別できる。1つは頂部裏面のいわゆる棟に当る部分で「中央にて二分されたる両側に傾斜に適応したる二個宛四行の長方形の浅き沈刻」（文献①・2図の3および3図の3）がそれであり，他は東西両端の小口に近い棺蓋裏面で，「前後の部分には一段の沈刻の内に円形を薄浮彫とせり。その形状より推して一」と記載されるもので，2図の4，3図の1がすなわちそれであり，われわれの調査時に得られた棺蓋端の小片を西側棺身小口にのせて作図した4図の上・下左が，対応する。

②棺身：両長側壁には鉄丹を塗彩するのみで，施文はない。両小口石のみにそれを認める。文献①は西・東で区別しているので，それに従う。西側―小口石のやや上位に横約61cm，縦17cmの長方形の一区を画して，その内に三個の円形をほぼ等分に配置して，円形以外の面を削り取って，三円を陽刻する。両端の二円には上部から二条の線が達しあたかも鏡をかけ吊したかのごとく見える。2図の4・3図の2，4図の下左がそれぞれである。東側―昭和42年(1967)の調査では不充分であったので，同57年（1982）11月18日再調査したが，さらに破壊されていた。写真（6・7図）のみを示す。これは「長方形沈刻区劃の内に素円と一種の方形状の部分を表はせるものを主とし別に区劃外に刀子一を線刻す」と記載（文献①）されたものであり，梅原末治氏の報文（プレート16）では，午橋生調査にかかる石材（文献④）であり，棺外で撮影（7図）されている。現在では不充分ながら旧状に近い形で置いてあるが，旧に復したものであろう。

③石枕：枕部を画する造り出しの突起帯上縁部にくり込みを認める。中央のそれは頭部を載せる枕部の位置と対応し，その左右に各1個所計3箇のくり込み部がある。いずれも風化と破壊が激しいが，直線と弧線が本来は造り出されていたと推考できる。鉄丹の塗彩痕をも認める。さらに突起帯側面にも，直線と弧線の沈刻線が部分的に遺っている。突起帯背面には施文は認められない（5図)。要約していえば，石枕の装飾文の構成は，立体的に彫り出された直弧文と平面的に沈刻された直弧文の二種によって成立しているといえる。惜しむらくは遺存が良好でないが，直弧文をもつ石枕は県内で初見であり重要である。詳細については高木氏らの報告が予定されている。

遺　物　鉄鏃片・須恵器片・骨片および瓦器・現代鉄釘。（文献④―鉄環・人骨）

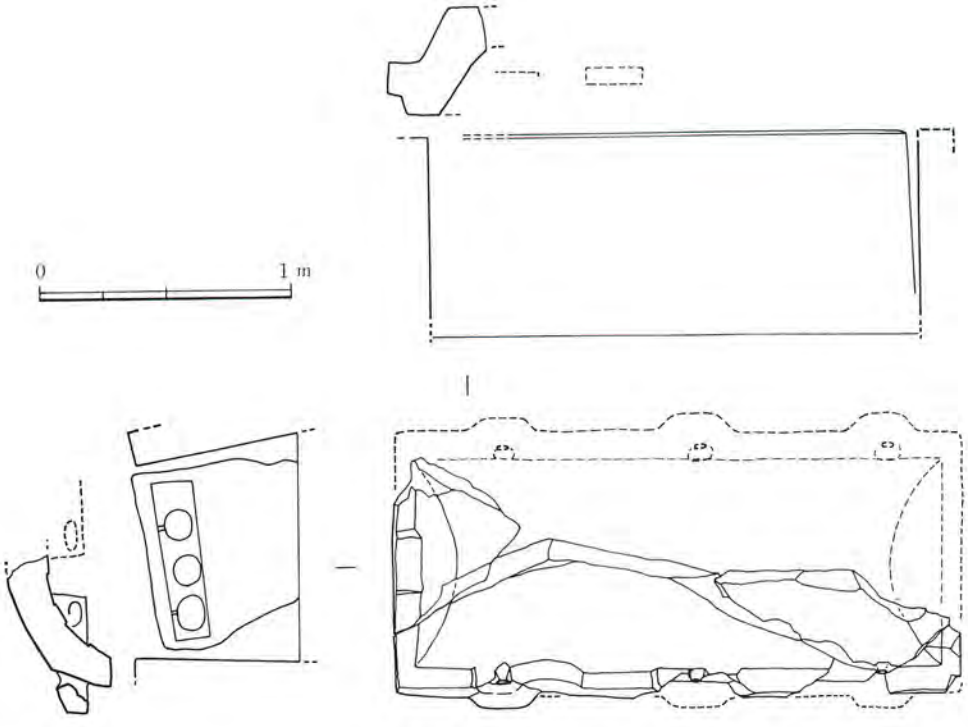
時　代　5世紀後半でも中葉に近い（文献②）

備　考　①昭和42年（1967）12月28日佐藤伸二・佐藤哲三・加悦力・敷島安人・本田・平山修一・高木恭二・井上・三島(責任者)ら調査。②同57年（1982）11月18日平山・高木・木下・三島実査。③保存状況―保護屋根あり。

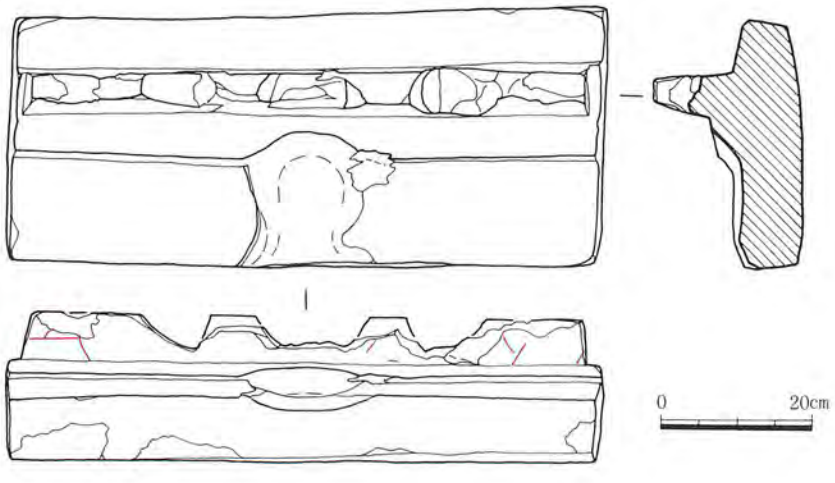
（三島　格）

〔参考文献〕

①梅原末治「肥後国八代郡吉野村の古墳」『京都帝国大学文学



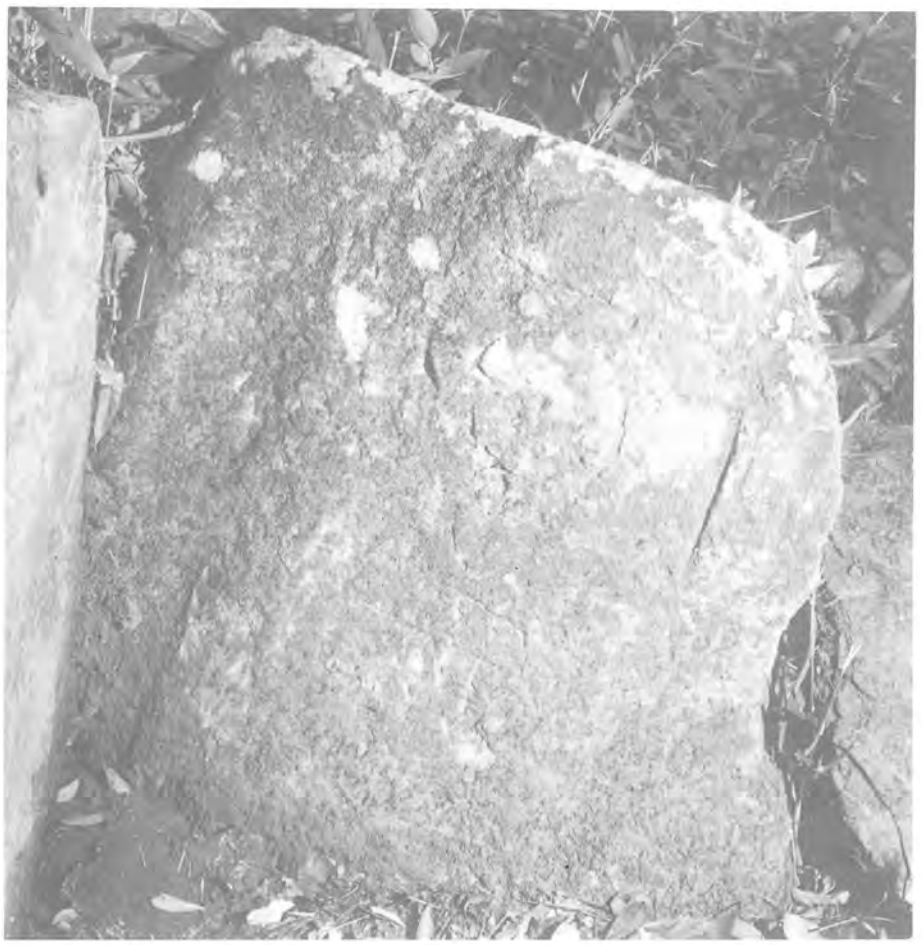
57の4図　竜北高塚古墳石棺実測図



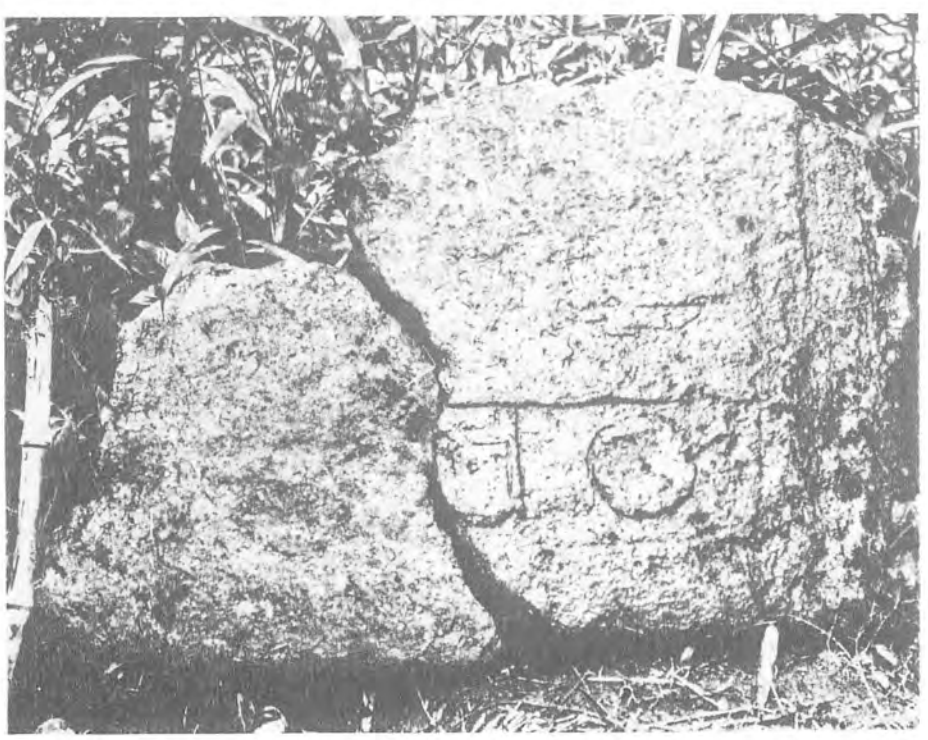
57の5図　竜北高塚古墳石枕実測図（原図　高木）

部考古学研究報告』3　P42－45　大正8年（1919）　京都
②高木恭二「環状突起を有する石棺について－特にその石棺材の産地をめぐって」『熊本史学』53・54　昭和54年（1979）　熊本
③江上敏勝「原始」『竜北村史』昭和48年（1973）　竜北（未見）
④午橋生「肥後雑見(二)」『考古学会雑誌』2－12　P408～P413　明治32年（1899）　東京
⑤三島格「明治中期の熊本県考古学」『肥後考古』4　昭和58年（1983）　熊本

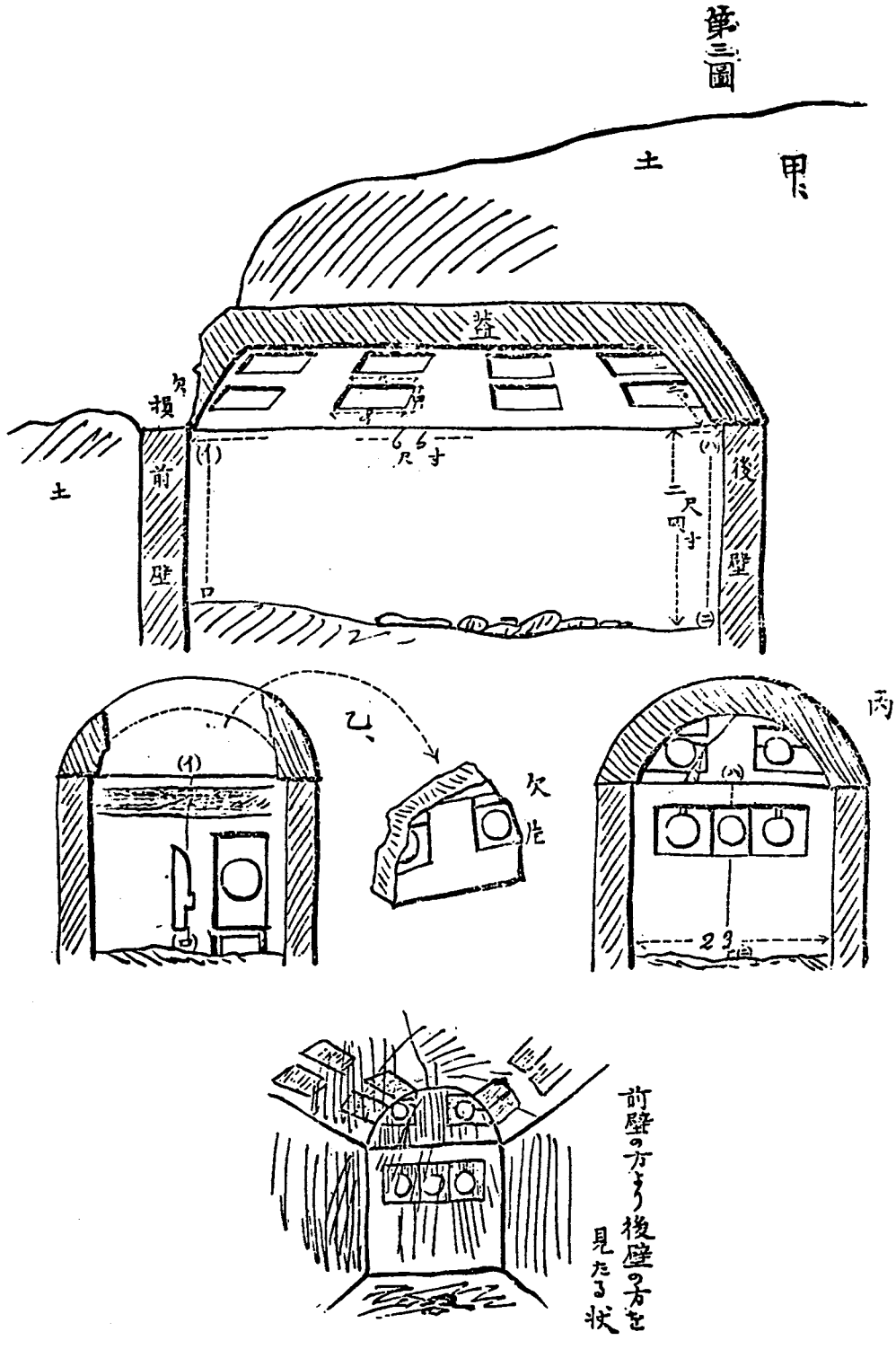
付　記　上文を提出後，文献④の午橋生氏の報文を実見した。明治32年（1899）の午橋生氏と梅原氏の間には20年の歳月の経過があり，考古学そのものの進歩は梅原氏のそれに当然反映してはいるものの，本墳の装飾についての観察と記載に関する限り両者は大差はない。梅原氏が午橋生氏に拠っている所もある。見取図（8図）とはいえ，見る者をして首肯せしむる。本墳についての学史上の栄誉は午橋生氏（筆名，本名は福島岱郎。当時熊本県師範学校教官）に与えられて然るべきものである。午橋生氏と本墳をめぐる問題については，文献⑤を参照されたい。　（三島　格）



57の 6 図　竜北高塚古墳石棺東小口文様（木下洋介撮影）



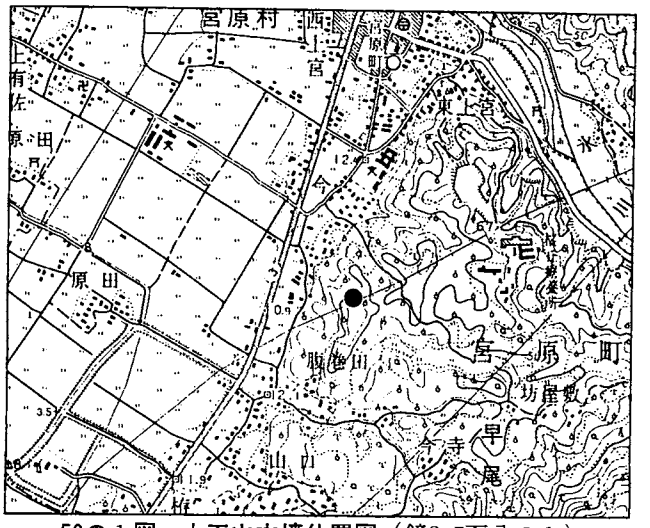
57の 7 図　竜北高塚古墳石棺東小口文様（京都大学・文献①）
但し上下が反対になっている。



57の8図　午橋生（＝福原岱郎氏）の竜北高塚古墳石棺実測図（文献④・⑤）

58. 大王山古墳〔昭和48年県史跡〕(⇨58の1～4図)

——八代郡宮原町早尾服巻田大王山——

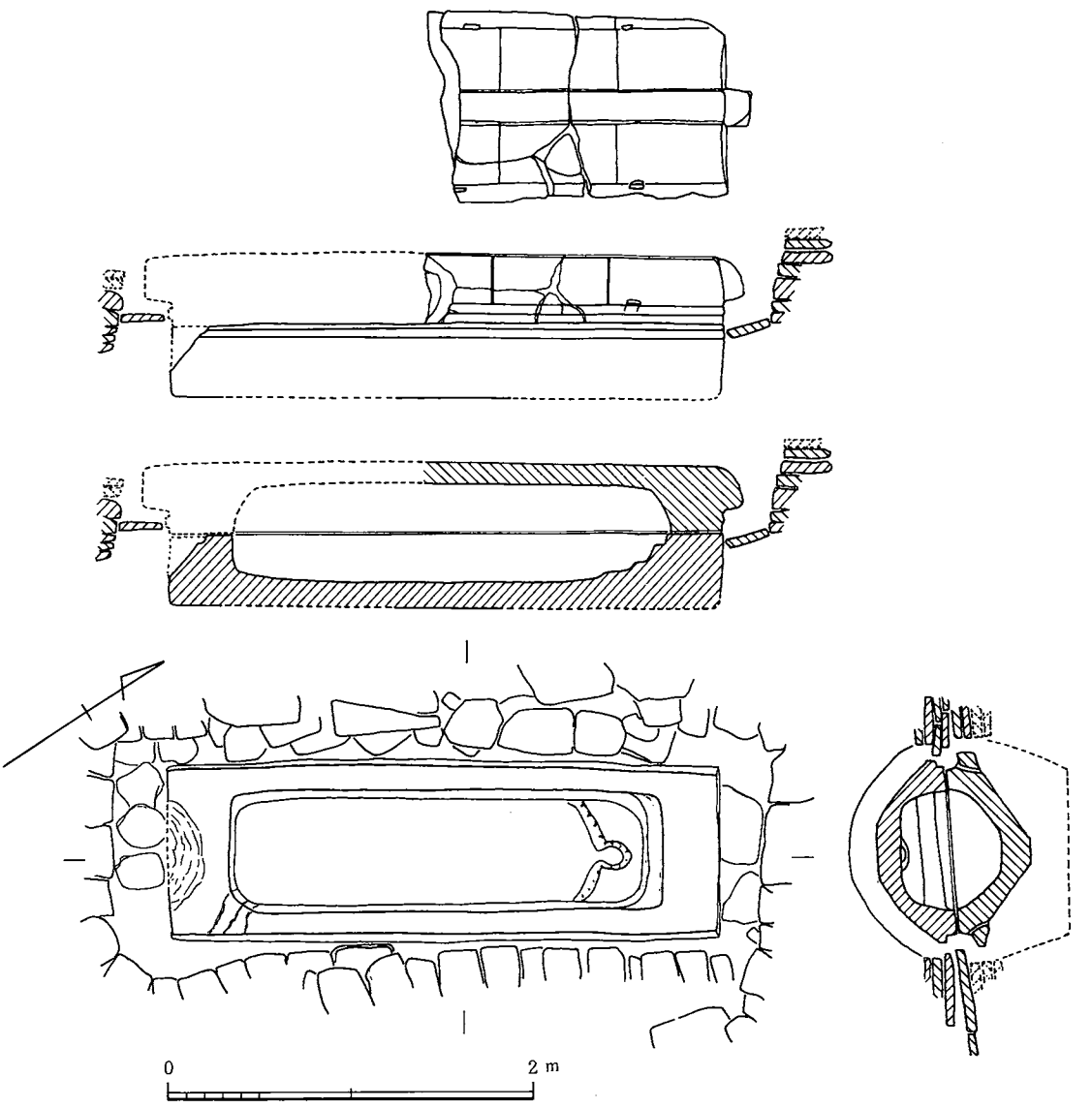


58の1図　大王山古墳位置図（鏡2.5万分の1）

立　地　古墳は竜峯山（517.2m）連峯の西麓，旧国道3号線にのぞむ早尾集落の裏山にあたり，周辺には巨石積の石室古墳2基がある。本来山頂を利用した円墳であるが周囲が削られ変形いちじるしい。『肥後国誌』によると貞享頃（1684～1687）の発掘といわれ俗に「船櫃」とよばれた。おそらく舟形石棺からおこった呼称であろう。

墳　丘　丘頂が平坦で墳丘の範囲が確認されていない。

内部施設　墳丘内部に割石小口積の竪穴式石室が構築され長さ3.60m幅1.15mを有するが天井までの高さは明らかでない。かって昭和9年(1934)，建武中興六百年祭にあたり天井石2枚を記念碑に転用したといわれ，近くの墓地に丹のついた石碑がある。その時石室の上部は破壊されたとみえ，多量の板状平石が散乱している。石室の容積一ぱいに阿蘇熔岩製の舟形石棺を納め，床は生粘土で固めていた。棺身は長さ3.04mを有し棺底の一側に造付の石枕を彫出す。



58の2図　大王山古墳石室・石棺実測図

頭と足側の身幅88cm，中央部身幅90cmを有し，これに現存長さ1.80m，幅1.05m，高さ37cmの棺蓋をかぶせていた。（身蓋総高82cm）おそらく貞享の盗掘者は足側から棺を打割り潜入したのであろう。蓋の前後に縄掛突起を彫出し，現在一側だけに残る。蓋の頂部は幅約15cmの平坦面をなし，これより両側面にかけて平板な斜面となり，あたかも切妻造の屋根を思わしめる。そして蓋の両斜面には高さ34cm，幅約70cmの長方形に浅く彫りくぼめた装飾があり，おそらくもとは両面に合計4ヶ所あったのであろう。身蓋共に接合部に舟べり状の「ハミ出し」があり，この部分に長さ10cm，幅約4cmの孔が左右対称に4ヶ所あけられ，破損部分を復原すると元来6ヶ所あったことになる。孔に磨滅がみられ，おそらくこれにベルト様のものを通したらしく運搬や構築時の必要から設けた縄掛突起の代用であろう。

このような石棺の縄掛突起に代って孔や環状孔を彫った例は，同じ宮原町室ノ山に割竹形石棺1例があり，同じ室ノ山出土の舟形石棺が大阪市立美術館にある。また同じ環状孔を彫った例は城南町石ノ室（家形）や佐賀県西隈（同）福岡県浦山（同）などの石棺にもみられる。

出土遺物　石室床面の足側より現存長さ6cm，幅1.3cmの刀子1点，また頭側より直刀1片が出土している。（乙益重隆）

年　代　5世紀

〔参考文献〕

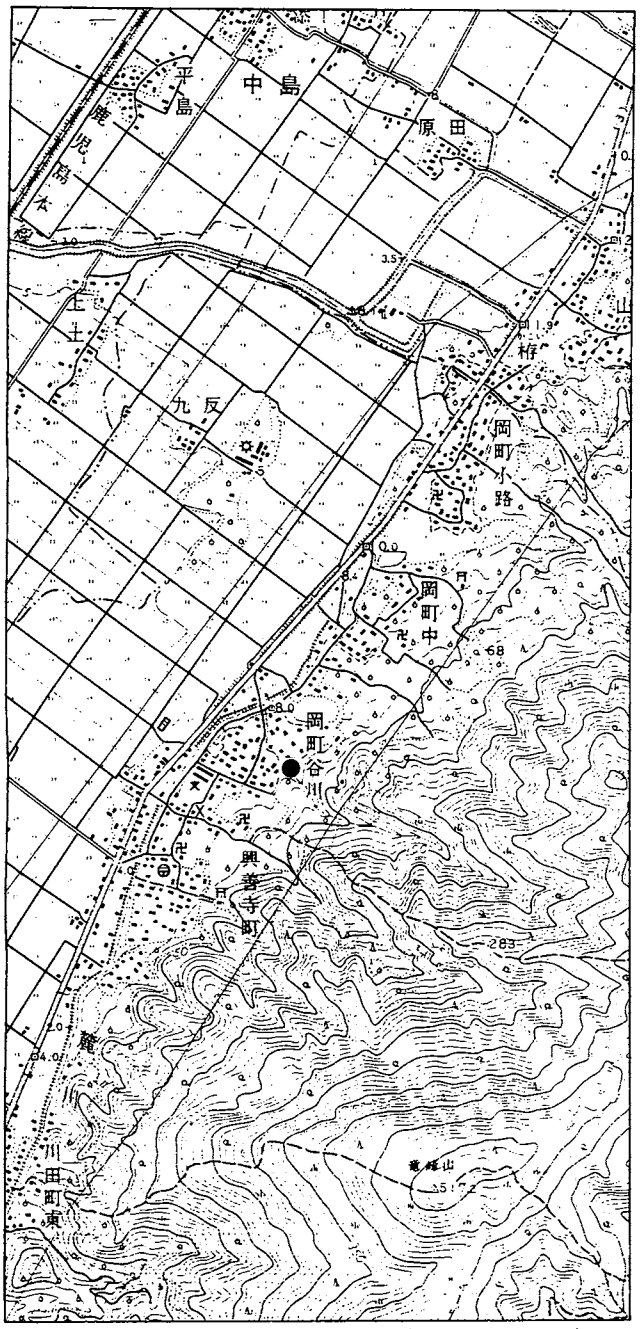
①乙益重隆「熊本県八代郡大王山古墳」『日本考古学年報11』昭和33年度　日本考古学協会　昭和33年（1958）
②『宮原町郷土誌』　宮原町公民館　昭和34年（1959）

58の3図　大王山古墳石棺

58の4図　大王山古墳石室

59. 門前（もんぜん）2号古墳 (⇨59の1～4図)

——八代市岡町谷川門前——



59の1図　門前2号古墳位置図（鏡2.5万分の1）

立　地　龍峯山の北西麓は丘陵端が小さな数段の段丘となり，沖積平野にいたる。この段丘上には現在集落が形成されているが，その間に多くの古墳が点在する。本古墳は比較的高い段丘の端部にある。

墳　丘　大正8年（1919）の京大報告には，径約50尺（約15m），高さ6尺（1.8m）の円墳であろうと記されている。昭和55年（1980）の県文化財報告では，本古墳の南西にある門前1号墳（箱式石棺・内行花文鏡等出土）とともに，前方後円墳になるとの見解が示されている。

墓　室　京大報告では石室であろうと記しているが，詳細は不明である。現存する石材の3辺に，石材と石材を組合せるための溝がある。このような溝は箱式石棺に多く見られる。あるいは箱式石棺を内部に納めた石室であったのかもしれない。

装　飾　浮き彫りに近い陰刻の二重円文が3個並んでいる。向って左端の円文と中央の円文の間は59cm，中央の円文と右端の円文との間は92cmで，3個の円文は等間隔ではない。また左端と中央の円文は1本の線刻で結ばれている。このように2個の円文を連結したものは，八代市日奈久新田町の田川内2号墳にある。また佐賀市金立町西隈の西隈古墳にも2個の円文間に連続三角文を入れた文様がある。2個の円文を線で結ぶことに何らかの意味があるのではなかろうか。

出土遺物　京大報告に赤焼土器と薄灰色の素焼で三脚付き浅鉢が出土したと記されている。赤焼土器は土師器であろう。薄灰色の三脚付き浅鉢は国内産の須恵器ではなく，朝鮮半島から輸入された陶質土器の可能性も考えられる。

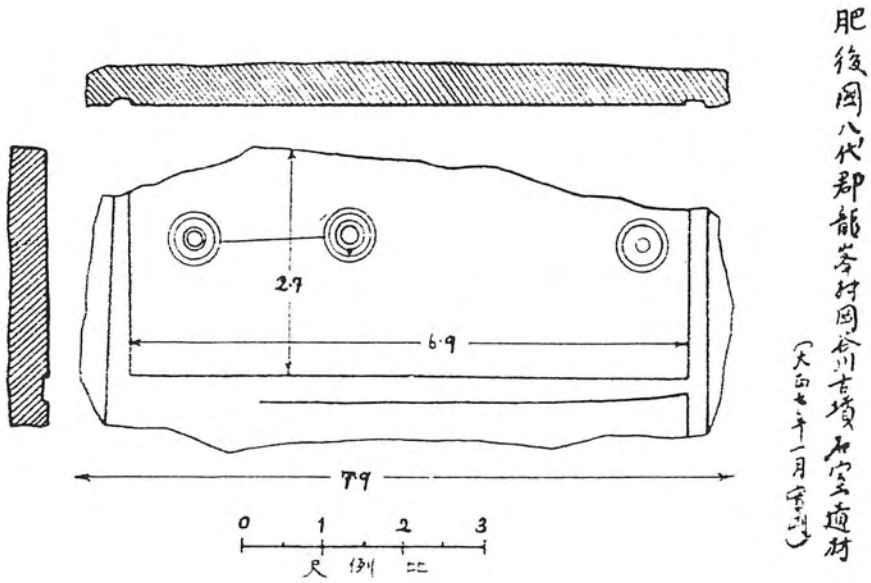
年　代　5世紀後半

備　考　大正6年（1917），開墾中に発見され，石材の一部が現在近くの公民館に保管されている。　（佐藤伸二）

〔参考文献〕

①『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊　京都帝国大学　大正8年（1919）
②『清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓』熊本県文化財調査報告第41集　熊本県教育委員会　昭和55年（1980）

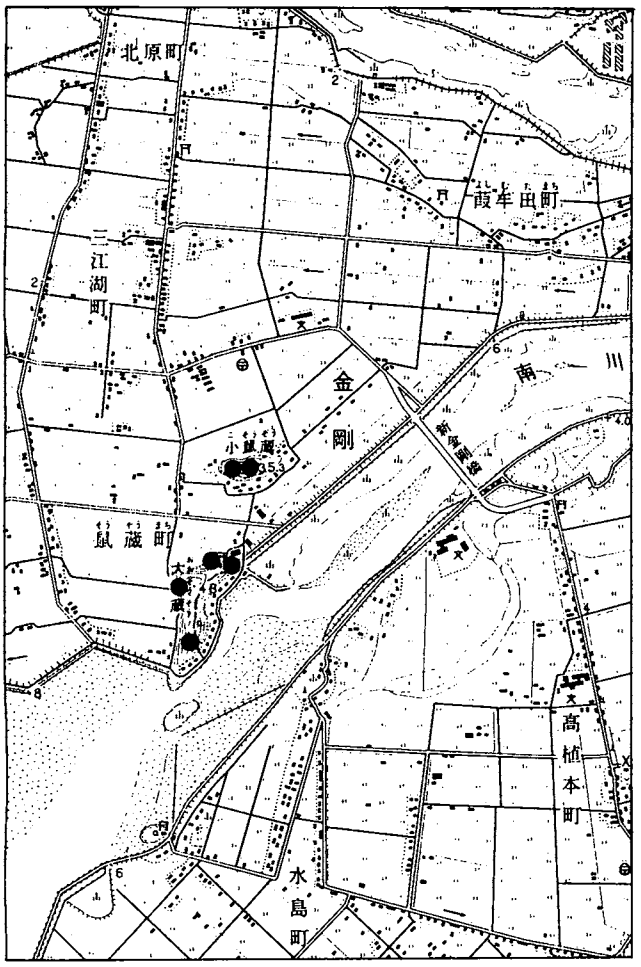
59の2図　門前2号古墳装飾石材拓影図（京都大学・文献①より）



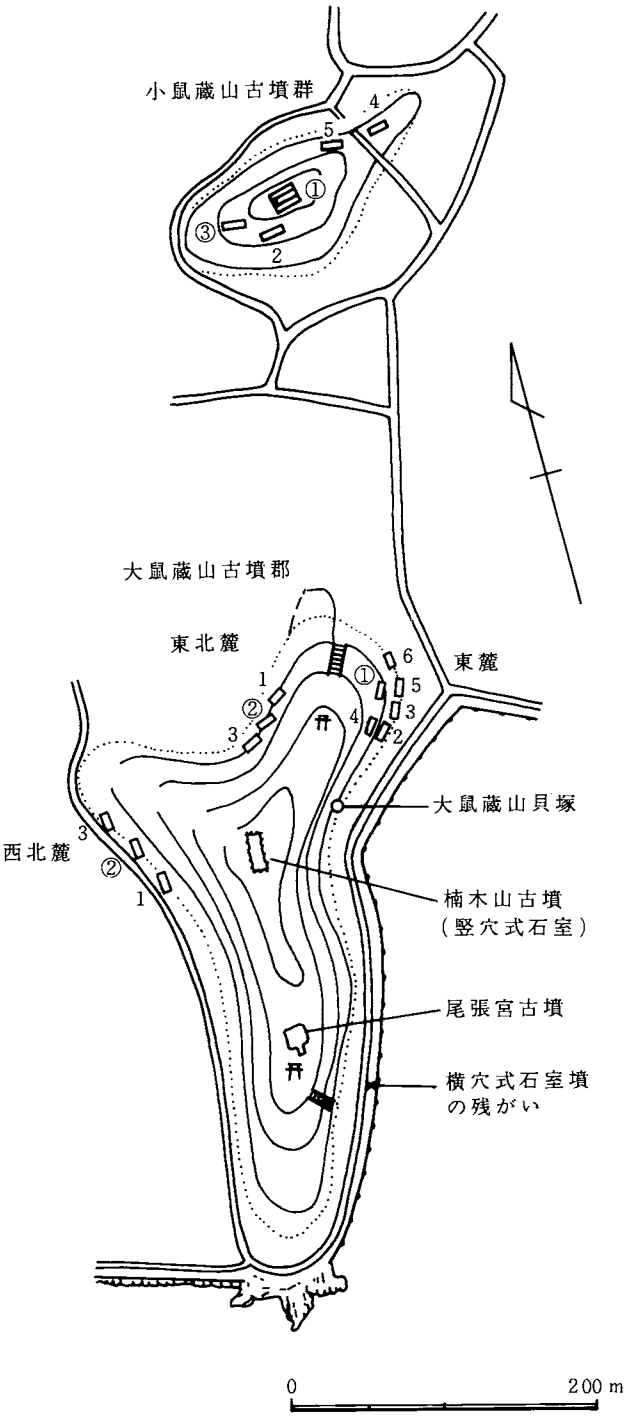
59の3図　門前2号古墳装飾石材実測図（京都大学・文献①より）

59の4図　門前2号古墳装飾石材

60．大鼠蔵尾張宮古墳〔昭和38年県史跡〕（60の１～３図）　——八代市鼠蔵町大鼠蔵——



60の１図　大鼠蔵山・小鼠蔵山古墳群位置図
（日奈久2.5万分の１）



60の２図　大鼠蔵山・小鼠蔵山古墳群分布図
（原図 江上敏勝）

立　地　球磨川デルタの南側に浮ぶ小島の一つ大鼠蔵（長さ350m）の山頂にあり，現在は周辺が干拓されて陸化している。当古墳は大鼠蔵山の南側の丘陵にあり，その上には尾張宮の社殿が建っている。

墳　丘　自然丘陵を利用した円墳と思われる。

石　室　砂岩の板石をアーチ状に積みあげた横穴式石室で，南に開口している。床面のプランは奥行き2.22m，幅2.32mの隅丸方形を呈し，その内側に厚さ５～８cmの低い石障をめぐらし，それを二枚の板石で区切っている。石障にはそれぞれ中央部に舟を思わせるえぐり（幅約1.25～ 130m，入口部は0.45m）が施されている。

現床面から天井までの高さは約2.05m である。

羨道は長さ0.71m，幅0.53m，閉塞された状態で，床面には板石を二枚敷き，天井までの高さ1.01m である。

装　飾　奥の石障に直径10.6cmの円文３個が彫られている。

出土遺物　開口が古く不明である。

年　代　６世紀中葉

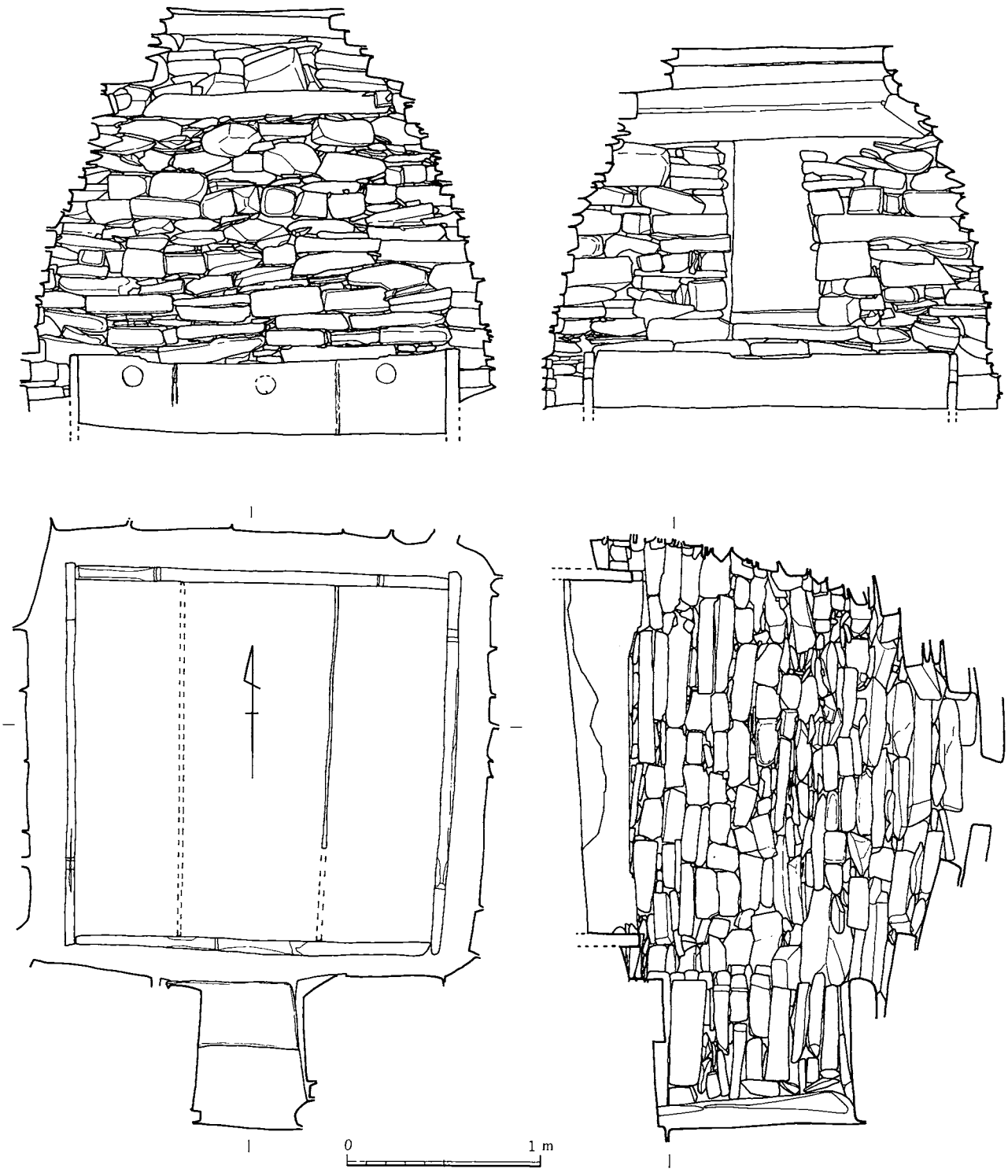
備　考　大鼠蔵山には，この他箱式石棺が東麓に6基，東北麓に３基，西北麓に３基，山頂に楠木山古墳があり，これらを含めて昭和38年（1963）１月22日，県史跡指定。(隈　昭志)

〔参考文献〕

①浜田耕作「八代郡金剛村大鼠蔵古墳」京都帝国大学文化大学考古学研究　報告第１冊，大正６年（1917）

②原口長之「大鼠蔵オワリ宮古墳」『熊本県の装飾古墳白書』昭和49年（1974）　熊本県教育委員会

③佐藤伸二「大鼠蔵オワリ宮古墳と東麓古墳」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P196～197 昭和51年（1976）熊本日日新聞社



60の3図　大鼠蔵尾張宮古墳石室実測図

61. 大鼠蔵東麓１号古墳 (⇨60の1・2図，61の1～6図)

——八代市鼠蔵町1257番地——

立　地　大鼠蔵山は敷川内町の北西４km，沖の洲新地が江戸末（弘化４年〔1847〕築立）に干拓されるまでは全くの孤島であった。島は南北に細長く横たわり，長さ約 400m 幅約100 m，北部約３分の１付近から北東へ折れ，屈折部はやや北西へ突き出し，幅約170ｍあり，平面の全体型は不完全なＹ字形を呈している。島の最高所は北に位置し海抜40m，ここに円墳で竪穴式石室の楠木山古墳がある。南の高所で海抜35ｍに円墳で扁平な砂岩の割石を平積み小口積みにした横穴式石室墳で円刻文のある尾張宮古墳がある。この１号古墳は島の東麓脚部で現在，墓地になっている所に位置する。

墳　丘　昭和29年（1954）９月，農業倉庫建設のため大鼠蔵の東側脚線部の土取り工事で６基の箱式石棺が崖下からまとまって発見された。出土地点は現在の海面から約３～５ｍの高さにあり，封土の有無は不明であるが，地元居住民の話によれば，最初からなかったと見る方が妥当のようである。

墓　室　この古墳は，６基のうちの１号古墳で土取り工事中最初の発見物であるため，石棺の規模や構造がどのような状態であったかは見ることができなかった。現場の人たちの話を綜合すると板石（安山岩質）９枚で組合わせた箱式石棺である。主軸の方向は南北，西側の縦の側壁に装飾ある板石が使用され，長さ125.7㎝，高さ55.7㎝，厚さ12㎝の安山岩質の平石である。西側壁は長さ90㎝で別の板石と組合せたものらしい。東側の縦の側壁には彫刻はなく長さ141㎝であるから，これも長さ70～80㎝のものをつぎ合わせていたものと考えられる。横壁のうち北側の板石は長さ74.5㎝，一方は下の方が三角につきだして長さ91㎝あるがその部は屍床面下に埋まり，高さは75.7㎝である。この板石は一方の三角形につきでた側に幅６㎝の溝があるので組合わせ面を加工してあったものである。石棺内面には丹がぬられた遺構が見られたが，屍床がどのようにつくられていたかはわからない。

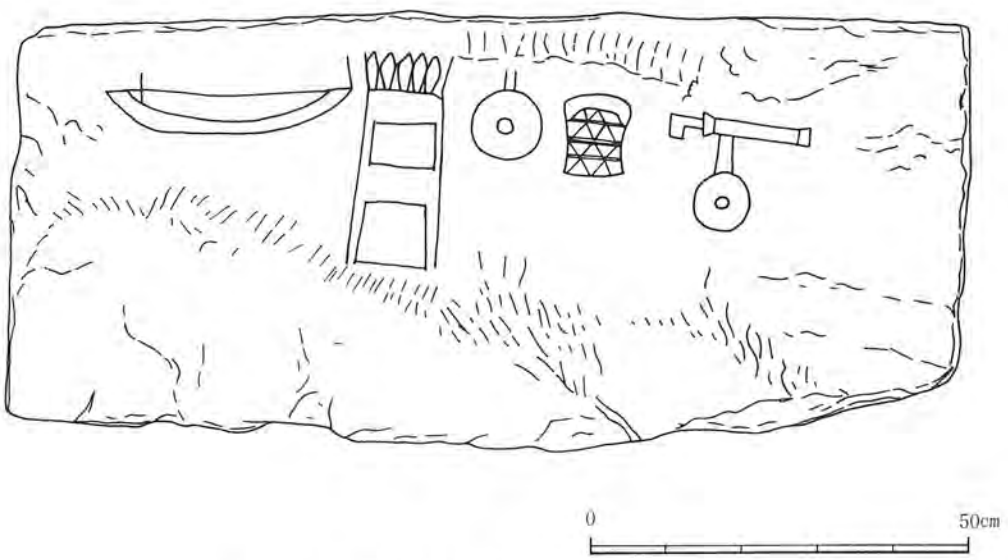
装　飾　西側たて壁には５つの装飾壁画が陰刻されていた。

61の１図　大鼠蔵山東麓土取り工事現場　昭和29年９月

61の２図　大鼠蔵山東麓箱式石棺発見の現場

61の３図　発見された東麓１号古墳装飾文

61の４図　発見された東麓１号古墳石棺側石



61の５図　大鼠蔵東麓１号古墳装飾石材図

左から長さ33.3cmの半月形の横長い舟のようなものは弓(舟とみる人もいる)，高さ28.5cmの靫（５本の矢がたつ），紐でつるした鏡（二重円文の内円は小さく鏡の鈕座を表わしたもの，外円は直径9.7cm，内円は直径2.4cm，紐の長さ7.6cm)，短甲（上体につける鎧で三角形の板金を横にはぎ合わせた様式で材料は鉄板か革の何れかで高さ10.6cm)，革鞘入りの大刀と鏡（鞘の部は長さ13.6cm，両端は3.1cm，柄頭は向って左の方にあり，鹿角製刀装の表現，大刀の下げ緒のあたりから二条の紐でつるした鏡）がはっきりと陰刻されている。おそらく武器の文様を彫ってここに眠る権力者の副葬品に代えたものとみられる。

出土遺物　人骨１体分（熟年の男性）・土師器の高坏１

年　代　　５世紀前半

備　考　この１号古墳以外の箱式石棺からは下記のものが出土している。

２号古墳（棺内）人骨２体，刀子１口，鉄鏃１（片刃）

３号古墳（東側棺外）人骨１体，剣１口，大形鉄鏃１

４号古墳（西側棺外）剣１口

５号古墳（棺内）北側第１号人〔少年男子，櫛２（大１，小１)〕同第２号人〔壮年女子，櫛３（大１，小２，銅鈴２)〕同第３号人〔年齢不明男子，櫛２（大１，小１)〕

南側第４号人〔熟年男子，櫛４（大２，小２）貝輪１，刀子１口〕同第５号人〔子供性別不明，櫛７（大５，小２)〕　　（江上敏勝）

〔参考文献〕

①乙益重隆「八代市大鼠蔵山古墳（肥後に於ける箱式石棺内合葬について)」『考古学雑誌』第41巻第４号，日本考古学会　昭和31年（1956）

②蓑田田鶴男著『金剛の歴史』八代市立第六中学校ＰＴＡ，昭和34年（1959）

③八代市文化財審議委員会編集『八代市の文化財第１集』八代市教育委員会　昭和39年（1964）

④八代市文化財審議委員会編集『八代市の文化財第２集』八代市教育委員会　昭和42年（1967）

⑤八代市文化財審議委員会編集『八代市の文化財総集編』八代市教育委員会　昭和55年（1980）

⑥斉藤忠著『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1973）

⑦『熊本県の文化財，史跡』熊本県教育委員会　昭和56年（1981）

⑧松本雅明編著『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）

⑨江上敏勝「熊本県八代地方に分布する古墳時代箱式石棺集成地名表」『夜豆志呂』27･28合併号　八代史談会　昭和47年（1972）

⑩江上敏勝編著『ふるさと百話，八代市の史話と伝説』社団法人八代青年会議所　昭和51年（1976）

61の６図　大鼠蔵東麓２号古墳石棺調査中の乙益氏(右下)

62. 大鼠蔵東北麓2号古墳（⇨60の1・2図，62の1・2図）

——八代市鼠蔵町1257番地——

立　地　大鼠蔵山の平面で不完全なＹ字形を呈する東北山麓に位置し，現在は畑及び墓地になっている付近である。

墳　丘　当時，土地管理者であった林田二生氏の話によれば，江戸時代以来，すでに山上や山脚から幾つかの石棺が掘り出され，土器類も出土したと伝えられているとのことであった。戦後，この東北側脚線部の土取り工事で３基が発見されすでに破壊されて詳細は明らかでないが，その中の2号古墳には二重円形刻文があった。その側壁１枚は林田氏宅屋敷に祀ってあった。おそらく採土中の発見のため封土はあったものと思われるが，その３基の全貌ははっきりしない。

墓　室　この古墳は３基ともに箱式石棺であったと推定され，３基のうちの２号古墳の側壁の一部である。すでに破壊墳のために石棺の規模や構造は全くわからない。林田氏の話から推定されるのは，板石９枚で組合わせた箱式石棺であることが考えられる。

装　飾　現存していた箱式石棺の側壁には二重円刻文（径約10cm～12cm）を３つ並べて彫ったものである。林田氏宅屋敷内の裏に昭和46年（1971）頃まであったが，林田氏転居（行き先不明）後は，その側壁の行方がわからなくなった。この側壁にあった二重円刻文は田の川内１号古墳にみられるものと同じものである。

出土遺物　不明

年　代　５世紀

（江上敏勝）

〔参考文献〕

①江上敏勝「熊本県八代地方における文化財・遺跡の破壊の概要について」『夜豆志呂』15，16合併号　八代史談会　昭和45年（1970）

②江上敏勝『球磨川南地区史跡文化財見学の栞』昭和52年（1977）　八代市教育委員会

③夜見ノ国の芸術，九州の装飾古墳(6)富樫卯三郎『大鼠蔵古墳』熊本日日新聞社　昭和39年（1964）２月８日

④江上敏勝「熊本県八代地方に分布する古墳時代箱式石棺集成地名表」『夜豆志呂』27，28合併号　八代史談会　昭和47年（1972）

62の１図　二重円形刻文をもつ大鼠蔵東北麓２号古墳

⇦62の２図　大鼠蔵東北麓２号古墳石棺の装飾刻文

63. 大鼠蔵西北麓2号古墳 (⇨60の1・2図，63の1図) ——八代市鼠蔵町弥次1257の1番地——

立　地　大鼠蔵山西北部でY字形屈折部よりやや北西へ突き出した山脚部に位置する。

墳　丘　昭和35年（1960）2月，金剛地区の鼠蔵海岸堤防のかき上げ工事のための土砂採掘中に発見されたものである。発見の知らせを受けた市教委社会教育課では2月16日係が現状調査をして土砂採掘を中止させた。4基発見されたが，すでに3基は大型採土機で見事に粉砕されていた。残る1基はやや遺構を残すだけであった。出土地点は現在の海面から3～5m位の高さにあり，山脚部で封土があったと工事関係者の話を総合すると言っている。発見されるまでは単なる山麓脚線部で，以前にその手前の土砂も採土されて道路になっている面から考えても封土があったことがいえる。

墓　室　発見された4基のうち3基は，工事関係者及び粉砕された石棺板石（安山岩質）の構造から判断すれば組合わせた箱式石棺であったと考えられる。その箱式石棺3基のうち一番北にあったのは，以前すでに破壊されていた石棺残骸であった。残りの2基の箱式石棺の板石も殆ど全部が海岸堤防のかき上げ工事現場へ運ばれ粉砕されて埋土されていた。残る1基は割石または平石積みの横穴式石室墳で，内部石棺右側の側壁には二重円刻文3つが刻まれていた。露出している側壁長さ1.8m，奥行き0.8mを計測した。この石棺の破壊度もひどかったが，後日調査することで保存されていた。別の破壊墳2基についても残されている遺構はその位置に保存してあった。この3基の破壊墳に装飾文様があったかはわからない。

昭和42年（1967）11月頃，農道取りつけ工事を請け負った建設業者が，この西北山麓に目をつけ，再び採土を行いブルドーザーによって無惨にも粉砕され，農道に埋められてしまった。当時市教委社会教育課には，発掘届などの申請もなく，後日開かれた文化財審議委員会では，現地を視察し，係を通じて関係者に対し厳重な忠告を行った。

出土遺物　人骨4片（上顎骨臼歯5本つき）須恵器片

年　代　5世紀　　（江上敏勝）

〔参考文献〕

①「大鼠蔵東北麓2号古墳」掲載と同じ
②昭和35年（1960）2月17日発行，西日本新聞「千四百年前の装飾石棺を発掘，八代市の大鼠蔵山で」の見出しに掲載。

63の1図　大鼠蔵西北麓2号古墳　（平石積みの横穴式石室墳）
破壊されて今はない

64. 小鼠蔵（こそうぞう）1号古墳 (⇨60の1・2図，64の1・2図)

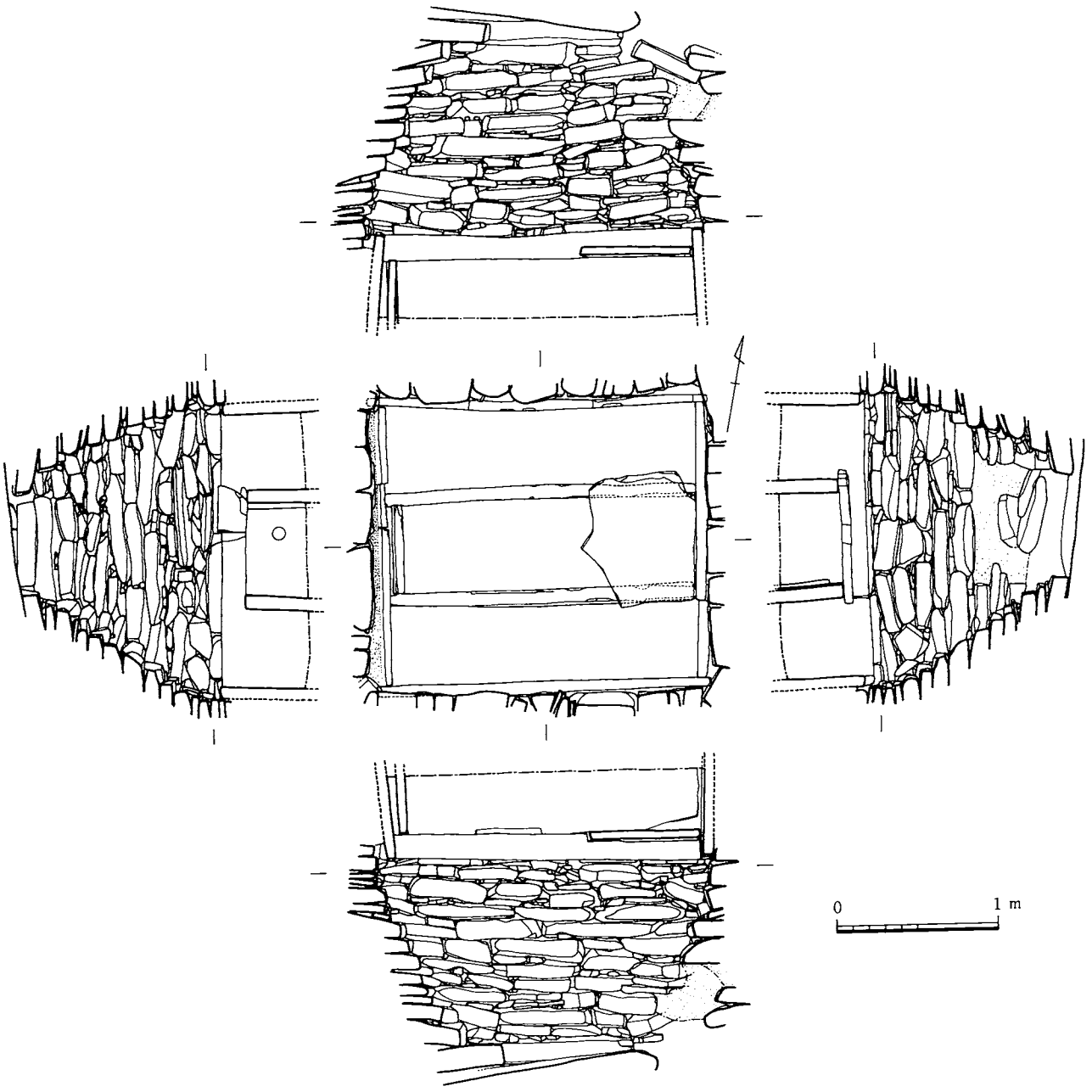
——八代市鼠蔵町小鼠蔵——

立　地　八代市街地の南を流れる球磨川の河口より南に約2キロ，水田地帯の中に大小2つの山がある。大きな山を大鼠蔵，小さな山を小鼠蔵とよばれ，元は共に離島であったが，弘化4年（1847）の干拓で陸つづきとなった。これらの山は古墳群地帯として知られ，中でも小鼠蔵（標高35.3m）には山頂に竪穴式石室を有する円墳1基があり，直径約8m，高さ約2mを有する。その周辺にはかって5基の箱式石棺があったが，現在2基が残る。

石室・装飾　小鼠蔵1号古墳の石室は割石を持送り式に平積にした竪穴式石室で，長さ2.10m，幅1.80m，天井までの高さ1.80mを有する。周壁に沿って高さ53cm，厚さ8cmを有する砂岩の切石を石障として立てめぐらし，その内部には高さ40cmの切石2枚で併列に仕切った3つの区画が設けられ床に礫を敷く。中央の区画は箱式石棺そのままにつくり，蓋石1枚が残る。内法の長さ1.83m，幅55cmを有し，石障に沿った一側には内壁を設け，この部分に直径約7cmの円文を彫りくぼめている。石棺の両側に設けられた区画は共に長さ195cm，幅50cmの同じ規格につくられ蓋石はない。これらの両区画には遺体を安置するだけの余地は充分あるが，果して屍床に供したかどうか明らかでない。

出土遺物　不明

年　代　5世紀



64の1図　小鼠蔵1号古墳石室実測図

備　考　この小鼠蔵１号古墳の西南側に２号と３号古墳(箱式石棺）がある。うち３号古墳の石棺の内面には円文４個が彫刻されている。また小鼠蔵１号古墳の東北側にあたる一段高い平坦部にも，かって箱式石棺の残骸１基分が残っていたが，今では痕跡さえない。また小鼠蔵北麓の崖線下にもかって箱式石棺１基が出土し（５号）内部に数体分の人骨と，土師器の小形丸底の坩１個を出土したという。その土器は高さ9.1cm，口径9.4cmを有し，口縁部がやや内湾し，頸部がくくれ，器面に斜行する荒い刷毛目があり，おそらくその時期は５世紀前半頃に比定される。

（乙益重隆）

〔参考文献〕
①乙益重隆「八代市大鼠蔵山古墳―肥後に於ける箱式石棺内合葬の例について―」考古学雑誌41巻４号　昭和31年（1956）
②蓑田田鶴男『金剛の歴史』八代市立第六中学校ＰＴＡ　昭和34年（1959）

64の２図　大鼠蔵山・小鼠蔵山遠景　左、大鼠蔵山(白石撮影)

65．小鼠蔵３号古墳（⇨60の1･2図，65の１図）

――八代市鼠蔵町1335番地――

立　地　小鼠蔵島の山頂部西端の尾根が急激に傾斜しようとする突端部，第一号墳の西方約20ｍの地点に位置する。

墳　丘　主体部の石棺の上端面が既に露出しており，現状観察から墳形の推定はできない。また，この露出状態を観察する限り，築造当時から墳丘は構築せず主体部のみを尾根上に埋置した可能性がある。

石　棺　主軸をほぼ東西に向けた組合せ式箱式石棺で，四壁を厚さ10cm前後の砂岩製板状切石各１枚で構築する。土圧によって石棺全体が西側へ傾いており，さらに棺材に接して繁茂している樹根の影響で南側長側壁も西方向へせり出しているため，平面観は平行四辺形を呈する。両長側壁はそれぞれ中程で２つに折れており，特に北長側壁は折れた部分から石材の表層が一部剝落している。また，両長側壁石材の両端部には浅い溝を切り，短側壁を嵌め込むように企画されており，底石はない。石棺内の床面は盗掘によって掘り下げられているが，棺材の内面にかすかに残った赤色顔料の痕跡から本来の床面は現状より5cm程高かったと考えられる。想定される床面の高さでの石棺内法は奥行き180cm，幅東短壁側で65cm，西短壁側で63cm，深さ50cmを測る。東短壁側の棺材がやや大きいことを考えれば，東側を頭部とした可能性がある。蓋石は１枚のみが南にズレた状態で残存しており，長さ約90cm，幅約105cm，厚さ10～15cmを測る。蓋石の裏面には棺身の石材と組み合わせるための深さ１～２cm，幅８～10cmの溝が「Ｈ」型に彫り込まれている。この刳り込みは蓋材の表面にも彫り込もうとしたとみられ，裏面の刳り込みとほぼ同じ位置に加工の痕跡が残されている。表面の剝落が激しく，加工も中途で止められていることから，本来刳り込みを施す予定でありながら加工の段階で変更したものとみられる。

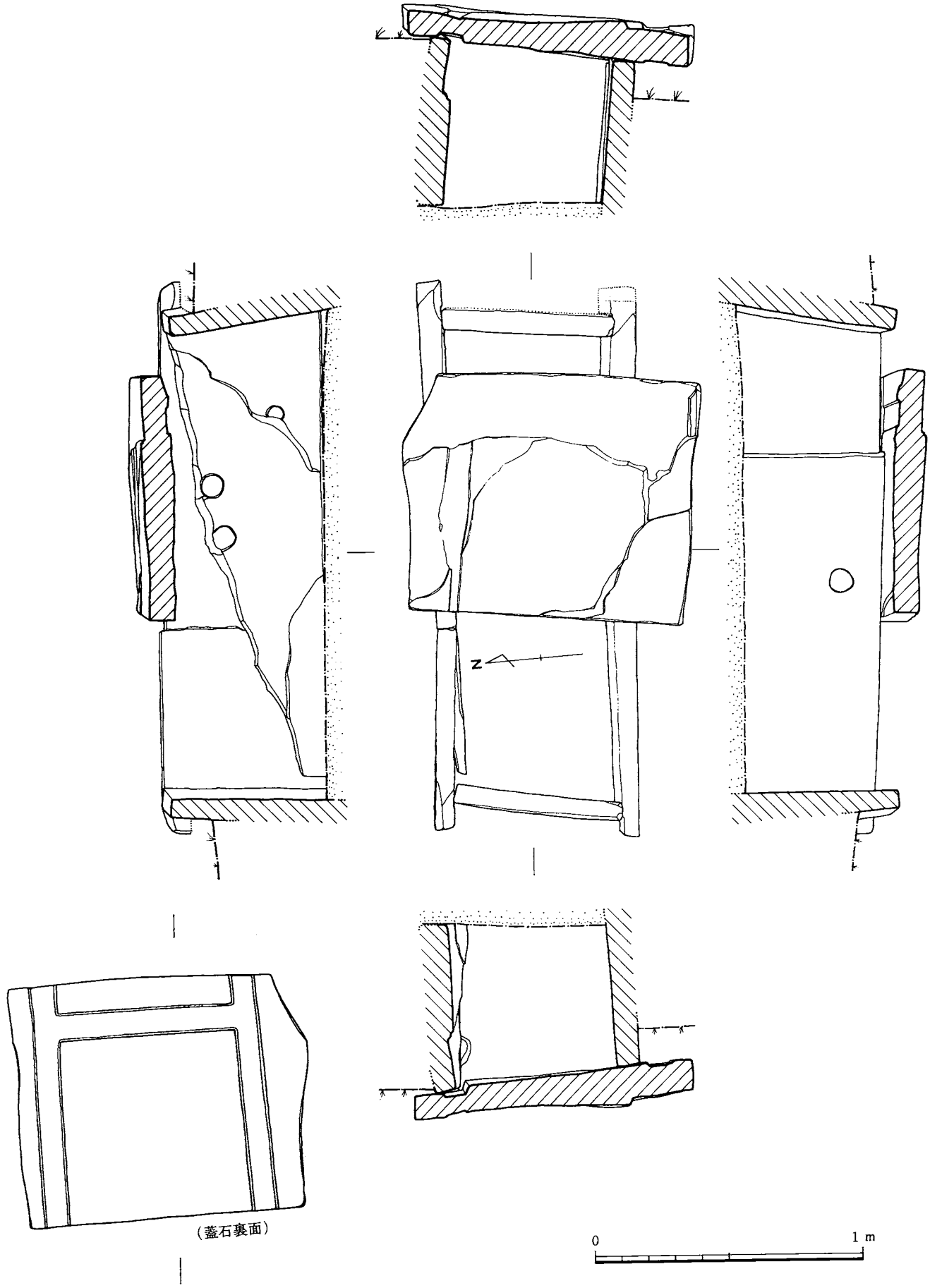
装　飾　北長側壁に３個，南長側壁に１個の円文が線刻されている。石棺内面全体にかっては赤色顔料が塗付されていた痕跡があるが，円文に特別な彩色を施していたものかどうかは不明である。北長側壁の円文３個のうち２個は棺材のほぼ中央部に並彫されており，直径は９cmを測る。他の１個は東の隅にあり，直径6.5cmである。南長側壁の円文はやはり棺材のほぼ中央部にあり，直径９cmである。円文の線刻は全て一重で深さ３㎜，幅３～５㎜で彫り込まれており，正円ではなく，少々歪である。なお，北長側壁東隅の円文は石材の剝離によって東半分のみ現存するものの楕円形を呈し，他の３個に比べて直径が小さく，位置も異なることが注目される。

出土遺物　古く開口しており，不明である。

年　代　小鼠蔵１号墳を隔てて東側にも３号墳と類似する石棺（５号墳）がかって存在したことが知られており，そこから土師器小形丸底坩１個が出土している。小形丸底坩は布留式期の所産と考えられ，３号墳もこの５号墳出土土器の示す年代と前後する時期（５世紀）に位置づけられるものと考えられる。

（池田栄史）

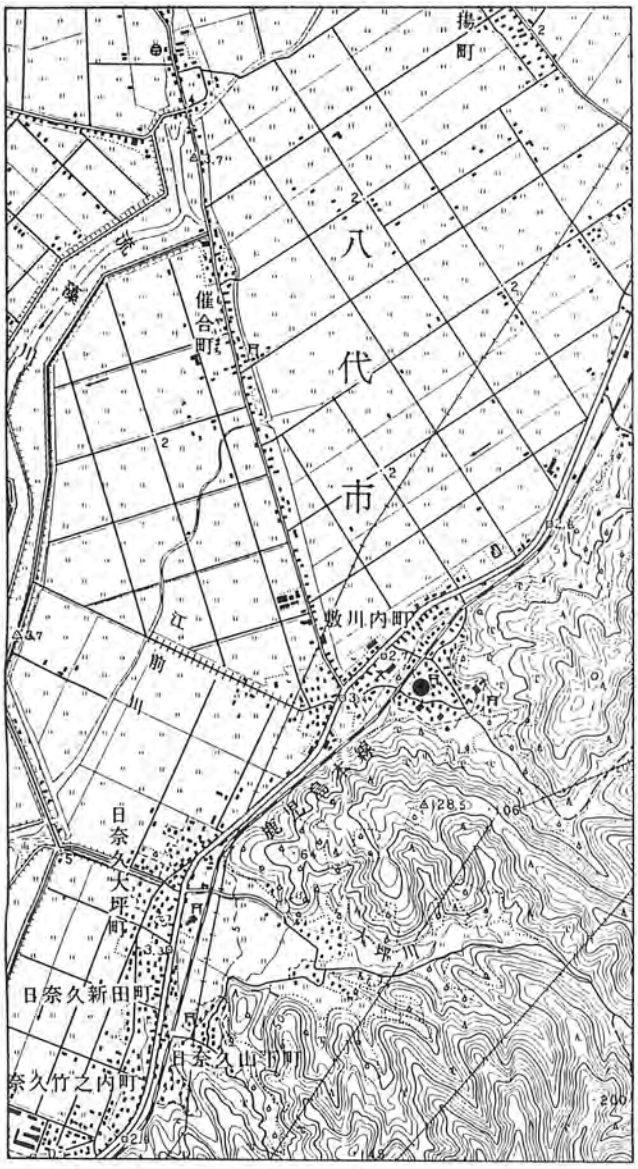
〔参考文献〕
①乙益重隆「八代市大鼠蔵山古墳―肥後に於ける箱式石棺内合葬の例について―」『考古学雑誌』41巻４号　昭和31年(1956)日本考古学会
②蓑田田鶴男『金剛の歴史』八代市立第６中学校ＰＴＡ　昭和34年（1959）
③江上敏勝「古代芦北の国造と遺跡について」『夜豆志呂』４肥後考古学会八代支部　昭和42年（1967）
④乙益重隆「小鼠蔵古墳出土の土器」『土師式土器集成』２昭和47年（1972）
⑤八代市文化財審議委員会編「小鼠蔵山第５号古墳出土土師坩」『八代市の文化財』編集編　昭和55年（1980）



65の1図　小鼠蔵3号古墳石棺実測図

66. 五反田古墳 (⇨66の１～５図)

——八代市敷川内町五反田1191——



66の１図　五反田古墳位置図（日奈久2.5万分の１）

立　地　敷川内川が作り出した小さな扇状地の先端部，敷川内の集落の西北端に近い田中弘氏の宅地の一角にある。この集落の歴史は古く，記録の上では南北朝時代にまでさかのぼることができる。古墳のある付近一帯は縄文中期～後期の貝塚である。

墳　丘　古くから宅地として利用され，破壊がひどく，墳丘は不明である。

墓　室　砂岩の割石を小口積にした横穴式石室である。壁面近くに円形刻文のある障石をめぐらせ，屍床には小円礫を敷き，丹が散布されていた。破壊がひどく，石室の大きさや形態に不明な点が多い。障石の内，ほぼ全体が残っているものを奥壁と考え，同種の古墳を参考にして石室の大きさが推計されている。それによると幅約1.6m，奥行1.9mの正方形に近い平面形をした石室と考えられる。この推計にもとずいて，現在石室の下部のみ復元されている。

装　飾　障石と考えられる２つの石材に，各々２個の円形刻文がある。円文は一重で，やや粗く彫られている。

出土遺物　鏡（捩文鏡）１，勾玉（硬玉）１，管玉（微小片１，碧玉２，ガラス１），小玉（土製１，メノウ１，ガラス29），刀子２，鉄鏃39，帯金具ノ，須恵器（提瓶１，横瓶１）。

年　代　６世紀中葉

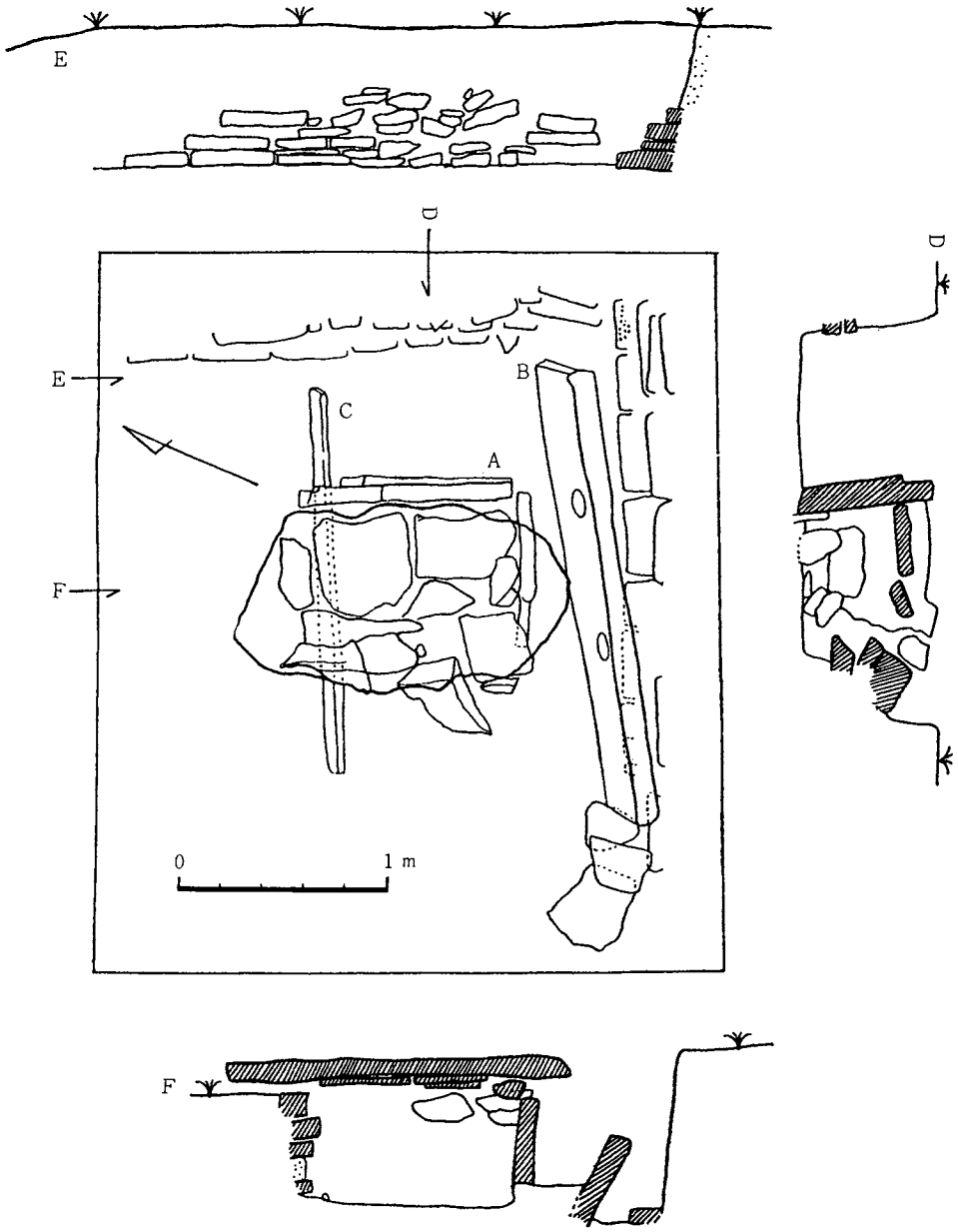
備　考　鉄器以外の遺物は，現在田中弘氏宅に保管されている。昭和36年（1961）の調査報告には，勾玉の材質を碧玉・管玉の１つを滑石としている。須恵器２点は提瓶と記されている。田中氏宅保管の遺物を観察した結果，上記の通り訂正した。（佐藤伸二）

〔参考文献〕

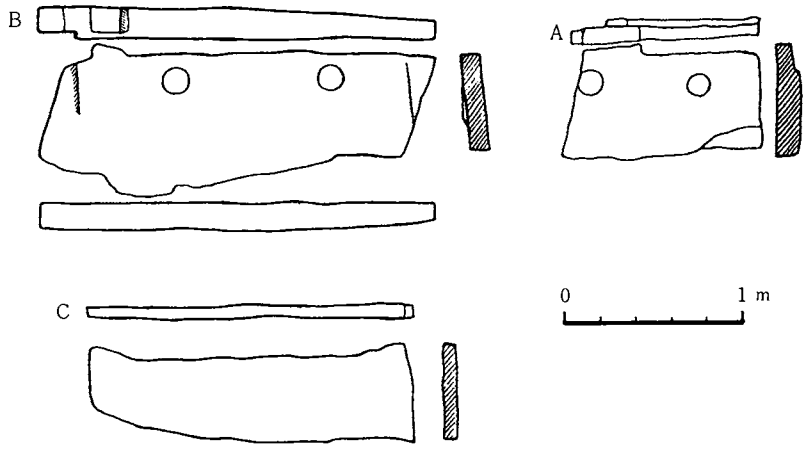
①松本雅明「敷川内五反田古墳調査報告」『熊本県の文化財第１集』　熊本県教育委員会　昭和36年（1961）
②蓑田田鶴男著『金剛の歴史』八代市立第六中学校ＰＴＡ　昭和34年（1959）

66の２図　五反田古墳石室の装飾壁面

66の３図　同左の円文



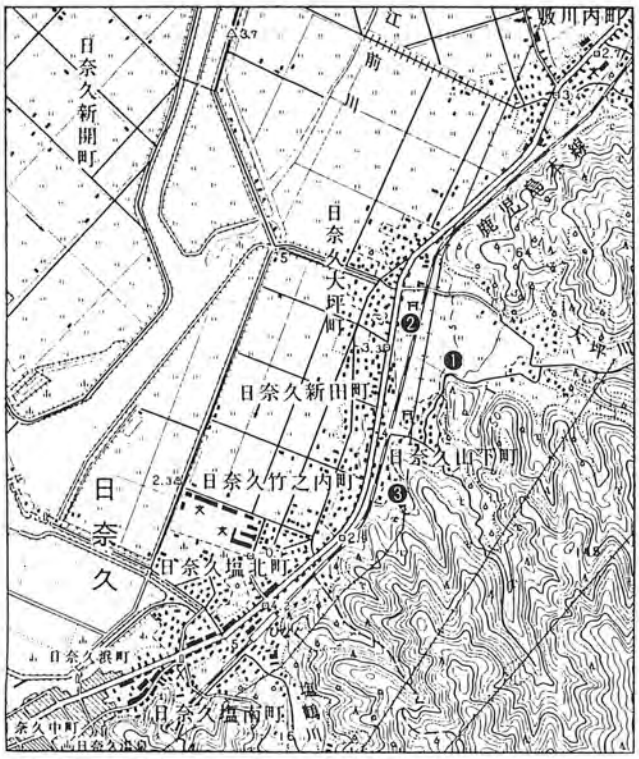
66の4図　五反田古墳石室実測図（松本・文献①より）



66の5図　五反田古墳石障実測図（松本・文献①より）

67. 長迫古墳（⇨67の１～11図）

——八代市日奈久大坪町永迫——



67の１図　長迫古墳とその石材位置図（日奈久2.5万分の１）
１長迫古墳推定地　２日奈久神社　３日奈久山下町

立地・墳丘　古墳はかって田河内（甲）古墳の北方約 500 m の山麓小字推屋にあり，もとは小高い塚をなしていたという。

装飾石材　明治のはじめ頃水田を開いたさいに古墳内部から装飾のある石材や人骨，刀剣，金具などを出土した。地元では小堂を建ててこれらの遺物を納めたが，いつとなく散逸し堂も廃絶したという。

装飾のある石材は砂岩の切石で，本来５枚で構成されたものらしく，最も大きな１枚は民家の井戸の側石に供せられていたが，大正２年（1913）他の小石材２点とともに東京帝室博物館（今の東京国立博物館）に寄贈され現在にいたっている。ついで大きな石材１枚は元千小田村の橋材に転用されていたが，現在日奈久神社の境内にある。その他にも元角田政治氏蔵の小石材があり，さらにその半分が山下町の中山義光氏屋敷内にあるという。

石材のうち東京国立博物館にあるものが最も精巧で，長さ2.18m，高さ85cm，厚さ約12cmを有し，上縁の一端から約60cmにわたって深さ約10cmの切り欠ぎを有する。一面に６個の図形を半肉彫にし，うち２個は円と同心円文をあらわすが，他の４個は三重の円心円の外周を精緻な三角形連続文で縁どりし，中心に円孔があり，いずれも上縁から二条の紐で垂下した状態をあらわす。それらの構図は松島町

67の２図　長迫古墳石材（明治末～大正初期頃における井戸枠に転用された状態）（東京大学提供）

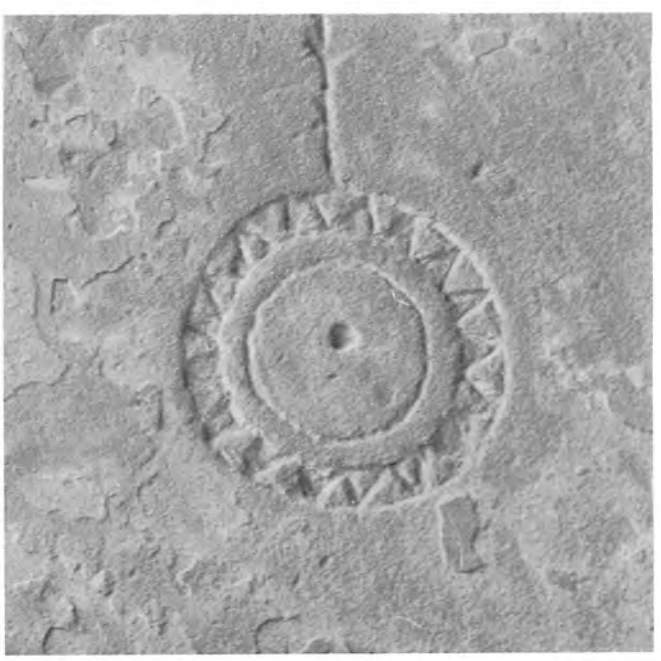
67の3図　長迫古墳石材の現状（乙益撮影、東京国立博物館協力）

阿村大戸南古墳石室のばあいと同様で，おそらく鏡を垂下したつもりであろう。他の2石にも各々同心円文2個をあらわす。日奈久神社の一石は長さ約2.10m，高さ85cm，厚さ12cmを有し風化磨損いちじるしい。上縁から紐で垂下した同心円4個がほぼ等間隔にならぶ。角田氏の一石には紐で垂下した同心円2個がみえ、その半分をなす中山氏のものに接合すると，他に同心円2個のある石材があったことになる。

これらの装飾ある石材は本来の形が明らかでない。現存する石材から復原すると箱式石棺とみるべきであるが，東京国立博物館所蔵の石材には一端に切り欠いだ部分があり，或いは古墳石室内部に立てめぐらした石障であった可能性がある。

年　代　伴出遺物が明らかでないが，他の類型的な図柄から判断して，おそらく5世紀代中葉頃の所産ではなかろうか。

（乙益重隆）



67の4図　長迫古墳石材の装飾文（同上）

〔参考文献〕
①梅原末治「日奈久町字永迫古墳」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』第1冊・大正6年（1917）
②松本雅明「敷川内五反田古墳調査報告」『熊本県の文化財』第1集　昭和36年（1961）
③乙益重隆「田川内古墳と長迫古墳」小林行雄編・藤本四八撮影『装飾古墳』　昭和39年（1664）

付1．日奈久（ひなぐ）神社の石材

——八代市日奈久大坪町日奈久神社境内——

石　材　長迫古墳の石材の一部である。長迫古墳は箱式石棺であったろうと，一般に考えられている。日奈久神社の石材は上辺の右半分が一段さがっている。観察の結果，これは後の割れではなく当初からのものである。東京国立博物館に保管されている長迫古墳の石材も同様に上辺の左3分の1ほどが1段さがっている。このように上辺の一部が一段さがったものは箱式石棺の棺材としては不適当である。一方横穴式石室である田川内1号墳の向って右側の障石は，石屋形の部分で一段さがっている。したがって，長迫古墳は横穴式石室であったと考えるべきではなかろうか。

装　飾　鏡を上から紐でつるしたような2重円文が4個ならんでいたが，現在はすべて消滅している。

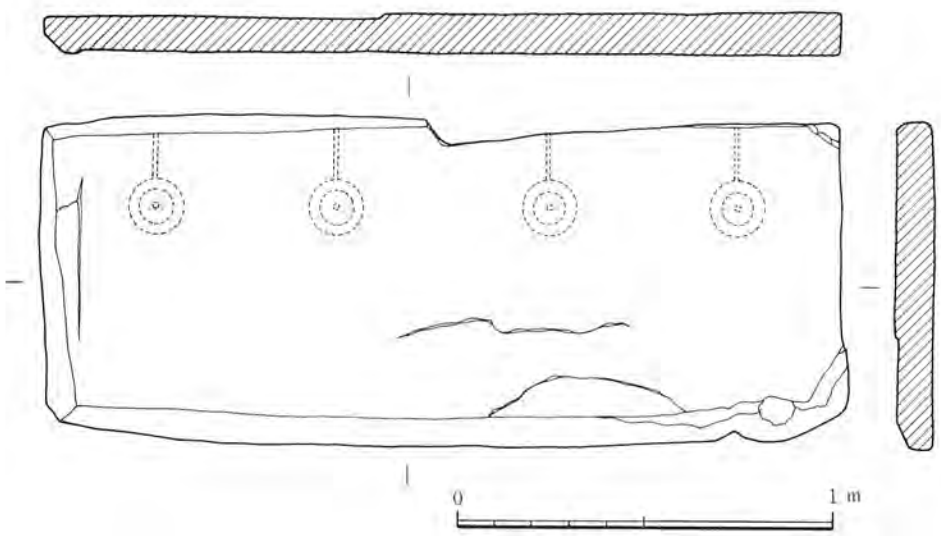
備　考　『金剛の歴史』では，これを塩釜3号墳としている。

（佐藤伸二）

〔参考文献〕

①『肥後における装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文化大学考古学研究報告第1冊　京都帝国大学　大正6年（1917）
②小林行雄編『装飾古墳』平凡社　昭和39年（1964）
③蓑田田鶴男著『金剛の歴史』八代市立第6中学校ＰＴＡ　昭昭34年（1959）

67の5図　長迫古墳日奈久神社の石材拓影（京都大学文献①）



67の6図　長迫古墳日奈久神社の石材実測図（円文は京都大学報告書の拓本から復原した）

付2．日奈久山下町の石材

——八代市日奈久山下町2514中山義光氏宅——

石　材　長迫古墳の石材の一部である。長迫古墳は箱式石棺であろうと一般に考えられているが，日奈久神社と東京国立博物館所蔵の石材から考えると，障石を持つ横穴式石室の可能性が強い。本石材も箱式石棺の短辺の石材にしては長すぎる。箱式石棺の長辺の石材か横穴式石室の障石の1つと考えるべきであろう。この石材を箱式石棺の長辺の石材とすれば，長迫古墳は箱式石棺と障石を持つ横穴式石室の2つの墓室を持っていたことになろう。

装　飾　鏡を上から紐でつるしたような2重円文が3個並んでいる。向って左端の1個は半分欠損している。

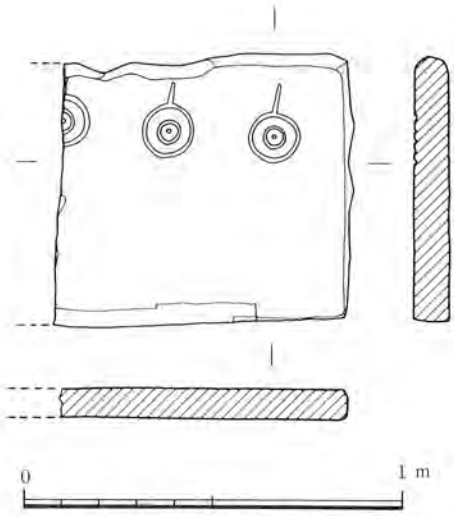
備　考　京大報告にある角田政治氏蔵の石材と接合できると思われる。本石材を『金剛の歴史』では塩釜3号墳としている。

（佐藤伸二）

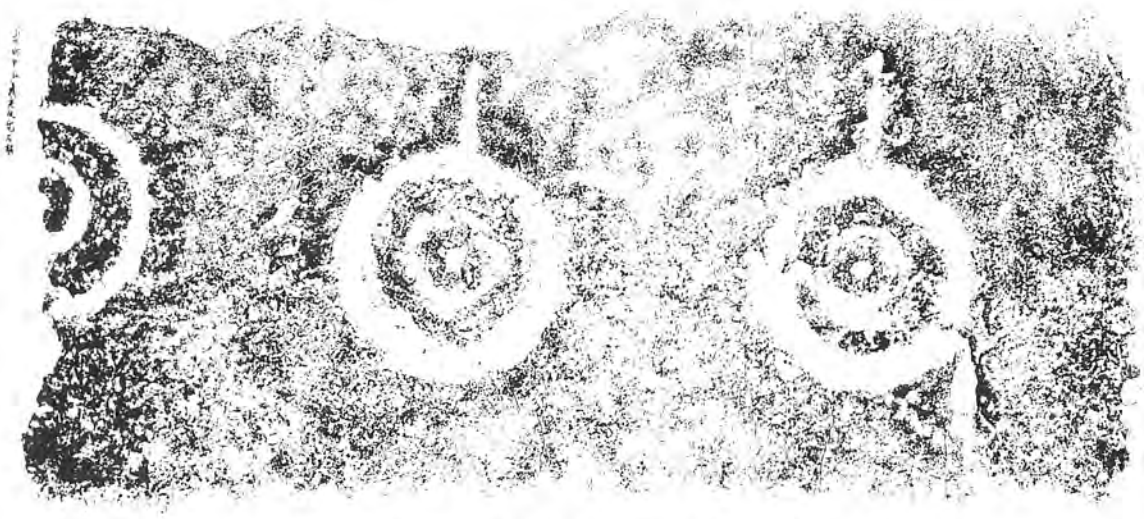
〔参考文献〕

①『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文化大学考古学研究報告第1冊　京都帝国大学　大正6年（1917）
②蓑田田鶴男『金剛の歴史』八代市立第6中学校ＰＴＡ　昭和34年（1959）

67の7図　長迫古墳角田氏蔵石材拓影
（京都大学文献①）



67の8図　長迫古墳日奈久山下町の石材実測図



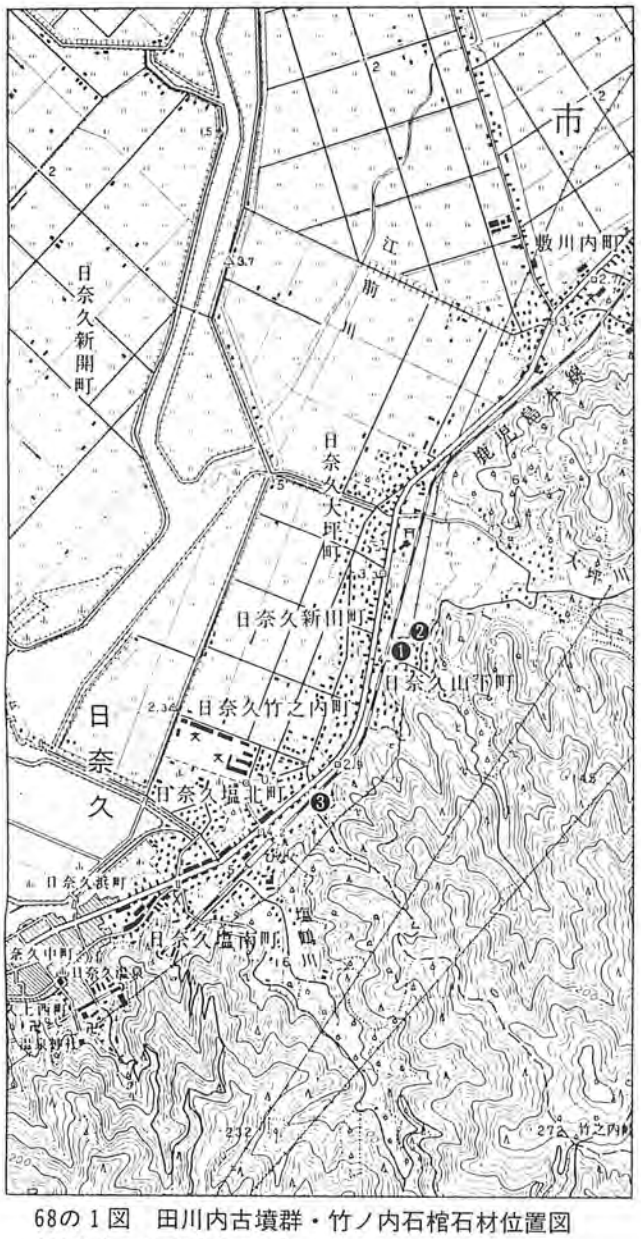
67の9図　長迫古墳日奈久山下町の石材拓影

67の10図　長迫古墳日奈久山下町の石材保存状態（中山義光氏宅）

67の11図　同左の石材

68. 田川内（たのかわち）1号(甲号)古墳〔昭和48年県史跡〕(⇨68の1～4図)

——八代市日奈久新田町2083——



68の1図　田川内古墳群・竹ノ内石棺石材位置図
(日奈久・2.5万分の1)
1 田川内1号古墳　2 田川内2号古墳　3 竹ノ内石棺石材

68の2図　田川内1号古墳石室内部

立　地　田川内の集落の西北の角，菅原神社の境内の西南部にある。東から西へ伸びた丘陵の先端が沖積平野に接するあたりに低い段丘が形成されているが，本古墳はその先端部に築かれている。なお付近一帯は縄文中期～後期の貝塚で，東方丘陵上には中世の田川内城址がある。

墳　丘　小形の円墳と思われる。現存の墳丘は昭和48年度（1973）の補修工事の際に復元されたもので，本来の墳丘の大きさや高さは不明である。

墓　室　板状の砂岩を小口積みにして，アーチ状の天井部を構築し，上部に大きな天井石を置いた単室の横穴式石室である。高さ196cm，奥行き242cm，幅は入口近くで212cm奥壁近くで230cm。奥に向ってやや広がった正方形に近い平面形を呈している。石室内面には丹が塗られている。石室の四方の壁には石障がめぐらされ，内部は板石を立てて仕切り，屍床を作っている。屍床は奥壁と左右の壁に添って作られており，いわゆる「コ」字形の配置である。奥の屍床は蓋石が乗り，箱式石棺の側壁に穴を穿ったような形態である。入口側の障石と奥の屍床の仕切石にはU字形の刳込みがある。

装　飾　すべて円形の刻文である。左右と奥の障石に各々3個の二重円文，奥の仕切石に3個の一重円文，入口の障石の外側に2個の二重円文がある。円文はいずれもややいびつで，正円ではない。二重円文も正確には同心円になっていない。

出土遺物　大正6年（1917）の京都大学の報告書に記載されている遺物は次の通りである。瑠璃玉10個，蕨手刀2口，剣身1口，鉄斧1口，貝輪5個，鎧残缺，刀身残缺，齋瓮式の土器片数個。

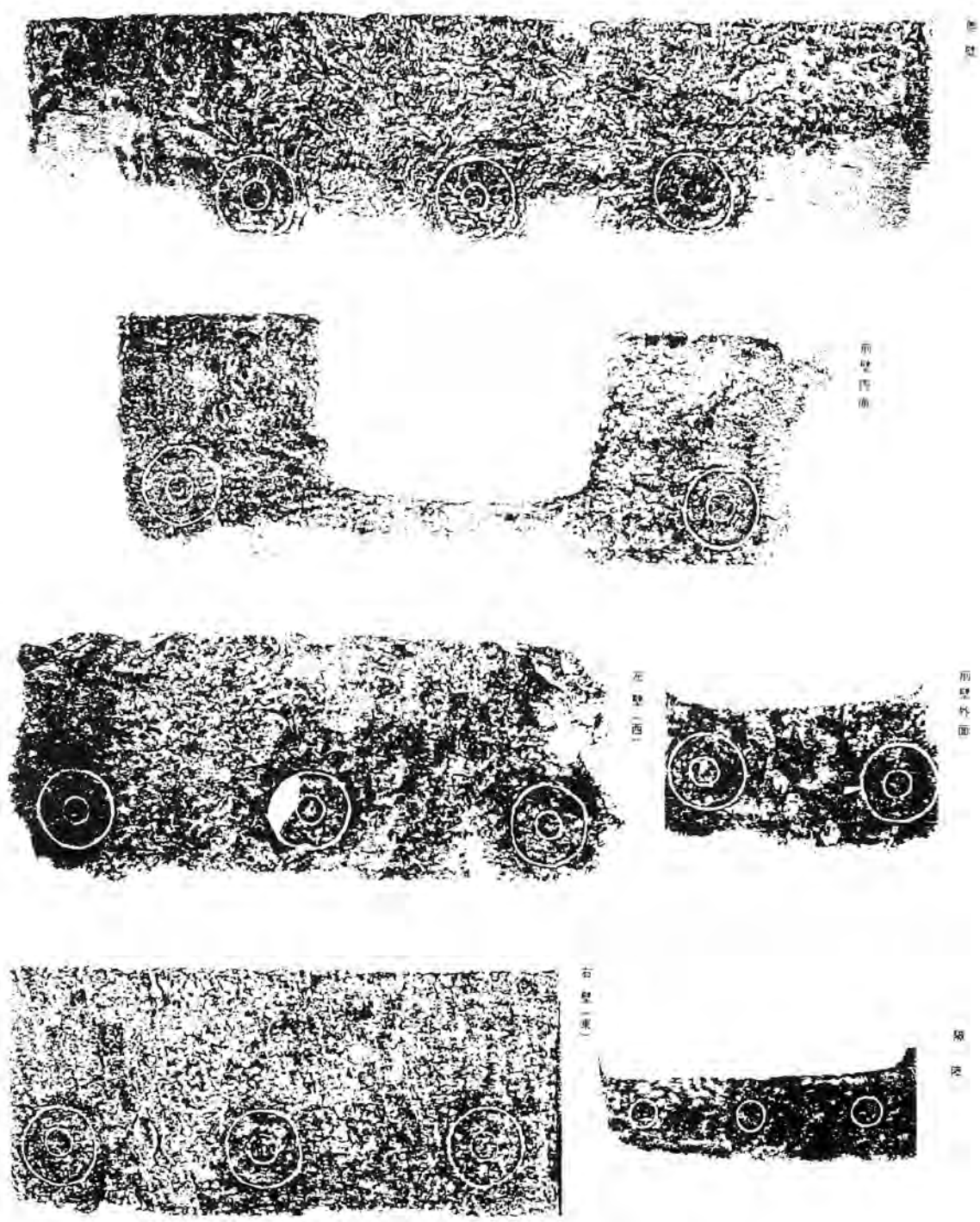
報告書の写真を見ると，蕨手刀と記されているものは蕨手刀子である。齋瓮式の土器は須恵器に近い陶質土器のことであろうが，その特色の記載を見ると，古墳出土の一般的な須恵器の特色とはかなり異なっている。

昭和35年（1960）の調査で，ヒスイ勾玉1，鹿角製刀装具，滑石製勾玉などが発見されている。

年　代　5世紀後半

備　考　芦北国造阿利斯登の子，達率日羅の墓であろうとの見解もある。『日本書紀』によれば日羅が百済から召喚され，暗殺されたのは敏達天皇12年（583年）である。本古墳の示す年代はそれより半世紀以上は古いと考えられるので，芦北君一族の墓であったとしても，日羅の墓とは考えにくい。

京大報告に記載されている齋瓮式の土器の一部と思われるものが2点日奈久小学校に保管されている。「大正六，二，二五，田川内古墳附近ニテ平野文學士採集古墳土器」と記されている。1つには表面に格子目タタキ内面に円形タタキ（青海波文）があり，もう1つには表面に平行タタキ内面に円形タタキ（青海波文）がある。2点とも古墳時

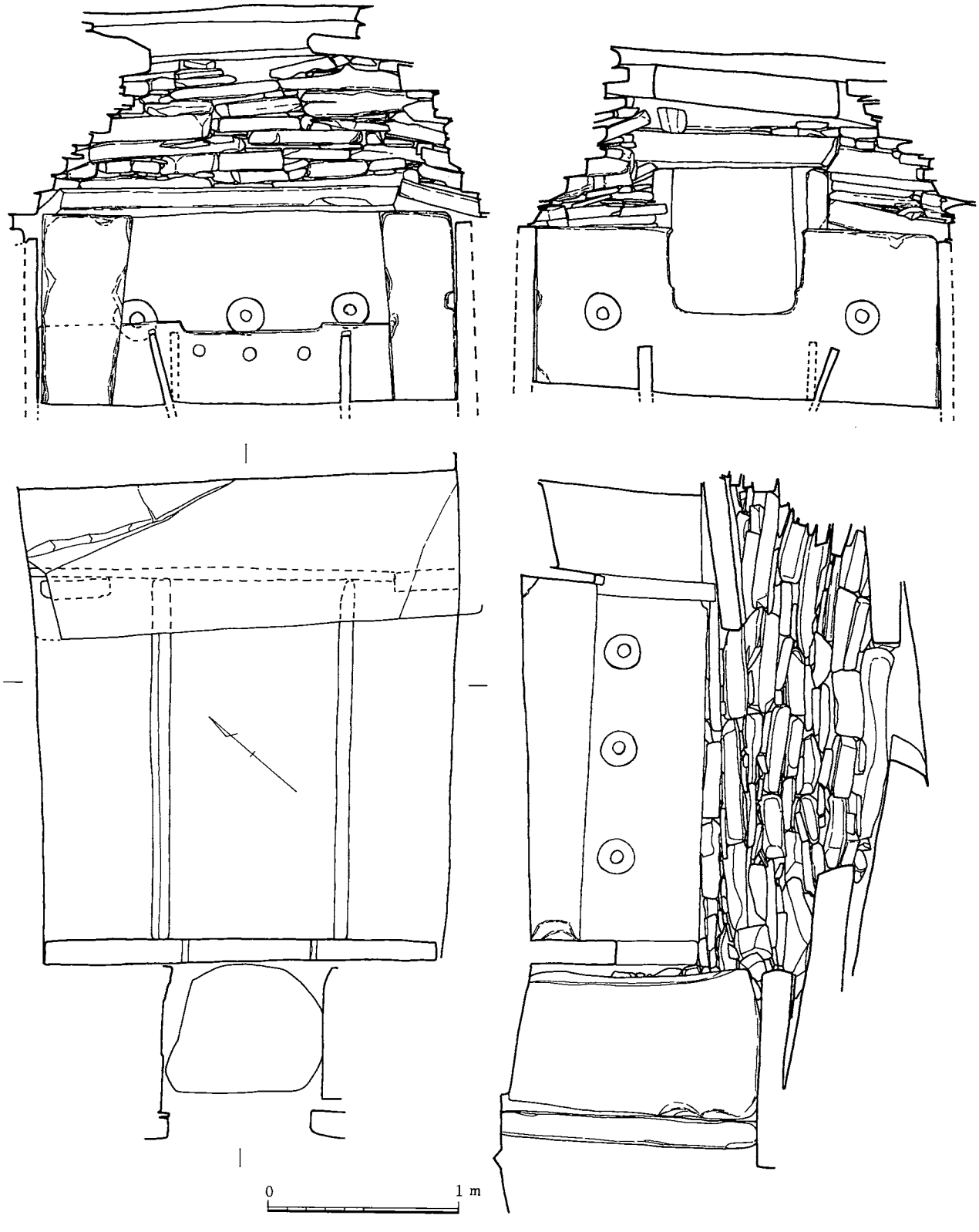


68の３図　田川内１号古墳石室梱壁文様拓影図（京大・文献①より）

代の一般的な須恵器である。京大報告に記載されている他の２点，縄文を有する大形のものと円文と三重圏を連続して２段に刻せるものは保管されていない。　（佐藤伸二）

〔参考文献〕

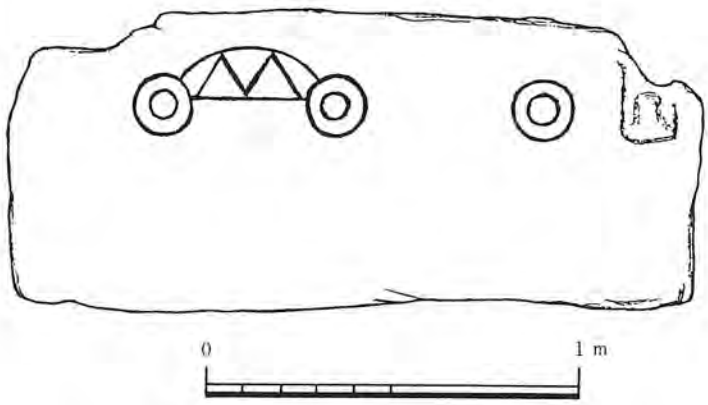
①『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文化大学考古学研究報告第１冊　京都帝国大学　大正６年（1917）
②蓑田田鶴男著『金剛の歴史』八代市立第６中学校ＰＴＡ　昭和34年（1959）
③江上敏勝著『続ふるさと百話―八代の史話と伝説―』　八代青年会議所　昭和54年（1979）
④『田ノ川内古墳第１号墳補修工事報告書』八代市教育委員会　昭和49年（1974）



68の4図　田川内1号古墳石室実測図

69. 田川内2号古墳 (⇨68の1図, 69の1図)

——八代市日奈久新田町——



69の1図　田川内2号古墳装飾文実測図（蓑田・文献①より）

立　地　田川内の集落の西北の角，田川内1号墳のある菅原神社の境内の北側の畑の中にあったが，現在は墳丘の一部を残してほとんど消滅している。

墳　丘　墳丘の詳細は不明

墓　室　『金剛の歴史』にある石材の実測図から判断して箱式石棺と思われる。

装　飾　側壁の1枚に装飾文様がある。二重円文を3個陰刻し，向って左側の2つを直線と孤線で連結し，その間に山形文を2つ並べている。右上端にユキを思わせる線刻がある。これは装飾文様であるか明らかでない。

出土遺物　不明

年　代　5世紀後半

備　考　昭和12～13年（1937～1938）ごろの発見で，昭和25年（1950）蓑田田鶴男氏等により調査された。昭和34年（1959）ごろには，石材は田川内1号墳の垣内に保存されていたとのことであるが，現在は不明。　（佐藤伸二）

〔参考文献〕

①蓑田田鶴男著『金剛の歴史』八代市立第六中学校ＰＴＡ　昭和34年（1959）

②松本雅明「敷川内五反田古墳調査報告」『熊本県の文化財第1集』　昭和36年（1961）

---

70. 田川内3号古墳 (⇨70の1～3図)

——八代市日奈久新田町——

70の1図　田川内3号古墳の装飾石材

立　地　田川内1号墳の近くにあったものと思われるが，はっきりした地点は不明である。

墳　丘　不明

墓　室　幅83cm・高さ65cmと幅80cm，高さ66cmの二枚の石材がある。墓室の形態は不明

装　飾　1石に二重円文が1つ，他の1石に一重円文が2つ陰刻されている。

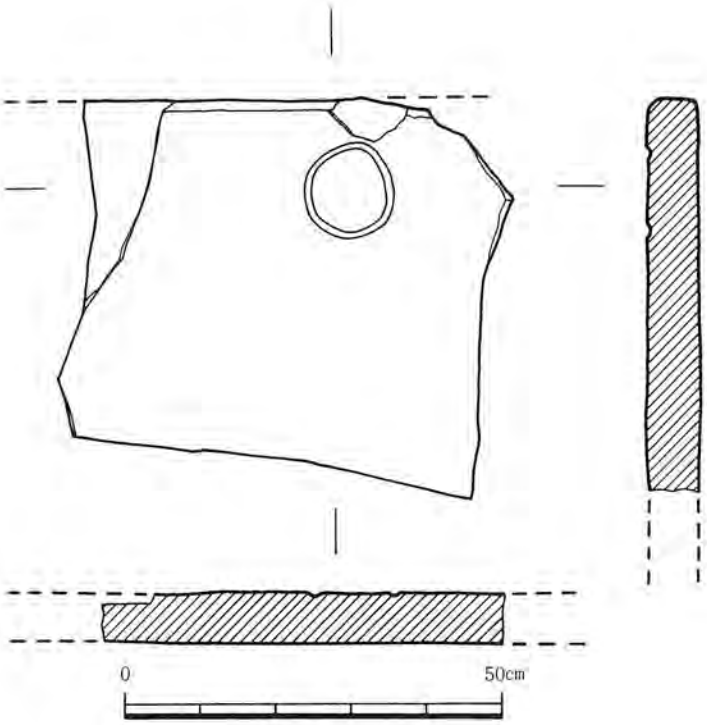
出土遺物　不明

年　代　6世紀

備　考　昭和35年(1960)，1号墳の墳丘の南側の藪の中から発見された。1号墳の垣内に保存されていたが，現在では一重円文のある石材のみ1号墳の入口に保存されている。　（佐藤伸二）

〔参考文献〕

①松本雅明「敷川内五反田古墳調査報告」『熊本県の文化財』第1集　熊本県　昭和36年（1961）

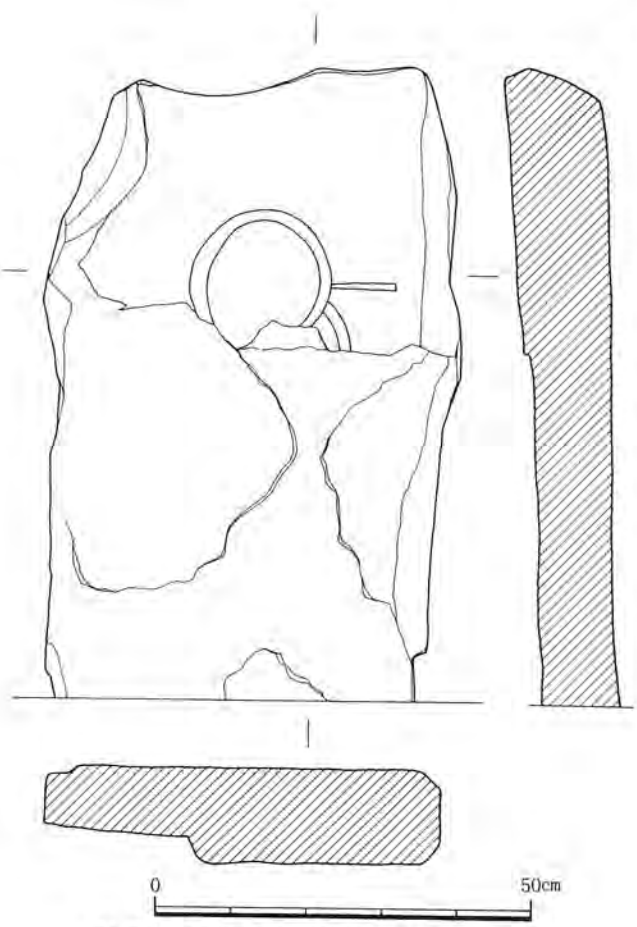


70の2図　田川内3号古墳装飾石材実測図

70の3図　田川内3号古墳装飾石材拓影図

71. 竹ノ内古墳（⇨68の1図，71の1図）

——八代市日奈久竹ノ内町——



71の1図　竹ノ内石棺装飾石材実測図

立　地　現在鹿児島本線が通っているあたりの山裾にあったものと思われる。

墳　丘　不明

墓　室　石材の形態から判断して，箱式石棺であろうと思われる。

装　飾　紐でつるした一重の円形刻文が1個観察される。全体に剝離がひどく，本来の個数は不明である。円文の右上部に弧線の一部が見える。田川内2号のように円文と円文をつなぐ弧線であろう。

出土遺物　不明

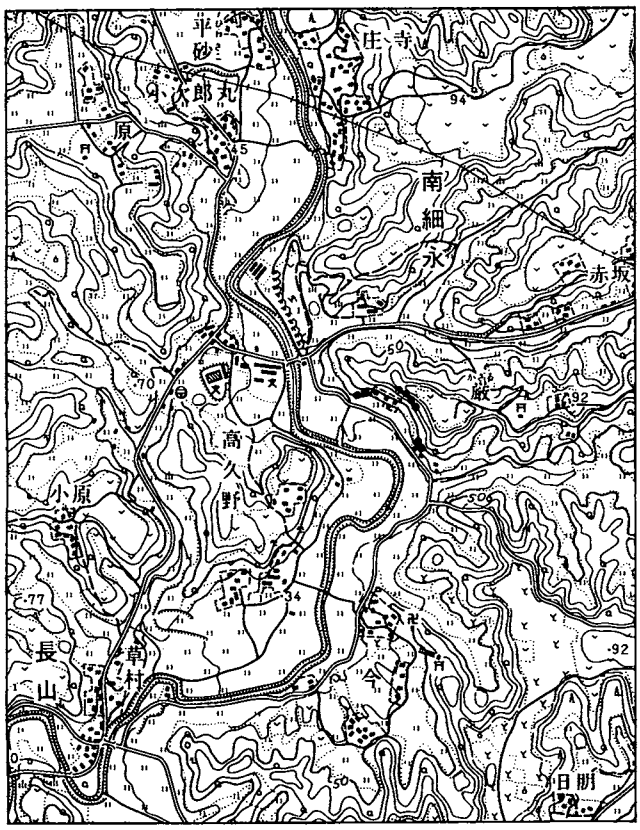
年　代　5世紀後半

備　考　現在，八代市日奈久竹ノ内町2633，米崎重明氏宅の裏庭のほこらの内に，馬頭観音などとともに祭られている。もとは竹ノ内神社の登り口近くの鉄道線路のわきにあったという。ちなみに，竹ノ内神社の境内には箱式石棺の蓋石が立てられている。これが米崎氏宅にある装飾ある棺材の蓋石であったかもしれない。　（佐藤伸二）

III　装飾ある横穴墓

72. 今村岩の下横穴墓群 （⇨72の１～６図）

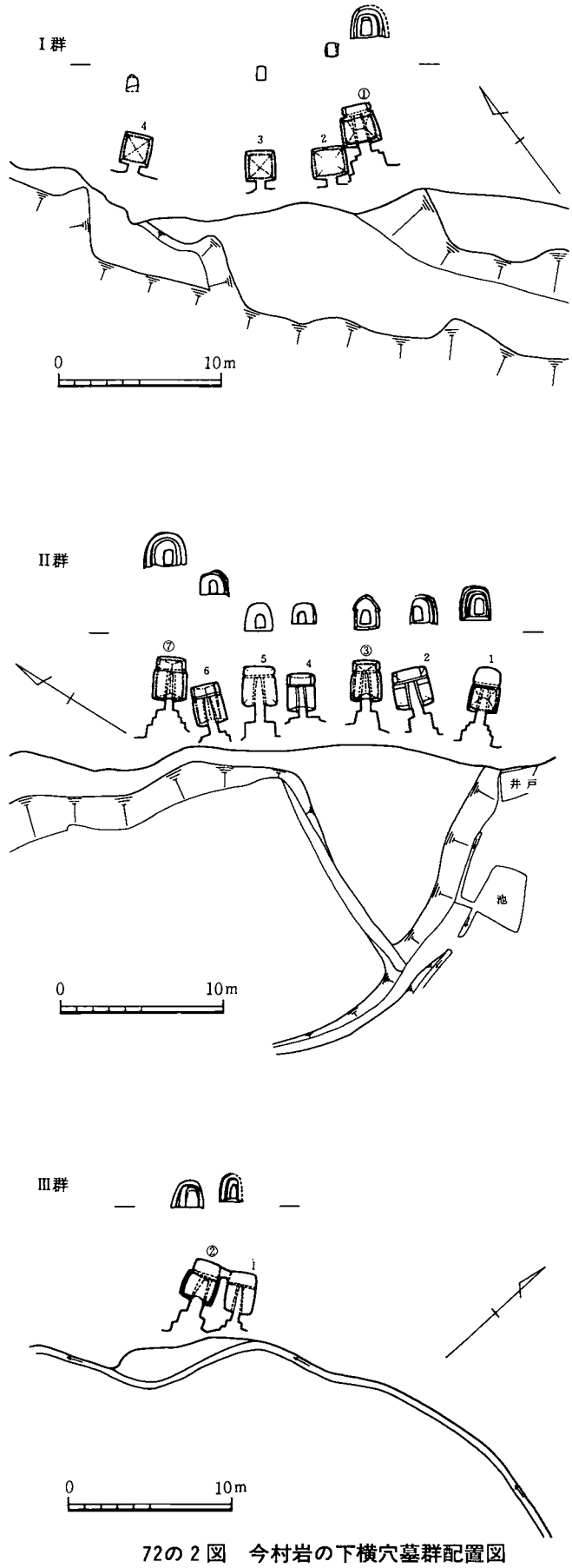
——玉名郡南関町今岩の下——



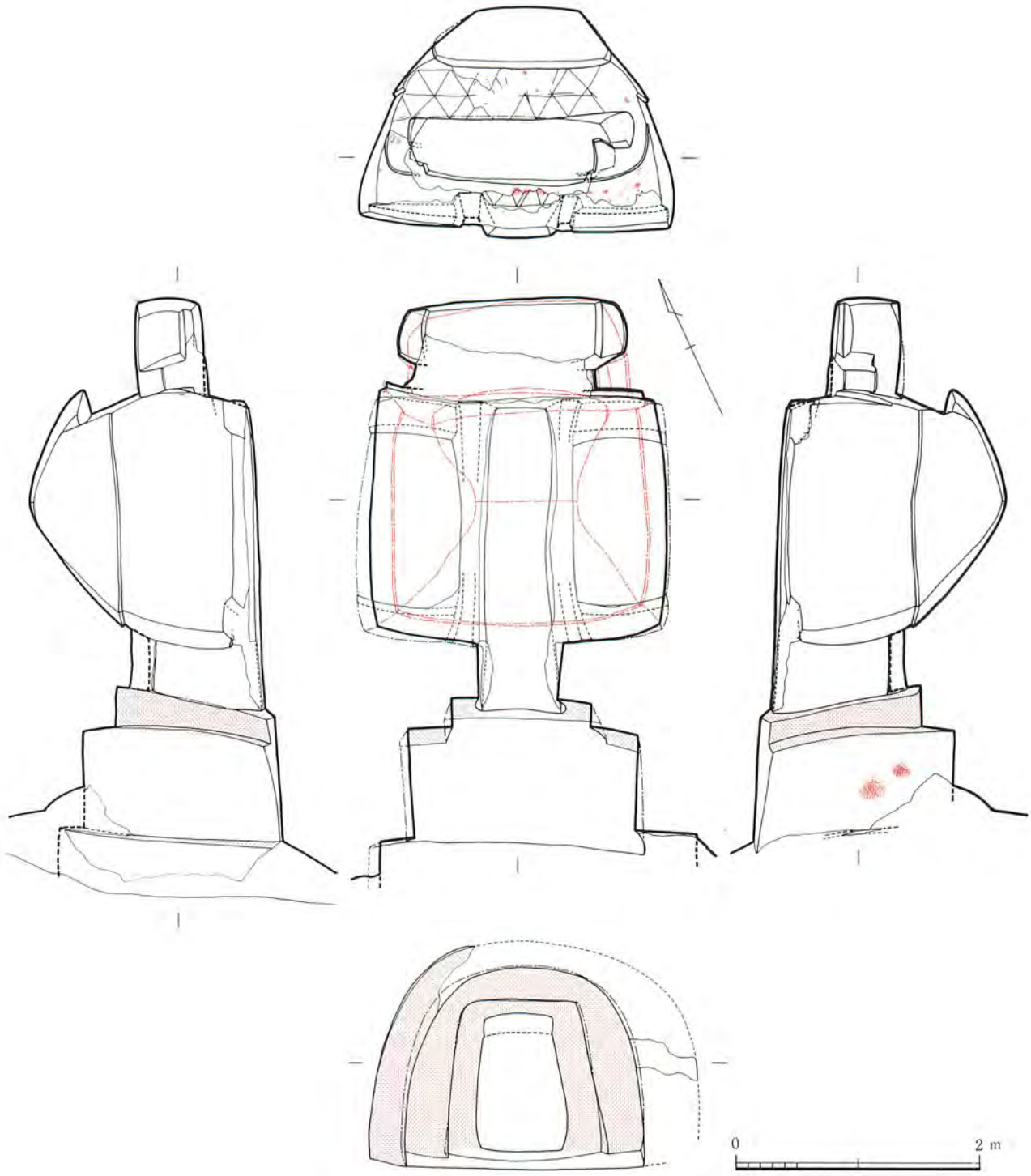
72の１図　今村岩の下横穴墓群位置図(関町2.5万分の１)

立　地　小岱山の北方約4.5kmの地点にある横穴墓群で，福岡県との県境付近を流れる関川を有明海から約12km程逆上ったところの東岸に位置する。周辺には標高80～100m前後の台地が発達しており，本横穴墓群も標高85m程の小台地の南西面，標高45m程のところに造られている。関川流域には凝灰岩崖面も割合に見られるが，横穴墓群は少なく，装飾が確認された横穴墓群はこの横穴墓群のみである。

分布と概要　関川から水田を挟んで100～200m離れて，扇形に弯入した地形の中央部と両端の３ヵ所に分布する。右側から順にⅠ～Ⅲ群とする。Ⅰ群は４基，Ⅱ群は７基，Ⅲ群は２基からなり，各々の右端を１号とする。Ⅰ群からⅢ群までの距離は250mを測る。Ⅰ群はいずれも羨門が方形で，１号は左右と奥に屍床をつけたいわゆる「コ」の字形の屍床配置を成すが，他の３基の屍床は方形で平坦である。天井はほぼ寄せ棟の家形を呈している。Ⅱ群は全て羨門がアーチ形で飾り縁も見事である。屍床はいずれも「コ」の字形であるが，奥屍床の造りや天井構造などは様々である。特に天井は寄せ棟の家形，カマボコ形，ドーム形などがみられる。Ⅲ群は２基とも羨門・２重の飾り縁がアーチ形を成している。いずれも「コ」の字形屍床で，１号の天井はドーム形，２号は家形の名残りのあるカマボコ形である。装飾はⅠ群１号，Ⅱ群３号と７号，Ⅲ群２号にみられる。そのほかⅡ群の中には飾り縁の全面に赤色顔料を塗ったものが数基見られる。

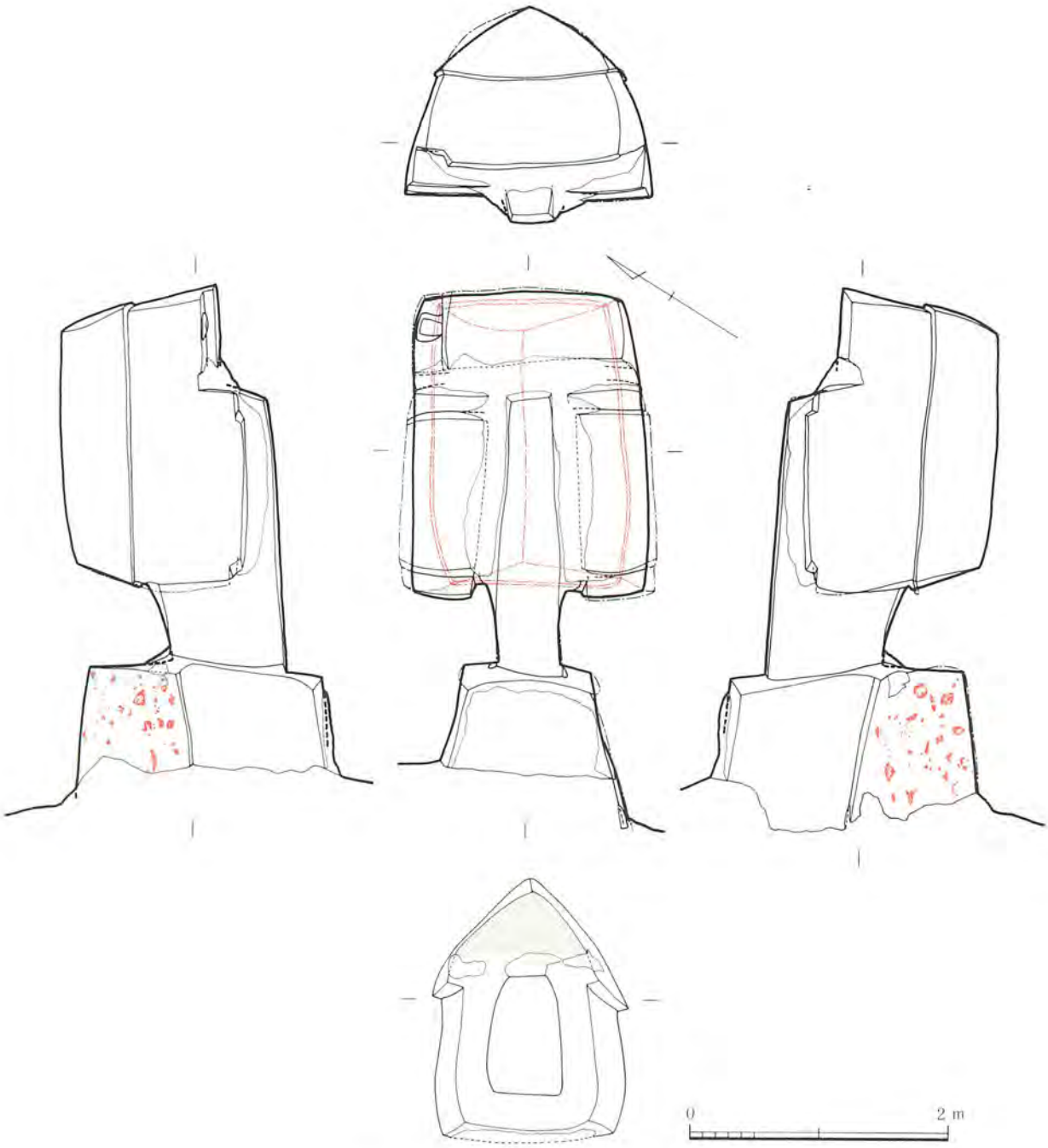


72の２図　今村岩の下横穴墓群配置図



72の3図　今村岩の下Ⅰ－1号横穴墓実測図

Ⅰ－1号横穴墓　Ⅰ群の中で最も大きく，複雑に造られた横穴墓である。羨門は後世に上部を拡張しているが，長方形で幅76cm，高さ約95cmであったことがわかる。羨門の外に三重の飾り縁が付いている。内側から第1の飾り縁は上部両隅にやや丸みをもつが方形で，幅 134cm，高さ 131cmを測る。第2の飾り縁はアーチ形で，幅 199cm，高さ 163cmを測る。第1の飾り縁の内壁は短かいが，第2の飾り縁の内壁は長い。第3の飾り縁は崩れているが，やはりアーチ形で復元すると幅約 270cm，高さ 185cmと考えられる。羨道は第2の飾り縁のところまで残っており長さ 100cmある。羨道と内部に通じる通路との間（羨門部）には8cmの段差がついている。羨門から玄室までは52cmを測る。屍床の仕切りは後世に破壊されているが，「コ」の字形で，各屍床とも両端に造り付けの枕がある。奥屍床を除いた部分の平面プランは横長の方形で幅 260cm，奥行き 195cm，高さ 185cmを測る。天井は寄せ棟で妻入りの家形である。奥屍床は石屋形状で，上部には庇をつくり，仕切りには内側に反った凸起をつけ，その仕切り全体をすくうように段差をつけて表現したゴンドラ形の面が走っている。奥屍床の大きさは奥に約50cm，横に 190cmを測り，天井は平担で，



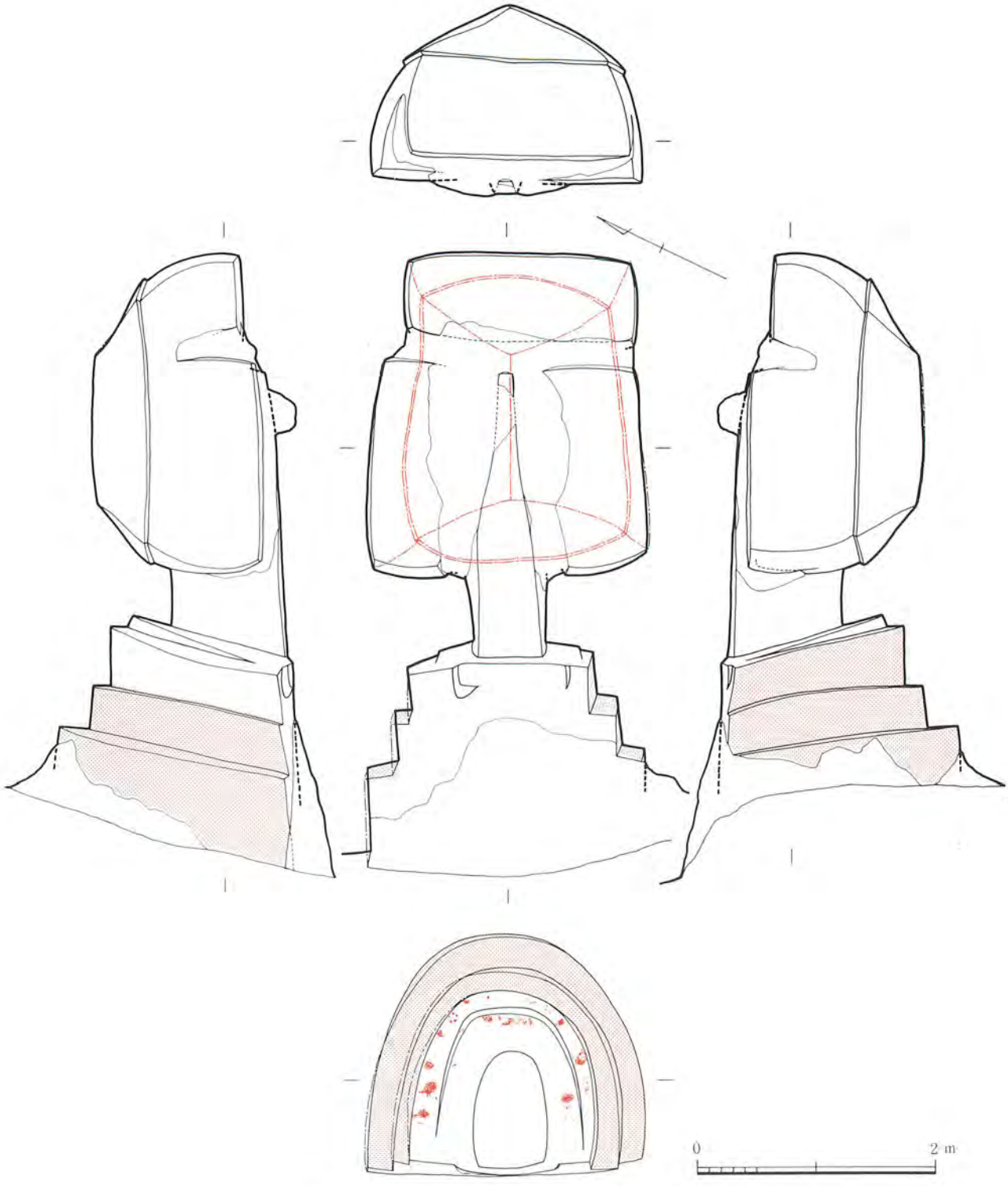
72の4図　今村岩の下II－3号横穴墓実測図

高さ55cmを測る。なお玄室全体の奥行きは 276cmを測る。

装飾は第2の飾り縁と奥屍床の前面にみられる。羨門部の外面，第1飾り縁の内面と外面，第2飾り縁の外面は全体が赤く塗られているが，第2飾り縁の右壁には部分的に赤く塗られている。形状がはっきりしないが、不正形の円文のようなものが2個描かれているようである。

奥屍床の前面の装飾は上部の庇と，仕切りの中央下部の2ヵ所にみられる。庇は幅40cmで，横に帯状になっており，この中央に横線を引き，その上下に連続三角文を並べている。庇の右端部には施文されない所があるが，左端はいっぱいまで施され，一部は左側の袖状のところまで下って施されている。この線刻文のほかに赤の彩色が部分的に残っているが三角文が塗り分けられていたかどうか不明である。奥屍床仕切り中央部の下の装飾は左右仕切りの奥の部分に挟まれたところに見られ，上から下に向かった連続三角文が3個線刻されている。このうち右から2個の三角とほぼ対応するように赤の彩色が見られる。なおこれらの三角文の下端にも一本の横線が引かれている。このほか赤の彩色は奥屍床仕切りの凸起や右屍床の奥面などにも部分的に残っている。

II－3号横穴墓　飾り縁の形態の特異な横穴墓である。羨門の正面観はアーチ形で，幅60cm，高さ90cmを測る。飾り縁は両壁に軒先線，天井に棟線がある家形を成している。このような飾り縁はこの群では本例のみであるので、複室，の前室かとも考えたが，全体が外開きになっていること，横穴墓の前があまり崩れていないことなどからやはり飾り

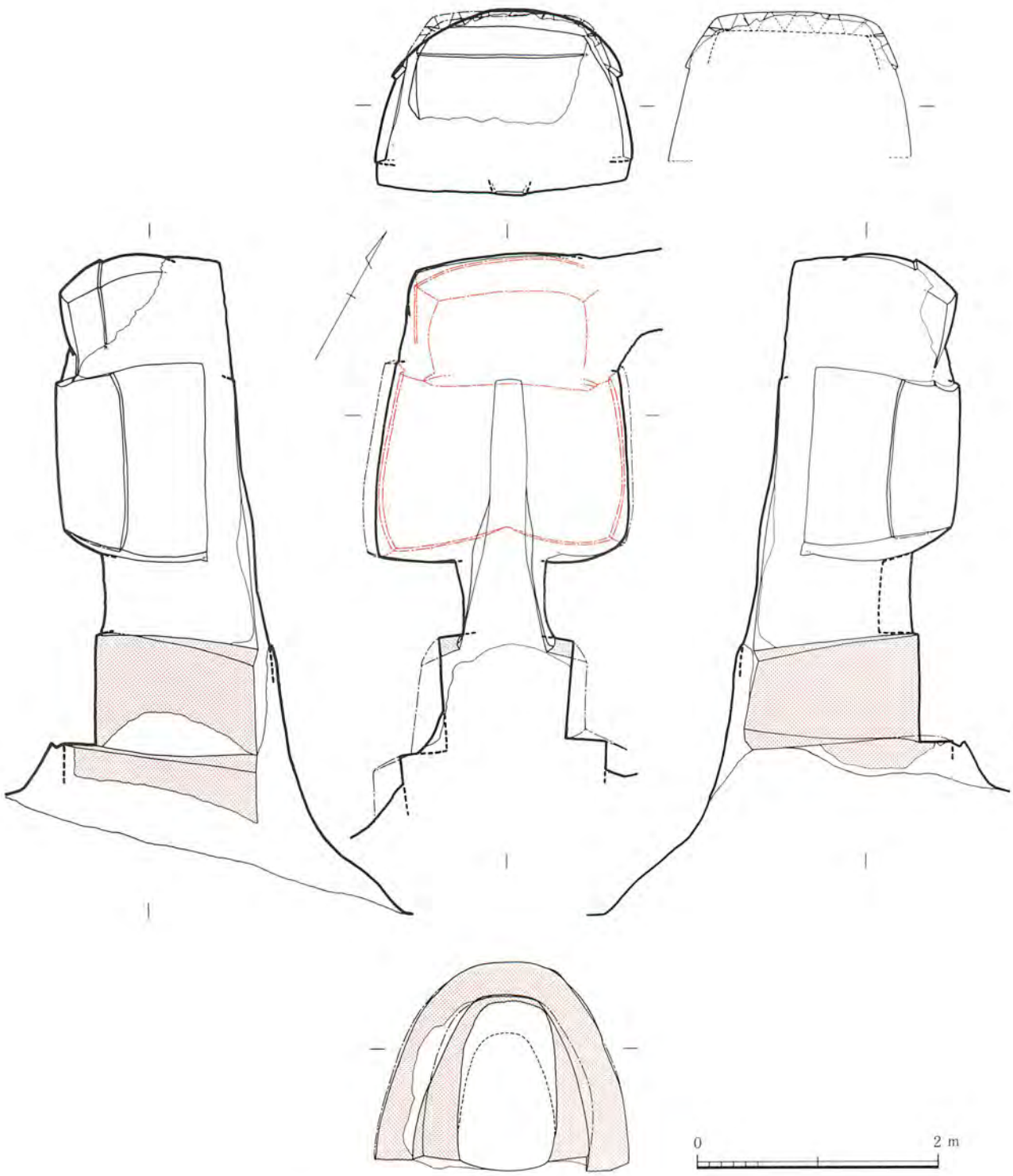


72の5図　今村岩の下II－7号横穴墓実測図

縁であるのは間違いない。この飾り縁は幅150cm，高さ200cmを測る。羨道の長さは70cm程確認でき，羨道と羨門とは28cmの段差がついている。羨門から玄室までは65cmある。玄室は仕切りが壊されているが「コ」の字形屍床と成っている。平面プランは奥に長い長方形で，幅 202cm，奥行き 240 cm，高さ 165cmを測る。左右屍床には各々両端に枕がついている。奥屍床は左右の屍床よりも約25cm高く，左側にのみ枕があり，中央部を凹めてある。天井は切り妻に近い家形で，妻入りとなっている。

羨門の外面の上部は赤く塗られているが，屋根に挟まれているので大きな三角形となっている。飾り縁内面（羨道側面）の屋根の部分は点々と赤色顔料が認められるが，風化が激しく何が描かれていたか不明である。塗られていない部分もあるので文様であったと考えられ，円などが沢山描かれていた可能性が強い。

II－7号横穴墓　II群で最も左，最も高い所にある横穴墓である。外部の保存は良いが，玄室内の仕切りは完全に壊されている。羨門はアーチ形で，幅63cm，高さ97cmを測る。羨門の外面に上部だけ明瞭な段のついたアーチ形の飾り縁状のものがある。これは閉塞石を立てかけるために造られ



72の6図　今村岩の下Ⅲ－2号横穴墓実測図

たものと考えられる。なお羨門の下には閉塞石の根元を安定させるため幅100cmの範囲を少し掘り凹めてある。さらにこれらの外に3重の飾り縁がついている。いずれもアーチ形で，内側から第1の飾り縁は幅 160cm，高さ 153cm，第2の飾り縁は幅 192cm，高さ 175cm，第3の飾り縁は幅 234 cm，高さ 205cmを測る。羨道の長さは約 170cmを測る。羨道と羨門の間には5cmの段差がついている。羨門から玄室までは約75cmを測る。玄室の平面プランは長方形に近いが，奥がやや狭くなっている。破壊された屍床を復元すると，通路は奥に向かって非常に細くなっており，最奥部は12cm程しかない。各仕切りとも両端が反り上がった痕跡があり，ゴンドラ形になっていたものと考えられる。各屍床は平坦で，左右屍床よりも奥屍床が15cm程高く造られている。天井は寄せ棟妻入りの家形である。玄室の幅 240cm，奥行き 270cm，高さ 155cmを測る。

第1飾り縁と第2飾り縁の内外面と第3飾り縁の内面は全面が赤く塗られているが，羨門の外面は赤の文様となっている。閉塞石用の段差の外側にはほぼ等間隔に赤の大きな点が並べてあり，不正形ではあるが円文を意図しているものと考えられる。段差の内側には，復元すると羨門上部

に，赤い帯状の線を横に引いていたようである。羨門右側には円文らしいものも残っている。その他，玄室内の壁面全体に薄い赤が塗られていたようである。

Ⅲ－2号横穴墓　Ⅲ群は2基からなるが，1号が2号よりも単純な造りであるので後で造られたものと考えられる。2号横穴墓は後世に大きく改造し破壊されている。羨門は拡張され，玄室内の各屍床は通路面まで掘り下げられている。しかしその痕跡よりある程度復元が可能である。羨門はアーチ形で幅82cmで，高さは 115cm程度であったと考えられる。羨門の外に二重の飾り縁がついている。いずれもアーチ形で，第1飾り縁は幅 148cm，高さ約 150cm，第2飾り縁は幅 215cm，高さ約 180cmを測る。羨門外面から第1飾り縁の内外面，第2飾り縁の内面までは全て赤く塗られている。羨門から玄室までは約70cmを測る。屍床は復元すると「コ」の字形になるが，奥屍床のみは壁面，天井とも独立している。奥屍床を除く部分は，幅 227cm，奥行き約 160cm，高さ 150cmを測る。天井は妻入りの切妻に近い家形を表現しているが，棟の線はなく，全体形はカマボコ形を成している。奥屍床は石屋形状に造られており部分的にその痕跡が残る。左右の袖状の部分よりも上部の方が一段張り出しており庇を表現したものであろう。しかしその上方の天井との間の抉りはない。奥屍床の天井は平坦で，やや前方に下がっているが，奥の高い部分の陵線が入り，その下方に軒先の表現があるので，平入りの家形を表わしているものと考えられる。なお奥屍床まで含めた玄室の奥行きは 253cmを測る。内部は煤が付着しているが，奥壁や左壁などに赤い彩色が確認でき，少なくとも軒先線よりも下部は全面やや薄い赤色で塗られていたものと考えられる。

奥屍床の前面の上方に線刻文が認められる。庇の表現とみられる部分全体にみられ，連続三角文が並んでいる。さらにそれは両側の袖石状の部分にまで及んでおり，最下部は右屍床の壁面軒先のところまで確認できる。彩色もあったと思うが現状ではわからない。

出土遺物　須恵器（坏身片，広口壺口縁部片，甕胴部片），土師器（丹塗磨研の高坏脚部片）。いずれも横穴墓付近で坂本経堯氏と三島格氏が採集。

備　考　昭和59年（1984）2月，坂田和弘氏（県文化課嘱託）によってⅠ－1号に線刻文があるのが確認され，同年3月，坂田氏と筆者らの実測調査の際さらに3基に装飾があるのを発見した。（高木正文）

〔参考文献〕
①三島格「肥後の須恵器資料（一）」『熊本史学』21・22
昭和36年（1961）

72の7図　今村Ⅰ－1号横穴墓外観

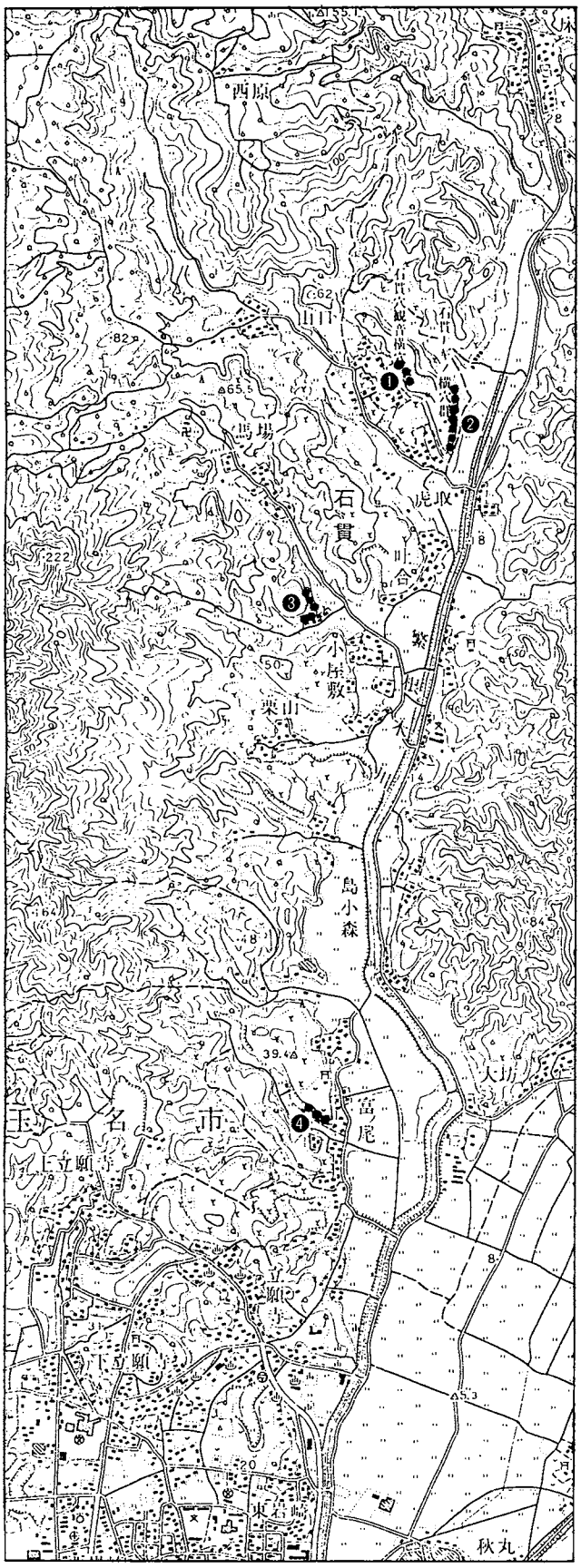
72の8図　今村横穴墓Ⅱ群近景

72の9図　今村Ⅱ－3号横穴墓外観

73. 石貫穴観音横穴墓群（いしぬきあながんのん）〔大正10年国史跡〕

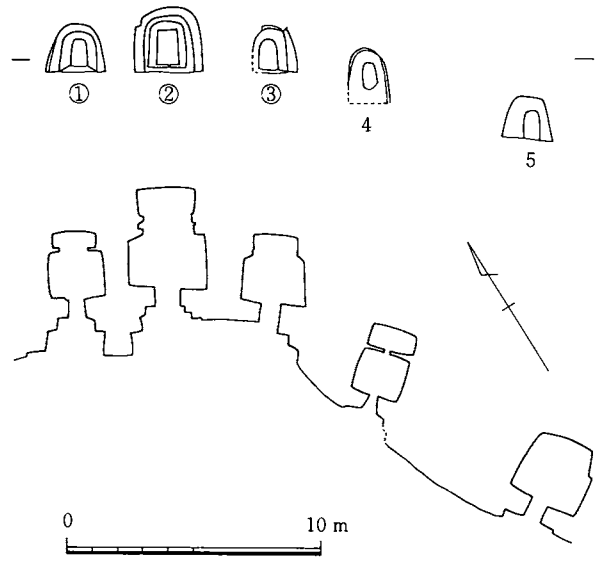
（⇨73の１～６図）

——玉名市石貫安世寺——



73の１図　繁根川流域装飾横穴墓群位置図（玉名2.5万分の１）

１ 石貫穴観音　２ 石貫ナギノ　３ 石貫古城　４ 原



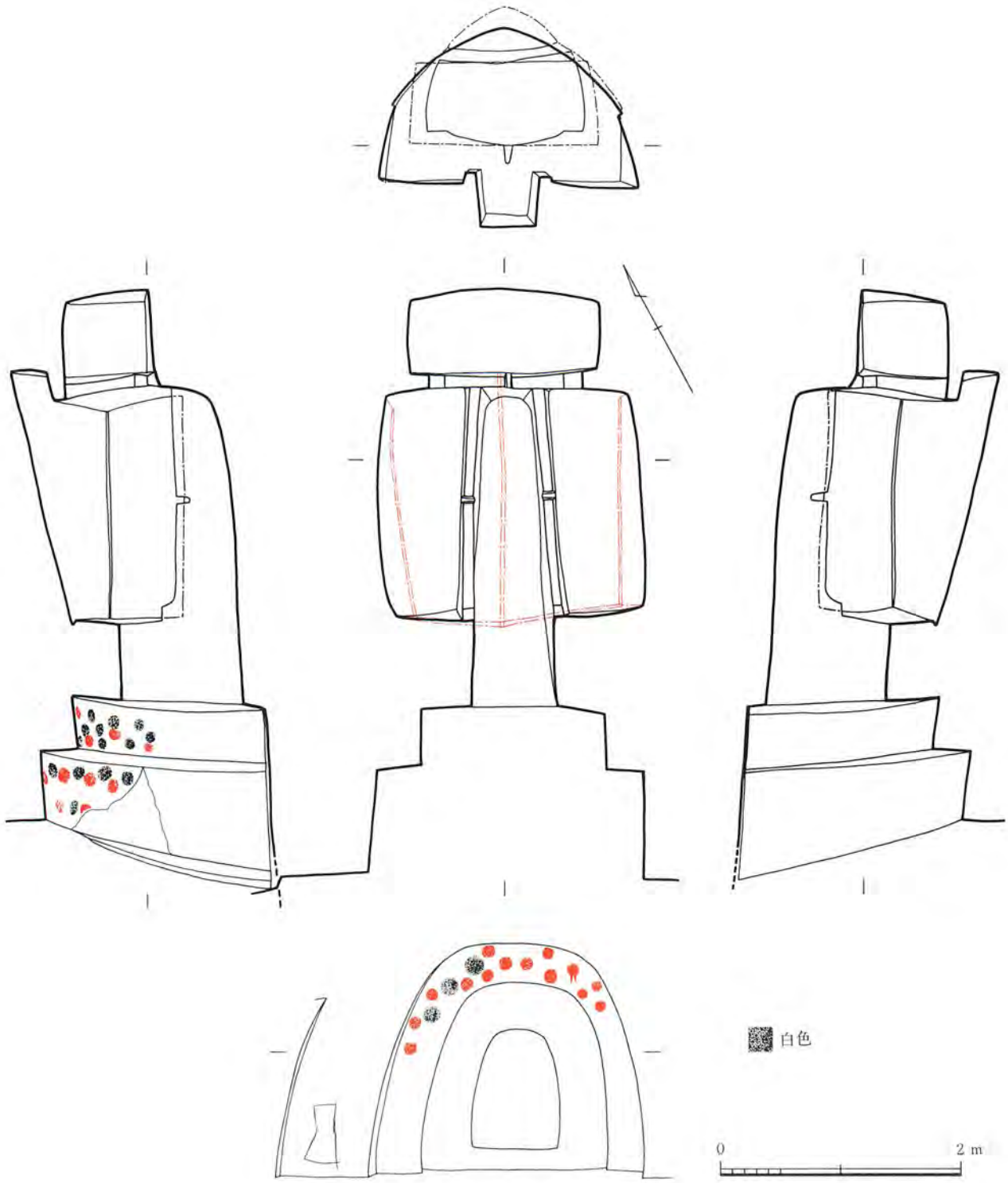
73の２図　石貫穴観音横穴墓群配置図

立　地　菊池川支流繁根木川沿いには，各所に阿蘇凝灰岩の露頭がみられ，そこに横穴墓が造られている。なかでも石貫穴観音横穴墓群と石貫ナギノ横穴墓群は最も宏壮（こうそう）である。小岱山東麓に続く舌状台地の南西斜面の標高約30ｍのところに石貫穴観音横穴墓群があり，眼下に小集落と田畑を見降している。

分布と概要　石貫穴観音横穴墓群は22ｍの範囲に５基を確認することができる。このうち左から数えて１～３号の３基はあたかも三尊仏のように並んでいる。その中央の横穴墓は奥壁に千手観音像が彫られているところから，穴観音とよばれ，古くから地域の人々の信仰を集めている。５基とも「コ」字形に屍床が配置されており，１号から３号が装飾横穴墓である。

１号横穴墓　羨門はアーチ形で幅70cm，高さ100cmを測る。羨門の外にやはりアーチ形をした二重の飾り縁がつき，左側は一部三重になっている。内側から第一の飾り縁は　幅155cm，高さ160cmを測り，第二の飾り縁は幅230cm，高さ185cmを測る。羨道の長さは150cmを測り，羨門部で15cm程の段が造られている。羨門から70cmで玄室に至る。玄室は幅220cm，奥行270cm，高さ160cmを測る。奥屍床を除く部分の平面プランは方形を成し，天井は切妻の家形で棟は奥に向かって上がっている。奥屍床は左右屍床よりも20cm程高く，床面・天井とも平坦で，仕切りは「ゴンドラ形」の表現の名残りがみられる。またその上方には庇があり，奥屍床全体が石室形状を成している。なお奥屍床には後世に五輪塔が入れられている。

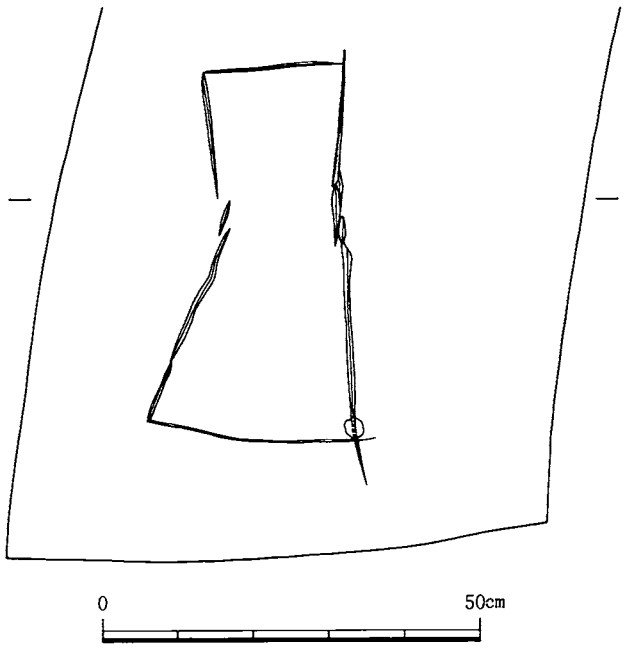
装飾は飾り縁にみられる。内側から第一の飾り縁の内面とその外面および第二の飾り縁の内面には赤と白の円状の点を配置している。また第二の飾り縁の左外面には線刻陰



73の3図　石貫穴観音1号横穴墓実測図

刻で盾が描かれている。この盾は描き方がやや粗いが，やや上方がくびれており，幅28cm，高さ49cmを測る。

2号横穴墓　位置的，構造的にこの横穴墓群の中で中心的な存在の横穴墓である。羨門は長方形で，幅85cm，高さ120cmを測る。羨門の外には三重の飾り縁がつき，内側から第一の飾り縁は方形であるが，第二飾り縁，第三飾り縁と次第にアーチ形になっている。第一飾り縁は幅・高さとも150cmで，第二飾り縁は幅・高さとも約190cmを測る。第三の飾り縁は上方が壊れているが幅約260cmで，高さは約230cmあったと推定される。羨道の長さは約200cmで，第一の飾り縁のところと羨門部で段がついている。また羨門から内側には段下がりになっているため，この部分には外へ通じる排水の溝が掘られている。羨門から80cm程で玄室に至る。玄室は幅300cm，奥行370cmを測る。奥屍床を除く部分は奥行200cmで，横長の長方形プランである。左右の屍床の仕切りはゴンドラ形で，側面から見ると浮き彫りになっている。仕切りの中央部下方には排水の穴が抉られている。左右屍床の上方には庇があり，同じレベルで入口側にも庇が



73の4図　石貫穴観音1号横穴墓第二飾り縁の盾線刻文実測図

ある。そのさらに上方は切妻の家形をした天井となっている。通路から天井までの高さは約250cmである。奥屍床は後世にやや改造されているようであるが，断定することが難しく，通常仕切りのあるべき位置より外にも平坦面と仕切りが造られている。またその仕切りの左右の中段には平坦面があり，灯明台のようである。奥屍床面が奥壁と左右壁に接した部分を残して掘り下げられているのは後世に改造を受けているためであろうか。奥屍床の前面上方には左右の屍床の庇よりも高い位置に庇があり，庇の上に円形の浮き彫り5個が等間隔に並んでいる。見方によってはこれが軒丸瓦の表現にも見え，また垂木の表現にも見える。

装飾は飾り縁と玄室内の仕切り・庇・奥壁に認められる。飾り縁の装飾は第一飾り縁と第二飾り縁の外面にみられるが，彩色が薄れているため調査者によって異なった文様に実測されているが，筆者の調べたところによると第一飾り縁の外面には等間隔に白色の円文が並び，その間を赤の彩色が取り囲んでいる。左側では赤の彩色のみしか確認できないが，本来は赤の中に白色の円文があったものと考えられる。第二飾り縁の外面にはその左上方に赤の円文を囲んだ白の環状彩色があり，その下方には赤の環状文が並んでいる。同飾り縁の右下部にも赤の彩色があるが文様の形状は不明である。また1号横穴墓と2号横穴墓の間の外壁には靱の下方を表したような陰刻があるが，その上方の面は後世に削られたのではないとみられるので，靱の残存ではないと考えたい。しかしこの陰刻が何であるか，当時のものか，後世のものか決しがたい。

玄室の仕切りの装飾は，先述したように左右の仕切り自体がゴンドラ形船を表現した壮大な浮き彫りで浮き彫り面全体が赤く塗られている。また奥屍床仕切りの前面の上縁付近も赤く塗られており，通路床面も赤く塗られている。

玄室の庇のうち入口側の庇の側面には線刻による連続三角文がみられる。また奥屍床上方の庇は前面が赤く彩色されており，先述のようにその上に円形の浮き彫りが5個並んでいる。

奥壁には中央よりいくぶん左寄りに千手観音の立像の浮き彫りが見られる。この浮き彫りが横穴墓築造時のものであるかどうかは判断が難しい。一説では横穴墓の築造年代を下降させ庇の円形浮き彫りを軒丸瓦の表現でとみて，千手観音像を当初からのものとする考えがある。他方庇の円形浮き彫りは垂木の表現などとも見ることができ，千手観音像が奥壁面の完成後，彫られているので当時のものとする見方に否定的な意見もある。筆者にもどちらか判断できないが，この横穴墓はその構造や造られた位置からこの横穴墓群で初期に造られた横穴墓と推定しているので，後者の可能性が強いのではないかと考えている。なお奥屍床には別に千手観音の座像の石彫一つも安置されている。

また奥壁の右側には細線による梯子状の線刻がある。その中央からは上方に二条の平行直線が伸びているが何を描いたものか不明である。

3号横穴墓　羨門はアーチ形で幅80cm，高さ120cmを測る。羨門の二重の飾り縁がつくが左側は壊れている。内側から第一の飾り縁は幅約170cm，高さ約180cmあり，第二の飾り縁は幅250cm程あったものと考えられるが，上部はもともと造られていなかったものと考えられる。羨道の長さは130cm程あり，羨門部で10cm程段上がりになっている。羨門から120cm程で玄室に至る。玄室は幅250cm，奥行き280cm，高さ190cmで，奥屍床を除いた部分の平面プランは横長の長方形で奥行き180cmである。この部分の天井は切妻の家形である。奥屍床の天井も軒先の表現もあり，切妻の家形を思わせるが，上面は平坦に近い。

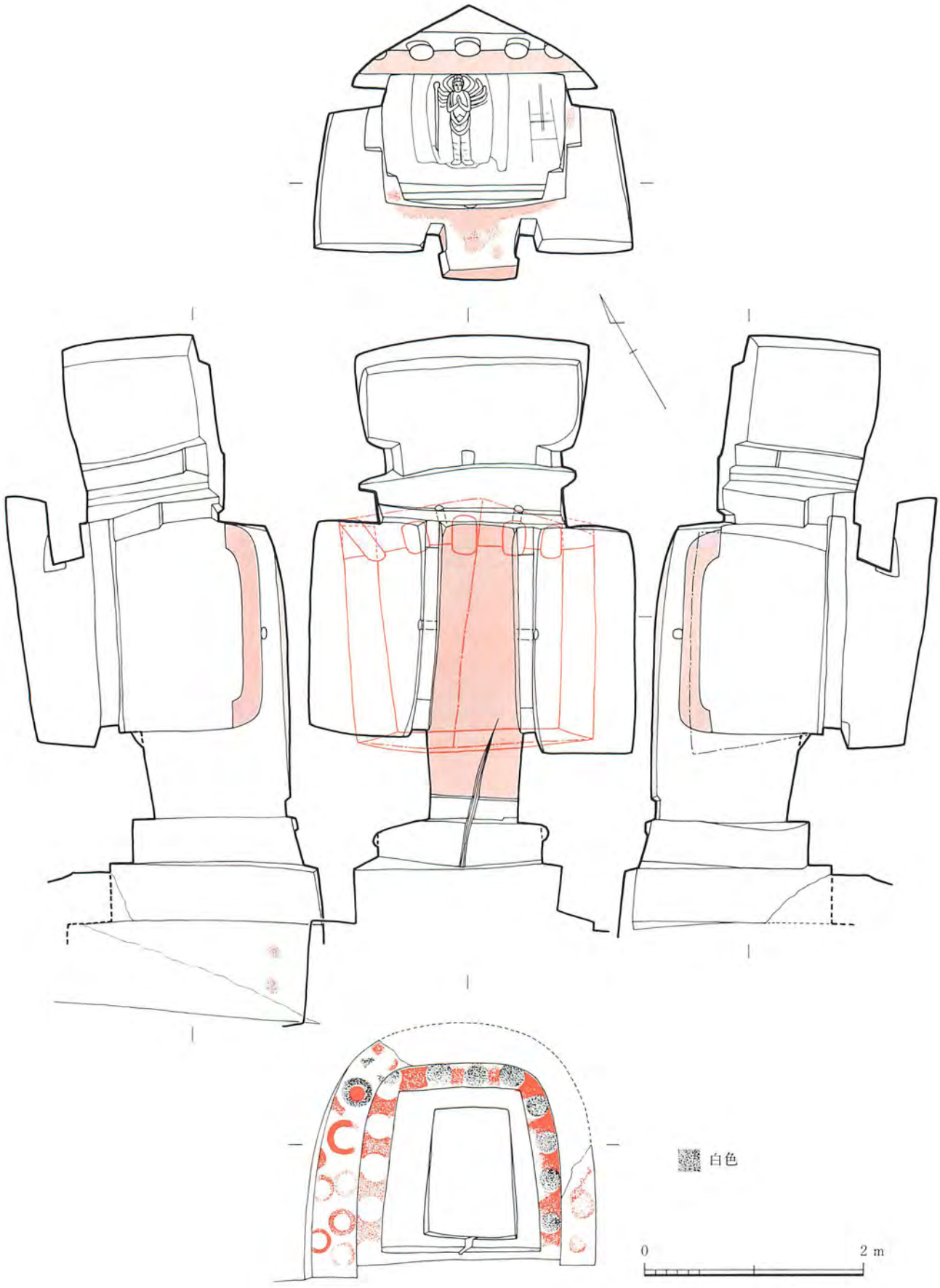
奥屍床と左右屍床の仕切りはゴンドラ形の船を表現してあり，通路から見るとその部分全体が浮き彫りになっている。また船の浮き彫りの部分を赤く塗っている。これは明らかに装飾に含めるべきものである。その他，羨門の外面から飾り縁にかけても全面が赤く塗られている。

出土遺物　不明

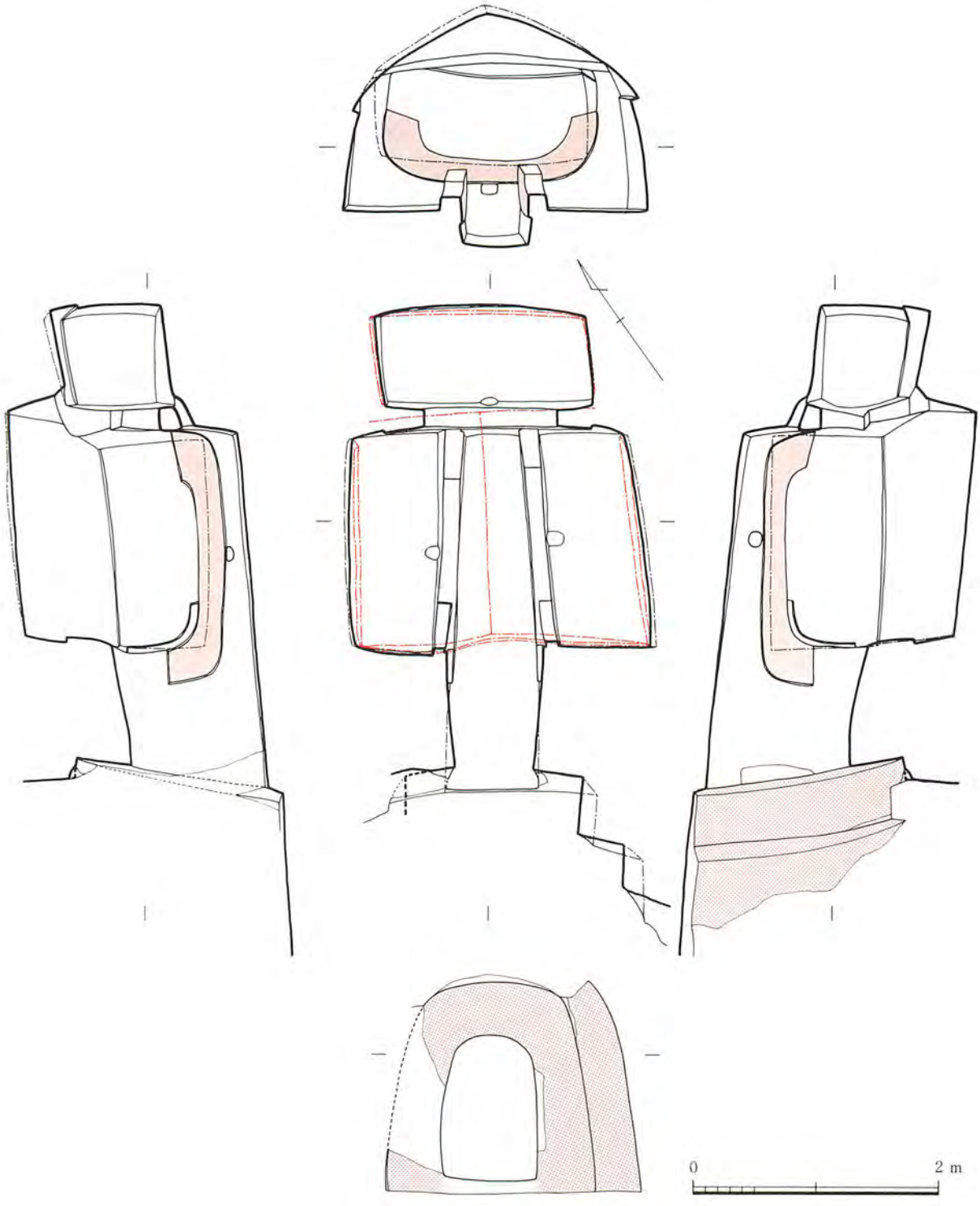
備　考　大正6年（1917）京都帝国大学浜田耕作氏により実測調査（文献①）昭和54年（1979）熊本大学考古学研究室により実測調査（文献⑫）　（高木正文）

〔参考文献〕

①浜田耕作「玉名郡石貫村の横穴群」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』（京都帝国大学文化大学考古学研究報告第一冊）P64－79　大正6年（1917）
②『熊本県史蹟名勝天然記念物概要附國寶其他』熊本県　昭和12年（1937）
③乙益重隆「熊本県の文化財」『郷土の文化財』13　宝文館　昭和35年（1960）　東京
④松本雅明「肥後石貫穴観音古墳の彫刻—大陸文化の浸透と古墳成立の時期—」『考古学雑誌』第45巻第4号　昭和35年（1960）
⑤乙益重隆「石貫穴観音横穴群とナギノ横穴群」小林行雄編『装飾古墳』P78　平凡社　昭和39年（1964）
⑥田辺哲夫「穴観音横穴群」斉藤忠編著『日本原始美術5　古



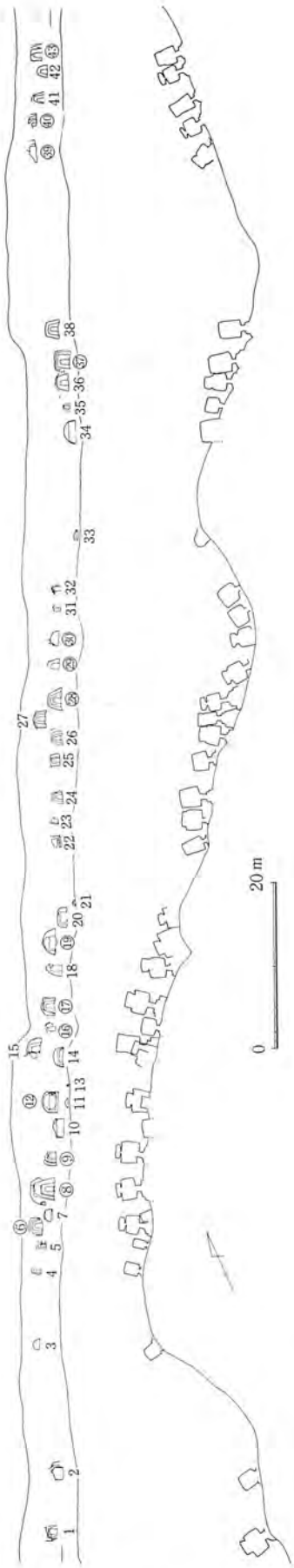
73の5図　石貫穴観音2号横穴墓実測図



73の6図　石貫穴観音3号横穴実測図

墳壁画』講談社　昭和40年（1965）
⑦日下八光『装飾古墳』朝日新聞社　昭和42年（1967）
⑧田添夏喜編著『玉名市の文化財第1輯』玉名市教育委員会　昭和45年（1970）
⑨斉藤忠『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1973）
⑩松本雅明「石貫穴観音横穴群」『熊本の装飾古墳』P32－35　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑪『熊本県の文化財』3（史跡）熊本県教育委員会　昭和56年（1981）
⑫西住欣一郎・宮本千絵編『石貫ナギノ・石貫穴観音横穴群』金曜会　昭和55年（1980）

74．石貫ナギノ横穴墓群〔大正10年国史跡〕
（⇨73の１図，74の１～19図）



74の１図　石貫ナギノ横穴墓群配置図

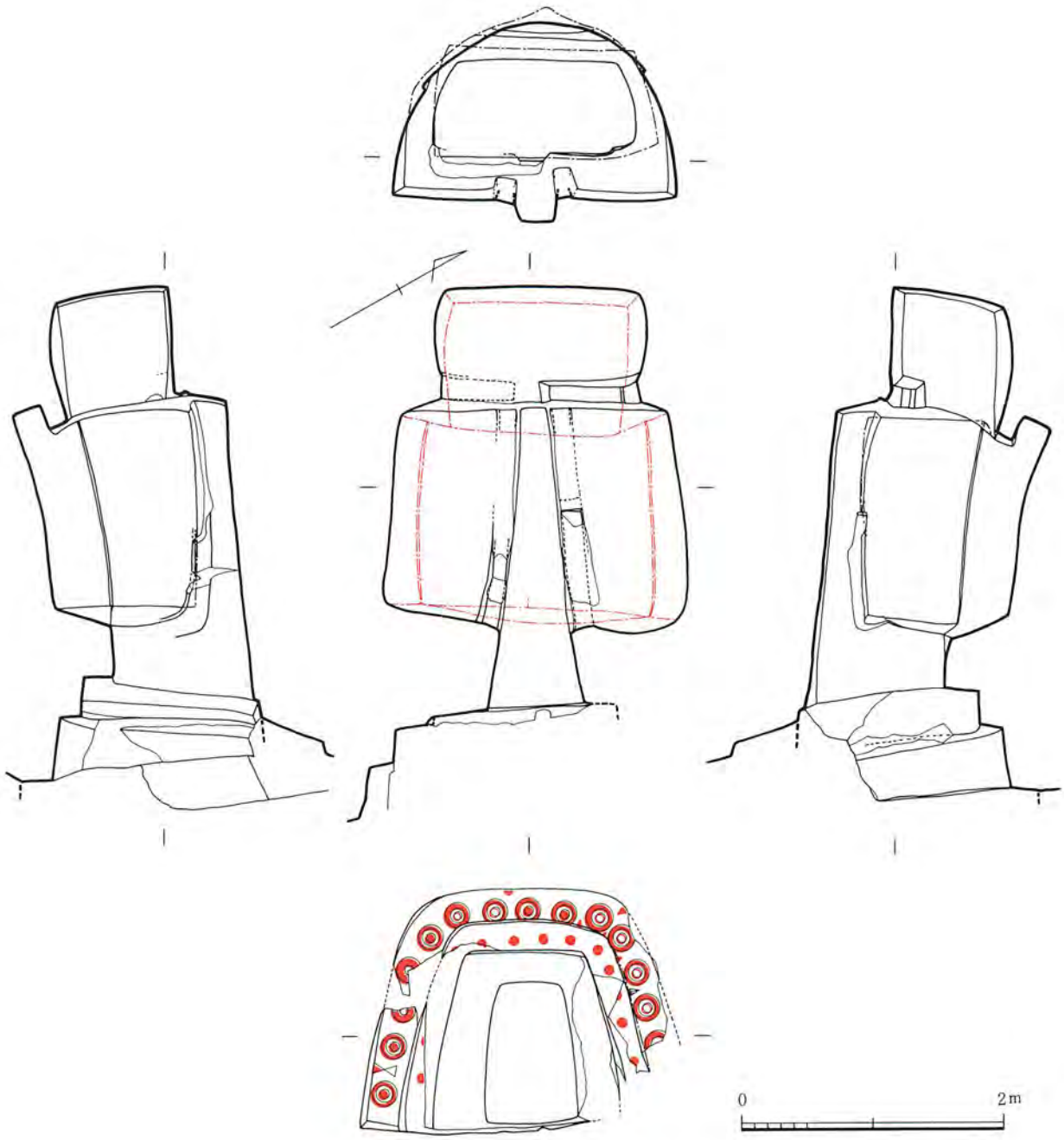
立　地　小岱山の東麓から延びて来た舌状台地の東側阿蘇凝灰岩崖面に石貫ナギノ横穴墓群が造られている。同台地の南西側にある石貫穴観音横穴墓群とは400程離れたところに位置する。

分布と概要　石貫ナギノ横穴墓群の分布範囲は250ｍに及んでいる。大正６年（1917）梅原末治氏の調査で42基確認され，さらに昭和54年（1979）西住欣一郎・宮本千絵氏らの調査で43基確認されたが，両者に数え漏れがあるので，実際には現在48基を認めることができる。左端の山中にはさらに数基埋もれている可能性があり，ここでは混乱を避けるため昭和54年の調査の番号を横穴墓につけ，左から１～43号とし，さらに右にあるもの３基を44号～46号とする。また左端にある２基を右から47号，48号としたい。

なお本文で扱う装飾横穴墓のうち大正６年に番号が付いていたものについてはカッコの中に旧番号を横穴墓名として示すことにする。装飾横穴墓を新番号で示すと６号・８号・９号・12号・16号・17号・19号・28号・29号・30号・37号・39号・40号・43号・45号の15基であるが，１号・24号・26号などの飾り縁も赤く塗られている。

６号横穴墓（旧６号横穴墓）　羨門の正面観は台形状で，幅75cm，高さ105cmを測る。羨門の外に三重の飾り縁が付く。内側から第一の飾り縁も台形で幅約150cm，高さ140cmを測る。第二と第三の飾り縁もほぼ台形であるが，上方の両隅が丸みをもちアーチ形に近い。第二飾り縁は幅約200cm，高さ160cm，第三の飾り縁は幅約250cm，高さ約190cmを測る。羨門のところには５cm程段が付いている。羨門から約60cmで玄室に至る。玄室は「コ」字形屍床であるが奥屍床は石屋形状になっており上部に庇が造られている。左右屍床の仕切りはゴンドラ形舟の彫り込みが確認でき，奥屍床の仕切

74の２図　石貫ナギノ８号横穴墓の石屋形（白石巌撮影）



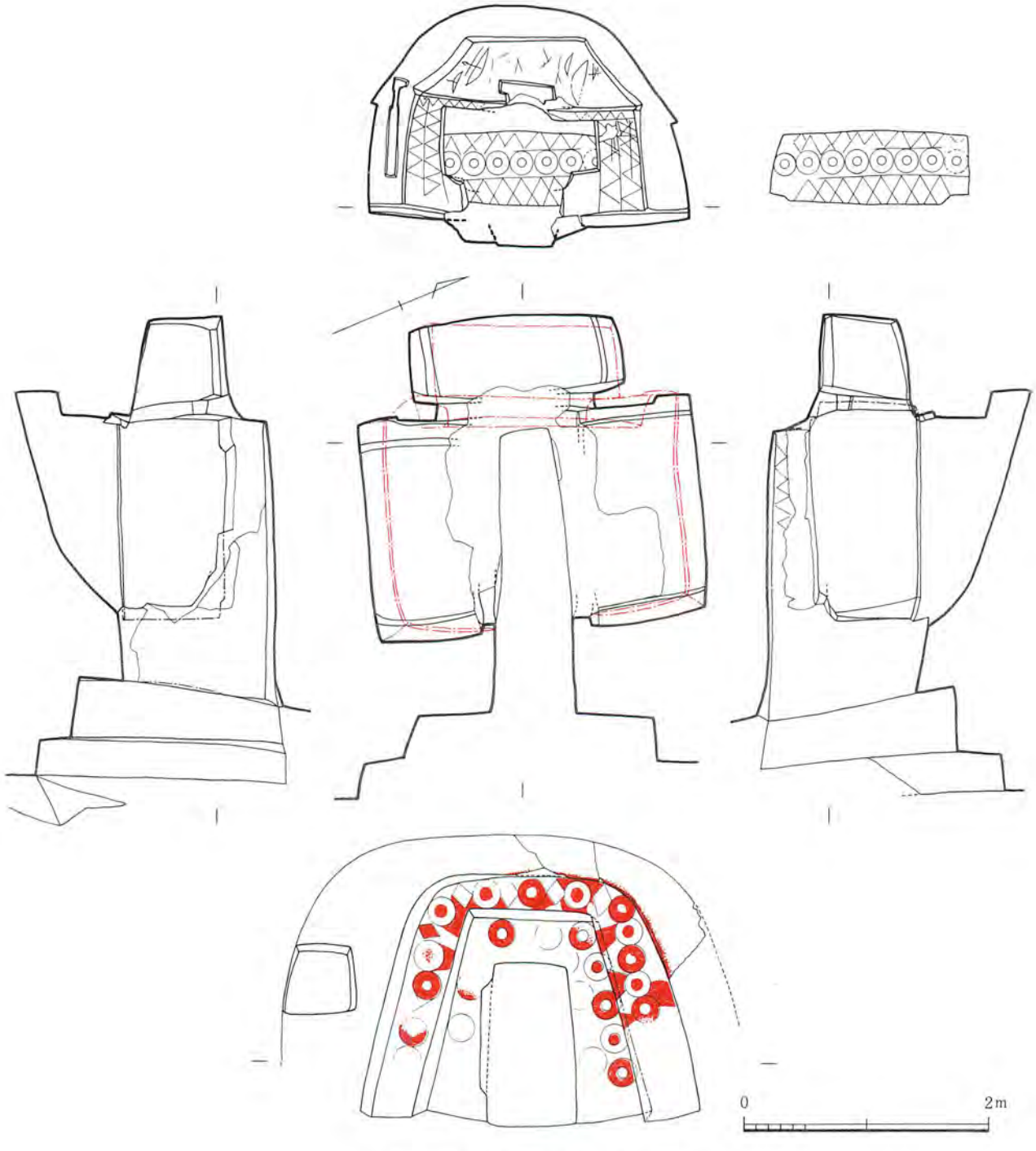
74の3図　石貫ナギノ6号横穴墓実測図

りもゴンドラ形に造られている。玄室の全長は250cmで，奥屍床を除いた部分は奥行170cm，幅230cm，高さ160cmを測る。天井は切妻で妻入りの家形で奥が高くなっている。奥屍床の天井はほぼ平坦である。

装飾は第一飾り縁と第二飾り縁の外面にみられる。第一飾り縁の外面には赤の小円文が等間隔に並べて描かれている。第二飾り縁の外面には細線で三重の同心円文を等間隔に並べ，それを赤で彩色している。またその間に小三角文を配している。

8号横穴墓（旧7号横穴墓）　羨門は長方形で幅75cm，高さ130cmを測る。その外に三重の飾り縁が付き，内側から第一飾り縁は台形で幅190cm，高さ約180cmを測る。第二飾り縁と第三飾り縁はアーチ形で，第二飾り縁は幅280cm高さ約200cmを測る。第三飾り縁は復元すると幅約390cm高さ約240cmを測る。なお第二飾り縁の左外面の高さ約90cmの所には幅60cm，高さ55cm程の四角の浅い掘り込みがある。横穴墓に伴うものとみることができるが機能は不明である。羨門から80cm程で玄室に至る。玄室のうち奥屍床を除いた部分は横長の長方形で奥行170cm，幅270cmを測る。左右屍床の仕切りは破壊されており，各屍床には両側に造り付けの枕がある。天井は軒先をもつが，棟の表現はなく，上部はカマボコ形に近く，奥に向かって上がっている。通路から天井までの高さは200cmを測る。玄室の全長は250cmである。奥屍末にも両側に造り付けの枕がある。

装飾は羨門部と第一飾り縁，玄室内の右屍床，奥屍床の石屋形前面と奥壁にみられる。



74の4図　石貫ナギノ8号横穴墓実測図

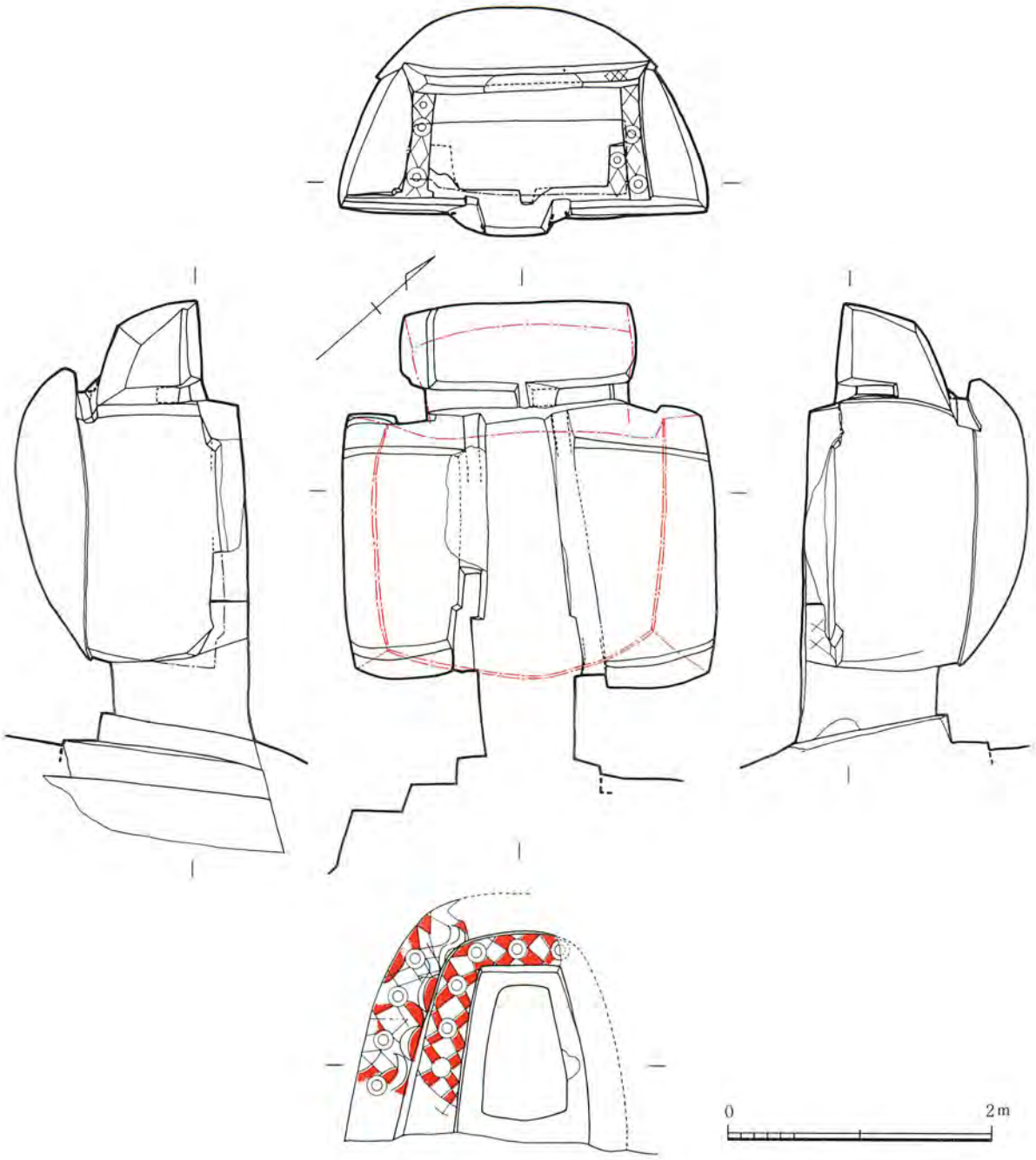
羨門の外面には細線で二重の同心円文を並べ，それを赤で塗り別けている。第一飾り縁の外面にも細線による二重の同心円文を並べ，その間にやはり細線で菱形文などを描き，赤で塗り別けている。

玄室内の右屍床の仕切りは壊れているが，通路に面した下部がかろうじて残っており，ここに線刻で連続三角文(鋸歯文）が認められる。なお，これに対応する左屍床の仕切りにも同様の文様が描かれていたものと推定されるが，破壊されている。

奥屍床前面の石屋形の柱石には各々中程を縦線で仕切り，その両側に縦方向の連続三角文を線刻している。また石屋形の軒の下にも横方向の細かな連続三角文を線刻している。石屋形の屋根には弓に矢をつがえた図と形体不明のものが雑然と線刻してある。

石屋形の柱石部と玄室左壁との間の小壁面には1個の刀が浮き彫りされている。柄を上にしており，長さ81cmを測る。柄頭は方形であるが，頭椎大刀の一種と考えられる。

石屋形（奥屍床）の奥壁には線刻文がみられる。壁面を横線2本で区画し，上段に連続三角文，中段に8個の二重円文，下段に「×」に交わる直線を並べて描いた菱形文を配置している。この奥壁の文様と羨門・飾り縁の文様とは共通性が見られる。



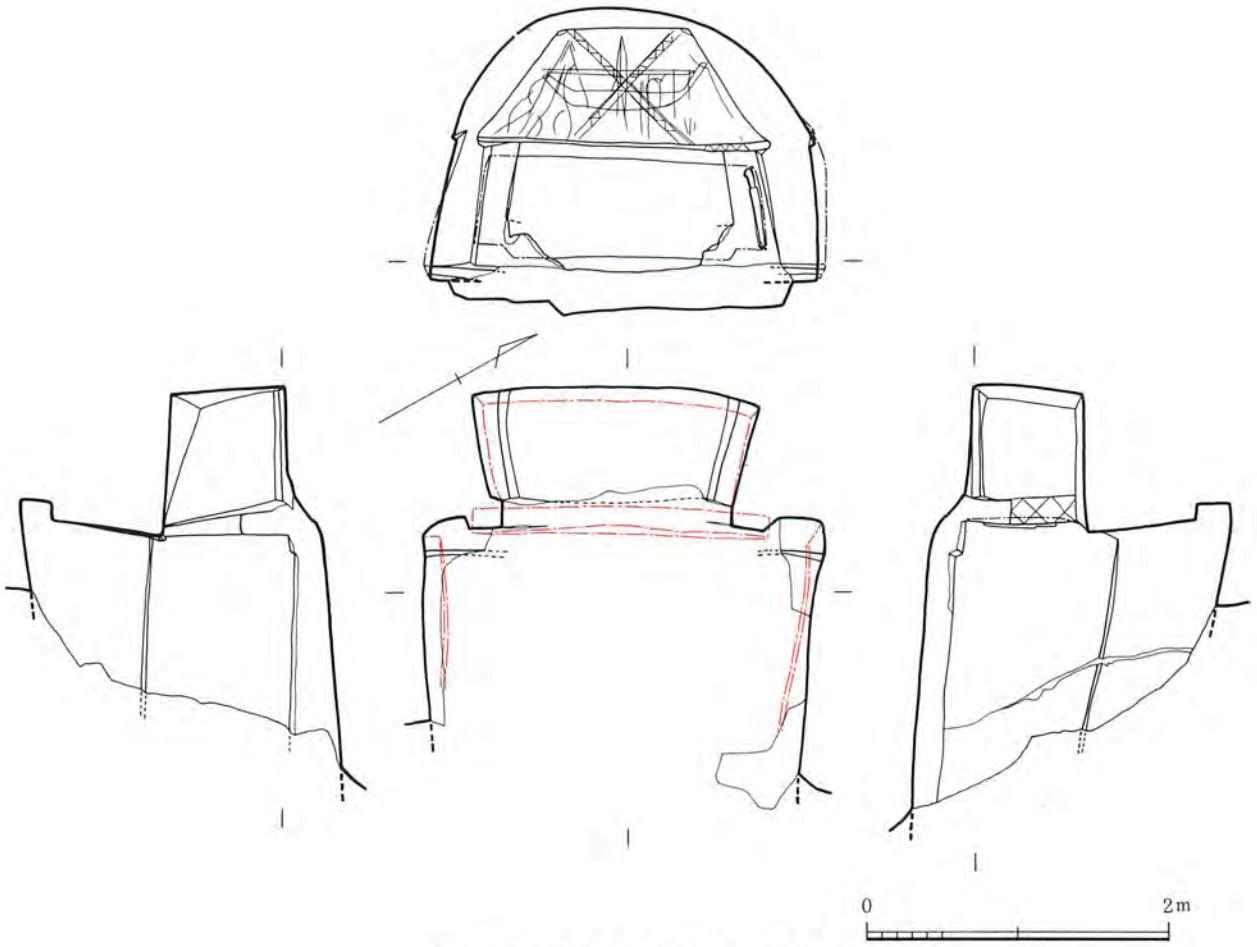
74の5図　石貫ナギノ9号横穴墓実測図

9号横穴墓（旧8号横穴墓）　6号・8号と同じく，羨門の外に三重の飾り縁をもち，羨門と内側から第一の飾り縁は長方形ないし台形で，第二・第三の飾り縁はアーチ形を成している。羨門は幅65cm，高さ100cm，第一飾り縁は幅105cm，高さ120cmを測る。第二と第三飾り縁は右側が壊れているが復元すると，第二飾り縁は幅約160cm，高さ約160cm，第三飾り縁は幅約270cm，高さ約190cmと考えられる。羨門から60cm程で玄室に至る。玄室に入ってすぐの通路が両側に幅が広くなった部分があるのが特徴的である。玄室は幅280cm，奥行き290cmを測り，奥屍床は石屋形になっている。奥屍床を除く部分の奥行きは210cmを測り，天井は軒先の表現があるが上方はドーム形になっている。左右の屍床にはそれぞれ両側に造り付けの枕がある。奥屍床には左側にのみ枕があり，その前面にはゴンドラ形の仕切りがある。

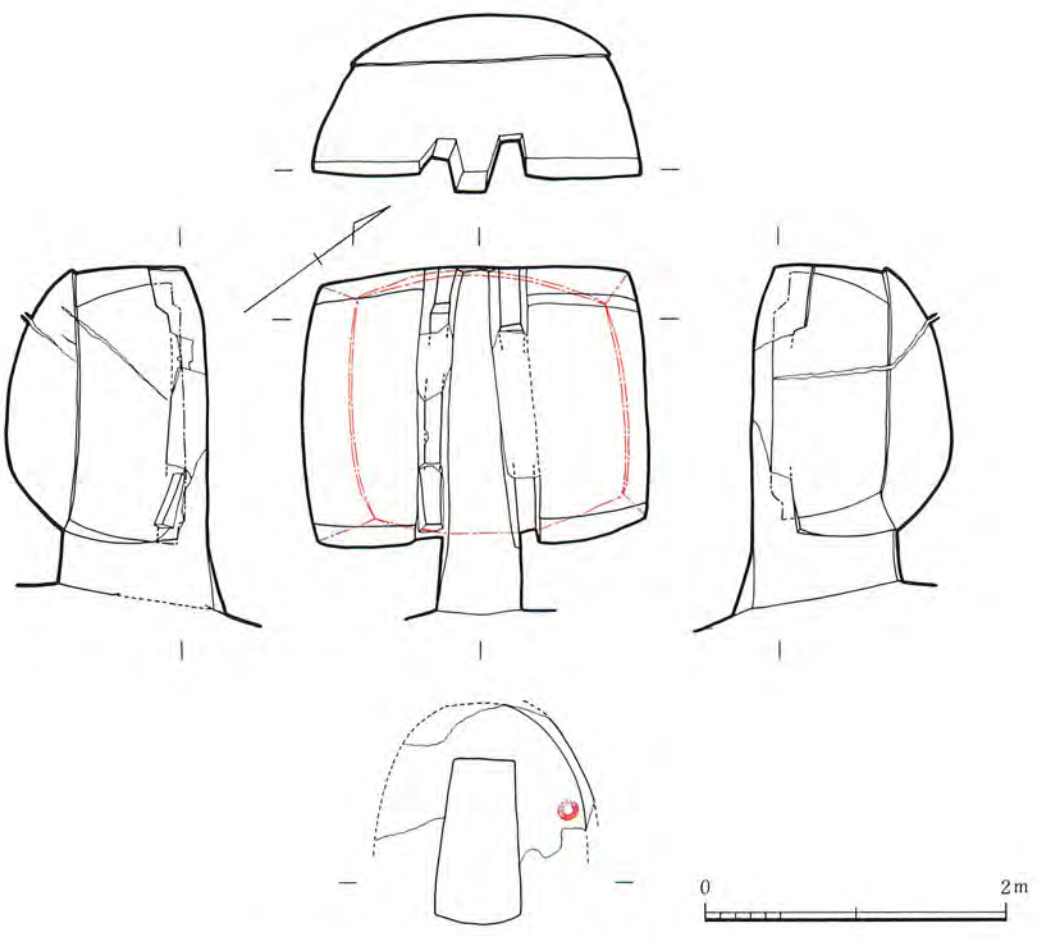
装飾は飾り縁と右屍床の仕切りと石屋形（奥屍床）の前面にある。

飾り縁の装飾は第一飾り縁の外面と第二飾り縁の外面にみられる。いずれも細線刻文と赤の彩色を併用したもので第一飾り縁の外面には二重円文の線刻等間隔に配置し，その間を菱形の線刻で結んでおり，その両側も平行線による菱形を描いて埋め，その菱形を赤く塗っている。第二飾り縁の外面にも二重円文を等間隔に配置して，それを菱形で結んでおり，さらに直線と弧線を用いてあいた部分を埋め，赤で彩色している。

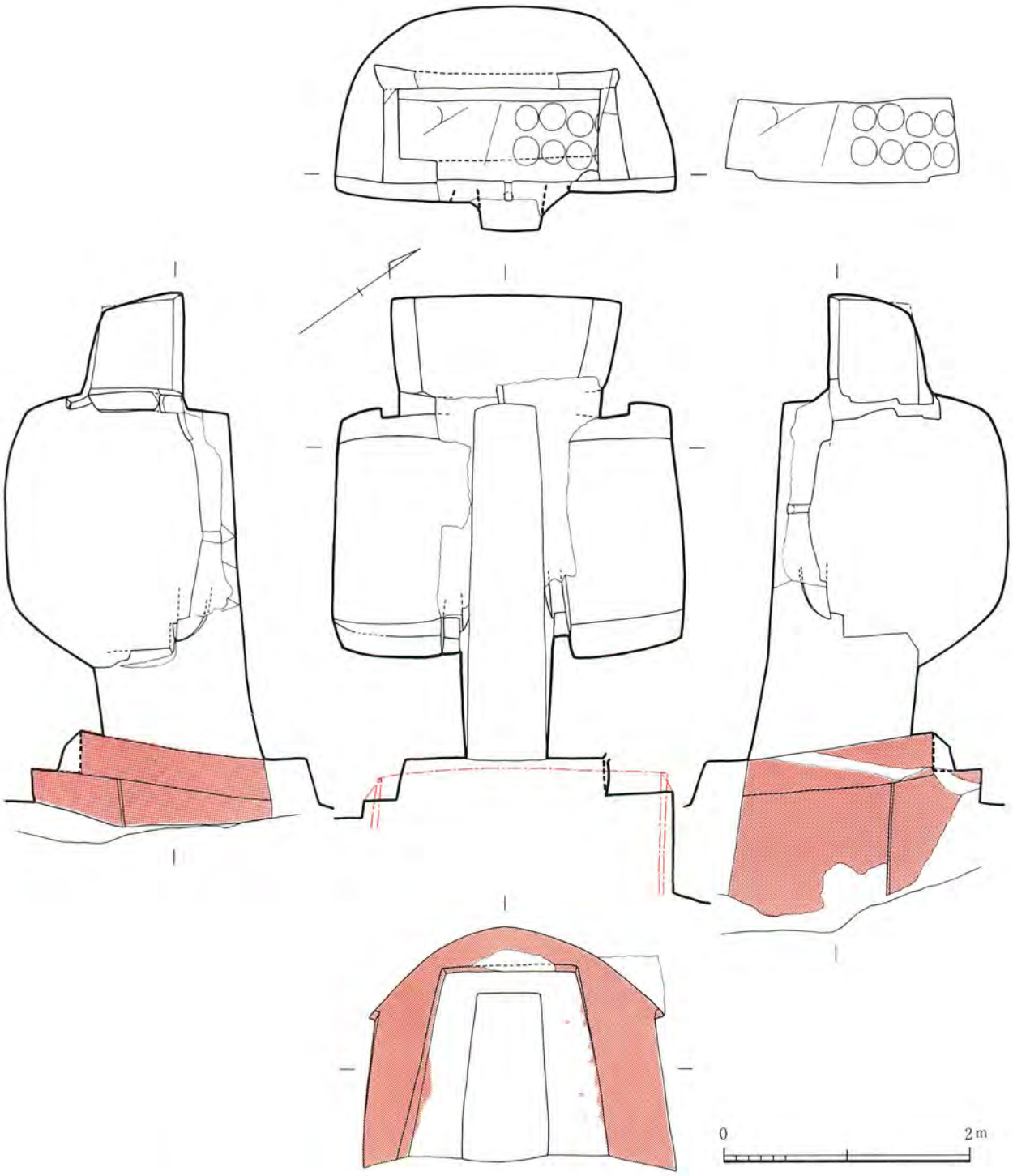
右屍床仕切りの装飾は，玄室に入ってすぐの通路が幅広くなった所の右面にあり，直交する斜線を横に並べたもの



74の6図　石貫ナギノ12号横穴墓実測図



74の7図　石貫ナギノ16号横穴墓実測図



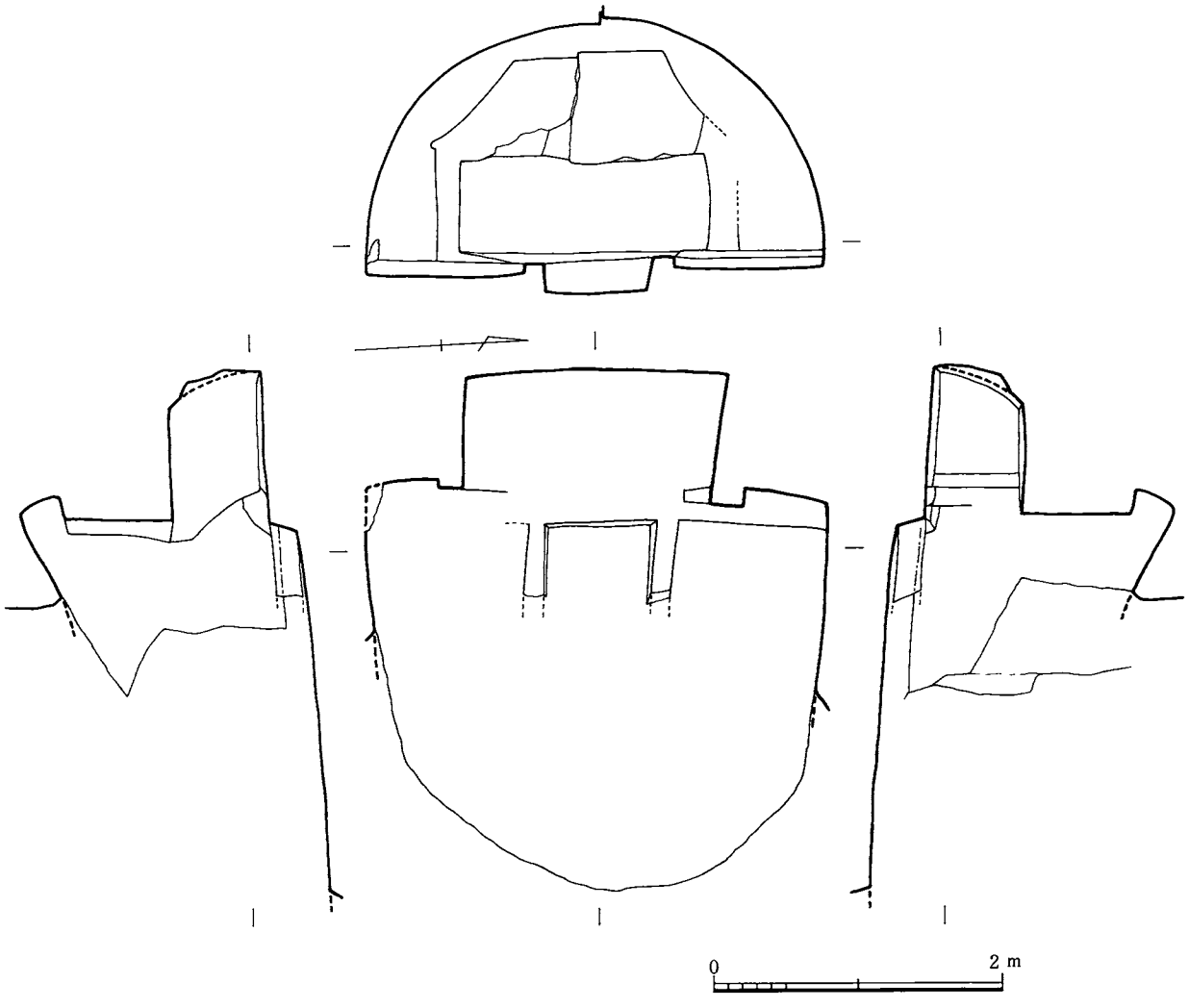
74の8図　石貫ナギノ17号横穴墓実測図

が認められる。

石屋形には両側の柱石に飾り縁の文様と同じく二重円文を菱形で結んだ線刻がみられる。またその内側のゴンドラ形仕切りの右側の立ち上がった所にも同様な文様がみられる。なお同仕切りの左側の立ち上がりは欠損している。石屋形の庇の前面には直交する斜線を横に並べた線刻が認められる。

12号横穴墓（旧10号横穴墓）　岩石の崩壊によって直接玄室の奥を露出している。残存部から見ると玄室の構造は8号横穴墓に類似している。玄室の幅は260㎝で，奥行きは現在270㎝残っている。左右の屍床の奥には造り付けの枕がある。奥屍床を除いた部分の天井は奥が高くなったカマボコ形であるが，軒先の表現がみられる。奥屍床は石屋形になっており，横穴式石室の奥に納めた平入りの家形石棺を見るようである。その屋根の傾斜は強く，少し反りがある。仕切りは壊れているが，屍床には両側に造り付けの枕がみられる。

装飾は石屋形の数ヵ所に見られる。まず屋根の正面には細線による文様がみられる。棟の両端から中央で交叉する



74の9図　石貫ナギノ19号横穴墓実測図

斜め平行線を引きその中を小さな連続三角文で埋め，それに重ねて中央部に大きな舟の線刻を描いている。その他にも形状の不明な線刻画が混入している。また軒先にも小さな連続三角文が認められる。石屋形の右柱の面には長さ63cmを測る刀の浮き彫りがみられる。その柄頭は8号横穴墓のものと異なり丸みをもっている。この刀の浮き彫りのある面の側面（内側）には直交する斜線を連続して縦に並べた菱形にも見える文様を描いている。

16号横穴墓　羨門は長方形で幅55cm，高さ110cmを測る。飾り縁は壊れているが，第一飾り縁は復原するとアーチ形で幅約160cm，高さ約160cm程度と考えられる。羨門から50cm程で玄室に至る。玄室は方形のプランで，幅230cm，奥行き180cmを測り，左右にのみ屍床が造られている。仕切はいくぶん壊れているが，仕切りはゴンドラ形であったことがわかる。両屍床とも両端に造り付けの枕がある。天井の上部はドーム形であるが，その下方には軒先の表現がみられる。通路から天井までの高さは130cmである。

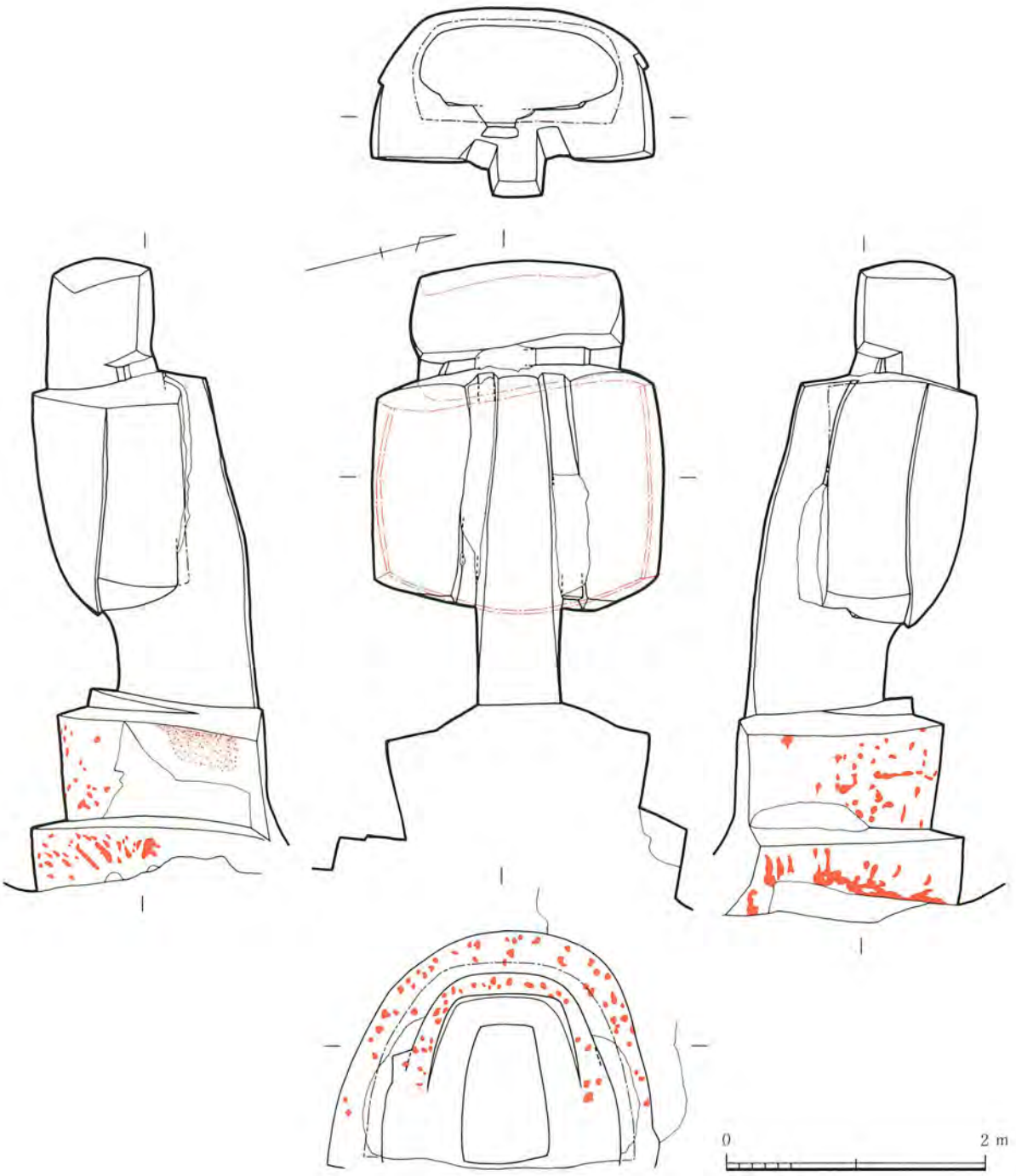
装飾は不鮮明であるが羨門の外面に赤色顔料で描かれた円文らしきもの1個が認められ，他の横穴墓の例から円文が並んでいたものと推定される。

17号横穴墓（旧15号横穴墓）　羨門は長方形で幅70cm，高さ130cmを測り，第一飾り縁は台形で幅170cm，高さ160cmを測る。第二飾り縁は軒先が付き，上方はアーチ形で，幅260cm，高さ200cmを測る。羨門から90cm程で玄室に至る。玄室は幅・奥行とも290cmを測り，奥屍床を除いた部分は奥行200cmで，天井はドーム形で高さ190cmを測る。左右屍床・奥屍床とも各々両側に造り付けの枕がみられる。奥屍床は石屋形になっており，上方に庇，左右に柱が浮き彫りに成っている。三屍床とも仕切りが壊れているが，各々中央部に排水の穴の痕跡が認められる。

装飾は左右の仕切りと奥壁に認められる。左右の仕切りは通路側から見るとそれ自体が浮き彫りの船となっており，さらにその下方に線刻による連続三角文の一部を認めることができる。

奥壁にはその右側に上下二段に並べた合計8個の線刻の円文を認めることができるが，左側では不鮮明で，斜線2本と，あるいは円文の残存かとも思われる弧線一個が認められる程度である。

その他外部の第一飾り縁の内外面と第二飾り縁の内面は全面が赤く塗られており，一部は羨門の外面にも及んでいる。羨門の外面には部分的に赤い所もあるが装飾文様であったかどうかは不明である。

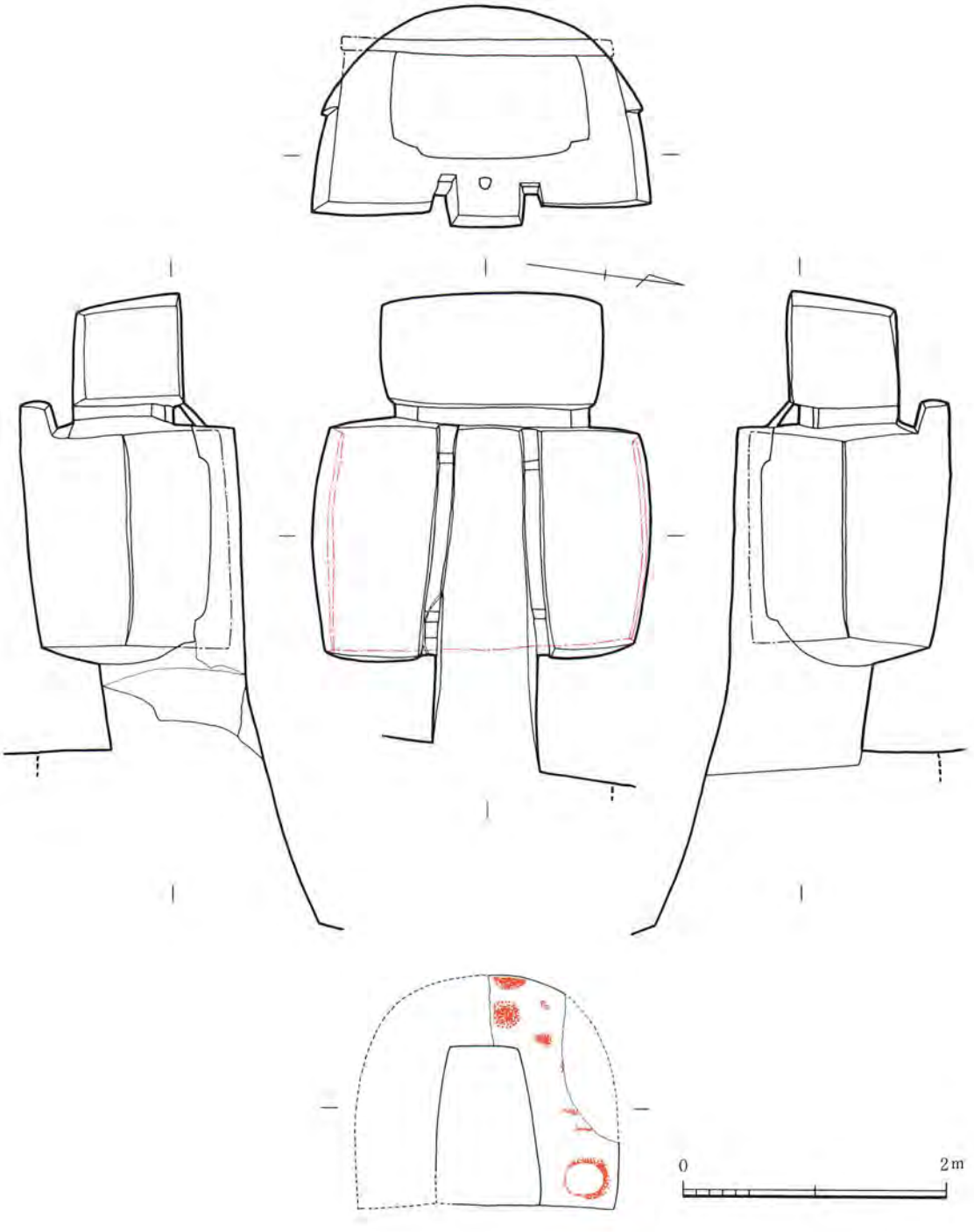


74の10図　石貫ナギノ28号横穴墓実測図

19号横穴墓（旧17号横穴墓）　20号横穴墓の左上方にある。「コ」字形屍床であるが大半は崩壊して奥の部分のみ残っている。奥屍床は石屋形になっており，整った家形を成している。天井は奥（石屋形の上方）が最も高くなっている。玄室の規模は非常に大形で幅320cm，奥行約350cm，高さ190cmを測る。

装飾は現状では確認できないが，梅原末治氏によれば(文献①)，「此の穴，現状上述の如く，内部には装飾全く見るなきも，今附近に散在せる残石面に円及びX形の彫刻の遺存せるものあり，是れによりて，其の入口の飾壁に，前数例に於て見るが如き装飾ありしを推知せらる。ただ其の如何なる部分に加えられしか，また彩色の有無に至りては全く不明なり。」というものでもと装飾横穴墓であったことがわかる。

28号横穴墓（旧25号横穴墓）　羨門は長方形で幅65cm，高さ105cmを測る。羨門の外に二重の飾り縁が付くが，羨門の外面上方にはもう一つ飾り縁状のものがあるので三重にも見える。おそらく羨門外面の上方にある段は閉塞石を安定よく立てかけるためのものと考えられる。とすれば閉塞石の形状は台形で，幅70～80cmで，高さ130cm程度であったと推定される。飾り縁はアーチ形で，第一飾り縁は幅約 180cm，高さ150cmを測り，第二飾り縁は幅250cm，高さ190cmを



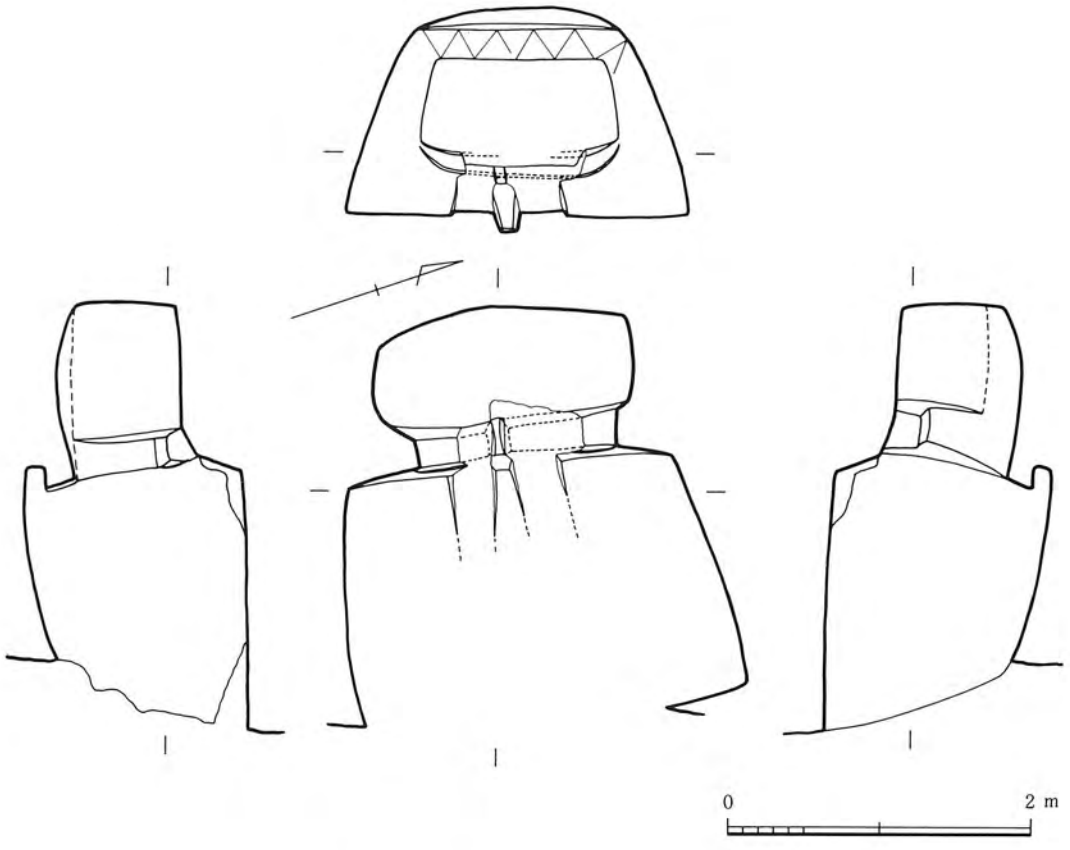
74の11図　石貫ナギノ29号横穴墓実測図

測る。第二飾り縁から羨門まで140cmあり，羨門から80cm程で玄室に至る。玄室はやや丸みをおびており，幅230cm，奥行270cmを測る。奥屍床を除いた部分の奥行きは190cmで，天井は軒先の表現があるが，上方はドームないしカマボコ形を成している。奥屍床の仕切りはゴンドラ形の船を表現している。

装飾は羨門の外面上方と，第一飾り縁の内・外面，第二飾り縁の内面にみられ，赤色の斑点を一ぱいに配している。

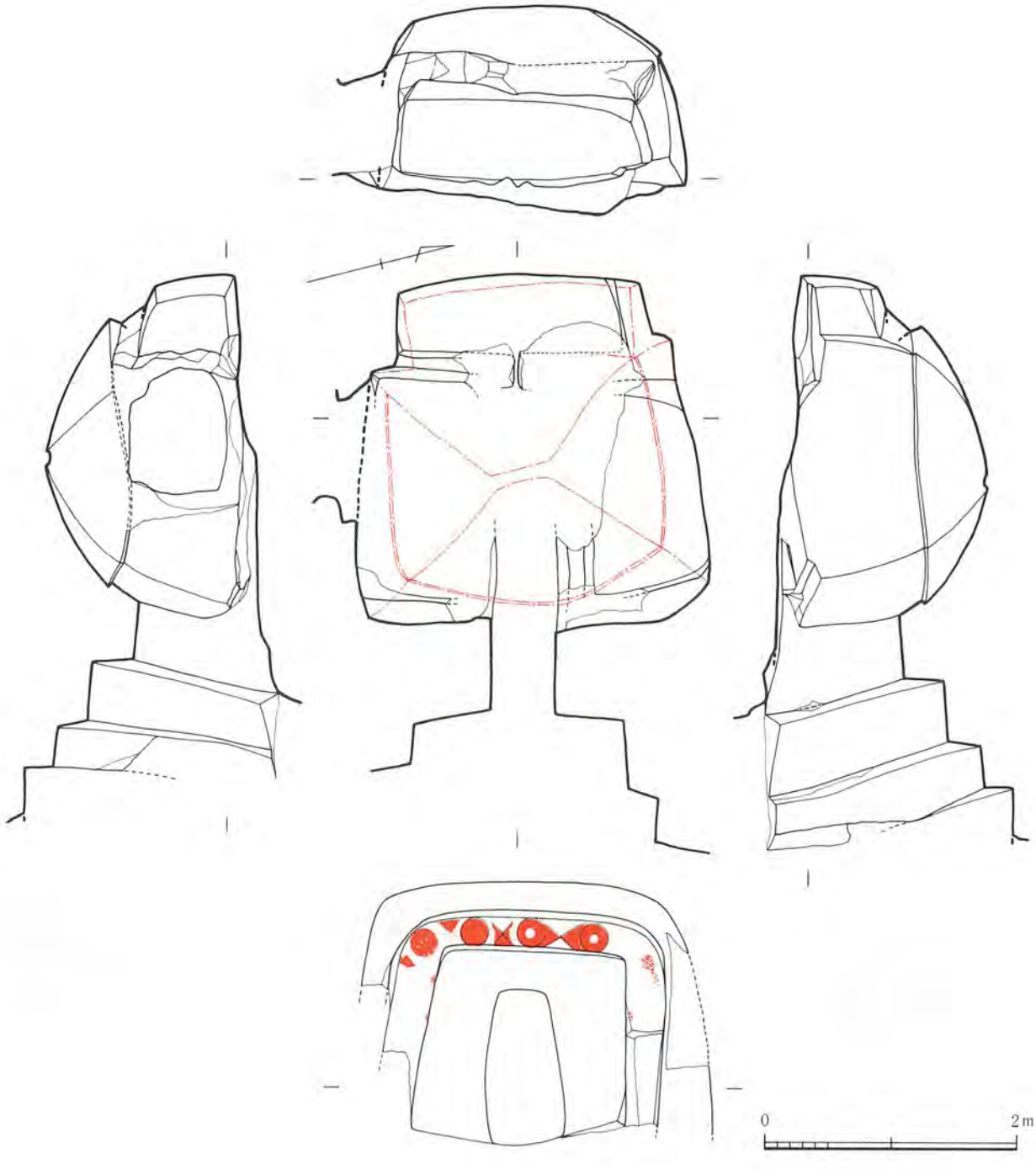
29号横穴墓（旧26号横穴墓）　羨門は長方形で幅80cm，高さ120cmを測る。飾り縁は壊れているが，第一飾り縁は復原するとアーチ形で幅200cm，高さ170cm程度と考えられる。羨門から90cmで玄室に至る。玄室は「コ」字形屍床で幅260cm，奥行き270cmを測る。奥屍床の前面上方には庇がある。各屍床の仕切りは両端が上がって平坦面がありゴンドラ形の船を表現している。奥の仕切りには溝水の穴があるが，左右の仕切りにはそれが見られない。奥屍床を除く部分の奥行きは180cmで，天井はカマボコ形であるがその下方に軒先の表現がみられる。通路から天井までの高さは165cmを測る。

装飾は羨門の外面に赤色顔料で描かれているが不鮮明で，円文や環状の文様とみられるものが認められる。その他羨門の裏の上部にも赤の円文らしいものの痕跡がある。



74の12図　石貫ナギノ30号横穴墓実測図

74の13図　石貫ナギノ12号横穴墓の石屋形（白石巌撮影）

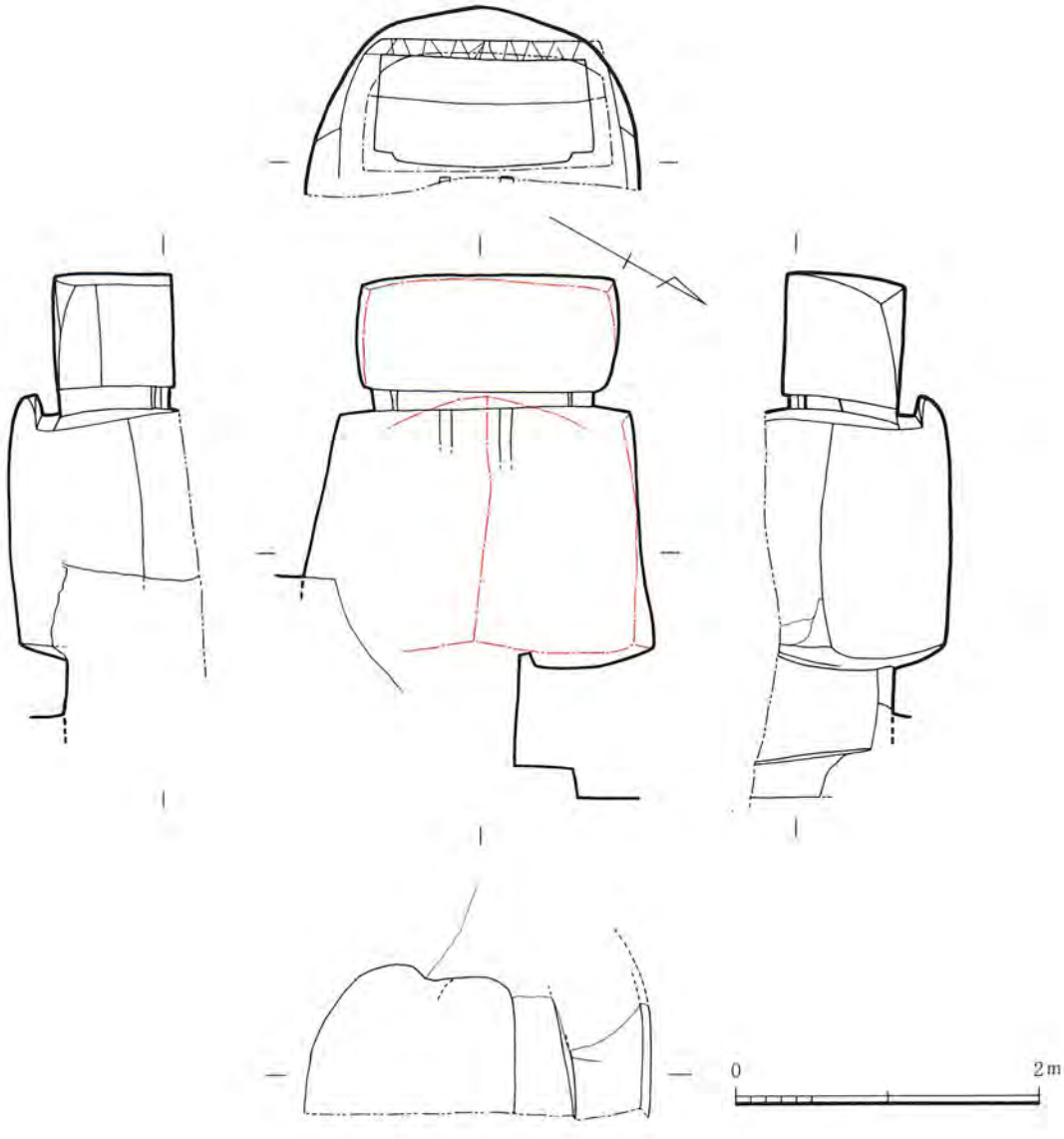


74の14図　石貫ナギノ37号横穴墓実測図

30号横穴墓（旧27号横穴墓）　羨門部や飾り縁は完全に崩れ落ちている。玄室も仕切りなどが壊れているが，残存部から「コ」字形屍床であることがわかる。玄室の幅は250cm，奥行き270cmであり，奥屍床を除いた部分の奥行きは170cmで天井はカマボコ形である。通路から天井までは高さ145cmを測る。奥屍床の前面上部には庇がある。

装飾は奥屍床の前面の２ヵ所にみられる。１ヵ所は庇の正面にあり，線刻の連続三角文を横に並べている。もう１つは仕切りの下方にやや幅の広い線刻で溝を入れて舟を表現しているものである。

37号横穴墓（旧33号横穴墓）　羨門は長方形で幅65cm，高さ110cmを測る。羨門の外に三重の飾り縁が付く。飾り縁は方形に近いが外側にいくに従い上辺の両端が隅丸になる。内側から第一の飾り縁は幅170cm，高さ160cm，第二の飾り縁は幅220cm，高さ180cmを測る。第三の飾り縁は両側が壊れているが復原すると幅約290cm，高さ約210cmである。羨門から60cm程で玄室に至る。玄室は床面の破壊が激しく，仕切りは殆んど無くなっている。また左壁には36号横穴墓に通じる穴も掘られている。左右の屍床には入口側に，奥屍床には右側に造り付けの枕がみられる。奥屍床の前面上方には庇がある。玄室の規模は幅280cm，奥行き270cmで，奥屍床を除く部分の奥行きは200cmを測り，天井は平入りで



74の15図　石貫ナギノ39号横穴墓実測図

寄せ棟の家形で，高さ165cmを測る。棟は下に突出させて表現している。

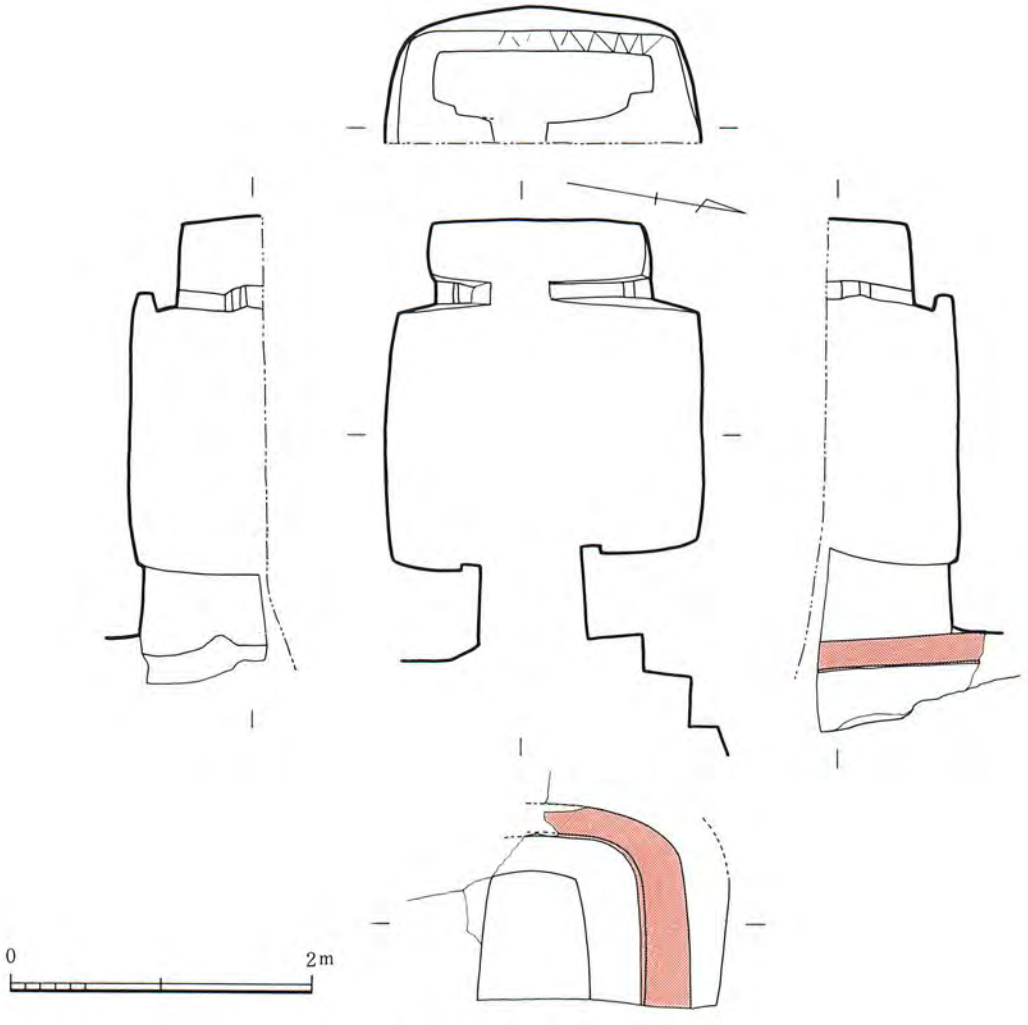
装飾は第一飾り縁の外面の上部にみられ，線刻で円文を等間隔に配し，その間にＸ文を入れ，赤で彩色している。その下方は風化のため消えたものと思われる。

39号横穴墓（旧35号横穴墓）　外部は大きく崩れ，玄室の左側も一部壊れている。また床面には土などが堆積しているので，床面についての正確な図面はとれていない。羨門は台形またはアーチ形で，幅60cm，高さ90cm程度の大きさであったと考えられる。飾り縁は二重に付いており，いずれもアーチ形であったと考えられる。羨門から70cm程で玄室に至る。玄室は復原幅240cm，奥行き260cmを測る。奥屍床を除いた奥行きは170cmで，通路から天井までの推定高130cmを測る。天井は妻入り，切り妻の家形の構造を成している。奥屍床の前面上部には庇が付いており，仕切りはやや両端が上がって平坦面をつくり，ゴンドラ形の舟を表現している。

装飾は２ヵ所に確認できる。１ヵ所は第一飾り縁の右外面にみられ，崩れた部分の直下に直線文一条がある。恐らく線刻と彩色の文様があったものの残存であろうと推定される。もう１ヵ所は玄室内の奥屍床前面の庇にみられるもので，線刻による連続三角文を横に並べている。

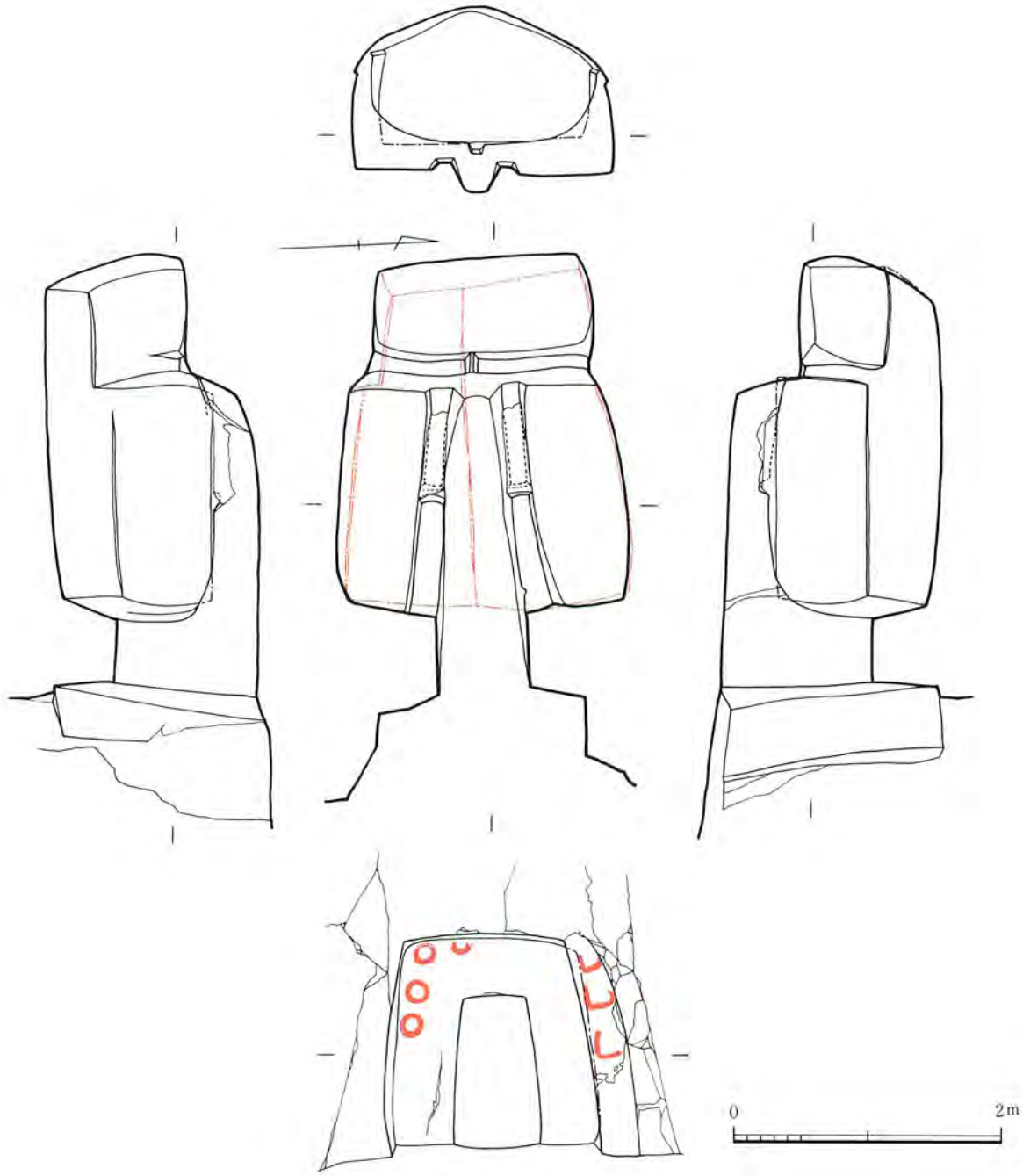
40号横穴墓（旧36号横穴墓）　外部の左側が崩れている。羨門は幅75cm，高さ90cm程度を測る台形で，その外に三重のアーチ形の飾り縁が付いている。羨門から60cmで玄室に至る。玄室の床面は埋もれているが，「コ」字形屍床を成すことがわかる。玄室の幅210cm，全長230 cmで，奥屍床を除いた部分の長さ（奥行き）は170cmを測る。また奥屍床を除いた部分の天井はカマボコ形に近く，現状の高さは90cmであるが，本来は100cm以上あるものと考えられる。奥屍床の仕切りはゴンドラ形で，その上方に庇がついている。

装飾は奥屍床の庇にあり，線刻による三角文を連続して施している。このほか外部の第一飾り縁の内外面は全面が赤く塗られている。



74の16図　石貫ナギノ40号横穴墓実測図

74の17図　石貫ナギノ横穴墓群近景（8号周辺、白石巌撮影）



74の18図　石貫ナギノ43号横穴墓実測図

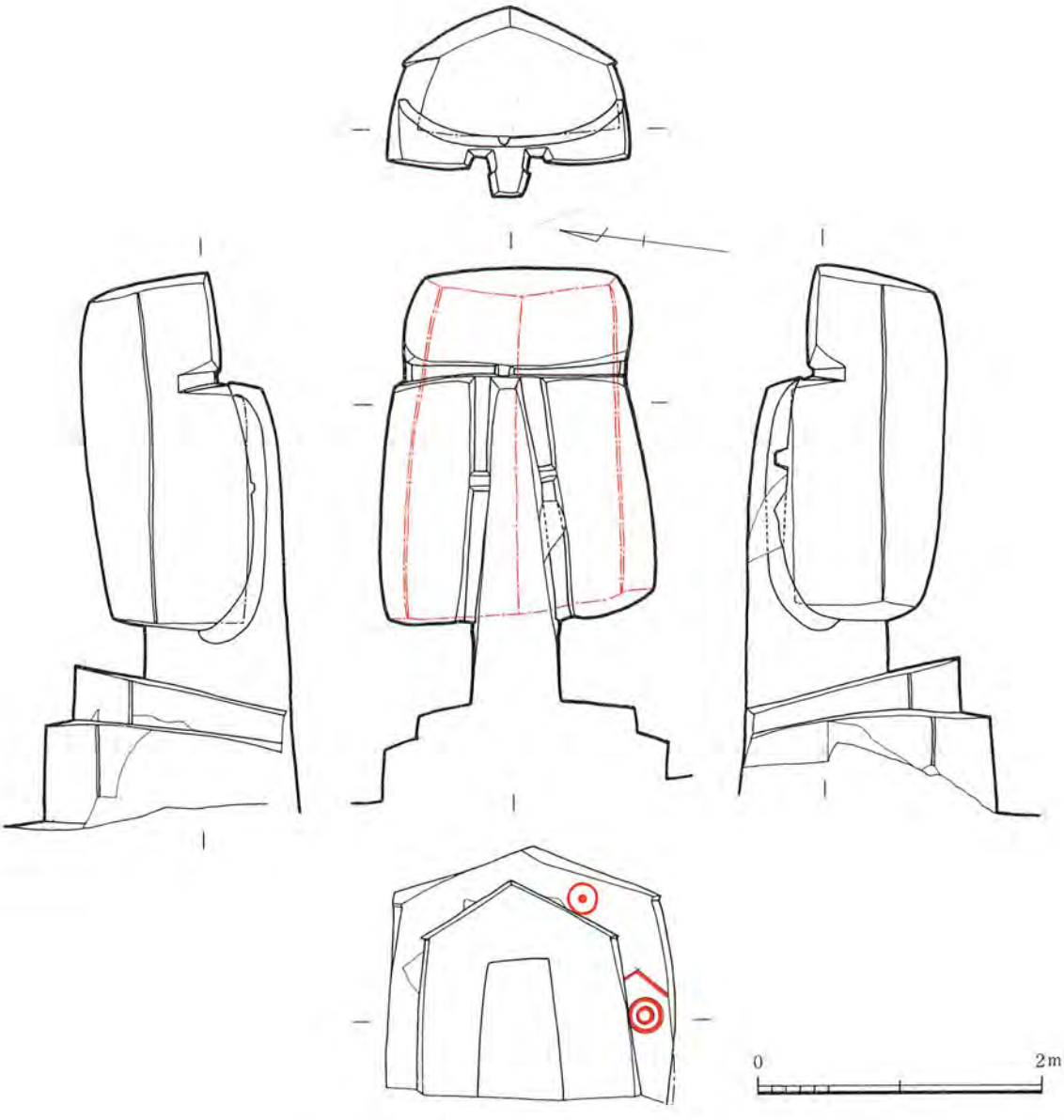
43号横穴墓（旧39号横穴墓）　羨門は長方形で，幅65cm，高さ110cmを測る。第一飾り縁は方形で幅・高さとも160cmを測る。さらにその外にも飾り縁があるが崩壊のため一部分しか残っていない。羨門から60cm程で玄室に至る。玄室は幅220cm，奥行き250cm，高さ150cmを測る。屍床は「コ」字形に仕切られており，奥の仕切りの両側と，左・右仕切りの入口側は大きく反っている。天井はカマボコ形に近いが一応棟と軒の表現があるので切り妻の妻入り家形とみるべきである。棟は奥屍床まで通っており，軒は奥屍床の部分が15cm程高い位置にある。

装飾は羨門の外面と第一飾り縁の外面にみられる。羨門の外面には左上にやや黄色を帯びた赤色で中空の円文を等門隔に配列したのが良く残っている。また第一飾り縁のうち崩壊を免れた右外面にはやはり同色で描いたL字形の文様３個が認められる。

45号横穴墓（旧41号横穴墓）　羨門は長方形で幅60cm，高さ100cmを測る。飾り縁は二重につき，形状が特異で，家形を成し，棟と軒の表現がみられる。羨門から50cm程で玄室に至る。玄室は「コ」字形屍床で，幅195cm，奥行き250cm，高さ135cmを測る。天井は妻入りで切妻の家形を成す。

装飾は第一飾り縁と玄室内の仕切りにみられる。第一飾り縁の装飾はその右外面に赤の彩色で描かれた同心円文２ヵ所と山形一つが認められる。また玄室内の仕切りは左・右・奥とも両側が反っており，側面からみるとゴンドラ形の舟を浮き彫りにしてある。

出土遺物　鉄鉾・鉄鏃



74の19図　石貫ナギノ45号横穴墓実測図

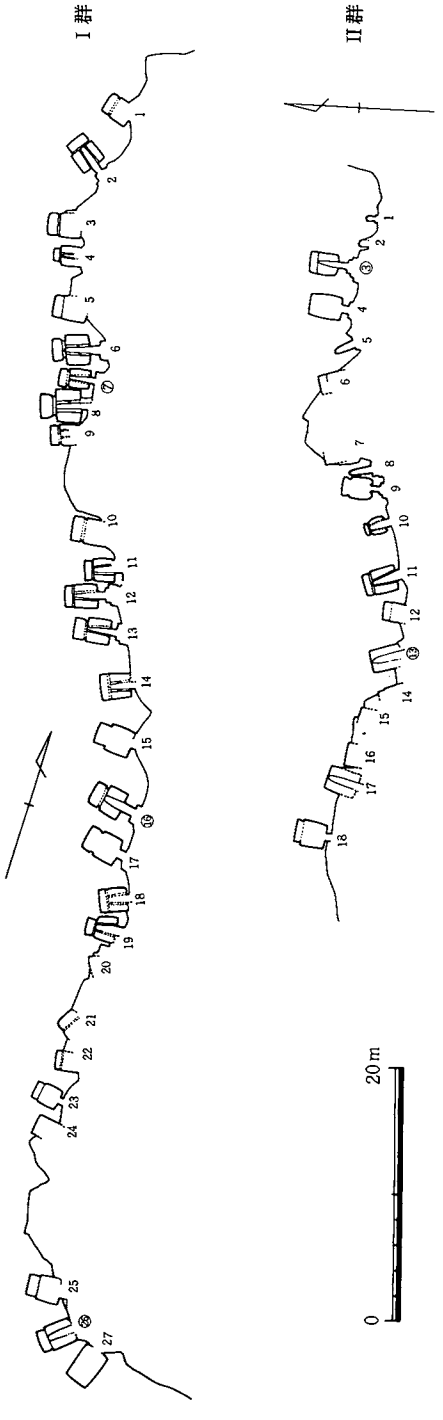
備　考　大正６年（1917）京都帝国大学浜田耕作氏により実測調査（文献①）。昭和48年（1973）田添夏喜氏により実測調査。昭和54年（1979）熊本大学考古学研究室により実測調査（文献⑪）。　（高木正文）

〔参考文献〕

①浜田耕作「玉名郡石貫村の横穴群」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』（京都帝国大学文科大学研究報告第１冊）大正６年（1917）
②『熊本県史蹟名勝天然記念物概要附国寶其他』熊本県　昭和12年（1937）
③乙益重隆「石貫穴観音横穴群とナギノ横穴群」小林行雄編『装飾古墳』Ｐ78　平凡社　昭和39年（1964）
④乙益重隆「ナギノ横穴群」斉藤忠編『古墳壁画（日本原始美術第５巻）』Ｐ189　講談社　昭和40年（1965）
⑤田添夏喜編著『玉名市の文化財』第１集　玉名市教育委員会　昭和45年（1970）
⑥森貞次郎『装飾古墳』朝日新聞社　昭和47年（1972）
⑦斉藤忠『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1973）
⑧乙益重隆編著『装飾古墳と文様』（古代史発掘８）講談社　昭和49年（1974）
⑨『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
⑩田添夏喜「石貫ナギノ横穴群」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』Ｐ36－44，熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑪西住欣一郎・宮本千絵編『石貫ナギノ・石貫穴観音横穴群』熊本大学考古学研究室　昭和55年（1980）
⑫『熊本県の文化財』３（史跡）熊本県教育委員会　昭和56年（1981）

75．石貫古城横穴墓群（⇨73の１図，75の１～９図）

——玉名市石貫古城原——



75の１図　石貫古城横穴墓群配置図

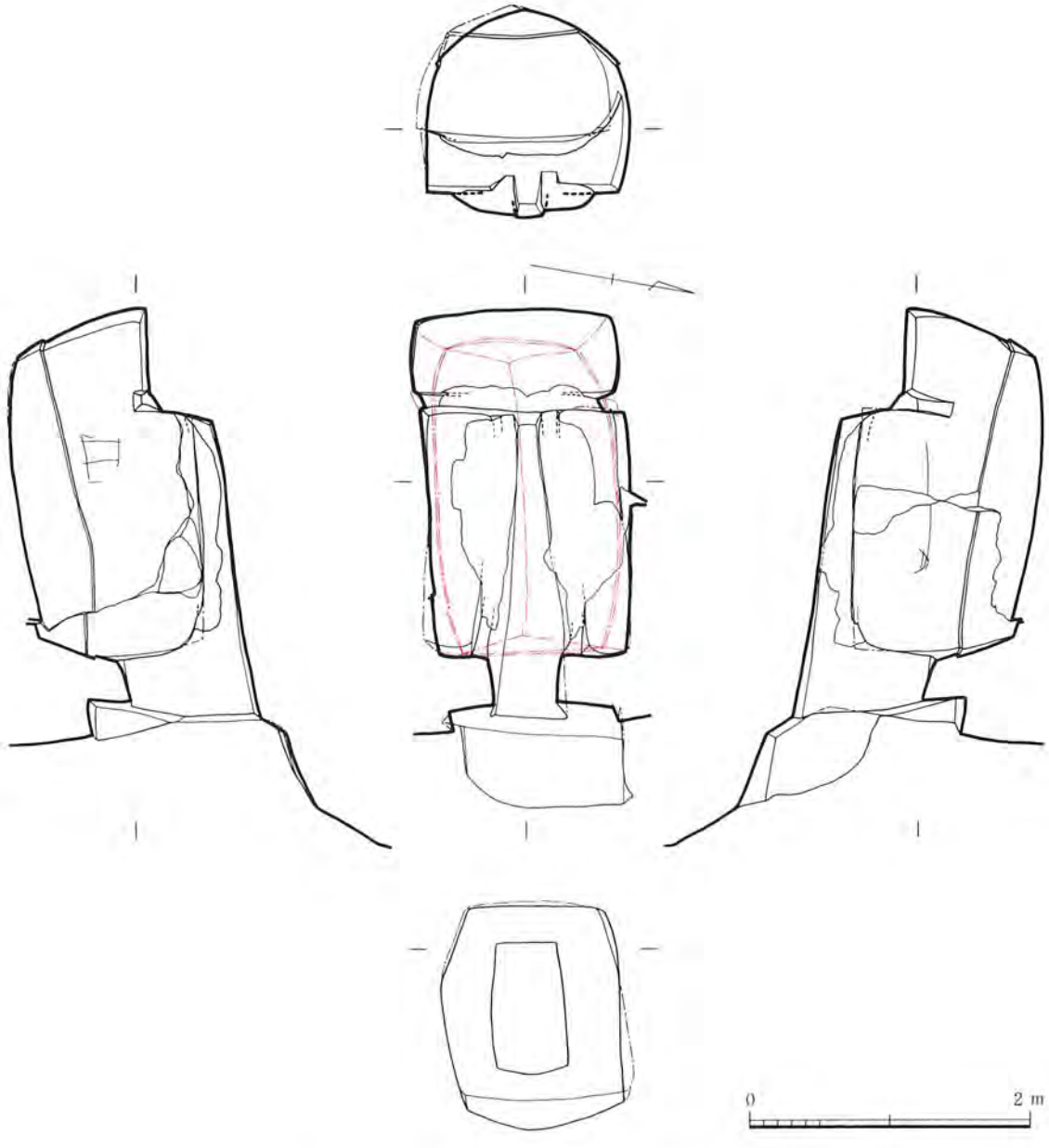
立　地　小岱山東麓の一支丘先端，東崖面と南崖面にある横穴墓群で，南崖面の下には古城集落がある。地名が示すように丘陵上は中世城跡である。石貫穴観音横穴墓群と石貫ナギノ横穴墓群のある丘陵からは約 800m 離れた南に二つ目の丘陵にある。また，この横穴墓群の 500m 東側を菊池川支流の繁根木川が南流している。

分布と概要　凝灰岩崖面の東側にある横穴墓群をⅠ群，南側にある横穴墓群をⅡ群とする。Ⅰ群は 100m の範囲に27基確認でき，玄室床面は埋没しているものと壊れたものを除くすべてが「コ」の字形屍床である。しかし羨門部の形態，奥屍床や天井の構造，規模などはさまざまである。北から番号をつけて，南端を27号とする。Ⅱ群は50m の範囲に18基確認でき東から番号をつける。「コ」の字形屍床の横穴墓以外に13号や17号のように右左のみ屍床を持つ横穴墓もある。１号と２号は奥行の短かい小型の横穴墓で，5号と８号は奥行の長い小型の横穴墓である。また，10号は「コ」の字形屍床をもつやや小型の横穴墓である。この横穴墓群のうちⅠ群７号に線刻文があることは県立玉名高校考古学部の調査により知られていたが，今回の調査でⅠ群の16号と26号，Ⅱ群の３号と13号にも線刻文があることがわかり，線刻文のある横穴墓は５基となった。特にⅡ群13号の舟と人物の線刻文は秀れている。

Ⅰ－７号横穴墓　両側の６号と８号の後に掘られたためであろうか，やや遠慮ぎみに造られている。壁面に亀裂が生じており，屍床の各仕切りは削られている。羨門部は長方形で幅54cm，高さ92cmを測る。その外側に幅約 130cm，高さ約 140cmを測る長方形の羨道（飾り縁）がつくが壊れており，現状では長さ50cmを確認できる。羨道から羨門には19cm段上がりになっている。通路のうち羨門から玄室に至るまでは50cmを測る。玄室の天井は細長の家形で棟や軒先の表現があり，妻入りで，切妻に近い形態を成している。平面プランは長方形で幅 150cm，奥行き 245cmを測るが，奥屍床は左右屍床よりも30cm高く造られている。通路から天井までの高さは 147cmを測る。

線刻文は玄室の左右の壁面にみられる。右壁の線刻は横に引いた長い直線の先端に横走する３本の線があり，その中央の線の両端を斜め左右に伸ばしたものであるが，何を書いたものか判断しがたい。田添夏喜氏の説明を借りれば「長い棒先に，釣灯篭をつけて差しのべた恰好だが，この時代に灯篭は考えられず，棒を除けば甲羅をもつ四つばいの亀を思わせ，また見かたを変えれば竪穴住居を連想する。」左壁の線刻は４本の直線で縦長の四角形を水桶形に描き，両側に突きぬけた上辺の両先端付近から短かい直線を垂らしている。この線刻文も類例がなく解釈しがたい図文である。

Ⅰ－16号横穴墓　Ⅰ群のほぼ中央部にある横穴墓で，割合大型である。羨門は長方形で幅58cm，高さ 109cmを測る。羨門の外側に二重の方形の飾り縁が付いていたと考えられるが壊れており，その一部分が残っている。内側の飾り縁は幅約 140cm，高さ約 170cmであったと考えられる。外側の飾り縁は幅約 170cmであるが，高さは不明である。羨門から玄室に至るまでは75cmを測る。玄室は幅 230cm，奥行き 295cm，高さ 170cmを測り，平面プランは奥のやや狭い長方形で天井は妻入りで切妻の家形である。床は一部壊れ

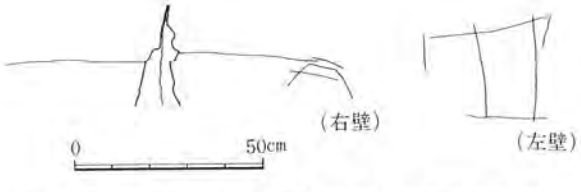


75の2図　石貫古城Ⅰ－7号横穴墓実測図

ているが、左右の屍床は仕切りがなく平担で，通路と段差をつけているのみである。通路との段差は30cm程ある。奥屍床よりも15cm程高く，低い仕切りを設けており，仕切りの両側は高く跳ね上がり上端は平担になっており，正面からみるとゴンドラ形の舟を表現していることが明らかである。

線刻は玄室の四壁にあり，左右壁には数本の斜線，奥壁と羨門側の壁には多くの斜線が引かれているが，図柄を意識して描いているようにも思われない。しかし後世の落書きではないと考えられるので一応線刻文として扱った。

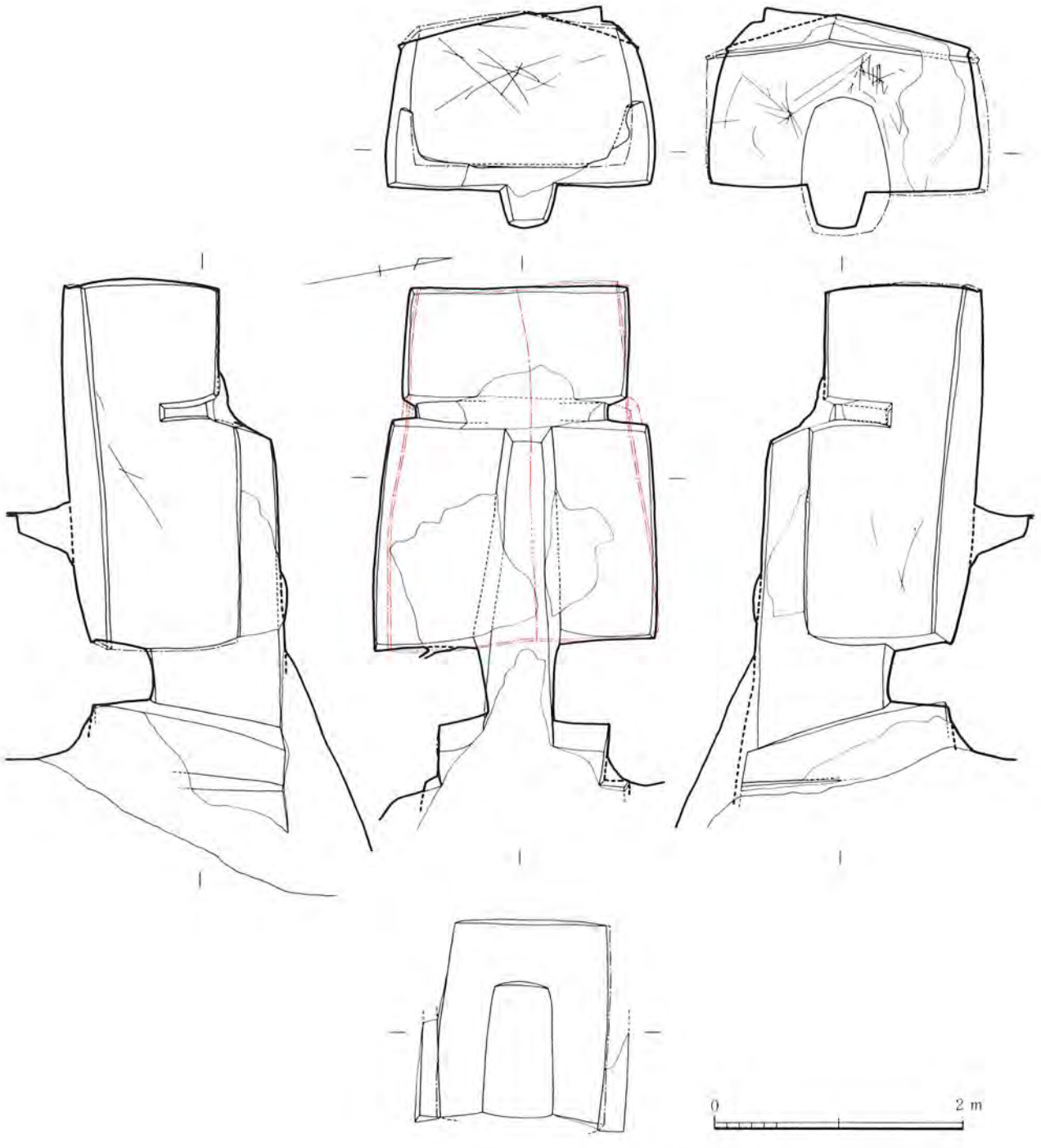
Ⅰ－26号横穴墓　25～27号横穴墓の3基はⅠ群の左端にあり，扇形に並んでいるところから被葬者は血縁的に関係があるものと推定される。26号横穴墓は羨門から左の屍床の一部にかけてが崩れ落ちているので羨門と飾り縁の形状は不明である。玄室は幅 194cm，奥行き 262cm，高さ 168cm



75の3図　石貫古城Ⅰ－7号横穴墓装飾文実測図

を測り，平面形は奥屍床部分がやや狭くなっているので凸形となっている。左右の屍床，奥屍床とも仕切りがなく，段差のみをつけているが均整のとれた横穴墓である。左屍床のみには形だけの排水溝をつけている。天井は妻入り切妻の家形であるが，軒先線から上は低いカマボコ形をなし，棟線はない。

線刻は奥壁にあり，数本の粗い線で鋸歯状文を描いているようであるが，そのような図柄を意識して描いたのかど

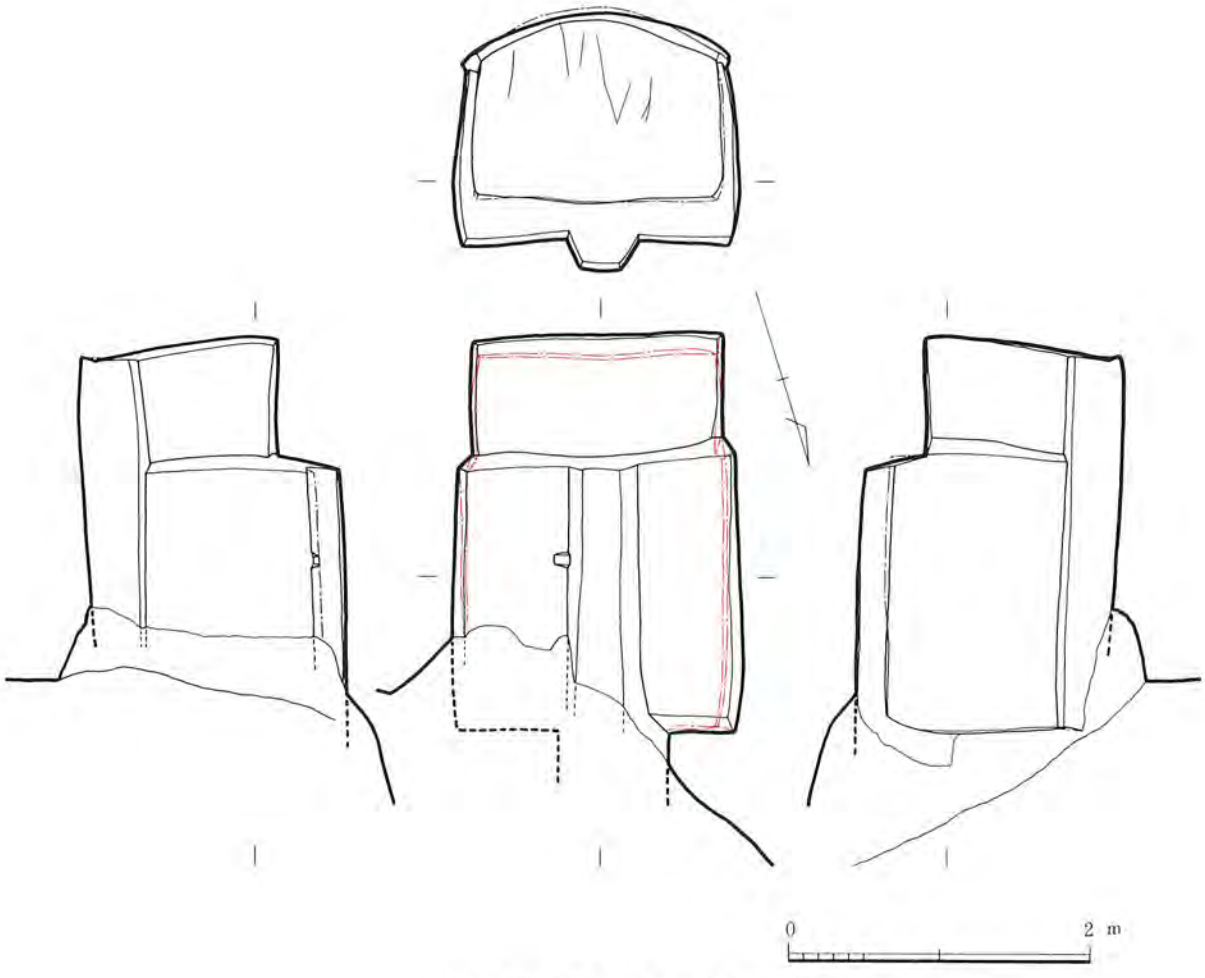


75の4図　石貫古城Ⅰ－16号横穴墓実測図

うか不明である。なお実測した以外にもほぼ2本平行の細くて短かい線が数ヶ所認められるが図化困難であった。

Ⅱ－3号横穴墓　3・4号横穴墓とその周辺の1・2・5号の小型横穴墓は普通の横穴墓と小型横穴墓との関係，小型横穴墓の機能を考える上で興味深い資料である。3号横穴墓は羨門が長方形で，その外側に三重の飾り縁が付いている。内側から第1の飾り縁は方形，第2の飾り縁は家形第3の飾り縁は左右のみで上部はない。羨門は幅52cm，高さ91cm，第1の飾り縁は幅 110cm，高さ 122cm，第2の飾り縁は幅 135cm，高さ 155cm，第3の飾り縁は幅 270cmを測る。羨道全体の長さは 130cmを測り，羨道と内部に至る通路との間には3cmの段差をつけている。羨門から70cmで玄室に至る。玄室は幅 173cm，奥行 240cmを測る長方形プランであるが奥の両隅は隅丸ぎみである。高さは 115cmを測り，天井はカマボコ形に近いが，棟や軒先はかろうじて陵がついている。両側の屍床と通路の間には仕切りがなく，あまり高さの差もないが，わずかに通路がU字形に凹んでいることで区別される。奥屍床は左右屍床よりも10cm程高く造られているが，やはり仕切りはない。

線刻は玄室の左側の軒先付近から天井にかけてと，入口側の壁面の入って左側のところにみられる。いずれも非常に細い線で描かれており，玄室左壁の軒先付近には4本程

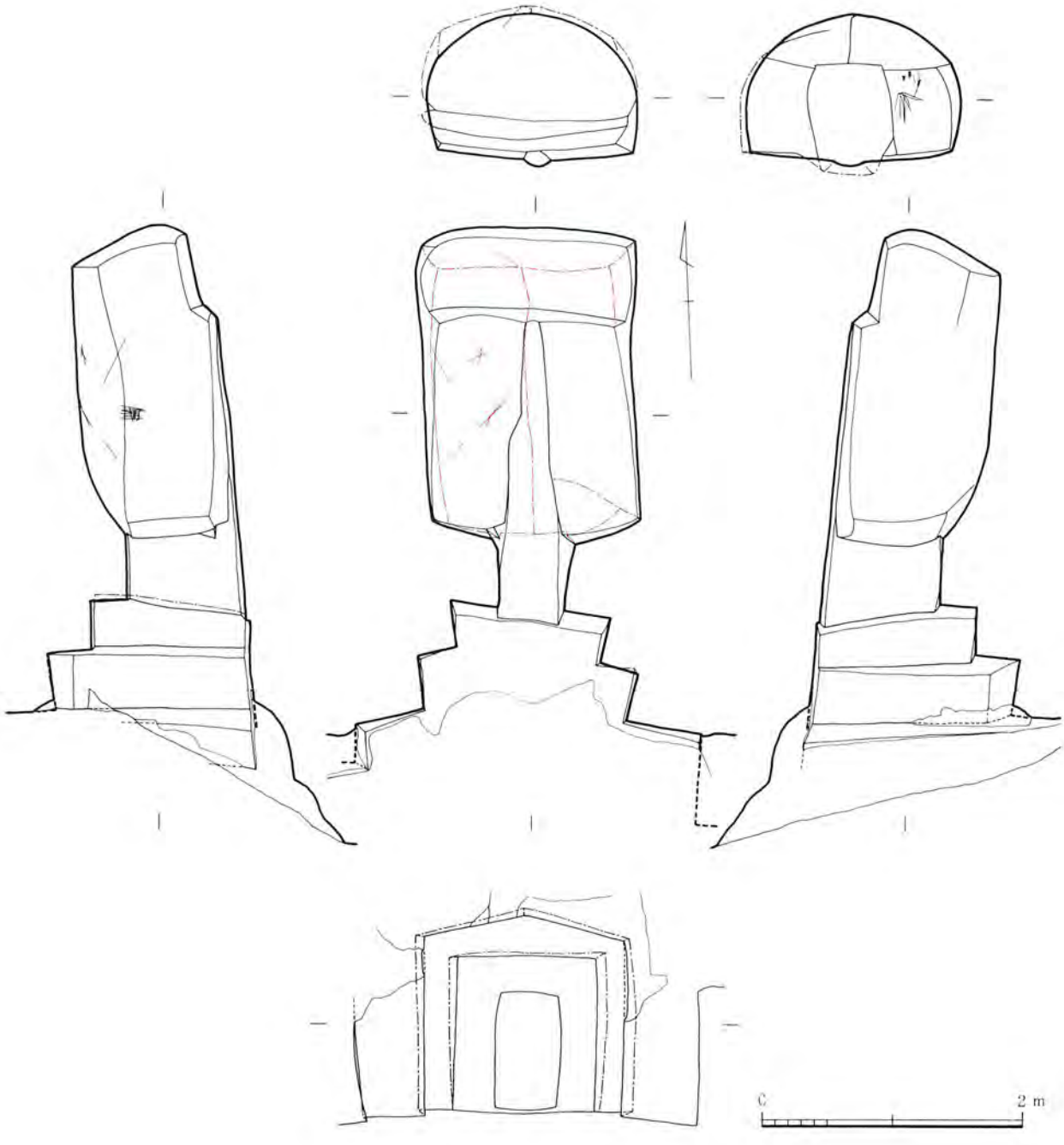


75の5図　石貫古城Ⅰ—26号横穴墓実測図

の横線と多数の縦線が，ほぼ四角い範囲にみられ，矢を入れた靫と見れないこともないが，雑な図で，はっきりしない。その上の天井にも一本の直線や，交差する直線などがあるが図文とはなっていない。入口側の壁面には一ヵ所から横と下方に長く伸びた植物の葉のようなものを描き，その上に左右に対についた葉あるいは麦の穂を連想させる絵を描いている。これらの線刻は非常に細線でかつ小さく描かれているが後世の落書きとも考えにくいので一応線刻文として扱っておく。なお外面の第2の飾り縁には後世に銘文などが刻まれている。

Ⅱ—13号横穴墓　Ⅱ群中で，4号・11号・17号・18号とともに大型の類に属する横穴墓である。線刻文はこの横穴墓群で最も秀れているが，残念なことに壊れて玄室を直接露出している。また通路は後世に竈として使用されたため，焼土や焼け石がみられ，通路も焼け，玄室全体にも煤が付着している。羨門の形状は不明で，通路の残存部から奥壁までは 300cmを測る。玄室は長方形プランで，幅 180cm，奥行き約 260cmを測る。通路面から天井までは 230cmで，天井は平担である。天井と奥壁の境には軒先状の抉り込みがある。屍床は通路よりも約40cm高く，左右にのみ設けられている。両屍床とも奥行きはあるが，幅は右が50cm，左が60cmで，両方とも壁面近くは斜めになっているので，通路に遺体が落ちるのではないかと思う程狭いのは不思議である。なお左右両壁とも同じ位置に縦につけた傷があるがこれは当初奥屍床を造ろうとしてつけて，設計変更したことを示すものである。その他，横穴墓の壁面の工具痕から推定すると切先が幅3.5cmの工具が使用されたことがわかる。

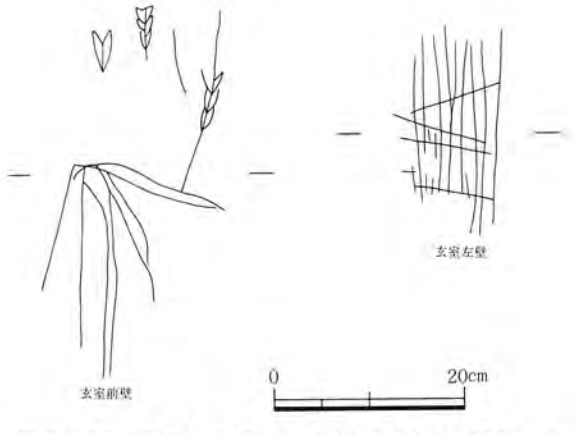
線刻文は左右壁と奥壁にみられ，舟を主体とした図柄である。左壁の線刻文は右上にゴンドラ形の舟の中央にマストが立てられ，長方形に張った帆が右から風を受けて大きく膨らんだ状態を描いてある。舟から出た直線は櫂で，船尾にみられる曲線は舵を表現したものであろうか。この舟は船首から船尾まで22cmに描かれている。またその左には右の舟ほど反りは強くないがやはり三日月形をした舟が描かれている。この舟のマストは途中で切れているが，おそらくその上方の縦線はその続きを描いたものでそのマストに大きな逆三角形の帆を張った状態を表現したものと考えられる。しかし一方では短かく立てたマストに三角形の帆を張っていると解釈することも可能である。この舟からも櫂あるいは舵状の線がのびている。この舟は長さ18cmを測る。二隻の舟の間にも舟あるいは鯨や魚と考えられるものが描かれている。もし鯨であれば捕鯨の状態を表わしたものであろうが断定できない。右下にも何かを大きく描いてある。見方によってはこれも鯨や魚にも見え，また舟を斜め上方から見た図にも見える。その他下方にのびた線と屈折した線を足とみれば，何かを被って踊る人物あるいは



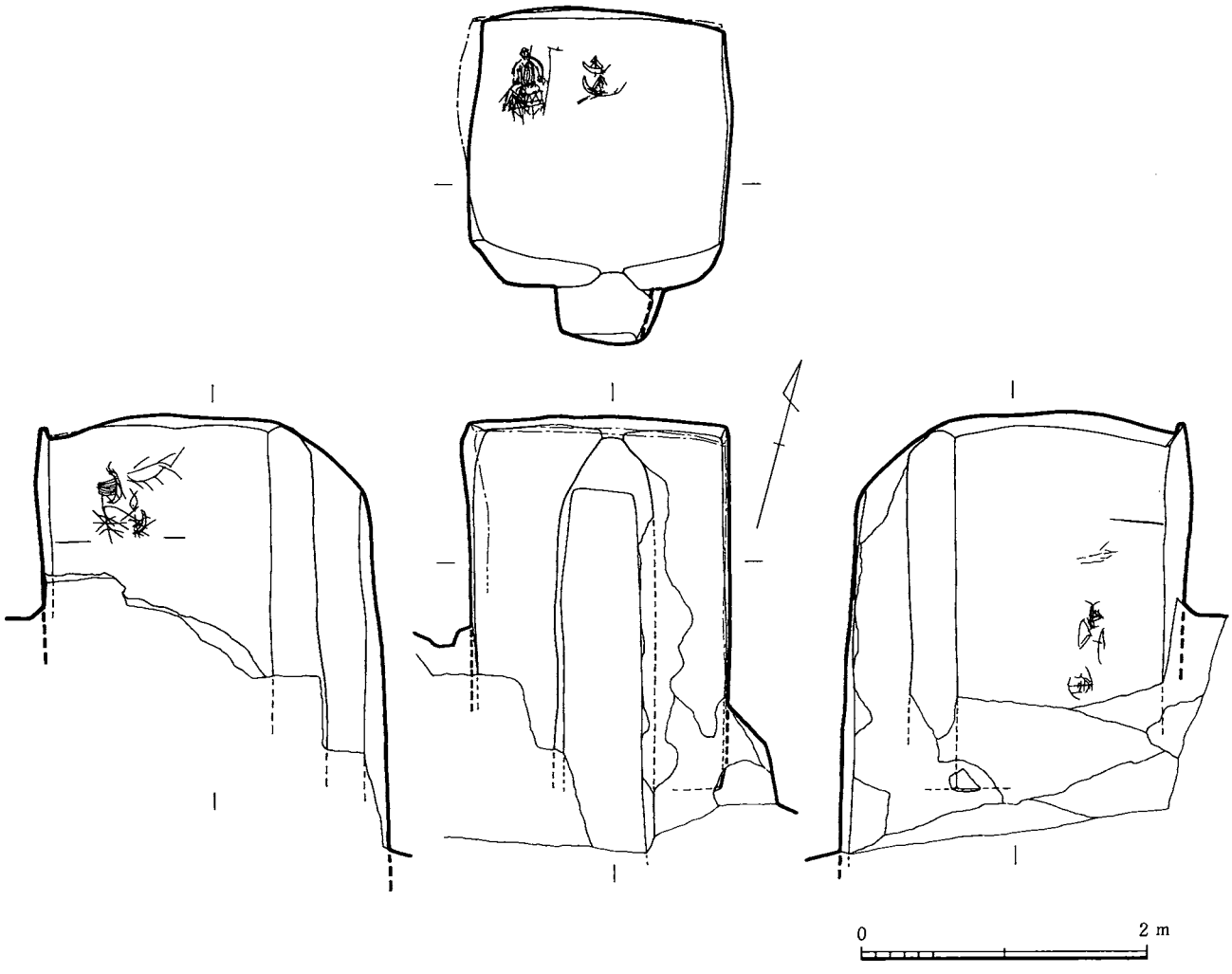
75の6図　石貫古城II－3号横穴墓実測図

薦を被ったこじきのようにも見える。この図文の大きさは縦39cmを測る。この他にも多くの直線や曲線がみられるが何であるか不明である。

奥壁の線刻文は左に人物，その右に二隻の舟が描かれている。人物は顔が写実的に表現してある。面長で，眉は一方は直線で，もう一方は丸く山形に引き，眼は菱形でややつり上がり，目尻は切れている。また眼球も描かれている。鼻は横から見たように描かれ，口はないが，耳の表現もある。首は細く，胴部や腕は顔に対して大きく，がっしりしている。指の表現もあるが丸くかこまれているので，握り拳を表現しているようである。手首に横線があり首の下にV字状の線があるのは，長袖の衣服を着た状態を描いているのではないかと考えられる。腰はややくびれ，楕円形に



75の7図　石貫古城II－3号横穴墓装飾文実測図



75の8図　石貫古城II－13号横穴墓実測図

表現している。その下方の表現がわかりにくいが，おそらく鋸歯文を入れたスカート状のものを描いているのではないかと考えられる。その下の縦線は足の表現を簡略化したものであろうか。この像は縦54cmを測る。人物の顔の横から足のところまで棒状の線が引かれている。また人物の横に先端に何かをつけた棒も立っている。人物の右手の下には斜め下方に方射状に広がった線があるが何を表現しているのであろうか。人物の右にある舟は上下に2隻描かれている。いずれも左側が船首と考えられ，船首のみを強調している。この手法は宇土郡不知火町桂原古墳など宇土半島基部の古墳群にも見られる。また2隻とも三角形に帆を張っており，櫂あるいは舵らしきものもみられる。上の舟は長さ20cm，下の舟は長さ30cmを測る。

右壁には入口側に舟を4隻描いている。最も右の舟は船体を一本の線で描き，マストを立て，上方は三角，下方は四角の帆を張っている。船尾の下の短かい曲線は舵であろうか。舟の長さは15cmを測る。中程の上の船は船体を浅く描いており，帆らしきものがあるが形がはっきりしない。櫂らしきものもみられる。舟の長さは24cmを測る。その左下方の舟は両端が反っているがやはり船体は浅く描かれている。マストは先端だけ描き，舟いっぱいに三角形の帆を張っている。右下には舵らしきものが描かれている。舟の長さは19cmを測る。最も左側の舟は船体に横線を引いているので構造舟を表わしていると考えられる。その上には三角形の帆などがある。船尾には舵と考えられる線がある。これらの舟以外にも線刻があるが図柄がはっきりしない。なお，これらの線刻文は複数の人によって描かれたらしく，三つの壁面とも舟の描き方が異なっている。

備　考　7号横穴墓の装飾は当時県立玉名高校教諭の卯野木盈二氏と同校考古学部の実測調査により確認された。

（高木正文）

〔参考文献〕

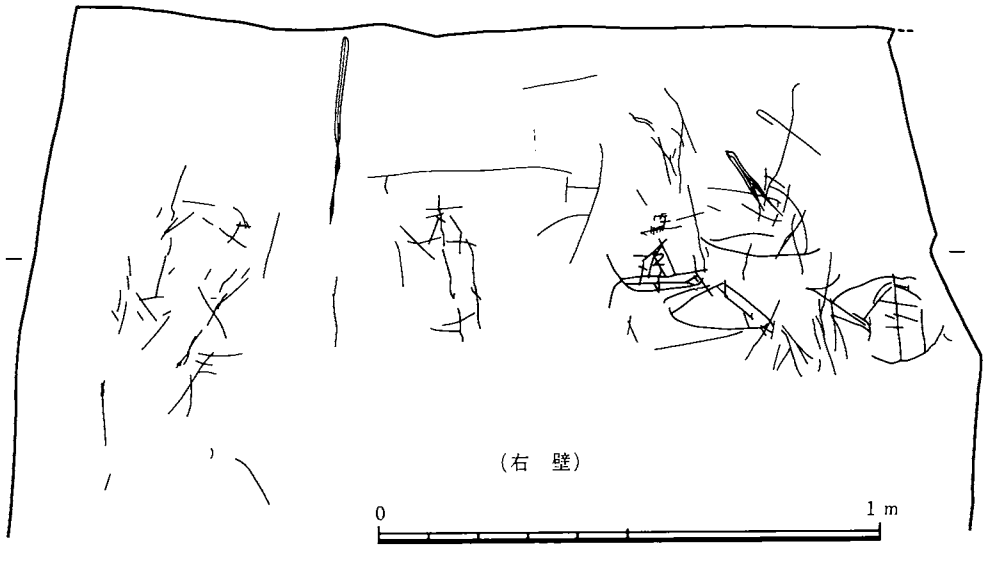
①西田道世他「玉名市石貫古城横穴古墳群調査記」『玉高考古学部部報』13　熊本県立玉名高校考古学部　昭和40年(1965)

②田添夏喜「石貫古城横穴群」『玉名市の文化財』2　玉名市教育委員会　昭和46年（1971）

③田添夏喜「石貫古城横穴群」『熊本の装飾古墳』松本雅明編著・白石巌写真）熊本日日新聞社　昭和51年（1976）

（奥　壁）

（左　壁）

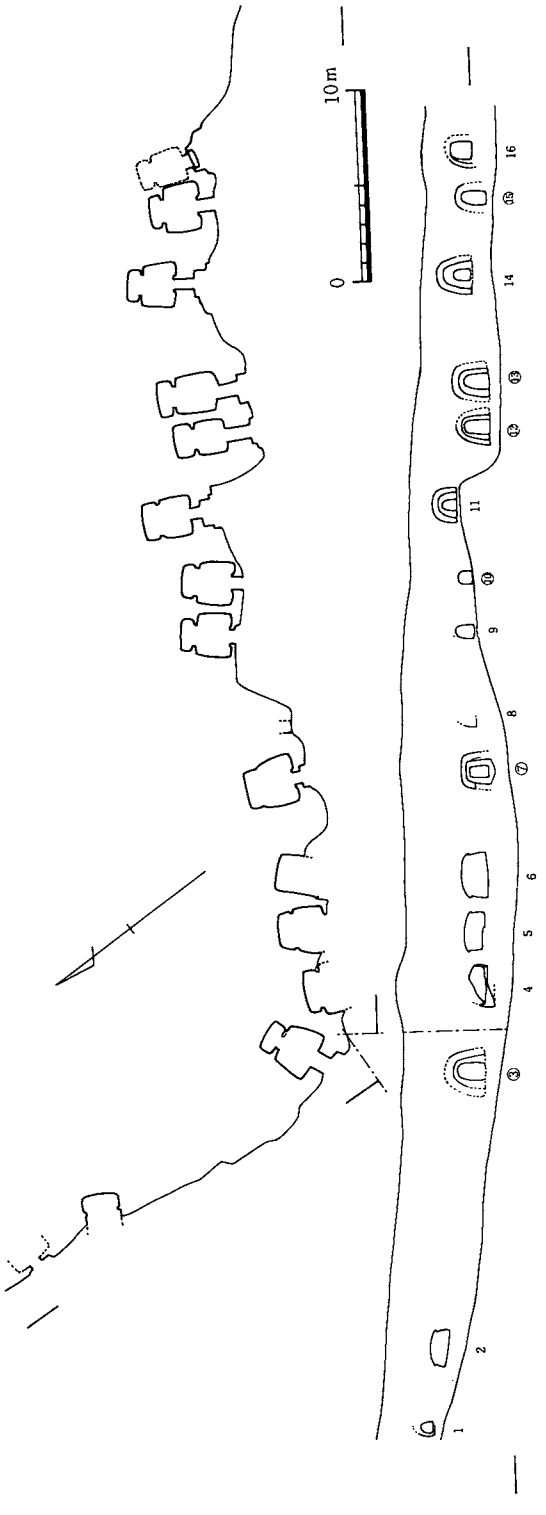


（右　壁）

75の９図　石貫古城Ⅱ－13号横穴墓装飾文実測図

76．原横穴墓群（⇨73の１図，76の１～10図）

——玉名市富尾原——



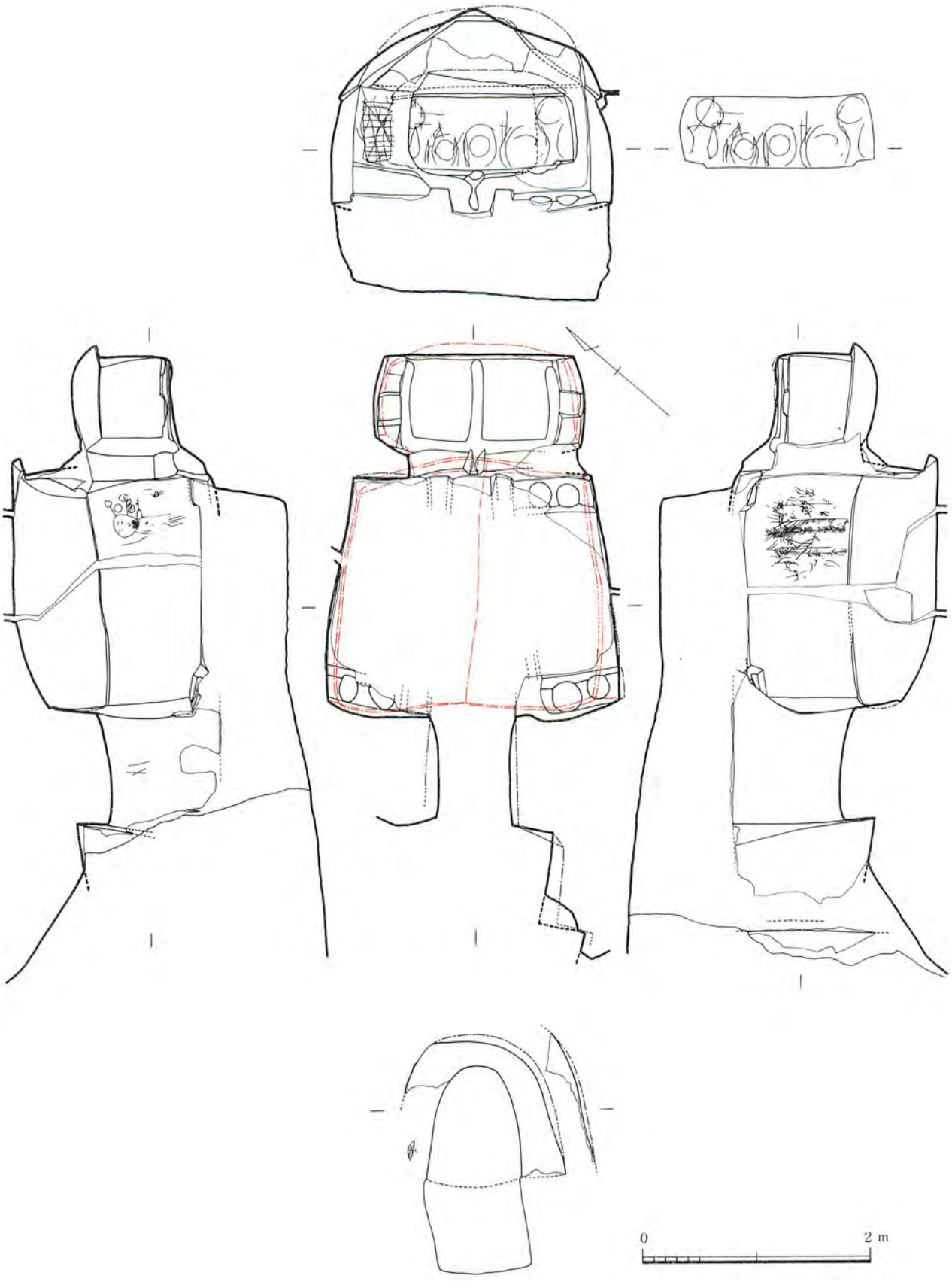
76の１図　原横穴墓群配置図

立　地　小岱山から南東に伸びてきた台地の上に富尾集落の氏神菅原神社があり，その南西の凝灰岩崖面に原横穴墓群がある。

分布と概要　70mの範囲に全部で16基確認される。左から番号をつけ，３号と７号に装飾があるのは田添夏喜氏らの調査でわかっていたが，今回の調査で10号・12号・13号・15号にも装飾があることが確認され装飾横穴墓は全部で６基となった。また11号は内外の全面が赤色顔料で塗られており，装飾には含めていないが，この群の中で重要な位置を占める横穴墓である。最も右端の第16号は近年の土砂崩れによって発見されたもので，上部にやや丸みをつけた閉塞石が閉じたままである。この横穴墓群の前には民家があり，一部は崖面が削られて横穴墓が破壊されている。また内部を倉庫にするため改造したものもある。１号と８号は埋もれているので構造が不明であるが，他はすべて，奥と左右に屍床をもつ「コ」の字形屍床となっている。

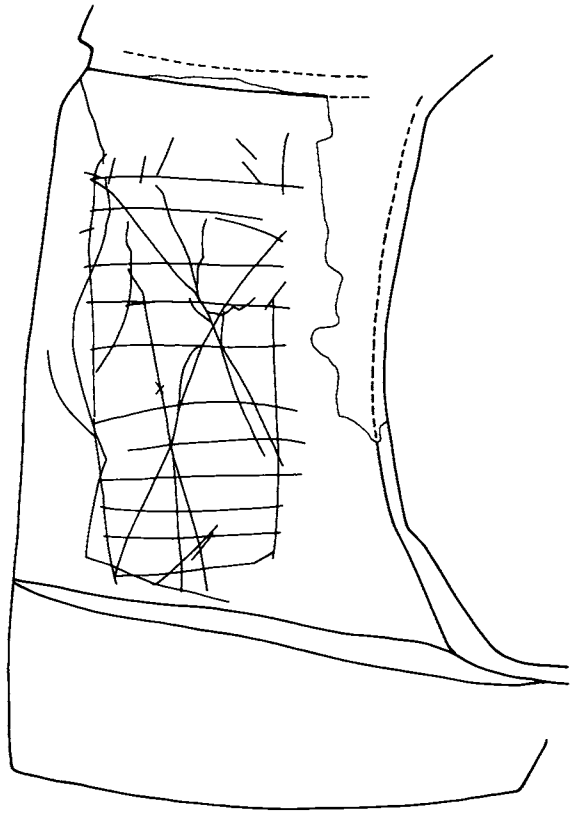
３号横穴墓　崖面が西に面した部分から南に面した部分へと変換する位置に造られた横穴墓である。内部から羨門部にかけて下方を掘り下げて改造してある。また内部の亀裂と，外部の風化が激しく，羨道部下部が抉れ，今にも転落しそうである。羨門部は幅85cm，高さ約 105cmを測るアーチ形で，その外側にやはりアーチ形をした二重の飾り縁の一部が残っている。通路のうち羨門から玄室までは95cmを測る。玄室の奥屍床を除いた形態は切妻の家形で，棟と軒先の表現がみられ，床面は抉られているが，残存部から考えると左右に屍床を設け，右屍床は奥と入口側にそれぞれ２個ずつの造り付け枕があり，左屍床にも入口側に２個，奥の数は不明であるがやはり２個の枕があったものと考えられる。これらの枕は屍床より５～10cm高く，それぞれ円形のくぼみをつけている。奥屍床を除いた平面プランはやや奥が狭くなった台形で，最大幅 266cm，奥行 208cm，高さ約 185cmを測る。奥屍床も前部の右側から上部が壊されているが，復原した正面観は両側に袖石状の壁をもち，その上は浮き彫りの屋根になっている。奥屍床の両側にはそれぞれ１個ずつの方形に抉った枕があり，左側の奥隅にもやや凹んだところがあるが，これが枕であるかどうかは不明である。床面の中央部と両側の枕の前から排水の溝が掘られ，仕切りに接して続いており，仕切り中央部の切れ込み部に集約されている。奥屍床の天井部は軒先の表現はあるが，上部は低いドーム形である。奥屍床の奥行きは88cm，幅 188cm，高さ86cmを測る。なお玄室の全長は 311 cmを測る。

装飾はすべて線刻で，内壁の５ヵ所にみられる。①左屍床の壁面奥寄りにあり，一人の人物が描かれている。頭は丸く髪の表現はなく，眉は細く，目も切れ目である。鼻または口とみられるものがあり，顎髭を生やしている。頭の右側に頭から伸びた２本の直線があり，それぞれの先端に

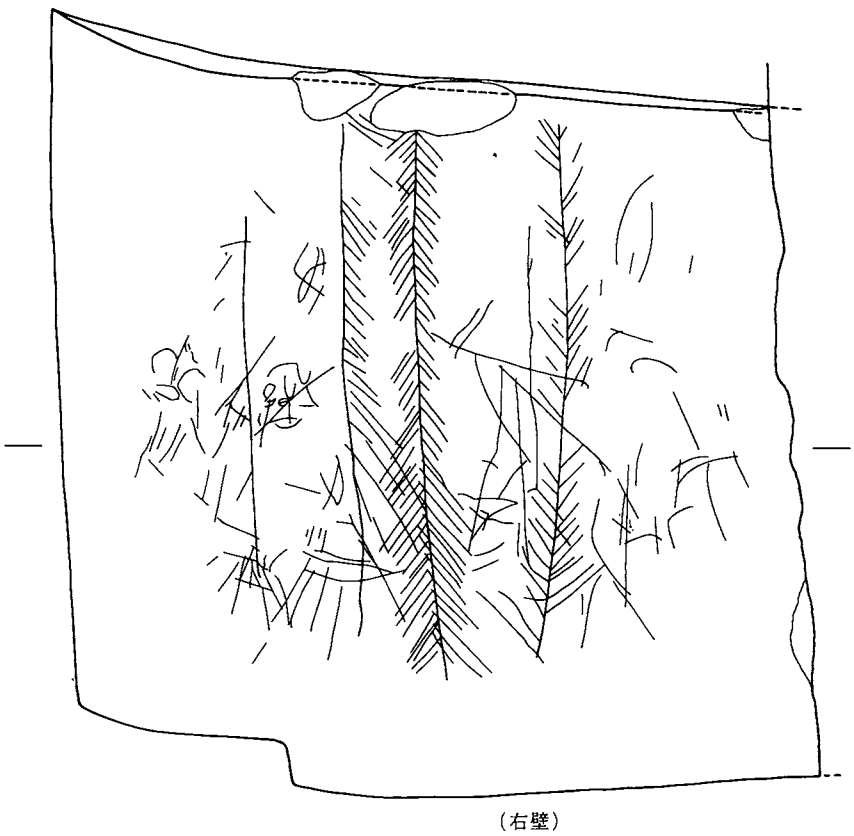


76の 2 図　原 3 号横穴墓実測図

（左壁）



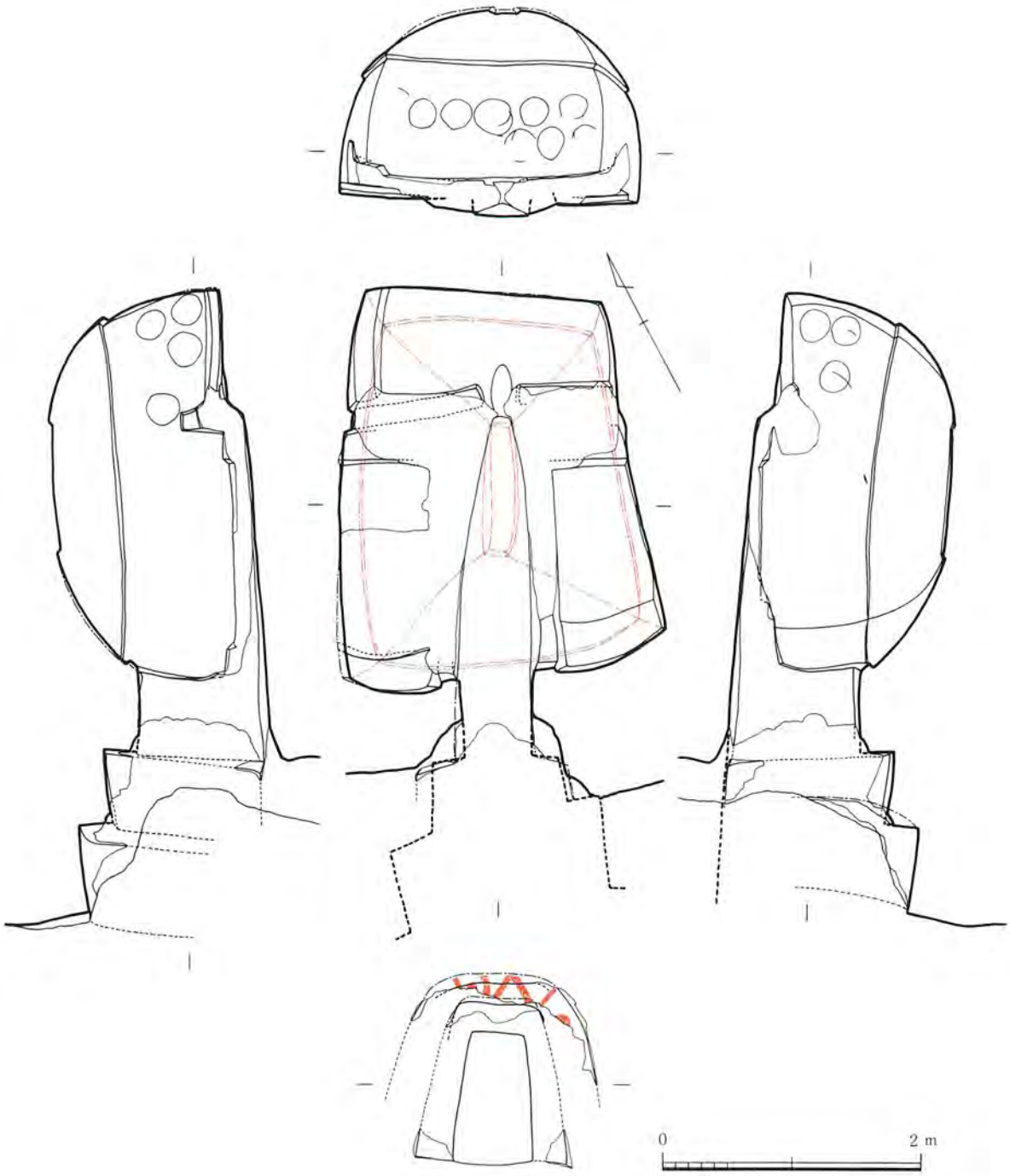
（奥屍床左前面）



（右壁）

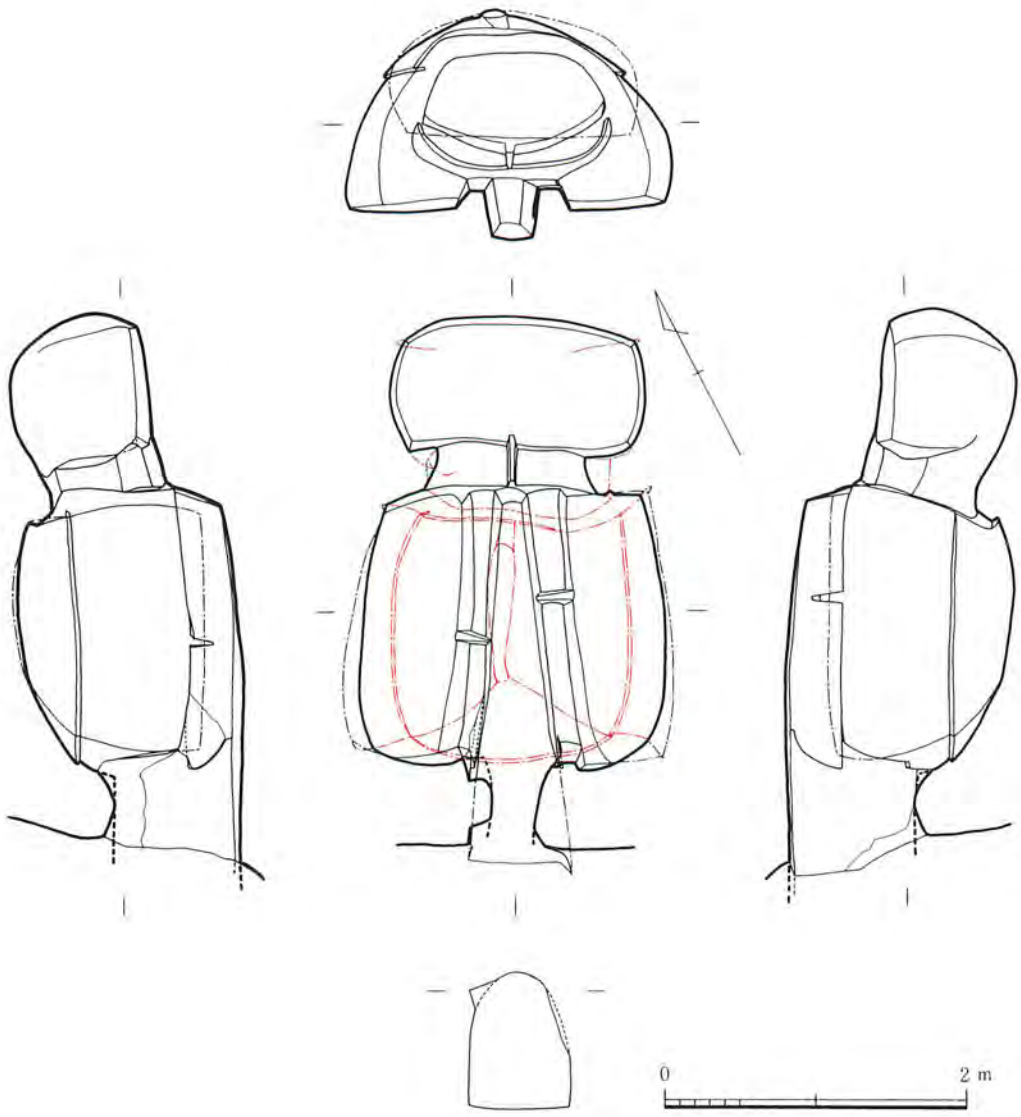
0　　1 m

76の 3 図　原 3 号横穴墓玄室壁面装飾文実測図



76の4図　原7号横穴墓実測図

不正形の円がついている。またその間にも円文1個がある。下の直線の途中下方には葉または花とみられるものがついている。その下には人物の左手らしいものがある。右手の表現は胴部下方が剝落しているのではっきりしないが，下に垂れているようである。その横には棒のようなものが立っている。足状のものも描かれているが簡略化されている。②左側屍床奥の枕の上にあたる，奥屍床前面の左側袖状部分に描かれている。不整形な縦長の長方形の区画をつくり，その中を平行横線で埋め，さらに数本の交差する斜線を引いている。上方にはいく本かの短かい斜線があるが風化のためはっきりしない。おそらく皮張りの盾の骨組みを表現したものと考えるが，上方の状態から靱である可能性も否定できない。なおこの線刻の描かれた位置と対応する右側のところにも線刻があったと推定されるが改造時に破壊されている。③右屍床の壁面奥寄りのところにあり，①の人物像と向かい合った位置にあたる。この部分の線刻は複雑であるが，大きくみると図柄の中に縦に引かれた4本の直線があり，右端の直線はそれを中心に左右の斜め上方に多数の平行斜線を引き，シダ植物を思わせる。次の直線はそれをさかさにしたような平行斜線がつき，さらに次のには右側にのみ斜め下方の平行斜線がついている。最も左の直線にははっきりした平行斜線はみられない。これらのシダ

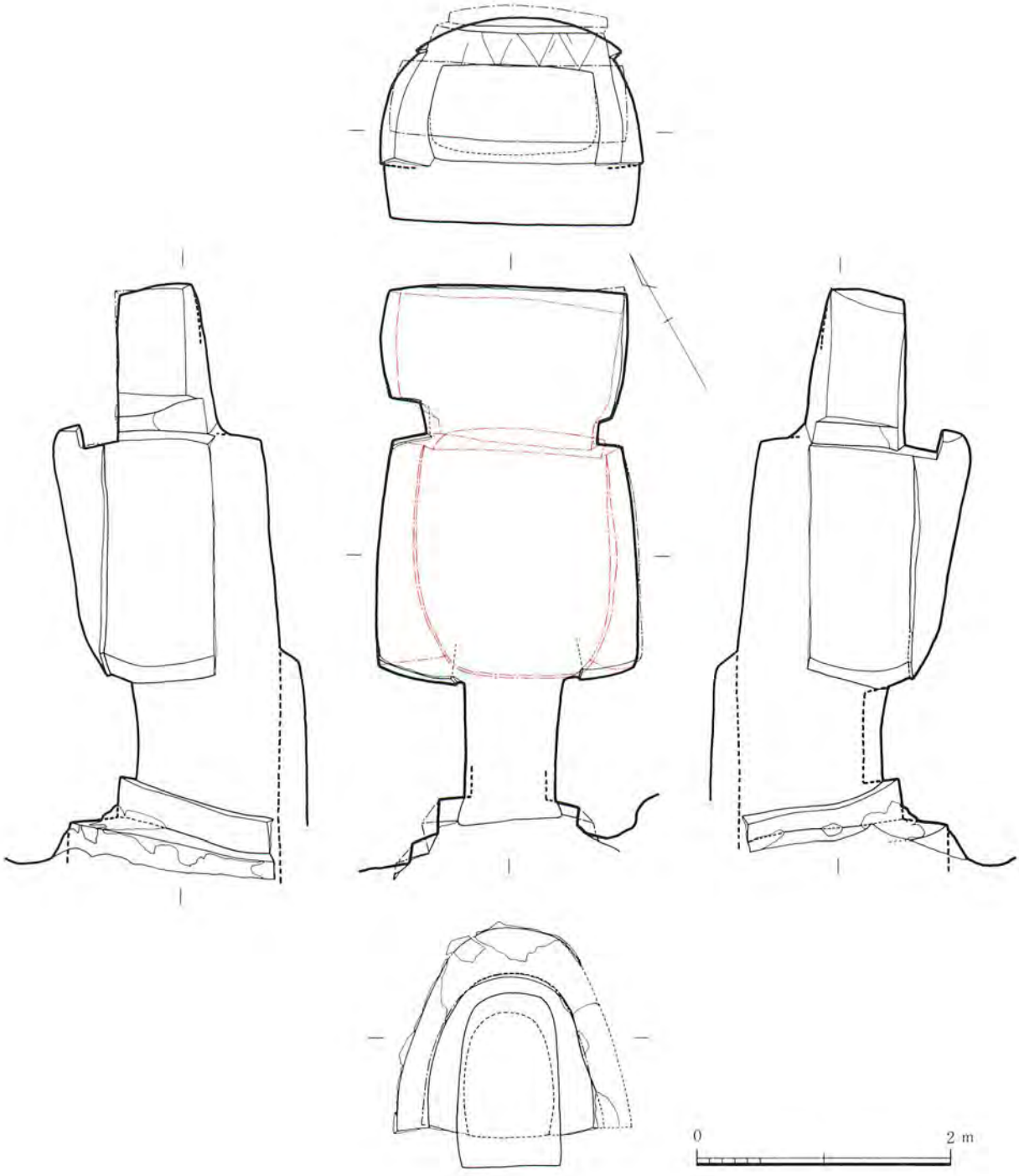


76の５図　原10号横穴墓実測図

植物状の文様の間やその外側には自由画風の線刻がいくつもあるが，何が描かれているかはっきりしない。④奥屍床前面の浮き彫りの屋根にも線刻の痕跡があるが，破壊と風化により何が描かれていたのか確認が不可能である。⑤奥屍床の奥壁全体に円文が線刻で描かれている。上下二段に別かれ，上段には両端に一重の円文があり，下段には二重の円文が３個と，右端に一重の円弧，左端に一重の円１個と円弧が描かれている。いずれの円もフリーハンドで描かれており大きさも一定していない。これらの円の間にいくつか直線もあるが何を表現したものかはっきりしない。以上の５ヵ所のほかに羨門から玄室へ至る通路の両側にも線刻があるが，何を描いてあるのか，また横穴墓の時期のものであるか不明である。また羨門部の左側には小さな弓のような線刻がある。これは風化面の一部を削って描かれているが，横穴墓の羨門部を造る際風化面を一部残したまま造ったのであれば当時のものと考えることができるが，横穴墓築造後に風化して剝落し，そこに描かれたのであれば追刻と考えられる。筆者は後者の可能性が強いと考える。

７号横穴墓　横穴墓群の中央部付近にあり，岩質は他の部分に比べるとやや硬質である。羨門は幅63cm，高さ 100cmで，その外に二重の飾り縁がついている。羨門部の正面観はやや上が狭くなった四角形であるが，飾り縁は外になるほど上部両端の角がとれ，第二の飾り縁はアーチ形になっている。羨門から玄室までは60cmを測る。玄室はやや奥が狭くなった台形で最大幅 256cm，奥行き 307cm，高さ 155cmを測る。天井は棟や軒先の表現のある寄せ棟の家形で，妻入りとなっている。棟は浮き彫り状に彫り出して表現している。床面は仕切りを壊して改造してあるが，「コ」の字形屍床で，奥の屍床には左に枕があり，左右の屍床には奥と入口側の両方に枕がついている。枕は６cm程の高さがあるが，頭を置く位置の抉りは造られていない。

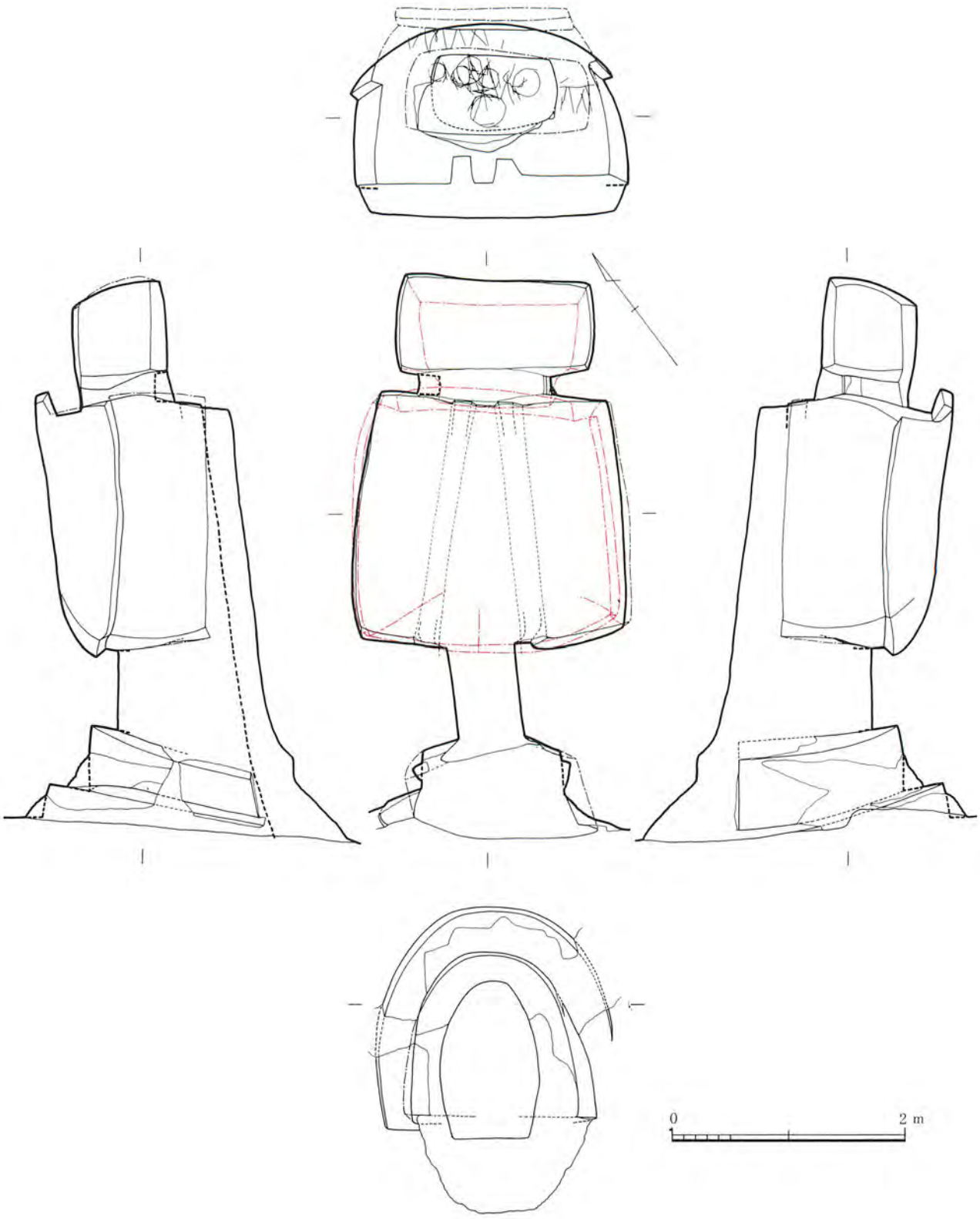
装飾は飾り縁と，玄室内壁にみられる。①飾り縁の装飾は羨門から数えて第１の飾り縁の外面にみられるもので，風化のため上部のみしか残っていないが，赤色顔料のみを



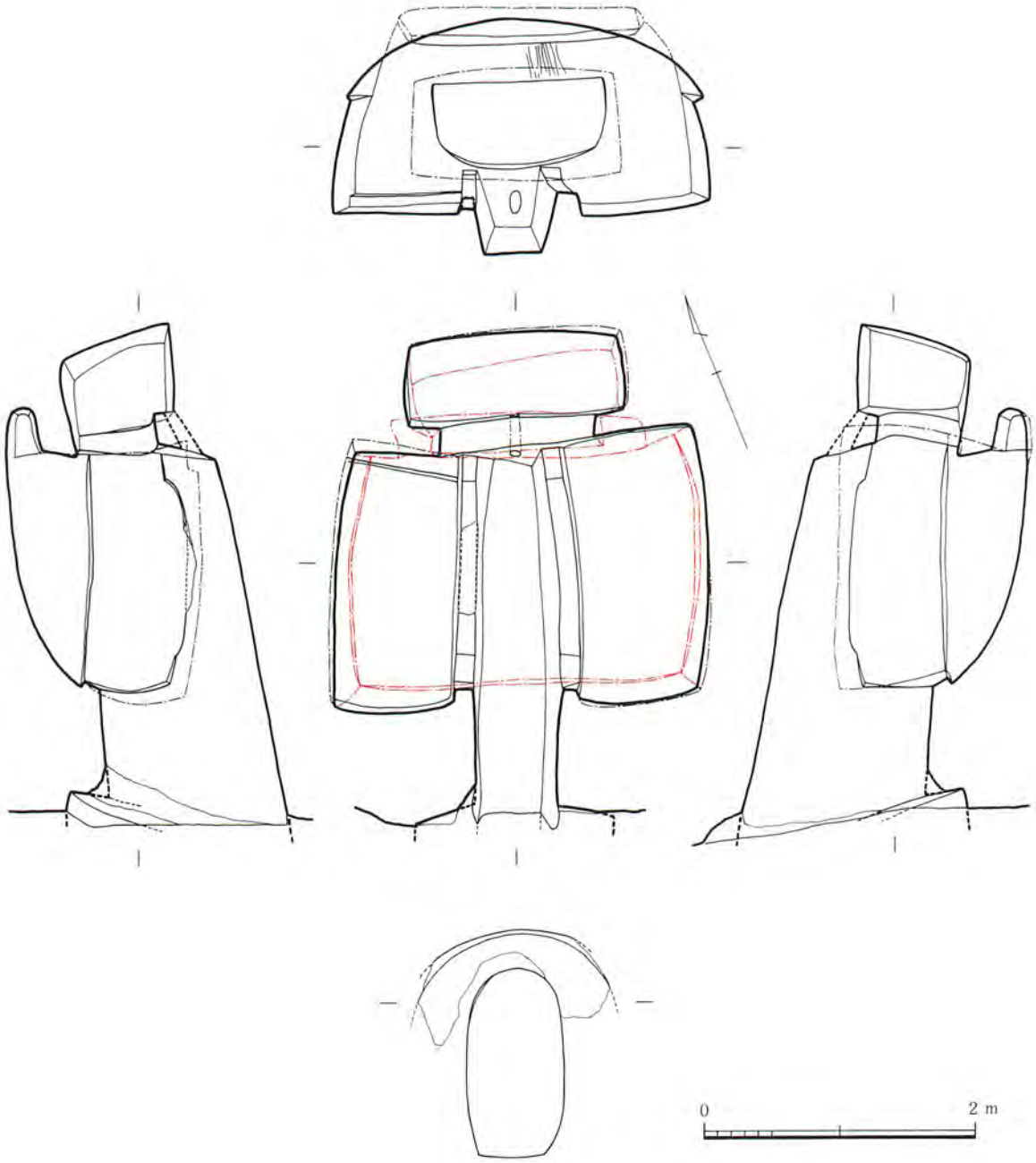
76の 6 図　原12号横穴墓実測図

使用し，上部には鋸歯状文様を描き，一ヵ所には円を配し，右に下降する位置にも円が描かれている。この横穴墓群で彩色の文様の残る横穴墓はこれだけである。②玄室内壁の装飾は奥壁とそれに続いた奥屍床部分の左右壁にみられる。いずれもフリーハンドによる線刻の円文である。奥壁の中段には円文５個が並び，下段には右端に３個の円文が認められる。また右壁の奥には中段に２個，下段に１個の円文，左壁の奥には中段，下段とも各２個の円文がみられる。なお内壁は線刻のみで，最初から彩色は行なわれていなかったと考えられる。

10号横穴墓　南に面した横穴墓のうち，９号，11号と共にやや高い場所にある横穴で，羨門部から外側は削平されている。羨門部の幅68cm，高さ88cmで，アーチ形になっている。羨門部から玄室まで86cm以上を測る。玄室の隅はすべて丸みをおびており，奥屍床は別造りになっている。奥屍床を除いた部分は妻入り寄せ棟の家形になっており，棟や軒先も造られているが，全体的に丸みがあるためドーム形天井を思わせる。左右屍床の仕切りは高くはっきりしているが，排水の切れ込みは左右で位置がずれている。また枕は造られていない。奥屍床を除いた玄室の幅228 cm，奥行186 cm，高さ 145cmを測る。奥屍床は高い位置に掘られており屍床は平担で枕はなく，天井はドーム形である。奥屍



76の７図　原13号横穴墓実測図



76の 8 図　原15号横穴墓実測図

床の奥行きは86cm，幅 176cm，高さ89cmを測る。玄室の全長は 298cmである。

装飾は他の装飾とは趣きを異にするのが３屍床の仕切りにみられる。奥屍床仕切りの前面にはその下方に大きく溝を入れて仕切り全体を浮き彫りのゴンドラとしている。また左右の仕切りも通路側からみると，入口に向かった所が舟の舳先状に浮き彫りとなっている。これらは彫られた位置が他の装飾とは異なるが，明らかに浮き彫りの舟であり，一種の装飾とみることができる。

12号横穴墓　後世に倉庫に改造されており，玄室の床は掘り下げられてコンクリートで塗られ，羨門部は当初のままかと見紛う程上手にアーチ形に拡張されている。羨門の当初の大きさは不明であるがアーチ形をしていたと考えられ，その外側に二重のアーチ形の飾り縁がついている。羨門から玄室までは長く，約 110cmを測る。玄室のうち奥屍床を除く部分の床面は方形に近く，左右に仕切りの痕跡が残っている。天井は軒先の表現はあるがカマボコ形に近く，奥の方が高くなっている。幅 213cm，奥行 192cm，高さ約16 0cmを測る。奥屍床前部は左右に袖状に残し，その上部は屋根状にせず，その上を抉っているので，天井石を石棚状に乗せたような形になっている。仕切りは破壊されているが，床面・天井とも平坦である。奥屍床の奥行き約 100cm，幅 197cm，高さ74cmを測る。玄室の奥行き全長は 306cmである。

装飾は奥屍床上部の石棚状に造られた部分の前面にあり，線刻で連続三角文（鋸歯文）が描かれている。

13号横穴墓　この横穴墓も羨門部が拡張され，玄室床面も掘り下げられている。羨門はアーチ形で，その外側に二重の飾り縁がついている。外側の飾り縁の幅は約 205cmで，高さは 188cmを測る。羨門から玄室までの長さは復元すると 100cm程度と考えられる。玄室の構造は隣の12号横穴墓と似ており，奥屍床を除いた床面は方形で，天井は軒先の表現はあるが奥の高いカマボコ形に近い。奥屍床の造りも12号横穴墓と同様である。奥屍床を除いた部分の幅242 cm，奥行き 212cm，高さ約 146cmを測る。奥屍床は奥行84cm，幅 173cm，高さ79cmを測る。玄室の全長は 308cmである。

装飾は３ヵ所にあり，いずれも線刻である。①奥屍床の上部の石棚状の部分の前面にみられ，中央部から左側にかけて連続三角文（鋸歯文）がフリーハンドで描かれている。②やはり奥屍床前面で，右側の袖石状のところに描かれている。横に線を引きその下に連続三角文（鋸歯文）を線刻している。③奥壁にみられ，上段にはフリーハンドで円文４個（うち１個はだぶっている）程が描かれ，下段中央に円文１個が描かれている。またこれらと重なって連続三角文（鋸歯文）状の線刻もみられる。

15号横穴墓　外部が崩れ落ちているが，羨門は幅74cm，高さ136 cmを測るアーチ形で，一段目の飾り縁の上部が残っているが，おそらく二重の飾り縁があったものと推定される。羨門から玄室までは 110cm程度と考えられる。玄室の構造は12号，13号横穴墓に似るが，奥屍床を除いた床面はより幅広で，奥行き 196cm，幅 286cmを測る。左側の屍床奥には造り付けの枕がある。天井は軒先の表現があるがドーム形に近く，奥が高くなっている。高さは 167cmを測る。奥屍床前面の上部は抉っているので石棚状になっており，内部の床，天井とも平坦である。奥屍床の排水は穴を通って中央の通路に出るようになっている。奥屍床の奥行き64 cm，幅 167cm，高さ82cmを測る。玄室の全長は277 cmである。

装飾は奥屍床の前面の石棚状のところにあり，中央よりやや右に右下がりの斜線が９本程引かれている。文様とはなっていないが，他の横穴墓の線刻と同じような線であるので当初からのものと考えられる。

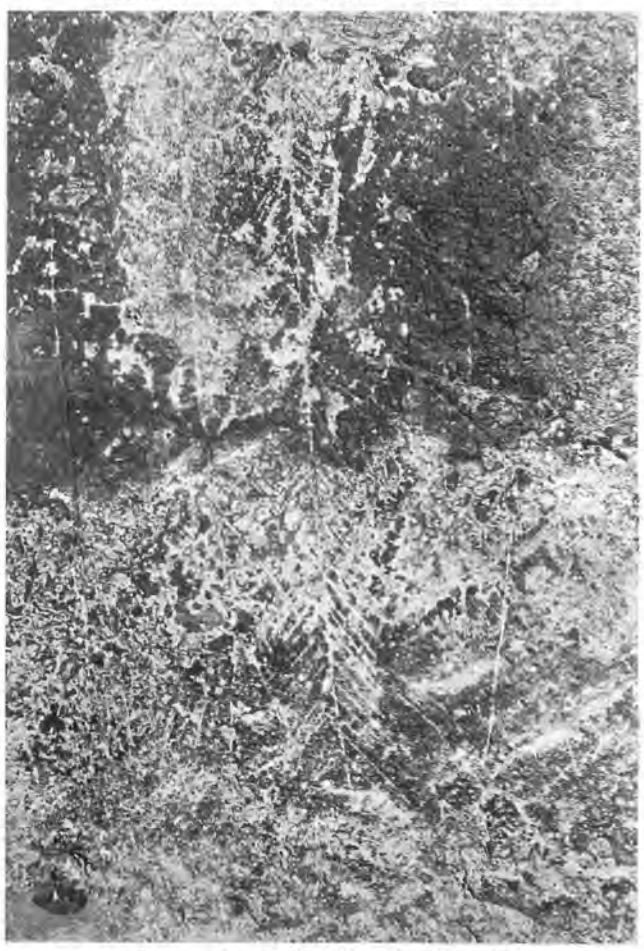
出土遺物　地元の人によると，この横穴墓群から昭和初期頃，鉄刀や須恵器などが出土したというが，行方不明である。

（高木正文）

〔参考文献〕

①田添夏喜「原古墳群」『玉名市の文化財』３　玉名市教育委員会　昭和47年（1972）
②『装飾古墳の壁画』佐賀県立博物館　昭和48年（1973）
③原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
④田添夏喜「原横穴群」『熊本の装飾古墳』松本雅明編著・白石巌写真　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑤森貞次郎『九州の古代文化』　六興出版　昭和58年（1983）

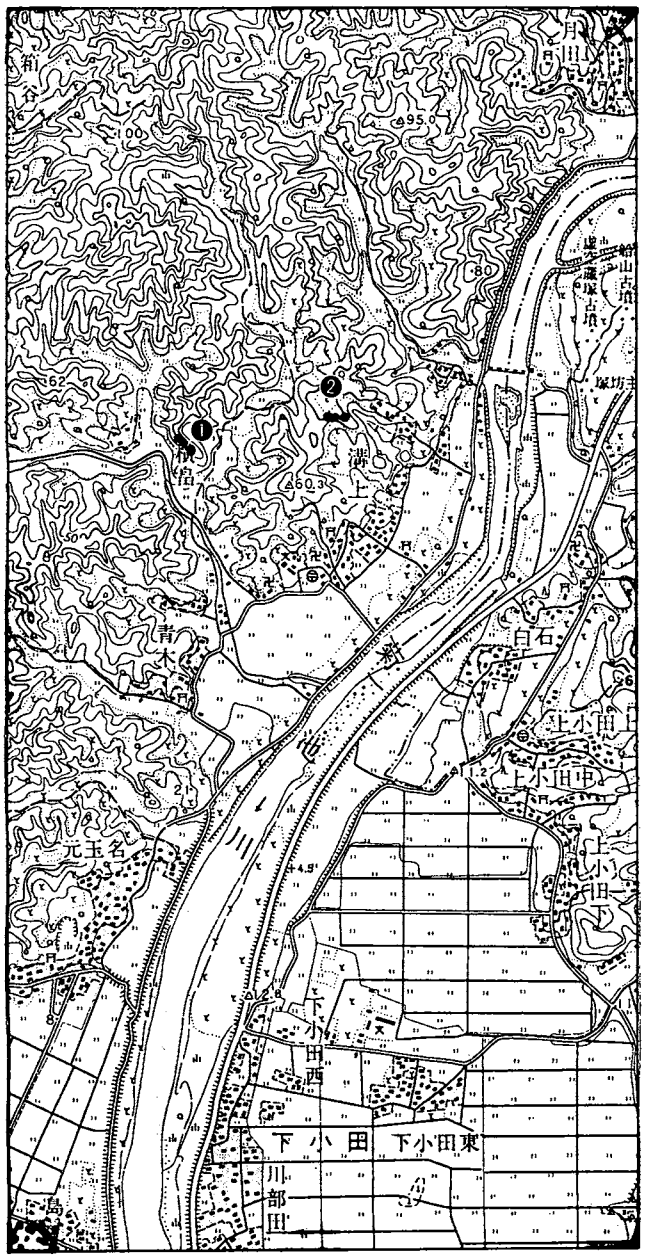
76の９図　原４号横穴墓玄室左壁の装飾文



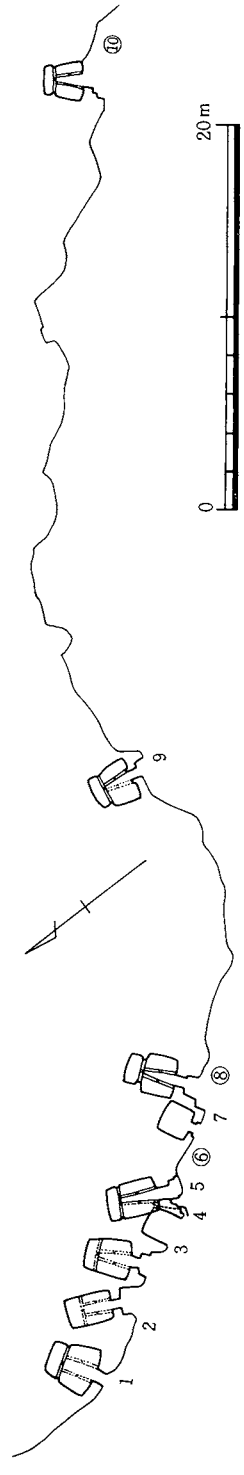
76の10図　原４号横穴墓玄室右壁の装飾文

77. 横畠横穴墓群 (⇨77の1～5図)

——玉名市溝ノ上横畠——



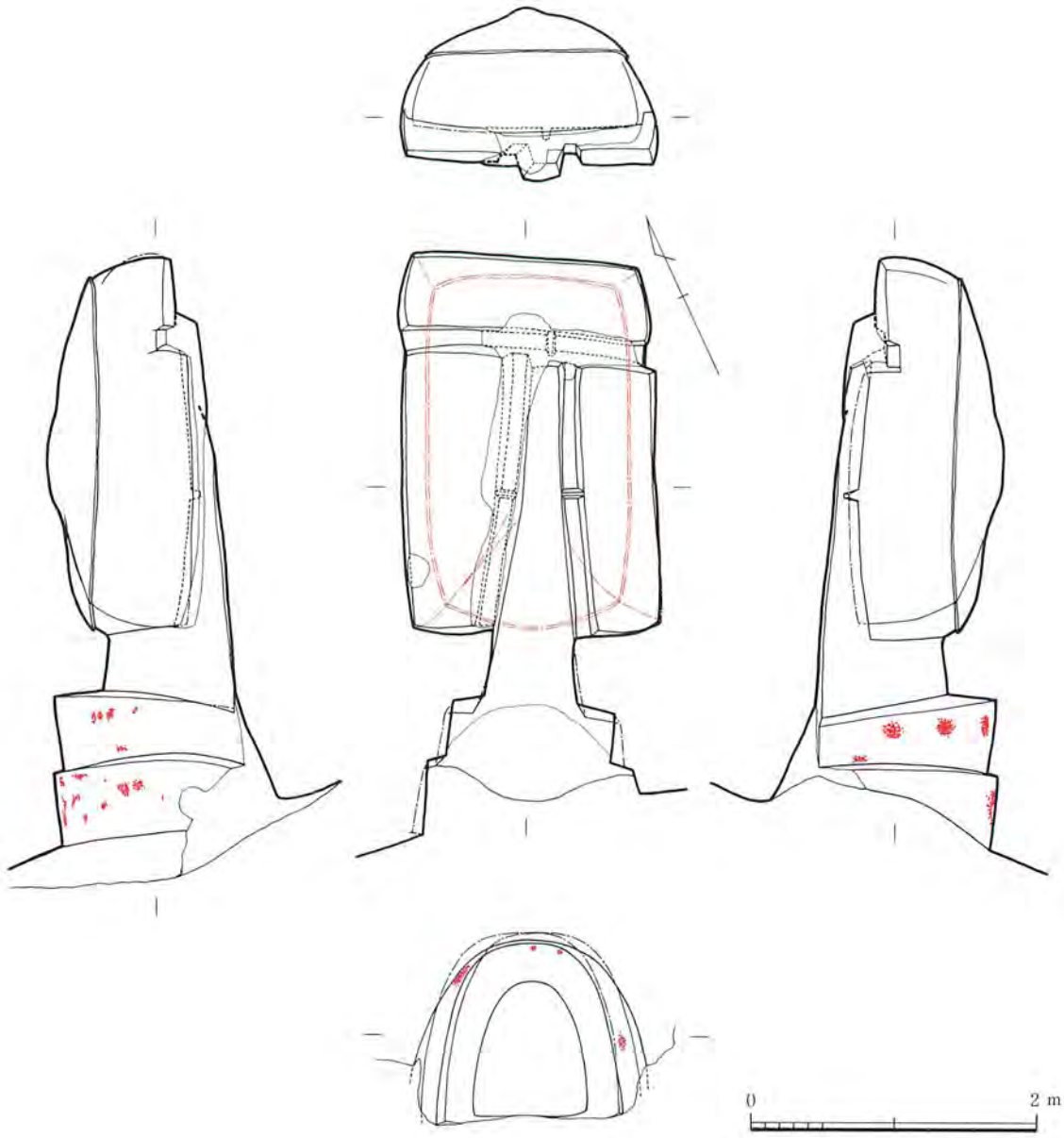
77の1図　横畠・城迫間横穴群位置図（玉名、25万分の1）
1.横畠　2.城迫間



77の2図　横畠横穴墓群配置図

立　地　菊池川支流の三蔵川を 1.2km程さかのぼったところの北岸，月田山から伸びて来た一支丘の南西にある。凝灰岩の崖面は丘陵の下部ではなく，尾根に近い標高約40mのところにあり，横穴墓群もここに造られている。

分布と概要　70m の範囲に10基の横穴墓がある。1号から8号までは割合密に造られているが，9号は15m 程離れたところに1基あり，10号は9号の地点からさらに35m 程離れたところにある。このうち4号と7号は床面が平坦で方形に近い。また5号は6号に付属した小型横穴墓である。その他の横穴墓は左右と奥の合計3区の屍床をもっている。3区の屍床をもつものでは床面が長方形で，天井が家形の1号～3号が古く，6号は中間形態で，奥屍床が高くなり，あるいは別造りとなり天井がドームに近くなった8号～10号が新しいと考えられる。装飾はこの横穴墓群のうち後半



77の3図　横畠6号横穴墓実測図

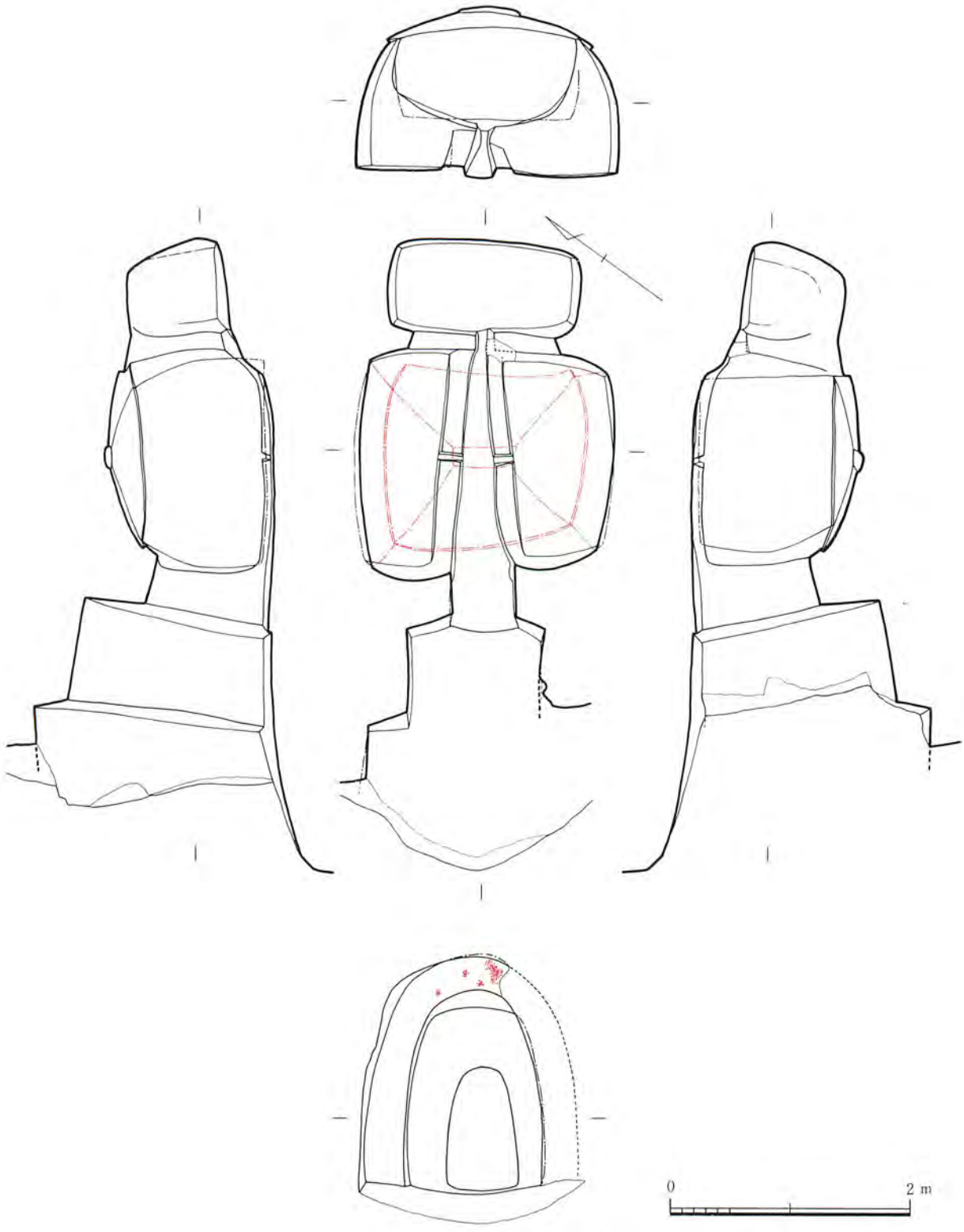
の時期に造られたと考えられる6号・8号・10号にある。このうち10号は新発見である。なおその他4号の内壁は全面赤く塗られている。

6号横穴墓　横穴墓群の中心部にある横穴墓で，1号～5号よりも一段高い位置にある。羨門部はアーチ形で，幅82cm，高さ93cmを測る。羨門の外側に二重のアーチ形の飾り縁がついている。外側の飾り縁は幅 166cm，高さ約 130cmを測る。羨門から玄室までの長さは54cmである。床面は奥に長い長方形で幅 180cm，奥行 262cmを測る。天井は軒先の表現があり，また天井中央部は上方にやや抉りを入れた棟の表現があるが，低くて断面はカマボコ形に近い。天井の高さは 116cmを測る。

装飾は羨門部外面，内側から数えて第一番目の飾り縁の内面および外面，第2番目の飾り縁にみられ，いずれも赤色顔料を用いて描かれているが，表面の風化が激しく文様の形状は明らかでない。ただ第一番目の飾り縁の内面は赤色顔料の残存状態から円文などが並んでいたのではないかと考えられる。

8号横穴墓　6号横穴墓とほぼ同じレベルにある。なお間の7号横穴墓はさらに高く，この群で最も高い位置にある。8号横穴墓は羨門の幅59cm，高さ 102cmを測り，二重の飾り縁がついている。羨道はやや長く，崖面から羨門までの長さは 186cmを測る。羨門から玄室までは56cmで，玄室のうち奥屍床を除いた部分は方形で幅 219cm，奥行き 190cmを測る。天井は平入りの屋根形で，高さ 141cmを測るが，軒先から棟までは非常に低い。奥屍床は少し高く，屍床・天井とも平坦に近く，奥行き77cm，幅 163cm，高さ84cmを測る。玄室の全長は 280cmである。

装飾は内側から第1番目の飾り縁の外面にみられ，赤色顔料で描かれているが，風化のため上部に一部残っている

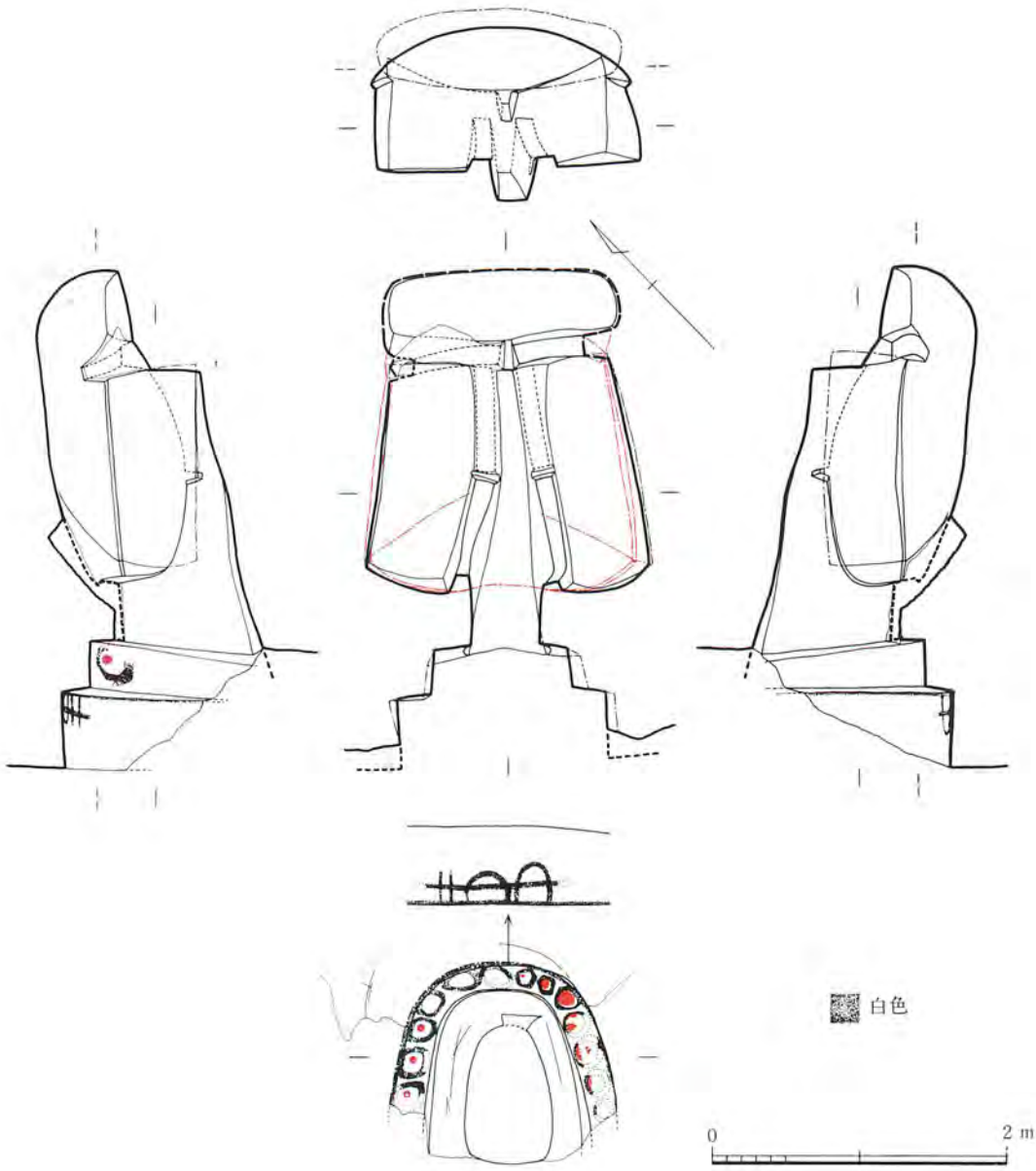


77の4図　横畠8号横穴墓実測図

だけで，形状は不明である。

10号横穴墓　右端に単独である横穴墓で，横穴墓自体も新発見である。内部に大きな亀裂が入り，入口全体がずれ，上部は右側に大きく傾き，右側は下に転落している。77の5図はそれらを図面上で復元したものである。羨門部はアーチ形で幅61cm，高さ93cmを測り，その外側に二重の飾り縁がついている。最も外側の飾り縁は幅 156cm，高さ約 140cm程度と考えられる。羨門から玄室までは約60cmある。床面は隅丸で，奥屍床が非常に高い。左右・奥とも屍床の仕切りは両端がはね上がっている。天井は軒先の表現はあるがドームに近い。玄室の幅 197cm，奥行き 214cm，高さ108cmを測る。

装飾は内側から第1番目の飾り縁の内面と外面，第2番目の飾り縁の内面にみられる。第1の飾り縁の内側は左側上方に赤色顔料で点を丸く書き，その周りに空白を残して白色顔料で囲んでいる。その他にもあったと思われるが消



77の5図　横畠10号横穴墓実測図

えている。第1の飾り縁の外面には全面に装飾が残っており，左側では赤色の点を四角の白色で囲み，上部になると赤色の点を五角形の白色で囲み，さらに右側では赤色が大きくなり円状になり，そのまわりを白色の円で囲んでいる。上方の白色だけのところも本来はその中にあった赤色が消えているものと考えられる。第2の飾り縁の内面は第1の飾り縁外面との間の角が全体にわたって白色の線で縁どられ，それと平行に白色の線が走っているが上部のみしか残っていない。上部には角の線から，平行な線をまたいでアーチ形の文様2個と直線文2本がみられる。さらにその外側にも文様があったらしいがよく見えない。このほか羨門の外面と，第2の飾り縁の外面に線刻があるがこれらは横穴墓を掘る際の設計の印と考えられる。　（高木正文）

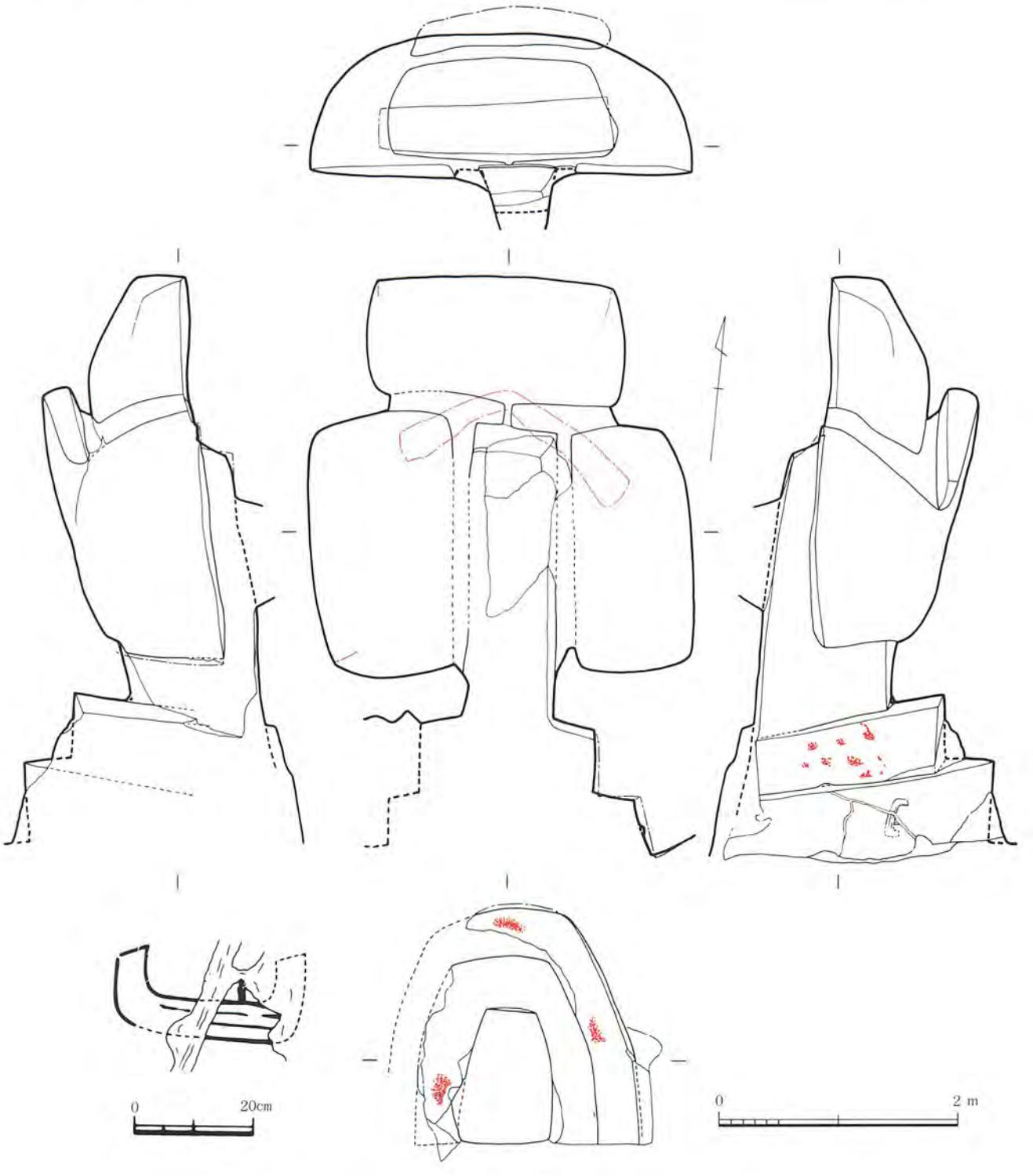
〔参考文献〕
①原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
②松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
③高木正文「古墳時代の再葬」森貞次郎博士古稀記念『古文化論集』　昭和57年（1982）

78．城迫間横穴墓群（⇨77の１図，78の１～４図）

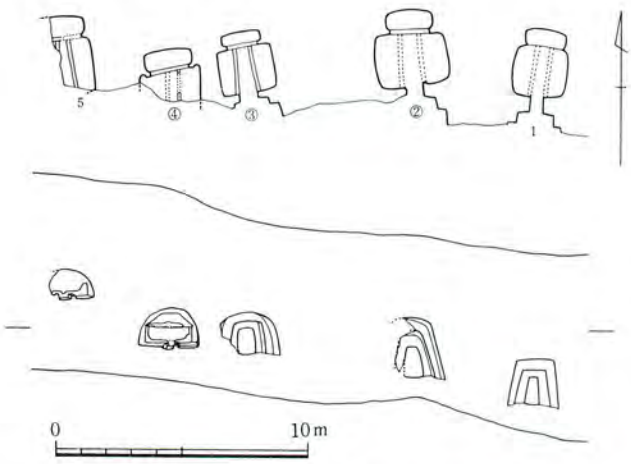
——玉名市溝ノ上城迫間——

立　地　玉名平野の最奥部にある溝ノ上集落から谷を250m程登った標高約40m のところにある。玉名平野の周辺には凝灰岩で造られた舟形石棺や家形石棺が多く分布し，城迫間横穴墓群の近くにも前田古墳，宮の後古墳，真福寺古墳，真福寺東古墳などがある。なお菊池川の対岸やや上流は江田船山古墳などがある清原台地である。

分布と概要　横穴墓群は高さ約７m の凝灰岩崖面の南面に造られており，21m の範囲に５基みられる。右（東）側から番号をつける。１号から左へ順に高くなっており５号が一番高い所にある。すべて三区の屍床をもつ横穴墓で，平面でみると奥屍床が狭いので凸字状になっている。飾り縁の形状は１号は方形であるが２号，３号と次第にアーチ形に近くなっている。４号，５号は崩壊がひどく，玄室の半分が残っている。この横穴墓群のうち２号が装飾横穴墓



78の１図　城迫間２号横穴墓および装飾文実測図（２の１）

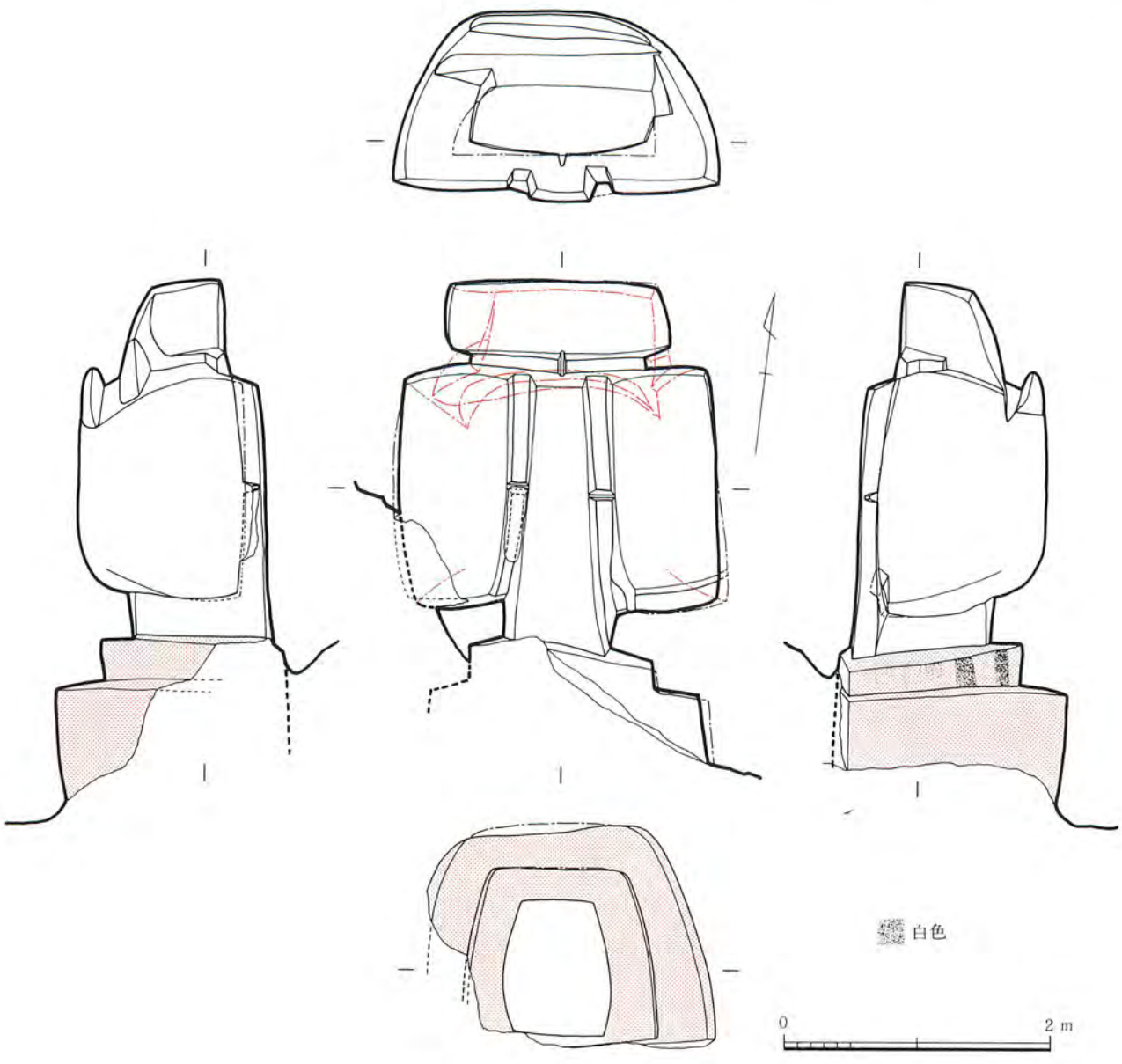


78の2図　城迫間横穴墓群配置図

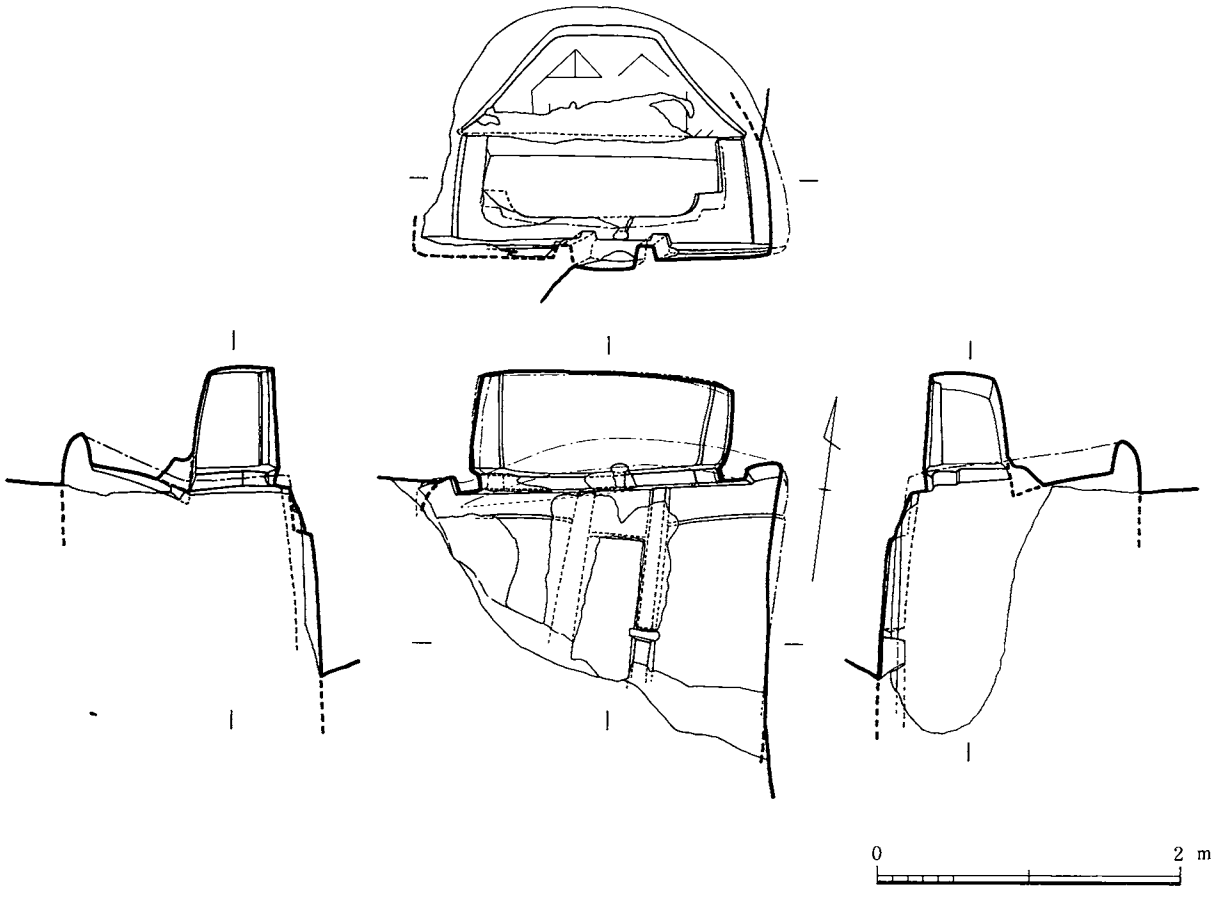
であることは田添夏喜氏らの調査により知られていたが，筆者の調査で3号・4号も装飾横穴墓であることがわかった。

2号横穴墓　羨門部は縦長の台形状で幅約78cm，高さ約110 cmを測る。羨門の外に二重の飾り縁が造られているがひびが入り破損が激しい。最も外側の飾り縁はアーチ形に近い。羨門から玄室までの長さは短かく65cm程度である。内部は盗掘坑らしい穴があり床面も破壊を受けている。左右の屍床は幅広に造られているので，奥屍床を除いた部分は奥行き220 cm，幅 324cmと，横長の長方形となっている。天井はドームに近いが奥に向かって高くなっており，通路奥部分で高さ 150cmを測る。奥屍床は前面に仕切りを設け，屍床の奥行き 110cm，幅 219cmの長方形で，天井の高さは82cmを測るが奥に向かって低くなっている。奥屍床前面の上部は，玄室天井からつながった抉りによって，石棚状に造り出している。なお玄室の全長は 332cmである。

装飾は横穴墓の外面にみられ，彩色と線刻（彫刻）の2種類がある。彩色は羨門部の外面，内面から第1番目の飾



78の3図　城迫間3号横穴墓実測図



78の4図　城迫間4号横穴墓実測図

り縁の内外面にみられ，部分的に赤色顔料が認められるが，風化が激しいため，装飾文様であったのか，全面塗られていたのかはっきりわからない。線刻は第2の飾り縁の内面，右壁にみられる。一部壊れているが，幅広の線刻でゴンドラ形の舟を縁どりし，その中に二重の横線を引いている。また一部に上方に伸びた線が認められ，マストを表現したものであるかもしれない。玉名地方では羨門より外に幾何学文様を描く例は多いが，器物を描く例は少なく，今のところ石貫ナギノ1号横穴墓の盾の線刻と本例のみである。

3号横穴墓　この横穴墓群の中央部に位置する。羨門は胴張りの長方形で，幅82cm，高さ 103cmを測る。羨門の外側に二重の飾り縁がつき，外側の飾り縁はアーチ形に近い。1号，2号に比べて横広の飾り縁である。羨門部の外面に閉塞石の輪郭を示すように土の付着がみられた。それから推定すると幅 105cm，高さ 120cmで，上部両端が隅丸になった長方形の閉塞石があったと考えられる。羨門から玄室まではわずか34cmしかない。玄室のうち奥屍床を除く部分は横長の長方形で，奥行き 180cm，幅 250cmを測る。右屍床入口側にのみ細長い枕が造られている。天井はカマボコ形で高さは 139cmある。奥屍床の上部はその上下を抉って庇状（石棚状）のものを造り出している。奥屍床の仕切りは右側はゴンドラ状に造られている。左側はそれとは異なるが，上部の抉りの段まで含めてみるとやはりゴンドラを意識して造ったともみることができる。奥屍床は細長で，奥行37cm，幅 171cmを測る。玄室全長は 246cmである。

羨門部外面，第1の飾り縁内外面，第2の飾り縁内面が全体に渡って赤色顔料で塗られており，第1飾り縁の内面右上方には赤の上に帯状に白色顔料が付着していた。さらにその下方も数条にカビの生え方が違う帯状のところがある。このことから，もとは第1飾り縁の内面には白い帯の装飾が並んでいたものと推定される。

4号横穴墓　羨門部と玄室前半分は崩壊している。玄室の床面はややひずんでおり，左右の屍床とも奥に枕がみられる。天井はないが，おそらくカマボコ形であったと推定される。玄室の幅約 240cm，高さ約 160cmである。奥屍床の正面観は平入りの家形で全体が浮き彫りになっている。仕切りは両端が上がっており，ゴンドラを表現している。奥屍床の両端には枕があるが狭い。天井は平担である。奥屍床の奥行き68cm，幅 173cm，高さ56cmである。

装飾は奥屍床前面の浮き彫りの屋根にあり，線刻で描かれている。風化により部分的に認められるが，上方には三角形，中程には縦の線，屋根の下端には斜線がみられる。なお菊池川対岸の清原台地から発見された家形石製品の屋根にも線刻の三角形がみえ類似例として興味深い資料である。

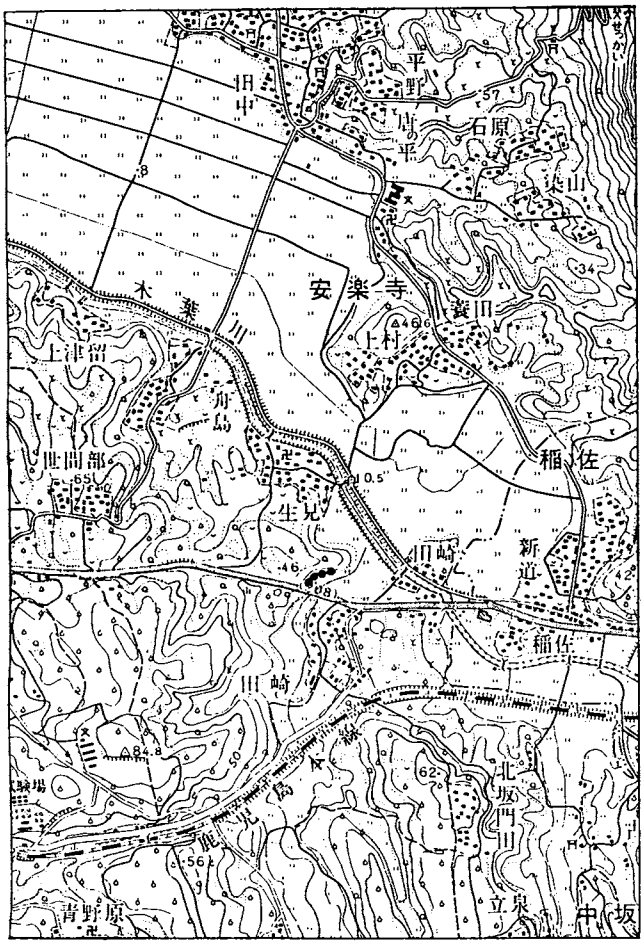
（高木正文）

〔**参考文献**〕

①松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）

79. 田崎（たさき）横穴墓群 (⇨79の1～3図)

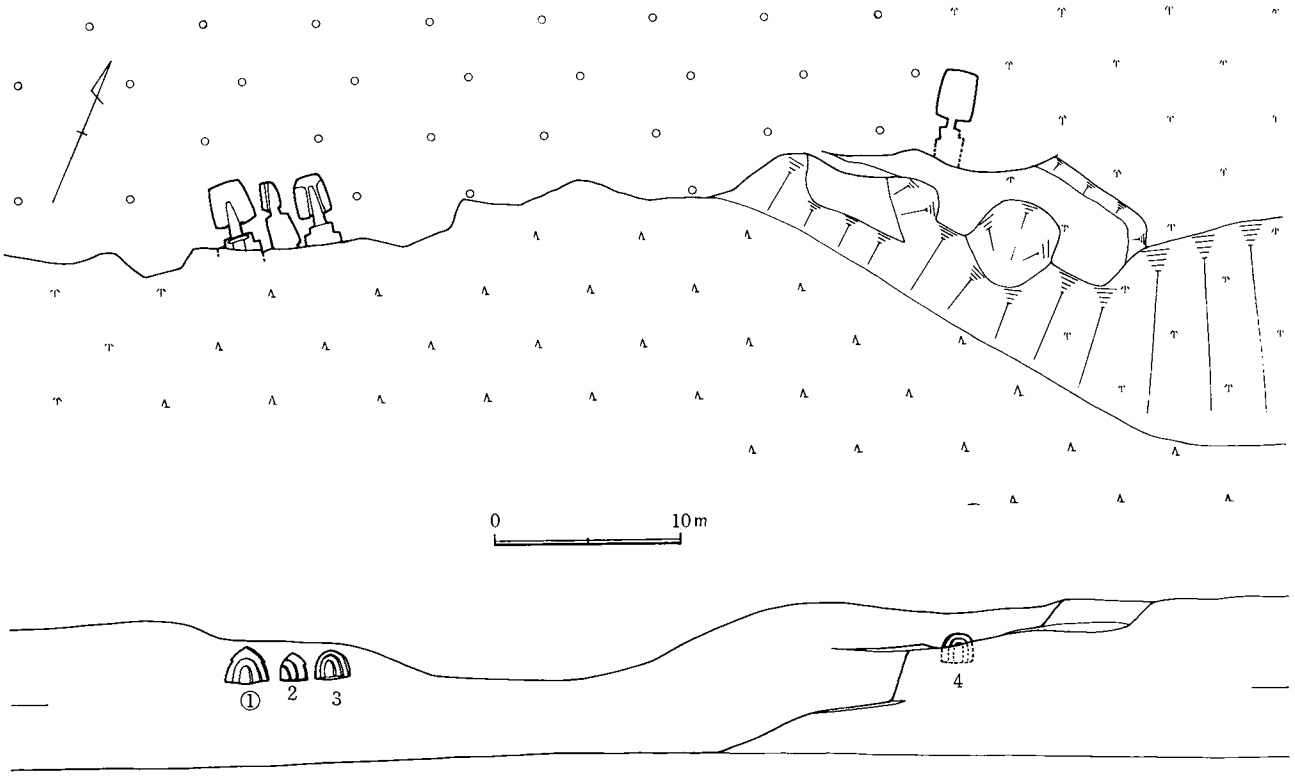
——玉名市田崎楢山——



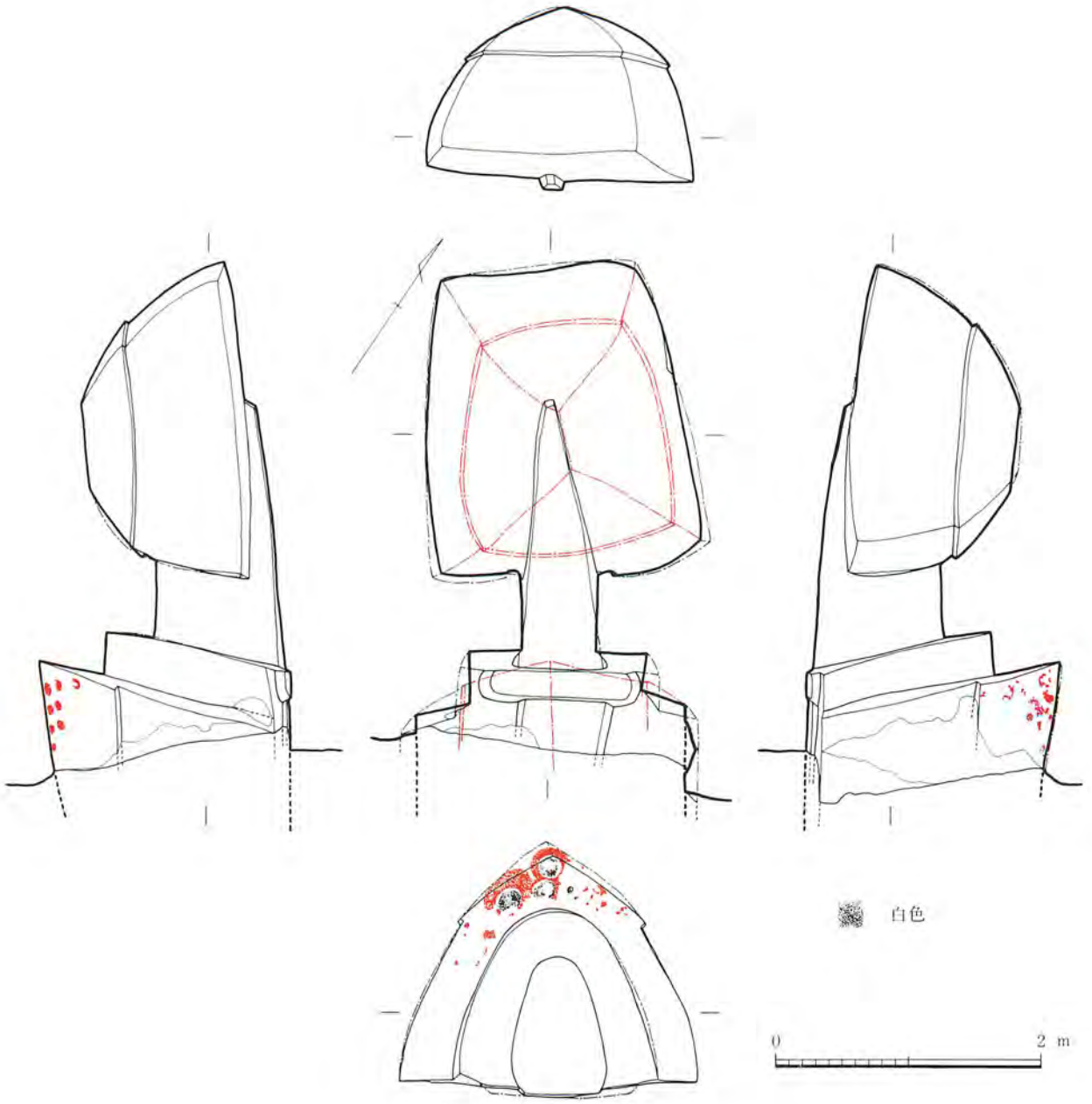
79の1図　田崎横穴墓群配置図（玉名・伊倉・2.5万分の1）

立　地　玉名平野を西に望む丘陵の東端部，舌状に延びた支丘陵の南側の凝灰岩崖面に横穴4基が開口している。なお横穴墓群から 200m 北東を菊池川の木葉川が西流している。

分布と概要　4基の横穴墓を西から番号を付けて1号～4号横穴墓とする。1号～3号横穴墓は並んで掘られているが4号横穴墓は30m 程離れたところにある。しかし4号横穴墓が埋もれかかっているところから考えるとこの周辺にはさらに数基が埋もれている可能性もある。このうち1号横穴墓に装飾がある。2号横穴墓は前部が壊れているが複室構造となっている。前室は床が平坦で天井は棟の表現があるだけの単純な形態で，幅約 150cm，奥行約 175cm，高さ約 145cmを測る。第二羨門はアーチ形である。後室は粗いノミ痕が残った未完成の状態で，通路の左側のみ仕切りを設けて屍床としている。幅約 105cm，奥行 150cm，高さ 75cmを測る。なお後室は未完成と考えられるが，このままで埋葬に使用されたと考える。3号横穴墓は単室で，割合保存状態が良く，アーチ形の羨門の外側に二重のアーチ形の飾り縁がついている。最も外側の飾り縁の幅は約 190cm，高さ 145cmを測る。玄室は通路の左右と奥に屍床を設けているが，奥屍床のみは仕切りがなく，奥壁も粗削りのままであるので未完成とも考えられる。天井部はドーム形に近い。玄室の大きさは幅約 170cm，奥行約 210cm，高さ約95cmを測る。4号横穴墓は内外とも下部が埋もれているが，外部は3号横穴墓と同様アーチ形の羨門部の外側にや



79の2図　田崎横穴墓群配置図



79の3図　田崎1号横穴墓実測図

はりアーチ形の二重の飾り縁が付いている。墓室の床面はは不明であるが，天井部は妻入り寄せ棟の家形で，軒先の表現もある。幅約 190cm，奥行 250cmを測る長方形プランで，高さは 105cm以上である。

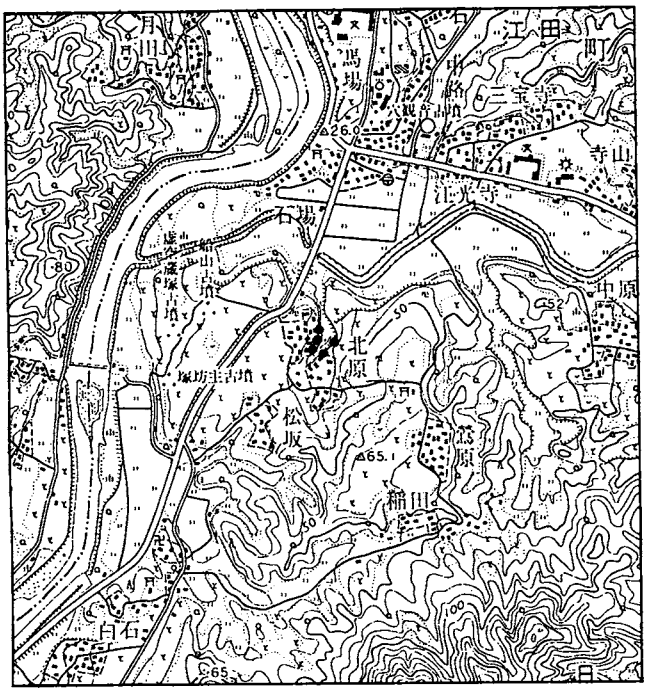
1号横穴墓　最も西端にある横穴墓で，この群で装飾文の確認できる唯一の横穴墓である。前部が崩れ落ちているのが残念である。アーチ形の羨門の外側にはやはりアーチ形の一重の飾り縁が付いている。またその外側に棟線と軒先の表現のある飾り縁が付いている。この飾り縁は幅 228cm 高さ 189cmを測る。羨門前部の床面には閉塞石を立てるための溝が掘られており，その外に中央部だけ凹みをつけた羨道が延びている。玄室は棟と軒先の表現のある寄せ棟の家形で，妻入りとなっている。壁面は垂直ではなく，上部が内側に大きく傾いている。床面は段差を付けて屍床と通路の区別をしているが仕切りはなく，左右と奥の屍床が「コ」の字状につながっている。玄室の幅は 214cm，奥行 236 cm，高さ 136cmを測る。

装飾文は飾り縁の外面とそれに続いた天井部（軒先より上）にみられる。彩色による装飾で，風化が激しいが，飾り縁の外面上部には白色顔料を円形に塗り，その回りを赤色顔料で囲んだものを4個以上描いているようである。また天井部の左側には赤色顔料で点状の円を数個描いており，右側にも赤色顔料による点状の円と不整形のものが描かれている。

出土遺物　4号横穴墓の近くから須恵器（提瓶・甕）の破片と土師器（坏）の破片を採集した。　（高木正文）

80．長力（ちょうりき）・北原横穴墓群（きたばる）〔昭和50年県史跡〕（⇨80の１～６図）

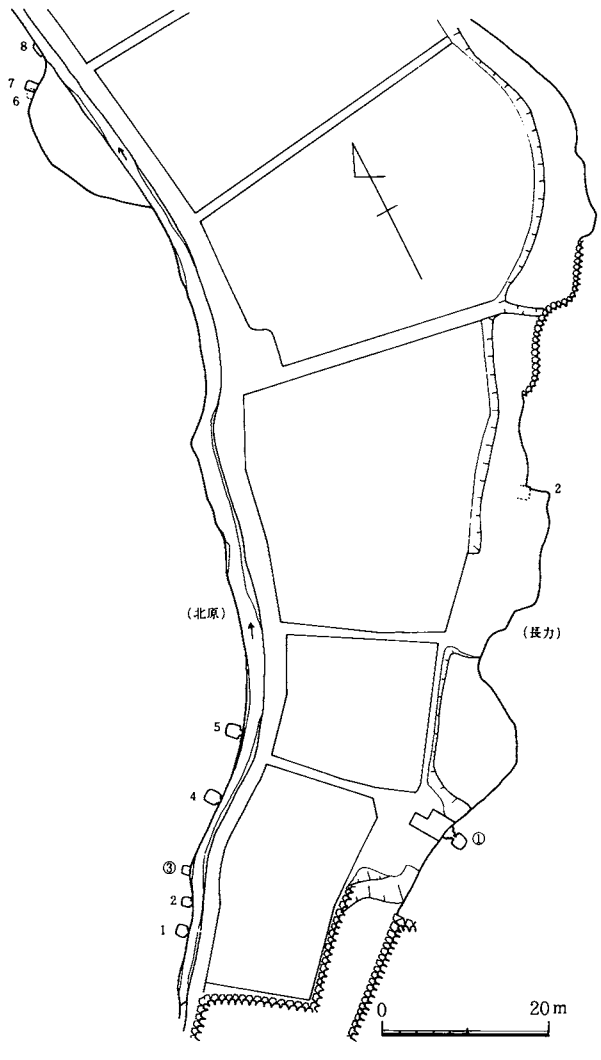
――玉名郡菊水町瀬川長力・北原――



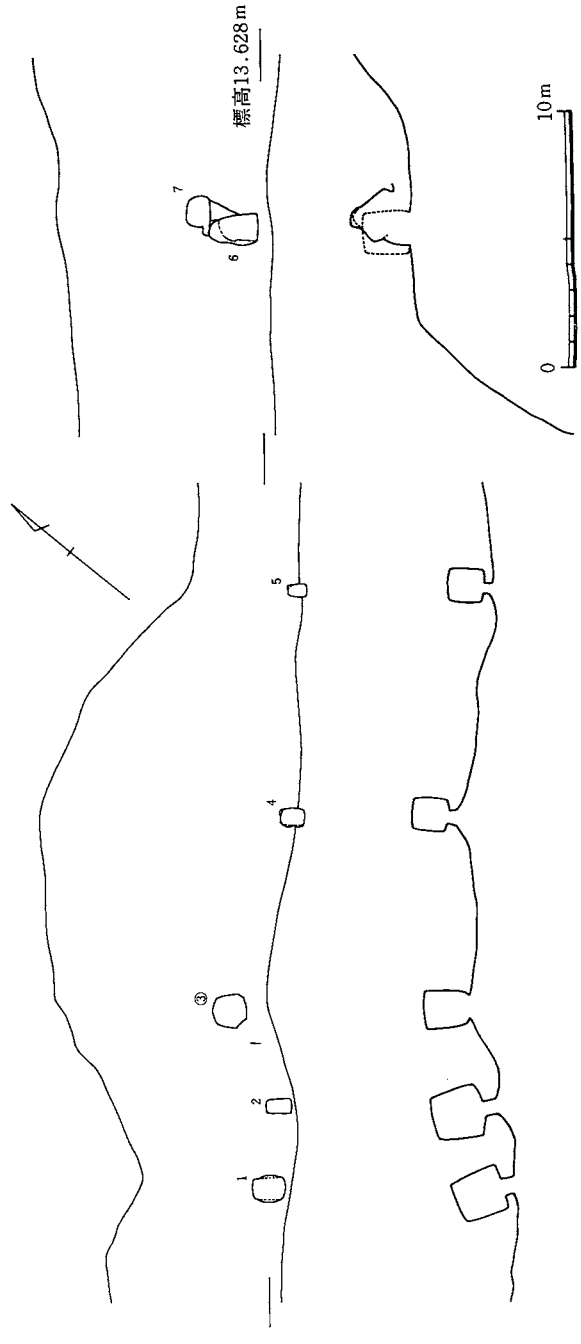
80の１図　長力・北原横穴墓群位置図（玉名2.5万分の１）

立　地　船山古墳のある清原台地（標高約30m）とその東にあるより高い鶯原台地（標高約60m）との間に北の菊池川支流江田川に向かって開いた細長い谷が形成されている。この谷の両側に横穴墓があり，谷の東側を長力横穴墓群，西側を北原横穴墓群と呼んでいるが，長力１号横穴墓とそれに面した北原５号横穴墓とは26mしか離れておらず，実際には同一の横穴墓群としてとらえることができる。

分布と概要　長力横穴墓群は２基確認されており，２基の間は40m離れている。谷の奥にあるものを１号とする。１号は割合保存が良いが２号は石切り場になったため玄室の左奥が一部残っているのみである。このうち１号は装飾が確認された。北原横穴墓群は 105m の範囲に８基確認され



80の２図　長力・北原横穴墓群周辺測量図

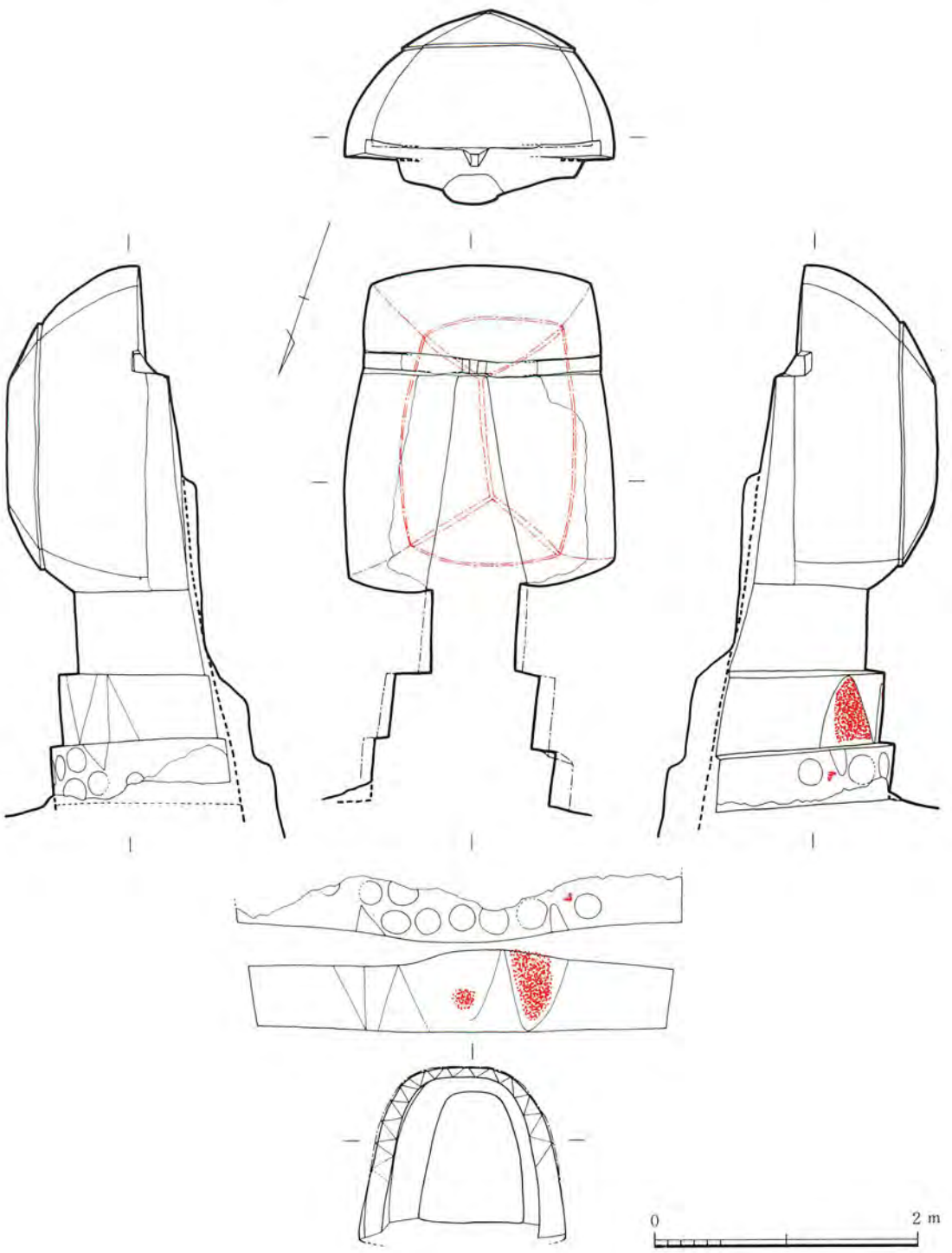


80の３図　北原横穴墓群配置図

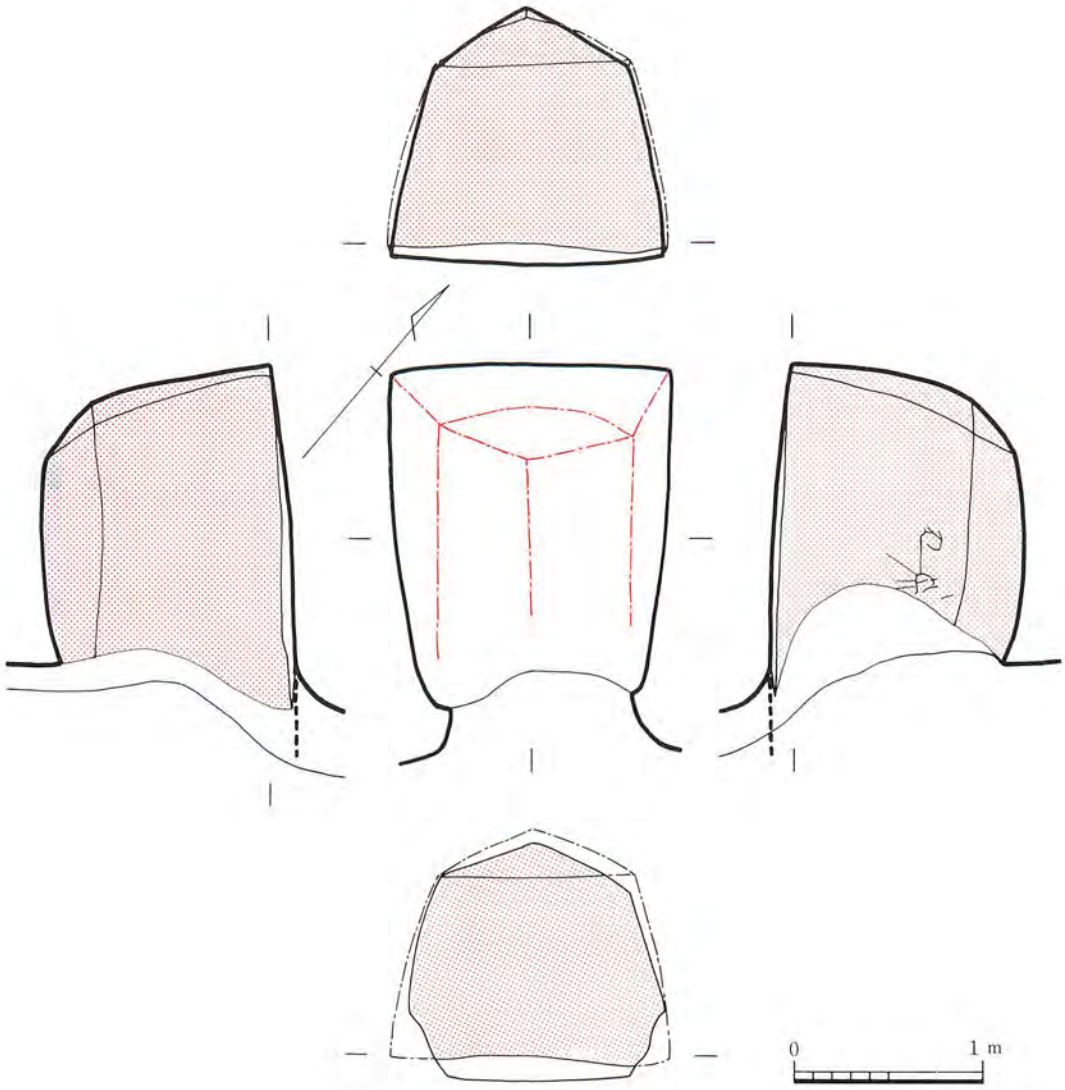
ている。谷の奥（南）から番号をつけて１～５号は比較的残りが良いが，離れた所にある６～８号は崩壊が激しい。これらの横穴墓の床面は平坦で天井は妻入りで寄せ棟の家形になっており，３号には装飾がある。

長力１号横穴墓　羨門はアーチ形で幅80cm，高さ 100cmを測る。羨門の外に二重のアーチ形の飾り縁が付いている。内側の飾り縁は羨門の60cm程外にあり，幅 120cm，高さ約 130cmを測る。外側の飾り縁はさらに40cm程外にあり，幅 160 cm，高さ約 140cmを測る。羨門から65cmで玄室に至る。玄室は「コ」字形屍床になっているが，後世に仕切りが壊されている。玄室の規模は幅 207cm，奥行き 240cm，高さ 135 cmを測る。天井は妻入りで寄せ棟の家形で，軒の部分は段をつけて表現している。

装飾は二重になった飾り縁に線刻で施されている。第１の飾り縁には内面と外面にみられる。内面には内外から大きな三角文を４個描いており，うち上部のものと右上のものは頂部が丸くなっている。外面には連続三角文を巡らしている。また第２の飾り縁の内面には斜め上方の２ヶ所に三角文を施し，全体に直径20cm前後の円文９個を配している。赤の彩色は一部分に残っているが，もとは線刻文に合



80の４図　長力１号横穴墓実測図



80の 5 図　北原 3 号横穴墓実測図

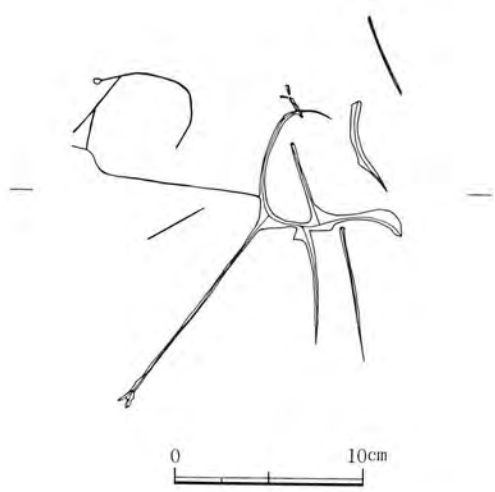
わせて配色されていたものと考えられる。

北原 3 号横穴墓　羨門部は侵食により崩れている。床は長方形で仕切りはない。天井は寄せ棟で妻入りの家形で，造りは単純で軒先に段差もつけられていない。玄室の規模は幅 150cm，奥行き約 180cm，高さ 130cmを測る。

装飾は玄室の右壁に線刻で自由画風に描かれているが，右側が壊れているので何を表現してあるのか不明である。なお内壁は全面赤く塗られている。

備　考　長力 1 号横穴墓は昭和49年（1974）に筆者と杉原幸寿氏が発見し，筆者が装飾文のあることも確認した。また北原横穴墓群は同年に坂口実氏と高木誠治（筆者の父）が発見し，筆者が 3 号に線刻があるのを確認した。

（高木正文）

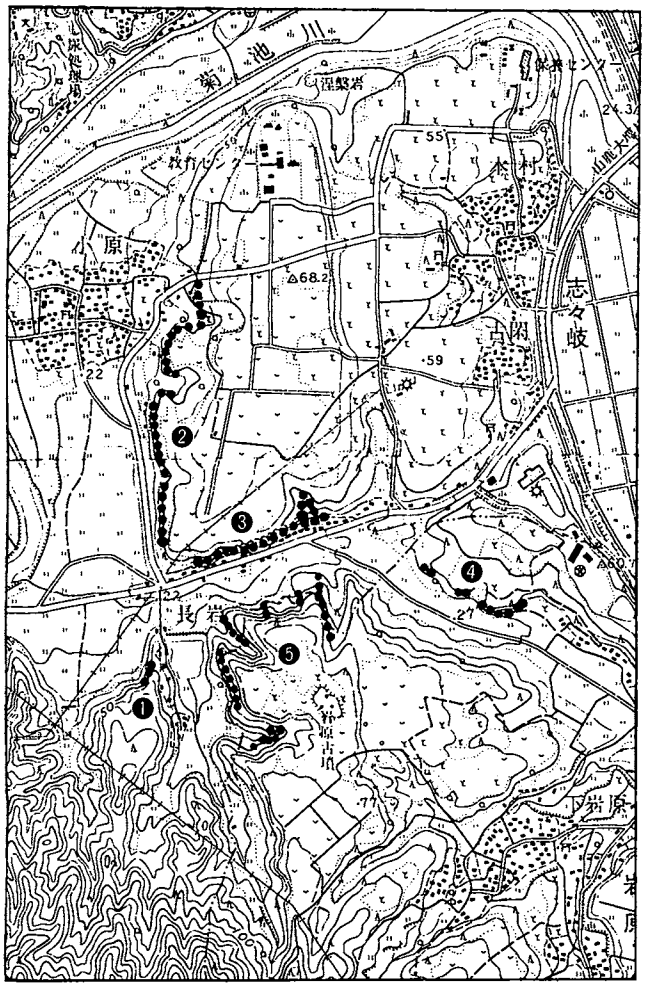


80の 6 図　北原 3 号横穴墓装飾文実測図

〔参考文献〕
①高木正文「長力・北原横穴群」『熊本の装飾古墳』松本雅明編著・白石巌写真　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
②池田道也『長力・北原横穴群』菊水町教育委員会　昭和55年（1980年）
③『熊本県の文化財』 3（史跡）　熊本県教育委員会　昭和56年（1981）
④高木正文「長力横穴群」『熊本県大百科事典』熊本日日新聞社　昭和57年（1982）

81．小原浦田横穴墓群（⇨81の１～９図）

——山鹿市小原浦田——

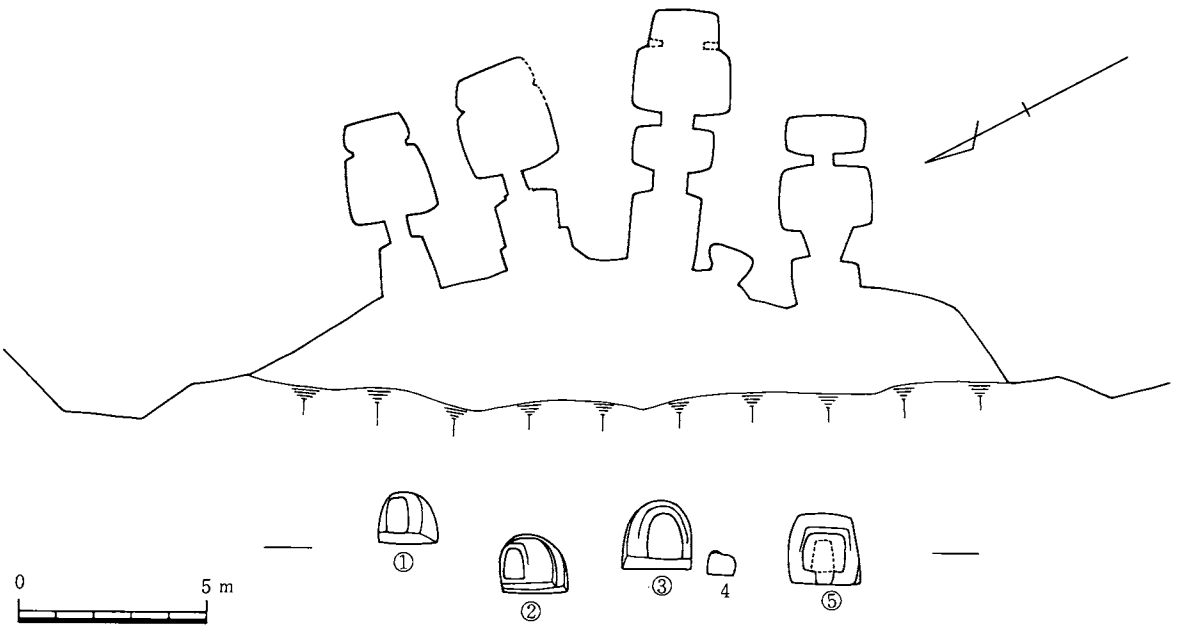


81の１図　志々岐・岩原台地周辺横穴墓群位置図
（山鹿・来民2.5万分の１）１小原浦田　２小原大塚　３長岩　４桜ノ上　５岩原

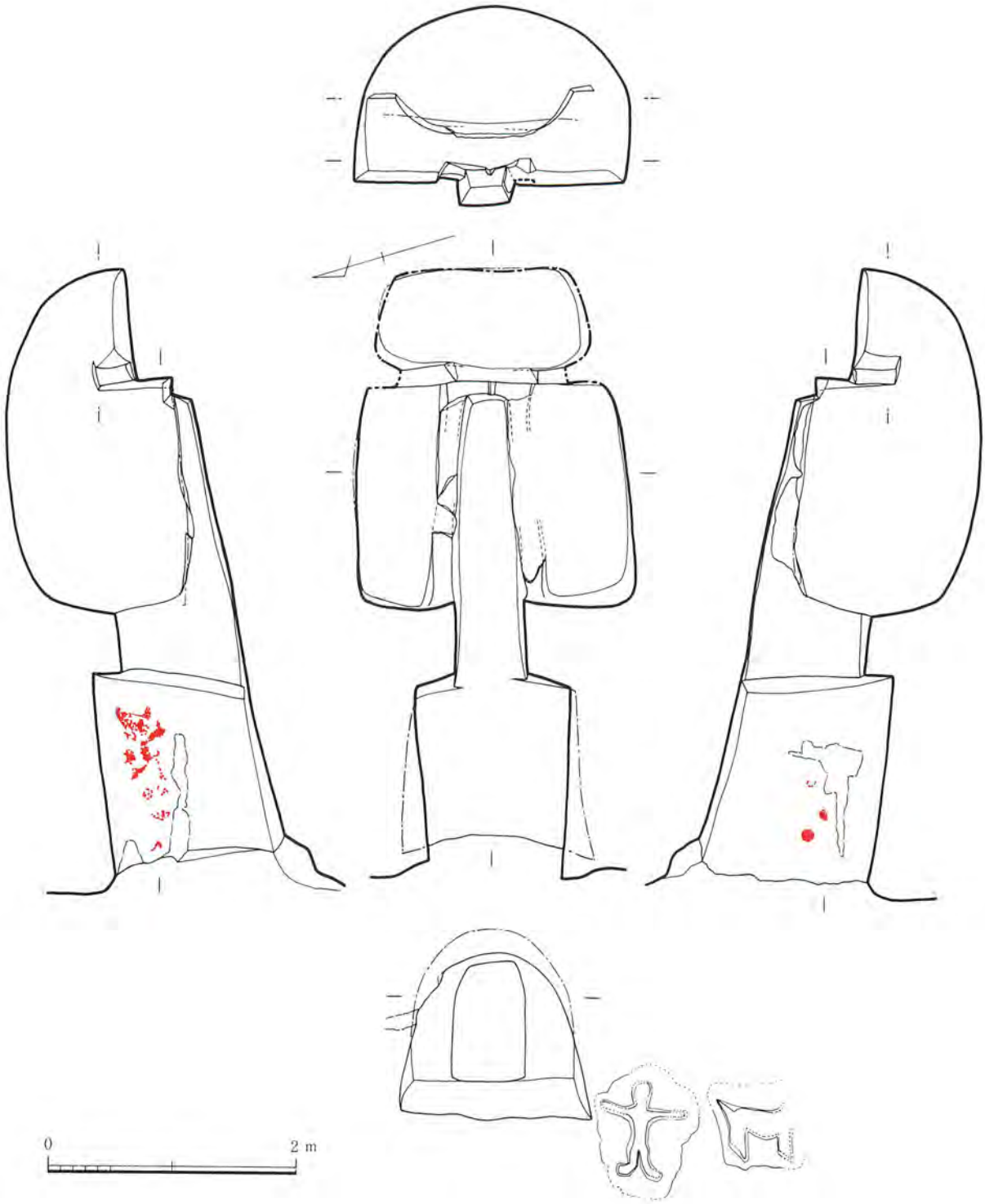
立　地　前方後円墳岩原古墳のある岩原台地の西側に谷を隔てて南から伸びて来た尾根がある。この東側に浦田集落があり，尾根の西側に小原浦田横穴墓群がある。なお尾根上には小原城跡もある。横穴墓群は標高約60mのところの凝灰岩崖面に掘られており，横穴墓群から前方 500mの所に菊池川を望むことができる。

分布と概要　横穴墓群は北西向きに５基並んでおり，14mの範囲に造られている。左から番号をつける。１号と２号，５号は３区の屍床をもつ単室の横穴墓であるが，３号は複室で後室に３区，前室に２区の屍床をもつ。また４号は小型横穴墓である。この横穴墓群は昭和40年（1965）５月に原口長之氏（当時県立第二高校教諭）と立山広吉氏（当時県立鹿本農業高校教諭）によって発見され，２号と３号に人物の浮き彫りなどがあることがわかり一躍脚光を浴びた。今回さらに実測調査を行ったところ，１号と５号からも赤色顔料を用いた装飾が発見され，５基のうち４号の小型横穴墓を除く大型の４基すべてが装飾横穴墓であることがわかった。なおこの横穴墓群から南西約 100mのところに無名の１基の横穴墓があるが，これは小原浦田横穴墓第Ⅱ群と呼ぶべきものであろうか。

１号横穴墓　左端の横穴墓で，一番高いレベルに掘られている。羨門，羨道部とも正面観はアーチ形で，特に羨道部は長く，カマボコ形である。羨道部最も外側の幅 158cm，高さ 135cm，長さ 143cmを測る。羨門は幅60cm，高さ 100cmで，羨門から玄室までは約70cmである。羨道およびその奥の通路は上り坂になっており，奥屍床は左右の屍床より一段高く造られているので，奥屍床の床のレベルは羨門の



81の２図　小原浦田横穴墓群配置図

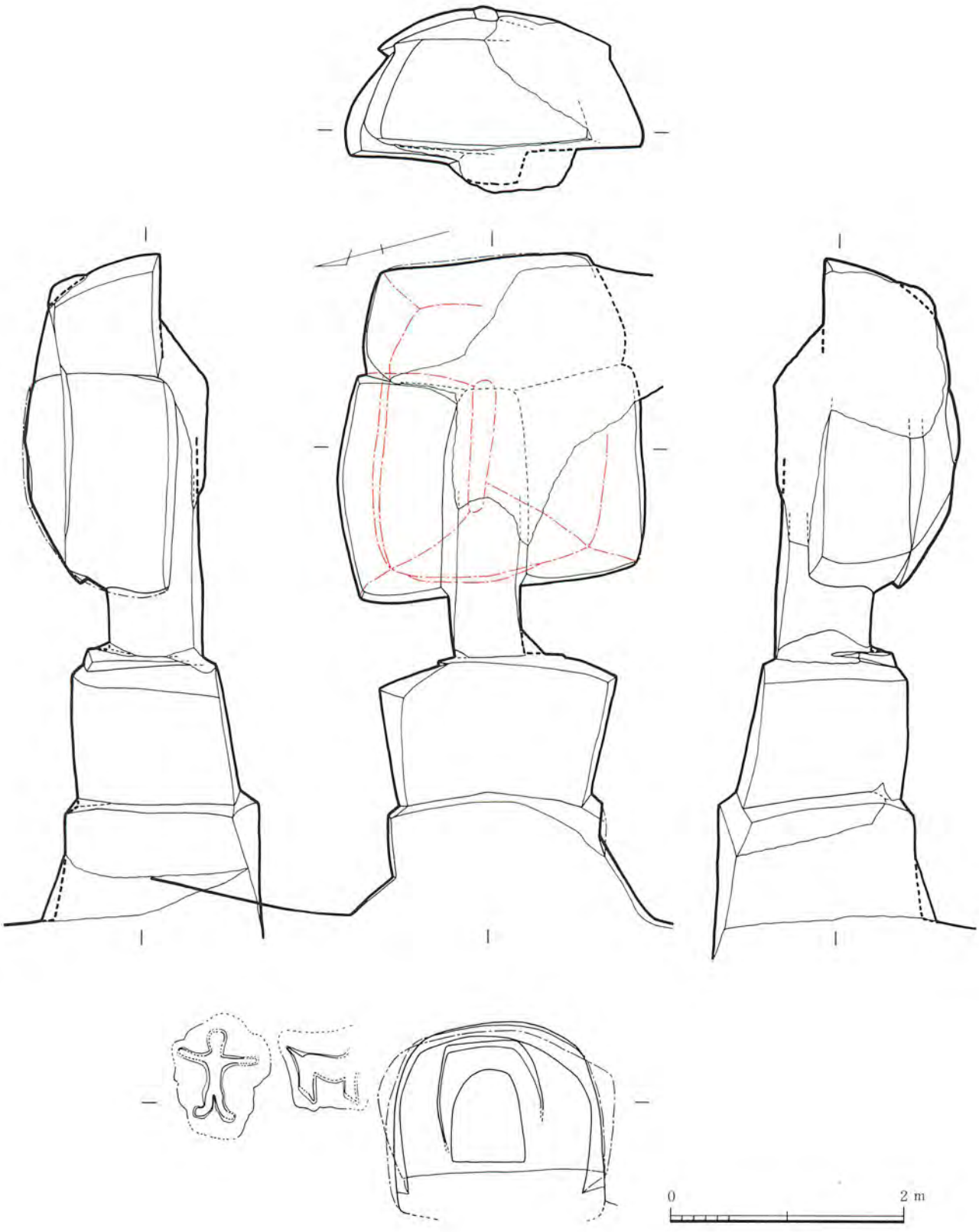


81の3図　小原浦田1号横穴墓実測図

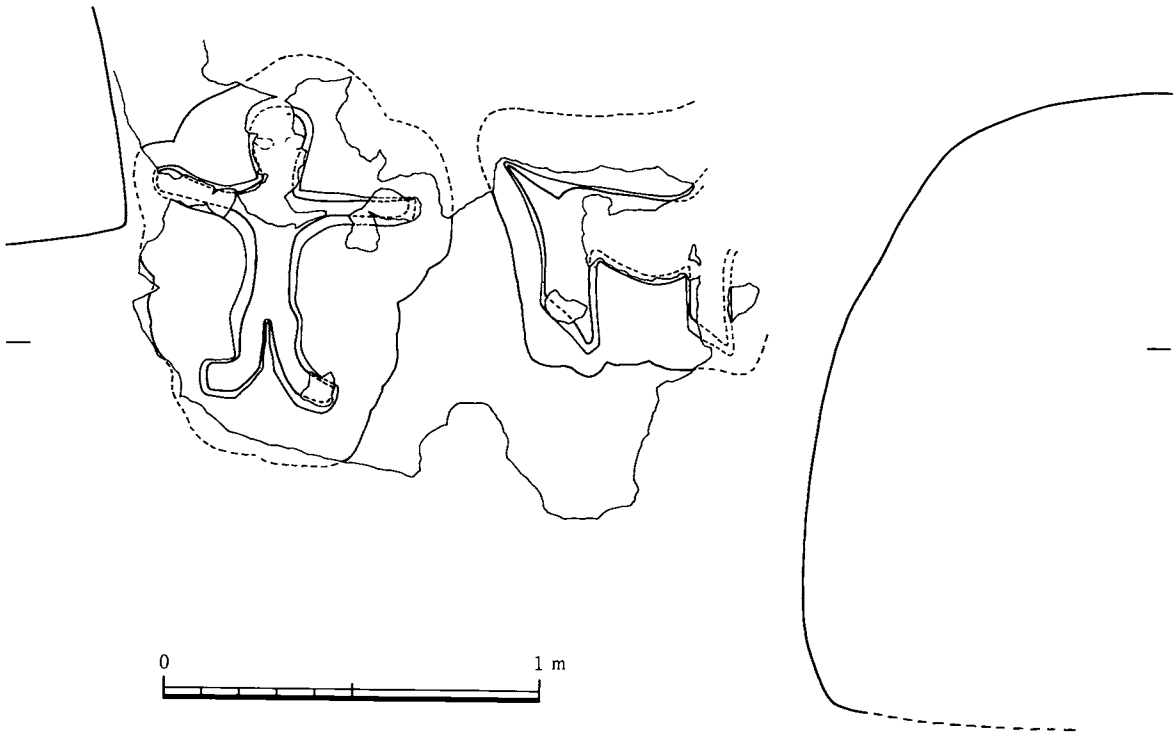
上部と同じレベルである。奥屍床の仕切りは中央部が壊れているが両端が上がって平担面を造っており，正面からみるとゴンドラに見えるようになっている。この仕切りの中央の下部，通路奥には平担面があり，まん中には排水の溝が切られている。天井はドームである。玄室の幅 226cm，奥行き 277cm，中央部の高さ 158cmを測る。

装飾は羨道部の両側にあり，風化のため図柄がはっきりしないが，右壁には赤色顔料で描かれた円らしきものが数個あり，左壁にはやはり赤色顔料で描かれた動物のようにも見えるものがある。なお，1号と2号の間の外壁にある浮き彫りは装飾のあるレベルからみて，2号に伴うものと考えたい。

2号横穴墓　羨門はアーチ形で，幅64cm，高さ80cmを測る。羨門部の外面には閉塞石を立てかけるためと考えられる胴張り長方形の抉り込みがある。これから推定すると閉塞石は幅約90cm，高さ約 110cmであったと考えられる。羨門の外に二重の飾り縁がつくが羨道が長いため内面のみ長く内側の飾り縁外面の幅は約10cmである。なお羨門部と飾り縁



81の 4 図　小原浦田 2 号横穴墓実測図



81の5図　小原浦田2号横穴墓外壁装飾文実測図

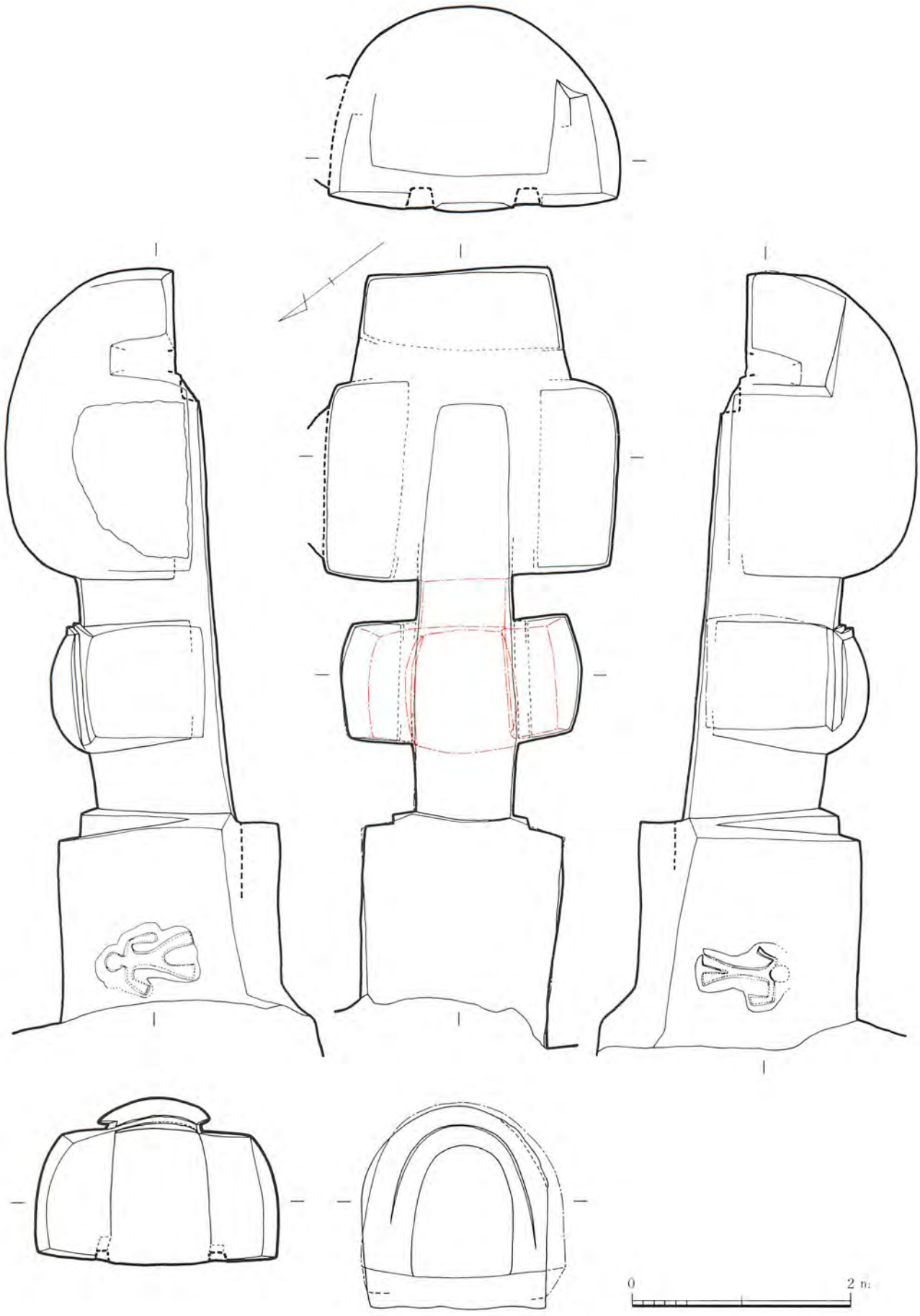
のそころには床面にも段がついている。羨道の長さは約250cmで，最も外側で幅 184cm，高さ 172cmを測る。羨門から玄室までは割合短かく，60cmである。玄室は奥がやや狭いが方形に近いプランをとっている。屍床の破壊が激しいが，「コ」の字形屍床で，仕切りは造られていない。天井は妻入りの屋根形（寄棟）であるがやや雑に造られている。棟は幅広に抉られており，軒先の稜もやや幅広である。玄室の幅 266cm，奥行き 284cm，高さ 150cmを測る。

装飾は横穴墓に向かって左側の外壁にあり，人物と馬が浮き彫りされている。風化が激しいが，いずれもそのまわりを彫り下げて浮き彫りとしており，左側の人物は両手を横に伸ばし，足を開いて正面を向いている。足には沓を履いているようにも見える。また全身に丸みがあるのも特徴である。この人物像の高さは80cmである。右側の馬は頭部から前足の一部が壊れているが横穴墓の方を向いており，前足，後足とも蹄を立てた状態を大きく表現している。胴部は後上がりで，尻尾をピンと伸ばしているので，今にも走り出さんとする様を彫ったようである。復元すると頭部までの高さは55cm程度であったと考えられる。

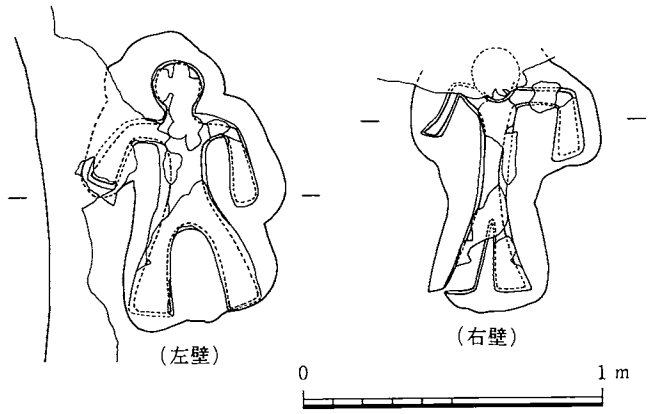
3号横穴墓　この横穴墓群の中央部にあり，複室構造の横穴墓である。羨道部，羨門とも正面観はアーチ形で，羨道の床面は改造により掘り下げられているが，長さ約 200cm，高さ約 180cmであったと考えられる。羨門は幅94cm，高さ122cmを測る。羨門の外面上方にアーチ形の抉り込みがあり，閉塞石を立てかけるためのものと考えられる。それから推定すると閉塞石は上部が丸い幅 130cm，高さ 140cmの大きさであったとみられる。羨門から前室までは64cmを測る。前室の左右に屍床があり，仕切りは後世に削られているが，その痕跡から本来は仕切りがあったとみてよい。右側の屍床は幅45cm，奥行き 106cmで，左側の屍床は幅52cm，奥行 105cmを測る。両屍床とも狭く，成人の一次葬を行なうことは困難である。天井は両屍床の上部は平担であるが，間の通路の上はドームである。その天井の境には内側に突き出た庇のようなものが表現されている。前室の幅は 221cm，高さ 152cmを測る。第二羨門の正面観は長方形で，幅92cm，高さ 124cmを測る。第二羨門から後室までは44cmである。後室も仕切りが壊されているが，奥屍床を除く部分の平面形は横長の長方形で，それに一段高い所に台形の奥屍床がついている。奥屍床の仕切りの前面はゴンドラ形になっていたようである。天井はドームである。後室の幅270cm，奥行き 278cmで，高さは 183cmを測る。

装飾は羨道の両壁の入口近くにあり，それぞれ人物の浮き彫りが一体ずつ彫られている。左右壁とも風化が激しいが，残存部から復元すると，向かって右壁の人物像は首を縮めて，両肘を曲げ，胴は細長く，足を「人」の字状に開いており，何か見構えているような格好である。人物像の高さは約 158cmである。向かって左壁の人物像は右壁と同じような格好をしているが，首が伸びており，肘も丸みがあり，足はアーチ状に踏ん張っている。この人物像の高さは 166cmを測る。おそらく左右の人物像は別の作者が彫ったものと考えられる。なお山鹿市熊入にある弁慶ケ穴古墳（横穴式石室）の羨門左壁にも浮き彫りの人物像があり，本例と同じような意図で彫られたものと考えられる。

5号横穴墓　右端にある横穴墓である。改造が激しく，羨門は拡幅されているが正面観は長方形であったと考えられる。羨門の幅は62cmで，高さは 110cm程度であったと推定



81の 6 図　小原浦田 3 号横穴墓実測図



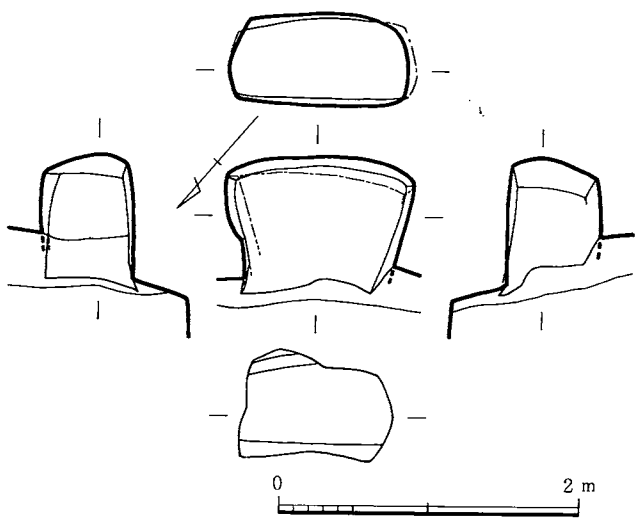
81の7図　小原浦田3号横穴墓羨道壁面装飾文実測図

される。羨門の外面上部に閉塞石を立てかけるためと考えられる掘り込みがある。これから推定すると閉塞石はやや上方が狭い長方形で，幅約 125cm，高さ 140cm程度であったであろう。羨門の前にやや長い羨道がつく，羨道部の正面観は方形で，幅 180cm，高さ 185cm，奥行 150cmを測る。羨門から玄室までは約70cmである。玄室の左右の仕切りは削られているが奥屍床の仕切りは割合残っており，両端が上がっているが，明瞭なゴンドラ状ではない。天井はカマボコ形を成している。玄室の幅 260cm，奥行き 309cm高さ 155cmを測る。

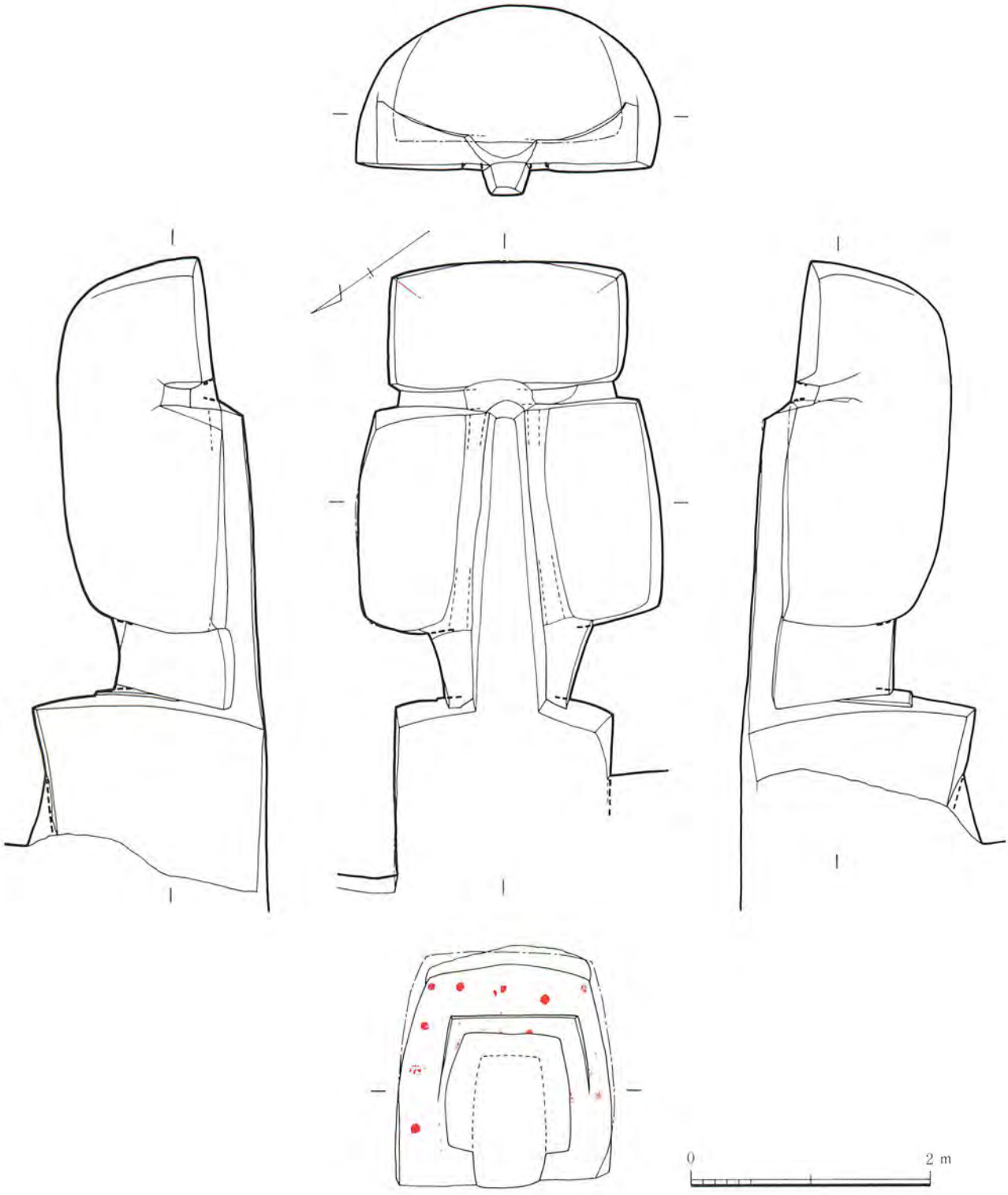
装飾は羨門部の外壁（羨道の奥面）にあり，赤色顔料が規則性をもって残っており，おそらく赤の円文が羨門を囲んで二列程配されていたと考えられる。このような位置に円文などが並ぶ例は玉名地方には多いが，山鹿地方では珍らしい例である。

備　考　大型の横穴墓の間にある4号の小型横穴墓は平面，天井とも平らで，台形状に掘り込まれている。入口付近が壊れているが，全体の奥行き85cm，幅 125cm，高さ60cmを測る。3号横穴墓に付属して造られたものと考えられ，成人をそのまま埋葬することが困難であるので，再葬墓と考える。　（高木正文）

〔**参考文献**〕
①「小原浦田横穴群」『チブサン』1　山鹿高校考古学部　昭和40年（1965）
②斉藤忠『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1974）
③乙益重隆『装飾古墳と文様』（古代史発掘8）講談社　昭和49年（1974）
④原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
⑤原口長之編著『山鹿の文化財』山鹿市教育委員会　昭和50年（1975）
⑥松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）



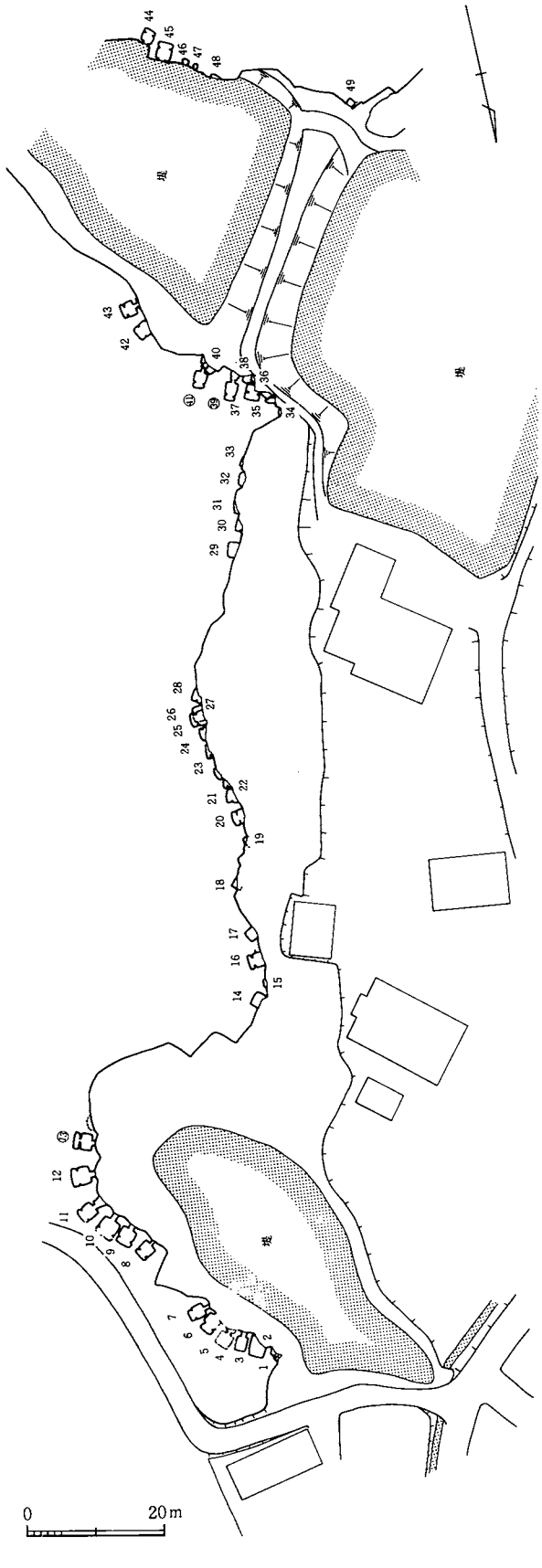
81の8図　小原浦田4号横穴墓実測図



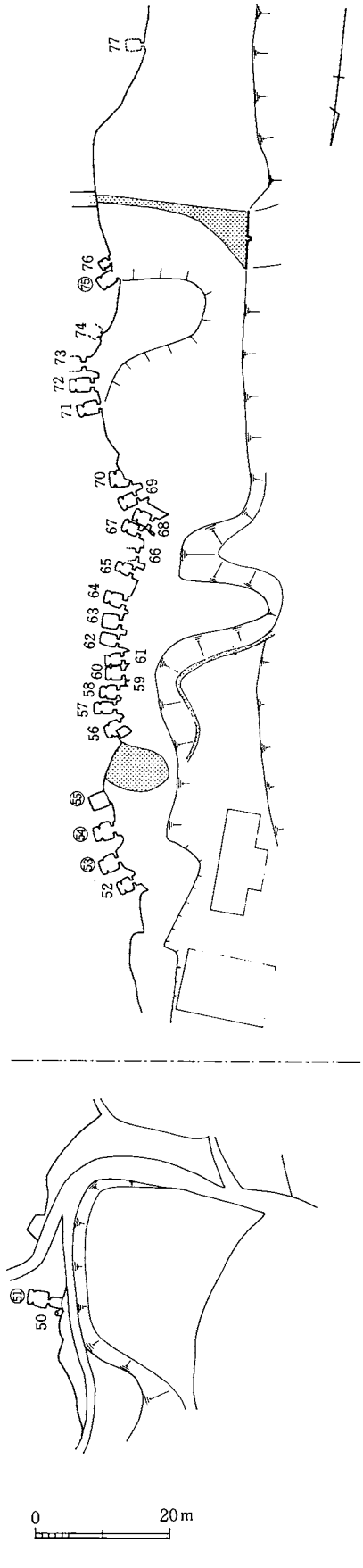
81の9図　小原浦田5号横穴墓実測図

82．小原大塚横穴墓群（⇨81の1図，82の1～18図）

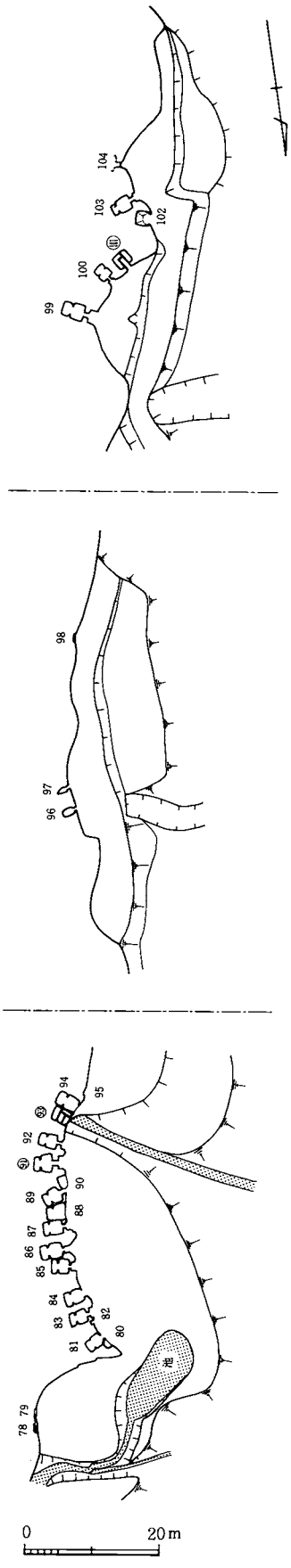
——山鹿市小原大塚——



82の1図　小原大塚横穴墓群配置図(1)



82の2図　小原大塚横穴墓群配置図(2)



82の3図　小原大塚横穴墓群配置図(3)

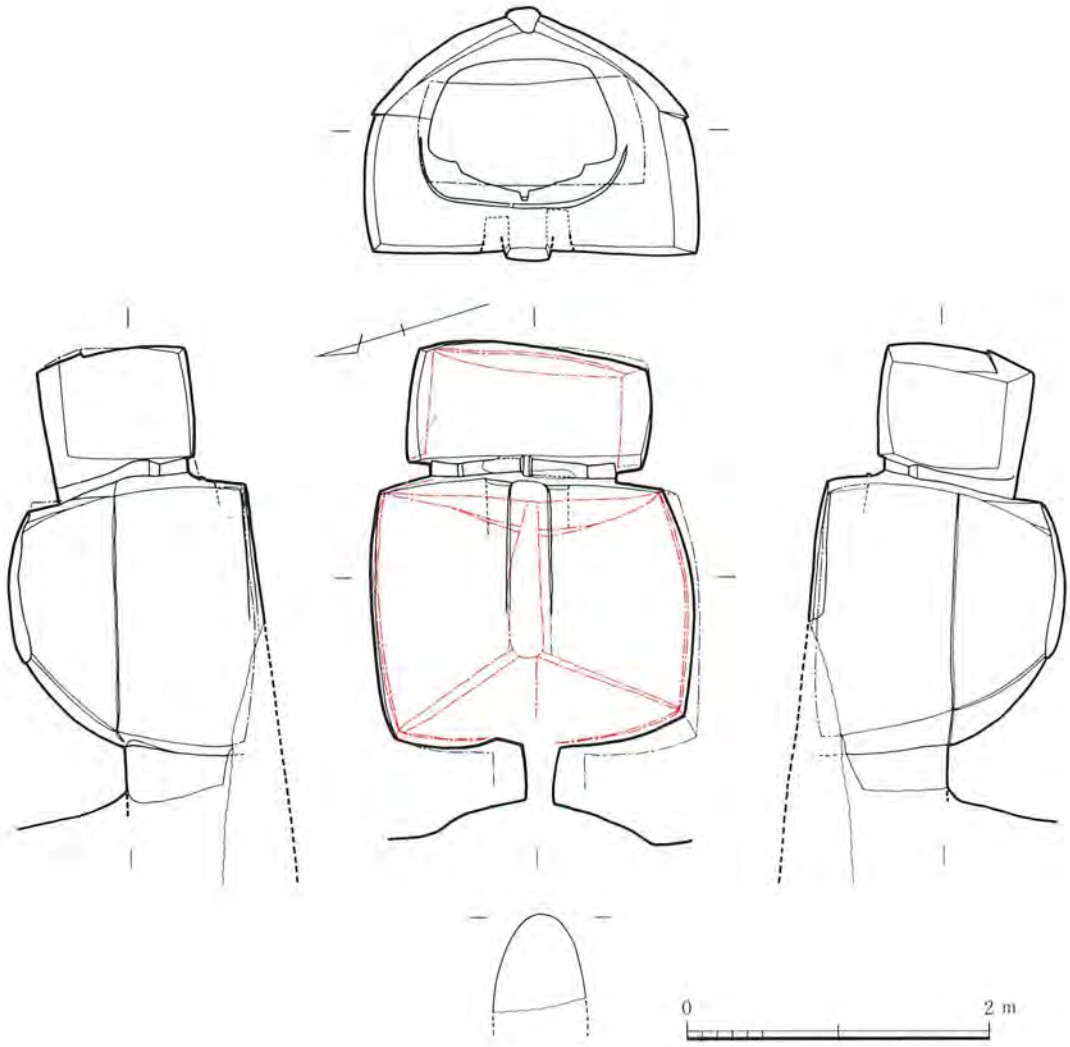
立　地　広大な菊鹿平野の大小の河川は山鹿市の西方で全て菊池川に集約される。この地点の両側にある台地が鍋田台地と志々岐台地である。鍋田台地の東崖面には鍋田横穴墓群があり，また志々岐台地の南面には長岩横穴墓群，その西面には小原大塚横穴墓群がある。志々岐台地には牛草遺跡など縄文時代後～晩期の遺跡があり，弥生時代の土器も出土する。また古墳時代の遺跡としては中尾箱式石棺群や大塚古墳（円墳）があり，大塚の地名はこの古墳の存在によってついたものと考えられる。志々岐台地をやや西に下った菊池川沿の竜宮遺跡からは弥生時代のカメ棺墓群や石蓋土拡墓，舟形石棺なども発見されている。小原大塚横穴墓群は台地西面のうち凝灰岩崖面のある部分全域に分布している。

分布と概要　横穴墓群は総数 104基からなり， 350mに渡って分布する。約10群程に分かれさらに各々が2，3支群に分かれる。横穴の番号は北から通し番号をつけた。横穴墓の構造は様々で，羨門や飾り縁が方形のものとアーチ形のものがあるが，位置的に同形のものが並ぶ傾向がみられる。また玄室の天井も家形のものとドームやカマボコ形のものがある。家形のものは寄せ棟で妻入りが多いが平入りもある。屍床は殆んど「コ」の字形である。その他小型横穴墓も10数基みられる。装飾横穴墓は11基（13号，39号，41号，51号，53号，54号，55号，75号，91号，93号， 101号）確認された。

13号横穴墓　8号から13号までは1つのまとまりを成しており，その右端にあるのが13号横穴墓である。ただし，13号横穴墓の右にさらに横穴墓が埋没している可能性もある。13号横穴墓の羨道部から玄室の一部にかけても埋没している。羨門は上部がアーチ形で，幅約65cmで，高さは 100cm前後と推定される。飾り縁は風化で壊れてしまっている。羨門から玄室までの通路の長さは50cm以上あったと考えられる。玄室は「コ」の字形屍床で，奥屍床は高く抉り込まれている。奥屍床を除く部分は幅 220cm，奥行 180cm，高さ 165cmを測り，平面プランは胴張りの方形である。屍床の仕切りは壊れている。天井は寄せ棟の家形で妻入りとなっている。棟はU字形に抉り込み，軒先は段差をつけて表現してある。奥屍床は左右屍床面よりも約35cm高く，天井は平担であるが前に傾いている。奥屍床の奥行き，70cm幅160cm，高さ 100cmを測る。なお玄室全体の奥行きは 260cmを測る。

奥屍床の仕切り中央部には排水の切れ込みがあり，仕切りの両端は上がって平担面を造りゴンドラ形をなしている。さらにそれを強調するためその下にU字形の溝を入れている。この溝の中央部は断面がU字形であるが両端上方に行くに従ってV字溝となっている。この溝をゴンドラ形の線刻とみて広義の装飾に含めたい。

39号横穴墓（旧36号横穴墓）　29号から43号までは1つの群と捕えることができ，さらにそれを3支群に分けることができよう。うち34号から41号までを1つのまとまりとみることができる。これらは二段に造られており，上段には

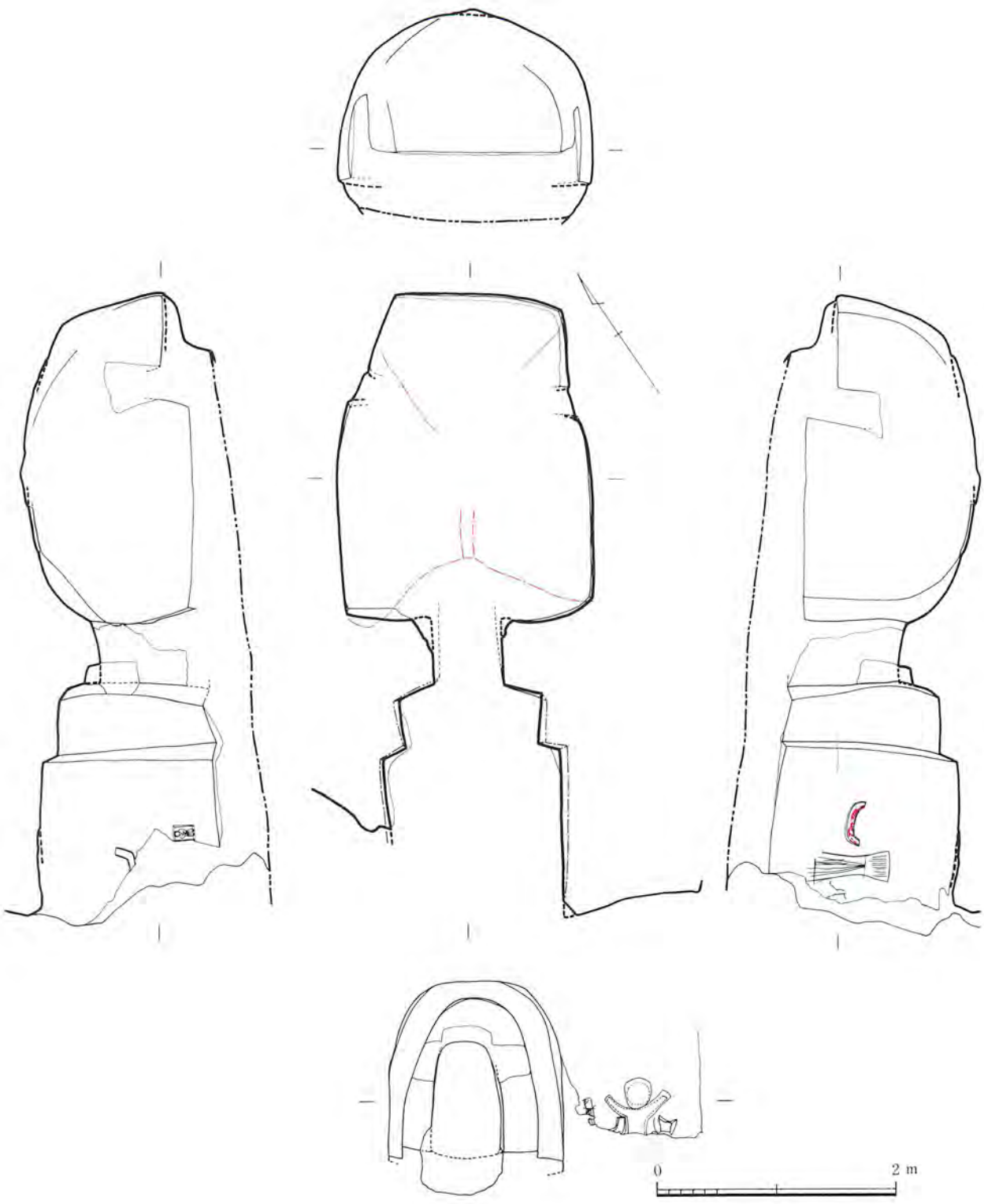


82の4図　小原大塚13号横穴墓実測図

34号，35号，37号，39号，41号がある。34号と35号は小型横穴墓である。他の3基のうち37号の羨道右壁には線刻文らしいものがあるが壊れているのではっきりしない。しかし39号と41号には多くの装飾が残っている。39号横穴墓は羨道から玄室内の床に至るまで後世に掘り下げられているが，旧状を推定することは可能である。羨門は幅62cmで，高さは約95cmである。アーチ形であるが上部は奴凧形に壊されている。羨門の外にやはりアーチ形の二重の飾り縁がついており，羨道が長いため外の飾り縁の内側は羨道壁といった方がふさわしいような感じである。羨道の長さは約200cmで，第1の飾り縁（内側）の幅は 115cm，高さ約140cm，第2の飾り縁の幅は 150cm，高さは約 160cmを測る。羨門から玄室に至るまでの長さは65cmを測る。玄室の屍床は「コ」の字形に復元することができる。奥屍床の仕切りは両端が高く跳ね上がっていたことがわかる。平面プランは方形に奥屍床の台形がくっついた形で，天井は寄せ棟妻入りの家形を表現しているが，軒先線はなく，ドーム形に近い。玄室の幅 215cm，奥行き 270cmを測り，高さは約150cmと推定される。

装飾は羨道の両壁（第2飾り縁の内側）と右外壁にみられる。羨道右壁の装飾は左から順に舟，靫（盾？），人物が描かれている。舟はゴンドラ形の浮き彫りで全体が赤く塗られている。全長は37cmを測る。靫は線刻で描かれ，強い線で中程のくびれた長方形の枠組をかき，上方から3分の1程のところに横線を引いて区切っている。その上方には縦方向に10本の細線を引いており，矢を入れた状態を表わしているもとの考えられる。横線の下方には，その中央部付近からやや放射状に下に線を引いている。この装飾文は筒形の靫を表現していると考えられるが，枠のみを見ると盾の形である。両者を1つのもので表現していることも考えられる。この靫の幅は25cm，高さは62cmを測る。その右側の人物とみられるものは頭部に当たるところが剝落しているが，両手を上方に向けて開き，また足も開いた状態を単純な線で見事に表現している。現存部（首から足まで）は高さ15cmを測る。この人物の描法は鍋田26—d号横穴墓玄室右壁のものと共通性がある。

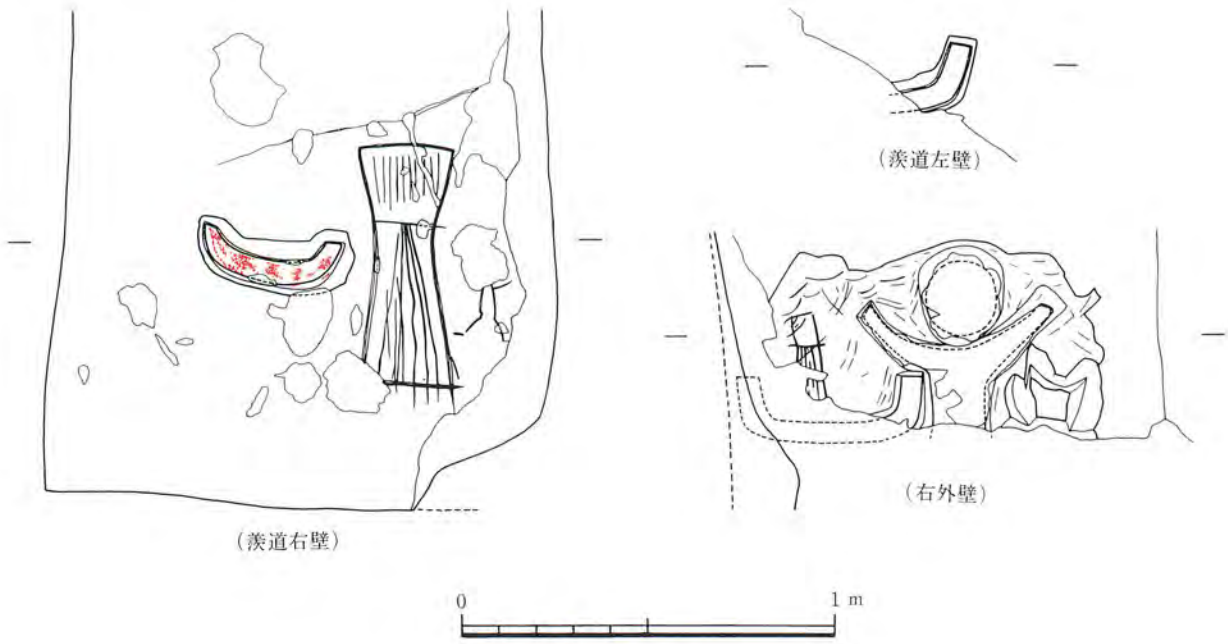
羨道左壁にはゴンドラ形の舟が浮き彫りされている。左側が壊れているが，右壁の舟よりも少し大きく彫られている。現存部の長さは20cmを測るが全長は50cm程あったものと推定される。もとはこの舟も赤く塗られていたのではなかろうか。なおこの舟の下方に神像（または仏像）のようなものが彫刻されているが，彫り方などから明らかに後世



82の5図　小原大塚39号横穴募実測図

に追刻されたものである。

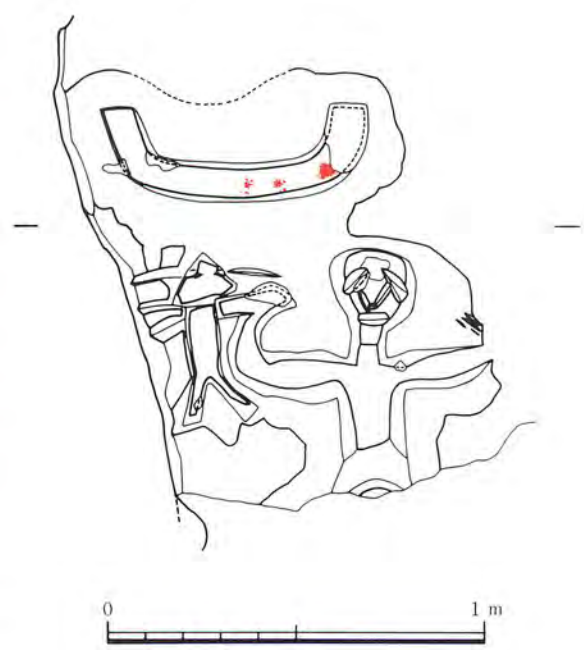
右外壁の装飾は舟，人物などが描かれている。風化が激しく，下方は崩れている。左にある舟は船体を浮き彫りで表してあり，ゴンドラ形をしているが右端の一部が残っているのみである。舟の中央上部に線刻でやや左側に傾いた長方形のものが描かれ，その上から3分の1のところに左右にやや突きぬけた横線が引かれ，その横線の下は4本の縦線が引かれている。この線刻は舟の帆を表現したものではなかろうか。舟の現存長は15cmであるが，全長50cm程あったものと推定される。中央にある装飾は風化剝落が激しいが，顔が丸く，両手を上げた浮き彫りの人物像で，腰部以下を欠損している。現存部の高さ48cmを測る。人物の右側に上方両端の尖った浮き彫りがあるが丁寧でないため何であるか不明である。柄のようでもあるがこの面にはそれに関係した武具がないため別のものであろう。なおその下の壊れた部分にも何か浮き彫りがあったようである。



82の 6 図　小原大塚39号横穴墓装飾文実測図

82の 7 図　小原大塚39号横穴墓羨道右壁装飾文

41号横穴墓（旧38号横穴墓）　39号の右に並んである装飾横穴墓である。羨道床面と左側は壊れており，玄室内の仕切りも破壊されている。羨門はアーチ形で幅55cm，高さ100cmを測る。その外側に二重の飾り縁がつく。飾り縁はアーチ形で，内側から第１の飾り縁は幅 100cm，高さ約 130cmで，第２の飾り縁は復元幅約 150cm，高さ約 170cmを測る。羨道の長さは約 140cmである。羨門から玄室までは60cmを測る。玄室の屍床は「コ」の字形で，平面プランは方形に近い。玄室の幅 228cm，奥行き 270cm，高さ 140cmで，天井はカマボコ形である。



82の 8 図　小原大塚41号横穴墓右外壁装飾文実測図

82の 9 図　小原大塚41号横穴墓実測図

82の10図　小原大塚41号横穴墓右外壁装飾文

装飾は右外壁にある。上方に舟，下方に２体の人物を並べて浮き彫りしてある。舟はゴンドラ形で，全長70cmを測る。一部に赤色が残っているが，もと舟全体が赤く塗られていたものと考えられる。下方左の人物は頭部が三角形で，両手を横にのばし，足を開いている。顔には目を横に切っている。目の高さのところに両側に溝が伸びているのは何であろうか。この人物の高さは46cmを測る。右側の人物は顔面と腕の表現に特徴がある。頭部は丸いが顎は細く，目は垂れ目で大きく，鼻はＶ字形で，口は結んでいるが大きい。首は長く，横に伸ばした腕は脇のところで内側に曲げている。右腕の先端は先述の三角頭の人物の腕と続いている。左腕の指は線刻で表現している。胴部は割合細く，腰から下を欠いているが，胴と腰の間には溝がある。この人物の現存高は65cmを測る。顔は泣いているようで，両手で悲しみを表現しているようでもある。また右側の人物は親で，左側の手をつないで持ち上げられたような人物は子供のようにも見える。

51号横穴墓（旧43号横穴墓）　他の横穴墓と離れて50号と51号の２基があり，左側の50号は小型横穴墓である。51号の羨門はアーチ形で，幅64cm，高さ 116cmを測る。羨道は現存長 150cmでカマボコ形に伸びており，最も外側で幅155cm，高さ 160cmを測る。羨道と羨門の間には３cm程段差がついている。羨門から玄室までの間は60cm程ある。玄室は幅 244cm，奥行き 285cm，高さ 128cmを測り，「コ」の字形屍床である。羨門部に比べて玄室の壁面の仕上げが粗いのが目立つ。通路の奥には一段のステップがある。各屍床

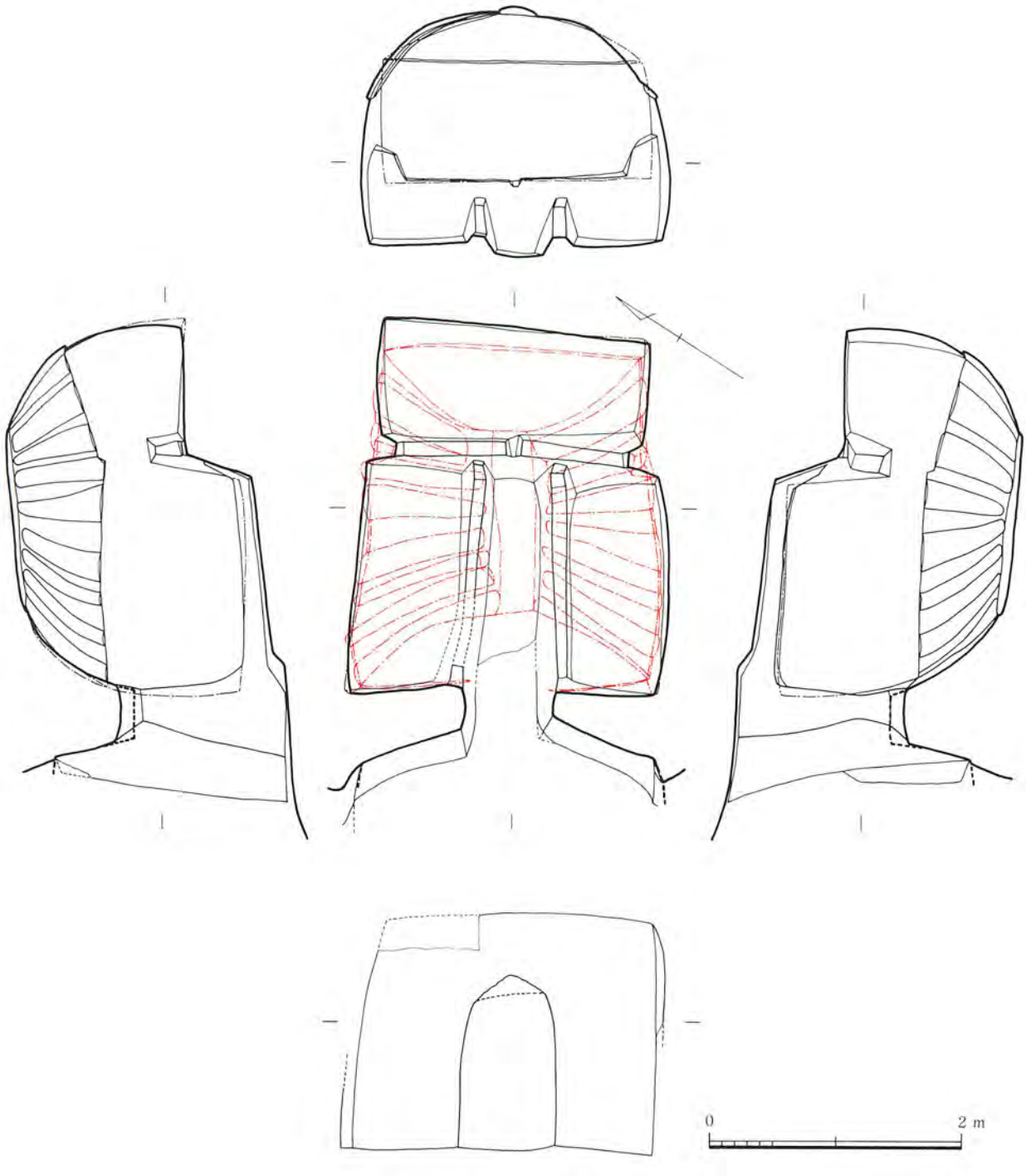
82の11図　小原大塚51号横穴墓実測図

は楕円形に近く，平担である。奥屍床の仕切りは両端が大きく反り上がっており，ゴンドラ形を意識して作ったと考えられる。天井はややカマボコ形に近いドームであるが，棟の部分は上方に抉って表現してある。

装飾は羨道部の両壁に彩色で施されている。羨道右壁の装飾は３ケ所に認められ，左の文様は中央部に白色があり，それを囲むように下半部に半月状に赤色があるので，赤色のゴンドラ形舟にも見えるが白色の上方にも赤色が認められるので，当初は白色を赤色で囲んだ円文ではなかったかと推定される。とすると，この文様の外径は50cmを測るものである。その右にはやはり白色の円文を赤色で囲んだ二重円文が描かれている。この文様も一部消えかかっているが，白色の直径は18cm前後，赤色の直径（外径）は29cmを測る。さらにこの二重円文の右下にも赤色のドーナツ形の円文が消えかかっている。白色は残っていないが，これも左と同様の二重円文ではなかったろうか。この赤色の直径は23cm前後である。この文様の下方にも赤色が点々と残っているが文様の形状は不明である。

羨道左壁の装飾は１カ所に認められるが剝落が激しい。残存部では長楕円形のようにも見えるが，これも右壁と同じく円文であった可能性もある。

53号横穴墓（旧45号横穴墓）　52号から76号までは大きな

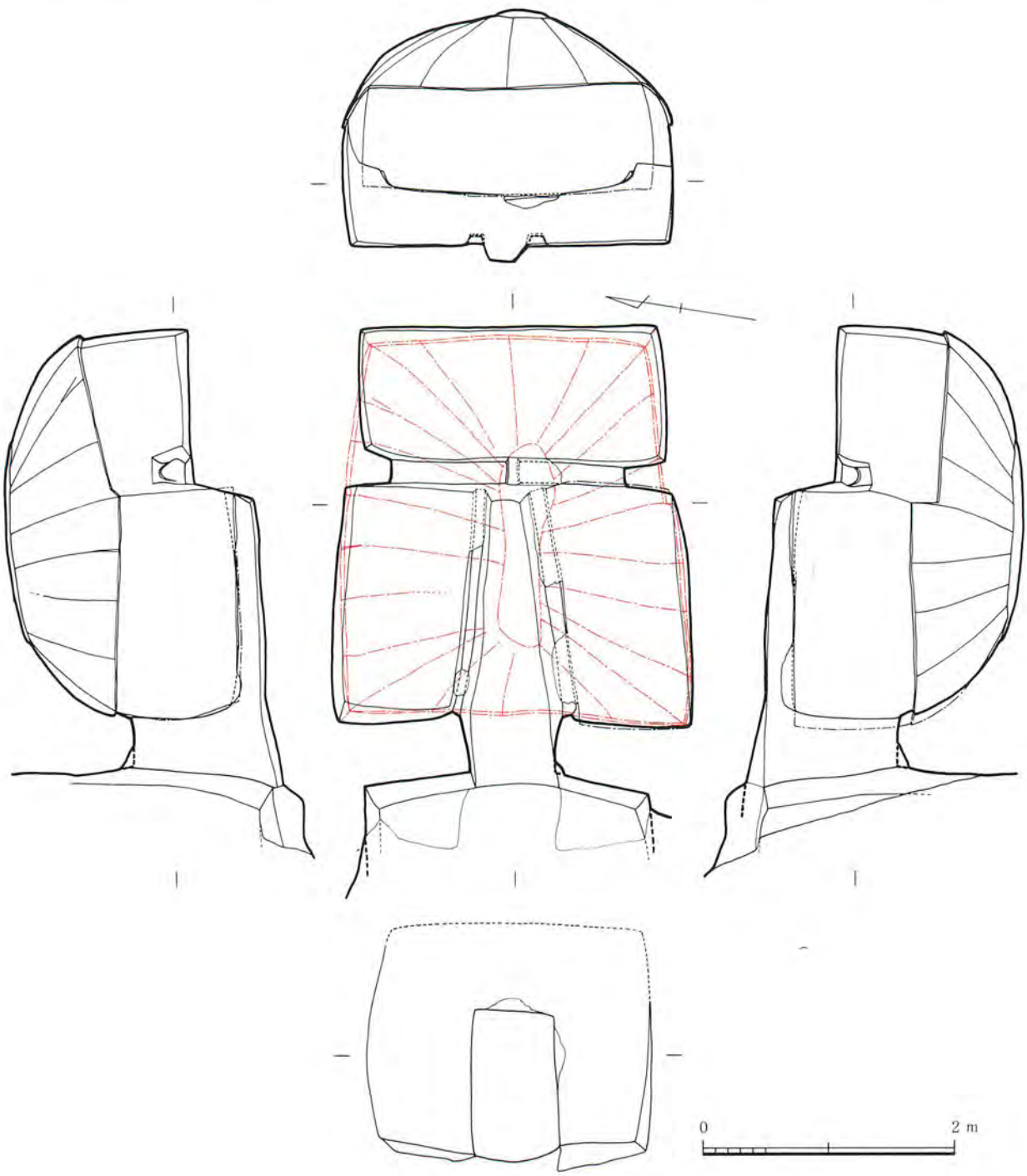


82の12図　小原大塚53号横穴墓実測図

群として捕えることができるが，その中で52号から55号までは支群としてまとまりを成している。このうち52号を除く３基の天井に装飾的な様相を見ることができる。53号横穴墓は外部の風化が激しいが，羨門は長方形で，幅77cm，高さ約 125cmを測り，その外に一重の飾り縁がついている。飾り縁は非常に大きな方形で，幅約 260cm，高さ約 190cmを測る。羨道は風化のため殆んど残っていない。羨門から玄室までの間は約50cmを測る。玄室の平面プランは方形で，屍床の配置は「コ」の字形である。奥屍床は左右の屍床よりも45cm程高い。各屍床の仕切りは両端が上がり，ゴンドラ形の舟を模しており，特に奥屍床の仕切りは顕著にそのことを窺うことができる。天井は寄せ棟妻入りの家形であるがやや丸みを帯びている。玄室の幅は 250cm,奥行き290cm，高さ 195cmを測る。

装飾に含めるのも疑問であるが，天井の表現が特異である。軒先線は四壁を一周し，奥屍床仕切りの上部で段差をつけている。棟は上方にU字形に幅広く抉り，左右の軒先との間にやはり幅広のU字形の抉り込みの帯を放射状に配している。このU字状の抉り込みの幅は10～30cm程度である。古墳時代の家屋の構造をある程度模していると考えられ，そのような意味で重要である。

54号横穴墓（旧46号横穴墓）　53号横穴墓とよく似た構造



82の13図　小原大塚54号横穴墓実測図

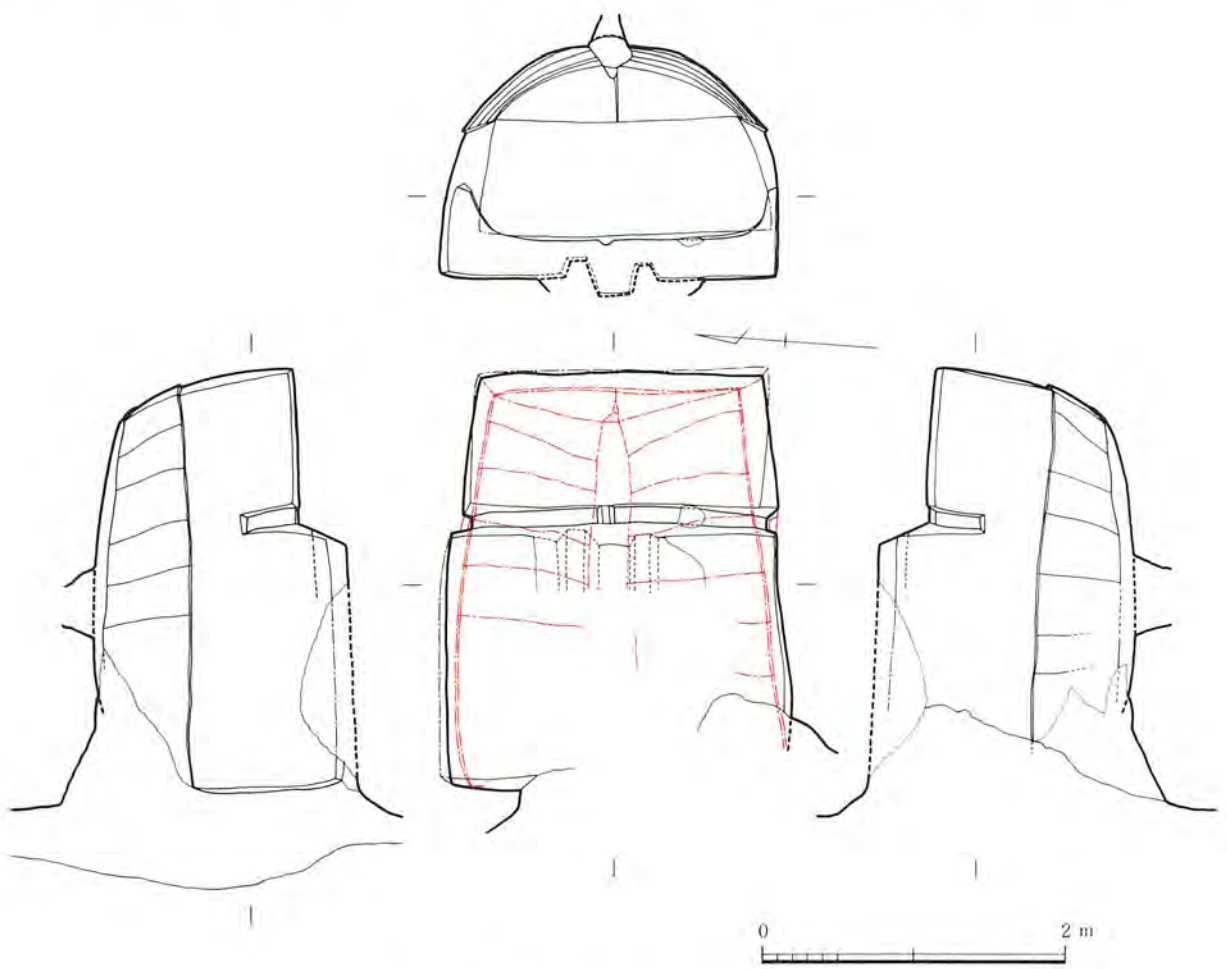
の横穴墓である。羨門は長方形で幅70cm，高さ約 110cmを測る。飾り縁は方形で幅約 230cm，高さは約 180cm程度であったと推定される。羨門から玄室までは約60cmを測る。玄室は幅 285cm，奥行き 310cm，高さ 200cmを測り，平面プランは方形であるが，奥が次第に狭くなっているので台形に近い。「コ」の字形屍床で，奥屍床は左右屍床よりも35cm程高い。奥屍床の仕切りはゴンドラ形を成しており，この内側の面には逆U字形の突出部がある。天井はやはり寄せ棟の家形で妻入りである。棟は上方に広く浅い抉り込みで表現し，軒先は奥屍床の部分だけ段上がりになっている。

天井の棟から軒までの間に等間隔に放射状の線刻がみられる。この線刻は四方とも施されており，垂木の表現と考えることもできる。先に述べた53号横穴墓の天井と施文技法は異なるが同様な意味をもつものである。

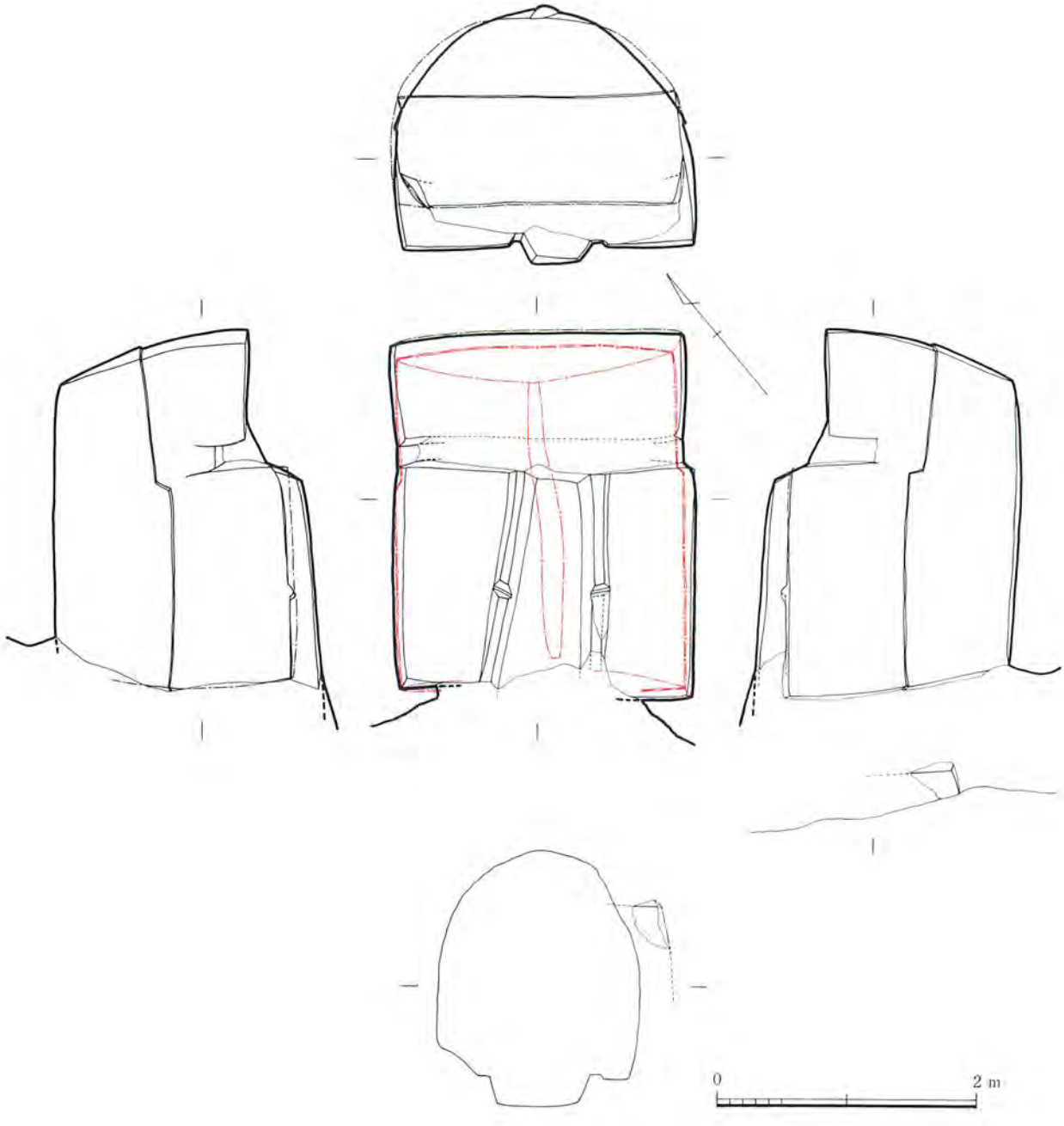
55号横穴墓（旧47号横穴墓）　風化のため前部が大きく崩れている。おそらく羨門と飾り縁は前二者と同じく方形であったと推定される。玄室の平面プランは奥がやや狭くなった方形で，「コ」の字形屍床である。奥屍床は左右屍床よりも20cm程高く，仕切りはゴンドラ形であるが，前二者よりも貧弱である。天井は寄せ棟の家形で妻入りである。玄室の幅 235cm，奥行き 270cm，高さ 170cmを測る。

天井の幅広く抉った棟と軒の間の左右部分には垂木状の線刻がみられる。並んで掘られた3基に垂木状の表現がみられたが，3基を比較すると53号はU字状に抉って垂木状のものを表現しているのに対して，54号，55号は線刻である。これは簡略化と見れないだろうか。軒先は53号，54号では奥屍床部分のみ段上がりになっているが55号ではそれが見られない。また奥屍床前面のゴンドラ形仕切りも53号に比べて54号，55号と順に貧弱になっている。このように見ると横穴墓は左から順に53号，54号，55号と造られたのではないかと考えられる。

75号横穴墓　52号から76号までの群のうち75号と76号は1つの単位として捕えることができる。ただし，75号の左の74号との間には1～2基の横穴が埋もれている可能性もある。75号横穴墓の入口は大きく崩れているが残存する飾り縁の一部分から推定すると，羨門，飾り縁とも正面観は方形であったとみられる。さらに飾り縁の幅は 200cm前後，高さは 160cm前後であったであろう。玄室の平面プランは方形で，「コ」の字形屍床である。奥屍床仕切りは壊れているが，痕跡より復元すると両方の上がったゴンドラ形である。天井は寄せ棟というより切り妻に近く，妻入りである。しかし全体の形状から見るとカマボコ形を成している。棟の部分は上方に浅く抉った帯が通る。軒先は四壁を一周し，奥屍床部分のみ段上がりになっている。玄室の幅は230cm，奥行きは 280cm，高さは 200cmを測る。



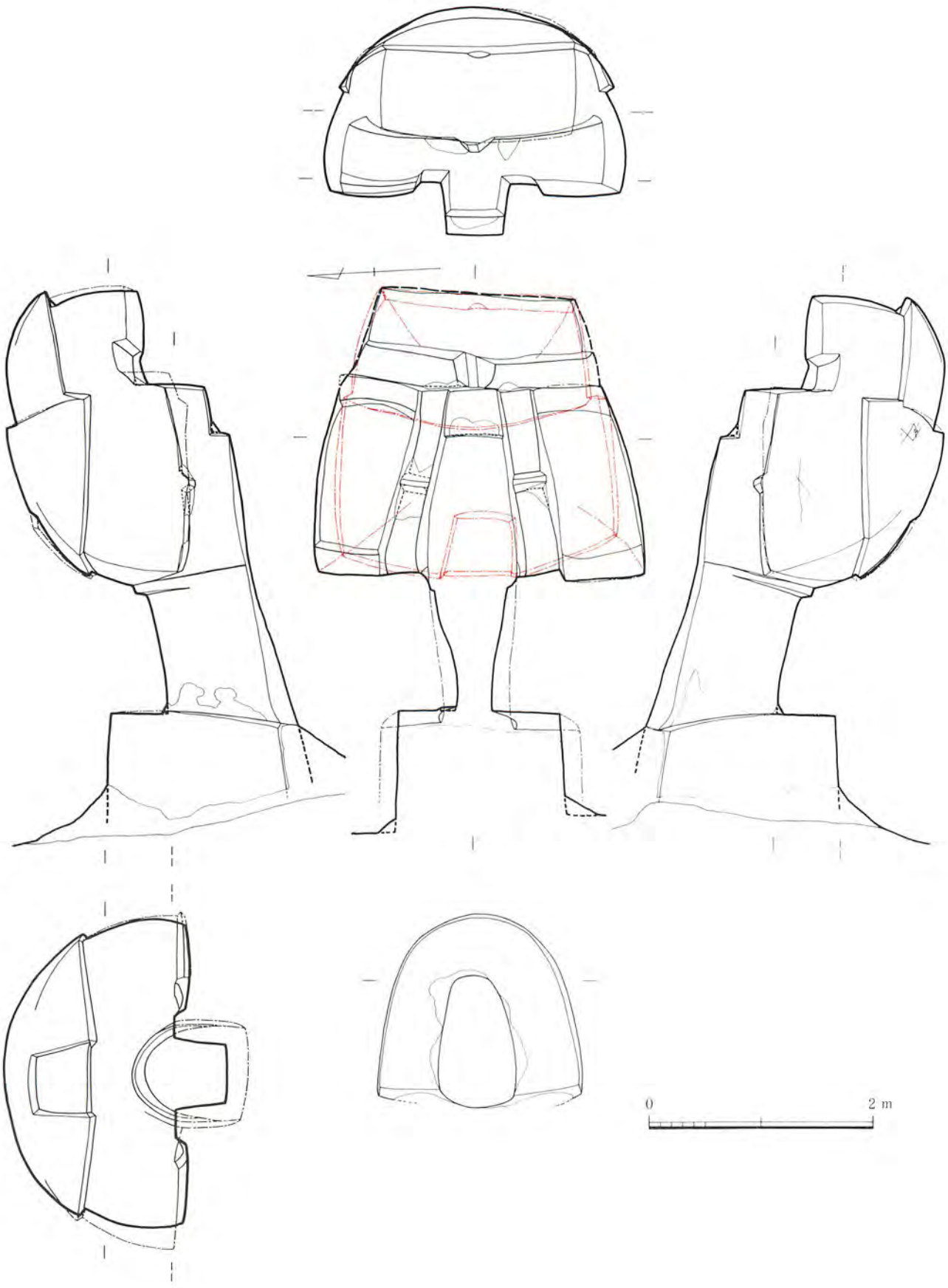
82の14図　小原大塚55号横穴墓実測図



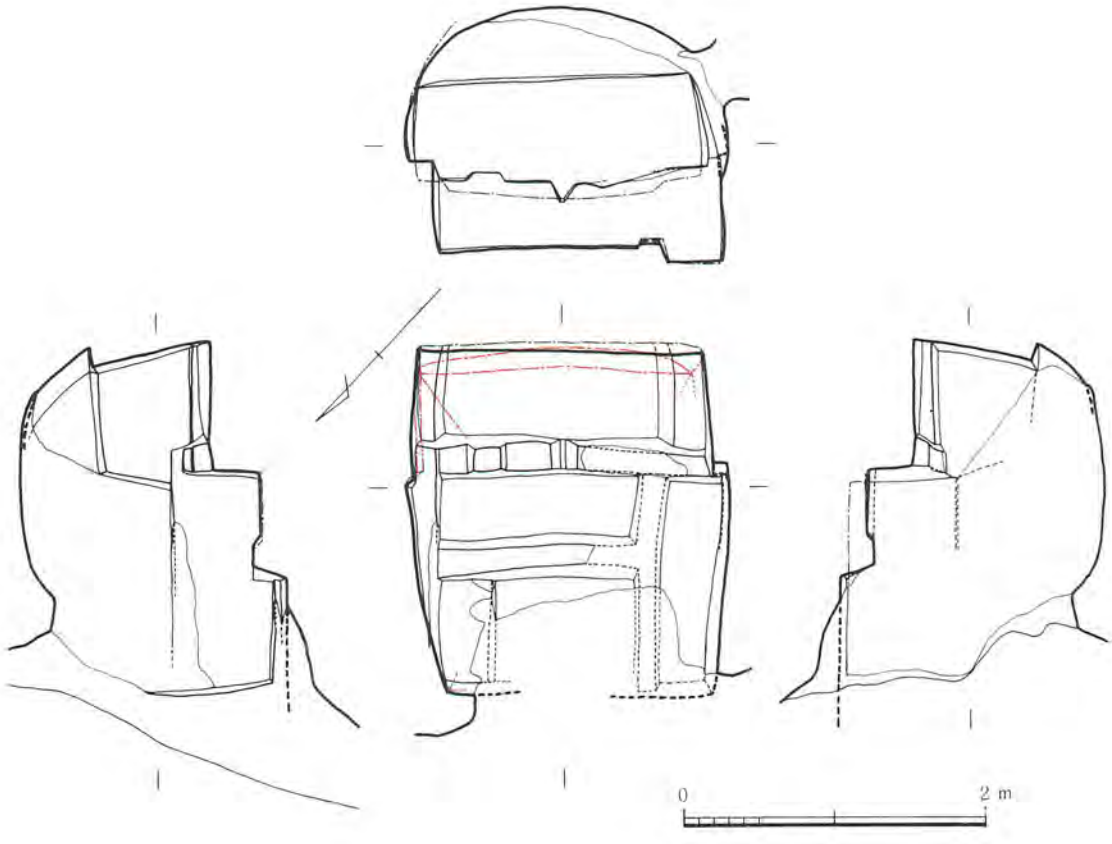
82の15図　小原大塚75号横穴墓実測図

先述のごとく奥屍床の仕切りはゴンドラ形であったと見ることができるが，さらに左端の残存部に溝状の切れ込みがある。これはゴンドラ形仕切りの舟を強調するためにつけられた縁どりの線刻とみることができる。このような意味で，本横穴墓群の13号横穴墓とともに装飾に準ずるものとして紹介しておく。

91号横穴墓　80号から95号までは１つの群となっている。細分は難しいが，91号と92号は関係が強いようである。91号横穴墓は羨門の外に一重の飾り縁をもち，いずれもアーチ形を成している。羨門は幅71cm，高さ 116cm，飾り縁は幅 186cm，高さ約 180cmを測る。羨門から玄室までの間は140cmを測る。玄室の入り口のところには縁どりがついている。玄室の構造は複雑で丁寧に造られている。全体的なプランは奥が狭くなった台形で，「コ」の字形屍床となっている。通路は奥に向かって急坂に上っており，通路の奥には一段のステップが設けられている。各屍床の仕切りは幅広く頑丈に造られており，左屍床には両側に明確な段をつけた枕があり，右屍床にも両側に不明瞭ながらもやや高まりをつけた枕を造っている。奥屍床は左右の屍床よりも40cm程高いが，通路が急な上り坂のため，羨門上部よりも25cm程も高く，非常に高く感じる。奥屍床には枕はなく，仕切りは両端に向かってわずかに高くなっている。天井は軒などの表現はあるが，ドーム形に近い。軒先は四壁をめぐるが，奥屍床部分のみ段上がりになっている。なお天井は奥屍床との境で逆に奥が下がっている。玄室の最大幅（入口側）300cm，奥行き 250cm，中央部の高さ 200cmを測



82の16図　小原大塚91号横穴墓実測図



82の17図　小原大塚93号横穴墓実測図

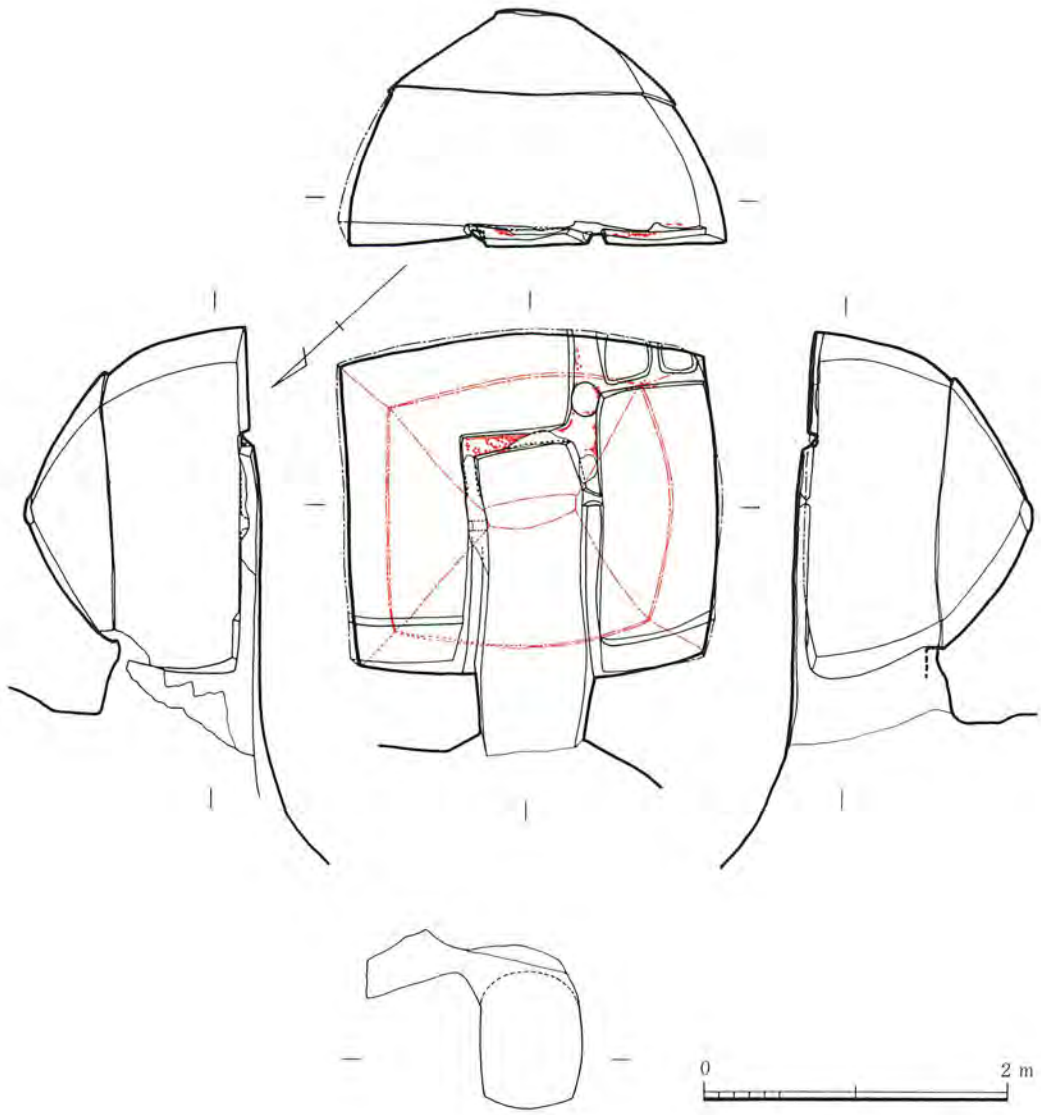
る。

玄室の右壁の２カ所に線刻がみられる。２カ所とも文様としては不確実なものであるが，後世の追刻とも考えがたいので一応線刻文と見ておく。１カ所は右屍床中央部の壁面にあり，わずかに波状になった横線の中程を斜線が横切っている。もう１カ所は同屍床のやや奥寄りの軒先よりも上にあり，X字を縦に二つ重ねたような文様を主とするものである。いずれも横穴製作者の落書きであろうか。このほか，玄室の入口上部の軒の上には幅65cm，長さ65cmの四角の凸起面があり，丁度額縁をかけたようであるが，ここには線刻などは見られない。家屋の煙出しを表現したものであろうか。

93号横穴墓　94号横穴墓と接して造られた横穴墓である。入口が壊れ，天井の大部分も剝落している。平面プランは方形で，幅 210cm，奥行き 230cmを測るが，屍床の配置が特異である。まず入ってすぐのところに横方向に幅65cm，長さ 130cmの屍床があり，左端には枕がついている。これを仮に前屍床と呼ぶことにする。その先に前屍床と平行に屍床が設けられている。この屍床は前屍床面より15cm高く造られており，幅40cm，長さ 130cmを測る。これを仮に中屍床と呼ぶ。前屍床と中屍床の右側に縦方向の屍床がある。これは前屍床とほぼ同じ高さで，幅35cm，長さ約 130cmを測る。これは他の横穴と同じく右屍床と呼ぶ。中屍床の奥には奥屍床がある。この屍床は中屍床よりも30cm程高く，幅65cm，長さ 190cmを測り，両端には枕がついている。以上のようにこの玄室内には通路がなく，床面全体に四つの屍床が造られている。天井は寄せ棟の家形を表現しているようであるが，ドームに近い形態のようである。軒先線は幅広い段がめぐらして表現しているが，奥屍床部分のみは50cm程高い位置につけられている。中屍床から天井までの高さは約 150cmであったと推定される。

屍床の仕切りのうち奥屍床のものは中央に排水溝を切っており，その左に四角の凸起（四角錐台形）がついている。右側部は欠損しているが，ここにも対称的な位置に凸起がついていたことも考えられる。この四角の凸起は何であろうか。原口長之氏は鹿央町岩原Ⅰ－14号横穴墓にみられるこれに類した奥屍床仕切りにある円錐台形が二つ並んだものを舟の「櫓べそ」を表現したものと解されており，また植木町宮穴17号と22号横穴墓にみられる奥屍床の２カ所に対称的にある円錐台形の凸起は上面が凹んでおり，灯明台的な機能をもつのではないかと考えられる。本例はそれらとは形態がやや異なるので何であるかは今後の問題である。文様を描いた装飾横穴墓とは全く違うが，装飾的な凸起をつけた仕切りを持つ横穴墓という意味でここに紹介する。

101号横穴墓　99号から 104号までは本横穴墓群で最も南端に造られた群で，さらに99号から 101号までと，102号から 104号までに細分できる。101号横穴墓は羨門部付近が壊れているが，羨門は方形に近い形で，幅65cm，高さ90cm程度ではなかったかと推定される。玄室の平面プランは方形で，幅 250cm，奥行き 225cm，高さ 155cmを測る。屍



82の18図　小原大塚101号横穴墓実測図

床の配置が特異である。通路の右側の右屍床は奥まで伸び両端に枕がついており，奥の枕には頭を置く位置を２つ掘り凹めている。左屍床と奥屍床は「L」字形に続いており，左屍床の手前に枕がついている。また奥屍床の右端，右屍床との間の仕切りには頭を置く位置の凹みを１つ造っており，仕切りを枕としている。通路と各屍床の高さがあまり変わらないのもこの横穴墓の特徴である。天井は寄せ棟平入りの家形で，棟は上方に浅く抉りを入れて表現し，軒先は段差をつけており，均正のとれた形態をしている。

仕切りのうち通路の奥と，右屍床奥から奥屍床右端にかけては部分的に赤く塗られていた痕跡が見られる。文様であったかどうかは不明であるが，部分的な彩色なのでここでとり上げておく。

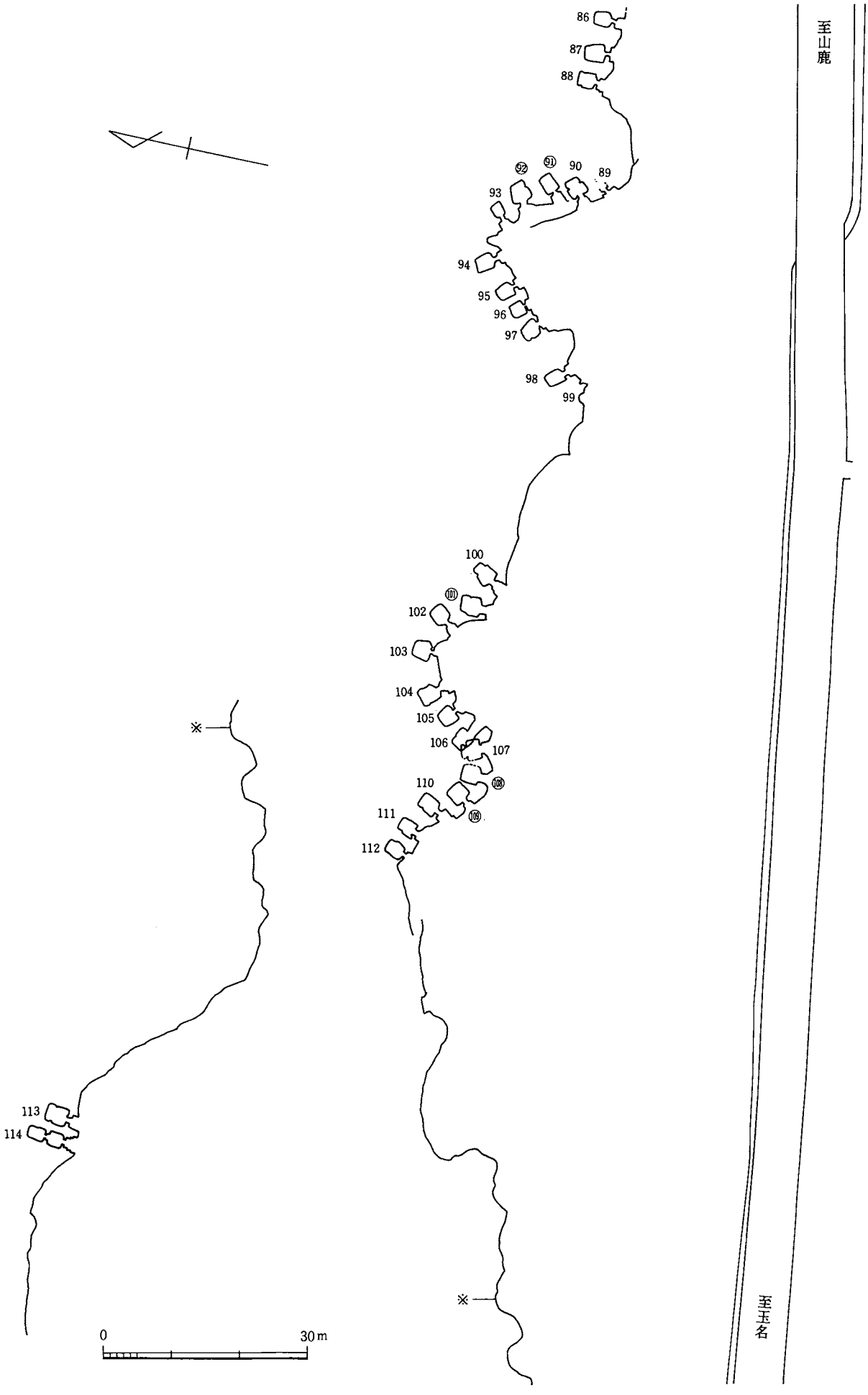
備　考　昭和40年（1965）４月，原口長之氏（当時県立第二高校教諭）と立山広吉（当時県立鹿本農業高校教諭）により本横穴基群の存在が確認され，39号と41号の装飾を発見された。また同年５月，隈昭志氏（当時県立山鹿高校教諭）と山鹿高校考古学部の調査で51号に彩色文様と53号～55号に屋根の表現があるのを発見した。さらに翌年には原口氏と立山氏により93号に「櫓べそ」状の凸起があるのも確認された。　（高木正文）

〔**参考文献**〕
①「小原大塚横穴古墳」『チブサン』１　山鹿高校考古学部　昭和40年（1965）
②斉藤忠『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1973）
③乙益重隆『装飾古墳と文様』（古代史発掘８）講談社　昭和49年（1974）
④原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
⑤原口長之編著『山鹿の文化財』山鹿市教育委員会　昭和50年（1975）
⑥隈昭志「小原大塚横穴群」『熊本の装飾古墳』松本雅明編著，白石巌写真　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）

83．長岩（ながいわ）横穴墓群〔昭和34年県史跡〕（⇨81の１図，83の１～28図）　――山鹿市志々岐長岩――

83の１図　長岩横穴墓群配置図(1)

83の2図　長岩横穴墓群配置図(2)



83の3図　長岩横穴墓群配置図(3)

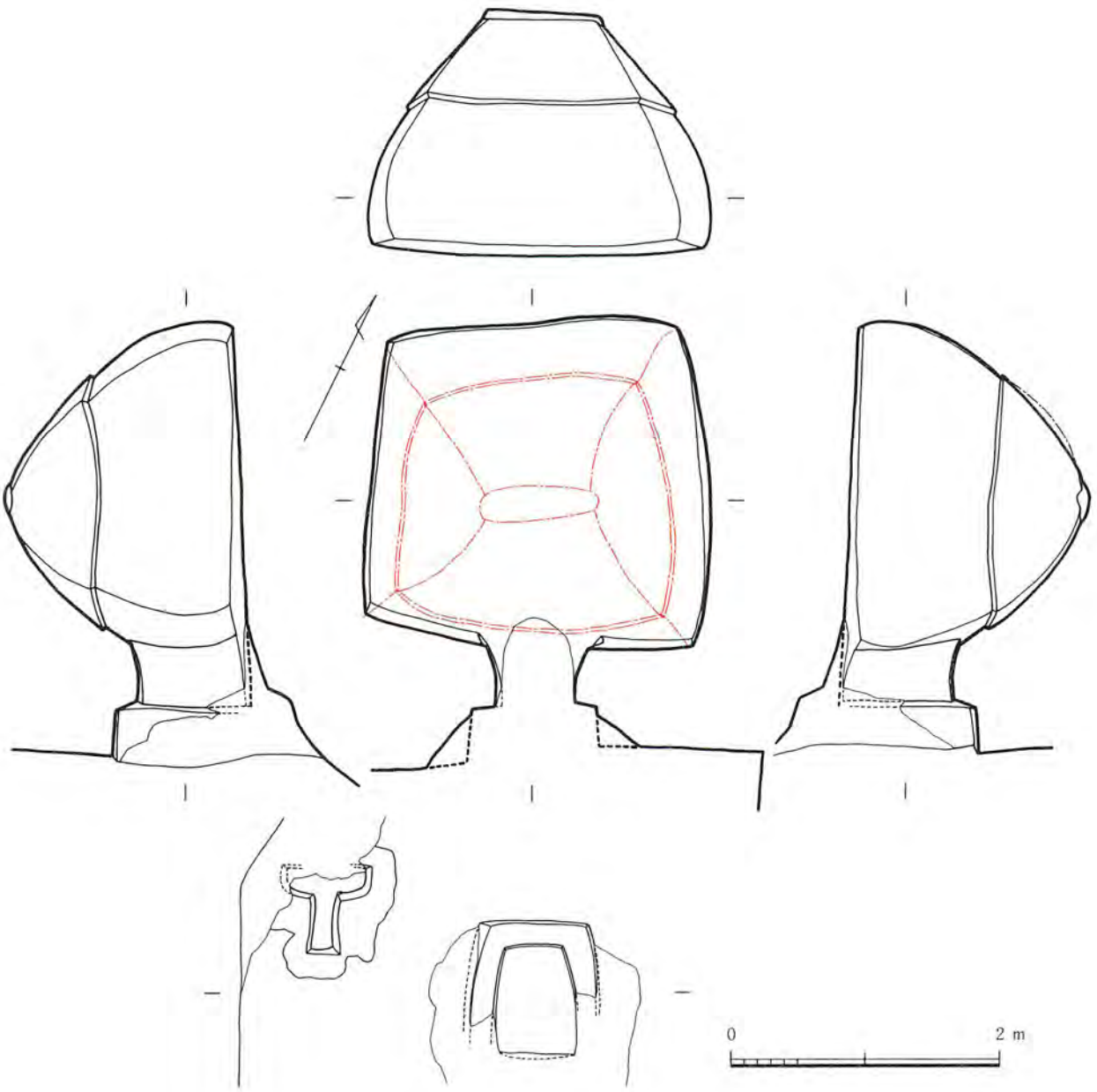
立　地　志々岐（しじき）台地（標高68ｍ）の南端と西端は阿蘇熔岩の崖によって限られている。とくに南端の崖は高さ10ｍ前後もある絶壁であるが，その崖面に横穴墓群が掘りこまれている。

志々岐台地の南端から100～150ｍの凹地をへだてて南方に岩原台地（標高50ｍ）がある。この両台地は古墳，横穴墓群の集積地帯で志々岐台地上には小原大塚古墳，小原石棺群，その他，岩原台地上には国指定史跡岩原古墳群，台地の北岸すなわち長岩横穴墓群と相対する崖面に岩原横穴墓群があり，それにつづいて小原浦田横穴墓群がある。その横穴墓群の中心をなすものが長岩横穴墓群である。

分布と概要　５万分の１地形図「高瀬」図幅の東端より14.1cm，北端より0.3cmの地点附近にある１号横穴墓を起点として，それより西へ阿蘇熔岩の岩壁にそって約500ｍの間に横穴墓が大小あわせて120基ある。この中に装飾をもつものが９基（41号・46号・48号・52号・91号・92号・101号・108号・109号）あったが，その中の１基（52号）の装飾は戦時中に破壊された。

41号横穴墓　左右の横穴墓と少し離れて掘られており，40号から44号までのまとまりのうち中心的な存在の横穴墓と考えられる。入口はやや壊れているが，羨門は長方形で，幅約66cm，高さ約85cmを測る。その外に一重の方形を成す飾り縁が付いている。飾り縁は復原すると幅・高さとも約105cm程度であったと考えられる。羨門から50cm程で玄室に至る。玄室の床面はややひずんでいるが方形に近く，幅260cm，奥行246cmを測る。仕切りは設けられておらず平坦なままである。天井は寄せ棟で平入りの家形に造られており，床面から棟までの高さは178cmである。

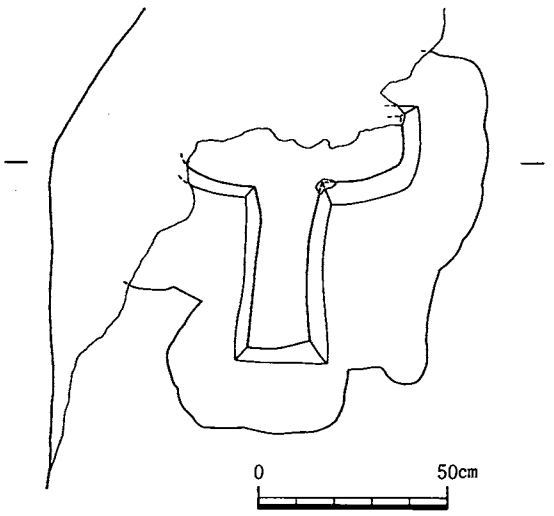
装飾は外壁の左の方にあり，靫が浮彫されている。この靫は奴凧形で，上部が風化により壊れているが，幅70cm，



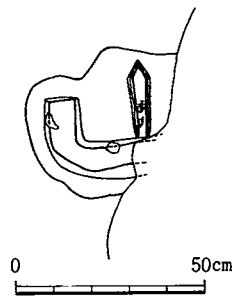
83の４図　長岩41号横穴墓実測図

高さ80cm程度あったと考えることができる。彩色は現状では確認することができない。

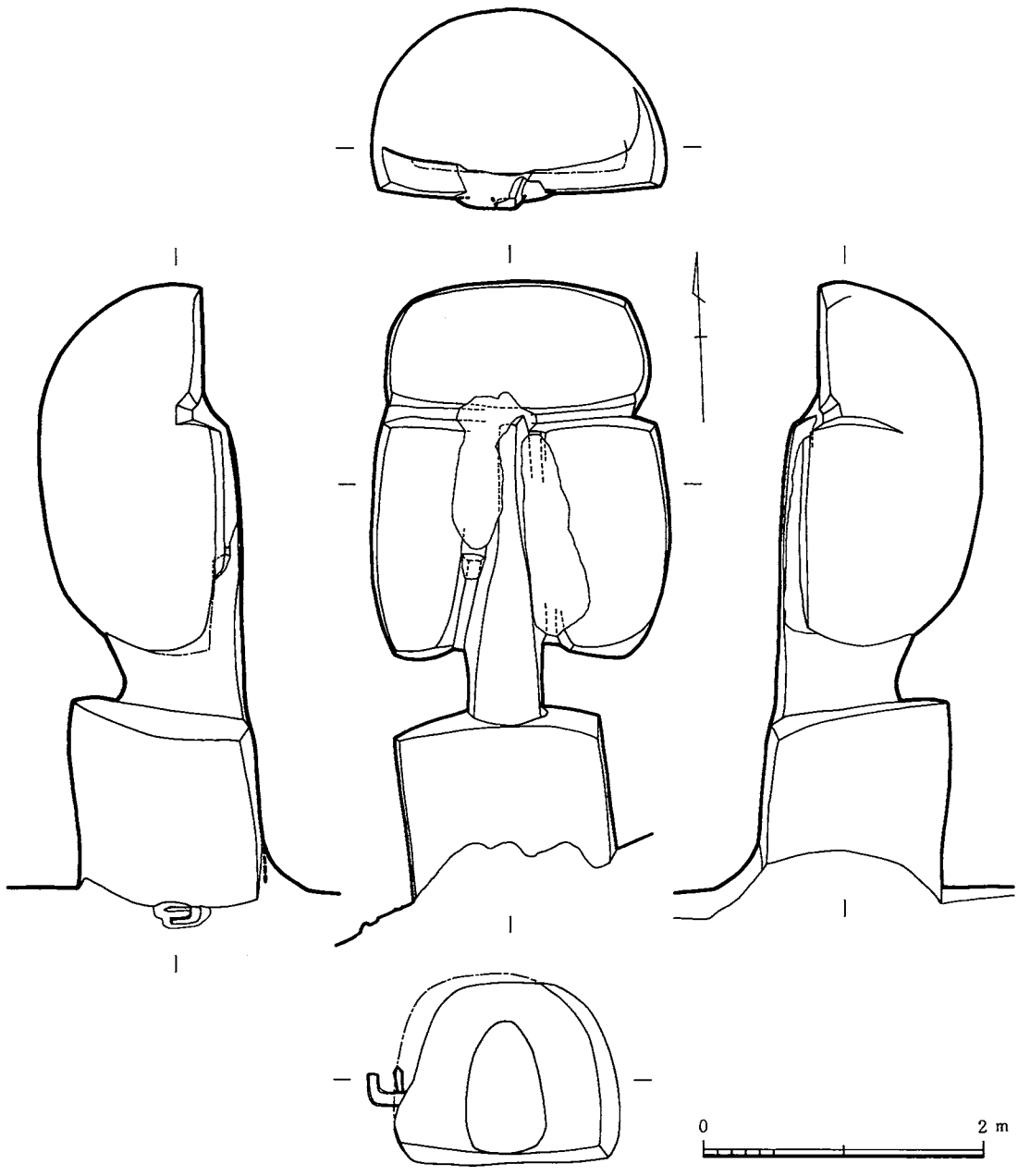
46号横穴墓　45号から52号までは1つのまとまりとみられる。この中の3基に装飾がみられ，46号もその1基である。羨門はアーチ形で，幅58cm，高さ95cmを測る。羨門の前に



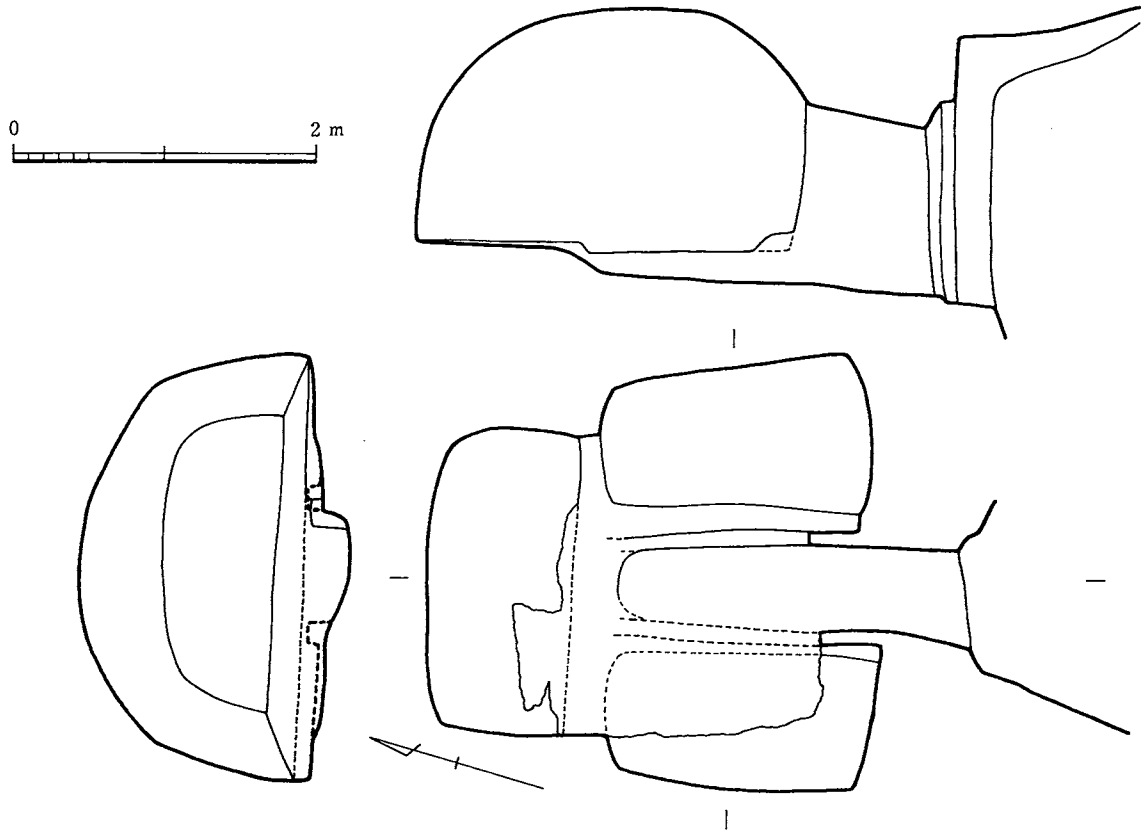
83の5図　長岩41号横穴墓左外壁装飾文実測図



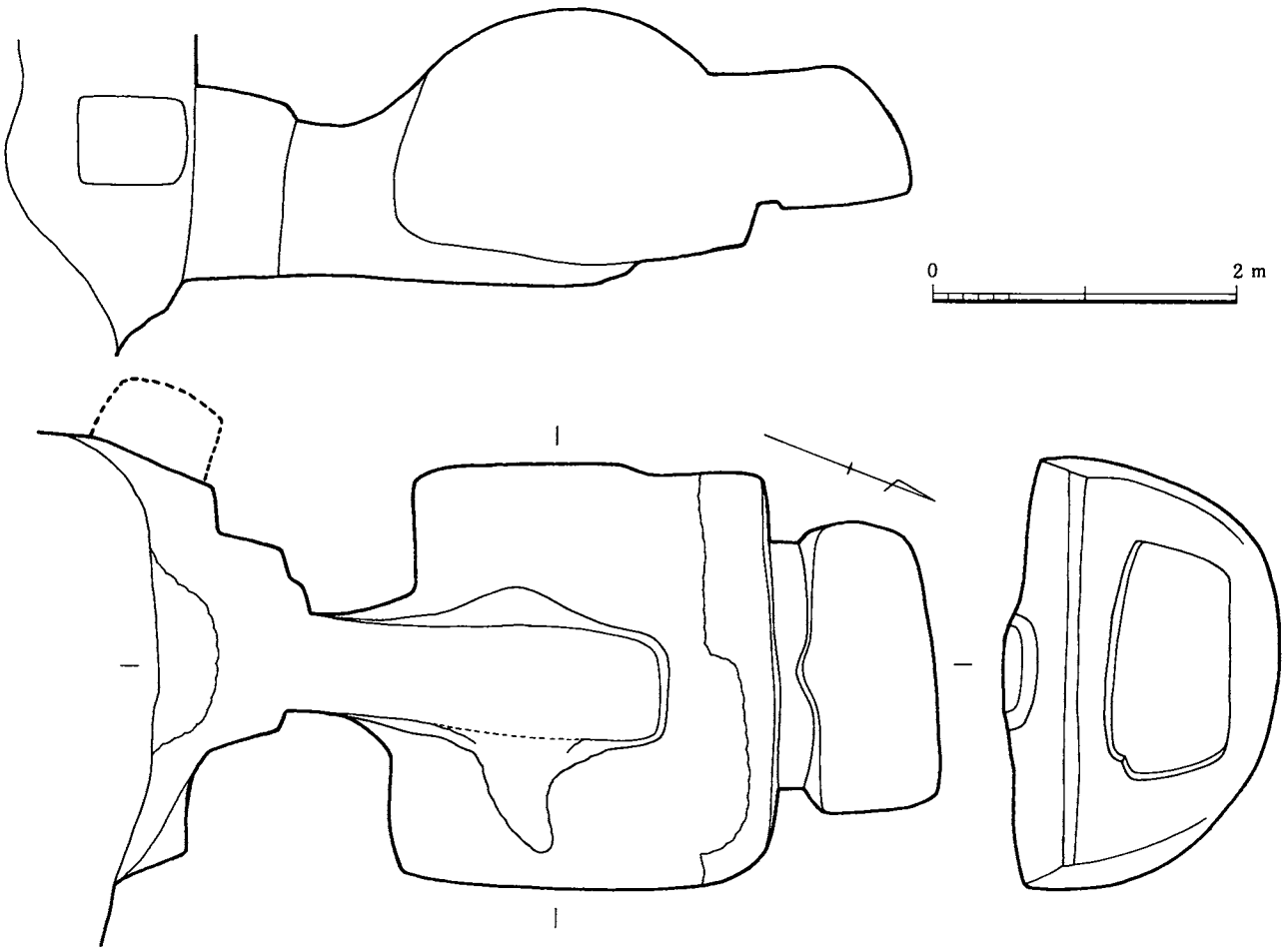
83の6図　長岩46号横穴墓左外壁装飾文実測図



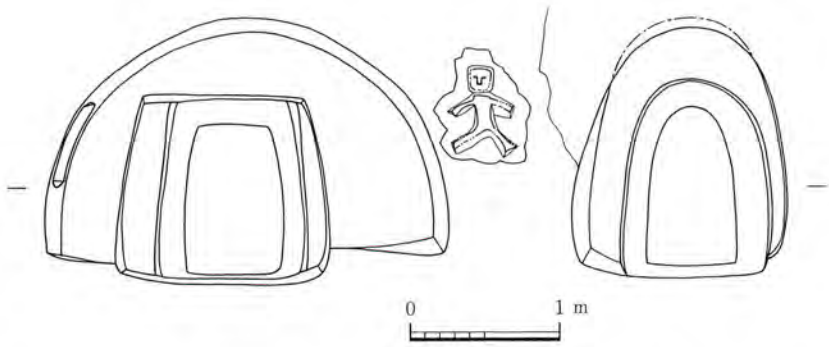
83の7図　長岩46号横穴墓実測図



83の 8 図　長岩47号横穴墓実測図



83の 9 図　長岩48号横穴墓実測図



83の10図　長岩47号・48号横穴墓と装飾文の正面実測図（右47号・左48号）

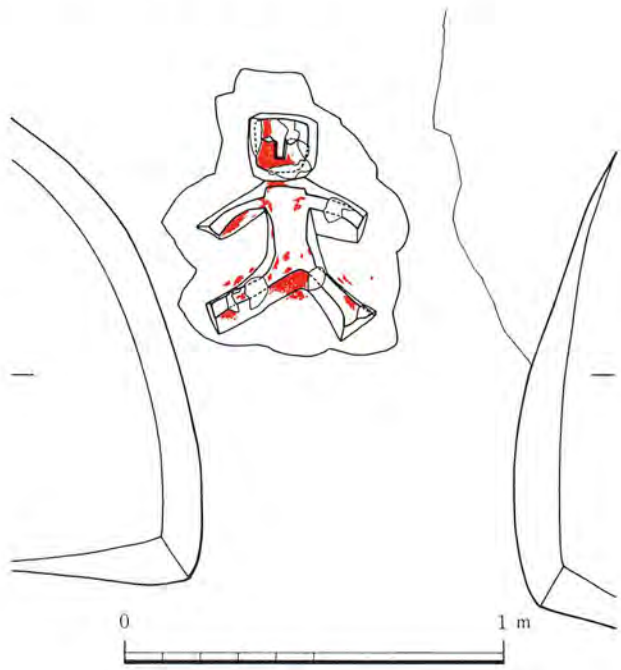
は幅150cm，高さ130cm，長さ120cmのカマボコ形をした羨道がある。羨門から60cm程で玄室に至る。羨道の方向よりも玄室の方向がやや右にずれているのは左にある47号横穴墓を意識したためであろうか。玄室は全体に丸みを帯びており，「コ」字形に仕切られている。奥屍床は左右屍床よりも10～15cm程高く造られており，その仕切りの右端部は上方に反っている。天井はドーム形を成している。玄室の規模は幅214cm，奥行き265cm，通路から天井までの高さは 140 cmを測る。

装飾は左外壁にあり，舟が浮彫されている。ゴンドラ形の舟で，その右側が欠損しているが，その中央と思われる部分に幅５～10㎜の溝の線刻で，上端の尖ったマスト状のものを表現している。このマスト状のものには赤色顔料の残存を認めることができる。なお，この装飾の大きさはマスト状の先端から舟底まで30cmを測る。

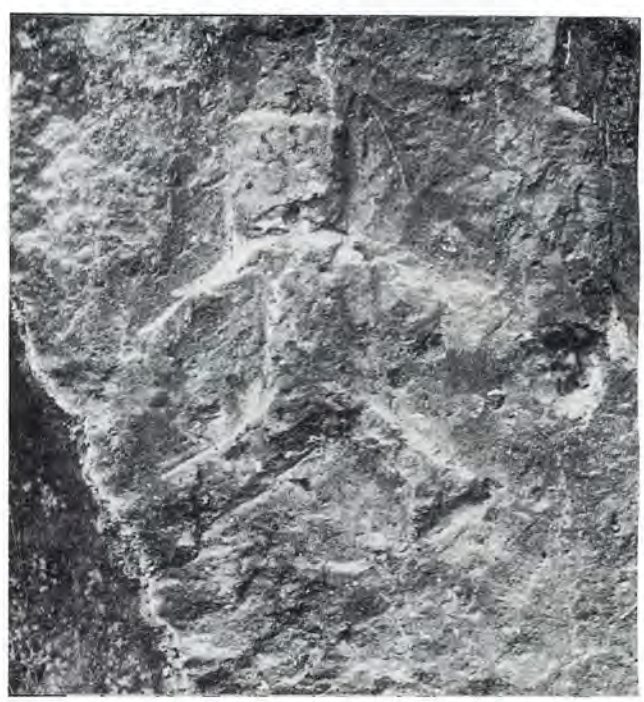
47号・48号横穴墓　47号と48号の間に装飾がある。

47号横穴墓の羨門は幅約60cm，高さ 100 cmを測るアーチ形で，その外にやはりアーチ形を成す二重の飾り縁がある。内側の飾り縁は幅約100cm，高さ130cm，外側の飾り縁は幅約140cm，高さ約170cmを測る。羨門の前には７cm程の段がある。羨門から60cm程で玄室に至る。玄室は仕切りが壊されているが「コ」字形に仕切られていたことがわかる。規模は幅約190cm，奥行約300cmで，天井はドーム形で，通路からの高さ約170cmである。

48号横穴墓は雄大な横穴墓である。羨門は幅約65cm，高さ約95cmを測る長方形である。その外に閉塞石を立てるためとみられる幅約100cm，高さ約120cmを測る飾り縁状の掘り込みがあり，さらにその外に二重の飾り縁がある。内側の飾り縁は方形で幅約140cm，高さ約120cmを測り，外側はアーチ形で幅約270cm，高さ約170cmを測る。外側の飾り縁の左内壁には幅約80cm，高さ約60cm，奥行約60cmを測る棚状の穴がある。この穴も後世のものではなく，横穴墓の付属施設と考えることができる。羨門から70cm程で玄室に至る。玄室は仕切りが破壊されているが「コ」の字形に仕切られていたことがわかり，さらにその奥に石屋形がある。従って全部で４区の屍床がある。このような屍床配置は付城72号横穴墓にもみられる。玄室の幅は約 280 cm，奥行約360cm，高さ約180cmを測り，天井はドーム形を成している。



83の11図　長岩48号横穴墓右外壁装飾文実測図



83の12図　長岩48号横穴墓右外壁装飾文（白石巌撮影）

83の13図　長岩横穴墓群の部分近景〔右から46～52号横穴墓〕　（大正11年頃撮影：京都大学考古学研究室提供）

装飾は先述のごとく47号と48号の間の外壁にみられ，両腕をひろげ足をふんばった人物像の浮彫がある。顔は四角で，両目はくぼめ，鼻は低い浮彫で表現してある。全体に稚拙な表現であるがおもしろみがある。人物像の高さは60cmで、もとは全身が赤く塗られていたようである。両側の横穴墓を比較すると48号横穴墓が雄大で，先に造られたと考えられ，また装飾もより48号横穴墓の飾り縁に近い位置にあるところから48号横穴墓に伴うものと見たほうがよいのではなかろうか。

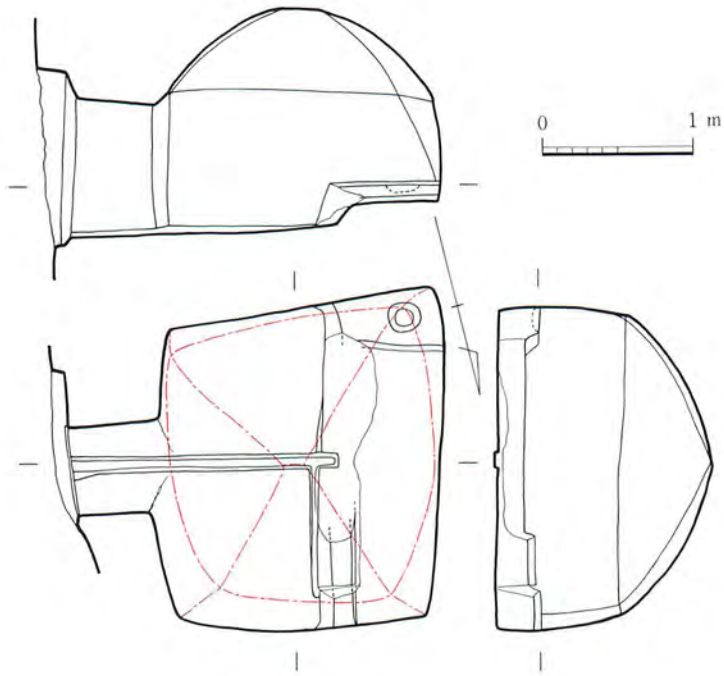
52号横穴墓　この横穴墓の羨門に向かって右外壁に装飾があったが，前に記したとおり戦時中ここに防空壕が掘られたため失われた。

羨門はアーチ形で幅約60cm，高さ約90cmを測る。京都大学（梅原末治氏？）が大正11年頃撮影した写真によると羨門の外に方形を成す二重の飾り縁があったことがわかるが，現在は外側の飾り縁は壊れてしまっている。内側の飾り縁は復原すると幅約130cm，高さ約115cmである。羨門から60cm程で玄室に至る。玄室はややひずんだ方形で，幅210cm，奥行190cmを測る。左右には仕切りがなく，奥だけ仕切られている。奥屍床の左側に造り付けの枕があり，頭を置く所が1ヵ所掘りくぼめられている。玄室の中央部には羨門まで通じる溝が掘られている。天井は妻入り寄せ棟の家形であるが，棟が短かいので宝形造に近い。床面から天井までの高さは約140cmを測る。

右外壁の装飾は京都大学の写真によると上方に靱，その右に人物像，それらの下段に馬が浮彫されている。靱は両袖付で，下方が広がっており，それに14本の矢を扇形に広げて納めている。人物像は顔が丸く，腕は短かいが両側に伸ばし，足をふんばっており，他の人物像と同じく大の字形をしている。馬はうな垂れた頭を左にして横から見た状態を彫っており，尾は太い。これらの浮彫は一応52号横穴墓に伴うと考えられているが，写真で見ると51号横穴墓との中間的な位置にあり，51号横穴墓に伴う可能性も考えてみる必要があろう。

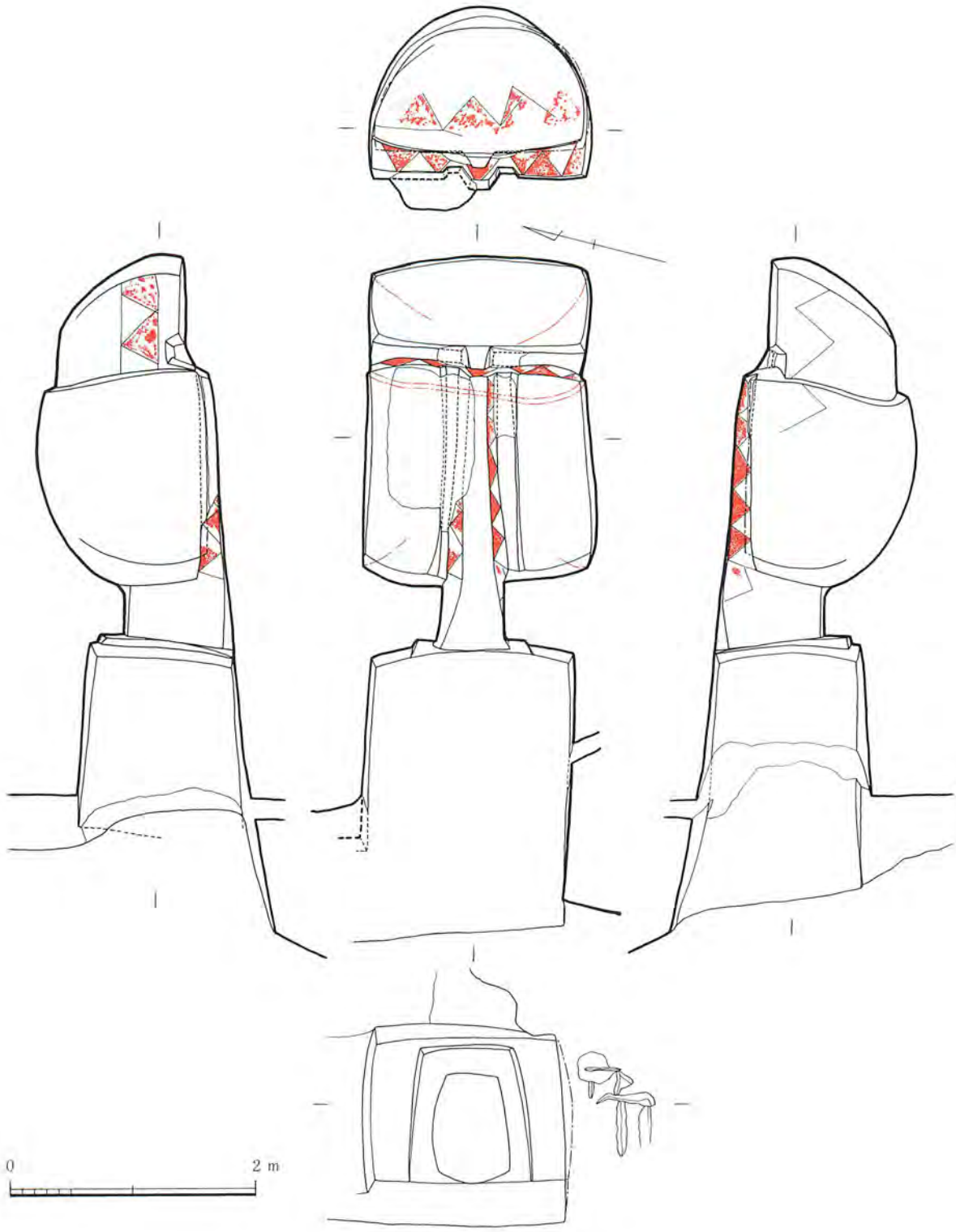
91号横穴墓　89号から99号までは同じ谷に造られており，一つのグループとみることができる。このうち最も高い位置にある91号と92号に装飾がある。

91号横穴墓は現在長岩横穴墓群で確認されている唯一基の内部に装飾を持つ横穴墓である。羨門は幅64cm，高さ88cmを測る。羨門の外側に幅102cm，高さ110cmを測る方形の飾り縁状のものがあるが，これは閉塞石を立てるための掘り込みである。羨門の前に幅170cm，高さ140cm，長さ 225



83の14図　長岩52号横穴墓実測図

83の15図　長岩52号横穴墓右外壁の装飾文〔現在は消滅〕　（大正11年頃撮影：京都大学考古学研究室提供）



83の16図　長岩91号横穴墓実測図

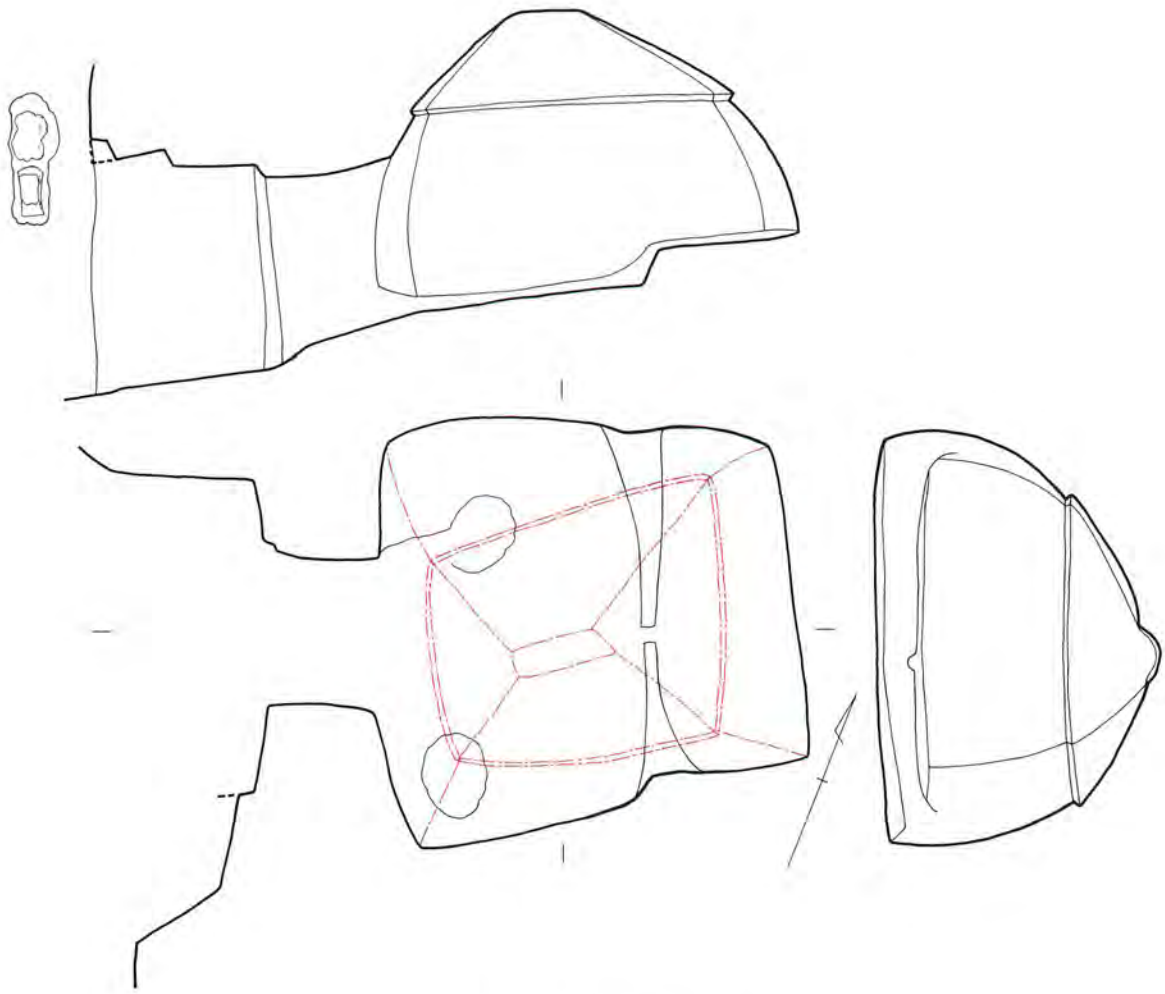
cm程度の割合長い羨道がある。羨道から60cm程で玄室に至る。玄室は長方形で幅191 cm，奥行263 cm，高さ147 cmを測り，「コ」字形に仕切られている。奥屍床は左右の屍床よりも20cm程高く，壁面・天井とも段がついて狭くなっている。天井の形態はカマボコ形とドーム形の中間的な形状を成している。

装飾は横穴墓に向かって右外壁と，玄室内の壁面および仕切りにみられる。

右外壁の装飾は，平担に仕上げた壁面にやっと粗割付の鑿を入れた所でやめているので何を彫ろうとしたものか不明であるが，鑿の痕や彫られている位置などから後世の追刻とは考えにくいので，未完成の装飾と考えられる。

玄室内の仕切りの装飾のうち左右の仕切りのものはその通路側の面に連続三角文を線刻しており，左の仕切りでは不明確であるが右の仕切りは下からの三角の部分を赤く塗っている。奥の仕切りはその前面に連続三角文が描かれ，やはり赤で塗りわけられている。

玄室壁面の装飾は主に奥屍床部分にみられ，いずれも連



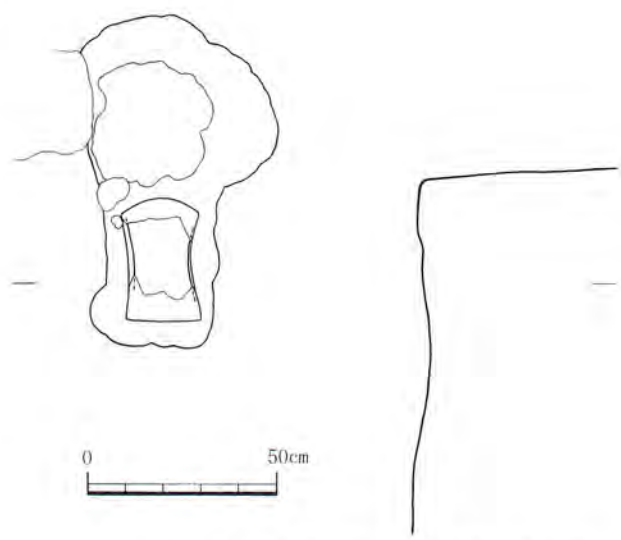
83の17図　長岩92号横穴墓実測図

続三角文であるが仕切りのものより大きく，左壁には上下に横線を引いているが，奥壁では下の線が一部引かれているのみで，右壁には上下の横線はない。また右壁の三角文は一部右屍床の壁面まで及んでいる。右壁・奥壁とも赤の彩色が加えられているが，右壁には彩色がみられない。これは当初からであるか退色したのか不明であるが，他の壁の残存状況からして前者の可能性が強いと考える。

92号横穴墓　羨道・羨門とも拡張されているが，91号と似た状態であったと考えられる。ただ羨道の天井部の途中に段があるのが異なっている。羨門の大きさは不明であるが，羨道は幅約200 cm，高さ約150 cm，長さ約200 cm程度あったものと考えられる。羨門から玄室までは約80cmで，屍床の仕切りは破壊されているが，「コ」字形屍床であったことがわかる。平面プランはほぼ方形で，幅・奥行とも280 cmを測る。天井は妻入りの寄せ棟家形で，通路から棟まで高さ約185 cmである。

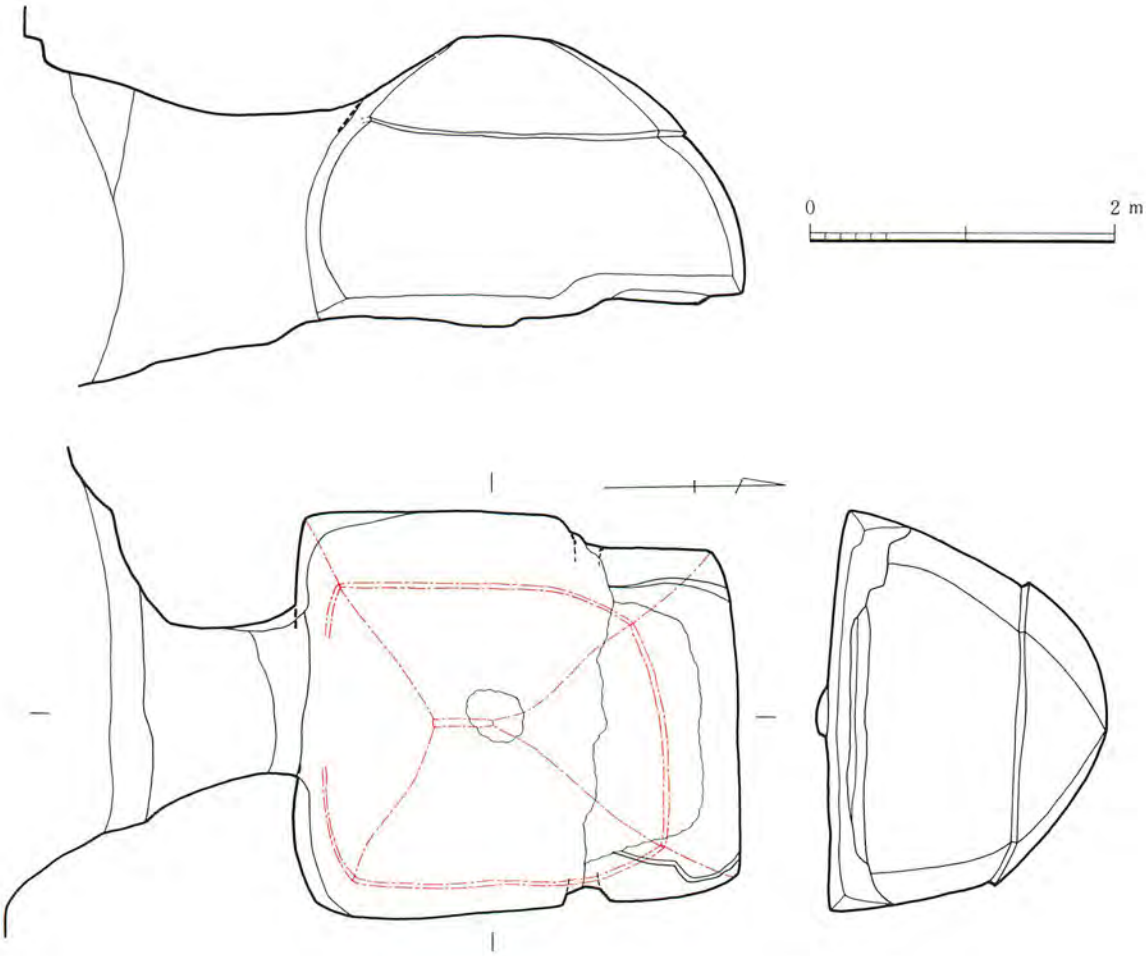
装飾は左外壁に浮彫があるが風化が激しい。上下に彫られていたらしく，下段のものは幅20cm，高さ32cmを測る小さな盾であったと考えられるが上段のものは剝落しているため不明である。一般には上段のものは同心円文と言われているが疑わしい。彩色は残っていない。

101号横穴墓　100号から112号までは1つのグループを成している。このうち101号と108号，109号に装飾がある。



83の18図　長岩92号横穴墓左外壁装飾文実測図

101号横穴墓は入口が大きく拡張されているため，羨門の大きさは不明であるが，その外縁に二重の飾り縁が付いていたことがわかる。いずれも正面観は方形で，復原すると内側の飾り縁は幅130cm，高さ130cm，外側の飾り縁は幅190cm，高さ160 cm程度であったと考えられる。羨門から80cm程で玄室に至る。玄室床面も破壊されているが，「コ」字型に仕切られていたことがわかる。平面プランは長方形で，



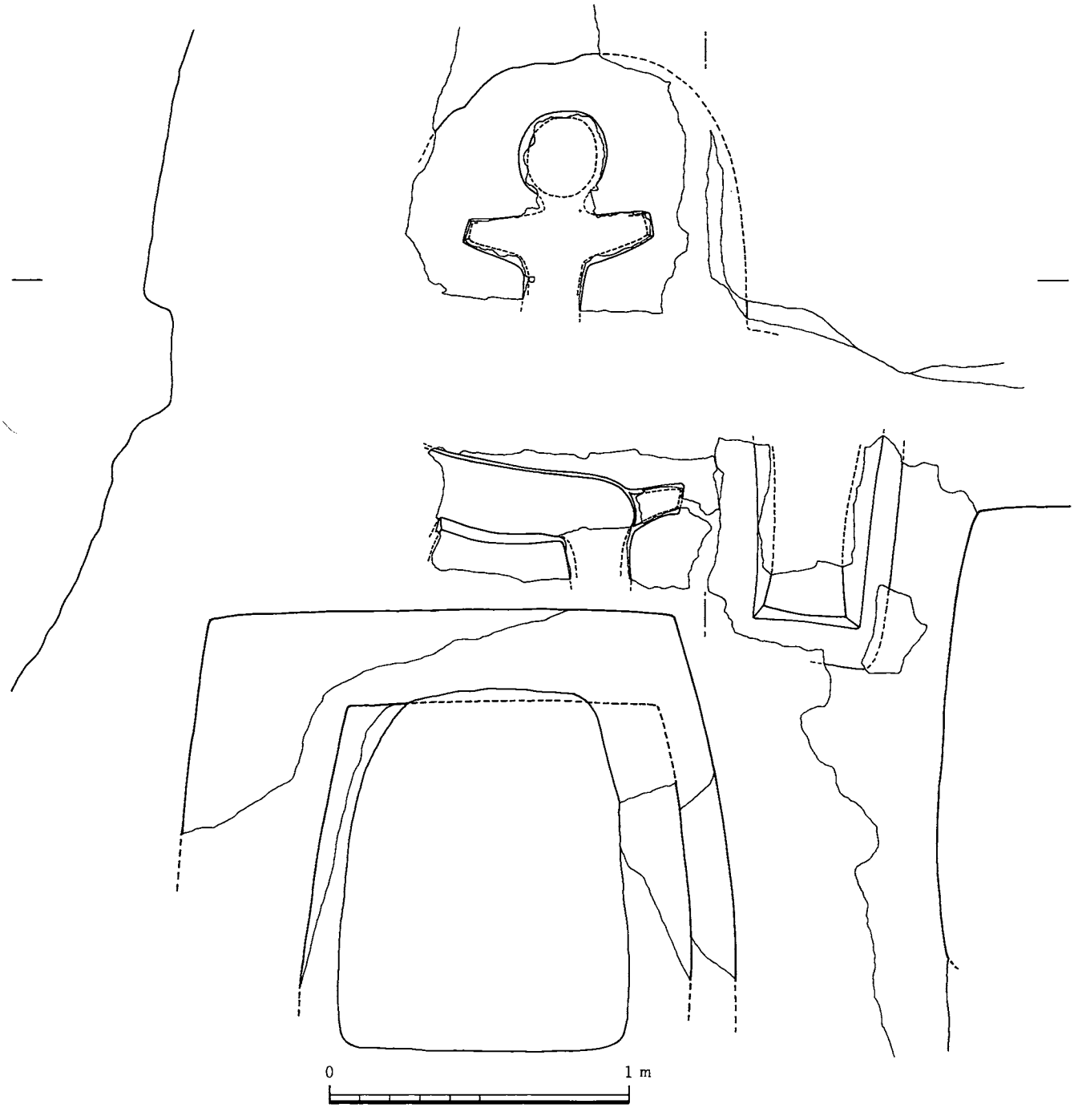
83の19図　長岩101号横穴墓実測図

幅260cm，奥行290cmを測る。天井は妻入り寄せ棟の家形で，高さは約180cmある。

装飾は入口の上方にみられ，風化と人為的な破壊により欠損が激しいが，人物像と馬と盾の浮彫がみられる。人物像は上方にあり，頭が丸く，両腕を横に伸ばしているが，全体が削平されており，腹部以下は後世に横穴墓の上に庇が設けられたらしくその際に抉られて破壊されている。人物像の両腕を伸ばした幅は64cmで，現存部の高さは65cmを測る。馬は人物像の下にあるが騎馬の状態ではない。頭を左に向けているが頭部・頸部は欠損しており前足もかろうじて付けねが確認できるだけである。胴部は割合細いが，後足・尻尾とも太く短かい。なお胴部と尻尾の境には段差がある。残存部の全長は85cmを測る。人物像と馬のある面からやや屈折した右面に盾がある。盾も上部を破壊されており，現存部は幅43cm，高さ63cmを測るが，復原推定では高さ80cm程度あったものと考えられる。これらの浮彫は赤く塗られていたものと思われるが，現在では確認できない。

108号横穴墓　入口が拡張されているが丁寧に仕上げてあるため当初のままかと見紛うほどである。羨門については不明であるが，羨道は残存部から復原すると正面観が方形で，幅140cm，高さ120cm程度であったことがわかる。羨門から玄室までは約90cmである。玄室は改造され，右側は107号の玄室と通じているが，床面には「コ」字形屍床の痕跡が

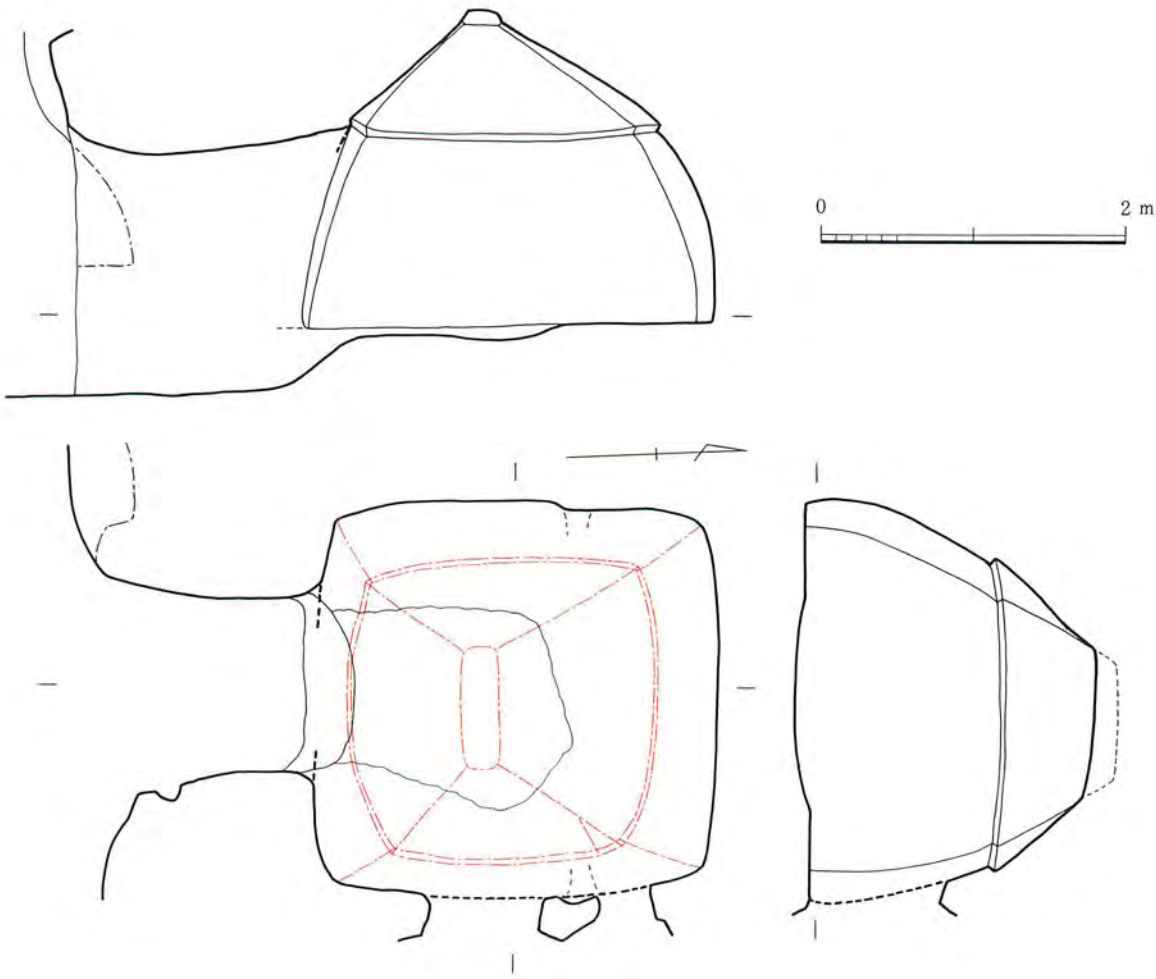
83の20図　長岩101号横穴墓装飾文全景
（上・人物，下・馬，右下・盾，白石巌撮影）



83の21図　長岩101号横穴墓外壁上部装飾文実測図

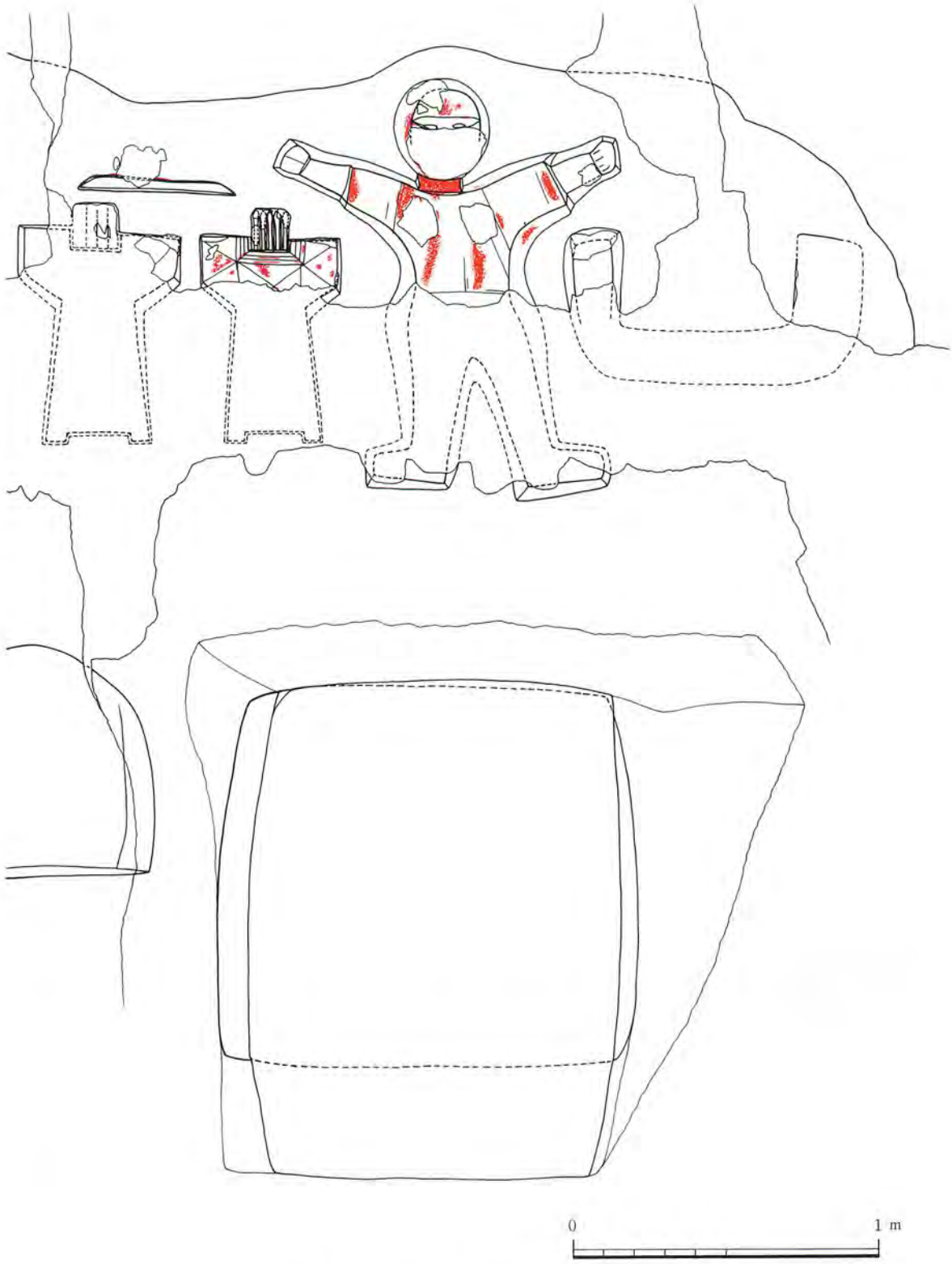
みられる。平面プランは方形で幅・奥行ともほぼ260cmである。天井は寄せ棟の家形を成し，平入りになっている。玄室の高さは210cmである。なおこの横穴墓の左外壁に幅約100cm，高さ約75cm，奥行約40cmの石棚状の掘り込みがあり，横穴墓に伴うものである可能性もある。

装飾は横穴墓の外壁上部に施されているが，その部分に後世に庇を付けるためとみられる抉り込みがあるので，いずれも完存していない。装飾は浮彫で，中央に「大」字形の人物像がある。頭は丸く，顔面の下半部は削られているが，目とその周辺は彫り窪めて表現している。両腕をのばし，袖の短かい着物を着ているのは興味深い。下半身は破壊されているが，わずかに両足の一部が残っているところから人物像の大きさは幅115cm，高さ136cmであったことがわかる。人物像に向かって右側に浮彫の一部が残っており，従来盾ではないかと推定されていたが，さらに右端部に残る剝落の痕跡や，近くの小原大塚39号および41号横穴墓の例などからゴンドラ形の舟であったと考えたい。人物像に向かって左側には両袖付の靱２個が並べて彫られている。いずれも上部のみ残っており，右側の靱には５本の矢の表現があり，左側の靱には４本の矢を表現していたようである。右側の靱の方が装飾に富んでおり，矢を収める所には３重の線刻の縁どりがあり，全面に縦線とＸ状に交わる直線を施している。右側の靱は幅46cm，左側の靱は幅53cmで，高さはいずれも77cm前後の大きさに彫られていたものと考



83の22図　長岩108号横穴墓実測図

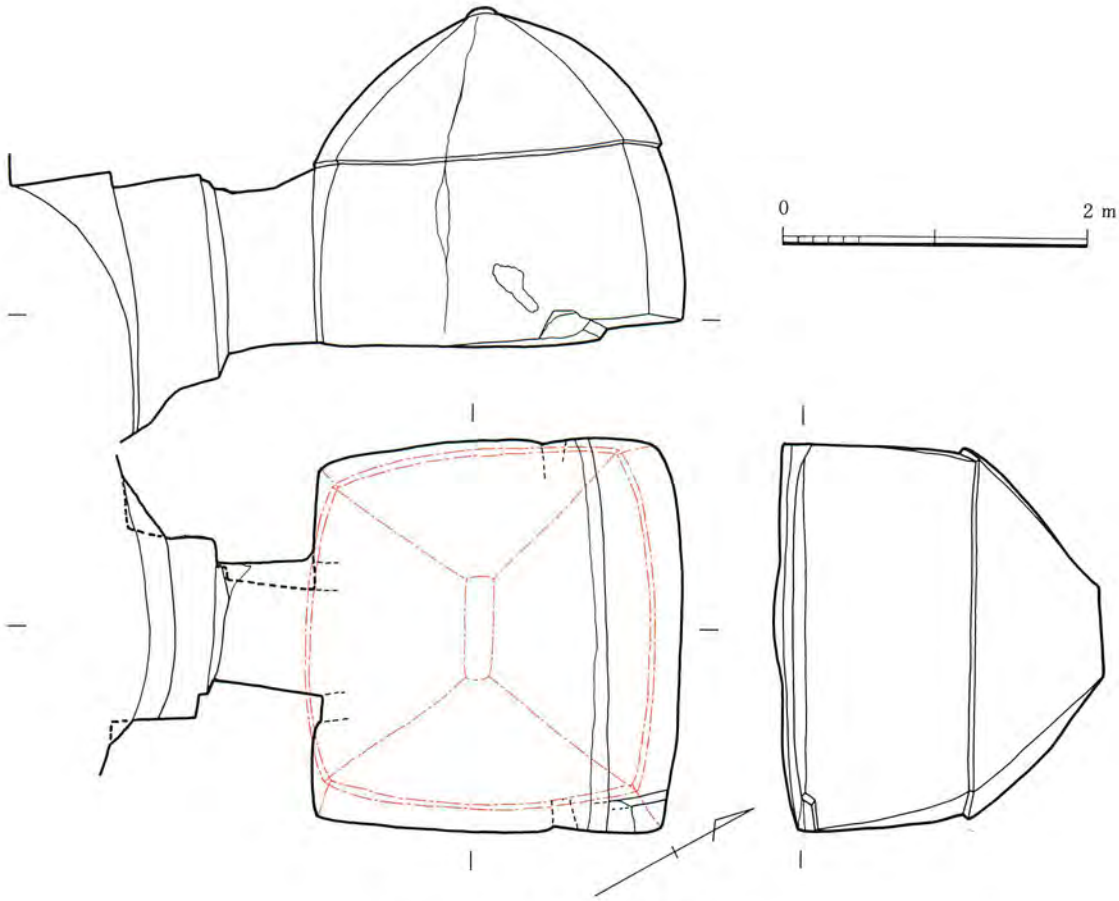
83の23図　長岩108号・109号横穴墓全景（右108号・左109号　白石巌撮影）



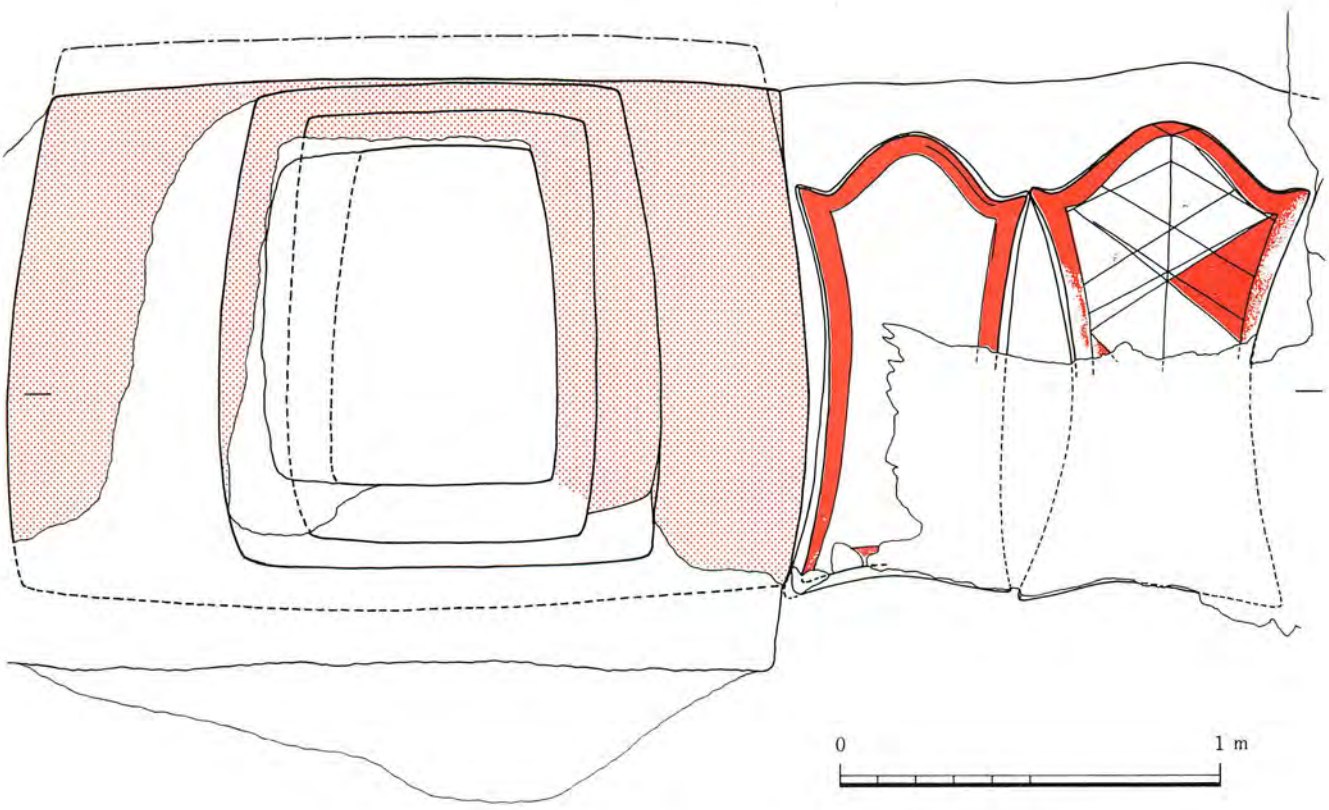
83の24図　長岩108号横穴墓外壁上部装飾文実測図

えられる。２個の靱の上方に弦を下にした弓が陰刻されている。長さ52cm，幅５cmを測り，浮彫の中で異例の表現である。これらの装飾のうち人物像と右側の靱と弓には赤の彩色が部分的に残っている。なおこれらの左側の壁面がやや屈折した所には盾２個の浮彫があり，これも同時に彫られたと考えられるが，これは一応109号横穴墓に伴うものとしておきたい。

109号横穴墓　いくぶん改造され，羨門も拡幅されているが，復原すると羨門の幅約60cm，高さ88cmで長方形を成している。その外に閉塞石を立てるための幅約80cm，高さ112cmの掘り込みがある。さらにその外に二重の飾り縁が付いている。内側の飾り縁は幅117cm，高さ125cmを測り，外側の飾り縁は幅214cm，高さ約150cmを測る。いずれも正面観は方形である。羨門から70cm程で玄室に至る。平面プランは幅250cm，奥行き240cmを測る方形で，仕切りが破壊されているが「コ」字形に仕切られていたことがわかる。奥屍床

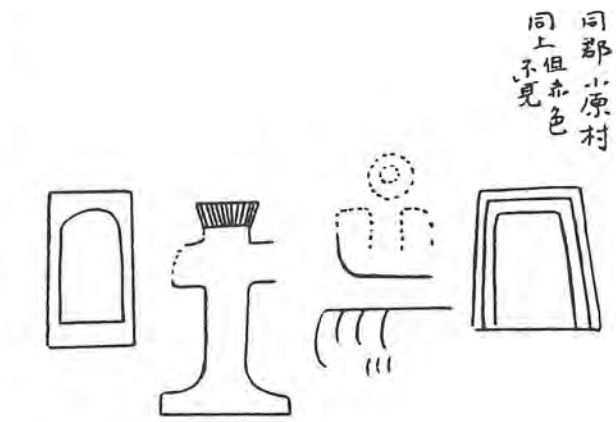


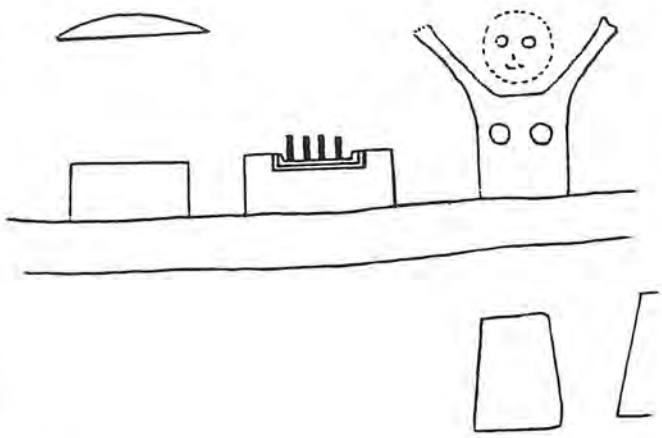
83の25図　長岩109号横穴墓実測図



83の26図　長岩109号横穴墓右外壁装飾文実測図

83の27図　長岩109号横穴墓装飾文（白石巌撮影）





83の28図　長岩横穴墓群装飾図
（矢野一貞『筑後将士軍談』より）

は少し高く，右端には造り付けの枕の一部が残っている。天井は寄せ棟の家形で平入りになっている。高さは約 215 cmである。この横穴墓は内外壁・天井部とも全面赤く塗られている。

装飾は右外壁にある。先述のごとく 108 号横穴墓の上部外壁から連続した装飾で，盾 2 個が浮彫されている。いずれも左右対称によく均整がとれ，彫りも深く，上縁のカーブはたくましく，盾に雄大な感じを与えている。盾の表面はよく研磨され，その上に細線で縁どりをしており，右側の盾はさらにその中央に縦線を引き，それに斜交する数条の線を引いているのは108号の上にある靱の文様と類似している。特に盾の細線は革縫の縫目を思わせる。いずれの盾も赤く縁どられ，右側の盾はその内側も三角形に赤く塗られた所がみられる。装飾の大きさは右側の盾が幅74cm，高さ125cmで，左側の盾が幅62cm，高さ120cmである。この盾の形は関東では 5 世紀に位置づけられており，福岡県八女市の岩戸山古墳の石製品などの例を参照して，この横穴墓築造の時期を 6 世紀前半にのぼらすことができるようである。

出土遺物　門口が古く遺物の伝わるものはなかったが，昭和39年（1964）の石人石馬研究会の調査時にわずかながら提瓶・坏片などの須恵器・鉄環・鉄鏃などの鉄器が発見された。いずれも古墳時代後期中葉～末期のものである。

備　考　108号横穴墓外壁上部の人物像の胸の部分が抉り取られている。これはこの部分を削ってその粉末を飲むと乳の病気が治るという俗信によるものである。

（原口長之・高木正文）

〔追　記〕　本稿を印刷中に新たに48号・49号・55号・56号で装飾を確認した。一覧表の**追加**を見よ。（高木正文）

〔参考文献〕

①矢野一貞『筑後将士軍談』嘉永 6 年（1853）
②波多巌「肥後国菊池河流域における横穴及び古墳」『考古界』第 5 篇 3 ・ 9 ・10号　明治38・39年（1905・1906）
③斎藤忠『装飾古墳の研究』吉川弘文館　昭和27年（1952）
④乙益重隆「長岩横穴群」小林行雄編『装飾古墳』平凡社　昭和39年（1964）
⑤原口長之「長岩横穴群」斎藤忠編著『日本原始美術 5（古墳壁画）』談談社　昭和40年（1965）
⑥榊晃弘『装飾古墳』朝日新聞社　昭和47年（1972）
⑦乙益重隆『装飾古墳と文様』（古代史発掘 8 ）講談社　昭和49年（1974）
⑧原口長之「長岩横穴群」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』P80～85　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑨『熊本県の文化財』3（史跡）熊本県教育委員会　昭和56年（1981）

84．岩原横穴墓群（いわばる）（⇨81の1図，84の1～14図）

——鹿本郡鹿央町岩原塚原——

84の1図　岩原横穴墓群周辺地形図（凸印は横穴墓）

立　地　米野山（標高 311.8m）の北麓に東西約1000m，南北約 700mの広大な岩原台地（標高75m前後）がある。この台地の上には前方後円墳岩原古墳（通称双子塚）を中心とした岩原古墳群があり，台地の北側崖面から西側崖面にかけて岩原横穴墓群がある。岩原台地の北には志々岐台地があり，その南崖面に長岩横穴墓群，西崖面には小原大塚横穴墓群がある。また岩原台地の北東には桜ノ上横穴墓群，西には小原浦田横穴墓群があるので，この周辺は総数400基余りからなる大横穴墓群集中地域を形成している。

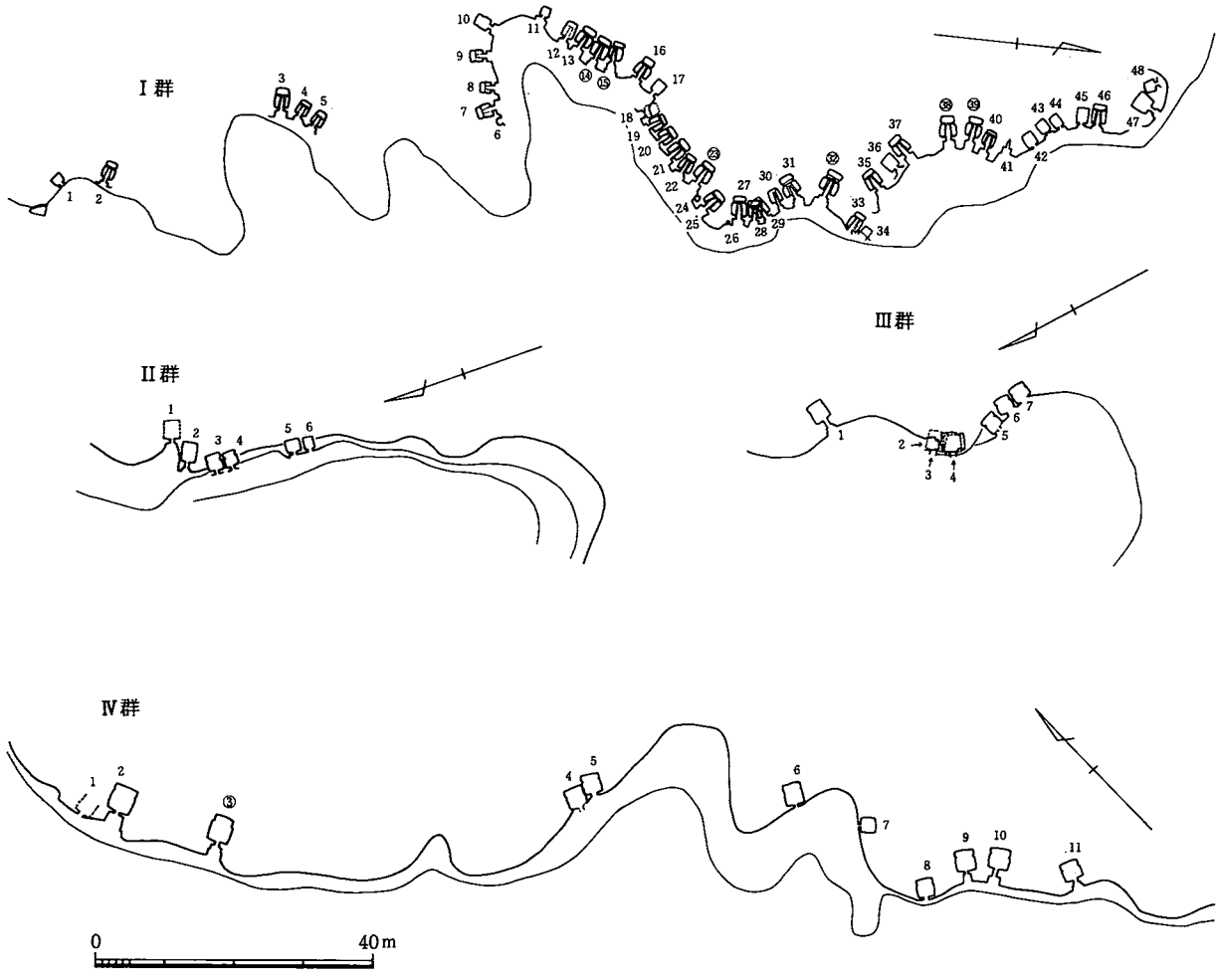
分布と概要　岩原古墳の北側に形成された谷から南西に形成された谷までの間の直径約 550mの範囲に 131基が分布し，地形から６群に大別される。またⅤ群のみは７つの支群に分けた。

Ⅰ群は岩原古墳の北の谷の西側崖面にある横穴墓群で，165mの範囲に48基の横穴墓が造られている。左側（北側）から通し番号をつけたが，崖面の凸凹が激しく，造られた位置や並んだ状態からいくつかの支群に分けることが可能である。やや大きく別ければ１号，２号，３～５号，６～10号，11～17号，18～25号，26～34号，35～41号，42～48号に細分できるであろう。多くは「コ」の字形屍床であるが，42～48号の群は46号のみが「コ」の字形屍床で，他は平担である。６号と24号と26号は小型横穴墓で，１号と11号もやや小型である。また41号は羨門から外側は完成しているが，内部は通路を掘りかけた状態の未完成横穴墓である。装飾は14号，15号，23号，32号，38号，39号の６基で確認された。

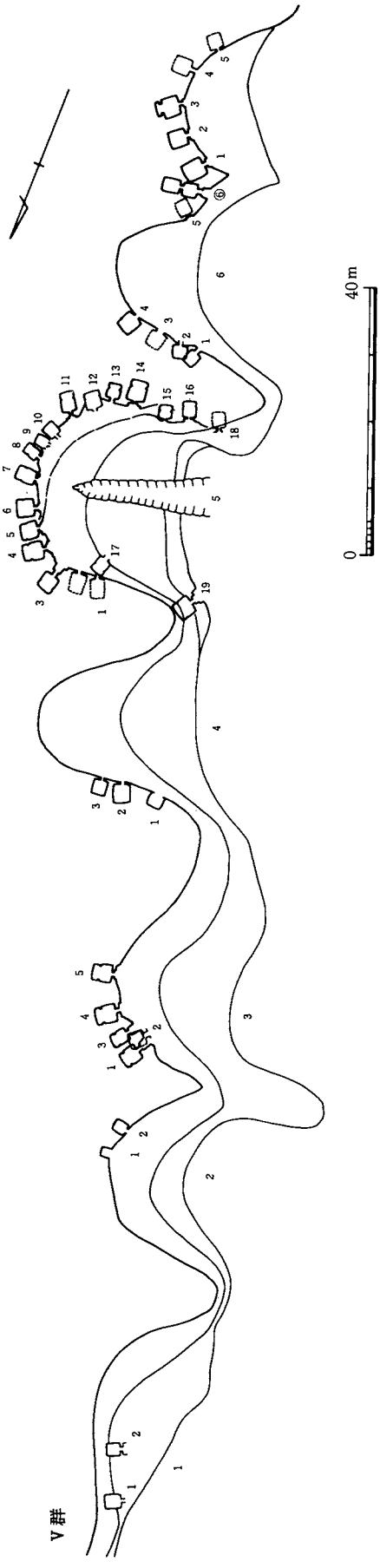
Ⅱ群はⅠ群から西に１つ目の谷にあり，Ⅰ群から 100m程離れた所にある。現在谷の東崖面にのみ６基あるが，筆者が10年程前調査した時には西岸面にも３基あった。西崖面のはその後の崖崩れで埋もれているようである。東崖面の横穴墓は22mの範囲に２基ずつのまとまりをもって造られている。なお西崖面の３基は東崖面の横穴群から50m程の所にあった。

Ⅲ群はⅡ群から西に２つ目の谷にあり，Ⅱ群から約 100m離れた所にある。横穴墓は谷の東崖面に７基ある。殆んど西に開口しているが，２号のみは複室で，北に開口している。32mの範囲に分布し，１号はやや離れた所にあり，中央部にある２号の下には３号と４号が重なっている。また５～７号はまとまりをもっている。

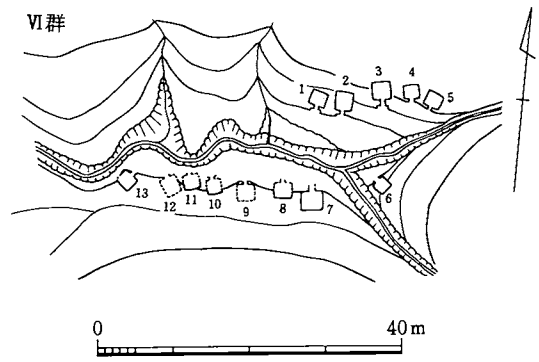
Ⅳ群はⅢ群から西に１つ目の谷にあり，岩原古墳の北西方向に位置し，谷は幅30～40mで，奥行き 200m程を測る大きなものである。横穴墓は谷の東崖面 147mの範囲に11



84の２図　岩原横穴墓群配置図(1)



84の3図　岩原横穴墓群配置図(2)



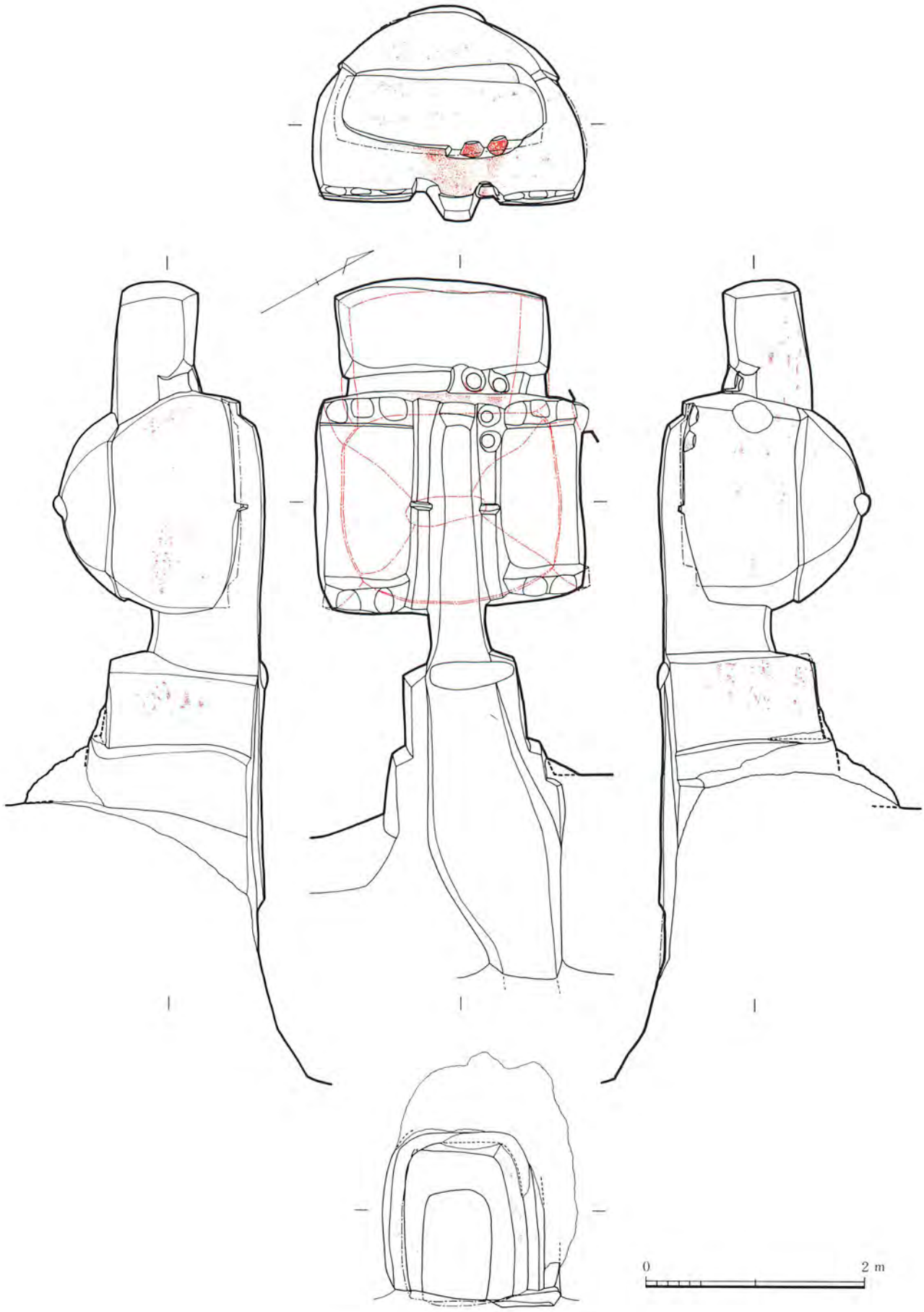
84の4図　岩原横穴墓群配置図(3)

基みられる。1～3号，4・5号，6・7号，8～11号はそれぞれまとまりを成している。このうち3号は装飾横穴墓である。

V群は岩原台地の西斜面で新たに発見した横穴墓群である。斜面の中程に扇形に挟れた崖面がいくつも並んでおり，その各々に横穴墓が並んでいる。V群の範囲は 225mに及んでおり，扇形の谷を支群とすると7支群に分けられる。崩壊が激しいので埋没している横穴墓も多いと考えるが，現在42基確認できる。「コ」の字形屍床が多いが，地点によって屍床と天井の構造が異なっている。1支群は2基，2支群も2基，3支群は5基，4支群は3基，5支群は19基，6支群は6基，7支群は5基確認でき，6支群の6号のみは複室構造で，装飾横穴墓である。

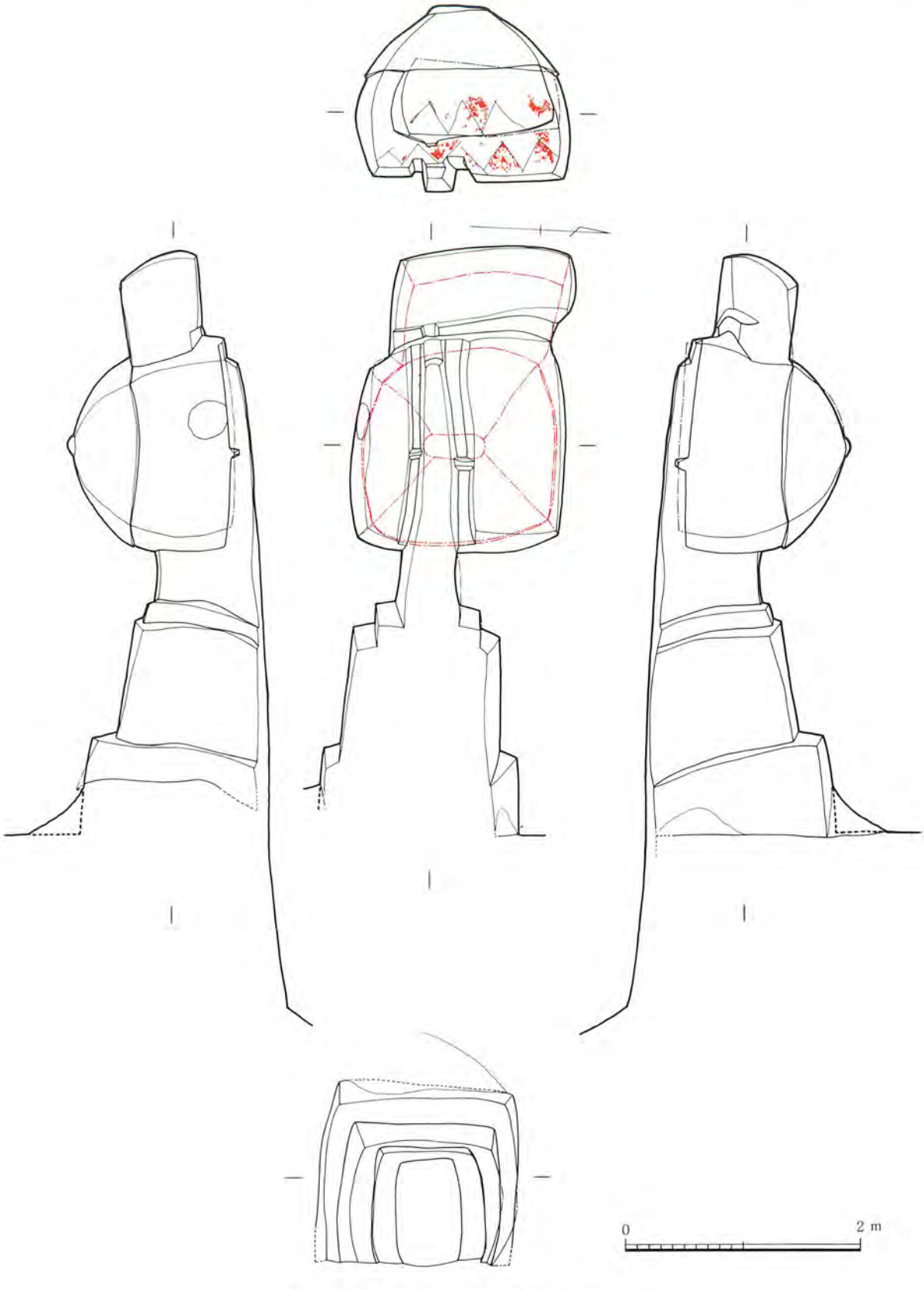
VI群は岩原古墳の南西の谷にある横穴墓群で，北崖面に5基，東崖面に1基，南崖面に7基程確認できるが，深いV字谷によって3つに分断されている。北崖面の横穴墓群は三段に配置されている。南崖面の横穴墓は二段に配置されているが，崩壊と埋没のため正確な数がつかみにくい。これらは44mの範囲にあるが，さらにここから30m程南西に1基の横穴墓がある。便宜上この1基もVI群に含めて，一応総数14基とみておきたい。

I－14号横穴墓（旧16号横穴墓）　11～17号のまとまりの中心をなす横穴墓で，規模も大きく，構造も複雑である。羨門は上方が丸みをもつが方形に近く，幅64cm，高さ 102cmを測る。羨門の外に二重の方形の飾り縁が造られている。内側から第1の飾り縁は羨門から約80cm外側にあり，幅113cm，高さ 145cmを測り，縁の幅は15cmを測る。第2の飾り縁は岩壁の関係で左側が長く，第1の飾り縁から右は約20cm，左は約70cmを測る。正面から見た幅は 145cm，高さ約160cmを測る。羨道は埋もれているがボーリング棒で調べたところでは中央部がやや凹んでおり，その墓道状のものは前庭部まで伸びており，現存長は 285cmを測る。羨門の下部には閉塞石を立てるための凹みがみられる。羨門から約50cmで玄室に至る。玄室は「コ」の字形に屍床が配置されているが，奥屍床は高く，天井も独立している。奥屍床を除く部分は幅 250cm，奥行 200cm，高さ 193cmを測り，平面プランは横長の長方形で，天井は平入り寄せ棟の家形である。軒先には段差をつけ，棟は上方にU字形に抉って



84の5図　岩原Ⅰ－14号横穴墓実測図

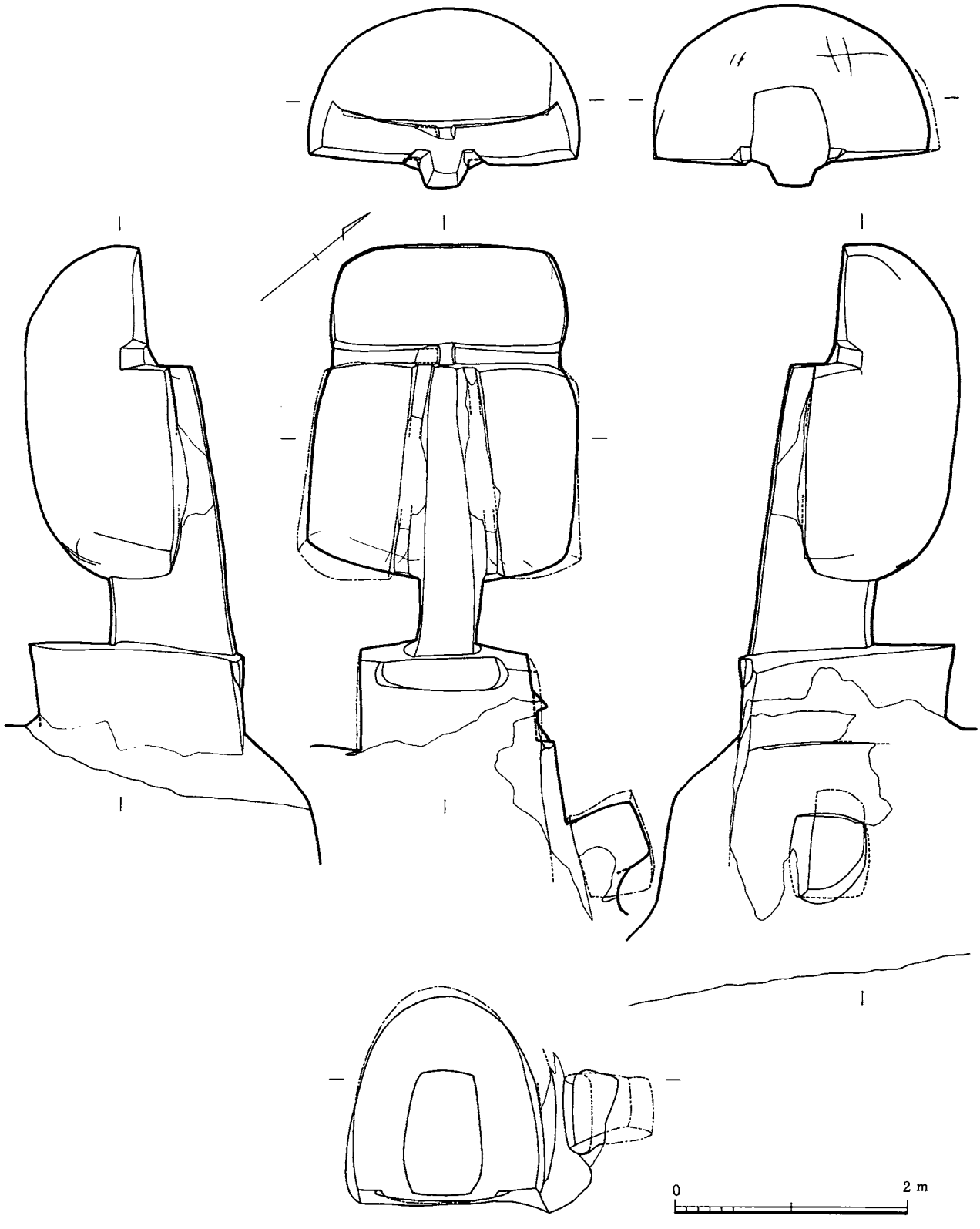
いる。左右の仕切りは両端がゆるやかに上がっておりゴンドラ形の舟を意識して造ったものと考えられる。右屍床の奥には円錐台形の凸起が二個並んでついている。いずれも底径20cm，頂径12cm，高さ８cm程を測る。右左の屍床とも奥に３つ，入口側に２つの合計５つずつの造り付け枕がある。通路の奥には一段のステップがある。奥屍床は左右の屍床よりも40～50cm程高く，屍床は平担で枕は造られていない。屍床の奥行き約80cm，横幅 195cmを測り，高さは70cmで，天井は平担である。奥屍床の仕切りもゴンドラ形に両端が上がっており，やや右寄りに円錐台形の凸起が２つ浮き彫りされている。左の凸起は底径22cm，頂径14cm，高さ10cmを測る。右の凸起は底径20cm，頂径12cm，高さ約10



84の６図　岩原Ⅰ－15号横穴墓実測図

cmを測る。この凸起の周辺は仕切りを削って凸起を強調している。なお奥屍床まで含めた玄室の奥行きは 300cmを測る。

奥屍床の仕切りは中央部付近の前面と，円錐台形凸起の前面が赤く塗られている。凸起自体も浮き彫りの装飾とみることもできるが，赤く塗られていることで装飾横穴墓に含めておきたい。右屍床の仕切りの奥の凸起も一部が赤く塗られている。また玄室壁面の各所と，外側の飾り縁内面などに赤く塗られたあとがあるが，何か描かれたのか，あるいは面的に塗られていたのか不明である。なお仕切りに見られる円錐台形の凸起について，仕切りがゴンドラ形の舟を表現しているところから，原口長之氏は櫓をかける「櫓



84の7図　岩原Ⅰ－23号横穴墓実測図

べそ」ではないかと考えておられる。

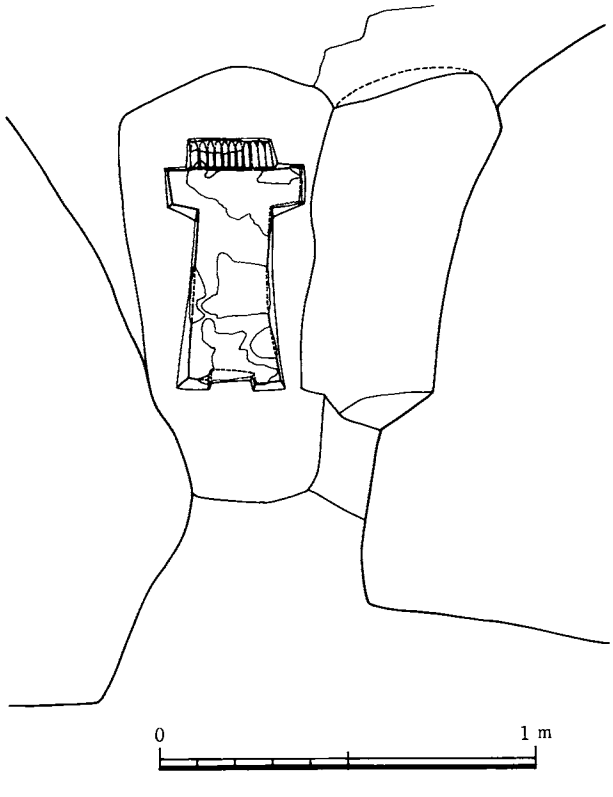
Ⅰ－15号横穴墓　14号横穴墓の後に掘られた横穴で，羨門部までは14号よりも丁寧に掘られているが，玄室を掘って行く途中で14号に通じたためやむなく設計変更して右側にずらしており，細部の仕上げはやや粗くなっている。羨門は長方形で幅57cm，高さ90cmを測る。飾り縁は三重に造られており，いずれも正面観は方形である。内側から第１の飾り縁は羨門から20cm程外にあり，幅98cm，高さ 103cmを

84の 8 図　岩原Ⅰ－32号横穴墓実測図

測る。第2の飾り縁はさらに 120cm程外にあり，幅 140cm 高さ 130cmを測り，また第3の飾り縁はさらに40cm程外にあり，幅 170cm，高さ約 160cmを測る。羨道は第3飾り縁まで長さ 180cm程あり，さらに外に平担面が 140cm程伸びている。羨門から70cm程で玄室に至る。通路は次第に狭くなり奥には一段のステップがついている。奥屍床を除いた部分は幅 185cm，奥行き 185cm，高さ 157cmを測り，天井は平入りで寄せ棟の家形であり，14号と同じ構造である。右屍床の幅は80cm程あるが左屍床の幅は半分の40cm程しかない。奥屍床は屍床，天井とも平担で，奥行き60cm，横幅158cm，高さ66cmを測る。玄室全体の奥行きは 258cmを測る。なお各屍床とも枕はみられない。

装飾は玄室奥壁と奥屍床仕切の前面にみられる。いずれも線刻で連続三角文（鋸歯文）を描いており，奥壁には横に3個並べており，仕切りの前面には横に5個並べている。赤色顔料が残っている状態から線刻に合わせて塗り別けてあったものと考えられる。

Ⅰ－23号横穴墓　18号から25号までが1つのまとまりをもっている。23号横穴墓には小型横穴墓（24号）が付属しているという点でこのまとまりの中でも特徴的な存在である。羨門はやや丸みをもつが長方形で幅69cm，高さ 106cmを測る。その前には8cmの段差があり，閉塞石を立てるための凹みがつけられている。羨門から80cm外側にアーチ形の飾り縁がついており，幅 175cm，高さ約 175cmを測る。左側はそこで終っているが，右の壁面はさらに外に 150cm以上続いており，羨門から60cm外側に小型横穴墓が掘られている。この横穴墓は羨道から50cm上にあり，入口は幅，高さとも70cmで，床は平担で奥の幅は85cmで，奥壁の高さは45cmを測る。これをここでは小型横穴墓としたが，構造が開放的であることから墓とは別の機能であることも考えられよう。いずれにしても23号横穴墓に伴った施設である。23号の羨門から玄室までの間は約65cmを測る。玄室は「コ」の字形屍床で，平面プランは奥がやや狭いため台形に近い。玄室の幅は 246cm，奥行きは 270cm，高さは中央部で 151cmを測る。天井はドームである。屍床，天井とも奥に向かってやや高くなっている。各仕切りは両端がわずかに上がっている。



84の9図　岩原Ⅰ－32号横穴墓外壁装飾文実測図

玄室の入口側の壁面に線刻が見られる。玄室から羨門側を見て右上には横に長い線を1本引き，それと交差するように2本の斜線を引いている。また左上には短かい2本の平行斜線を引き，その右の斜線にはさらに短かい斜線2本を交差させている。これらの斜線は何を表現しているのか不明であるが，後世のものではないようであるので，装飾とみておきたい。

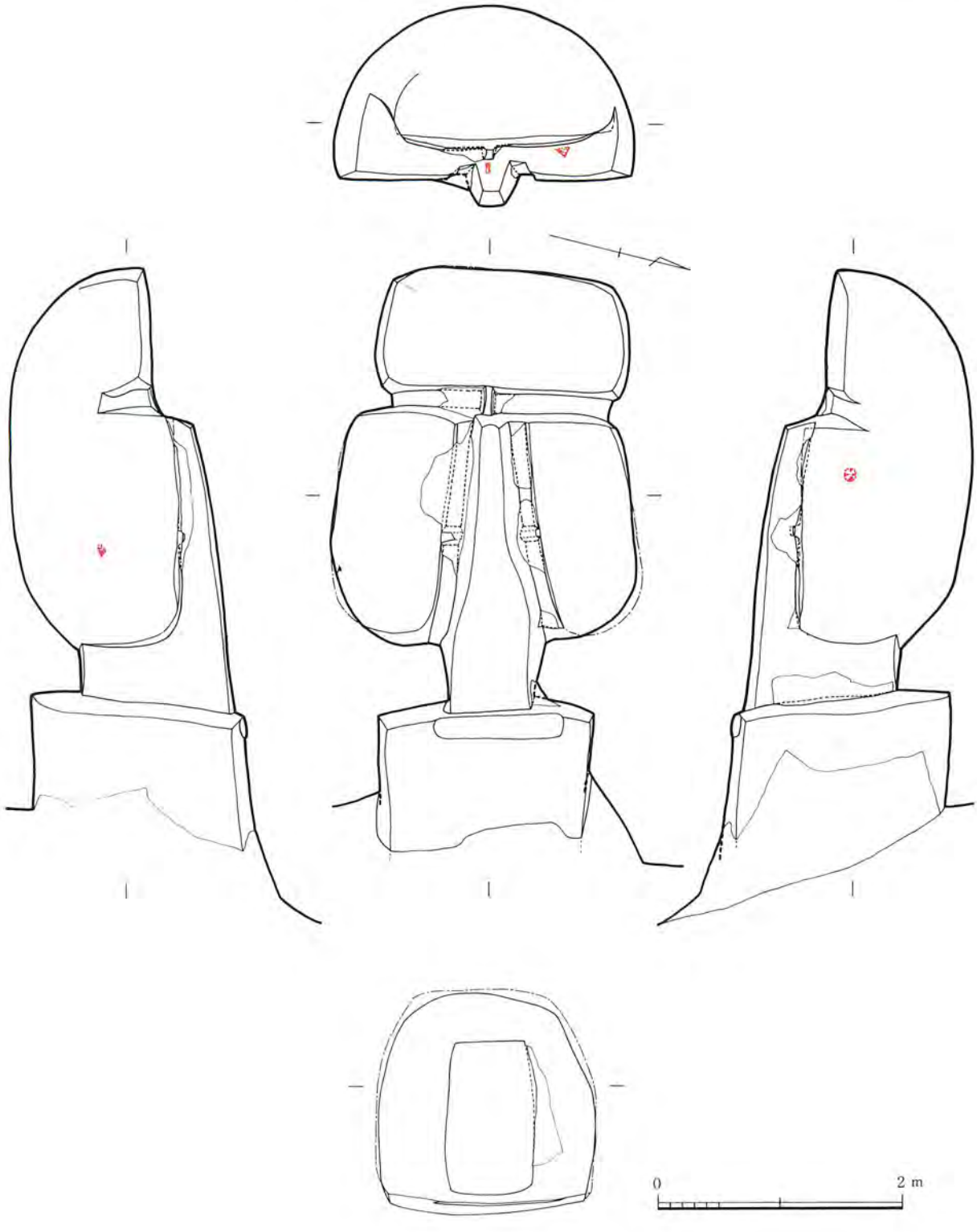
Ⅰ－32号横穴墓　26号から34号までのまとまりのうち中心的存在は31号と32号である。この2基の間に装飾があるが，31号はこの装飾をさけて掘られているところから，この装飾は先に造られたと考えられる32号に伴うものと考えたい。32号の羨門は方形で，幅76cm，高さ 112cmを測る。羨門の前には3cm程段があり，この部分に閉塞石を立てるための凹みをつくっている。飾り縁はアーチ形のものが二重についており，内側から第1の飾り縁は羨門から50cm外にあり幅 162cm，高さ 141cmを測る。第2の飾り縁はさらに 150cm程外にあり，幅 240cm，高さ 180cmを測る。羨道の入口中央部には幅 100cm，奥行15cm程の一段のステップが造られている。羨門から玄室までの間は約70cmを測る。玄室の屍床は「コ」の字形で，仕切りは重厚に造られており，特に奥の仕切りは幅が広く中央付近で43cmもあり，その前半部は8cm程削った，幅 145cm，奥行15cm程のステップが造られている。この仕切りを正面から見ると両端が大きく跳ね上がって端部は平担になっており，まさにゴンドラ形を成している。左右の屍床は平担であるが，奥屍床の左には造り付けの枕があり，不明瞭ながらも3つの凹みがみられる。天井は妻入り寄せ棟の家形であるが，軒の表現はない。玄室の規模は幅 285cm，奥行き 316cm，高さ 205cmを測る。

装飾は玄室内と外壁にみられる。玄室内の装飾はゴンドラ形をした奥屍床仕切りの前面にみられ，退色のため形状がはっきりしないが，ある間隔をもって赤の彩色が配されている。また仕切りのステップの一部や奥壁などにも赤の彩色が認められる。外壁の装飾は左外壁にあり，靱が浮き彫りされている。横穴墓と靱の間に縦95cm程角の部分を抉り取った部分があるが，これは横穴墓の入口から装飾が見えやすくするため，あるいは装飾と32号の結びつきを明確にするためであろうか。靱の浮き彫りは奴凧形で，上方に鏃を11本刻んでおり，下端には脚をつけている。大きさは

幅37cm，高さ66cmを測る。風化が激しいため彩色は残存していない。

Ⅰ－38号横穴墓　35号から41号まではまとまりをもっている。うち38号と39号に彩色による装飾が認められる。38号は羨門が長方形で幅74cm，高さ 126cmを測る。羨門の前は7cm程の段がついており，ここに閉塞石を立てるための浅い凹みがある。羨道は長さ 110cm程残っており，天井はカマボコ形を成しており，入口の幅 180cm，高さ 182cmを測る。羨門から玄室までの間は約70cmを測る。玄室は「コ」の字形屍床で，幅 257cm，奥行き 307cm，高さ 165cmを測る。各仕切りは両端が上がっている。玄室の四隅は丸みをもち，天井はドームである。

彩色は奥屍床の仕切り前面と左右壁面にみられる。奥屍床の仕切り前面には通路の奥にあたる所に小さな長方形状の赤の彩色が残っている。また右屍床中央部の奥にあたる所には三角形らしい赤の彩色が認められる。右壁の赤の彩

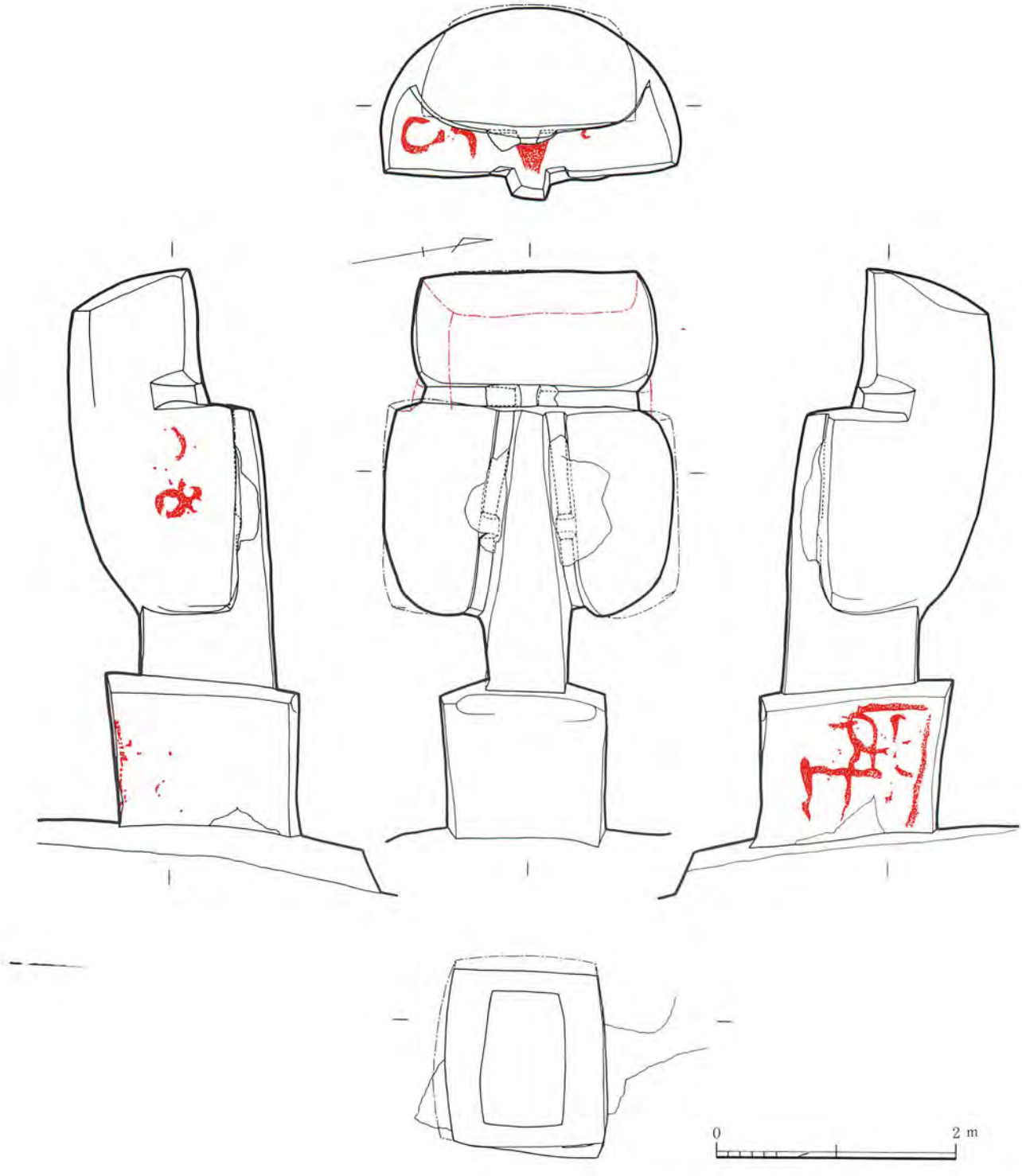


84の10図　岩原Ⅰ－38号横穴墓実測図

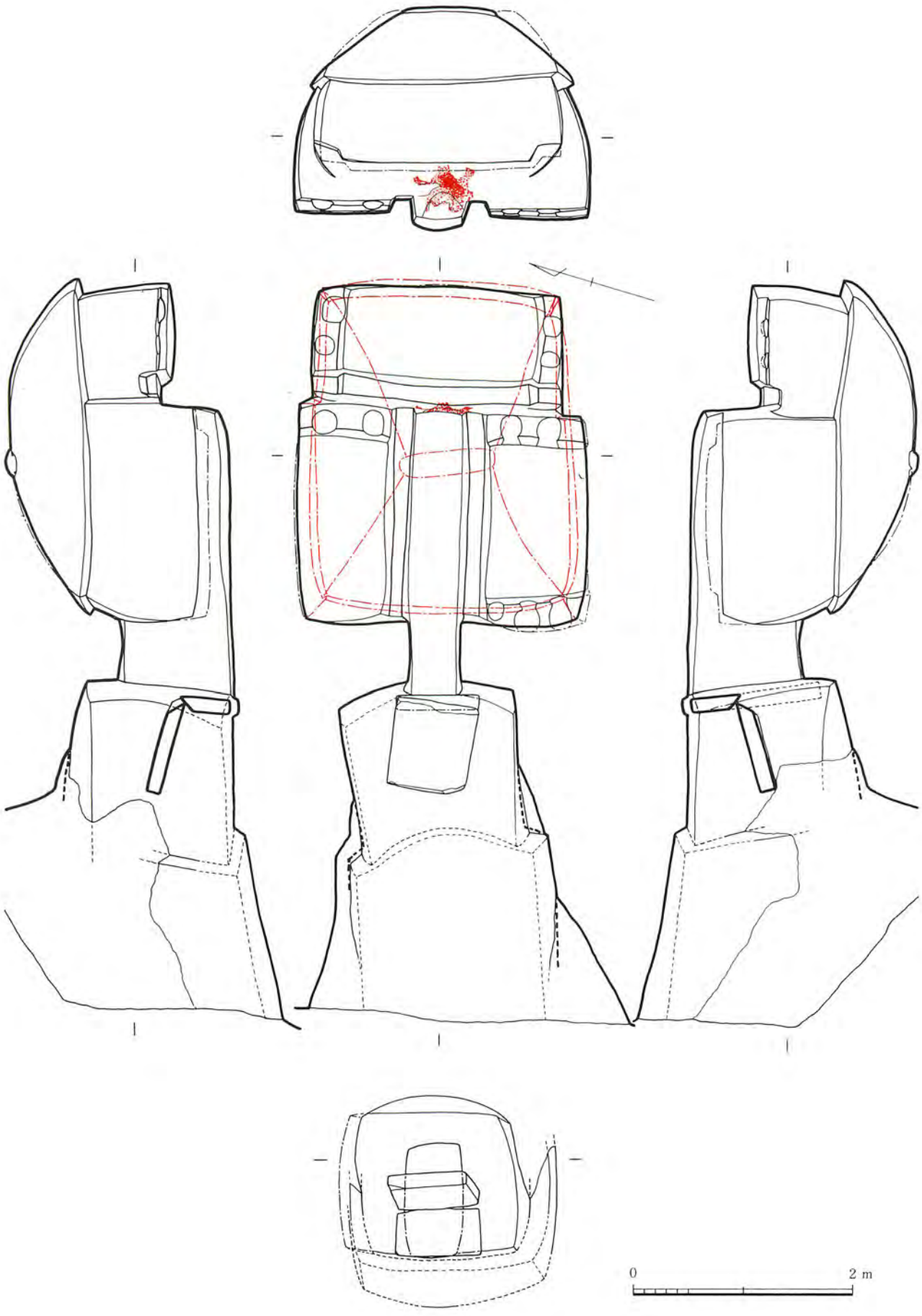
色は円文であろうか。左壁の赤の彩色は形状が不明である。

Ⅰ－39号横穴墓　38号の右側の横穴墓である。羨門は長方形で，幅72cm，高さ 112cmを測る。羨門の前には18cmの段があり，その両側に閉塞石を立てるための凹みが抉ってある。羨道の長さは 120cmで，天井は平担である。羨道の入口（飾り縁）は方形で幅 136cm，高さ 152cmを測る。羨門から64cmで玄室に至る。玄室の屍床は「コ」の字形に配置され，左右の仕切りは入口側が，奥の仕切りは両端が跳ね上がっている。天井はドームで，玄室全体が丸みをもつが，奥壁は平担であるのでカマボコ形に近い。玄室の規模は幅250cm，奥行 280cm，高さ 155cmである。

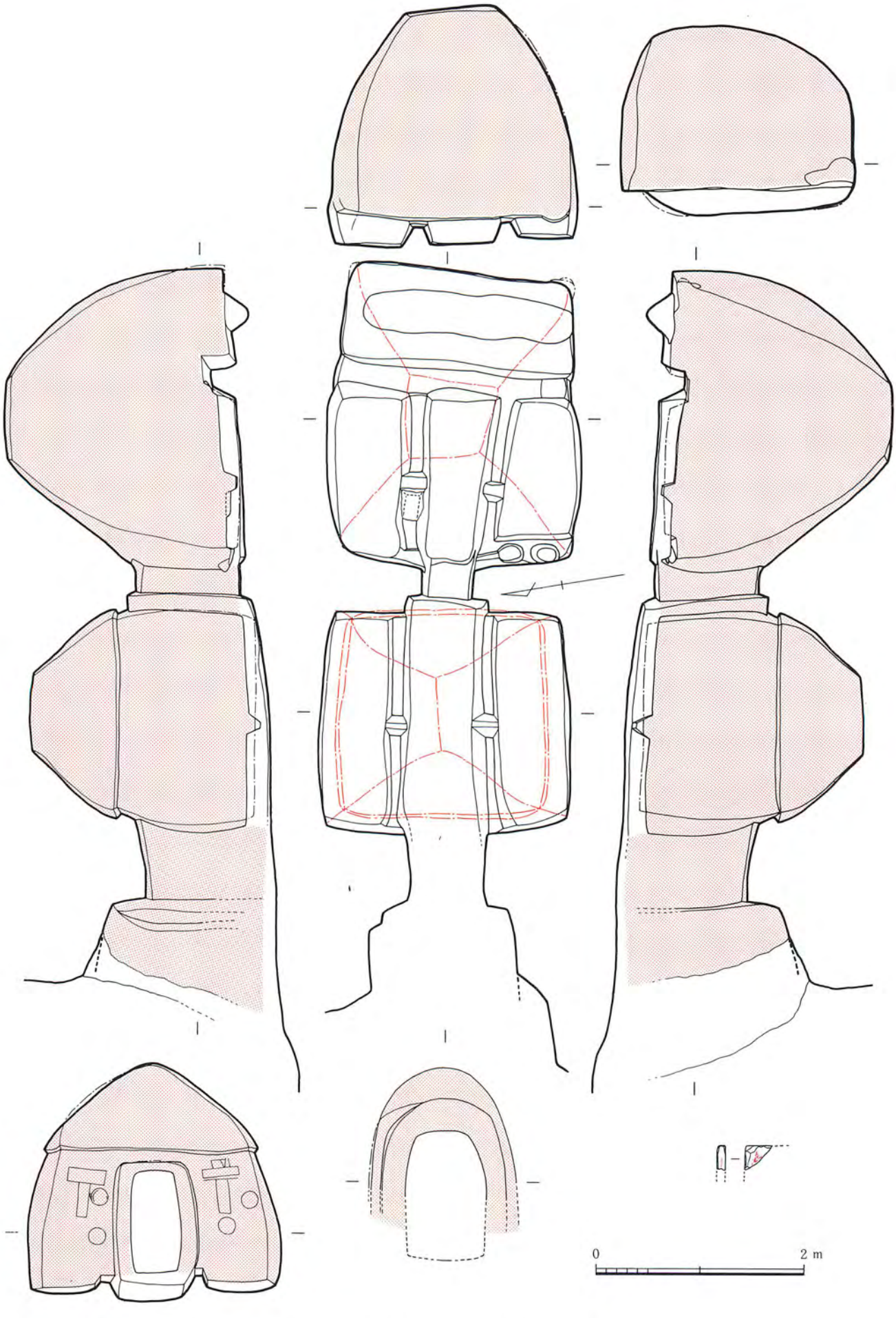
装飾は羨道の両側壁と，玄室内にみられる。いずれの装飾も赤の彩色で描かれており，羨道の右側壁には幅５～10cmの帯状の彩色がみられ，風化のためはっきりしない所もあるが，主として格子目状になっているようである。しかし各帯はうねりをもち，一部は円状になっている所もあり，特異な文様である。この反対側の羨道左側壁にも一部に赤い彩色が残っているが，風化が激しいため殆んど消えてい



84の11図　岩原Ⅰ－39号横穴墓実測図



84の12図　岩原Ⅳ－3号横穴墓実測図



84の13図　岩原Ⅴ－6－6号横穴墓実測図

る。玄室内の装飾は2カ所にみられる。1カ所は奥屍床仕切りの前面にある。中央部にはV字状に赤く塗られており，左にはS字形を横にしたような彩色文がある。右には小さな三日月形の彩色文がある。もう1カ所は左屍床の横の壁面にみられる。右には浅いU字状の彩色文があり，その左にはC字形を3つ背中合わせにしたような文様がみられる。

Ⅳ－3号横穴墓　1号から3号までの1つのまとまりを成している。2号と3号は大型の横穴墓である。3号の羨門は長方形で幅54cm，高さ 105cmを測る。羨門の前に閉塞石が立っているが上半が折られ，引き倒されている。閉塞石を復元すると上がやや狭いが，ほぼ長方形で幅80cm，高さ120cm，厚さ14cm程度と推定される。羨道は長く 300cm程残っているが埋没したままなので正確なことは分らないが，ボーリング棒で調べたところでは途中に段があると考えられる。この段に対応するように両側壁にも飾り縁状の段差がついている。ここの幅は約 150cm，高さ約 150cmを測る。羨門から70cm程で玄室に至る。玄室の平面プランは奥屍床がやや狭いので凸字状をしており，幅 275cm，奥行き 305cm，高さ 204cmを測る。左右屍床の仕切りは直線的で，右屍床には奥に2つ，入口側に3つの造り付けの枕がある。また左屍床には奥にのみ2つの枕がある。奥屍床は左右屍床よりも40cm程高く，両端に2つずつの枕がみられる。天井は玄室が奥に長いにもかかわらず平入り寄せ棟の家形で，軒先は幅広い段があり，特に奥屍床部分は15cm程もある。棟は上方に抉って表現している。

装飾は奥屍床の仕切りにみられる。仕切り自体がゴンドラ形をしており，舟を強調するため両側から縁どりの線刻を入れている。またこの中央部前面に赤の彩色で何かを描いてある。左側と下方が剝落しているのではっきりした形がわからないが，まん中が山のようになっている所を頭部とみればその左右に両腕を上げているように見える。山鹿とその周辺に多い人物像である可能性もあるが，ヒキガエルのようにも見える。この絵の下方にはアーチ形のやや浮き彫りにした面があるが何の表現であるか不明である。

Ⅴ－6－6号横穴墓　この横穴墓群で確認した唯一の複室横穴墓で，またV群で唯一の装飾横穴墓である。6支群から7支群に移ろうとする所の突出部に造られている。羨道部から前室の屍床にかけては埋没しているが，ボーリング棒で調べた所では，羨門，羨道部ともアーチ形で，羨門は幅約80cm，高さ約 125cmを測る。また羨道の長さは 120cm以上あり，幅約 140cm，高さ約 180cmと推定される。羨門のすぐ外側には飾り縁状の段があるが右側には見られない。羨門から70cm程で前室に至る。前室は平面プランが方形で両側に屍床をもつ。天井は妻入り寄せ棟の家形である。前室の規模は幅 243cm，奥行き 212cm，高さ 230cmを測る。第2羨門は幅49cm，高さ98cmを測る長方形で，その外に幅82cm，高さ 118cmの縁がついている。この縁は閉塞石を立てるために造られたものであろうか。第2羨門と後室の間は約30cmで，前室の通路から第2羨門には12cm段上がりになっており，そこから後室の通路へは5cm段下がりになっている。後室も方形であるがやや隅が丸みをもっている。屍床は「コ」の字形に配置され，右屍床の入口側には2つの造り付けの枕がある。また奥屍床は平担面を造ったあと中央部を舟形に刳り貫いている。天井は四隅の線を四角の平担面に集約している。後室の幅 248cm，奥行き 282cm，高さ 225cmを測る。

84の14図　岩原横穴墓群（Ⅰ－29～32号）

装飾は前室の奥壁の左右にあり，いずれも靫1個と円文2個を線刻しているが，円文の位置が左右でやや異なっている。靫はT字形で剝落のため鏃の表現がはっきりしないが，右側は3本程描いていたと推定され，左側の靫にももとは同様に鏃を描いていたものと考えられる。右側の靫は幅35cm，高さ52cmを測り，左側の靫もほぼ同じ大きさである。4個の円文は直径16～17cmを測る。なお羨道，前室，後室とも全壁面が赤く塗られている。また前室の左屍床のところに閉塞石の角の部分の破片と思われるものが落ちていたが，これも一側面と一面は赤の彩色が認められた。

出土遺物　V群5支群の谷から須恵器の甕や坏など6世紀中葉～後半頃の遺物が採集されている。またⅣ群からは須恵器の高坏や貝をはめ込んだ雲珠などが出土している。

（高木正文）

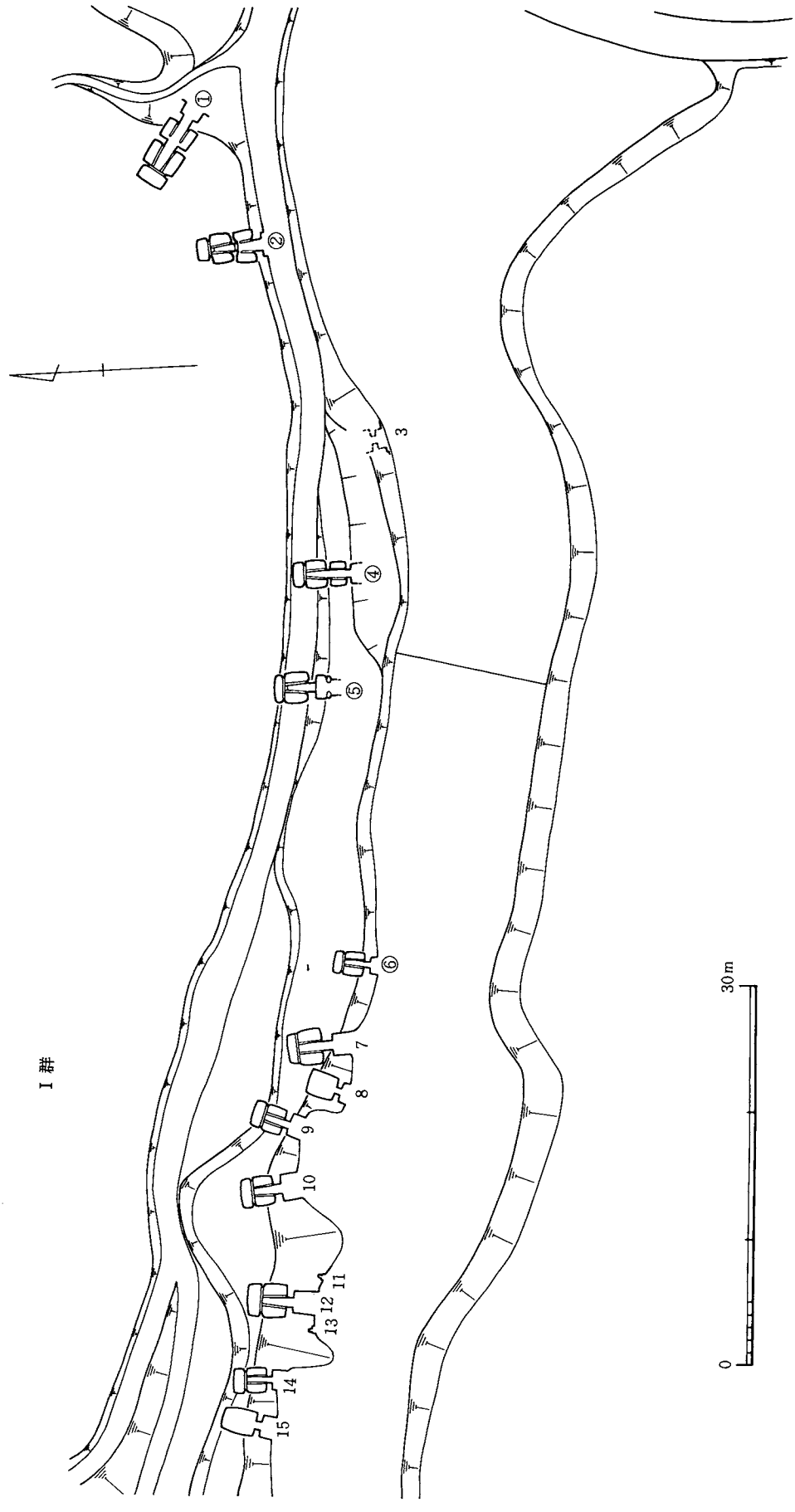
〔参考文献〕

①原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）

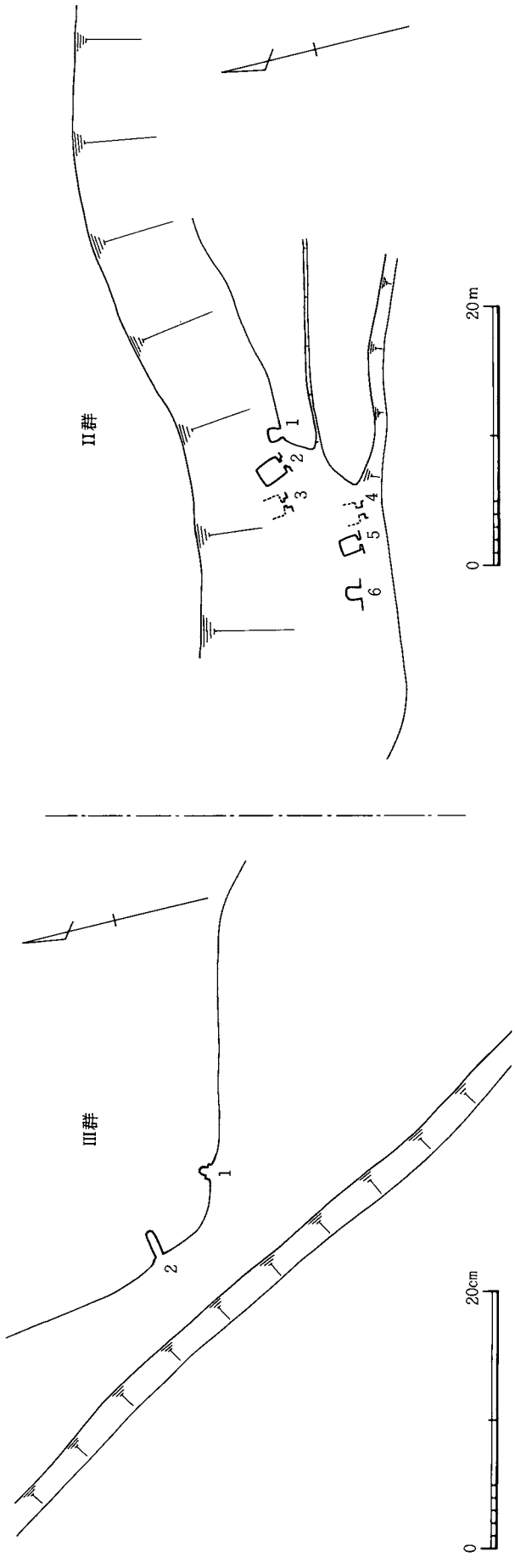
②松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）

85. 桜ノ上横穴墓群〔昭和48年県史跡〕(81の1図，85の1～8図)

——鹿本郡鹿央町岩原大野原・清水——



85の1図　桜ノ上横穴墓群配置図(1)



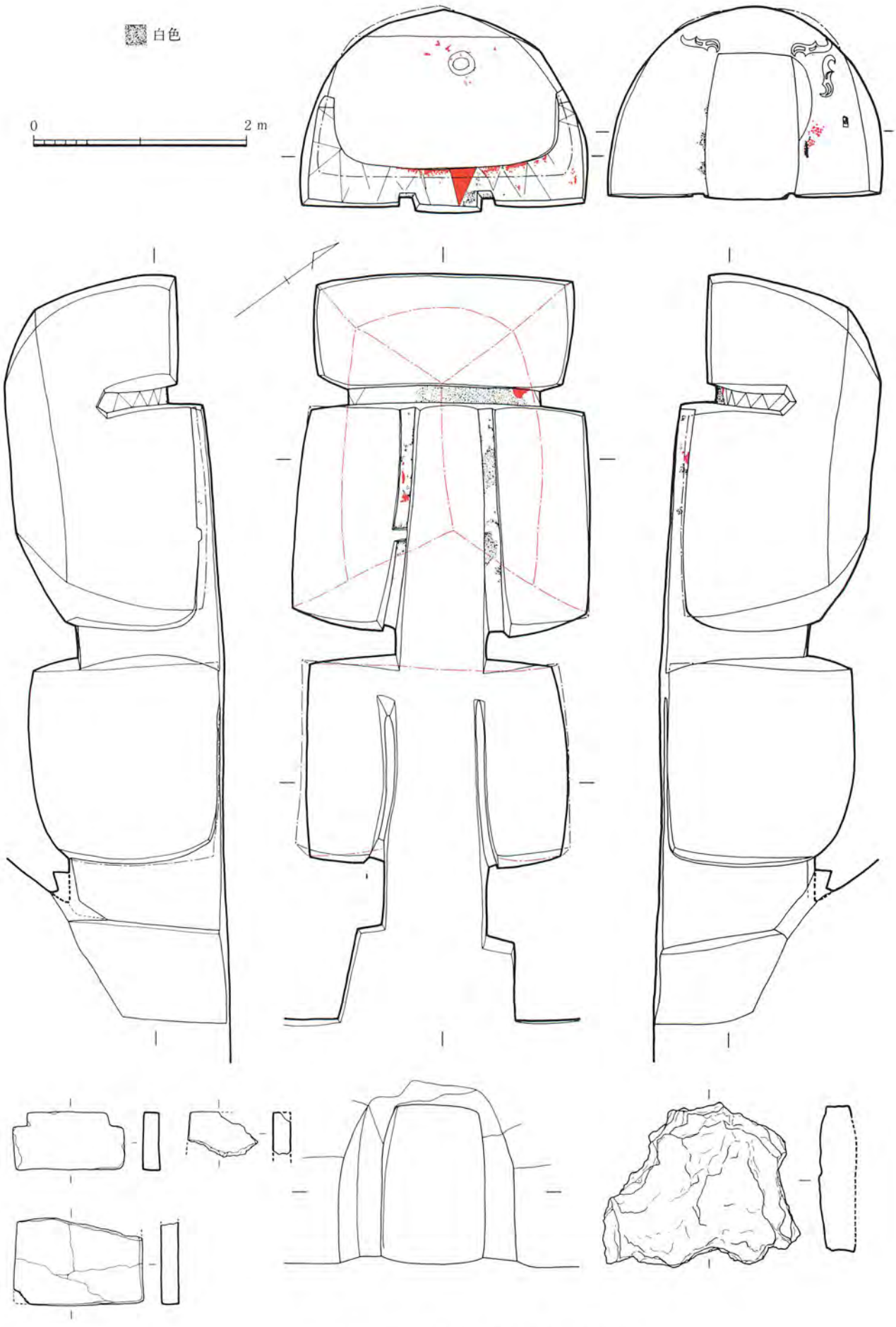
85の2図　桜ノ上横穴墓群配置図(2)

立　地　菊池川の左岸，菊鹿盆地の西端にある志々岐台地が南東に伸びたところの南西面の凝灰岩斜面にある。近距離に岩原横穴墓群や長岩横穴墓群などがあり横穴墓の密集地域を形成している。

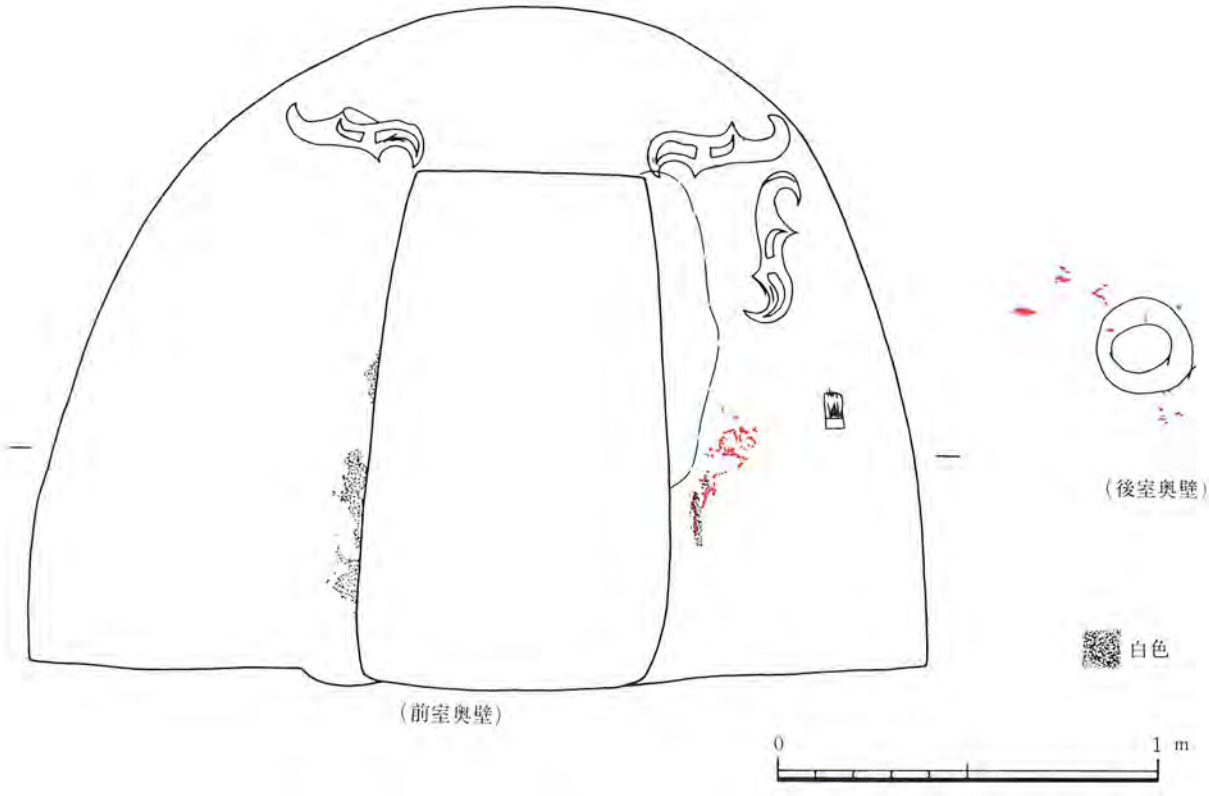
分布と概要　桜ノ上横穴墓群は385m の範囲に23基が確認された。大きくみると3群に分かれており，東から数えてⅠ群は107m の範囲に15基が並んでいる。Ⅰ群はさらに1号から5号までと6号から15号までに分かれ，埋没して不明である3号を除く1号から5号までは複室構造であり，玄室内に装飾文や彩色が認められる。5号と6号は20m 程離れており，2～3基の横穴墓が埋没している可能性がある。6号から15号までは全て単室である。11号と13号は小型横穴墓で，12号のに付属したようにその左右に造られている。8号と15号の床は埋もれているが全て「コ」字形屍床と考えられる。天井は6号，7号，9号，12号，15号は妻入り寄せ棟の家形で，8号，10号，14号はカマボコ形である。なお6号から15号までの横穴墓のうち11号と13号の小型横穴墓を除く全ての羨門に赤の彩色が認められるが，風化のため文様であったかどうかは不明である。Ⅱ群はⅠ群の西方120m のところにあり，現在6基確認できるが，さらに数基埋没しているものと考えられる。上下二段に3基ずつ，各々左あがりに並んでいる。1号は小型横穴墓で6号は未完成である。3号と4号は埋没しているが，2号と5号は家形の天井を確認できる。Ⅲ群はⅡ群の西方140m 程のところにあり，2基確認できる。1号は飾り縁をもち，内部は埋もれているが，奥行きがないので小型あるいは未完成と考えられる。2号も内部の床が埋まっているが羨門の幅約90cmで奥行き約2m を測り，玄室は羨門と同じ幅のまま奥に至っている。

Ⅰ－1号横穴墓（旧1号横穴墓）　複室の横穴墓で，第一羨門の正面観は方形で幅98cm，高さ148cmを測る。羨門の前に落ちていた幅185cm，高さ153cm，厚さ約35cmを測る緑色片岩（？）の割石は元は羨道の上方に架していたものと考えられる。羨門から80cm程で前室に至る。前室の平面プランは横長の長方形で，両側に仕切られた屍床を設けている。前室の幅260cm，奥行き190cmを測り，天井はカマボコ形で高さ180cmを測る。第二羨門も正面観は長方形で，幅88cm，高さ135cm を測る。第二羨門の前の部分は閉塞石を立てるため仕切りをカットしている。第二羨門から50cm程で後室に至る。後室は「コ」字形屍床で，奥屍床の仕切りはゴンドラ形に両側が上がっており端部は三角形に尖っている。右側の屍床の仕切りにだけ排水の溝が切られている。天井は妻入りの寄せ棟の家形造られている。後室の規模は幅280cm，奥行き333cm，高さ185cmを測る。羨門から奥壁まで690m を測る壮大なもので，全面が研かれており，県内で最も整美な横穴墓と考えられる。

閉塞石は第一羨門と第二羨門の2 ヵ所に立てられていたと考えられ，3枚分の凝灰岩切石が残っている。1枚は完全な形で，幅104cm，高さ54cm，厚さ17cmを測り，上方両端に切れ込みがあるので，凸字形をしている。他の2個の



85の3図　桜ノ上Ⅰ－1号横穴墓実測図



85の4図　桜ノ上Ⅰ－1号横穴墓内壁装飾文実測図

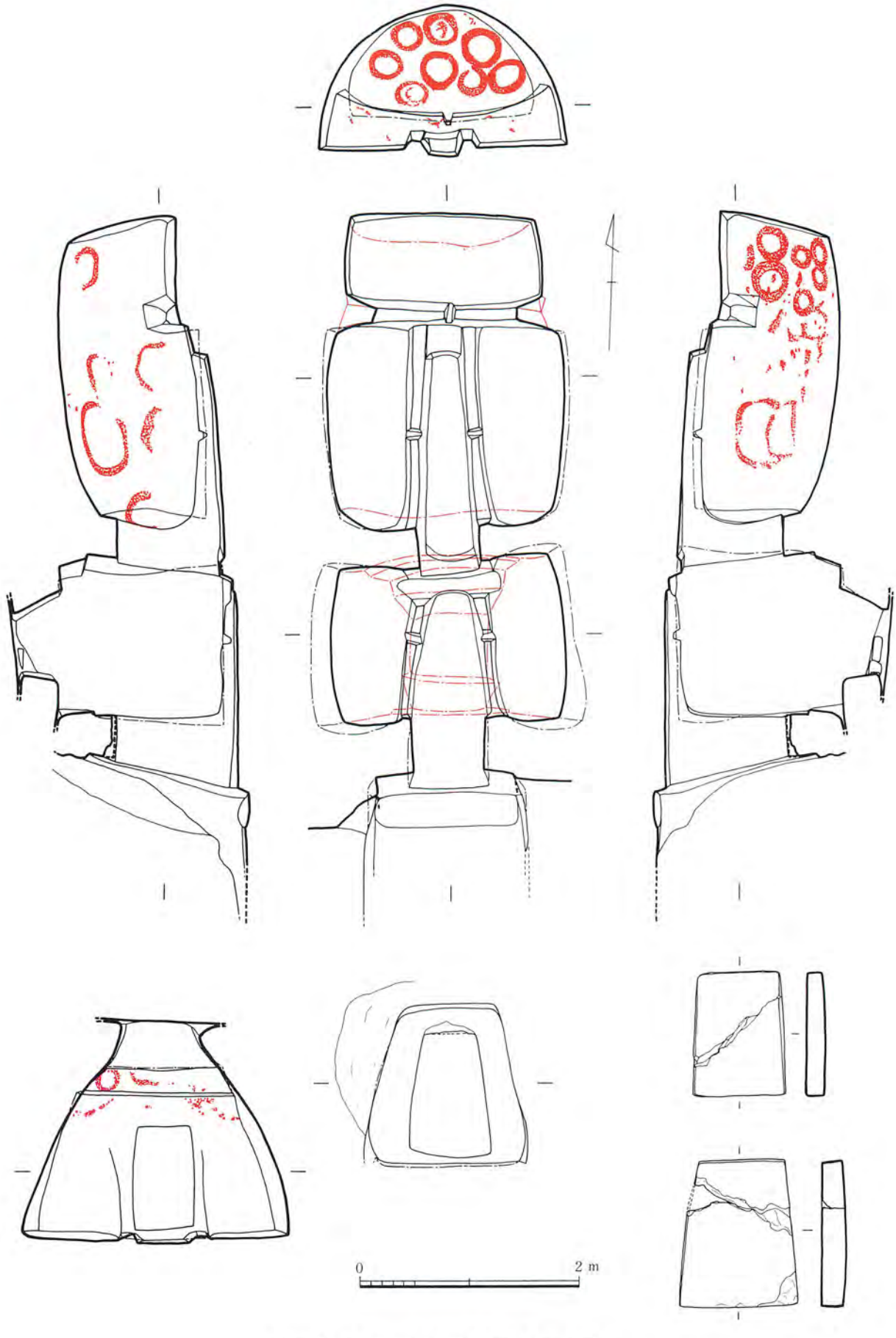
うち1個は上部を欠くが，幅122cm，現存高83cm，厚さ17cmを測る。おそらく羨道の上方に石を架しているため，一枚石の閉塞石を立てて開閉できないので，以上2枚の閉塞石を重ねて立てたのではなかろうか。残り1個の閉塞石は上端の一隅の部分の破片で厚さは17cmを測る。これは第二羨門の閉塞石の破片と考えられる。

装飾は前室奥壁と後室奥屍床の仕切り部と後室奥壁に施されている。前室奥壁の装飾は第二羨門の左右上方に対称的に線刻で「f」字状の文様を横向きに描いており，右上の文様の下にはさらに同文様を縦に描いている。装飾古墳の文様としては類例のないものであるが，古墳出土の轡の鏡板にf字状のものがあり関連のある文様と考えることができる。なおこの文様の大きさは長さ約40cmを測る。さらに右下方には幅5cm，高さ11cmに小さく叡のような線刻文が施されている。右上の「f」字状文様の一部と羨門の中程の高さの右側には赤い彩色が認められる。また羨門のやや下方の左右には白色の彩色が残っている。

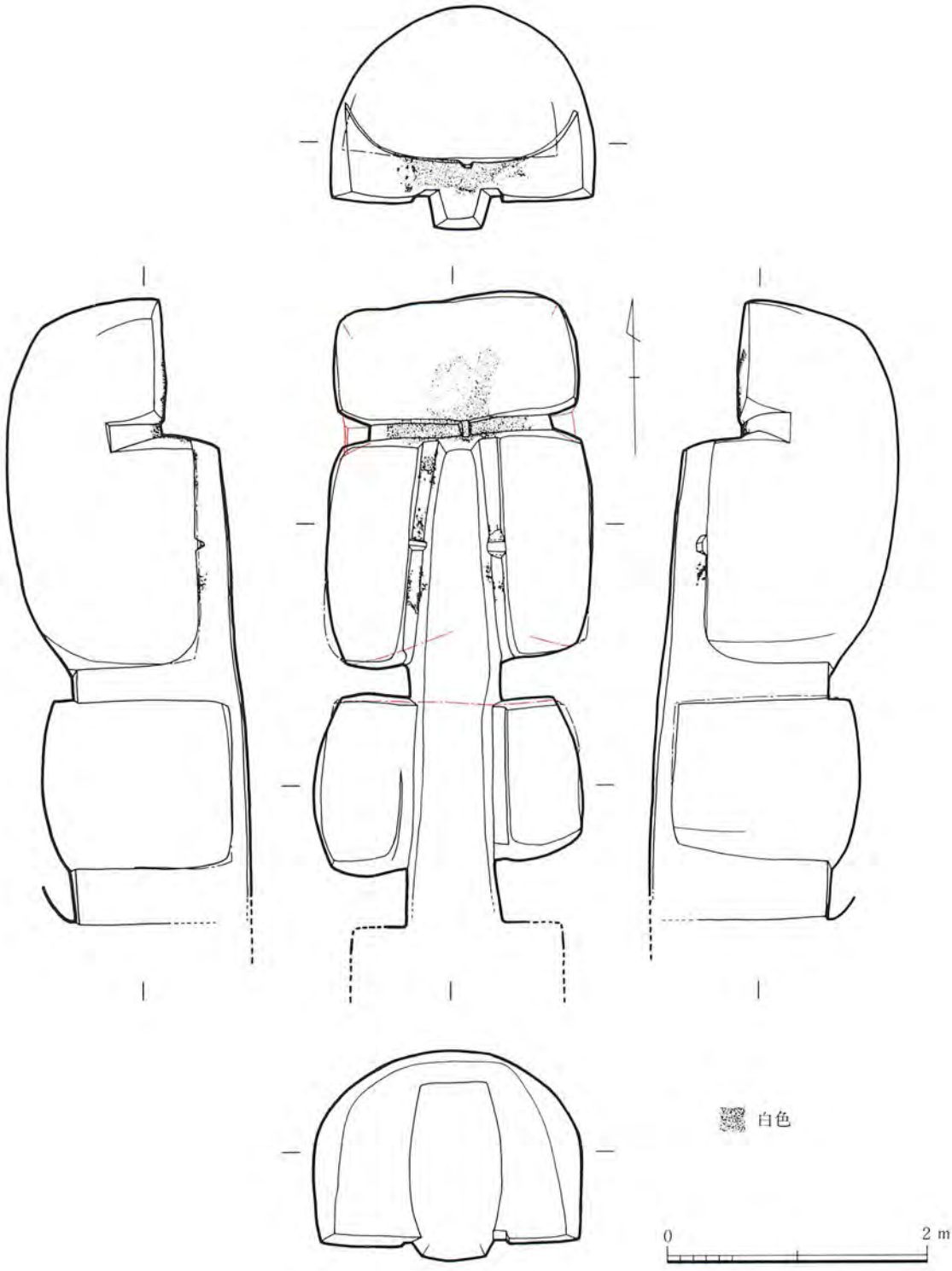
後室奥屍床仕切りの装飾は仕切りの前面と側面にある。仕切り前面には全体に渡って連続三角文（鋸歯文）が線刻されており，一部に残っている彩色から復元すると上からの三角形を赤色で，下からの三角形を白色で塗り分けてあったものと考えられる。仕切りの側面にはやはり連線三角文が線刻されており，仕切り中央部の上面には白色の顔料が，またその一部には赤色顔料がみられる。その他左右の仕切りの上面や側面にも白色と赤色の顔料が認められる。

後室奥壁の装飾は上方の中央よりやや右寄りの位置に二重の円文がフリーハンドで線刻され，その周辺にわずかに赤の彩色が認められる。外側の円文の径は約25cmを測る。

Ⅰ－2号横穴墓（旧11号横穴墓）　Ⅰ－1号の左10mのところにある横穴墓である。第一羨門の正面観は長方形で幅74cm，高さ110cmを測る。羨門の前には10cm程段差があり，閉塞石を立てるため凹みを造っている。羨道は道路工事により削られているが，幅約150cmで，長さ130cm程残っており，正面観は台形に近い。羨門から65cm程で前室に至る。前室は幅250cm，奥行き165cm，高さ203cmを測る。中央に通路が通り，その左右に屍床が設けられている。仕切りの中程に溝が切られ，奥の部分は閉塞石を立てるため，仕切りを削っている。天井の構造は特異で上方は自然石で構築している。入口側は途中に1つの段をつけ，その上方に自然石を横に渡し，その上に天井石を乗せており，その隙間にも小さな自然石を詰めている。左右壁はストレートに天井に至るが，奥壁は途中の2ヵ所に段をつけて天井に至る。この天井の構築は単に凝灰岩層が終っているため自然石で補ったのではなく，凝灰岩の上方を整形して積み上げており，奥壁の段差も石積みの状態を表現したものと見れば，横穴式石室を模倣して築造した横穴墓と考えることができるであろう。第二羨門も長方形で幅55cm，高さ93cmを測り，羨門部だけ段上がりになっている。第二羨門から45cm程で後室に至る。後室の屍床は「コ」字形に配置され，各仕切りの中程に排水の切れ込みを入れている。通路の奥には一段のステップを設けており，奥屍床の仕切りは両端に向かっていくぶん反り上がっている。後室全体はカマボコ形を成しており，幅225cm，奥行き280cm，高さ132cmを測り，広さに対して天井が低い。羨道の残存部から奥壁ま



85の5図　桜ノ上Ⅰ－2号横穴墓実測図



85の 6 図　桜ノ上Ⅰ－ 4 号横穴墓実測図

では650cm程ある。

閉塞石は2ヵ所に羨門に立てられており，いずれも上方がやや狭くなった長方形を成し，凝灰岩製の切石で造られている。第一羨門の閉塞石がやや大きく，幅106cm，高さ133cm，厚さ22cmを測る。第二羨門の閉塞石は幅83cm，高さ110cm，厚さ16cmを測る。

装飾は前室奥壁と，後室の奥壁・左右壁・入口側壁にみられる。前室奥壁の装飾は第二羨門のすぐ外側の面の上方と，その上の一段出っ張った面にみられ，赤の彩色で文様を描いてあるが薄れており，上部の円文をかろうじて確認できる程度である。

後室の装飾も赤の彩色で描かれており薄れているが，奥壁には壁面全体に8個の円文を配している。右壁には奥の方に円文を数個描き，その手前にはゴンドラ状に曲がった文様などがあるがはっきりしない。左壁には「U」字状あるいは「C」字状をした文様が6個以上描かれており，最も手前の1個は入口側壁に及んでいる。その他奥屍床の仕切りの前面にも部分的に赤の彩色がみえるが図文は不明である。

Ⅰ－4号横穴墓　2号の16m程西に3号があり，さらにそこから9m程西に4号がある。この横穴墓も複室であるが，1号，2号に比べて墓室全体が丸みを帯びている。羨道は埋没しているが，幅は170cm程度あり，羨道に天井はない。第一羨門は長方形で幅75cm，高さ135cmを測る。羨門の上で凝灰岩が終っている。羨門から50cm程で前室に至る。前室は割合に狭く，幅210cm，奥行き138cm，高さ158cmを測る。通路を狭んで両側に屍床があり，通路より屍床面は10cm程高いが，仕切りは低く，排水の溝は切られていない。第二羨門の正面観は胴張りの長方形で幅70cm，高さ130cmを測る。この前には閉塞石を立てる抉り込みなどがないため，閉塞石は第一羨門の前にだけ設置されていたものと考えられる。前室の天井はカマボコ形を成している。第二羨門から40cm程で後室に至る。後室は「コ」字形に屍床を配置しており，各仕切りの中程に排水溝を切っている。奥屍床は左右屍床よりも30cm程高く，仕切りの両端は反り上がっている。後室の規模は幅207cm，奥行き278cmを測り，天井はドーム形で高さ165cmを測る。第一羨門から奥壁までは480cmを測る。

後室の仕切りに白色の彩色がみられる。奥屍床の仕切りは上面から前面中央部付近にみられ，また屍床面にも及んでいるが，コウモリの糞が付着して白色に変色しているものと判別が難かしい。左右屍床には上面と側面の一部に認められる。全面に塗られているのではないので文様とみられるが，図文の形状は不明である。白の顔料は白粘土が使われていると考えられる。

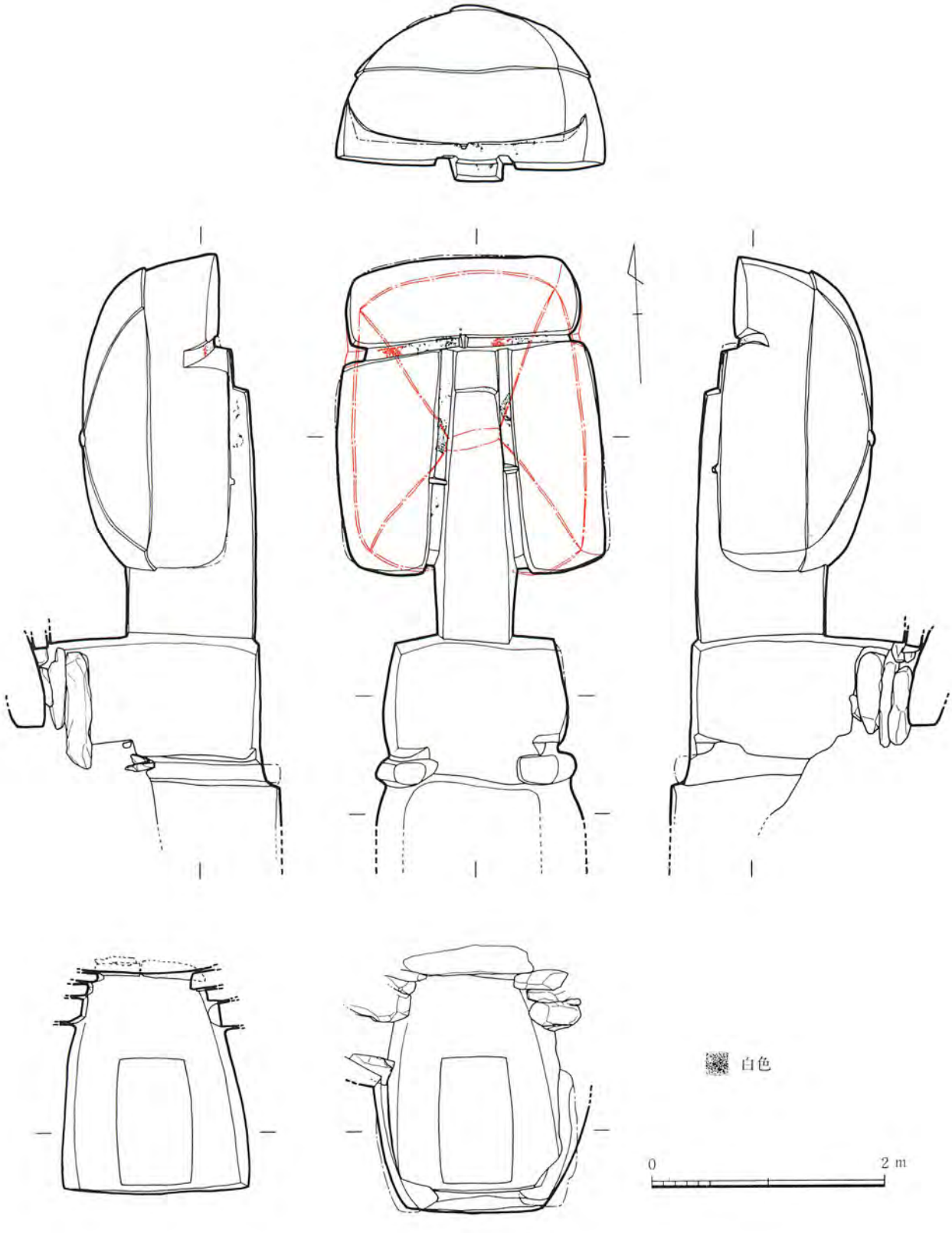
Ⅰ－5号横穴墓　5号は4号の8m程西に位置している。羨道は埋もれているが，幅は約190cmで，天井はない。複室構造の横穴墓で，第一羨門部は羨道より15cm程段上がりになっている。羨門の両側に深さ15cm程の抉りがあり，それに続いた壁面も抉られているところから，第一羨門の両側は運んで来た石材を立てた袖石が立てられていたことがわかる。羨門の幅は60～70cm程度であったと考えられる。羨門を30cm程進むと前室に至る。前室は狭く，横長の長方形で幅160cm，奥行き約100cmで，屍床は仕切られていない。天井は両側に三段，奥に一段に自然石を積み上げ，天井石を乗せており，あたかも横穴式石室のようである。床から天井までは195cmある。第二羨門は前室から5cm程段上がりになっており，幅65cm，高さ110cmを測る長方形である。第二羨門から70cm程で後室に至る。後室は幅230cm，奥行き270cmを測る隅丸の長方形で，「コ」字形屍床となっている。各仕切に排水溝が設けられており，奥屍床はゴンドラ形に両端が反っている。通路の奥には一段のステップも設けられている。天井は低く高さ150cmで，平入りで寄せ棟の家形になっているが，全体的にドームに近い。棟は上方に抉り，軒は段差をつけて表現している。第一羨門から奥壁までは450cmを測る。

装飾は後室の屍床の仕切りにみられる。奥屍床の仕切りはその上面に赤と白の彩色がみられ，もとは塗り分けてあるか，文様を描いてあるかであったと考えられる。一部彩色が重なった所を見ると白色のあとで赤色が塗られたようである。奥屍床仕切りの前面，通路奥のステップの前面，右屍床の仕切りの上面，左屍床仕切りの上面と側面にも白色が認められるが図文など不明である。

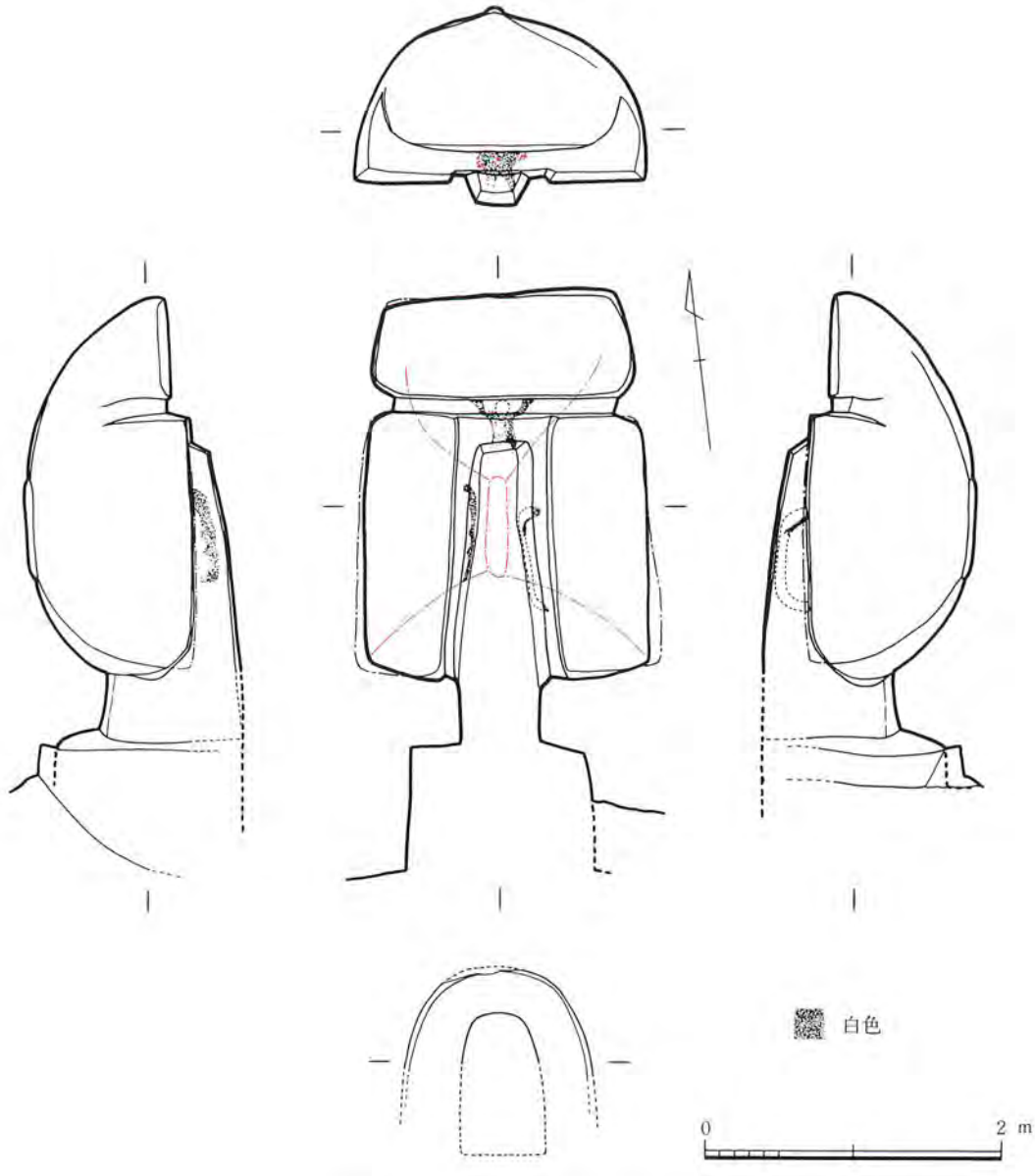
なお，本横穴墓群にみられるような自然石を運んで来て横穴墓の墓室の一部を築いた例は今日のところ熊本県では知られておらず，近くの山鹿市付城横穴墓群に仕切りや，奥屍床の石家形状部分に凝灰岩切石等を用いたという例はあるが，その意図するところは全く異っていると考えられる。

Ⅰ－6号横穴墓（旧2号横穴墓）　5号の西約20mにある横穴墓で，現在確認されている単室の横穴墓では右端に位置する。羨道・羨門とも下部が埋もれているが，いずれも正面観はアーチ形で，羨門は幅約60cm，高さ約95cmとみられる。羨道は幅約135cm，長さ約100cm，高さ約125cmと推定される。羨門から50cm程で玄室に至る。玄室の平面プランはやや隅丸の長方形で，幅210cm，奥行き260cmを測り，「コ」字形に屍床が配置されている。奥屍床の仕切りは両端を反らせてゴンドラ形の舟を表現している。通路の奥には左右の屍床の仕切りとつながったステップを設けている。各仕切りには排水の溝は切られていない。天井は低く高さ135cmしかなく，妻入り寄せ棟の家形であるが，軒はなく，ドーム形に近い。ただ棟は上方に抉って明確に表わしている。

装飾は3仕切りともみられ，現在はいくぶん消えかかっているが，原口長之氏や隈昭志氏の調査記録（昭和33年）をもとに記述すると通路奥のステップから奥屍床仕切り上面にかけて白色の顔料を用いて，両手・両足を開いた人物像を描いてあり，左右の屍床仕切りには各々その上面から側面にかけて，やはり白色の顔料でゴンドラ形の舟を描いてあった。なお奥屍床仕切りの上面と側面部分は人物像を



85の7図　桜ノ上Ⅰ－5号横穴墓実測図



85の8図　桜ノ上Ⅰ－6号横穴墓実測図

描く前に赤色の顔料が塗ってある。本横穴墓の奥屍床のごとく仕切りそのものをゴンドラ形にした例は多いが，左右屍床のごとく仕切りにゴンドラを描いた例もあることは当時の送葬思想を考える上で興味深いものである。

出土遺物　Ⅰ－1号横穴墓　須恵器破片，鉄鏃片1，鋤先1，金環1。Ⅰ－2号横穴墓　人骨3体，鉄鏃2。Ⅰ－6号横穴墓　鉄鏃片，飾り金具片，金環2。

備　考　昭和33年原口長之氏と山鹿高校考古学部で調査，現Ⅰ－1号とⅠ－6号で装飾発見。昭和39年現Ⅰ－2号発見，原口長之氏と山鹿高校及び鹿本高校考古学部で調査。昭和40年隈昭志氏と山鹿高校考古学部でⅡ群とⅢ群を確認。なおⅠ－2号・4号・5号の彩色は今回の調査で発見した。

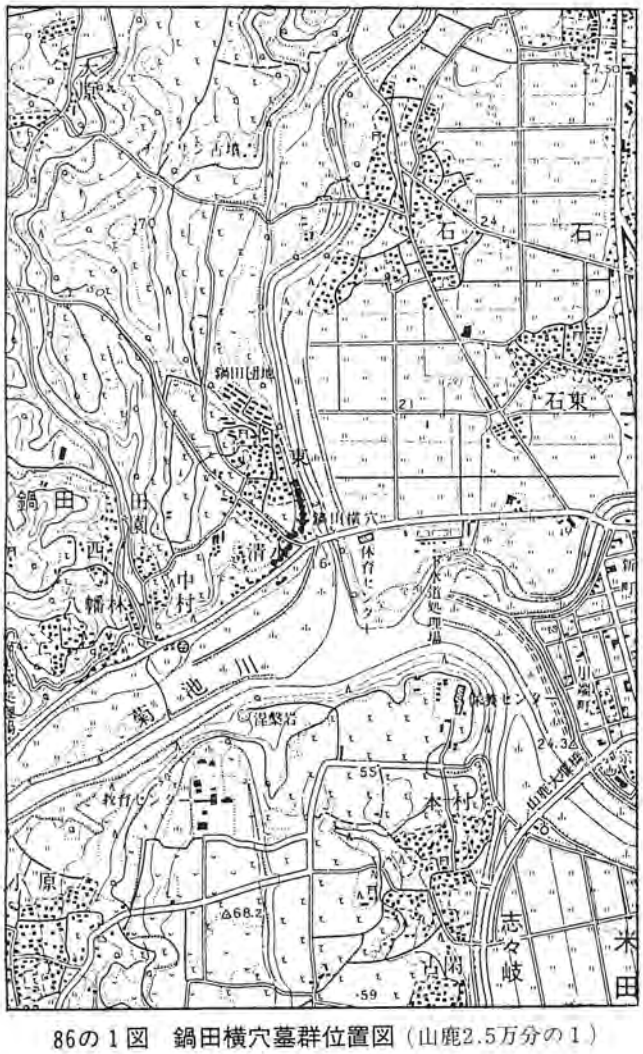
（高木正文）

〔参考文献〕

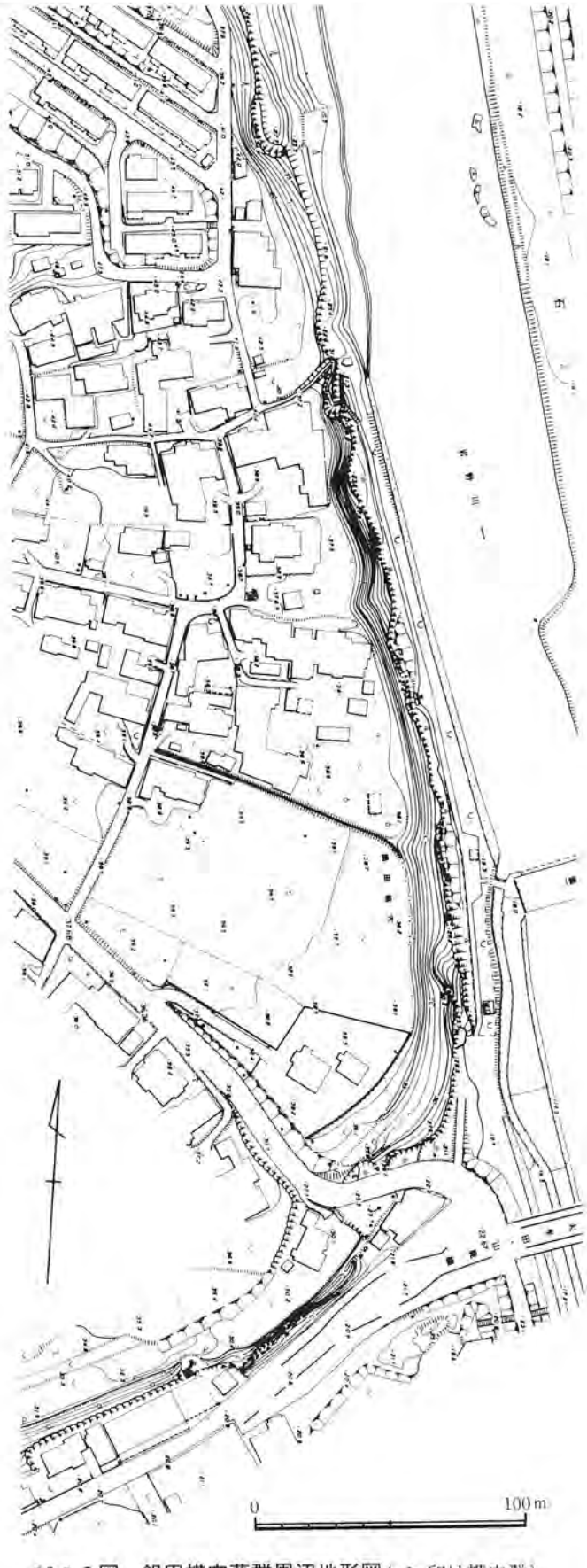
①原口長之『新たに装飾を発見した二つの古墳について』　昭和33年（1958）　プリント
②原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
③原口長之「桜ノ上横穴群」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
④『熊本県の文化財』3（史跡）　熊本県教育委員会　昭和56年（1981）

86. 鍋田横穴墓群〔大正11年国史跡〕(⇨86の1～33図)

——山鹿市鍋田——



86の1図　鍋田横穴墓群位置図（山鹿2.5万分の1）

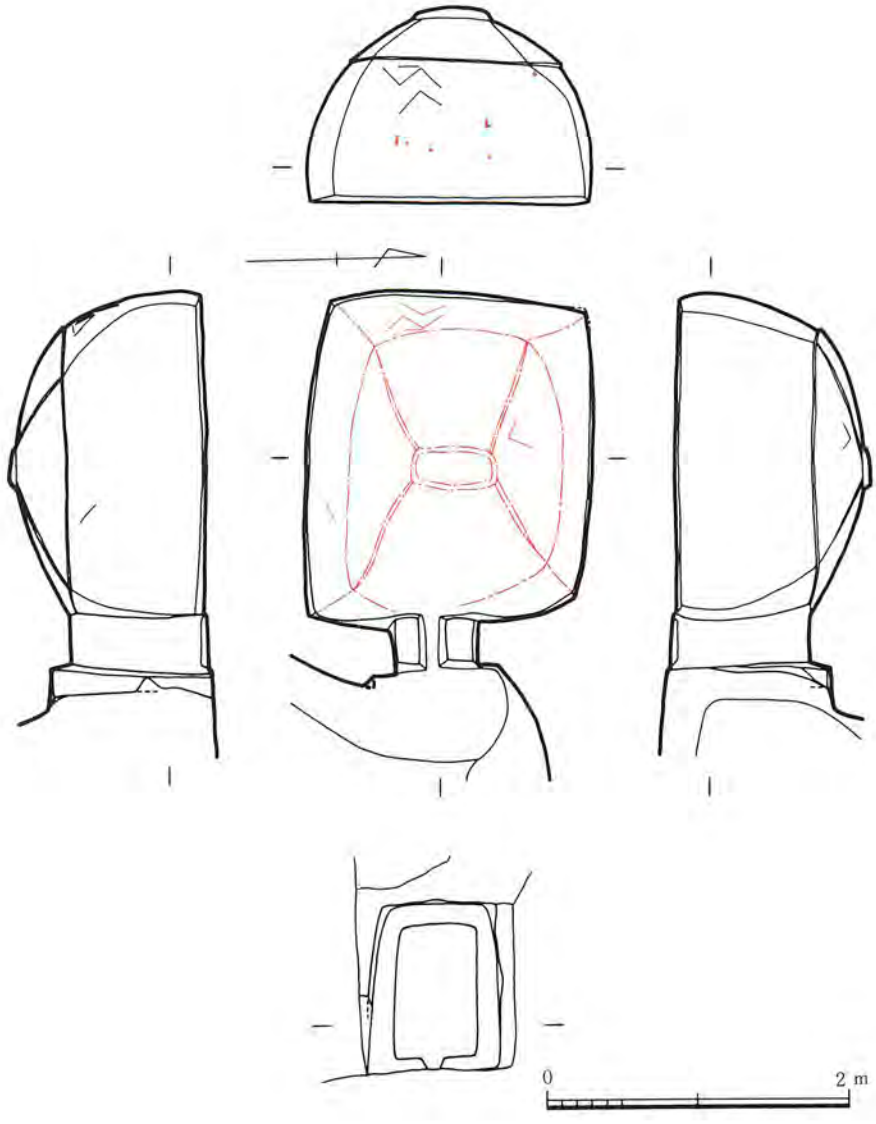


86の2図　鍋田横穴墓群周辺地形図（凸印は横穴群）

立　地　山鹿盆地の西側を菊池川支流岩野川が南流している。この川に面した台地の崖面には城・付城・鍋田と装飾を含む横穴墓群が並んでいる。また台地の上にもチブサン古墳やオブサン古墳など装飾古墳や，箱式石棺などが分布している。

分布と概要　鍋田横穴墓群は300ｍの範囲に現在50基確認されるが，大正10年（1921）に下林繁夫氏の測量調査により確認されその後埋没しているものを含めると総数60基を数える。横穴の番号は埋没しているものがあるため通し番号に直さず，下林氏の番号を踏襲したが，見落としてあった分については枝番号をつけ，誤認については訂正した。横穴墓群は約10群程に分かれ，「コ」字形屍床と平坦屍床が混在している。羨門と飾り縁が方形で，玄室天井が寄せ棟の家形のものが多いが，羨門や飾り縁がアーチ形で，天井がカマボコ形やドーム形を成すものも数基みられる。装飾は全域に散在するが，２基～３基並んだ所もあり，従来10基知られていたが，今回の調査で16基確認された。装飾は浮き彫りと線刻があり，赤の彩色を併用したものもある。装飾の位置は外壁と玄室内壁の二種があり，その両方に施されたものもある。装飾のある横穴墓は６・７・８・12・

86の3図　鍋田横穴墓群配置図



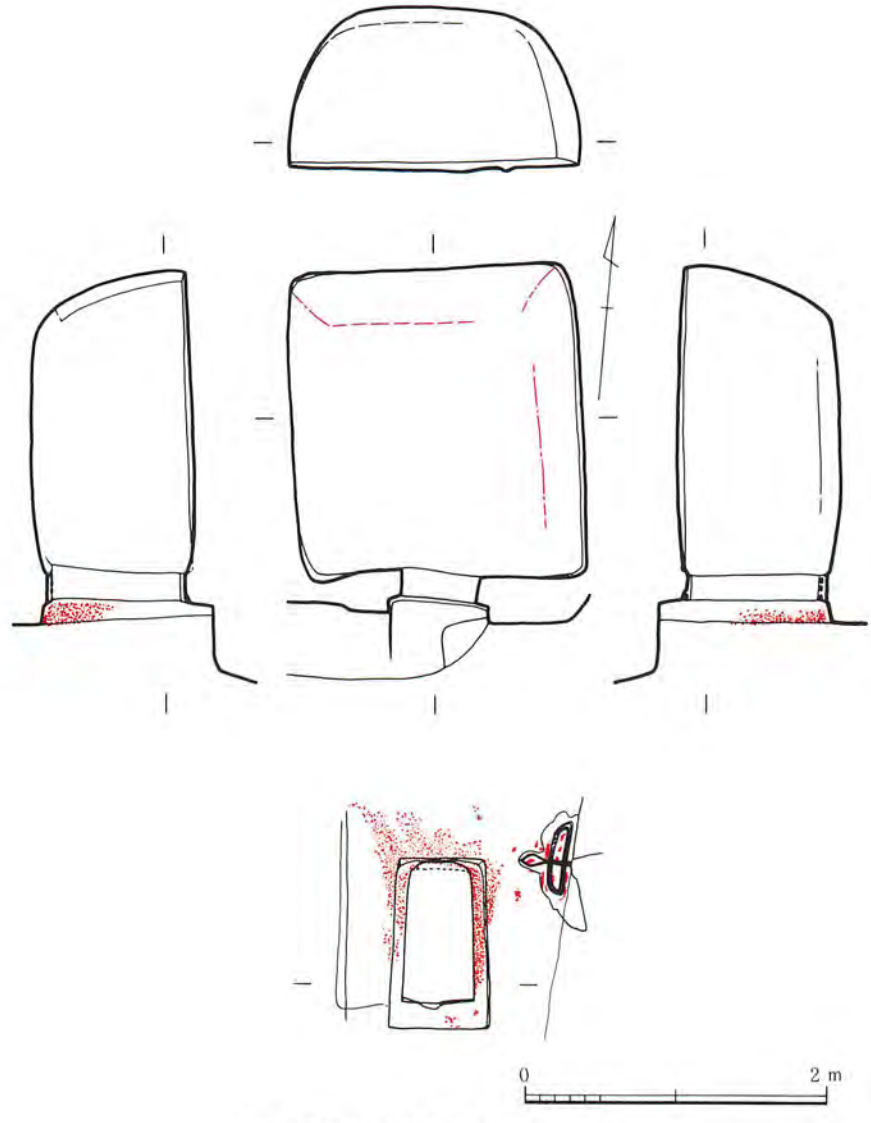
86の4図　鍋田6号横穴墓実測図

13・14・21・26b・26d・27・33・46・49・50・52・53号である。このうち21号横穴墓は内部が埋もれているが複室のようである。

6号横穴墓　1号から8号までは大きく群とみることができる。うち6号から8号までは小さなまとまりを成し，3基とも装飾をもつ横穴墓である。6号は凝灰岩崖面がL字形に抉れて直立した部分の左面に掘られており7号はその右面に掘られている。6号の羨門は長方形で，幅56cm，高さ87cmを測り，その外にやはり長方形で幅88cm，高さ108cmを測る飾り縁がついている。羨門部はその内外よりも8cm程高くなっているが，その中央部には排水の溝が通っている。羨門と玄室の間は約35cmを測る。玄室の屍床は平坦で幅190cm，奥行210cmを測る方形プランである。やや奥に長いにもかかわらず天井は平入りの寄せ棟家形になっている。棟の部分はやや上に抉って表現しており，軒は段差をつけている。壁面が内部に曲がっているところから全体形はドーム形にも近い。屍床から棟までの高さは129cmを測る。

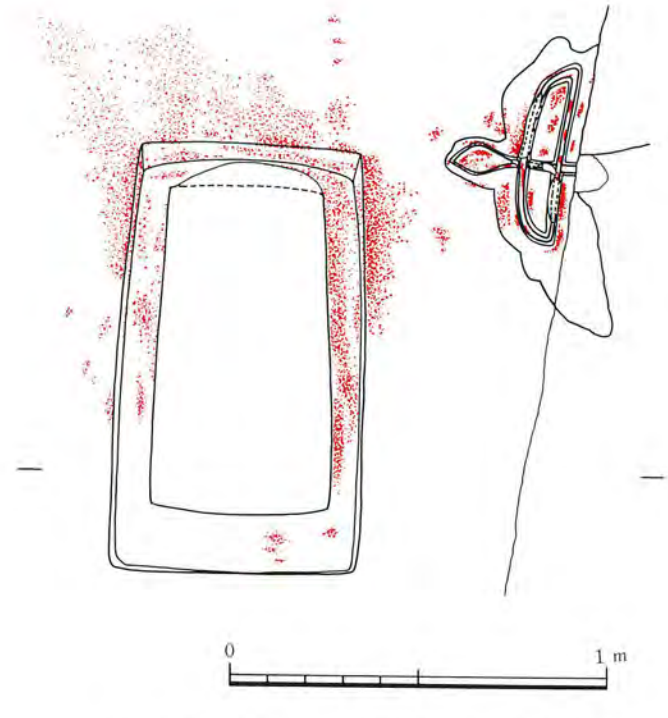
装飾は玄室の奥壁にみられる。壁面の剝落が激しいため残りが悪いが，左上方には線刻による二段の連続三角文が認められる。また左壁の一部にも線刻が残っており，右壁にも線刻らしいものがあるが不鮮明なため図化が困難である。本来は三壁とも連続三角文が施されていたものと推定される。また玄室右上方にも逆V字状の線刻が認められる。その他奥壁には部分的に赤の彩色も残っているが，全面塗られていたものか，連続三角文の線刻を塗り分けていたものかどうか不明である。

7号横穴墓　羨門は上方を削られているが，羨門・飾り縁とも長方形で，羨門は幅48cm，高さ約85cm，飾り縁は幅66cm，高さ110cmを測る。羨門は15cm程段上がりになっており，羨門から玄室までの間は18cmを測り，玄室へは4cm程段下がりとなっている。玄室はやや隅丸ではあるが平面プランは方形で，屍床は平坦である。玄室内で後世に火が焚かれているため壁面や天井部の剝落が激しく，軒先線なども不明瞭である。しかし本来棟はなかったようで，全体形

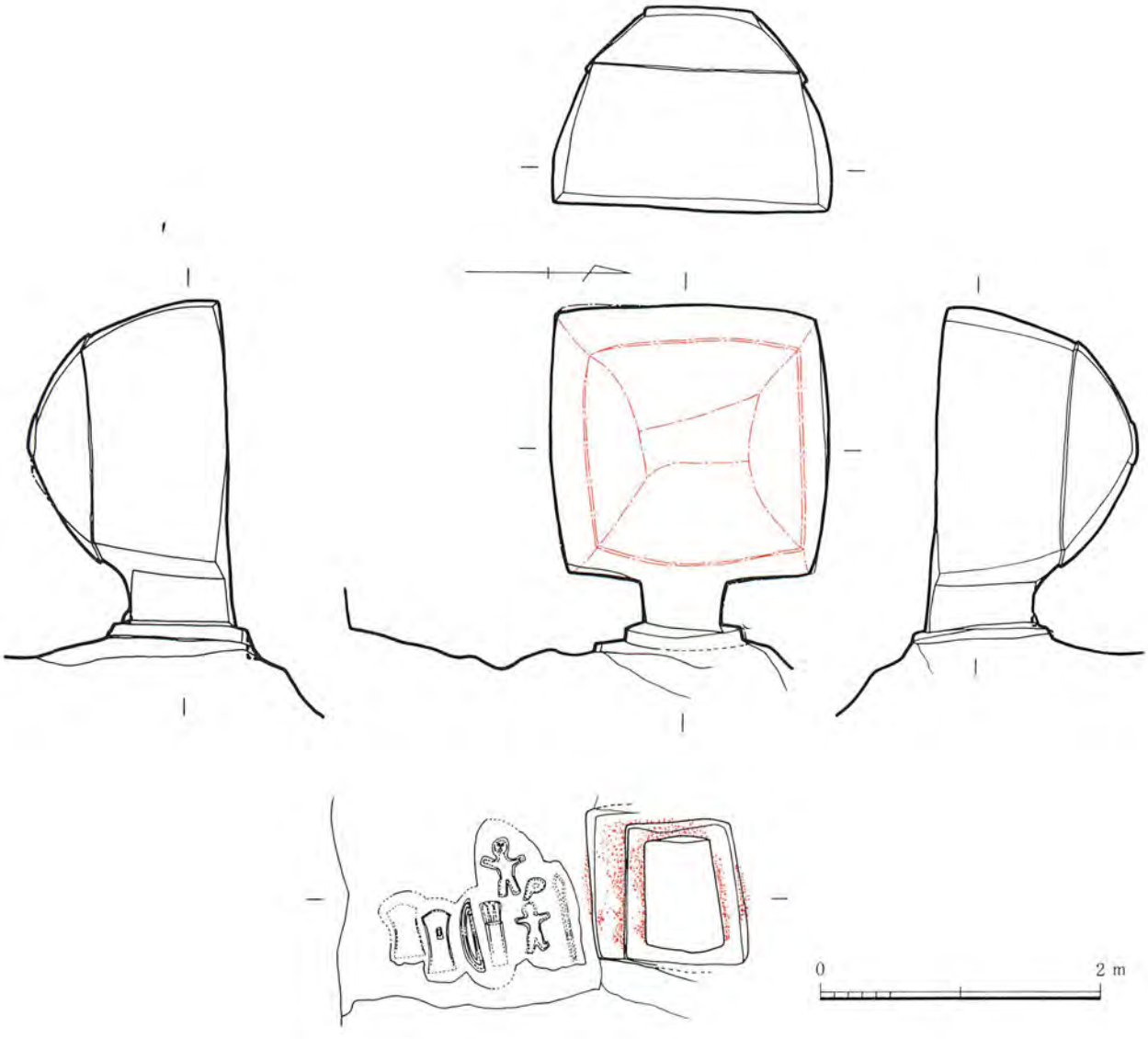


86の 5 図　鍋田 7 号横穴墓実測図

86の 6 図　鍋田 7 号横穴墓外壁の弓浮き彫り



86の 7 図　鍋田 7 号横穴墓外壁装飾文実測図



86の8図　鍋田8号横穴墓実測図

はカマボコ形に近い。玄室の規模は幅194cm，奥行き201cm，高さ106cmを測る。

羨門部から外壁にかけては赤く塗られており，右外壁の上方に弓の浮き彫りがみられる。この弓は幅12cm，高さ48cmを測り，横穴墓の羨門側（左側）に向かって矢をつがえている。矢はその威力を示すかのように鏃を大きく表現してあり，長さは34cmを測る。この弓矢とその周辺も赤く塗られている。なおこの装飾を嘉永二年（1849）に矢野一貞がスケッチしている。

8号横穴墓　7号の外壁面から直角に曲がった壁面に掘られた横穴墓である。羨門・飾り縁とも長方形で，羨門は幅56cm，高さ80cmを測る。飾り縁は幅90cm，高さ100cmを測り，左側にはもう一重の飾り縁が付いている。羨門は10cm程高くなっており，羨門から玄室までの間は30cmである。玄室の平面プランは方形で幅200cm，奥行196cmを測り，屍床の仕切りはない。天井は平入りの寄せ棟家形で，高さ143cmを測る。

羨門から飾り縁にかけては赤く塗られている。また左外壁には多くの浮き彫りによる装飾がみられる。風化が激し

86の9図　鍋田8号横穴墓外壁の人物浮き彫り

86の10図　鍋田８号横穴墓外壁装飾文実測図

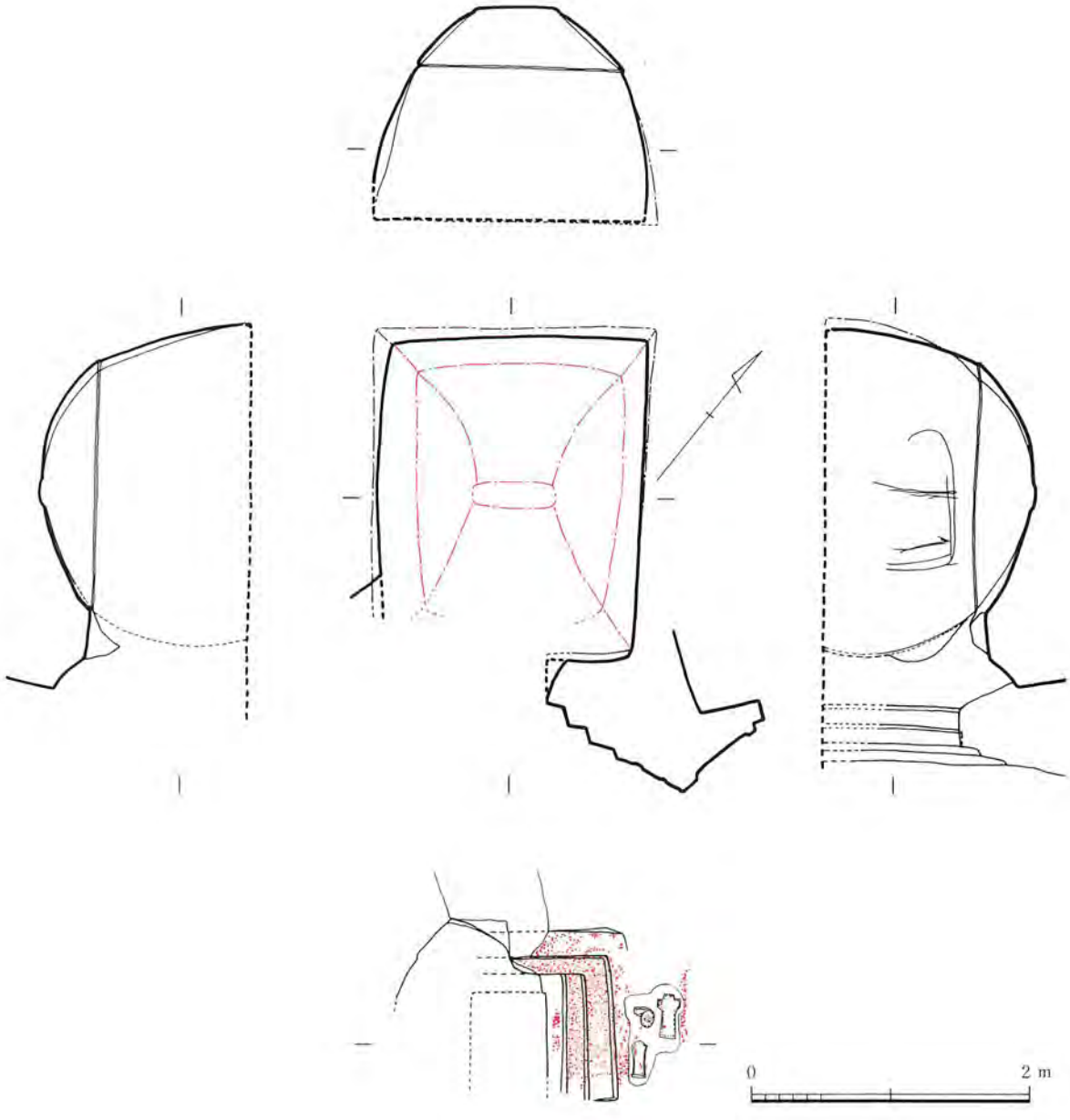
いが，中央部は割合残りが良く，左から盾，弓，靫が並んでいる。盾は中央より少し上に浮き彫りによる長方形の把手がついている。下部を欠損しているが幅21cm，高さ約44cmを測る。弓は左に向いており，幅12cm，高さ52cmを測る。靫は単純な筒形で，大きな鏃を３本収めている。幅15cmで，下部は風化しているが高さ約45cmと推定される。盾の左側に浮き彫りの痕跡らしいものがあり，ここにも同様の盾が彫られていたのではないかと考えられる。また靫の右側には人物の浮き彫りが二段にみられる。いずれの人物も両腕を伸ばし，足を開いており，上方の人物の顔は鼻を浮き彫りにし，目と口を凹めている。大きさは上方の人物が幅33cm，高さ42cmで，下方の人物は幅26cm，高さ約36cmを測る。二つの人物像の間の右側にＰ字形をした浮き彫りの痕跡がある。これは鞆であろうか。下方の人物の右側にも棒状に浮き彫りの痕跡とみられるものがある。これは剣であろうか。これらの浮き彫りは赤く塗られていたと考えられるが，風化の為残っていない。

12号横穴墓　下林繁夫氏の配置図によると８号と12号の間に９～11号があるが現在は埋没している。またこの部分は二段になっており，下段には16～18号があるが現在は中央の17号以外は埋没している。12号は崖面のやや出っ張った所に造られており，左側の羨門から玄室の一部にかけてが壊れており，下部は埋もれている。残った右側を見ると羨門・飾り縁とも長方形で，飾り縁は三重に付いている。羨門の大きさは復元すると幅約55cmで，高さは90cmと推定される。外側の飾り縁は幅約150cm，高さ100cmで，上方のみはその20cm上にも飾り縁が付いている。羨門から玄室までの間は約35cmを測る。玄室の屍床は平坦で，やや奥に長い長方形プランで，幅205cm，奥行240cmを測る。天井までの高さは約155cmで，天井の形態は平入りで寄せ棟の家形を成している。軒は段をつけ，棟はいくぶん上方に抉って表現している。

装飾は内壁と外壁の２ヵ所にみられる。内壁の装飾は右壁にあり，線刻で施されている。２ヵ所に数本の縦線があり，おそらく左側が前足で右側が後足とみれるであろう。とすれば上方の２本の横線は胴体で，その左側に曲がった所が頭部である。また短い尻尾らしいものもついている。やや胴部が細いが，他の装飾の例から考えると馬を表現しているのではなかろうか。頭部の状態は項垂れているようである。この絵の大きさは幅100cm，高さ55cmに描かれている。

外壁の装飾は右側にあり，風化が激しいが，浮き彫りで，右側には奴凧形の靫，その左の６の字を裏返して寝かせたようなものは鞆であろうか。その下には盾がみられる。いずれも小さな浮き彫りで，靫は幅22cm，高さ32cmを測り，鞆と考えられるものは幅20cm，高さ15cm，盾は幅16cm，高さ27cmを測る。いずれも赤く塗られた痕跡がみられる。また羨門から飾り縁にかけても赤く塗られている。なおこの外壁の装飾のうち靫は矢野一貞のスケッチに見られる。

13号横穴墓　羨門は長方形で幅62cm，高さ86cmを測る。その外に一重のやはり長方形の飾り縁がついている。飾り縁の大きさは幅83cm，高さ97cmを測る。羨門から10cm余りで玄室に至る。玄室の平面プランは長方形で，幅170cm，奥行200cmを測る。屍床の仕切りはない。天井は妻入りで，切妻状の家形を成すが棟などの稜線は不明瞭である。底から天井までの高さは低く100cmしかない。



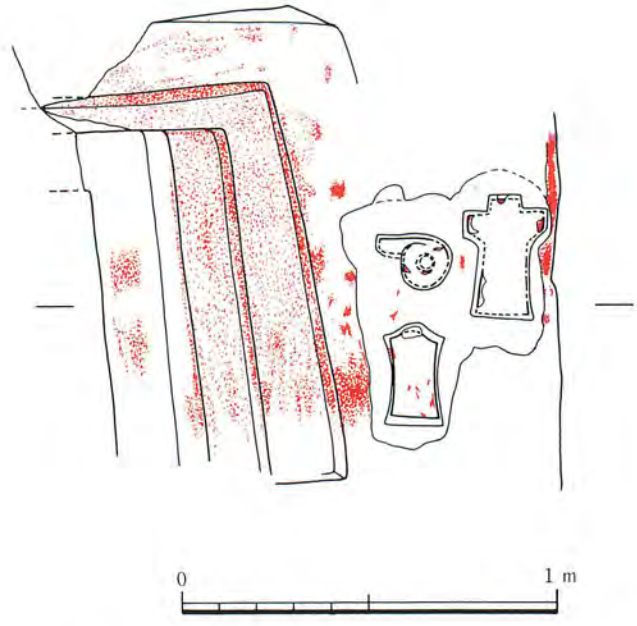
86の11図　鍋田12号横穴墓実測図

玄室の天井などには部分的に赤の彩色が認められ，羨門から外壁にかけても赤の彩色が残っている。また外壁の左上方には後背状に抉られた部分がある。ここは雨水の流れ落ちによると考えられる風化が激しく，現状では何も残っていないが，おそらくもとは浮き彫りあるいは彩色による装飾があったと考えられる。

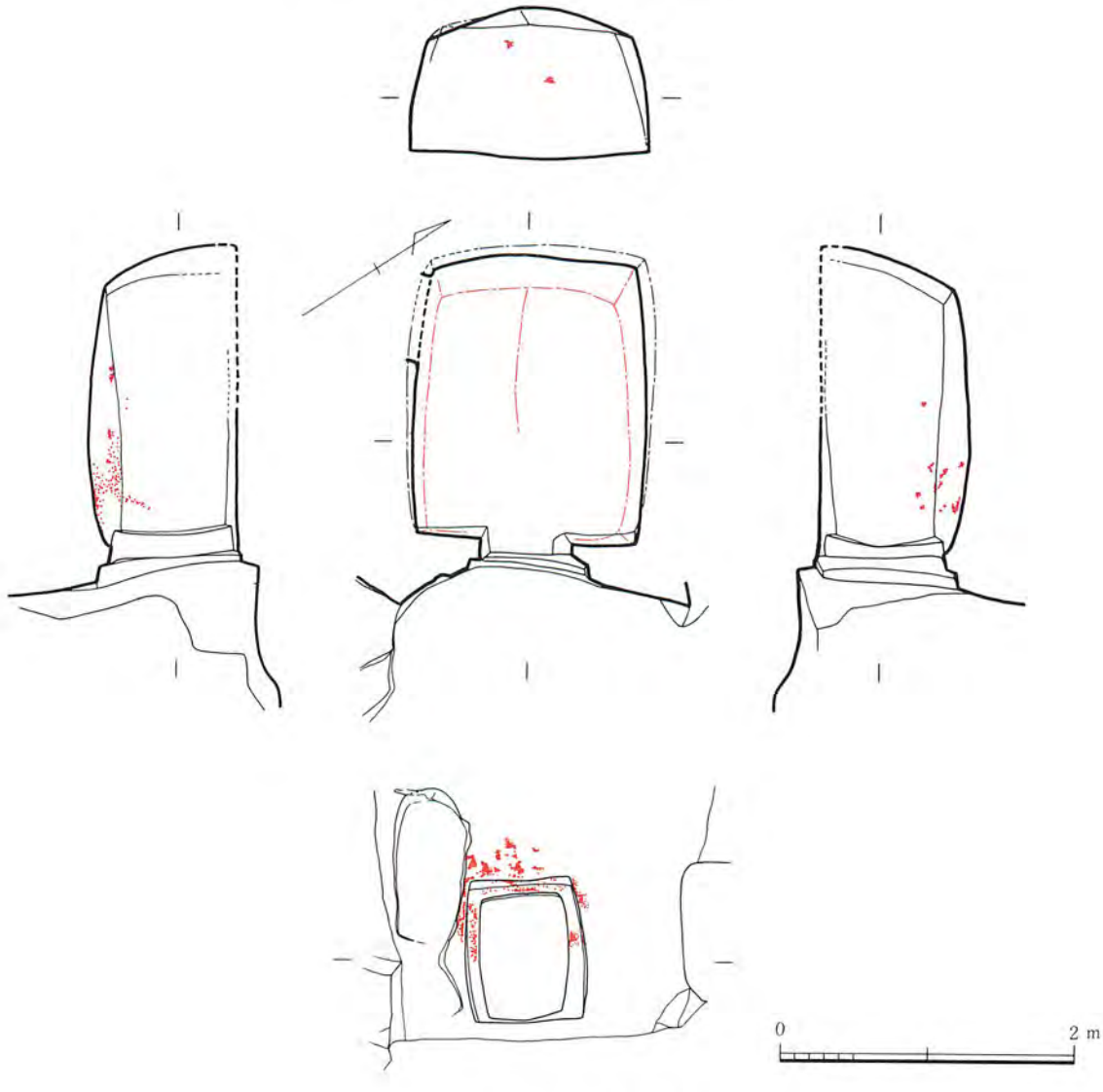
14号横穴墓　崖面をL字状に抉って横穴墓を造っており，羨門は長方形で幅60cm，高さ75cmを測る。羨門の外に三重の飾り縁が付いている。内側から第1の飾り縁は幅95cm，高さ100cmで，第2の飾り縁は幅115cm，高さ110cmを測る。また第3の飾り縁は右側が内面に長いので測定しにくいが，正面から見ると幅約170cm，高さ約120cmを測る。羨門の前には20cmの段があり，閉塞石を立てるための抉り込みがみられ，そこから外側へ通じる排水溝が掘られている。羨門から玄室までは37cmで，玄室の平面プランは方形で幅205cm，奥行き195cmを測る。床には左側にのみ仕切りを設けて細長い屍床を造っているが，右側の広い空間も屍床として使用したものと考えられる。天井は平入り寄せ棟の家形で，高さ130cmを測り，棟は上方に抉っており，軒は段差をつけて表現している。

羨門から飾り縁にかけては赤く塗られており，第3の飾り縁の右側内壁に鞆の浮き彫りが2つ並んでいる。いずれも奴凧形をした同形態の鞆で，肩部の接した状態から右側が先に彫られたものと考えられる。鏃の表現はないが，鏃を入れる部分を段下がりにしている。体部の下方には一条の帯を浮き彫りしている。いずれも赤の彩色の残存状態から考えて，鞆の下端部と帯状の部分を塗り，また肩部付近を縁どりするように塗っていたようである。右側は幅29cm，高さ42cmで，左側は幅24cm，高さ42cmを測る。

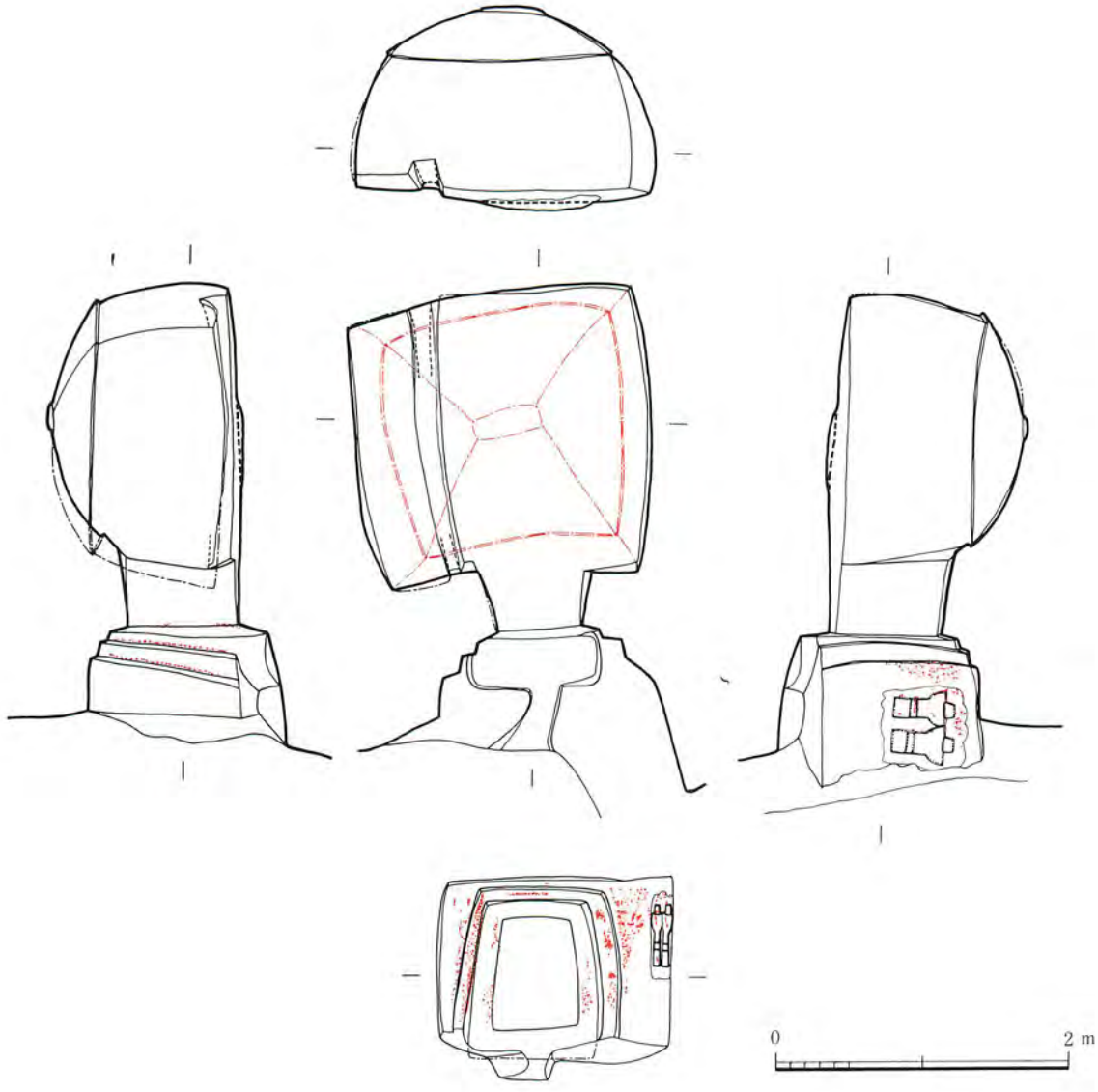
下林繁夫氏の大正10年作成の分布図によると14号の右に



86の12図　鍋田12号横穴墓外壁装飾文実測図

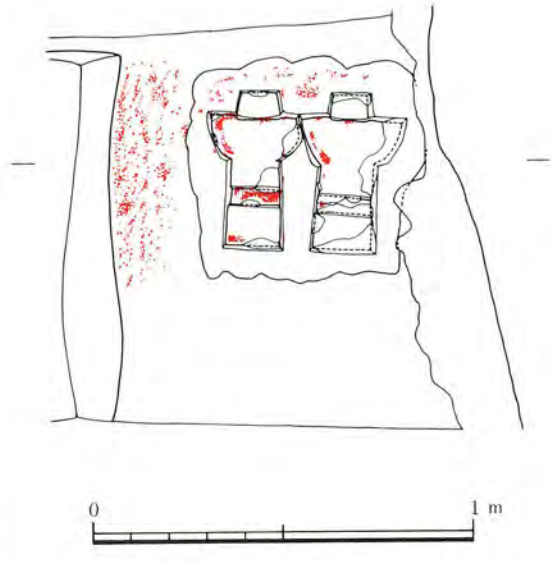


86の13図　鍋田13号横穴墓実測図

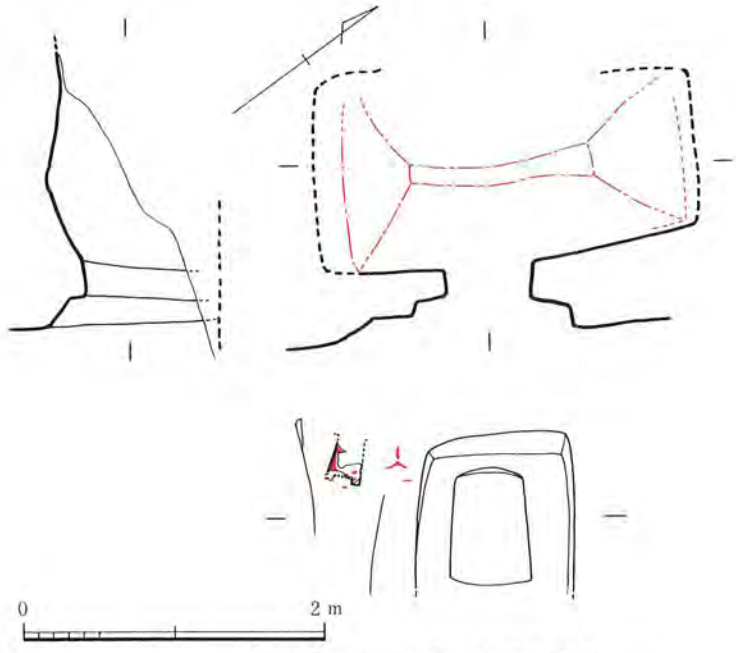


86の14図　鍋田14号横穴墓実測図

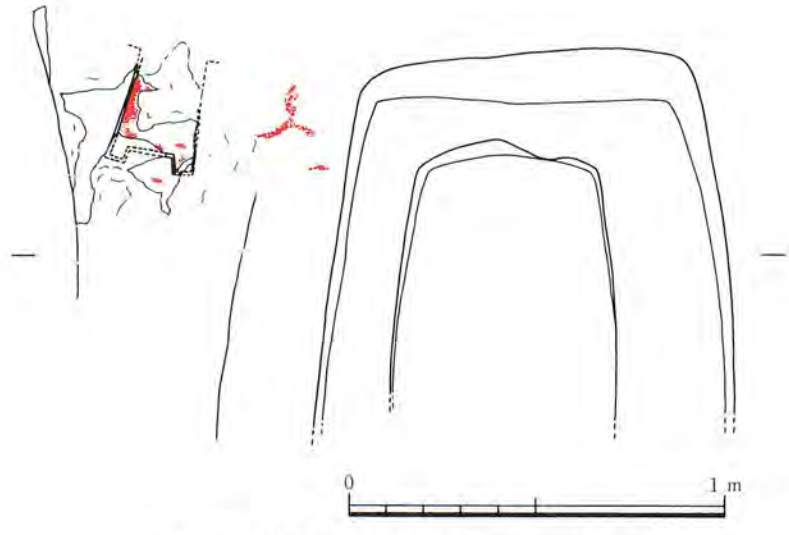
86の15図　鍋田14号横穴墓羨道右壁の鍬浮き彫り



86の16図　鍋田14号横穴墓羨道右壁装飾文実測図



86の17図　鍋田21号横穴墓実測図



86の18図　鍋田21号横穴墓外壁装飾文実測図

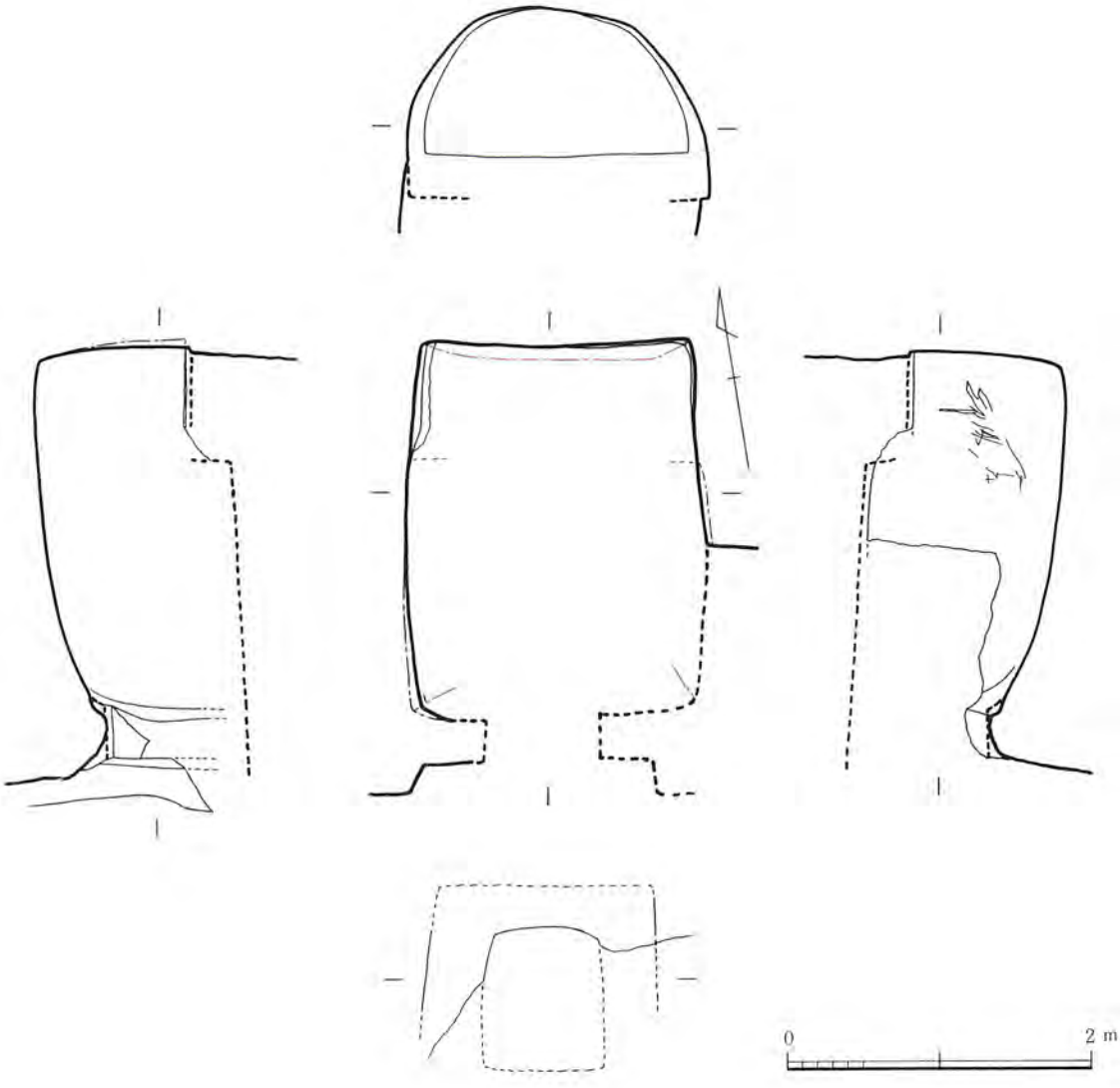
15号が並んでおり，その下段に19号と20号が並んでいる。

21号横穴墓　21号から23号までは１つのまとまりを成している。10年程前に筆者が調査した時には21号の左側に１基見えていたと記憶しているので，14号と21号の間には10基程埋もれている可能性がある。21号横穴墓は内部に土があるので正確な実測が不可能であるが，羨門・飾り縁とも方形である。羨門は幅約60cm，高さ約75cmで，飾り縁は幅約110cm，高さ約100cmを測る。羨門から20cm程で玄室に至る。玄室は横長で，幅約250cm，奥行き約120cmと推定され，天井は平入り寄せ棟の家形である。天井をよく見ると一度下がったあとさらに奥に続いており，複室ではないかと考えられる。

装飾は左外壁にみられる。風化による剝落が激しいが，浮き彫りで，残存部から推定すると体部下方の両端に脚をもつ靱ではないかと考えられる。とすると体部の現存部は幅23cm，高さ26cmを測り，復元すると全高は50cm程度であったとみられる。浮き彫りの上面や，横穴との間にはかろうじて赤の彩色が認められる。

なお矢野一貞の嘉永二年（1849）のスケッチによると14号と27号の装飾の間に多くの鏃を収めた靱が描かれているが，この靱には脚がついておらず，21号の浮彫りとは異なるようである。現在埋没している横穴墓の装飾であろうか。

26ｂ号横穴墓　24ｂ号から26ｂ号までの４基は１ヵ所に集まって造られており，少し離れて26ｃ号から26ｅ号までの３基がある。このうち24ｂ号，26ｂ号～26ｅ号は下林氏の配置図に記録されていなかった横穴墓である。26ｂ号は自然崩壊と人為的な改造によって原形を大きく損なっているが，復元すると羨門部は方形で，同じく方形の飾り縁が付いて



86の19図　鍋田26ｂ号横穴墓実測図

いる。玄室は床が掘り下げられているが，残存部から考えると「コ」字形屍床をもつ長方形で，幅200㎝，奥行き約240㎝である。天井はカマボコ形で床からの高さは130㎝前後と考えられる。

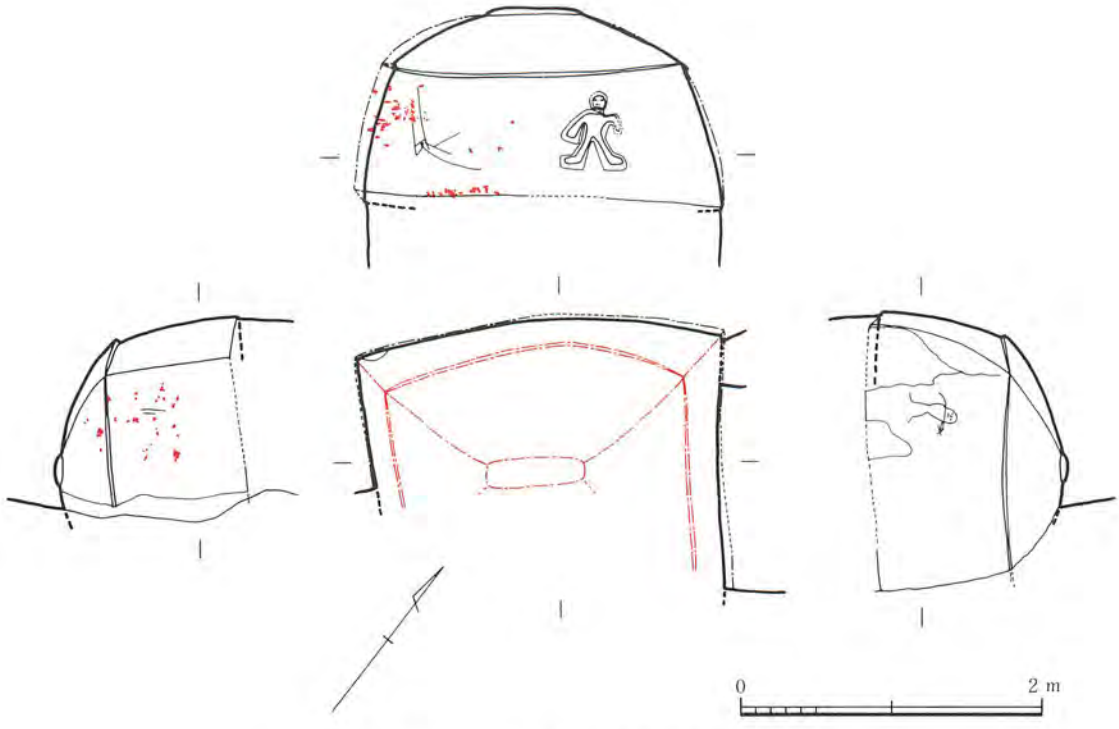
玄室の右壁奥の方に線刻がみられる。おそらく鳥を描いていると考えられ，右にくちばしのある頭部があり，長い首をもち，足をまっすぐ伸ばして立っている。くちばしから尾羽まで幅70㎝，頭から足先まで高さ60㎝を測る。

26ｄ号横穴墓　入口側が壊れ，床面は掘り下げられている。残存部から考えると床は平坦で方形に近く，幅250㎝で，奥行きは170㎝以上である。天井は寄せ棟の家形で，平入りになっている。軒は段差をつけ，棟は上方に抉っており，床から天井までの高さは約130㎝を測る。

装飾は玄室の奥壁と右壁にみられる。奥壁の装飾は浮き彫りと線刻がある。中央より少し右には浮き彫りの人物像がある。顔は小さく，目と口を凹めており，左腕はやや欠損しているが右腕よりも小さく，足は人の字形に開いている。大きさは幅45㎝，高さ51㎝を測る。一般に浮き彫りの装飾は横穴墓の外壁にみられるが，本例は異例である。奥壁の左側には線刻文がみられる。数本の線で器物のようなものを描いてあるが何であるか不明である。この線刻の周辺には赤の彩色も部分的に残っている。

右壁の装飾は線刻による人物像がみられる。頭と胴部とは腕に続いた線で区別しただけなので首がなく，顔面には目・鼻・口を短線で表現している。右腕は１本の線であるが，左腕は二本の線で描き先端は矢印のようになっている。胴部下方がくびれ，足は踵で折れている。顔と胴部のみ大きいのでカエルのような形をした人物像である。幅28㎝，高さ33㎝に描かれている。これと面した左壁にも二条の線があるが文様とはなっておらず，周辺には赤い彩色が残っている。

27号横穴墓　この横穴墓群の中心部にある横穴墓で，最も優れた装飾をもっている。入口の右側から玄室の一部が壊れている。復元すると羨門は幅約55㎝，高さ約90㎝である。羨門の外に二重の飾り縁が付いている。内側の飾り縁は幅85㎝と推定され，高さは100㎝である。外側の飾り縁は復元幅125㎝で，高さは115㎝を測るが、下端は10㎝程上で終わっている。羨門から40㎝で玄室に至る。玄室の平面プラン

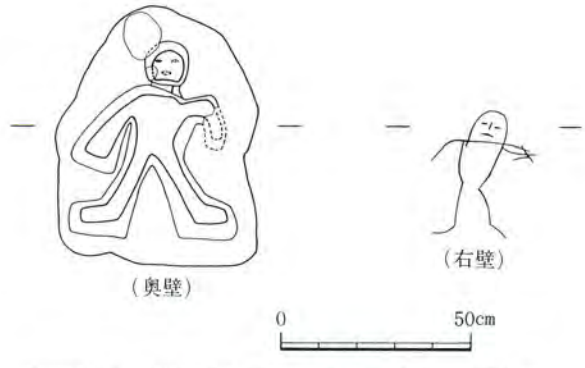


86の20図　鍋田26ｄ号横穴墓玄室装飾文実測図

は横長の方形で，幅255cm，奥行き200cmを測る。床は平坦なままで屍床の仕切りはない。天井は方形造の屋根になっており，高さは152cmを測る。

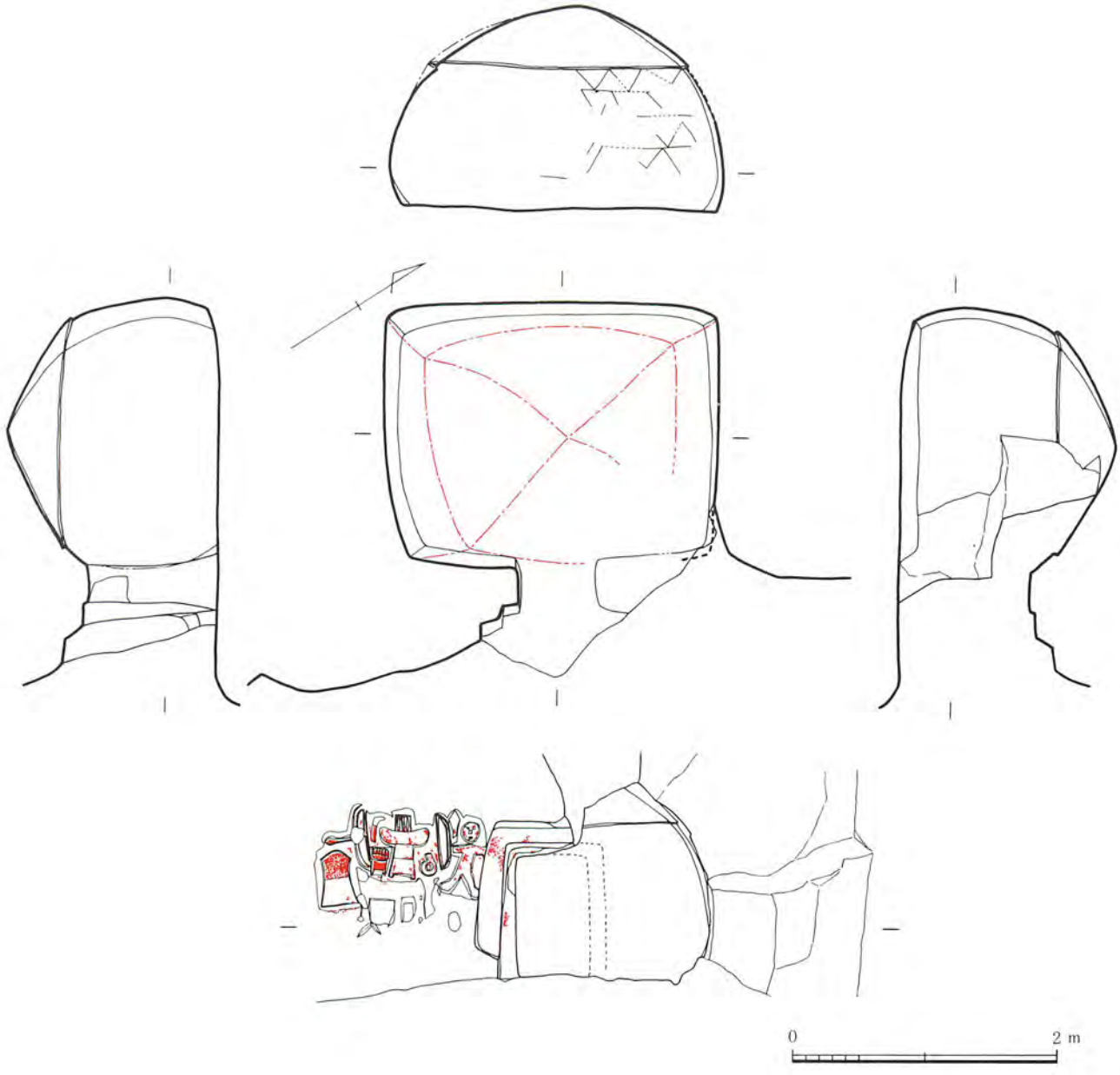
装飾は奥壁と外壁にみられる。奥壁の装飾は後世に玄室内で火を焚いているため煤の付着と剝落により不明瞭であるが，壁面を四条の横線で仕切り，その間に連続三角文の線刻を並べている。

向かって左外壁の装飾は浮き彫りで様々のものが描かれている。右端には人物像がある。両腕を横に伸ばし，足を大きく開いており，大の字形をしている。頭は丸く，目とコは彫り凹め，鼻を浮き彫りし，鼻の孔も表現している。人物像の大きさは幅44cm，高さ58cmを測る。人物の腕の左に弓があり，手で持っているようにも見える。弓は玄を外側に向けており幅10cm，高さ42cmを測る。人物の頭と弓の間には切先を上に向けた剣とみられるものがある。幅は10cmで，長さ25cmを測る。弓の左には奴凧形の靫がある。上方には６本の鏃を収めており，体部上方には一条の溝を入れ，その下方には段差をつけている。また下端には脚を付けている。靫の幅は38cm，高さは48cmを測る。靫の右下には６の字を裏返したような装飾がある。これは鞆であろうか。幅14cm，高さ18cmを測る。靫の左上には切先を下に向けた刀子がある。柄は曲がっており，刃部と柄との境は段差をつけ刃部の方が浅い浮き彫りになっている。刀子の長さは20cmを測る。靫の左下には小型の靫がある。靫の大きさに対して大きな鏃を６本収めており，下端には脚をもっている。この靫と上方の刀子との左には弓があり，左側に先端を向けた矢をつがえている。幅33cm，高さ49cmに描いている。弓矢の右下には盾がある。均整のとれた盾で上半をわずかに段下がりに造っている。幅29cm，高さ42cmであ



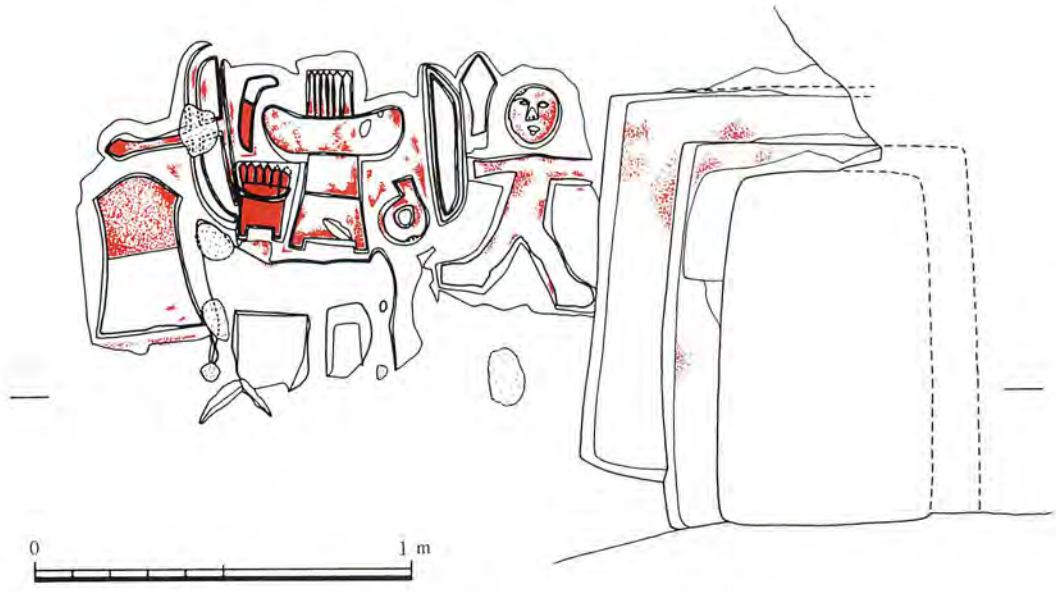
86の21図　鍋田26ｄ号横穴墓玄室装飾文実測図

86の22図　鍋田26ｄ横穴墓奥壁の人物浮き彫り



86の23図　鍋田27号横穴墓実測図

86の24図　鍋田27号横穴墓外壁の浮彫り



86の25図　鍋田27号横穴墓外壁装飾文実測図

る。また鞆や靫の下部から盾の左側にかけて馬の浮き彫りがある。他の浮き彫りに比べて仕上げが丁寧でないため見落としそうであるが，右側に頭を向けた横向きの姿である。頭をうなだれ，尻尾は太く跳ね上げている。大きさは幅53cm，高さ45cmを測る。これらの浮き彫りは赤く塗られているが，刀子は刃部のみ，盾は上半のみが塗られている。その他羨門から飾り縁にかけても赤く塗られた跡が残っている。

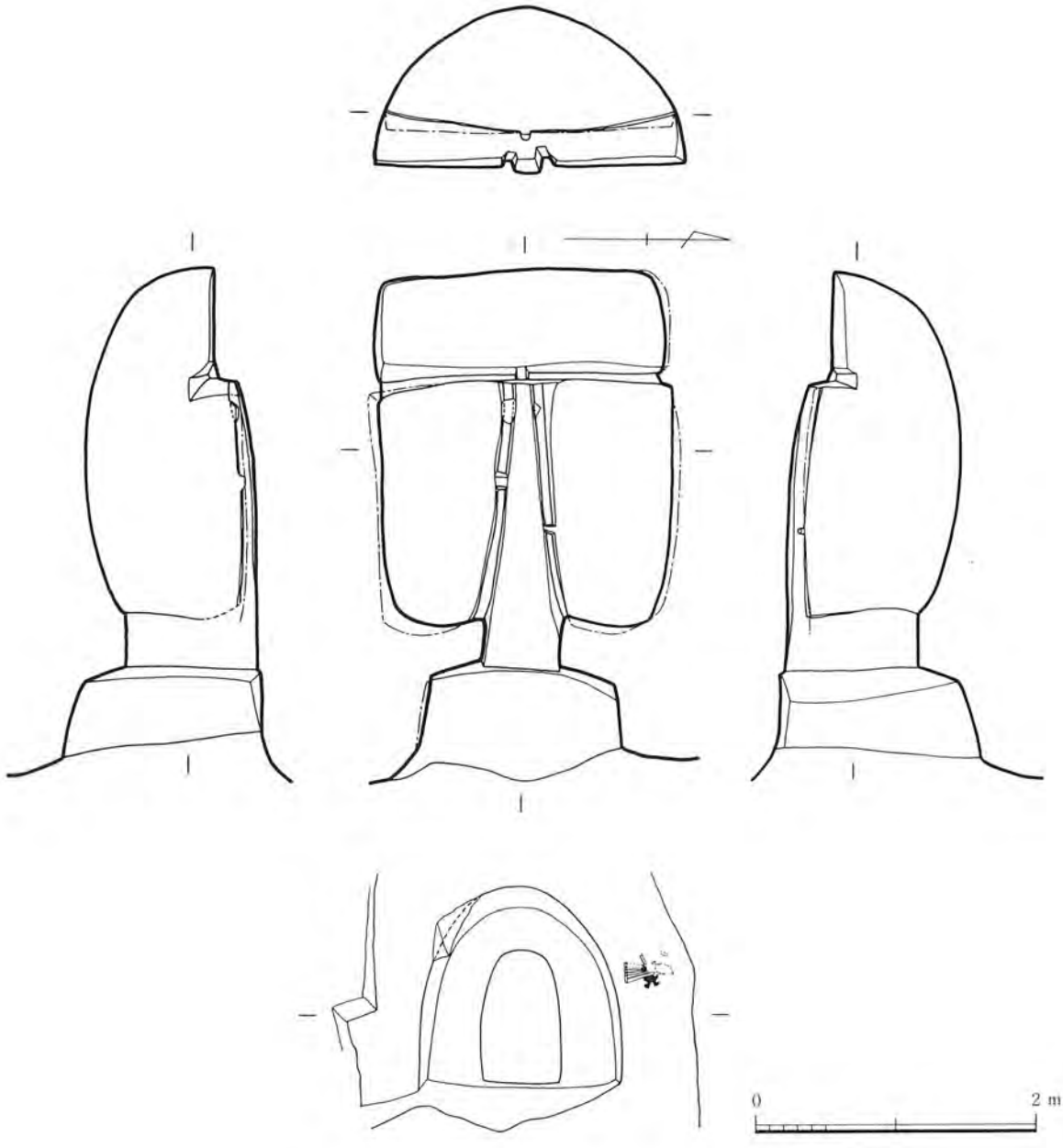
右外壁は崖が転落し，その岩の行方はわからないが，嘉永二年に矢野一貞がスケッチしたのを見ると横穴墓に近い方から靫・剣・人物が浮き彫りされていたことがわかる。人物は左外壁と似ているが，盾は脚をもたずやや形態が異なっている。

下林氏の配置図には27号の右に28号と29号があるが，これは自然の岩の裂け目の誤認とみられる。またそれよりも上方で小型の横穴墓が新たに発見されたのでここではこれを28号とした。

33号横穴墓　31a号から33号までの4基はまとまりを成している。うち31a号は下林氏の配置図にはなかった小型横穴墓である。33号は羨門がアーチ形で幅58cm，高さ94cmを測る。その外にアーチ形の飾り縁が付いており，幅146cm，高さ144cmを測る。羨門の前には3cm程段が付いている。羨門から約35cmで玄室に至る。玄室は「コ」字形屍床で，仕切りは細く，両端がわずかに上がっている。左右屍床よりも奥屍床は20cm程高い。平面プランは隅丸の長方形で，幅225cm，奥行き255cmを測る。天井はドーム形で，高さは120cmである。

装飾は外壁右側に浮き彫りで描かれている。風化のため上部から右側にかけて壊れているので全体が不明であるが，下方にあるのは開いた人物の足とみられ，その上には何かを持っているものとみられる。中央から左に向かって放射状にいくぶん開いた溝を切った浮き彫りがあり，端部は段

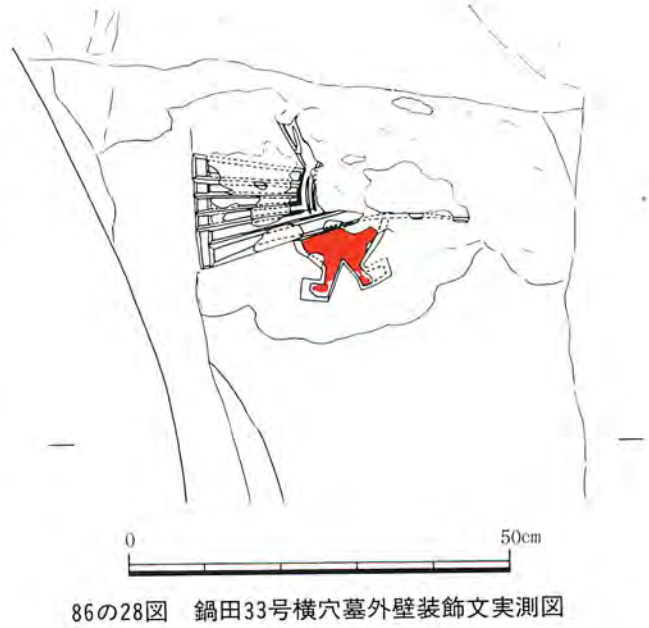
86の26図　鍋田横穴墓群装飾図
（矢野一貞『筑後将士軍談』より）



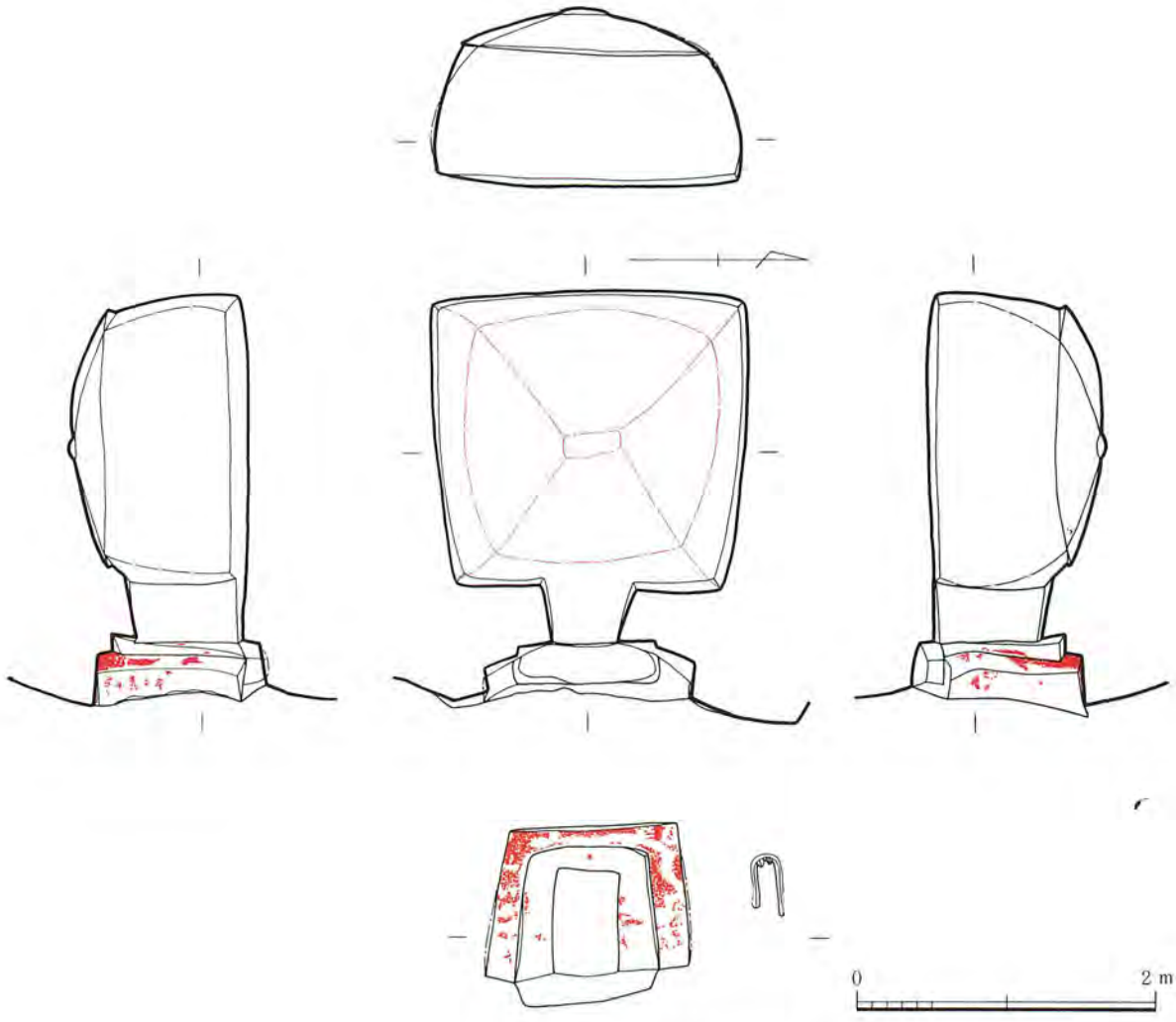
86の27図　鍋田33号横穴墓実測図

をつけて低くなっている。放射状の溝は中央部近くの途中で終わり，そこに弧状の溝を三条入れている。この右側の部分には平坦面がある。これを人物が持っている道具とすれば何であろうか。筆者は放射状の部分は弦を張った状態にも見えるので琴ではないかと考えている。すなわち人物が琴を抱いているのではなかろうか。なおこの人物の足の部分は赤く塗られている。

46号横穴墓　36号から46号までの10基は並んで造られているが，46号と47号はそれぞれやや離れて造られている。46号は羨道の外に二重の飾り縁をもっており，いずれも正面観は方形である。羨門は幅45cm，高さ70cmを測る。飾り縁のうち内側のものは幅95cm，高さ90cmで，外側のものは幅140cm，高さ100cmを測る。羨門の前には閉塞石を立てるための溝が掘られている。羨門から約40cmで玄室に至る。玄室の平面プランは方形で，仕切りはなく，幅215cm，奥行



86の28図　鍋田33号横穴墓外壁装飾文実測図



86の29図　鍋田46号横穴墓実測図

き195㎝を測る。天井は寄せ棟の家形で，平入りになっており，軒先は段差をつけ，棟は上方に抉って表現している。

装飾は右外壁にみられる。逆U字形にV字溝を彫り，上部2ヵ所に切れ込みを入れている。工具痕からみて横穴墓の時期のものと考えられるので，未完成の浮き彫りの装飾ではなかろうか。恐らく8号の外壁にみられた鏃を3本収めた靫と同様のものを彫るつもりではなかったろうか。なお羨門から飾り縁にかけては風化による剝落のため赤の彩色がまだらに残っているが，本来は全面に塗られていたものと考えられる。

49号横穴墓　48号から50号までの3基は1ヵ所に並んで造られている。このうち49号と50号に装飾がある。49号は羨門の正面観が長方形で，幅約50cm，高さ約80cmを測る。その外に二重の飾り縁が付いているようであるが，外側は風化が著しい。内側の飾り縁は幅約95cm，高さ約105㎝を測る。羨門から約30cmで玄室に至る。玄室のプランは方形で幅225cm，奥行250cmを測る。仕切りは後世に破壊されているが「コ」の字形屍床である。奥屍床に両端に2個ずつの造り付けの枕があり，左右の屍床には入口側にのみ2個ずつの枕がある。枕の形は奥屍床のは方形に抉っているが，左右屍床のは馬蹄形に抉っており，左屍床の枕のうち1つは抉っていない。天井は方形造の家形で，通路から頂部までの高さは135cmを測る。

装飾は左右壁と奥壁にみられ、細い線刻で施されている。奥壁の線刻は中央に奴凧形の靫を2個描き、その上に円文を2個並べている。左上には大小の円文6個を二段に並べその下には大きな連続三角文を施している。また奥壁の右端にも上下二段に大きな連続三角文を施している。また靫の左には大刀のようにも見える線刻があるが断定しがたい。右壁の線刻はその奥寄りの部分にのみみられ、上下二段に仕切り大きな連続三角文を並べている。左壁の装飾もやはり奥寄りの部分にのみみられ、上下に仕切り、その上段には円文2個、下段には大きな連続三角文を認めることができる。

全面を薄い赤で塗っていたのではないかとみられる。以上の他に右外壁に浮き彫り状のものが見えるが，筆者は風化により岩の硬い部分が残って浮き彫りに見えるものと考えている。

50号横穴墓　羨門は長方形で，幅65cm，高さ95cmを測る。その外に二重の方形の飾り縁が付く，内側の飾り縁は幅90cm，高さ120cmを測り，外側の飾り縁は幅170cm，高さ140cmを測る。羨門と内側の飾り縁のところで段がついている。

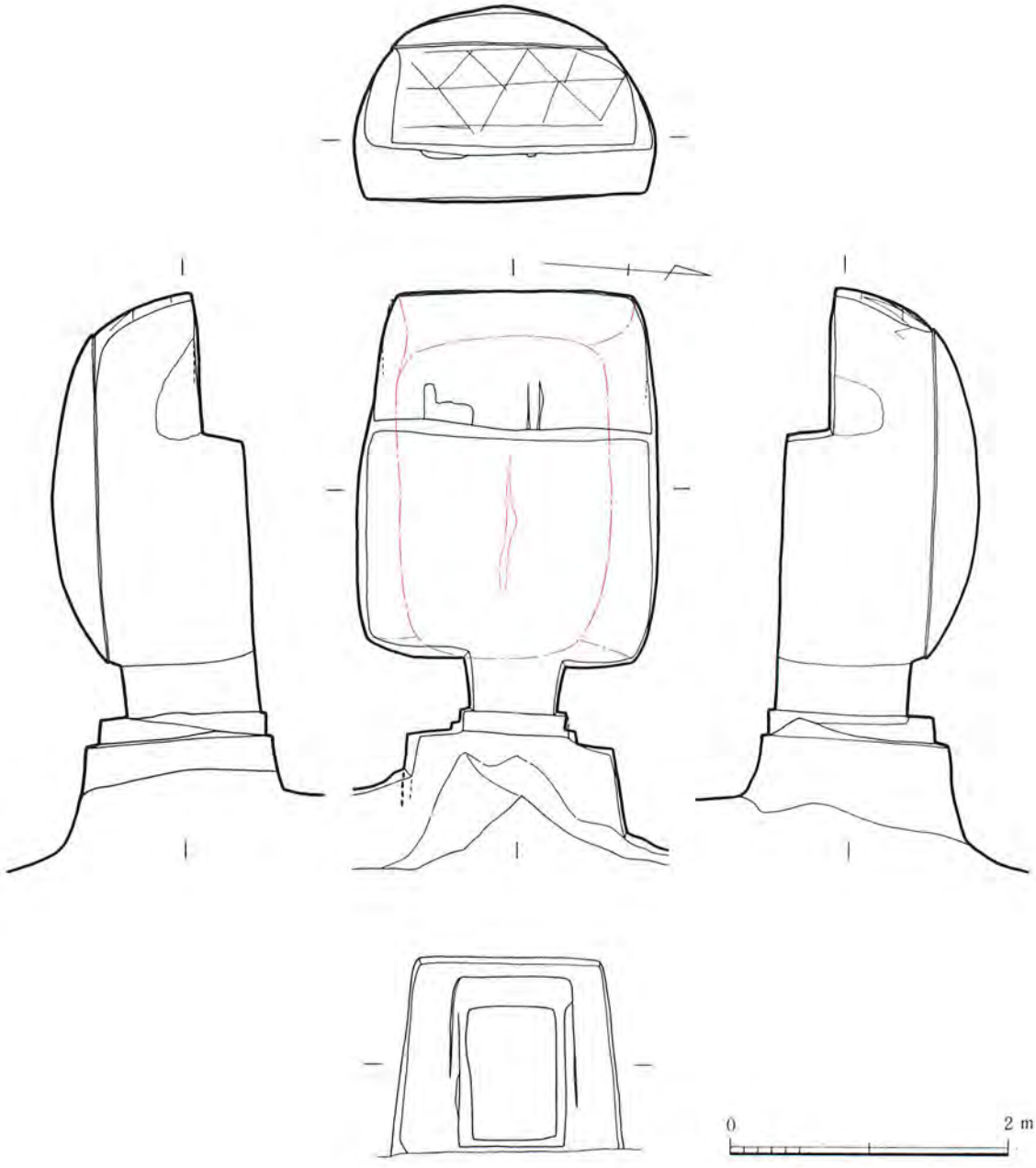
86の30図　鍋田49号横穴墓実測図

羨門から40cmで玄室に至る。玄室の平面プランはやや隅丸の長方形で幅220cm，奥行き265cmを測る。奥屍床は一段高く，仕切りは後世に削られている。天井は棟と軒先の表現もあるがドームに近い。高さは140cmを測る。

装飾は奥壁に線刻で施されている。横線を３本引いて，その間に二段に連続三角文を並べている。

52号横穴墓　51号から54号までの４基はまとまりをもって造られている。このうち52号と53号に装飾がある。なお54号の下方で新らしく横穴墓が確認されたのでこれを55号とした。52号は羨門の一部が壊れているが復元すると幅約65cmで，高さ100cmを測る長方形である。その外に方形の飾り縁が三重に付いている。内側から第１の飾り縁は幅108cm，高さ124cmを測る。第２の飾り縁は高さ150cm，幅128cmを測る。第３の飾り縁は風化のためはっきりしないが幅約180cm，高さ約170cmである。羨門の前には８cm程の段がある。羨門から玄室までは45cmである。玄室は「コ」字形屍床であるが，左右の仕切りは省略されており，入口側の部分にだけわずかに段差をつけている。また左屍床の入口側には２個の造り付け枕がある。奥屍床を除く部分は幅230cm，奥行き205cmを測る方形である。天井は寄せ棟の家形で，平入りになっており，高さは152cmを測る。奥屍床は壁面を長方形に抉り込んで造っており奥行き70cm，横幅215cmを測る。天井は平坦で高さ93cmである。玄室全体の奥行きは288cmを測る。

装飾は奥壁，奥屍床前面，左右の壁面に線刻で施されている。奥壁の装飾は大きな三角文が二段に並んでいるがそ

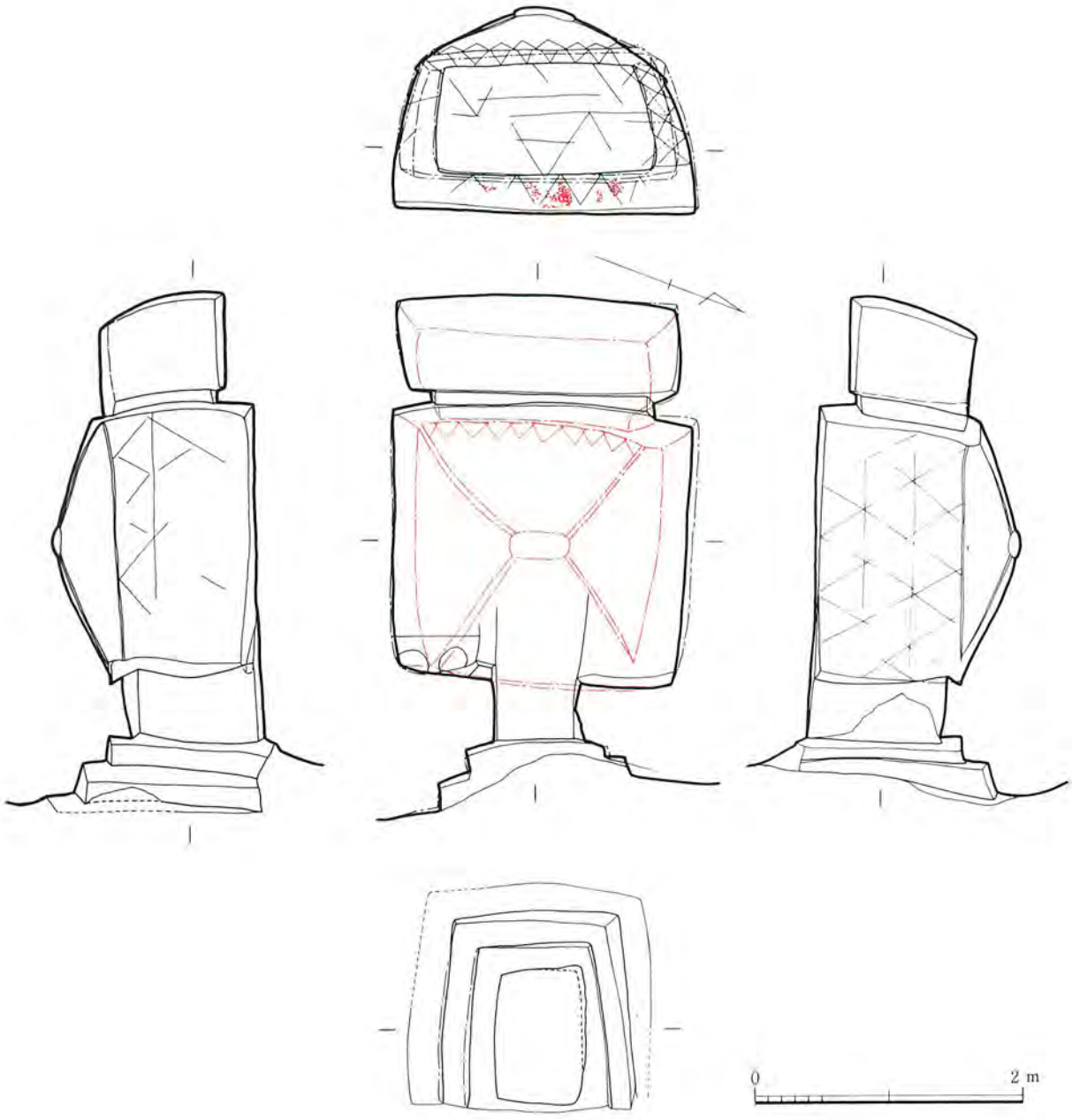


86の31図　鍋田50号横穴墓実測図

の間にも横線があるので本来は三段または四段に仕切られていたものと考えられる。奥屍床前面には下部に連続三角文を並べており，右側には直線文を交差させた菱形文を縦に並べており，左側も同じ文様があったものとみられる。またその上部には軒の上下に連続三角文を並べている。右壁は壁面に二本の横線を引いて三段に仕切り，その横線のところで交差するように左右からの斜線を入れて，連続三角文を三段に並べたようにしている。左壁は部分的にしか残っていないが，右壁と同じ文様が描かれていたことがわかる。これらの線刻文のうち奥屍床前面の下部の連続三角文には部分的に赤の彩色が残っている。

53号横穴墓　羨門の正面観は方形で幅70cm，高さ84cmを測る。その外に二重の方形の飾り縁がつくが右側が壊れている。復元すると内側の飾り縁は幅約110cm，高さ128cm，外側の飾り縁は幅約150cm，高さ140cmと推定される。羨門の前には20cm程段がついている。羨門から40cmで玄室に至る。玄室の屍床は「コ」字形配置で，奥屍床は壁面・天井とも独立している。奥屍床を除く部分は方形プランで，幅213cm，奥行き195cmを測る。左右屍床の仕切りは入口側は明瞭であるが奥の方では省略されている。天井は平入りの寄せ棟の家形に成っており，高さは130cmを測る。奥屍床は隅丸の長方形で，奥行き60cmで横幅190cmであり，天井は平坦で高さ66cmを測る。また玄室全体の奥行きは260cmである。奥屍床の仕切りは端の方から中央に向かって二段にくり込んでおり，ゴンドラ形の舟を意識して造ったものと思われる。

装飾は奥壁と奥屍床前面と左右の壁にみられる。奥壁の装飾は消えかかっているが復元すると壁の中央に横線を引き，その上下に線刻の連続三角文を並べている。奥屍床の前面にはその両側と上部にみられる。両側の線刻は上方に



86の32図　鍋田52号横穴墓実測図

Xを施しており，左側のみはその下に奴凧形の鞆を幅広の線刻で彫っている。上部には軒の上下に連続三角文の線刻を並べその上方に横線を引いている。左右の壁の装飾は横線を二条引いて壁面を三段に区切り，全面を連続三角文で埋めている。また右壁のみは軒の上に一列の連続三角文を施しており，その上端に一条の横線を引いている。

（高木正文）

〔参考文献〕

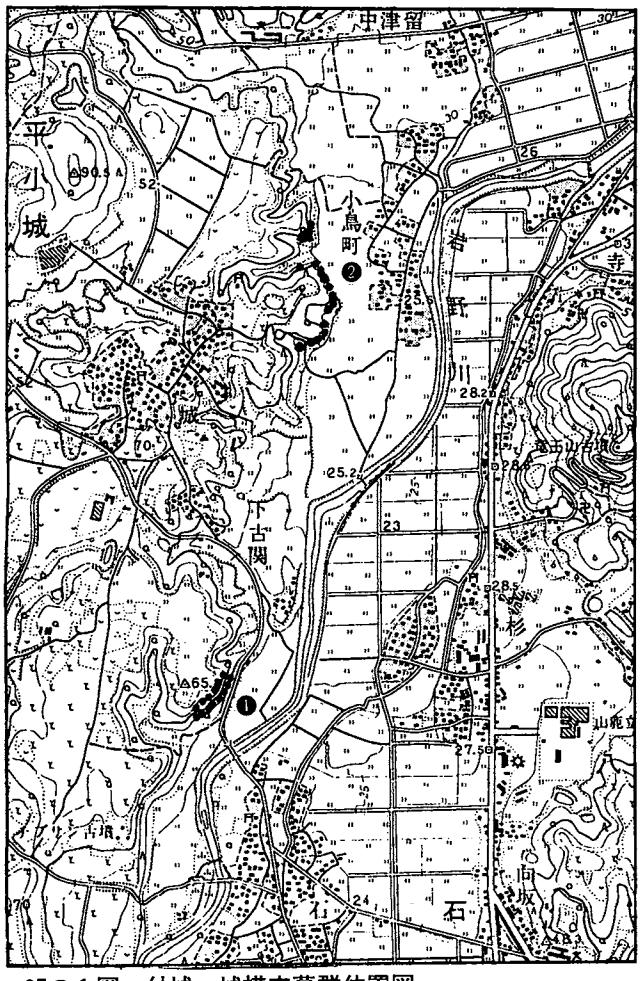
①矢野一貞『筑後将士軍談』嘉永６年（1853）
②下林繁夫「鍋田横穴」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』４　昭和２年（1927）
③『熊本県史蹟名勝天然記念物概要附国宝其他』熊本県　昭和12年（1937）
④乙益重隆『肥後上代文化史』（郷土文化叢書８）　日本談義社　昭和29年（1954）
⑤乙益重隆「装飾古墳」『熊本県の歴史』原田敏明監修　文画堂　昭和32年（1957）
⑥乙益重隆「熊本県の文化財」『郷土の文化財』13　宝文館　昭和35年（1960）
⑦原口長之「鍋田横穴群」『装飾古墳』小林行雄編　平凡社　昭和39年（1964）
⑧乙益重隆「鍋田横穴群」『日本原始美術５古墳壁画』斉藤忠編著　講談社　昭和40年（1965）
⑨日下八光『装飾古墳』朝日新聞社　昭和42年（1967）
⑩森貞次郎『装飾古墳』朝日新聞社　昭和47年（1972）
⑪斉藤忠『日本装飾古墳の研究』　講談社　昭和48年（1973）
⑫佐賀県立博物館『装飾古墳の壁画』　昭和48年（1973）
⑬乙益重隆『装飾古墳と文様』（古代史発掘８）　講談社　昭和49年（1974）
⑭原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会

86の33図　鍋田53号横穴墓実測図

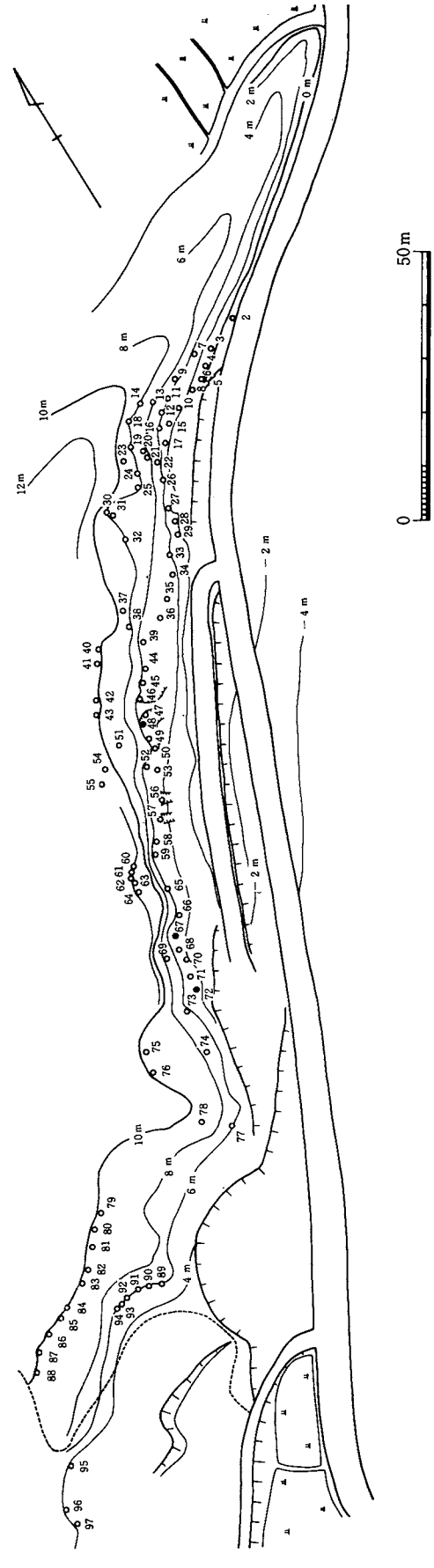
昭和49年（1974）
⑮原口長之編著『山鹿の文化財』山鹿市教育委員会　昭和50年（1975）
⑯坪井清足・町田章編『壁画石造物』（日本原始美術大系６）講談社　昭和52年（1977）
⑰松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑱『熊本県の文化財』３（史跡）熊本県教育委員会　昭和56年（1981）

87．付城（つけじろ）横穴墓群〔昭和49年県史跡〕（⇨87の1～6図）

——山鹿市城付城・小原——



87の1図　付城・城横穴墓群位置図
（山鹿2.5万分の1）　1付城　2城

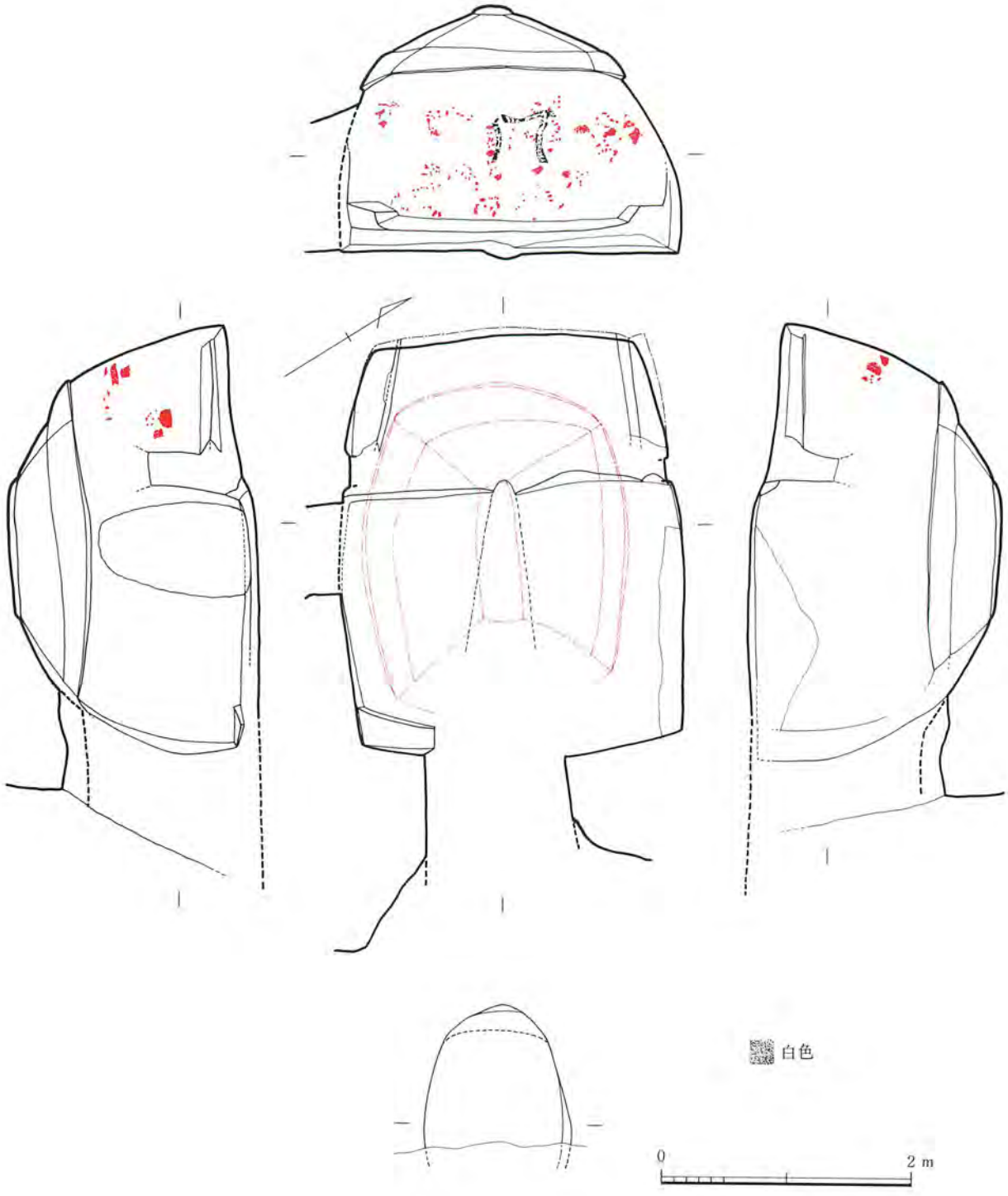


87の2図　付城横穴墓群配置図

立　地　菊池川支流岩野川を北へ2km程さかのぼった所の左側丘陵斜面に付城横穴墓群がある。鍋田横穴墓群はこの南1.5km，チブサン古墳とオブサン古墳は丘陵上の南西500mにある。横穴墓のある地点の地形は丘陵が東に向かって扇形に突き出ており，横穴墓の造られている凝灰岩の質はやや軟弱である。

分布と概要　近くの鍋田横穴墓群や城横穴墓群が崖面にほぼ一段に並んで造られているのに対して，付城横穴墓群は斜面に数段に渡って造られている。これは凝灰岩質と地形に関係するものである。横穴墓群の範囲は250mに及んでおり，上下には5，6段に造られている所もある。現在96基確認できたが，埋もれているものが多く，また岩石採取などで破壊されたものや埋没のため未確認のものを含めると200基を超える横穴墓群と考えられる。開口した横穴墓を見ると割合大型が多く，風化も激しいが，北から番号をつけて48号，67号，72号には装飾文が確認される。また71号は複室構造の横穴墓である。

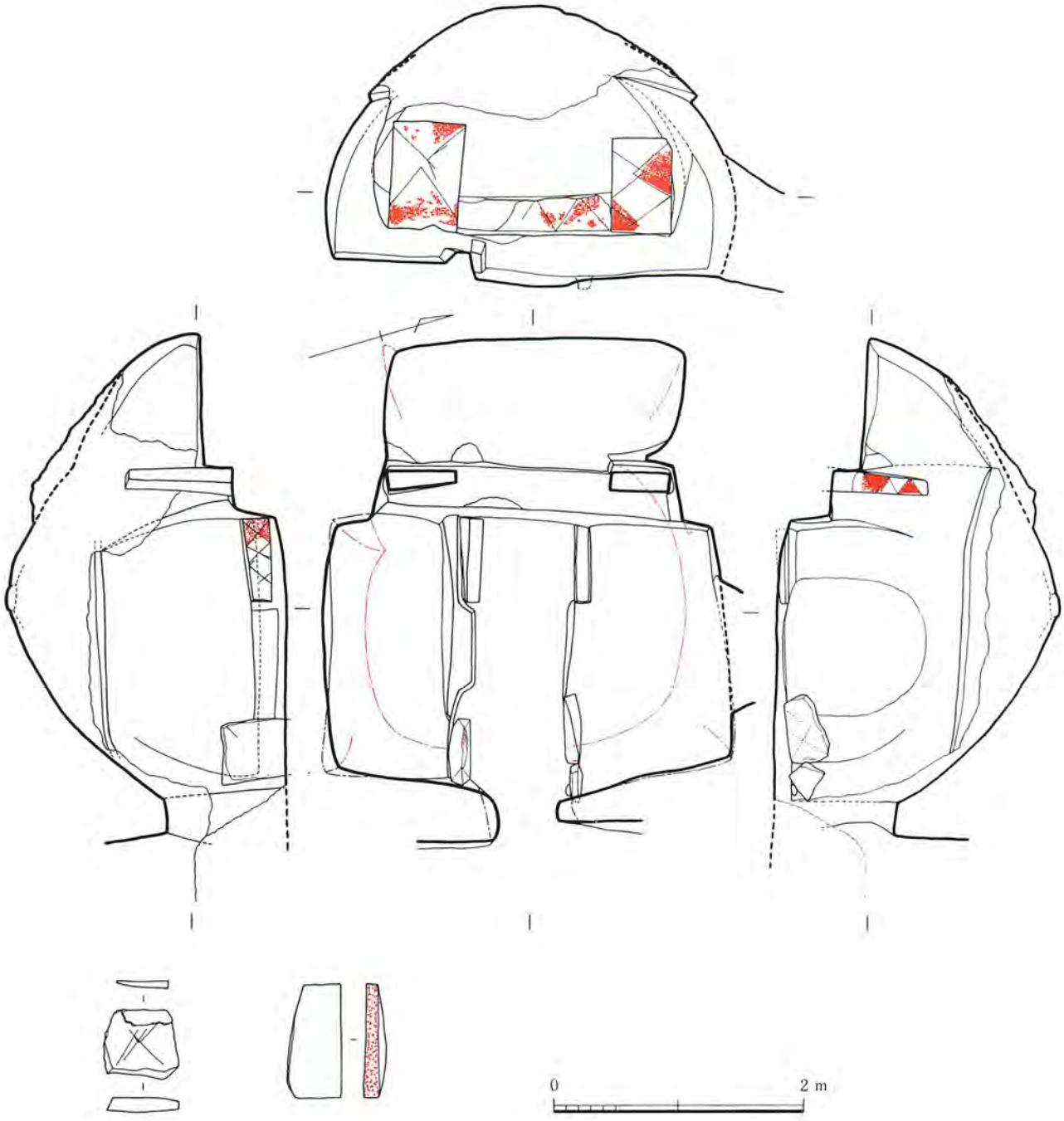
48号横穴墓（旧21号横穴墓）　横穴墓群の中央からやや北に寄った地点にある横穴墓で，現在最下段にあるが，さらに下方に横穴墓が埋もれている可能性もある。風化のため



87の3図　付城48号横穴墓実測図

羨門部の形状と大きさは不明である。玄室の平面プランは奥に長い長方形で，屍床は「コ」の字形に配置されている。各屍床の仕切りは壊されているが，奥屍床の仕切りはゴンドラ形に両端が跳ね上がっていた痕跡が認められる。また奥屍床の両端には造り付けの枕がある。右側屍床は平坦であるが，左側屍床の入口側にも造り付けの枕がみられる。玄室の幅は275cm，奥行きは335cm，高さは200cmを測る大型の横穴墓である。天井は妻入り寄せ棟の家形で，棟は上方に抉っている。軒の部分の表現が特異で軒の上に幅約30cmの外側に抉った帯がめぐっており，屋根に庇をつけたような感じである。

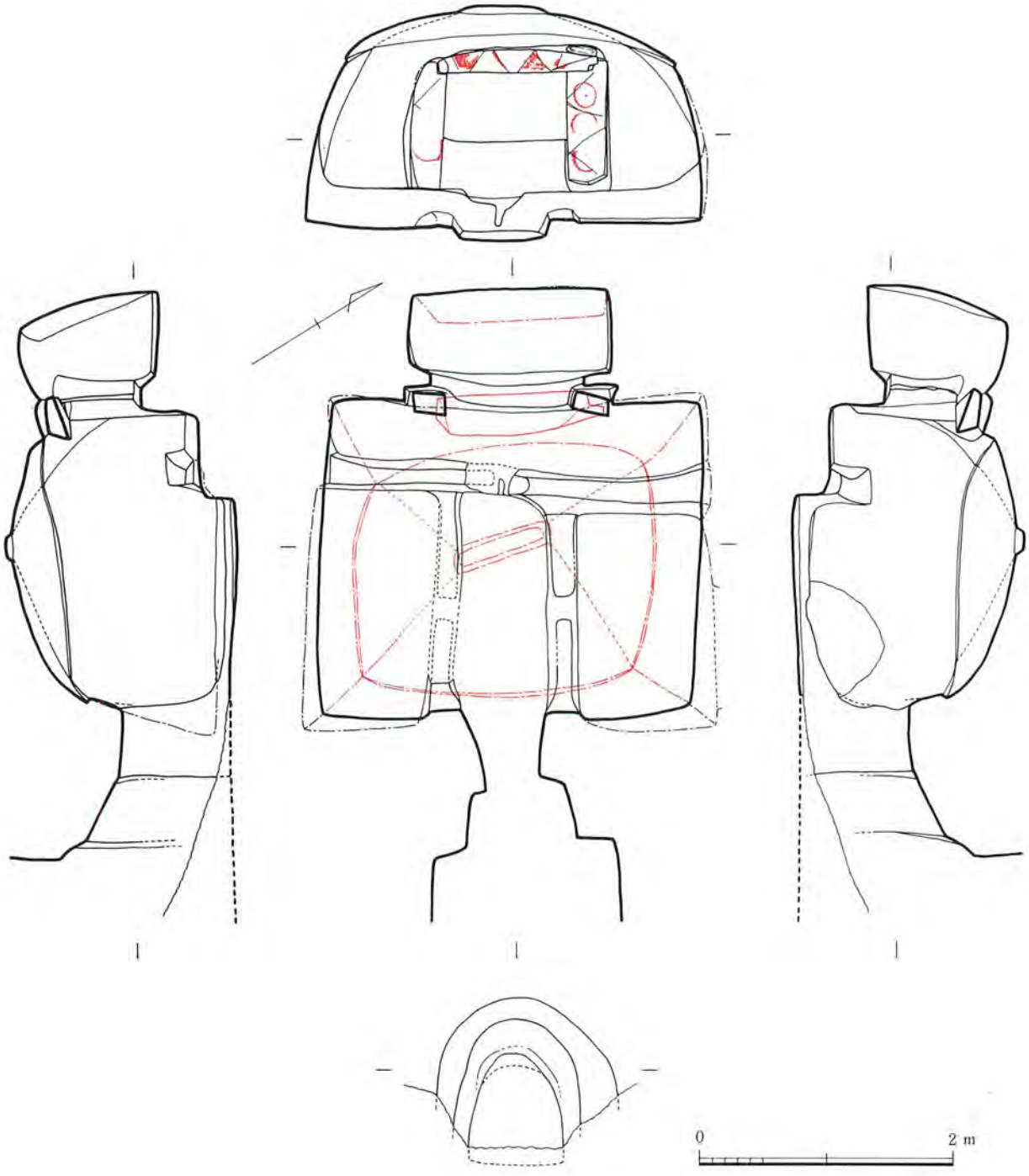
奥壁と左右壁の奥屍床部分に赤色顔料が点々と残っており，もとは奥屍床の壁面全体が赤く塗られていたと考えられる。奥壁中央部には白色の図文がみられる。一見「M」字形に見えるが，左右の線は中程がくびれている。また右上端には尻尾のようなものも付いているので横向きの馬を簡略化して描いているようでもあるが判断が難しい。隈昭志氏は盾である可能性もあると見ておられる。なお白色の



87の 4 図　付城67号横穴墓実測図

顔料は白粘土であろうか。

67号横穴墓（旧28号横穴墓）　横穴墓群のほぼ中央部にあり，この付近で確認されるものでは最下段の列にある。羨門は風化で崩れ，入口付近はまだ埋もれたままであるが，羨門は幅70cm，高さ90cm程度であったと考えられる。玄室は広く，幅330cm，奥行き360cm，高さ220cmを測る。本横穴墓の特徴は凝灰岩を抉る以外に外部から硬質の凝灰岩切石や割石を持ち込んで横穴墓を構築していることである。左右の仕切りは各々入口側と奥の部分を抉っており，ここに持ち込んだ石材を立てて仕切りとしている。これらの石材は凝灰岩の割石を用いており各々に装飾がある。左屍床の仕切り石は当時のままであるが，右屍床奥の仕切りは抜かれており，68号横穴墓の入口付近に落ちていた線刻文のある石材が，もとここに設置されていたのではないかと考えられる。また右屍床入口側の仕切り石は近年動いていたものを立てたものであるが，表裏をまちがえて復元している。奥屍床は左右屍床よりも60cm程高く，独立に抉って造られている。奥屍床面の大きさは奥行き100cmで，横幅245cmを測る。奥屍床前面には仕切りはなく，逆に幅30cmのステップがあり，その両端に袖石状に凝灰岩切石を立てている。この切石は厚さ約15cmで，いずれも根元をはめ込んでいるが，地上部の大きさは右が幅48cm，縦75cm，左が幅58



87の5図　付城72号横穴墓実測図

cm，縦85cmを測り，いずれも装飾が施されている。これらの切石の上部には恐らく石屋形状に切石が渡されていたものと考えられる。天井は剝落が激しいが奥屍床を除いた部分の天井は寄せ棟で平入りの家形で，全体的に丸みを帯びている。

装飾は奥屍床の左右の袖石状の石材と，その間の奥屍床の下前面，および左右の仕切りの割石石材にみられる。奥屍床左の袖石状石材にはその前面に上からと下から線刻で三角を描き，その三角部分を赤く塗っている。右の袖石状石材には前面と側面に装飾がある。前面には両側から頂部が重なるような三角形を線刻し，その右側のものを赤く塗り，その下に各三角の下端から内側に斜線を引き，その左下部分を赤く塗っている。この側面には縦に連線三角文（鋸歯文）を線刻し，うち二つの三角形を赤く塗っている。奥屍床の下前面の装飾は両側の袖石状切石に挟まれた部分に施されている。左側が一部崩れているが，三つの三角文が並んで線刻されていたと考えられ，線刻とは無関係に赤が塗られている。

左屍床仕切りのうち入口側の石材は縦長の割石で，頂部に赤が認められ，通路側に一本の斜線が見られる。また奥の仕切りは横長で，通路側にX字状に交差する連続三角文を線刻し，奥の一部を赤く塗っている。右屍床仕切りのう

ち入口側の石材は近年２個の石材を復元設置してあるが，その大きい石材の側方が赤く塗られ，屍床側にＸ字と斜めの線刻がある。本来は赤く塗られた部分が上で線刻のある面が羨門側に向いていたのではないかと考えられる。右屍床奥の仕切りはなくなっているが，先述のごとく68号横穴墓入口付近に落ちていた石材がそれではないかと考えられる。この石材は風化のため線刻が消えかかっているが，Ｘ字状を主文様とする線刻がみられる。このほか68号横穴墓の入口付近には一側を赤く塗った石材も落ちており，67号以外（68号か？）にも石材を持ち込んだ横穴が埋もれているものと考えられる。

72号横穴墓（旧32号横穴墓）　67号と同列にあり，左に４つ目の横穴墓である。この横穴墓も67号のように一部を持ち込んだ石材で築いている。羨門はアーチ形で，上部が一部崩れ，下部は埋まっているが，幅約70cm，高さ約80cm程度と考えられる。羨門の外にアーチ形の二重の飾り縁がついているが風化と埋没のため規模ははっきりしない。現在確認できる羨道の長さは100cm程度で，羨門から玄室までは60cmを測る。玄室のうち奥屍床を除いた部分はやや横長の方形で，幅330cm，奥行き260cm，高さ180cmを測る。屍床の配置が特異で，奥屍床を除いた部分だけで「コ」の字形に配されている。混乱を避けるため奥屍床の前の屍床を仮に中屍床と呼ぶことにする。各屍床は仕切りで区画され，中屍床は左右屍床よりも20cm程高く造られており，３屍床とも仕切りの中央部に排水の切れ込みがある。中屍床は非常に細長で，幅は広い所で60cm，狭い所で40cmを測り，長さは300cmもある。天井はやや崩れているが，平入り寄せ棟の家形で，棟は上方に抉り，軒先は段差をつけて表現している。奥屍床は中屍床の上の壁の中央部を抉り込んで造っており屍床面は中屍床よりも30cm程高い。屍床の前に仕切りを造り，その両側に石材をはめ込み，その石材の上部に他の石材を渡して石屋形を造っている。石材の重なる所には切り欠きを入れてはめ込んであり，右上の岩面との透き間には河石を詰めて固定してある。奥屍床の仕切りには排水の切れ込みはない。奥屍床の広さは奥への幅65cm，横への長さ160cmで，天井までの高さは110cmを測る。

装飾は奥屍床の石材の正面にみられ，右側の袖石状石材には右から二つの連線三角文を線刻し，それに重ねて，線刻とは無関係に赤い円文を縦に３個並べている。左側の袖石状石材にも同様な文様が描かれていたらしく，上方に三角文の線刻の一部，下方に赤い円文の一部が残っている。上方に渡した石材には上方からの三角文を三つ並べ，三角形を赤で色別けしている。また固定するため詰めた河石も一部赤く塗られている。

この横穴墓群の67号と72号で石材を持ち込んで玄室の一部を構築していることを確認できたが，これは単に軟弱な岩盤であるので石材で補ったのではなく，装飾を施すためにその箇所に硬質の石材を使ったと考えるべきではなかろうか。　（高木正文）

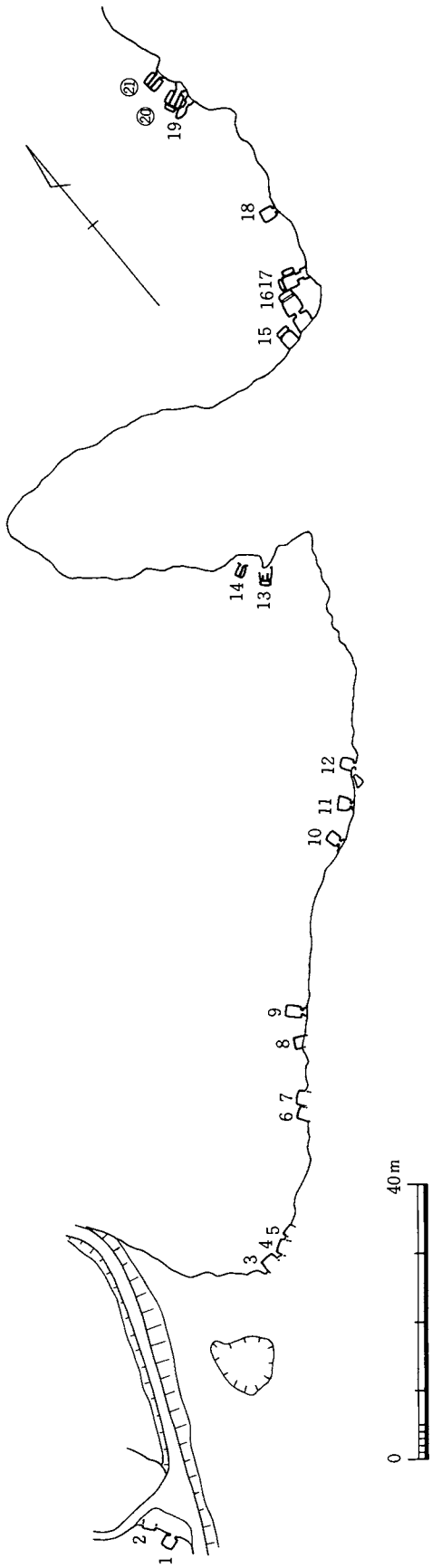
出土遺物　明治44年に横穴群のすぐ南側に県道が建設されたときに，多量の須恵器が出土したので，旧制鹿本中学（現熊本県立鹿本高等学校）および熊本市立博物館に保管されていたが，鹿本中学の遺物は昭和24年，同校の火災のため大半が不明となった。第二次大戦中の防空壕への転用の際やその後において採取した遺物は，県立山鹿高等学校（現鹿本高等学校）と山鹿市立山鹿中学に保管されている。その多くは須恵器で，ほかに少数の土師片と金環１個がある。ことに，昭和40年に採石のためにブルドーザが入ったとき前庭部周辺から多量の須恵器が発見され，山鹿市立八幡小学校や平小城小学校の生徒が採集し，一部は山鹿高等学校に保管されたが，中には完形品もかなりあった。大体の時期は須恵のⅢ期が主体である。ただ，残念なことに横穴内から検出したものが少ないため，横穴の形式と須恵の時期の的確な判断ができない。　（隈　昭志）

87の６図　付城72号横穴墓奥屍床（白石　巌撮影）

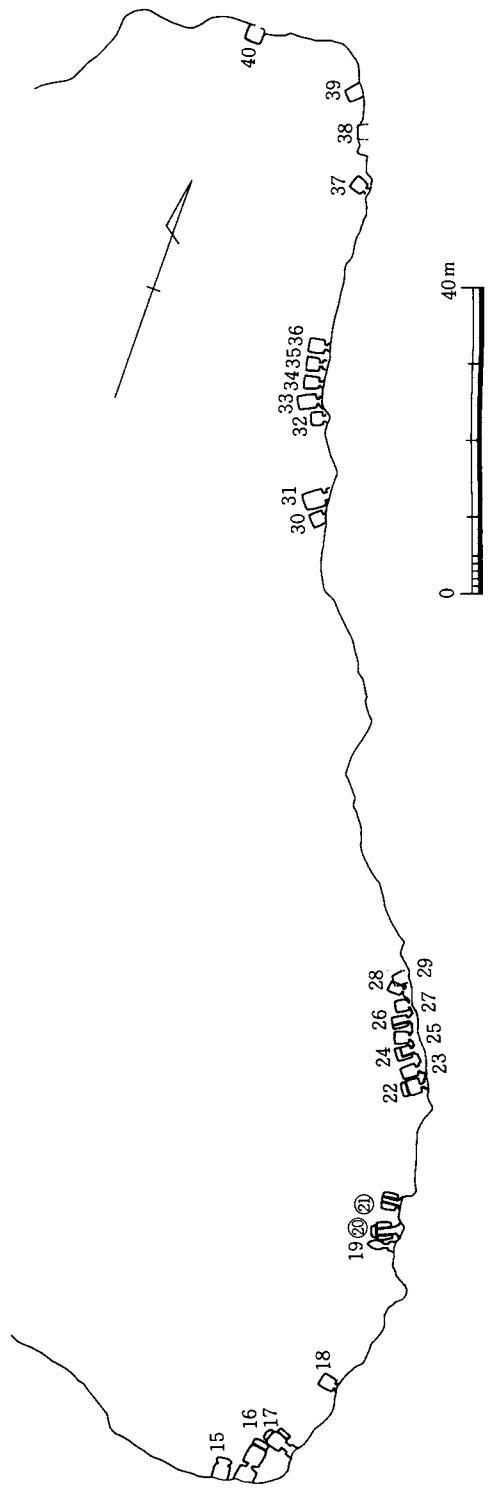
〔参考文献〕

①丸山武水「付城横穴前庭部より土器出土」『チブサン』３　昭和40年（1965）
②隈昭志「付城横穴群」『チブサン』９　昭和42年（1967）
③斉藤忠『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1973）
④原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
⑤原口長之編著『山鹿市の文化財』山鹿市教育委員会　昭和50年（1975）
⑥隈昭志「付城横穴群」松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑦隈昭志「付城横穴群」『五ッ穴横穴群』熊本県文化財調査報告34　昭和54年（1979）
⑧『熊本県の文化財』３（史跡）　熊本県教育委員会　昭和56年（1981）
⑨松本健郎・勢田広行「肥後の須恵器㈠」『九州考古学』56　九州考古学会　昭和57年（1982）

88. 城横穴墓群〔昭和34年県史跡〕(⇨87の1図，88の1～7図)



88の1図　城横穴墓群配置図(1)



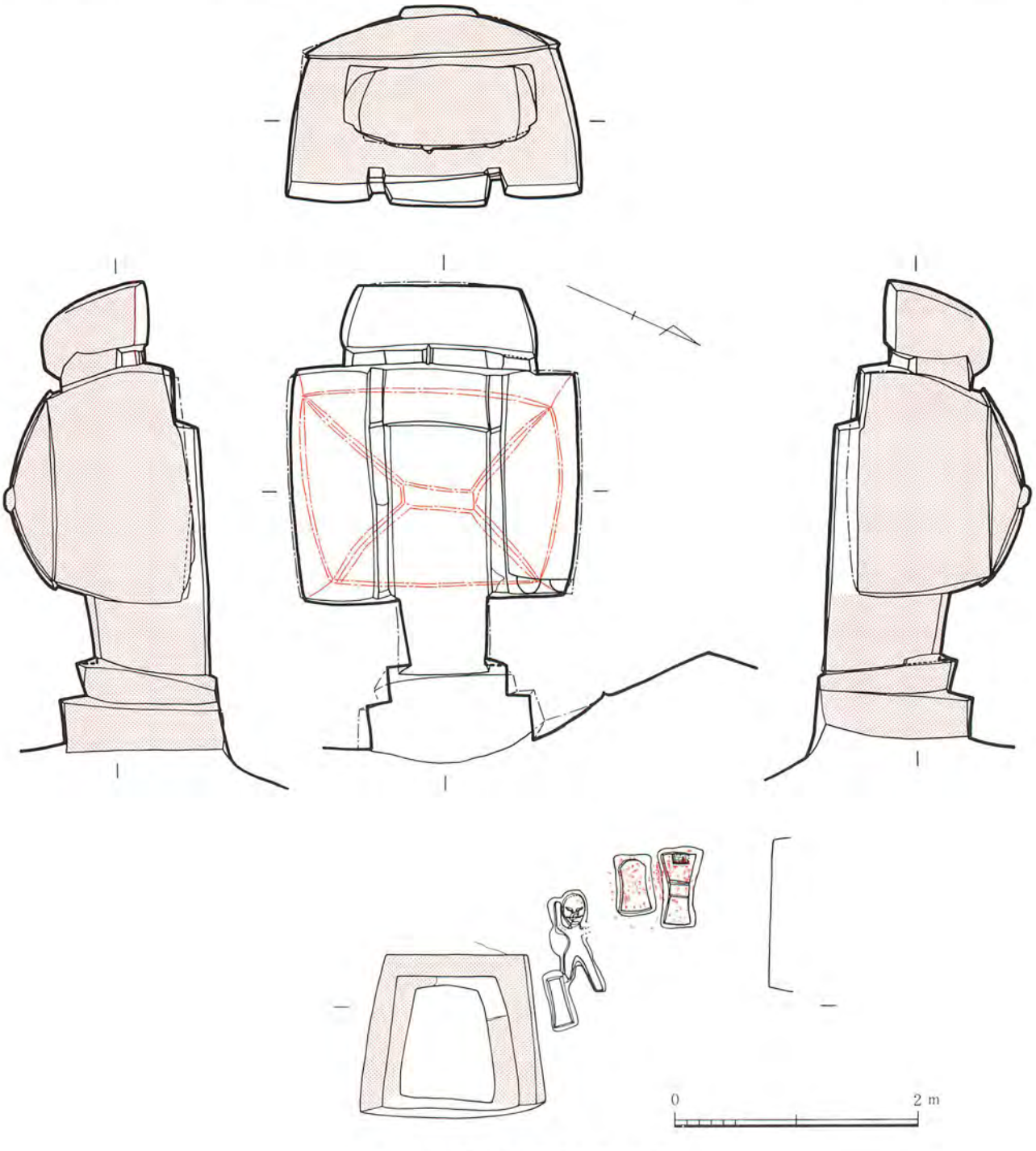
88の2図　城横穴墓群配置図(2)

88の3図　城横穴墓群配置図(3)

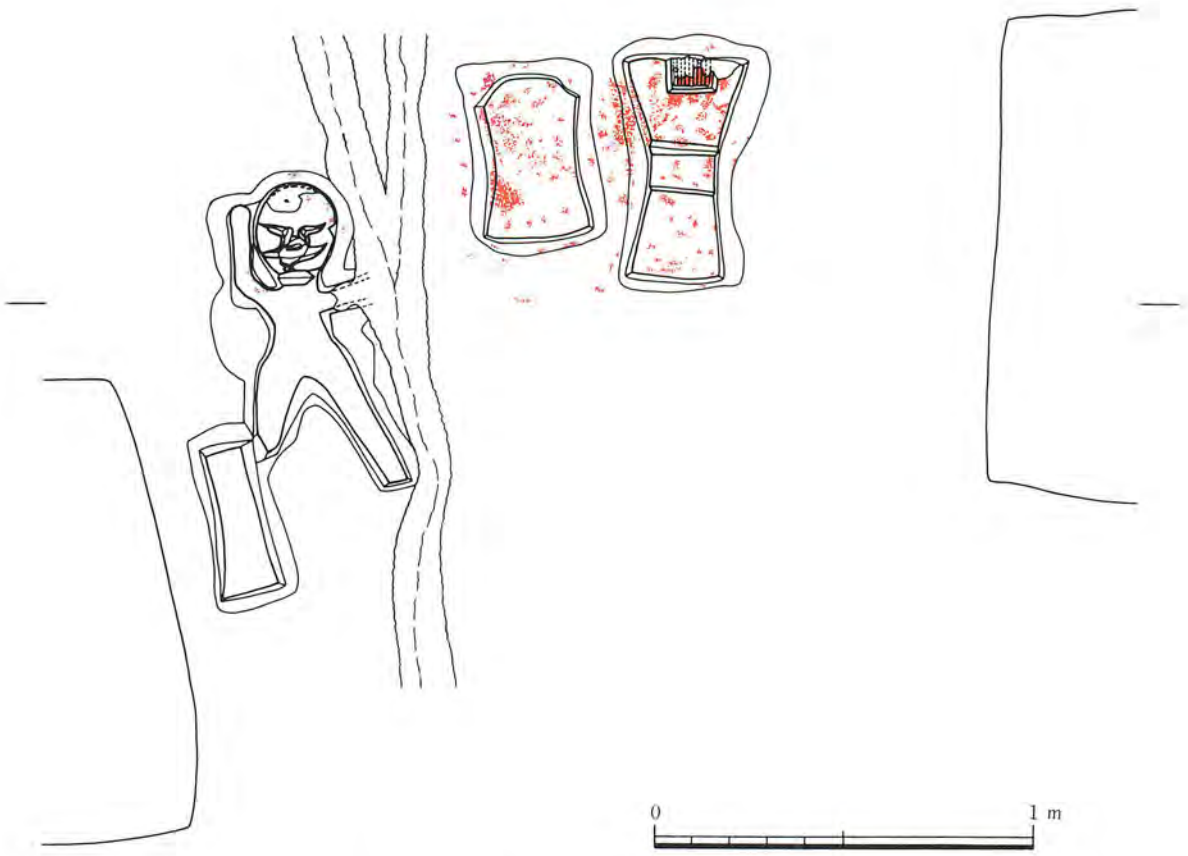
立　地　山鹿市の西を菊池川支流岩野川が南流し，この川に沿った丘陵の東面には凝灰岩崖面が形成されている。この崖面の数ヵ所に大規模な横穴墓群が造られており，その１つが城横穴墓群である。付城横穴墓群からは北に1300mほどのところに位置し，近くには装飾古墳馬塚古墳（円墳・横穴式石室）がある。また横穴墓群のある崖の上部の丘陵には城村城跡がある。

分布と概要　横穴墓は500m の範囲に46基が造られている。右（南）から番号をつける。配置の状態から10数群に分けることができる。横穴の構造は様々で，「コ」字形や平担な屍床のほかに左右にのみ屍床をもつものやL 字形の屍床をもつ横穴などがあり，入口が壊れているが16号横穴墓は複室である。造り付けの枕をもつ横穴墓もある。また19号横穴墓は玄室を造りかけて途中でやめている。装飾は20号右外壁から21号の左外壁にかけてにみられるだけであるが構造の立派な横穴や内壁が赤く塗られた横穴もあることから本来はさらに多くの装飾があったものと推定される。

20号横穴墓　（旧６号横穴墓）　19号から21号までの３基は並んで造られている。20号は羨門・飾り縁とも方形で，羨門は幅78cm，高さ92cmを測る。飾り縁は二重に付いており，内側は幅114cm，高さ107cmで，外側は幅154cm，高さ135cmを測る。羨門の前には５cm段がついている。羨門か



88の４図　城20号横穴墓実測図



88の5図　城20号と21号横穴墓の間の外壁装飾文実測図

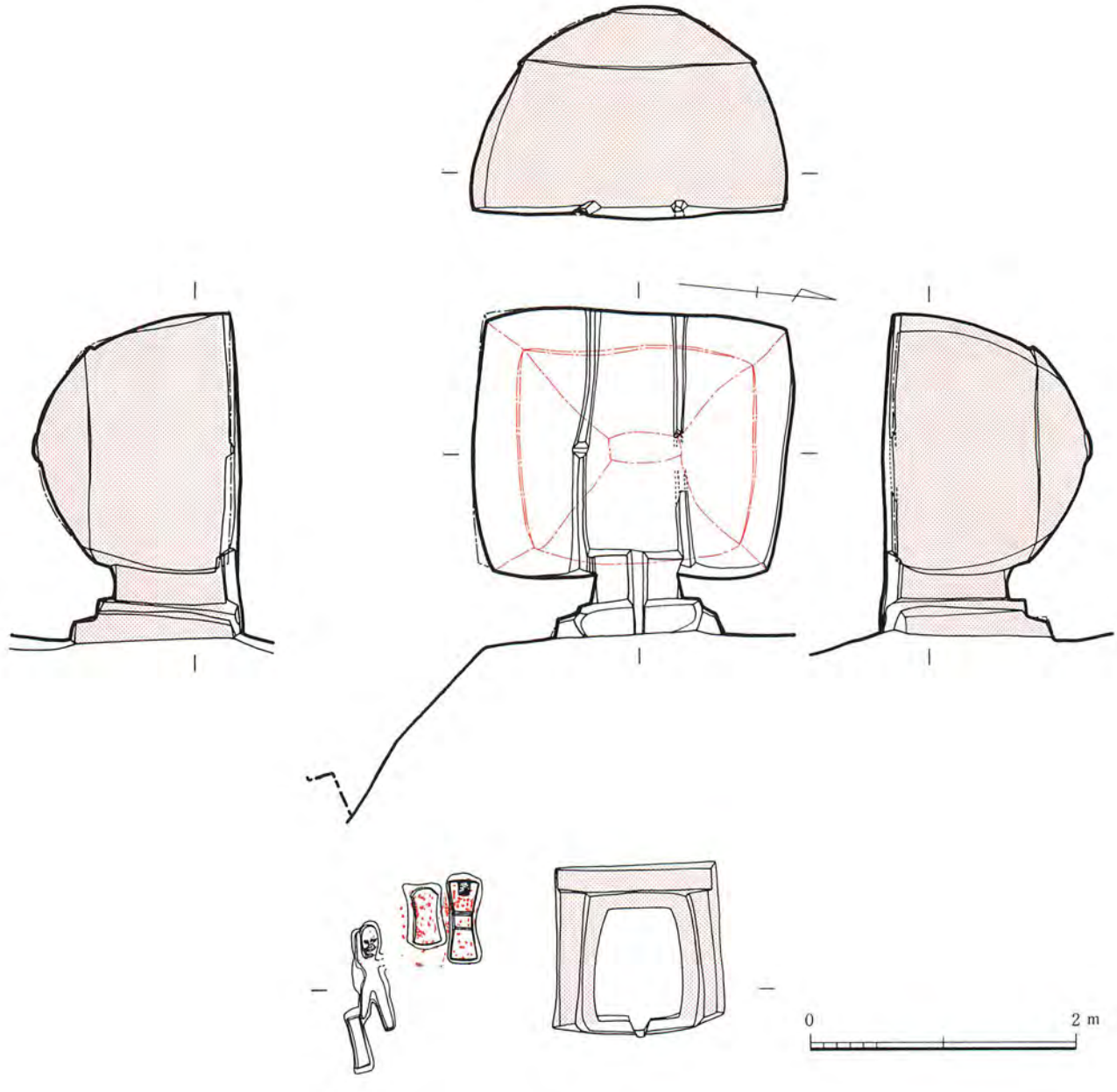
ら65cmで玄室に至る。玄室内は通路が幅広く，その奥にはステップが造られている。奥屍床は壁，天井とも独立している。奥屍床を除く部分は幅245cm，奥行き193cmを測る横長の長方形プランで，天井は平入り寄せ棟の家形で，高さ162cmを測る。軒先は段差をつけ，棟は上方に抉っており，隅棟はV字形に抉って表現している。奥屍床は横幅162cm，奥行き54cmで，天井はドームで高さ86cmを測る。奥屍床前部の仕切りは両側に二段の抉りが造られている。なお玄室全体の奥行きは260cmである。

装飾は右外壁に人物1，盾2，靱1が浮き彫りされているが，21号との間にあり，配置の状態から両方の横穴墓の共有の装飾と考えられる。ここでは都合上20号に近い人物と盾1を20号のものとみて説明したい。盾は横穴墓のすぐ右側に彫られており，単純な長方形であるが上辺が下辺よりも短かい。大きさは幅18cm，高さ40cmを測る。人物は盾の右上に彫られており風化のため輪郭が不明瞭であるが顔は丸く，口は大きく裂け，目はつり上がっている。左腕は欠損しているが右腕を上げ，両足は開いている。顔の付近には赤の彩色の痕跡が認められる。人物の大きさは高さ約80cmである。なお，20号横穴墓は玄室壁面から外側の飾り縁の内面まで全面が赤く塗られている。

21号横穴墓（旧7号横穴墓）　羨門は長方形で，幅68cm，高さ85cmを測る。飾り縁は方形で二重に付いており，内側の飾り縁は上方と両側では面が異なっている。内側の飾り縁は幅98cm，高さ108cmを測り，外側の飾り縁は幅132cm，高さ127cmを測る。羨門の前の下部両端には閉塞石を安定させるための抉り込みがみられる。羨門から玄室までの間は約40cmで，この部分のみは内外よりも10cm程高くなっており，中央部を排水溝が通っている。玄室はやや横に長い長方形プランで，左右にのみ屍床がある。20号と比較すると奥屍床が省略された形である。天井は平入り寄せ棟の家形を成している。玄室の規模は幅240cm，奥行き200cmで，高さは156cmを測る。

20号と同様，玄室内壁から外側の羨門の内面までは全面赤く塗られている。浮き彫りは21号から見ると左外壁にあたる位置に彫られている。右側の靱と盾を21号に伴うもの

88の6図　城20号・21号横穴墓外観（白石　巌撮影）



88の7図　城21号横穴墓実測図

としてここで述べたい。靱は21号から70cm程離れた所に彫られており，長方形の中程がくびれた形で，上方の凹字状の部分に9本の鏃を収めている。中程よりやや上に一条の横溝を入れ，その下をへ字形に削って段をつけている。大きさは幅34cm，高さ60cmを測る。靱のすぐ左に並んで盾が彫られている。盾は上部が丸みをもち肩部が張り，胴部がややくびれた形をしており，幅30cm，高さ44cmを測る。この靱，盾とも風化が激しいが，全面に赤の彩色が残っている。なお，この盾から30cm離れた所に人物が彫られている。

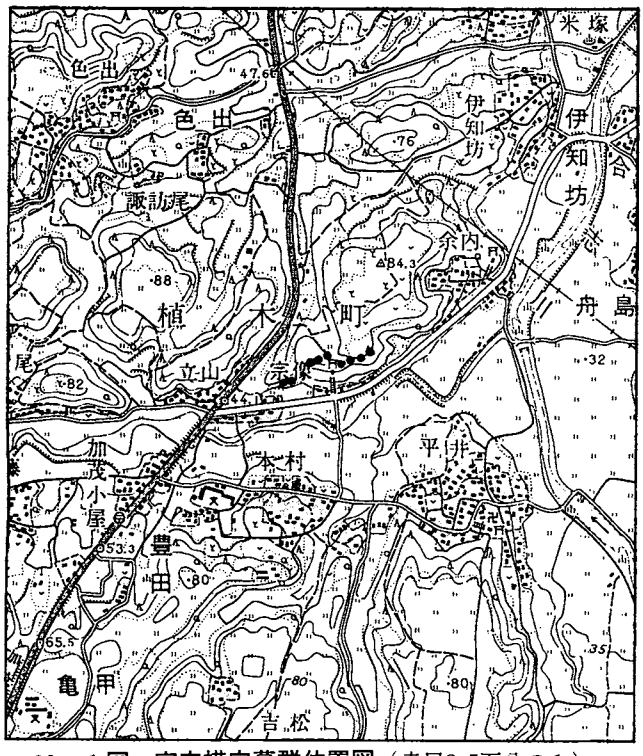
（高木正文）

〔参考文献〕

①原口長之「城横穴群」斉藤忠編『日本原始美術5古墳壁画』講談社　昭和40年（1965）
②日下八光『装飾古墳』朝日新聞社　昭和42年（1967）
③「城横穴古墳群」『チブサン』8　山鹿高校考古学部　昭和44年（1969）
④斉藤忠『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1973）
⑤原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
⑥原口長之編著『山鹿の文化財』山鹿市教育委員会　昭和50年（1975）
⑦桑原憲彰「城横穴群」松本雅明編著　白石巌写真『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑧『熊本県の文化財』　（史跡）　熊本県教育委員会　昭和56年（1981）

89．宮穴横穴墓群（⇨89の１～４図）

——鹿本郡植木町豊田宗像——



89の１図　宮穴横穴墓群位置図（来民2.5万分の１）

立　地　菊池川支流合志川のさらに支流の豊田川北岸の丘陵の斜面にはやや軟質の凝灰岩の露出した斜面が続き，そこに多くの横穴墓が造られている。下流（東）から順に余内の横穴墓群，宮穴横穴墓群，乗越横穴墓群，今藤横穴墓群と並んでおり，各群とも埋もれているものが多く正確な基数は不明である。宮穴横穴墓群の直上には円墳の豊田古墳（主体部不明）がある。

分布と概要　宮穴横穴墓群は宗像集落の上方の加茂神社を中心として約300ｍの範囲に造られている。大部分は埋没しているとみられ，所々の崖に露出した状態から数段に渡って造られていると考えられ，総数は数百になるものと推定される。このうち加茂神社の周辺にある２基の横穴墓に特異な凸起が造られている。装飾文を施すものではないが彫刻をもつ横穴墓ということで参考のためここで紹介しておきたい。加茂神社の敷地からその左側に並ぶ一群の横穴墓群は最上段の一つのまとまりとしてとらえることができる。ここには総数24基が確認できる。東から番号をつけると17号と22号に特異な凸起の彫刻がある。この群は割合大型で，「コ」の字形屍床を成すものが多く，墓道も長く，いくつも飾り縁が付いている。22号には閉塞石が残っており，神社の拝殿の上り段にも閉塞石が再利用されている。

17号横穴墓　羨道が長く約250㎝を測る。羨門はアーチ形で幅79cm，高さ100㎝を測る。その外に四重の飾り縁が付いている。いずれもアーチ形で，内側から第１の飾り縁は羨門のすぐ外に付き，幅135cm，高さ122cmを測る。第２～第４の飾り縁はほぼ80cm間隔につき，入口側に埋もれているが，いずれもほぼ幅180cmで高さ150cmである。なお第１の飾り縁がやや台形に近いのは閉塞石を立てかけるためであろうと考えられる。羨門から90cmで玄室に至る。玄室の平面プランはほぼ方形で，屍床は「コ」字形に配置されている。天井は寄せ棟で妻入りの家形である。玄室の規模は幅322cm，奥行き326cm，高さ186cmを測る。

奥屍床の仕切りが左右の屍床の仕切りと接するところの２ヵ所に円錐台形の浮き彫りの彫刻がある。底面径約40cmで，上面径約26cmであるが，左側はこれよりやや小さい。高さ約15cmで，上面の中央には径13cm，深さ５cm程の凹みがある。鹿本郡鹿央町岩原１－14号横穴墓にある「櫓べそ」状の彫刻と似ているが中央が凹むことと位置が異なっている。左右対称の位置にあり中央が凹んでいることから，福岡県嘉穂郡桂川町の王塚古墳にあるような灯明台的な機能をもつのではなかろうかと考えられる。

22号横穴墓　羨道は埋もれているが，長さ約300㎝あり，幅広である。羨門はアーチ形で幅約80cm，高さ約110㎝を測る。そのすぐ外に閉塞石を立てるための台形の飾り縁が付いている。この第１の飾り縁は幅約140cm，高さ約140cmを測る。その外にさらに二重の飾り縁が付いている。第２の飾り縁は羨道の中間にあり，幅約210cm，高さ約150cmを測る。第３の飾り縁は入口が崩れているのではっきりした大きさが不明であるが現状では第２の飾り縁とほぼ同じ数値である。羨門から90cmで玄室に至る。玄室の平面プランは奥がやや細くなった胴張りの台形で幅307cm，奥行き332cmを測る。「コ」字形屍床で，天井は妻入り寄せ棟の家形である。高さは193cmを測る。

17号横穴墓と同じ位置に円錐台形の彫刻がある。底面径35～40cm程度で，高さ約15cm，上面径25cmを測る。上面中央の凹みは径13cmで深さ約５cmを測る。17号と同様灯明台的な機能をもつものと考えられる。

羨門の前に閉塞石が倒れている。長方形に近い台形で，底辺103cm，上辺87cm，高さ124cm，厚さ11cmを測り，凝灰岩製である。この周辺の凝灰岩に比べて硬質であるので他の地点から持って来たと考えられる。

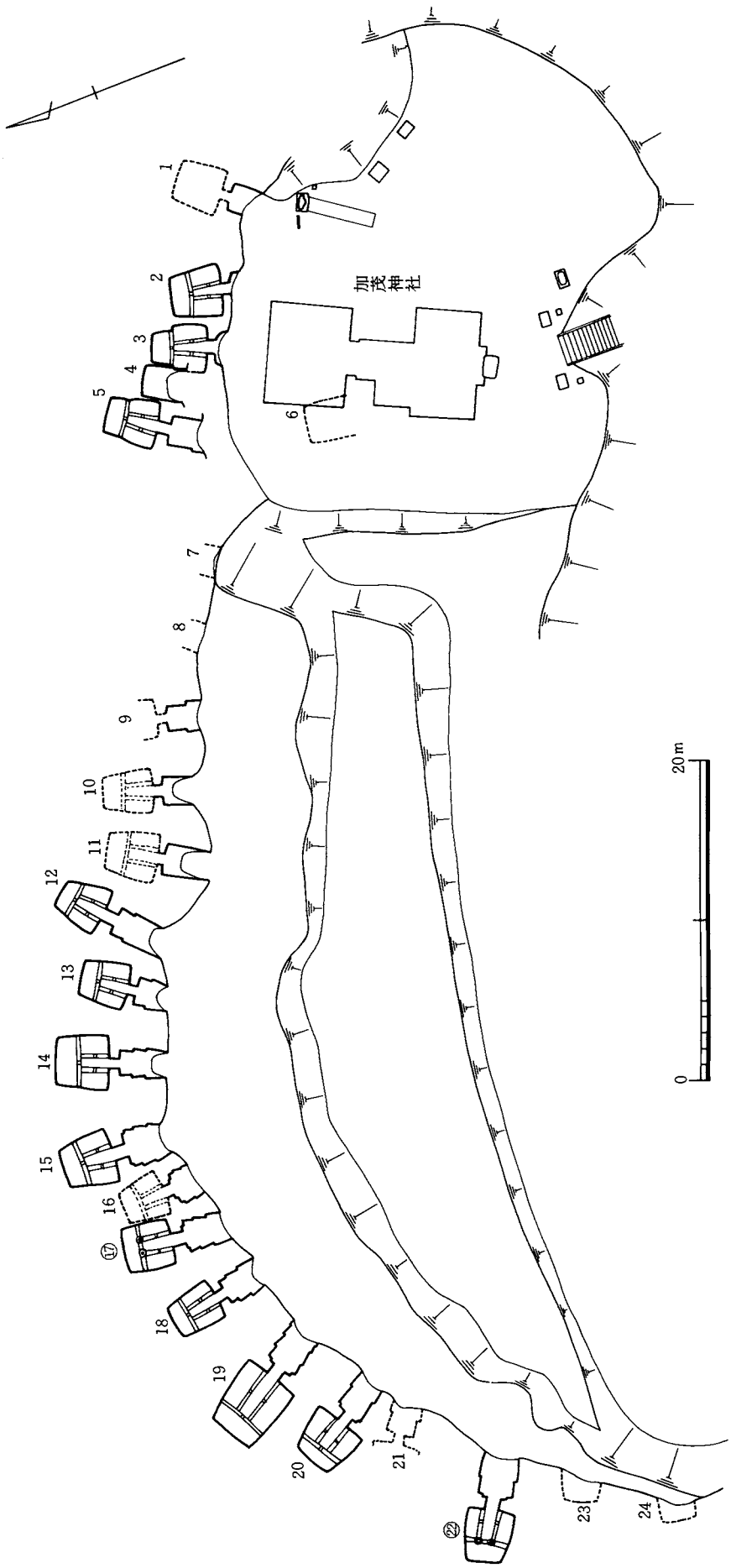
出土遺物　22号から圭頭柄頭が出土。その他加茂神社の周辺などから須恵器，土師器，勾玉，ガラス玉，金環，鉄鏃などが出土している。

備　考　昭和49年（1974）玉名高校考古学部などにより調査が行われた。（高木正文）

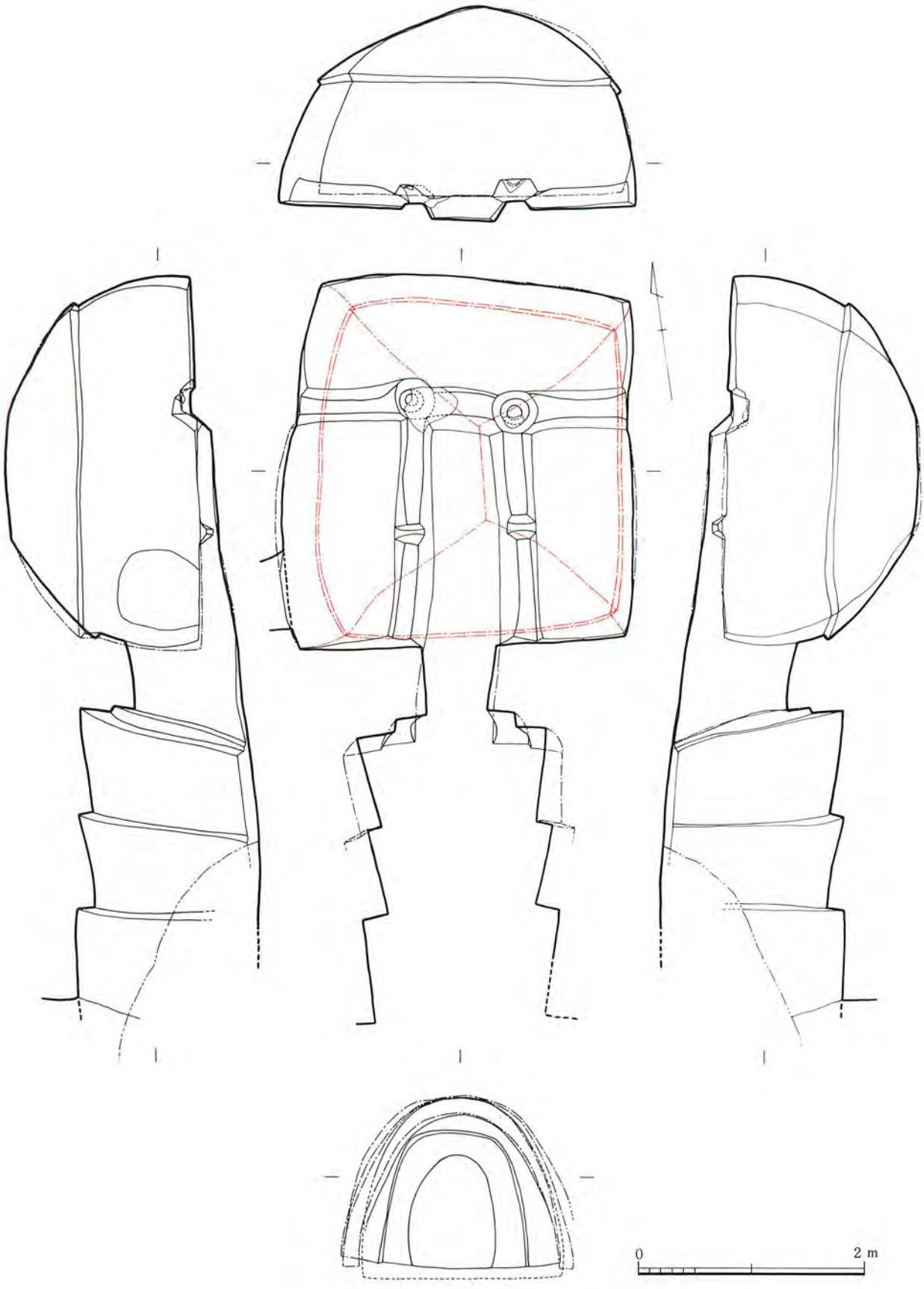
〔参考文献〕

①「第二回植木総合調査について」『玉名高校考古学部報』31　昭和49年（1974）

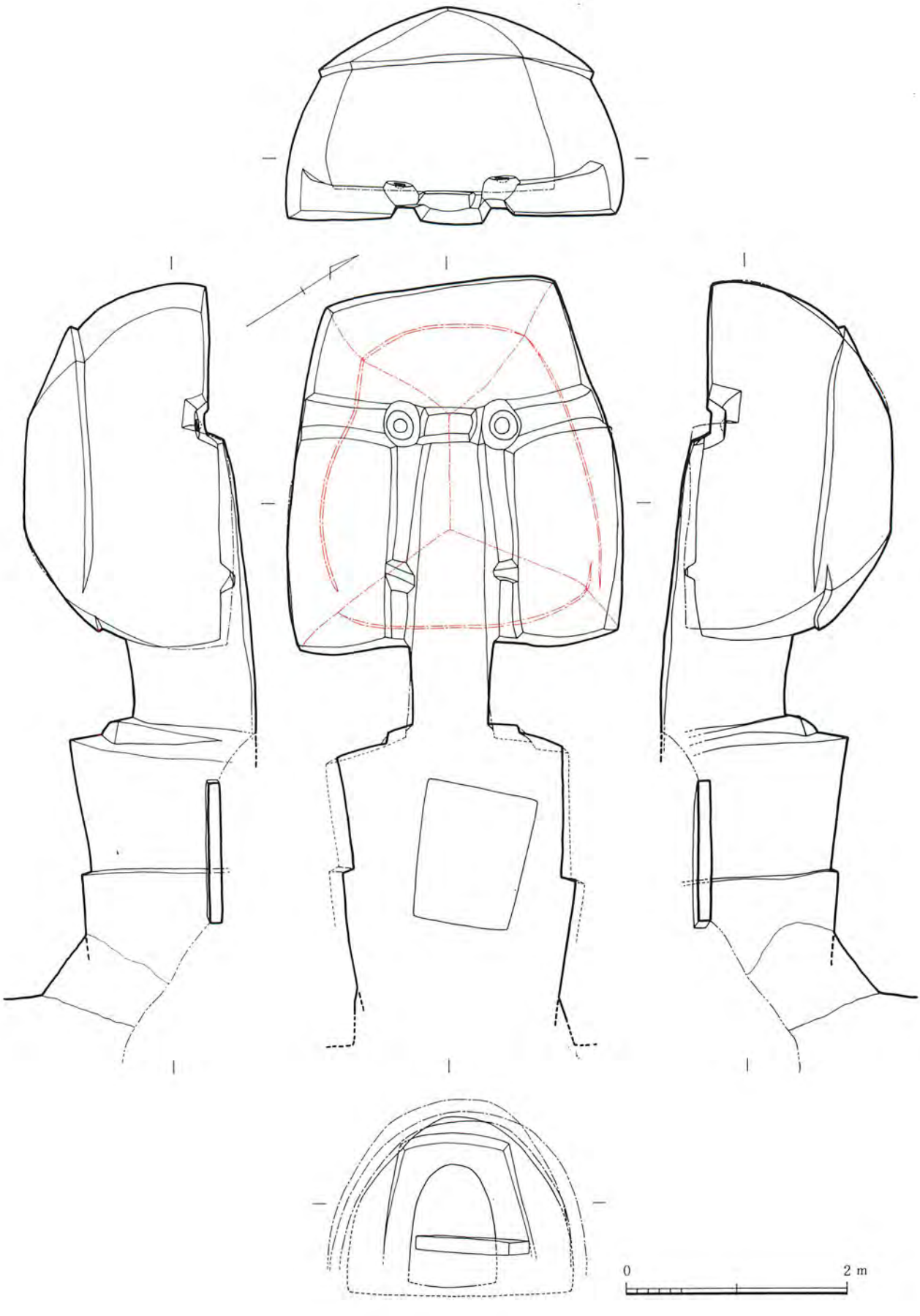
②隈昭志「原始・古代」『植木町史』昭和56年（1981）



89の2図　宮穴横穴墓群配置図



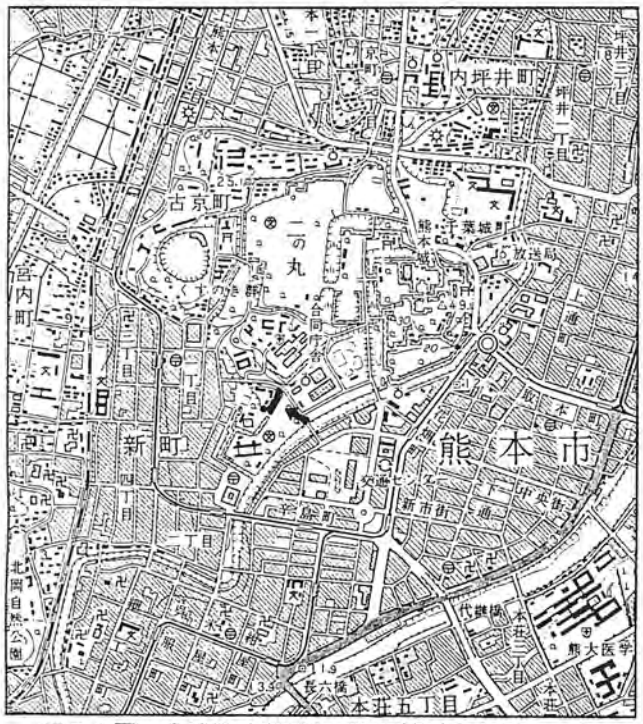
89の3図　宮穴17号横穴墓実測図



89の4図　宮穴22号横穴墓実測図

90．古城横穴墓群（ふるしろ）（⇨90の１～８図）

——熊本市古城町３－１番地——



90の１図　古城横穴墓群位置図（熊本2.5万分の１）

立　地　古城横穴墓群は熊本県の中央部，熊本平野に北から延びて来た植木（京町）台地の最先端部にある。ここには熊本城が築かれているが，このうち初期の本丸跡の南東崖面に横穴墓群が開口している。現在は県立第一高等学校の敷地内になっている。

分布と概要　高さ15ｍのやや軟弱な凝灰岩崖面の幅 100ｍ範囲に53基の横穴墓が確認でき，大きく三段に造営されている。横穴墓の構造と遺物から６世紀末から７世紀末にかけて造られたと考えられる。最初に造られたものはこの群でただ１基のみ複室構造になっている横穴墓（20号）とその周辺にある２基（３号，19号）の安山岩製閉塞石を用いた横穴墓と考えられる。次いで前者の周辺やあるいは数ヵ所にある玄室の奥壁などに棚状の部分をもつ横穴墓（５号，６号，10号，17号，18号，45号）が造られたと考えられる。その後造られたと考えられるのは前二者の間やその周辺，さらには下段，一部は上段にある割合大型の横穴墓（２号，７号，８号，11号～16号，21号，29号，31号，44号，46号，49号）である。最後に造られたと考えられるのは羨門や玄室がやや狭くなり，全体の仕上げがやや雑になったもので中段や下段にも一部造られているが，多くは上段に造られている（１号，９号，22号，23号，28号，30号，32～43号，47号）。また改葬墓と考えられる小型の横穴墓も４基（18の２号，31の２号，34の２号，38の２号）確認された。この群のうち８号と16号の閉塞石に彩色と彫刻が確認され，39号の閉塞石から文字が発見された。また46号横穴墓の玄室内壁からは線刻文が発見された。

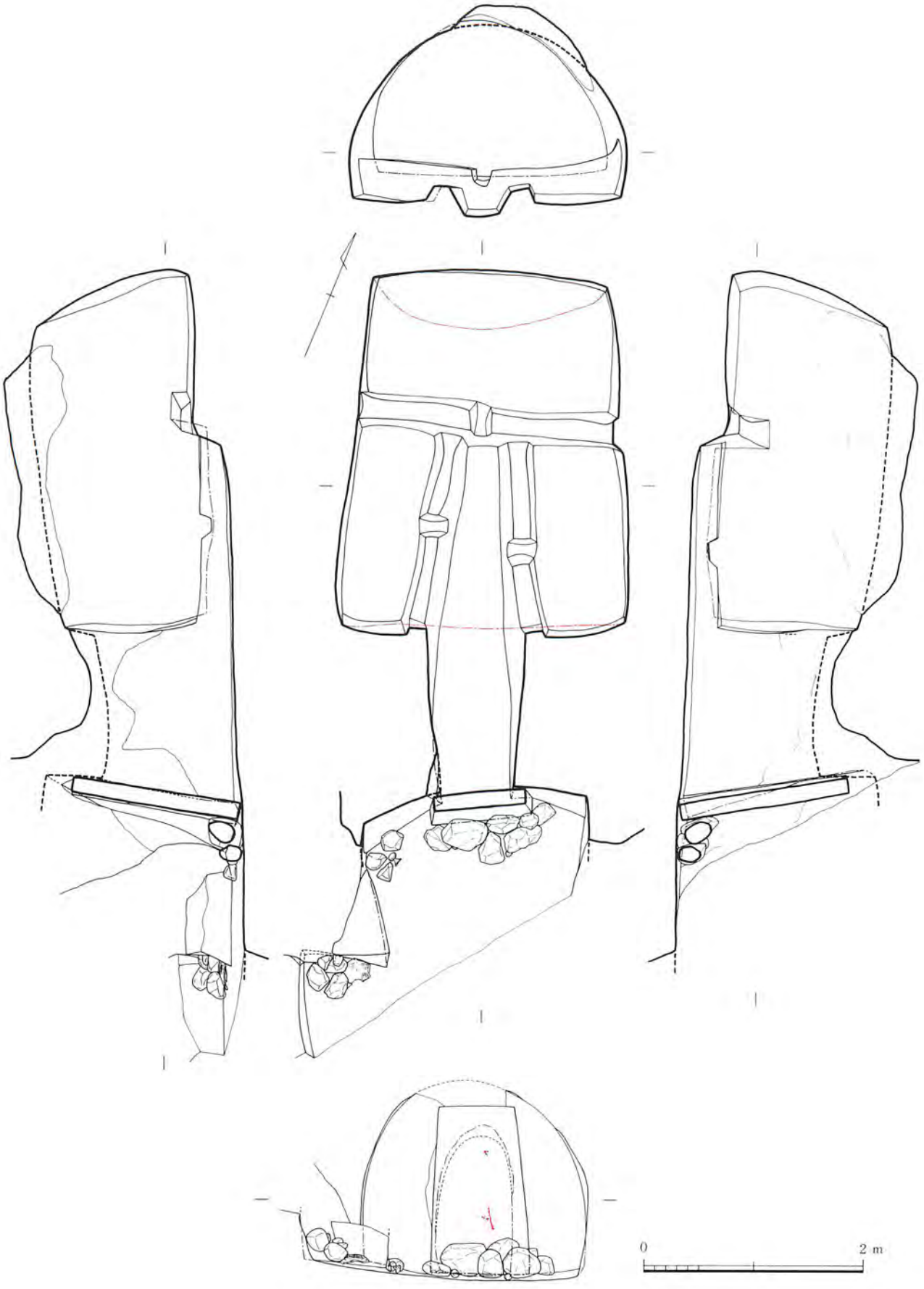
８号横穴墓　中段のやや右寄りの位置にある横穴墓である。羨門はアーチ形で，幅71cm，高さ約125cmを測る。羨道は前部を削平され，上部は崩れているが，現存長約230cmを測る。飾り縁は左側の残存部より二重に付いていたと考えられる。羨門から玄室に至るまでは153cmを測る。玄室の平面プランは長方形で幅270cm，奥行き330cmを測る。屍床は「コ」字形に配置されており，奥屍床が左右屍床よりも20cm程高い。天井はいくぶん剝落しているが，復原するとカマボコ形で，高さ約172cmを測る。７世紀前半の横穴墓と考えられる。

閉塞石は上辺71cm，下辺94cm，高さ155cm，厚さ16cmを測る凝灰岩の切石で，表面は丁寧に仕上げている。外面の一部に赤の彩色が残っている。中央よりやや右下方にＹ字状に残っており，上方にも点々と確認できる。全面塗られていたのではないと考えられるので本来は赤い線の文様ではなかったかとみられる。

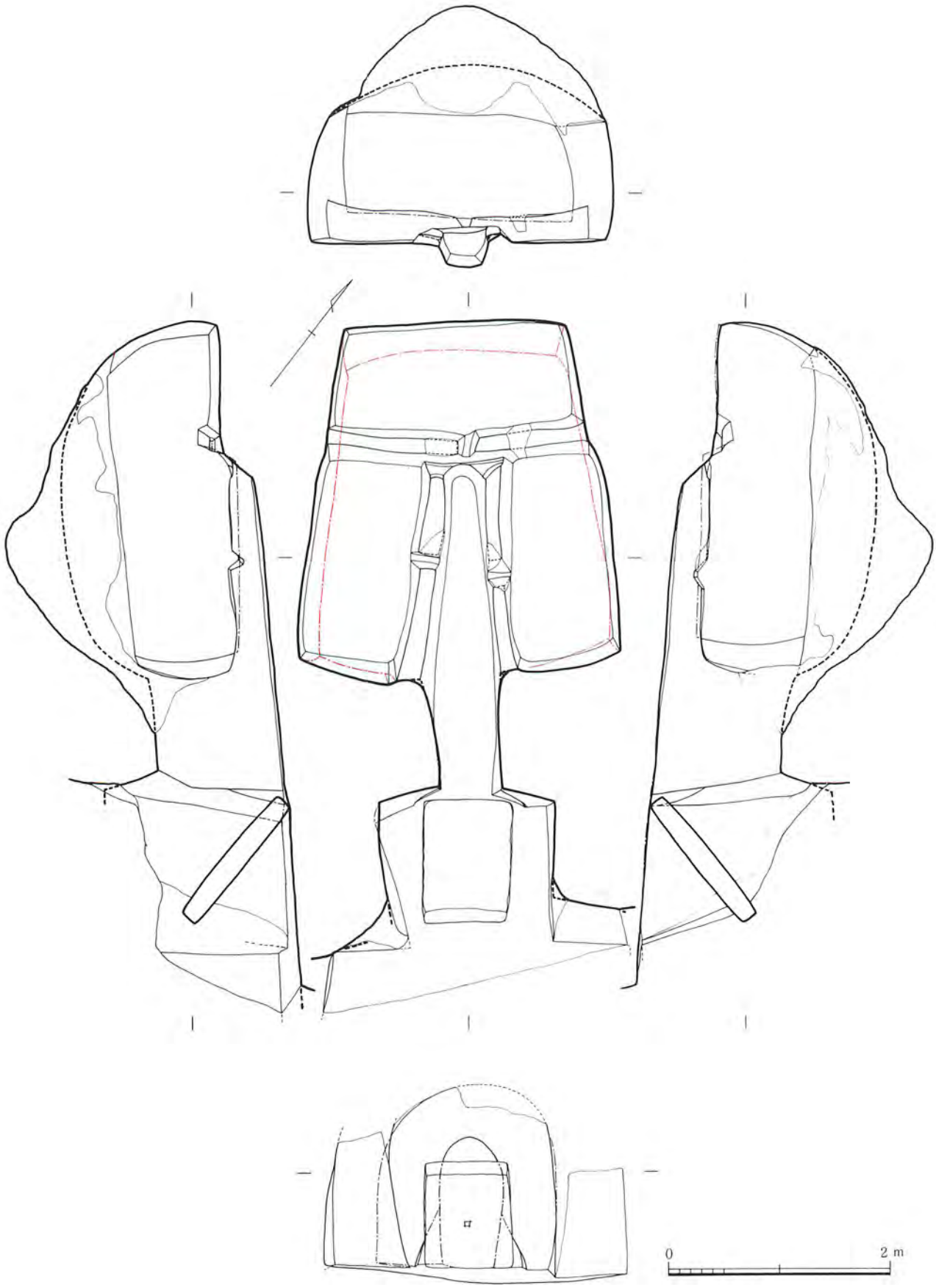
16号横穴墓　中段のほぼ中央部にある横穴墓である。羨門はアーチ形で，幅58cm，高さ112cmを測る。羨道は現在約

90の２図　古城横穴墓群全景

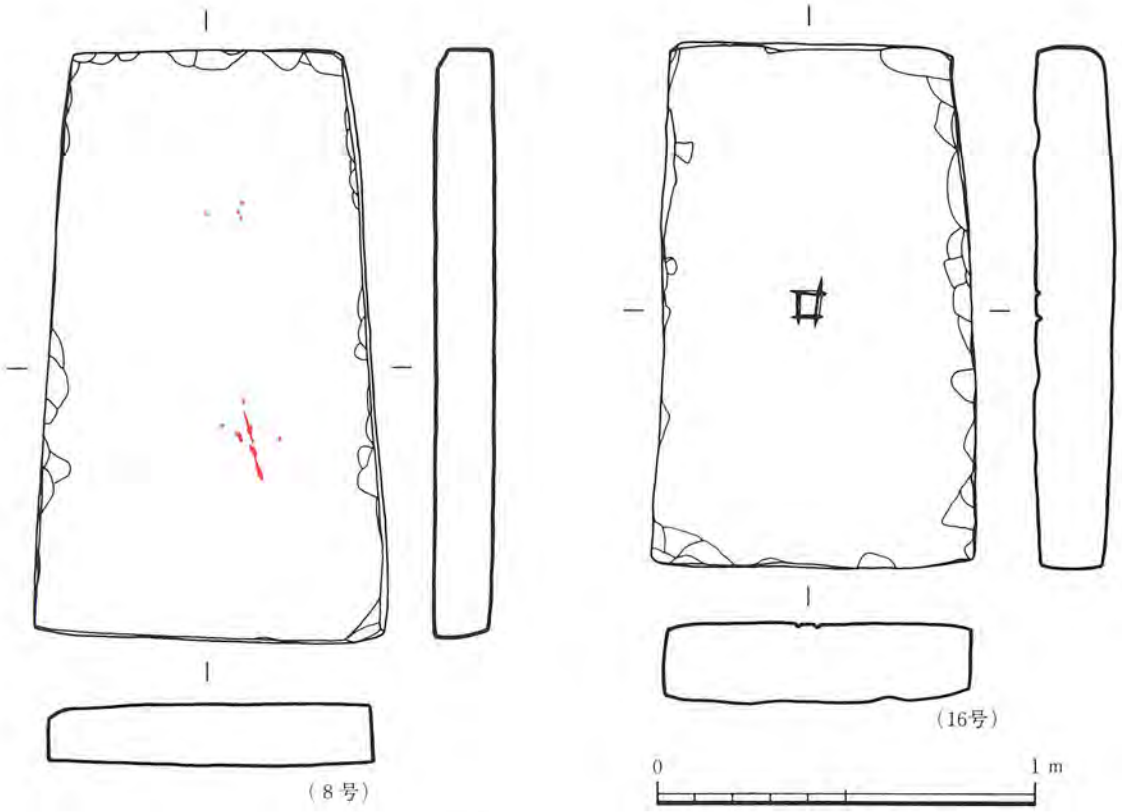
90の3図　古城横穴墓群配置図



90の4図　古城8号横穴墓実測図



90の 5 図　古城16号横穴墓実測図



90の6図　古城8号・16号横穴墓閉塞石実測図

200cmの長さ残っており，二重の飾り縁が付いていたと考えられる。羨門から100cmで玄室に至る。玄室の平面プランは台形で，幅293cm，奥行き318cmを測り，「コ」字形に仕切られている。天井はドームであるがかすかに軒先線を認めることができる。高さは復元すると約180cmである。7世紀前半に造られた横穴墓と考えられる。

閉塞石は後世に引き倒した状態で発見された。硬質の凝灰岩の切石で造られており，上辺がやや狭いが長方形に近く，上辺75cm，下辺86cm，高さ137cm，厚さ21cmを測る。外面の中央部に薬研彫りで四角を描いてある。四角の大きさは横5cm，縦6.5cmを測る。この彫刻は把手の表現と考えられる。また県内の盾の装飾文様のうち把手をもつ例も多いことや，下益城郡城南町の牛頸横穴群に靱を表したとみられる閉塞石があることから本例も盾を表現した閉塞石ではないかと考えられる。

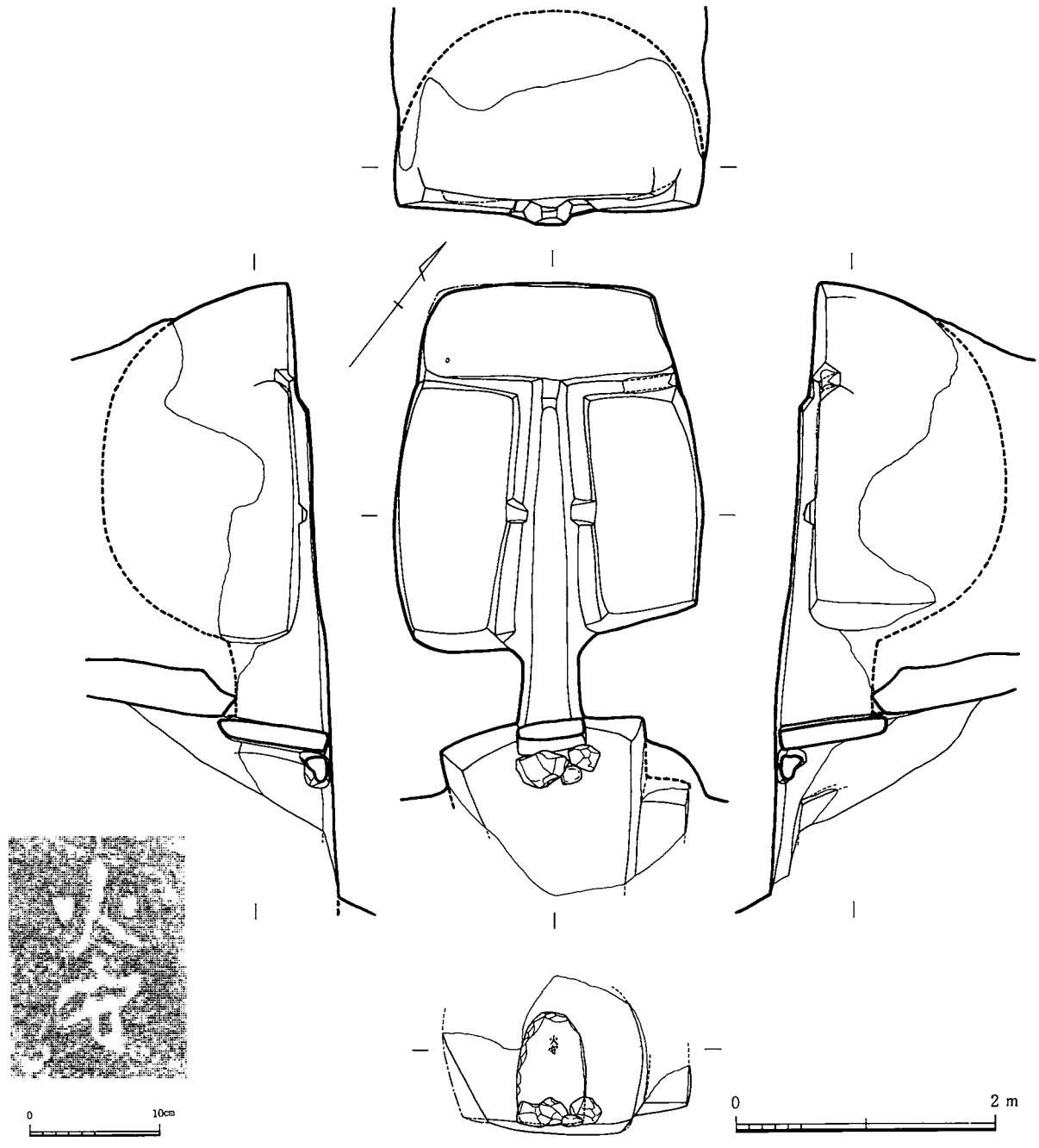
39号横穴墓　上段の中央よりやや右側，先述の8号横穴墓の上方にある。羨門はアーチ形で幅55cm，高さ72cmを測る。羨道は現状では125cm残っており，右側には飾り縁の一部のステップが残っている。羨門から75cm程で玄室に至る。玄室の平面プランは台形に近く，幅240cm，奥行き275cmを測る。「コ」字形屍床で，中央の通路は狭い。天井は陥没しているが復元するとドール形で，高さは160cm程度と推定される。7世紀末に造られた横穴墓と考えられる。

羨門は閉塞石で塞がれ，その根元は3個の軽石を置いて固定してあった。この状況は埋葬当時のままと考えられた。閉塞石は凝灰岩製切石で，幅55cm，高さ83cm，厚さ17cmを測り，上方はやや丸くなっている。外面の中央部やや上方に「火守」または「火安」と読める文字が薬研彫りに刻まれている。文字の大きさは火が横7cm，縦7.5cmで，その下の守または安が横7cm，縦8cmを測る。文字の周辺は他の部分に比べて表面仕上げが丁寧（平坦）であり，前工程で文字を彫るのを意図していたことがわかる。

46号横穴墓　中段の右端近くにあり，この群で最大の規模をもつ横穴墓である。天井が陥没し，羨門部付近は崩れ落ちている。玄室の構造は特異で，入ってすぐの所に幅190cm，現存の奥行き170cmを測る平坦面があり，その奥に逆凹字形の約20cm程高い面がついている。さらに奥に40cm高い屍床がありその前に大きな仕切りが付いている。仕切りの中央部には排水の穴が穿たれている。天井はカマボコ形であったと推定される。玄室全体の規模は幅343cm，現存奥行き440cm，仕切りの前の平坦面からの推定高は310cmを測る。

線刻文は入口近くの玄室右壁にあるが，岩質が悪いため凝灰岩に含まれる軽石の部分，横12cm，縦14cmの範囲にのみ残っている。縦に直線を1本引き，その上端から左右の斜め下方にそれぞれ直線を引いており，その内部の上半を斜め格子目状に直線で埋めている。県内の線刻文の類例から推定すると，マストを立て帆を張った船とも考えられるが想像の域を出ない。

出土遺物　8号横穴墓—須恵器（鏃1，甕片1，平瓶1）金環2。16号横穴墓—須恵器（鏃1），金環1，鉄滓1。39号横穴墓—鉄滓。46号横穴墓—なし。その他の横穴墓—人骨，馬歯，須恵器（鏃，坏，高坏，平瓶，横瓶，提瓶，台付埦，甕，壺，台付壺，長頸壺），土師器（坏，高坏，



90の7図　古城39号横穴墓実測図・文字拓影図

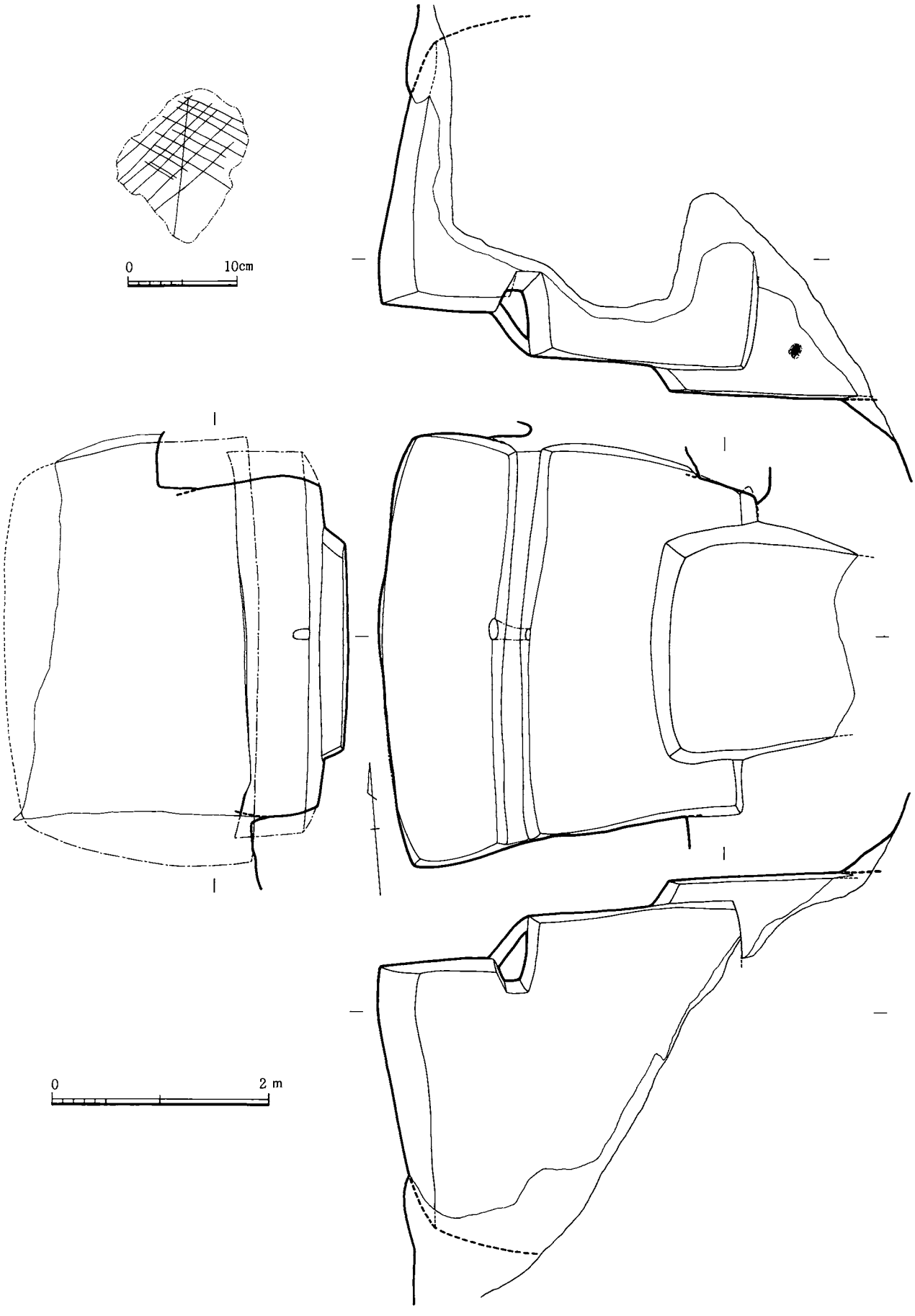
平瓶，丹塗長頸壺），金環，銀環，メノウ製勾玉，水晶製勾玉，碧玉製管玉，水晶製切子玉，ガラス製丸玉，メノウ製丸玉，ガラス製粟玉，滑石製臼玉，土製丸玉，金銅製杏葉，金銅製雲珠，金銅製留金具，鉸具，鉄鏃，刀子，鉄滓など。

備　考　昭和33年（1958），現在地に県立第一高校が移る際に運動場拡張工事が行われた。その時6基以上の横穴墓が発見され，乙益重隆氏の指導により当時の第一高校教諭畑木久信・野口貞義・三島彦介氏を中心に，同校社会研究部の部員によって行われた。その後昭和57年（1982）8月の集中豪雨で崖面の2ヵ所が崩壊したため，災害復旧工事に先立ち，県教育庁文化課で全面発掘調査を行った。調査は文化課の高木と米原圭子，柳原真由美が担当し，昭和57年（1982）11月から昭和58年（1983）6月まで行い，総数53基の横穴墓を確認し，記録した。なお現在，複室の横穴墓を含む中央部分の横穴墓群が保存されている。

（高木正文）

〔参考文献〕

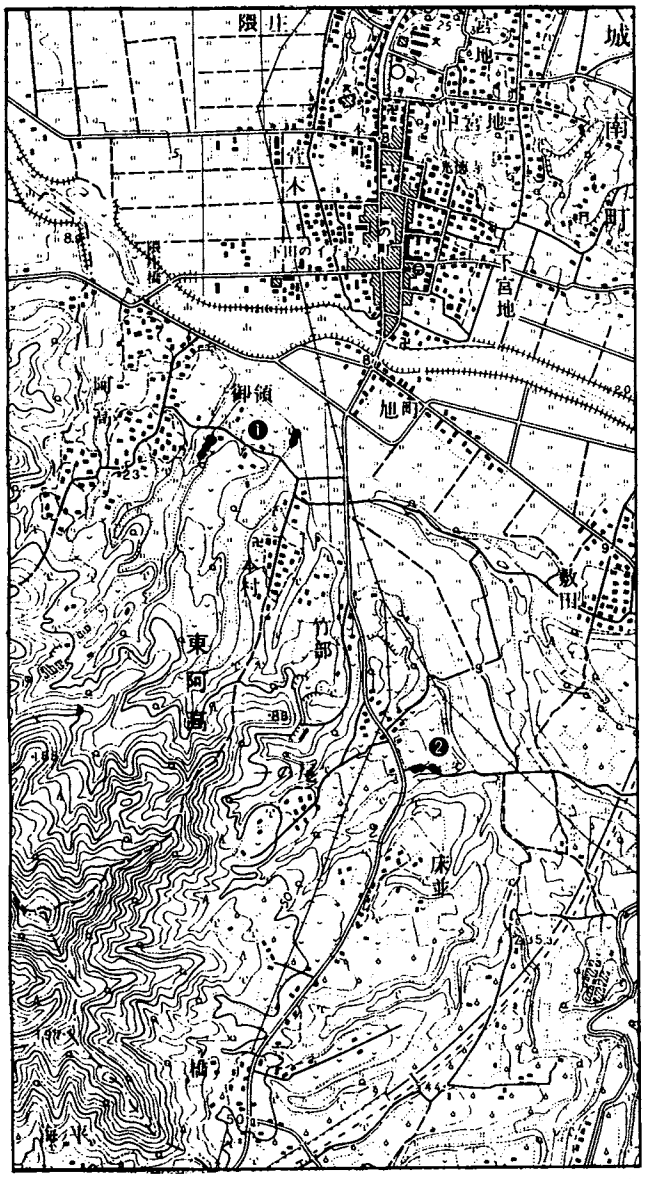
①『熊本市史』昭和7年（1932）
②熊本県立第一高等学校社会科研究会『峠』　昭和34年(1959)
③乙益重隆「古城横穴群」『熊本市文化財調査報告II（北部地区)』熊本市教育委員会　昭和46年（1971）
④高木正文「熊本市古城横穴墓群の調査」『考古学ジャーナル』223 P26−28　ニュー・サイエンス社　昭和58年（1983）



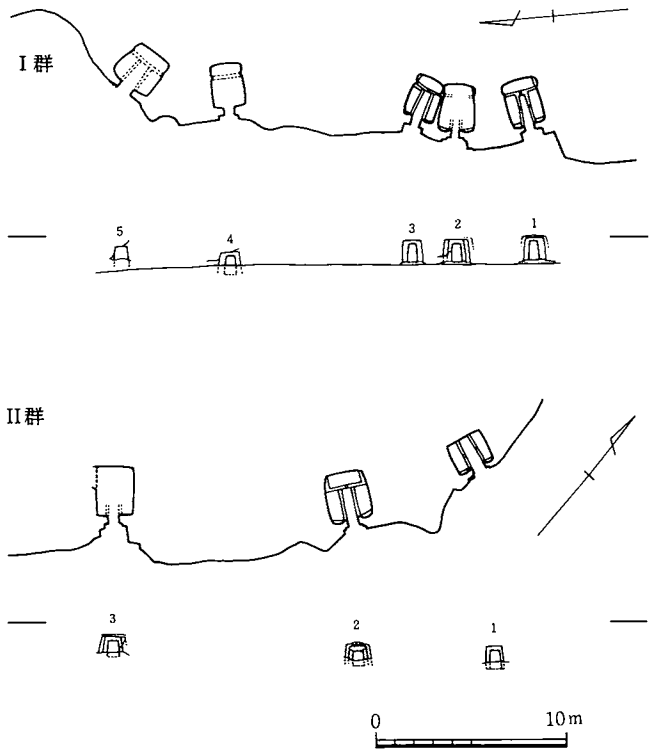
90の 8 図　古城46号横穴墓および線刻文実測図

91．御領横穴墓群（⇨91の１，２図）

——下益城郡城南町東阿高八尾——



91の１図　御領・牛頸横穴墓群位置図（字土2.5万分の１）
１御領　２牛頸



91の２図　御領横穴墓群配置図

立　地　緑川支流の浜戸川左岸，木原山（別称雁回山，標高314.4ｍ）の麓から延びた一丘陵に御領集落がある。横穴墓はこの集落の西の水田に面した低崖面と，集落の東の丘陵端部の２ヵ所に造られている。御領集落一帯は縄文時代後期の御領貝塚があり，西の谷を挟んだ丘陵端部には縄文時代中期から後期に至る阿高貝塚，さらに北に連なって黒橋貝塚がある。また西側の御領横穴墓群のある谷の奥(南)には総数126基以上を数える阿弥陀尾横穴墓群がある。塚原古墳群とは1500ｍ程離れており，ここから塚原台地周辺にかけては多くの横穴墓群がみられる。

分布と概要　横穴墓群のうち西のものＩ群，東のものをII群とする。Ｉ群は現在５基確認できる。横穴墓が造られた後に谷が土砂で埋もれているため，埋没した横穴墓もある可能性がある。羨門の正面観は方形で，一～三重の飾り縁がいつている。いずれも「コ」字形屍床で，右（南）から数えて１～３号には造り付けの枕がある。１号と２号には奥屍床右側と左右屍床の入口側にあり，３号には１，２号と同じ位置のほかに左屍床の奥にもある。４号と５号の屍床は埋もれている。II群はＩ群から300ｍ離れた所にあり，３基確認できる。いずれも羨門の正面観は方形で，飾り縁は右（北）から数えて１号には一重，二号には二重，３号には三重に造られている。屍床は１号は左右にしかなく，各々入口側に造り付けの枕がある。２号は「コ」字形屍床で，左右屍床には入口側に造り付けの枕があり，奥屍床にも両端に仕切とつながった枕状の面がある。３号も「コ」字形屍床の痕跡があるが，後世に防空壕に改造されている。

装　飾　故小林久雄氏によると「御領横穴（御領貝塚の西崖面）の一基には，羨門上縁に円形の陽刻を施したものがある。」（『九州縄文土器の研究』Ｐ219所収）とされているが，現在は風化の為確認できず，またどの横穴墓に装飾があったのかも不明である。

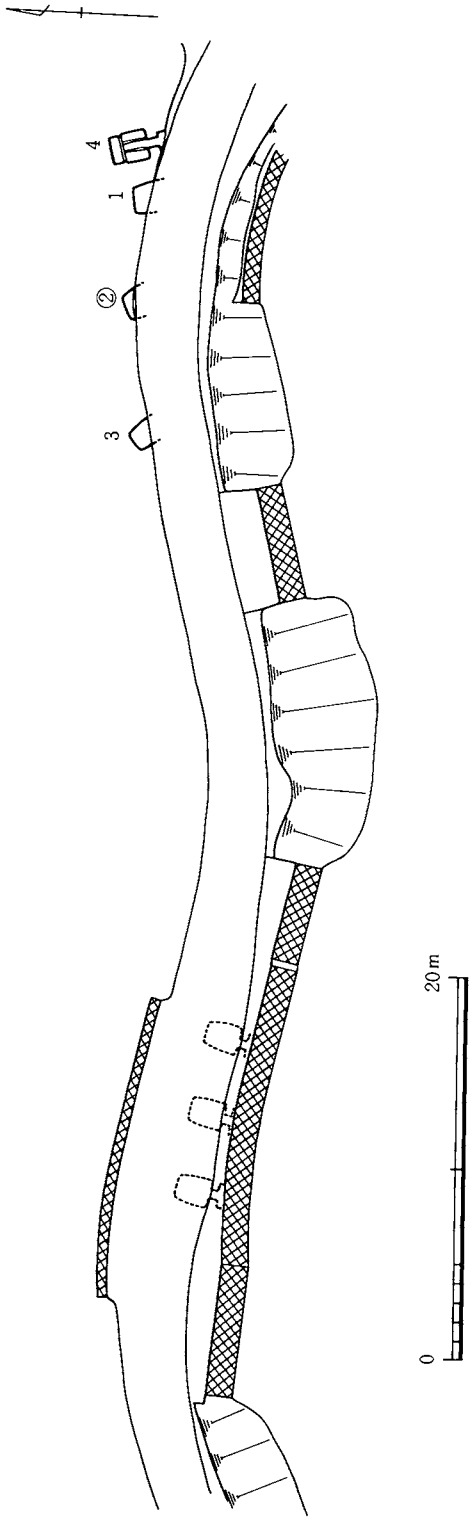
出土遺物　須恵器（『城南町史』）　（高木正文）

〔参考文献〕

①小林久雄「横穴古墳閉塞石の装飾」（昭和10年稿，未発表）『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会　昭和42年（1967）　熊本
②小林久雄・三島格「阿高・尾窪の古墳群」松本雅明編著『城南町史』Ｐ101－105 城南町役場　昭和40年（1965）

92. 牛頸（うしくび）横穴墓群 (⇨91の1図，92の1～5図)

——下益城郡城南町東阿高一位田——



92の1図　牛頸横穴墓群配置図

立　地　緑川の支流浜戸川の左岸（南岸）に方形周溝墓や円墳，前方後円墳等の墳丘からなる塚原古墳群のある塚原台地があり，そこから谷を隔てた西側に牛頸横穴墓群のある丘陵がある。この丘陵は雁回山から伸びて来た一支丘で，丘陵の南崖面に牛頸横穴墓群があるが，小さな谷を挟んで南側にも造られている。また谷のすぐ奥には一尾横穴墓群，谷を出た所の丘陵東端部には一位田横穴墓群がある。

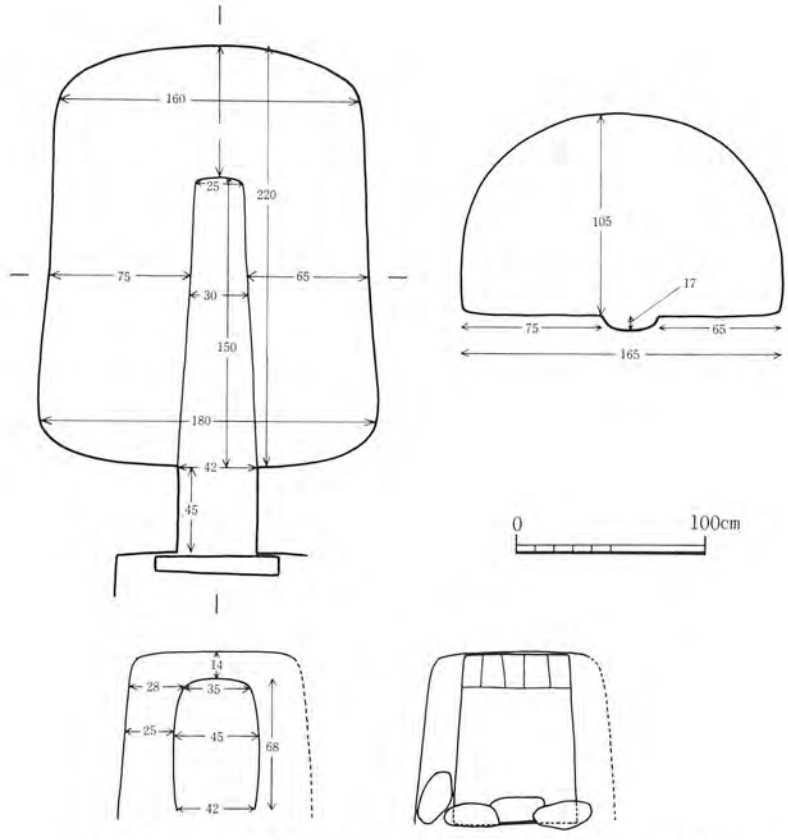
分布と概要　谷の両側に横穴墓があるが南側のものについては未調査であるので，北側のものについて述べる。現在1基のほぼ完全なものと3基の奥壁の部分のみ残すものが残るのみであるが，故小林久雄氏の昭和10年の調査記録によるとこれら4基の下方に5，6基の横穴墓があったことがわかり，また昭和48年に現存する4基よりも30m程西側で崖崩れがあり3基の横穴が確認（うち最も西の1基は閉塞石がありその外に須恵器の長頸壺が置かれていた）されているので，本来は10数基から成っていたものと考えられる。故小林久雄氏の記録はノートと原稿の二種があり，昭和10年5月17日のノートのスケッチと注記によりここで取り上げる装飾のある閉塞石をもつ横穴墓の状態をかなり詳細に知ることができる。従って本稿は小林氏の記録をもとに記述する。小林氏の配置図と筆者の現状の配置図を比較すると昭和10年に破壊された3基の横穴墓は現在奥壁部分のみ残っている3基であることがわかる。『城南町史』ではこの3基を東から1号～3号とされているので，それを踏襲して東端のものを4号としておく。うち2号が装飾のある閉塞石をもつ横穴墓である。

2号横穴墓　羨門部は正面観が長方形とアーチ形の中間的な形態で幅45cm・高さ68cmを測る。飾り縁の正面観は隅丸の方形で，幅約100cm，高さ約90cm程度である。羨門から45cmで玄室に至る。玄室の平面プランは奥がやや狭い隅丸の長方形で幅は入口側で180cm，中央部で165cm，奥で160cmを測り，奥行きは220cmである。屍床は「コ」字形であるが，各屍床の仕切りはなくつながっている。天井はドーム形で，中央部付近で屍床面から高さ105cmである。なお中央部で通路と屍床面との差は17cmを測る。

閉塞石は凝灰岩の切石が用いられ，上方がやや狭い長方形で，下部の幅65.5cm，上部の幅56cmで，高さ88cmを測り，厚みは上下，左右によって異なるが最大厚15.5cmを測る。閉塞石はほとんど垂直に立てられ，その下部は数個の塊石でおさえられていた。

装飾は閉塞石の正面にあり，その上部に4条の縦線が陰刻され，その下部に横線が刻されている。陰刻の幅はほぼ1cmで，深さ0.5cmを測る。縦線の間隔は均等ではなくそれぞれ広狭がみられる。小林久雄氏は閉塞石を盾を模したようであると見ておられるが，筆者は靱を表現しているようにも思える。

出土遺物　2号横穴墓—副葬品なし，成人の人骨（おそら



92の２図　牛頸２号横穴墓略測図（小林久雄の記録から復元）

92の３図　牛頸２号横穴墓発見状態（原版 小林）

く男性)。三島格氏のノートに記された小林氏からの聞き書きメモによる。

西端の横穴墓―閉塞石の前から須恵器長頸壺。

備　考　昭和10年５月17日小林久雄氏調査。昭和48年災害復旧工事に伴ない城南町教育委員会と県文化課で調査。

（高木正文）

〔参考文献〕

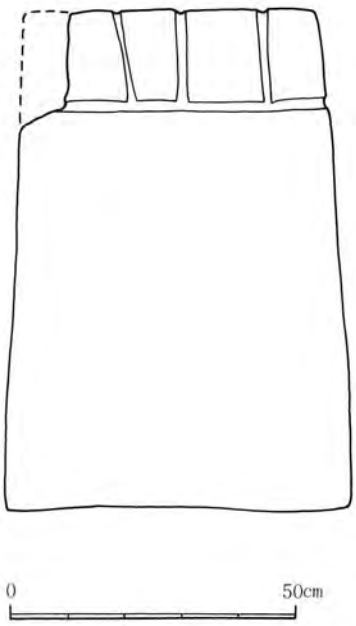
①小林久雄氏の調査ノート（昭和10年記録）
②小林久雄「横穴古墳閉塞石の装飾」（昭和10年稿，未発表）『九州繩文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会　昭和42年（1967）熊本に所収。
③三島格「阿高・尾窪の古墳群」松本雅明編著『城南町史』P101－105　城南町役場　昭和40年（1965）
④松本雅明「牛頸横穴群」『熊本の装飾古墳』P148，149　熊本日日新聞社　昭和51年（1976）

〔資　料〕

横穴古墳閉塞石の装飾

小林久雄

豊田旧村内には，後記亀骨副葬のごとき，数百の横穴古墳があるが，ここに報告せんとするものもその一例である。昭和10年５月17日，当時の豊田村では医救土木事業を以て隈庄より松橋に通じる県道より，東阿高牛頸坂附近の水田に下る道路開設中，従来５・６個の横穴の存在する，その上方３間ばかりの処に，前日に２個の横穴を破壊し，その日にはその中間にて熔岩破砕中，空洞を生じ，閉塞石を発見するに至った。通報によって現地に到着した際は，羨道



92の4図　牛頸2号横穴墓閉塞石実測図
（小林　文献②より）

92の5図　牛頸2号横穴墓閉塞石（原版 小林）

の大部分は破壊されて居るが，閉塞石は依然現状のまま残されていた。工事関係者の説明と，現況とにより推測すると，羨道は1.5m をこえ，幅はほぼ30cmにて，底面は旧状のままで平く，その外に閉塞石が立てられ，羨道には少量の土壌がつまっていたようである。閉塞石の下部は数個の塊石でおさえられていた。

閉塞石は矩形の凝灰岩の切石を用い，ほとんど垂直に立てられていた。高さ88cm，幅上部56cm，下部65.5cmで，下部がやや拡っている。石の上部に4条のたての線が陰刻され，その下部に一線が刻せられている。陰刻は幅ほぼ1cm深さ5mmである。縦の刻線は長さ17.5cmであるが，縦線によって画せられた石面の幅は，右より10cm，13cm，11cm，10cm，9cmとなって，それぞれ広狭が見られる。石の厚みは上下，左右によって相異があり，上端は右10cm，左15.5cm，下端は右12cm，左7cmで，上部の方が厚くなっている。

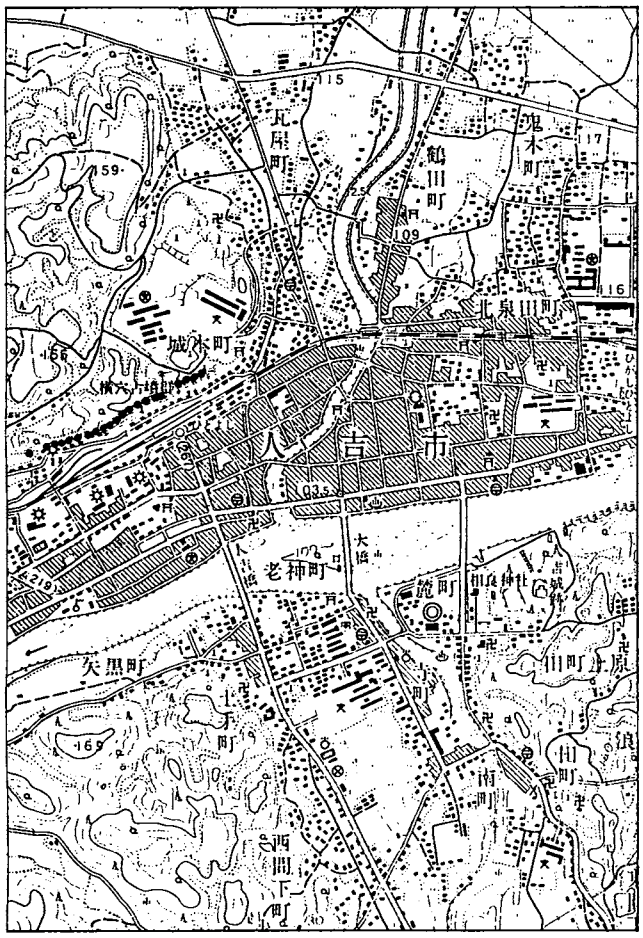
此の蓋石の内部は牛頸横穴群または附近の多くの横穴群に一般に見られるように，穹窿状の天井と，玄室の奥室及び両側に屍床をもつものであるが，羨道が長く，その外に彫刻ある閉塞石を見るものは類例を見ざるところである。玄室内から遺物は発見されなかった。尚，この横穴の東方500m の石之室古墳（円墳）には，横口の巨大な組合式家形石棺の内部に，奥壁と左右両側に斜線を網目状に交錯せしめた沈刻線文様が見られる。また本横穴の西北1300m の御領横穴（御領貝塚の西崖面）の1基には，羨門上縁に円形の陽刻を施したものがある。本横穴の蓋石は一見盾を模したようにも思われるが断定はできない。貴重な装飾古墳の一例としてここに報告する次第である。

（昭和10年稿）

※本稿は小林久雄先生の遺稿集『九州縄文土器の研究』（昭和42年）に収録されている。

93．大村（おおむら）横穴墓群〔大正10年国史跡〕（⇨93の１～19図）

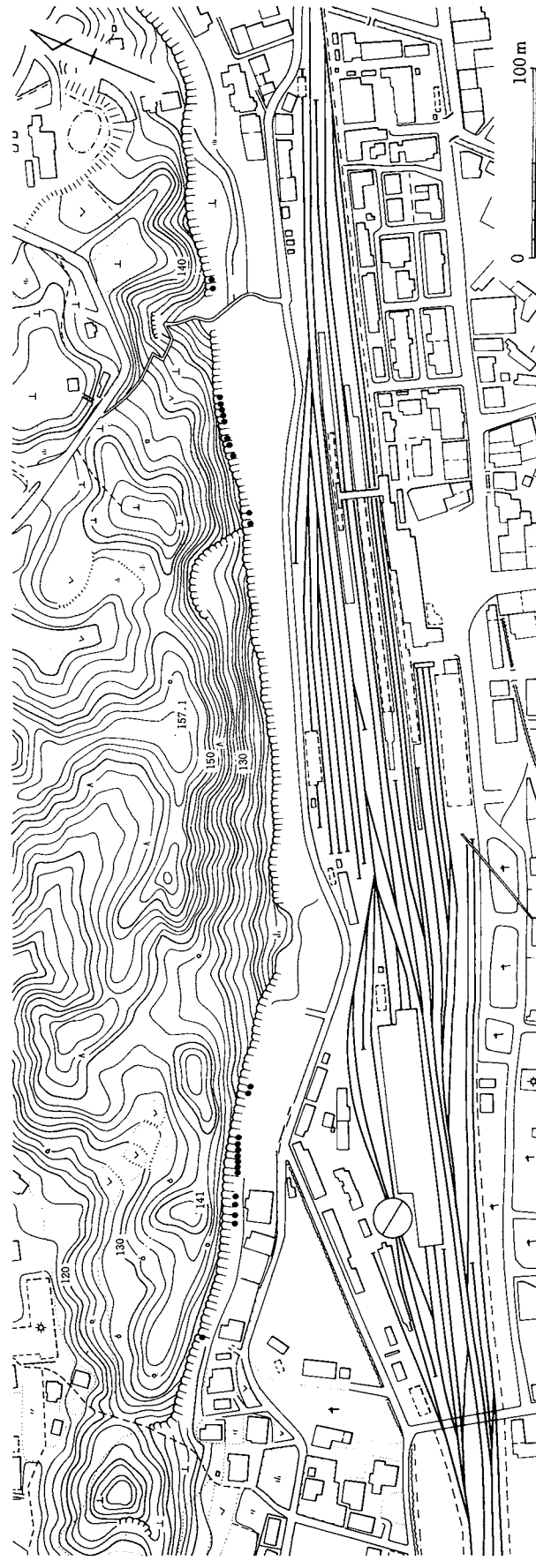
——人吉市城本町——



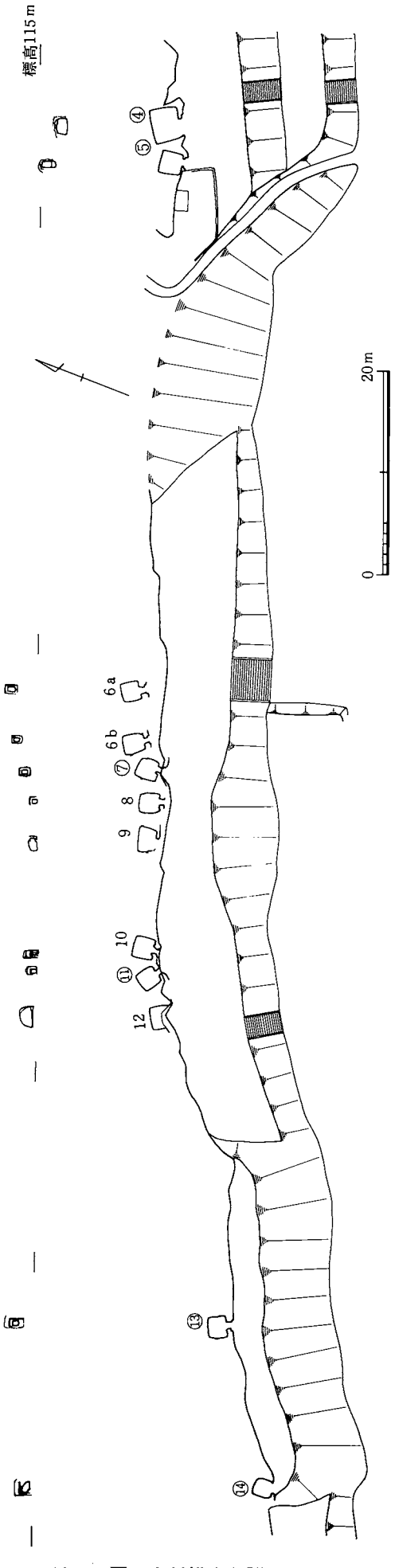
93の１図　大村横穴墓群位置図（人吉2.5万分の１）

立　地　球磨川の右岸，国鉄人吉駅の裏の凝灰岩崖面に造られた横穴墓群である。横穴墓群のある崖の上は標高約150ｍの村山台地で，押型文土器などを出土する村山遺跡がある。また球磨川の対岸には人吉城跡がある。

分布と概要　横穴墓群は南面した崖の幅550ｍの間に分布し，現在26基確認される。京大報告による１～３号は確認できない。内部が家形に造られた一見横穴墓にも見える後世の穴があるのでそれの誤認であろうか。また５号と６号の間にも１基あるがこれは数え落としであろうか。これを６ａ号，６号を６ｂ号とする。また今回新たに15号の右に１基と22号の左に５基確認された。このうち15号の右を15ａ号，15号を15ｂ号，22号の左を23～27号とする。なお，14号と15ａ号の間の崖には横穴墓らしいものが数基見えるが，地形的に確認が困難である。ここではさらに増えることも予想されるので横穴墓の号数を通し番号に直さず，京大報告の号数のままとした。この横穴群は配列の状態からほぼ８群に細分できる。Ⅰ群は４，５号，Ⅱ群は６ａ～９号，Ⅲ群は10～12号，Ⅳ群は13，14号，Ⅴ群は15ａ，15ｂ号，Ⅵ群は16～22号，Ⅶ群は23～26号，Ⅷ群は１基離れてある27号である。うち装飾のある横穴墓は４号，５号，７号，11号，13号，14号，15ｂ号で，Ⅰ群～Ⅴ群までは谷群にみられる。また破壊の激しいⅥ群の16号や17号，Ⅶ群の



93の２図　大村横穴群地形図

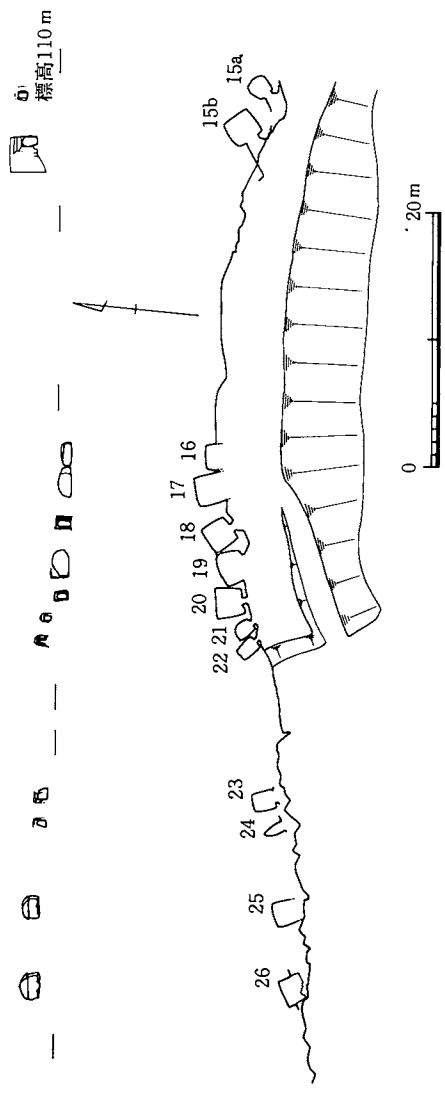


93の3図　大村横穴墓群配置図(1)

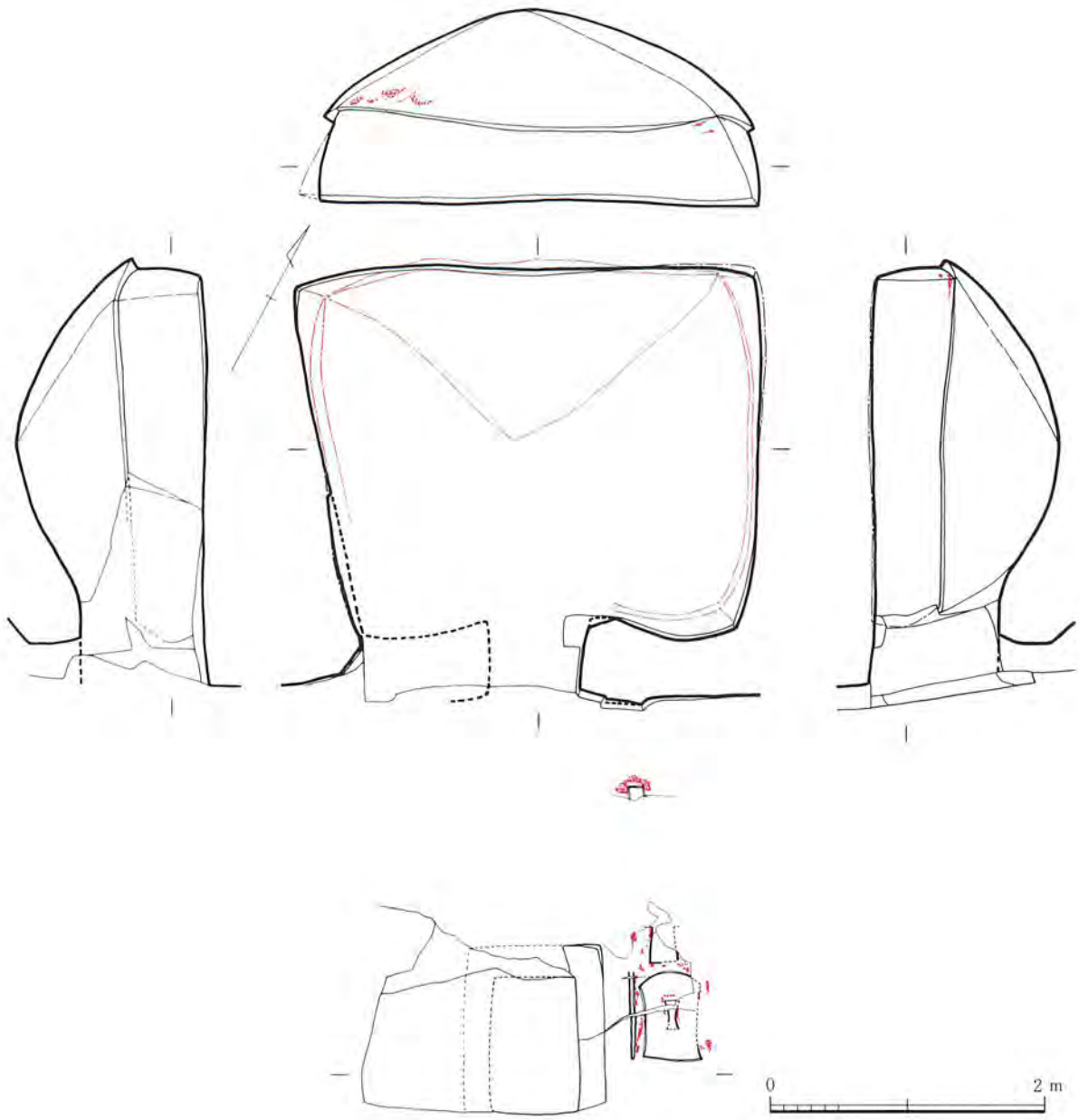
26号なども装飾があった可能性が強いので，Ⅷ群を除く各群に1～2基の装飾横穴墓があったと考えられる。

4号横穴墓　Ⅰ群は4号，5号とも装飾横穴墓である。4号横穴墓は羨門の左側が壊れ，外壁の風化も激しいが，羨門は長方形で，幅約65cm，高さ約100cmと推定される。羨門の外に一重の飾り縁がついている。飾り縁も長方形で幅約100cm，高さ約120cmを測る。羨門から約50cmで玄室に至る。玄室の平面プランは方形であるが，やや奥が広くなっている。屍床は仕切られず平坦なままで，天井は宝（方）形造である。軒先線は段差をつけて明瞭に表現してあるが，隅棟は稜線が非常に不明瞭である。玄室の幅345cm，奥行き270cm，高さ135cmを測る。平面の広さに対して天井が高いのが特徴である。なお内壁の数ヵ所に赤の彩色が認められる。

装飾は右外壁にみられ，風化による岩壁のひびと剝落で破壊が著しい。羨門のすぐ右には剣と盾が浮き彫りされている。剣は先端がやや不明瞭であるが縦に長さ66cmを測る。盾は側辺の上下が外にやや反り，上辺は上に弧形に張った形で，中央に中程のくびれた把手をつけている。盾の大きさは幅約45cm，高さ約65cmを測り，盾の周囲と把手の周囲は赤く塗られている。盾の上の装飾は上方が次第に狭くな



93の4図　大村横穴墓群配置図(2)

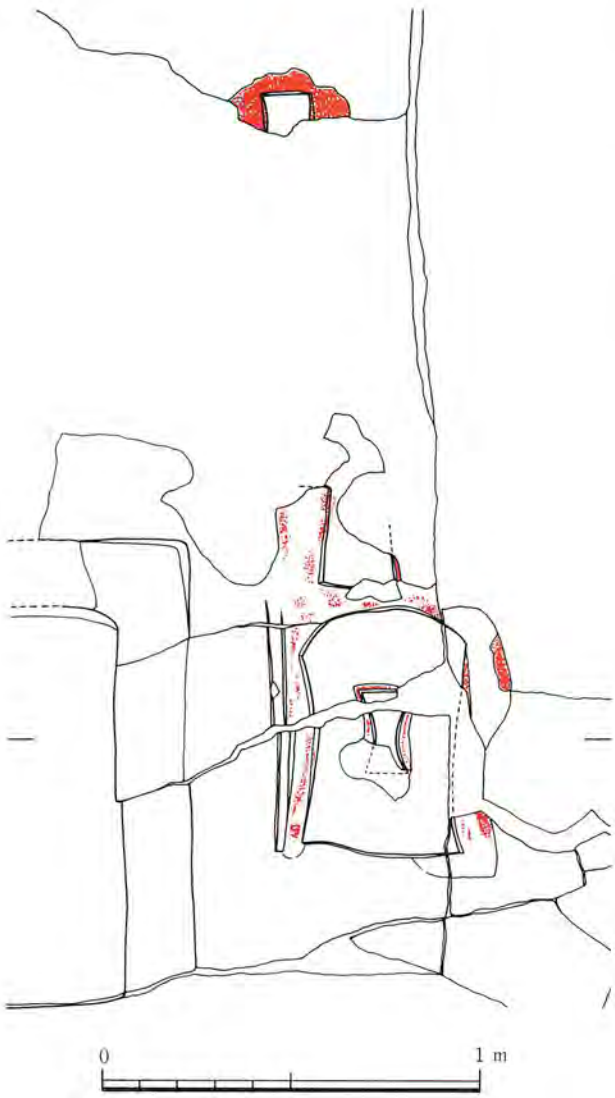


93の5図　大村4号横穴墓実測図

った長方形で，その上部が横に開いているので靱の浮き彫りではないかと考えられる。現存の高さ45cmを測る。やはり周囲が赤く塗られた痕跡がある。さらにその上方，羨門上端よりも120cm程上に浮き彫りの上方が残っている。その形状より靱の上端の突起部と推定される。上辺の幅13cmを測り，周囲は鮮やかな赤が残っている。その他羨門の上部や左側にも装飾があった可能性が強いが残っていない。

5号横穴墓　4号の左やや上方にある横穴墓である。羨門は後世に拡張され，玄室床面も中央部を掘り下げられている。推定すると羨門は長方形で，幅約50cm，高さ約85cmと考えられ，その外側の飾り縁はやはり長方形で幅約85cm，高さ約110cmとみられる。羨門から玄室までは約35cmを測る。玄室の平面プランは方形で，幅233cm，奥行き223cmを測る。屍床の仕切りは左側のみ造られ奥壁まで達している。天井は宝形造であるが，隅棟の稜線が不明瞭で，ドーム形に近い。なお玄室内で後世に火が焚かれているので天井に煤が付着し，壁面も部分的に剝落している。

装飾は外壁の羨門上部にみられる。靱4個と剣1個が浮き彫りおよび薬研彫りで描かれている。最も左側の靱は奴凧形の浮き彫りで，体部に横線を入れている。下端は風化しているが，やや高い浮き彫りになっている。幅45cm，高さ93cmを測る。その右の2個の靱はやはり奴形であるが，薬研彫りで縁どりをしたのみで，一部の溝は両方の靱で共有している。2個のうち左側の靱は幅80cm，高さ110cmで，右側の靱は幅60cm，高さ110cmを測る。最も右端の靱は4個の靱の中で最も丁寧に仕上げられており，薬研彫りに彫刻を加えている。輪郭は奴凧形であるが，上部に8本の鏃を浮き彫りにし，その下方を凹字状に彫り下げ，体部には2本の溝を切り，下端には脚をつけている。また周囲と鏃の間やその下の凹字状部，体部の溝など凹んだ所は赤く塗



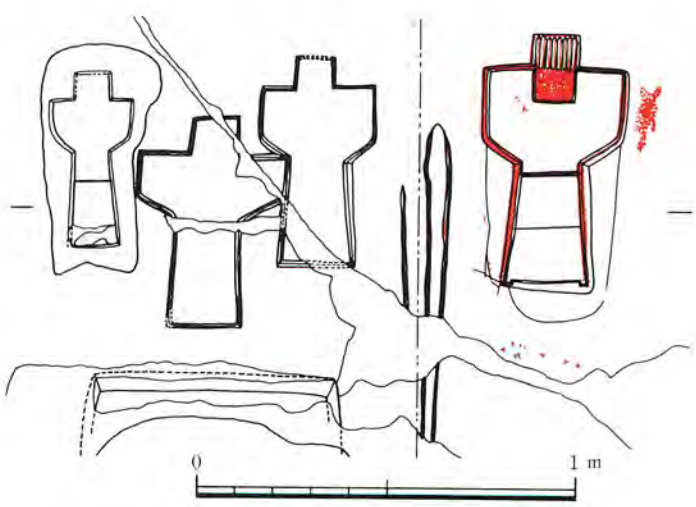
93の6図　大村4号横穴墓外壁装飾文実測図

られている。この靱は幅75cm，高さ80cmを測る。体部周辺に細い沈線がみられるがこれは文様割り付けの時の線であろうか。右側の2個の靱の間に剣が切先を上に向けて薬研彫りで表現されている。下部を欠くが現存部は167cmを測る。この切先付近の溝も赤く塗られている。この剣の左に薬研彫りの一線があるがこれは文様とはなっていない。なお，靱のうち左側3個は煤が付着し，風化も進んでいるので，彩色が確認できないが，右端の靱や剣と同様，赤で縁どりされていたものと考えられる。

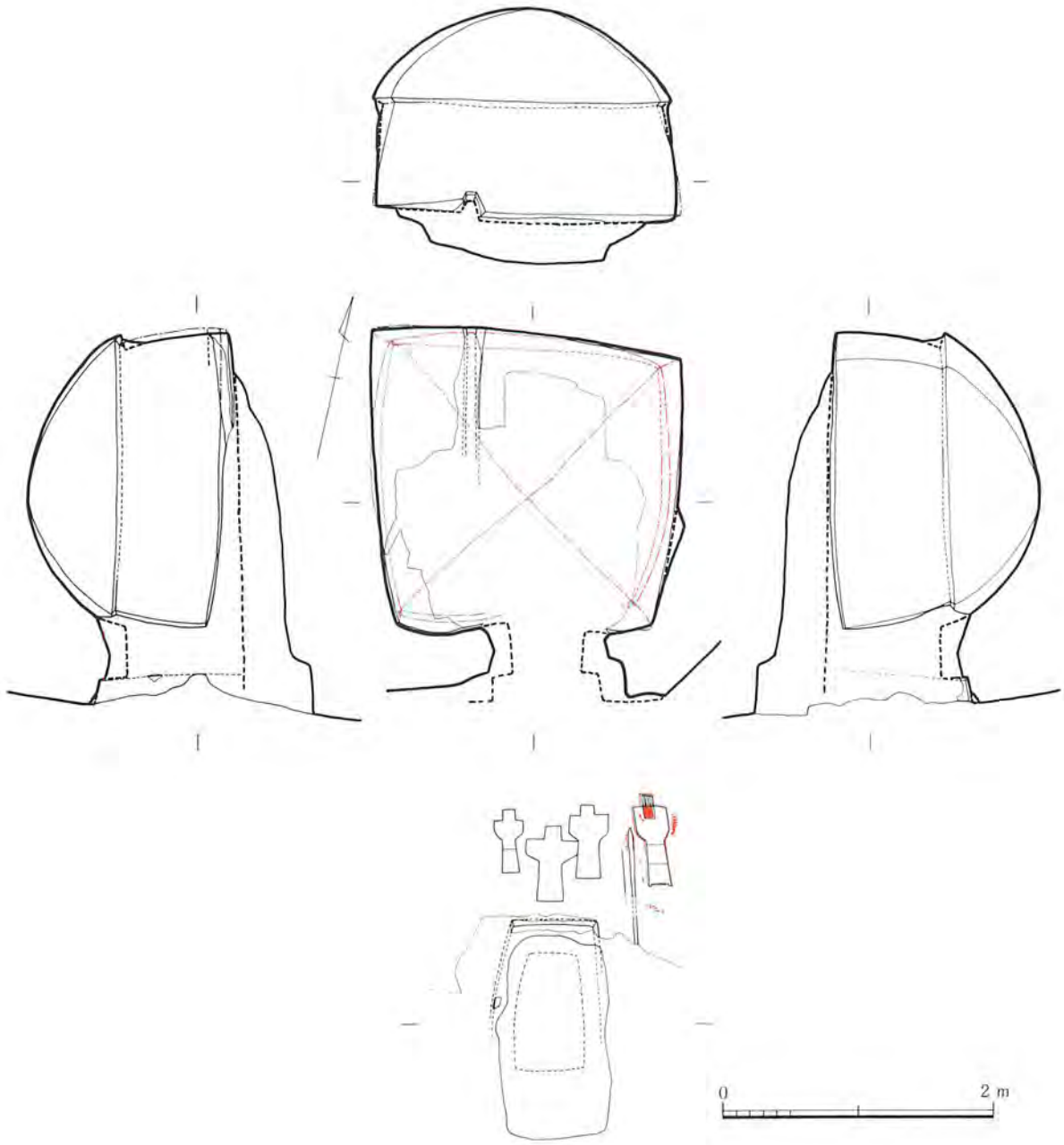
7号横穴墓　II群の5基のうち中央部にある横穴墓である。岩壁がL字状に凹んだ右面に掘られており，装飾もその両面を生かして施されている。羨門はアーチ形で，幅56cm，高さ63cmを測る。羨門の外に幅90cm，高さ114cmを測る長方形の飾り縁が付いている。飾り縁は羨門の下にも巡っており，羨門との段差は25cmついている。羨門から玄室までの間は50cmを測り，玄室は入口より段下がりになっている。玄室内には大きな亀裂が生じており屍床・天井とも摩れている。玄室は左側に偏して掘られており，屍床は平坦で，天井はドーム形である。屍床全体から見ると左側がいくぶん高く，入口側に抉れているのが目立つ。玄室は幅200cm奥行き220cm，高さ105cmを測る。左壁には部分的に赤の彩色が残っている。

装飾は外壁の2ヵ所にあり羨門上方から右側にかけての部分と，外壁左面上方にみられる。羨門上方には飾り縁に接して連続三角文が8個の溝の大きな線刻（薬研彫り）で描かれ，左端の1個除く三角形の頂点から上方に短かい線を伸ばし，横一本の線に結んでいる。なお右端の三角文は下方に線を加えて菱形文にしている。これらの連続文の上方左寄りの部分には大きな三角文が二重に薬研彫りに線刻されている。これらの線刻の溝には部分的に赤色顔料が残っており，もとは全ての溝が赤く塗られていたと考えられる。なお大きな三角文は高さ35cmを測る。この右に靱の浮き彫りがある。奴凧形で，両端は斜め上方に上がって上辺に連点文を抉っている。中央上部には鏃を10本入れている。鏃の先端は尖らせてはいない。鏃の根元に凹字形の一段高い浮き彫り面があり，11個の連点文がみられる。体部には二条の凹部に挟まれた凸帯があり，下方には一条の沈線が引かれている。最下端両側には脚が造られている。鏃と連点文，靱の輪郭などは一部に赤の彩色が残っている。靱は一部が欠損しているが，幅約35cm，高さ55cmを測る。靱の下，羨門の右側に弓が浮彫りされている。下方を欠損しており，幅10cm，現存長20cm程度を測る。弓の右側にも太い棒状の浮き彫りがあるが一部しか残っていないので何であるか不明である。

羨門の左側は鈍角に岩面が折れているが，この部分は若干抉れ，抉ったところに赤の彩色が残っている。この上方に馬などの浮き彫りがある。最上部には蹄を立て，尻尾をピンと伸ばし，背に鞍を乗せた馬が彫られている。頭部を欠損しており，現存長33cm，高さ23cmを測る。その下には馬が二頭並んで彫られている。左側の馬は頭部欠損しているが，首を伸ばし，蹄を立てている。体はやや大きい。現存の大きさは長さ27cm，高さ18cmを測る。右側の馬は顔面が剝落しているが，下顎の状態は馬の特徴をよく表わしており，両耳を立てている。首は長く，肩部には筋肉が付き，



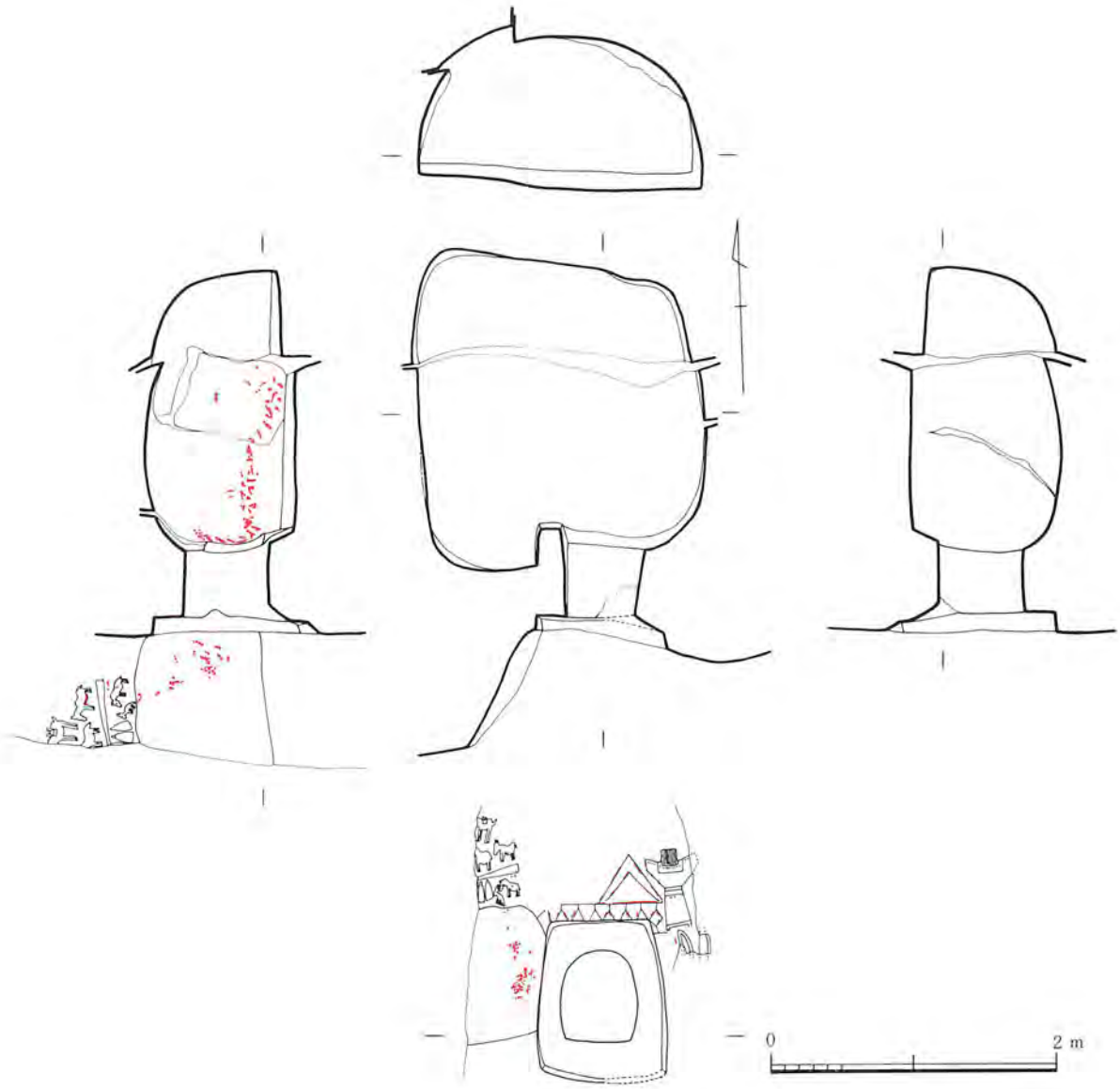
93の7図　大村5号横穴墓外壁装飾文実測図



93の8図　大村5号横穴墓実測図

胴長で，尻尾は風になびくように先端が細くなっている。腹部と前足に赤い彩色が残っている。長さは36cm，高さ16cmを測る。この下に右側を柄とした棒状のものが伸びており，その下に3個の釣り鐘状のものが下がっている。左側の1個は欠損して一部しか残っていないが，これらは馬の間に彫られているので馬鐸のようなものであろうか。棒は先端を欠くが現長65cmを測る。馬鐸状のものは高さ15cmを測る。この右にはさらに馬が2頭彫られている。左の馬は右の馬の後に彫られたためであろうか小さく彫られている。頭部など剝落しているが，目の穴がわずかに残っており，耳を立てている。首は長く，足には蹄を表現している。尾は長く垂れている。右側の馬は最も良く残っている。顔面はまさに馬面で鼻は側方に2つの穴をあけている。口や顎の表現も見事である。目の穴は赤く塗り，耳は立てている。首と胴はやや長く，短い尾がついている。足は小さいが蹄を表現している。この馬は長さ17cm，高さ15cmを測る。これら5頭の馬は従来その一部を牛や兎などとする考えもあったが，上記のような細部の表現からすべて馬とみるべきである。

11号横穴墓　Ⅲ群の3基のうち中央の横穴墓である。羨門は幅58cm，高さ59cmを測る方形である。羨門のすぐ外に方形の縁どりがあるが，京大報告の大正5，6年(1916, 1917)調査の写真にはなく，その後つけられたものである。なお玄室内に朽ちた板扉があり，そのサイズがこの縁どりに一致した。飾り縁は方形で，幅86cm，高さ約100cmを測る。羨門から玄室までの間は約50cmを測り，玄室は20cm程度段

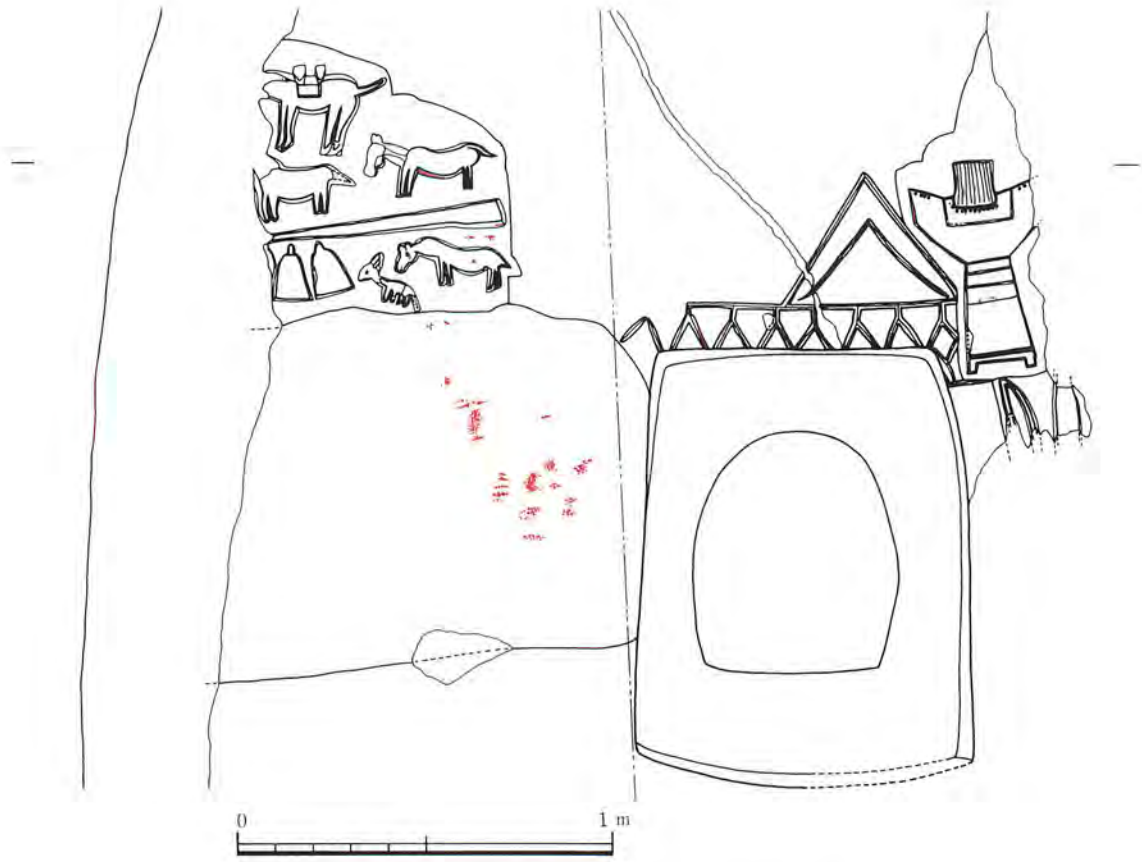


93の9図　大村7号横穴墓実測図

下がりになっている。屍床は方形に近いがひずみがあり，入口側の隅は丸い。右側にのみ仕切りが造られている。天井の形態は奥壁に面があるのでカマボコ形に近い。玄室の幅200cm，奥行き208cm，高さ125cmを測る。

外壁の羨門の左右上方に浮き彫りの装飾がみられる。装飾の中心を成すものは靫で右上に1個，左上に2個ある。いずれも奴凧形で，右上の靫は凹字状部に12本の鏃を入れ，体部は上下に段をつけて中央に高い面を残し，下端両側に脚をつけている。上方の左右と体部中央の3ヵ所には釘状のものを打ちつけた穴がある。この靫は幅42cm，高さ63cmを測る。その右下に線刻で何かを描いてある。上方の四角な杓文字状の形をしており，下部に横に線が引かれている。これも横穴墓の時期に描かれたと考えられ，その形状より靫を小さく描いたものではなかろうか。幅6cm，高さ5cmを測る。

羨門左上の靫は凹字状部に大きな鏃を4本浮き彫りし，体部に一条の凹帯を入れ，その少し下には一条の沈線を引いている。下端両側には脚をつけている。靫の上方左右，中央部，体部下方の4ヵ所には釘状のものを打ちつけた穴がある。また体部には赤い彩色が一部残っている。大きさは幅38cm，高さ74cmを測る。その左側の靫は全く同じ形をしており，同じ位置（4ヵ所）に釘を打ちつけたような穴がみられる。しかし鏃の数は2倍以上の13本が表現されている。幅35cm，高さ74cmを測る。以上の大きく描かれた3個の靫には釘を打ちつけたような穴がみられた。いずれの靫にも中軸上と上方の左右対称の位置にみられる。大正6年（1917）発行の京大報告（浜田耕作・梅原末治）では「或は思ふに斯の如き形のものを釘を以て壁面に打ち付けたる状を示すものか」とみておられる。筆者は釘を打ちつけただけではなく，飾り金具などが付けられていた可能性もあると考える。羨門の左外壁には2個の靫のほか，刀子3本，円文4個，3日月状の文様2個が浮き彫りされている。刀子は靫の間の上中下の3ヵ所にあり，いずれも切先を下に向けた抜き身で，柄の部分より身の部分が浮き彫りが低い。



93の10図　大村７号横穴墓外壁装飾文実測図

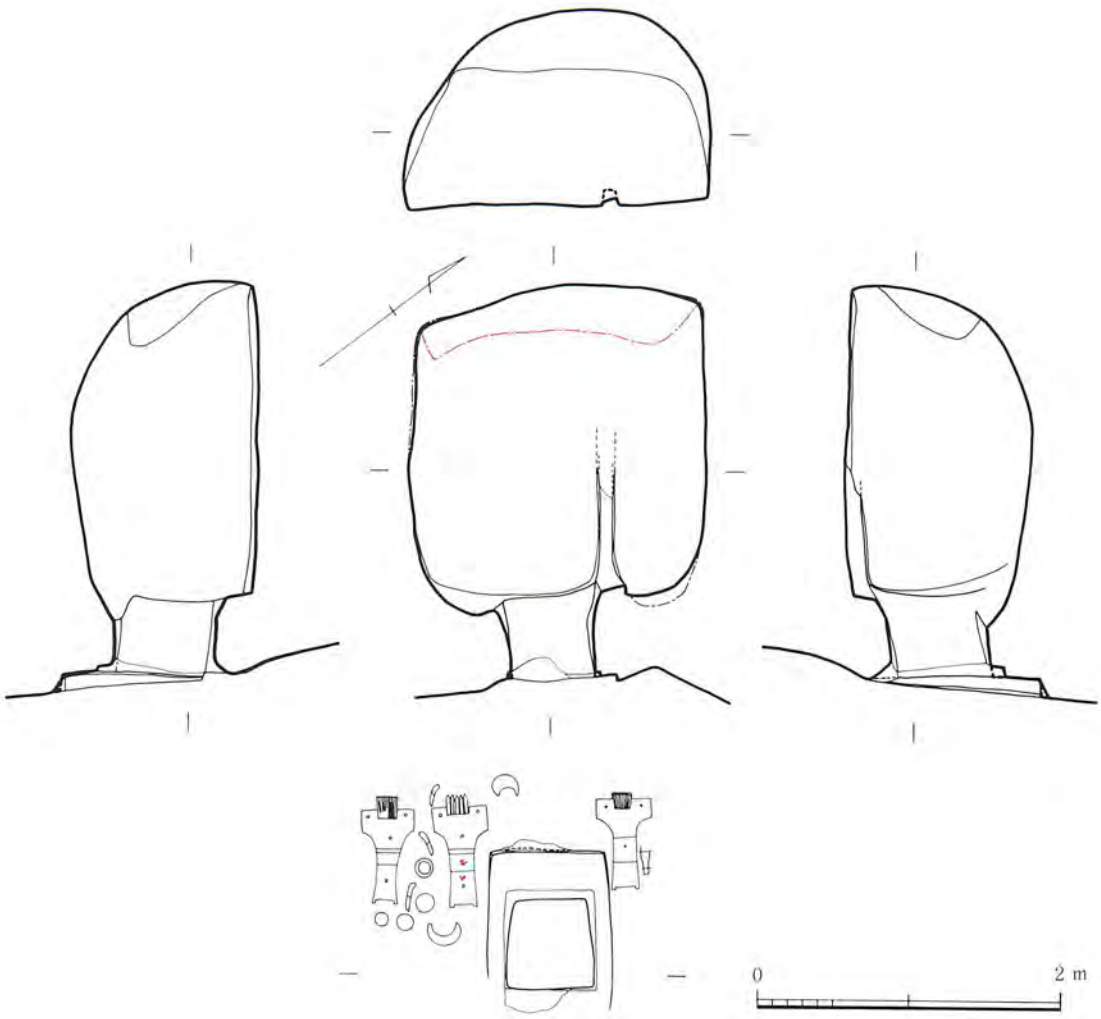
柄の端部がやや太くなり曲がっているのが特徴である。刀子の長さは上から順に15cm，17cm，18cmを測る。鞅の間に円文が２個ある。上方の円文は環状の浮き彫りで直径12cmを測る。下方の円文は単純な円文でやや歪んでいるが長径は15cmを測る。左側の鞅の下方にも単純な円文の浮き彫りが２個並んでいる。その右側の直径13cm，左側の直径11cmを測る。三日月状の文様は右側の鞅の右上部と，同鞅の下方にある。上の文様は上方に曲がった三日月形で，一端は尖っているがもう一端は切ったように尖っていない。下の文様は上のものの上下をひっくり返した形である。上のものは幅18cm，高さ15cm，下のものは幅24cm，高さ20cmを測る。この三日月状のものはその形状より靫（とも）と考えられる。

13号横穴墓　Ⅲ群は13号と14号の２基からなるが，16ｍ離れて造られている。２基とも装飾横穴墓である。13号横穴墓は羨門の左側が壊れており，内外の数ヵ所にひびが入っている。復元すると羨門は長方形で幅51cm，高さ約67cmである。飾り縁も長方形で幅90cm，高さ150cmを測る。羨門と下方の飾り縁とは50cm程段差がついている。羨門から玄室までの間は65cmを測り，通路は奥壁まで達している。屍床は左右にあるが仕切りはなく，通路と５cm程段差をつけている。平面プランは方形で幅215cm，奥行き195cmを測る。天井は低く，通路面から110cmで，軒先の表現はあるがドーム形である。

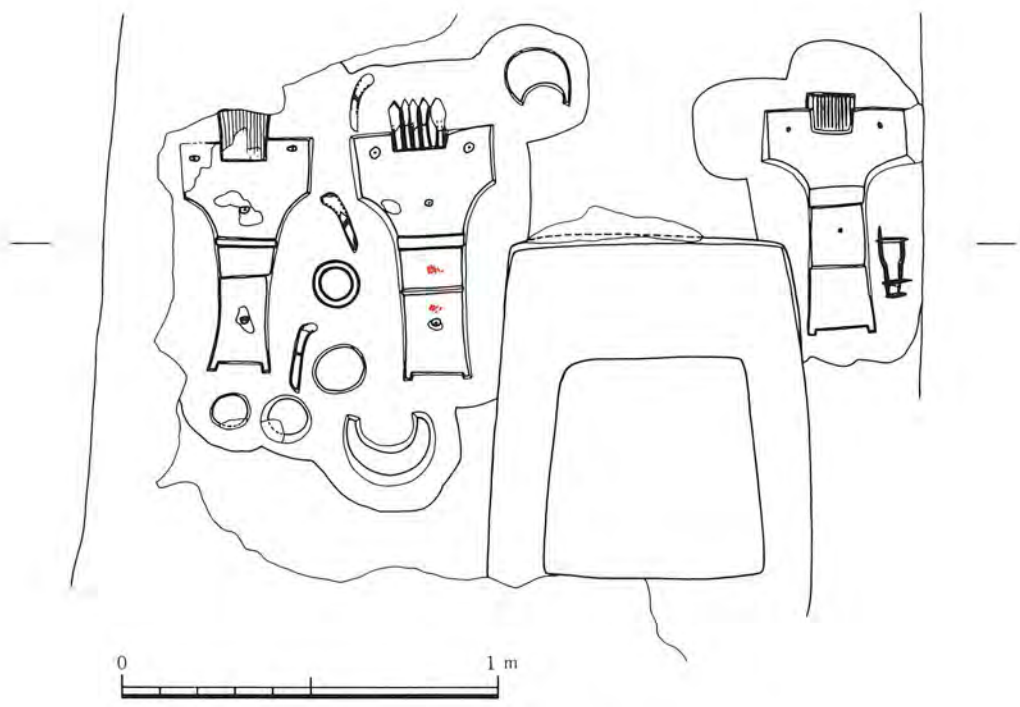
装飾は外壁の３ヵ所にみられる。羨門の右上には線刻（薬研彫り）で盾が描かれている。両側は中程がややくびれている。その内側に二重に同形のものが描かれているが，内側のものは把手を表現したものであろう。盾の大きさは幅30cm，高さ50cmを測り盾の内部や周辺には部分的に赤の彩色が残っている。盾の右側辺のところに細沈線があるが，これは割り付けの線とみられる。このほか盾の右に三角形状の細沈線があるがこれは何であるか不明である。羨門の左上には線刻（薬研彫り）で円文が１個描かれている。直径は12cmで，円文内や周辺に部分的に赤の彩色が残っている。この円文のある面の左に鈍角に外に伸びた岩面が一部残っており，ここに装飾がみられる。残存部は大刀の柄頭と考えられる浮き彫りで，２振並べてある。柄頭の上端が丸くやや右に曲がっているので，頭椎大刀を表現したものと考えられる。いずれの柄頭も赤く塗られている。右側の残存長（縦方向）は11cmを測る。このような大刀を浮き彫りした装飾古墳は熊本県内では玉名市石貫ナギノ横穴墓群に２基と天草郡大矢野町広浦古墳にみられ，大刀の線刻は熊本市千金甲３号古墳に例がある。

14号横穴墓　羨門の右側が大きく壊れている。羨門は復元すると幅35cm，高さ55cm程度を測る長方形と考えられる。飾り縁も長方形で幅約65cm，羨門下部からの高さ約80cmを測る。羨門から玄室までの間は約50cmを測り，玄室は20cm程段下がりになっている。屍床は平坦で隅丸方形で，幅180cm，奥行き200cmを測る。天井は奥のつぶれたカマボコ形で，高さ90cmを測る。

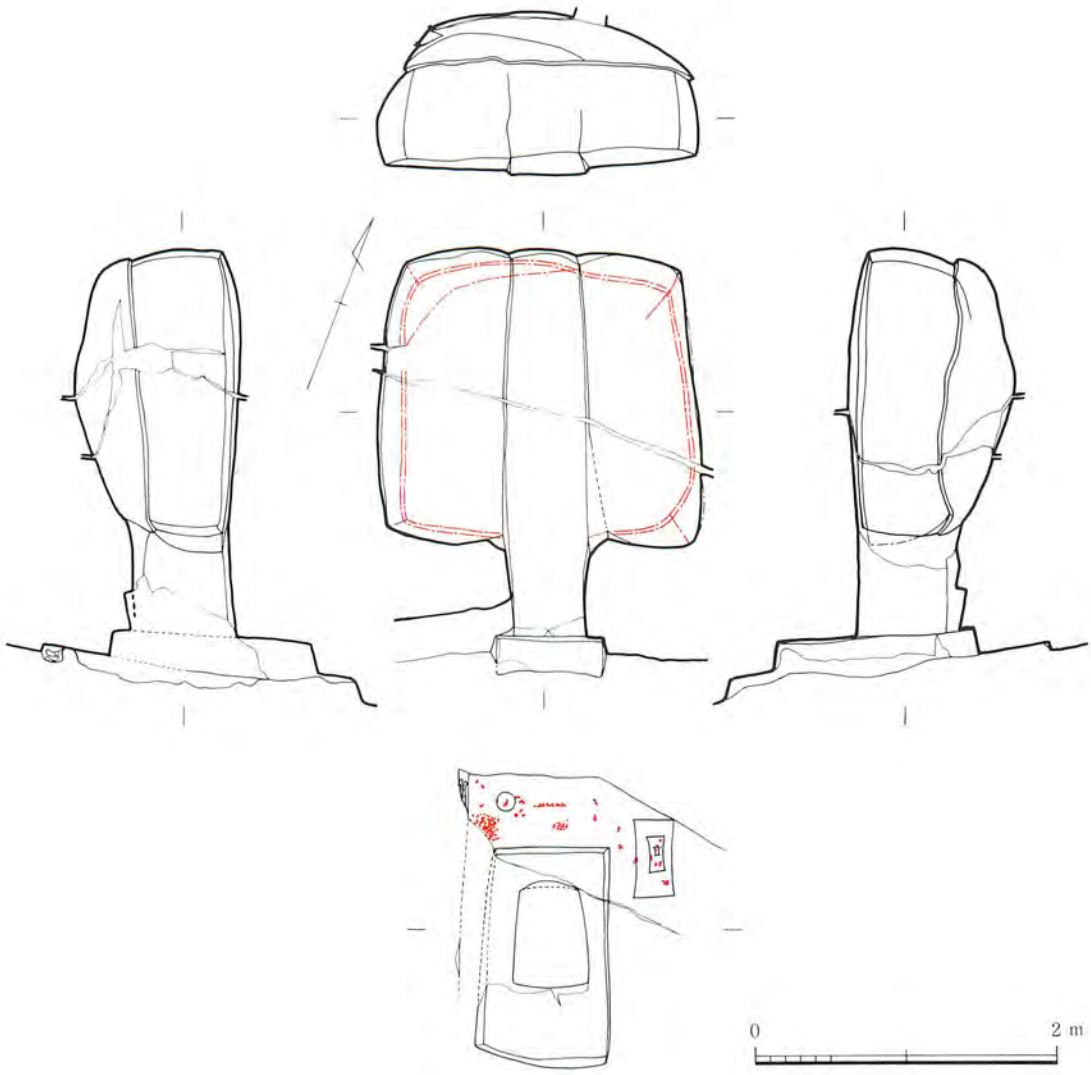
装飾は外壁の２ヵ所にある。１ヵ所は羨門上部で，鞅と



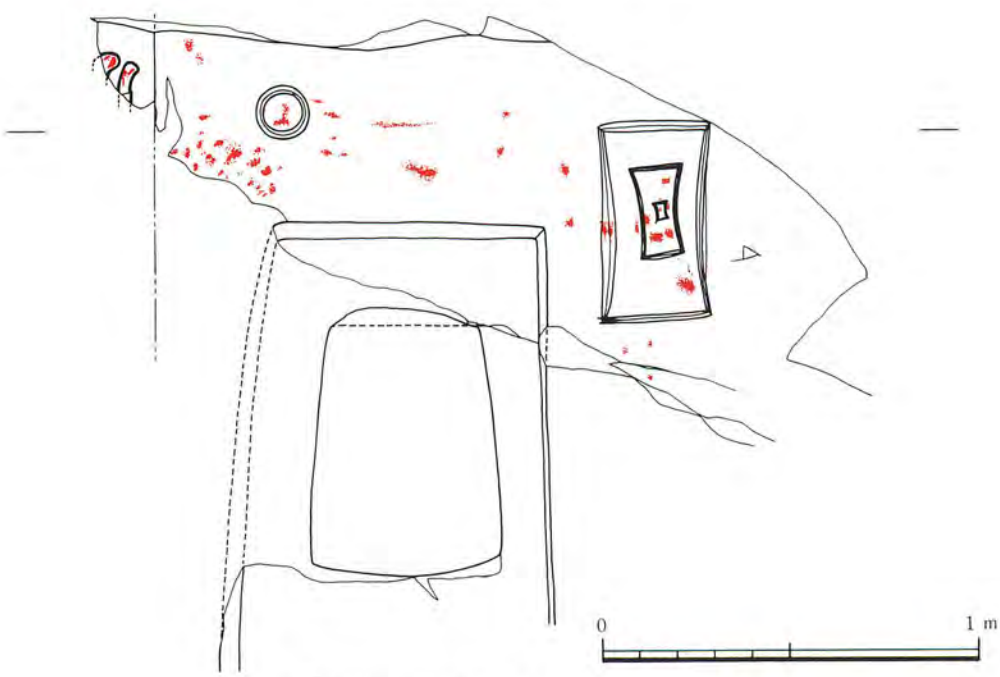
93の11図　大村11号横穴墓実測図



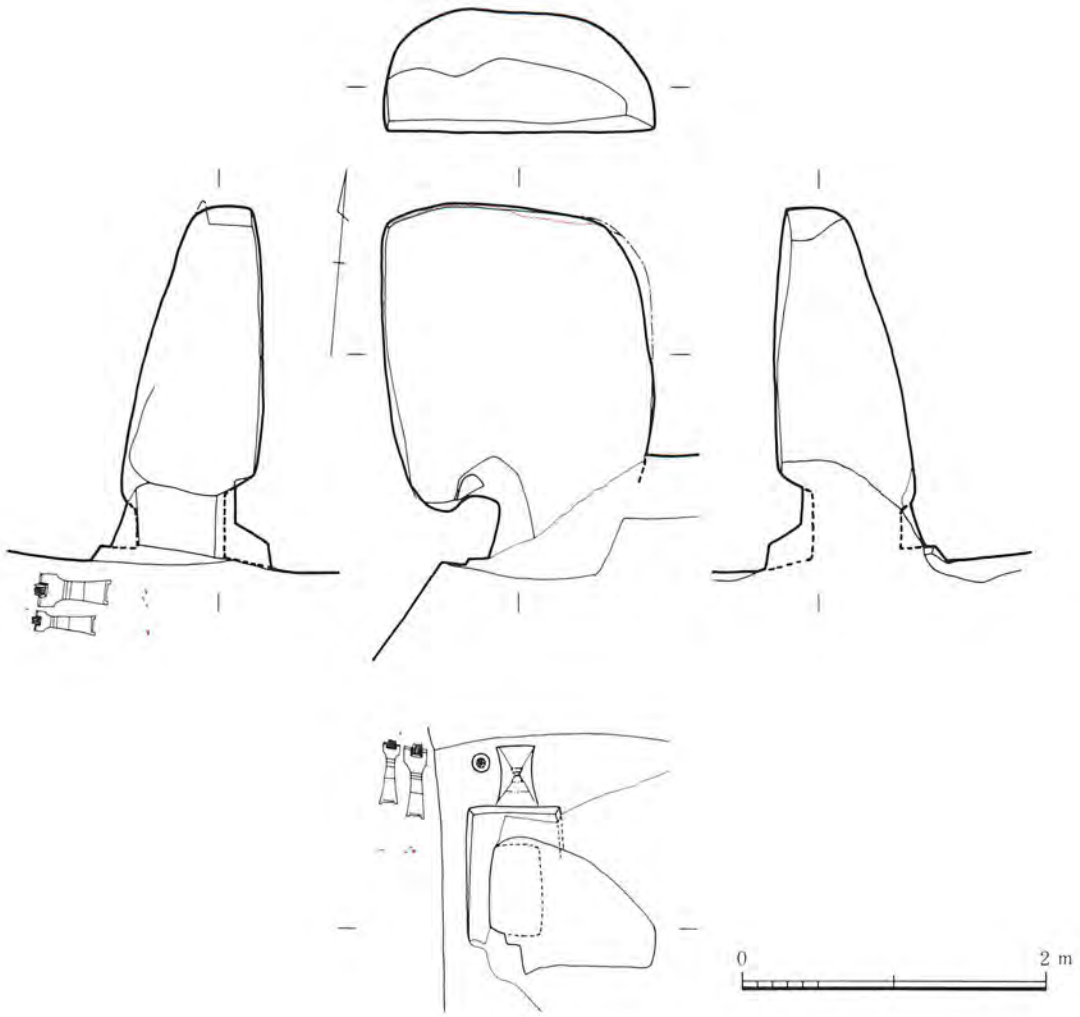
93の12図　大村11号横穴墓外壁装飾文実測図



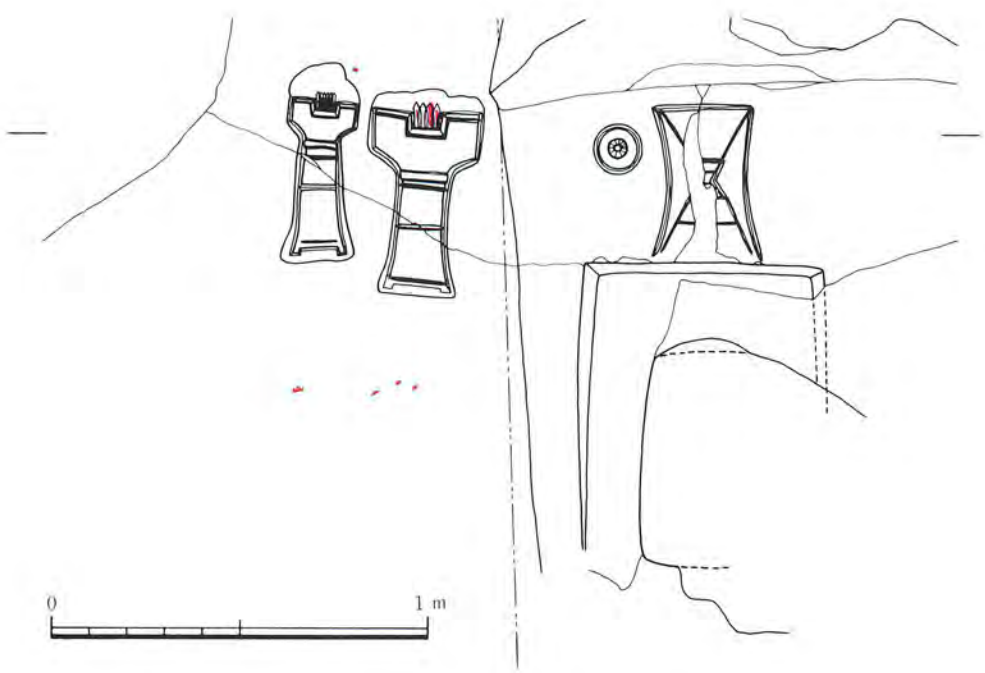
93の13図　大村13号横穴墓実測図



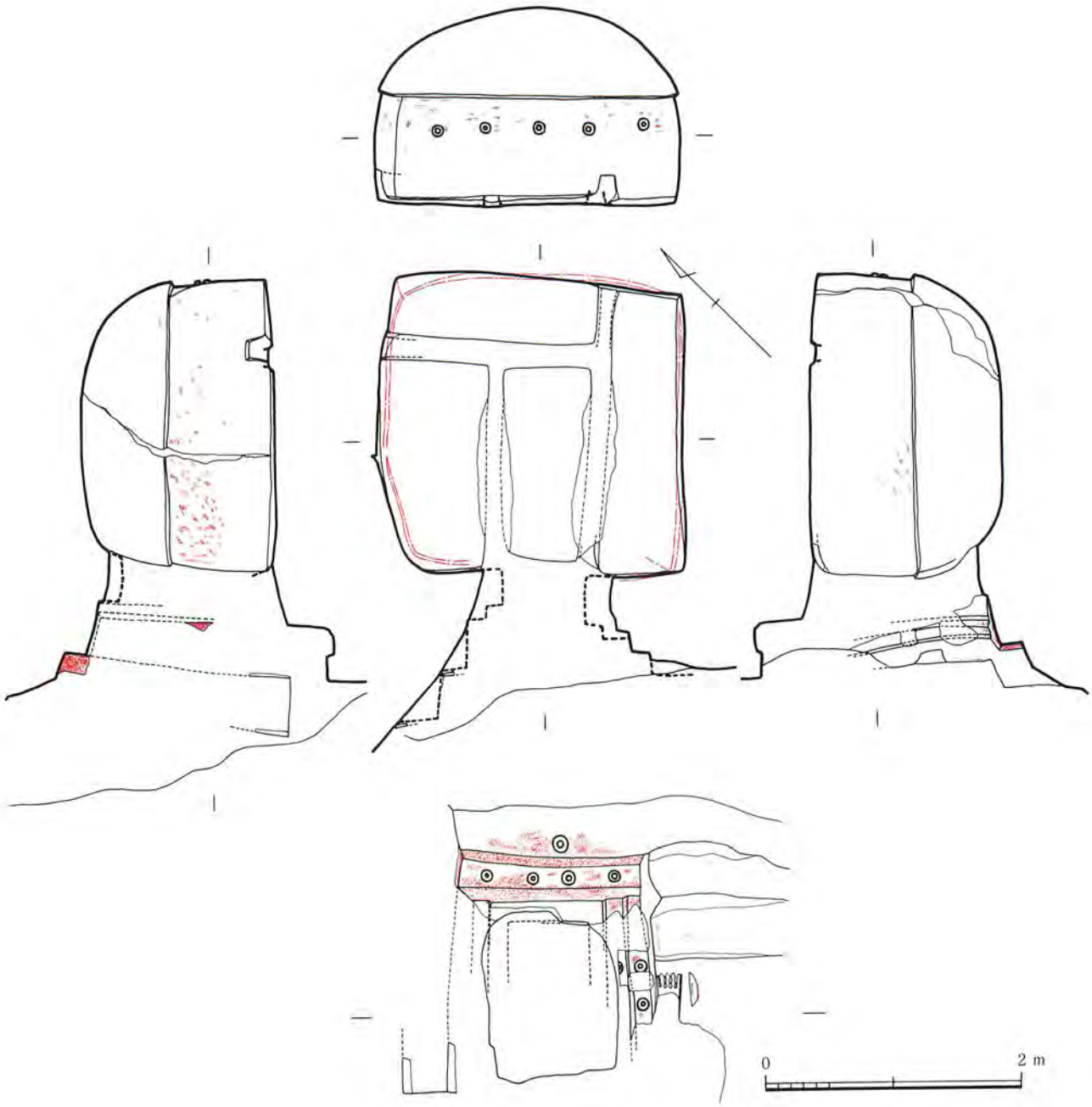
93の14図　大村13号横穴墓外壁装飾文実測図



93の15図　大村14号横穴墓実測図



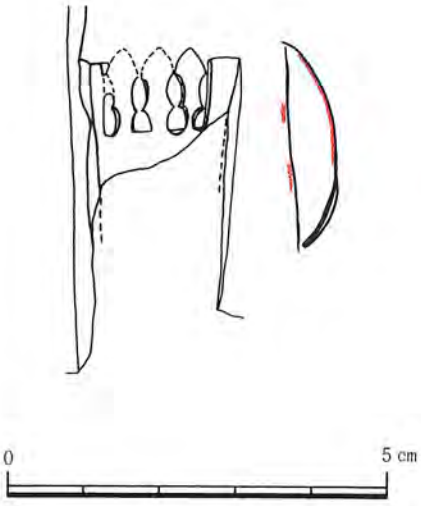
93の16図　大村14号横穴墓外壁装飾文実測図



93の17図　大村15ｂ号横穴墓実測図

車輪状文が線刻（薬研彫り）されている。両側辺は弧状に内側に曲がり，下の辺は省略されている。中程を縦に亀裂が走り壊れているが，中央に鼓形の線刻の中に横線２または３条入れた把手を表現している。また把手からは四隅に斜線が伸びており，下方に伸びた斜線２本の中程を結ぶ横線も引かれている。盾の大きさは幅30cm，高さ40cmを測る。盾の左に車輪状文がある。この文様は三重に円を線刻し，内側の２個の円の間に放射状の線刻を加えたものである。文様の直径は11cmを測る。これと同じ車輪状文は4.5km東に離れた球磨郡錦町京ヶ峰横穴群と宇土市晩免古墳の家形石棺内壁にみられる。盾と円文のある壁面の左に鈍角になった壁面がありここにも装飾が施されている。同形の鞆が２個並べて浮き彫りしてあるが右がやや大きい。凹字状の部分に鏃を浮き彫りしており，右の盾は４本，左の盾は６本表わしている。その下には凹字状の線を入れて鏃を納めた部分と細線で結んでいる。体部には一条の帯状凹帯と２条の線を横に入れ，下端にももう一条の線を入れ，両端に脚をつけている。右側は幅29cm，高さ49cmで，左側は幅18cm，高さ43cmを測る。いずれの鏃も赤の彩色で塗られており，鞆の上方や下方にも一部に赤の彩色が認められる。

15ｂ号横穴墓（旧15号横穴墓）　２基からなるⅤ群のうち規模・構造ともに優れた横穴墓である。残念ながら羨門部が後世に拡張され，破損が激しい。復元すると羨門は方形で幅約60cm，高さ約100cmと推定される。飾り縁は左右と上部とは一致せず，左右には三重，上部には二重みられる。おそらく県内の横穴墓のうち方形の飾り縁をもつものでは



93の18図　大村15ｂ号横穴墓外壁装飾文実測図

最も優れていると考えられる。最も外側の飾り縁は幅約200cm，高さ約190cmを測る。羨門から玄室に至るには段下がりになっていたと考えられる。玄室の平面プランは方形で幅240cm，奥行き230cmを測り，天井までの高さは150cmである。屍床はその仕切りが破壊されているが「コ」の字形配置を成し，右側の屍床は奥壁まで達している。天井はドーム形であるが軒先線の表現はみられる。内壁の至る所に赤い彩色が残っている。また外部の飾り縁は全面赤く塗られていたと考えられる。

装飾は玄室奥壁，飾り縁，右外壁の３ヵ所にみられる。奥壁の装飾は円文で，中央を残して環状に抉っており，等間隔に５個並べている。直径は10cm程度である。飾り縁の装飾も奥壁と同じ環状文で，上方の第１飾り縁の外面に４個，第２飾り縁の外面に１個施されている。羨門の右側の飾り縁には第１飾り縁に１個，第２飾り縁に２個残っているが，本来は４個ずつ並んでいたものと考えられる。左側の飾り縁は壊れているので不明である。向かって右外壁の装飾は靫と弓で，靫は下方を欠損しているが，筒形の靫を表現していると考えられる浮き彫りで，形の整った鏃を３本納めている。この靫の幅は20cm，現存高35cmを測る。その右側に弓を線刻している。この弓の絵の大きさは横６cm，高さ27cmを測り，線刻部分を赤く彩色している。なおこの横穴墓と同じ屍床配置を持ち，造りの丁寧な26号横穴墓も装飾横穴墓であったと推定されるが，破壊されているのが残念である。

出土遺物　明治40年頃，肥薩線の鉄道工事の際，わらび手直刀一口と盌形土器１個が発見された。　（高木正文）

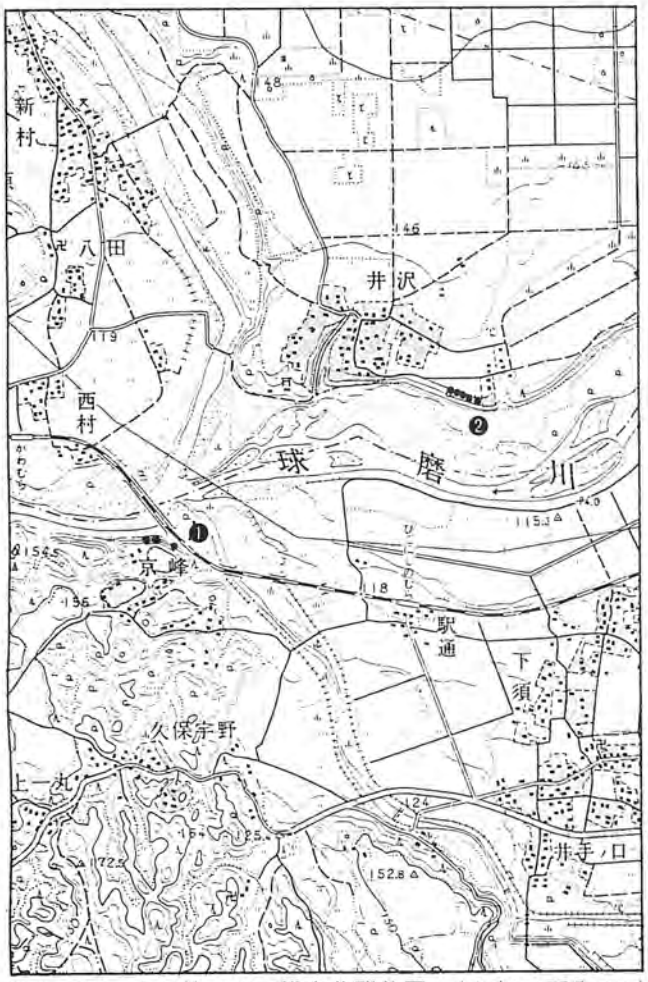
〔参考文献〕

①浜田耕作「球磨郡大村城ヶ下横穴群」『京都帝国大学文化大学考古学研究報告』１　Ｐ48－54　大正６年（1917）　京都
②『熊本県史蹟名勝天然記念物概要附国宝其他』熊本県　昭和12年（1937）
③乙益重隆『肥後上代文化史』Ｐ175－176 日本談義社 昭和29年（1954）
④乙益重隆「熊本県の文化財」『郷土の文化財』13　宝文館　昭和35年（1960）
⑤乙益重隆「城本横穴群」小林行雄編『装飾古墳』Ｐ95　平凡社　昭和39年（1964）
⑥原口長之「城本横穴群」斉藤忠編著『日本原始美術５古墳壁画』Ｐ188　講談社　昭和40年（1965）
⑦日下八光『装飾古墳』朝日新聞社　昭和42年（1967）
⑧森貞次郎『装飾古墳』朝日新聞社　昭和47年（1972）
⑨斉藤忠『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1973）
⑩佐賀県立博物館『装飾古墳の壁画』　昭和48年（1973）
⑪乙益重隆『装飾古墳と文様』（古代史発掘８）　講談社　昭和49年（1974）
⑫原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
⑬坪井清足・町田章編『壁画石造物』（日本原始美術大系６）講談社　昭和52年（1977）
⑭松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑮『熊本県の文化財』３（史跡）　熊本県教育委員会　昭和56年（1981）

93の19図　大村横穴墓付近発見蕨手直刀（京大報告より）

94. 京ガ峰横穴墓群〔昭和34年県史跡〕(⇨94の１～７図)

——球磨郡綿町西簀毛田——

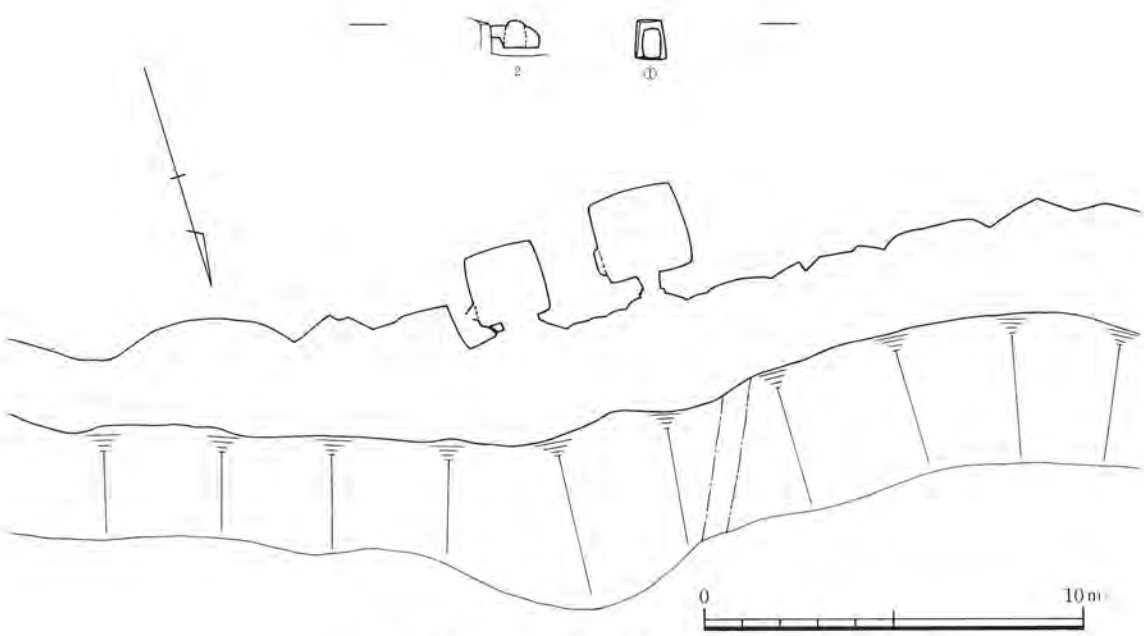


94の１図　京ガ峰・小原横穴墓群位置　（人吉2.5万分の１）
１京ガ峰　２小原

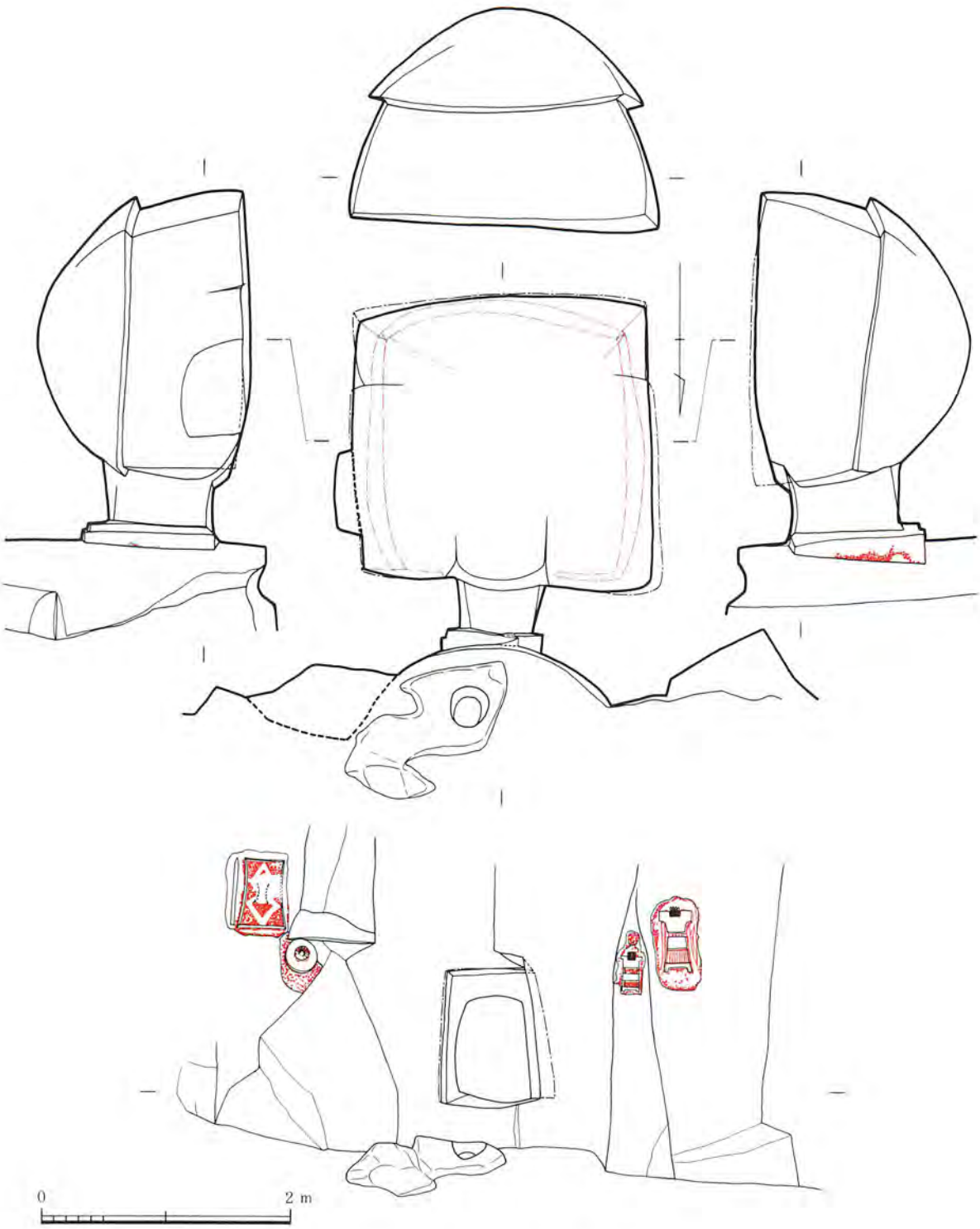
立　地　川辺川が球磨川に合流する所の対岸（南岸）に京ヶ峰横穴墓群がある。この東を小纏川が北流し球磨川に合流している。装飾のある大村横穴墓群は球磨川対岸の西に4.5kmの地点，また小原横穴墓群は球磨川対岸の北東1.1kmの地点にある。京ガ峰横穴墓群は台地の北東端部の凝灰岩崖面にある。

分布と概要　横穴墓群は岩面の北面に２基と約100ｍ離れた東西に１基の合計３基からなっている。北面の横穴墓については以前から知られていたが，東面のものは今回の調査で発見したものである。北面の西から番号をつける。従来１号と２号に装飾があると考えられて来たが，筆者は１号のみに装飾があると考える。しかし，ここでは従来の誤りを直すため２号についても述べることにする。

94の２図　京ガ峰１号横穴墓全景



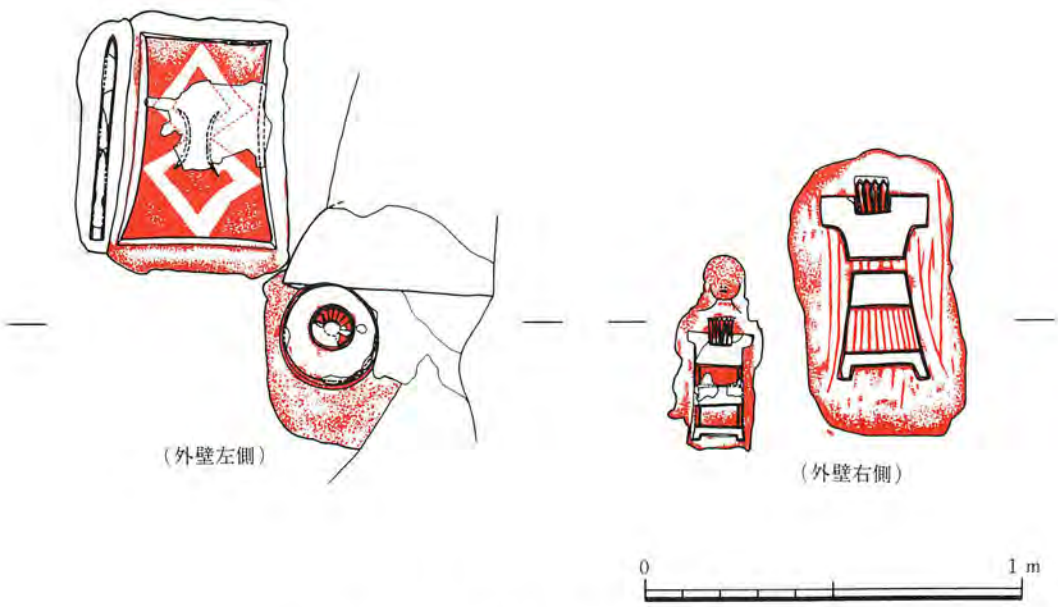
94の３図　京ガ峰横穴墓群配置図



94の4図　京ガ峰1号墳横穴墓実測図

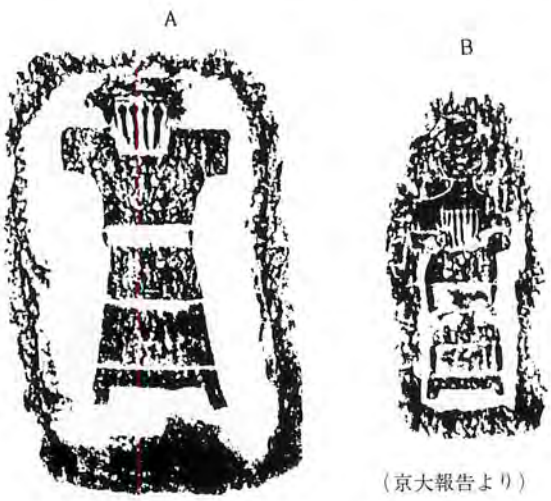
1号横穴墓　崖面のやや凹んだ所に掘られた横穴墓で，真北に向かって開口している。羨門・飾り縁とも長方形で，羨門は幅60cm，高さ85cm，飾り縁は幅80cm，高さ110cmを測り，飾り縁の内面には赤の彩色がみられる。羨門から約40cmで玄室に至る。玄室は20cm程段下がりになっており，平面プランは方形である。屍床は平坦に近いが，端部に「コ」の字形屍床の名残りの表現がみられる。玄室下部はやや粗いのみ痕が残っている。天井は幅広い軒先をつけ，寄せ棟の家形を表現しているが，上部はドーム形になっている。玄室の幅250cm，奥行き235cm，高さ175cmを測る。なお，左壁面の一部は後世に抉っている。

装飾は外壁の左右の張り出した面にみられる。右外壁の装飾は羨門飾り縁から70cmのところのやや上部にあり，靱2個が浮き彫りされている。左側の靱は上部に奴凧形に張り出しをつくり，中央の凹部に6本の鏃を浮き彫りしている。体部には凹帯が2条あり，特に両側に縁を残して長方形に彫り下げている。下部両端には脚がある。鏃と体部の凹帯は赤く塗られている。また靱の周りの抉り込み部分も



94の5図　京ガ峰1号横穴墓外壁装飾文実測図

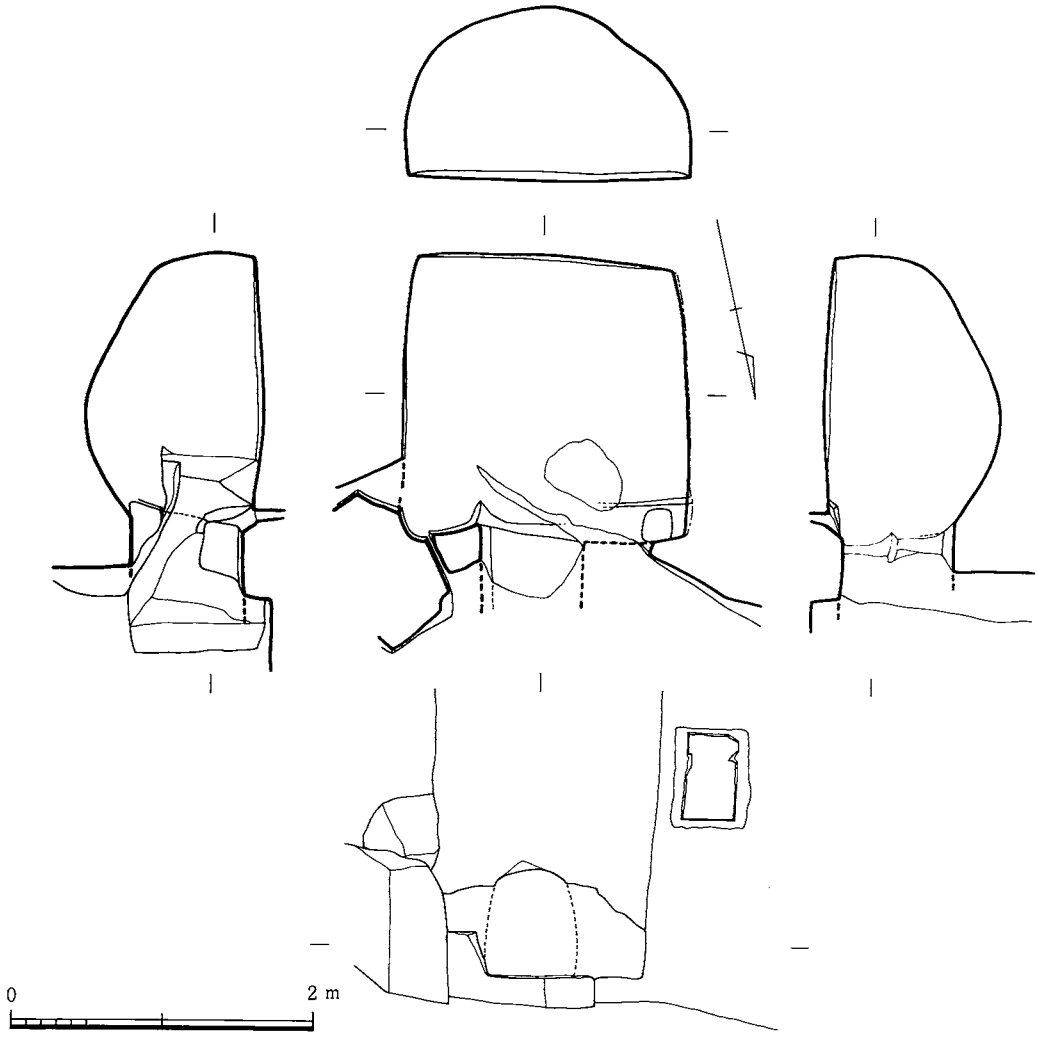
赤く塗られている。この靱は幅18cm，高さ32cmを測る。この靱の上方に靱の周りの抉り込み面と同じ面を拡張した部分があり，ここに線刻で顎，首，肩を描き，顔には鼻の孔と口を入れて人物を表現している。顔の周りの抉り込み面の輪郭は上部が丸く，その下がうねっているので髪を表現していると考えられる。京大報告では「頭部には左右に別れて髪を美髻に結べるが如き状をなせり」と表現されている。これを後世の追刻と考える人もあるが，この部分は靱の周りの抉り込み面と連続しており，削りの技法も同じである。また赤く彩色されていることなどから追刻とは考えにくい。福岡県岩戸山古墳には片面は人物，もう一面は靱となった石人があるが，この装飾も靱を人体と見て顔面のみを線刻したと考えることも可能である。以上のような理由で京大報告を支持して，当時の装飾と考えたい。右側の靱は左側の靱よりやや大きく幅29cm，高さ53cmを測る。奴



94の6図　京ガ峰1号横穴墓右外壁装飾文拓影

凩形で凹部に4本の鏃を浮き彫りしている。体部には2条の凹帯があり，上方の凹帯は浮き彫りを切り離している。下部両端には脚がついている。鏃は赤く塗られ，2条の凹帯部分は赤い縦線で埋め，靱の周辺にも数本の赤い縦線が引かれている。また抉り込みの輪郭内側も赤く塗られている。

羨門の右側の2つの靱と対称的な位置に車輪状文，盾，剣の浮き彫りがみられる。従来これらの装飾は2号に伴うと考えられて来たが，張り出した岩面のうち1号寄りの右端部分にあること，装飾と1号横穴墓羨門との距離が120cmであるのに対して，復元した2号横穴墓羨門までの距離は170cm程もあり，1号の方により近いことなどから1号に伴うものと考えた方がよいのであろう。とすると1号横穴墓の左外壁の装飾ということができる。装飾のうち車輪状文は円盤状の浮き彫りの中に二重の円を線刻し，その中間部分に放射状の線刻を施している。この放射状の部分と文様の周囲は赤く塗られており，文様の直径は28cmを測る。なおこの文様の類例は人吉市大村14号横穴墓外壁と宇土市晩免古墳家形石棺内壁にある。車輪状文の上に壁面の角の部分を抉り込んで平坦面を作った棚状のものがある。これを後世のものと考える人もあるが，装飾と同じ工具を使っていると考えられること，棚状遺構のあと装飾が配置されていること，横穴墓に伴う棚状遺溝の例が山鹿市長岩横穴墓群，鹿本郡鹿央町岩原横穴墓群，玉名市石貫ナギノ横穴墓群などにもあることなどから当時のものと考えられる。この棚状遺構の左に盾の浮き彫りがある。上下辺は直線であるが左右辺は内側にいくぶん弧を描いて曲っている。中央部を破壊されているが，浮き彫りで表現した把手の下端がかろうじて残っている。この盾は赤の彩色で上下に二重の菱形文を描き，その中心部と外方を赤く塗りつぶしてい



94の7図　京ガ峰2号横穴墓実測図

る。盾の大きさは幅42cm，高さ56cmを測る。盾のすぐ左には剣の浮き彫りがある。切先を上に向けており，幅4cm，長さ54cmを測る。

2号横穴墓　1号の左側にあり，羨門とその周辺が崩れ落ちて玄室内が直接見えている。羨門は残存部から復元すると幅60cm，高さ70cm程度と推定される。玄室は10cm段下がりになっている。玄室の平面プランは方形で，屍床の仕切りはないが右の入口側には造り付けの枕があり，凹みが1つ残っている。天井はドームである。玄室の大きさは幅192cm，奥行き183cm，高さ116cmを測る。

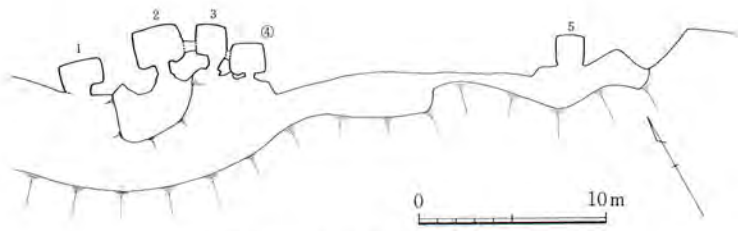
2号横穴墓の外壁右上方に盾状の浮き彫りが見られる。この浮き彫りを今まで横穴墓に伴うものとして誰も疑う人はいなかった。しかし1号の装飾とは工具痕が全く異なる。しかも後世の追刻であるとする決定的な根拠は，2号横穴墓の羨門部を復元すると浮き彫りのある面は岩の中に埋没してしまうということである。つまり横穴墓の羨門部が後世に崩れ落ちた後に描かれたものであるとしか考えられない。以上のような理由からこの横穴墓は一応装飾横穴墓ではないと考えたい。　（高木正文）

〔参考文献〕

①浜田耕作「球磨郡西村京ヶ峯横穴」『京都帝国大学文化大学考古学研究報告』1　P54－57　大正6年（1917）京都
②乙益重隆『肥後上代文化史』P176－177　日本談義社　昭和29年（1954）熊本
③乙益重隆「京ヶ峰横穴」小林行雄編『装飾古墳』P94　平凡社　昭和39年（1964）
④日下八光『装飾古墳』朝日新聞社　昭和42年（1967）
⑤森貞次郎『装飾古墳』朝日新聞社　昭和47年（1972）
⑥斉藤忠『日本装飾古墳の研究』講談社　昭和48年（1973）
⑦佐賀県立博物館『装飾古墳の壁画』　昭和48年（1973）
⑧乙益重隆『装飾古墳と文様』　古代史発掘8）講談社　昭和49年（1974）
⑨原口長之編著『熊本県の装飾古墳白書』熊本県教育委員会　昭和49年（1974）
⑩坪井清足・町田章編『壁画石造物』（日本原始美術大系6）講談社　昭和52年（1977）
⑪松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社　昭和51年（1976）
⑫『熊本県の文化財』3（史跡）　熊本県教育委員会　昭和56年（1981）

95．小原（こばる）横穴墓群（⇨94の１図，95の１，２図）

——球磨郡相良村柳瀬井沢小原——



95の１図　小原横穴墓群配置図

立　地　川辺川が球磨川に合流するところから球磨川を１㎞遡った北岸の凝灰岩崖面に造られている。対岸の京ヶ峰横穴墓群からは1.1㎞程離れている。崖の上は標高140～150ｍの広大な台地で，台地の西崖面（川辺川左岸）には三石横穴墓群がある。

分布と概要　横穴墓群は30ｍの範囲に５基分布している。向かって左から番号をつける。１～４号は近接して造られているが，５号のみは離れている。全て床面は平担で天井はカマボコ形又はドーム形である。床面積は１，２号は広いが，３～５号は狭い。天井は全て低い。３号は４号の後に造られたらしく，掘る途中で４号に通じたので大きく左に曲げて玄室を造っている。４号は装飾横穴墓である。

４号横穴墓　崩壊が激しいが，羨門・飾り縁とも方形で，羨門は幅約50cm，高さ53cmを測る。羨門から約35cmで玄室に至る。玄室は段落ちになっており，平面プランは不整形の隅丸方形を成す。屍床は平担で左側半分程は後世に破壊を受け，左壁も３号と貫通されている。玄室の幅205cm，奥行き175cm，高さ95cmを測る。

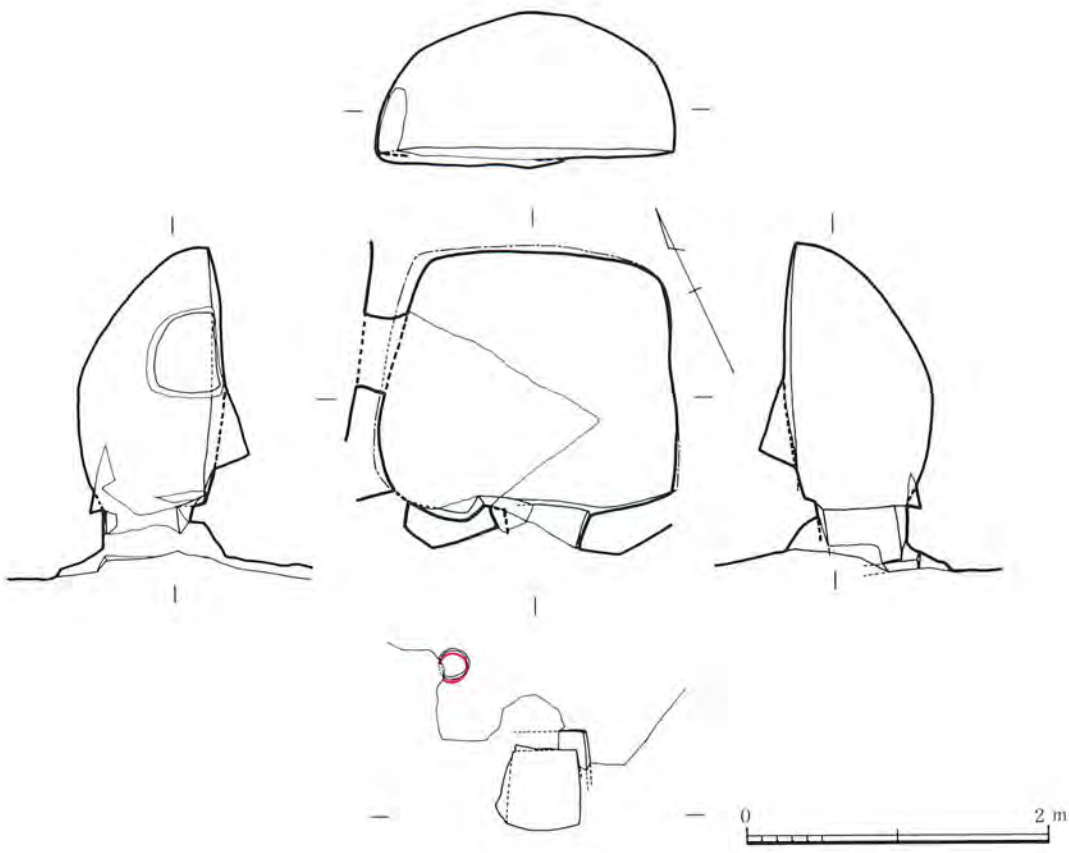
装飾は外壁の羨門左上方にあり，円文が線刻（蘂研彫り）されている。線の溝の幅は２cmで，円文の内径は17cmを測る。溝内は赤く塗られている。

備　考　小原横穴墓群は昭和51年（1976）７月，県立球磨商業高校郷土研究部による三石横穴墓群の実測調査中に，地元の平川源八郎氏の案内で渋谷敦氏らが確認し装飾を発見した。なお３号の内外面にも赤の彩色が認められる。

（高木正文）

〔参考文献〕

①渋谷敦・前田一洋・秋吉大『三石・小原横穴群調査報告』熊本県立球磨商業高等学校郷土研究部　昭和52年（1977）



95の２図　小原４号横穴墓実測図

Ⅳ 付　　章

1．熊本県下における装飾古墳の発見と研究の歴史

乙益重隆

熊本県下において最も早くから開口し，人びとの目にふれた装飾古墳は，八代郡竜北町大野の大野窟[1]であろう。この古墳は石室内の羨道部右側壁に，僧道榮なる者の撰述した「明應六年五月十八日」（1497）木野但馬守相直の願文が彫刻されている。しかし当時はこの石室が古墳の内部施設であるという認識どころか，こんにち僅かに消え残る彩色文様に対する関心さえなかったのであろう。また，熊本県荒尾市平井区上井手三ノ宮神社[2]の前方後円墳から，県境をこえること北に約70mには，福岡県大牟田市東萩ノ尾町萩ノ尾弁天山古墳[3]がある。この石室内部に観音菩薩が建立されたのは元禄5年（1692）8月のことであった。それは羨道部東壁に残る奉行中村伊右衛門の建立した碑銘によってうかがわれる。おそらく石室はそれ以前に開口していたのであろう。そして石室内部奥壁に赤で描いた同心円文や円文・楯や舟の絵があることは知られていたにちがいないが，何の記録も残っていない。また熊本県側に位置する三ノ宮神社古墳[4]も開口年代こそ明らかでないが，武装石人1体を伴い，前方部の南側凸地にその脚部1個があり，注連縄を張って祀る。その傍に長方形の板状石があり，[5]表面に三角形連続文を線刻し赤と青の彩色がみられる。おそらく三ノ宮神社古墳の石材であろう。（『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊41頁参照）

また『肥後国志』八代郡種山手永早尾村の条には大王山叢祠について次のようにみえる。

大王山上二祠アリテ神体六軀夫婦ノ像トモ衣冠和朝ノ風儀ニアラス里俗ハ唐ノ大王ト云（中略）山上ニ石櫃アリ船櫃ト稱ス長二間可リ切石九枚ヲ以テス貞享ノ比（1684—1687）里人之ヲ発キシニ中ヲ船形ニシテ鉄ノ鳥居剣香爐ナト有シト云

この古墳こそ八代郡宮原町早尾，腹巻田（はらまきだ）大王山3号古墳[6]のことであろう。昭和33年『宮原町郷土誌』の資料調査にあたり，墳頂部の測量中に再発見されたものである。内部構造は割石小口積の竪穴式石室で，その容積一ぱいに舟形石棺が安置されていた。石室は奥行3.70m・幅1.10m，石棺の長さ3.10m幅90cmを有し，切妻の屋根形を呈した棺蓋の両側面に，ほぼ方形に彫りくぼめた部分が3箇所ずつ左右6箇所あり，おそらくこれらの彫刻も装飾の一種であろう。

また梅原末治氏によると宇土郡不知火町鴨籠坊ノ平古墳[7]が盗掘されたのは，正徳5年（1715）11月のことであった。「当時肥前国より石工新三郎外1名，同村八尾神社の鳥居建設の為来村し，工を終りて後私に夜間に此の塚[8]を発きて，遺物を奪ひ去りしものなり。」という。しかし棺蓋に彫刻された直弧文B型の美事な半載文様と彩色については，何らの伝承も残っていない。

さらに『肥後国志』五町手永，釜尾村常福寺の条によると

天台ノ古跡ト云此古跡ノ後口山傍畑ノ際ニ窟アリ始ヲ知ラス岸崩レテ埋レ居レシヲ明和六年（1769）ノ春発見セリ口窄ク内ハ一間四方計リ切石ノ壁天井ニヶ向ノ石壁朱ニテ塗リ桔梗ノ紋アリ常福寺ノ粮倉ニテヤアランカ後又埋メ置タリト云。

この古墳こそ大正10年3月3日，国の史跡となった飽託郡北部町釜尾古墳[9]のことである。桔梗の紋というのは，石室内奥壁にそって組立てられた石屋形の前面および内面に，赤・青・白で描かれた双脚輪状文のことで，切石の壁とあるのは割石積の誤である。いずれにしても県下における，古墳石室内の装飾文様のことが記録にみえる例としては最古に属する。

また『肥後国志』が編纂された明和9年（1772）以前に知られていた古墳のうち，装飾を有する古墳をあげると次のようなものがある。まず山鹿郡山鹿手永鍋田村の条には産塚のことがみえる。すなわち

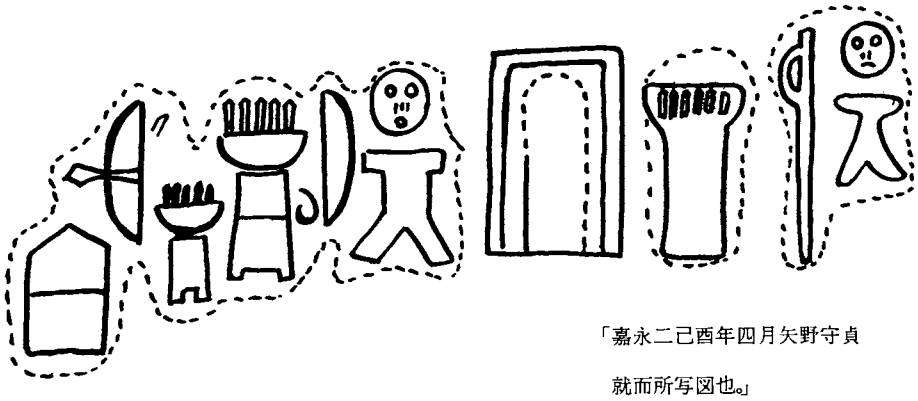
塚ニ穴アリ其内甚タ狭シ乳味乏シキ婦此穴ニ祈テ験アリ賽ニ醴（こざけ）ヲ供ス常ニ醴ノ香アリ

とあり，おそらくこの記事は山鹿市城西福寺のチブサン古墳[10]（前方後円墳）のことであろう。醴（こざけ）というのは甘酒のことで，この信仰行事は今なお継承されている。しかし石室内部の装飾文様については何ら記されていない。なお，『肥後国志』同手永の条にも「産塚二ヶ所アリ鍋田村条下ニ同シ」とあるのは，チブサン古墳の近くにある巨石積の石室を有するオブサン古墳（円墳）のことであろう。去る昭和54年度の実測調査時に[11]，この石室内壁にも三角形連続文の線刻があることが判明した。さらに同村円通寺跡の条に「廃跡ノ下ニ城内二丸ヘノ切通シノ小径アリ岩地蔵ト云ヘルハ此所也岩壁ニ岩地蔵幷穴墓アリ」とあるのは，全体の地形配置からみて城横穴（じょう）第6号[12]のことであろう。「岩地蔵」というのは横穴入口に彫刻された人物像のことらしく，他に楯や靱・弓などもみられる。ちなみに「城内二丸」というのは，城（じょう）氏の居城のことである。

また『肥後国志』中村手永津袋村の条には鹿本町津袋御靈隠塚について「林間ニ一石窟アリ御靈塚ト云口狭クシテ奥ハ九尺[13]四方大石ヲ疊テ築キ上ノ大石ニ胃ノ鉢ノ形ニ穿チタル穴アリ云々」とある。この古墳は石室奥壁ニ白と赤で靱と鞆を，東壁に靱を描いているが，これらの装飾については何らの記載もない。尚，この古墳の東隣に御靈塚という円墳[14]があるが，内部における装飾の有無は明らかでない。

同じ『肥後国志』の上益城郡鯰手永陣村の条には座敷塚のことがみえている。

当村ノ上ノ野ニ塚アリ西ニ向テ穴アリ前ニ大石ヲ置ク穴ニ這入ルコト二間ハカリ石ヲ疊ム奥ニ至レハ方二間許



付　第1図　山鹿市鍋田横穴第27号、崩壊以前の壁面彫刻（『筑後将士軍談』より）

ノ石穴アリ東ノ方大石ヲ壁ニシテ朱ニテ塗リ蛇ノ目ノ紋三ツ付タリ何レノ時何人ノ所為タルヲ知ス里俗座敷塚ト云

この塚は今の上益城郡御船町大字滝川にする今城大塚古墳のことである。墳丘が崩れ，石室の一部が破損しているが，[15] 石室内部の奥壁に円文や楯・靱などを描いており，とくに「蛇ノ目紋三ツ付たり。」とあるのは注目すべきで，おそらく円文三個のことであろう。

次に八木田政名の『新撰事蹟通考編年考徴』巻七（天保12年・1841年完成）によると次のような文がみえる。

芦北郡日奈久田河内村ノ傍古城山ノ続キニ窟アリ其始不知窟上草樹森鬱小堂アリ堂ノ側ニ巨石アリ里民夏時暑ヲ避ケ又相集テ藁ヲ擣ノ台石トス其音硜々トシテ地ニ響ク寛政年中（1786－1800）一人云此音尋常ノ石ニ非スト土ヲ採リ石ヲ発スニ其下沖空ニシテ深ク広シ乃チ梯ヲ卸シ炬ヲ秉テ内ニ入ニ石ヲ蟄テ壁トシ覆トス高サ一丈余広サ二間余方其内地並ニ小キ截石ノ圻界アリ西ニロアリ堅横三尺ハカリ壊テ啓カス東城跡ノ方ニ石戸アリ疑クハ洞ロナラン石戸ノ上ニ石段アリ段上ニ一短刀及鍔金物小キ鉄輪等アリ石戸ノ前ニ三人ノ体骨アリ初メ里人ノ礎トセシハ組留ノ上石ナリ事官府ニ白ス郡代命テ石上ニ壇祠ヲ設ケ以テ祀之勿復開

この巨石下に発見された石室は，今の八代市日奈久新田町田川内（甲）古墳のことである。記述が具体的で詳細な点はきわめて[16]貴重で，おそらく実見録によったものであろう。この古墳は縄文中期の貝塚と重復しており，石室内部の石屋形や石障に同心円文や円文を描いた顕著な装飾古墳である。かつて大正５年（1916）京都帝国大学一行の調査時には５体の人骨を出土しており，おそらくうち３体は寛政年間に発見された分であろう。「鍔金物」とあるのは挂甲小札[17]の残欠らしく「小サキ鉄輪」とあるのは刀剣外装金具の一部であろうか。

また『肥後国年歴』によると，安政４年（1857）５月13日，益城郡沼山津手永井寺村で古墳が発見された。それは偶然にも地震によって藪が崩れ[18]，古墳の石室が開口したという。この古墳こそ石障や羨門などに直弧文Ａ型・Ｂ型・Ｃ型その他を複雑なばかりに線刻し赤・青・白・緑の四色で塗りわけた図柄を有する，上益城郡嘉島町井寺古墳のことである。当時熊本から騎馬の武士が検分のためにやってきたというが，その武士も古墳の装飾が何であるかわからなかったとみえ，何の記録も残っていない。

さらに中島広足の著『かしのしずえ』[19]上巻によると「磐井の墓」という頃があり，筑後国上妻郡吉田村（今の福岡県八女市吉田）の大神宮前（岩戸山古墳）にある石人や，正福寺の石馬，一条石人山の石棺，山鹿市長岩108号上段の大の字形に立つ人物像などを描いているが，それらの多くは矢野一貞の著『筑後将士軍談』の写しであった。とくに矢野一貞のこの本によると山鹿市鍋田横穴[20]27号外壁について，今では崩壊して見ることのできない，右半分の靱と大刀・大の字形に立つ人物像が写されているのは貴重である。そして彫刻群の下段に「嘉永二己酉年四月，矢野守貞就而所二写図一也」とみえている。その他にも同書には「肥後国山鹿郡鍋田村石窟外面所レ鐫立物以レ下与二宮田窟中赤象一足レ中相徴レ上追而贅レ之」と記し，７号横穴外壁の弓に矢をつがえた浮彫をはじめ12号外壁の靱２個その他の彫刻が写されている。文面にみえる「宮田石窟中赤象」というのは今の福岡県浮羽郡浮羽町楠名（くすみょう）重定古墳石室内部に描かれた赤色の靱群のことである。当時平田篤胤系の国学者たちは，この靱のならぶ絵を神代文字であると解した。しかるに矢野一貞はこの絵を古墳封土にならべた埴輪と同様な立物であると解し，これを朱象と称した。そして朱象は宮田石窟だけでなく，鍋田の石窟にも彫られ，今更贅言を要するものではないと称しているのはまさに卓見である。

その他にも慶応２年（1866）頃木原楯臣の著といわれる『蘇渓温古』によると，阿蘇郡阿蘇町手野の上御倉古墳と下御倉古墳について次のようにみえている。

北宮鳥居ヨリ三十間ハカリ西ノ畑中ニ上御倉下御倉ト云大ナル塚二ツアリ共ニ其下ニ穴アリ上御倉ノ穴ノロハ竈ノロノ如クニシテ五間程匍匐シテ入レハ高九尺上下左右ヲ以テタタ入四間ハカリアリ奥ニ幅ニ間高八尺程ノ切石アリ此ヲ障子石ト云其前ニ幅三尺長七尺程ノ石棺アリ此穴ヲ土人風穴ト云夏日ハ毒虫多クシテ入ヘカラス下御倉ノ穴

ハ埋レテ入ルコトヲ得ス

文面にも見える通りこれらは巨石積複室の石室古墳で，県の指定史跡になっている。『熊本の装飾古墳』阿蘇郡の項によると，上御倉古墳には彩色による装飾があるという。それは前室入口の前に倒れていた板石の裏側に，白色で高い山のような形を描き，山のほぼ中央に幅3cmぐらいの線を上下に通し描き，その下段には黄色地に黄色の人物像が上半身だけ残るというが確実性を欠ぐ。

明治時代になると新しい西洋文明の影響をうけて，あらゆる学問は飛躍的発展をとげた。中でも考古学は従来の単なる懐古趣味や，奇異なものに対する興味本位の解釈から前進し，科学的な考証を本位とする学問へと成長しつつあった。それとともに重要な遺跡・遺物の発見が相つぎ，県内にも多くの研究者が輩出した。まず明治2年（1869）には装飾古墳ではないが玉名市繁根木の伝左山古墳が発見され，同6年（1873）には有名な玉名郡菊水町江田船山古墳[21]が発掘され，多くの副葬品を出土した。一方明治8年（1875）5月には『博覧会品物録』[22]が刊行され，それによると当時熊本では盛大な博覧会[23]が催された。出品物には書画骨董品・古器物類から金銀製品，産業関係の機械器具類，農産物・水産物・岩石にいたるまで雑然とならび，中に勾玉・管玉をはじめ金銀製耳環銅矛など，十数点の考古資料もみられる。その目的は巻頭言に云うように「未タ見サルヲ見未タ知ラサルヲ知ル人間ノ楽ミ之ヨリ大ナルハナシ」という，珍品供覧を兼ねた殖産興業にあった。こうした機運はやがては観聚館[24]（明治28年・1895）や物産館[25]（同35年・1902）の設立となり，やがて大正のはじめ頃県教育会の運営する明麗館の設立をみるにいたった。

明治12年にはかの東京大森貝塚を発掘調査したエドワード・S・モース（Edward, S, Morse）[26]が熊本にやって来た。そして熊本から人力車で八代へ行き，その途中大野貝塚の発堀を行っている。しかもその時，貝塚付近にあたという舟形石棺蓋をスケッチしている。その棺蓋は欠損品であったが両側に環状繩掛突起を有し[27]，内面には方形区画を亀甲状にあらわした一種の装飾があったことが知られる。また明治13年熊本県庁では，内務省よりの布達甲第206号にもとずき，県下各地において古墳が発見されたばあいの調査報告を命じている。おそらくそれらの報告控であろう。熊本県立図書館には『古墳発顕記録』と称する精細な絵入りの公文書綴が残っていたが，昭和20年の戦災で焼失したという。幸い十条製紙八代工場の夕葉文庫に所蔵する写本や花岡興輝氏の写本，故丹辺総次郎氏の抄写本があり，原本のおもかげを知ることができる。それによると明治16年（1883）3月1日，宇土郡花園村列戸長代理野口盤平は，今の宇土市立岡の晩免と潤野において，古墳石棺を発見した旨，見取図を副えて県庁に報告している。中でも晩免の石棺は切妻の家形組合せ式で，蓋の前後に繩掛突起を有し，左右両側に環状繩掛突起を設けた特異なものであった。棺身内部には長辺に刀架状突起と16花弁の菊花文を，短辺にも刀架状突起と円文らしきものをあらわす。潤野の石棺は家形の寄棟式で，左右両側に環状繩掛突起を設け，短辺側の縁にそって「吾人，平資盛」の後世の偽刻文字があった。[28]棺内の長辺には三角形連続文とその下際に刀架状突起を彫り，両突起の間と下際にはそれぞれ円文らしきものをあらわす。そして晩免石棺のある小山が「ミサキ山」とよばれ，毎年正月十二日に「テンノフ」祭が行われ，さらに近傍に平家伝説が残るところから，後には安徳天皇陵墓参考地に指定されてしまった。いかに考古学上の智識に乏しかった当時とはいえ，よくも騙されたものである。

明治20年代になると著名な研究者の熊本をおとずれる者が多く，たとえ断片的とはいえ新しい資料をつぎつぎに学界に紹介した。まず若林勝邦氏は同23年に「肥後に於ける石器時代遺蹟調査報告」[29]『東洋学芸雑誌』を発表したのをはじめ，同年には「肥後旅行談」『人類学雑誌』を，同25年には「肥後の古墳」『同誌』を発表し，後の研究者たちに多くの手がかりをもたらした。また先にのべた立岡の晩免と潤野古墳のことが，小杉榲頓[30]氏によって『帝国史蹟取調会報』第3号に発されたのも25年12月のことであった。さらに明治30年代になると中村徳五郎・和田千吉・大野延太郎氏らの旅行踏査が相ついだ。そして井寺古墳の直弧文壁画が各種の文献に紹介され，或は阿蘇中通古墳群（中村徳五郎氏は明治36年2月踏査）のことが世に知られるようになったのも，これらの人たちの現地踏査成果によるものであった。

その頃になると地元研究者の活躍はめざましいものがあった。まず福原岱郎氏は装飾古墳ではないが明治30年10月「玉名郡繁根木古墳出古物参考書」を執筆し，ついで本多氏「肥後国玉名郡繁根木村の古墳及び発見品」『考古学会雑誌』2巻2号（明治31年）を発表した。そして同32年には『同誌』2巻9号と同10号にわたって「肥後雑見」[31]を連載し，八代郡竜北町高塚の装飾ある石棺や大野窟などを巧みなスケッチと解説で紹介した。これらの記事が後に浜田耕作氏を中心とする，京都帝国大学考古学教室の行った装飾古墳調査時の，有力な手がかりとなった。

日露戦争後から大正のはじめにかけては，波多巖氏の活躍がめざましかった。氏は当時旧制鹿本中学の教諭をつとめながら多くの遺跡を調査し，とくに『肥後国菊池河流域に於ける横穴及び古墳（一・二・三・四）」を『考古界』5巻3・9・10号（明治38・39年）に発表し，主として山鹿市一帯の古墳や鍋田・長岩などの装飾ある横穴を紹介した。そして同37年（1904）頃には学生某（中島秀雄氏のこと。）[32]の報告により山鹿市臼塚の石人を踏査し，これが端緒となって県下各地の石人が発見されるにいたったという。ついで同42年には「チブサンの石人につきて」を『考古界』7巻10号に発表。とくに大正元年には「肥後国平小城村古墳チブサンの石棺及模様に就て」を『考古学雑誌』3巻2号に絵入で報告し，これによってチブサンの装飾文様は全国的に知られるにいたった。

大正時代に入るや各地で装飾古墳の発見が相ついだ。柴田常恵氏は同元年夏天草・八代・芦北・鹿本の各地をまわ

り，幾つかの装飾古墳や石人石馬を撮影し学界に紹介した。また同２年夏和田千吉氏は御船町今城大塚古墳の壁画を模写し，重要な手がかりを残した。熊本市小島町千金甲第１号墳の装飾壁画が発見されたのも[33]同２年のことで，熊本師範学校生某によって報知され，角田政治氏の紹介するところとなった。また玉名市石貫ナギノの装飾ある横穴群は，地元石貫小学校[34]長高橋六郎氏の目撃談から，大槻弘毅氏の現地踏査（大正14年）によって確認され，人吉市城本横穴群（一に大村横穴群とも云う）は同５年春，[35]下林繁夫氏によって確認され新聞に発表されて以来，世に知られるようになった。また下益城郡城南町大字板野坂本の同心円文ある古墳石材は，同５年冬熊本第一師範学校生徒某によって発見され，また同郡松橋町宇賀岳古墳の装飾文様は，同年12月[37]平野乍氏によって発見された。

こうした一連の発見が相ついだ[38]結果，同５年12月下旬から同６年１月にかけて，浜田耕作・梅原末治氏による県下の装飾古墳の全面的な調査が行われた。この時の調査には県内における多くの研究者の協力があった。当時の記録によると矢野寛・古賀徳義・笹原助・角田政治・大槻弘毅[39]・堀亮策・武田又男などの人びとの名がみえている。こうして同6年3月30日には，わが国の考古学史上に偉大なる画期をもたらした『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』（京都帝国大学文科大学考古学研究報告，第１冊）が刊行されたのである。その内容は６章からなり，県内における12の装飾古墳と20箇所の装飾ある横穴の他に，福岡県久留米市日輪寺古墳の調査が収録されている。このように京都帝国大学考古学教室による装飾古墳の組織的調査は，全国的な関心をあつめるとともに，県下の研究者に多大の影響をもたらした。

一方，熊本県では大正４年12月10日付『熊本県告諭第一号』をもって「史蹟調査保存二関スル規程」を発令。同日付をもって『熊本県令第二十五号』による「名勝・旧蹟・古墳墓・天然記念物ニ関スル規程」を制定し，これらの登録台帳を作成することを条文化した。この規程は大阪府とともに全国に先駆けて制定したもの[40]で，ついで同６年には三重県と京都府が，同７年には東京府[41]が制定している。それほどに当時の熊本県には文化財に対する尊重愛護の念がたかまった時代であった。

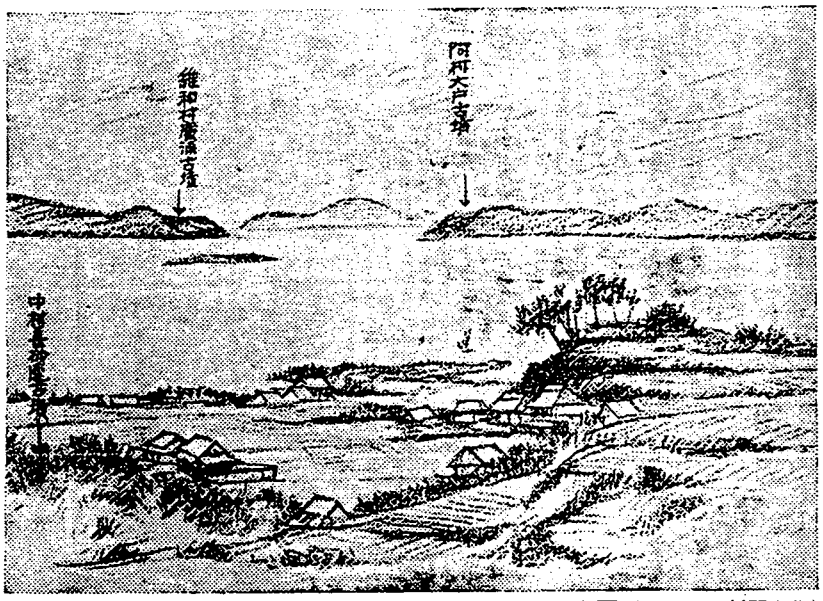
たまたま大正６年３月には八代市岡谷川門前において，開墾に伴い新に装飾古墳の石材が発見された。それはかって明治17年（1884）変形獣首鏡１面と倣製内行花文鏡２面を伴った石棺の北隣にあたり，板状石に円文と同心円文を彫刻したものであったが，すでに古く破壊され明確なことはわからなかった。

ついで大正７年２月には天草郡大矢野町[42]千束蔵々（せんぞくぞうぞう）島（当時の維和村）広浦において，装飾古墳が発見された。現地は天草上島の阿村大戸鼻古墳群の対岸，広浦岬の突端部にあたり，かつてはサムライノ塚と称する数基の古墳があったという。この他に堀鉱業株式会社というダイナマイト工場が設立されるにあたり，それらの古墳が破壊された。たまたま平野乍氏は大刀に刀子を重ね彫りした石材と，刀子ならびに円板に柄をつけた形と，半円板に柄をつけた形の彫刻ある石材を採取されたといい，それらの２枚は現在県立美術館に出陳されている。（済々黌高等学校所蔵）その他にも石材の一部２枚が京都大学考古学陳列館に所蔵されている。この古墳は本来の形が明らかでないが，おそらく大戸南古墳のような石棺系の小石室古墳であったとみられ，果してその一部かどうかわからないが長さ約1.30cm・幅約60cmの板状石に円文の彫刻のならぶ板状石が，現地の蜜柑山の崖線に横たわっている。また京都帝国大学考古学教室では浜田耕作氏を中心に[44]梅原末治・島田貞彦・榊原政職氏らによって，再び九州内における装飾古墳の調査が行われた。調査は同７年１月と４月に行われ，同８年10月15日には「九州に於ける装飾ある古墳」『京都帝国大学考古学研究報告』第３冊が刊行されるにいたった。この報告書の内容も熊本県内が主体をなし，10箇所の装飾古墳のほかに，福岡県久留米市浦山古墳の石棺が含まれている。この時の調査にも矢野寛・古賀徳義・下林繁夫・平野乍・角田政治氏などの協力があったことは，同報告書の序言にみえる通りである。

こうした機運に相俟って県内の有力な装飾古墳はつぎつぎに国の史跡に指定された。まず大正10年３月には井寺古墳と千金甲甲古墳・同乙古墳・釜尾古墳・大村横穴群・石貫穴観音横穴・同ナギノ横穴群の７箇所が，ついで同11年10月にはチブサン古墳・鍋田横穴群の２箇所が史跡に指定された。そして昭和２年３月には「熊本県下に於ける内務大臣指定の史蹟と天然記念物」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第４冊が刊行されたが，その内容は一部の追加調査の成果以外は，『京都帝国大学考古学研究報告』第１冊と第３冊の抄録であった。

昭和時代に入るや県下における装飾古墳に関する研究は，すでに大正時代に出尽した感があり，新しい遺跡の発見も研究論文や調査報告書にもめぼしいものがなかった。わずかに昭和５年５月には小林久雄氏によって，下益城郡城南町東阿高牛頸の横穴群６箇の一つから，扉石の表面に４条の縦線の下際に１条の横線を沈刻した装飾が発見された。その調査成果は氏の追悼論文集『九州繩文土器の研究』（昭和42年）218～219頁に収録されている。また昭和９年４月７日には天草郡大矢野町（旧中村）大字長砂（ながざ）連字上貝場の丘頂に，琴比羅神社を建立するにあたり，横穴式石室墳が発見された。それは右側の石障に直弧文Ａ型とＣ型，および二段にならぶ４個の方形の突起を，左障には直弧文Ａ型を浮彫にしていた。この古墳は下林繁夫氏と坂本経堯氏によって調査が行われ，その結果は下林氏によって『九州日日新聞』と済々黌の同窓会誌に発表されたが，内容はほぼ同じであった。その後浜田耕作・梅原末治氏も現地を踏査されたが，まとまった報告はなかった。

さらに昭和14年10月毛利久氏によって発表された「肥後国京ヶ峯横穴の一壁面彫刻に就いて」『考古学論叢』14輯の論文は，装飾壁画の真偽問題を扱った重要な研究であっ



付　第２図　長砂連古墳発見当時、下林繁夫氏の写生図（九州日日新聞より）

た。すなわち京ヶ峯の１号横穴上段に浮彫された小形靱の上部にはミズラの人物の沈刻があり，従来この人物像は後世の偽刻であるという説が多かった。これに対して毛利氏は石人石馬と横穴壁画彫刻の不離な関係から，この人物像を真物となしている。確にこの人物像は靱や周辺の彫刻壁画とは表現技法を異にし，背面に負うべき靱の上役に正面向の人物を彫るのはいかにも矛盾する。しかしよく観ると人物の顔面は他の彫刻の部分と同様に，丹で真赤に厚塗りしており，一概に偽刻とばかり決められないものがある。

やがて日本は昭和16年12月８日より完全に戦時体制に入ったが，戦時中には特に重要な遺跡の発見もなく，装飾古墳の研究についても取りあげるべき重要なものはなかった。

戦後における考古学の発展はめざましいものがあった。古代史の科学的解明が強調され，埋蔵文化財に対する関心がたかまるや，考古学は俄かに脚光をあびるようになった。加うるに食糧対策として各地に土地開墾が行われるや遺跡・遺物の発見が相つぎ，こうした機運には一段と拍車がかかった。まず戦後において最初に発掘された装飾古墳は昭和23年３月，熊本語学専門学校の学生たちによる熊本市清水町稲荷山古墳であった。この古墳は石障系石室古墳で，石障の内面に赤[45]・白・青の三色で連続三角形文と同心円文を描いていたが，その後の保存処置がわるく文様は消滅してしまった。ついで同年梅原末治氏は菊水町江田船山古墳の再調査を兼ね，塚坊主古墳の発掘を行われた。その時石室奥の石棺内壁と，両袖石に彩色による三角文や円文の配列があったという。ついで同25年５月には坂本経堯氏によって，荒尾市四ッ山古墳の発掘調査が行われた。この古墳は古く盗掘に会い天井を失なっていたが，巨石で囲んだ石室西壁に，コンパスで描いたらしい円文がうすれながら残っていた。また同29年９月26日には八代市鼠蔵（ぞうぞう）町大鼠蔵山東麓[46]の道路開設にあたり箱式石棺が出土し，乙益が調査した。その内壁には弓と靱・垂下した鏡・短甲・大刀と垂下した鏡（或は鞆か？）を浮彫りにしていた。この石棺には土師器の壺片と高坏を伴い，それらの形式からみると５世紀前半まで遡ることがわかった。

また同31年夏には原口長之氏[47]を中心とする山鹿高等学校の生徒諸君によって，山鹿市熊入弁慶ヶ穴古墳の石室内部の清掃が行われた。そして前室の周壁から赤・白・青で描いた幾何図形文や馬が船に乗る光景・舟に鳥がとまった柩舟らしいものなど，数々の場面をあらわした絵が発見された。すでにこの古墳の第二羨門に描かれた同心円文と，馬が舟[48]に乗る光景は，明治35年頃波多嶽氏によって発見され，その時模写された壁画が高橋健自氏の『日本原始絵画』（昭和２年）に引用されている。しかしその頃は原口氏らの調査時ほど豪華で，沢山の絵画があることはわからなかった。その後この古墳は同年12月28日付で国の指定史跡となった。また同34年２月11日より松本雅明氏と蓑田田鶴男は，八代市教育委員会，八代史蹟保存会・肥後考古学会八代支部の協力をえて八代市敷河内（しきかわち）五反田古墳の発掘調査を行った。古墳石室はすでに数回にわたって破壊されていたが，石障壁に円文がならぶ単純な装飾であったが，捩文鏡をはじめ須恵器や玉類，刀子，鉄鏃などが残り，この種の古墳の編年観に有力な手がかりをもたらした。

昭和30年代の終り頃から全国的に地域開発[49]が進行し，各地で遺跡の発見が相ついだ。同39年１月には下益城郡中央村中郡（なかごおり）において，家形石棺の内部に円文と同心円文を描いた装飾が発見され，高島忠平・伊藤奎二・菊池大和・佐藤伸二氏らによって発掘調査が行われた。この石棺は地表下に埋設され，最初から封土があったかどうか疑わしい。県下では時おりこうした封土のない石棺だけの埋葬遺構が発見されることがある。

昭和40年代に入る[50]と開発事業はいよいよ急速化した。同40年には宇土郡不知火町長崎の国越古墳が開墾のため変形されることになり，同年８月には富樫卯三郎氏中心とする

宇土高等学校生徒諸君によって測量調査が行われた。ついで翌41年7月24日には県教育委員会主催のもとに，発掘調査を行った。すでに石室内部は盗掘によって著しく破壊されていたが，奥壁にそって組立てられた平入りの家形石棺には，奥壁と両袖石，棺蓋に直弧文の鍵ノ手文を線刻し，その上から赤と青・緑・白で彩色していた。とくに床面は奇跡的によく保たれ，漢式鏡三面の他多くの貴重な副葬品を出土した。これに併行して県教育委員会では鹿本郡植木町石川山[51]において6基の円墳群を発掘した。原口長之氏によるとうち第4号墳では，羨道に架した石梁の表面に線描きによる絵らしきものが検出されたという。さらに同45年には玉名郡岱明町大原において，線描きの[52]絵らしいもののある箱式石棺（第9号）が発見され，また宇土市笹原町梅崎山でも船を線描きした古墳石材が[53]発見された。とくに昭和52年5月末に発見され，同53年9月から[54]三角町教育委員会主催のもとに発掘調査が行われた，同町大字中村字前畑の小田良（おだら）古墳は，近年にない重要な装飾古墳の発見であった。古墳は本来小封土を有す円墳で内部は石障系の石室があり，その奥壁には左から靱・同心円・楯・同心円・楯・同心円・靱の順に浮彫りであらわす。同心円はいずれも上下から紐で繋ぎとめた形をあらわし，左側壁に4個，右側壁に3個，入口側の壁に2個配置し，昭和54年10月23日付で国の指定史跡となった。以上の他にも県内各地で断片的に発見された例は少からぬものがあり，とくに昭和56年以来熊本県教育委員会が行った基礎調査にさいしては，従来まったく顧みられなかった古墳石室や横穴の内外面から，予想をはるかに上まわる装飾文様や壁画が検出されるにいたった。

一方，戦後になると新しい遺跡・遺物の発見に伴い装飾古墳の研究にもいちじるしい前進がみられた。まず昭和27年に出版された齊藤忠氏の『装飾古墳の研究』（吉川弘文館）は，日本国内だけでなく広く東アジア各地に分布する壁画を有する古墳をも含め，総合的に展開した労作で，その後における装飾古墳研究の手引書となった。また松本雅明氏は『考古学雑誌』45巻4号（昭和35年）に「肥後石貫穴観音の彫刻――大陸文化の滲透と古墳成立の時期――」を発表。その内容は石貫穴観音横穴内部奥壁の千手観音像と軒丸瓦状の突起を，横穴成立期の所産となし，文献史学や美術史的見地から8世紀の所産となす，重大な提言がなされた。この説には今なお強い反対意見もあるが，奥壁の千手観像の一部には石屋形の軒にみるのと同様な赤の彩色の残るものがあり，一概にこの像を後世の追刻とばかり決められないものがあろう。

装飾古墳のことが考古学研究者だけでなく，美術史家やジャーナリズムの面にとりあげられ，まさにブームの状態を呈するようになったのは，昭和39年1月以後のことであった。それは平凡社が雑誌『太陽』№8として「日本の原始絵画」特集号を刊行したことにはじまる。その内容は熊本・福岡県下の最も壮麗な装飾古墳の壁画を選び，カラー写真で紹介したもので，この時からはじめて古墳壁画の色調と迫力が一般に知られるようになった。これより先，昭和36年には朝日新聞社が新聞紙面に「装飾古墳をたずねて」を連載し，熊本日日新聞社でも同39年2月には「夜見国の芸術」を連載するなど，装飾古墳に対する重要性については啓蒙するところ多大なものがあった。ついで同年10月には小林行雄編・藤本四八撮影『装飾古墳』が出版され，ここに装飾古墳は学問的評価だけでなく，芸術的評価をうけるようになり，多くの画家や写真家に強い関心をもたれるようになった。その後刊行された単行本や雑誌は，すべてカラー写真による図録ばかりで，本質的な問題に取組んだ研究書は少なかった。すなわち昭和40年には斉藤忠氏編『古墳壁画』（日本原始美術4.講談社）が刊行され，同42年には日下八光氏著『装飾古墳』（朝日新聞社）が刊行された。とくに日下氏の大著は従来ややもすると考古学上の観察だけに終始した古墳壁画に対して，画家の立場からみた精密な模写と観察の成果が公開され，大きな研究の前進となった。

昭和45年9月には江川和彦氏の解説による「装飾古墳」が『古美術』31号（三彩社）に掲載され，同47年3月31日には写真，榊晃弘・文，森貞次郎の両氏による『装飾古墳』（朝日新聞社）が刊行された。こうした機運の中で奈良県明日香村の高松塚古墳が発掘されたことは，装飾古墳ブームに一段の拍車がかかることになった。同年6月には『芸術生活』25巻6号が「高松塚と装飾古墳」を特集し，乙益の「装飾古墳とは何か」を掲載している。そして同年10月には佐賀県立博物館主催による装飾古墳特別展が開催され『装飾古墳の壁画』という重宝な図録が刊行された。また同48年に刊行された斉藤忠氏の著『日本装飾古墳の研究』（講談社）は，著者が長年にわたって蓄積された研究成果だけに，そこに扱われた対象は国内だけでなく広く東アジア諸地域についても網羅した，今までにない大冊であった。

昭和49年2月25日には乙益の編著『装飾古墳と文様』（古代史発掘8.講談社）が刊行された。また同年3月熊本県教育委員会が行政上の必要から刊行した『熊本県の装飾古墳白書』は当時としては時宜をえた措置であった。

そして昭和50年7月15日には斉藤忠氏著『古墳の絵画』（日本の美術7.至文堂）が，ついで51年3月20日には松本雅明編写真白石巌による『熊本の装飾古墳』（熊本の風土とこころ7.熊本日日新聞社）が刊行され，ともに重宝な案内書と広く普及した。さらに同53年サンポウデラックス社では『99の迷』シリーズとして矢野和之氏の解説と三沢博昭氏の写真による「甦る古墳文化」を特集した。そして同年12月8日には玉利勲氏の『装飾古墳』（平凡社）が，翌54年には藤井功・石山勲氏の『装飾古墳』（日本の美術6.講談社）が刊行された。このように装飾古墳に関する出版物はほとんどが写真図録集の類で，それらの多くは大同小異ともいうべきものであった。それだけに考古学的立場から真向に取組んだ論文や著書[56]は少い。最近装飾古墳ブームは大分下火になりはじめたが，今後の研究にこそ本格的な成果が期待されよう。それとともに古墳や壁画の永久

保存を目的とする，抜本的な研究と対策が恒常的に進められるべきであろう。

註

1　三島格「熊本県大野窟古墳」九州考古学19（昭和38年）

2.『肥後国志』下巻種山手永大野村の条。（九州日日新聞社）

3．梅原末治・古賀徳義・下林繁夫「熊本県下に於ける石人と其の表飾の古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊（大正14年）

4．註3．渡辺正気「萩尾古墳」小林行雄編・藤本四八撮影『装飾古墳』（昭和39年）

5．昭和39年，石人石馬研究会の三ノ宮古墳実側にさいし，三島格氏らによって発見された。

6．乙益重隆「熊本県八代郡大王山古墳」日本考古学年報11（1962年）

7．梅原末治「宇土郡不知火村古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴』（京都帝国大学文科大学考古学研究報告第1冊，大正6年）

8．文面にいう八尾神社とあるのは永尾神社のことか？

9．浜田耕作「肥後国飽託郡西里村釜尾の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊）（大正8年）

10．波多巌「肥後国平小城村古墳チブサン石棺及び模様について」考古学雑誌3巻2号（大正元年）

11・12．田辺哲夫編『熊本の上代遺跡』熊本日日新聞社（昭和55年）

13・14．『鹿本町史』（昭和51年）

15．梅原末治「肥後国上益城郡今城の大塚」『註9』

16．梅原末治「芦北郡日奈久町古墳」『註7』

17．この古墳の発見年代については『新撰事蹟通考』には寛政年間(1789～1795)とみえ，京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊によると，現地調査が行われた大正5年当時から60余年前といい，約半世紀前後の誤差がある。

18．井寺村はここでは沼山津手永に属しているが『肥後国志』（明和9年迄）には鯰手永に属していた。

19．熊本女子大学蔵木版本による。

20．矢野一貞『筑後将士軍談』上・下2冊（昭和2年活字本刊行）

21．『玉名郡誌』55～56頁（明治42年）

22．梅原末治「玉名郡江田村船山古墳調査報告上・下」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1冊（大正11年）

23．『博覧会品物録』上下2冊（明治8年）熊本市呉服町開花堂

24・25．県内の物産ならびに美術品，古器物を陳列した博物館のようなものであったが，明治35年には産業面を強化し物産館となった。

26．県立図書館の設立（明治44年）後，その隣に設けた小博物館で県教育会によって運営されたが，昭和20年の戦災で焼失した。しかし陳列品の主なものは熊本城顕彰会に引きつがれ，現在熊本博物館に出陳されている。

27．E・Sモース・石川欣一訳『日本その日その日』（東洋文庫，平凡社）（昭和46年）この石棺は現在行方不明。
髙木恭二「肥後南部の石棺資料」（三）『宇土市史研究』第4号（昭和58年）

28．この落書は明治10年前後頃，当時の宇土町内に住む一少年が友人と現地に遊びに行き，小刀の先でいたずらしたものという。（昭和30年頃，鎮西高校教諭であった某氏の談による。）

29．若林勝邦氏は明治23年当時宮内省にあって庶務課長をつとめていた。その踏査記は『古墳発顕記録』にみえる遺跡の確認再調査であった。

30．井寺古墳の直弧文壁画は大野雲外の「日本古墳紋様考」『東京人類学会雑誌』143号や，八木奘三郎『日本考古学』農商務省『稿本日本帝国美術史』などに紹介された。中村徳五郎は「阿蘇中部の旧跡について」を『九州日々新聞』（明治40年）に発表。これは後に「阿蘇中部の旧蹟及び古墳に就いて」『歴史地理』43巻6号（大正13年）として再録された。

31．三島格「明治中期の熊本県考古学」『肥後考古』4（昭和59年）26頁によると，福原岱郎氏は別に「午橋生」というペンネームを用いた。

32．『註3.』31頁「鹿本郡臼塚と其の石人」にみえる「学生某」が中島秀雄氏であることは，昭和26年頃氏から直接聞いた。尚，中島氏は鹿本中学・早稲田大学出身。大阪毎日新聞福岡支局長・サイパン日報社長を歴任。昭和23年より同28年まで熊本県教育庁社会教育課嘱託として文化財行政面を担当し，多くの業績を残された。

33．「肥後国上益城郡今城大塚」『註9』32頁。

34．「飽託郡小島町千金甲高城山古墳群」『註7』

35．「高瀬付近の遺跡」『註7』

36．「人吉付近の遺跡」『註7』

37．「肥後国下益城郡杉上村の古墳」『註9』

38．「肥後国下益城郡松橋の古墳」『註9』

39．『註7』序言による。

40．熊本県教育会『史蹟調査の栞』（大正5年）より。

41．椎名慎太郎『精説文化財保護法』（昭和52年）

42．「肥後国八代郡龍峯村の古墳」『註9』

43．「肥後国天草郡維和村の古墳」『註9』

44．昭和39年春，現地踏査の折確認

45．高士與市「稲荷山古墳研究」『考古学報』第1冊（昭和24年）プリント版

46．坂本経堯『四ツ山古墳』（昭和25年）

47．乙益重隆「八代市大鼠蔵山古墳―肥後に於ける箱式石棺内葬について―」『考古学雑誌』41巻4号（昭和31年）

48．原口長之「装飾古墳弁慶ヶ穴調査報告」『熊本史学』11号（昭和32年）

49．松本雅明「敷河内五反田古墳調査報告」『熊本県の文化財」第1集（昭和36年）

50．高島忠平・菊池大和・佐藤伸二・伊藤奎二「熊本県中郡楠原の装飾ある家形石棺」『熊本史学』31号（昭和41年）

51．乙益重隆「国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』（昭和42年）

52．原口長之「石川山古墳群」『同書』

53．松本雅明編『熊本の装飾古墳』30頁。熊本日日新聞社（昭和51年）

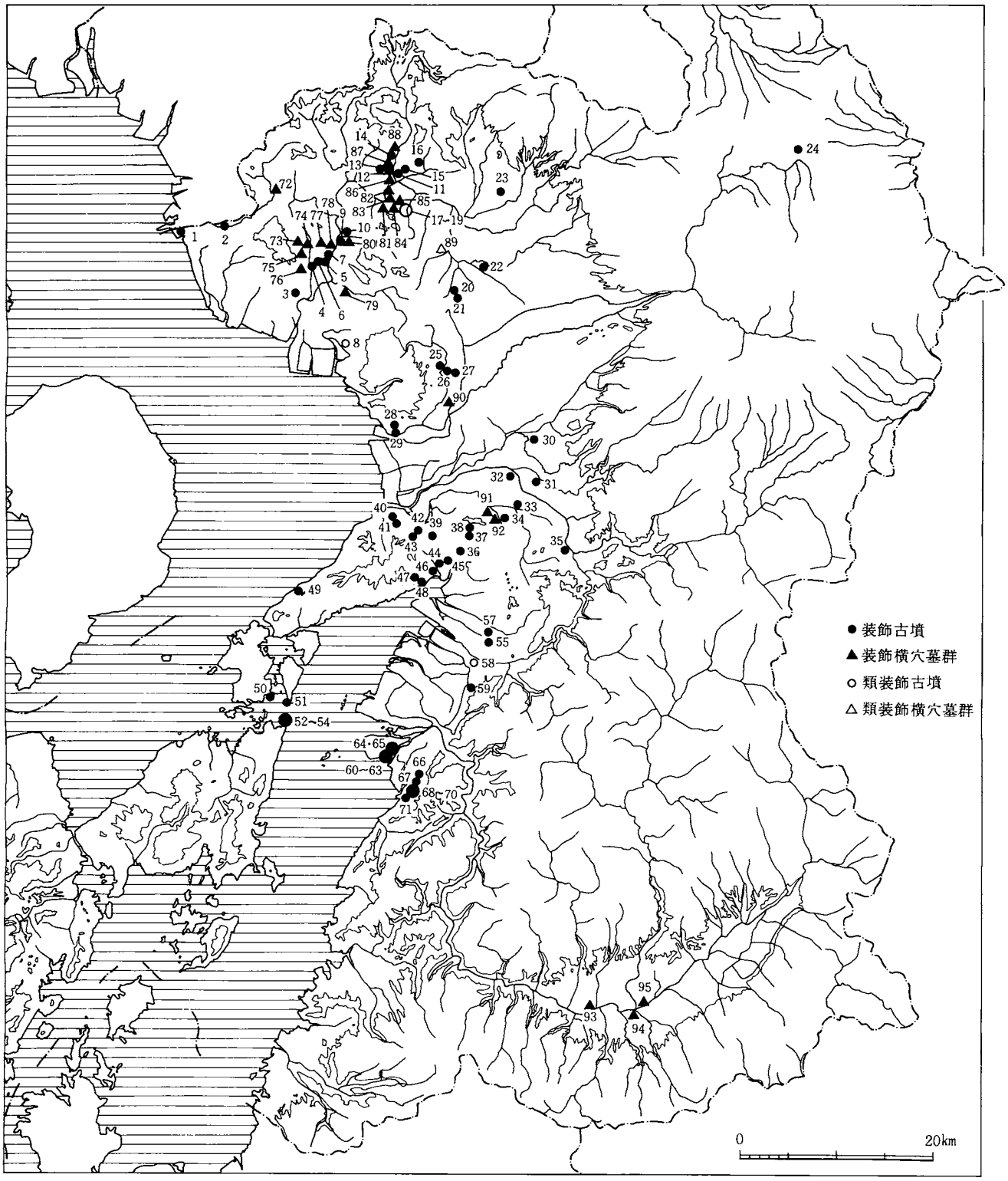
54．富樫卯三郎・清見末喜「梅崎古墳発見線刻の舟」『考古学ジャーナル』第20号（昭和43年）

55．『小田良古墳』『三角町文化財調査報告』三角町教育委員会（昭和54年）

56．装飾古墳についてはここに掲げた出版物だけではなく，考古学古代史の講座本にしばしば取り上げられた。森貞次郎「装飾古墳の発生まで」「装飾古墳の展開」『古代の日本』3（角川書店・昭和45年），乙益重隆「装飾古墳」『新版考古学講座』原史文化下（雄山閣・昭和45年），乙益重隆「埴輪・石人石馬・装飾古墳」『東アジア世界における日本古代史講座』4（昭和55年）などはその代表例で，他にも数篇がみられる。

2．熊本県の装飾古墳の分布と一覧

(1) 熊本県の装飾古墳分布図



1 四ツ山　2 三ノ宮　3 大原９号　4 大坊　5 永安寺東　6 永安寺西　7 馬出　8 経塚　9 塚坊主　10 江田穴観音　11 臼塚　12 チブサン　13 オブサン　14 馬塚　15 弁慶ガ穴　16 御霊塚　17 持松塚原　18 持松３号　19 浦大間４号　20 横山　21 石川山４号　22 石立　23 袈裟尾高塚　24 上御倉　25 釜尾　26 富尾　27 稲荷山　28 千金甲１号　29 千金甲２号　30 井寺　31 今城大塚　32 坂本　33 甚九郎山　34 石之室　35 中郡　36 宇賀岳　37 潤野　38 晩免　39 宇土城石垣の古墳石材　40 梅崎　41 城塚　42 東畑　43 仮又　44 鴨籠　45 不知火塚原１号　46 国越　47 桂原１号　48 桂原２号　49 小田良　50 長砂連　51 広浦　52 大戸鼻北　53 大戸鼻南　54 大戸鼻　55 大野窟　56 大野（位置不明）　57 竜北高塚　58 大王山　59 門前２号　60 大鼠蔵尾張宮　61 大鼠蔵東麓１号　62 大鼠蔵東北麓２号　63 大鼠蔵西北麓２号　64 小鼠蔵１号　65 小鼠蔵３号　66 五反田　67 長迫　68 田川内１号　69 田川内２号　70 田川内３号　71 竹ノ内　72 今村岩の下　73 石貫穴観音　74 石貫ナギノ　75 石貫古城　76 原　77 横畠　78 城迫間　79 田崎　80 長力・北原　81 小原浦田　82 小原大塚　83 長岩　84 岩原　85 桜ノ上　86 鍋田　87 付城　88 城　89 宮穴　90 古城　91 御領　92 牛頸　93 大村　94 京ガ峰　95 小原

※類装飾古墳・類装飾横穴墓群としたものは本書に所収した装飾に類するもの。

(2) 熊本県の装飾古墳一覧表

番号	古墳名	所在地	形態	図文の場所	図文の種類	施文の方法	備考	本文番号
1	四ツ山	荒尾市大島区笹原四ツ山神社境内	円墳・横穴式石室	玄室右壁・左壁	円文	線刻	図文消滅	1
2	三の宮	荒尾市平井区下井手	前方後円墳・横穴式石室	板石	山形波状文	線刻彩色(赤)	石人あり	2
3	今村岩の下Ⅰ-1号	玉名郡南関町今岩の下	横穴墓	飾り縁	円文？	彩色(赤)	13基のうち4基に図文あり	72
				石屋形庇	連続三角文	線刻彩色(赤)		
				通路奥	連続三角文	線刻彩色(赤)		
4	同 Ⅱ-3号	玉名郡南関町今岩の下	横穴墓	飾り縁	円文(珠文)？	彩色(赤)		72
5	同 Ⅱ-7号	玉名郡南関町今岩の下	横穴墓	羨門外壁	円文？	彩色(赤)		72
6	同 Ⅲ-2号	玉名郡南関町今岩の下	横穴墓	石屋形庇	連続三角文	線刻		72
7	大原9号	玉名郡岱明町野口	箱式石棺	内壁	星？・舟？・家？	線刻	移転復原	3
8	石貫穴観音1号	玉名市石貫安世寺	横穴墓	飾り縁	珠文	彩色(赤・白)	5基のうち3基に図文あり。大正10年国指定史跡	73
					盾	線刻		
9	同 2号	玉名市石貫安世寺	横穴墓	飾り縁	円文	彩色(赤・白)		
				屍床仕切り	舟形	浮彫彩色(赤)		
				入口側庇	連続三角文	線刻		
				奥壁	千手観音像	浮彫	追刻の可能性あり	
					不明	線刻		
10	同 3号	玉名市石貫安世寺	横穴墓	屍床仕切り	舟形	浮彫彩色(赤)		73
11	石貫ナギノ6号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	飾り縁	三重円文・珠文・三角文	線刻彩色(赤)	49基のうち15基に図文あり。大正10年国指定史跡。旧6号	74
12	同 8号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	羨門外壁・飾り縁	二重円文・菱形文	線刻彩色(赤)	旧7号	74
				屍床仕切り	連続三角文	線刻		
				石屋形前壁	連続三角文	線刻		
				石屋形屋根	弓矢	線刻		
				石屋形の横	大刀	浮彫		
				奥壁	連続三角文・二重円文	線刻		
					連続菱形文			
13	石貫ナギノ9号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	飾り縁	二重円文・菱形文・弧線	線刻彩色(赤)	旧8号	74
				右屍床仕切り	X文	線刻		
				石屋形前壁	二重円文・菱形文	線刻		
				石屋形庇	X文	線刻		
14	同 12号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	石屋形前壁	大刀	浮彫	旧10号	74
				石屋形仕切り側面	連続X文	線刻		
				石屋形屋根	連続三角文・舟・形状不明	線刻		
15	同 16号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	羨門外壁	円文？	彩色(赤)	旧番号なし	74
16	同 17号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	左右仕切り	舟形・連続三角文	浮彫・線刻	旧15号	74
				奥壁	円文	線刻		
17	同 19号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	飾り縁	円文・X文	線刻	旧17号。図文消滅	74
18	同 28号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	羨門外壁・飾り縁	珠文	彩色(赤)	旧25号	74
19	同 29号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	羨門外壁	円文	彩色(赤)	旧26号	74
20	同 30号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	石屋形庇	連続三角文	線刻	旧27号	74
				奥屍床仕切り	舟形	浮彫		
21	同 37号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	飾り縁	円文・X文	線刻彩色(赤)	旧33号	74
22	同 39号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	飾り縁	形状不明	線刻	旧35号	74
				石屋形庇	連続三角文	線刻		
23	同 40号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	石屋形庇	連続三角文	線刻	旧36号	74
24	同 43号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	羨門前壁・飾り縁	円文(環状)・L字文	彩色(赤)	旧39号	74
25	同 45号	玉名市石貫ナギノ	横穴墓	飾り縁	同心円文・山形文	彩色(赤)	旧41号	74
				仕切り	舟形	浮彫		
26	石貫古城1-7号	玉名市石貫古城原	横穴墓	左右壁	不明	線刻	45基のうち5基に図文あり	75
27	同 Ⅰ-16号	玉名市石貫古城原	横穴墓	内壁	斜線	線刻		75
28	同 Ⅰ-26号	玉名市石貫古城原	横穴墓	奥壁	三角文？	線刻		75
29	同 Ⅱ-3号	玉名市石貫古城原	横穴墓	内壁	植物？・不明	線刻		75
30	同 Ⅱ-13号	玉名市石貫古城原	横穴墓	内壁	人物・舟	線刻		75
31	原3号	玉名市富尾原	横穴墓	右壁	シダ状平行斜線	線刻	16基のうち6基に図文あり	76
				左壁	人物	線刻		
				石屋形前壁	盾	線刻		
32	同 7号	玉名市富尾原	横穴墓	飾り縁	連続三角文・円文	彩色(赤)		76

番号	古墳名	所在地	形態	図文の場所	図文の種類	施文の方法	備考	本文番号
				奥壁・左右壁	円文	線刻		
33	原10号	玉名市富尾原	横穴墓	仕切り	舟形	浮彫		76
34	同12号	玉名市富尾原	横穴墓	石屋形庇	連続三角文	線刻		76
35	同13号	玉名市富尾原	横穴墓	石屋形前面	連続三角文	線刻		76
				石屋形庇	連続三角文	線刻		
				奥壁	連続三角文・円文	線刻		
36	同15号	玉名市富尾原	横穴墓	石屋形庇	斜線	線刻		76
37	大坊	玉名市玉名大坊	前方後円墳？横穴式石室	石屋形内壁・前面	連続三角文・円文	彩色(赤・青)	昭和52年国指定史跡。保存工事	4
				第二羨門両袖石	連続三角文	彩色(赤・青)		
				第一・第二閉塞石	連続三角文	彩色(赤・青)		
38	永安寺東	玉名市玉名永安寺	円墳・横穴式石室	前室奥壁	連続三角文	線刻彩色(赤)	昭和34年県指定史跡	5
				前室右壁	円文・舟・三角文	線刻彩色(赤)		
				前室左壁	円文・馬	線刻彩色(赤)		
				石屋形庇	連続三角文	線刻彩色(赤)		
39	永安寺西	玉名市玉名永安寺	円墳・横穴式石室	玄室奥・左右壁	円文	線刻彩色(赤)	昭和34年県指定史跡	6
40	馬出	玉名市元玉名	円墳・横穴式石室	石屋形内壁・前面	円文・連続三角文	線刻	古墳消滅	7
41	横畠6号	玉名市溝ノ上横畠	横穴墓	飾り縁	円文？	彩色(赤)	10基のうち3基に図文あり	77
42	同8号	玉名市溝ノ上横畠	横穴墓	飾り縁	形状不明	彩色(赤)		77
43	同10号	玉名市溝ノ上横畠	横穴墓	飾り縁	二重円文・帯状文	彩色(赤・白)	半壊	77
44	城迫間2号	玉名市溝ノ上城迫間	横穴墓	飾り縁	舟	線刻	5基のうち3基に図文あり	78
45	同3号	玉名市溝ノ上城迫間	横穴墓	飾り縁	帯状文	彩色(赤・白)		78
46	同4号	玉名市溝ノ上城迫間	横穴墓	石屋形屋根	三角文・斜線文	線刻		78
47	田崎1号	玉名市田崎楢山	横穴墓	飾り縁	二重円文・珠文	彩色(赤・白)	4基のうち1基に図文あり	79
48	塚坊主	玉名郡菊水町瀬川清水原	前方後円墳・横穴式石室	家形石棺奥壁	連続三角文	彩色(赤)	昭和26年国指定史跡。埋没	9
49	長力1号	玉名郡菊水町瀬川長力	横穴墓	飾り縁	円文・三角文・連続三角文	線刻彩色(赤)	2基のうち1基に図文あり。昭和50年県指定史跡。保存工事	80
50	北原3号	玉名郡菊水町瀬川北原	横穴墓	右壁	不明	線刻	8基のうち1基に図文あり	80
51	江田穴観音	玉名郡菊水町江田	円墳・横穴式石室	羨道左壁	形状不明	彩色(赤)	昭和19年国指定史跡	10
52	小原浦田1号	山鹿市小原浦田	横穴墓	羨道壁	形状不明	彩色(赤)	5基のうち4基に図文あり	81
53	同2号	山鹿市小原浦田	横穴墓	左外壁	人物・馬	浮彫		81
54	同3号	山鹿市小原浦田	横穴墓(複室)	羨道両壁	人物	浮彫		81
55	同5号	山鹿市小原浦田	横穴墓	羨門外壁	円文？	彩色(赤)		81
56	小原大塚13号	山鹿市小原大塚	横穴墓	奥屍床仕切り	舟形	浮彫	104基のうち10基に図文あり	82
57	同39号	山鹿市小原大塚	横穴墓	羨道右壁	靫・人物・舟	線刻・浮彫彩色(赤)	旧36号	82
				羨道左壁	舟	浮彫		
				右外壁	舟・人物・不明	線刻・浮彫		
58	同41号	山鹿市小原大塚	横穴墓	右外壁	舟・人物	浮彫彩色(赤)	旧38号	82
59	同51号	山鹿市小原大塚	横穴墓	羨道右壁	二重円文	彩色(赤・白)	旧43号	82
				羨道左壁	円文	彩色(赤)		
60	同53号	山鹿市小原大塚	横穴墓	玄室天井	垂木状の表現のある屋根	陰刻	旧45号	82
61	同54号	山鹿市小原大塚	横穴墓	玄室天井	垂木状の表現のある屋根	線刻	旧46号	82
62	同55号	山鹿市小原大塚	横穴墓	玄室天井	垂木状の表現のある屋根	線刻	旧47号	82
63	同75号	山鹿市小原大塚	横穴墓	奥屍床仕切り	舟形	浮彫		82
64	同91号	山鹿市小原大塚	横穴墓	右壁	X文(菱形文)？・不明	線刻		82
65	同101号	山鹿市小原大塚	横穴墓	仕切り	形状不明	彩色(赤)		82
66	長岩41号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	左外壁	靫	浮彫	120基のうち12基に図文(※追加あり)。昭和34年県指定史跡	83
67	同46号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	左外壁	舟	浮彫彩色(赤)		83
68	同48号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	右外壁	人物	浮彫彩色(赤)		83
69	同52号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	外壁	人物・馬・靫	浮彫	図文破壊	83
70	同91号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	外壁	彫りかけの文様	浮彫		83
				左右・奥仕切り	連続三角文	線刻彩色(赤)		
				内壁	連続三角文	線刻彩色(赤)		

番号	古墳名	所在地	形態	図文の場所	図文の種類	施文の方法	備考	本文番号
71	長岩 92号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	外壁	盾	浮彫		83
72	同 101号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	外壁	人物・馬・盾	浮彫		83
73	同 108号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	外壁	人物・靱・弓・舟	浮彫彩色(赤)		83
74	同 109号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	右外壁	盾	浮彫彩色(赤)		83
75	岩原 I-14号	鹿本郡鹿央町岩原塚原	横穴墓	仕切り	円錐台状突起など	浮彫彩色(赤)	131基のうち8基に図文あり。	84
76	同 I-15号	鹿本郡鹿央町岩原塚原	横穴墓	奥壁	連続三角文	線刻彩色(赤)		84
				奥屍床仕切り	連続三角文	線刻彩色(赤)		
77	同 I-23号	鹿本郡鹿央町岩原塚原	横穴墓	入口側壁面	不明	線刻		84
78	同 I-32号	鹿本郡鹿央町塚原	横穴墓	左外壁	靱	浮彫		84
				奥屍床仕切り	形状不明	彩色(赤)		
79	同 I-38号	鹿本郡鹿央町岩原塚原	横穴墓	内壁・奥屍床仕切り	形状不明	彩色(赤)		84
80	同 I-39号	鹿本郡鹿央町岩原塚原	横穴墓	羨道両壁	格子目状文	彩色(赤)		84
				奥屍床仕切り	V字文・S字文など	彩色(赤)		
				右壁	U字状文など	彩色(赤)		
81	同 IV-3号	鹿本郡鹿央町岩原塚原	横穴墓	奥屍床仕切り	舟形	半浮彫		84
					形状不明	彩色(赤)		
82	同 V-6-6号	鹿本郡鹿央町岩原塚原	横穴墓(複室)	前室奥壁	靱・円文	線刻		84
83	桜ノ上I-1号	鹿本郡鹿央町岩原大野原・清水	横穴墓(複室)	前室奥壁	f字文・靱?	線刻彩色(赤)	23基のうち5基に図文あり。昭和48年県指定史跡。保存工事。旧1号	85
				後室奥屍床仕切り	連続三角文	線刻彩色(赤・白)		
				後室奥壁	二重円文	線刻彩色(赤)		
84	同 I-2号	鹿本郡鹿央町岩原大野原・清水	横穴墓(複室)	前室奥壁	円文など	彩色(赤)	旧12号	85
				後室奥壁	円文	彩色(赤)		
				後室左右壁	円文・C字文・U字文	彩色(赤)		
				後室奥屍床仕切り	形状不明	彩色(赤)		
85	同 I-4号	鹿本郡鹿央町岩原大野原・清水	横穴墓(複室)	後室仕切り	形状不明	彩色(白)		85
86	同 I-5号	鹿本郡鹿央町岩原大野原・清水	横穴墓(複室)	後室仕切り	形状不明	彩色(赤・白)		85
87	同 I-6号	鹿本郡鹿央町岩原大野原・清水	横穴墓	仕切り	人物・舟	彩色(赤・白)	旧2号	85
88	臼塚	山鹿市石臼塚762	円墳・横穴式石室	玄室入口側壁面	人物・三角文	彩色(赤・白)	石人あり：昭和48年県指定重要文化財	11
				石屋形奥壁	三角文・円文	線刻彩色(赤・白・青)		
				石屋形右壁	三角文	線刻彩色(赤・白)		
				石屋形前面	連続三角文	線刻		
89	鍋田 6号	山鹿市鍋田	横穴墓	奥壁	連続三角文	線刻	50基のうち16基に図文あり。大正11年国指定史跡	86
90	同 7号	山鹿市鍋田	横穴墓	右外壁	矢をつがえた弓	浮彫彩色(赤)		86
91	同 8号	山鹿市鍋田	横穴墓	左外壁	人物・靱・弓・盾など	浮彫		86
92	同 12号	山鹿市鍋田	横穴墓	右外壁	靱・盾・鞆	浮彫彩色(赤)		86
				右壁	馬?	線刻		
93	同 13号	山鹿市鍋田	横穴墓	左外壁	不明	浮彫?		86
94	同 14号	山鹿市鍋田	横穴墓	羨道右壁	靱	浮彫彩色(赤)		86
95	同 21号	山鹿市鍋田	横穴墓(複室?)	左外壁	靱?	浮彫彩色(赤)		86
96	同 26b号	山鹿市鍋田	横穴墓	右壁	鳥?	線刻		86
97	同 26d号	山鹿市鍋田	横穴墓	奥壁	人物	浮彫		86
				左右壁・奥壁	人物・不明	線刻		
98	同 27号	山鹿市鍋田	横穴墓	左外壁	人物・剣・鞆・靱・刀子・弓矢・盾・馬	浮彫彩色(赤)		86
				右外壁	人物・剣・靱	浮彫	図文消滅	
				奥壁	連続三角文	線刻		
99	同 33号	山鹿市鍋田	横穴墓	右外壁	琴を持った人物?	浮彫彩色(赤)		86
100	同 46号	山鹿市鍋田	横穴墓	右外壁	靱?	浮彫	彫りかけの図文	86
101	同 49号	山鹿市鍋田	横穴墓	奥壁	靱・円文・連続三角文	線刻		86
				右壁	連続三角文	線刻		

番号	古墳名	所在地	形態	図文の場所	図文の種類	施文の方法	備考	本文番号
				左壁	円文・連線三角文	線刻		
102	鍋田 50号	山鹿市鍋田	横穴墓	奥壁	連続三角文	線刻		86
103	同 52号	山鹿市鍋田	横穴墓	奥壁・左右壁	連続三角文	線刻彩色(赤)		86
				奥屍床前面	連続三角文	線刻彩色(赤)		
104	同 53号	山鹿市鍋田	横穴墓	奥壁・左右壁	連続三角文	線刻		86
				奥屍床前面	連続三角文	線刻		
				奥屍床前面	靱	浮彫		
105	チブサン	山鹿市城西福寺	前方後円墳・横穴式石室	家形石棺奥壁	円文・三角文・菱形文	彩色(赤・白)	大正11年国指定史跡。保存工事	12
				家形石棺右壁	人物・円文・X文	彩色(赤・白)	石人あり	
				家形石棺左壁	円文・菱形文	彩色(赤・白)		
				家形石棺軒先	連続X文(菱形文)	線刻彩色(赤)		
106	オブサン	山鹿市城西福寺	円墳・横穴式石室	奥壁	斜格子目文?	線刻	昭和59年県指定史跡予定	13
				第二羨門右袖石	不明	線刻		
				後室左屍床仕切り石	連続三角文	彩色(赤)		
107	付城 48号	山鹿市城付城・小原	横穴墓	奥壁	馬?(盾?)	彩色(白)	96基のうち3基に図文あり。昭和49年県指定史跡。旧21号	87
108	同 67号	山鹿市城付城・小原	横穴墓	石屋形前面	連続三角文	線刻彩色(赤)	旧28号	87
				左右仕切り石	連続三角文(X文)	線刻彩色(赤)		
109	同 72号	山鹿市城付城・小原	横穴墓	石屋形前面	連続三角文	線刻彩色(赤)	旧32号	87
					円文	彩色(赤)		
110	城 20号	山鹿市城城	横穴墓	右外壁	人物・盾	浮彫彩色(赤)	46基のうち2基の間に図文あり。昭和34年県指定史跡。旧6号	88
111	同 21号	山鹿市城城	横穴墓	左外壁	盾・靱	浮彫彩色(赤)	旧7号	88
112	馬塚	山鹿市鬼天神1328	円墳・横穴式石室	前室奥壁	連続三角文	彩色(赤・白・青)	昭和48年県指定史跡。保存工事	14
				後室右壁・前壁	連続三角文	線刻		
				家形石棺軒先	連続三角文	線刻		
113	弁慶ガ穴	山鹿市熊入1109	円墳・横穴式石室	羨道左壁	人物	浮彫	昭和31年県指定史跡。保存工事	15
				羨道左奥壁	人物・馬・舟にのった人物	彩色(赤)		
				前室右入口側壁	舟にのった馬	彩色(赤・白)		
				前室左入口側壁	同心円文	彩色(赤・青・白)		
				前室右壁	舟にのった馬・舟にのった荷と鳥	彩色(赤・白)		
				前室左壁	舟にのった馬・舟にのった荷・円文・人物	彩色(赤・白)		
				前室右奥壁	連続三角文・菱形文・円文・同心円文	彩色(赤・白・青)		
				第二羨門右壁	舟にのった荷・その他	彩色(赤・白)		
				第二羨門左壁	舟にのった馬・同心円文・靱	彩色(赤・青・白)		
				第二羨門左閉塞部	馬にのった人物	彩色(赤)		
114	御霊塚	鹿本郡鹿本町津袋広江307	円墳・横穴式石室	玄室奥壁	靱・X文	彩色(赤・白)	昭和52年県指定史跡。保存工事	16
				玄室右壁	靱・柄	彩色(赤・白)		
115	横山	鹿本郡植木町有泉横山842	前方後円墳・横穴式石室	石屋形前面	双脚輪状文・連続三角文	彩色(赤・白・青)	解体保管	20
116	石川山4号	鹿本郡植木町石川塚前97	円墳・横穴式石室	羨門天井石	林の中の家?	線刻		21
117	石立	菊池郡西合志町合生石立	墳形不明・家形石棺	屋根	連続三角文	線刻	移転復原	22
118	袈裟尾高塚	菊池市袈裟尾高塚722~724	円墳・横穴式石室	石屋形奥壁	靱・連続三角文	線刻	昭和50年県指定史跡。保存工事	23
				第二羨門楣石	靱	線刻		
119	上御倉	阿蘇郡一ノ宮町手野宮の前	円墳・横穴式石室	閉塞石	人物・山?	彩色(白・黄)	昭和34年県指定史跡	24
120	釜尾	飽託郡北部町釜尾同免	円墳・横穴式石室	石屋形奥壁	双脚輪状文・同心円文・三角文	彩色(赤・白・青)	大正10年国指定史跡。保存工事	25
				石屋形左壁	同心円文・三角文	彩色(赤・白・青)		
				石屋形左右前壁	双脚輪状文・同心円文・三角文	彩色(赤・白・青)		
				石屋形天井石	連続重三角文	彩色(赤・白・青)		

番号	古墳名	所在地	形態	図文の場所	図文の種類	施文の方法	備考	本文番号
				後室入口側壁	連続三角文	彩色(赤・白・青)		
				第二羨門天井	連続重三角文	彩色(赤・白・青)		
121	富ノ尾	熊本市池田3丁目富ノ尾	円墳・横穴式石室	羨道西側腰石	円文・三角文	彩色(赤)	富ノ尾古墳群中に石人あり	26
122	稲荷山	熊本市清水町打越521-4	円墳・横穴式石室	石屋形内壁	円文・三角文など	彩色(青・白)	昭和49年県指定史跡	27
				石屋形左右前壁	同心円文	彩色(赤・青・白)		
				石屋形天井石前面	連続三角文	彩色(赤・青)		
				玄室側壁	同心円文	彩色(赤・青・白)		
123	古城8号	熊本市古城町3-1	横穴墓	閉塞石	形状不明	彩色(赤)	53基のうち2基に図文あり	90
124	同46号	熊本市古城町3-1	横穴墓	右壁	形状不明	線刻		90
125	千金甲1号	熊本市小島下町勝負谷	円墳・横穴式石室	奥石障	同心円文・対角線文・靫	浮彫彩色(赤・青・黄)	大正10年国指定史跡。甲号	28
				左右石障	同心円文・対角線文	浮彫彩色(赤・青・黄)		
				奥仕切り石	舟・同心円文	浮彫彩色(赤・青)		
126	千金甲3号	熊本市小島下町町高城山	円墳・横穴式石室	石屋形奥壁	同心円文・大刀・靫・弓・舟	線刻彩色(赤・緑)	大正10年国指定史跡乙号	29
				石屋形右壁	同心円文・靫・弓	線刻彩色(緑)		
				石屋形左壁とその前面	同心円文・大刀	線刻彩色(緑)		
				石屋形天井石前面	同心円文	線刻		
127	井寺	上益城郡嘉島町井寺富屋敷	円墳・横穴式石室	玄室石障	直弧文・車輪文・梯子文・柱状文・鍵ノ手文	線刻彩色(赤・白・青・緑)	大正10年国指定史跡	30
				羨道両壁・外壁	直弧文・梯子文	線刻彩色(赤)		
128	今城大塚	上益城郡御船町滝川1373	前方後円墳・横穴式石室	奥壁	同心円文・盾?	彩色(赤)		31
129	坂本	下益城郡城南町板野坂本	円墳・横穴式石室	奥石障	同心円文	浮彫	破壊	32
130	甚九郎山	下益城郡城南町沈目奥野1115	前方後円墳・横穴式石室	側壁石材	円文・形状不明	彩色(赤・青・白)	埋没	33
131	石之室	下益城郡城南町塚原北原	円墳・家形石棺	奥壁・両側壁	斜格子目文	線刻	埋没	34
132	御領	下益城郡城南町東阿高八尾	横穴墓	羨門上部	円文	線刻	8基のうち1基に図文があったが消滅	91
133	牛頸2号	下益城郡城南町東阿高一位田	横穴墓	閉塞石	靫?	線刻	10数基のうち1基に図文。横穴墓は破壊。閉塞石は移転保存(破損激しい)	92
134	中郡	下益城郡中央町中郡楠原平927	墳形不明・家形石棺	内壁	円文	線刻彩色(赤・黄)	移転復原	35
135	宇賀岳	下益城郡松橋町松橋岩谷	円墳・横穴式石室	奥壁	円文・連続三角文・菱形文	線刻彩色(赤・緑)	昭和51年県指定史跡。保存工事	36
				左右壁	連続三角文・梯子形文	線刻彩色(赤)		
136	潤野	宇土市立岡町潤野	円墳?・家形石棺	内壁	円文・連続三角文	線刻	埋没	37
137	晩免	宇土市立岡町晩免	円墳・家形石棺	内壁	円文・車輪文	線刻	棺蓋外面にも垂木状線刻あり。埋没古墳石材を石垣に使用。移転保管	38
138	宇土古城	宇土市神馬町宇土城三の丸跡	横穴式石室石材	石材(1)	鳥	線刻		39
				石材(2)	木の葉	線刻		
				石材(3)	舟	線刻		
				石材(4)	舟	線刻		
				石材(5)	木の葉	線刻		
				石材(6)	舟?	線刻		
139	梅崎	宇土市笹原町梅崎	墳形不明・横穴式石室	右壁	舟	線刻	半埋没	40
140	城塚	宇土市城塚町	墳形不明・横穴式石室	左壁	舟?	線刻	破壊	41
141	東畑	宇土市恵塚町東畑	円墳・横穴式石室	奥壁・右壁	形状不明・連続三角文	線刻	半埋没	42
142	仮又	宇土市恵塚町仮又	円墳・横穴式石室	左右壁	舟・木葉文	線刻	昭和57年県指定史跡	43
143	鴨籠古墳	宇土郡不知火町長崎坊ノ平	円墳・方形石室	家形石棺棺蓋	直弧文・円文・梯子形文	線刻彩色(赤・青)	家形石棺は移転保管	44
144	不知火塚原1号	宇土郡不知火町高良栗崎坊平	円墳・横穴式石室	天井石	旗旌?木葉文など	線刻	通称鬼塚	45
				内壁	舟・旗旌?など	線刻		

番号	古墳名	所在地	形態	図文の場所	図文の種類	施文の方法	備考	本文番号
145	国越	宇土郡不知火町長崎国越	前方後円墳・横穴式石室	家形石棺奥壁	直弧文・梯子形文	線刻彩色（赤・青・緑）		46
				家形石棺左右前壁	直弧文・梯子形文	線刻彩色（赤・緑）		
				家形石棺屋根	方形文・連続三角文・鍵ノ手文	線刻彩色(赤)		
146	桂原1号	宇土郡不知火町長崎白玉	円墳・横穴式石室	奥壁	同心円文	彩色(白・黒)	昭和50年県指定史跡。保存工事	47
				玄室四壁	舟	線刻	通称白玉古墳	
147	桂原2号	宇土郡不知火町長崎白玉	墳形不明・横穴式石室	羨道右壁	舟と波	線刻	半壊	48
148	小田良	宇土郡三角町中村前畑	墳形不明・横穴式石室	奥石障	同心円文・盾・靫	浮彫	昭和54年国指定史跡。埋没	49
				左右と入口側石障	同心円文	浮彫		
149	長砂連	天草郡大矢野町長砂連貝場	円墳？・横穴式石室	右石障	直弧文	半肉彫	昭和50年県指定史跡。保存工事	50
				左石障	直弧文・円文・梯子形文	半肉彫		
150	広浦	天草郡大矢野町千束広浦	墳形不明・箱式石棺	石材(1)	大刀・刀子	浮彫	破壊。装飾石材は移転保管	51
				石材(2)	刀子・円文・半円文	浮彫		
				石材(3)	刀子・円文	浮彫		
				石材(4)	上部半円下部方形の物	浮彫		
151	大戸鼻北	天草郡松島町阿村御手水	円墳・横穴式石室	奥・左右石障	円文	線刻	昭和48年県指定史跡。保存工事	52
152	大戸鼻南	天草郡松島町阿村御手水	円墳？・箱式石棺	南側壁	同心円文（間に連続三角文）	線刻	昭和48年県指定史跡。保存工事	53
153	大戸鼻石棺	天草郡松島町阿村御手水	箱式石棺	側壁	円文	彩色(赤)	図文消滅。移転復原	54
154	大野窟	八代郡竜北町大野芝原	円墳・横穴式石室	玄室・前室・羨道壁面	形状不明	彩色(赤・白)		55
155	竜北高塚	八代郡竜北町高塚吉本	円墳・家形石棺	東壁・西壁	円文	浮彫	半壊	57
				天井部	円文・方形区画	浮彫・陰刻		
				石枕	直弧文	浮彫		
156	門前2号	八代市岡町谷川門前	墳形不明・箱式石棺？	石材	同心円文	浮彫	破壊。装飾石材は移転保管	59
157	大鼠蔵尾張宮	八代市鼠蔵町大鼠蔵	円墳・横穴式石室	奥石障	円文	線刻	昭和38年県指定史跡	60
158	大鼠蔵東麓1号	八代市鼠蔵町大鼠蔵	墳形不明・箱式石棺	石材	弓・靫・二重円文・短甲・大刀	線刻	破壊。装飾石材は移転保管	61
159	大鼠蔵東北麓2号	八代市鼠蔵町大鼠蔵	墳形不明・箱式石棺？	石材	二重円文	線刻	破壊	62
160	大鼠蔵西北麓2号	八代市鼠蔵町大鼠蔵	墳形不明・横穴式石室	玄室側壁	二重円文	線刻	破壊	63
161	小鼠蔵1号	八代市鼠蔵町小鼠蔵	円墳・竪穴式石室	玄室石棺西壁	円文	陰刻		64
162	小鼠蔵3号	八代市鼠蔵町小鼠蔵	墳形不明・箱式石棺	両側壁	円文	線刻		65
163	五反田	八代市敷川内町五反田1191	墳形不明・横穴式石室	東・南の石障	円文	線刻	半壊。現地復原	66
164	長迫	八代市日奈久大坪町永迫	墳形不明・横穴式石室？	石障石材3枚	同心円文（連続三角文をめぐらすものもある）	線刻	破壊。装飾石材は移転保管	67
165	田川内1号	八代市日奈久新田町2083	円墳？・横穴式石室	四壁の石障	二重円文	線刻	昭和48年県指定史跡。保存工事	68
				奥の仕切石	円文	線刻	甲号	
166	田川内2号	八代市日奈久新田町	墳形不明・箱式石棺？	石材	二重円文・三角文など	線刻	破壊	69
167	田川内3号	八代市日奈久新田町	墳形不明・主体部不明	石材	円文・二重円文	線刻	破壊。装飾石材は移転保管	68
168	竹ノ内	八代市日奈久竹ノ内町	墳形不明・箱式石棺？	石材	円文・弧線	線刻	破壊。装飾石材は移転保管	69
169	大村4号	人吉市城本町城本・鳥岡	横穴墓	右外壁	盾・靫・剣？	浮彫彩色(赤)	26基のうち7基に図文あり。大正10年国指定史跡	93
170	同5号	人吉市城本町城本・鳥岡	横穴墓	上部外壁	靫・剣	浮彫・線刻彩色(赤)		93
171	同7号	人吉市城本町城本・鳥岡	横穴墓	上部外壁	三角文・連続三角文・靫・弓など	浮彫彩色(赤)		93
				左外壁	馬5頭・馬鐸？	浮彫彩色(赤)		
172	同11号	人吉市城本町城本・鳥岡	横穴墓	右上外壁	靫	浮彫		93

番号	古墳名	所在地	形態	図文の場所	図文の種類	施文の方法	備考	本文番号
				左外壁	靱・刀子・靫?・円文	浮彫彩色(赤)		
173	大村13号	人吉市城本町城本・鳥岡	横穴墓	右上外壁	盾	線刻彩色(赤)		93
				左上外壁	円文・大刀	線刻・浮彫彩色(赤)		
174	同 14号	人吉市城本町城本・鳥岡	横穴墓	上部外壁	盾・車輪文	線刻		93
					靱	浮彫彩色(赤)		
175	同 156号	人吉市城本町城本・鳥岡	横穴墓	奥壁・飾り縁	同心円文	陰刻彩色(赤)		93
				右外壁	靱・弓	浮彫・陰刻彩色(赤)		
176	京ガ峰1号	球磨郡錦町西簱毛田	横穴墓	右外壁	靱・人物	浮彫・線刻彩色(赤)	3基のうち1基に図文あり	94
				左外壁	盾・剣・車輪文	浮彫彩色(赤)		
177	小原4号	球磨郡相良村柳瀬井沢小原	横穴墓	左上外壁	円文	線刻彩色(赤)	5基のうち1基に図文あり	95

〔追加〕(本書刊行直前に新発見したもので本文では記述していない)

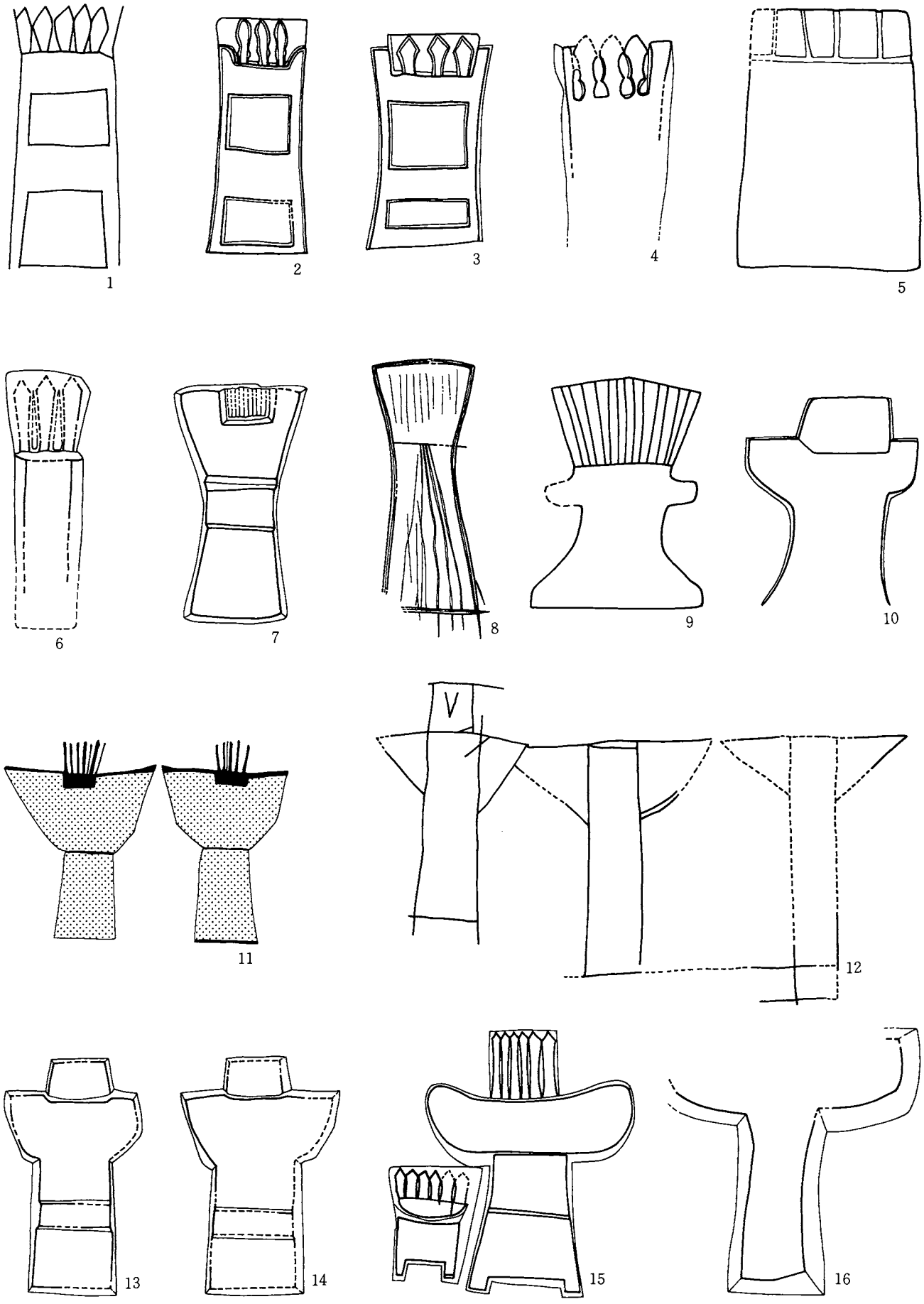
番号	古墳名	所在地	形態	図文の場所	図文の種類	施文の方法	備考	本文番号
68	長岩48号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	左外壁	形状不明	浮彫	図文の一部残存	83
178	同 49号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	飾り縁	連続三角文	線刻彩色(赤)		83
179	同 55号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	奥壁・左右壁	連続三角文	線刻		83
				奥屍床仕切り	四角錘台形突起	浮彫	2個あり	
				左右・奥仕切り	連続三角文	線刻彩色(赤)		
180	同 56号	山鹿市志々岐長岩	横穴墓	奥壁・左右壁	連続三角文	線刻		83
				奥屍床仕切り	四角錘台形突起	浮彫	2個のうち1個は破壊	
				左右・奥仕切り	連続三角文	線刻		

(熊本県の装飾古墳の現在の総数180基。装飾のある石棺・石室墓65基。装飾のある横穴墓115基。)

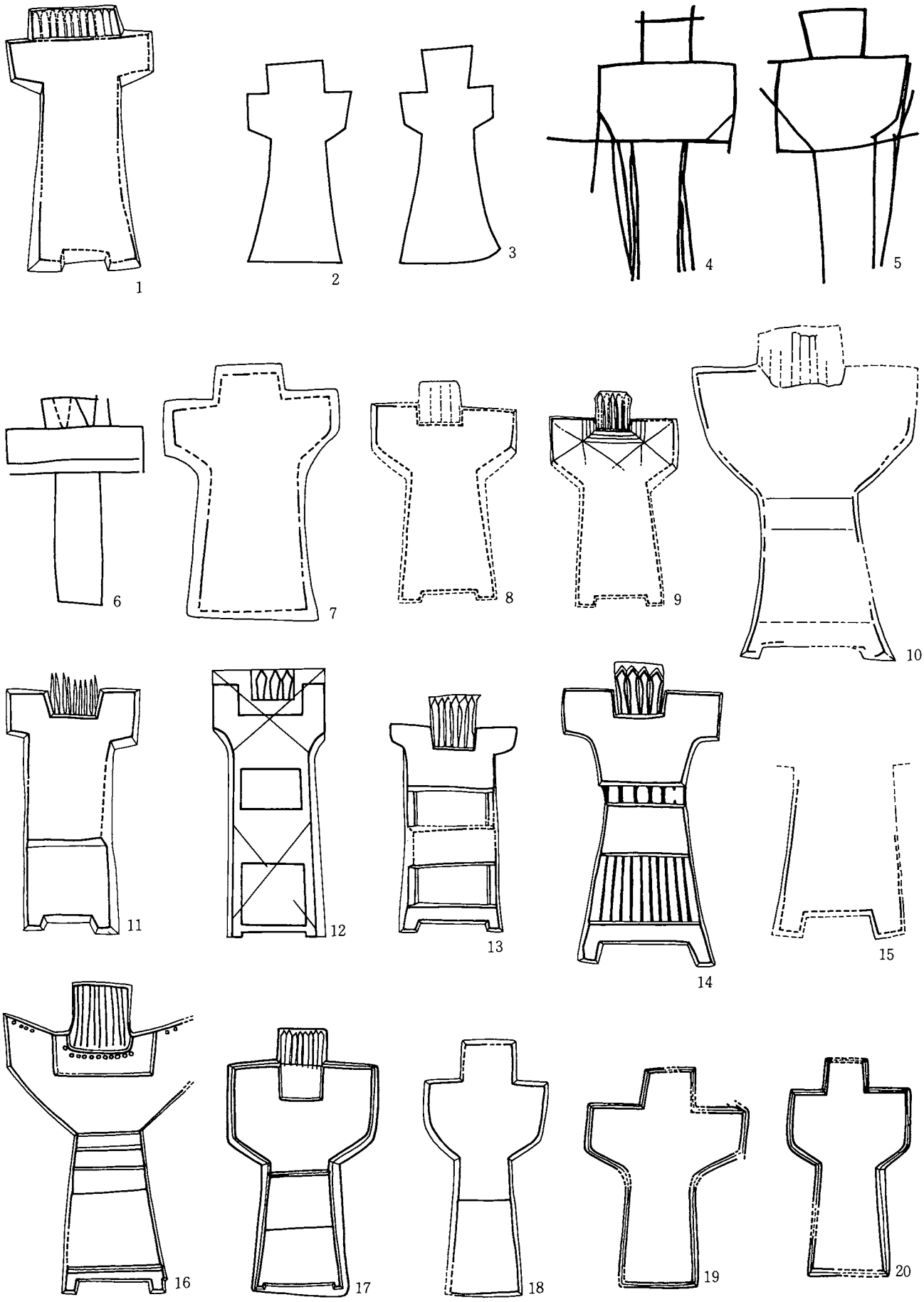
〔参考資料〕装飾古墳に類する古墳一覧表(本書で取り上げたもののみ)

番号	古墳名	所在地	形態	図文の場所	図文の種類	施文の方法	備考	本文番号
1	経塚	玉名郡天水町部田見城ノ平1213	円墳・舟形石棺	棺蓋(外面)	長方形区画	陰刻		8
2	小原大塚93号	山鹿市小原大塚	横穴墓	奥屍床仕切り	四角錘台形突起	浮彫		82
3	持松塚原	鹿本郡鹿央町持松1220	家形石棺	棺蓋(外面)	長方形区画	陰刻	昭和48年県指定史跡。埋没	17
4	持松3号	鹿本郡鹿央町持松中屋敷	家形石棺	棺蓋(外面)	長方形区画	陰刻		18
5	浦大間4号	鹿本郡鹿央町千田浦大間	家形石棺	棺蓋(外面)	長方形区画	陰刻		19
6	宮穴17号	鹿本郡植木町豊田宗像	横穴墓	奥屍床仕切り	円錘台形突起	浮彫		89
7	同 22号	鹿本郡植木町豊田宗像	横穴墓	奥屍床仕切り	円錘台形突起	浮彫		89
8	古城16号	熊本市古城町3-1	横穴墓	閉塞石	四角形(把手の表現)	線刻		90
9	同 39号	熊本市古城町3-1	横穴墓	閉塞石	「火守」または「火安」	線刻		90
10	(大野村石棺)	八代郡竜北町大野	舟形石棺	棺蓋(内面)	長方形区画	陰刻?		56
11	大王山	八代郡宮原町早尾腹巻田大王山	墳形不明・竪穴式石室	舟形石棺棺蓋(外面)	長方形区画	陰刻	昭和48年県指定史跡。保存工事	58

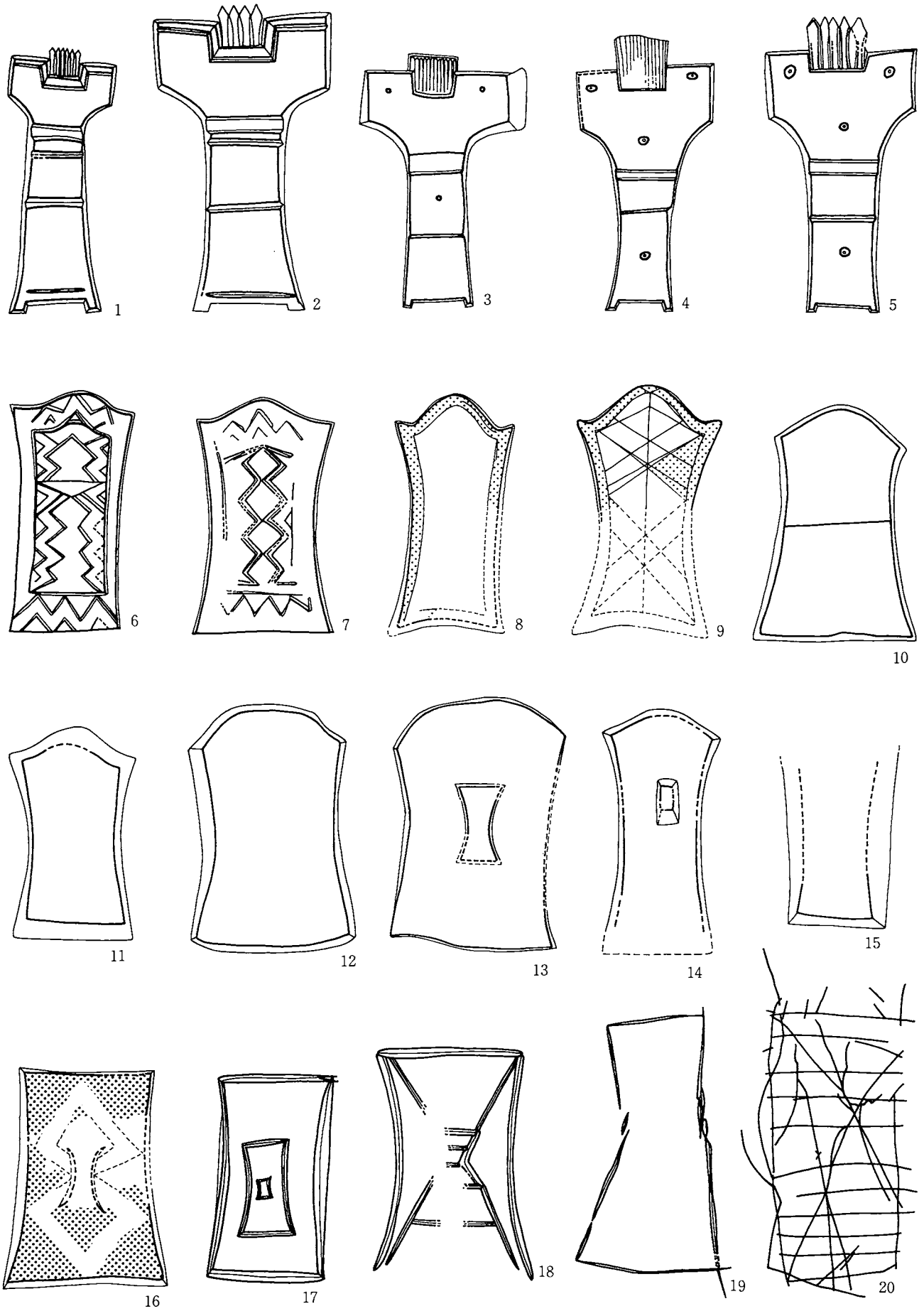
(3) 熊本県の装飾古墳図文集成（器物・像のみ、縮尺不統一）



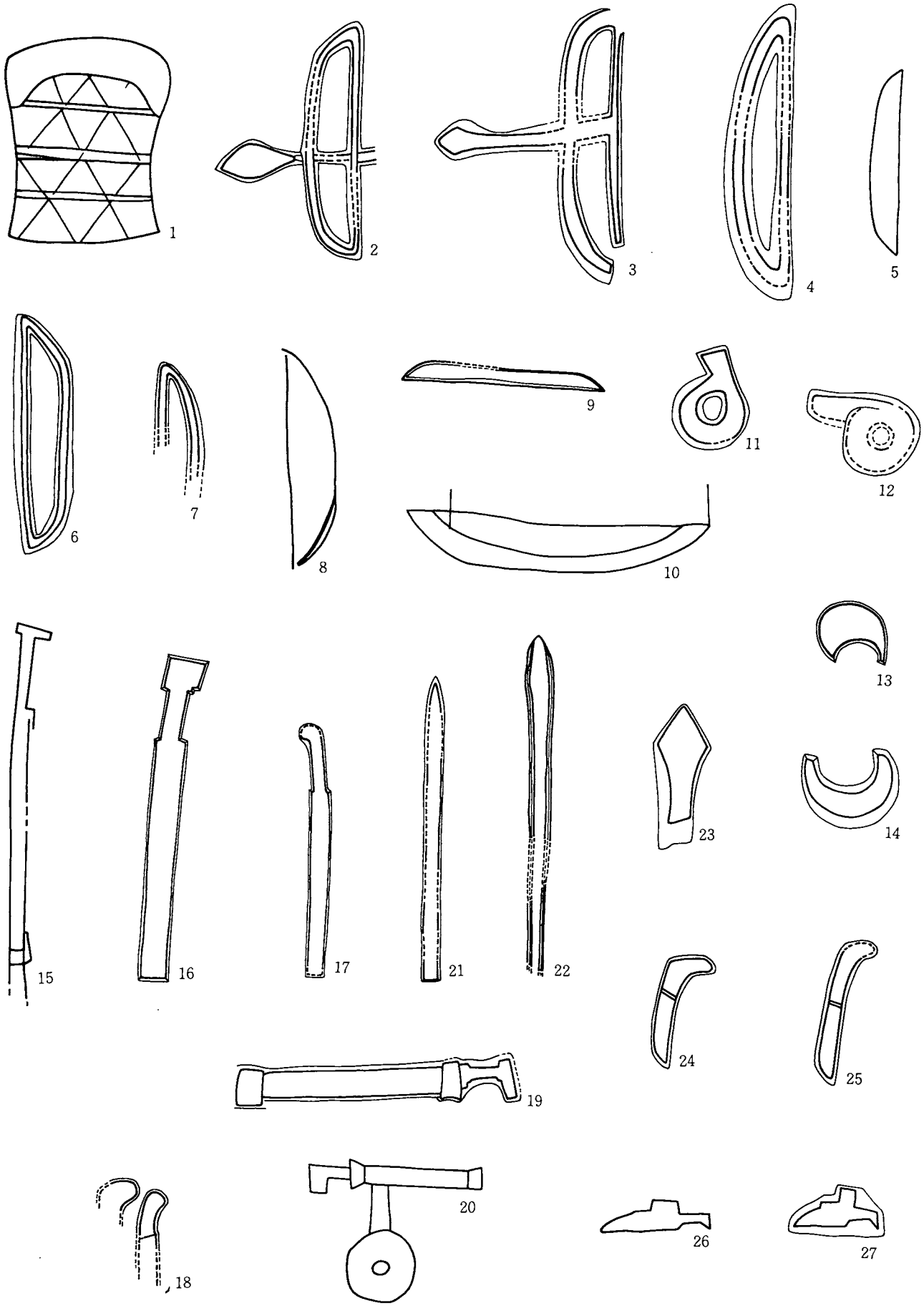
1図戮　1大鼠蔵東麓1号古墳　2・3小田良古墳　4大村15b号横穴墓　5牛頸2号横穴墓閉塞石　6鍋田8号横穴墓　7城21号横穴墓　8小原大塚39号横穴墓　9長岩52号横穴墓　10鍋田53号横穴墓　11弁慶ガ穴古墳　12袈裟尾高塚古墳　13・14鍋田14号横穴墓　15鍋田27号横穴墓　16長岩41号横穴墓



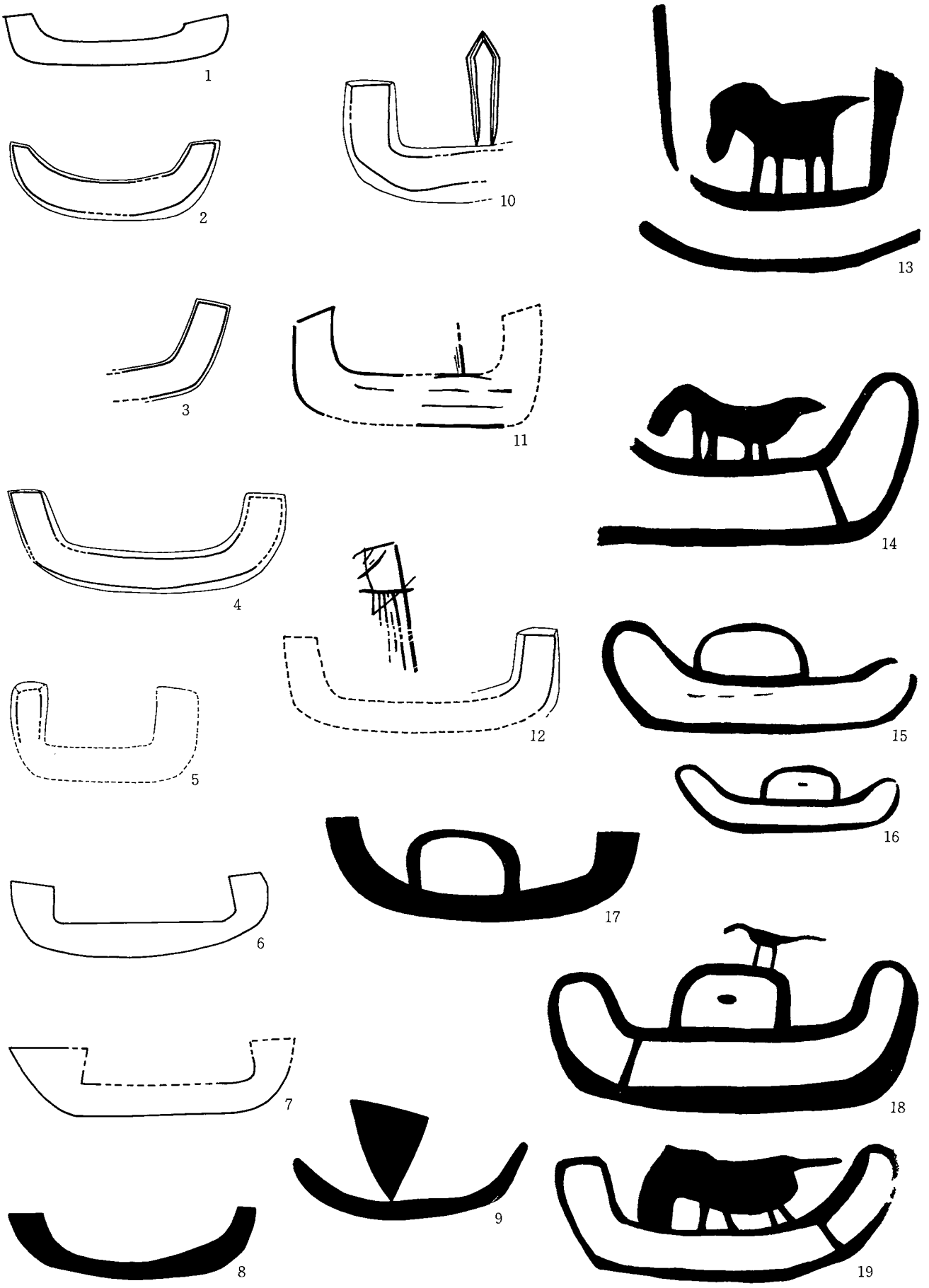
2図版　1岩原Ⅰ－32号横穴墓　2・3千金甲3号古墳　4・5鍋田49号横穴墓　6岩原Ⅴ－6－6号横穴墓　7鍋田12号横穴墓　8・9長岩108号横穴墓　10臼塚古墳石人背面　11袈裟尾高塚古墳　12千金甲1号古墳　13・14京ガ峰1号横穴墓　15鍋田21号横穴墓　16大村7号横穴墓　17～20大村5号横穴墓



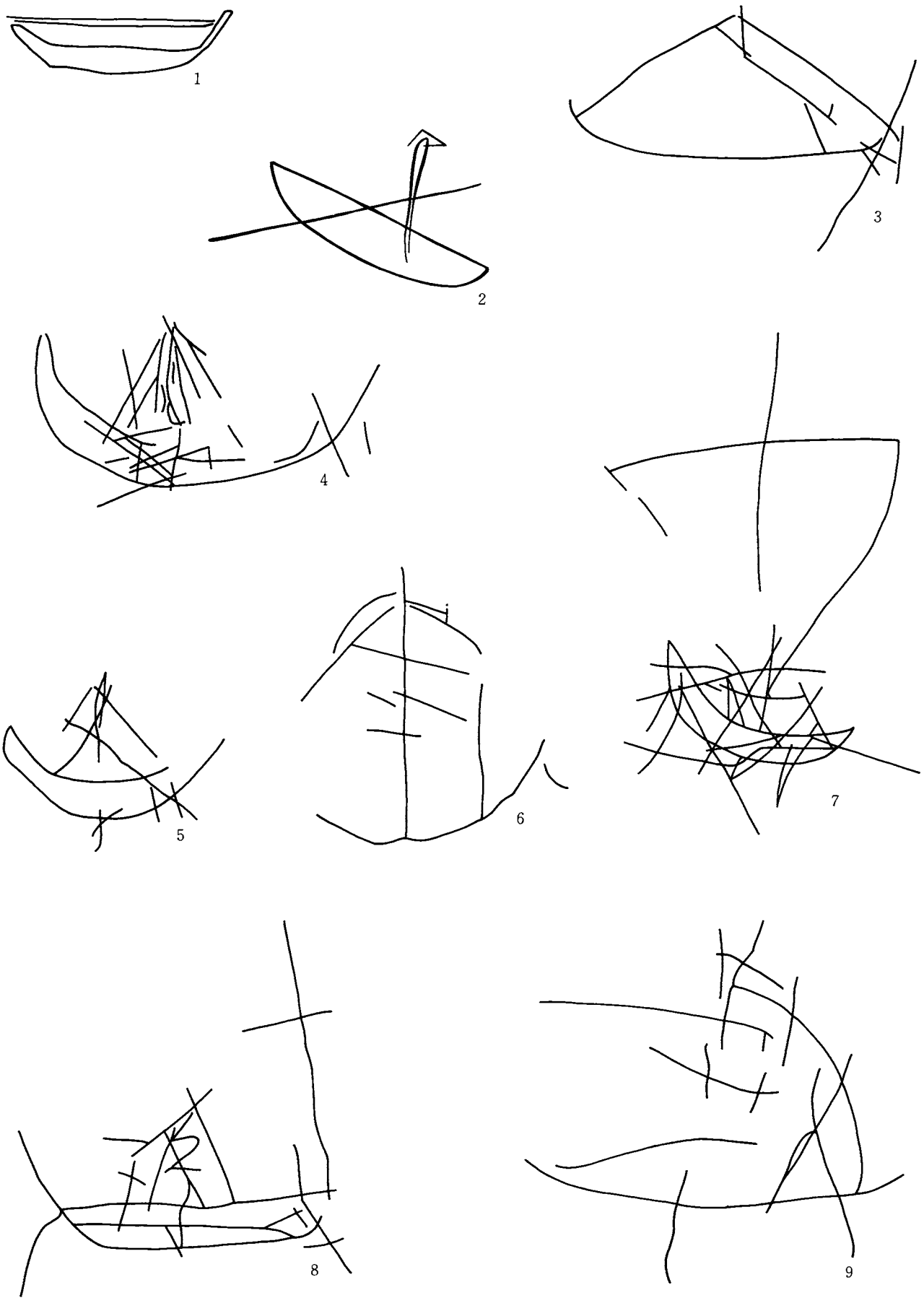
3 図鞆・盾　1・2 大村14号横穴墓　3～5 大村11号横穴墓　6・7 小田良古墳　8・9 長岩 109 号横穴墓　10鍋田27号横穴墓　11鍋田12号横穴墓　12城21号横穴墓　13大村 4 号横穴墓　14鍋田 8 号横穴墓　15長岩 101 号横穴墓　16京ガ峰 1 号横穴墓　17大村13号横穴墓　18大村14号横穴墓　19石貫穴観音 1 号横穴墓　20原 3 号横穴墓



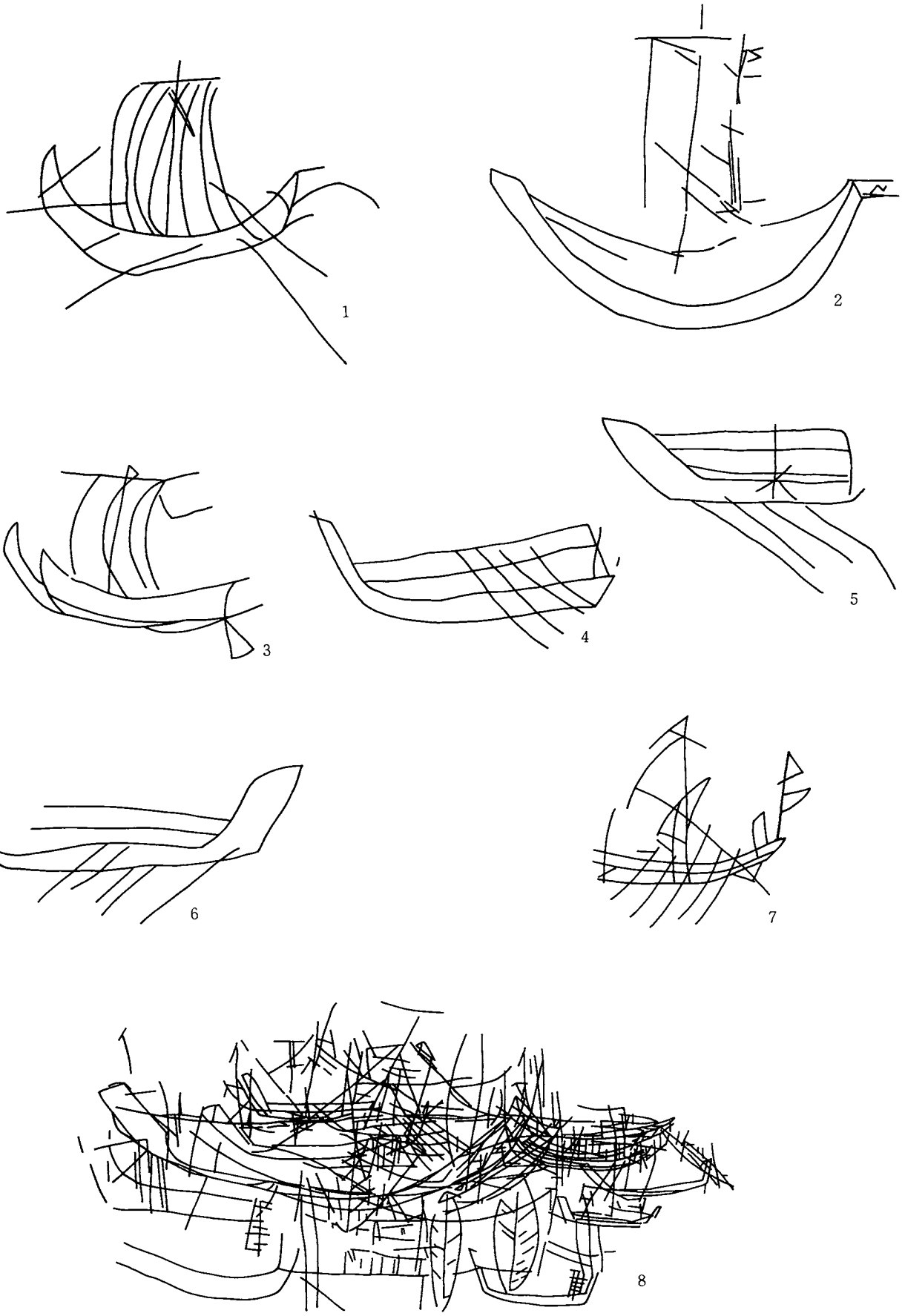
4図短甲・弓・靫・太刀・剣・刀子　1大鼠蔵東麓1号古墳　2鍋田7号横穴墓　3鍋田27号横穴墓　4鍋田8号横穴墓　5千金甲3号古墳　6鍋田27号横穴墓　7大村7号横穴墓　8大村15b号横穴墓　9長岩108号横穴墓　10大鼠蔵東麓1号古墳　11鍋田27号横穴墓　12鍋田12号横穴墓　13・14大村11号横穴墓　15千金甲3号古墳　16石貫ナギノ8号横穴墓　17石貫ナギノ12号横穴墓　18大村13号横穴墓　19広浦古墳　20大鼠蔵東麓1号古墳　21京ガ峰1号横穴墓　22大村4号横穴墓　23・24鍋田27号横穴墓　25大村11号横穴墓　26・27広浦古墳



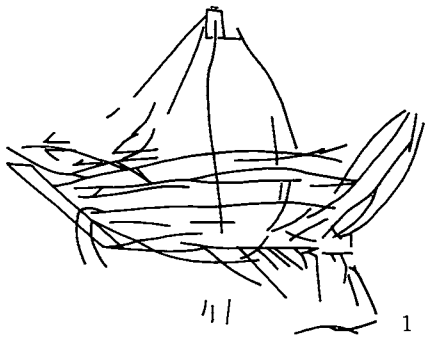
5 図舟　1 石貫穴観音 3 号横穴墓　2・3 小原大塚39号横穴墓　4 小原大塚41号横穴墓　5 長岩 108 号横穴墓　6・7 千金甲 3 号横穴墓　8・9 永安寺東古墳　10長岩46号横穴墓　11城迫間 2 号横穴墓　12小原大塚39号横穴墓　13～19弁慶ガ穴古墳



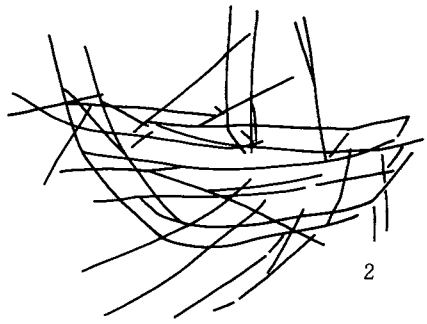
6 図舟　1 石貫ナギノ12号横穴墓　2 大原 9 号石棺　3 ～ 9 石貫古城II－13号横穴墓



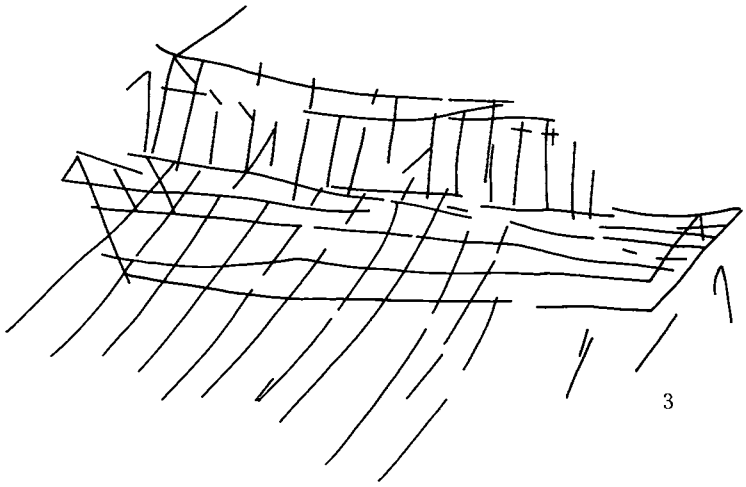
7 図舟　1 石貫古城Ⅱ－13号横穴墓　2 桂原 2 号古墳　3 ～ 7 桂原 1 号古墳　8 仮又古墳



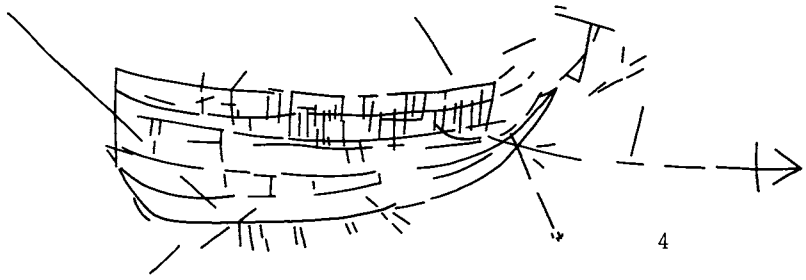
1



2



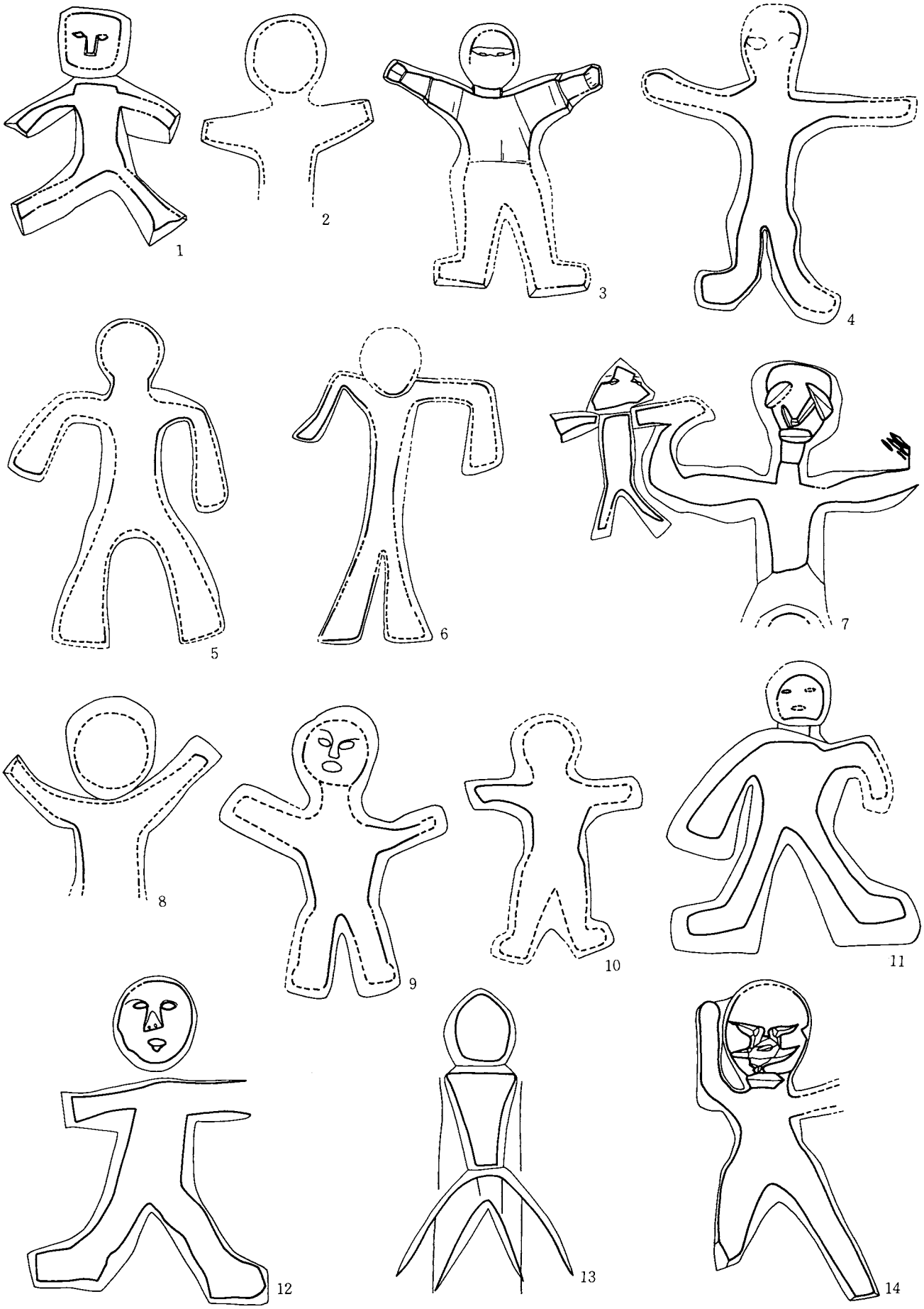
3



4

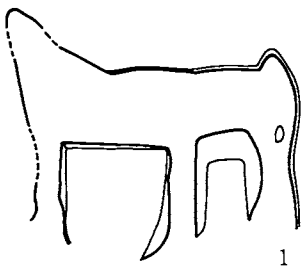
5

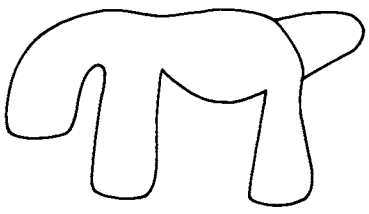
8 図舟　1 仮又古墳　2 不知火塚原 1 号古墳　3・4 宇土城石垣の古墳石材　5 梅崎古墳

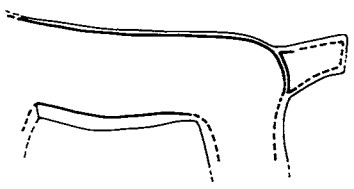


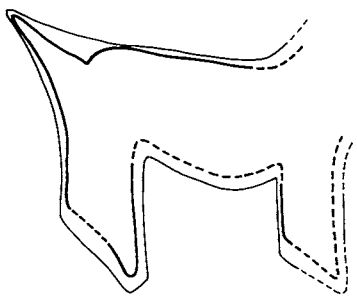
9 図人物像　1 長岩48号横穴墓　2 長岩 101 号横穴墓　3 長岩 108 号横穴墓　4 小原浦田 2 号横穴墓　5・6 小原浦田 3 号横穴墓　7 小原大塚41号横穴墓　8 小原大塚39号横穴墓　9・10鍋田 8 号横穴墓　11鍋田26ｄ号横穴墓　12鍋田27号横穴墓　13弁慶ガ穴古墳　14城20号横穴墓

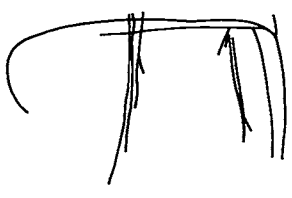
10図人物像　1鍋田33号横穴墓　2チブサン古墳　3臼塚古墳　4京ガ峰1号横穴墓　5原3号横穴墓　6石貫古城II－13号横穴墓　7鍋田26d号横穴墓　8小原大塚39号横穴墓　9～12弁慶ガ穴古墳

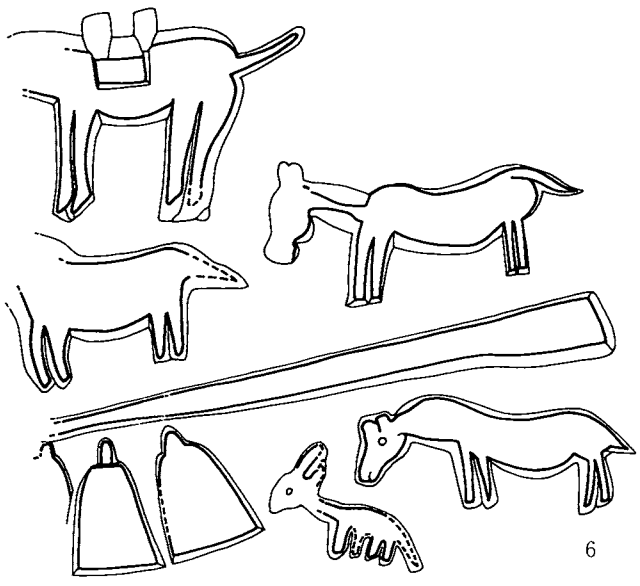

1

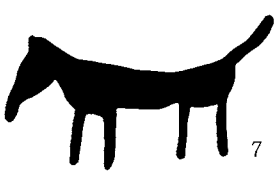

2


3

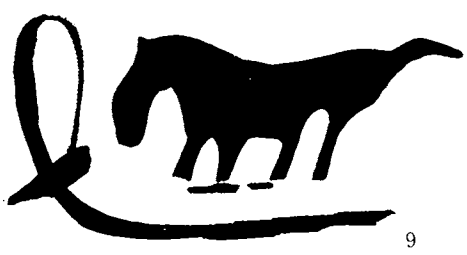

4


5


6


7

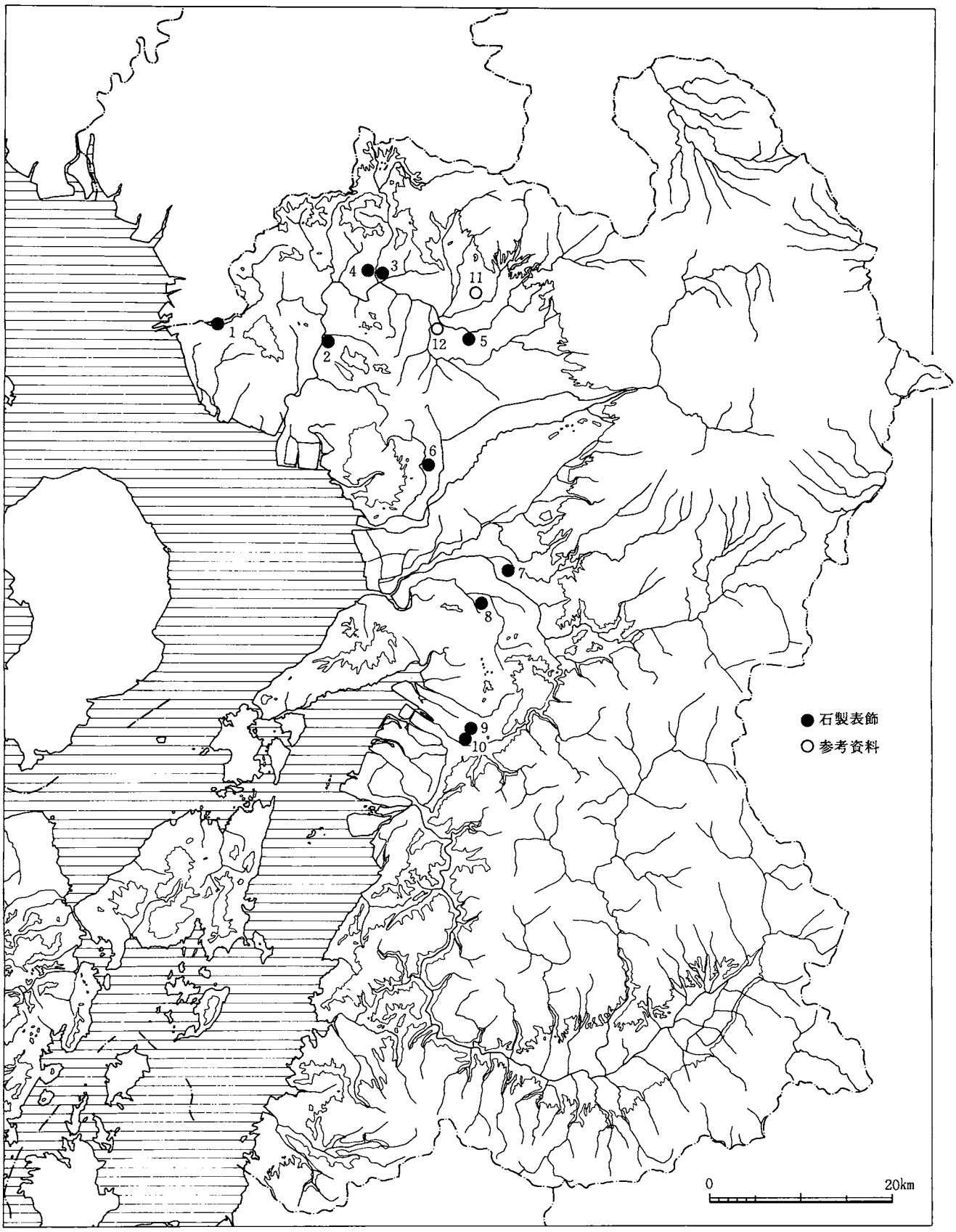
8


9

11図馬　1 鍋田27号横穴墓　2 長岩52号横穴墓　3 長岩 101 号横穴墓　4 小原浦田 2 号横穴墓　5 鍋田12号横穴墓　6 大村 7 号横穴墓　7 永安寺東古墳　8・9 弁慶ガ穴古墳

3．熊本県の古墳石製表飾の分布と一覧

(1) 熊本県の古墳石製表飾分布図



1　三ノ宮古墳　2　清原　3　臼塚古墳　4　チブサン古墳　5　フタツカサン古墳　6　富ノ尾古墳群
7　今城大塚古墳　8　石之室古墳　9　姫ノ城古墳　10　天堤古墳　11　袈裟尾高塚古墳　12　小野崎

(2) 熊本県の古墳石製表飾一覧表

番号	古墳名	所在地	古墳の形態	石製品の種類	備考
1	三ノ宮	荒尾市平井区下井手	前方後円墳・横穴式石室	武装石人1	装飾古墳。昭和10年国指定重要美術品
2	(清原台地)	玉名郡菊水町江田清原	不明	武装石人1，腰掛1，家1	江田船山古墳の西方約70m。昭和48年11月26日県指定重要文化財
3	白塚	山鹿市石白塚	円墳・横穴式石室	武装石人（靫を背負っている）1	装飾古墳。昭和48年5月16日県指定重要文化財
4	チブサン	山鹿市城西福寺	前方後円墳・横穴式石室	石人1	装飾古墳
5	フタツカサン	菊池市木柑子	前方後円墳・横穴式石室	石人1	木柑子石人として昭和50年7月31日県指定重要文化財
6	富ノ尾	熊本市池田3丁目富ノ尾	不明	石人（女性）1	所属の古墳不明
7	今城大塚	上益城郡御船町滝川1373	前方後円墳？・横穴式石室	石函1	装飾古墳
8	石之室	下益城郡城南町塚原北原	円墳・家形石棺	蓋？（柄）1	装飾古墳
9	姫ノ城	八代郡竜北町大野	前方後円墳・不明	靫2，鞆5，蓋（笠6，柄3）6	
10	天堤	八代郡竜北町大野	前方後円墳・不明	蓋（笠1，柄1）1	古墳は破壊消滅

〔参考資料〕

11	袈裟尾高塚	菊池市袈裟尾高塚	円墳・横穴式石室	靫1	装飾古墳。石室楣石として使用の石材
12	(小野崎台地)	菊池郡七城町小野崎	不明	舟？1	

(3) 熊本県の古墳石製表飾集成

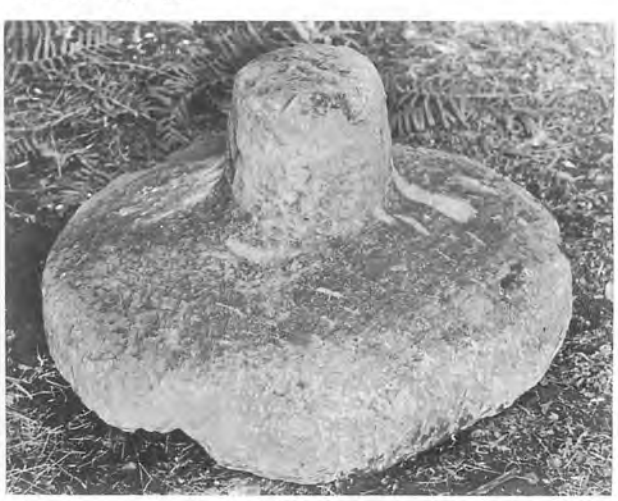
①清原（せいばる）石製品

（石人）

（家形石製品）

②天堤（あまづつみ）古墳の蓋（きぬがさ）

（腰掛形石製品）



〔①、②白石巌撮影〕

③三ノ宮古墳石人

④チブサン古墳石人

⑤臼墳古墳石人

⑥富ノ尾古墳群の石人

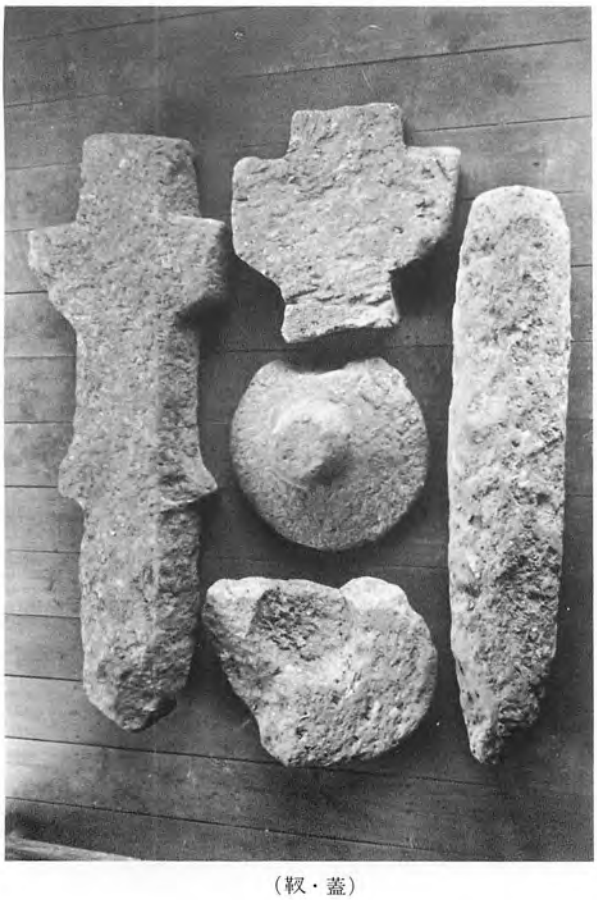
〔③三島格撮影　④、⑥乙益重隆撮影　⑤白石巌撮影〕

⑦姫ノ城古墳の石製品

（さしば 翳）

（翳）

（翳）

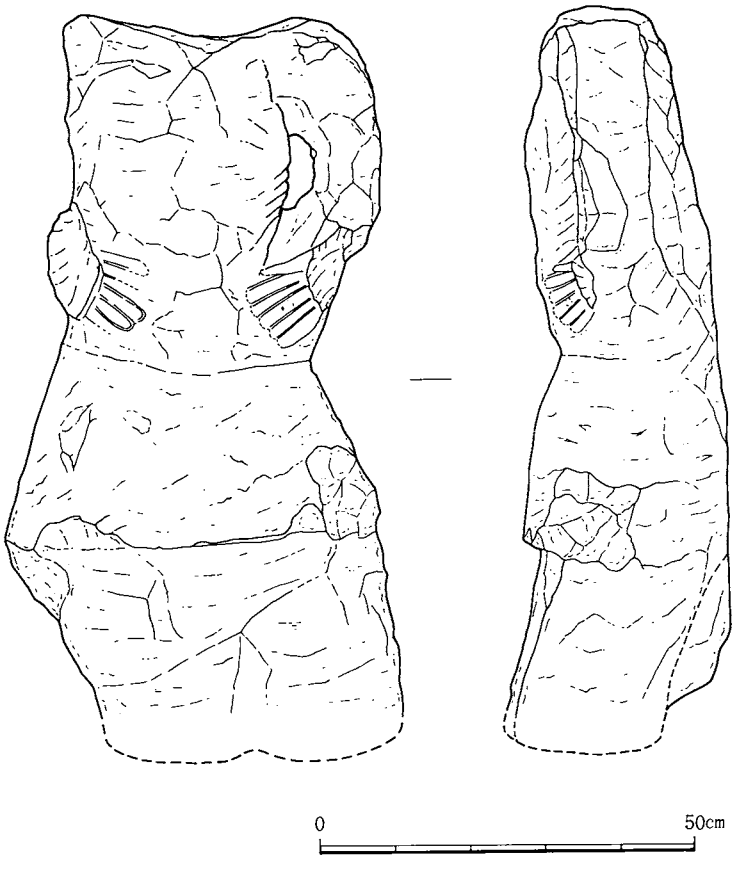


（靫・蓋）

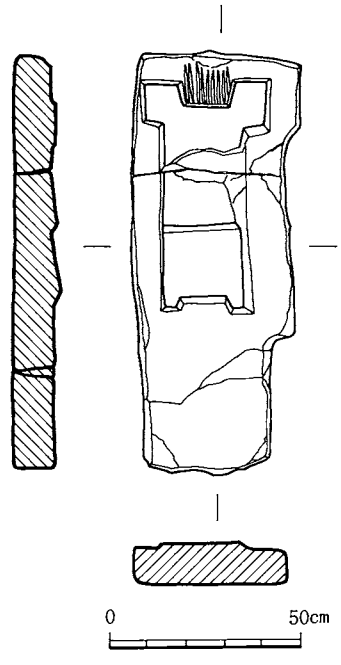
（蓋）

〔⑦白石巌撮影〕

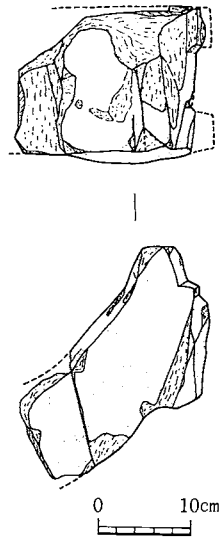
⑧木柑子石人（フタツカサン古墳石人）



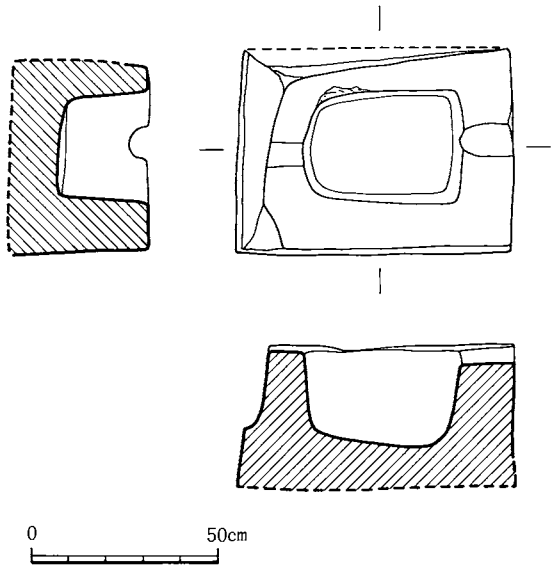
⑪袈娑尾高塚古墳の靫



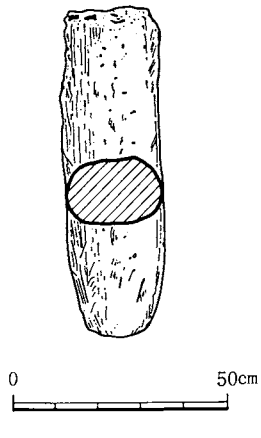
⑫小野崎の石製品
（舟？）



⑨今城大塚古墳石函



⑩石之室古墳石製品
（蓋の柄？）



〔⑧本田博久原図　⑨緒方勉原図　⑩『城南町史』より　⑪文化財保存計画協会原図　⑫隈昭志原図〕

熊本県文化財調査報告　第68集

熊本県装飾古墳総合調査報告書

昭和59年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　コロニー印刷

〒860 熊本市二本木３丁目12番37号

無断で本書より転載・複製等を禁じます

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 68 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：熊本県装飾古墳総合調査報告書
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日